リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～

真王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～

【Ｎコード】
Ｎ７６００Ｐ

【作者名】
真王

【あらすじ】
『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』のさらにもう一つの物語。なのは達リリカル組とよろず屋コンビ＋桂　小太郎＋エリザベス＋月詠に加え、ある世界から４人の女神が舞い降りた。そんなハチャメチャメンバーの前に、武装集団『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋助と、世界を破壊しようとする”元”女神、マジェコンヌが現れ、世界を破滅に導くロストロギア”ダークソウル”ですべてを無にする気であった。そんな彼らのたくらみを阻止するために立ち上がり、さらに、銀時たちは新たな仲間とともに彼らを阻止するのであった。

リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　銀の侍と４人の女神、始めるぞコラアアアアア！！！注：キャラ崩壊の可能性あり！それがいやなら回れ右！『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　銀の侍と４人の女神』からタイトルチェンジしました。現在の使用作品：リトルバスターズ、ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ、スプラッターハウス、ＨＯＤ、コープスパーティー、Ｔｏｌｏｖｅる、涼宮ハルヒの憂鬱、史上最強の弟子ケンイチ、クレヨンしんちゃん、らき☆すた、マリオ、ＷＯＲＫＩＮＧ！、ロックマンＸ、スマブラ、インフィニットストラトス、マリオ＆ルイージＲＰＧ３、魔界戦記ディスガイア、東方、スーパーマリオギャラクシー、ピクミン２、フェアリーテイル、アルカナハート、ニードレス、ハイスクールＤ×Ｄ、ＤＯＧＤＡＹＳ、ドラッグオンドラグーン、戦国乙女、インフィニティ・ブレード

まずはじめ

こんにちは。作者の真王です。
初のこの小説をだしたのですが、まだまだ新参者なため、駄文、字の誤りなどある可能性があります。が、私としては、この小説を書くことにいいことがあると信じているわけでしてこの先もすごいことがあると思ってください。（ちなみに更新は不定ですけど）

「おーい。」

まず、よろず屋組とリリカル組に現れるキャラ達ですが、いろいろいますよ。たとえば、変わった学生集団とか、ドクロ面の大男とか、変わった店の従業員達とか、きのこの国ｎ「おおーーい！！きこえるかー！！！」って、だれっスかこんな時に。

がちゃっ

？？？「やっとあいたぜ。待たせんじゃねーよ作者。」
あれ？銀さん、主役がここに来るなんて珍しいな。
銀時「うっせーな。暇だったからここに来たんだよ。」
そうっすか。でもちょうどよかったよ。
銀時「何がだ？」
俺の作った小説に銀時ともう一人のことを紹介しようとしてたんだよ。
銀時「まじでか！・・・って、ん？もう一人？」
そうｄ”コンっコンっ”「あの～～あいてますかー？」ってきたきた。

ガチャっ

???「あ！作者さん、こんにちは～！」
よう！これでそろった。
銀時「・・・だれ？」
あ～っこの子は君と同じくもう一人の主人公だ。
???「はじめまして。ネプテューヌっていうんだ。よろしくね～！」
銀時「はぁ？こんなガキが主役だと？」
ネプテューヌ「むっ！ちょっと失礼だよ。私にはすごい力を持ってるんだから。」
銀時「へぇ～～。どんなんだ？」
ネプテューヌ「見ててよ。変身！」
ピカーーーン。
ネプテューヌ？「どう？これが私の力よ。」
銀時「えええええええ！！ちょちょちょっとまて～～～い、これお前おもいっきりべつじんじゃねーかー！」
ああ、彼女は変身して姿が変わってるようだけど能力を上げるらしくてね、この姿は周りからパープルハートと呼ばれてるんだ。
パープルハート「まっとりあえず仲良くやりましょ。」
銀時「おっおう、わかった。」
っと、いうわけで
パープルハート「リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　銀の侍と４人の女神。」
銀時「始めるぜこの野郎。」

？？？「あれ？僕たちの出番は？」
？？？「『物語が進んだら出してやる』ってさ。」
？？？「おいおい・・・おれたちも保留かよ。」
？？？『切ないな、それは。』
？？？「出番が来るまで待つか。」
？？？「おにいちゃん・・・。」
？？？「我が輩の出番はまだか～～～！！！」
？？？「出番がほしいわ・・・。」
？？？「だっ大丈夫っすかね～・・・。」

まずはじめ（後書き）

初投稿です。
気になるとこがあったらかんそうをおねがいします。

第一訓：物語にはいくつものルートがある（前書き）

真王「記念すべき第一話。」

ネプテューヌ「リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　銀の侍と４人の女神。」

銀時「始まるぜ。」

第一訓：物語にはいくつものルートがある

ここは第一世界の魔法都市”ミッドチルダ”、その町のビルの屋上に一人の男が夜空を眺めていた。

???「この世界の月は奇麗じゃねぇか」

その男は、赤い浴衣に左目は隠れており、キセルを吸っていた。

???「あんたもそう思わねぇか？」

そういう男の後ろには、黒いローブを身に纏う人物がいた。

???「ふんっそんなもの興味などないが血のような赤い月と闇のような黒い月なら好きだな」

謎の人物は、吐き捨てるようなことを言う。

謎の人物「そういうお前にも変わった趣味があるのではないのか？高杉晋助」

謎の人物は男・・・高杉晋助をちゃらかす。

高杉「変わった趣味とはご挨拶だな」

っと、高杉は軽く流す。

謎の人物「・・・まあいい。お前と私は目的が同じ者同士だからな」

そういって謎の人物は黒い宝石を出す。その宝石には、なにやら禍々しいオーラを放っている。

高杉「そいつか？闇を力に変えて何もかもを壊すってのは」

謎の人物「そうだ。だがこれは一部のパーツでしかない。それにもかかわらずこの力は強力だ。扱いには少し難しいぞ？」

謎の人物の表情は見えないが笑っているようだ。

高杉「いいねぇ。そういうもんは最高に好きだ」

高杉も謎の人物と笑っていた。

高杉「ふっふっふっふ・・・こいつを集めれば何もかもを壊せる。・・・だれにも邪魔はできない・・・そう、誰にもな、ふっはっはっはっはっはっはっは」

高杉がうれしそうに高笑いをあげていた。

謎の人物（もうすぐだ・・・もうすぐ世界がなくなる。もし奴が現れるなら、この”ダークソウル”で貴様を八つ裂きにしてやろう。フハハハハハハハハ）

謎の人物はある人物を思い出し、復讐を誓うのであった。

ｉｎ　歌舞伎町

ここは歌舞伎町とよばれる町、その町では、天人（あまんと）と呼ばれる亜人がおり、さらにその町のとある店、”スナックお登勢”の二階にある”万事屋　銀ちゃん”がある。
その万事屋のオーナー・坂田銀時と宇宙最強の戦闘種族『夜兎族』の神楽は、暇を持て余していた。
ゾーマとの闘いから数カ月。平和な毎日を過ごしている。相変わらず依頼はあんまり来ないが、装置を使ってたまにフェイト達が遊びに来る。
銀時はため息をついた。

銀時「暇だな…」
神楽「そうアル…」

ボソッと小さく呟いた。

？？？「おはようございまーす」

そう言って現れたのは、万事屋の働き者・志村新八である。
地味な存在かつツッコミ役という悲しい役につけられた人物である。

新八「余計なお世話じゃ！！・・・っとどうしたんですか銀さん」

新八が銀時に聞くと

銀時「どうしたもこうしたも暇で暇でヤル気でねぇんだよ」
神楽「マジ退屈ネ。何も無いままっていうのは銀魂として面白くないネ。もっといいことしたいアル」

銀時・神楽「「はぁ～」」

再び銀時と神楽はため息をついた。
どうしたものかと考えた。
そこで思いついた。

神楽「銀ちゃん、私達がなのはちゃん達の世界に行けば良いアル！！」

銀時「おおー、そうだよそれだよ！何故それに気付かなかったんだ！？」

新八「ええっ！なのはちゃんのところにですか？！」

新八は驚きとうれしさが両方出た。

銀時「よし！そうときまればじじいのとこに行くぞ。」

銀時は椅子から立ち上がり，ジャンプを片手に歩きだした。新八は準備を済ませ、そして神楽も傘を持ち出す。
玄関を出て，目指すは源外の工場。

？？？「む…銀時とリーダーではないか」

源外の工場へ向かう途中、後ろから声をかけられた。
銀時は立ち止まって、振り返った。
そこにいたのは，攘夷志士の集団の1人であり，『狂乱の貴公子』桂小太郎とペット（！？）のエリザベスだった。

神楽「あ…ヅラとエリー」
ヅラ？「ヅラじゃない桂だ」
神楽にヅラ呼ばわりされて突っ込む桂。そして銀時に話しかける。
桂「銀時、これから何処に向かうんだ？」
銀時「ああ、ちょいと暇だからフェイト達の世界に向かうんだよ」
っと銀時は軽く答えると……。
桂「なら……俺とエリザベスも連れて行ってくれないか？」
銀時・神楽・新八「「「は？」」」
銀時達は片眉を上げた。
桂「向こうの世界に行けば、しばらくの間は真選組の追っ手から身を隠す事ができるからな」
などと言う桂らしい理由に、断ってもしつこくついて行くだろうな。
断るのメンド癖さくなったのかか、動向を許す。
まぁ居ても邪魔になるわけでもないし。
桂とエリザベスを加え，源外の工場へ向かう。
すると、
銀時「月詠？」
月詠「銀時」
銀時達の前に、一人の女性が現れた。
顔に傷があり、口に煙管をくわえていて、黒い着物を着ている。地

下都市『吉原』の自警団『百華』の頭・月詠である。

新八「月詠さん！どうしたんですか、こんな所で？」
月詠「いや、日輪に”少しは外で休んできたら”と言われてな」
銀時「ああ、そう」

確かに月詠は、ほとんど休まず吉原を見回っている。
日輪が月詠に休みを与えるのもわかる。
銀時がそんな事を思っていると、月詠は桂とエリザベスに気付いた。

月詠「そっちの男と天人は誰だ？」
銀時「俺の知り合いのヅラとエリザベスだ」
桂「ヅラじゃない桂だ」

桂が銀時の言葉を訂正する。

月詠「わっちは月詠でありんす。以後よしなに」
桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」
神楽「なんでいちいち好物を言うあるか！！」

好物を言い出す桂に神楽の突っ込みの拳が炸裂して，桂は血を吐いて倒れる。
苦い顔で哀れみする月詠にエリザベスがプラカードを出して挨拶する。

エリザベス『初めまして、エリザベスです』
月詠「……ああ、こちらもよろしく」

不気味そうにエリザベスを見て挨拶する月詠。月詠との挨拶を済ませ、桂は銀時に小さく声をかけた。

桂「銀時，貴様も随分と罪な男になったものだ。フェイト殿達以外にもこんな可憐な娘と付き合って…」
銀時「オーイ。誤解を招く発言はやめてくれ、ヅラ君」
桂「ヅラ君じゃない桂だ」

五人と一匹は源外の工場の前に到着した。なんやかんやで、月詠も一緒に来る事になった。中には、何やら機械を弄ってる老人がいる。

銀時「おーい、じーさん」
神楽「生きているあるか，老いぼれ」
新八「何言ってんの神楽ちゃん！」

銀時と神楽が老人を呼んで、新八が神楽の言葉に突っ込んだ。

???「ん？」

老人が振り返った。
赤いゴーグルを付け、白髭をたくわえた老人は、平賀源外。江戸一番の機械技師であるが、ある事件を起こして今は指名手配されている。

銀時「ちょいと装置動かしてくんねーか？」
神楽「なのはちゃん達に久し振りに会いたいアル。」
源外「そりゃ構わねーが……」

源外は桂とエリザベスと月詠を見た。
銀時が源外に近づいて、小声で話し掛けた。

銀時「ヅラとエリザベスはじーさんと同じ指名手配犯だから安心しな」
源外「そうか？まぁそれならいいんだが、あの娘っ子は誰だ？また別品連れてきたな」

月詠を見ながら言った。
顔に傷があるとは言え、月詠はなかなかの美人である。

源外「まさか銀の字、お前の…」
銀時「違ーよ」

即座に銀時は否定した。

銀時「んな事より、とっとと装置動かしてくれ」
源外「わかったよ」

源外は移動した。
銀時、神楽、新八、桂、エリザベス、月詠の五人と一匹は装置の中に入った。
初めて装置の中に入った月詠は、珍しそうに中を見ている。
向こうに行くのは久しぶりだな。
銀時がそう思っていると、装置の中が赤くなった。
すると、スピーカーから源外の声が聞こえた。

源外「銀の字。装置の中に赤いボタンがあるだろ？そのボタンを押すと」

銀時は嫌な予感がした。
そして予感は的中した。何も知らない月詠が、ボタンを押した。

源外「装置の出力が最大になって制御出来なくなる。絶対に押すな」
銀時「ジジー！そっちを先に言えェエエ！！それに何でオメーがボタン押してんだ！？」

源外に向かって怒鳴った後、月詠にも怒鳴った。

月詠「いや、すまん……気になってしまって…」

月詠は素直に謝った。

銀時「つーかこんなボタン、前までなかったぞ！これじゃ白夜叉鎮魂歌と攘夷戦争鎮魂歌と同じパターンじゃねーか！」

銀時が怒鳴っていると、装置内の赤い色は濃くなり、電気がビリビリする。

源外「まぁ行き先は、なのはの世界だから大丈夫だろ」

装置の外にいる源外は、呑気にそう言った。

神楽「ヘルペス！ヘルペスミーシー！！」

神楽が頭を抱えて叫ぶ。

新八「ヘルプミーだよ神楽ちゃん」

神楽に突っ込む新八。

桂「武士たる者どんな状況でアレ，常に冷静でなければならぬ」

エリザベス『うむ，その通り！』

桂、エリザベス、月詠は冷静だった。

銀時・神楽・新八「落ち着けるかァアアア！！！」

ありったけの声で、銀時と神楽と新八は怒鳴った。
直後、赤い光は強くなり、バチッと強烈な閃光を放った。
光が収まり、源外は装置の扉を開けて中を見た。五人と一匹の姿はなかった。
源外「まぁ銀の字なら大丈夫だろ」

ｉｎ　？？？

銀時たちが装置でワープしているころ、この世界でも同じことが起きた。
この世界は、四つの大陸が宙に浮いていた。
近代未来都市のような紫の大地”プラネテューヌ”、ごつごつして工場の多い黒の大地”ラステイション”、雪が降り積もる白の大地”ルウィ―”、自然いっぱいの緑の大地”リーンボックス”、その大陸達の天にいちする”天界”があった。これを総じて、ゲイム業界と呼んでいる。
そのゲイム業界のプラネテューヌのある場所で

？？？「イースン遅いな～」

などという白のパーカーワンピに、ピンクよりの紫の髪の女の子・ネプテューヌが退屈そうにしている。

???「我慢しなさい。呼ばれているのにとっとと帰るのはダメでしょ？」

っと黒い髪に赤いリボンでツインテールにして、クリアドレス（スカートが短いが）とガーターベルトを身につけている少女・ノワールが注意する。

???「なにかあったの？」

っと白い帽子に白い服をきて、周りから見れば、『かわいい』が一言に出てきそうな少女・ブランが心配そうに聞く。

???「あらあら・・・一体どうしたのでしょうか」

っと腰まで伸びた金髪にグラマーな体をもつ女性・ベールも心配している。

この四人は、イースンことイストワールに『面白いものがある』と呼ばれてきたのだが、彼女が姿を現していないのだ。

数分待っていると、

???「お待たせしてすいません」

っと四人が声のしたほうへ向くと、本に座っている妖精のような少女が現れた。

ネプテューヌ「も～～イースン！すごっく待っちゃったよ～！」

ネプテューヌはぷりぷりに怒る。

ノワール「どうしたんですか？」

ノワールが尋ねると

イストワール「すいません。最終調整に手間取ってしまったんです＜（＾―＾；）」

イストワールが少し焦って答える。ちなみに彼女の語尾の顔文字は、彼女曰く”仕様です”らしい。

ブラン「最終調整？」

ベール「それって、あなたが言ってた面白いものですか？」

そう聞くと

イストワール「ハイそうです（、ー′）ｂ」

っと言ってグッ！っと親指を上げる。

イストワール「それにあなた方以外にも呼んでおきました。」

ネプテューヌ「え？それはだｒ「ねぷねぷ～～！」ってこんぱっ？！」

振り返るとＣのアクセサリーのついたヘアバンドにピンクのセーターと背中にまで伸びた髪の少女・コンパがやってきた。

？？？「わたしもいるわよ」

っというのは、緑のリボンに青ジャージと黒い服の少女・アイエフである。
ネプテューヌ・ベール「「アイちゃんも?!」」

っと二人は驚く。
ちなみになぜベールがアイエフと知り合っているかというと、ゲーム友関係だからである。

イストワール「これで全員揃いましたね」
ネプテューヌ「ところでそのおもしろいものってなに?」
イストワール「ではまず私についてきてください（＾＾）／」

っと六人はイストワールについていった。

イストワール「つきました」

イストワールの案内でついてきたネプテューヌ一行は目の前にある赤い布の中が気になった。

ノワール「まさか面白いものって」

ノワールが気になって尋ねると

イストワール「そう!この私、イストワール作の転送装置です!!」

ばばーんっと出てきたのは数人入れそうなスペースがある大きな機械”転送装置”である。

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・コンパ「すごーーーい！！！」
アイエフ「すごいわね」

五人は目を光らせるほどすごく感動しており、アイエフはそこそこ感動している。

イストワール「ではみなさん、準備をするので中で待ってください」

っと指示を出し、装置をいじり始める。

ネプテューヌ「それにしてもイースン一人でこれを？」

ネプテューヌの問いにそうですよとイストワールが答える。そして、

イストワール「では・・・始めます！！」

イストワールはスイッチを押した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

っと装置が作動している。すると、

コンパ「イースンさん。これはなんですか？」

コンパは赤い目盛が気になった。

イストワール「ああっそれは出力調整装置でしてそれを勝手にいじ

ると≪キリキリキリッ≫」

イストワールの説明も聞かずにコンパが装置をいじってしまった。

イストワール「出力が暴走して手がつけられないのでいじらないでくださいね」

ネプテューヌ「イースーーーーーーーン！！！！なんでそんな物作ったのーーーー！！！！」

ネプテューヌが突っ込む。

アイエフ「ちょっコンパ！！元に戻して！」

コンパ「はっはいです！！」

アイエフの指示にコンパは慌てて元に戻そうとするが・・・

バキャッ！！

全員「あっ（゜Ｏ゜）」

壊れた。そして、

ガシャンガシャンガシャン×１０

暴走した。（笑）

ネプテューヌ「コンパ～～～～～～～！！！！何してくれてんの～～～～！！！」

アイエフ「どうしてくれるのよこれ～～～～～～～～！！！！！」

コンパ「ごっごめんなさいです～～～～～～～～～！！！！！」

イストワール「あははは・・・結局厄介なことになりました」

ノワール「どうすんのよ」
ブラン「諦めが肝心だ」
ベール「切実ですね・・・」

直後、赤い光は強くなり、バチッと強烈な閃光を放った。
光が収まり、七人の姿はなかった。

銀色の魂を持つ侍と女神たちが出会うとき物語は動き始めるのであった。

第一訓：物語にはいくつものルートがある（後書き）

真王「ひとつで数時間かかるとは思いもよらなかったよ…」

銀時「次回『子供は助けた人に憧れを抱く』テイクオン・・・ちがった、テイクオフ」

第二訓：子供は助けた人に憧れを抱く（前書き）

真王「スバル登場！・・・そして銀時とネプテューヌが接触！さてどうなる！
リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　銀の侍と４人の女神　始めます」

第二訓：子供は助けた人に憧れを抱く

００７１年４月２９日。
ミッドチルダ臨海第８空港。
ロストロギアによる大火災が起こっていた。オレンジ色の炎が空港を包み込む。消防隊が消火活動をしているが、炎が収まる気配はない。

消防隊員１「ダメだ！これ以上は無理だ！引き上げよう！」

一人の消防隊が叫んだ。

消防隊員２「だが、まだ中に子供がいるんだぞ！！」

仲間に振返りながら、消防隊が叫んだ。

目の前に広がるのは、赤い空。
――アレ？なんだコレ？空が真っ赤だ。
彼は床に倒れていて、うっすらと開けた片目で、真っ赤な空を見ている。
――アレ？なんか蒸し暑くねぇ？
彼の周りの風景には火に包まれている壁や窓，つまり火事の光景である。
――アレ？何で俺、こんなことになってんだっけ？アレ？こんなん前の時も、やらなかったっけ？アレ？

銀時「ん……？」

銀時は両目を開けて、ゆっくりと上体を起こした。
頭を、くしゃくしゃと掻く。
銀時は周りを見回した。どこかの建物の中のようだ。しかも炎に囲まれていて、幾つか柱が倒れて、壁も崩れて道を塞いでいる。

銀時「何だ？火事か？つーか、どこだ此処？」

銀時は記憶を辿る。
確か源外の転送装置に乗って、変な赤いボタンを月詠が押して，そしたら訳分からなく転送して……気がついたら此処にいた。

銀時「よっこいしょう。」

とりあえず、銀時は立ち上がった。
座って考えていても、何もわからないし、解決策も思いつかない。

銀時「神楽ー、新八ー、ヅラー、エリザベスー、月詠ー、おーい。・・・・・いねぇのかよ。とりあえず此処から出るか。このまま此処にいたら、丸焼きになっちまうからな」

銀時は出口を求めて、適当に歩き出した。

出口を求めて、炎が燃え盛る建物の中を歩き回る。炎の勢いが増していき、建物内の暑さが増していく。大量の汗を流しながら、取りで通路を進んでいく。

銀時「そろそろ出口、見つけねーと……マジでヤバイんだけど……」

危険な状況にすると、途中で銀時は足を止めた。キョロキョロと周りを見る。すると・・・

銀時「!?・・・今、声が聞こえたような……」

銀時は、声がしたと思われる方へ歩き出す。
少し歩くと、広い場所に出た。その中心辺りにある石像の前に、女の子がいた。顔を俯きながら、泣いている。

??「お父さん…お姉ちゃん…!」

泣きながら父親と姉を呼ぶ女の子。
顔や服は、すすで所々黒くなっている。炎の熱さで大量の汗をかき、息苦しそうになっている。

銀時「親とはぐれたのか?」

銀時が呟いた時だった。

女の子「…痛いよ……恐いよ……こんなの嫌だよ……帰りたいよ……」

顔を俯きながら、泣き続ける。

ピシピシピシッ・・・バキッ

その時、女の子の後ろにある石像にヒビが入った。ヒビは広がり、僅かに石像が前にズレた。
女の子は後ろを振り返った。
石像が、女の子に向かって前に倒れる。

銀時「ちっ！」

軽く舌打ちをして、銀時は走り出す。
女の子は振り返って、自分に向かって倒れてくる石像に気付く。

女の子「ひぃ……！！」

女の子は短い悲鳴を上げて、目を硬く閉じて頭を抱えた。
もう助からない。女の子が、そう思った時だった。

銀時「待て待て待て待て待て待てェエエエ！！」

銀時が叫びながら、全速力で女の子の元へ向かう。
石像が落ちる直前で、女の子を抱きかかえて走り去る。銀時の後ろで、石像が音を立てて床に落ちて、粉々に砕けた。

女の子は、自分を抱えている銀時の着物を離さぬよう、ギュッと強く握っている。

銀時「大丈夫か？」

銀時が、女の子に声をかけた。

声を聞いて女の子は、ゆっくりと目を開けて顔を上げる。緑色の瞳をしている女の子は、銀時の顔を見た。

女の子「……おじさん……誰……？」

銀時「おじ……！？」

おじさん、と呼ばれて銀時はショックを受けた。

一旦、女の子を床に降ろして、銀時は自分の右腕の匂いを嗅いだ。

女の子は、不思議そうな顔で銀時を見つめている。

銀時「あのさ……俺、加齢臭とかする？」

右腕から顔を離して、やや落ち込みぎみに女の子に尋ねた。

すると女の子は突然、驚愕の表情を浮かべる。

銀時「・・・・・あのさ、『おじさん』って呼ぶのやめてくんない？せめて『お兄さん』って呼んでくんない」

真顔で銀時が言った。

銀時の年齢は、まだ二十代前半……いや、二十代後半……あれ？どっちだっけ？まぁとりあえず二十代なので、おじさんと呼ばれるのは、まだ早い。

おじさんと呼ばれるのが納得いかず、小さくブツブツ文句を呟きながら、銀時は、再び女の子を抱き上げた。

その時、

ガラガラガラガラッ

天井から大きな瓦礫が降ってきた。

銀時「なっ！！」
女の子「ひぃッ…」
絶体絶命と思ったその時だった。
？？？「クリティカルエッジ！！」
ドゴ～～～ン
女性の声とともに紫色の光が通った。銀時たちを助けた女性は、蝶のような羽（？）と黒っぽいタイツに腰の部分にトレードマークと思われる”N”の文字、結んだ二つの三つ編みが足までいくような紫色の髪で、蒼い瞳の顔はまるで女神のように美しかった。
ネプテューヌ「う…ううん……？」
ネプテューヌは（若干）寝ぼけながらも起きた。どこかの建物のようだが、あちこちに炎がまわっていた。
ネプテューヌ「え？え？なにこれ？火事？」
ネプテューヌはここに来る前を思い出す。
イストワールが転送装置を作った↓装置作動↓コンパが勝手にいじる↓暴走して転送↓現在。

ネプテューヌ「とりあえずどうしよう・・・」

ネプテューヌは悩んだ後、仲間たちを呼んだ。

ネプテューヌ「コンパー、アイちゃ～ん、ノワールー、ブランー、ベールー、どこなの～」

ネプテューヌは叫ぶも、返事はなかった。

ネプテューヌ「…しかたない、みんなをさがそう」

ネプテューヌは仲間たちを探すために、中に入って言った。

あたりを探すものの、炎の勢いは増し、暑さで大量の汗を流していく。

ネプテューヌ「うぅ……熱い……なんかやばいかも」

暑さで熱中症になってしまいそうな時、

？？？「待て待て待て待て待て待てェエエエ！！」

男の声が聞こえた。

ネプテューヌ「え？何々？」

声のしたほうへ向くと、銀髪の男と青い髪の女の子がいた。

ネプテューヌ（さっきの声はあの人かな？）

ネプテューヌは男・銀時を見ていた。途中、銀時の変なリアクションがあったが。

ピシッ

ネプテューヌ「！！？」

音が聞こえ、上を向くと天井がいかにも抜けそうであった。そして、

バガッ

崩れおちた。

ネプテューヌ「いけない！変身！！」

突然ネプテューヌが光った後、紫髪の女性へと姿を変えた。
実はネプテューヌは紫の大地”プラネテューヌ”の守護女神（ハード）であり、
変身時の彼女はパープルハートと呼ばれている。後、ノワール、ブラン、ベールもネプテューヌと同じ守護女神（ハード）である。

パープルハート「間に合え！はあああああああああああああ！！！」

パープルハートはダッシュで銀時のところへ行き、

パープルハート「クリティカルエッジ！！」

ドゴ～～～ン

彼女の十八番の技で瓦礫を吹き飛ばした。

パープルハート「大丈夫？」

パープルハートが銀時と女の子に向かって言う。

銀時「あっああ、まあな」

銀時は服に付いたごみを払い落とす。

銀時「つーかお前、そんな恰好して恥ずかしくねぇのか？」

っと聞くと

パープルハート「ほっときなさい。それと私は”お前”ではなくてネプテューヌという名前があるのよ。・・・まぁこの姿ではパープルハートって呼ばれるけども」

パープルハートは呆れて言う。

銀時「そうかい」

銀時が納得すると、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

建物が揺れ始めた。

銀時「っと、やべぇな・・・さっさと脱出しようぜ」

パープルハート「・・・それもそうね」

パープルハートはひびの入った壁を見つめる。

パープルハート「あそこの壁から突き進むわよ！」

銀時「わーったよ。」

銀時は女の子を担ぐ。

銀時「今からあそこを蹴破って、外に出る。しっかり俺につかまってろ」

女の子は頷くと、銀時の体を強く抱いた。

自分につかまったのを確認して、銀時とパープルハートは壁に向かって走り出す。勢いを落とさずに壁に迫る。

銀時「うおりゃァアアア！！」

パープルハート「はぁぁあああああああ！！」

力強く床を蹴り、壁をぶっ飛ばした。

壁の先に、出口と思われる穴を見つけて、銀時とパープルハートは走る。

炎の中を駆け抜け、建物の外へと出た。

銀時「ふぅ……どうやら外に出れたみてェだな」

パープルハート「そうね」

外に出たのを確認して、銀時は女の子を床に降ろした。

女の子「お兄さん。お姉さん。助けてくれて、ありがとう！」

銀時「おお」

パープルハート「ええ」

女の子のお礼に、銀時とパープルハートは短く応えた。
火災はおさまってないので、三人は建物から離れた。
離れた所から見て、燃えているのが空港である事がわかった。
銀時は、これからどうするか、ぽりぽりと頭を掻きながら考える。
パープルハートもどうするべきか悩んでいる。
すると、銀時を見つめながら女の子が言った。

女の子「……お兄さん達、凄いなァ」
銀時・パープルハート「「ん？」」

銀時とパープルハートは考えを中断して、女の子に顔を向けた。

女の子「私……弱虫で……ずっと泣いてばっかで……何にもできなかった……」

自分の情けなさと悔しさで、女の子は泣き出す。

パープルハート「違うわ」
女の子「え？」

女の子は涙を流しながらパープルハートをみた。パープルハートは、女の子の頭に手を乗せ、

パープルハート「あなたが弱虫で泣き虫なら・・・ずっとその場で泣き続けていた。けど、あなたは”家族を探す”という勇気があったのよ」
銀時「そうだ。泣きながらでもいい。ボロボロでみっともなくても、諦めねェで進み続けたんだ。恥じる事なんてねーぜ」

二人の励ましに、女の子は泣きやんだ。

女の子「わたし、スバル・ナカジマって言うんだよ。お兄さんたちは？」

女の子の名はスバルと言い、銀時とパープルハートも名前を言う。

銀時「俺は坂田銀時、『侍』だ」

パープルハート「私はネプテューヌ、プラネテューヌの『守護女神（ハード）』よ」

スバル「侍？守護女神（ハード）？？」

三人が話で話し合っていると，空に誰かの声が聞こえたのか，スバルが振り向いて空を見上げた。

こちらに向かってくる、白い点を見つけた。段々近づいてきて、白い点が人である事がわかった。デバイスを持って、白いバリアジャケットに身を包んでいる。

スバル「お兄さん！お姉さん！助けが来たよ！」

スバルは後ろを振り返った。

スバル「……あれ？」

だが、そこに銀時とパープルハートの姿はなかった。

今さっきまで居たのに、忽然と消えてしまった。辺りを見回すが、やはりいない。

スバルは、少し淋しげな表情になるが、すぐにそれは消えた。そし

て決心する。
私も、あの銀髪のお兄さんと紫髪のお姉さんのように、強くて誰かを助けられる人になる。
そして４年後に銀時とネプテューヌとスバルは再会することになる。

第二訓：子供は助けた人に憧れを抱く（後書き）

真王「そういえばスバルって助けてくれた人に影響されているようだね。銀時では刀で、ボーボボではハジケをつかってたな・・・なら、私なりのスバルのポジションを考えるか」

スバル「次回『アクシデントは大乱闘の予感』テイクオフ！」

第三訓：アクシデントは大乱闘の予感（前書き）

真王「感想があんま来ないＯＴＬ」

コンパ「あっあの…しっかりしてください」

ネプテューヌ「アハハ・・・『リリカル銀魂』始まるよ」

第三訓：アクシデントは大乱闘の予感

００７５年。５月。
ミッドチルダ。第３起動高層ビル。
そこで数多くのガジェット達が大暴れしているという奇妙な事件が発生している。幸いにも閉店してあった為か誰１人もいなかった。
そんな中でツインヘアーの栗色の髪の女性が多くのガジェットと戦っている。
高町なのは。１９歳。機動六課の教導官を務めている。
レイジングハートを構えて、そこから大量の魔力を収束して一気に放つ。

???「ディバイン・バスター！！！！」

桜色の閃光が放たれ、無数のガジェットたちが一斉に消えた。これで大抵数多くのガジェット達を倒したにもかかわら、まだ山ほど存在する中，もう3時間近く戦っている為、魔力の限界を感じた。
そしてパスを通してフェイトに援護要求を求める。

なのは≪フェイトちゃん、そっちはどう?≫

なのははフェイトにパスを通して話しかけると，フェイトのほうも苦しそうな状況であった。

フェイト≪ダメ、こっちのほうのガジェットたちも異常なまでの多さに苦戦している！シグナル達とフォワード部隊の皆で戦っているから、もう少し時間がかかる！それまで辛抱して≫

なのは≪うん、わかった≫

パスを終え、フェイト達のほうも苦しい状況に追い込まれている。ガジェットたちが襲来して来たのは２ヶ月前であり，それまでは大した数は無かった上にそんなに強いわけじゃなかった。しかし，今回のガジェットの数は異常なまでに多かった。一体何が起こっているのかわからないまま、なのはは悩む。

なのは「…こんなとき、銀さん達がいてくれたら…」

なのはは銀時の名を言い出す。この世界では銀時の存在は世界的に有名である。

坂田銀時。

『ジュエルシード事件』、『闇の書・ゾーマ事件』を魔法を使わず、剣だけで解決した男。

その鬼神の如き強さから『白夜叉』と呼ばれ，管理局内でも有名で，知らない人は殆どいない。

魔導師としてのランクで言えば，間違いなくなのは達と同じくＳ＋は入る。

そしてゾーマを剣の腕だけで倒した銀時はまさに世界を救った英雄的な武神であった。

だが、実際に銀時の戦いの様子を見た者は、当時の事件の関係者やアースラの局員と、極僅かな人数である。だから本当に銀時がそんなに凄い人なのか、まだ信じられない人が多い。

だが、フェイト・シグナム・リィンフォームからはゾーマと戦った銀時の鬼神の戦いっぷりの話を聞かされ，もしかすればなのはでも勝ってしまうのでないかと思ってしまうほどである。

なのは「フェイトちゃん、アルフさん、シグナムさん、リインフォースさんの４人は銀さんの強さを知っているから…どんだけ強いんだろう？」

何故か銀時の事を考え出すなのは。

魔術が使えないのにも関わらずにその鬼神のごときの強さを持った武人が想像できないため，その眼で確かめたい気持ちであった。

シュルルルルルルル！！

なのは「何！？」

奇妙な音に，なのはは後ろを向くと，そこから数多くの緑色の爪らしき刃のある触手がなのはを襲う。魔力が半端じゃなく付きかけて反応が遅く魔法を唱える事ができなかった。そして・・・・

なのは「きゃあああああああああああああ！！！！」

無数の触手に体全体を巻かれて捕まり，その奥に引き込まれてしまうのである。

銀時「……あれ？…ここは？スバル？」

突如，またもや景色が変わった事で驚きだす銀時。周りの光景は何やら見慣れない町の景色を高速ビルの屋上から見えるのであった。一体どうしてなのか頭の中で混乱する中、神楽、新八、桂、エリザベス、月詠が銀時に駆けつける。

神楽「銀ちゃん！いつの間に来てたアルか！？」
新八「銀さん！大丈夫ですか！？」

神楽と新八は心配したのか銀時に駆けつけると，銀時は神楽と新八の姿を見て安心するかのうな表情で叫ぶ。

銀時「神楽、新八、無事だったか！…それに、ヅラ、エリザベス、月詠！！」
桂「ヅラじゃない桂だ！」

相変わらずヅラ呼ばわりされて突っ込む桂を尻目に，銀時はこの状況が一体何なのかを考える。

銀時「ま、何とか無事に面子は揃ったわけだし…とりあえずこの状況が一体なんなのか考えようか。」
月詠「わっちらはあの転送装置によってこの異世界に来たようで，ここが何処だか分からん。」

桂と月詠は無事にメンバーが揃った事で安心しているが、訳の分からない場所に飛ばされて不自然に感じている。

神楽「銀ちゃん！ここ海鳴町じゃないアル！？」
銀時「え…マジで！？」

神楽は不安げに銀時に言うと，銀時は驚きだして周りを見てみる。
確かにそこはビルがばっかり立っており、海鳴町とは全然雰囲気が違う。

一体どうしてこんな場所に付いたのか、本当にここがフェイト達の世界なのか理解できない銀時に、エリザベスがボートを出す。
エリザベス『まぁ…無事に揃ったから良いんじゃない？』
神楽「うっさいネ！！何どうでもいいような言い方するアルか！？」
銀時「おいおい，まさかこれもしかしたらまた別のアニメか漫画の――」

ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォンン！！

全員「！！？？」

突如の大爆発で５人＋一匹は驚きだす。それはビルから何かが大暴れしている感じで暴れているようであった。

月詠「な…なんじゃ、今の爆発は！？」

月詠が驚く中，床から突如，緑の化け物が銀時達を囲んだのである。

銀時「何なんだよこいつらはーー！？」

っと銀時は大きく叫ぶ。

新八「こっこれは・・・銀さん！」
神楽「銀ちゃん、こいつら何者ネ！」

神楽と新八は警戒しながらも傘と木刀を取り出して構え，月詠もクナイを構えだす。

銀時「知るかよ！こんな奴あの馬鹿皇子がなんか拾ってきたのか？」

銀時は怒鳴る。ちなみに馬鹿皇子とは、銀時の世界のハタ皇子のことである。

桂「何はともあれ、江戸の平和を乱すものは誰であろうと、この『狂乱の貴公子』桂小太郎が天誅を下す！」

エリザベス『お仕置き開始じゃ！』

桂はそう言いながら刀を抜いて構え、エリザベスがプラカードを構える。

銀時「いや・・・ここがどこであるかどうかもわかんねぇよ。つうか、新小説が始まっていきなりバトル展開かよ」

新八「そんなこと言ってる場合ですか?!」

っとうじうじと文句言いながら銀時は、腰に差している『洞爺湖』と彫られている木刀『幼刀・星砕』を抜いて構える。

神楽「ちょうど良いアル、最近運動不足だったから相手をしてやるネ」

神楽も両手をボキボキと鳴らしてやる気満々であった。

月詠「来るぞ！」

月詠が叫ぶと、異形達は一斉に銀時達を襲い掛かる。

ミッドチルダ　第3起動高層ビル・エントランスエリア

ネプテューヌ（・・・あれ？）

ネプテューヌが目を覚ますが、なぜか周りが真っ暗である。

ネプテューヌ（何これ？！暗いし動けない！・・・・・・あれ？足だけ動く）

体中が金縛りにあったように動くことができないネプテューヌ（足は動くが）

ネプテューヌ（どうしよう・・・このままじゃ・・・・・・・・・・ん？足に何か違和感が）

ネプテューヌの足が掴まれていることに気づき、・・・引っ張られている。

ネプテューヌ（イダダダダダ！ちぎれるちぎれるちぎれる～～！）

ネプテューヌはずっと足を引っ張られつづけ、

スポンッ！！

引っこ抜かれた。

ネプテューヌ「ウワッ！！」

？？？「キャァっ！！！」

引っこ抜かれたネプテューヌはしりもちをついた。

ネプテューヌ「イタタタ・・・一体何ｇ「気がついた？ネプ子」ってアイちゃん？！」

ネプテューヌは友達であり、仲間でもあるアイエフと再会出来た。

？？？「私たちもいるわよ」

そういったのは、女神仲間であるノワール、その後ろにはブランとベールがいた。

ネプテューヌ「よかった、みんな無事なんだ」

ネプテューヌがホッとしていると

コンパ「私は無事じゃないですぅぅぅ～～～～・・・・・・・」

ネプテューヌのしたで気絶しているコンパがいた。

ネプテューヌ「うわっ！！コンパ！大丈夫！？」

ネプテューヌはすぐさま降りる。

コンパ「うぅ・・・大丈夫です」

と言って、埃を払い落とす。

ネプテューヌ「よかった・・・・・・っていうかココドコ？」

イストワール「ここは異世界なんですよ」

っといつからいたのか、イストワールが説明した。

ネプテューヌ「ええ！！？ってことはここはゲイム業界じゃないの！？」

イストワール「はい」

ネプテューヌ驚いて聞くと、イストワールは普通に答えた。

ネプテューヌ「じゃあここはどういう世ｋ」

ドゴォォォォォォォォォォォォン

？？？「グオオォォォォォォォ～～～ン！！」

全員「！！！？？」

突然の破壊音とモンスターの鳴き声が上から聞こえた。

モンスター「オオオオオオオオオォォォォォ！！」

現れたモンスターは、緑の皮膚に数本の触手、大きな口を持ち、蠍のような赤い尻尾（？）が特徴を持っているが、ネプテューヌ達はこのモンスターに見覚えがあった。

ネプテューヌ「アバババン!?なんでこんな世界に!?」

ネプテューヌのいうアバババンとは、リーンボックスのダンジョンに住み着いた凶暴なモンスターである。だが彼女たちは、イストワールの協力でモンスターをすべて消滅させたのだが、そのモンスター・アバババンがここにいるのだ。

アバババン「グゥォオオオオアアアアア!!!」

アバババンが咆哮を放って、上へと登って行く時、アバババンの触手に女性が捕まっているのが見えた。

ノワール「!考えている余裕はないわ・・・追いかけてあいつを倒すわよ」

っと言って、懐からショートソードを取り出す。

ネプテューヌ・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ
「うん!／わかった／ええ／ハイです!／任せなさい」

っと、それぞれ木刀・ハンマー・パイク・大きな注射器（つーか武器なのか?しかもどこから?）・カタールを構える。

イストワール「・・・ではみなさん、がんばってくださいね（´∀`）／」

ネプテューヌ・コンパ・アイエフ・ノワール・ブラン・ベール
「あんたも戦えよ!!!!!!（イースンさんも戦ってください!!!!!!）（怒）」

イストワール以外の全員が怒鳴る。

イストワール「・・・・・非戦闘員でごめんなさい・・・（ＴＯＴ）」

イストワールは泣きながらも後をついて行った。

ミッドチルダ臨海第７空港

そこではフェイト達が大群のガジェット達の破壊をしていた。そしてようやく全てのガジェットは壊滅し，ツインヘアーの金髪の女性『フェイト・テスタロッサ』は陸に降り、四人の男女がフェイトに駆けつけた。

フェイト「皆、大丈夫!?」

???「はい！」

フェイトの心配の声に、三人の男女が応えた。

オレンジ髪のツインテールの少女。ティアナ・ランスター。１６歳。

赤髪の男の子。エリオ・モンディアル。１０歳。

ピンク色の髪の女の子。キャロ・ル・ルシェ。１０歳。

ちなみにキャロの隣には、使役竜フリードリヒ。通称フリードという小さな竜がいる。

三人とも機動六課の新人フォワード部隊である。

そして，赤い衣装を着たハンマーを持った少女ヴィータと、剣を持

ったピンク色のポニーテールの女性シグナムが駆けつけてきた。

フェイト「ヴィータ、シグナム！」

フェイトは安心したかのような顔で2人の名を呼ぶ。しかし，数が多すぎたのかさすがの2人も魔力を使い果たして，もう飛ぶことが出来ない状況になっている。

ヴィータ「こっちのほうも何とか片付いた。」

シグナム「だが・・・さすがに数が多すぎた・・・今までの3倍・・・いや4倍はあった。一体何がどうなって・・・・・・。」

突如の急激なガジェットの増幅に理解できないヴィータとシグナムだが，最優先すべき事ははなのはの援護である。

フェイト「ここも無事に解決したし、後はなのはの援護に向かうよ。」

F（フォワード）「はい！」

フェイトは急いでなのはの援護に向かう報告をするが，パスを通じても全然返事が来なかった。

フェイト（返事が無い！？…一体なのは何が…）

？？？「た…大変ですー！」

っと，空からヘリが現れ，その中にはシャマルがいた。

何やら慌てている様子であり，フェイトはシャマルに聞き出す。

フェイト「シャマル、どうしたの！？一体何が……」

シャマル「第3起動高層ビルに、意味不明の異種生命体が突如ビル

に現れたそうです！」
全員「！？」

そこは、なのはが大量のガジェットと1人で戦っている高層ビルである。なのはとのパスが通らないのも、そこでなのはに何かが起こった事である。

フェイト「なのは！」

フェイトは驚愕してなのはの名を呼んで叫んだ。

ヴィータ「ちぃ…なのはに何かあったのかもしれない！」

ヴィータは嫌な予感が嫌というほど想像する。

エリオ「フェイトさん！」
キャロ「早く，なのはさんの救出を！」

っとエリオとキャロがフェイトに言うと，迷いも無くなのはの救出に向かう。

フェイト達はヘリに乗って、なのはのいる第3起動高層ビルに向かっている。早く向かっても大抵は1時間までかかる。
フェイトは飛んで一足先になのはを助けたいが，魔力がもうほとんど無い為，今はせめて体力の回復をするしかなかった。
そしてシャマルはモニターをだすと，そこには第3起動高層ビルに強大な異種生命体と小さなものが映し出されているのが分かる。
それを見たフェイト達は信じられないような表情をする。

しかも，魔導師達のデバイスによる魔法攻撃もびくともせずに，さらに拡大し続けて刃の生えた触手の化け物が暴れている。
そして、数多くの魔導士達が返り討ちされて叩き落されたりと言う恐ろしい光景を眼にする。

ティアナ「こ……こんな化け物染みた生命体がいたなんて……」

っとティアナは恐ろしく感じる。見たこともない生命体に拡大し続ける為、まさに化け物しか言いようがない。挙句化け物は体から卵を出して、増殖しているのだ。だが、その化け物・アバババンの触手の一つに見覚えのあるものが見えた。

フェイト「!?なっなのは!!?」

そう、彼女の親友なのはであった。

ヴィータ「なっなんでなのはが」
シグナム「クッこんなときに高町が捕まるなんて」

ヴィータは驚き、シグナムは拳を握る。

フェイト、シグナム、ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャロは残り少ない魔力でアバババンに勝てるのか心配になってきた。
だが、その時シャマルはモニターを見てある異変に気づいた。
それは、アバババンの子供アバババンチャイルドが次々と倒されていくのだ。

シャマル「え…いきなり異種生命体がやられていく!?」

シャマルがそう言うと、フェイト達も驚きだしてモニターに注目する。
確かに誰かがアバババンチャイルドの体を踏み台扱いとして接近戦で戦っている所が映し出されている。

シグナム「一体誰がこんな無謀な事を・・・・・まさか！」

シグナムはある人物に気が付く。
それは，魔力を持たなくても鬼神の如くの強さを持った伝説の『白夜叉』の存在であった。

銀時「てぇやあああああああああああ！！！！」

銀時は木刀をアバババンチャイルドに向けて何度も大きく振り，次々アバババンチャイルドを真っ二つに斬る。

銀時「はいィイイイ！次ィイイイ！！」

銀時は首が飛ばされたアバババンチャイルドの頭を踏み台としてアバババンチャイルドの中に飛び込みながら、さらに木刀を振るった。
アバババンチャイルドは次々と斬られていく。

桂「おおォおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

桂も銀時に劣らない剣技を炸裂させ，アバババンチャイルドを真っ二つに両断した。
休まず刀を横薙ぎに振るって数多くのアバババンチャイルドを次々と切り離す。伊達に銀時と共に攘夷戦争に参加してなかったの様な

強さを炸裂させる。

神楽「ほぁちゃあぁぁぁ

まさに銀魂の5大超戦士とも言えるようなメンバーの人離れした戦いぶりは、アバババンチャイルドをも勝っていて次々とアバババンチャイルドを倒す。

新八「なんで僕だけ二つ名がないんですか！！！？」

新八はむなしく叫ぶが、あるとしても『ツッコミマスター』しかない。

ティアナ「す・・・すごい・・・！」

鬼神の如き強さで暴れ回る6人の姿を見て、ティアナは思わず口に出す。

ハッキリ言って、フェイト達が到着する前にすでに解決しそうである。

そして，モニターに映し出されている銀時の姿を見てフェイトは…。

フェイト「銀…時…？」

フェイトが口を開いた。

眼をこすってもう一度モニターを良く見ると、間違いなく銀時の姿が映し出されていた。

フェイト「やっぱり銀時だ！」

ヴィータ「マジかよ！それに、神楽・桂・エリザベスもいるぞ！」

シグナム「やはり銀時か！」

間違いなく銀時達の姿である事にフェイト・シグナム・ヴィータが

驚きだす。
銀時だけじゃなく神楽、桂、エリザベスの3人の強さはあいも変わらずであり、始めてみる月詠の実力はもかなりの手練だとフェイト達は思った。
シャマルも銀時がまさかこの世界に来ていたことに驚きを隠せなかった。

一方のフォワード隊のティアナ・エリオ・キャロの3人は銀時の名を聞き，驚きを隠せなかった。

ティアナ「ふ…フェイト隊長，銀時って……まさか，あの武神・坂田銀時ですか？」

っとティアナは質問すると、フェイトは縦に頷く。

エリオ「『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』で、魔法を使わずに剣だけで解決し、さらにはその強さはなのは隊長とフェイトさんに匹敵するS＋級に入る剣豪。そして世界を救った英雄で、人々からは「白夜叉」もしくは「エース・オブ・シルバーサムライ」とも呼ばれる伝説の武神」

銀時の噂を聞かされたことを改めて言い出すエリオ。

キャロ「魔法を使わずに活躍したって噂は、本当だったんですね」

キャロは、改めて銀時達が凄い人であると認識した。

そして銀時と桂は次々とアバババンチャイルドを斬り倒すと、背中を合わせる。

銀時「よぉ…くたばってねぇか，ヅラ」

桂「ヅラじゃない桂だ。伊達にお前と共に譲夷戦争に生き残ってはいない」

っと、桂は息切れしそうで溜息を吐くと、窓側に向く。そこにはアバババンチャイルドの大群がいた。

桂「あそこに穴を空く。その隙に中に侵入して奴らの親玉を潰すぞ。……エリザベス、あれを！！」

エリザベス『了解！』

っと書かれたボートでアバババンチャイルドを次々と粉砕しながら向かってくるエリザベス。

そして口から鋼鉄のスケッチ2つと、いつも桂が持っている爆弾の5倍の大きさを持つ爆弾を出す。

銀時「お前、エリザベスにこんな物騒な物を持たせたのかよ！？」

下手したらエリザベスの中でその爆弾が大爆発してとんでもない事が起こると銀時は突っ込むが、

桂「ぐずぐずしている暇はない！」

っと言いながら銀時に1つのスケッチを渡すと，2人はスケッチを構える。

桂「化け物共、見るが良い！！！！」
銀時「これが本当の……」

銀時と桂は一斉同時にスケッチをタイミングよく振り，２人のスケッチが巨大爆弾に直撃する。

銀時・桂「ゲートボールじゃ～～～～～～～～～～～～～～～！！！！」

飛ばされた巨大爆弾は、アバババンチャイルドのいる窓側に向かう。そして直撃した後、巨大爆弾は大爆発して出口のように穴が開かれた。

月詠「銀時、桂、ここはわっち等が食い止める！だから主等は先に行け！」
神楽「銀ちゃん、ヅラ、行くヨロシ！！」
新八「銀さん、桂さん、後は頼みます！！」
エリザベス『どうか、ご無事で！！』

神楽、新八、エリザベス、月詠の４人は銀時と桂アバババンチャイルドの親玉の討伐をたくし、外にいるアバババンチャイルドを次々と倒していく。

銀時「行くぜ、ヅラ！」
桂「ヅラじゃない桂だ！」
アバババン「オオォォォ

物語が始まって、すぐにド派手なバトルが始まったのであった。

第三訓：アクシデントは大乱闘の予感（後書き）

真王「次回で銀時とネプテューヌがまた接触します。けど早く感想来ないかな～～～・・・」

ネプテューヌ「次回『息がそろうとどんなボスもへっちゃら』テイクオフだよ♪」

第四訓：息がそろうとどんなボスもへっちゃら（前書き）

真王「実は、黒神さんから４つのリクエストが欲しいというコメントをいただきまして、かなえてあげると許可をもらえるというので、考えようと思います。」

銀時「つーか、許可もなくこの小説を作ったのはお前だろうが」

真王「・・・否定できない・・・」

コンパ「『リリカル銀魂』始まるです」

第四訓：息がそろうとどんなボスもへっちゃら

ミッドチルダ　第３起動高層ビル・１０Ｆ

突如現れたアバババンとアバババンチャイルドに侵略された第３起動高層ビルの中に侵入する銀時と桂は、元を立つ為に親玉を討伐しに行く。次々と現れるアバババンチャイルドを次々を斬り倒していきながら２人は下に向かっている。

桂「どけぇ～～～！！」
銀時「小便かけるぞ、このやろ～～！！」

２人の侍の力により、次々とアバババンチャイルドが斬り倒されていく。・・・つうか銀さん、小便って言うなや。
天人との戦いに慣れている２人にとっては朝飯前のような存在である。
眼の前に見えた扉は何やら頑丈に固まっており、アバババンチャイルドの軍勢が続々と囲んでいる。

銀時「ちぃ・・・まだいやがるか！」
桂「だが、先ほどまでとは違うあの守りの塊から考えれば間違いなくあそこに親玉がいるはずだ！一気に行くぞ！」

銀時と桂は刀を構えて強行突破しようとするが、突如２人の後ろから走っているかの様なローラー音が聞こえる。

銀時・桂「！？」

２人は後ろを向くと、１人の少女が素早く駆けつける。

？？？「はぁあああああああああああ！！！！」

少女はアバババンチャイルドの軍勢に飛び込むと、右手に装着した黒くて金属的なグローブでアバババンチャイルドをすべてなぎ倒していった。

銀時「な・・・・・・1人でえいりあん共を全て倒しやがった！」

桂「大した戦法と技だ。この世界にも銀時のような強いものが存在したか」

予想外の事に驚く銀時と桂。

そして、少女は後ろを振り向く。

？？？「やっぱりまだ逃げ遅れがいたんだ。良かった、無事に見つか・・・・・・て・・・・・・？」

少女は銀時の顔を見て唖然とする。

少女の容姿は青い髪でショートカットのボーイッシュな少女で、頭に白い鉢巻をかけていて、何やら白いロングコートを着ていて緑色の瞳をしている。

？？？「まさか・・・・・銀時さん！？」

少女が、銀時の名を言い出すと、銀時は思わず驚きだす。

銀時「お前、何で俺の名前を？」

銀時が少女に尋ねると、少女は嬉しそうに銀時に抱き抱える。

？？？「やっぱり銀時さんだ～～！！」
銀時「のぁ～～！！ちょ・・・・・ちょっとまてぇ～～～～！！
何でお前が俺の名前を知っているんだ～～！！？？」

大胆に抱かれて慌ててしまう銀時。彼の胸元には少女の大きな胸が
押しかかれてしまい、動揺を隠せない。
それを見た桂はニヤニヤと笑い出す。
こいつ、絶対に後でぶっ飛ばす！っと銀時はその時そう思った。
しかし、少女のほうを良く見ると、どこかで見たような感じで見る。

銀時「あれ？ちょっと待って……何か見覚えがあんだよな……どこ
かで会ったっけ？」

首を傾げる。
そして少女は銀時に名を言い出す。

スバル「お久し振りです、銀時さん！私です、スバル・ナカジマで
す！」

少女がスバル・ナカジマと名乗ると・・・銀時はしばらく唖然とす
る中、我に返ってスバルの名を叫ぶ。

銀時「・・・・・・え・・・・・・嘘・・・・・・スバルゥウウウ
！？」

銀時の大声に、スバルはビクッと体を震わせた.

スバル「え・・・あ・・・はい」

マジでかァアアア！？

銀時は頭を抱えて、今は真っ暗なビル内を仰ぐ。

銀時（え・・・いや、さっき会ったスバルは、まだ小学生位じゃなかったんじゃ！？てぇええ！？）

何がなんだか分からない銀時に、スバルは嬉しそうに声をかける。

スバル「本当にお久し振りです。まさかここで４年ぶりの再会が出来て私、感激です」

銀時「４年ぶり？」

スバルの「４年ぶり」っという台詞に銀時はあの光景がなんなのか分かった。

銀時（オイィ～～～～！！まさかあれは４年前の光景だったの！？え・・・銀さんだけタイムスリップしちゃったの！？）

っと銀時は慌てる中、原因は装置の制御不能により、銀時だけ４年前の世界に飛ばされ、そして何故か予想外にすぐに神楽達の場所に飛ばされたのである。

スバルは桂を見ると、驚きだしてはしゃぎだす。

スバル「ああー！！「狂乱の貴公子」桂小太郎さんだ！」

っと尊敬するかのような叫びにスバルは桂を見ると・・・

桂「む・・・俺の事も知っているのか。」

桂も、この世界では有名な存在である。

桂小太郎

『闇の書・ゾーマ事件』で銀時と同じく魔法を使わずに剣と爆弾で解決して活躍した侍。
かなりのクールボケで、しかも人妻好きと言うかなり変なところが印象的に大きいが、その強さは銀時に引けをとらない強さを持っており、剣の腕もかなり高く、爆弾の使い手でもある。
しかも『んまい棒混捕駄呪（コーン・ポタージュ）』や『んまい棒鎖羅魅（サラミ）』などデバイスではない特殊な道具を使いこなす戦いぶりは、「狂乱の貴公子」・または「狂乱の騎士」とも呼ばれる。

スバル「はい、何せあの時空管理局遺失物管理部機動六課のはやて課長が最も信頼する、ヴィータさん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさんと同じ、5人目の騎士とも言われた伝説の侍です！」
桂「はやて・・・八神殿の事か！？」
銀時「スバル・・・まさか、この世界にフェイト達がいるって事か！？」

スバルがはやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの名を言い出すと、銀時と桂はこの世界は間違いなくフェイト達の世界であると確信した。
そしてスバルは2人の質問に正直に答える。

スバル「はい・・・フェイトさんの事は知っていますけど？」

っとスバルは答えだすと、2人は間違いなくこの世界がフェイト達の世界であると確信する。

桂「何はともあれ、今はこの状況を何とかしないとな。スバル殿、お主はこのビルに侵略している生物が何者なのか知っているか？」
スバル「え！？いっいや私に聞かれてもわかりまｓ「ビキビキビキッ」！？」

上からひび割れる音が聞こえ、そして、

バカァァァァァァァン！！

？？？「ゴォォォオオオオオオ！！？？」
？？？「キャァァァァ～～～～！！！！」

天井が崩れ、巨大生物と約６人ぐらいの少女たちが降ってきた。
だが、銀時は運悪く、少女達の下にいた。

銀時「へ？？・・・ウゴッ！！」

銀時は少女達の下敷きになってしまった。

ネプテューヌ「イタタタタタ・・・みんな生きてる？」

落ちてきた少女達の一人はなんと、ネプテューヌだった。

ノワール「いっつ・・・なんとかね」
ブラン「こんなのかすり傷程度よ」
ベール「汚れてしまいましたわ」
イストワール「私もなんとか無事です」
アイエフ「コンパ・・・・・・大丈夫？」
コンパ「はうううぅぅぅ～～」

さらに、ノワール・ブラン・ベール・イストワール・アイエフは無事のようだが、コンパは目を回している。

銀時「おいちょっと」
ネプテューヌ「ん？」

下から声が聞こえるので、下を見ると

銀時「早く下りてくんねぇか」

銀時がいました。

ネプテューヌ「あっごめんなさ・・・・・・」

下りようとしたネプテューヌは銀時をまじまじと見つめている。

銀時「えっ？何見てんの？やめてくれないその眼差し」

銀時がやめてくれというが、

銀時「・・・あれ？何か見覚えのあるような・・・」

ネプテューヌを見て何かに引っ掛かり、考えていると、

ネプテューヌ「・・・・・・あなたは坂田銀時？」

ネプテューヌがそういうと、

銀時「・・・なんでおれの名前を・・・」

っと、銀時が返すと

ネプテューヌ「やっぱりそうなんだ！」

ネプテューヌがうれしそうなリアクションをする。しかし、倒れている銀時はもちろん、桂とスバル・ノワール・ブラン・ベール・イストワール・アイエフに、ついさっき正気に戻ったコンパもわけがわからないような顔をする。

銀時「・・・おめぇ誰だよ」

銀時が起き上がってきくと、

ネプテューヌ「私はネプテューヌだよ」

ネプテューヌはそう答えた。

銀時「・・・えっ？・・・・・・・・・・嘘？・・・・・・・・ネプテューヌって？？」

ネプテューヌ「うん♪」

・・・・・・・・・・

声を上げた。
その大声に、ネプテューヌを含む全員が耳をふさいだ。

銀時「ちょっおまっ嘘つくんじゃねぇーよ!!どう見たってガキじゃねーか!」
スバル「そうだよ!!ネプテューヌさんっていったらもう少し背が高かったよ!!!」

銀時とスバルが目の前にいる少女をネプテューヌだとは信じてないらしい。

アイエフ「ネプ子・・・あんた一体何をしたの?」
ネプテューヌ「なっ何したって、目が覚めたら周りが火の海でちっちゃいスバルちゃんと銀さんがいて変身して一緒に脱出しただけだよ~~」

アイエフの問いにどぎまぎにこたえる。

銀時「あん?変身?」
スバル「変身って何?」

っと二人が変身という単語に興味を持った。その時、スバルの目が早く見たいと言っているようだ。

ネプテューヌ「それはこうだよ。変身!!」

ピカ~~~~~ン

突然ネプテューヌから強い光が出て、おさまるとスバルを助けた頃と同じパープルハートになっていた。

銀時・スバル「・・・・・・ェェエエエ

凶暴だから」

っと説明するネプテューヌ。

銀時「あ？阿波馬場？何だそれ」

ノワール「アバババンよ。あいつの名前」

銀時の間違いをノワールが訂正する。

アバババン「グガァァァァアアアア！！！」

アバババンが突然口から卵を出した。そして、

アバババンチャイルド「ギュァァァアアア！！」

５体のアバババンチャイルドが生まれた。

銀時「ちっ！早くあいつをたおさねぇとキリがないぜ」

銀時は木刀を構える。

ネプテューヌ「私たちもあいつを倒そうとしてるけど人質もってるから迂闊に手が出ないの」

ネプテューヌの言葉に銀時はアバババンを見ると、白い服の女性が捕まっていた。

銀時「くそ！どうすれｂ「私にまかせてください！！」ってスバル！？」

っといきなりスバルがアバババンのほうへ向かっていった。

アバババン「！！グガガァ！！！」
アバババンチャイルド×５「ギャアアアア！！」

突進してくるスバルに気づいたアバババンがアバババンチャイルドに指示を出し、アバババンチャイルドが一斉に飛びかかる。

アイエフ「何やってんのよあの子！！死ぬつもり！！？」
コンパ「スバルさん！！」

二人はスバルを助けようとするが、

銀時「待てよ」

銀時に止められた。

アイエフ「何で止めるの！？」

アイエフの問いに銀時が、

銀時「あいつは・・・きっと強いぜ」

っと笑みを浮かべて、スバルを見ていた。

飛びかかったアバババンチャイルドが近づく中、

スバル「（・・・・・・・・・いける！！）ハァッ！！」

スバルがカクッと右に曲がり、アバババンチャイルドの攻撃をかわ

す。

アバババン「！！？ガルゥ！！」

近づいてきたスバルにアバババンが攻撃するが、ジャンプでかわされる。だが、

アバババン「（ニヤッ）ガアアアア！！」

見逃さなかったアバババンが尻尾でスバルを狙うが、

スバル「ふんっ！！」

バシッ！

アバババン「ガァ！？？」

右手に装備したグローブで尻尾の軌道をずらした。これにアバババンは驚いてしまい、隙を作ってしまう。

スバル「（いまだ！）ハァァアアア！！！」

ズバンッ！！

アバババン「ギィィィイイイイ！！？？」

隙をついたスバルが、アバババンの触手を切り落とし、女性を助け出した。

スバル「これはおまけだよ！ハァッ！！」

ズガンッ！！

アバババン「グバァッ！！？」

さらにスバルからの一撃をもらい、アバババンはたたきつけられ、のびてしまう。

アイエフ・コンパ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人はスバルの活躍に唖然としてしまった。

ネプテューヌ「スバルちゃんすご～～～い」

ネプテューヌは感激し、

ノワール「なかなかやるわね」

ノワールは感心し、

ブラン「・・・・・・・・・」

ブランは無表情だが、驚いており、

ベール「あらあらあら・・・」

ベールは驚きながらも感心していった。

イストワール（あの人はかなりの魔力と運動能力を持っていますね。・・・彼女のことをもう少し調べる必要がありますね）

っと、イストワールはスバルの並はずれた身体能力と力に興味を持ち始める。

イストワール（しかし、彼女は人とは違う気を感じます。ネプテューヌさんのような女神ではないのに・・・あれは・・・・・・）

っとイストワールは何かを考えたが、やめた。

銀時「よう。おわったか」

っと銀時がスバルに声をかける。ちなみに、スバルに飛びかかった5体のアバババンチャイルドは、銀時たちが倒して、死骸になっている。

スバル「はい。・・・っと」

スバルはアバババンに捕まった女性をおろす。が、スバルはどこかで見たような顔に考える。

スバル「この人・・・どこかで見たような・・・」

そして銀時は気絶している女性が無事なのか声をかける。

銀時「おい、大丈夫か!?返事をしろ!」

??「・・・・・う・・・うぅ・・・？」

女性はゆっくりと眼を開けると、銀時の姿が眼に映ると・・・なのはは少し驚いたような表情で銀時の名を言い出す。

なのは「銀・・・さん？」

見知らない女性に名を呼ばれて、銀時はポカンとしてる。

銀時「あの…どちら様で？」

と、銀時は目の前の女性が、銀時も良く知っている人物であると気付かずに言った。

だが、ジッと見ていると何か気になる。

銀時「あれ？ちょっと待って……何か見覚えがあんだよな……どこかで会ったっけ？」

首を傾げる。

しかし、女性の持っているデバイスを良く見ると、ボロボロに壊れかけていてもはっきりと分かる「レイジングハート」である。

そして銀時は気付いた。

銀時「お前っ！まさか…なのはか！？」

驚きながら銀時は言った。

なのは「・・・ああ、やっぱり銀さんだ！」

なのはも銀時である事にはっきりとわかって銀時の名を言いだす。

銀時「えっ！？ちょっ…マジでか！？」

驚いた銀時は、マジマジとなのはを見つめた。

なのは「私、１９歳になりました！」

銀時「１９！！？」

銀時は更に驚いた。

確かに今のなのはは、大人だ。元々可愛かったが、大きくなって大人の魅力的なモノもあって綺麗だ。

銀時「あらら～、すっかり大きくなっちゃって……ってちょっと待てェエエエ！！」

急に立ち上がって、銀時は叫んだ。

後ろにいる桂とスバル・さらにはネプテューヌ達も驚いて、体を震わせた。

銀時「おかしい！絶対おかしい！！だって…お前この前まで、まだ小学生……えええっ！？何これ？どうなってんだ！？」

目の前の事が信じられず、銀時は混乱した。

なのは「落ち着いてください、銀さん！」

なのはの言葉にピタリと混乱を止める銀時。

ネプテューヌ「・・・あれ？銀さんこの人と知り合い？」

ネプテューヌが二人の会話に入る。

銀時「知り合いにも何も、あの時のなのははまだ小学生だったんだぞ。」

銀時の答えにネプテューヌがキラーンと眼を光らせる。

ネプテューヌ「へぇ～。でもその年なら銀さんと結婚できるんじゃないかな～？」
銀時・なのは「！！？／／／／／」

ネプテューヌのセリフに銀時となのはが顔を赤くする。
それだけでなく、コンパとアイエフとスバルも顔を赤くし、ノワールの顔が真っ赤に染まり、ブランはそのネタいただきっていうような顔をし、ベールはクスクスと笑い、桂はニヤニヤと笑っている。
その時スバルがなのはという名前を思い出し、正気に戻る。

スバル（って・・・なのはさんってあの『機動六課』の隊長の１人であり，『エースオブエース』の異名を持っているあの高町なのはさん？）

まさかの人物に会ったスバルは内心に驚き出している。
そして桂も一緒であった。

桂「高町殿！？・・・いつの間にそこまで・・・」
なのは「桂さん、お久し振りです」

桂に気が付くと、なのはは親しそうに桂に挨拶する。

桂「うーむ、随分と大きくなったな。おこづかいに五十円あげよう」
なのは「あ…いえ、結構です」

なのははは、やんわりと断った。

ネプテューヌ「何言ってんの！お金をもらったら自分の物にｓ「コソ泥かあんたは！！」」

ネプテューヌの発言にアイエフが突っ込む。
そして、なのはの隣にいるスバルに気が付く。
なのは「え・・・とう・・・・君は？」
っとなのははスバルに名を訪ねると、スバルは名乗りだす。
スバル「ス・・・スバル・ナカジマです」
名のりだすと、なのはは驚きだす。
なのは「え・・・スバル・ナカジマって・・・まさか時空管理局陸士１０８部隊長、ゲンヤ・ナカジマさんの娘！？」
なのははスバルにそう聞き出す。

実はスバルには、魔導士達でもちょっと有名な新人魔導士。
４年前の事件でスバルは銀時とネプテューヌに助けられ、その後父であるゲンヤに銀時の事の存在を知らされた。
魔法が使えない代わりに剣だけで鬼神の如くの強さを持った武神であることを聞かされる。
銀時の存在を知ったスバルは、その一週間後に魔法を習い始める。
銀時のように誰かを護れる武神になりたい・ネプテューヌのように誰かを助けられる人になりたいと言う一心で、人一倍・・・いや人十倍的な努力で、強力な魔法と技を得た。
他にも、姉のギンガにも、もしもの為に武術を学んでいた。
その翌年に時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入学すると、魔導士としては良い線を行くという程度だが、鍛え上げ

られたその力は誰よりも注目を浴びすでに？1の優秀な魔導士とも評価されていた。
その為、スバルの魔力は自分自身でも予想外の事にランクは陸戦ＡＡ＋となっている。
銀時のような、そしてネプテューヌのような心強い人間になりたいと言う理由で父・ゲンヤは納得して許した。

銀時「・・・え・・・スバルって、俺を目的にそれほどスゲェ成績を残したの？やべぇよ、なんかメッチャ照れるんだけど？どうすればいいんだ、ヅラ」
桂「ヅラじゃない桂だ。・・・しかし、魔導士とは思えないやり方だが、スバル殿のやり方はまさに侍の魂を持った魔導士とも言えよう。君のその信念に感動した。そんなスバル殿には攘夷志士タオルを上げよう」

っと桂は何処から出したのか、攘夷と書かれたタオルをスバルに渡す。

スバル「あ・・・ありがとうございます」

苦笑しながらも、スバルは攘夷志士タオルを受け取る。

なのは「二ヶ月間の間、どこかで修行していると聞いたから、ギンガさんは心配していたよ。何でスバルがここに？」

姿を消したはずのスバルがどうしてこの第3起動高層ビルにいるのか、なのはは質問する。

スバル「実ｈ「バガァァァァアアアアアァァ！！」なっ！！

？」

スバルが説明しようとした時、気絶していたアババンが復活した。

ネプテューヌ「ああっ！しまった、忘れてた！」

ネプテューヌ達もなのは達の会話を聞いていたため、アババンの存在を忘れたしまったようだ。

アバババン「グヴヴヴヴヴゥゥゥゥ・・・・・・」

アバババンは、銀時達を睨んでいる。相当お怒りのようだ。

銀時「何だ？無視されて怒ってんのか？ああん？」

銀時もアバババンを睨む。

アバババン「ヴヴヴヴヴヴヴゥゥゥゥゥゥ・・・・・・」

アバババンは数秒間睨み続けた後、

アバババン「・・・・・・・・・・・・グアッ！！」

窓に向かって走り始めた。

全員「えっ！！！？／なっ！！！？」

突然のアバババンの行動に驚く。そして、

バリ～～～ン！！

アバババン「グヴォォォォオオオオ！！！」

窓を破ったアバババンが、触手を使ってビルを登っていく。

銀時「逃げる気かあいつは！」

ネプテューヌ「早く追いかけよう！逃したら大変なことになるよ」

イストワール「・・・行き先は多分屋上です。・・・急ぎましょう」

屋上へと逃げだしたアバババンを追いかけるため、銀時達も後を追う。すると、

なのは「あっあの・・・」

銀時「ん？」

なのはが銀時を止める。

なのは「わっわたしも屋上に行ってもいいかな？」

今のなのはは魔力も尽きてボロボロであるのに突然行きたいと言い出す。すると銀時は、

銀時「・・・いいぜ。だがあいつは俺が倒してやるからな。安心して見届けてろ」

っと言ってなのはの頭をなでる。

なのは「あっ／／／／／」

なでられたなのはは顔を赤くする。すると、

ネプテューヌ「銀さん。”俺”じゃなくて”俺達”じゃないの？」

ネプテューヌが間違いを訂正させる。

銀時「うっせ～な！行くぞなのは」

なのは「はい！」

銀時は屋上へ行き、なのはは銀時を追いかけた。

ミッドチルダ　第３起動高層ビル屋上・ヘリポートエリア

アバババン「グルルルルルル・・・」

屋上へと這い上がったアバババンはその身を休めようとしたが、

バァン！

ネプテューヌ「やっと追い付いた！」

銀時「もう逃がさねぇぜ！」

アバババン「！？グウウウウウウウウウゥゥゥゥゥ・・・・・・」

やって来たネプテューヌ達に追いつかれ、来た道を戻ろうとするが、

ノワール「逃がさないわ」

っとノワールとブランとベールが行く手を阻まれた。アバババンは囲まれた。

銀時「おい。たしかおまえはなんてったっけか？」

いきなり銀時がこんなことをきくと、

ネプテューヌ「ネプテューヌだよ」

っと答える。

銀時「よし！じゃぁネプテューヌ、一撃であいつを倒すぞ」

ネプテューヌ「当然！」

スバル「あっ私も」

銀時・ネプテューヌ・スバルの三人でアバババンを仕留めようとする。

アバババン「ガァァァァアアアアアアアア！！！」

しびれを切らしたアバババンが、三人に襲いかかるも、かわされて、

銀時「でぇぇえええええやぁぁぁあああ！！」

ネプテューヌ「えええええぇぇぇぇぇぇ～い！！」

ズドォォッ！！！

アバババン「ガボォッ！！！」

二人のサンドイッチアタックをくらってしまい、

スバル「ハアアアッ！！」

ズシンッ！！

アバババン「ガッ！！！？」

スバルの攻撃で頭が埋もれる。
その後、アバババンへのラッシュは続く。

ネプテューヌ「ほいな♪」バキッ！　アバババン「グア゛ッ！！」
銀時「おら！！」バコッ！　アバババン「ガブッ！！」
スバル「デヤッ！！」ドガッ！！　アバババン「ゴォォッ！！」

まさに袋叩きである。

アバババン「・・・グヴヴヴヴヴガア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！」

完全にぶち切れたアバババンが触手を振り回す。

銀時「てめぇと付き合うのはここまでだ」
ネプテューヌ「とどめといくよ～～！」

っと二人はいっせいに走り出し、

銀時「おらおらおらおら～～～！！！」
ネプテューヌ「無駄無駄無駄無駄～～～！！！」

アバババンの触手を切り落とす。つうか二人ともなんでジョ○ョな

んだ？

なのは（す・・・すごい・・・間近で見ると、銀さんってこんなに強かったんだ。）

初めて間近で見る銀時の戦いっぷりになのはは驚きを隠せなかった。

なのは（銀さんだけじゃない！ネプちゃんの剣さばきや、それに劣らずスバルの魔法攻撃・・・けど何よりも銀さんが凄い！剣術の『型』がないって言うよりも・・・『型』が変化する剣技だ！）

あの魔導生物兵器『ゾーマ』を剣だけで倒し、変化自在の豪快なる剣を振るう『白夜叉』坂田銀時。

とても普通の少女とは思えない動きと身軽さを持つネプテューヌ。

魔法と力（パワー）で新人魔道士？1の実力を持つと言われる、スバル・ナカジマ。

なのは（でも・・・・銀さんはやっぱり凄い）

なのはが銀時の実力に感心していると、

アバババン「ゴッ！？ゴォォオ！！？？？」

アバババンの触手がすべて無くなっていた。

銀時「さ～て、エイリアン野郎。覚悟はいいか」

ネプテューヌ「どうせなら思い切ってドンッ！っていくよ」

銀時「いいね。そのほうが気持いいな」

アバババン「グゴ・・・」

触手のないアバババンでは成すすべもなかった。そして、

銀時「はい！せ～の」

銀時・ネプテューヌ・スバル「でやっ！！！！」

バキィィィィン！！！

アバババン「ガア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ァァァァァ・・・・・・」

三人にぶっ飛ばされたアバババンは、屋上から落下していき、

ズドォォォォォォォォォン！！！！

地面に落ちた。

アバババンチャイルド「アアアアア・・・・・・・・・・・・・・・」

それと同時に、アバババンチャイルドが全員息絶えた。

なのは達「やった～～～～～！！！」

アバババンを銀時達が倒したことにより、なのは達は喜びを出した。

銀時「やるじゃねぇか」

ネプテューヌ「銀さんもやるじゃん」

銀時とネプテューヌはお互いの手をたたき合った。

スバル「あれ？わたしは！？」

第四訓：息がそろうとどんなボスもへっちゃら（後書き）

真王「長く作ってしまった。・・・次回はフェイトと銀時が再会、そして向かうのは彼女たちの本部『機動六課』、そしてネプテューヌは・・・」

ティアナ「ちょっと作者、今回のスバルあんま変わんないじゃない」

真王「まぁ、変わってないように見えるが彼女の技がチートにしておきました」

ティアナ「何それ!!?技がチートってどういうつもりよ!!」

真王「おちつけ・・・スバルだけチートにするのはかわいそうだからフォワード全員にもチートを上げますよ」

ティアナ「え!?マジで!?」

真王「フォワードのチート化ですが、物語が進むまで保留にしておきますので待っててくださいｎ「チャキッ」・・・なにしてるんですか」

ティアナ「今すぐ私をチートにしなさい。頭に風穴をあけられたくなｋ「ジェノサイドブレイバー!!!」キャァァァァァァ!!!」

真王「全く、俺を脅すなんて命知らずな（ため息）。・・・まぁいいや、なのは、たのむ」

なのは「ハッハイ！！次回『長ったらしい話はみんないや』テイクオフ！（ビクビク）」

第五訓：長ったらしい話はみんないや（前書き）

真王「Ｚｚｚ・・・Ｚｚｚ・・・Ｚｚｚ・・・」

銀時「おいこら作者！何寝てんだ！」

真王「ん？・・・おっと時間か。みんな、位置について」

ネプテューヌ「２０１１年、新年明けまして～」

全員「おめでとうございま～～～す！」

真王「ついに始まった２０１１年、ここから先はハチャメチャ入りのストーリーがスタートします。というわけで、『リリカル銀魂』」

全員「始まります！！」

第五訓：長ったらしい話はみんないや

ミッドチルダ　第3起動高層ビル・入口付近

神楽「何アルか！？」

外で戦っていた神楽・新八・エリザベス・月詠の４人はアバババンが屋上から降ってきたことに気づいた。慌ててその場を離れ、アバババンが地面に激突したと同時に、アバババンチャイルドが全員揃って息絶えたのだ。

月詠「どうやら、銀時と桂は無事に親玉を討伐したようじゃな」

煙管（きせる）を加えて口から煙を放つ月詠は少し笑って安心する。

エリザベス『さすが桂さん』

っとエリザベスはそう書かれたボートを出す。

神楽「とにかく、銀ちゃんとヅラも無事って事ね。早く2人を迎えにいくアル。」

エリザベス『そうだった！』

神楽・新八・エリザベス・月詠の４人は急いで2人を探しに行こうとするが、突如巨大なヘリの音が聞こえ出す。

４人はその音の方向を振り向くと、そこにはフェイト・ヴィータ・シグナム・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロがいた。

ヴィータ「おおーい、神楽ー、エリザベスー！」

ヴィータが嬉しそうに声をかけると、神楽も返事をするかのように叫ぶ。

神楽「おおー、シグナム・ヴィータ・シャマルある！元気だったアルか！」

見慣れた3人の姿を見て神楽は喜びだす。
そしてフェイトがヘリから降りてバリアジャケットの衣装に変身して神楽に近づく。

フェイト「神楽、エリザベス、久し振り！」

１０年後の姿のフェイトであるとは知らず、神楽と新八とエリザベスはポカンとする。

新八「・・・あの・・・誰ですか？」

っと新八はそう言うと、エリザベスはフェイトの持っている『バルディッシュ』である事を気づく。

エリザベス『あれって、バルディッシュじゃない？』

そうか狩れたボートを神楽に見せるエリザベスに、神楽は

神楽「あ・・・本当ネ。」

っと言い出す。そして3人は１０年後のフェイトが自分達の知っているフェイトであることを確信する。

神楽「まさか・・・フェイトアルか！？」
新八・エリザベス『え・・・マジ！？』

2人がフェイトであることを驚きだし、フェイトは苦笑して顔を頷く。

ミッドチルダ　第3起動高層ビル屋上・ヘリポートエリア

銀時「あ～っ久々に運動した気分だ」
ネプテューヌ「え？私はまだ余裕だけど？」

アバババンを倒した銀時は、肩をぐるぐる回しているが、ネプテューヌはまだまだ余裕である。

銀時「俺とお前じゃこの疲れなんてわかるわけね～よ」
ネプテューヌ「へぇ～、つまり銀さんは年寄りなんだね」
銀時「違げ～よ！！」

年寄りという単語に反応し、怒鳴る銀時。

銀時「ま、それにしても」

っと銀時はスバルを見て、

スバル「銀時さん？」
銀時「強くなったな、スバル」

銀時がそう言うと、スバルは晴れたかのような顔で嬉しく感じた。

銀時「何かを守る為にここまで強くなれるなんて、大したもんじゃないか。その信念に胸にはってもっと強くなれ。」

スバル「・・・はい！」

憧れた人物にも認められ、スバルは嬉しさで一杯だった。

なのは「・・・あ・・・あのう・・・・・・銀さん／／／」

突如、なのはは顔を真っ赤にして銀時を見つめると、銀時はなのはの顔に振り向く。

なのは「その・・・えっとう・・・ありがとうございます／／／」

テレながらも助けてくれた事に礼を言うなのはに、銀時は意外そうな顔で少し驚くが、すぐに笑い出す。

銀時「おいおい、さっきまでのきつそうな顔よりも、綺麗な笑顔で笑っているじゃねぇか。そっちの方が似合っているよ」

なのは「ふぇ？／／／」

綺麗といわれてドキッとなったなのは。

桂は銀時にまた女が出来るのではないかと笑い出し、スバルは何やらなのはの反応に意外そうに見る。

ネプテューヌ（・・・銀さんもしかしてわざとなの？・・・いや、性格上そうはないとしたら天然？・・・それともただの鈍感？）

ネプテューヌは銀時となのはのやり取りを見て、うらやましそうに見ていた。
突如、隣から数多くの足音が聞こえてきて、銀時はその音が聞こえる方法を見て見ると、1人の金髪の女性と顔合わせすると、女性は思わず銀時の名を口にする。

フェイト「銀・・・時・・・？」

名前を言われて思わずポカンとなる銀時だが、女性の髪形に持っているデバイス『バルディッシュ』を見ると、その女性がある人物である事を分かった。

銀時「まさか・・・フェイトか！？」
フェイト「あぁ！！」

銀時に名を呼ばれて喜びだすフェイトは嬉しくなり、思わず『バルディッシュ』を落として銀時に駆けつける。

フェイト「銀時ー！！」

フェイトは銀時に飛びかかって、銀時の胸の中に飛び込んだ。銀時は思わずフェイトを抱いた。

銀時「お…おい、フェイト…」

フェイトが突如抱きついてきて、銀時が戸惑っていた。

フェイト「クス・・・銀時・・・会いたかったよ…」

フェイトは腕に力を入れて、銀時を強く抱いた。

銀時は物凄く動揺している。子供の頃のフェイトならそうでもないが、今のフェイトは大人だ。
大きくなった胸が背中に当たる。さすがの銀時も、これには動揺を隠せない。

銀時「ちょ・・・フェイト・・・！！」

一体どうすれば良いのか分からないまま戸惑う銀時に、シグナムが現れた。

シグナム「銀時・・・なのか・・・。」

名前を呼ばれて銀時はシグナムを見ると、少しヤバイ表情をする。
この状況をシグナムに見られたら間違いなく殺されると恐怖を感じたからだ。

銀時「シ・・・シグナム！？・・・ひ・・・久し振りだな・・・その・・・あれだ・・・何と言うか・・・」
シグナム「銀時ぃいい！」

シグナムも思わず駆けつけて銀時に立ちついてくる。

銀時「お前もかいぃいいい！！」

フェイトに続いてシグナムまで銀時に抱きついてきて、腕に力を入れて抱きつく。

シグナム「会いたかった」

シグナムは頬を赤く染める。

大きな胸が銀時に当たる。
フェイトとシグナム、2人の大きな胸に押しつぶされそうな感じで
銀時は顔を真っ赤にして大量の汗を出す。
なのはとスバルは顔を赤くし、桂はニヤリとからかいがいがありそ
うな笑みを浮かべだす。

ネプテューヌ（銀さん・・・なのはさんに飽き足らず、金髪の人と
ピンクの人に抱かれて、しかも胸がでかいし、・・・むかつく！）

ネプテューヌは、フェイトとシグナムに嫉妬している。後ろにいる
ブランは

ブラン（・・・あのでか乳野郎共・・・「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴ」）

っと、フェイトとシグナムに殺意をむけている。（主に胸）
そばにいる4人は、ブランの殺意にビクビクしている。

銀時「ま…待て待て、フェイト、シグナム！と・・・とりあえず何
がどうなっているのかを説明してぇえええ！！」

予想外の展開に銀時は、動揺を抑えられなかった。
銀時のいた世界には、見た目は綺麗だが、中身が強暴だったり性格
に問題がある者ばかりで、まともな女性がいない。
だがフェイトやシグナムは、見た目も綺麗で中身も普通の本当に綺
麗な女性だから、こんな事をされると余計に銀時は動揺してしまう
のだ。
そんな様子を、後から来た神楽と新八は不機嫌そうな顔をして、エ
リザベスと月詠は興味深そうに三人を見ていた。

そして、ヴィータ・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロはなのはとスバルと同じく、顔を赤くしていた。
スバルはティアナの姿を見て何かやばそうな顔をした。
そしてヴィータとシャマルは桂の姿を見て驚く。

ヴィータ「ああー、ヅラだ！」
桂「ヅラじゃない桂だ」

ヴィータにヅラ呼ばわりされて突っ込む桂に、ヴィータとシャマルが駆けつける。

シャマル「お久し振りです！まさか貴方もいつの間にかこの世界に来ていたなんて・・・。」
桂「ヴィータ殿にシャマル殿、お主らも元気そうで何よりだ。」

久し振りのヴィータとシャマルとの再会に桂も笑い出す。
かつては共に、『闇の書』の蒐集に強力をしあった仲間同士であり、桂にとっても掛け替えのない仲間である。

ヴィータ「はやてもヅラと会ってないから悲しそうな顔をしていたぞ。せっかくだから会いに来てやれよ。」
ヴィータは桂にはやてに会わせる事を言いだす。
はやてにとって、桂も自分の為に力を貸してくれた恩人の１人であり、最も信頼する人物であった。

桂「ウム、八神殿もさぞかし成長をしているから、お小遣いに５０円をやらなければな。」
ヴィータ「やらんで良いわぁあ！！」

ドカ！

桂「ごふぉおお！！」

桂のクールボケに、ヴィータがグラーフアイゼンで桂の頭を叩いた。

シャマル「落ち着いて、ヴィータちゃん！」

エリザベス『暴力はよくない！』

怒り任せのヴィータを抑えるエリザベスとシャマルだか、モロにグラーフアイゼンを喰らったのか、桂の頭からは大量の血を出していた。

ティアナ、エリオ、キャロの新人フォアード隊は見慣れない光景に苦笑して呆れるしかなかった。

ネプテューヌ組（ネプテューヌ除く）「何やってんだあの人は・・・」

ネプテューヌ除くネプテューヌ組も呆れる。

そんな中、ティアナは後ろでスバルの姿を見てスバルを呼ぶ。

ティアナ「スバル？・・・アンタ、スバルなの！？」

スバル「ギク！？」

ティアナに呼ばれて驚きだすスバル。

フェイト、シグナム、ヴィータ、シャマル、エリオ、キャロもスバルの方を注目すると、スバルはやっちゃったかのような顔で苦笑いする。

スバル「あちゃ～、ばれちゃった・・・かな？」

ティアナ「スバル！どうして、アンタがここにいるのよ！？」

まさかの再会にスバルもティアナも驚きを隠せなかった。

スバル「あ～・・・なんというかね。町でアイスを食べてたら第３起動高層ビルに謎の生物が暴れてるって聞いてここにいるっていうか・・・」

っとスバルは曖昧に答える。

ティアナ「あんたね・・・」

ティアナは呆れてため息を突く。

するとフェイトがネプテューヌ達に気づいて、

フェイト「・・・ところで、あなたたちはいったい？」

っと質問すると、

ネプテューヌ「あ・・・え・・・えっと」

何を説明すればいいのか分からないネプテューヌに、

アイエフ「ここで話すより別のとこで話したほうがいいんじゃない？」

アイエフが助け船を出した。

フェイト「・・・そうですね。では、『機動六課』へご案内します」

銀時「おし、じゃあそこへいこうぜ」

っとフェイトが承諾し、銀時はそこへ行こうとする。

ネプテューヌ「ありがとう、アイちゃん！」
アイエフ「これも頭の悪いネプ子のためよ」
ネプテューヌ「ひどい！」

さっきまでの感動を落胆してしまったネプテューヌ。

銀時「・・・なぁ」
フェイト「ん？どうしたの、銀時」

銀時がフェイトを止めた後、こう言い放つ。

銀時「『機動六課』ってなんだ？」
全員「知らんと行こうとしてたんかい！！！！！！！！」

機動六課部隊長オフィス。

デスクに座っているのは、部隊長の八神はやて。１９歳。
隣にはリインフォースがいる。
ドアが開かれ、銀時、フェイト、桂、シグナム、なのは、シグナム、スバル、ネプテューヌ組が入ってきた。・・・え？早く着きすぎ？気にするな、キングクリムゾンというやつだ。

はやて「桂さん、銀ちゃん！ホンマに桂さんと銀ちゃんや！」

銀時の姿を見たはやては、思わず立ち上がった。

リインフォース「銀時！」

リインフォースも銀時を見た。会えた嬉しさで笑顔になる。

桂「おお、八神殿ではないか！随分と大きくなって・・・お小遣いに６０円をやろう」

シグナム「いちいちやらんで良い！」

フェイト「それとなんで１０円増えているの？」

早速の桂のクールボケにフェイトとシグナムは突っ込みだす。

エリザベス『桂さん・・・せめて１００円に上げてあげましょうよ』

とエリザベスはボートを出すと・・・

フェイト・シグナム「増えれば良いって問題じゃない（よ）！」

２人の声がピッタリに会い、突っ込みだす。

銀時はリインフォースを見て久し振りに声をかける。

銀時「リインフォースは変わってねーな」

リインフォース「私は、年はとりませんから」

リインフォースは笑顔で返事をした。

すると、

？？？「わあ！銀さんと桂さんです！」

三十センチくらいの小さな少女が、銀時と桂の前に現れた。長い水色の髪で、見た目はリインフォースにそっくりだ。

銀時「うおっ！なんだコイツ！？リインフォース！？ちっさいリインフォースだ！」

桂「何と！？」

小さなリインフォースを見て、銀時と桂は驚いた。

はやて「その子は『リインフォース・ツヴァイ』って言うてな。リインフォースの妹や」

はやてが銀時に教えた。

銀時「え？妹？マジでか！？」

リインフォースを見ながら、銀時は尋ねた。

リインフォースは、少し照れた感じで頷いた。

リイン「よろしくです、銀さん！桂さん！」

無邪気な笑顔で、リインフォース・ツヴァイは挨拶した。

銀時「お…おお」

桂「うむ、こちらもよろしく頼む」

少し戸惑いながら、銀時は返事をし、桂はしっかりとした態度で返

事をする。
リインフォースの妹?性格が全然違うんですけど。めっちゃ明るいんですけど。
まじまじとリインフォース・ツヴァイを見つめる。
はやて「その子の事は”リイン”って呼んであげてな」
はやてが言った。
二人がごっちゃにならないためか。て事はリインフォースの方は、そのままリインフォースでいいワケか。
銀時は納得して頷いた。
はやて「まぁ立ち話もなんやし、座ろうか」
はやてが、デスクの前にある来客用のソファーに座るよう促した。
銀時達はソファーに座った。
はやて「それにしても、桂さんと銀ちゃん全然変わっとらんな」
ソファーに座りながら、はやてが言った。
フェイト「銀時達は過去から来たみたいなんだ」
フェイトが答えた。
はやて「過去から?」
なのは「装置が制御不能になったみたいで、誤ってこの時代に来ちゃったみたいなの」
今度はなのはが説明した。

なるほど、とはやては頷いた。

桂「それにしても八神殿、此処は何処か教えてもらいたいのだが？」

桂は、来たときから疑問に思っていた事を聞いた。
フェイト達が制服を着ているところから推測すると、管理局か何かの部隊みたいだ。

はやて「ここは古代遺物管理部　『機動六課』。ロストロギア関連の危険な任務を扱う部隊や」

はやてが答えた。

フェイト「はやてが立ち上げたんだよ」
銀時「えっ！？はやてが！？」

フェイトの言葉に銀時は驚いた。

銀時「って事は、お前が一番偉かったりすんのか？」
はやて「うちは機動六課の部隊長や」

はやてが胸を張って言った。
銀時は驚いた。まさかはやてが隊長とは。世の中わからないものだ。

桂「おお、それは大した者だ！八神殿の努力と仲間の力が合わさった結果というわけか！」

感心したかのように驚く桂に、はやては少し顔を真っ赤になる。

はやて「ふふ・・・おおきに、桂さん／／／」

凄く嬉しそうな顔をするはやてに、フェイトとなのははポカンとなる。
そして銀時はシグナムに小さな声で話しかける。

銀時「おいおい、はやてってもしかすればヅラの事を・・・（ニヤリ）」

ニヤニヤと笑い出して話し出す銀時にシグナムは、

シグナム「ああ、銀時の考えているどおりだ。主は『闇の書・ゾーマ事件』以来、桂に対する思いが恩人以上になっている。最も、人妻好きである桂に、ヴィータ・シャマル・ザフィーラは知らないだろうがな」

シグナムはどうやら桂に対するはやての思いを気づいたようである。
しかし、桂自身は気づいてはいないようだ。

銀時「知ったら、3人はヅラに何かするかもしれないかもな。とりあえずヅラ達には内緒しておこうぜ」
シグナム「そうだな。特にヴィータが知ってしまったら桂が恐ろしい目に合うかもしれないな」

2人は、はやてが桂に好意を持っている事を誰にも言わないことを決意する。

はやて「それよりスバル。私の方からも聞きたい事があるんだけどええか」

さっきまでとは違って真剣な表情ではやてはスバル声をかけた。

スバル「あ・・・はい！」

思わず返事をするスバル。

はやて「なのはちゃんから聞いたんやが・・・相当の活躍をしたようやな。」

スバル「あっはい」

新人魔道士でも？1の実力を持つと言うスバルだからこそできたことである。

はやて「もし良かったら　フォワード部隊に入らへん？」

スバル「え？」

まさかのスカウトにスバルは唖然とする。

はやて「もちろん、ただ訓練を受けるだけじゃなく、ウチのフォワード部隊の新人達の起爆剤として欲しいんや」

リイン「スバルさんのようにスバ抜けた実力者がいれば、他の人たちも負けられない勢いで成長しますしね♪」

はやてとリインはそう言う考えでスバルにフォワード部隊に入ることを進める。

フェイト・シグナム・なのはも賛成のようであり、スバルは迷わずに賛成する。

「分かりました・・・私でよければｂ「ねぇ～～まだなの～」・・・」

スバルがしゃべっているときにセリフを被るネプテューヌ。

ネプテューヌ「話が長いよ～。待ちくたびれちゃうよ～」

まるで子供のように（実際そうだが）駄々をこねるネプテューヌ。
ちなみに彼女は、壁の隅っこで座っている。

フェイト「ちょっと部隊長室で座っちゃだめだよ！」

フェイトはネプテューヌに注意するが、

ネプテューヌ「や～だ～。立つのも長い話聞くのもヤ～！」
フェイト「だからダメだって。あなたたちもこの子を止めて！」

もはや手がつけられないので、フェイトは彼女の知人に止めてもらうよう頼むのだが、

アイエフ「話しかけないで。このパ○ロス解くの難しいんだから」
コンパ「わぁ～。チョウチョが飛んでるです～」
ノワール「ほつれかけてるわ・・・早く整えないと」
ブラン「・・・うるさい。集中できない・・・（本を読みながら）」
ベール「・・・次のステージは確かあのあたりですわね。・・・しかしラスボスへ行く前にアイテムを取り損ねてはいないか確かめないと・・・（ブツブツ）」

全員揃って自由にやってました。（笑）

はやて「何やっとんじゃあんたらはーーーーーー！！！！（怒）」
はやては怒鳴り、周りにいる銀時たちは、呆れるしかなかった。

イストワール「・・・今回の私は空気ですね・・・（ー＿ー）」

第五訓：長ったらしい話はみんないや（後書き）

真王「『機動六課』に協力することになった銀時たちとネプテューヌ達とスバル、そしてなのははある決意を・・・」

コンパ「次回『人間告白するなら今のうち』テイクオフです」

～つぶやき～

真王「・・・そろそろ銀八先生を始めようかな…」

第六訓：人間告白するなら今のうち（前書き）

真王「アクセス確認したら５０００以上のＰＶが来ました。それほど『リリカル銀魂』が人気があるという証拠なんですね、わかります。っというわけで、『リリカル銀魂』」

モナー「始めるモナー」

真王「あっ！セリフとられた！」

第六訓：人間告白するなら今のうち

機動六課・食堂

ティアナ達フォワードメンバー、ヴィータ、シャマル、神楽、新八、月詠は一緒に食事をしていた。
既に互いの自己紹介は済んでいる。

エリオ「神楽さんって、銀時さんと一緒に『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』を解決した、あの神楽ですか！？」

神楽の名前を聞いたエリオは驚いた。

神楽「そうアル。」

っと、神楽は軽く返事をして山盛りのご飯ををおかわりした。

キャロ「す・・・凄い人なんですね」

キャロも驚いてる。

新八「いや～すごいってもんじゃないですよ。すごいって言うのは戦ってるときだけで、日常だとあまりよろしくないんですから」
神楽「んだよ駄目ガネ。私の威厳にケチつけるアルか」
新八「バクバク食ってるくせに威厳は関係ないだろ！！！」

っと新八は突っ込む。するとティアナが、

ティアナ「えっと・・・あなたは・・・」

新八「あっすいません。僕は志村新八って言います」

新八が自己紹介すると、

ティアナ「ああ！噂であった”江戸一番のツッコミ使い”って貴方！？」

新八を指差して、ティアナが叫んだ。

新八「えっ！？いや、そりゃあ、まぁ…一応僕はツッコミ役ですけど…」

綺麗な女の子から”江戸一番”と言われて、新八は少し照れた。

神楽「新八のくせに照れてんじゃねーヨ。ツッコミ以外地味のくせに」

新八「んだとコラァアアア！僕らの世界でツッコミ役は、物凄く重要なんだぞォオオオ！！」

神楽の発言にキレる新八。

みんなが楽しんで話していると、銀時達がやってきた。

はやて「みんな、事件解決お疲れ様。明日の訓練も頑張ってな」

F「はい！」

はやての言葉に、フォワードの三人が応えた。そして、新しく仲間に入る銀時達を紹介した。

はやて「今後、ウチらの仲間になる新しい新人等と、知ってのとお

りうち等の世界を救った英雄を改めて紹介するな」
銀時「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してます」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。
次に桂が挨拶する。

桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」
神楽・新八・ヴィータ「だからいちいち好物をいうんじゃねぇ（ないアル）！！」

神楽と新八とヴィータが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。
ティアナ・エリオ・キャロの3人は銀時のだらけた挨拶と桂のクールボケに自分達の中の英雄のイメージが崩れ落ちていく。

次はネプテューヌ組の紹介で、

ネプテューヌ「今からここに協力すろことになったネプテューヌだよ～、よろしく～」

っと、元気よく挨拶するネプテューヌ。

コンパ「わ・・・わたしはコンパって言います・・・よ・・・よろしくお願いするです（ドキドキ）」

っと緊張いっぱいに挨拶するコンパ。

アイエフ「私はアイエフ、とりあえず協力者になるわ」

っと右手を腰にあてて、挨拶するアイエフ。

ノワール「ノワールよ。よろしくね」

っと短く終わらせるノワール。

ブラン「私はブラン・・・あまり気安く話しかけないで・・・」

っと避け気味に話すブラン。周りは苦笑いを浮かべる。

ベール「ベールと申します。よろしくお願いしますね」

っとお辞儀をするベール。お辞儀をするとき胸が揺れた気がした。

イストワール「私はイストワールです。はじめまして（＾∀＾）」

っと普通に挨拶するイストワール。

そして最後にスバルが挨拶する。

スバル「わ・・・私、スバル・ナカジマです！新しくフォワード部隊に入りましたので、これからもよろしくお願いします！」

銀時と桂とは違って丁寧に挨拶をするスバルに、エリオとキャロも挨拶する。

エリオ「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします！」

キャロ「わ・・・私はキャロ・ル・ルシエです！こちらは使役竜のフリードです！」

フリード「きゅいい。」

そして最後にティアナが立ち上がって、挨拶をする。

ティアナ「ティアナ・ランスターです。どうぞよろしくお願いします。」

普通に挨拶をすると、はやては銀時達に3人の新人フォアード隊の説明をする。

はやて「桂さん、銀ちゃん、スバルに言っておくな。この3人もスバルに劣らない優秀な新人なんやで。エリオはまだ10歳にも関わらずに魔導師ランクは陸戦Bで、階級は三等陸士。使用デバイスは槍型のアームドデバイス「ストラーダ」。そんでキャロも階級は三等陸士。使用デバイスはグローブ型のブーストデバイス「ケリュケイオン」。レアスキル「竜召喚」を持つ召喚魔導師なんや」

キャロの竜召喚に驚きだす銀時。

銀時「マジでか!?え・・・何、キャロって竜を召喚できるの!?」

キャロ「は・・・はい」

竜を召喚する事ができるキャロに、銀時はある頼みをする。

銀時「お願い、キャロ!今すぐ竜召喚で「ドラ○ンボール」の「○龍」を召喚して!そうすれば「かめ○め波」が撃てる願いが叶える!」

キャロ「えぇー!?」

突如、無茶な頼みに驚きだすキャロに、ティアナが立ち上がる。

ティアナ「なんですか、その「○龍」って!?それより「かめ○め

波」ってなんなんですか！？」

訳分からないティアナは銀時につっこみだす。キャロは銀時の無茶なお願いに戸惑っている。

その光景をなのは達は唖然とし、なのは達は苦笑するしかなかった。

神楽「それは良いね！私も卵がけご飯を１００杯は食べたいアル」

新八「まだ食べる気か！」

今度は神楽に新八が突っ込みだすと、続く桂が話に参加する。

桂「ちなみに俺は最高級のそばを頂きたい。」

ティアナ「どんだけそばが大好物なのよ！！！！」

ティアナは額に血管を浮かべて、ツッコミだす。

エリザベス『定春に負けないようにもっと目立ちたい』

新八「アンタもいちいち願い事を言うな！」

新八は怒鳴った。ティアナはエリザベスの存在に突っ込みたくなりそうだったが、あえて関わらないほうが良いと考えた。

月詠「わっちは金剛石で作られた超最高級の煙管（きせる）を頼んで見たいもんじゃ」

新八・ティアナ「それもはや煙管（きせる）の常識を破っているじゃねぇか（ないの）！！」

とてもボケキャラとは思えない月詠のボケに反応するかのように怒鳴って突っ込む新八とティアナ。

しかし、意外とコンビネーションの良いツッコミである。

笑いながらも、はやてはティアナの紹介をする。

はやて「そんでティアナの階級は二等陸士で、使用デバイスは拳銃型のインテリジェントデバイス「クロスミラージュ」。陸士訓練校での成績は首席卒業をしておるんや」

銀時「は・・・首席卒業って何？」

なにやら首席卒業の事を知らない銀時に、

桂「なんだ銀時。首席卒業の事も分からぬのか？首席卒業というのは成績が誰よりも優秀であり、頂点に立った生徒が卒業する事だ。」

っと、桂が説明する。

ネプテューヌ「・・・何を言ってるのかよくわかんない」

ネプテューヌは頭を抱えている。

アイエフ「・・・あんたもう少し学習しなさいよ」

呆れて愚痴をこぼすアイエフ。ネプテューヌは学習能力が女神の中で低いらしい。

そしてはやて、リインフォース、リインは初めて見る月詠に近づいて挨拶する。

はやて「はじめまして。機動六課部隊長、八神はやてです」

リインフォース「部隊長補佐のリインフォースです」

リイン「リインフォース・ツヴァイです！」

三人が自己紹介した。

月詠「わっちは月詠じゃ」

月詠も自己紹介した。
そしてエリオは何か話したい事があるのか銀時に近づく。

エリオ「あの、銀時さん！」
銀時「ん？」
エリオ「少し…いいですか？」

遠慮がちに銀時に聞いた。

ネプテューヌ「？」

外へ行こうとする二人を、ネプテューヌは見ていた。

銀時とエリオは外に出た。

エリオ「銀時さん、貴方の噂はフェイト隊長から聞いています！」
銀時「噂？」

一体どんな噂なのか銀時は聞いて見ると、エリオはその噂を銀時に言った。

エリオ「魔法が使えないけど、『ジュエルシード事件』、『闇の書・

ゾーマ事件』を剣だけで解決し、その剣術は稲妻の如く変化して相手を翻弄し、その鬼神の如き強さから『白夜叉』もしくは『エース・オブ・シルバーサムライ』と呼ばれ、管理局内でも有名で知らない人は殆どいない、伝説の武神。」

銀時「え？何？俺ってそんなに有名なの？」

真剣に説明するエリオに、銀時が尋ねた。

エリオ「はい！なにせあのオーバーSランクを超える強さを誇ったゾーマを倒して、世界を救った英雄ですから！」

興奮しながらエリオは答えた。

両拳を握って、興奮を抑えられないでいる。そんでもって、銀時に尊敬にも似た眼差しを向けている。

銀時に尊敬の眼差しを向ける者が、この世にいたとは驚きである。

銀時「え？マジで？ちょっ…その目やめてくんない？あんまり見つめられると、照れちゃうから」

銀時は嬉しいような困ったような、複雑な表情を浮かべた。

エリオ「それに、銀時さんの強さは先ほどの奇妙な異性生命体との戦いで見させていただきました。銀時さんだけじゃなく、桂さんに神楽さん、エリザベスさんにあの月詠さんって言う女性も魔法なしであんだけ凄い戦いっぷりをしましたから、今度いつか銀時さんの世界に行って見たいです。」

もしかすれば、銀時の世界に行けば真の強さとはなんなのかを理解できると確信してなのか、銀時の世界に少し憧れを持つエリオ。・・・あっ新八がのってねぇ。

だが、銀時はそれは辞めた方が良いと考える。

銀時「エリオ君、確かに俺の世界の人物は曲者ぞろいが多いかもしれないけど・・・でも時にはおっかねぇ人物が山ほどいるんだぞ。例えば、卵で『ダークマター』と呼ばれる『可愛そうな卵』を作れる殺人料理人の極悪女。料理にマヨネーズをかける異常な味覚を持ったニコチンマヨラー。警官なのにしつこく女にストーカーをするゴリラストーカー。相手が困っているのにそれをどす黒く楽しむドS。何度職業を取ろうと、落とされるもしくはクビにされ続けるマダオ。しつこく名前を間違えて何度も仕事をサボる大ボケ馬鹿。さらには家賃払え払えっとしつこく言ってきて常識を超えた身体能力を持つスナックババァなど・・・他にも常識を破った人物だって俺の世界じゃ当たり前のようにいるんだぞ」

エリオ「そ…それは凄いですね…」

銀時達の世界の説明を聞くエリオは、銀時の世界が予想以上に凄いって事に苦笑する。

エリオ「でも・・・なんだか楽しそうな感じですね」

銀時「そうか？」

普段、色々と巻き込まれてトラブルを起こされる上、酷い目に何度も合ったため、それが楽しそうである事に不思議に思う銀時。むしろ辛いとしか言いようがないのである。

エリオ「・・・それと・・・僕は銀時さんに話しておきたい事があるんです。」

ちょっと悲しそうな表情をするエリオは銀時に重大な事を話し出す。

銀時「なんだ、話したい事があるなら言ってみろ。」

銀時は聞くだけ聞いてみようと考えるが、それはとんでもない事である事に気が付く。

エリオ「・・・実は僕、フェイトさんと同じプロジェクトFによって生み出された人造生命体なんです。」

銀時「な…！？」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

フェイト以外にも、人造的に作られた生命体が存在したなんて事に。

エリオの話からすれば、モンディアル家の病死した一人息子のクローンである。

。ある時両親と引き離されたが、その際に事実を突きつけられた途端に両親が抵抗をやめてしまったこと、また研究施設での非人道的な扱いから一時期重度の人間不信に陥っていた。

その為、当時のエリオは誰も信頼することができず、自分自身も信じることが出来なかった。

誰にも信頼することができなくなったエリオの前に現れたのが、フェイトだった。

フェイトによって救い出され管理局の保護を受けてからも荒みきっていたが、魔法を行使して暴れるエリオに対して行ったフェイトの体を張っての真摯な説得と献身をきっかけに急速に立ち直っていく。

そして、フェイトから銀時の話を何度も聞かされた。

自分が最も愛した男であり、『プロジェクトF・A・T・E』の前者の方の産物として生み出されたクローンである自分でも、命を張ってまで守ってくれて、自分だけじゃなく母・プレシアをも救って

くれた恩人である事を。
そして自分自身も銀時に尊敬する気持ちを持ったのであり、一度会ってみたくなったのである。

エリオ「だから、僕も銀時さんみたいに、大事なモンを護るという信念を持って強くなりたいです。クローンとしてじゃなく、1人のエリオとして。」

真実を話したエリオ。
当時は自分自身をも信じることが出来なかったが、それでもフェイトに出会ったことで人間のような心を取り戻したエリオを見て、銀時はエリオならその思いが出来ることを確信した。

銀時「出来るさ、お前なら。」

銀時は軽くエリオの頭に右手を乗せ、笑いながら言い出す。

銀時「エリオもフェイトがいたから、誰かを信じる気持ちを取り返して強くなっているんじゃねぇか。・・・だから、誰かや自分も信じる気持ちさえ失わなければ、絶対にテメェ自身の大事なモンを護れると思うぜ」
エリオ「・・・・・銀時さん」
銀時「それによ・・・俺の知り合いであるチンピラ警察共の中に、1人お前と同じ思いをした奴がいるんだぜ」

当時のエリオは誰も信じられない事を聞いて、銀時はある人物を思い出してエリオに話し出す。

伊東鴨太郎（いとうかもたろう）

真選組に入隊してからまだ浅いが、文武両道で能力的にかなり優れているため参謀の地位を任されており、北辰一刀流免許皆伝の凄腕剣剛であり、その実力は土方に匹敵する程の実力を持っている。

近藤をはじめ真撰組の約半分は『先生』と呼ばれている。

だが鬼兵隊と手を組んで新撰組を乗っ取る計画をしていたが、その真の目的は自分を認めてもらう為である。『理解されない』事であると考えており、真撰組に入ったのは自分の『器』を人々から認めてもらう為であった。

そして本当に欲しかったものは、仲間と一緒にいられる『絆（いと）』であるのだが、それをも忘れていた。

それは幼少時代、学問・剣術も見事で『神童』とも呼ばれていたが、双子の兄の病ばかりに関わっていた両親からは構ってもらえず、誰にも認めてもらえなかった。

それでも誰かが自分を認めてもらえると信じ、ひたすら努力をし続けていたのだが、そんな鴨太郎の気持ちを周囲の者達は理解するどころか、ますます鴨太郎に逆恨みに等しい妬みを抱くばかりであった。

このトラウマから、『孤独』と『一人』を嫌うようになり、自分や誰にも信じることが出来なかった。

それは、別の意味でエリオに似ている感じであった。

その為、近藤と土方を暗殺するために『鬼兵隊』と手を組んだが、真選組を壊滅させる為の捨て駒として利用されたのである。

だが裏切ってもなお、己に救いの手を差し伸べる近藤達の姿を目の当たりにした事で、本当に欲しかった『絆（いと）』の事を思い出す。

だが死の寸前まで追い込まれ、土方との決闘により倒され、裏切り者ではなく真選組の隊士として、後悔も無くこの世を去る。

銀時「結局そいつは死んじまったけど、結果的には孤独に死ぬことは無かったわけだ。それに比べりゃ、エリオはまだ幸せ者だと思うぜ。」

空を見上げてエリオは伊東と比べてまだマシであると良い出す。

銀時「大きな事件を起こす前にフェイトに会ったお陰で、今もこうして立派に生きているしよ。・・・だから、お前はお前自身として頑張って生きろよ。」

エリオにそう言い、中に向かうなか、エリオは銀時の後ろ姿を見て銀時の名を叫ぶ。

エリオ「銀時さん！」

エリオに呼ばれて足を止める銀時。

エリオ「僕、頑張ります。その伊東さんの分まで生きて、大事な人を護れるぐらいに強くなります！」

エリオはそう言うと、銀時は笑って振り向かずに手を振るいながら去っていく。そしてエリオの中で、また１つ強くなる目的ができたのであった。

機動六課の草葉で、複数の影が二人の話を聞いていた。

？？？「うぅ・・・いいはなしだね～・・・」
？？？「本当です・・・私・・・感動したです」

草葉の陰でエリオと銀時の話を聞いてたのは、ネプテューヌ・コンパ・アイエフ・ノワール・ブラン・ベールだった。ネプテューヌとコンパは泣いていた。

ノワール（『お前はお前自身として頑張って生きろ』・・・か。・・・きっとあの子なら、できるかもしれないわね。がんばりなさい）

ノワールは、陰から微笑み、エリオを応援した。

中に戻った銀時は、フェイトに部屋へ案内された。
泊まるアテがないので、銀時達は機動六課の隊舎に泊まる事になった。
そしてフェイトは案内を終えた後、自分の部屋に入ると、そこにはベットに座っているなのはがいた。

フェイト「なのは、どうしたの？」

いつもと様子が違うなのはにフェイトは声をかける。
ちょっと顔を真っ赤に染まっている為、何か様子がおかしくなったようである。

なのは「フェイトちゃんに、どうしても話しておきたいことがあるんだ／／／」

顔を真っ赤にしながらもなのははフェイトにどうしても話しておきたいことがある。

なのは「銀さんの事なんだけど・・・／／／」
フェイト「銀時がどうしたの？」

なのはが銀時の事で話がある事に珍しく感じるフェイトだが、なのはの口からとんでもない事を聞き出す。

なのは「私・・・銀さんの事を・・・好きになっちゃったみたいなの／／／」
フェイト「・・・・・・え？」

今、なのはの口からとんでもない事を聞き出すフェイトはしばらく唖然とする。
そして十秒後に頭の中で大爆発するかのような驚きを表す。

フェイト「えええええええええええええええええええええええええ！？」

まさかのなのはの告白にフェイトは大叫びするしかなかった。
自分やアルフやシグナム以外にも、銀時に好意を持つ女性がいたなんて予想しなかった。

フェイト「な・・・なのは！？・・・どうして、なのはが銀時の事を！？」

何故なのはが銀時に好意を持っているのかを聞きだすフェイトに、なのははその理由を言いだす。

なのは「・・・あの『闇の書・ゾーマ事件』以来・・・私はその時の銀さんがゾーマとの戦いをシグナムさんとリインフォースに聞かされて・・・フェイトちゃん達は知っていて、私の知らない銀さんはどんな姿なのか想像し続けたんだ。それ以来、時々銀さんの事を何故か頭の中で浮かびあがっちゃうの。」

実際、ゾーマと戦って鬼神の如くの強さを発揮した、『白夜叉』銀時の事を知っているのは、実際にこの眼に焼き付けたフェイト・シグナム・リインフォースの3人だけである。
その為、なのはを始め、銀時の『白夜叉』としての強さを知らないものは数多い。
しかし、なのははあのアバババン戦で見た白夜叉と化した銀時の姿を見てようやく分かった。
それ以来、なのはの頭の中には銀時のことしか浮かばなかった。

フェイト「でも・・・・・なのはにはユーノがいるんじゃ？」

フェイトはユーノの事をなのはに聞き出す。
かつて、なのはのパートナーとしてなのはのサポートに入った少年、ユーノ・スクライア。
遺跡の発掘を生業とするスクライア一族の出身で、自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまったことに責任を感じ、独自にその回収を行っていた。封印に失敗して重傷を負ったところをなのはと出会い、一命を取り留める。
その後の成り行きから彼女に協力を申し出、「レイジングハート」を託した。
なのはを魔導士として導かせた張本人である。

そんな彼は、今ではなのはを1人の女性として愛しているようだ。

だが、なのは自身は親しい友人程度であった。

なのは「ユーノ君は大切な仲間で友達なんだけど・・・別に好きって程じゃないかな？」

とんでもなく残酷な事を無意識に言い出すなのはに、フェイトはユーノがそれを聞けばどれだけのショックを受けるのだろうか想像できなかった。ちなみに新八もどうなるのかなんて知るよしもない。

フェイト（ユーノには・・・黙っておこう）

なのは「だから・・・今日からライバルって事だね／／／」

その意味は、なのはも銀時争奪戦に入ってしまう意味である。

まさか、なのはが銀時に好意を持つ事は予想できなかったフェイトはどういえば良いのか、分からないままであるが・・・彼女の口からは思わず・・・

フェイト「わ・・・私だって負けないもん」

その言葉しか口にだせなかった。

第六訓：人間告白するなら今のうち（後書き）

真王「次回は銀時たちが模擬戦に参加。するとシグナムがある人を指定するが・・・」

桂「次回『バトルはスリルを求めるもの』活目せよ・・・・・・違った・・・テイクオフ！」

第七訓：バトルはスリルを求めるもの（前書き）

真王「この話はシグナムとの対戦相手が誰だかわかります。では、『リリカル銀魂』」

ギコ「始まるぞゴルァ！」
しぃ「始めます」
モララー「始めるからな！」

真王「ああっ！またセリフとられた！」

第七訓：バトルはスリルを求めるもの

機動六課・訓練場。

沢山のビルが並ぶ所に、ティアナ達はいた。

訓練の内容は、自律行動型のロボット『ガジェットドローン』をフォワードの三人で倒すというものだ。

ティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』で狙い撃ちする。

キャロは、錬鉄召喚で鎖を出してガジェットの動きを止める。エリオの槍型デバイス『ストラーダ』がガジェットを貫く。フリードも炎を吐いてガジェットを攻撃する。

フォワードの三人は、それぞれの魔法を駆使してガジェットを破壊していく。

銀時達とネプテューヌ達は、なのは達と一緒に屋上から訓練の様子を見ている。

スバルも、新人としてティアナ達はどんな訓練を受けているのかをまずは見学している。

やがて銀時が口を開いた。

銀時「うん。これ魔法じゃねーな」

神楽、新八、桂、エリザベス、月詠以外の全員が、思わずコケそうになった。

なのは「えっと…一応魔法なんですけど」

ハハハ、と苦笑しながらなのはが言った。

神楽「いや機械使っているアル。あれ見ても，魔法ですって言われてもピンとこないネ。」

呆れた表情で神楽が言った。
すると桂がカメラ目線になり、

桂「次回から『機動少女メカニックなのは』スタート。皆、刮目せよ」
キリッとした顔で言った。

月詠「いや、勝手にタイトルを変えたらマズイだろう」
ヴィータ「それにカメラはねぇよ」

月詠とヴィータがツッコんだ。が、

ネプテューヌ「桂さん、もう少し下がってくれない？」

何時から持ってたのかネプテューヌがカメラを回していた。
隣にいるブランは、マイクを持っていた。

新八「あんたらなにやってんの！！！」

新八は怒鳴った。
なのは達は力無く笑った。

なのは「そうだ！」

なのはが何かを思いついた。
みんなの注目がなのはに集まる。

なのは「銀さん達も訓練してみませんか？」
銀時達「は？」

なのはの提案に、銀時達は片眉を上げた。

銀時「んなメンドくせー事やってられっかよ」

と心底メンドくさそうに断った。
だが、銀時の性格を知っているなのは達は、これくらいでは諦めなかった。
ちゃんと奥の手を用意してある。
なのはがフェイトに目配せし、フェイトは頷いた。

フェイト「ねぇ銀時」

フェイトが声をかけた。

銀時「何だ？」

銀時は、絶対に訓練なんてやらねーぞ、というような顔をする。

銀時「訓練してくれたら、私がチョコレートパフェを好きなだけ奢ってあげるよ」
銀時「テメーらァ！俺達の活躍、目に焼き付けとけ！」

と、わずか一秒で銀時は心変わりした。
桂、神楽、新八、エリザベス、月詠は呆れてため息をついた。

桂「武士たる者他人の誘惑に負けるとは・・・銀時、貴様も堕ち

たな」

桂は銀時の誘惑の弱さに強い呆れ感を持った。
そんな桂の前にはやてが言う。

はやて「まぁまぁ。桂さんも訓練してくれたら、うちがそばを好きなだけ奢ってあげるし」
桂「魔導士達よ！武士の魂、その眼で刮目せよ！」

銀時に負けない誘惑の弱さで、わずか一秒で心変わりした。
４人とネプテューヌ達は銀時と桂の誘惑につられたその姿に強く呆れた。

なのは「ネプちゃんも参加してみる？」

なのはがネプテューヌを誘うとすると、

ネプテューヌ「イヤ、めんどくさい」

たった一言で拒否した。

チョンチョン

アイエフ「ちょっといいですか」
なのは「なに？」

アイエフがこっそりとなのはに耳打ちをする。

アイエフ「・・・・・・っというわけよ（ひそひそ）」
なのは「わかった（ひそひそ）・・・ネプちゃん」

ネプテューヌ「な～に？」

ネプテューヌはいやいやそうな顔をする。

なのは「訓練してくれたらおいしいスイーツをごちそうするけど」

ネプテューヌ「よし！、みんなはりきっていこ～！！」

と、一秒もたたないうちに心変わりした。

ノワール・ブラン・ベールは呆れてため息をついて、アイエフはやっぱりっという顔をしていた。

フォワード一同の訓練を終わりにし、銀時達もガジェットを倒す訓練をする事になった。

スバル達は、なのは達と一緒に屋上に来ている。

スバルは内心わくわくしていた。これから、あの憧れの銀時の訓練が見られるのだ。

スバル「楽しみだな！」

スバルは、本当に楽しそうな笑みを浮かべてる。

実際、スバルはあのアバババン戦で銀時とネプテューヌと共に戦っていたが、そんなにその眼に活黙しておらず、ちゃんとこの眼で見て見たいと思っている。

エリオとキャロも、銀時達の訓練がどのような者なのか楽しみにしていた。

一方ティアナは、それほどテンションは高くはなかった。

下にいる銀時達は、なのはからの開始合図を待っていた。

月詠「何故わっちまで、訓練に参加しなければならんのじゃ？」

月詠は一人納得がいかなかった。

銀時「ままま。いいじゃねーか。訓練すればチョコレートパフェが食えて、みんなが幸せになれんじゃねーか」

桂「うむ、そばも食い放題となれば、まさに極楽の幸せの瞬間であろう」

ネプテューヌ「スイーツ食べほうだ～～～い」

月詠「それは、ぬしらしか幸せになっとらんぞ」

銀時と桂とネプテューヌを睨みながら、月詠がツッコんだ。

神楽「でも見ているだけじゃつまんないアル。私も付き合ってやるね」

エリザベス『たまには運動するのも良いですし』

神楽も拳をボキボキと鳴らし、エリザベスは桂の隣でボートを構える。

ノワール「まぁ運動不足にならないだけましね」

ブラン「私は嫌なのに・・・」

ベール「いいじゃないんですか。たまには」

ノワールは準備を整え、ブランはいやいやながらも参加し、ベール

はパイクを構える。

アイエフ「準備はいい？コンパ」
コンパ「はいです！」

アイエフは長い袖からカタールを出し、コンパは大きな注射器を構える。

新八「・・・ってちょっと待ってください！コンパさんなんですかそれは！」

新八がコンパの持つ注射器を指差す。

コンパ「ちゅ・・・注射器ですけど・・・」
銀時「いやありえねぇよ！！そんなでっかい注射器があるわけないだろ！！！」
コンパ「そ・・・そんなこといわれても・・・・・・グスッ」

銀時が怒鳴ってしまい、コンパは泣いてしまう。

ネプテューヌ「あーーーーー！！！銀さん、コンパを泣かせた！！」
ノワール「最低ね」
ブラン「近寄るな」
ベール「男失格ですね」
新八「そうですね」
神楽「マジきもいアル」
桂「まったくだ」
エリザベス『あほですね』
月詠「なにやっとんじゃ」
銀時「ちょっとーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！なに

これ!!?何この四面楚歌!!!?俺なんか悪いことした!!??」

周りから痛い言葉を受け、汗を流す銀時。

コンパ「み・・・みなさん。私は別に気にしてないですから」

泣きやんだコンパは、まわりのみんなを安心させる。

アイエフ「そう?でももし銀さんがまたコンパを泣かせたら呼んで。半殺しで反省させるから」

銀時「お前何物騒なこと言ってんの!??」

コンパ「は・・・半殺しはダメですよ!」

アイエフの物騒なセリフに突っ込む銀時とコンパ。

なのは「・・・みなさーん。準備はいいですか?」

屋上にいるなのはが聞いてきた。

銀時「いつでもいいぜ」

神楽「かかってくるアル」

新八「オッケイですよ」

桂「こちらの準備は万全だ」

エリザベス『OK!』

月詠「不本意だが、まぁよかろう」

ネプテューヌ「ワンターンキルでいくよ」

アイエフ「さて、はじめますか」

コンパ「き・・・緊張するです・・・」

ノワール「こっちもOKよ」

ブラン「早くして・・・」

ベール「いきますよ」

十二人は返事をした。
すると、十二人の前に百体のガジェットが現れた。

「襲い掛かるガジェットを１０分以内に破壊。それじゃ、ミッションスタート！」

なのはが開始の合図をする。
百体のガジェットが、一斉に銀時達に襲い掛かる。
三体のガジェットが銀時に向かって、中心にある黄色いレンズから光線を放った。
銀時はガジェットの前から消えた。

銀時「遅せぇ」

一瞬でガジェットの横に移り、木刀『洞爺湖』をガジェットに向かって、横薙ぎに振りぬく。
三体のガジェットは一瞬で横真っ二つに斬られた。
すかさず銀時は、近くにいるガジェットを縦に斬った。

F「早い！？」

フォアード部隊達は驚いた。
動きが素早く、ガジェットを木刀だけで切り裂いているのだから。

銀時「はいぃイイイ！次ぃイイイ！！」

銀時は次々とガジェットを破壊していく。

桂「動きが鈍い！」
エリザベス『なめとんのかゴルァア！！』

桂もガジェットの攻撃を避け、銀時に続くかのように複数のガジェットを次々と斬り、その隣でエリザベスもボートで剣を振り回すかのような勢いで桂に遅れないようにガジェットを破壊する。

神楽「ほぁちゃあああああああああああああああ！！」

その反対側に、神楽は傘を豪快に振り回してガジェットを粉砕し、時には殴ったり蹴ったりとしてガジェットを破壊し続ける。
そしてガジェットを踏み台にして高くジャンプし、落下加速を利用して傘を大きく振るうと、一気に五体のガジェットを押しつぶすかのように破壊する。

新八「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

奥のあたりから、新八はガジェットを木刀で次々と破壊する。心なしか新八の動きがすごく速い気がする。

新八「（なのはちゃんが僕を見ている。ここで活躍しないで何が男だ。）おら、かかってこい鉄屑どもーーーーー！！！！！」

愛の力で潜在能力を発揮するとはまさにこのこと。しかし後日に、その愛が砕けるなども知らずに。

月詠は複数のクナイを五体のガジェットに向けて放った。ガジェットは障壁を張ってクナイを防ぐ。

月詠「後ろがガラ空きじゃ」

ガジェットの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。
クナイは障壁が張られていないガジェット達の背中を貫き、中の動力炉を破壊した。

ネプテューヌ「やぁぁぁぁあああああ！！！」

銀時達とは別の場所で、ネプテューヌは次々とガジェットを破壊していった。
すると、後ろから十体のガジェットがネプテューヌを攻撃するが、いつの間にか消えた。

ネプテューヌ「どこ見てるのかな？」

後ろに回ったネプテューヌは、十体のガジェットを薙ぎ払った。

F「あっちも早い！？」

体格差などモノともせず、三体のガジェットを破壊する。

ネプテューヌ「どんどんいくよ～～！」

ネプテューヌは、次のガジェットを破壊しに行った。

ノワール「はぁ！！」

別の場所で、手に持つショートソードで、ガジェットを破壊するノワール。
すると、七体のガジェットが現れるが、

ノワール「そんなレベルで私に挑むの？馬鹿なの？死ぬの？」

余裕で七体のガジェットを破壊する。

ブラン「フンッ！」

また別の場所で、ブランがハンマーで、ガジェットをなぎ倒していく。

ブラン「まとめて・・・・・ぶっとべぇぇぇぇぇ！！！！！」

ハンマーを地面にたたきつけて、ガジェットを破壊した。言わば衝撃波だ。

ベール「遅いですわ」

さらに別の場所で、ベールがパイクを振り回し、ガジェットを破壊している。

すると、ベールがパイクを回して、

ベール「プープルアセンスバースト！」

魔力のこもった攻撃で、ほとんどのガジェットが破壊された。

アイエフ「しっかりやりなさいよ、コンパ！」

コンパ「はいです！！」

背中あわせになっているアイエフとコンパ。二人の周りには、十五体のガジェットが壊れていた。

アイエフ「この攻撃が見切れる？」

ダッシュで動いて、ガジェットを次々とガジェットを破壊していく。

コンパ「い・・いくです！」

アイエフが飛び出したと同時に、コンパは注射器をガジェットに向け、

コンパ「発射です！！！」

ズドドドドドドドドドド！！

注射器からマシンガンのように発射し、ガジェットを破壊するが、

銀時「うわっ、たたたたたたたた！」

新八「うぉわ！」

エリザベス『あぶな！』

アイエフ「コンパ！！銀さん達にまで狙ってどうすんの！？」

射程内にいる銀時達にまで狙われてしまった。

コンパ「ご、ごめんなさいです！！！」

その後も、銀時と桂が三体のガジェットを斬り、その反対側に神楽、新八、エリザベス、月詠がガジェットを5体破壊する。

ネプテューヌ達も、コンボとバトンタッチで、次々とガジェットを破壊していき、訓練が始まって一分も経過しない内に、百体のガジェットは全て破壊された。

訓練の様子を見ていたスバル達は呆然となる。
銀時達は武器をしまった。

銀時「チョコレートパフェゲットだな」

銀時は満足そうに笑っている。

神楽「私も後でなのはちゃん達にすこんぶを奢ってもらうアル」

後ですこんぶを奢らせようと神楽は考える。

新八（やった！これでなのはちゃんは僕を！）

新八はなのはと抱き合うことを妄想する。

桂「えいりあんに比べればガジェットもたいした事はないな」
エリザベス『全くです』

桂とエリザベスは物足りないと言った感じである。

月詠「だからわっちは乗り気じゃなかったんじゃ」

月詠は再び煙管を口にくわえる。

ネプテューヌ「スイーツゲット～～～！」

ネプテューヌはうれしそうだ。

アイエフ「腕は衰えてないわね」

アイエフは肩を回す。

コンパ「怪我が無くてよかったです」

コンパは安心している。

ノワール「このくらい余裕よ」

ノワールはまだ足りないと言っているようだ。

ブラン「やっと休める・・・」

ブランはとっとと帰りたがってる。

ベール「楽勝ですわ」

ベールは肩を回しながら言う。

十二人とも、まだまだ全然余裕である。

なのは「やっぱり、これくらいじゃ簡単すぎたね」

なのはが言った。

フェイト「銀時と神楽の強さは相変わらずだね」

はやて「桂さんの剣術も良え腕やったな」

ヴィータ「ああ、にしてもエリザベスって、あんなに強いんだな」

シグナム「それに、以前の異種生命体との戦いで見せた月詠という女性の実力、やはりかなりの手練だ」

リイン「5人とも凄いです」

フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、リインも、それぞれの感想を言った。

シグナム（それにしても、ネプテューヌか・・・・・・・・・）

シグナムが、ネプテューヌをみて、何かを考え込んでいる。

エリオ「あの！」

エリオが声を上げた。

エリオ「銀時さん達が攻撃した時、『ＡＭＦ』が効いてなかったみたいなんですけど…」

『ＡＭＦ』とは、攻撃魔法を掻き消すシールドみたいなものである。

フェイト「銀時達は魔法を使ってないんだ。だから『ＡＭＦ』は、銀時達には何の効果もないんだよ」

キャロ「えっ！？そうなんですか！？」

キャロが驚きの声を上げる。

一分もかからずに、百体のガジェットを倒したのも驚きだが、魔法を全く使っていない事にも驚いた。

キャロ「・・・ってあれ？ベールさんは魔法を使ってたような気が」

ベール「ここの魔法と、私たちの使っている魔法と違うので効果がないのではないのでしょうか」

キャロ「そうなんですか？」

キャロの疑問をベールが答えた。

スバル「銀さん、スゴイ！」

スバルは興奮してはしゃいでいる。

リイン「では次ｈ「待て」ってシグナム！？」

シグナムがいつの間にかバリアジャケットを展開して、銀時達のところへいく。

銀時「？どうした」

シグナム「いやなに、戦いを見ているうちに私もあいつと戦いたいと思ったのでな」

シグナムが誰かと戦いたいと言っている。まわりがざわめく。

銀時「・・・それって誰だ？」

シグナム「それは・・・・・お前だ！」

シグナムが相手を指差した。その相手とは・・・

ネプテューヌ「え？私？」

ネプテューヌだった。

ネプテューヌ「えっと・・・なんで？」

そう聞くと、

シグナム「お前の戦い方を見て戦いたいという言葉が出たのだ。光栄に思え！」

まったく理由になってない答えだった。

後ろでヴィータが、

ヴィータ「また始まったよ。あのバトルマニア」

と、つぶやいたそうだ。

だが、なのは達はシグナムの行動にすごく驚いた。

なのは「シグナムさん！本気ですか！」

フェイト「いくらネプテューヌが強いとはいえ子供相手にそんな」

ネプテューヌ「きこえてるよ！！」

フェイトが、子どもといったので突っ込む。

シグナム「そんなことなどどうでもいい！私と戦え！」

なのは達の話を無視して、ネプテューヌと戦おうとするシグナム。

銀時「おいおいシグナム。子供相手に戦うだなんて大人げないな」
シグナム「・・・・・・・・・・・・・・・」

銀時の痛い一言に、黙るシグナム。
エリオとキャロは複雑な気持ちになる。

シグナム「・・・・・・とにかく私と戦え！！」
全員「誤魔化した！！！！？？」
ネプテューヌ「いいよ」
全員「いいの！！？」

ネプテューヌは、なぜかシグナムの誘いに乗った。

シグナム「そうか！では準備ができたら訓練場に来い！！」
ネプテューヌ「オッケイ！」

シグナムは訓練場へと飛んで行った。

新八「ちょっとネプテューヌちゃん。なんでシグナムさんの申し出を受けたの？あの人本気ですよ」

新八は心配してやめさせようとするが、

ネプテューヌ「ふ～ん、そうなんだ」

それがどうかしたの？とでも言いたそうな顔をしていた。

ティアナ「そうなんだ、じゃないわよ！シグナム副隊長は強いのよ

！」

っとティアナが怒って言う。が、

銀時「まぁ受けてやっても良いんじゃないか？」

っと銀時が言う。

桂「うむ。ネプテューヌ殿の実力を見るにいい機会だ。やらせてやれ」

エリザベス『右に同じく』

月詠「わっちもじゃ」

桂・エリザベス・月詠も賛成している。

ネプテューヌ「よし、いくよ～」

ネプテューヌはシグナムのいる訓練場へと向かった。

ネプテューヌ「おまたせ～」

訓練場に待たせているシグナムのところについたネプテューヌ。

シグナム「おそい！何時まで待たせるつもりだ！」

シグナムは仁王立ちで待っていた。

ネプテューヌ「そんなことより早くやろ」

シグナム「おっと、そうだったな。」

シグナムはレヴァンティン、ネプテューヌは木刀を構える。

イストワール「今回は私が合図を出します。準備はいいですか」

シグナム・ネプテューヌ「当然（だ）！」

イストワール「それでは・・・・・始め！！」

イストワールの合図とともに、シグナムが先に動いた。

シグナム「ハァァァァァアアアア！！！！」

レヴァンティンを振り上げ、ネプテューヌに切りかかるが、

ヒョイッ！

シグナム「何！？」

かわされる。

シグナム「なら！」

避けた方向にレヴァンティンを振るが、ネプテューヌがいなかった。

シグナム「一体どk「どこ見てるのシグナムさん？」な！！？」

ネプテューヌはレヴァンティンの上に乗っていた。

ネプテューヌ「そんなんじゃ全然張り合いにならないよ！っと」

シグナムから距離を離れるも、まだまだ余裕である。

一方、遠くで見ているなのは達は、

フェイト「うそ、シグナムの攻撃をかわしてる」
なのは「ネプちゃん・・・すごい」
銀時「やるじゃねぇか」

フェイトが驚き、なのはと銀時は感心している。

ノワール「驚くのは早いわよ。ネプテューヌはまだ本気出してないから」
エリオ「あれで本気じゃないんですか！？」

ノワールに説明に、エリオは驚く。

シグナム（本気ではないといえ、私の攻撃をかわすとは・・・しかもあの表情からすると奴は本気を出していない）

本気を出さず余裕なネプテューヌに対し、シグナムは焦っている。

シグナム「（ここからは本気でいくぞ！）レヴァンティン！カートリッジロード！！」

ガシャン

カートリッジを1つロードする。
直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

ネプテューヌ「うわ！剣から炎が！」

ネプテューヌは驚く。

シグナム「紫電一閃！！！」

ドゴオオオオオォォォォォォォン！！！

シグナムの十八番である紫電一閃が炸裂した。

ヴィータ「あーあ」
なのは「ああ！ネプちゃん！」
神楽「おおーい！ねぷっち～！大丈夫あるか～！！」

シグナムをよく知っているものは呆れ、そうでない人はネプテューヌを心配する。

ノワール「あんたたち馬鹿なの？」

いきなりノワールが言い放つ。

新八「え？どういうことですか」
ノワール「あいつが簡単にやられはしないわ。よくみてなさい。」

彼女のライバルをやってるからこそわかること。
少なくとも、ノワールとブランとベールは分かっているのだ。

煙がはれると、最初にシグナムが現れる。だが彼女は驚いた顔をしている。

シグナム「なん・・・だと・・・」
？？？「・・・びっくりして思わず変身してしまったわ」

レヴァンティンを受け止めるネプテューヌ・・・否、パープルハートがシグナムの紫電一閃を防いだのだ。

シグナム「ばかな・・・わたしの紫電一閃を防いだだと。・・・それにその姿は・・・」

パープルハート「驚いた？これが私のもう一つの姿よ」

パープルハートは、勝ち誇る顔をしていた。

一方、なのは達は

新八「だれぇぇぇ

・・・・・って、え？」

神楽「ちょっと待つネ！あれがねぷっちアルか！」

まわりのみんなは、シグナムと戦っている女性・パープルハートを見る。

桂「そうだ。それに彼女はエイリアン・・・アバババンといったか？銀時と手を組んで倒したらしいぞ」

エリザベス『マジっすか！』

桂の言葉に、周りは驚いた。

パープルハート「・・・さて、反撃開始よ！」

ガキィン！！

シグナム「グウッ！！」

パープルハートの攻撃に、吹き飛ばされるシグナム。

シグナム「くっ！レヴァンティン！カートリッジｒ「させると思ったの？」「ズドッ！」グぁッ！」

紫電一閃を出そうとした矢先に、回し蹴りを受けるシグナム。

シグナム「ば・・・ばかな・・・いつのｍ「遅いわよ！」くっ！！」

ダメージを受けたシグナムに、追い打ちをかけるパープルハート。

パープルハート「そらそらそらそらそら！！」

シグナム「くぅぅ・・・」

シグナムは連続攻撃に苦戦する。

ヴィータ「マジかよ、シグナムが追い込まれていやがる！？」

信じられないような表情でヴィータは驚く。

そしてはやては感心するかのような感じでパープルハートを高く評価する。

はやて「大した子や。スピードだけはシグナムを上回っとる。」

はやてだけじゃなく、神楽、月詠もパープルハートの強さに感心する。

神楽「うぉはー！ねぷっち、凄いアル！」

月詠「かなりの鍛錬を包んでおるな、魔法なしでもかなりの実力じゃ。」

そして、フォアード部隊はシグナムと互角に戦っているパープルハートの強さに唖然と驚いている。

特に驚くべきはパープルハートの刹那のごとくの瞬間移動であった。

あれも魔法の一種だと最初はだれもが思ったが、パープルハートの刹那の瞬間移動は魔法ではなく独自の運動神経と身体能力によるものである。

シグナム「くっ！ならば！」

シグナムは、パープルハートからかなり離れる。

シグナム「レヴァンティン!!」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シュランゲフォルム』となった。

パープルハート「連結刃・・・鞭のような剣かしら」

パープルハートが不思議そうに見ていると、

シグナム「飛竜一閃!!!!」

炎を纏った連結刃をパープルハートに放った。

パープルハート「・・・鞭の弱点って知ってる?」

シグナム「・・・?」

パープルハートが、こんなことを言い出す。

パープルハート「リーチが長く、敵を一掃するにはもってこいの武器。・・・だけどその武器には弱点がある。・・・それは」

襲ってくる連結刃をかわして、

ガシッ!

掴んだ。

シグナム「何!!?」

パープルハート「掴まれたらその鞭が動かなくなるの」
炎を纏った連結刃を素手でつかんだパープルハート。手には血がにじんでいる。

パープルハート「お礼に私の必殺技を見せてあげるわ」
連結刃を捨て、刀を構える。
すると、みるみる刀に紫のオーラが纏っている。

シグナム（なんだあれは・・・すさまじい魔力だ。）
何時でも防御できるように構えるシグナム。しかし表情は焦っている。

パープルハート「これが私の必殺技…全力でいくから、覚悟して」
ゴオオオ

声のしたほうへ向くが、太陽をバックにしているため見えない。

パープルハート「これでとどめよ。ネプテューンブレイク！」

オーラをまとった刀を振り、紫色の真空刃のようなものをシグナムに放つ。

ドゴォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！

シグナム「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

シグナムはよけきれずに直撃を受けてしまい、吹き飛ばされる。

そして、煙がはれるとシグナムが倒れている。

イストワール「勝者！ネプテューヌさん！」

シグナムが倒れたことにより、パープルハートが勝利した。

銀時・フェイト・桂・なのは・はやて・神楽・エリザベス・月詠・ヴィータ・リインはパープルハートの予想以上の実力に感心する。

エリオとキャロはシグナムを倒したパープルハートの実力に驚きだしていた。

エリオ「す・・・凄いです！ネプテューヌさん！」

パープルハートの見たことが無い魔法剣技と魔法に感心したエリオ。

キャロ「唯さえ、リミッターをかけられているシグナムさんとさえ対等に渡り合える魔導士はそうはいないのに、シグナムさんを倒す

なんて・・・」

キャロも驚きを隠せないまま感心する。

エリオとキャロがパープルハートの強さに騒いでる中、ティアナは複雑な顔をしていた。

ティアナは悔しそうに拳を強く握った。

ノワール「・・・・・・・・・・」

そんなティアナを、ノワールはただ黙ってみていた。

第七訓：バトルはスリルを求めるもの（後書き）

真王「っというわけで、対戦相手はネプテューヌでした～。さぁ次回は、なのはが銀時に告白！だけどそれを気に食わないものが・・・」

アイエフ「次回『男の嫉妬と趣味は醜い』テイクオフよ」

～広告～

真王「同作の『魔王と聖王と狭間の混沌（カオス）』もお楽しみください」

第八訓：男の嫉妬と趣味は醜い（前書き）

銀八「3年Z組ー！」

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。ホームルームをやる前に、転校生を紹介する」

ネプテューヌ「はじめまして♪ネプテューヌだよ」

コンパ「わ・・・私はコンパです」

アイエフ「アイエフよ。よろしく」

ノワール「私はノワール。みんなよろしく」

ブラン「・・・私はブラン」

ベール「ベールと申します。はじめまして」

銀八「よ～し、六人は適当に席につけ。今回紹介だけだから何もない。以上！」

イストワール「『リリカル銀魂』始まります（＾口＾）ノ」

第八訓：男の嫉妬と趣味は醜い

訓練が終わって夕食の時間。
食堂に集まって、みんなで夕食を食べている。
銀時は、デザートのチョコレートパフェを食べていた。

フェイト「銀時。今日の訓練、お疲れ様」
スバル「お疲れ様です！」
銀時「おお」

フェイトとスバルの言葉に、銀時は短く答えた。

銀時「そういや、フェイト。アルフとプレシアはどうしてんだ？」
フェイト「母さんは、本局で働いてるんだ。アルフは母さんの仕事の手伝い」
銀時「そうか。二人とも元気か？」

パフェを口に運びながら、銀時は尋ねた。

フェイト「うん。元気だよ。銀時の事を教えたら、二人とも嬉しそうだったよ」
銀時「そうか」

銀時はパフェを食べ終えた。
おかわりのパフェを頼もうとした時、

？？？「銀時ぃ！！」

声と共に背中に衝撃が走った。

銀時「おわっ！」

ビックリした銀時は後ろを見た。
そこには、

銀時「アルフ！」

人型の姿になってるアルフがいた。

アルフ「銀時ぃ、久しぶり！会いたかったよ！」

アルフは、銀時に抱き付いた。
周囲の注目が銀時達に集まる。

銀時「ちょっ…離れろ、バカ犬！」
アルフ「素直じゃないな♪」

嬉しそうな顔をしてるアルフは、なかなか離れない。

銀時「つーか何でおめェが此処にいるんだ？本局でプレシアの手伝いしてたんじゃねーのかよ？」
アルフ「銀時に会いたくて来たんだよ♪」

フェイトからの知らせを聞いて、本局から来たらしい。

銀時「とりあえず離れろ！」

銀時が叫んだ。すると、

ネプテューヌ「銀さん、その子誰？」

アイスを頬張っているネプテューヌがアルフを見る。

フェイト「紹介するね。私の元使い魔の」

アルフ「アルフだよ！」

元気よく挨拶するアルフ。

ネプテューヌ「そうなんだ♪。わたしはネプテューヌだよ。よろしく♪」

と、いいながらアルフの頭をなでる。

アルフ「／／／／／」

なでられて気持ち良かったのか、顔を赤くする。

ネプテューヌ「・・・アルフちゃん、お手！」

アルフ「ワン！・・・はっ！」

ネプテューヌに犬の扱いをされ、はっとなる。

フェイトは苦笑いを浮かべ、銀時はニヤニヤと笑っている。

アルフ「ちょっとなｎ「おすわり！」ワン！・・・・・・」

またもや、つられる。

ネプテューヌ「よ～しよしよしいい子だね～」

ムツ○ロウのような口調で、アルフをなでるネプテューヌ。
アルフはなでられてるせいか、怒る気もせず、むしろ気持ちいらしい。

アイエフ「・・・あの子、将来トップブリーダーになれそうじゃない？」
コンパ「ねぷねぷは動物に懐かれやすいんじゃないんですか？」

遠くで、ふたりはネプテューヌとアルフのやり取りを見ていた。
ちなみに、ノワールはアルフを見て胸キュンしたらしい。

一方の桂は、はやてと二人っきりでそばを食べていた。
エリザベスとリインは桂とはやての関係に気づいて、２人っきりにさせる為に銀時達と食事をしていた。

桂「全く、銀時も随分と罪な男になったものだ」

笑いながら桂はそう言うと、はやても面白がって笑い出す。

はやて「そうやな。銀ちゃん、あの調子だとジャンジャンと女に好意を持たされるかもな」
桂「ふ・・・違いない」

何やら二人っきりで言い雰囲気で話す桂とはやて。
そしてはやてはフォワード部隊の事を桂に聞き出す。

はやて「そう言えば、桂さん。桂さんから見て、新人達の訓練はどうや？もちろんスバルは除くけどな」
桂「・・・そうだな・・・エリオ殿とキャロ殿ははっきり言って相性が良い相方同士だ。おそらく、２人の力は今後の成長しだいで大

きくなるであろう」

桂から見て、スバルと比べれば2人はまだ未熟だが、チームワークとしてはそこら辺よりはかなり良い。
コンビネーション的な実力は間違いなく副隊長級は良くであろう。

桂「だが・・・訓練と言えば・・・ティアナ殿には不自然な感じがする」

桂がそう言い、ティアナのほうを向くと、ティアナはあんまり食事を進んでおらず、銀時とスバルとネプテューヌを複雑そうな顔で見つめる。

はやて「やっぱりそう思うか?」
桂「ああ、実力は単独的にはエリオ殿とキャロ殿より上である事は分かる。だが・・・何か無理をしているようだ。・・・まるで・・・自分の体を壊すかのような行為のようなその様な・・・」

2人と比べてティアナには何か不自然を感じる桂だが、1つだけ確信した事がある。

桂「いずれにせよ、今のティアナ殿のやり方では、成長する事はないだろう。」

現実的に言う桂だが、今は放っておいた方が良いと確信する。

夕食を食べ終え、みんなそれぞれの部屋に戻り、眠っていた。ちなみにアルフは、フェイトの部屋で一緒に寝ている。
銀時はベッドに横になっている。元気なアルフの姿が見れて、銀時は安心した。
だが、銀時の中には少し不安があった。
前に新八達と一緒に『A's編』を見た。
そして物語にゾーマが出ていない事に気付いた。プレシアの時もそうだったが、どうやら銀時達が介入した事で、原作のストーリーとは違う展開になっているようだ。
だとしたら、今回も違う展開になる可能性がある。
まぁ原作の内容は知らねーけどな。
銀時はため息をついた。
何も問題が起こらなきゃいいが。
すると、扉がノックされた。

銀時「開いてるぞ」

軽く返事をする。

なのは「お・・・オジャマ・・・します。」

声がした後、扉が開かれた。
入ってきたのはなのはだった。
銀時は起き上がって、なのはに体を向けた。

銀時「んで?何の用だ?」

銀時が尋ねた。

なのは「できれば・・・外で・・・・・・」

機動六課・展望スペース

銀時となのはは外に出て、お互いを向き合っているが、

なのは「あの……その……／／／」

なのはは顔を赤くし、銀時から目をそらしながら呟く。

え・・・あれ？この展開、どっかで見たような感じがするんだけど？

なのはの顔ってこんなに赤かったっけ？

あれ、これって・・・いや・・・それはあり得ない・・・。だって、

なのはにはユーノがいるんじゃ・・・・

なのは「銀さん！・・・わ・・・私・・・／／／」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にし、なのははついに銀時に告白をする。

銀時「私・・・銀さんの事が好きです／／／」

銀時の予想が当たり、なのははついに銀時に告白をした。

１０年前の『闇の書・ゾーマ事件』以来、心の奥底で芽生えた初めての思い。

それは銀時に恋をしたなのはの初恋であった。

銀時「……マジでか？」

沈黙を破って、銀時が尋ねた。

なのは「・・・・・・・・・はい・・・／／／」

小さな声で返事をしながらも顔を真っ赤に染めてなのはは言う。

告白した事で吹っ切れたのか、なのはは歩き出し、銀時に抱き付いた。

なのはの豊満で柔らかい胸が、銀時に当たる。

なのはもまた、１０年たって魅力ある女性へと成長したので、胸もかなりでかいのである。

銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

こういう状況に慣れていない銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

銀時（おいいいいいいいいい！！何これぇえええ！！え？何？俺ってこんなにも罪な男だっけ！？マジでどうすんの！？ユーノは？ユーノはどうするの！？つうか銀さんとんでもない事をしちゃったんだけどぉおお！！）

自分が一体何をしたのかっと考える銀時。

一体何処でなのはは自分にほれてしまったのか考える中・・・

なのは「・・・・・銀さん／／／」

なのはは両手を銀時の顔に添えた。

そしてゆっくりと顔を近づけ、自分の唇を銀時の唇に重ねた。

なのはにキスされ、銀時の体は固まった。

なのは「・・・・ん／／／」

甘ったるい声を出して、シグナムの時と同じで、長い時間キスをした。
銀時が女性とキスをするのはこれで三度目になるであろう。
人生は何が起こるかわからない事はまさにこの事であった。
なのはは、銀時から唇を離した。

なのは「にゃはは・・・昨日、助けてくれたお礼だよ。このファーストキスは／／／」

なのはは、嬉しそうな笑みを浮かべた。
一方銀時は、キスをされて呆然としている。以前にフェイトやシグナムにもキスされたが、なのはのキスは、２人とはまた違った感触のキスだった。

なのは「フェイトちゃんにもシグナムさんにも負けないもん。・・・これからもよろしくね、銀さん／／／」

こうしてまた１人、銀さん争奪戦に参加する女性が増えて、なのはは部屋に戻ろうとしたときだった。

ババァァァァァァァァァン！！！！！

大きな音とともに、何かが出てきた。

なのは「な・・・なにこれ・・・」

なのはは、青い顔をしたが、銀時のほうがもっと顔が青い。その理由は、

新八「・・・・・・お前ぇぇ・・・それでも人間かぁ？・・・・（怒）」

膨大なる殺意を放つ新八がいるからだ。

なぜかというと、銀時となのはが外へ行こうとする際、新八が目撃し、告白からキスまで一部始終を見てしまったからだ。

銀時（あ・・・俺死んだかな・・・）

銀時は死を覚悟した。

新八「お前のかぁちゃん何人だァァァァァァァァァ！！！！！！！（激）」

恋人を取られた男はどれだけ怖いか、銀時は思い知ることになる。

・・・・・・・・・ことはなかった。

なのは「だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

なのはが飛び出して、銀時をかばう。

新八「・・・・・・って、なのはちゃん！？」

新八は驚いて正気に戻る。

なのは「だめ！だめなの！！」

なのはは銀時をかばって、涙を流す。

新八「！！？！？」

新八は、泣いているなのはを見て、ショックを受けた。
なのはが銀時をかばって泣いている⇒なのはちゃんが銀さんを守っている⇒なのはちゃんが銀さんを愛している!?

新八「うっうわあああああああああああああ!!!!!!!!（泣）」

新八は泣きながら扉へ向かっていく。

新八（嘘だ!なのはちゃんが!なのはちゃんが銀さんとなんて!!・・・いや、それ以前に僕はなのはちゃんを泣かせてしまった!!僕は・・・僕は・・・!!）

絶望を抱いた新八は、扉のドアノブに手をかけ「なのはちゃんどうしたの!!?」

ガァンッ!!

新八「ゴフッ!!」

・・・る前に、ネプテューヌ達が扉を開けて、新八はぶっ飛ばされた。

ネプテューヌ「なのはちゃんどうし・・・・・・なんで銀さんがいるの?」
銀時「あ・・・いや・・・えっとだな・・・」

何やら歯切れが悪い。するとベールが、

ベール「・・・・・・なにやっているんですか?新八さん」

倒れている新八を見つけたので声をかけると、

新八「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

動かない魂の失った屍のようになっていた。

ベール「あらあら大変！早く起こさないと・・・・・・・・・・・・えい♪」

ブスッ！

新八「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ベールがパイクで刺して、新八は１０メートルくらい飛び上がった。

ノワール「・・・・・・もうすこしましなやり方ないの？」

ベール「めんどくさかったので♪」

そんなことを言ってるが、顔がなぜか笑っていた。

ブラン「どうしたの？」

ブランがきくと、新八は答えた。

新八「・・・・・・僕はダメな男だ。なのはちゃんが大すきなのに銀さんに取られ、腹いせ殺ししようかって時になのはちゃんを泣かせてしまった。・・・僕はどう生きていけばいいんだぁーーーーーーーーーーーー！！！！

もはや心がすでに絶望しきっていた。
銀時となのははは、どうしよう、と悩んでいたら、

パン！！

全員（ノワール以外）「！！？」

突然ノワールが新八を平手打ちした。

ノワール「しっかりしなさい！あんたそれでも男なの？！」

ノワールが、新八に説教し始めた。

ノワール「失恋して絶望したから何？八つ当たりなんて外道がすることよ！それに、彼女は彼女なりの道があるなら、それを支えるってのが男の役目でしょ！」
新八「！！」

ノワールの言葉に、ハッとなる新八。

ノワール「そう、男なら・・・大好きな女性のためにサポートしてやりなさい」

ノワールの言葉で、新八に心が突き刺さるような衝撃が走った。

新八（そうだ・・・そうだった！僕は初めてなのはちゃんと出会ってかわいいと思った。なのはちゃんのために僕は守り続けた。でもそれはなのはちゃんに恋をしたからだ。銀さんに取られて殺したいほどだったけどそれは間違いなんだ！、ああっ！・・・僕はなんて馬鹿なんだ！僕の浅はかなことでなのはちゃんの幸せを踏みにじる

なんて！、そして、なんて幸せ者なんだ！ノワールさんは僕のやるべきことを教えてくれた！、なのはちゃんの幸せのために、僕は・・・・・・・・）

新八は、銀時となのはに向かって正座して、

新八「ごめんなさい！銀さん！なのはちゃん！！僕は大馬鹿でした！なのはちゃんの幸せを考えずに自分はひどいことを！！」

と、二人に向かって土下座した。

なのは「にゃはは・・・新八君、別に気にしてないよ」

なのはが新八をなだめた。

なのは「新八君は私のためにやってるけどもう十分だよ。新八君は新八君らしく頑張っていこうよ」

なのはの微笑みをみて、新八は顔を赤くする。

新八「・・・「グシッ」ハイ！」

涙を拭いて、新八は元気を取り戻した。

なのは「・・・だけど、銀さんは私のものだよ♪（黒）」

新八「・・・ハハッ・・・・・・それは決定事項ですか・・・（汗）」

なのはの黒い笑みに、冷や汗を流す新八。

新八は、ノワールのとこに歩み、

新八「すみませんでしたノワールさん」

あやまった。

ノワール「いいのよ。すきでいったわけだし」

ノワールは気にしてないらしい。

ブラン「ま、改心しただけでもいいし」

ベール「いつもの新八君のままのほうが良かったりしますしね」

ブランとベールは言う。

新八「ありがとうございました。では、」

新八は、自室へと戻って行った。

銀時「・・・やっとあいつも卒業したのかね～」

と、いつものようにだらける。

なのは「にゃはは・・・さぁ、もどろ」

銀時達も、自室へと戻って行った。

翌朝。

一応、なんやかんやでスバルが新しく加わって、フォワードのみんなは個別訓練を受ける事になった。

ちなみに、スバルはティアナと同じくなのはのスターズ分隊に入り、実力がすでに副隊長急に入っているため、フォワード部隊の中で唯一シグナムとヴィータと同じく、『能力限定』の魔力リミッターがかかっているが、それでも強さはフォワード部隊の中でも一番強いってぐらいである。

それぞれの個性を活かすための訓練に、スバル達は頑張る。

ヴィータがいつもどおりに新人を鍛える中、シグナムもまたエリオの訓練に付き合っている。

いつもなら、シグナムが新人の訓練には参加しないのだが、エリオが「銀時さん見たいに大事なものを護れるほど強くなりたい」っと言う信念に興味を持って、エリオの特訓を付き合っている。

銀時の様な強い男になれるのかその眼で確かめたいからである。

銀時達は訓練の様子を見守っている。

そこへアルフがやってきた。

アルフ「ここにいたんだ」

銀時「ああ。暇だからな。つーかお前は仕事しなくていいのかよ？」

答えた後、銀時はアルフに言った。

アルフ「ちゃんとプレシアからは、休みを貰ってるもーん」

気軽にアルフは答えた。

月詠「ふむ。アルフは天人に似ているな」

アルフを見ながら、月詠が言った。
一方の桂は真剣な眼差しでティアナを見ると、隣にいるエリザベスに話しかける。

桂「エリザベス。エリザベスから見て、ティアナ殿はどう見る？」
エリザベス『そうだね・・・何か無理をしている感じがします。時々だけどムキになっているような、なんか分からないけど』

桂は昨日、はやてに新人フォワード部隊の様子を聞かされて以来、ティアナの慌てっぷりを気になっていた。

エリザベス『なんか、強さだけを求めているようにしか見えない』

そう書かれたボートをだしてエリザベスは感想を言い出す。

桂「やはりそうか。・・・武士であろうと魔導士であろうと・・・人はみな、強さだけを求めても・・・『真の強さ』は得られぬ」
月詠「同感じゃ。」

桂がエリザベスと話していると、隣で煙管を加えて口から煙を吐く月詠が話しかけてきた。

桂「月詠殿」
月詠「桂の言う通り、ティアナの今の行為は強くなる為じゃなく、強さだけを求めて抗っている行為にしか見えぬ。あれではいくら訓練を続けても強くはなれぬ」
桂「うむ、・・・このままでは、ティアナ殿の体はいずれ内部から崩壊してしまうであろう」

どうすれば良いか迷ってしまう桂、エリザベス、月詠の3人。

ヴィータ「よーし。午前の訓練は終わりだ！」

ヴィータがスバル達に告げた。

訓練を終えたスバル達は、それぞれストレッチをした。

銀時「こんな訓練毎日やんのか。大変だな？」

ジャンプを持ちながら、銀時は他人事のように言った。

ネプテューヌ「銀さん、それ何？」

ネプテューヌがジャンプを指差す。

銀時「勇気と萌と心の詰まったジャンプだ」

銀時は答える。

ネプテューヌ「みせて。・・・・・・・・うわっ、すごい」

ネプテューヌは、ジャンプ愛読者になった。

昼食を食べるため、銀時達は食堂にいた。

そこでティアナ達は顔をしかめていた。原因は銀時とフェイトにある。

二人は、真っ白いご飯の上に『ある物』をかけているのだ。

意を決して、エリオが聞いてみた。

エリオ「あの……お二人とも何をかけてるんですか…？」
銀時「これか？」

銀時はエリオに顔を向けた。
片手で丼を掴み、顔の前まで持ち上げた。

銀時「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

ご飯に小豆を乗せるという、銀時特製の宇治銀時丼。
ティアナ達は顔を歪め、嫌悪感を露にする。
宇治銀時丼自体にも驚いたが、更に驚きなのが、隣に座ってるフェイトがそれを美味しそうに食べているのだ。
フェイトの意外な食の好みに、ティアナ達はア然とした。
シグナム、ヴィータ、リインフォースは、宇治銀時丼を始めて見るが、とても好きにはなれないと思った。

銀時「食うか？」

銀時がスバル達に尋ねた。

ティアナ「え…遠慮しときます！」

慌ててティアナ達は断った。
だが、スバルは・・・

スバル「じゃあ・・・一口だけ頂いてみます」

っと箸を掴んで宇治銀時丼を近づいた。
それを見たなのはも・・・

なのは「私も・・・試しに・・・。」
ティアナ「なのはさん!?」

なのはも試そうと箸を掴むとティアナは驚く。
以前、「ジュエルシード事件」の解決時に宴会をやって、フェイトから宇治銀時丼を差し伸べられたが、何やら不気味に感じて断った。
だが、好きになった銀時の好物を知る為に、試して見ようとする。
スバルとなのははゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し摘んで口の中に入れた。
もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。
そして・・・・2人が口にした感想は・・・

スバル「あ・・・凄く美味しいです!」
なのは「ほんとだ!これ、全然いけるよ!」

一発で気に入ったようである。
2人の予想外の感想にティアナ達は・・・

ティアナ達「えええぇぇぇ

銀時は少し身を乗り出す。

スバル「はい！凄くおいしいです！」
なのは「全く新しい珍味だよ、銀さん！フェイトちゃん！」

スバルとなのはは目を輝かせている。
銀時とフェイトはリンディ以外の同志が見つかって大喜びした。
それを見たティアナ達の口からは・・・・・・・

ティアナ達「な・・・・なんだそりゃーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

だった。

月詠「あんなのを好きになれる者がおるなんて・・・」
神楽「世の中は広いネ」
新八「なのはちゃんまで・・・」

神楽と月詠と新八の3人も、銀時の宇治銀時丼を気に入る者はそうはいないと考えてたが、フェイトだけじゃなくスバルとなのはも気に入った事に不思議に感じた。

ネプテューヌ「銀さん、何食べてるの？」

ネプテューヌが銀時の持つ『宇治銀時丼』をさす。

銀時「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

と、ネプテューヌに見せる。

アイエフ「ちょ、なにこれ！小豆ばっかじゃないの！」
コンパ「銀さん！糖尿病になるですから、控えてくださいです！！」

アイエフは嫌がり、コンパが注意するが、

ネプテューヌ「私の分はない？」
アイエフ・コンパ「ネプ子！？／ねぷねぷ！？」

いきなりのネプテューヌの言葉に驚く二人。

銀時「あるぞ」

何時から作ったのか、宇治銀時丼を置く。

銀時「さぁ、遠慮なさらずにたいらげなさ～い」

ちゃらけた口調でネプテューヌを試しているが、

ネプテューヌ「わかった」

パクッ！

一口で平らげた。

全員「って一口かよ！！！！！！！」

宇治銀時丼は、一口で平らげられるものではないのだが、ネプテュ

ーヌはそれを難なく平らげた。

ネプテューヌ「・・・意外といけるね。この料理」

ネプテューヌもこの宇治銀時丼が気に入った。

ティアナ達「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

まさかネプテューヌまで宇治銀時丼を気にいるとは思いもよらなかったようだ。

神楽たちはまた一人増えた、という顔をしていた。

一方の桂とエリザベスは、はやてとリインと一緒にそばを頂いていた。

ヴィータ「おい、ヅラ。朝食ぐらいそば以外の物を食べる気が無いのか？」

ヴィータは桂に話しかけると、桂はヴィータにそばの良さを話しかける。

桂「ヅラじゃない桂だ。それにそばは血圧を下げる効力を持っているぞ。・・・ヴィータ殿も是非試食すると良い」

ヴィータ「それはつまり私が血圧高いと言いたいのかぁあああ！！」

ヴィータは額に血管を浮かべて怒鳴りながらツッコみ、ハンマーを出して桂を襲おうとするが、シグナムとリインフォースに抑えられる。

ブラン「蕎麦っておいしいの？」

横からブランが飛び出てくる。

桂「そのとおり。ブラン殿、そばは血圧を下げる効力を持っているぞ。是非試食するといい。・・・身長は保証できんが」

ブラン「（ブチッ！！）んだとーーーーーー！！！！！てめぇ！！！あたしが豆粒ドちびのペッタンコって言いたいのかーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！（怒）」

桂「ごぼぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

額に血管を浮かべ、桂をぶっ飛ばすブラン。

彼女はストレスをためやすい性格なため、キレると口調が荒くなるのだ。

それを見ていたヴィータはグッジョブ！、と親指を立てた。

第八訓：男の嫉妬と趣味は醜い（後書き）

真王「次回はホテル・アグスタの警備。しかしそこで事件が起きた。」

ノワール「次回『どんなところでもトラブルはつきもの』テイクオフ！」

～予告～

ナレーション「ホテル・アグスタに危険なロストロギアが運び込まれたようです」

第九訓：どんなところでもトラブルはつきもの（前書き）

真王「そろそろ本編終了も近くなってきたな」

パープルハート「たしかに。『リリカル銀魂』始めるわよ」

第九訓：どんなところでもトラブルはつきもの

戦隊舟の中

そこには、何やら赤紫色に輝く数多くのカプセルの中にはある凶悪な兵器が眠っている。
それを不気味に笑い出す高杉と1人の大男が話している。

???「おおー、これが高杉が言っていた例の機械兵器(からくり)か」
高杉「ああ。すでに1本は完成されているからそいつは俺の部下にやったさ。いずれお前さんの部下にも使わせてやるよ」

高杉はククク・・・と不気味な笑い方をすると、男も面白そうに笑い出す。

???「ふはははははは！人間が作ったとは言え、ふれた瞬間に凶器を感じるわ！我等天人と手を組んでまで世界を潰すと聞いた事があるが・・・本当にその様だな？」

愉快そうに笑い出す大男に、高杉の顔は獣を狩る脅威の笑顔を浮かぶ。

高杉「ああ、だからアンタの計画に手を貸してやったんだ。異次元だろうと元の世界だろうと・・・俺は全てを壊してやるのさ」

世界の全てを憎み、この手で破壊すると誓った黒い獣の脅威は収まることはない。
大男は高杉が宇宙海賊『春雨』より脅威の人物であると改めて知る。

???「『春雨』と手を組んだのも、世界を潰す為の利用って訳か」
高杉「まぁな。世界を壊す為なら、『春雨』だろうがなんだろうが邪魔するものを殺すだけさ。・・・そんなことより、お前さんあいつをみなかったか？」

煙管を加えて高杉は大男に聞くと、男は答える。

???「あいつ？ああ、あの女か？『ちょっとした仕掛けをしてくる』とかいってどっかいっちまったぞ？」
高杉「・・・なるほどな。だがその前に、実は数日後に、ホテル・アグスタで骨董オーディションが行われる。その為、機動六課がそのホテルの警備をするらしく、お前達は大量のガジェットを襲わせるつもりだろ。そいつ等を実験台にさせて例の機械兵器（からくり）の威力、その眼で確かめて見るといいぜ」

高杉はその兵器を部下に使わせて計画の為に溜めさせる。

???「元は実験用とはいえ、あれもかなり凶悪な代物だろ？」
高杉「ククク・・・ああ、もしかすればあんな駄作品でも機動六課を全滅させる力はあるだろ？」

強力な兵器を駄作品扱いする程まで、高杉の計画している兵器はとんでもなく凶器ともいえるであろう。

高杉「ククク・・・さぁ、祭りの始まりだ」

高杉の中に眠る黒い獣の闇が今、動き出す。

銀時達はヘリに乗って、ホテル・アグスタに向かっていた。
そこで行われる骨董オークションに出る、取引出品許可されているロストロギアをレリックと間違えてガジェットが現れる可能性があるので、機動六課が警備に呼ばれたのだ。
現場には昨夜から、シグナムとヴィータが既に警備している。
銀時、桂、フェイト、なのは、はやては、建物の中の警備をする。
最初は嫌がった銀時と桂とネプテューヌだが、ビッグサンダーチョコレートパフェ三つ＆amp;最高級特上天ぷら蕎麦（そば）という条件で引き受けた。
ちなみに新八は、六課で留守番している。
そして只今ヘリの中では、

銀時「だぁーーーーーーーー！！！！！！またジョーカーかよーーーー！！！！！」
ネプテューヌ「銀さん、運がないね」
桂「まったくだな」

銀時・ネプテューヌ・桂が、ババ抜きをやってました。（笑）

ティアナ「って、なにやってんのあんたら！！」

ティアナが怒鳴る。なのは組は苦笑いを浮かべ、万事屋・ネプテューヌ組は呆れている。

キャロ「あの…シャマル先生。その荷物は何ですか？」

キャロは、シャマルの隣に置いてある五つのカバンを指差した。
シャマル「ああ、これ？隊長達と銀さんと桂さん・それにノワールちゃんとベールさんのお仕事着♪」
ニッコリ笑いながら、シャマルは答えた。
キャロ達は首を傾げた。
ついでに銀時と桂とノワールとベールも、意味がわからず首を傾げた。

ホテル・アグスタ・エントランスホール

到着したスバル達は警備を始めた。
オークションが行われる会場の入口では、チケットを受付の男に見せて次々と人が入っていく。
一人の女性がチケットではなく、機動六課の身分証を見せた。
受付人「あっ！」
身分証を見た受付の男は驚いた。
はやて「こんにちは。機動六課です」
はやて、フェイト、なのはが綺麗なドレス姿で受付前に立っている。
その三人の後ろには、

銀時「何で俺達まで、こんな恰好なんだ?」
桂「仕方がないであろう。これを引き受けなければ、銀時はビッグサンダーチョコレートパフェを食べられないんだぞ?それに俺も最高級特上天ぷらそばを見過ごす事になる」

スーツ姿の銀時と桂が愚痴っていた。
普段の着物を脱ぎ、黒いスーツを着ている。
ちなみに銀時の木刀と桂の刀はシャマルに預かってもらっている。

フェイト「よく似合ってるよ、銀時」
なのは「ぐっと来るよ、銀さん」

フェイトとなのははニコッと微笑んだ。

はやて「いやー、ほんま両手に花って言うのはまさにこの事やな」

銀時、フェイト、なのはを見ながら、はやてが言った。

フェイト「も、もう、はやて!／／／」
なのは「からかわないでよ、はやてちゃん!／／／」

二人は頬を赤くした。

なのは「・・・ど・・・どう、銀さん?わたしとフェイトちゃんのドレス姿は?／／／」

なのはが銀時に尋ねた。
銀時はドレス姿のフェイトとなのはを見つめた。色っぽい黒のドレスと綺麗なピンクのドレス。大人になったフェイトとなのはの魅力

をさらに上げている。
銀時に見つめられ、二人の顔がみるみる赤くなっていく。

銀時「よく似合ってんじゃん。綺麗だよ」

銀時は見た感想を言った。

フェイト「うん、ありがとう／／／」
なのは「にゃはは／／／」

フェイトとなのはは嬉しそうに微笑んだ。
三人の姿を見て、桂とはやてはニヤニヤと笑い出す。

桂「銀時も大変だろうな・・・この先に待ち構える試練を受けねばならぬ事を知らぬ用だしな」
はやて「それもそうやな」

この先に待ち構える試練。
それは口にしないで想像しながら楽しむ2人。
そしてはやてはテレながらも桂を見る。

はやて「そ・・・それと桂さん・・・・その・・・私はどうかな？／／／」

顔を赤く染めながらはやては桂に訪ねる。
美しき水のドレス。はやてもまた、フェイトとなのはにひけをとらないほどの魅力が上がっていた。

桂「見事に似合っている。美しくなったな、八神殿」

桂も見た感想を言い出す。

はやて「うふふ、ありがとな桂さん／／／」

はやても嬉しそうに笑い出すと、はやては桂の右腕を自分の絡めさせる。

それを見たフェイトとなのはも銀時の腕に自分達の腕を絡めさせる。

ノワール「・・・見ててこっちが恥ずかしいわ・・・」

ベール「まぁまぁ。いいではありませんか」

そんな5人に黒いドレスを着たノワールが愚痴をこぼし、緑のドレスを着たベールが制する。

ドレス姿のベールは、まわりから見れば美しいお嬢様のようなオーラがあるため、ほとんどの男性が彼女を見ている。

ベール「どうですか桂さん」

ベールが桂に自分の姿を聞き出す。

ちなみに、はやてはベールを見たときピシッ、と音を立てた。

なのはとフェイトも同じくピシッ、と音が鳴ったらしい。

桂「おお!どんな美女でも引けを取らない美しさだ」

銀時「そんなんなら男がいっぱいできるんじゃね?」

2人は見た感想を言う。

ベール「うふふ」

ベールはうれしそうだ。

ちなみになのは・フェイト・はやては、

3人（女として負けたァァァァァァァァァァ！！！！！）

と、心の中で絶叫したそうだ。

ノワールは、やれやれって顔をした。

七人は、危うく任務中である事を忘れそうになった。

ホテル・アグスタ・地下

銀時達がホテル・アグスタの中を監視する中、神楽、エリザベス、月詠の3人はスバル達と共に、ホテルの周辺を警備していた。

今回はなのは、フェイト、はやての3人の部隊長と、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ護騎士団全員集合である。

以前、ティアナはスバルから父・ゲンヤと姉・ギンガから聞いたことぐらいの事を話されたことを思い出す。

はやてが使ってるデバイス、魔導書型の『夜天の書』。

シャマルとザフィーラははやて個人が保有してる特別戦力。

それにリインフォースとリインさんを合わせて七人揃えば、無敵の戦力とも言われる。

そう思い出すと、ティアナはある事を考えていた。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。

魔法は使えないけど、優れた身体能力だけでオーバーSランクを超

える強さを誇ったゾーマを倒し、その実力は間違いなくオーバーS級は行く『白夜叉』坂田銀時。
坂田銀時に勝るとも劣らない戦闘能力を誇り、剣だけじゃなく爆弾やデバイスとは全く違う特殊な道具を使いこなす『狂乱の貴公子』桂小太郎。
宇宙最強戦闘種族『夜兎族』っと言う胡散臭い種族だが、戦闘力だけなら機動六科を含めても最強を誇る神楽。
桂のペットだが、桂に劣らない戦闘力を誇り、特殊な武装を使いこなすエリザベス。
クナイと言う飛び道具を使いこなし、素早い動きで相手を翻弄する月詠。
さらに隊長格全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク。
他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばっかり。
あの年で、もうBランクを取ってるエリオと、レアで竜召喚士のキャロ。
そして最も凄いのが、潜在能力と可能性の塊で、魔術はすでにAA＋級の実力を持ち、新しく入ってきたフォワード部隊のスバル。
そして、銀時のような素早い動きと変身能力を持つネプテューヌ。

やっぱり…うちの部隊で凡人は私だけか……。

ティアナは静かに目を閉じる。
でも、そんなの関係ない。
しばらくして、ゆっくりと目を開けた。
私は、立ち止まるワケにはいかないんだ。
ティアナが改めて決意した時、不気味な光景を見た。

それは、何処から出したのか突っ込みたくなるような刀を地面に付け、頭に『打倒・ガジェット』っと書かれた鉢巻をかけているエリザベスがいた。

ティアナ「・・・あのう・・・随分と張り切っていま・・・」

シュン！！

ティアナ「きゃあああああ！！」

突如、エリザベスが刀を回転に振りだし、ティアナは思わず叫んでギリギリに避けて、地面に尻をつけて転ぶ。

後少し、反応が遅れていたら間違いなく斬られていた。

ティアナ「何するんですか！？」

ティアナが怒鳴ると、エリザベスは鉢巻に『エリゴ１３』と書かれており、葉巻をくわえたまま目付きをかの「ゴル○」の様にして、

エリザベス『俺の後に立つな』

そうか書かれたボートを出す。

ティアナ「うっさいわ！！どっちが前だか後ろだかわからない体をしているくせに！！」

ティアナが、額に青筋を浮かべて怒鳴りながらツッコんだ。

ホテルを囲む森。
森の中を走る集団があった。
ホテルへ向かって、真っ直ぐに森の中を移動してるのは、ガジェットの集団だった。
屋上で警備をしているシャマルのクラールヴィントが反応した。

シャマル「シャーリー！」

シャマルが叫んだ。

シャーリー「はい！」

管制室にいるロングアーチのメンバーのシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーが返事をした。
管制室でも、ホテルに接近しているガジェットを感知した。

ティアナがシャマルの近くまで駆け上がった。

ティアナ「シャマル先生！私も状況を見たいんです。前線のモニターもらえませんか？」
シャマル「了解。クロスミラージュに直結するわ」

シャマルはモニターを回した。

モニターをもらったティアナは、エリザベスの所に戻った。
だが、エリザベスは、ガジェットがいる方へ向かって走り出した。

エリザベス『ここは任せた！』
ティアナ「ちょっ…エリザベスさん！？」

そう書かれたボートをティアナに見せて、エリザベスはティアナに勝手にホテルの守備を任させた。

エリザベスは森の中に入っていった。
スバル、神楽、月詠、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、ネプテューヌ、ブラン、アイエフ、コンパの１０人が迎撃に向かう。あと勝手に動いてるエリザベスも。

神楽「おおー、でかいアル！めっちゃ倒しがいがアルね」

神楽は傘を構えて大型と対峙する。
そして神楽は素早く突撃して、傘を豪快に振り回しながら小型ガジェットを次々と破壊していく。

神楽「ほわちゃぁあああああああああああああ！！」

隙が出来たと確信し、大きくジャンプする。
そして体を回転させて大型に手刀を炸裂させ、大型ガジェットは押しつぶされて大爆発した。

シグナム「左側は私が何とかする。スバルは右側を」

スバル「はい！」

シグナムとスバルは数多くのガジェット達を左右に分けて倒す事に決めた。

スバル「行くよ、マッハキャリバー！！」

スバルは、凄まじい勢いでガジェット達に向かって飛び出した。
技を炸裂させ、一気に４体以上のガジェットを破壊した。続けて周りにいるガジェットを次々と破壊していく。

シグナム「レヴァンティン！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シュランゲフォルム』となった。
スバルに続くかのように、スバルの反対側にいるガジェット達を連結刃で攻撃した。
連結刃は蛇のように動き、次々とガジェット達を斬る。

ヴィータ「行くぞアイゼン！」

空中にいるヴィータは、八個の鉄球を出した。

ヴィータ「まとめて、ぶち抜けェエエ！！」

グラーフアイゼンを振り、八個の鉄球を打ち放った。
全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。

ザフィーラの前にもガジェットが居て、光線を放つが、ザフィーラは防御フィールドで防ぐ。

ザフィーラ「ここは通さん！！」

ザフィーラの声の後に、地面から光の柱が現れ、ガジェット達を貫いた。
エリザベスは偶然にも月詠と合流して、２人でガジェットの撃墜をしていた。

エリザベス『チェストーーーーーー！！』

そう書かれた鉢巻を頭にかけているエリザベスは、刀を上段に振り、豪快にガジェット達を次々と一刀両断する。遠距離で攻めてくるガジェット達には口からキャノン砲を出して攻撃し、ガジェット達を吹飛ばす。

月詠「動きが鈍すぎじゃ！」

月詠は大量のクナイを一斉に放ち、１０体以上のガジェット達を串刺しにし、ガジェット達は大爆発する。

ネプテューヌ「ザコはいくら来ても無駄だよ」

銃を取り出したネプテューヌは次々とガジェットを撃ち抜く。
ちなみに、ネプテューヌ達の持つ銃を質量兵器かとなのは等は思って没収したが弾はなく、魔力で撃つという説明で納得したらしい。

ブラン「消えて」

ハンマーを振り回してガジェットを次々と破壊するブラン。

ブラン「ぶっ飛びやがれ！！」

と言って、大型ガジェットをハンマーで飛ばし、ボウリングのピンのように途中にある木々とガジェットを弾き飛ばす。

別の場所では、アイエフが舞い踊るようにガジェットを破壊し、コンパが注射器をマシンガンのように撃ち続けてガジェットを破壊するが、

ネプテューヌ「わわわわわわわわわわわっ！！」
ブラン「あぶね！どこ狙ってやがる！！」
神楽「ぎぃやあああああああああ！！！」

またもや味方を狙ってしまった。

コンパ「ご、ごめんなさ～～～～い！！！」

ティアナは、モニターで戦いの様子を見ている。

ティアナ「これで、能力リミッター付き……神楽さん、エリザベスさん、月詠さん、ネプテューヌ、ブランも、まだまだ本気じゃない……」

ティアナは自然と強く拳を握った。
焦りと苛立ちが生まれる。

中にいる銀時はトイレにいた。用を足し終えて、手を洗っている。
ガジェットが来たみてーだが…あいつら大丈夫か？
なんやかんやで、スバル達の心配をしてる銀時。

銀時「まぁ神楽、エリザベス。月詠の3人がいれば、大丈夫だろ。
それにあいつも・・・」

手を拭いて、トイレから出ようとした。
その時、トイレに入ってきた人と肩がぶつかった。

銀時「おっと悪ぃ」
？？？「いえ、こちらこそ…」

二人は互いに顔を見た。
すると銀時にぶつかった男は目を見開いた。

？？？「ぎ…銀さん！？」

男は銀時の名を叫んだ。

銀時「…どこかで会ったか？」

銀時は首を傾げた。

ユーノ「僕ですよ！ユーノ！ユーノ・スクライアです！」

自分を指差しながら、男は名乗った。
名前を聞いて銀時は思い出した。

銀時「ユーノ!?えっ?マジでユーノ!?」

思い出した銀時は驚いた。

ユーノは長い髪を後ろに束ねていて、少し面影が残っている。

銀時「マジでビックリしたぜ。え?お前、今何やってんの?」

ユーノ「今は考古学者で、無限書庫の司書長をしてます」

銀時「お前も偉くなったな」

１０年でみんな見間違える程に変わったな。変わってねーのは俺だけか。

何か先を越されたと言うか、置いてかれたみたいで、銀時は軽く落ち込んだ。

そして、この再会が新たな反乱の開幕である事を知らずにいた。

桂とはやては会場内でのデート・・・もとい監視をし続けてる頃、

ノワール「・・・派手にやってるみたいね」

ノワールが外を見ながら言う。

ベール「・・・・・・何か気になることが?」

ベールがきくとノワールが答えた。

ノワール「・・・ティアナのことよ」

ホテル・アグスタの外

キャロ「召喚・来ます！」

キャロが敵召喚師の召喚を察知して紫色の四角い魔法陣が４つ現れ中から1型9と3型一つが出て来る

ティアナ「迎撃いくわよ！」

エリオ「はい！」

ティアナの言葉にエリオ達が応えた。

ティアナは、ガジェット達にクロスミラージュを向ける。

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいつだってやってきた。

バン！　バン！

魔力弾を撃つがＡＭＦのせいで当たりが浅い。更に撃つが有人操作に成ったらしく私の攻撃は避けられてしまう。

ティアナ「ちっ！」

ガジェットがミサイルを撃つと、ティアナは冷静に全て撃ち落とす。

キャロ「ティアナさん！」

キャロが叫ぶ。
すると、ガジェット1型が光線を私に撃って来て、ティアナはジャンプして回避する木を盾にしてガジェットの様子を見る。

シャマル（防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！）

シャマルが念話で、スバル達に伝えた。
ティアナの表情が険しくなる。

ティアナ「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全部倒します！」
シャマル（ちょっと…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！）
ティアナ「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから！」

そう言いながら、クロスミラージュを構える。
ティアナは、エリオに顔を向けた。

ティアナ「エリオ、ガジェット達の注意を引き付けて！その隙に私が一気に破壊する！」
エリオ「は、はい！」

言われた通り、エリオは素早い動きでガジェット達の注意を引き付ける。
その隙にティアナは、カートリッジを四発もロードした。
証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくたって…どんなに危険な戦いだって。
ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。

ティアナ「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

クロスミラージュを構える。

ティアナ「クロスファイヤー――」

エリオは、ガジェット達の攻撃を避け続ける。

ティアナ「シュート！！」

オレンジ色の魔力弾が、一斉にガジェット達に迫る。
次々とガジェット達に魔力弾が当たり、倒していく。
だが、魔力弾が一発反れて、エリオに迫る。

キャロ「エリオ君！！」

キャロが叫びながら走り出す。

エリオ「えっ！？」

エリオが振り返るが、今からでは避けられない。
魔力弾がエリオに当たるかと思われた時、白い影が魔力弾を防いだ。

エリオ「え！？」

エリオは自分を守った白い影を見た。
赤い目に肩まである水色の髪（長いものだと腰あたり）と水着のような白いボディースーツ、手には変わった斧が握られていたが、シグナムと戦ったパープルハートのような雰囲気があった。

？？？「・・・ぎりぎりだったな」

と、白い少女が斧を肩に乗せて言う。

エリオ「あ、あの・・・あなたは？」

ホワイトハート「・・・私はホワイトハート・・・よくネプテューヌと一緒にいた白い子は覚えてる？」

少女・ホワイトハートがエリオにこう聞く。

エリオ「え？、ネプテューヌさんと一緒にいた・・・・・・・・・・・って、まさかブランさん！！？」

エリオが驚いて聞くと、ホワイトハートがコクっとうなずいた。

するとヴィータがやって来て、ティアナに怒鳴る

ヴィータ「ティアナ！この馬鹿！！無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！」

怒鳴られたティアナは、魔法陣を展開させたまま唖然としてる。

ヴィータ「なんで私が来るまで待てず、あんな無茶な事をしやがった！！」

ヴィータはティアナの無謀な攻めに怒っていた。

下手をすればエリオが撃たれていたかも知れないからだ。

エリオ「違うんです！ヴィータ副隊長！今のは・・・・」

ヴィータ「うるせェ、馬鹿ども!!」

エリオが言い訳をするが、ヴィータが怒鳴った。

ヴィータ「もういい…後はアタシがやる!三人まとめてすっこんでろ!!」

怒鳴られた3人は、唖然とした。

ヴィータ「・・・・・・わりぃな。エリオを助けてくれて」

ヴィータはホワイトハートに感謝する。

ホワイトハート「・・・別にいい」

気にしてない、と付け加えて言う

ホワイトハート「そんなことより・・・・・・敵をほっといていいの?」

ヴィータ「!っと、ヤベェ!!急ぐぞ!」

ヴィータは先に飛んで行き、ホワイトハートは後をついていった。

ホテル内。

銀時とユーノは、トイレから出た後も話をしていた。

銀時「そういや、お前まだフェレットになれんの?」

ユーノ「はい。なれますけど？」

ユーノは首を傾げながら答えた。

銀時「フェレット姿で、まだ女湯覗いてたりすんのか？」

ニヤニヤ笑いながら、銀時は聞いた。

ユーノ「だから！それは誤解ですってば！」

ユーノが必死に弁解する。

？？？「司書長」

ユーノ「ん？っと時間か。じゃあ銀さんまた今度」

銀時「おお」

男に呼ばれ、ユーノは仕事に戻り、銀時は手を振る。

ホテル・アグスタ・会場

司会者『レディース・アーンド・ジェントルマ～ン、お待たせしましたみなさん。これよりオークションを開催いたします。』

司会者の言葉に、出席者は拍手する。

ノワール「・・・なんとまぁすごいこと」

ノワールはこんなことを言う。

司会者『そんなわけで、骨董品を紹介してくれるのは考古学者且つ無限書庫の司書長・ユーノ・スクライアさんで～す』

ユーノが現れると同時に、観客が盛大な拍手を送る。

なのは「あれ？ユーノくん」

なのはが声を上げる。

ベール「たしか、あなたの幼馴染でしたわよね？」

なのは「ハイ」

ベールの問いになのはは答える。

司会者『それでは、最初の品はこちらです！』

そう言ってステージに現れたのは、黒くてひし形の宝石だった。

すると、ノワールとベールが顔を険しくする。

ノワール「（なにあれ・・・いやな予感がするわ。・・・ベール！）」

ベール「（わかりましたわ）・・・すいません。ちょっとお手洗いを」

はやて「ん？なんや、はよ済ませとき」

ノワール「ごめんね」

とはやて等にいって、２人は会場を出る。

桂（2人があの宝石を見た瞬間、険しい顔をしたが、あれはいったい？）

桂も黒い宝石を見て、表情を険しくする。

司会者が説明を終えて、オークションがはじまろうとしたその時、

ガタガタガタガタガタガタガタガタ！

黒い宝石の入ったケースがガタガタ揺れ始めた。

司会者『な、なんだ！？』

司会者も観客も驚いていると、

ガシャン！

ケースが壊れた。・・・にもかかわらず、宝石が宙に浮いている。

そう、浮いているのだ。

桂（何！？浮いているだと！）

桂を含め、なのは達も驚く。すると、

ビシャーーーーン！

宝石から雷が発生した。

それだけでなく、雷から人の形をしたモンスターが現れた。

赤い四つの目に青いメタルなボディー、両腕と背中に金色の大きな

爪のある・ヘカントケイルが現れた。

ヘカントケイル「？、？？」

しかし、ヘカントケイルはここはどこだと言わんばかりにきょろきょろ見回している。

桂（馬鹿な！宝石から化け物が現れるだと？）

現れたヘカントケイルに驚く桂たち。
すると、ヘカントケイルがユーノのところへ歩み寄った。

ヘカントケイル「・・・・・・・・・・」
フェイト「大変！ユーノが危ない！」

フェイトがそういうが、間に合わない。
ヘカントケイルが爪を振り上げたその時、

？？？「待ちなさい！」
ヘカントケイル「！！」

声が聞こえ、ヘカントケイルは振り向く。

そこにいたのは、

ブラックハート「あなたに好き勝手させないわ」

黒のボディースーツと銀色になびく髪と緑色の瞳の少女・ブラックハートと、

グリーンハート「覚悟はよろしくて？」

ポニーテールにした緑の髪と、胸と下半身しか布面積がない女性・グリーンハートが現れた。

なのは「なにあれ！？」

なのはは現れた2人に驚く。

フェイト「・・・あれ？・・・気のせいかな、変身後のネプテューヌと似てるような・・・」

フェイトの言葉に、なのはとはやてがああ～、という顔になる。

はやて「ってゆうかな・・・あれ、目のやり場に困るんちゃうん？」

はやてはグリーンハートに注目する。

なんせ彼女は七割がた肌を露出しているため、ほとんどの男が顔を赤くしている（桂は除く）。

ヘカントケイル「・・・・・・・・・」

ヘカントケイルは、右腕の爪でブラックハートを狙うが、

ブラックハート「遅いわよ」

ゴスッ！

ヘカントケイル「！！？」

ヘカントケイルは蹴りをくらい、ひるむ。
しかし、負けじと今度はグリーンハートを狙う。しかし、

グリーンハート「遅いですわ」

と言って、右腕に装備している槍でヘカントケイルをきる。

ヘカントケイル「・・・・・・・・・・・・」

ヘカントケイルはやけくそになって、2人を狙うも、

ブラックハート「消えなさい」
グリーンハート「さようなら」

返り討ちにされ、ヘカントケイルは倒れた。

まわりから歓声が上がる。しかし、あの黒い宝石がなくなっている。

桂（・・・なんなんだ?あの宝石は）

桂は険しい顔で、黒い宝石のことを考えていた。

ガジェットをすべて破壊した外では、
人気のない所で、ティアナは1人落ち込んでいた。
証明出来なかったからである。
あの時、ホワイトハートがいなければエリオに直撃していたのであり、何も出来ず、結局自分は何も残せてないのだ。

ティアナ「ううううっ！　私・・・は」

ティアナの眼から、涙が大量に出る。

ティアナ「うあぁぁぁぁぁぁぁ！」

堪らなく悔しかった。
自分のミスショットが許せなかった。
何度も悔やみ、何度も泣き叫び、ティアナはそのくり返しをする事しか出来なかった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。始まりましたこのコーナー。この小説の気になるところを答えていく『教えて！銀八先生』のじかんで～す」

ネプテューヌ「先生！さっそく来た質問を答えましょうよ」

銀八「わかった。・・・って一つだけかよ。まぁいいや。ペンネー

ム『あああ』さんからの質問。『銀さんとネプテューヌ勢で誰が一番強いですか？
僕的には銀さんがいちばんであってほしいです。』、だそうだ。どうなんだ？」

真王「それは私が答えましょう。銀時とネプテューヌ達の強さを式で表すなら、

銀時＝ネプテューヌ＝ノワール＝ブラン＝ベール＞（コンパ＝アイエフ）

といった感じです。銀時とネプテューヌのガチバトルならほぼ互角ですが、変身状態のネプテューヌだったら、銀時は少し苦戦するようです。」

銀八「というわけで、『あああ』さん廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「ひとつだけだとさびしいね」

銀八「そうだな。そんなわけで、この質問コーナーはここで終了しますが、質問がある人はジャンジャン来てくださ～い。あと黒神さんのとこに人気投票があるらしいのでこっちも人気投票を応募しときま～す。」

第九訓：どんなところでもトラブルはつきもの（後書き）

真王「と、言うわけでコメントと人気投票を応募しておきます。投票するさいは一言コメントに書き、そのキャラに対する感想を書いてください。あ、投票は一人五票です。さて次回は、ホテル・アグスタから帰還した銀時達。しかしティアナの様子が変だが・・・」

パープルハート「次回『過去には意外すぎる思い出がある』テイクオフ」

～応募～

銀八先生の質問と、人気投票をお願いします。

第十訓：過去には意外すぎる思い出がある（前書き）

真王「アクセス確認したらもう１００００ＰＶを突破してました。」

銀時「マジでか！」

神楽「おお！すごいネ！」

桂「なんと・・・ここまで人気があるとは」

真王「私もうれしいです。では、『リリカル銀魂』」

銀時・神楽・桂「始まるぞ（アル）」

第十訓：過去には意外すぎる思い出がある

ガジェットとの激戦を終え、現場では調査班が現場検証をしていた。
フェイト達も現場検証の手伝いをしている。
ティアナは、エリオ達から少し離れた所で、なのはと話をしていた。
ガジェットとの戦いでのミスショットの事で、なのはに少し怒られた。
話が終わり、ティアナはゆっくりとした足取りで、スバルの所へ向かった。
神楽と月詠は事後処理をキャロとエリオとやっている。
キャロは銀時、フェイト、アルフ、ユーノと話しているのを見て神楽に聞く。

キャロ「神楽さん、フェイトさんと話している人って考古学者のユーノ先生ですよね？」
神楽「ん？たしか無限なんたらのリーダーぽくて、なのはちゃん達の幼なじみね。淫獣だからキャロは近づいちゃダメね。エリオもあんな大人になっちゃダメアルよ」
エリオ「はい？」
キャロ「わ・・・分かりました」
フリード「きゅくー！」

エリオ、キャロ、フリードは神楽の説明に納得して返事をする

月詠「ちょっと待て！今の説明はなんじゃ！？特に最後！！」

月詠が呆れてツッコミをすると、神楽は呆れたような表情でユーノの事を言い出す。

神楽「ユーノは以前、子供の時になのは達の裸をフェレットの姿で見た野蛮な男だったね！自覚はないとは言え、女の敵アル」

神楽はそう言いだす。

以前、海鳴温泉でフェレット姿でなのはと一緒に女湯を入った事がある。

それがきっかけで、フェレット姿の話をされるといつもそのネタでからかわれてしまう事が多いのである。

そして銀時とフェイトに呼ばれて、神楽達は向こうに行く。

なのはがティアナとの話しを終え、銀時達に駆けつけ、銀時、フェイト、アルフは、ユーノの護衛をなのはに変えてこの場を去る。

銀時「ユーノも大人になったし・・・そろそろなのはに告白すんじゃねェ？」

銀時はニヤニヤと笑いながら面白そうに言い出すが、フェイトは苦笑して銀時に話し出す。

フェイト「そんなことをすれば・・・ユーノは心を痛むかもね」

苦笑してフェイトはそう言うと、その意味を理解した銀時は、「あ！」っと叫んで思い出した。

なのはは銀時に好意を持っていてユーノには友達としか見ていないことに。

神楽、月詠、アルフ、エリオ、キャロは銀時の叫びに驚きだす。

銀時「ヤベーよ、そんな事になっちまったら俺、ユーノに殺されそうだよ！？どうしよう！！」

ガクガクと震える銀時。

ネプテューヌ「新八君の一件もあるしね♪」

それを見て、面白そうな顔をするネプテューヌ。

すると、フェイトは銀時の片腕を両腕で掴む。

フェイト「大丈夫だよ。何かが会った時には私が銀時を守るから♪／／／」

顔を真っ赤に染めて銀時にそう言うフェイト。

腕にフェイトの胸の谷間が少し挟んでいる事で、銀時は物凄く動揺している。

2人の光景に神楽とアルフとネプテューヌは不機嫌そうな顔をして、月詠は興味深そうに二人を見て、エリオとキャロにいたっては顔を真っ赤に染めている。

ノワール（・・・今のモンスター・・・あれはヘカントケイルだったわ。なぜあのモンスターが・・・それとあの宝石は・・・）

ノワールは黒い宝石のことを考えていたが、答えは導けなかった。

なのははユーノと久しぶりに話す。

やっぱり友達と話すのは楽しいようであった。

そしてユーノが真剣な表情をする。

ユーノ「なのは、君に言いたい伝えたい事があるんだ！」
なのは「ふぇ！？なっ何をですか？」

なのははユーノの真剣な表情に驚くと、ユーノは顔を真っ赤にしてなのはに伝える。
１０年間のなのはに対する思いを今こそ彼女に伝える為に。

ユーノ「なのは！僕は君が好きだ！／／／」
なのは「・・・・・・ふえーー！？」

突如の告白になのはは驚くと、ユーノはさらに言い出す。

ユーノ「僕と付き合ってください！／／／」

恋人として付き合う事をなのはに伝える。
全て言い切ったから彼は、なのはの返事を待つが・・・

なのは「・・・・・・ユーノ君・・・告白はうれしいんだけど・・・ごめんなさい！／／／」

ガーン！！

その返事を却下するなのはにユーノは振られてしまったことに絶望する。

なのは「実は私、１０年前から銀さんの事が気になってて、今は銀さんの事が好きになちゃったみたいなの／／／」
ユーノ「ええー！？」

なのはの告白に驚きを隠せなかったユーノは驚きを隠せなかった。
なのはが銀時の事を思っていたなんて知らなかった。

ユーノ「ぎ・・・銀さんだって！？だって、銀さんにはフェイトにアルフ、それにシグナムだって・・・」
なのは「分かっているよ！・・・でも・・・あの『闇の書・ゾーマ事件』以来、銀さんの事が気になって気持ちがもやもやしていたんだ／／／」

気持ちを抑えられないなのはは銀時の事が好きであった事を知り、以前に告白したのである。

なのは「だから・・・ユーノ君、ごめんなさい！！」

もう一度頭を下げて誤るなのはに、ユーノは・・・

ユーノ「い・・・いや、そのう・・・大丈夫だよ！自分の気持ちを伝えられたからそれで十分だよ」

苦笑しながらもユーノはなのはにそう言った。
どんなに足掻いても振られた事には変わりはないのである。

ユーノ「じゃ・・・じゃあ、僕はそろそろ行くね」

ユーノ君は建物に向かうと・・・

なのは「ユーノ君！」

なのはが呼ぶと振り向き私は笑顔で言う

なのは「私達はこれからもずっと友達だから！だから、ユーノ君も頑張ってね！」

ユーノも笑顔でなのはに手を振り建物の中に入った。

その後、なのはに振られた事に強いショックを受けてかなり落ち込んでしまった事には言うまでもない。

ブラン「・・・・・・・・・見なかったことにしておくか・・・」

なのはとユーノのやり取りを見てしまったブランがいた事も言うまでもない。

ホテルアグスタから帰って来たところだ

なのは「じゃあ今日はもう解散」

フェイト「しっかり休んで今日の疲れを取ってね」

F『『はい！』』

なのは達は隊舎にフォワード達は宿舎に戻って行く。

スバル「銀時さん、ちょっと言いかな？」

スバルが話したい事があると言いスバルの部屋に向かう銀時。
桂、神楽、新八、エリザベス、月詠、リィンフォースも銀時について行く事になった。

ノワール「あれは・・・？」

ノワールは、スバルたちの方へと見つめていた。

そこは、スバルとティアナが寝泊りする部屋。
全員椅子に座り、スバルはティアナの事を話し出す。

スバル「実は、ティアの事で話があって呼んだんだ。」
桂「ティアナ殿の事か？教導の時も時々だが、ティアナ殿は無茶する事が多い・・・力を求めるのは珍しくはないが……ティアナ殿のは度が過ぎてる事が多い」
月詠「一体ティアナに何があったと言うんじゃ？」

桂と月詠はティアナの無茶な行動に、もう言われずにはおれなかった。
銀時、神楽、新八、エリザベスも、同じ気持ちである。
リィンフォースも同じく気になっていた。
スバルは顔を暗くしてある局員のプロフィールを出す。

出たのはティアナの兄、ティーダ・ランスター。

首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師だったが、ティアナが１０歳の時に殉職している。享年２１。
スバルは彼の経歴を話し、彼が違法魔導師に手傷を負わせけど逃が

してそして殉職した事を話し顔を更に辛そうにする。

スバル「その時ね、心無い上司が死んでも捕まえるべきだった・・最後に役たたずで無意味って言ったんだ」

そう言うと銀時、桂、月詠、リインフォースは無言に黙りこむ。

神楽「酷いアル！命をかけてまで真剣に戦った部下に対する台詞じゃないね！」

エリザベス『全くだ！』

新八「そうですよ！お兄さんの頑張りを無意味だなんて！！」

神楽とエリザベスと新八は怒りを表している。

スバル「その時ティアはまだ１０歳、沢山傷付いて、沢山悲しんだ・・・」

話しは終わり銀時達もそれぞれの場所へ行く。

話を聞いた銀時はスバルを連れてティアナの所に向かうと、

ノワール「・・・・・・・・・・・・・」

ノワールがいた。

それだけでなく、ネプテューヌ達もいた。

銀時「・・・・・・まさと思うがお前ら・・・」

銀時がきくと、ノワール達がうなずく。

銀時「・・・行くぞ」

といって、銀時とスバルとノワールたちは、ティアナのところへ向かった。

ティアナは一人訓練をやっていた。
すでに4時間もやっていた。
ティアナは訓練を続けていた。辺りはすっかり暗くなり、夜空には綺麗な星が輝いている。
途中でティアナは息が荒くなり、地面に膝をついた。
汗を拭いて呼吸を整え、立ち上がった時、

銀時「いや～、精が出んなぁ」

のんびりとした声が聞こえた。
後ろを見ると、そこにはニヤニヤと笑っている銀時とスバル、それとノワール達がいた。

ティアナ「銀時さん！スバル！それにノワールさん！」

ティアナは驚いた。

ティアナ「い…いつから見てたんですか？」
ネプテューヌ「ついさっき」
銀時「それより、ここら辺で終わりにすりゃどうだ？」

私の事を心配して？

ティアナは少し戸惑った。

ティアナ「だ、大丈夫です。まだもう少し続けます！」

慌てて銀時とスバルとネプテューヌ達から顔をそらす。

銀時「ヅラ達から聞いたぜ。俺がいねぇ間に、なんかいろいろ大変だったそうじゃねぇか」

ティアナ「……」

ティアナは、少し顔を俯いた。

ノワール「ミスショットがそんなにショックなの？」

ノワールが尋ねた。

ティアナは黙ったまま答えない。銀時とスバルとネプテューヌ達に背を向けて、クロスミラージュを構えて訓練を再開する。

ノワール「朝晩の訓練を見てて思ったんだけど、ティアナは無理してるんじゃない？」

訓練してるティアナを見つめながら、ノワールは言った。

ティアナは動きを止めた。

ティアナ「訓練の様子…見てたんですか？」

少し驚いた感じでティアナは尋ねた。

ノワール「たまにだけど」

ノワールは答えた。

銀時「お前の無茶な特訓はヅラ達も知ってやがるぜ。無茶してまで強くなりたいんかよ？」

ティアナ「…詰め込んで練習しないと上手くなんないんです。凡人なもので」

そう答えて、ティアナは訓練を再開した。

銀時「俺から見りゃ、魔法が使えるってだけで凄ェと思うがよォ」

少し羨ましそうに銀時は言った。

もし、銀時が魔法を使えればかめはめ波を撃てると考えている。

ティアナは再び動きを止めた。

ティアナ「ただ魔法が使えるだけじゃ…ダメなのよ……」

背を向けたまま、ティアナは言った。

ティアナ「私には……スバル達みたいな才能もないし…キャロみたいなレアスキルもない…」

スバル「ティア・・・・・」

クロスミラージュを握る手に力が入る。

銀時は黙って、ティアナの話を聞いてる。

ティアナ「だから私は…少しぐらい無理をしないと、強くなれないんです！！」

ティアナの大きな声が庭に響いた。

ティアナの様子を見て、銀時はため息をついた。

銀時「お前の兄貴の事は、スバルから聞いたぜ？」

ティアナ「！？」

兄の事を口に出す銀時に、ティアナは後ろを振り向く。

何故、兄の事を銀時が話し出すのかを聞こうとする前に、銀時は話し出す。

銀時「災難だったな。残酷な上官に無能扱いされた上に亡くなっちまったなんざ、二重の悲しみを背負ってしまったもんじゃねぇか」

ティアナ「・・・何が・・・言いたいんですか？」

深刻な顔でティアナは銀時を睨みつける。

銀時「まぁ、他人の事は言えた義理じゃねぇが・・・俺もお前と一緒で家族がいねぇんだよ」

ティアナ「え？」

睨みつける事を辞めて、ティアナは驚きだす。

スバルもネプテューヌ達も銀時に家族がいないことを始めて知った。

銀時は少し自分の過去を話し出す。

銀時「俺がまだガキの頃、戦争が繰り返され、両親は死んじまった。親の顔はろくに覚えていねぇで、どう生きれば良いのか分からなくてよォ・・・んで、命を落とした者の所有物をはぎ取りながら生活するしかなかった訳だ」

初めて聞かされる銀時の過去にスバルとティアナとネプテューヌ達は黙って聞くしかなかった。

小さい頃でも、銀時は屍を食う鬼として恐れられており、生きていく為にはこれ以外の方法しかなかった。

銀時「まぁ、それでもお前さんの兄貴にゃあ関係ねぇ事だが・・・俺が言える事はただ一つ。・・・お前の兄貴、ティーダは望んでんのはお前が強くなる事や立派な魔導士なる事じゃねぇ」

ティアナ「それは、どういう事ですか！？」

兄・ティーダが望んでいるのが妹であるティアナが強くなる事と立派な魔導士になることでもない事にティアナは銀時にそれがどういう意味かを聞きだすと、銀時ははっきりと言いだす。

銀時「てめェ自身の幸せだ」

ティアナ「！？」

銀時がそう言うとティアナは何かを打ち遂げたかのような感じで深刻な顔を消す。

銀時「無茶して苦しんでまで強くなるなんざ、兄は求めているのか？いくらお前が強くったって、兄は戻っては来れねぇんだぜ？」

ティアナ「でも・・・私は！」

銀時「分かってりゃ！兄の魔法の強さを証明してぇんだろ？」

ティアナの言いたい事を銀時は理解している。

銀時「確かにお前の兄貴の上司は無能であると言っちまっが、現にここにいるスバルやお前の上司であるフェイト達はそう思っていんのか？」

ティアナ「！？」

銀時の言葉にティアナはスバルを見る。
スバル自身はティアナの兄が無能であるとは一度も思ってはいなかった。

銀時「確かにお前には家族はいねぇ・・・けど現に家族の絆と同じぐらいの固い絆で結ばれている仲間がいるだろ?」

銀時はそう言いながらスバルの頭に手を載せると、スバルは少し顔を真っ赤に染める。

銀時「俺が言いてぇ事わかるか?」

銀時はティアナに尋ねた。
ティアナは黙って考えた。
少し考えて、ティアナは銀時に顔を向けた。

ティアナ「…自分を心配してくれてる人がいるって事ですか?」
銀時「その通り」

今度はティアナの頭を撫でると、ティアナは恥ずかしがる。

銀時「人間ってのは脆い生き物なもんだ、誰かに支えられてやらねぇと行けねェもんだ……それがマヨラーでも」

銀時のそのマヨラーの事は、真選組の『鬼の副長』である土方十四郎の事であった。
銀時の話を聞いて、ティアナは考えた。
私が傷つけば、心配したり悲しむ人がいる。なのはさんやスバル、他にも沢山の人が。

ティアナ「……」

私は悔しかった。兄さんが教えてくれた魔法は役立たずじゃない。
それを証明したくて。兄さんの執務官になる夢を叶えたかった。
でも、銀時さんの話を聞いて、スバルや皆に心配させてまで、仲間を危険な目に遭わせてまでする事じゃない気がする。

ティアナ「あの…銀時さん……」
銀時「あァ？」
ティアナ「ごめんなさい！私…自分勝手で…銀時さんやスバル、みんなに心配ばかりかけて……」

目を固く閉じて、大きな声で銀時に謝った。
銀時さんの言葉で気がついたのだ。
私は一人じゃない。私の事を想ってくれる人達がいる。

銀時「どうやら分かったようだな……それによぉ、現にお前の事を心配してくれてる仲間は、目の前にいるぜ？」

銀時がそう言うと、スバルの方を向く。

スバル「ティア」

スバルは優しい声でティアナの名を呼ぶ。
そしてティアナはゆっくりとスバルに近づいてきて抱きつく。

ティアナ「スバル・・・ご免・・・心配かけて本当にご免ね」

ティアナは、涙を流しながらスバルに謝罪する。
そしてスバルはそんなティアナを優しく撫でて励ます。

コンパ「うぅ～～～～～・・・・」
アイエフ「あらら・・・コンパ泣いちゃってるよ」

銀時の過去を聞いて泣いているコンパを、アイエフが慰める。

ノワール「・・・まぁ、私たちのと比べたらこっちのほうがましかもね・・・」

ノワールがこんなことをつぶやいた。

銀時「アぁん?何の話だ?」
ノワール「・・・昔の話よ」

そう答えるが、表情が少し暗い。

ネプテューヌ「銀さん」
銀時「ん?」
ネプテューヌ「・・・特別に私たちの過去を教えてあげてもいいよ」

ネプテューヌの言葉に、銀時は片眉を上げた。

アイエフ「・・・いいの?ネプ子」

アイエフが心配そうに言う。

ネプテューヌ「私はいいよ・・・みんなもいいよね」
ノワール「ええ・・・」
ブラン「・・・・・・（コクっ）」
ベール「いいですわ」

三人は肯定する。

ネプテューヌ「・・・イースンも」

ネプテューヌは、木の陰に隠れているイストワールに言う。
イストワールがゆっくりと現れて、

イストワール「・・・それではみなさん・・・彼女達の過去をお話しします。」

イストワールは過去を話した。守護女神(ハード)戦争のこと。４人が殺し合いをしていたこと。ネプテューヌが記憶喪失になったこと。すべての元凶“マジェコンヌ”が仕組んだことなどすべて話した。

銀時「・・・そうか」

過去を聞いた銀時が感想をだす。
スバルとティアナはショックを受けている。
まさか仲のいい４人が殺し合いをするなんて思いもよらなかったのだ。

ネプテューヌ「どう・・・かな・・・銀さん」

ネプテューヌは暗い顔をしながらも銀時に聞く。

銀時「だからどうしたんだ？」

ネプテューヌ達「え!?」

銀時の発言に驚くネプテューヌ達。

銀時「守護女神戦争(ハード)だかなんだか知らねえが、お前らはお前らで生きていけばいいんじゃねぇのか?」

あとな、と銀時は続ける。

銀時「俺から言えることはな・・・どんなことがあっても自分の魂を失うなってことさ」

といって、ネプテューヌの頭をなでる。

ネプテューヌ「あっ／／／／／」

頭をなでられたネプテューヌは顔を赤くする。

ネプテューヌ（銀さんの手・・・暖かい／／／／）

その後ろでは、ノワールは羨ましそうに、ブランは物欲しそうに、ベールはあらあらと笑いながら2人を見ていた。

コンパ「わぁ～。銀さん大胆です～」

アイエフ「・・・あの様子だと惚れたんじゃないかしら。ネプ子」

コンパは顔を赤くし、アイエフはやれやれとした顔になる。

すると、ティアナは銀時を見て顔を赤くして何かもじもじすると、ある事を言い出す。

ティアナ「あの・・・銀さん・・・もし宜しければ・・・兄さんって呼んでいいですか？」
銀時「・・・・・・は？」
スバル「へ？」
ネプテューヌ達「え？」

銀時とスバルとネプテューヌ達は豆鉄砲食らったような表情をする。
そして銀時は頭を右手でごしごしとこすって・・・・・・

銀時「まぁ、別に良いけど？」

そう答えるとティアナは嬉しく感じて銀時に抱きつく。
その様子を見てスバルは羨ましそうにティアナを見る。

銀時「んじゃ、一件落着と言う事だし、帰るぞ」
スバル・ティアナ『『はい！』』

2人は力強く返事をする。
寮に帰ろうと9人は歩き出す。
だが、すぐに銀時が足を止める。スバルとティアナとネプテューヌ達は銀時の顔を見る。銀時は驚いた顔で目を見開いていた。
スバルとティアナとネプテューヌ達は銀時の視線の先を見た。

一人の男が銀時達に背を向けて道の先に立っていた。
派手な着物を着て、腰に刀を差している。
口にくわえている煙管を離し、フーッと白い煙を吐いた。夜風に吹かれて、白い煙は消えていった。
そして男は顔を上げた。

？？？「この世界にも随分と、デケー月が出てるな」

夜空に輝く月を見上げて、男が言った。
後ろに誰かいると分かっていながら、不気味な雰囲気すら漂う。

？？？「かぐや姫でも降りてきそうな夜だと思ったが…随分と懐かしい奴が降りてきたな」

男はゆっくりとこちらを振り返った。
振り返った男は左目を包帯で覆い、口にはキセルをくわえている。

銀時「高杉…！？」

銀時が目を見開いて驚く。

高杉「よぉ。久しぶりだな銀時ィ」

口元を歪めて不敵に笑う。
世界を救った英雄、『白夜叉』坂田銀時と、攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、高杉晋助の再会の瞬間であった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。また始まりましたこのコーナー。今回アシスタントをするのは」

ネプテューヌ「は～い。ネプテューヌだよ」

銀八「そんじゃぁいくぞ。ペンネーム『月光閃火』さん。『どうも…月光閃火（げっこうせんか）という。

『作者に質問。ホテル・アグスタに行くのに、何で新八が留守番だったんだ？新八もあれで充分に強いはずだが…。』

輝刃「確かに…新八も武士の端くれだ。銀時達程では無いにしろ、そこら辺の一般ピーポーな魔導師相手にも充分にイケると見たからな。」』だそうだ。新八曰く、なのはちゃんに頼まれたらしいぞ」

ネプテューヌ「そうなんだ。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次の質問は、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『マリオ「ってか…ちゃんと話してるのか？」

唐突だね；

マリオ「だってよ…ちゃんと話してなきゃあ今回の様な事が起きたんだよ…ヴィータも怒ってないで何でこんな事したのかを聞けば良いのに…もうちょいフレンドリィに行けよな（ため息）」

ルイージ「それにしても…前回現れたのってネプテューヌさんの所のモンスター？」

スネーク「2人の様子から見るにそうじゃないか？」

フォックス「だが…仮にそうだとしても…なぜ彼女達の世界のがあるんだ？」

マリオ「そこが疑問だな…真王に質問『銀時やネプテューヌ達を含めて現代の機動六課を強さの順位で表すならどんな感じになる？』」

ルイージ「僕も質問…『銀さんはネプテューヌさん達を最初に見た印象はどんな感じですか？』」

『だって。作者さん、どうなの？」

真王「これは難しいですけどこんな感じかな？

一位：銀時、ネプテューヌ

二位：ノワール、ブラン、ベール、神楽、桂、スバル

三位：なのは、フェイト、はやて、シグナム、アイエフ、コンパ、エリザベス、月詠

四位：ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャロ、リインフォース、ザフィーラ

五位：新八

ランク外：イストワール、リイン、シャマル
です。」

銀八「っておい！なんでランク外まであるんだよ！」

真王「イストワールは非戦闘員、リインはユニゾン担当、シャマルはサポーターだからです。」

銀八「・・・ま、いいや。次の質問は銀時、出番だ。」

銀時は立ち上がる。

銀時「そうだな～。ネプテューヌは生意気なガキンチョだが根はいい奴だったぜ。アイエフは真面目な奴だが新八のようなツッコミの素質がありそうだし、コンパは純粋すぎる女の子って感じだったな。ノワールは一目見た瞬間ツンデレか？って思っちまたし、ブランは静かだけども怒らせてはいけないって思ったし、ベールはみんなの優しいお姉さんって感じだったな。」

銀八「そうかい。そんなわけで、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい。」

ネプテューヌ「次の質問。・・・あっ！この人いろいろとお世話になってる『黒神』さんだ。え～っと『皆さんに質問。

僕の小説『攘夷戦争鎮魂歌』では貴方は魔導士として目覚めました。そのバリアジャケットが『ブレイブルー』の主人公、ラグ●の衣装と一緒ですので、みんなから見てどう思いますか？
軽い感想でも構いません』」

全員が立ち上がり、
全員「かっこいいからいいんじゃない？」
と、答えた。

ネプテューヌ「ありがとう『黒神』さん。廊下に立ってね」

銀八「はい。今回はここまで。次回もジャンジャン来てくれよ。以上！」

第十訓：過去には意外すぎる思い出がある（後書き）

真王「次回は高杉の登場！そして、ネプテューヌと因縁があるあいつも・・・」

ブラン「次回『ライバルの因縁は切っても切れない』テイクオフ・・・」

～予告～

ナレーション「ネプテューヌが何かに襲われるようです」

第十一訓：ライバルの因縁は切っても切れない（前書き）

真王「アクセス調べたらなんとＰＶが１５０００アクセス、ユニークが１５００人突破しました」

全員「な、なんだってーーーーーーーー！！！！」

銀時「マジかよ！！どんだけ人気あんだよ『リリカル銀魂』は！！」

ネプテューヌ「読者のみなさん、ありがとうございました！」

真王「それでは『リリカル銀魂』始まるよ」

第十一訓：ライバルの因縁は切っても切れない

ティアナの過去の苦しみを解放した銀時とスバルは寮に戻ろうとするが，そこに銀時は思わぬ人物と再会する。
攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、武装集団『鬼兵隊（きへいたい）』のリーダー、高杉晋助。
かつて銀時と桂と共に攘夷戦争で天人と戦った仲間だが、憎しみで変わり果ててしまった今、銀時と桂の因縁の相手である。

スバル『ティア・・・この人』
ティアナ『分かっている。・・・この男・・・ヤバイ！とてつもなく危険な存在だわ！』

スバルとティアナも念話で話をする。
この男……危険な感じがする。
二人は、そう直感した。

ネプテューヌ（なんだろ・・・この人）
ノワール（・・・危険な予感しかしないわ）
ブラン（何？・・・あいつ）
ベール（この方は・・・一体？）
アイエフ（なんか・・・やばくない？）
コンパ（こ、怖いです）

ネプテューヌ達は、高杉を警戒している。
アバババンと言う奇妙な異種生命体を見てきた。
だが目の前にいる男は、それがちっぽけに思える程の危険な感じを放っていた。

分かっている事はただ1つ。

高杉と呼ばれるその男は銀時の因縁の関係であるようである。

銀時「…何でテメーがこんな所にいやがる？」

銀時が敵意をむき出して高杉に聞く。

これほどまでに敵意をむき出しにした銀時をスバルとティアナは初めて見た。

高杉「おいおい、そんな物騒な怖い顔をするなよ。そこの9人の譲ちゃんが怖がっているぜ？」

？？？「譲ちゃんじゃない」

高杉後ろから、声が聞こえた。

声を聞いた高杉は、笑いを止める。

この声は……！

高杉は後ろから1人の人の気配を感じた。

鬱陶しい黒い長髪に着物姿。右手に刀を握っていて高杉に向ける。

桂「桂だ」

高杉を見据えながら、桂小太郎が名乗った。

スバル・ティアナ『『桂さん！！？』』

桂の登場にスバルとティアナが桂の名を呼ぶ。

高杉「ククク……ヅラも随分と久し振りだな」

高杉の声を聞き、桂は高杉に睨みつける。

桂「やはり、貴様もこの世界に来ていたか…何で貴様がここにいる！」

桂も銀時と同じく敵意をむき出して高杉に聞く。

高杉「何…数カ月前、攘夷浪士の間で妙な噂が流れてな。その噂が”桂小太郎がアニメの世界に行った”っていう事でよ。いてもたってもいられなくなって来ちまったよ」

スバル・ティアナ「！！」

ネプテューヌ達「？」

スバルとティアナが驚く。

自分達の世界がアニメの世界であると言う事に。

ネプテューヌ達はチンプンカンプンだが。

高杉は煙管を加える。

高杉「俺達はその噂の真相を調べた。そしてあの、源外ってじーさんに辿り着いた。あのじーさんが作った装置で、別の世界に行くとは……ククク。お前等相変わらず馬鹿やってるなァ」

可笑しそうに高杉は笑った。

高杉「だが、この世界に来た俺も馬鹿かもな」

高杉が笑い出す。

高杉「おい、そこの紫の譲ちゃん」

高杉がネプテューヌを指名する。

高杉「お前に会いたいって奴がいるぜぇ」

そう言って、高杉の横からフードをかぶっている人物が現れる。

？？？「・・・久しぶりだな」

声からすると女性のようだが、イストワールはわなわな震えている。

イストワール「ま・・・まさか、あなたは・・・」

ネプテューヌ達「？？」

ネプテューヌ達はわけがわからないらしいが、イストワールはフードの人物がわかるようだ。

？？？「ほう？・・・さすがに何年も一緒にいたお前なら分かるらしいな」

ネプテューヌ「イースン！あの人のことわかるの！？」

ネプテューヌは言うが、イストワールは答えない。

？？？「覚えてないなら教えてやろう」

と言って、フードつきの服を脱ぎ捨てた。

ノワール達「なっ！！！」

ノワール達はその人物を見て驚いた。肌は青白く、派手な魔女の服を着て、帽子には茨が飾り付けられていた。

ネプテューヌはその人物を見て、

ネプテューヌ「お、お前は・・・・・・・・・」

驚きながら、

ネプテューヌ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・誰？」

爆弾発言を投下した。

ガシャーーーーン!!ガラガラガラ!!ドド～～～～ン!!

ネプテューヌの爆弾発言に、銀時達はおろか高杉や謎の人物までもがずっこけ、まわりの建物もろとも崩れ落ちました。（爆笑）

（ギャグ補正だから元に戻るが）

銀時「おいーーーー

マジェコンヌ「私の名はマジェコンヌ。わけあってこの男とともにしている」

マジェコンヌはフン、鼻を鳴らす。

ノワール「・・・ありえないわ。あなたはたしか「死んだはず、か？」・・・」

マジェコンヌ「そう、確かに私はあの時死んだ・・・だが、こいつのおかげで復活したのさ」

そう言って、取り出したのは黒い宝石だった。

桂「っ！それはオークションの！」

ノワール「なんなのよそれは！」

桂が驚き、ノワールがマジェコンヌの持つ宝石を指す。

ティアナ「ま、まさか・・・それはロストロギア！？」

マジェコンヌ「そう、これは”ダークソウル”と呼ばれるものでな。闇を力に変えるというものだ」

マジェコンヌが説明する。

イストワール「・・・まさか、あのビルのアバババンは」

マジェコンヌ「そのとおり。こいつがモンスターを召喚したのさ」

マジェコンヌは自慢げに笑う。

ネプテューヌ「・・・よくわかんないけど、そのダークソウルを壊せばいいんじゃない？」

ネプテューヌがこんなことを言い出す。

スバル「ちょっと、ネプテューヌちゃん！」

スバルが止めようとするが、高杉が突然言い出す。

高杉「クックック・・・言い忘れてたが、銀時とヅラに再会したい男を連れてきたぜ？」

桂「俺と銀時に？」

高杉の言葉に意味不明さを感じる桂だが、突如後ろからとてつもない殺気を感じて後ろを振り向くと、思わず刀を振り出すが、相手の攻撃とぶつかってしまうのである。

？？？「おやおや、以前は上手く行ったと言うのに、今度はそうは行かなかったようだな」

男の顔を見て、銀時と桂は驚きを隠せなかった。

右手には鍔のない刀を持っていて、左手にはその鞘を持っている。

さらにグラサンをかけていて、眼は盲目のようである。

その男は死んだと思われたが、現に桂の目の前にいた。

桂「ば・・・馬鹿な！お前は・・・」

銀時「人斬り・・・似蔵！」

その男は『人斬り似蔵』こと　岡田似蔵（おかだにぞう）であった。

『鬼兵隊』の一員であり、以前は『紅桜』の暴走で銀時と対決した

が、あえなく敗北。
その後は行方不明とされており，死んだかどうか分からない。

そんな男が何故ここにいるのか知らないが、桂は似蔵の刀を防いでバックすると、銀時に駆けつける。

仁蔵「随分と久し振りだねぇ。『白夜叉』坂田銀時に『狂乱の貴公子』桂小太郎。一度に会いたい人物と一気に会えるなんて嬉しくて笑いだすねぇ」

ふふふっと笑い出す似蔵に、スバルとティアナも似蔵から危険性を感じた。

スバル「銀さん、桂さん！あの男を知っているのですか！？」

スバルは似蔵の事を聞き出す。

桂「奴は・・・岡田似蔵！『人斬り似蔵』と恐れられた『鬼兵隊』の一員。以前，『紅桜』を使って俺や銀時に襲ってきたが、『鬼兵隊』との戦いで行方不明になったはずだが・・・まさか生きていたとは」

厄介な人物が生きていた事に驚く桂。

ブラン「・・・・・その右手は何？」
仁蔵「こいつが気になるかい？」

ブランは仁蔵の右腕に違和感があるのを感じ、仁蔵はその右腕を見せる。

銀時「!!そいつは!」
桂「ばかな!妖刀『紅桜』だと!!」

ピンク色に光り、機械でできているのにまるで生きているような刀・紅桜があった。

そして高杉は、以前に紅桜の工場を破壊されたことを桂に話し出す。

高杉「ヅラ，以前にお前が紅桜の工場に大量の爆弾を仕掛けて破壊したことを覚えているだろ?実はな，お前がしくじってくれたお陰で、一本だけだが残ったんだよ」
桂「ぐ!」

まさか全て破壊し切れなかったことに悔やむ桂。

高杉「しかもな、本物をベースに，『鬼兵隊』と剣煉の部下達に『紅桜』を大量に作らせたわけだ」
アイエフ「・・・その一本は量産型ってこと?」
高杉「察しがいいじゃねぇか」

全ての元凶は高杉にあった。
銀時は今でも木刀を抜き出すような怒気を放っている。

銀時「まさかアニメの世界で、テメェと会うことになるとはなァ」
桂「貴様の野望も、ここで沈ませてもらう!」

銀時と桂は高杉にそう言うが、高杉はククククっと笑いだす。

高杉「銀時、ヅラ、お前等本当にこの世界の事を誤解してるな」
桂「誤解だと?」

桂が目を細めた。

高杉「この世界は、アニメの世界なんかじゃねェ」

高杉が衝撃の一言を言った。
銀時、桂、スバル、ティアナの４人は、驚愕な表情を浮かべた。
ネプテューヌ達は首をかしげているが。

高杉「考えてみろ。どうして三次元の世界で生きてる俺達が、二次元の世界に行ける？」
銀時「何って、源外のジーさんの装置で…」
高杉「そこだよ」

高杉が銀時の声を遮った。

高杉「そもそもじーさんが作った装置は、二次元の世界に行く為の装置じゃねェ。あくまで別の場所へ移動する装置だ。二次元の…架空の世界に行くなんざ不可能だ。ならこの世界は何なのか？答は簡単だ。ここは架空の世界なんかじゃなく、実在する本物の世界なんだよ」

高杉の言う事に間違いはない。
確かに源外が作った装置は、二次元へ移動する為の装置ではない。
高杉は説明を続ける。

高杉「いわゆる『並行世界』ってヤツだ。様々な可能性の世界。この世界も、その無数の可能性の中の一つ。装置が『リリカルなのは』のＤＶＤの内容を読み取り、俺達は『リリカルなのは』と酷似したこの世界へ移動した。こういう事だ」

説明を終えて、高杉は煙管を離して煙を吐いた。
銀時達は、動揺を隠せなかった。今まで、フェイト達は架空の存在で、この世界も架空の世界だと思っていた。だが真実は違った。
フェイト達もこの世界も、実在する一つの世界。
ここにいるスバルもティアナも実際に存在するのである。

高杉「それにしても、異次元の世界でも銀時とヅラも有名人になったらしいじゃねぇか」

再び口に煙管をくわえる。

高杉「まぁ攘夷戦争で『白夜叉』と恐れられた銀時なら、ゾーマって言う化け物に勝つのも当たり前なわけだな」
スバル「攘夷戦争？」

高杉の言葉にスバルがひっかかる。
先ほどの桂から『攘夷戦争』の事は聞いたが、銀時が『白夜叉』と呼ばれてたのはずっと前であった事は知らなかった。

ティアナ「『白夜叉』って、兄さんがゾーマを倒すほどの強さを持ったから、そのあだ名がつけられたんじゃないの！？」

ティアナが高杉に話しかけると高杉は煙管を口から放して煙を吐く。

高杉「おいおい，譲ちゃん達は銀時の『白夜叉』の異名をそんなちっぽけなモンだと思ってたのか？」
ティアナ「ちっぽけ？」

銀時がゾーマを倒した事で『白夜叉』と呼んだ事がちっぽけである

事を高杉が言い出す。

高杉「その様子だと、話してねェようだな銀時？」

銀時はなにも返さない。

高杉「『攘夷戦争』の事は銀時かヅラに聞いた事があるだろ？宇宙から来た天人との戦において鬼神の如き働きをやってのけ、敵はおろか味方からも恐れられた伝説の武神。それが『白夜叉』と呼ばれた男，坂田銀時だ」

スバルとティアナ、そしてノワール達が驚いた顔で銀時を見る。自分達の知っている「白夜叉」とは全く違う本当の「白夜叉」の意味を始めて知った。

ネプテューヌ「ふ～ん。そうなんだ？」

だが、ネプテューヌだけは違った。

高杉「・・・そりゃどういうことだ？」

高杉が目を細めて言う。

ネプテューヌ「だってそうじゃん。ここにいるのはミッドチルダの英雄の銀さんでも『白夜叉』の銀さんでもない唯の」

仁蔵「それ以上は黙っててもらいますかねぇ？」

仁蔵がネプテューヌに向かって切り落とそうとする。

バギャン！！

刀が壊れた音が聞こえた。壊れたのは・・・紅桜だった。

仁蔵「ば・・・馬鹿な・・・・・・紅桜を・・・一瞬で・・・」

パープルハート「・・・唯の私達の仲間の坂田銀時よ」

ネプテューヌ・・・否、パープルハートは紅桜を一撃でたたき割った。

仁蔵は倒れた。

高杉「・・・『模造品』とはいえ、一撃で壊すなんてやるじゃねぇの」

無表情で言ってるが、本心は驚いている。

マジェコンヌ「・・・だからなめてかかるなと言っただろう」

マジェコンヌはため息を突く。

パープルハート「・・・あなた達を好き勝手にさせるわけにはいかないわ」

刀を高杉とマジェコンヌに向けて言う。

マジェコンヌ「だったらどうするのだ？」

パープルハート「こうするのよ！」

マジェコンヌのところまで瞬間移動して、手に持つダークソウルをはじく。

マジェコンヌ「何!?」

マジェコンヌは驚く。ダークソウルは宙を舞う。

銀時「よし!いいぞネプテューヌ!」

パープルハートは後退し、ダークソウルをキャッチする。

ドクンッ!!

全員「!!!!?」

どこからか、心臓の鼓動音が聞こえた。

すると、ダークソウルから黒い光と触手が現れた。

パープルハート「な、何?」

パープルハートが驚いていると、ダークソウルから黒い腕が現れ、

パープルハート「グアッ!」

パープルハートを鷲掴みにした。

ノワール「ネプテューヌ!!」

ノワールが叫ぶ。

銀時「おいおいおいおい！どうなってんだよあれ！！」

銀時もわけがわからないらしい。
高杉もマジェコンヌも驚いている。
すると、ダークソウルを中心に黒い靄のようなものが上半身の人の形になり、パープルハートを持ち上げる。

パープルハート「グ・・・グゥ・・・」

ギリギリと締め付けられて、身動きが取れないパープルハート。

？？？「ーーーーーー！！！！！ーーーーーーーーーーー！！！！！！」

赤い目を光らせ、裂けた口から奇声を上げる。
まるで真っ黒な人影が意思を持っているようである。

桂「いかん！ネプテューヌ殿を助けるのだ！！」
？？？「ならば僕に任せろ」

ズバンっ！

？？？「ーーーーーーーーーーーー！！！！！！？？？」

突然神速のごとくの斬撃で、謎の影の腕が切れ、謎の影は地面にうずもれる。
パープルハートを助けた人は、黒い髪の毛を後ろに束ね、左目に眼帯を付けている。

銀時「九兵衛！？」

銀時が思わず大声を出してその名を言い出す。
桂、スバル、ティアナも九兵衛の存在に驚きだしている。

パープルハート「ケホッケホッ・・・・・どなたか知らないけどありがとう」
九兵衛「お礼は後だ・・・気をつけろ!!」

九兵衛はうずもれた影に警戒する。

???「ーーー

影は腕を振り上げ、パープルハート達に攻撃するが、かわされる。

守護女神（ハード）たち「ハァァァァァァァァ！！！！！」

パープルハートとブラックハートは剣を、ホワイトハートは斧を、グリーンハートは槍で影を攻撃する。

？？？「ーーー！！！！！・・・・・・・・・」

４人の守護女神の攻撃を受けた影は消滅し、ダークソウルだけになった。

しかし、いつの間にか高杉とマジェコンヌ、仁蔵までもがいなくなった。

銀時「あいつらどこに行きやがった！」

桂「落ちつけ銀時。深追いするな」

桂は銀時を制した。

すると、ダークソウルが宙に浮き始めた。

【ダークスター（マリオ＆ルイージＲＰＧ３より）の移動音をイメージしてください】

銀時「なんだ？何やる気なんだ？」

銀時達は警戒する。すると、

シュン！

ダークソウルが消えた。

銀時「・・・何だったんださっきのは？」
桂「分らん」

桂はそう言って、九兵衛に近づいて話しかける。

桂「にしても九兵衛殿。お主までこの世界に来ていたとは」
九兵衛「桂小太郎か…その様子だとこの世界の事を知っているようだな。宜しければ詳しく教えてくれないか？」
桂「・・・・・・・・・・・・」

桂は少し沈黙に黙ったが，九兵衛に全てを話すことにした。
この世界は『リリカルなのは』の世界であり、しかも１０年後である事に。
しかもアニメの世界と言う架空の世界ではなく、実際にある本物の世界であった事を。

さすがの九兵衛も驚きを隠せなかったのか信じられない表情をする。

九兵衛「つまり、この世界は実際に存在する世界であり、しかも僕達だけじゃなくなのはの世界とは全く違う世界であると？」
桂「信じられないようだが、実際は現実どおりだ」

桂が嘘を言っていないと確信して九兵衛は信じる事にした。

桂「それよりも、どうしてお主がこの世界に？」

不思議そうに桂は言い出す。

九兵衛「実は妙ちゃんに銀時と神楽殿と新八殿が行方不明と訊いて

…源外の転送装置を使いなのは達の世界に行ったと考え、僕は源外の所に行ったんだ。所が装置は何者かに破壊されていて…修理にかなり時間が掛かると言われ、仕方なく一旦道場に戻ろうと思い、その帰り道で変な光に包まれてしまってな。気付い時には既にこの場所に飛ばされていたんだ。」

桂「光にだと!?」

九兵衛が光に包まれてこの世界に飛ばされた事を聞いて驚く桂。

この世界は転送装置がなければこれないのではないかと考える。

桂「とにかく、俺は今回の事と九兵衛殿の事を八神殿に話してくる。九兵衛殿、すまぬが一緒に来てくれぬか?」

九兵衛「承知した。僕自身も話しておかねばならないことが多いからな」

桂と九兵衛はこの場を去る。

2人の後姿をスバルは見終えると、銀時に話しかけた。

スバル「銀さん・・・あの九兵衛さんって、もしかしてあの『闇の書・ゾーマ事件』を銀さん達と一緒に解決したあの柳生九兵衛ですか?」

銀時「んん?・・・ああ、そうだが?」

銀時自身も、九兵衛がこの世界に飛ばされた事に驚く。

パープルハート「銀時」

銀時「んあ?どうしっ!!」

いきなりパープルハートが銀時にキスした。

スバル・ティアナ「あーーーーー！！！」

スバルとティアナはパープルハートを指差して、大声を出す。
ブラックハートは呆れ、ホワイトハートは興味なく、グリーンハートはクスクスと笑っている。

パープルハート「私を撫でたお礼よ。銀時」

と言って、この場を去った。

銀時「・・・なんでこうなるの？」

銀時はそう言うが、誰も答えてくれなかった。

こうして色々と大変な事が起こった一日は終わるのであった。

翌朝

銀時はぐっすりと寝ている。
その笑顔は何やらいい夢を見ているかの様な感じであるが、眼を覚ます時には不幸が起こることになる事を、この時まだ知らない。

なのは「それじゃあ銀さんを起こそうか！」
フェイト「うん！」

なのはとフェイトは友達関係である以上に銀時をめぐる恋のライバ

ル関係でもあるが、２人仲良く銀時を起こす事にした。
そして、銀時のいる部屋に入る。

なのは「銀さん、朝だよ・・・！？」
フェイト「一緒に朝食た・・・・！？」

なのはとフェイトは時が止まりだすかのように凍りつく。２人の眼に映った物は信じられない表情であった。

銀時「んだよぉ？もうちょっと寝かせてく・・・・」

銀時は寝起きは悪いので、すぐに起き上がらないが、

銀時「何か殺気を感じるんだけどぉー！！！」

眠気が一瞬で消え失せた。
部屋の入口の所でなのはとフェイトが無言、無表情でこちらを睨んでいた。

あれは憎しみ、又は視線で人を殺れる。

銀時（何で二人とも怒ってんの！？銀さん何かしたぁー！？）

銀時は２人に何をしたのかを考える中、周りを良く見て見るとある事が分かった。
それは、銀時の隣にスバルとティアナ・さらにはネプテューヌ（現在パープルハート）までもが銀時の隣で寝ている事であった。
実は昨晩、スバルとティアナとネプテューヌは銀時の部屋にこっそりと侵入してベットに潜り込んで来たのである。
３人はまだ寝ている。

それはもう、幸せそうに。

銀時「・・・・・・ふぇっフェイトさん、なのはさん！違うんだよ！これはねぇ、その２人がさぁ！？」

銀時は誤解をされないように２人に説明をする。

なのは・フェイト「・・・・・・・・・」

無言で目が単色で銀時を見つめる二人。
銀時の顔が青ざめており、大量の汗が流れている。

スバル・ティアナ・パープルハート「うーん」

スバルとティアナとパープルハートが起き・・・てなかった。
そして寝転がって銀時に近づき・・・

スバル「銀さん、大好きです。スウ～」
ティアナ「兄さん、大好き。スウ～」
パープルハート「銀・・・時・・・スウ～」

３人は寝言を言ってギュッて銀時を抱き付く。

ブチィィィ！！

なのは・フェイト「銀時（銀さん）の馬鹿ぁーーーーーーーーーーーーーー！！」

２人は『レイジング・ハート』と『バルディッシュ』から極大な桜色の閃光と極大な金色の閃光を銀時に向けて放つ。が、

パープルハート「・・・うるさーーーーーーーーーーい！！！！」

バゴッ！！

なのは・フェイト「ヴェゴォッ！！」

２人の放つ閃光ごと殴り飛ばし、そのまま眠りにつくパープルハート。

ちなみに２人はのびている。

銀時は結果オーライか？、と思った。

なんやかんやで銀時達の元の日常が戻ったのである。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。３回も始まりましたこのコーナー。んじゃ、今回の

アシスタントは、」

コンパ「私、コンパと」

アイエフ「アイエフがアシストするわ」

銀八「それじゃあいくぞ～。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「やはり出て来たか高杉…」

フォックス「そしてネプテューヌと因縁がある奴も出て来たな…」

ルイージ「不安が高まるね…」

スネーク「奴は油断ならない相手だからな…」

ネス「ってか銀さんタイムは凄いよね～」

リュカ「うん…だけどユーノさんはどうなるのやら；」

だよな～；

ソニック「そんな訳で質問『ネプテューヌにリインフォースがユニゾンするって事あるのか？』」

ネス「銀さんに質問『魔法使えるならどんな技を使いたい？ちなみにかめはめ波以外でね』」

マリオ「真王に質問『ティアナ達をどう言う感じに強化するんだ？』」

ちなみに人気投票ですが銀さん、スバル、ネプテューヌ、ティアナ、新八さんの５人に投票します～

マリオ「次回を待ってるぜ！！」『だ。投票ありがとう！まず最初の質問なんだが、可能性あるんじゃないか？」

コンパ「ねぷねぷとリインフォースさんならできるんじゃないでしょうか？」

アイエフ「変身後のネプ子ならもっと強くなれるんじゃない？」

銀八「だよな。じゃあ銀時、２つ目答えろ。」

銀時が立ち上がる。

銀時「かめ〇め波以外か？う～ん・・・あっ！ＢＲＥ〇ＣＨの『月牙〇衝』がいい！」

銀八「はい、ありがと。次は作者」

真王「ティアナ達の強化？秘密です♪でも後に分かるかもしれませんよ？」

銀八「はい、というわけで、『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

アイエフ「次の質問ね。ペンネーム『月光閃火』さん。『よぉ…月光閃火だ。

俺は５票全掛けで新八に投票だ！

輝刃「いいのか？」

ああ…今のアイツ（新八）なら、いい感じに活躍出来ると確信してるからな。それに、アイドルオタクな所を除きゃ結構いい奴だからな…またいい娘が現れるだろ。ま…アイドルオタクだっつー事が含むとアイツの強さは半端ねぇけどな（苦笑）。

輝刃「ハハハ…確かにな。あ…俺から質問だ。」

『高杉に質問だ。アンタは世界をぶっ壊す気でいるが、正直に言おう…アンタこの世界で興味が湧いた食べ物とかあるか？あと、アンタや銀時達の慕う『先生』みたいな人に出逢ったら…どんな反応を示すんだ？あ…ちなみに、後者の質問はアンタの他に銀時と桂…それとまだ出番が無いであろう辰馬にも答えてもらうぞ？』

あ～…確かに、その質問は俺も思ったぜ。特に後者の質問はかなり気になる所だな』・・・新八君が来たわね」

銀八「なんでだよ！！なんであんなオタクが5票なんだよ！！」

コンパ「せ、先生！どうしたんですか！？」

銀八「・・・すまん、なんでもねぇ。最初の質問は高杉に聞いたところ”ねぇよ”だそうだ。２つ目の方はみんな昔のことを思い出してんじゃねぇか？」

コンパ「そうなんですか？あ、『月光閃火』さん。廊下に立ってくださいです」

銀八「次だ。ペンネーム『黒神』さんからの質問。『フェイトへ
なのはが銀時の事を好きになった事についてどう思います？
やっぱ強敵ですか？

スバルとネプテューヌ側へ

僕の小説『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』に
登場するスバルは侍の魂を持つ魔剣士として活躍しています。
彼女の剣の腕を見て、皆さんはどう思いますか？
具体的に聞かせてください。』」

フェイトが立ち上がる。

フェイト「なのはには絶対負けない！／／／／／」

銀八「なんで赤くなってんだ？・・・ま、いいや。次の質問はスバル、ネプテューヌ」

スバルとネプテューヌが立ち上がる。

スバル「これわたしですか！？って思いました」

ネプテューヌ「このスバルちゃんつよいね～。私が変身して勝てる

かな～？」

銀八「はい、てなわけで『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

コンパ「ところで、人気投票はどんな感じでしょうか？」

真王「え～っと、

新八：６票

銀時・スバル・ネプテューヌ・ティアナ：１票

・・・になってる」

銀八「おいいいいいいいいいいいい！！！！！どういうことだよこれ！！！！」

真王「知らん。立ち直った新八がいいらしくってこうなったようだね」

銀八「納得いかねぇよ！！！俺が直接あいつをしｍ「月牙天衝！！！」ギャァァァアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

真王「まったく・・・少しは落ち着けっつーの。と、いうわけでまた次回会いましょう」

アイエフ・コンパ「ハ・・・ハイ・・・・・・（ガクガク（（（（。口。；））））ブルブル）」

第十一訓：ライバルの因縁は切っても切れない（後書き）

真王「新八が６票だなんてな・・・。さて次回は、なのは達が銀時争奪戦開始！？そして銀時はパワーアップする！？」

ベール「次回『男を奪う女は気が荒い』テイクオフですわ」

～予定～

真王「本編終了あたりにモンスター解説図鑑を開きます」

第十二訓：男を奪う女は気が荒い（前書き）

真王「『あああ』さんから銀時に5票出されて、銀時と新八が6票と並びました。」

銀時「・・・なんか納得いかねぇのは気のせいか？」

真王「我慢しろ。『リリカル銀魂』はじまるよ」

第十二訓：男を奪う女は気が荒い

朝からドタバタと騒ぎ出した中、新しく入ってきた九兵衛とユーノとフォワード隊の挨拶は終わり、それが嘘のように銀時達は朝食をしていた。

なのは・フェイト「～♪」

銀時の左右にフェイトとなのはが抱き付いていた。
フェイトならともかく，いつの間にかなのはにもここまで懐かれた事に月詠が意外そうに驚き，銀時に話し出す。

月詠「銀時…主はいつの間にか、なのはにも好意を持たれたんじゃな」
銀時「・・・まぁな」

銀時はげんなりと答えた。
月詠は続いて銀時にフォアード隊の事を聞き出す。

月詠「フォワード達との訓練どうじゃ？」
銀時「良い感じに強くなってるぜ。特にティアナが気持ちに余裕が出来てんのか今フォワードの中で一番伸びてんだとよォ…スバルとのコンビネーションも相性良いみてぇだぜ」

っと銀時は安心したかのように説明すると、

なのは・フェイト「あ～ん♪」

なのはとフェイトが「あ～ん♪」として来た。

銀時はこれ以上刺激したく無いので素直に応じる。

銀時「あ～ん」

フェイトとなのはの差し入れを口にしてゆっくりと噛む。
少し照れくさいなのか顔を少し真っ赤に知る。
実際こう言う事はされた事がないからだ。
フェイトとなのはは凄く幸せそうな顔で笑顔たっぷりである。

後ろのスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースが、何かブツブツと言って黒い憎悪を放っているがそれは気にしなかった。

一方のスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースの５人が、何やらとてつもないどす黒い気を放っている。
神楽と九兵衛と新八はそんな５人に恐怖の余り、青ざめてガタガタ震えている。

神楽（な・・・なんかスバル達が怖いアル！！）
九兵衛（こ・・・これが修羅場って言う物なのか！？この僕が怯えるなんて！！）
新八（なのはちゃぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！にげてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！）

エリオとキャロとフリードも今にも泣き出しそうに恐がっている。
エリザベスとリィンは5人に恐怖して抱き合うかのように体をガタガタ震える。
シャマルとザフィーラも無闇に声をかけたら行けないと恐れている。

スバル「ずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよ・・・・・・」
ティアナ「許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない・・・・・・」
シグナム「いつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬る・・・・・・」
アルフ「卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者・・・・・・」
リインフォース「私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって・・・・・・」

ヴィータ「お前等！いい加減にそのどす黒い気を抑え――」

ギロリ×5

ヴィータが5人に忠告するが，睨みつけるだけで殺せそうな勢いのある5人の殺気に臆したのか青ざめて・・・・・

ヴィータ「・・・いや、なんでもない」

ヴィータも臆してしまい、走ってシャマルに抱きついて涙を流す。
唯、最も憎悪を抱いている人物がいた。

パープルハート「・・・・・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

パープルハートである。手に持つ刀をギリギリと握りしめ、いまにも相手を殺りそうである。

アイエフ（なんか・・・ネプ子がすごく怖いんだけど？）
コンパ（い、いつものねぷねぷじゃないです・・・）
ノワール（あんなに殺意を放つネプテューヌは初めてだわ・・・）
ブラン「・・・・・・・・・・・・（ベールの後ろで震えている）」
ベール（・・・よほど銀時さんが好きなんですわね・・・）

パープルハートの殺意に、５人はビクビク震えている。

一方の桂とはやては一緒に朝食を頂き、銀時争奪戦が大きくなる事に面白がりながら笑っていた。
ユーノはそんな銀時を羨ましそうに睨んでいた。

訓練場では凄い事になっていた。
フェイト、なのは、スバル、ティア、シグナム、アルフの６人の戦争・・・・・もどい模擬戦らしきもので激しい展開になっていた。
なのはの『ディバイン・バスター』を連発、フェイトが『バルディッシュ』を『ライオットザンバー・カラミティ』と言う大剣で接近してきてスバルも『マッハキャリバー』を『ウィングロード』と言う水色の魔法道で対抗し，シグナムとアルフもその２人を一気に倒

すかのように接近し、ティアナはすかさず『クロスファイヤーシュート』を連発。
ちなみにネプテューヌは参加してない。

フェイト「二度と銀時に近づけないようにしてやる！」
なのは「にゃはははは、身の程を知れなの！」
スバル「隊長だからってやって良い事と悪い事がありますよ！」
ティアナ「兄さんを汚すな！」
シグナム「敵は一人残らず斬る！」
アルフ「一気にお邪魔虫を蹴散らしてやる！」

などと銀時をめぐった争奪戦が始まっていた。
それを見た銀時はどうすれば良いのかわかんなかった。
桂は面白がり、月詠にシャマルとザフィーラは呆れている。
神楽，新八，エリザベス，ヴィータ，ウィン，エリオ，キャロ，フリードは6人の異常な暴れっぷりに怖がっている。

ノワール「・・・あんたは参加しないの？」
ネプテューヌ「うん。めんどくさい」

ネプテューヌはそれだけの理由で、参加しなかったようだ。

銀時「何でこうなるの？」

自分がどうすればこうなるのかと唖然して考える。
後ろからはユーノの嫉妬心を篭った眼線が銀時を突く。
そんな中，桂は面白そうに笑い出す。

桂「はっはっはっはっはっは！銀時、お前本当に罪な男になったな？どうせ罪になるなら今こそ攘夷志士になると・・・・」
銀時「お前は黙ってろォォォォ！！」

銀時は額に青筋を浮かべて怒り任せに桂にとび蹴りをする。

桂「ごふぁーー！！」

吹飛ばされて倒れる桂。
そして九兵衛が銀時に話しかける。

九兵衛「安心しろ。君がそのつもりで女を落した事は承知している」
銀時「何？その落すって？何か誤解されそうな言い方しないでくれねェ！？」
九兵衛「だが、そんな君に同じ武士として１つ言っておこう」

何やら真剣な眼差しで銀時を見て何かを伝えようとする九兵衛。
銀時はそれは武士の事で関係しているのではないかと思・・・・・・

九兵衛「女の価値は胸の大きさではない事だー！」

ったが、思いっきり予想外な一言に銀時は思わずずっこける。

銀時「おいー！ちょっとおかしくないィィィィ！？何でお前の口からそんな言葉が出てくるのォ！？何，その武士にメッチャ関係ない台詞！？お前そう言うキャラじゃねぇだろォ！！」

胸の大きさなんてどうでもいいと思われていた九兵衛。

だが実際は気にしていたようである。
あの貧乳ヒロインの1人である妙並の胸の小ささであり、この世界での10年後のなのは、フェイト、はやての成長した巨乳を見て凄く強いコンプレックスを抱く。
そして九兵衛はその一言を言い切った後、

九兵衛「ふ・・・ひぐ・・・だって・・・だってここの世界の女達がずるいんだも～ん」

右眼から大量の涙を滝のように流し、さらには鼻水も少したれている。

新八「おいー！！なんか九兵衛さんのキャラ設定が崩壊しかかっているゥ！！救急車ー、救急車何処ォォ！？」

ガシッ！

九兵衛の後ろから誰かが掴んできた。ブランである。

ブラン「おい・・・ちょっとこっち来い・・・・・・」

と言って、九兵衛はブランにズルズルと引きずられ、建物の裏側へ行くと、

九兵衛「ウギャアアアアアアアアアア！！！！」
ブラン「誰が永久ペッタンコだコラーーーーーーーー！！！！！！」

そんな断末魔と怒気が聞こえた。

月詠「何をやっとるんじゃあやつらは？」
神楽「ツッキー，あんまり気にしないほうが良いね」

煙管を加えて呆れる月詠と呆れる神楽。
そして2人は、先ほどから少し顔を真っ赤に染めて神楽と月詠を見ていたエリオの姿に気づく。

月詠「どうした、エリオ？わっちらの顔に何かついておるのか？」
エリオ「い・・・いえ！そうではありません！ただ・・・／／／」
神楽「ただ？」

もじもじとエリオは両手の指をくっ付けながら神楽と月詠を見る。

エリオ「・・・神楽さんと月詠さんって魔法を使わなくても凄く強いし…それに…神楽さんは時々酷い事を言う事があるけど…本当は優しくて可愛いし…月詠さんは顔に傷があるけど闘う姿は月の様に美しくて…それに普段の姿も綺麗だし、美人だなぁって思っちゃって／／／」

エリオに思わぬことを言われて照れる2人の女性。
実際、以前の銀魂の第二回人気結果でベスト１０以内に入ったのも，女性キャラの中ではこの2人だけであった。
エリオの周りにも美人な女性、可愛い女性など数多く存在するが，神楽と月詠のような見たこと無い容姿と魔法を使わなくても美しい女を見た事が無いからである。

神楽「そ・・・そう言われると照れるね／／／」
月詠「ふふ」

神楽ら顔を赤くし、月詠は少し笑い出してエリオを見る。
顔がトマトのように赤くなるエリオに、キャロはムッと来てエリオの頬っぺたを引張る。

エリオ「あいたたたたたたたたたたたたたたたた！！」

いきなり引張られて驚くエリオはかなり痛がる。
キャロは頬っぺたを掴みながらエリオを引っ張り出して神楽と月詠から離れる。

ひとまず、まだ戦いを続けているフェイト達を放って置いて、今日の訓練は中断し、銀時は部隊長オフィスに呼び出されたのだ。

銀時「何か用か？」

目の前のはやてに尋ねた。

はやて「実は、銀ちゃんの能力アップをしたいと思っとるんや」
銀時「能力アップ？」

はやての言葉に銀時は片眉を上げた。

はやて「昨日、桂さんから似蔵とか言う男が恐ろしく強うなって生き返った訊いてな。もしかしたら、その似蔵はゾーマ並の実力かもしれん」

ゾーマ並みの実力者。
確かに銀時から見ても、昨晩の似蔵のあの強さは尋常ではなく、もしかしたら一対一でゾーマと戦えば勝てるのではないかと考える。
しかもその男に対戦艦用機械機動兵器である『紅桜』を使わせたら間違いなくゾーマ以上の強敵となる。
そうなると今のままでは正直キツい。

はやて「そこで、銀ちゃんの能力アップをやろうと言う事になったんや」
はやてが右手の人差し指を立てながら言った。
銀時「具体的にどうすんだ？」

本当にそんな事が出来るなら、やらない訳にはいかない。

はやて「詳しい事はシャーリーが教えてくれるから、デバイスルームに行ってな」
はやてに言われ、銀時は部隊長オフィスを出て、デバイスルームへ向かった。

廊下を歩き、銀時はデバイスルームの前に着いた。扉を開けて部屋の中に入った。

シャーリー「あっ。銀さん」

部屋の中にシャーリーと、

リインフォース「来ましたか」

リインフォースがいた。

銀時「何でリインフォースもいんだ？」

シャーリー「銀さんの能力アップに、リインフォースさんが必要なんです」

リインフォースの代わりに、シャーリーが答えた。

銀時「どういう事だ？」

自分の能力アップに、何でリインフォースが必要なのかわからない。

シャーリー「リインフォースさんは、『融合型デバイス』なんです」

銀時「『融合型デバイス』？」

シャーリーの言葉に銀時は片眉を上げた。

シャーリー「その名の通り、他者と融合するデバイスです。適合率の高い者と融合する事で、飛躍的に能力を向上させるん事ができるんです」

シャーリーが説明した。

銀時「おいおい！ドラゴン○ールのフュージョンみてーじゃねェか！ヤベッ。テンション上がってきちゃったよ！」

シャーリーの説明を聞いた銀時は興奮した。

シャーリー「ただし、適合率が低いと融合事故が起こる可能性があるので、気をつけてくださいね」

シャーリーは、テンションが上がってる銀時に注意した。

銀時は不安げにシャーリーを見た。

銀時「それって……デブになったり、ガリガリになったりすんのか？」

銀時はゴクリと唾を飲み込んだ。

シャーリー「まぁ外見に変化が現れたり、能力がおかしくなったりいろいろだと思います」

銀時「思いますって…」

急に銀時は不安になった。

だが他に方法がないのなら、ユニゾンとやらをやるしかない。

諦めたように、銀時はため息をついた。

シャーリー「それじゃあ、早速始めましょう。リインフォースさん、お願いします」

リインフォース「はい」

シャーリーに言われ、リインフォースは銀時に近寄った。

リインフォースの胸が銀時に当たる。銀時は少し戸惑った。

リインフォース「では銀時。これからユニゾンをします。ジッとしててください」

そう言って、リインフォースは目を閉じた。

リインフォース「ユニゾン・イン！」

リインフォースが叫んだ直後、二人は白い光に包まれた。
光の強さに、シャーリーは目を閉じた。数秒の輝きの後、光は消えておさまった。
シャーリーはゆっくりと目を開けた。目に入ったのは銀時だった。
リインフォースの姿はない。銀時とユニゾン出来たみたいだ。
シャーリーは銀時を観察した。瞳が蒼くなっている所以外、特に外見に変化は見られない。どうやら一応ユニゾンは成功のようだ。

シャーリー「あの…どうですか銀さん？」

ユニゾンした感じを尋ねてみた。
銀時はシャーリーには答えず、手足を動かして自分の体を見ている。
すると突然、銀時は驚愕の表情をした。

銀時「おおおっ！何だこいつァ！？体の中から力が溢れ出てくるみてェだァアア！！」

両手で拳を握って、銀時は興奮した声を出す。

リインフォース【シャーリー。銀時とのユニゾンに成功しました】

銀時の中にいるリインフォースが、シャーリーに報告した。

シャーリー「よかった」

シャーリーはユニゾン成功に一安心した。
一方、銀時は内側から漲る力にまだ興奮していた。
おいおいおい、マジでか。これヤバイよ。どれぐらいヤバイかって言うと、マジヤバイ。
今ならあの夜王鳳仙と一対一で闘り合っても勝てる気がする。かめ○め波が出せる気がする。
最初はフュージョンの失敗版みたいな、デブやガリガリにならないか不安だったが、そんな不安は完全に消えていた。

シャーリー「リインフォースさんとユニゾンしている状態なら、魔法を使う事も可能だと思います」
銀時「マジでか!?」

シャーリーの言葉に銀時は更に興奮する。
試しに手を前に出して、障壁を張ってみる事にした。フェイト達が出してるような障壁をイメージする。
すると手の前に、銀色の障壁が展開した。

銀時「うぉおおおお!!」

銀時は驚きと興奮の声を上げた。
リインフォース【見事です、銀時】
リインフォースが褒めた。
銀時は障壁を消した。
マジでスゴくね?それじゃあ空とかも飛べんのか。
タイトル『魔法侍リリカル銀ちゃん』に変更するか?
なんて事を考えていると、

リインフォース【ああ……銀時の中……気持ちいい…】

リインフォースが艶かしい声を出した。

銀時「何言ってんのお前？気持ち悪いんだけど…」

銀時は若干引いた。

リインフォース【好きな人と一体化するのが、こんなに気持ちいいとは……】

銀時「え…？」

今のリインフォースの言葉に、銀時は目を細めた。

銀時「お前、今何て言った？」

リインフォース【ですから、好きな人と一体化……あっ！！／／／】

リインフォースは、しまったと言うような声を出した。

銀時「えええええええ！！？」

銀時の叫び声が、デバイスルームに響いた。

銀時「おま…お前まで俺の事……！？えええええ！！」

銀時は動揺がおさまらない。

リインフォースは黙ってしまう。

シャーリー「あの…どうかしたんですか？」

シャーリーが心配そうに尋ねた。

どうやら今の会話は、聞かれてなかったみたいだ。

銀時「いやいやいや！何も問題ねーぞ！うん、問題なし！」

動揺しまくりながら、銀時は答えた。

銀時「そ…それじゃあユニゾン解くか！」

銀時の声に応えるように、体から光が発した。
光はおさまり、銀時の前にリインフォースが現れた。
リインフォースは、顔を真っ赤にして俯いている。

シャーリー「リインフォースさん。大丈夫ですか？」

シャーリーが尋ねた。

銀時「ああ！じゃあ俺が医務室まで連れてくわ！」

そう言って銀時は、リインフォースの腕を掴み、急いでデバイスルームを出た。
シャーリーは不思議そうに首を傾げた。

デバイスルームを出た銀時とリインフォースは、屋上にいた。

銀時「リインフォース。お前さっき言った言葉、マジなの？」

急いで屋上に来たので、銀時は肩で息をしている。
リインフォースの顔は赤いままである。
顔が真っ赤で反応なし。
う～ん。こいつァマジか？
と、銀時は思った。
両者口を閉じたまま沈黙が続いた。
銀時が頭を掻いた時、

リインフォース「…十年前、貴方は私に言いました」

リインフォースが口を開いた。
銀時は頭を掻くのを止め、リインフォースの話を聞いた。

リインフォース「『笑ったお前の顔も見てみてーし』。人にあんな言葉を言われたのは初めてでした」

懐かしむようにリインフォースは語った。

リインフォース「嬉しかった。その時まで、私は道具としてしか扱われなかった」

リインフォースは、胸に手を当てた。

リインフォース「あの時から、私の心の中には銀時がいた。貴方の事を考えると、胸が熱く、苦しくなる」

俯いてた顔を上げる。
赤い瞳が真っ直ぐに銀時を見つめる。
思わず銀時は唾を飲み込んだ。
この緊張感、何度目？

リインフォースがゆっくり歩み出す。そっと銀時に抱き付く。

リインフォース「銀時。貴方が好きです」

リインフォースは頬を赤くして、銀時に告白した。
銀時は、体が固まって動けなくなっていた。
フェイトやシグナム達からも告白されたが、やっぱり慣れない。

リインフォース「銀時」

リインフォースが顔を上げて、銀時を見つめた。

リインフォース「フェイト達には負けません」

銀時を見つめながら、リインフォースはハッキリと言った。

リインフォース「貴方のユニゾンのパートナーとなり、貴方を護ります」

決意と想いを銀時に伝える。
護られてばかりでなく、私も銀時を護りたい。
愛する貴方の力になりたい。

銀時「…リインフォース」

銀時はリインフォースの両肩を掴んだ。
リインフォースの顔が更に赤くなった。

銀時「この先、ゾーマ以上にヤベー敵が現れるかもしれねェ。もしかしたら、俺一人じゃ手に負えねェようなヤベー敵が」

真剣な表情でリインフォースに語る。

銀時「だから、そん時は…俺に力を貸してくれ」

銀時がそう言った瞬間、リインフォースの顔が明るくなった。

リインフォース「はい。喜んで」

頬を赤くし、リインフォースは嬉しそうに頷いた。
銀時は『ユニゾン』という新たな力を手に入れた。
リインフォースの心もゲットした。心の方は、十年前に既にゲットしてるんだけど。

リインフォース「では戻りましょう、銀時」

リインフォースは銀時と腕組をした。

銀時「何で腕組?」

銀時が尋ねるが、リインフォースは気にせず嬉しそうに腕を組んだまま、銀時と屋上を出た。
銀時はため息をついた。まさかリインフォースからも告白されるとは。
フェイト、スバル、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォース。銀時に好意を持った女性は、さらに増えた。ちなみにネプテューヌも。
これからどうするか、銀時は悩んだ。

一方、機動六課・訓練場付近

ネプテューヌ「なのはちゃんたちまだやってるよ～。ハムッ」

ネプテューヌは、アイスを頬張りながら言う。

ノワール「それほど銀時が好きってことよ」

ノワールは、自分の髪をくしでときながら言う。

ブラン「・・・嫉妬と恋愛は紙一重」

本を読みながら、何やら意味深なことを言うブラン。

ちなみに九兵衛は、ブランにぼこぼこにされてボロ雑巾状態である。

ベール「世も末ですわね～」

まるで他人事のように言うベール。

ネプテューヌ「ん？ベール、何持ってんの？」

ベール「これですか？」

ベールは、抱えている箱を見せる。

ベール「このミッドチルダで発売された『ＯＷ（オヴェー）ｅｅ』ですわ」

と、自慢げに言うベール。

『ＯＷｅｅ』とは、銀時の世界の発売中止になったはずのゲームなのだが、なぜかミッドチルダで発売されていたようだ。
ちなみに『ＯＷｅｅ』を見たブランは、複雑な顔をしたらしい。

すると、

アイエフ「っ！危ない！！伏せて！！」

訓練場から流れ弾が飛んできて、サッ、と伏せる。

ネプテューヌ「あいたた・・・みんな大丈・・・・・・」
ノワール「どうしたのネプテュ・・・・・・」
ブラン「一体何・・・・・・」
ベール「どうかなさいまし・・・・・・」

ネプテューヌ達がある場所を見て・・・・・・固まった。
そこにあるのは、流れ弾によって焦げた跡だけでなく、無残な姿になったアイスとくしと本と『ＯＷｅｅ』があった。
ネプテューヌ達は女神モードになり、

パープルハート「・・・・・・・・殺るわよ」
ブラックハート・ホワイトハート・グリーンハート「ええ（おう）」

殺意のオーラを出しながら、なのは達のところへと向かった。
コンパとアイエフは、なのは達に合掌した。

パープルハート「ネプテューンブレイク！！」

なのは達「ワギャアアアアアア！！！！！」

ブラックハート「インフィニットスラッシュ！！」

なのは達「ノバァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

ホワイトハート「ハードブレイク！！」

なのは達「グボァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

グリーンハート「スパイラルブレイク！！」

なのは達「ドワァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

女神たち「くたばりなさい（やがれ）！！！！この大馬鹿共がーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

なのは達「ウギャァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

哀れ、なのは達。

たまたま付近を通りかかった銀時は顔を青ざめ、リインフォースは参加しなくてよかった、と心の中で安心したそうだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。もうすでにレギュラーになって来ましたこのコーナー。じゃあ今回のアシスタントは」

イストワール「こんにちは。私、イストワールがアシストします（＾＾）／」

銀八「よ～しそれじゃ・・・・・・ってまた1つかよ。まぁいいや、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「すげぇ…ネプテューヌの奴、あの高杉を転ばせるとは…；」

フォックス「物凄いシリアスブレイカーだな…；」

ルイージ「と言うか…僕と兄さんにクッパが主役のゲームのＢＧＭが出て来たね；」

スネーク「俺的に最後らへんのパープルハートがなのはとフェイトを攻撃ごと殴り飛ばしたのが印象深かったぞ今回；」

ネス「確かに；」

リュカ「凄いですよね；」

僕からネプテューヌ達に質問『変身してても装着してるの外せれるの？』

マリオ「俺から真王に質問『美味い料理は出るか？』」↑ちなみに内のマリオは××料理を簡単に完食します。

ルイージ「（それって××料理の奴になりそうだな；）…僕から高杉に質問『ネプテューヌさんの発言にこけた際、どう言う心境だった？；』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ネス「そして銀さんのハーレムを楽しみにしてます♪」

リュカ「ネス～；」『ずばり、最初の質問はイストワールさん、答えなさい」

イストワール「可能です。その状態から私服になれますよ」

真王「次の質問ですが、できますよ。そんなマリオさんに、バイオエリンギャーのソテーとモスマンの佃煮、そしてレッドモンスターケーキをプレゼント」

銀八「待て待て待て待て待て！明らかに食べられるもんじゃねぇよ！しかも最後のは完全に料理じゃねぇし！」

真王「モンスターケーキは食べられるモンスターなんだよ。それにレッドモンスターケーキにはハバネロ成分がたっぷり入ってるんだ♪」

銀八「あくどい！あくどすぎるぞ作者！」

真王「いいからいいから。シャマルの猛毒料理（バイオマター）でも平気なら激辛料理（インフェルノマター）だとどんな反応をするのやら♪」

イストワール「・・・・・・最後の質問です。高杉さん曰く、何が何だかわかんねぇ、だそうです」

銀八「『鳴神ソラ』さん！廊下に立たないで激辛物質（インフェルノマター）から逃げてーーーーーーーーーーーー！！！！！」

第十二訓：男を奪う女は気が荒い（後書き）

真王「実は激辛物質（インフェルノマター）はあるプロからつくられてるんですよ。」

イストワール「そうですか・・・次回『女運の悪い奴はろくなことがない』テイクオフ」

第十三訓：女運の悪い奴はろくなことがない（前書き）

真王「次回から我がオリジナル物語がスタートします！それでは『リリカル銀魂』」

？？？「始めるでゲソ！」

真王「コラコラ！あんたの出番はまだ！」

？？？「ちぇっ」

第十三訓：女運の悪い奴はろくなことがない

機動六課の食堂。
引きつった顔で席についてるのは銀時。その銀時の右側にフェイトとなのは、左側にシグナムとアルフ、その前にスバル、ティアナ、リインフォースが座っていた。
七人とも、なんかこう…負のオーラ的なモノを放っていて、近寄り難い雰囲気が出来ている。実際、フェイト達が座ってる席に近寄ろうとする者はいなかった。
そんな負のオーラの中心に座ってる銀時は、冷汗をダラダラ流している。
気のせいか、胃が痛くなってきた気がする。
実は銀時とリィンフォースの事をフェイト達の耳にも入り、こんなことになっていた。
原因は偶然にその様を見ていた桂とはやてがフェイト達にその時の様子を話していた。

腹の辺りを摩りながら、銀時は思った。
周りの人達は、フェイト達が放つ負のオーラに当てられて、食があんまり進んでいない。
そんな中、桂とはやてだけは笑みを浮かべて、楽しそうに様子を見ている。
ヴィータ「はやて、ヅラ・・・アレ、何とかしなくていいのか？」
桂の隣に座ってるヴィータが、フェイト達を指差しながら小さな声で言った。
桂「これも銀時の罪深さが原因だ。ほうっておけ」
はやて「銀ちゃんがあんなに女たらしになるメッチャおもろいからな、そうっとしとき♪」
ヴィータ「お前ら、何か楽しんでいないか！？」

心底今の状況を楽しんでる桂とはやてに、ヴィータは怒鳴った。
エリザベス、シャマル、ザフィーラ、リィンは戦場では感じられない修羅場に恐怖を感じていた。

神楽「銀ちゃん、もしかしたらとんでもない事に巻き込まれているアル」
九兵衛「いや，いや、既になっているぞ」
平然な顔で言う神楽にツッコム九兵衛。
ユーノ「銀さんもなのは達にズタボロにされればいいんだ。」
新八「ユ、ユーノさん・・・」
ボソリとユーノも銀時に負の感情を込めた言葉を言い出す。
エリオとキャロも、銀時の心配をしていた。

エリオ「月詠さん。銀さん達……あのままにして、いいんですか？」
月詠「下手に手を出したら火傷するだけじゃ。放っておけばよい」
月詠は気にせず食事を続けた。

ネプテューヌ「修羅場だね～」
アイエフ「修羅場ね」
コンパ「修羅場です」
ノワール「修羅場よね」
ブラン「修羅場だ」
ベール「修羅場ですわ」
イストワール「・・・あなた方はほかに言うことはないんですか？」
イストワールは頭を抱えた。

フェイト「まさかリインフォースさんまで、銀時が好きだったなんて予想外でした」
フェイトが沈黙を破った。
リインフォース「言っておきますが、銀時は私のモノです。譲る気はありません」
毅然とした態度で、リインフォースは言った。
銀時「いや…俺、お前のモノでも誰のモノでもないから…」
銀時が少し弱々しく言った。やはり、いつもの勢いはない。

シグナム「悪いがリインフォース。私も譲る気はない。銀時とユニゾンが出来るからと言って、調子に乗ってもらっては困る」
銀時の言葉をスルーし、シグナムは目を鋭くして言った。
アルフ「銀時との付き合いは、あたしとフェイトの方が長いんだ！つまり銀時は、あたしのモノだ！！」
大声でアルフが言った。
銀時は顔をしかめた。
コイツら俺の話、聞いちゃいねェ。

フェイト「アルフ。私の事、忘れてるよ？」
ニッコリと、フェイトは黒い笑みを浮かべた。
なのは「悪いけどフェイトちゃん！銀さんは渡さないよ」
なのはは笑いながらそう言いだすと、眼だけは笑っていなかった。

ティアナ「なのはさんだって、兄さんに手は出させないよ！」
ティアナも上司関係なくなのはにつっかかる。
スバル「そうだよ！銀さんは誰にも渡しませんよ！」
スバルがそう言いだすとティアナはスバルに睨みつける。

ティアナ「スバル！それはつまり私も含まれている訳！？」

スバル「そうだよ！ティアにも渡さないんだから！」
以前，仲が良くなったばかりの2人もここだけは互いに譲れなかった。
互いににらみ合っている2人を見て銀時は2人を止めようとする。

銀時「いや、だから…お前等までそう睨み合わなく…」
シグナム「銀時は私の男だ！誰にも渡さんぞ！」
銀時の言葉を遮って、シグナムが六人に言った。
七人の口論はヒートアップし、ギャーギャー騒ぎ始めた。
銀時はため息をついた。
何で俺の周りにいる女は、みんな人の話を聞かないんだ？
俺、何か悪い事したか？

ネプテューヌ「銀さんって女運ないの？」
ネプテューヌ組「なさそうね（だな）（です）（ですわ）」
遠くでこんな会話が聞こえた。俺泣いていい？
銀時「あ…あの～、なんか俺邪魔みたいだから～、向こう行ってようか…？」
ゆっくりと席を立ちながら、恐る恐る七人に聞いてみた。
すると、

フェイト「逃げないで銀時！」
なのは「銀さんがいないとダメなの！」
スバル「銀さんの事で話しているんですよ！」
ティアナ「兄さんもちゃんといて！」
シグナム「お前もここにいろ！」
アルフ「あたしを置いて行かないで！」
リインフォース「銀時と合体したい！」

七人は銀時に向かって叫び、無理矢理イスに座らせた。

歴戦の侍『白夜叉』も、七人の修羅には勝てなかった。
再び七人の白熱した口論が始まる。
諦めた銀時は、黙って見守る事にした。
ふと桂とはやての方を見る。銀時の困ってる様子を笑いを堪えながら楽しそうに見てる。
あのバカップル共。いつかヤキ入れてやる。
2人を睨みながら、銀時はそう思った。

フェイト「銀時は私のだよ！」
なのは「私のだよ！」
スバル「私のです！」
ティアナ「私の兄さんだよ！」
シグナム「いや、私の男だ！」
アルフ「あたしのだ！」
リインフォース「私のモノです！」
七人の口論は続く。
なかなか終わらない口論に終止符を打つため、フェイトが勝負に出た。

フェイト「私は小さい頃に、銀時に裸を見られた事があるんだよ！」
フェイトが爆弾発言した直後、周りのみんなが口から飲み物やら食べ物を噴いた。
銀時「おいィイイイ！！何言っちゃってんのお前！？」
慌てて銀時は叫んだ。

エリオ「は…裸を……！？」
キャロ「小さい頃の・・・フェイトさんの・・・・・・！？」
エリオとキャロは顔を赤くした。
神楽と九兵衛も顔を真っ赤に染めている。
しかもシグナムは火に油を

シグナム「甘いな、テスタロッサ。お前も見ていただろ？銀時は私の胸の谷間に顔を埋め、しかも手で胸を揉んだ」
少し誇らしげにシグナムは語った。
銀時「お前も何言っちゃってんのォオオオ！！？」
テーブルを叩きながら銀時が叫んだ。
リインフォース「む…胸を揉んだ…！！？」
リインフォースの顔が赤くなっていく。

ヴィータ「シグナム、何で他人の前でそれ軽々しくいえるんだ！？／／／」
あり得ないとヴィータは大きく怒鳴りだす。
月詠「わっち以外にもそんなことをしたのか銀時？」
煙管を加えて呆れる月詠。
実際に月詠も，偶然とは言え銀時に胸を2回も揉まれたことがある。
銀時「テメーらァ！何、昔の恥ずかしい出来事語ってんだ！？」
マズイ。
銀時は思った。
このまま二人を放っておいたら、大変な事になる。
フェイト「私は裸を見られただけじゃなくて、銀時の手料理を食べたり、一緒に寝たりしました！」
トドメとばかりに、フェイトが言い放った。

スバル「て…手料理！？」
ティアナ「い…一緒に寝たァ！？」
スバルとティアナは、ショックを受けて愕然とした。
二人は力無くうなだれた。
銀時は口を大きく開けて固まった。

するとコンパが、
コンパ「え?フェイトさんの料理がまずいから銀さんが料理したんじゃないですか?」
こんなことを言い出した。
フェイト「いや違うからね!!別に料理が下手で銀時に作ってもらったわけじゃないからね!／／／／」
フェイトは誤魔化しているのだろうが、全然誤魔化し切れてません。

アルフ「あたしは混浴で、一緒に温泉に入ったー!」
手を挙げながらアルフが言った。
リインフォース「こ・・・混浴!?」
リィンフォースもショックを受け、テーブルに突っ伏した。

銀時「ちょーっとまってぇーーーーーー!!」
さらに状況が悪化して青ざめていく銀時だが、なのはがこの中でとんでもない事を言い出す。
なのは「みんな小さすぎるよ!」
銀時達はなのはのほうに注目すると、銀時は嫌な予感をしてしまう。
なのは「私なんか銀さんに自分のファーストキスを授けたんだよ!／／／」
今までの衝撃的に誰もが大爆発するかのような衝撃を受け，口に入れていた飲み物と食べ物を噴射するように吐きだす。
ある者は鼻血を出したり、ある者は大ショックを受けたり、ある者は「うそだぁーー!!」っと叫びだす。
ちなみに新八は知ってるため、あまりショックは受けなかったが、ちょっぴりダメージはあるらしい。

銀時「言っちゃったよこの子ぉーーーーーーーーー!!他人の前ではいえない恥ずかしい事を言っちゃったよー!」
フェイト「な・・・なのはの・・・・・・」

スバル・ティアナ・アルフ・リインフォース「ファーストキスぅううう！？」
スバル、ティアナ、アルフ、リィンフォースは驚きだした。
ユーノは衝撃のあまり白目を剥いている。

ネプテューヌ「安くない？それ」
アイエフ「ネプ子。それは言うだけ野暮、てもんよ」
ネプテューヌのつぶやきに、アイエフが止める。

シグナム「己のファーストキスをだと？・・・そんなの１０年前に私もしているぞ！／／／」
突然シグナムの火に油をかけるような発言をしてさらに衝撃的に知る。
ヴィータ「シグナムぅー！お前もやったんかいーーーーー！！／／／」
ヴィータは顔を真っ赤に染めて突っ込みだす。
はやて、シャマル、ザフィーラ、ウィンの４人はシグナムの大胆さに顔を真っ赤に染める。
なのははシグナムに驚きだしているが、フェイトは平然としている。
なぜなら彼女が先に・・・・・・

フェイト「ふふふ・・・まだまだ甘いわね、シグナム」
シグナム「何？」
シグナムはフェイトを睨みつけると、フェイトがここ一番的な衝撃発言を言い出す。
フェイト「私なんかシグナム達が来る前に銀時に授けたんだよ！」
さらに上が行くかのようにフェイトは大胆に言い出す。

シグナム「何だとぉおお！？」
シグナムも驚くかのように驚きだす。それはつまり・・・・・・

フェイト「私は銀時にファーストキスを授けただけじゃなく・・・銀時のファーストキスを頂いたんだよ！／／／」
のはや暴走としかいえない大胆すぎた発言に誰もが（特に男性）が信じられない衝撃が襲いだす。

６人「ぎ・・・・銀時（銀さん）（兄さん）のファーストキスぅーーーーー！？」
なのは、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースの６人は衝撃的に驚きだし・・・・そして。
６人「そ・・・そんなぁあああああああああ！！」
６人はショックを受け、テーブルに突っ伏した。
銀時「だァアアア！！お前大胆すぎるのも，程がありすぎるだろぉ！！」
怒鳴った後、銀時はチラッと周りを見た。
周りのみんなは、軽蔑の眼差しを銀時に向けていた。
小さな女の子の裸を見て、一緒に寝た。しかもシグナムの胸を揉んだり、アルフと一緒に温泉に入ったりした。さらにはフェイト、なのは、シグナムのファーストキスを奪った。みんなの頭の中で、銀時はロリコン、エロオヤジであると認識された。

神楽「銀ちゃん、マジで最悪アル。新八（じみ）よりメッチャ女の敵ね。しばらく私に声をかけるなアル」
新八「・・・なんか神楽ちゃんに突っ込みたいことがあるけど、銀さんがそんな人だなんて思いませんでした」
エリザベス『七股はやばすぎでしょ？』
月詠「銀時・・・いくらなんでもそれはやりすぎじゃろ？」
神楽と新八は軽蔑し，エリザベスと月詠は呆れる。
エリオ、キャロ、リィンは苦笑しながら銀時から下がっていく。

ヴィータ「テメェがそんな男とは思わなかったよ」

シャマル「銀さん・・・シグナムとリィンフォースだけじゃなく他の女にも手を出すなんて・・・」
ザフィーラ「同じ男として恥を感じる」
ヴィータ、シャマル、ザフィーラも銀時を鋭い眼線で見る。

ユーノ「あんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしに・・・・・・（ブツブツ）」
ブツブツと言いながら負の感情をさらに大きくするユーノ。
銀時「ちょ待てよ……その目、やめてくんない？心がスゲー痛むから」
銀時は必死にやめるよう訴えるが、軽蔑の眼差しはなくならない。
本当に俺、何か悪い事した？
ヤベッッ。前が霞んで見えねェ。
銀時は手で涙を拭いた。

その時だった。

ネプテューヌ「ていうかそんな安っぽいキス一つでそんな大げさにすることかな？」
突然ネプテューヌがこんなことを言い出す。
まわりの人だけでなく、銀時と言い争ってたなのは達もネプテューヌ達の方へ向く。
シグナム「・・・それはどういう意味だ」
ネプテューヌ「だってそうじゃん。ファーストキス取っても、裸見られたり胸触られたりしても、料理作ってもらったにしても結局はただの事故且つスキンシップなだけだよ」
ノワール「そうそう。というかしつこくてわがままな女は男の意見なんてこれっぽっちも聞こうとしないのが多いし」
ブラン「単にあなた達は恥ずかしさをアピールしてるだけだし」

ベール「結局のところ、あなた方は銀時さんをあまり見てないだけですわ」

４人はなのはたちに言い放つ。

銀時はうんうんとうなずき、まわりの人はちょっとばかり呆然としている。

しかし、なのは達にとっては火に油を注ぐようなものだ。

７人「うるさい！！万年彼氏いないような貴方達が口出ししないで（するな）！！！」

なのは達は怒鳴るがそれは彼女たちにとって禁句である。

ブチィッ！！

パープルハート「よし！その減らず口ごとタタっ切られたいようね？」

ブラックハート「命乞いするなら今のうちよ？けど答えは聞いてあげないけどね！」

グリーンハート「覚悟はよろしくて？」

ホワイトハート「後悔しても、遅い…」

いつの間にか女神モードになって、武器をなのはたちにあてる。

７人「スイマセンデシタァァァァァァァァ！！！！！（泣）」

４人の殺意に全力で謝ったなのはたち。

前回の『第十二訓：男を奪う女は気が荒い』から彼女達を怒らせたトラウマにより、二度とあんな目に会いたくないということになったそうだ。リインフォースは見ただけでトラウマになった。

そんな彼女たちの殺意に、食堂にいる人たちは顔を真っ青に染まる。

パープルハート「後あなた達に言っとくけど」

そう言うと同時に銀時に抱きつく。
銀時「うお！」
パープルハート「銀時は誰のものでもないわ。銀時は銀時で進むのよ」
と、パープルハートは言う。
銀時「ネプテューヌ・・・」
銀時はちょっと驚く。
ブラックハート「要はあなたがしっかりやれってことよ」
グリーンハート「でも銀時さん、たまには皆さんのために支えてあげてくださいね」
ホワイトハート「・・・・・・（銀時に寄り添う）」
銀時「お前ら…」

４人から励ましを受けた銀時は、不思議と気持ちが楽になり、自然に笑みが出る。
なのは達「ちょっと（まて）！！銀さん（銀時）は私ｎ「ああ？」
ナンデモナイデス、ゴメンナサイ」
なのは達は何か言いかけたが、威圧されて片言になる。

パープルハート「それで銀時、この後どうする？」
パープルハートが銀時を見る。
ブラックハート達もアイエフもコンパもイストワールも、そして新八と神楽、九兵衛、月詠、桂、エリザベス、はやて、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リインフォース、リイン、シグナム、アルフ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、なのは、フェイトが銀時を見る。

そして、銀時はある事を決意した。

銀時「・・・・・・とりあえず、この世界でも万事屋すっか」

今，フェイト達の世界で万事屋が再開される。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い完全にレギュラーになりましたこのコーナー。そしてアシスタントをするのは、」

ノワール「『ラスティション』の女神・ノワールと」

ブラン「『ルウィー』の女神・ブランと」

ベール「『リーンボックス』の女神・ベールがお送りしますわ」

銀八「よし、いくぞ～。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『鳴神ソラ&ルイージ&リュカ「（ガタガタブルブル（。Ａ。；））」

フォックス「こえぇ～～～；」

スネーク「教訓『彼女達（ネプテューヌ）の好きな物には手を出すな』だな；」

ネス「だね；」

マリオ「何が？（しぃ～しぃ～）」↑送られて来た料理を全て完食した所で歯を磨き中

…ホント××料理を平然と食べれるなあんた；

ソニック「それにしても…銀時とユニゾンすると目の色が変わるけどマジでネプテューヌとユニゾンした時はどうなるんだろうな…」

髪の色が変わるんじゃない？

フォックス「ネプテューヌ達に質問『平然と料理を食べた内のリーダーを見てどう思った？』；」

ルイージ「ネプテューヌさん達に質問『それぞれ好きな物ってなんですか？』今回それぞれ出てたけど確認の為にね…」

スネーク「俺からも質問だ『ネプテューヌ達は今持ってる武器以外に他にも何か武器はあるのか？』」

まあ…そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「料理美味かったぞ（≧∀≦）ｂ」『って食いやがったのか！？あの料理を！？」

ノワール「ありえないわ・・・どんな胃袋してんのよ・・・」

ブラン「・・・・・・怪物？」

ベール「いや、その例えはどうかと；」

ネプテューヌ「わたしはあそこまではちょっと・・・；」

銀八「だな；あ、最初の質問は以上のとおりだ。次の質問はこうだ」

ネプテューヌ「食べ物！特にスイーツが好き！！」

ノワール「わたしは・・・・・そうねぇ・・・猫が好きだわ・・・（声優も好きだなんて言えないわ）／／／／／」

ブラン「・・・小説の本」

ベール「もちろんゲームですわ。スーパーファミコンから始まってＷｉｉとＰＳ３などを持ってますわ」

真王「最後の質問ですが、私が答えましょう。彼女達の持ってる武器以外にもネプテューヌには龍刀・桐生、ベールにはグングニル、ノワールにはカリバーン、ブランにはブレイドハンマーという最強武器を持ってます。」

銀八「すげぇな。そんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい。

次はペンネーム『黒神』さんからの質問『狂乱の貴公子　桂小太郎へ
貴方は僕の小説では真戦組よりも重要人物の1人として活躍しています。
真戦組より活躍している気分はどうですか？

ネプテューヌ達へ

『カプコン』に出てくるキャラクターの中で是非とも手合わせしたい人物がいれば、言ってみてください。』」

桂が立ち上がる。

桂「実に最高だ！ふはははははははははは！」

銀八「はいそうですか。次」

ネプテューヌ「私は『ストリートファイター』のベガって人と戦ってみたいな～」

ノワール「私は『デビルメイクライ』のダンテって人と張り合ってみたいわ」

ブラン「・・・『バイオハザード』のネメシスって強いの？」

ベール「私は『ヴァンパイアシリーズ』のデミトリという方に興味がありますわ」

銀八「ってそりゃ最強キャラじゃねぇか!!・・・まあいいや、『黒神』さん、廊下に立ってなさい」

ノワール「次の質問はペンネーム『ああああ』さんからよ。『ネプテューヌ達が滅茶苦茶強いですけど、なのは達はネプテューヌ達と同じ位、強くなれますか？
ここの銀さんもブレイシルバーみたいなデバイスで強くなりますか？』多分そうなるんじゃない？」

真王「２つ目は多分そんな感じで強くなると思います」

銀八「２人揃って多分って・・・まあいいや。『ああああ』さん、廊下に立ってなさい」

ベール「最後ですわ。ペンネーム『ｆｙｆｇｙｆ』さんからの質問『ネプテューヌと夜王、どっちが強いですか？
ネプテューヌでも屁怒絽さんは怖いですか？
銀時に３票。なのはに１票。フェイトに１票』はい。ありがとうございます」

ネプテューヌ「１つ目は強そうだけど負ける気はしないよ！２つ目は・・・屁怒絽さんって誰？」

銀八「あ、ああ・・・屁怒絽さん・・・いや、屁怒絽様はこう言う方だよ」

屁怒絽さんの写真を見せる。

ノワール・ベール・ブランは顔を青くする。

ネプテューヌ「へぇ～。この人が屁怒絽さんなんだ♪」

ネプテューヌは平気らしい。

銀八「・・・え～。ネプテューヌの反応は以上です（ビクビク）。『ｆｙｆｇｙｆ』さん。屁怒絽様に気を付けてください（汗）」

真王「人気投票を発表します。

銀時：９票

新八：６票

スバル・ティアナ・ネプテューヌ・なのは・フェイト：１票

・・・になってます」

ネプテューヌ「ぶ～。原作じゃ主役なのに～」

ネプテューヌはいじける。

真王「さて、『鳴神ソラ』さんのところに『メガハニーケーキ』を密封してプレゼントするか」

銀八「おっ偉くまともなもんを出すな。・・・ってなんで密封するんだ？」

真王「一度開けると何処からともなく蜂が来るだけでなく、スズメバチ系までやってくるんだよ」

銀八「おいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！何つぅ危険なもんを作ってんだ～～～～～～～～～！！！！！！」

ネプテューヌ「でもあの蜂蜜の甘さがおいしかったよね♪ピンクボールちゃんと食べあった頃を思い出すよ」

銀八「食ったんかよ！！！蜂はどうした蜂は！！！」

ネプテューヌ「蜂を気にしてたらケーキが食べられないよ。・・・・・そのおかげで全治一カ月入院したけど」

銀八「やっぱ駄目じゃねぇか！！！」

真王「もうプレゼント行っちゃったよ？」

銀八「『鳴神ソラ』さん！！！にげて～～～～～～～～～！！！！！」

第十三訓：女運の悪い奴はろくなことがない（後書き）

真王「次の章に入る前に番外編が始まります。海からの侵略者が現る！？」

新八「次回『イカの踊り食いはあまり良くない』テイクオフ！」

～予告～

ナレーション「ミッドチルダの海で、イカな少女が目撃されているようです」

番外訓：イカの踊り食いはあまり良くない（前書き）

真王「今回は番外編です。では『リリカル銀魂』スタートです」

番外訓：イカの踊り食いはあまり良くない

機動六課の訓練場付近
そこで1人の少女・ネプテューヌが釣りをしていた。

ネプテューヌ「早くかかんないかな～」
銀時「お～い。なにやってんだ～」
銀時が朝の寝起きのような口調で言う。
新八「あれ？ネプテューヌちゃん。何か釣ってるんですか？」
ネプテューヌ「それがまだなんだよ～。何かかかってくれないかな～」
釣竿を動かして魚を狙うネプテューヌ。すると、

クイクイッ

釣竿に反応があった。
ネプテューヌ「おお！かかった！」
銀時「よし！早く釣りあげろ！」
竿をぐいぐいと引っ張り続け、そして、
ネプテューヌ「・・・捕ったど～～～～！！」
大物を釣り上げた。
銀時「おお！いい獲物が釣り上げ・・・・・・」

？？？「いはははははは！はひふへへほ！（いたたたた！何するでゲソ！）」
イカ（な少女）を釣り上げた。

ドゴっ！

？？？「グフェッ！」
イカ（な少女）は蹴り飛ばされた。
ネプテューヌ「ああっ！せっかく釣り上げた獲物が…」
銀時「ネプテューヌ、お前は何も見てなかった、何も釣り上げなかった。そういうことにしとけ」
新八「いや、銀さん。・・・さっきの女の子、人じゃなかったですか？」
新八がさっき見た者に対しての疑問を言う。

銀時「馬鹿野郎、新八。人が海から来るわけねぇだろ。あれだよ。エイリアンかなんかだよ」
新八「なるほど、そうですか。人が海で居続けられるわけないですもんね」
さっき釣り上げられたものをエイリアンと決めつけ、納得する。
銀時「さ～て。さっさと自分の部屋にもd「ちょっと待つでゲソ！」グオッ！」
後ろからとび蹴りをくらい、倒れる銀時。
銀時を蹴り飛ばした少女は、白い服にイカの頭（多分帽子だろうが）と水色の触手のような髪の毛、手首足首に水色のリングがついていた。

イカ娘「このイカ娘様に対して蹴り飛ばす挙句、無視するとはいい度胸でゲソ！」
銀時を指差して、堂々と語るイカ娘。
銀時「あいててて・・・・・まったく、おめぇのようなガキにつき合うようなことはねぇよ。とっとと家に帰れ」
銀時は言うが、イカ娘は食い下がらない。
イカ娘「うるさいでゲソ！蹴られた借りはそのまま返すでゲソ！」
すると、触手のような髪が伸び、銀時に襲いかかる・・・・・と

思ったら、
新八「たらばっ！！」
なぜか新八を狙った。
銀時「・・・お～い君。なんで新八を狙ったんだ？」
銀時がきくと、イカ娘は答える。
イカ娘「そこにいる男はサンドバックで十分でゲソ」
銀時「ああ、そうか」
新八「あんたらひどくない！！」
サンドバック扱いされた新八が怒鳴る。

ネプテューヌ「・・・ところで、イカ娘ちゃんはどこから来たの？」
イカ娘「それは海から来たんでゲソ」
ネプテューヌが質問して、イカ娘は答えるが、
銀時「はいはい。そういう嘘は親の前でやっとけよ」
銀時は信用してなかった。挙句、
イカ娘「何するでゲソ！放さないカ！」
服をつかまれ、そのまま六課に連れて行かれた。

機動六課・食堂

神楽「・・・で、銀ちゃんはこの迷子を拾ってきたアルか？」
イカ娘「迷子とは失礼でゲソ！」
イカ娘は神楽に喝を入れる。
現在イカ娘は、六課組とネプテューヌ組に質問を受けている。

ベール「つまりあなたは海の世界の住人っというわけですか？」
イカ娘「そうでゲソ」

キャロ「あなたの家はどちらに？」
イカ娘「海そのものが私の家でゲソ！」
桂「イカ娘殿、そばは好きか？」
イカ娘「普通でゲソ」
神楽「酢昆布あげるヨ」
イカ娘「いただくでゲソ」
スバル「イカ娘ちゃんは好物とかある？」
イカ娘「エビが好きでゲソ！」
新八「イカ娘ちゃん、なんで僕を狙ったの？」
イカ娘「サンドバックは黙るでゲソ」
新八「コラアアアァァァ！！！」
などなどの質問が来ました。

銀時「ま、要するにお前は自然を汚した俺達人間を復讐するために、侵略しに来たってか？」
銀時の問いにそうでゲソ、と答える。
イカ娘「それにしてもここは変わった場所でゲソ。私が居候してた『海の家・れもん』とは全然違うでゲソ」
イカ娘は六課をきょろきょろと見回す。
フェイト「イカ娘、多分それはね」
イカ娘「？」

イカ娘「うえええぇぇぇぇ！！！ここは私の住んでた世界じゃないでゲソか？」
イカ娘はかなり驚いている。
イカ娘「あのうっとおしい二人から逃れられるならうれしいでゲソが、何とかならなイカ？！」

と言って、フェイトを揺さぶる。
フェイト「大丈夫！私達管理局がイカ娘のいた世界を見つけて帰してあげるから」
イカ娘「ほんとでゲソか！」
イカ娘は嬉しそうだ。

銀時「安心しろ。フェイト達は約束を守るぜ」
イカ娘「ありがとうでゲソ！」

その後、フェイト達がイカ娘のすんでいる場所を探している間、
ネプテューヌ「イカ娘ちゃん見～っけ！」
イカ娘「み、見つかったでゲソ」
ネプテューヌ「缶ふｎ「させなイカ！」うわ！」
缶けりして遊んでました。・・・つか触手使って倒すな。

かくれんぼ

イカ娘「何処に・・・・・・・・・！、見つけたでゲソ！」

ドゴッ！

銀時「テメッ！触手で木をなぎ倒すな！」

だるまさんが転んだ

イカ娘「だ～る～ま～さ～ん～が～～転んだ！、でゲソ」
ネプテューヌ「おとと；」
銀時「つーか触手でがっちりホールドしてんじゃねーよ！」

レースゲーム

イカ娘「私が一位でゲソ！」
銀時「待ちやがれこのやろ！」
ネプテューヌ「負けないよ～」
イカ娘「わははは、ってトゲゾーが来たでゲソ～！」
ベール「もう一つ来ますですわ」
イカ娘「今度はスターで跳ね飛ばされたでゲソ～！」

スマ○ラ

イカ娘「食らうでゲソ！」
桂「効かぬわ！」
ベール「でしたら、これはどうでしょうか？」
はやて「あかん！、最後の切り札や！」
ベール「遅いですわ」

ドオォォォォォーーーーーーーーーン！！！！！

桂「ば、馬鹿なぁーーーーーーーーー！！！！！」
イカ娘「やられたでゲソーーーーー！！！！」

新八いじめ？

イカ娘「いつもより多くまわってるでゲソ」
新八「あわわわわわわわわわ」
コンパ「あの・・・そろそろ止めてくださいです」
イカ娘「サンドバックはこれで良いんでゲソ」
新八「僕はサンドバックじゃない！」

そして、イカ娘の世界が見つかった。

イカ娘「やっと帰れると思ったんでゲソが・・・・・・さびしいでゲソ・・・」
自分の世界に帰れると言う嬉しさが来るが、たった一日なのに後から別れのことでシュンッとなる。
ネプテューヌ「イカ娘ちゃん・・・」
銀時「・・・そんなにしょげんじゃねーよ」
銀時が言う。
銀時「別れが来たとしても、最後には笑顔でいけばいいじゃねぇか」
イカ娘「銀時・・・」

銀時だけでなく、まわりのみんなも言う。
ネプテューヌ「そうだよ！イカ娘ちゃんはよく遊んでくれたし」
ベール「私達とゲームしてくれましたし」
神楽「私と付き合ってくれたアルし」
なのは「いろいろと面倒を見てくれたし」
桂「俺のそばを台無しにしたことがあったし」
はやて「うちが始末書を書かされる羽目になったしな」

イカ娘「ネプテューヌ、ベール、神楽、なのは、桂、はやて・・・」
イカ娘とともに過ごした思い出を語るなのは達。
唯、桂とはやての場合は恨みごとのようだが。

新八「だから、元気でいてくださいってことですよ」
イカ娘「・・・サンドバックに言われると癪でゲソ」
新八「オイイイィィィィィィィ!!!!結局あんたは僕をサンドバックしか見てないのかーーーーーーー!!!!」
最後の最後までサンドバック扱いされた新八。
周りは苦笑いする。

イカ娘「・・・・・みんなのおかげで帰れることができるでゲソ！みんなはもう友達でゲソ！」
ネプテューヌ「うん！私たちはもう友達だよ！」
涙交じりだが、元気よく別れのあいさつをする。
銀時「じゃぁまたな。元気でやれよ」
イカ娘「また会うでゲソーーーーー!!!!」

シュンッ！

開いていた時空ゲートは消え、イカ娘はいなくなった。
銀時「・・・あ～あのやかましいガキがいなくて清々するぜ」
ネプテューヌ「そんなこと言って、ほんとはさびしかったんじゃないの？（ニコニコ）」
銀時「ちげーよ！」
そんなこと言っても、やっぱ寂しかったりする銀時であった。

イカ娘の世界・海の家・れもん

イカ娘（・・・・・帰って来たんでゲソな・・・）
海を眺めて、銀時達を思いだすイカ娘。
???「お～い、イカ娘～。そこでなにやってんだ～？」
遠くでイカ娘を呼ぶ声が聞こえた。
イカ娘「・・・何でもないでゲソ～～～～！」
もう彼女は侵略よりも今の生活が好きのようだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。番外編だけど質問コーナーを始めま～す。」

ネプテューヌ「今回のアシスタントは私達がするよ！」

ブラン「・・・さっさと始めて」

銀八「そう急かすな。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「何が？（ふきふき）」↑ファイアーボールマリオになってハチ達は近寄れなかった。後、口を拭ってる。

うわぁ…↑ハチ防備装着中

ルイージ「流石兄さんだ…」↑メタル帽子着用

フォックス「だな」↑リフレクター発動中

スネーク「良くやるよな」↑ダンボールで隠れ中

ネス「だね～」↑メタル帽子着用

リュカ「；」↑同じく着用

マリオ「と言うかキスとか体に触れただけで銀時を軽蔑するなんて…（くわっ！）銀時舐めてんだろ！！！（怒）」↑銀さんを軽蔑した目で見ようとしたメンバーに怒りのマリオファイナルを放つ

おいいいいいいいいい！！！！！！！

ルイージ「そっちの銀さんを少しだけ軽蔑した目で見た人たち逃げてぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

んでまぁ…話変わるけど…ちょっとネプテューヌ達を知る為に公式サイトの見たんだけど…

フォックス「へえぇ～それで？」

…個性豊かなメンバーだなと思ったと同時に…女神姿凄い服だな…って思った…

一同「どれどれ…」

（ネプテューヌの公式サイトを見ています）

ルイージ「…確かにこれは…」

マリオ「4人とも動き易い服だな」↑純粋な感想です。

スネーク「最初は戦いあっていたのか？」

フォックス「サイトを見るだけではそうじゃないのか？」

ネス「面白い名前の人もいるね～」

リュカ「そうだね…この2人も出るのかな？」

マリオ「さあ？…ネプテューヌ達に質問『真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは使ってみたい技はあるか？』」

ルイージ「銀さんに質問『ネプテューヌさん達が持ってる武器で使いたいって思う武器はありますか？』」

ソニック「スバルに質問『銀時やネプテューヌ達から見習いたい所はあるか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます。

マリオ「応援してるぞ～～」『・・・もはやこいつモンスター以上か？」

女神たち「だったら直接たたきに行こうか（な）（しら）？」

銀八「嫌、怖いからやめてくれ・・・（汗）；」

ネプテューヌ「最初の質問はね～。私、『超マッハ次元斬』がいい！」

ノワール「私は『暗黒剣Xの字斬り』を使いたいわ」

ブラン「・・・『プラズマ昇天激』がいい」

ベール「私は『魔砲流星群』というのを使ってみたいですわ」

銀八「って全部『ディスガイア』の技じゃねーか！！」

銀時「落ちつけって。2つ目はネプテューヌの刀が相性がいいぜ」

スバル「3つ目は2人の強い心です」

銀八「はい、ありがと。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次の質問。ペンネーム『スカル』さんからの質問『皆さんに質問、今週の銀魂を見てどう思われますか?銀さん6股してますよ?』」

全員が立ち上がる。

全員「ごめん。まだ見てません」

銀八「『スカル』さんごめんなさいね。廊下に立たなくていいから」

ベール「では最後の質問ですわ。ペンネーム『月光閃火』さん。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…銀時も大変だよな。モテる男っつーのも、見方によっちゃ精神的に地獄だもんな。

輝刃「だな…ただでさえ、銀時は糖尿病抱えてるのにその上鬱病まで抱えてしまったら始末に負えないぞ？」

だよな…あ、質問書き記しておくぜ？

『作者に質問だ。銀時の奴はフラグ立ちっぱなしだが、他の銀魂キャラ達は何らかのフラグとかカップリングはあるのか？特に新八とか近藤とか。あ…一緒に長谷川さんとかも教えてくれ。』

輝刃「確かに…かなり銀時ばかりがフラグフィーチャーされてばかりだからな…。この際他の銀魂キャラ達のフラグとかカップリング総ざらい…というのも悪くはないな…。」』どうなのですか？」

真王「答えましょう。銀時×フェイトがありますが、銀時×ネプテューヌも悪くありません。新八と近藤は分かりませんが、長谷川だったらベールがにあうかと」

銀八「何でベールなんだ？」

真王「いや、特に意味は・・・・・・ん？」

落ちている紙を拾う。

【銀時×桂もよしですＢＹ西園】

真王「・・・・・・美魚、ＢＬはほどほどにしとけ」

銀八「誰だよ？美魚って？」

真王「きにするな。『月光閃火』さん。廊下に立ってくれ」

ネプテューヌ「そういえば『鳴神ソラ』さんのマリオさん、どんなものでも食べるんだね」

銀八「あの様子じゃ食べ物の中に植物が入ってようが、爆弾が入ってようが、ウィルスが入ってようが、ピーチ姫が入ってようが問答無用で食べそうだな」

真王「あ！ピーチで思い出したんだけど彼女ここに訪れてケーキを作ってたぞ。そしてそのケーキは『鳴神ソラ』さん宛てに運ばれていったぞ」

銀八「恋人にプレゼントか？羨ましいじゃねえか畜生！」

真王「あっそ・・・（そう言えばケーキ作ってるときにイガイガしたものと黒い爆弾と赤・青・黄色の生物っぽいものがそれぞれ入れてたな。それに一瞬ピーチ姫が裸になってもうひとつにケーキの中に入っていったように見えたがあれはいったい？）」

ネプテューヌ「ところで人気投票はどうなったの？」

真王「あ！ちょっとまて、ええっと・・・・・・・・・・

銀時：１４票

新八：６票

ネプテューヌ・スバル・ティアナ：２票

なのは・フェイト・高杉：１票

・・・になってる」

銀八「なんでだよ！なんで銀時が１４もいくんだよ！俺も人気投票欲しいよ！」

真王「あんたは無理だろ銀八」

銀八「うるせえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！俺が人気ナンバーワンに「リトルボーイ！！」グバアァァァァァァァァ！！！！！」

ブレイド「まったく口うるさい馬鹿教師だぜ」

ネプテューヌ「あれ？『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』のブレイドじゃん。こんにちわ」

ブレイド「は～い。げんきかな？ネプたん・ブランたん！」

ブラン「うぜぇ！」

ブレイド「ぐぷあっ！」

真王「こら！ゲストをぶっ飛ばすな！・・・というわけで」

女神たち＋ブレイド「次回をお楽しみに（まってるぜ）！」

番外訓：イカの踊り食いはあまり良くない（後書き）

真王「以上。『侵略！イカ娘』からイカ娘でした～。次回は短編集ですので気軽に見ていってください」

～募集～

真王「番外編に載せたいキャラがいたら、一言コメントに書いてください。そのキャラが現れることがあります。（決めるのは私だが）」

超短編集1（前書き）

真王「ここはネプテューヌ風にアレンジした短編集です。それではスタート」

超短編集1

～彼女の胃袋～

六課の食堂で銀時は小豆いっぱい入れてるご飯『宇治銀時丼』を食べていた。
なのは、フェイト、スバルも食べていた。

ヴィータ「・・・お前ら、よくそんなものを平気で食べられるな」
ため息交じりに言うヴィータ。
銀時「バカヤロー、ヴィータ。これはすごくうまいんだぞ」
フェイト「そうだよヴィータ。とても美味しいよ」
スバル「ヴィータ副隊長はこの味が理解できないんですか？」
なのは「一緒に食べようよ。ヴィータちゃん」
ヴィータ「お前らの舌おかしいんじゃねーのか！？」
ヴィータは怒鳴る。

ネプテューヌ「ヴィータ～。一度食べてみたら？きっとおいしいよ」
ネプテューヌは宇治銀時丼を食べながら言う。
ヴィータ「あんな気持ち悪いもん絶対食う気はしな…って、てめぇは何杯食ってんだ！！」
ネプテューヌの傍には、宇治銀時丼のタワーがあった。
銀時達は見た瞬間ブー！、と吹いた。

ネプテューヌ「ん～～・・・・・・９杯かな？」
新八「いやいやいや！それを含めると１０杯目ですよ！」

１つのタワーに９杯の丼ぶりがあり、今食べてるもので１０杯目である。

ネプテューヌ「おいしいからいいも～ん。今度これの大食い大会があったら参加してみよっかな」
銀時「絶対にあるかそんなもん！！」
いくら宇治銀時丼が好きでも、１０杯以上食べるのは無理だと思った銀時であった。
ちなみになのはとスバルは、負けじと宇治銀時丼をもっと食べるが、さすがに無理のようで、トイレで戻したという。

～2人目の白い悪魔？～

ある日、銀時達はニュースを見た。
アナウンサー「次のニュースです。ミッドチルダの〇〇地区で強盗軍団『シェイパー』の一味全員が逮捕されました。」
新八「へぇ～、強盗が全員逮捕されたんですか～」
新八がニュースの感想を言う。するとフェイトが、
フェイト「おかしいわ。『シェイパー』はS級犯罪組織の部隊なのにこうもあっさりだなんて・・・」
何かを考えるしぐさをする。

アナウンサー「しかし、発見された時の『シェイパー』の本拠地は、何者かに壊され、一味全員ボロボロの状態で発見されたようです」
フェイト「え？」
ニュースの内容に、フェイトは驚く。
アナウンサー「一味のほとんどは、うわごとで『悪魔が・・・白い悪魔が・・・』などと言っておりますが、詳しい情報はありません」

白い悪魔って言う単語に、全員がなのはを見る。
なのは「・・・何でこっち見るの？私悪魔じゃないから！」
なのはは否定するが、視線が絶えない。

すると、ブランがやってきた。
ブラン「なにやってんの？」
ネプテューヌ「あ！ブランおかえり。・・・・・ってどうしたの？ほっぺに赤いの付いてるよ」
ブランの右ほほに、赤いものがついていた。

ブラン「ああ、レストランでケチャップの料理を食べてたからそのせいじゃない？」
ネプテューヌ「そうなんだ」
ネプテューヌは納得する。すると、
アナウンサー「一味の生き残りの証言によると、『白い服で、斧を振り回してた』との事で、全滅する前に『ちっさい』といった瞬間に暴れだしたとの事です」

白い服で・・・・・・・・・斧を振り回してた・・・・・・。

全員がブランを見る。
全員（あれ・・・・・・・・・・・・ほんとにケチャップなのか！？）
冷や汗を流して、考えないことにした。

～遠慮します～

ヴィータ「なぁ、ベール。頼みたいことがあるんだ」
突然ヴィータがベールに頼みごとをする。
ベール「どうしたのですか？」
ベールがきくと、いきなりヴィータが土下座した。
ヴィータ「頼む！あたしに胸を大きくする方法を教えてくれ！！」
・・・実にどうでも「ああ？」実にどうでもいい内容だった。
ヴィータ「言い切りやがった！！」
ベール「・・・誰に向かって言ってるのですか？」
ヴィータが突然怒鳴ったことに、ベールは聞く。

ヴィータ「いや、すまん。何か電波が頭に通ったんだ。それよりも胸を大きくする方法を教えてくれ！！」

バン！

神楽・九兵衛「私（僕）も教えるネ（てくれ）！！！」
たまたま通りかかった神楽と九兵衛が、話に乗り出す。
ベール「・・・分りましたわ」
ヴィータ・神楽・九兵衛「ホント（アル）か！！」
ベール「ええ。ただし、条件がありますわ」
ベールは教えようとする代わり、条件を言おうとする。

ベール「この私と２０時間ゲームと付き合ってくれたら教えますわ」
ベールの条件内容に３人は固まる。
ヴィータ「・・・それって、遠回しに廃人になれって言ってねぇか

？」
ベール「はい♪」
笑顔で答える。

ヴィータ・神楽・九兵衛「謹んで遠慮させていただきます（くアル）・・・」
胸の件をあきらめることにする3人であった。

～はやてのおっぱい万歳記（ベール編）～

はやて「そんでな、フェイトちゃんの胸は大きくなって行くもんや」
ベール「まあ、そうなのですか」
はやてとベールは、2人して変な話し合いをしていた。

ベール「・・・ところではやてさん。さっきから何を見ているのですか？」
はやての視線が気になるベール。
はやて「決まってるやん。あんたのそのマシュマロや～！」
ベール「きゃ！」
いきなりはやてが、ベールの豊満な胸をもむ。

はやて「おお～。シグナムとは違う見事な弾力と柔らかさ。これはすごいわ」
ベール「は、はやてさん・・・」
顔を赤くしながらはやてを睨む。
はやて「ん？」

ベール「やめてくださ～～～～～～い！！！」

バシィーーーン！！！

はやて「ぼふぁーーーーーーー！！！」

強烈ビンタを受け、５メートルくらいぶっ飛ばされた。

ベールはどこかへ逃げてしまった。

はやて「ふっ、いい乳だったぜ・・・・・・・・・・・ガクッ」

最終的に台無しなセリフを言うはやてなのであった。

～はやてのおっぱい万歳記（コンパ編）～

はやて「フフフ・・・獲物発見や～」

はやては、壁の隅っこである獲物を狙っていた。コンパである。

はやて「それじゃあ・・・・・・いただきま～～す！！」

コンパの胸をがっしりとつかむ。

コンパはどんどん顔を真っ赤に染めて、

コンパ「・・・キャアアアアアアアアア！！！！！！！！」

悲鳴とともに、はやてに注射器で刺す。

はやて「いたっ！」

刺されたはやては注射器を外す。

コンパはすでにいなくなってる。

はやて「・・・今回は作戦失敗見たいやなあ・・・」

はやては自室へと戻っていった。

翌日、
はやては緊急入院された。
顔中にブツブツのデキモノができて、触ろうとすれば激痛が走るのである。
銀時「・・・・・・んで、一体何を仕出かしたらそうなったんだ？」
はやて「・・・言わんといて・・・（もうコンパちゃんを驚かすのやめよ・・・）」
はやては二度とコンパに悪戯をすることはなかったそうだ。

～謎の幽霊の正体～

六課でこんなうわさが流れた。『六課の訓練場で女の叫び声が聞こえる』と。
銀時「そんな噂、デマに決まってんだろ？近所迷惑にもほどほどにしとけっつーの」
銀時が切り捨てるように言う。
ネプテューヌ「怖いの？銀さん」
銀時「ば、馬鹿野郎・・・・・・この俺が怖いわけないだろ」
などと否定しているが、冷や汗がダラダラと出ている。
ノワール「・・・・・・・・・・」
そんな中、ノワールは微妙な表情を浮かべていた。

夜。

ティアナ「・・・あの噂が本当なら・・・確かめないと」
ティアナが一人で、幽霊の正体を突き止めようとする。
???「・・・・・・・・・・・・・」
何処からか女性の声が聞こえた。
ティアナ「・・・ほんとに訓練場から聞こえるわ」
ティアナは訓練場へと向かった。

機動六課・訓練場

???「・・・あなた・・・つ・・・えなさい！・・・」
謎の幽霊のいる訓練場にやって来たティアナ。その幽霊は何かに叫んでいるようだ。
???「先に言っておくわ。私はか～な～り強い！」
よ～く聞くと何かの決め台詞を言っているようだ。
しかし心なしか、どこかで聞き覚えがある。
ティアナ（この声・・・どこかで聞いたような・・・？）
そう考えていると、幽霊が見えた。それは銀色になびく髪の、
ブラックハート「世のため人のため！悪の女神の野望を打ち砕くブラックハート！この漆黒の輝きを恐れぬのなら、かかってきなさい！」
ブラックハートだった。

パキッ！

ティアナ「あっ」
ブラックハート「！誰！」
ずっこけかけたところで枝を踏んでしまい、見つかってしまった。

ブラックハート「ティ、ティアナ・・・・・・あんたまさか・・・」
ティアナ「あ～・・・・・その・・・ごめんなさい」
ティアナが白状すると、ブラックハートはへたれ込んだ。
ブラックハート「見られてしまった・・・・・変身後の決め台詞を言ってるのを見られてしまった。」
ものすごく気まずい。

ティアナ「あ、あの・・・・・・私、何も見なかったことにしますから」
ブラックハート「・・・・・・・・本当？」
ブラックハートは顔を上げる。
ティアナ「はい」
ブラックハート「ありがとう！」
ブラックハートはガシッ！、とティアナの手を握る。

ブラックハート「あ！もうこんな時間。じゃぁね」
ブラックハートは、六課の自室へと戻っていった。
ティアナ（・・・もしかしてノワールさんは・・・）
ティアナは考えたが、やめておくことにした。

～薬物注意！～

イストワール「これをこうして・・・あとはこれを入れれば・・・できました！」
イストワールは、緑色の液体の入った瓶を2つ作った。
神楽「何がアルか？」

すると、神楽・九兵衛・ヴィータがやってきた。
ついでに銀時、新八、ネプテューヌ、ブランもやってきた。

イストワール「あなた方はお身体を気にしているそうなので私が体を大きくする薬を作りました。」
ヴィータ・神楽・九兵衛「マジでか！」
3人は驚く。
ヴィータ「よし！じゃぁそｒ「ウォリャアアア！！！」っておまえら！」
神楽と九兵衛が、薬を横取りし、飲んだ。

ボボーン！

何と2人は、グラマティックなボディーになった。
神楽「キャッホォーーーーーウ！！！！これで私は大人ネ！！」
九兵衛「ついに・・・ついに僕は手に入れた！」
2人は大人になった体に興奮している。

ヴィータ「おい！おまえら！せっかくあたしが飲もうとしてたところを！」
ヴィータは2人を睨む。
神楽「フン！世の中は弱肉強食ネ！」
九兵衛「その通りだ」
二人は自慢げに語る。

イストワール「お二人方、うれしいことは分かりますがくれぐれｍ「イヤッホォーーーーーーーーウ！！！！」って、ああ・・・・・・」
イストワールが何かを説明しかけたが、神楽と九兵衛はどっかへ行ってしまった。
ネプテューヌ「・・・イースン。何言おうとしてたの？」

イストワール「これです」
といって取り出したのは、体が大きくなる薬の使用説明のメモだった。だが、問題は後半の内容だった。
銀時「『なお、使用して２４時間過ぎると腹痛および下痢を引き起こしますのでご注意を』・・・・・・・・・・・・」
新八「・・・銀さん、これって」
銀時「何も言うな」
銀時は自室へと戻っていった。
ヴィータは危なかった、と安心したそうだ。

後日、あの２人がトイレに立て籠もってたことは言うまでもない。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。短編集でも始めますよ～。さぁ今回のアシスタントは、」

イカ娘「番外編からこのイカ娘様がアシスタントするでゲソ！」

銀八「よしいくぞ！ペンネーム『月光閃火』さん。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…長谷川さんにはベールか…何かこう『優しい父親と、構ってくれて嬉しいけどなかなか素直になれないツンデレ娘』って感じが頭の中に浮かぶな…。

輝刃「確かに…そう思えてならないな。あ…今回は俺から質問だ。」

『女神達に質問だ。リリカルなのは勢と銀魂勢の男性キャラ達の中で「この人となら付き合ってもいいかな♪」ってキャラは居るか？』」

女神組が立ち上がる。

ネプテューヌ「銀さんがいい！」

ノワール「土方かしら」

ブラン「・・・いない」

ベール「私は桂さんですわ」

銀八「はいありがと。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

イカ娘「次の質問に行くでゲソ！ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「あはは～何言ってんだよ～ピーチ姫は友達で大切な人であ

って恋人じゃないぞ～～後、姫、料理は体を張って作るのは止めとこうな、後、流石に俺は料理されてないのや生きてる動物（動く料理は除く）は食べられないって」↑埋め込まれていた物を除いて全て完食

言って置きます。内のマリオは超×１００倍鈍感です。他にも鈍感メンバーはたっぷり

フォックス「色々とフラグ立ててるよな…自分の世界にいる女の子やオリキャラの神様や家設定の今はいないマリオの師の奥さん」

ルイージ「兄さんが××料理に慣れてるのよそれだよね；」

スネーク「それにしても…俺達が出るのとかマリオのゲーム出たな；」

ソニック「番外編だったんだな～」

ネス「しかも何時の間にかミッドチルダに着いていたと言うのだね～」

どうせなら…家のマリオを出して欲しいもんだ。

ルイージ「無理でしょ；」

フォックス「無理だろ；」

ソニック「Ｈｅｙ質問だぜ！『ネプテューヌ達は自由に世界行けるならどんな世界に行きたいんだ？』」

ネス「僕からもネプテューヌさん達に質問『真王さんが知ってるア

ニメ、漫画、ゲームの中でこれは使ってみたい能力はある？』」

フォックス「俺はな…『ネプテューヌ達はスマブラでどんなキャラを使うんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』でゲソ！」

また女神組が立ち上がる。

ネプテューヌ「学園都市がある世界かな？能力は『電撃を操る程度の能力』で、マリオを使うよ♪」

ノワール「オリンポスコロシアムに行ってみたいわ。後、『瞬時に移動できる程度の能力』にシークが好きだわ」

ブラン「・・・グリーングリーンズってある？能力は『衝撃を操る程度の能力』でドンキーコングを使うわ」

ベール「たまには幻想郷というところへ行ってみたいですわ。それから『技を駆使する程度の能力』にマルスを使いますわ」

銀八「能力は全員『東方』かよ！！」

イカ娘「私は『水分を操る程度の能力』が欲しいでゲソ！」

銀八「オメーも張り合うな！・・・ま、そんなわけで」

全員「銀八先生をお楽しみに～！」

超短編集1（後書き）

真王「いかがでしょうか。さて次回は、万事屋とネプテューヌ達に意外な人たちがやってきた。一体彼らは・・・」

イカ娘「次回『友達を思ってこそ仲間』テイクオフでゲソ！」

～警告～

真王「更新が遅れることがあります。なので温かく見守ってください」

第一回、モンスター解説図鑑

真王「第一回、モンスター解説図鑑のコーナー！」

ワーーーーー！！パチパチパチパチ！

銀時「・・・おい作者。何だこれは」

真王「この章の初めから終わりまで現れたモンスターを紹介するんですよ」

ネプテューヌ「ようは私を襲ったあいつも紹介するんだね」

真王「そういうこと。まずはじめは、こいつだ！」

～アバババン～

第三訓から登場。
ゲイム業界のリーンボックスに生息するモンスター。緑色の皮膚と爪のついた触手に大きな口と赤っぽい尻尾が特徴。もとはある勇者が封印したらしいが、解き放たれてしまったらしい。ネプテューヌ達に倒されたが、ダークソウルの力で第3起動ビルに姿を現した。

真王「こんな感じです」

銀八「なるほどねぇ」

ノワール「次ね」

～アバババンチャイルド～

第三訓から登場。
アバババンから生まれた子供。数の多さに銀時達を苦戦させた。しかし、生みの親が死ぬと同時に、生まれた子供たちも一緒に死ぬようだ。

銀時「あれはうざかったな」

桂「同感だ」

真王「次行くよ」

～ヘカントケイル～

第九訓に登場。
ダークソウルから召喚されたモンスター。青いメタリックなボディーと金色の爪が特徴。
ラスティションの工場に生息している。

ブラックハート「ま、結局ザコだったけど」

銀時「そうかい。次はネプテューヌを襲った奴だな」

～正体不明（アンノウン）～

第十一訓に登場。
ネプテューヌに襲いかかった謎の敵。ネプテューヌがダークソウルにふれたときに現れた影のような敵。高杉やマジェコンヌには反応はなかったのに守護女神（ハード）には現れたことから、何か関係があるらしいが詳細不明。

真王「物語が進むと正体がわかるかも？」

銀時「そうかい。それじゃぁ」

全員「ばいば～い」

第一回、モンスター解説図鑑（後書き）

いかがでしょうか。それではまた。

～予告～

ナレーション「ある学生集団が六課に流れ着くようです」

第十四訓：友達を思ってこそ仲間（前書き）

真王「物語は進み、新たな章がスタートしました。そして現れるキャラはいったい？」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始めるよ」

第十四訓：友達を思ってこそ仲間

僕は何が何だか理解できなかった。

それが起こる前まではみんな修学旅行で楽しくやれると思ってた。
けど、僕らの乗ってたバスが道を外れ、横転しかけるときだった。

不思議な光が僕らを包み込んできたような気がした。

アナウンサー「ニュースをお伝えします。先日、▼■地区で横転事故が発生しました。クルマをよける際に横転したと思われますが、奇怪なことに生徒が行方不明になってるとの情報があります。なお、行方不明になてる生徒は直枝　理樹さん、棗　鈴さん、井ノ原　真人さん、宮沢　謙吾さん、神北　小毬さん、三枝　葉留佳さん、能美　クドリャフカさん、来ヶ谷　唯湖さん、西園　美魚さんと、３年生の棗　恭介さんです」

機動六課・入口前

ネプテューヌ「ん～～、はぁ～気持良い朝だな～」
ネプテューヌは、外で背伸びして、新鮮な空気を吸っている。
ネプテューヌ「でもなんかこう・・・何か事件が起きたらこの退屈感も解消できるかな～」
と、肩を振り回して上を見上げると、

・・・・・白い渦のようなものがありました。

ネプテューヌ「・・・・・・なにあれ？」
ネプテューヌは、白い渦をじーっと眺めていると、

ドサッ！

何かが落ちてきた。
それは、数人の少年少女だった。
ネプテューヌ「・・・なんだろう？この人たち・・・」
気を失っている彼らを見ていると、ある一人の男子が腹部にけがをしていた。
ネプテューヌ「！大変だ！銀さ～～～ん！！みんな～～～～～！！！」

機動六課・医療室
？？？「・・・あれ？・・・・・・・ここは・・・」
温厚な性格で童顔である少年・直枝理樹が目を覚ます。
理樹（確か僕らはバスに乗って・・・・・・・・・そう言えば途中で光が見えた気がしたけどあれは・・・）

理樹が考え込んでいると、
シャマル「あ！気がつきましたか」
白衣を着たシャマル、そしてネプテューヌと銀時がやってきた。

ネプテューヌ「よかった～。大事に至らなくて」
銀時「あたりまえじゃねぇの？」
ネプテューヌはホッとして、銀時は普通に答える。
理樹「あの・・・あなた達は・・・」
ネプテューヌ「あ！自己紹介がまだだったね。私はネプテューヌ」
銀時「俺は銀時だ」
シャマル「私は機動六課の医療士・シャマルです」
と、それぞれ自己紹介する。

理樹「機動・・・六課？」
理樹は頭をかしげる。するとあっ！、と思いだして
理樹「そうだ！他のみんなは！？」
ガバッ！と起き上がるが、
シャマル「動いちゃだめです。安静にしてください」
シャマルに止められた。

理樹「でも僕「うるさいな・・・」ってこの声は」
理樹の隣から聞き覚えのある凛とした声が聞こえた。
？？？「うるさいぞ理樹。一体何を騒いでる？」
猫の尻尾のような茶色い髪の少女・棗鈴が起き上がった。

理樹「鈴！」
銀時「おっ、おめぇも起きたか」
鈴「！！」
鈴は銀時を見るなり、歯を見せて警戒している。
ネプテューヌ「・・・銀さん、嫌がられているよ」

銀時「なにそれ、俺なんか悪いことしたのか？」
銀時はショックを受ける。

理樹「すいません。鈴は人見知りが激しい性格ですから・・・」
理樹が説明して銀時を慰める。
鈴「理樹！こんなおっさん天パと話してたらアホになるぞ！」
鈴が銀時に対する文句に、銀時がキレる。
銀時「んだと！このガキ！おっさんは許せるが俺を天パって言いやがって！」
鈴「うるさい！黙れ天パ！！」
フカーッ！、と猫の威嚇のように鈴は怒り、両者は一歩も譲らないようだ。

？？？「・・・んだよ鈴。うるさくて眠れねーぞ！」
？？？「一体何を騒いでるんだ？」
？？？「やれやれ・・・何をやっておるのやら」
別のベッドで、バンダナを付けた筋肉ムキムキそうな男と白髪で剣道着を着た男と黒のロングヘアーの女性が目を覚ました。

理樹「真人！謙吾！来ヶ谷さんも！」
理樹は三人を呼ぶ。
真人「おう！理樹じゃねーか」
謙吾「鈴、お前は何をやってるんだ？」
来ヶ谷「まぁいいではないのか」
真人があいさつし、謙吾は鈴に呆れ、来ヶ谷は謙吾をなだめる。

？？？「う～～～ん・・・何～？」
？？？「むっ、はるちんの面白センサー反応ありか？」
？？？「わふっ、なんなのですか？」
？？？「面白いことが起きてますね」

続いて、のほほんとしてセーターを着た少女と紫のかなり変わったツーテールの少女と子犬っぽくて蝙蝠の髪飾りを付けた少女と青い髪に赤いヘアバンドの少女も起き上がる。

理樹「小毬さん！葉留佳さん！クド！西園さん！」
鈴「何！小毬ちゃん！」
小毬という名前が出てきて、反応する鈴。

小毬「あっ、鈴ちゃんだ～」
葉留佳「おやおや、理樹くんもいますよ」
クド「わふっ、皆さん無事ですか」
美魚「私もいますよ」
みんなそろって無事のようだ。

鈴「ところで理樹、ここどこだ？そしてそこの天パはだれだ？」
銀時「テメッ！また天パって言いやがったな！」
銀時が怒鳴る。

理樹「あはは・・・・・この人は銀時さんでここは機動六課の医療室だよ」
理樹は説明する。
真人「んだぁ？そりゃ？」
謙吾「なるほどな」
来ヶ谷「ほぅ」
小毬「銀時さんって言うんだ～」
葉留佳「医療室！つまりここは病院か」
クド「銀時さんなのですか？」
美魚「はじめまして」
鈴「・・・・・・・・」
それぞれ別々の反応をした。

ネプテューヌ「・・・ところでシャマルさん。あの人はどうだった？」

シャマル「傷もふさがって安静にしているわ」

ネプテューヌ「そうなんだ」

理樹「あの・・・一体何を話しているんですか？」

理樹は2人の会話が気になった。

シャマル「実はあなた達を見つけてここまで運んだのはネプテューヌちゃんのおかげなの」

ネプテューヌがえっへん！と胸を張った。

シャマル「それでね、あなた達と同じ制服を着た男の子がいて腹部を怪我してたらしくて今治療しているわ」

理樹「僕たちと同じ制服？」

理樹はもう一人の生徒が気になった。

理樹「あの…その人の特徴は分かりますか？」

シャマル「ええ、オレンジ色の髪で名札に『棗恭介』って書かれてたわ」

理樹・鈴「！！」

理樹と鈴が驚いた顔をした。それだけでなく、真人、謙吾、小毬、葉留佳、来ヶ谷、クド、美魚も驚いていた。

理樹「恭介！？恭介がいるの！？」

鈴「あの馬鹿兄貴がいるのか！？」

2人はシャマルに聞いた。

シャマル「え…ええ。でもここじゃなくて別の部屋「誰か俺を呼んだか？」」

男の声が聞こえた。理樹達にとって、懐かしい声が聞こえた。

理樹達「恭介（さん）！！」

恭介「よう」
壁に寄り添っているのは鈴の兄であり、みんなのまとめ役である棗恭介である。
シャマル「ちょっとあなた！部屋から出てはいけないって言ったでしょ！」
と、恭介に叱るが、
恭介「いや、さっきイストワールってやつが俺に薬をくれてもう元気ハツラツなんだ。ホラ」
そう言っておなかを指差す。傷が完全になくなっていた。
シャマル「だからって勝手に部屋を出てはいけません「大丈夫ですよ。私が保証しますから」・・・イストワールさん」

扉からイストワールが現れて、シャマルを制する。
理樹「え？女の子？」
鈴「理樹！こいつ浮いてるぞ！」
子毬「わぁ～、妖精さんだ～」
クド「わふっ！かわいいです～」
来ヶ谷（クドリャフカ君もかわいいんだがな）
理樹達はイストワールを見て反応する。

ネプテューヌ「ところで、理樹君達はどんな関係なの？」
恭介「俺達か？」
恭介がニィッ、と笑ってこう言い放つ。
恭介「悪を成敗する正義の味方『リトルバスターズ』さ」

機動六課・食堂

恭介率いるリトルバスターズは、万事屋組、ネプテューヌ組、六課組と楽しく話し合っていた。

恭介「でだ、そこからこう進み、そしてバンっ、と登場してポーズを決めるとかっこいいだろ？」

ネプテューヌ「へぇ～。なるほど」

恭介は何かの講座をネプテューヌに話している。

陰でノワールがメモを取っている。

ブラン「・・・・・・・・・・・・・・・」

美魚「・・・・・・・・・・・・・・・」

ブランと美魚は本を読んでいる。

小毬「ガペペ……これしょっぱいよ」

神楽「当たり前ネ。酢昆布はしょっぱいからこそ美味しいんダヨ」

神楽と子毬は酢昆布を食べてるが、やっぱしょっぱいらしい。

銀時「ドヘッ！」

葉留佳「や～い、引っ掛かってやんの～」

銀時「テメッ、待ちやがれこのクソガキ～！！」

ビー玉で転がされた銀時は、葉留佳を追いかける。

来ヶ谷「・・・・・・・・・」

キャロ「あ…あの、私に何か用ですか？」

来ヶ谷「何でもない、気にするな（かわいいな・・・）」

来ヶ谷はキャロを見て、心の中で妄想している。

クド「エリオさんは強いのですか？すとろんぐぼ～いなのです！」

エリオ「クドリャフカさん。それってＳｔｒｏｎｇ　ｂｏｙでしょ

うか」
クド「わふっ！そうなのでした」
クドの間違いを、エリオが訂正させた。

桂「謙吾殿、そばを食べてみるか？」
謙吾「いただくとしよう」
ベール「でしたらわたしも」
桂・謙吾・ベールはそばを食べ始めた。

真人「２９８・・・２９９・・・３００！よし！さらに筋肉に磨きがかかったぜ」
鈴「唯キショイだけじゃないかボケーーー！！！」
真人「グプァ！！」
月詠「・・・なかなかの蹴りじゃな」
鈴と真人のやり取りを、月詠は眺めていた。

新八「なんか・・・すごい馴染んでません？」
理樹「ごめん・・・これが日常だったりするんだよ」
新八「ですよね」
新八と理樹は半ばあきらめたような気分である。

はやて「みんな仲ようやっとるか～？」
はやてがやって来た。
フェイト「どうだった？はやて」
フェイトの問いにはやては・・・・・・・・首を振った。
はやて「理樹君達の住んでた町と学校がどこにもなかったそうや」
理樹達「ええ！？」
理樹達は驚いた。

イストワール「・・・でしたら彼らは別次元の地球から来たという

ことになりますね」
イストワールが説明するが理樹達は分からないらしい。
恭介「簡単に言うとだな、俺達の住んでた地球とは別の場所、つまりパラレルワールドってことさ」
恭介が補足して、みんな納得したようだ。

理樹「でもこれからどうしようか」
理樹達リトルバスターズがうーんと考えていると、
ネプテューヌ「だったらここに住んでみる？」
ネプテューヌがこんな提案をした。
理樹「え？でも皆さんに悪いよ・・・」
銀時「俺は別にかまわねぇぜ」
銀時は、葉留佳をしめながら賛成している。

なのは「私もオーケイだよ」
桂「うむ、おれもだ」
エリザベス『わたしも』
神楽「私も賛成ヨ」
スバル「あっわたしも」
ティアナ「私もいいわよ」
ノワール「こっちもね」
ブラン「別にいい」
ベール「私もですわ」
すでにほとんどが賛成した。

銀時「はい、というわけで今日からおめぇらはここに住むことになりましたっと」
若干適当なことを言う銀時。
理樹「ほ、本当にいいんですか？みんなは」
理樹はメンバーに聞くと、

鈴「あたしは理樹と一緒がいい」
真人「帰れねぇんならここに住めばいいんじゃねぇか？」
謙吾「それしかないしな」
小毬「私は何でもいいよ～♪」
葉留佳「遠慮なく住みますヨ♪」
クド「皆さんは親切なのです。だからここに住むです」
来ヶ谷「うむ、私も異論はない」
美魚「私もＯＫですよ」
恭介「どうやら全員決まったようだぞ。理樹はどうする？」

恭介が理樹に聞く。
そして理樹は決めた。これは理樹達の、
理樹「わかりました。よろしくお願いします」
リトルバスターズの新たな道なのだから。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。もうすでにレギュラーになりましたこのコーナー。さぁ今回のアシスタントは、」

ネプテューヌ「また参上！ネプテューヌだよ」

銀八「いくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『…バカテス？

ルイージ「何いきなり言ってんの？；」

いや…学生集団と聞いてね…

スネーク「他にもあるだろ学生集団がある作品は…」

フォックス「だよな…それにしてもネプテューヌが『とある～シリーズ』の学園都市でノワールがディズニーシリーズのヘラクレスの舞台…と言うかキングダムハーツか？…それの1つか」

カービィ「それでブランちゃんは僕の所だね♪」

リュウケンドー（ソラ）「んでベールは霊夢達のいる東方だな」

撃龍剣「しかし…神楽や九兵衛は悲惨だな…」

マルス「ただで得する事はあんまりないって事だね…まあ…ドクターのならデメリットなしの薬を作れちゃうけどね…と言うかもうあるね」

ドクター「いきなりだね…と言うか私の作った胸が大きくなる薬は

子供がいる女性用のだからね；」

マリオ「と言う訳でネプテューヌ達に質問『女神姿にネプテューヌ達は変身出来るけどもし真王の知ってる真王さんが知ってるアニメ、漫画、ゲームの中にある変身ヒーロー&ヒロイン系でなるならどんな奴になる？」

ネス「僕は皆に質問『真王さんが知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは着て見たいキャラの服ってある？ちなみに自分とこの服以外で答えてね♪』」

ソニック「俺は作者である真王に質問『もしかしてネプテューヌ達のパワーアップも考えてるか？』ちなみに前俺が聞いたリインフォースとのユニゾン以外のな」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ルイージ「流石に今回は兄さんに向けての料理はこなかったね」

スネーク「と言うか毎回俺達が被害に遭いそうな料理は来て欲しくないぞ…」『・・・気にしてんのかよ」

ネプテューヌ「そうだね・・・あ、最初の質問はね、わたしはプリキュアかな？」

ノワール「私は仮面ライダーディケイドよ！！」

ブラン「・・・『魔法少女リリカルブラン』・・・・・・フフッ」

ベール「私は特にありませんわ」

銀八「はいありがと。次の質問」

全員が立ち上がる。

銀時「『ドラゴンボール』の孫悟空の恰好がいいな」

新八「僕は特にありません」

神楽「『東方』のメイリンの服が着たいネ」

桂「『黒執事』の執事服だ」

エリザベス『『プリニースーツ』はないでしょうか？』

月詠「わっちは忍者じゃから『ディスガイア』のクノイチの恰好をしてみたいもんじゃ」

九兵衛「僕は・・・・・駄目だ、出てこない」

なのは「私は『マリオシリーズ』のピーチ姫のドレスが着てみたかったんだ♪」

フェイト「私はゼルダのドレスかな？」

はやて「うちは『うみねこの鳴く頃に』のベアトリーチェのドレスや」

シグナム「私はアイクの戦士服だ」

ヴィータ「一度でいいから『ディスガイア』のラズベリルってやつの服を着てみようかな」

シャマル「私は『うたわれるもの』のエルルゥの服かしら」

ザフィーラ「私は必要ない」

スバル「『ディスガイア』のアデルさんの恰好をしてみたいです！」

ティアナ「私はなぜか『ひぐらしの鳴く頃に』のレナの私服が着たいって思ったわ」

エリオ「僕は『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』のクルスさんの服です」

キャロ「私は『ＷＯＲＫＩＮＧ！』のぽぷらさんのセーラー服が着てみたいです」

ネプテューヌ「私は『マリオシリーズ』のマリオがいい！」

ノワール「『ファイナルファンタジー』のクラウドって人の恰好をしてみようかしら」

ブラン「・・・『ゼロの使い魔』の魔法服」

ベール「私は『ワンピース』のハンコックさんの服ですわ」

真王「そして最後の質問ですがそうなる可能性がありますよ」

銀八「はい。そんなわけで、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

真王「『鳴神ソラ』のとこのマリオさん。そんなあなたにメタルケーキとメロロンケーキをプレゼントします」

銀八「まてまて！明らかに悪意がありそうな料理じゃねーか！！」

真王「失敬な！メタルケーキは『クラナド』の早苗さんのパンの材料から抜き取って加工しただけのものだぞ」

銀八「思いっきり駄目じゃねーか！！それとメロロンケーキってなんだよ！！？」

真王「中に夢魔（サキュバス）が１０体入ってるんですよ。しかも最強レベルの」

銀八「危険な予感しかねーーーー！！！！」

真王「あと言い忘れてたがメタルケーキの中に丸くてすごく硬い犬さんが隠れております」

銀八「作者ーーーーーーーー！！！！お前『鳴神ソラ』さんに恨みでもあんのか！？」

真王「違うよ。そこのマリオさんには『これは無理だわ』というリアクションをしてくれなきゃ面白くないと思って」

銀八「あっそ。あいつの苦しみそうな顔が見てみたいもんだ」

真王「さらに追加で言うがメタルケーキの中の犬は無敵アイテムでも効かない体質らしくて、アナゴさんは１０匹飼ってたそうだ。それにもしその犬を傷つけたらアナゴさんが魔王化してくるそうだ」

銀八「マリオさーーーーーーーーーーーーーん！！！！！逃げてーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！世界が壊れるーーーーーーーーーー！！！！！」

真王「これは追加しますがマリオ以外に被害が出ないようにしました。なので安心してください」

第十四訓：友達を思ってこそ仲間（後書き）

真王「何とリトルバスターズが参戦！この先どうなることやら…。次回は六課に居候することになった理樹達。しかし何もやることもないので理樹達はあることをしようとする」

理樹「次回『借りができたら返すのが礼儀』テイクオフだよ」

第十五訓：借りができたら返すのが礼儀（前書き）

真王「リトバス編の第二話目。理樹達はどうするのやら」

理樹「・・・『リリカル銀魂』始まるよ」

第十五訓：借りができたら返すのが礼儀

銀時やなのはさん達の許しにより、六課に住むことになったリトルバスターズのメンバー達。
そのメンバー達は今、

理樹達「…暇だ」

退屈な状況であった。
理樹「せっかくここに住むことになったんだけど・・・何も無いのはちょっとね・・・」
理樹はこの状況をどうするか考えている。

恭介「ここに住むことになったんだ。遊んだ方がいいんじゃないのか」
恭介が提案する。
理樹「いや、遊ぶって・・・」
恭介「もちろん、ただ遊ぶだけじゃないぞ」
鈴「なんだそれは。もったいぶらず話せ」
そして恭介はこう答えた。
恭介「六課のみんなの手伝いだ」

シャマル「ごめんね～。手伝ってくれて」
理樹「いえ、別にいいですよ」
恭介の提案により、理樹達・リトルバスターズは六課の手伝いをす

ることになった。
今理樹は、シャマルの医療道具を運んでいる。

真人「ったく、何でおれがこんなもんを・・・」
謙吾「我慢しろ。これも少しの恩返しみたいなものだ」
後ろにいる真人と謙吾も手伝いをしているが、理樹の持ってるものよりも重いようだ。

恭介「お？理樹か」
理樹「あ！恭介」
理樹と真人と謙吾の反対側からやって来たのは、大量の紙を運んでいる恭介とクドと小毬と来ヶ谷だった。
小毬「これ重いよ～；」
クド「わふ～…べり～へび～なのです～・・・」
来ヶ谷「しっかりするんだ二人とも（苦痛の表情を浮かべるのもかわいい…）」
理樹「２人とも大丈夫…；ところで恭介、それは？」
恭介「部隊長さんの始末書さ」

ああ…なるほど、と理樹は納得する。
ちなみに鈴はさぼり、美魚は体力がないので休んでおり、葉留佳は、

ガシャーーーン！！

銀時「テメッ！待ちやがれこのクソガキーーー！！」
葉留佳「あはは～。ここまでおいで～～」
サボるどころか迷惑をかけていた。

理樹「・・・・・・・・・・・・」
理樹はこの先大丈夫なんだろうかと不安になった。

機動六課・食堂

なのは「ありがとう理樹君」
理樹「いえいえ、どういたしまして」
なのはにお礼を言われて、頭を下げる理樹。現在食事中。
葉留佳「いや～。しんどい思いをしましたね～」
鈴「苦しい戦いだったな」
新八「イヤ、嘘つくんじゃねーよ!!あんたら二人さぼってんじゃん!!それに葉留佳さんはサボるどころか相手に迷惑しかかけてないじゃん!!」
新八は2人に怒鳴る。（特に葉留佳）

ネプテューヌ「モグモグモグモグモグモグモグモグ・・・」
スバル「バクバクバクバクバクバクバク・・・」
エリオ「ガツガツガツガツガツガツガツ・・・」
クド「・・・皆さん、よく食べるです…」
真人「あいつらの胃袋はどうなってんだ?」
3人の食べっぷりに、クドと真人は唖然とする。

桂「来ヶ谷殿。そばはいかがか?」
来ヶ谷「うむ。いただこう」
桂と来ヶ谷はそばを食べている。謙吾とベールとはやても食べている。

小毬「いただきま～す。」

銀時「あれ?そのお菓子どうしたんだ」
小毬「えへへ～。実はこれ自作なんだ～」
銀時「え?マジ!」
自作と聞いて、銀時は驚く。

銀時「・・・ところで、お前らの日常ってこんな感じか?」
銀時がまわりの雰囲気のことを問う。
小毬「いつもってわけじゃないけどそうなんだよ」
銀時「そうか」
小毬の答えに銀時は少し笑った。

機動六課・訓練場付近

銀時が、暇なのでそこら辺を散歩していると、

ガァンッ!!

銀時「イテッ!!」
何かが頭に当たった。
銀時「いててて・・・なんだこれ?」
銀時は、地面に落ちてる野球ボールを拾った。
恭介「お～い!そのボールをこっちに渡してくれ～!」
訓練場から恭介が走りながらが銀時を呼んでいる。
彼の左手にグローブがはめられていた。

銀時「・・・なにやってんの?おまえら」

恭介「何って、野球をやってるんだよ」
ネプテューヌ「なになに～。私も混ぜてくれな～い」
野球をやってることに、ネプテューヌが参加したいと乗り出す。

恭介「いいぜ。何時でも大歓迎だ」
ネプテューヌ「わ～い！みんなにも話してこよ！」
そう言って、六課へ戻っていく。
恭介「あんたもどうだ？」
恭介が銀時を誘う。
銀時「・・・しゃーねーな」
銀時も参加することにした。

ネプテューヌ「でやっ！」

スカッ！バン！

謙吾「ストライク！バッターアウト！」
銀時達は恭介の野球に参加することにした。現在、ネプテューヌは空振り三振をした。
ノワール「だらしないわね、ネプテューヌ」
ノワールのきつい指摘に、ネプテューヌはシュンッとなる。
銀時「ま、次にがんばればいいじゃねーか」
そんなネプテューヌを、銀時が励ます。
ネプテューヌ「銀さん」
ネプテューヌは、少し元気が出た。

その後も、野球は続き、

ノワール「ハアッ！」
恭介「レフトだ！」
真人「よし任せろ！」
真人がボールをキャッチし、ノワールは少し悔しそうだ。

銀時「・・・なんか後ろからひしひしと嫌な感じがするんですけど」
クド「そ、そうなのですか？」
２番ベースで、銀時は後ろから感じる殺意に冷や汗をかいている。
殺意を出しているのは来ヶ谷である。

謙吾「マーーーーーン！！！」
ネプテューヌ「ウワッ！」
銀時「てかなんだ今の叫び声は！？」
謙吾「仕様だ、気にするな」
バットを振る際、叫び声を出したことに銀時は聞くが、謙吾は仕様だと答える。

鈴「これでもくらえ！『ライジングニャットボール』！！」
新八「ゴパァ！！」
ネプテューヌ「す、すごい。ボールが見えなかった」
銀時「あいつは将来いい選手になれるぜ」
ネプテューヌと銀時は鈴の超豪速球の感想を言う。

新八「あんたら少しは僕の心配をしろ～～～～！！！」
新八は２人に怒鳴る。ちなみにデットボール判定である。

そして野球が終わった後も、銀時達は遊んでいた。
かくれんぼしたり、ゲームをしたりと楽しく遊んでいました。

銀時「あ～、疲れた」
ネプテューヌ「あ～、楽しかった」
銀時は肩を回し、ネプテューヌはご機嫌である。
恭介「そいつはよかったな」
理樹「ネプテューヌさん、機嫌いいね」
鈴「まるで子供だな」
理樹達リトルバスターズはとても楽しかったそうだ。

すると、
ネプテューヌ「ねぇ…あれ何？」
空を指差し、指差した方向を見ると・・・・・・白い渦がありました。
理樹「あれって確かバスの時の」
九兵衛「そうだ！、僕はあれに飲み込まれてここに来たんだ」
九兵衛の言葉に、銀時達が驚く。
そして渦から５つの物体が落ちてきました。

鈴「な、何だこのキショイのは？」
鈴が身構える。落ちてきたのは、緑色でペラペラな板のようなものが四枚ある体のモンスター・ヒンニャー４体と、オレンジ色で頭にとげの付いた亜種らしきモンスター・ハンニャーだった。

ＩＢＧＭ：バトルｂｙペーパーマリオＲＰＧ
（Ｐａｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ：　Ｔｈｅ　Ｔｈｏｕｓａｎｄ　Ｙｅａｒ　Ｄｏｏｒ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂａｔｔｌｅ

Ｔｈｅｍｅ）

ネプテューヌ「こいつらまさか！」
イストワール「いえ！このモンスターたちは、別次元の世界のモンスターです！」
別世界のモンスター・ヒンニャーとハンニャーを見て違うという。

真人「何だ？このペラッペラな奴は」
理樹「ちょ、真人！」
真人はふいに近づく。
一匹のヒンニャーが、真人に攻撃してきた。
真人「どわっ！」
理樹達「真人！！」
こうげきをうけたまさとはたおれ、理樹達がかけよる。

真人「いててて・・・にゃろ！やってくれたな！」
真人は怒る。するとまたヒンニャーが攻撃してきた。
真人「くらえ！こんにゃろ！！」

ドゴッ！！

真人の拳がヒンニャーに直撃。打ちどころが悪いせいか、ヒンニャーがたおれた。
真人「へへっ、どうだ参ったか！」
ネプテューヌ「うわ、真人って強いんだね～」
真人の強さにネプテューヌが感心すると、
一斉に３匹のヒンニャーが襲いかかった。

来ヶ谷「フッ、一匹は任せろ」
来ヶ谷はそう言って、１匹にヒンニャーを、

来ヶ谷「ハァッ！！」
刀で切り倒した。ちなみに刀は偽物です。

謙吾「マーーーーーン！！！」
謙吾は、１匹のヒンニャーを木刀でタタっ切る。

鈴「邪魔じゃどけーーーーー！！！」
鈴はハイキックでヒンニャーを撃沈させた。

ネプテューヌ「・・・・・・すごっ」
ネプテューヌは唖然とし、銀時達も驚いている。
恭介「すごいだろ、あいつらは」
恭介はなぜか誇らしげに言う。

すると理樹が、
理樹「！危ない！」
ネプテューヌ「キャッ！」
突然ネプテューヌ抱きついたと思ったら、

ドガっ！

理樹「うあっ！」
何と隙を突いて襲いかかるハンニャーからかばったのだ。
銀時・恭介「なっ！」
来ヶ谷・謙吾・真人「っ！？」
鈴「理樹！？」
銀時達とリトバス組は驚く。

銀時「こんのやろ！！」
銀時はハンニャーを攻撃し、ハンニャーは倒れた。

恭介「理樹！しっかりしろ！」
恭介は理樹を抱え、リトバス組は理樹にかけよる。
理樹「いっつつ・・・・・・」
ネプテューヌ「大丈夫？理樹君」
理樹「・・・よかった。無事なんだね」
理樹は自分よりもネプテューヌを心配する。

銀時「ったく、無茶しやがるぜ」
銀時は皮肉なことを言うが、
銀時「けど、ネプテューヌを助けたんだ。許してやるよ」
ネプテューヌ「ありがとう。理樹君」
銀時とネプテューヌはお礼を言った。

理樹「・・・・・・・・・どういたしまして」

恭介達が理樹を医療室へ連れて行ってる頃、イストワールは考え事をしていた。
イストワール（今のモンスターは別次元の世界のモンスター・・・いったいなにが起こったのでしょう？）
そう考えるが、その答えを導けることはなかった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。今回のアシスタントは」

理樹「こんにちは。直枝理樹です」

銀八「そんじゃいくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「よ～しよしよし、良い子だな～」↑犬を手懐けて後ろにはぷすぷすとこげてる夢魔１０体が積み重なれていた。なお、ケーキは全て完食

ルイージ「流石兄さん…」

スネーク「俺達の中で一番強くて自分に悪意あるチートを無効化するからな…」

フォックス「それにしても…リトルバスターズのキャラが加わったな…作者少ししか知らないがどうなるのやら…」

だね…けれど、何か起きそうだね…

ネス「確かに」

リュカ「どうなるかな？」

マリオ「良し、真王に突撃♪」

犬「わうっ♪」

ルイージ「あっ、あっち行ったよ…」

スネーク「そんな訳でそっちのメンバーに質問『家のリーダーを見てどう思った？素直な感想を頼む』」

カービィ「は～いは～い僕からも皆に質問！『スマブラメンバー（DXでのキャラも含む）でコンビ組むなら誰と組む？』」

リュウケンドー「俺からも質問『真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは使って見たい武器はあるか？勿論自分のとこ以外のを頼むぜ』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「後、ちゃんと食べれるのを頼むぜ、もし食べれないのや生きてる奴を入れたらマリオファイナルだからな☆」』」

リトバス組が立ち上がる。

リトバス組「・・・あんたほんとに人間？」

銀八「俺もそう思う。二つ目と三つ目の質問は」

理樹「僕はヨッシーかな？あと、ホームランバットがなんか馴染む

んだ」

鈴「・・・ピカチュウだ。『ディーグレイマン』のダークブーツはあるか？」

恭介「俺はマリオを選ぶぜ。武器はダンテが持ってた銃を使うぜ」

真人「筋肉と言えばドンキーだ！武器なんかいらねぇよ！」

謙吾「俺はリンクだな。五右衛門の持ってた斬鉄剣を使ってみたいものだ」

小毬「私はカービィだよ～。スターロッドで魔法使いになろうかな～」

葉留佳「はるちんはミスターゲーム&ウォッチですヨ。武器はビームソードですね」

来ヶ谷「マルス氏だな。武器は謙吾氏と同じものだ」

クド「頑張り屋のあいすくらいまーなのです。りっぷすてっきはあるですか？」

美魚「サムスです。スーパースコープはありますか？」

銀八「ありがと。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

真王「そう言えばマリオさん、犬を返してくれたのはいいけどアナゴさんが『あぁぁぁぁぁぁぁんのぉぉぉぉぉおおおおくそがきめぇぇぇぇぇぇ・・・・・せぇぇいばいしてくれるうううううう

うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ』と怒りの形相であなたのとこへ向かって行きましたよ？」

銀八「でもよ～。あいつ確かチート無効化があるんだろ？無理じゃね？」

真王「噂だけどアナゴさんは新技を身につけたらしいよ。『チートなんぞ消してんじゃねぇ！！』っと言うカウンター技で問答無用で殴ることができるそうだ」

銀八「・・・・・・あいつ死んだな・・・（合掌）」

第十五訓：借りができたら返すのが礼儀（後書き）

真王「次回はネプテューヌがもっと変わった遊びがしたいと言い出す。そして恭介は、ある遊びを提案した」

恭介「次回『地味なものでも立派な武器になるゲームがある』ミッションスタートだ！」

第十六訓：地味なものでも立派な武器になるゲームがある（前書き）

真王「今回は『リトルバスターズ！』に欠かせないあのゲームが始まります！」

クド「わふっ！『リリカル銀魂』始まるなのれひゅ・・・あぅぅ～～」

真王「あらら・・・噛んじゃったか・・・」

第十六訓：地味なものでも立派な武器になるゲームがある

リトルバスターズが六課に住んで五日がたった。

ネプテューヌ「ねぇ～。なんか面白いのない～」

ネプテューヌが何か面白いことがしたいと言い出した。

理樹「え？面白い事って言われても」

理樹は対応に困っている。

ネプテューヌ「たまには野球以外でもやりたいことないの～？」

すると恭介が何かをひらめいたようだ。

恭介「面白い事なら俺に任せろ」

そう言って、部屋から出て行った。

ネプテューヌ「一体何の準備をしてんのかな？」

ネプテューヌがそう考えていると、恭介が戻ってきた。

恭介「ネプテューヌ、ちょっと外へ出てくれ」

機動六課・入り口付近

そこにはたくさんの人だかりがいた。

その中心には真人とネプテューヌがいた。

ネプテューヌ「・・・これから何が始まるの？」

ネプテューヌが聞くと、

恭介「まだ特別ゲストが来てないから待て」
と、待ったをかける。すると、

フェイト「ちょっとちょっと！これはいったい何！？」
銀時「一体何の騒ぎだ？」
フェイト達六課組と、銀時達万事屋組が来た。
恭介「お！来たな」
なのは「来たな、じゃないですよ！一体何をしようとしてるんですか！」
なのはが恭介に怒鳴るが、恭介は怯まず、
恭介「まぁまて。まず説明を聞いてくれ」

恭介は咳払いをする。
恭介「よし！今から真人とネプテューヌのランキングバトルを開始する！」
銀時達「ランキングバトル？」
恭介が言ったことに、銀時達は首をかしげる。

恭介「ルールは簡単だ。これから周りにいる観衆から武器になりそうな物を投げてもらう。お前達はその中から好きな道具を一つ選び、そしてそれを使って敵を倒す……ただし、直接相手の身体を自らの拳で殴るとかの行為は禁止だからな？」
さらに、と恭介は付け加える。
恭介「負けた者は勝った奴から称号をつけられる。後、女性はハンデとして落ちた物を拾っていいぞ」
恭介の説明は終わる。

真人「へっ俺が勝ってお前に恥ずかしい称号を付けてやるぜ！」
ネプテューヌ「それはこっちのセリフだよ！」
真人「よしおめぇら！武器よこせ！」

真人の声に、野次馬たちは武器になるものをいっせいに投げ込まれた。

ネプテューヌ「よし！・・・・・これだ！」
ネプテューヌが投げ込まれた武器から選んだのは、
ネプテューヌ「・・・・・ハリセン？」
お笑いなどでよくあるハリセンだった。

一方、真人は、
真人「またこんなしょぼいのかよ・・・」
割り箸を持っていた。
真人「まあいいや。コッペパンよりかはちょうどいい。これで勝負だ！」
コンパ「コッペパンで戦ってたんですか！？」
コンパが違う意味で驚く。
恭介「・・・・・なにがともあれ、バトルスタートだ！」
恭介の合図とともに、火ぶたが切って落とされた。

スイーツ大好き小学生
ネプテューヌ

ＶＳ

憎めない筋肉マン
井ノ原真人

ネプテューヌ「何さ！小学生って！」
新八「ネプテューヌちゃん、誰に言ってんの？」

ネプテューヌ「私からいくよ～～！」
ネプテューヌの攻撃。
ネプテューヌ「なんでやねん！」
真人に突っ込んだ。
真人「ぐはっ！」
真人に１００のダメージ！

はやて「なんかあんまピンとこーへんな～」

真人「今度はこっちから行くぜ！」
真人の攻撃。
割り箸で頬をつまんだ。
ネプテューヌ「いたっ！」
ネプテューヌに８０のダメージ！

銀時「つーかやってること地味じゃね？」
恭介「こっから先が面白いんだよ」

ネプテューヌ「いくよ！」
ネプテューヌの攻撃。
ネプテューヌ「アホか！！」
真人に突っ込んだ。
真人「ドオゥ！！」
真人に２００のダメージ！

はやて「・・・少しキレがつかめてきたんか？」

真人「くらえ！」
真人の攻撃。
割り箸で鼻をつまんだ。
ネプテューヌ「ふがっ！」
ネプテューヌに２００のダメージ！

ノワール「鼻をつまむって…」

ネプテューヌ「なんの！」
ネプテューヌの攻撃。
ネプテューヌ「お前の血は何色だ！！！」
真人に突っ込んだ。
真人「ぐわぁぁ！！」
クリティカルヒット！
真人に１０００のダメージ！

新八「どんどんキレが良くなってますね・・・」

真人「負けるか！」
真人の攻撃。
ネプテューヌ「おっと！」
ミス！
ネプテューヌはハリセンで防いだ。

ティアナ「ガードもありなのね」

ネプテューヌ「これでとどめ！」
ネプテューヌの攻撃。
真人「ぐわっ！」
真人に３００のダメージ！

真人「のおぉぉぉぁぁぁ！！！」
真人は倒れた。
ネプテューヌ「わ～い。勝った～」
ネプテューヌ、ＷＩＮ！！

真人が負け、ネプテューヌが勝った。
ネプテューヌ「恭介さん、確か勝った人は負けた人に何するんだったっけ？」
恭介「勝った奴は負けた奴に称号を与えるんだ」
ネプテューヌ「そっか～。じゃ真人にはこれだね♪」

真人は、『ヘタレ筋肉マン』の称号を手に入れた。

銀時達「ぶわはははははははははは！！！！」
称号を付けられたと同時に、銀時達が笑いだす。
真人「ヘタレいうなぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～！！！！」
真人は頭を抱えて、地面に突っ伏した。

ノワール「な、なるほど。確かに面白い遊びね。なら私はシグナムと挑戦するわ」
ノワールは、シグナムとランキングバトルで勝負しようとする。
シグナム「ほぅ・・・いいだろう、勝負だ」
シグナムはそう言って、レヴァンティンを構える。

恭介「こらこらこら！『ランキングバトルに自分の武器は使うな！』そこは覚えとけよ」
シグナム「むぅ・・・」

恭介の指摘に、シグナムをしぶしぶ従う。

ノワール「それじゃ、みんな！武器頂戴！」
シグナム「私のもだ！」
野次馬たちは武器になるものをいっせいに投げ込まれた。

シグナムが手にしたのは、
シグナム「く…黒ひげ・・・だと・・・」
樽にナイフを刺して、中にいる黒髪のおっさんを出してしまった人の負けという、よくパーティーかなんかで使われるようなおもちゃであった。
そしてその武器は……シグナムにとってはまったく役にたたないような武器でもあった

ノワール「私のは・・・・・・っと」
ノワールが手にした武器は……威力が強い方の部類に入る水鉄砲だった。
しかも、満タン。
変えタンク付き（もちろんこちらも満タン）。

シグナム「一応聞いておくが、これは本来通りの方法でしか使ってはいけないのか？」
シグナムが、もう一度恭介に確認をとる。
恭介は笑顔を崩さず、むしろ面白そうな表情を見せて、こう言った。
恭介「もちろん！　黒髪危機一髪なら、ナイフを刺して中にいるおっさんを飛ばさないといけない」
シグナム「・・・・・変な武器を手にしてしまったか・・・」
恭介「何がともあれ……バトルスタート！」
ショックを受けるシグナムを無視して、恭介は戦闘開始の合図を告げた

夢見る歌姫
ノワール
ＶＳ
荒ぶる戦闘狂
シグナム

ノワール「何この恥ずかしい称号！！？」
シグナム「私は荒ぶれてなどない！！」

シグナム「まずは私だ」
シグナムの攻撃。
シグナムは樽に剣を一本さした。
しかしおっさんは飛び出さない！

桂「運との勝負だな」

ノワール「今度は私よ」
ノワールの攻撃。
ノワールは引き金を引き、水鉄砲を放った。
シグナム「冷たっ！そして痛っ！」
シグナムに３００のダメージ！

スバル「水鉄砲っていたいの？」

シグナム「こちらの番だ！」
シグナムの攻撃。
シグナムは樽に二本の剣をさした。
しかしおっさんは飛び出さない！

エリザベス『２本さしたのに・・・』

ノワール「これ弾こめなきゃいけないの？」
ノワールは水鉄砲の準備をしている。

コンパ「隙ができてるです～！」

シグナム「いまだ！」
シグナムの攻撃。
シグナムは樽に三本の剣をさした。
しかしおっさんは飛び出さない！

銀時「またハズレかよ・・・」

シグナム「ぬあああああああああああ！！！！」
ノワール「自分に不運に呪いなさい」
ノワールの攻撃。
ノワールは水鉄砲を二回撃った！
シグナム「ぐっ！がっ！」
シグナムに３００のダメージ！
シグナムに４００のダメージ！

ブラン「二度撃ちってありなの？」

シグナム「これで・・・どうだ！」
シグナムの攻撃。
シグナムは樽に剣を二本さした。
勢いよくおっさんが飛び出した！
ノワール「ちっ！」
ノワールに５００のダメージ！

真人「やっときたぜ」

ノワール「もう一回詰め直さないと・・・」
ノワールは水鉄砲の準備をしている。

シグナム「これは取りに行かないと次の攻撃ができないのか！？」
シグナムは転がっていったおっさんを回収し、樽にセットした。

ノワール「もう終わりよ」
ノワールの攻撃。
ノワールは水鉄砲を二回撃った！
シグナム「っ！ぐっ！」
シグナムに３００のダメージ！
シグナムに４００のダメージ！

シグナム「馬鹿な・・・この私が・・・」
シグナムは倒れた。
ノワール「なかなかの相手だったわよ」
ノワール、ＷＩＮ！！

ノワール「さ、あなたにこの称号を与えるわ」

シグナムは、『情けない騎士様』の称号を手に入れた。

銀時達「ぎゃ～ははははははははははは！！！！！」

真人とくらべてかなりの笑い声を出す銀時達。

シグナム「ぬぐあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

シグナムは恥ずかしさで突っ伏した。

はやて「あ～おもしろいわ。ブランちゃん。うちと勝負しいひん？」

ブラン「いや」

即答した。

はやて「なんや、ブランちゃんは勝負をほっぽり出すのがいいんか？」

ピクッ！

ブラン「よし！いい度胸だ！勝負してやる！」

はやての言葉に反応し、勝負することになった。

はやて「そんじゃ、うちらに武器をくれへんか～」

はやての声とともに、野次馬たちは武器になるものをいっせいに投げ込まれた。

ブランが手にした武器は・・・・・ピコピコハンマー、そしてはやては、

はやて「ほ～、これは馴染みあるやないか」

ネプテューヌが使ってたハリセンだった。

恭介「よし！バトルスタートだ！」

小さな小説家
ブラン
ＶＳ
狸部隊長
八神はやて

ブラン「小さいは余計・・・」
はやて「誰が狸や！！」

はやて「まずはうちや」
はやての攻撃。
ブラン「っ！」
ブランに１５０のダメージ！

フェイト「あれ？割と普通だね」

ブラン「いく・・・」
ブランの攻撃。
はやて「無駄や♪」
ミス！
はやてはハリセンでガードした。
なのは「負けてないね、はやてちゃん」
はやて「こんどはうちや」

はやての攻撃。
ブラン「いた！」
ブランに２００のダメージ！
はやて「少しコツをつかんだで～」
はやてはハリセンの使い方のレベルが上がった。

桂「コツをつかむと戦況が変わるのか」

ブラン「きいて」
ブランの攻撃。
はやて「いたっ！」
はやてに３００のダメージ！
ブラン「・・・そういうことね」
ブランはピコピコハンマーの使い方のレベルが上がった。

ネプテューヌ「ブランも負けてないよ」

はやて「みてみぃ、うちの攻撃を」
はやての攻撃。
はやて「なにやっとんねんな～～～！！！」
ブランに突っ込んだ。
ブラン「ぐぅ！きゃぅ！」
クリティカルヒット！
ブランに８００のダメージ！
ブランに８００のダメージ！

ブラン「覚えてろよ・・・」
ブランは倒れた。
はやて「うちの圧勝や～」
はやて、ＷＩＮ！！

はやて「そんじゃ、ブランちゃんはこれをつけようか」

ブランは、『エターナルロリータ』の称号を手に入れた。

ブラン「～～～～～～～～～～！！！！！！！！！」

ブランは顔を真っ赤に染めて、

ブラン「死にやがれ！このぼけ狸が～～～～～～～～～～！！！！！！！！！（怒）」

はやて「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

はやてをハンマーで殴り飛ばした。

端っこで、ヴィータは泣きながら親指を立てた。

銀時達が押さえ、元に戻るまで数時間かかったそうだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

銀八「は〜い。今回のアシスタントは」

恭介「よう。この恭介さまがアシストするぜ」

銀八「んじゃいくぞ!ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「これをどうぞ」

アナゴ「あっ、どうもすいません」

ルイージ「…普通に和んでるよ」

スネーク「『正気に戻れ!!』と叫んだ後にハリセンで一閃したら普通のアナゴに戻ったな…」

マリオ「それにしても…なぜ俺が戦った敵があそこに…（ずず〜）」

アナゴ「おかしいですね（ずず〜）」

ルイージ「ちなみに兄さんは常識離れな事をしてますが人間です;」

マリオ「あっちに行きたいが…俺が行けるかどうか分からんしな…」

ルイージ「ネプテューヌさん達や銀さん達に質問『家の兄さんを四字熟語で表現するならどんな感じ?』」

スネーク「リトバスのメンバーに質問だ『銀時達を初めて見た際はどう言う印象だった?』」

フォックス「真王に質問『もしかしてリトバスメンバーもレギュラーに入るのか？それとも今の章だけか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ネス「どうなるのやら…」『」

全員が立ち上がる。

全員「・・・奇奇怪怪？」

銀八「そう思うよね・・・んじゃ次の質問」

リトバス組が立ち上がる。

理樹「まず銀時さんだけど、いつもだらけてた人だったね」

鈴「あの眼鏡は存在が薄いのか？」

小毬「神楽ちゃんはちょっとあれだけどいい子だったな～」

来ヶ谷「桂氏は面白い方だな」

クド「エリザベスさんは私と同じマスコットの匂いがするです」

美魚「月詠さんは顔に傷がありますがいい人でした」

理樹「なのはさんは優しそうな方でしたよ」

クド「フェイトさんも親切でした。でも少し私に対して過保護性があるのは気のせいでしょうか？」

恭介「はやては面白そうな奴だな」

謙吾「シグナムは修羅を乗り越えた者って感じがしたな」

小毬「ヴィータちゃんはあまのじゃくだけど可愛かったな～」

理樹「シャマルさんは厳しいけど優しい医療士さんでした」

クド「ザフィーラさんがしゃべるオオカミとは驚きましたです！」

真人「俺の筋肉が叫んでるぜ！スバルは強い奴だってな」

葉留佳「ティアちゃんはツンツンだったね」

来ヶ谷「エリオ少年とキャロ君はかわいかったな（キュンキュン）／／／／／」

理樹「ネプテューヌは元気な子だったね」

鈴「あたしには生意気なガキにしか見えん」

小毬「ノワールちゃんはティアちゃんみたいにかわいかったな～」

美魚「ブランさんは静かな方でしたね」

クド「ベールさんは大きい人なのです！（違う意味で）」

真王「最後の質問ですが、彼らはレギュラーです。他にもレギュラーキャラが現れることもありますよ。（例外もいるが）」

銀八「ハイそんなわけで、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

美魚「ところで思ったんですが『鳴神ソラ』さんのマリオさんは称号を付けるならどんなのですか？」

理樹「う～ん。『チートハンター』かな？」

鈴「『ゲテモノイーター』じゃないのか？」

恭介「いや、『スマブラの赤き大魔王』だと思うぞ」

真王「個人的には『チート界の破壊者』と思えるが」

銀八「待て待て！後半物騒じゃねぇか！そう思えるけども！」

美魚「でもマリオ×ルイージか、マリオ×リンクか、マリオ×スネークも悪くありませんね」

真王「なるほど。ホモなマリオが好きだと」

銀八「いや、きめーよ！おっさんとおっさんはきめーよ！！」

真王「諦めろ。これが彼女の性格だ」

美魚「どうせならマリオ×銀八ってのも」

銀八「やめてーーーーーーーーーー！！！！」

第十六訓：地味なものでも立派な武器になるゲームがある（後書き）

真王「次回は、銀時がグラナガンで散歩しに行った。が、銀時はトラブルに巻き込まれるのであった」

鈴「・・・次回『狙われた子供はほっとけない』テイクオフだ」

～予告～

ナレーション「生体ポットを積んだトラックが横転事故を起こした模様です」

第十七訓：狙われた子供はほっとけない（前書き）

真王「３００００ＰＶ且つユニーク３０００人突破ーーーー！！！」

全員「ぬぁ、ぬぁんだってーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

恭介「すげーぜ！ここまで人気があるなんて思いもよらなかったぞ！！！」

理樹「うん！読者の皆さま、ありがとうございました！！」

真王「テンション高いところでいくぞ！『リリカル銀魂』！！」

全員「始まります（るぜ）！！！！！」

第十七訓：狙われた子供はほっとけない

今日は機動六課の休日。

銀時「さ～て、どうしよっかな～」

銀時は、グラナガンの街の中で散歩している。

グラナガンに来る前は、なのは達がじゃんけんで勝負していたが、

銀時がこっそりと抜け出して現在の状況にある。

ちなみにネプテューヌ達は、銀時とは別のところにおり、恭介達はどこかで遊んでいる。

銀時がいろいろとまわっていると、

ズルズルズル・・・

何か物音が聞こえた。

銀時「ん？」

銀時は物音が聞こえた方を見た。

不審に思い、物音が聞こえた所へ向かった。人気のない路地裏に入った。

そこで銀時は、以外なモノを目にした。

小さな少女がいた。ボロボロの服を着ていて、左腕には鎖が巻かれていた。その鎖の先には、二つの黒いケースが繋がれていた。

銀時「オ…オイ！」

銀時は少女に駆け寄った。

そっと少女の肩に手を乗せる。

少女は顔を上げて、銀時を見た。

？？？「…だ…れ…？」

首を傾げながら、銀時に尋ねた。

銀時は改めて少女の状態を見た。
ボロボロの服に鎖に繋がれた二つのケース。
どう見ても普通ではない。銀時は厄介事の危険を察した。
確か元の世界でも、同じような事があったような。

そう、勘七郎の事件である。あの時は万事屋の前に、勘七郎という赤ん坊が置かれてあって、橋田屋の後継ぎ騒動に銀時は巻き込まれたのだ。
しかもその赤ん坊が、やけに俺に似てたんだよな。それで俺の隠し子疑惑が浮上しちまって酷い目にあ……。
そこまで考えた銀時は、思考を止めた。

ちょっと待て。もしこんな所をフェイト達に目撃されたら……。
そう思った瞬間、銀時は冷汗を流した。
銀時「お……俺は殺される!!」
ガタガタ体を震わせる。
アイツらきっと、俺を幼女誘拐犯とかと勘違いするに違いない。いや、前回と同じく隠し子だと勘違いされる可能性もある。
そうなったら間違いなく、俺は殺される。

銀時は顔を歪ませ、冷汗を流し続ける。
少女は、不思議そうに銀時の顔を見ている。
銀時は緊張して、唾をゴクリと飲み込んだ。

落ち着け、俺。
そうだ、親を探せ。
この迷子少女の親を探して見つければ、全て解決だ。
そう決意して、銀時は少女に笑いかけた。
銀時「なァお嬢ちゃん。パパ～、ママ～って呼んでみ」

少女「パ…パ。マ…マ？」
少女が、銀時の言った言葉を口にした。
すると、路地裏の入口に何かが現れた。
銀時は顔を上げて、路地裏の入口に現れたソレを見た。

？？？「グゥウゥウゥウゥウゥウ・・・・・・」
鳥の頭にライオンのような体のモンスター・グリフォンが現れた。
銀時「おいおい・・・ずいぶんと変わったお父さんだな」
銀時はグリフォンを見て笑う。

グリフォン「グオオ！！」
グリフォンは右手の爪で、銀時をひっかこうとする。
しかし銀時は少女を抱え、回避する。
銀時「ちっまた面倒なことになったな」
銀時はグリフォンを睨みながら舌打ちする。

少女が狙いとは考えにくい。それなら、少女の鎖に繋がれている二つのケースと考えるのが自然だ。
グリフォンがゆっくりと銀時達に近づく。
さて、どうしたものかと考える。
すると、下から着物が引っ張られた。銀時は下を見た。
グリフォンに怯えて、少女が銀時の着物を掴んでいる。
銀時は真剣な表情になった。

銀時「ったく、どうすりゃ「伏せなさい！」！！」
突然女の声が聞こえ、銀時と少女は伏せる。
グリフォンに丸いものが投げられた。銀時は瞬時に爆弾だときづいた。

ドガァァァン！！

グリフォン「グォオオオオオオ！！？？」
グリフォンは爆発に巻き込まれ、壁に叩きつけられた。
銀時と少女は起き上がる。

銀時「・・・なんだ？一体」
？？？「無事見たいね」
後ろから声が聞こえたので、振り返ると、紫色の髪は肩よりも少し上の位置で切りそろえられており、頭に黒のヘアバンドをつけており、黄緑色のリボンもつけている少女だった。少女の着ているセーラー服の左肩あたりに、『ＳＳＳ』というシンボルマークらしきものがあった。

銀時「あ…ああ。あんたは？」
ゆり「私はゆり。ＳＳＳ団の戦線リーダーをやってるわ」
銀時「は？ＳＳＳ団？」
少女・ゆりは、ＳＳＳ団と名乗るが、銀時には意味がわからないらしい。そこへ、

？？？「お～い！ゆりっぺ～！」
？？？「ゆり、こんなところにいたのか」
と言って現れたのは、恭介と同じようなオレンジの髪の少年と、青い髪で若干バカっぽいような少年だった。
ゆり「あら？来たの。音無君、日向君」
日向「ゆりっぺ、それひどくないか？・・・まあいいや、他の奴らもきたぜ」
そう言うと、ゆり達の後ろから大柄な男と眼鏡をかけた男と若干貧弱な少年とハルバードを持った男とやさぐれあんちゃんな男と忍者っぽい少女とバンダナを付けた外国人っぽい男と小悪魔のような衣装を着た少女と黒帽子をかぶった少年がやって来た。

そして遅れて、銀色の髪と金色の瞳の天使のような少女がやって来た。

ゆり「あらあら、みんなも奏ちゃんもきたんだ」
日向「いやだからそう言うのはひどくないか？」
日向が突っ込む。

銀時「・・・あの・・・おたくら誰？」
ハルバードの男「キサマァ・・・ゆりっぺにその口のききかたは何だ！」
ゆり「落ちつきなさい」
ゆりがチョップでハルバードの男をおとなしくする。

ゆりを含む全員が自己紹介をする。
ゆり「さっきも言ったけど私はゆりよ」
音無「俺は音無だ」
奏「私は奏」
日向「日向って呼んでくれ」
松下「俺は松下。柔道五段をやっている」
高松「私は高松です」
野田「フン・・・野田だ」
椎名「・・・椎名」
藤巻「藤巻だコラ」
ユイ「ユイです！はじめまして☆」
ＴＫ「ＴＫダヨ！レッツダンス？」
大山「あ…僕は大山です」
直井「最後は僕だな。直井文人様だ」
ゆり「あとここにはいないけどメンバーはいるわ。それであなたは？」

今度は銀時の番である。
銀時「俺は坂田銀時。『万事屋銀ちゃん』をやっているぞ」
大山「・・・万事屋？」
高松「なんでも屋ということですよ」
高松が大山に万事屋のことを説明する。

銀時「それにしてもおめぇら良く派手なことをしたな」
銀時は路地裏の破壊後を見る。
ゆり「しかたないじゃない。そうでもしないとあなたその子を抱えては戦えないでしょ？」
ゆりの言うこともっともだった。少女を抱えてはグリフォンに勝てるかどうかも疑わしかった。
？？？「譲ちゃんの言うとおりだぜ」
また別の声が聞こえた。銀時にとってすごく聞き覚えがある声が。

銀時「この声は・・・・・・・・・まさか大串君！」
大串君？「ちげーよ！！土方だこのやろ！」
大串く・・・・・・ゲフン、チンピラっぽい瞳孔が開いた男・土方は銀時にキレる。

沖田「ありゃ？旦那じゃねーですかい」
山崎「あ、ホントだ」
その奥から、腹黒くてドSな沖田と、地味な密偵員・山崎が現れた。
山崎「地味は余計だ！・・・っと、旦那はいったい何をやってたんですか？」
銀時「つーかそんなことよりなんでオメーらがここにいんだよ」
銀時は山崎に聞くと、
山崎「いや～、実は俺達不思議な光に巻き込まれてここにいるんですよ」
土方「クォラ！山崎！ばらすな！」

土方が山崎をけりつぶす。が、銀時は驚いた顔をして、

銀時「不思議な光ってお前ら・・・まさか」
銀時がきくと、土方があきらめた顔して答える。
土方「ああそうだ。ちなみに近藤さんもだ」
銀時「あのゴリラもか・・・」
真選組三大勢力＋αが不思議な光に巻き込まれたことを知った銀時。

山崎「ちょっと待て!!何でおれがαなの!!?」
ゆり「そこ、黙りなさい」
隣で山崎が何か言ってるが、ゆりが踵落としで沈める。

銀時「・・・一応聞いておくがこいつらは」
銀時がゆり達をさして土方に聞く。
土方「ああ、こいつらも光に巻き込まれたとのことでここにいるんだが、・・・なぜそんなことを聞くんだ?」
銀時「実は俺のとこにも光に巻き込まれたってのがいるんだ。九兵衛とリトルバスターズってんだが」
土方「・・・あの柳生のか」
リトルバスターズは知らないが、九兵衛という名前に眉をひそめる土方。

くいくいっ

銀時「ん?」
誰かが銀時の着物を引っ張っている。少女だ。
銀時「どうした?」
銀時は様子を見ると、少女はプルプル震えていた。
少女「オシッコ・・・」
全員「げっ!」

少女はトイレに行きたがっているが、ここにトイレはない。

銀時「やべぇよ。こんなところで漏らしちまったら俺達いろんな意味でおしまいだよ」

土方「何で俺達まで巻き込まれるんだよ」

沖田「土方さん。もうあきらめてくだせぇ」

日向「近くに公園があってそこにトイレがある。早く行くぞ！」

銀時達は、トイレのある公園へ走った。

少しして、路地裏にガサッ！と音が聞こえた。

グラナガン・公園

何とかトイレに間に合った銀時は、少女のようを済ませている。

外で土方とゆり達は待機している。

ゆり「にしてもあんたの知り合いってああいうチャランポランなわけ？」

ゆりがため息混じりで土方に聞く。

土方「あいつと一緒にすんな。・・・知り合いなのは当たってるが」

タバコを吸って答える土方。

土方「んで、お前らはどうすんだ？」

ゆり「情報収集が必要だからね。あいつに言っといて。『しばらく坂田銀時のいる機動六課にいる』って」

土方「そうかい。伝えてやるよ、あのマッド野郎によ」

ゆりの答えに承諾する土方。

日向「正直あんな恰好した奴らと一緒にいんのはウンザリだったしな」
音無「目のやり場に困ったしな」
大山「見てるの恥ずかしくって寝てられなかったよ・・・」
日向は愚痴をこぼし、音無はうんうんと頷き、大山は顔を赤くする。

すると銀時と少女が戻ってきた。
銀時「あ～～間に合った間に合った。あんがとな」
ゆり「どうってことないわ」
銀時はお礼を言い、ゆりは遠慮している。

ゆり「そうだ。私たちあなたのところに泊まりたいんだけど」
ゆりがいきなりこんなことを言い出す。
銀時「は？なにいってんの？お前らあのゴリラのとこにいるんじゃないの？」
ゆり達は近藤たちの家があるからそう言うが、
土方「安心しろ。近藤さんから許可をもらったぞ」
その近藤が許可したようだ。

銀時はため息を吐いた。
銀時「ハァ・・・ところで」
銀時は少女と向き合う。
銀時「名前はなんて言うんだ？」
ヴィヴィオ「ヴィヴィオ・・・」
少女はヴィヴィオといった。

銀時「そっか。ヴィヴィオはあんなところでどうしたんだ？」
と、ヴィヴィオに聞くと、
ヴィヴィオ「ママ・・・」
銀時「ん？」

ヴィヴィオ「ママとパパ、いないの・・・」
ヴィヴィオは親がいないと言った。

銀時「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
銀時は無言でヴィヴィオを見る。
銀時は昔から親がいない。まるで自分と同じ孤独なものなんだと、そう思った。
銀時「・・・そうか」
銀時の返事はそれだけだった。

ゆり「・・・・・・・・・・」
一方ゆりは、２人の様子を見て痛感していた。自分と弟と妹の４人の仲良しな光景と重ねているのだ。

しかし、それも長くは続かなかった。

ＩＢＧＭ：危機一髪！ｂｙスーパーペーパーマリオ

グリフォン「グオオオォォォォォォォォ！！！」
上空からグリフォンが降りて来たのだ。
ゆり「・・・・・人がせっかく感傷してるって時に」
ゆりはいらだち、グリフォンを睨む。

？？？「ガルルルルルゥゥゥゥ・・・・・」
後ろからモンスターのうなり声が聞こえた。
大きな爪と羽をもつ竜のようなモンスター・ワイバーンが現れた。
藤巻「もう一匹いやがったのか！？」
椎名「いや・・・・・あと一匹！」
椎名が叫ぶ。

？？？「ハハハハハハハハハハ・・・」
黒いローブと大きな血の付いた鎌を持つデスサイズが笑いながら現れた。

ＢＧＭ：ＶＳノーバディｂｙキングダムハーツ２（ｔｅｎｓｉｏｎ　ｒｉｓｉｎｇ　ＥＸＴＥＮＤＥＤ　ｋｉｎｇｄｏｍ　ｈｅａｒｔｓ　２）

土方「鳥に蜥蜴・・・挙句に死神まで現れるたぁ俺達は冥土の土産にされちまいそうだな？」
山崎「んなこと言ってる場合ですか！」
余裕な言い方をする土方に、山崎が突っ込む。

グリフォン「ギャアァァァァァ！！！！」
グリフォンが先にゆりに攻撃を仕掛ける。
ゆり「遅いわよ」
グリフォンの爪から避け、背中に乗る。
グリフォン「グオオ！！グゥエアアアアア！！！！！」
グリフォンが暴れて、ゆりを払い落とそうとする。
ゆり「ドウドウドウ！いやっは～～～！！」
対してゆりはロデオのようにグリフォンに振りほどかれないようにしている。

日向「うわ～・・・ゆりっぺすげ～」
音無「感心してる場合か！」
日向が感心しているところを音無が突っ込んだ。
野田「この鳥野郎！くたばりやがれ！」
松下「行くぞ！みんな！」
グリフォン「！！グゥオオオオオォォォ！！！！」
グリフォンは、ゆりと戦線メンバーと戦うのだった。

ワイバーン「グルルルルル・・・・・」
ワイバーンは土方と沖田と山崎を睨んでいる。
土方「よし総悟。あの蜥蜴野郎に一発ぶちかましてやれ」
沖田「へイ」
沖田はバズーカを持ってワイバーン・・・・・ではなく、土方に向けた。
土方「・・・なんでおれなんだ?」
沖田「いや~。土方さんもろともぶっ飛ばそうと思いまして」
土方「テメーから先にぶっ飛ばしたろーかアアァァァァァァ!!!!!」
土方と沖田は大喧嘩になった。

ワイバーン「ガルっ!」
チャンスと言わんばかりに、ワイバーンが不意打ちを仕掛ける。
土方「テメーは邪魔だ!!」
沖田「どいてくだせぇ!」
ワイバーン「グギャァァァァァァァ!!!」
土方と沖田が2人揃って刀でワイバーンと切り捨てた。

山崎「・・・初めからそうすればよかったんじゃないですか?」
隅っこで山崎がこうつぶやいた。

野田「オラッ!」
藤巻「ニャロッ!」
椎名「ハァッ!」
ユイ「死ねぇ!」
松下「せぇいやっ!」
グリフォン「グヴヴヴヴゥゥゥゥゥ・・・・・」
ゆりによってグリフォンは体力を奪われ、戦線メンバー達による攻

撃に消耗している。

ゆり「あなたは大人しくしてなさいっ！」
ゆりは手に持つナイフで、
グリフォン「グオ！・・・ゴォ・・・・・・」
グリフォンの息の根をとめた。

デスサイズ「ハハハハハハハハハハ・・・・・・」
銀時はデスサイズと対峙している。
銀時「全く、ははは笑いやがって」
銀時はため息を突く。

ヴィヴィオ「おじさん・・・」
銀時「安心しろ。パッパとかたずけてやるからな。・・・てかおじさんじゃなくてお兄さんって呼べよな」
銀時はヴィヴィオを安心させる。
デスサイズ「ハハハハ・・・・・・ソノガキトイッショニアルモノヲヨコシナ」
なんとデスサイズがしゃべった。
銀時「何だしゃべれるじゃんかよ。てっきり笑うだけかと思ったぜ」
デスサイズ「ズイブントヨユウダナ？ソノケースヲワタセバミノガシテヤッテモイイガ？」
銀時「見逃す？隙を突いて殺す気だろテメー」
銀時は睨む。

デスサイズ「スルドイナ。ソノケースノナカミニハオオキナエネルギータイガアルンダ。ソノチカラニハダークソウルノチカラヲゾウフクサセルニチガイナイトオモウノダガナ」
デスサイズの言葉に、銀時は耳を疑った。
銀時「ダークソウル！？何でテメーが知ってんだ！」

デスサイズ「カンタンダ。ワタシハダークソウルカラウマレタノダ」
銀時「なっ！」
デスサイズはダークソウルから生まれたと言った。

パープルハート「その話本当なの！？」
上からパープルハートがやってきて、他の女神たちやコンパとアイエフもやって来た。
デスサイズ「メガミカ、チョウドイイ。ダークソウルカラウマレタノハホントウダ。コノカラダハアルアクマヲベースニカタチヅクラレ、ソシテイマノワタシガイルノダ」
デスサイズは説明した。

パープルハート「・・・あなたがダークソウルから生まれたのは分ったわ。そして、あなたはここにそんざいしてはいけないわ！！」
パープルハートは刀をデスサイズに向けて言う。
銀時「そう言うこった。だからテメーは」
銀時とパープルハートが武器を構えて、
銀時・パープルハート「さっさと消えろ（なさい）！！！」
デスサイズを切り捨てた。

デスサイズ「グゥッ！・・・・・ワタシヲケソウガ、イツカアノオトコトアノオンナガダークソウルデセカイガコワレルダロウヨ」
パープルハート「それでも・・・私たちは立ち止まらないわ」
デスサイズ「・・・ソノイキゴミガドレダケツヅクノカナ？・・・サラバダ！」
デスサイズは砂のように消えていった。

パープルハート「・・・・・・・・・・・・・」
パープルハートは無言になる。
銀時「・・・ネプテューヌ」

パープルハート「・・・ごめんなさい。ぼーっとしてたわ」
パープルハートは銀時に謝る。
パープルハート「・・・ところで銀時、その子は？」
パープルハートはヴィヴィオを指差す。
銀時は大量の汗を出している。

パープルハート「銀時・・・」
銀時「いやいやいや違うからね！別にさらったんじゃないからね！！」
銀時は必死に弁解する。
するとアイエフは、ケースを開けた時驚く。
アイエフ「ちょっと！これ『レリック』じゃない！」
アイエフの言葉にパープルハート達が驚く。

ブラックハート「・・・何かわけありみたいね。回収しましょ」
グリーンハート「銀時さん。そしてあなた方も六課に来ていただけますか？」
グリーンハートが銀時とゆり達と土方達に言う。すると土方が、
土方「わりぃ、近藤さんを一人にさせるのは無理なんだ。そいつらだけでいいぞ」
グリーンハート「・・・・・わかりましたわ」
グリーンハートは承諾し、土方達は帰っていった。

パープルハート「銀時、なのは達が待ってるわよ」
銀時「できれば嫌なんだけどな」
銀時は頭をかきながら六課へ戻っていった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。今回のアシスタントは」

鈴「・・・・・・鈴だ」

銀八「おいおい・・・まいっか。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問。『読みましたいやぁオモロイ勝負ですねぇ見てておなか痛かったです何時か自分もやってみたいです・・・ボーボボであいつら最強ですからねぇ

んじゃ時代に合わせてこちらも質問させて頂きます

パチ美

「やっほ～、ｓｉｂｕｇａｋｉが書いてる小説「リリカルボーボボ」の真のヒロインのパチ美が質問させて貰うわよぉ。この中でもしバ

トルで使うとしたらどの武器を使うのぉ？

1．ワカメ
2．鼻毛
3．サービスマン
4．伊藤さん
5．そんなことより僕の日記帳知らない？

この質問は今回勝負に出た方達に答えてもらうわぁん。絶対に答えてねぇん♪」

あぁ気持ち悪い・・・以上です
パチ美の存在に気分を悪くされた方達・・・ガンバ！』」

全員が立ち上がる。

全員「全部いやです」

銀八「だな。『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に立ちなさい。次はペンネーム『鳴神ソラ』さん。『ふぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！（怒×１００）

ルイージ「作者の怒りが爆発したぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

スネーク「いかん！リトバスメンバーの美魚が最後でマリオや俺達をＢＬな目で見てさらにカップリングなどを言ったから作者の怒りが頂点に高まった！！」

ネス「まあ…美魚さんに言うなら…『さあ、お前の罪を数えろ！』だね」

リュカ「そんな事言ってる場合じゃないよ！！作者がデビルランチャーやら色々と凄いものの果てに世の中に出てる全ての××料理の集大成な（こっちでの）ピーチ姫の××料理を出しちゃってるよ！！」

フォックス「誤れ！早く誤らないとそっちに色々行くぞ！！」

マリオ「凄い称号ばっかだな…俺、そんなに奇奇怪怪か？」

ソニック「Ｈｅｙ，良く凄い料理を食べてるからじゃないか？…まあリトバスメンバーに質問『俺を四字熟語で表現するならどんな感じになるんだ？』」

スネーク「マリオと組んだら最強のコンビだからな作者のスマブラだと…ネプテューヌ達に質問『自分達的に戦いたくない相手はいるか？』」

フォックス「俺からも質問『今回不名誉な称号を付けられたメンバーは戦った相手に勝ってたらどう言う称号を付けてた？』」

ネス「まあ…作者が今暴走中なので僕が代わりに…次回を楽しみにしてます♪」

ふぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！（怒×１００）

フォックス「落ち着け作者！！」

マリオ「…何で作者暴走してるんだ？」

ソニック「さあ？」』ってやっぱ前回のが駄目だったじゃん！どうしてくれるんだよ作者！」

真王「スキマですべて消した」

銀八「対応早っ！・・・まいっか。最初の質問は」

リトバス組が立ち上がる。

リトバス組「電光石火！」

銀八「即答かよ！しかもポケモン！？」

理樹「ごめん。これしか思いつかなくて」

ネプテューヌ「２つ目は私達気持ち悪いものは嫌なんだよ」

銀八「そうか。じゃ３つ目は」

真人・シグナム・ブランが立ち上がる。

真人「俺が勝ったらあいつを『貧弱者』にしてやったぜ」

シグナム「私なら『ツンデレ娘』にしてやったぞ」

ブラン「・・・あいつを『ちびグソ狸』にしてやりたかった」

銀八「ブランちゃん！！？年頃の女の子が汚い言葉を使ってはいけませんよっ！！！」

鈴「・・・『鳴神ソラ』。廊下に立ってろ」

銀八「は～い。きょうの銀八先生はここで終わｒ「ちょっとまった～～～～！！！」ってなんだ？」

葉留佳「いや～。間に合いましたネ。もう少しで終りかけましたヨ」

銀八「はぁ？一体何する気なんだ？」

葉留佳「私とクド公が『鳴神ソラ』さんにちょっとした疑問を答えてもらおうと思いましてネ」

クド「では質問です。『マリオさんと当麻さんはどっちが強いですか？』」

理樹「当麻さんって『とある魔術の禁書目録（インデックス）』の主役の人だね」

銀八「何でそいつが出てくんだ？」

理樹「推測だけど、当麻さんは幻想殺し（イマジンブレイカー）を持っているからマリオさんと互角に戦えるんじゃないかって」

葉留佳「そう！マリオさんの持つ『チートブレイカー（葉留佳、命名）』があっても当麻はそれを効果なく消せるって思ってるんですヨ」

銀八「てかそのチートブレイカーが幻想殺し（イマジンブレイカー）を消すんじゃね？」

恭介「いや、その幻想殺し（イマジンブレイカー）は彼の右手に固

定しているから消えないぜ」

葉留佳「そういうこと。あ、わたしから質問『マリオとボーボボがハジケ勝負をしたらどっちが勝つんですか？そしてマリオさんは『サービスマン』と勝負したら勝てますか？』」

恭介「ボーボボのハジケはすごいからな。さすがのマリオでもちょっとは参るんじゃね？」

銀八「いやしらねーよ。ってかサービスマンってあの絶対に見てはいけない技を持つあいつか。作者、どっちが勝つと思うんだ？」

真王「シラネ」

第十七訓：狙われた子供はほっとけない（後書き）

真王「六課に住むことになったゆり達、そしてさらに意外な客が現れる？」

ゆり「次回『ペットの扱いは計画的に』オペレーション・スタート！」

～予告～

ナレーション「ミッドチルダで大きな犬の目撃情報があります」

～つぶやき～

真王「ネタづまりで遅れてしまったな・・・」

第十八訓：ペットの扱いは計画的に（前書き）

真王「…最近ネタ詰まりで更新が遅くなってきてるな」

銀時「おいおい…しっかりしろよ」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』はじまるよ」

第十八訓：ペットの扱いは計画的に

機動六課
銀時とネプテューヌがレリックとヴィヴィオを見つけた事で、機動六課の休日は強制終了。全員制服に着替えて、機動六課隊舎に集まった。

部隊長オフィス

はやて「まさかレリックを見つけてくるとは驚きやな」
はやてが驚き半分、呆れ半分で言った。
はやて「しかも…」
視線を銀時の隣に向けた。

ヴィヴィオが、銀時の着物を掴んでいた。
はやて「小さな女の子まで連れて」
銀時「しょうがねーだろ。あのまま置いてく訳にもいかねーし」
メンドくさそうに銀時は答えた。
なのは達がやってきた。

なのは「さっき陸士１０８部隊のギンガから連絡があって、銀さんがその子を見つけ近くの場所で、トレーラーの横転事故が発生してたの」
フェイト「その現場で、中身が空っぽの生体ポッドと、何か重い物を引きずっていった痕を発見したって」
なのはとフェイトが報告した。

リインフォース「では、その生体ポッドの中に入っていたのは、この少女だと？」

リインフォースがヴィヴィオを見つめた。
フェイト「そうだと思います。さっきこの子の体を検査してみたら、人造生命体である事がわかりました」
最初は検査を嫌がったヴィヴィオだったが、銀時の説得で何とか検査を受けてくれた。

桂「ここ最近の貴様のハーレム生活には面白半分で見ていたが、まさか幼き少女までナンパされるとは」
銀時「おーい、どのように見ればこの子が俺にナンパしたと確信したんだヅラ君？」
桂「ヅラじゃない桂だ」
銀時「で？このガキどうすんだ？」

銀時がみんなに聞いた。
銀時「此処で保護するに決まってるやろ？その子、銀ちゃんに懐いてるようやし」
はやてが当然とばかりに言った。
銀時の中でイヤな予感がした。
銀時「ちょっと待て。え？まさか俺がこのガキの保護者になんのか？」
この流れでいくと確実にそうなる。

何とかそれだけは阻止したい。これ以上の面倒事は、ハッキリ言って御免だ。
はやて「当たり前や。今日から銀ちゃんは、その子のパパや！」
ビシィ！と銀時を指差して、はやてが言った。
ヴィヴィオ「パパ？」
ヴィヴィオは銀時を見上げながら呟いた。
銀時「じょ…冗談じゃないぜ！俺はガキの面倒なんて見ねェぞ！」
銀時は声を荒げて断った。

すると、ヴィヴィオが銀時の着物を引っ張った。銀時が下を向くと、
ヴィヴィオが着物を掴みながら銀時を見上げてる。
ヴィヴィオ「パパ」
上目使いで銀時を見つめる。
銀時「う…」
うるうると潤んでるヴィヴィオの瞳に、銀時はたじろいだ。
銀時「よ…止せ！そんな無邪気な瞳で俺を見るんじゃねェ！」
上目使いをやめるように言う。
だがヴィヴィオは、上目使いをやめない。

はやてと桂は、ヴィヴィオの上目使いにたじろいでる銀時を見て笑っている。
そして銀時は、ヴィヴィオの上目使い攻撃に耐えられなくなり、
銀時「わかったよ！俺が面倒見ればいいんだろ！？やってやるよコノヤロー！！」
ヴィヴィオの面倒を見る事になった。
ヴィヴィオは嬉しそうに、銀時に抱き付いた。

はやて「決まりやな」
リイン「頑張ってください、銀さん！」
リインが応援した。

銀時「ったく。あ、そう言えばあいつらはどうしてるんだ？」
はやて「あいつら？ああ、その子と一緒に連れて来たあの子たちやな」
ヴィヴィオと一緒に連れてきたゆり達のことだと考える。

銀時「そいつらはいったい何やってるんだ？」
銀時は、ゆり達の様子を聞く。

はやて「ちょっと待ってぇな」
はやては、ゆり達戦線メンバーとネプテューヌ達とリトルバスターズの様子を見るためにモニターを開くと、

ゆり「待ちなさいよあんた！」
恭介「待てと言われて待つ馬鹿がいるか！」
ネプテューヌ「わ～助けて～～！」

野田「テメ～、やんのかクソガキ！」
ヴィータ「それはこっちのセリフだ！後あたしはガキじゃない！」

神楽「好きなものは酢コンブに限るヨ」
松下「俺は肉うどんだな」

真人「お前はいい筋肉を持ってるじゃないか」
高松「フフッ分りますか」

ユイ「センパ～イ。新技かけさせてくださいよ～☆」
日向「イヤに決まってんだろうが！」
ブラン「・・・・・・・・・・・・（2人の様子を眺めている）」

エリザベス『こんにちは』
椎名「・・・あさはかなり」
来ヶ谷「ふむ」

直井「音無さん！もっと僕を慕ってください！」
音無「いやだからわかったから！つーかお前ら何見てんだ？」
奏「別に」
美魚「何でもないです（・・・音無×直井もよしです）」

ＴＫ「マイネームイズＴＫダヨ！ＯＫ？」
クド「クドリャフカなのです！ないすとぅみ～とぅ～」
ノワール「変わった会話ね・・・」

藤巻「テメっまちやがれ～！！」
葉留佳「あははは～～～～！」

カオスが広がっていました。
銀時「・・・・・・・・・・なにこれ？」

隊舎のロビー。
ヴィヴィオを連れた銀時と、フェイト達が集まっていた。

スバル「ええっ！？銀さんがその子の面倒見るんですか！？」
スバルが驚いた声を出した。
周りのみんなも驚いている。確かに銀時が子育てなんて、想像もできない。
ちなみにゆり達は、すでに自己紹介を終えている。

神楽「マジ最悪ネ。少女にまで手を出すなんて侍の欠片も全然ないアル」
銀時「誤解する言い方辞めてくんねェ？手を出したっと言うより出されたから」
誤解する言い方をする神楽に銀時は軽くツッコむ。

月詠「しかし、ぬし一人に子育てなど出来るのか？」

月詠が銀時に尋ねた。
ちなみに、今は煙管をくわえていない。さすがに小さな女の子の前では煙管は吹かせない。

フェイト「大丈夫ですよ。私が一緒に面倒を見ますから」
そう言ったのはフェイトだった。
なのは「何を言っているのフェイトちゃん？ヴィヴィオの面倒は私と銀さんが見るんだよ？」
対抗意識を持って、なのはが言い出す。

ティアナ「いやいや、大人だからって出来るとはかぎりませんよ？ここは妹である私が兄さんと……」
リインフォース「妹が兄の妻になるなんてあり得ないから！！」
ティアナがヴィヴィオの母になると言い出すが、リインフォースがそれを否定する。
リインフォース「ここは、銀時と一体化できる私こそ母親になるべきだ！」
リインフォースが高々と宣言する。

シグナム「貴様等では任せられない。ヴィヴィオの面倒は、私と銀時が見る」
腕を組んで、シグナムが言った。
アルフ「あたしが銀時と一緒に面倒見る～！」
ハイハイ！と手を挙げてアルフも言った。

ヴィータ「どうすんだ、銀時？」
ザフィーラ「ここはお前が決めるべきだと思うが？」

ヴィータとザフィーラは銀時にどうすべきかと言い出す。
銀時は困ったように頭を掻いた。

そこに……

ネプテューヌ「へぇ～ヴィヴィオちゃんって言うんだ～」
ヴィヴィオ「そうだよ、お姉ちゃん」
ネプテューヌがヴィヴィオと話し合っていました。

ネプテューヌ「あはは～私はネプテューヌって言うんだよ～」
ヴィヴィオ「ネプト・・・ネプ・・・ねね・・・」
まだ幼いヴィヴィオでは、ネプテューヌとはっきり言えないようだ。
ネプテューヌ「あ～、呼びづらいならネプ姉ちゃんって呼んでもいいよ」
ヴィヴィオ「ネプ・・・姉ちゃん」
ヴィヴィオがネプテューヌを呼ぶ。

ネプテューヌ「何？ヴィヴィオちゃん」
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！」
返事をしたネプテューヌに、ヴィヴィオはぱぁっと明るくなって抱きつく。

銀時「・・・何かあいつ、子供の扱いうまくね？」
銀時のつぶやきに、なのは達はうなずく。

ノワール「ずいぶんとかわいくやってるじゃない？ネプテューヌ」
ブラン「・・・・・・・・」
ベール「あらあら、かわいらしい子がいますね♪」
ヴィヴィオとじゃれ合っていると、ノワールとブランとベールが来た。
ヴィヴィオ「！？」
ヴィヴィオは三人を見た瞬間ネプテューヌの後ろに隠れた。

ネプテューヌ「大丈夫だよヴィヴィオちゃん。この人たちは怖い人たちじゃないから安心して」
と、ヴィヴィオの背中を撫でて安心させる。
ヴィヴィオ「・・・・・・・・・・」
ヴィヴィオは3人を見ている。

ノワール「こんにちは。ノワールって言うのよ」
ブラン「・・・ブラン」
ベール「ベールと申しますわ」
ヴィヴィオに対して自己紹介する3人。

するとヴィヴィオが、
ヴィヴィオ「ノワール・・・お姉ちゃん・・・?」
ノワールの眺めて言う。
ノワール「お・・・お姉ちゃん!?」
ノワールはお姉ちゃんと呼ばれて驚く。
ネプテューヌ「あれ?いやなの、呼ばれるの」
ノワール「い・・・嫌なわけないわよ!というかもっとお姉ちゃんって呼ばれたいって言うか・・・・・・って何言ってんのよ私はーーーーーーーー!!!!!」
ノワールは恥ずかしさで頭をガンガン壁にぶつける。

次はブランを見る。
ヴィヴィオ「ブランお姉ちゃん?」
ブラン「何?」
ブランはヴィヴィオに天使のような笑顔で返事をする。
ブラン自身はお姉ちゃんと呼ばれるのがうれしいようだ。

来ヶ谷「ハァ・・・ハァ・・・あそこに見えるのは天使たちなのか?／／／／／」

来ヶ谷が息を荒くして、鼻血をボタボタ流している。

恭介（やべっ！来ヶ谷の病気だ！）
理樹（来ヶ谷さん！それじゃ危ない人ですよ！）
ゆり（な・・・何？あの人すっごい鼻血出してるけど）
ユイ（あれ？なんかいやな予感が・・・）
銀時（何あの人・・・すっげー鼻血出してるんですけども・・・）
神楽（なんかいろんな意味でやばいネ・・・）
キャロ（あれ？なんだろ？ものすごい悪寒が・・・）
フェイト（エリオとキャロがえらい目に会いそう・・・そして私達も・・・）
鼻血を出している来ヶ谷に、周りの人はみんな引いている。

最後にヴィヴィオはベールを見た。
ヴィヴィオ「ベールお姉ちゃん？」
ベール「はい♪」
ベールは笑顔で返事をした。

ネプテューヌ「ん？」
ネプテューヌは何かを見つけて、外へ出た。
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん？」
ヴィヴィオも外へ出た。
銀時「なんだ？」
銀時達は、ネプテューヌとヴィヴィオの後を追った。

外に出た銀時達は、ネプテューヌとヴィヴィオを探していると、

ネプテューヌ「あはははは、よしよしいい子だね～」
ヴィヴィオ「わ～い♪」
大きな犬「ワンっ♪」
ネプテューヌ達は、人間2人くらい乗せられそうな犬に乗っかっていました。

銀時・神楽・新八「定春!?」
銀時達のペット・定春だった。

理樹「うわっ!何これ!」
真人「デケぇ!」
クド「わふ～。大きな犬さんなのです～♪」
小毬「ホントだ～」
音無「な、何だこの犬!」
ユイ「おお～。でかいですね～」
椎名「あ、あさはかなり」
みんなも定春に驚いている。

銀時「定春!お前なんでここn「ワンっ」ギャアアアアアアア!!!」
銀時が近付いたら、定春がかみついてきた。
ネプテューヌ「定春くん駄目だよ。はなしなさい。メ～」
ヴィヴィオ「メ～だよ」

定春「ワフッ」
ネプテューヌが命令すると、定春は放した。

銀時「だ～ったく相変わらずかみつきやがって」
???「よくやられるんですか?」
銀時「やられるにも何もこいつは何でもかんでもかみついてぇえええ

ええええええええ！！！！！！」
銀時は、いつの間にか真横にいた金髪のツインテールの少女に驚く。

ゆり「あ！、もう来たのね。遊佐さん」
遊佐「ハイ」
銀時「ってオメーの知り合いかよ！」
銀時はゆりに怒鳴るが、ゆりは無視する。

ゆり「…ところで今あなただけなの？」
遊佐「いえ、彼女達もいますよ」
？？？「そういうこった」
そう言ったのは、赤いショートの髪でギターケースを背負った少女。
その後ろには、彼女の仲間らしき3人の少女達がいた。

ユイ「岩沢さん！」
ユイが少女・岩沢に駆け寄る。
ゆり「紹介するわ。私達の仲間の」
岩沢「岩沢だ。『ガルデモ』のボーカルをやってる」
ひさ子「あたしはひさ子。リードギターをやってる」
入江「ドラム担当の入江です」
関根「ベースの関根だよ～」
それぞれ自己紹介するが、銀時はガルデモという単語が気になった。

銀時「・・・何だ？そのガルデモって？」
新八「銀さん知らないんですか！このミッドチルダで有名な人たちですよ！」
新八が銀時に怒る。

銀時「しらねーよ。つーか新八は知ってんのか？」
新八「当たり前です！『ガールズ・デッド・モンスター』、通称『

ガルデモ』は４人の女子でありながらミッドチルダで大熱狂を博したアイドルメンバーズなんですよ！」

ユイ「そう！クールビューティーな岩沢さんを筆頭にギターのひさ子さん、ドラムの入江、ベースの関根が演じるガルデモですよ！ミッドチルダで知らないものなどほとんどいません！」

新八とユイが、ガルデモについて説明する。アイドルと呼ばれた岩沢たちは照れくさそうなしぐさをする。

ユイ「特に『Ａｌｃｈｅｍｙ』は私にとっては大好きな曲ですが、『Ａｌｃｈｅｍｙ』もまた捨てがたいですし後・・・」

銀時「だ～！！分ったからもういいって！」

銀時は耳を押さえる。

銀時「あっ…つーかおまえら何で定春と一緒に？」

銀時がきくと、

ガルデモ『拾った』

即答した。

銀時「・・・にしてもあいつら仲良く懐いてんなァ」

銀時は、定春に懐いているネプテューヌ達に目を向ける。

ネプテューヌ「ホラホラッ、よしよし♪」

ヴィヴィオ「わ～い♪」

クド「わふ～っ！」

小毬「かわいいね～♪」

ブラン「・・・・・・・・・・（寄り添っている）」

定春「ワンっ！」

ネプテューヌ達はとても楽しそうだ。

椎名「・・・・・・・・・」

椎名が近付いて、定春に触ろうとしたら、

定春「ガう♪」
バックリと食われた。それも顔面から。
頭がすっぽりと定春の口の中へ。当の定春は尻尾を振っている辺り、じゃれついているだけなのかもしれない。

新八「椎名さんんんんんんんんんっ！！！！」
ゆり「ちょっ、椎名さん！早く離れて！」
食べられた椎名に新八が叫び、ゆりが離れるように指示する。
この光景を新八も神楽も見たことがあった。
なんというか、主に銀時が交通事故にあって記憶喪失になったときみたいに。

椎名「邪魔をしないでくれ。こんなかわいい犬を抱けるのが夢みたいだ。うれしすぎて意識が飛びそうだ…」
新八「よくねぇエエエエエエエエ！！！！！意識が飛んだら間違いなく天国へ直行ですよオオオオオオオオオ！！！！！」
言ってる傍から血をだらだらと流す椎名に鋭い切れのある新八のツッコミが入り、それから慌てて助けに入る。さすがは新八。ツッコミという一点だけ見れば間違いなく一流である。

椎名「アァ・・・私はかわいい犬に食われて死ぬだなんて・・・いいかも／／／／」
ゆり「よくないィィィィィィィィィ！！！！！このまま逝っちゃったら間違いなく死後の世界に直行するわよォォォォォォォォォォォ！！！！！」
音無「早く助けろっ！！椎名が危ない道を進もうとしてるぞっ！！」
必死に止めに入る新八。止めに入りながらもそのツッコミの切れは未だに健在。定春の中で「はぁぁぁぁあ」なんて心底悦に入った吐息を漏らす椎名。一方の神楽は酢昆布を口にし、完璧に無視を決め込んでいて、銀時はそんな様子の面々をみて小さくため息。

どうやら、こっちの世界でもいつもみたいに、……いや、いつも以上に騒がしくなりそうだなんて思いながら、やっぱり助けには入らなかった。

そして椎名を放したのは1時間に及んだらしいが、椎名は腑に落ちないような顔をしたそうだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「おし！そんじゃ始めるぞ～。まずアシスタントは」

ゆり「ＳＳＳ団戦線リーダーゆりがアシストするわ」

銀八「そんじゃ行くぞ。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問。『何と新撰組全員集合ですか

こりゃ楽しみだ

んじゃ質問

作者「どうも、前回は質問にご返答頂き有難う御座います。懲りずに質問致します。

まず銀さんに質問ってか・・・もういっそのこと一夫多妻制の国に行っちまえば?そうすりゃあんたに惚れてる子全員と末永く暮らせるよぉ（ニヤニヤ）

んでもう一つ

黒神さんのところだと銀さんは魔道士化しましたが、もしかして此処だと土方、沖田も魔道士化しますか?ってかして欲しいと思います・・・以上です」』」

銀時が立ち上がる。

銀時「いや…そんなとこ行ったら俺どの道いやな目に会うんですけれども・・・」

真王「2つ目ですが、しません」

ゆり「七股かけた男って・・・最低ね」

銀八「同感だ。『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に立ってなさい」

ゆり「つぎはペンネーム『鳴神ソラ』さんからね。『マリオＶＳ当麻なら普通にマリオが勝ちます。理由は能力あってもなくても2人の戦いの経験では家のマリオは能力が使えなくても当麻より経験が豊富なのと技も沢山あるので勝てます…そしてボーボボとなら…引き分けだな…後、サービスマンとなら楽勝でマリオの勝ちです。

フォックス「だよな…と言うか…また新しい作品の出たな；」

スネーク「他にも色々と敵でモンスターが多いな…んで土方達はあの博士の所にいるようだな…」

ルイージ「それにしても…ダークソウルって一体なんなんだろうね…」

ソニック「確かに…モンスターを呼ぶ以外は謎の奴だよな…」

ネス「んで来るんだね…神楽さんのペットが…」

リュカ「どうなるんだろう；」

ルイージ「それでリトバスの皆に質問『僕を四字熟語で表現するならどんな感じになる？』」

スネーク「今回出てきたゆり達に質問だ『銀時達を初めて見た際はどう言う印象だった？』」

フォックス「皆に質問『真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは出て来て欲しくない敵キャラはいるか？ちなみにチートキャラとかバグキャラと呼ばれるのは省いてくれ』」

マリオ「させ…次回はどうなるのやら…」

スネーク「平和だな…」

ルイージ「そうだね…何もこないから平和だよ」

うむ…

ネス「だね」『…ズバリ答えてあげましょう」

リトバス組が立ち上がる。

リトバス組「・・・付和雷同？」

銀八「あ～っマリオがさきさき進むからかもしれんなァ。んじゃ次は」

ゆりを含む戦線メンバーが立ち上がる。

ゆり「まず銀時はグータラのチャランポランよ」

藤巻「あの眼鏡は若干俺と同じような雰囲気がするのは気のせいか？」

ユイ「神楽さんはアホな人ですね☆」

椎名「桂　小太郎・・・あいつはできるな」

大山「エリザベスさんはちょっと不気味な人一（？）だったね」

椎名「月詠・・・彼女はいい忍者だな」

音無「なのはさんはしっかり者だったな」

日向「フェイトさんもだったな」

関根「はやてさんは悪戯好きな人なんだね～」

ひさ子「シグナムさんはすっげぇ強そうだぞ」

野田「俺はちっこくて生意気なヴィータってやつが気に食わん！」

入江「シャマルさんは看護師さんなんだね」

高松「ザフィーラさんはよい男気がありますね」

松下「スバルはなかなかの腕力を持ってそうだ」

直井「あのティアナって子はかなりの射的能力を持っているようだ」

音無「エリオは小さいながらも強そうだ」

日向「俺はキャロよりも隣のフリードってやつに驚いたな」

ユイ「ネプちゃんはいい友達になれそうだね～☆」

関根「そうだね～☆」

入江「ね～☆」

ゆり「ノワールは・・・まあ頑張り屋さんね」

松下「ブランがあんな重たそうなハンマーを軽々と持ち上げられるのが正直驚いたぞ」

ＴＫ「イッツ、パワードガールッ！」

ユイ「ベールさんは大きい人だ！（違う意味で）」

銀八「ありがと。んじゃ最後の質問だ」

リトバス組、ＳＳＳ団以外の全員が立ち上がる。

銀時「正直オレはゴースト系は来ないでほしい・・・（ビクビク）」

新八「僕もです・・・」

神楽「私もイヤネ！」

桂「俺は苦手な奴などいない」

エリザベス『同じく』

月詠「わっちは苦手なものなど克服しておるぞ」

なのは「私はお化けが苦手なの・・・（ビクビク）」

フェイト「うねうね動くのはちょっと…」

はやて「台所の黒い悪魔が嫌いや！」

シグナム「どうも触手系が好きになれん」

ヴィータ「あたしは気持ち悪い虫が嫌いだっ！」

シャマル「私もです！」

ザフィーラ「私はない」

スバル「虫が嫌い！」

ティアナ「私も虫は無理よ！」

エリオ「実は八神部隊長から怪談を聞いて以来、怖くなっちゃったんです」

キャロ「わ・・・わたしも」

ネプテューヌ「野菜のお化けは嫌いだよ！」

ノワール「ぬるぬるした気持ち悪いのは嫌よ！」

ブラン「お化け嫌い・・・」

ベール「触手の魔物は嫌ですわ」

銀八「ハイそんなわけでここで終了しますが、ゆりが『鳴神ソラ』さんに質問があるようです」

ゆり「それじゃ、『もしマリオが幻想郷に喧嘩売っても余裕で勝てるの？』それと、『皆はマリオの苦手なものを知っているの？』よ」

銀八「それじゃ、また次回会いましょう」

第十八訓：ペットの扱いは計画的に（後書き）

真王「次回は六課にモンスターが現れてクドリャフカとヴィヴィオがさらわれた！銀時達は追いかけることに・・・」

音無「次回『どこかの国ではよくさらわれる奴がいる』テイクオフ！」

～報告～

真王「先にいいますが、キャラのほとんどがうろ覚えです」

第十九訓：どこかの国ではよくさらわれる奴がいる（前書き）

真王「リトバス編のオープニングは『とある科学の超電磁砲（レールガン）』の『ｏｎｌｙ　ｍｙ　ｒａｉｌｇｕｎ』が似合うと思いますがね。それでは始め！」

第十九訓：どこかの国ではよくさらわれる奴がいる

クド「ヴィヴィオさ～ん！こっちにパスするです～！」
ヴィヴィオ「うん！」
六課の庭で、ヴィヴィオとクドがフリスビーで遊んでいた。
銀時達は六課でゴロゴロしているか、遊びに付き合っているか、熱心に仕事している。

すると、

ドシ～～～～～～ンッ！！！

クド「わふっ！！」
ヴィヴィオ「ひゃっ！」
突然の地鳴りと振動に2人は尻餅を突く。

銀時「なんだなんだ？」
なのは「一体何があったの？」
銀時達も、異変を感じて外に出た。

ネプテューヌ「うわっ！なにあれっ！？」
恭介「こ…こいつはっ！」
地鳴りを発生させたのは、黒色が主だが、全長3メートルで体中どれもこれもバラバラなボディの人型の機械のようなモンスターだった。

銀時「おいデカブツ！テメー一体何だ？」
銀時はモンスターを指差して呼ぶ。
ジャンクゴーレム「おれか？俺はジャンクゴーレム、ダークソウル

に作されたものだ」
全員「っ！！？」
ダークソウルという言葉に、銀時達は驚きを隠せない。

ジャンクゴーレム「お前達と話す余裕なぞない。そこのガキをいただくぞっ！」
ヴィヴィオ・クド「きゃあああああああ！！！！！」
ジャンクゴーレムは、近くにいたクドとヴィヴィオを捕まえる。
なのは・フェイト・銀時「ヴィヴィオ！？」
理樹・鈴「クド！！」
ジャンクゴーレム「こいつらを返してほしければこの俺を追いかけてみろっ！！」
と言って、足の部分がローラーに変わり、逃げだした。
銀時「あっ！！テメっ待ちやがれーーー！！！！」
フェイト「ちょっ！銀時！？」
銀時と神楽と新八は、定春に乗ってジャンクゴーレムを追いかけた。

恭介・ゆり「俺達（私達）もいくぞ（わよ）！」
リトルバスターズ・戦線メンバーズ「うん！／わかった！／了解！／おう！」
恭介とゆりの指示に、リトルバスターズとＳＳＳ団のみんなが行動を開始するが、
フェイト「ちょっと！あなたたちどこへ行こうとしてるの！？危険だからやめなさい！」
ティアナ「そうよ！あなた達は死ぬつもり！？」
フェイト達に止められる。恭介達は立ち止まってこう言った。

恭介「悪いがそれはできない相談だ。目の前で能美がさらわれちまったってのを見逃すようじゃ、俺達リトルバスターズの名折れだ」
ゆり「そういうことよ。仲間がさらわれてハイそうですかって簡単

にあきらめるようじゃリーダーとしてのメンツが立たないわ」
理樹「ごめんなさい！けどクドを見捨てるわけにはいかないんです！」
鈴「クドは友達だっ！」
来ヶ谷「うむ。クドリャフカくんを助けにいくのだ」
野田「俺はゆりっぺに指示に従うだけだ」
日向「なんだかんだいって、俺らはただ助けに行くだけだがな」
リトルバスターズも戦線メンバーズも、どちらも一歩も譲らないようだ。

するとネプテューヌ達が、
ネプテューヌ「よくいったよっ！皆っ！」
ノワール「いい心構えじゃない」
ブラン「評価に値する」
ベール「よいことを言いましたわ」
と、リトルバスターズと戦線メンバーズにエールを送った。

フェイト「ネプテューヌっ！！？何を考えているの！？」
なのは「ネプちゃん！やめさせてあげてっ！」
なのはとフェイトがリトルバスターズと戦線メンバーズ達に注意するように言うが、
アイエフ「なのはさん、この子たちは本気よ」
コンパ「できるだけ無茶はしないでくださいです」
アイエフがあきらめろと言い、コンパがとりあえず注意をした。

理樹「…ってあああっ！手間取ってる間に銀さんもう見えなくなっちゃった！」
理樹が叫ぶと、すでに銀時どころか、ジャンクゴーレムでさえ見えなくなった。
ネプテューヌ「あらら・・・行っちゃった」

鈴「おい！どうすんだ！」
鈴は、ネプテューヌに怒鳴るが、ネプテューヌは自信満々な顔になる。

ネプテューヌ「簡単だよ。・・・変身！」
突如ネプテューヌが光りだし、理樹達は眩しさで目を手で覆う。
光がおさまると、ネプテューヌ達はパープルハート、ブラックハート、ホワイトハート、グリーンハートになった。
パープルハート「さて、あなた達いくわよ」
と、パープルハートは言うが、なぜか理樹達リトルバスターズと、ゆり達戦線メンバーズは固まっていた。
まさかと思い、女神たちは耳をふさぐ。

リトルバスターズ・戦線メンバーズ「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！？」
リトルバスターズと戦線メンバーズの全員（クドは除く）が驚愕し、六課一面に彼らの声が響き渡った。
パープルハート「・・・すごい声を出してくれるわね」
ブラックハート「まあ、ほとんど私達のせいだけどね・・・」
パープルハートが呆れ、ブラックハートはやれやれなしぐさをする。

パープルハート「・・・さぁ、早く行きたいなら私達と一緒に行くわよ」
理樹「い…行くってどうやって・・・」
理樹の言うことはもっとも、銀時達万事屋はすでにいなくなってるのだが、パープルハートはニヤリと笑う。
パープルハート「簡単よ。私達に捕まっていくのよ」
その言葉に、理樹達は唖然とする。

パープルハート「さぁ、早く行くわよっ！」

理樹「う、うわあああああああ！！！！！」
パープルハート達は理樹達をつかんだ後、ビルを軽々と越えるジャンプ力でまるで忍者のように銀時達を追いかけ始めた。
ちなみに、パープルハートには、理樹、鈴、恭介、ゆり、音無、日向、奏。
ブラックハートには、真人、謙吾、来ヶ谷、野田、藤巻、高松、ＴＫ。
ホワイトハートには、小毬、葉留佳、美魚、松下、椎名、ユイ。
グリーンハートには、桂、エリザベス、月詠、直井、コンパ、アイエフを連れている。

すると桂が、
桂「あの・・・ベール殿。背中に何か当たってるようだが…」
桂の背中に、グリーンハートの柔らかいマシュマロが当たっていることを聞く。
グリーンハート「あら？そうでしょうか？」
グリーンハートはうふふと笑う。
直井（この女・・・・・・もしかしてわざとやってるのではあるまいな・・・）
直井はグリーンハートの企みに不審に思った。
直井（そういえばあの八神という女は桂に好意を寄せていたらしいが・・・・・まさかっ！！（汗））
直井はグリーンハートの考えを確信し、冷や汗をかいた。

グリーンハート（うふふふ・・・・・・あの狸さんには良いリアクションが取れるような気がしますわ）
グリーンハートは、心の中で黒い笑みを浮かべていた。

はやて「はっ！」
なのは「ど、どうしたのはやてちゃん！？」

はやてがいきなり声を出したので、なのは達がびっくりする。
はやて「い、今うちは何かを取られた気がする」
フェイト「いや知らないよ！はやての事情なんて」
そんな六課美女三人組のやり取りなのであった。

F「あれ？私（僕）達は？」
後ろでフォワードが忘れ去られていることは言うまでもない。

ミッドチルダのはずれ・廃墟工場

その場所で、銀時、神楽、新八、定春はパープルハート達を待っていた。
神楽「あ！・・・銀ちゃん来たネ」
神楽が銀時を呼ぶ。
すると、理樹達を連れたパープルハート達がやって来た。そして理樹達をおろした後、それぞれネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールに戻った。
銀時「おいコラネプテューヌ、何でこいつらまで連れてくんだよ」
銀時がジト目で理樹達を睨む。

理樹「違うんです！これは僕達の勝手で来たんです！」
理樹は銀時に必死に弁解する。
理樹「僕達は、クドを助けるためにここに来たんです！危険なことだって言うの分っていますが、それでもクドは僕達の、リトルバスターズの仲間なんですよ！！」
銀時「・・・・・・・・・・・・」

理樹の必死な説得を、銀時はただ黙って聞いている。

鈴「・・・連れて行かなかったら蹴りくらわすぞ」
銀時「ちょっ！武力行使で脅すのやめてくんない！！」
鈴の脅しに、銀時は突っ込む。

銀時「・・・・・・っだ～～～ったく」
銀時は頭をかきながら、理樹達にこう言った。
銀時「・・・足を引っ張るような真似だけはすんなよ」
理樹「！・・・ハイ！」
銀時の許しに、理樹は元気よく返事をした。周りのみんなもうれしそうな顔をする。
銀時「おし！行くぞおめーら！」
全員「おーーーーーーーーーーーーう！！！！！」
銀時の言葉に、リトルバスターズと戦線メンバーズが大きく返事をして、工場の中に入っていった。

新八「皆さん、クドちゃんを助けるために」
桂「そうだな。自らの仲間のためにたとえどんな困難が待ち受けていおうとも決して振り返らず、まっすぐ進む。直枝殿、主は立派な侍のはしくれかもしれん」
新八「いや、理樹さんは普通の人間なんですけれども・・・」
なんやかんやで、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、アイエフ、コンパは中に入っていった。

廃墟工場・ガラクタ広場

ＢＧＭ：ジャンク工場ｂｙロックマン７
（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　７：　Ｊｕｎｋ　Ｍａｎ' ｓ　Ｓｔａｇｅ）

ジャンクゴーレム「よく来たな」
ゴミ溜め広場の中央で、ジャンクゴーレムがたっていた。
銀時「よう。あの２人はどこにいるんだ？」
ジャンクゴーレム「フッ、安全のために上から眺められる場所に閉じ込めているぞ」

パチッ！

ジャンクゴーレムが指で鳴らすと、つりさげられた檻が降りてきた。
その中にはヴィヴィオとクドが入っていた。
ヴィヴィオ「パパっ！助けてっ！」
クド「皆さ～ん！へるぷなのです～！」
２人は銀時達に助けを求める。

銀時「安心しろオメーら。今からこいつをぶっ飛ばしてやっからよ」
理樹「クド！絶対に助けてやるからね！」
銀時は２人を安心させる。
ジャンクゴーレム「そろそろ覚悟はいいか？・・・行くぞっ！」

ＢＧＭ：ボス戦ｂｙロックマン？
（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｓｓ　ｔｈｅｍｅ）

ジャンクゴーレム「まずはこちらから行くぞ」

ジャンクゴーレムは銀時達に接近し、右手でパンチを繰り出す。
銀時「ちっ！」
ネプテューヌ「おっと！」
銀時とネプテューヌはそれをかわす。しかし、地面に当たったパンチがへこんでいた。

ネプテューヌ「うわっ…当たったら無事じゃすまなさそ～…」
ジャンクゴーレム「その余裕なセリフが言い続けられるかな？」
ジャンクゴーレムは、高さ7メートルにまで飛び上がり、ネプテューヌを潰そうとした。
ネプテューヌ「避ければおしまいだよ」
ジャンクゴーレム「どうかな？」
ネプテューヌはよけ、ジャンクゴーレムは地面を踏んだ。

ズシ～～～～～～～～ン！！！！！

ネプテューヌ「うわっ！」
銀時「うおっ！」
ジャンクゴーレムは地面を踏んだと同時に、突然地震が発生し、ネプテューヌ達はすっ転んだ。
ジャンクゴーレム「隙ができたな！」
ジャンクゴーレムはネプテューヌに右手を振りおろす。
ネプテューヌ「やばっ！」
ブラン「伏せてろネプテューヌ！！」
神楽「ホワチャアアアアアアアア！！！！！！！」
ジャンクゴーレム「ぬっ？グアッ！！」
ブランはハンマーを、神楽は蹴りを炸裂させ、ジャンクゴーレムを退けさせた。

ジャンクゴーレム「ぬぅぅ・・・なかなかやるな」

銀時「今度はこっちから行くぜっ！！」
ジャンクゴーレム「ぬおっ！」
銀時がジャンクゴーレムに接近し、木刀で攻撃する。ジャンクゴーレムはそれを両腕で防ぐ。

ジャンクゴーレム「なるほど・・・よくうわさで白き羽衣の夜叉がいると聞いたが、お前がその坂田銀時だな」
銀時「ほめても何も出ねーぞっ！」
木刀のラッシュ攻撃に、ジャンクゴーレムはひたすら防ぐ。

桂「こっちを忘れてもらっては困るぞ」
ジャンクゴーレム「ぬっ！」
後ろから桂の奇襲を左腕で防ぐ。
ジャンクゴーレム「ほう、『狂乱の貴公子』か」
桂「桂って呼んでほしいのだが・・・」

月詠「援護するぞ」
エリザベス『助太刀！』
月詠はクナイを、エリザベスは刀を構え、ジャンクゴーレムに接近する。
ジャンクゴーレム「させるか！」
そう言うと、なんと胴体が開き、大砲が出てきた。
銀時「オイーーーーーーーー！！！体から何か出てきたぞ～～～！！！！」
月詠「むっ！いかん！」
エリザベス『ヤヴェッ！』
ジャンクゴーレム「くらえ！」
大砲が発射し、月詠とエリザベスのところに向かうが、２人はギリギリでかわす。

新八「僕だって負けませんよっ！うおおお

アイエフ「グリーンハート様・・・・・・もしかしてわざとやってない？」
コンパ「はやてさんがいたら間違いなく怒るです・・・」
ベールの行動に、アイエフは呆れ、コンパははやてがキレることを想像して、怯えている。

煙がはれて、ジャンクゴーレムが現れる。
ジャンクゴーレム「ぬぅぅ・・・少しお前達を甘く見ていたようだ…」
ジャンクゴーレムは立ち上がる。
ジャンクゴーレム「ここからは・・・本気でいかせてもらうぞっ！！！」
そう言うと、両手を上げ始めた。銀時達は警戒する。
ジャンクゴーレム「ウオオオォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！」
ジャンクゴーレムがうねりを上げる。すると、金属のガラクタが宙に浮き、ジャンクゴーレムに向かって集まって来た。

ネプテューヌ「な…何あれ！？」
ジャンクゴーレムの頭上に集まったガラクタがグルグルと回っている。
そして、ガラクタは塊になり、
ジャンクゴーレム「くらえっ！！ジャンクバスターーー！！！！」
かめはめ波のように、ガラクタの塊が発射された。それどころか周りに浮いていたガラクタも飛んできた。

銀時「ちっ！」
銀時は木刀でたたき落とし、神楽は傘で防ぎ、新八、桂、エリザベス、月詠、アイエフ、コンパはガラクタの陰に避難し、ネプテュー

ヌも木刀でたたき落とし、ノワールはショートソードで切り落とし、
ブランとベールはハンマーとパイクを回して防いでいる。
理樹達はガラクタの陰に避難している。

ジャンクゴーレム「どうだ！この俺のジャンクバスターの力は！」
ジャンクゴーレムは、自慢げに笑う。

銀時「ちぃっ！地味な技のくせに相当厄介だぜ」
銀時は舌打ちする。
すると、またガラクタが、ジャンクゴーレムの頭上に集まって来た。

ジャンクゴーレム「フハハハ。さぁ、覚悟するがいい！！」
ジャンクゴーレムの高笑いが、工場に響き渡っていった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

銀八「どうも～、坂田銀八先生で～す。さぁ今回のアシスタントは」

奏「立華　奏がアシストするわ」

銀八「んじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「喧嘩を売るとかは別に俺は幻想郷のメンバーとは仲が良いぞ…んであ…1人なら余裕、メンバーによるけど数人では半々だな…ちなみに苦手な物はないが…ちょっとオリキャラで苦手な人がいる…それと俺はこっちだとオリジナルの仮面ライダーに変身出来るんだ」

ルイージ「それで定春や色んな子が出たね」

スネーク「それで早速被害が出てるな；」

ネス「それで次回は攫われるようだね」

リュカ「どうなるんだろう…」

マリオ「させ、銀時やそっちにいる全員に質問だ『次の俺が１０代の時に実際にやった修行でどれをやりたい？

1．逆さ吊り1時間＋全方位からの魔法攻撃

2．1時間大岩から逃げる耐久レース

3．マンモス１００頭分の重りを付けて腕立て＋腹筋１００回

』」

ルイージ「後に加わったａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！の皆に質問『家の兄さんどう思う？』；」

フォックス「美魚に質問『女メンバー同士のカップリングはどう考えてる？ちなみに正直に答えてくれ』」

次回も頑張ってください！

ネス「どうせなら…銀魂やネプテューヌに出たネタを此処でアレンジして見たらどうですか？」

ルイージ「平和だ…」

スネーク「何も来ないのは良い事だ…」『…ズバリお答えしましょう」

全員が立ち上がる。

全員「全部イヤっ！！」

ネプテューヌ「私は2番と3番やるけど」

ノワール「私は1と2番ね」

ブラン「1番と3番…」

ベール「逆さづりを除いて1番ですわ」

銀八「やんのかよっ！お前ら！・・・まあいいや。次の質問は」

戦線メンバーズが立ち上がる。

戦線メンバーズ「・・・もはやあんたはモンスターを超えているよ」

銀八「だよな；んじゃ次」

美魚が立ち上がる。

美魚「女性の方など興味ありません」

真王「彼女は男と男のカップリングにしか興味ないらしいよ」

銀八「ああ…そう…。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってくれ」

奏「次のペンネーム『黒神』さんから質問。『1：奏、出て来るかなァ？

2：ユリへ、原作アニメの貴方は奏に比べるとぜんぜんヒロインぽさがありませんでしたけど、気にしていますか？（黒笑い）

3：銀時の白夜叉化はいつ見られますか？

以上です。

『・・・私出てるのに…」

銀八「まぁ向こうが気付かなかっただけだな。では2つ目の質問は」

ゆりが立ち上がる。なぜか拳銃を持って。

ゆり「ちょっと『黒神』さんのところに行ってくるわ（黒い気を発している）」

真王「待てやめろ。３つ目の白夜叉化はまだ先です。もう少しお待ちください」

銀八「は～い。そんじゃ奏、ゆりを止ｍ「ハンドソニック」ぎゃあああああああああ！！！！！」

奏「ゆり、いくよ」

ゆり「脳天ごとぶっ放してあげるわ」

真王「あ～らら。彼女達行っちゃった。あっ！そうそう東和馬（焼きたて！！ジャぱんより）さんが『鳴神ソラ』さん宛てにジャぱん１３５号（リアクション効果：故郷のおふくろの味を思い出すようです）を送り出したようです。ついでに皆さんの分もあります。では」

日向「あ…言い忘れてたが『黒神』さん。廊下に立つ前にゆりっぺ達から逃げてくれ」

第十九訓：どこかの国ではよくさらわれる奴がいる（後書き）

真王「次回は、銀時達とジャンクゴーレムに決着が。そして理樹達は・・・」

奏「次回『希望という名の光は願いの一つである』テイクオフ」

第二十訓：希望という名の光は願いの一つである

ＩＢＧＭボス戦ｂｙイレギュラーハンターエックス（Ｍａｖｅｒｉｃｋ　Ｈｕｎｔｅｒ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ２０：　Ｂｏｓｓ　Ｂａｔｔｌｅ）

銀時「うわったたたたたたたたたたた！」
ネプテューヌ「うわわわわわわわわわわわ！」
ジャンクゴーレム「ハハハハハハ。どうしたどうした！」

ジャンクゴーレムのジャンクバスターによって、銀時とネプテューヌは逃げ続けている。

ジャンクゴーレム「どうしたっ！まだまだいくぞっ！！」
ジャンクゴーレムは銀時達に向かって、ジャンクバスターを連射する。

理樹「僕が合図をしたら、一気に発射してください」
ブラックハート「わかったわ」
ホワイトハート「おう」
グリーンハート「よろしいんですの？あなた方も狙われることもあるのですよ？」
一方では理樹達が作戦を立てていた。
それは銀時達がジャンクゴーレムの注意をひきつけさせ、クドとヴ

ィヴィオを救出する作戦なのだ。
しかし、檻はどのぐらい硬いか分らず、失敗するとジャンクゴーレムが理樹達に襲いかかるというリスクがある。

理樹「それでも・・・やる価値はあります！」
理樹は自分を、そしてみんなを信じて答える。
恭介「フッ、よしお前ら！」
ゆり「あんた達！」

恭介・ゆり「ミッションスタートだっ！！／オペレーションスタートっ！！」
リトルバスターズ・戦線メンバーズ「おうっ！！」
恭介とゆりが、リトルバスターズと戦線メンバーズに言い、全員が行動を開始した。

銀時「おいノロマ野郎！オメーの攻撃なんてあたらねーよ！」
ネプテューヌ「べ～だ。当ててみろ～～！」
ジャンクゴーレム「ヌゥゥゥ・・・そんなに死にたいならすぐに死なせてやるっ！！」
銀時とネプテューヌがジャンクゴーレムに挑発し、ジャンクゴーレムはその挑発に乗せられ、銀時達に集中している。

真人「ここで良いのか？」
ヴィヴィオとクドが閉じ込めている檻の真下に、真人と謙吾と松下と高松とＴＫが配置についた。
理樹「いいよ！ノワールさん、ブランさん、ベールさんお願いします！」
ブラックハート「任せなさい！！」
ホワイトハート「いくぜっ！」
グリーンハート「いきますわっ！」

ブラックハート達は銃で檻をつないでいる鎖に向かって、

パパパンっ！！ガガキッ！

撃った。そして鎖に命中。そして、

パキッ！

鎖が外れ、檻が落ちてきた。

ヴィヴィオ・クド「ひゃあああああああああああ！！！！」

ジャンクゴーレム「ぬっ！？」

ヴィヴィオとクドの悲鳴にジャンクゴーレムがきづいた。が、

銀時・ネプテューヌ「でやあああ！！！」

ジャンクゴーレム「グゥワアアアアアアアア！！！！」

余所見をしたことにより、銀時とネプテューヌの攻撃を受けてしまい、倒れた。

真人達は落ちてきている檻を、

真人・謙吾・高松・松下・ＴＫ「どわっ！！（オウッ！！）」

体を使って、受け止めた。

理樹「みんなっ！大丈夫！？」

理樹達が駆け寄る。

真人「どうってことねえよ。それよりホラ」

真人達は大丈夫だと言う。

檻は落下した衝撃で壊れ、ヴィヴィオとクドが解放されている。

クド「わふ～。皆さんのおかげで助かりました！」

ヴィヴィオ「ありがとうお兄ちゃん！お姉ちゃん！」

理樹「どういたしまして」

鈴「ど・・・どういたしまして・・・／／／／／」
お礼を言われ、理樹は返事をする。
鈴はお姉ちゃんと呼ばれて、恥ずかしながらも返事をした。

ジャンクゴーレム「ごおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」
理樹達「！？」
突然ジャンクゴーレムが起き上がり、理樹達の方へ向かい、
真人達「ぐわっ！」
理樹「真人っ！」
真人達を吹き飛ばした。

ジャンクゴーレム「ハァ・・・ハァ・・・あの2人を囮にガキどもを助ける…ハァ・・・なかなかやる考えじゃないか・・・」
ジャンクゴーレムは理樹を睨んでいる。理樹、クド、ヴィヴィオはジャンクゴーレムの怒りの目に動かなくなった。
ジャンクゴーレム「だが貴様は調子に乗ったな・・・・・・死ぬがいい！！」
ジャンクゴーレムの右手が理樹達をとらえた。

恭介「理樹っ！！」
桂「いかん！早く助けねば！」
月詠「無理じゃ！わっちのクナイではあやつを倒せん！」
エリザベス『おまけに理樹さん達との距離が近いから巻き込まれるよ！！』
桂「くそっ！」
月詠のクナイでは、ジャンクゴーレムのボディにはあまり傷つかず、かと言ってバズーカでも撃ったら理樹とクドとヴィヴィオが巻き込まれてしまうのだ。

ジャンクゴーレムは右手を構えたまま、理樹に問う。
ジャンクゴーレム「小僧、殺す前に遺言を聞かせてもらおうか？」
理樹「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
クド「リキ！！駄目です！！」
ヴィヴィオ「理樹お兄ちゃん！！」
無言の理樹に、クドとヴィヴィオがしっかり理樹の手を握る。

理樹「・・・・・・・・・・めない」
ジャンクゴーレム「ん？」
理樹「僕はあきらめない！！僕はお前になんか殺されない！！」
理樹は、ジャンクゴーレムに力一杯言い切った。

ジャンクゴーレム「・・・・・・この状況でよくそんなことが言えるな小僧。それとも、小僧共には光が見えると？」
ジャンクゴーレムが理樹に問う。
理樹「光は光でも、僕らには希望という名の光がある！お前でも撃ち破れない光が！」
ジャンクゴーレム「・・・ならばその光がどれほど強いのか試してｙ「デュエルエッジ！！」グゥオアアッ！！」
ジャンクゴーレムが攻撃を繰り出す前に、ネプテューヌがデュエルエッジで吹っ飛ばす。
そしてパープルハートに変わる。

パープルハート「そう、希望の光は願いをかなえる力でもある！そしてその願いは、あなたを倒すことよ！！」
ジャンクゴーレム「ぬっ！グボアッ！」
パープルハートはダッシュでジャンクゴーレムに接近し、刀で切った。
ジャンクゴーレム「オォノォレェ～～～～～！」
ジャンクゴーレムは、両腕をふり回すが、パープルハートは軽々と

避ける。

パープルハート「もうあなたと長くいる時間はないわ。消えなさいっ！！」

ザンッ！ザンッ！ザンッ！ザンッ！ザンッ！ザンッ！ザンッ！

ジャンクゴーレム「グッ！ガッ！グアッ！グオッ！ガフッ！ゴハッ！ガッ！ドァッ！」

パープルハートの華麗なる剣さばきに、ジャンクゴーレムは切られる切られる。

その光景は、まるで舞い踊る女神のようだった。

理樹「すごい・・・」

恭介「ああ・・・確かにすごいぜ」

クド「わふ～。ネプテューヌさんまるで踊ってるようです～」

ゆり「なんてきれいなのかしら…」

リトルバスターズと戦線メンバーズは、パープルハートの剣さばきに目を奪われていた。

ヴィヴィオ「・・・・・・・・・・・・」

その中でヴィヴィオは、パープルハートの華麗な姿に酔いしれていた。

誰よりも美しく、誰よりも強い彼女の姿に、そして誰にも媚びることのない強い眼差しに、ヴィヴィオは彼女を、パープルハートを強く憧れていく。

ジャンクゴーレム「調子に乗りおって～～～…」

ボロボロのジャンクゴーレムは、パープルハートから離れ、ジャンクバスターを発動する。

ジャンクゴーレム「これで終わりだっ！！」
ジャンクバスターは放たれ、パープルハートに向かう。

パープルハート「終わるのはあなたよ」
しかしパープルハートは笑い、刀から紫のオーラが現れる。
パープルハート「ネプテューンブレイクッ！！」
そして紫の一閃を繰り出し、ジャンクバスターをかき消した。

ジャンクゴーレム「なっ！！？」
ジャンクゴーレムは驚くが、油断してしまい、直撃を受けた。
ジャンクゴーレム「グアアア

銀時とネプテューヌ達が帰って来た。
なのは「銀さん！」
フェイト「銀時！」
銀時「よう、帰って来たぞ～」
なのはとフェイトが銀時に駆け寄る。

ネプテューヌ「たっだいま～」
理樹「帰ってこれた…」
恭介「何だ理樹。出られない空間から出れたような感想は」
ネプテューヌはちゃらけて、理樹は苦労したような感想を漏らし、
恭介は理樹に突っ込む。

フェイト「…ってちょっとっ！砂だらけじゃないっ！？」
理樹の制服が砂と埃だらけになっているのに気付き、理樹はバツが
悪そうな顔をする。
理樹「あぁ…えと…すいません」
なのは「すいませんじゃないよっ！よく見るとみんな怪我してるしっ！」

リトルバスターズや戦線メンバーズのほとんどが砂が着いたり怪我
をしていた。
真人「こんなもん傷のうちにはいんねーよ」
謙吾「これは転んで怪我したレベルだ」
野田「これはかすり傷だ」
ユイ「ちょっと汚いだけですよ」
しかしほとんどは大したことないと言う。

フェイト「だからってあなた達は傷だらけよ！！早く医務室に「駄

目…」…ってヴィヴィオ？」
フェイトが理樹達を連れて行こうとしたら、ヴィヴィオが前に立って止めた。
ヴィヴィオ「お兄ちゃん達をいじめたら駄目…」
ヴィヴィオは涙目でなのは達に訴えた。

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース「ヴッ！」
なのは達は精神にダメージを負った。
するとネプテューヌが、
ネプテューヌ「大丈夫だよヴィヴィオちゃん。なのはちゃん達はもう理樹君達をいじめないからね」
と言って、ヴィヴィオの頭を撫でて慰める。
ヴィヴィオ「本当？」
ネプテューヌ「そうだよ♪」
ネプテューヌは笑顔で答える。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん…」
ネプテューヌ「ん？」
ヴィヴィオ「私、ネプ姉ちゃんみたいになりたい！」
突然のヴィヴィオの言葉に、周りにいるみんなが驚いた顔をした。
ネプテューヌ自身も驚いたが、気を取り直してヴィヴィオに聞いた。

ネプテューヌ「私みたいになりたい？」
ヴィヴィオ「うん！」
どうやらヴィヴィオはパープルハートの戦いに憧れを抱き、パープルハートのように強くなりたいと言っているようだ。そしてネプテューヌはこう言った。
ネプテューヌ「それはいいけど、強くなりたいならそれ相当の覚悟がいるんだよ」
ヴィヴィオ「かくご？」

ヴィヴィオは首をかしげた。

ネプテューヌ「そう、強くなるんだったらそれは相手と戦う、もしくは苦しい思いをするってことになるんだよ。相手を傷つけることもあるし、殴られたら痛いし、戦争だったら人が死ぬということがあるんだよ。」

ネプテューヌの説明を聞いているヴィヴィオだが、銀時達はネプテューヌの説得力に驚いている。ネプテューヌはノワール達とお互い戦い合っていたからこそ知っているのだ。

ネプテューヌ「もし力が欲しいなら相手と戦う、痛い思いを乗り越える、その覚悟をヴィヴィオは守れる？」

ヴィヴィオはう～んと考える。

ヴィヴィオ（ネプ姉ちゃんみたいになるには人を傷つけたり痛い思いをするってことなの？・・・それは嫌だよ。けどネプ姉ちゃん…なんだか悲しそうな眼をしていた気がした。強くなる…それは苦しい思いを乗り越えること。……ネプ姉ちゃんは試してるんだ。私が戦うという覚悟があるかどうかを。適当なことじゃ無理なんだ。ネプ姉ちゃんたちみたいになるにはどんなことがあっても決して挫けないことなんだ！だから・・・）

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！ヴィヴィオ頑張るっ！」

ヴィヴィオは力一杯答えた。その時のヴィヴィオはまっすぐな目をしていた。

ネプテューヌはにっこりと笑い、

ネプテューヌ「よく言ったねヴィヴィオ！イースン！」

イストワール「ハイ。出来てますよ」

ヴィヴィオを撫でた後にイストワールを呼び、そのイストワールが手にウサギのぬいぐるみを持っていた。

ヴィヴィオ「それは？」
イストワール「ヴィヴィオさんが強くなると言った証です」
そう説明し、ヴィヴィオに渡す。

イストワール「完成仕立てですので名前は決めていただけませんか？」
名前を決めろと言われ、ヴィヴィオは考える。

なのは「ねぇイストワールさん」
なのはが呼ぶ。
イストワール「はい、なんでしょう」
なのは「あのぬいぐるみって？」
イストワール「はい、あれはデバイスです」
イストワールが即答した。

スバル「ええっ！？あれイストワールさんが作ったんですか！？」
イストワール「そうですよ」
イストワールの答えになのは達は驚いた。
ティアナ「一体何をしたの？」
ティアナがきくと、
イストワール「秘密です♪」
笑顔で答えた。

ティアナ（シャーリーさんならすごく喜びそうね・・・）
デバイスメーカーのシャーリーが、イストワールのデバイスを見たらすごいよろこび方をするんじゃないかとティアナは想像する。

ヴィヴィオ「・・・・・あっ！決まったよ～！」
手をポンッと叩き、イストワールを呼ぶ。
イストワール「それではまずマスター認証、次にそれの正式名称、

それからそれの呼びやすい愛称（マスコットネーム）を付けてください」

それを聞いて、ヴィヴィオは分ったと言い、認証を開始する。

ヴィヴィオ「ーマスター認証　ヴィヴィオ

術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド

私の愛機（デバイス）に個体名称を登録

愛称は『クリス』

正式名称『セイクリッド・ハート』

いくよ、クリス

セイクリッド・ハート

セーーーットアーーーーープ」

《ヴィヴィオセットアップ中》

セットアップした姿は全身黒いタイツに腹部は鎧の一種がつけられているがバリアジャケットは白い部分があり、なのはのバリアジャケットとやや似ている。ただ、そこはあまり問題はないが、一番の問題は何とヴィヴィオの姿が大人になっているのだ。胸はボイン！ウエストはキュッと引き締まっており、傍から見れば美しい美女に

なっていた。

ヴィヴィオ「……わぁ～…」
ヴィヴィオは変わってしまった自分の姿に驚いていた。
ネプテューヌ「すごいじゃんヴィヴィオ！」
ノワール「すごい変わりっぷりね…」
ブラン「そうね（またデカ乳仲間が増えた…）」
ベール「あらあらあら…」
ネプテューヌ達はヴィヴィオの姿に驚きを出した。

ネプテューヌ「ねぇ銀さんもどう・・・・・銀さん？」
ネプテューヌが銀時を見ると、銀時は固まっていた。それだけでなく、コンパ、アイエフ、新八、神楽、なのは達、リトルバスターズ、戦線メンバーズの全員が固まっていた。
ネプテューヌ「…ヴィヴィオ、ちょっとごめん」
ヴィヴィオ「え？」
ネプテューヌは耳栓を付けて、ヴィヴィオの耳をふさぐ。

全員「…ええエエエ

誰もかれもがヴィヴィオに対してパニックになっている。
ちなみに理樹はギャップについていけず思考停止し、鈴に体を揺さぶられて正気に戻った。

ネプテューヌ「みんな失礼だな～。この子はヴィヴィオだよ」
ノワール「姿は変わってるけども正真正銘のヴィヴィオよ」
ネプテューヌとノワールがヴィヴィオだと言う。彼女達は変身すると姿が変わるため、それほど驚いてなかったようだ。

ヴィヴィオ「パパ～～～♪」
銀時「うおっ！」
大人姿のヴィヴィオが銀時に抱きつく。ヴィヴィオの豊満な胸が銀時に当たる。
銀時「え？ちょっ、なにこれ？何このＴｏｌｏｖｅる的な感覚。・・・ハッ！」
抱きつかれた銀時は、後ろからものすごい殺気を感じた。なのは達である。

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・アルフ
「銀さん（銀時）（兄さん）？なにをやってるのかな（だ）？」
すごく黒い気を発しているなのは達。銀時は青ざめる。
銀時「ま、待て待て待て待ってくれっ！！お願いだから待ってくれ！３０円あげるから！！」

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・アルフ
「問答無用！！」
銀時が言うも、なのは達は止まる気は全くなし。絶体絶命かと思われたその時、

ガシィッ！！

ネプテューヌ達がなのは達をつかんで、
ネプテューヌ「ドオオッセイッ！！」
投げ飛ばして、

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・
アルフ
「あああああああああああああああああああああああ！！！！！」

チャポンッ！

海へと落ちた。

なのは「ちょっと！なにするの！？」
ずぶ濡れのなのはがネプテューヌに問い詰める。濡れてるせいか、
服が透けているため、新八含む男性陣が顔を赤くしている。
ネプテューヌ「暴走寸前だったから頭を冷やしてあげたんだよ」
シグナム「むっ、それは謝るが銀時の妻になるのは私なのだからな
！」
シグナムが妻になると言ったせいで、なのは達が突っかかる。

フェイト「違うよ！銀時とヴィヴィオの妻になるのは私だよ！」
なのは「フェイトちゃんそれは絶対に渡さないよ！」
リインフォース「銀時の妻は私だ！」

スバル「隊長達だけはずるいです！あたしも～」
ティアナ「兄さんの妻は私よ！」
アルフ「あたしだ～！」
ま～たなのは達は言い争いを始めた。

銀時「ま～た始めやがったよこいつ等…」
ネプテューヌ「みんな後見人になるって選択をあると思うんだけどな～」
銀時はため息をつき、ネプテューヌは不安を漏らすが、なのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・アルフ
「後見人！？それだ！！」
後見人という言葉に、なのは達がひらめいた。

フェイト「銀時！私たちがヴィヴィオの後見人兼銀時のママとしてやっていくよ！」
銀時「後見人はいいとしてもそこだけは限定かよ！？」
まぁそんなこんなでなのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・アルフはヴィヴィオの後見人となった。そしてヴィヴィオはなのは達をママと呼ぶようになった。（スバル、ティアナ、アルフは除く）

理樹「楽しそうですね銀さん」
理樹は銀時に歩み寄って言う。
銀時「ま～な。オメェも楽しい仲間がいるじゃねえか」
理樹は恭介達リトルバスターズを思い浮かべ、クスッ笑う。
理樹「はい」
ゆり「私達も忘れないでよ～」
こうして理樹達リトルバスターズとゆり達ＳＳＳ団は六課の協力者になり、銀時達と過ごすことになった。

～余談～

来ヶ谷「あは…あはははははは…ヴィヴィオ君は大人じゃない…あはははは」

小毬「ゆいちゃ～～～～～～～んッ！！！戻ってきて～～～～～～～！！！」

大人化したヴィヴィオを見て、来ヶ谷が精神崩壊寸前だったことは言うまでもない。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「どうも～。さぁ今回のアシスタントは」

ユイ「ユイにゃんがアシストしますよ☆」

銀八「ユイにゃんって…まあいいや。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス「（良かった…もしそう言うの考えてたら質問した側としてどうしたもんかと思ってたぞ；）」

マリオ「ああ～…美味いのは美味いけどなぜか師匠とヘキサさんとの修行の日々を思い出す（涙）」

…苦労した日々を思い出して哀愁の涙を流してるよ；

ソニック「けどマジで美味しいな♪」

リュカ「……（ず～～～ん）」

ネス「ああ！リュカが良い思い出を振り返ってたけど大切な人を思い出して沈んだ！！」

ルイージ「それにしても相手は厄介だね…」

スネーク「そしてちゃっかりと桂にアピールするグリーンハートもといベールだな…」

マリオ「？…それよか…お前らの原作の日常よりかマシじゃないかな？」↑Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓの答えにちょっと不満げ

ルイージ「そう言えば・・・気になった事があるから真王さんに質問『Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓのメンバーもレギュラーですか？』」

スネーク「Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓのメンバーに質問だ『マリオに称号を付けるならどんな感じのだ?ちなみにリトバスメンバーが言ったの以外で頼む』」

フォックス「と言うか…俺の前々回の質問がちゃんと答えられてないからもう一度…『真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは出て来て欲しくない敵キャラはいるか?ちなみにチートキャラとかバグキャラと呼ばれるのは省いてくれ…ちゃんとキャラの名前で答えて欲しい。〇〇系とかうねうねと体を動かしてる動作で表すのはなしだからな』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「パンは美味かったぞ♪」『…ズバリ答えましょう。ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ組はレギュラーの仲間入りです。んで次はあいつらがマリオの称号を考えた結果こうなりました。」

紙に、『赤き貴公子』『烈火の拳闘者』『クッパより強い』『レッドグラトニー』『天然なるアホ』と書かれている。

銀八「そして最後は」

全員が立ち上がる。

銀時「正直オレはキングダムハーツのファントムがいやだ・・・（ビクビク）」

新八「僕もです・・・」

神楽「私もイヤネ!」

桂「俺は苦手な奴などいない」

エリザベス『同じく』

月詠「わっちは苦手なものなど克服しておるぞ」

なのは「私はテレサがちょっと無理なの・・・（ビクビク）」

フェイト「ゲッソーはちょっと…」

はやて「ゴキモンが嫌いや！」

シグナム「モルボルは・・・嫌だな」

ヴィータ「あたしはドラクエのミイラ男が嫌いだっ！」

シャマル「私はボスパックンがいやです！」

ザフィーラ「私はない」

スバル「フロウスが嫌い！」

ティアナ「私も無理よ！」

エリオ「実は僕もです」

キャロ「わ・・・わたしも」

ネプテューヌ「私はないかな」

ノワール「モルボルは嫌よ！」

ブラン「テレサ嫌い・・・」

ベール「ゲッソーは嫌ですわ」

銀八「ハイ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ユイ「次ですね☆ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。『何か強敵っぽいのが出てきましたねぇこりゃ次回が楽しみですなぁってあれ？新撰組は？此処で質問です

天の助「この物語に出てくる全てのキャラに質問だ！ズバリ、俺を食ってくれ！」

は～い、だそうですので適当にあしらって下さいんじゃそう言う事で』…って言うか」

全員「いらないよ」

銀八「だよな」

ネプテューヌ「え～。心太を焼いて食べたらおいしいんじゃないの？」

銀八「食う気かお前！？・・・はい『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊

下に立ってなさい」

真王「その前にマリオに言いたいことがあるという方がいますよ」

ゴジラ「『鳴神ソラ』とその仲間たちよ。『我と勝負しろ！』以上だ」

銀八「ゴジラぁ～～～

第二十訓：希望という名の光は願いの一つである（後書き）

真王「リトバス編が終了！…けどその前に番外編が始まります」

ユイ「次回『変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる』テイクオフですよ☆」

番外訓：変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる（前書き）

真王「銀時がちょっと災難な目にあう？」

銀時「何で疑問形？」

真王「成り行き」

番外訓：変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる

機動六課・訓練場

銀時「あ～～かったるいな～～…」
ある日、銀時が肩を回して散歩していた。

銀時「ん？」
すると、銀時は木の陰でイストワールを見つけた。
銀時は気になって呼んだ。

銀時「お～い、イースン何やってんだ～？」
イストワール「あ、銀さん」
？？？「おお、銀時か」
銀時の呼び声にイストワールと腰まである青い髪の美女が返事をした・・・・・・・・・・・あれ？

銀時「・・・あれ？なぁイースン…そいつ誰だ？」
銀時は、イストワールと一緒にいる金色の目に腰まである長くて青い髪で、着ている服は何やらパープルハートみたいな感じの美女を指差す。

？？？「ひどいな～。あたしだよ、スバル」
少女はスバルと名乗った。
銀時「・・・ハァ？スバルぅ？嘘をつくのはよくないぞオメー」
この女頭でもいかれたか？みたいな顔で言う。
銀時「あれ？待てよ・・・今の声スバルだよな～…」
美女の声が何だかスバルみたいな声だったので、銀時は考え込む。
イストワール「・・・・・スバルさん、一度変身を解除してくだ

さい」
銀時「は?」
銀時は一瞬耳を疑った。

イストワールは今スバルって言わなかったか?って言うか変身って…
スバル?「わかった」
スバルと呼ばれた少女はそう言うと体が光り始め、晴れるとそこに・
・・・・・・・スバルがいました。

銀時「あり?・・・嘘・・・あれ?・・・」
銀時は目をこすってスバルを見ている。
スバル「あの~銀さん?」
銀時「…なぁスバル。あれはお前なのか?」
銀時がスバルに尋ねると、
スバル「はい」
スバルは答えた。

侍沈黙中・・・

銀時「でえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!??」
銀時はシャウトした。
銀時「おいおいおいおい!それどういうことだよっ!?」
銀時はスバルを問い詰める。

スバル「えっと・・・この腕輪をつけて変身しようとするとさっき
のみたいになるんです」

そう言うスバルの右腕に確かに腕輪があった。

銀時「イースンイースン？・・・これはいったい何だ？」
イストワール「それは私が作った『女神の腕輪』です。それを装備して変身を望むと文字通り変身するんです」
銀時がスバルがつけている腕輪についてイストワールに聞くと、答えた。
銀時「・・・・・あ～～、なるほど」
銀時はなんとか納得した。

するとネプテューヌ、なのは、フェイト、ティアナ、エリオ、キャロがやって来た。
ネプテューヌ「あれ？銀さん、スバル、何やっているの？」
銀時「ああ、この腕輪のことを話してたんだよ」
銀時は、スバルの付けている腕輪を指差して言う。

エリオ「何なのでしょうかその腕輪」
イストワール「それはですね」
イストワールは腕輪のことを説明・・・・・・・・そして、
ティアナ「ふ～ん。スバルちょっと貸して」
スバル「え？うん」
スバルは腕輪を外し、ティアナはその腕輪を装備する。

ティアナ「（ぱっと見唯の腕輪みたいだけど…やってみよっかな）変身っ！」
ティアナが叫ぶと突然光りだし、収まるとそこにいるのはオレンジロングヘアーの青い瞳の美女がいた。

なのは「・・・え？ティアナ？」
ティアナ？「何ですかなのはさん」

なのはが美女に聞くと、美女は答えた。しかも声がティアナそのものだった。

フェイト「ティアナ!?本当にティアナなの!?・・・でも確かに声はティアナだけど」

ティアナ?「姿が変わってますから私だとは分らないですよね。でもこの姿は一応シューティングハートって名前ですが」

ティアナ・・・シューティングハートは自分の姿を見て言う。

銀時「シューティングハート?普通にティアナで良いだろ」

シューティングハート「私はこの姿をシューティングハートって呼ぶことにするのよ。でもやっぱ呼びやすいティアナでもいいわ」

スバル「あっ!、私はキャリバーハートってつけたんだよ」

銀時「そうかい」

変身時のティアナはシューティングハートと、変身時のスバルはキャリバーハートと名づける。

ネプテューヌ「どうせならなのはちゃん達もやる?」

いきなりネプテューヌが提案しだした。

なのは「え?」

フェイト「私達も?」

ネプテューヌ「うん。ティアナもいいよね?」

シューティングハート「・・・・・まあいいけど」

シューティングハートはそう言うと、ティアナに戻った。

ネプテューヌ「それじゃあ、なのはちゃんから」

ネプテューヌはなのはに腕輪を渡す。そしてなのはは装備する。

なのは「どんな感じなのかな・・・・・変身!」

なのはが叫ぶと光りだし、晴れるとそこには蒼い瞳に白髪ロングの美女がいた。

なのは?「わぁ～、すごいなの！」
ネプテューヌ「それじゃあ、なのはちゃんはその姿はどんな名前にするの?」
エンジェルハート「う～ん・・・エンジェルハートにするなの！」
なのは・・・エンジェルハートはネプテューヌから名前を聞かれ、名乗る。

フェイト「エンジェルハート・・・『天使の心』って意味だね」
銀時「天使だぁ～?魔王で充分だろ?って言うか『なの！』って思いっきり時代遅ｒ」

ズドンッ！！

エンジェルハート「何か言ったなの?銀さん?」
銀時「ハイ。言ッテマセン」
銀時は思いっきり言ってはいけないことを言ったため、エンジェルハートに脅され、青くなる。
地面はえぐれ、そばにいるフェイト達はガタガタ震えている（ネプテューヌは除く）。

ネプテューヌ「次はフェイトだよ～」
エンジェルハート「・・・分ったなの・・・」
ネプテューヌの指示に、エンジェルハートはしぶしぶ従い、なのはに戻ってフェイトに渡し、フェイトは装備する。

フェイト「それじゃぁ・・・・・変身！」
フェイトが叫ぶと光りだし、晴れると金色の目の金髪ロングの黒い服の美女がいた。しかも露出度はグリーンハート並である。
なのは「わぁ～／／／／／」

スバル「フェイト隊長・・・大胆です・・・／／／／／」
なのは達は顔を赤くしている。

ネプテューヌ「フェイト、その姿の名前は決まった？」
サイズハート「うん・・・サイズハートにしようかと思うんだ」
変身したフェイトは、サイズハートと呼ぶことにした。

銀時「てかフェイト、お前そんな恰好で恥ずかしくねーのか？」
今のサイズハートの姿は露出度が８割ぐらいあるため、さすがに目のやり場に困った。
サイズハート「え？そうなのかな？普通だと思うけど…」
銀時「それで普通だったらお前は強度の露出狂だよっ！！」
今の服を普通だと答えるサイズハートに、銀時は突っ込む。

ネプテューヌ「何なら銀さんもやってみる？」
銀時「・・・・・え？」
ネプテューヌの言葉に耳を疑う銀時。
なのは「あ！それいいね！」
フェイト「銀時もやってみようよ！」
さらになのはといつの間にか変身を解いたフェイトが言いだす。

銀時「いやいやいや、何で俺までやるんだよ！そんなもんお断ｒ「逃がさないよ♪」っておい放せ～！」
銀時が断ろうとしたら、なのは、フェイト、スバル、ティアナが銀時をがっちりホールドする。
ネプテューヌはそんな銀時に腕輪を装備させ、
ネプテューヌ「いいよ、イースン」
イストワール「ハイ。それでは発動♪」
銀時「ちょっとまてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
イストワールがスイッチを押し、銀時は叫ぶが間に合わず、体が光

る。
そして光がはれると、美しいロングの銀髪に蒼い瞳、シグナム級のバストをもち、右手には名刀らしきものが握られている美女がいた。

なのは「・・・え?・・・銀さん?」
フェイト「銀・・・時・・・?」
なのは達は美女に話しかける。
???「・・・・・・ってなんじゃこりゃあああああああああああ!!!!!」
美女は突然叫びだし、なのは達はびくっ!となる。

???「なんだよこれ!?俺女になってるぅ~~~~っ!?」
美女は自分の姿にパニクっている。しかも声は銀時の声だ。
ネプテューヌ「わ~、かわいいじゃん銀さん」
銀時?「オメ~に可愛いなんて言われたくねぇよっ!!」
銀時?はネプテューヌにからかわれて怒鳴る。

イストワール「銀さん、一応その姿の名前はシルバーハートにしますけどよろしいですか?」
シルバーハート「おっ!なんかそれかっこよくね?・・・ってちげーよ!!何で俺女になってんだよっ!!」
銀時・・・シルバーハートは、自分が女になってることの不満を言うが、
イストワール「それは仕様です(´∀`)」
シルバーハート「腹立つ!!顔文字も含めてメッチャ腹立つ!!」
サラッと流される。

ムニムニッ

シルバーハートがイラついてるところに、ネプテューヌが・・・シ

ルバーハートの胸を触っていた。
ネプテューヌ「わぁ～、銀さん柔らか～い」
シルバーハート「ちょっ、おま・・・何胸触ってんだよっ!?」
ネプテューヌに胸を触られて、あたふたするシルバーハート。ちなみになのは達は2人のやり取りに顔を赤くしている。

ネプテューヌ「ホント銀さん柔らかいね～。コンパとは違った柔らかさと触り心地だよ～」
自分の顔をシルバーハートの胸に埋まりながら揉んでいる。
シルバーハート「オイィィィィィィィィィ!!!お前それ唯の変態じゃねーかァァァァァァ!!!!」
シルバーハートは怒鳴り散らす。

シルバーハート（まずいっ!非常にまずいっ!!こんな姿を誰かに見られたら・・・（汗））
シルバーハートは冷や汗を流している。こんな姿を見られたらとてもではないが、生きていけない。周りからは痛い男として見られるのがおちだ（この場にいる全員を除く）。
特にはやては人の胸を揉みに来るやつだからシルバーハート（銀時）の貞操の危機が来るし、九兵衛は胸の大きな人を嫌うやつだから命の危機が来る。

そんなことを考えていると、
はやて「何しとるんや～」
九兵衛「君らは何をしているのだ?」
タイミング悪く2人が来てしまった。

シルバーハート（ゲッ!）
なのは「あ、はやてちゃん」
はやて「なのはちゃん、そこのネプちゃんが抱きついているんはだ

れや？しかもえらいナイスバディをもっとるやないか！」
はやては案の定シルバーハートに対して、手をわきわきさせている。

シルバーハート「（やっぱりか！くそっ！どうｓ）「銀さん黙ってないで何か話したら？」っておぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」
シルバーハートが考えてる矢先にネプテューヌが余計なことをしてしまい、シャウトする。

はやて「なん・・・やて・・・？」
九兵衛「なん・・・だと・・・？」
２人は我が目を疑った。

はやて「なのはちゃん、どういうことなん？」
なのは「えっと・・・それはね」

説明中・・・

なのは「というわけなの」
はやて「なるほどな～」
はやてと九兵衛は納得すると、２人は獲物を狙う目になった。

はやて「それじゃ銀ちゃん。その胸をうちに触らせてくれへんか？」
九兵衛「銀時、覚悟はいいか？（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」
はやては手をわきわきさせ、九兵衛は殺意を放ちながら剣を構えている。

シルバーハート「ちょっ、ちょっと待てよ・・・お願いだから、３００円あげるから」

はやて「その胸をうちに触らせ～～～！！！」
九兵衛「天誅！！！」
シルバーハートの言葉も聞きもせず、２人が襲いかかって来た。もはやこれまでかと諦めかけた瞬間、
ネプテューヌ「・・・ビルを飛び越えるようなイメージでかわして（ボソッ）」
シルバーハートの耳元で抱きついているネプテューヌが言い、思わず指示どうりにジャンプすると、

ビュンっ！！

シルバーハートが空高く飛び上がった。

なのは「ふぇっ！？」
フェイト「嘘っ！？」
はやて「んなっ！？」
九兵衛「何だとっ！？」
なのは達は驚く。

シルバーハート「うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？俺空を飛んでるぅウウウウウウウウ！！？」
飛び上がったシルバーハート自身も驚いていた。現在地は地面から６０メートルである。

ネプテューヌ「そこからグライダーのイメージで飛んでみて（ボソッ）」
またもやネプテューヌが耳元でささやく。
シルバーハートは一応グライダーをイメージして跳ぶと、水平飛行した。

シルバーハート「・・・おぉ～・・・」
グライダーのように飛んでいる自分に驚くシルバーハート。

ネプテューヌ「どう？銀さん。始めて飛んでみた感想は？」
ネプテューヌがきくと、シルバーハートはにっこりと笑う。
シルバーハート「スゲーぜネプテューヌ。他にもできるのか？」
ネプテューヌ「もちろん。まぁ、ためしてみて」

ネプテューヌが指示すると、シルバーハートはその指示通りに動いたり飛んだり武器を使って攻撃したりした。

シルバーハート「サンキューな。いい経験をしたぜ」
ネプテューヌ「どういたしまして♪」
シルバーハートは感謝し、ネプテューヌは返事をする。

シルバーハート「つーかもうこんな恰好はウンザリだ」
ネプテューヌ「また飛びたいんだったらその恰好だけど…」
シルバーハート「ああ・・・そう・・・ハァ・・・」
シルバーハートはもう変身したくないと言い出すが、ネプテューヌに言われ、ため息をついた。

余談だが、ミッドチルダ全域に『六課の銀の美女』と呼ばれる噂があり、世界的に大人気を博したのは言うまでもない。なお、その美女に正体でもある人物は若干胃が重くなってきたことも言うまでもない。

～おまけ～

銀八「教えて！！」

全員「銀八先生！！」

銀八「またまた始まっちまったよ～このコーナー。今回のアシストは」

岩沢「ガルデモのボーカル担当岩沢だ」

銀八「そんじゃいくぜ。ペンネーム『鳴神ソラ』さんから。『マリオ「良いだろう！その勝負受ける！」

（そう言って懐からウルトラゼロアイを取り出し…）

マリオ「ジュワ！」

（装着すると同時にウルトラマンゼロに変身する）

おいいいいいいいい！！！！！

スネーク「やれやれ…ルイージも行ったらどうだ？」

ルイージ「やっぱり…」

（溜息を付いた後にコスモプラックを取り出し…）

ルイージ「コスモス！！」

（言うと同時にコスモプラックが光り、ルイージはウルトラマンコスモスへ変身する）

またまたおいいいいいいいい！！！

スネーク「させ…叫んでる作者を無視して感想だが…ＯＰがとある科学の超電磁砲（レールガン）だったのは置いといて…ジャンクゴーレムの戦いは終わったな」

フォックス「ああ…見事なコンビネーションだったな」

ネス「それはそうと…まさかのこれより後のＶｉＶｉｄで出るヴィヴィオの奴が出たね～」

リュカ「これが一番の驚きだよね；」

ピット「と言うか称号の中で凄いのあるね；」

ソニック「だな…皆に質問だけど…『現代いる六課のメンバーを足が速い順で並べたらどうなる？』

Ｕゼロ「これで決まりだ！ファイナルウルティメイトゼロ！！」

コスモスＦＭ「御免ね、コスモストライク！」

ゴモラ「ぐぉぉぉぉ！！」ドカーーーン！

スネーク「倒したか…メンバーに質問だ…『家のルイージに称号を付けるならどんな感じだ?』」

フォックス「ヴィヴィオに質問、『デバイスを手に入れて今後どう言う技を作ってみたいんだ?真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの奴を参考にしても良いぞ』」

ネス「次回を楽しみにしてます♪」

『ズバリ作者が答えましょう」

真王「ハイ。早さ順で並べるならこんな感じです。」

紙に、フェイト＜エリオ＜なのは＜スバル＜シグナム＜リインフォース＜ヴィータ＜ザフィーラ＜はやて＜ティアナ＜シャマル＜キャロ、と順番に並んでいる。

真王「２つ目は、彼らはこう書きました。」

紙に、『緑の貴公子』『永遠の二番手』『英雄の弟』『幽霊嫌い』『お化けの掃除人?』と書かれている。

真王「そして三つ目は…ヴィヴィオ、答えなさい」

ヴィヴィオ「私は原作通りの技を使うけどパパとネプ姉ちゃんからオリジナルを作ろうと思ってるんだ♪」

銀八「くぅ～。羨ましいぞ畜生。『鳴神ソラ』。廊下に立て」

岩沢「何で命令形？まいっか。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問。『ランド「いよ、大将モテモテじゃねぇか羨ましいねぇ、俺はランド・トラビス。人読んでザ・ヒートだ！（キラリン）んじゃ俺から質問行くぜ。ズバリ！どうやったら大将みたいにボインで美人な姉ちゃん達にもてるんだ？教えてくれ！・・・って、やべ！メールが来た！んじゃ俺はこれで・・・ってぎゃあああああ！待てメール！俺が悪かった！だからそれで殴るのは・・・頼むからガジェット？型を投げるのは勘弁ってぎゃあああああああ！」

ブツン・・・』・・・・・・・・・何がしたいんだこいつは？」

銀八「知らねえよ」

銀時「俺もなんで持てるかなんてしらねーよ」

岩沢「じゃあ『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に立て。次はペンネーム『黒神』さんからの質問。『音無へ

僕の小説『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』を見て、感想をお願いします。

ネプテューヌ全員へ

『劇場版　銀魂　新訳紅桜編』と言う映画ですが、見てみます？見たら具体的に感想をお願いします。

キャロへ

神楽と月詠の事をどう思っていますか？

黒神

「以上です。」『一つ目は音無、答えてくれ」

音無が立ち上がる。

音無「シリアスを除くともうグダグダだよ・・・」

ネプテューヌ「2つ目は私達暇があったら見るよ」

真王「んじゃ三つ目。キャロは？」

キャロ「・・・むかつきます」

銀八「・・・『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

真王「あっ！そうだ、『鳴神ソラ』にこの『女神の腕輪』（女神に変身できます。男キャラは女体化します）をプレゼントしますよ」

銀八「ちょっとまてや。誰につけさせるんだよ」

真王「誰でもいいよ。ピーチでもいいし」

銀八「・・・まぁいいか」

番外訓：変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる（後書き）

真王「次回はやっぱ短編集。それではまた会いましょう」

超短編集２（前書き）

真王「この短編集にエロい表現が含まれています！それでも見るのならあなたは勇気ある紳士です。それではご鑑賞あれ」

超短編集2

～仲間が増えた～

機動六課の食堂で、銀時達はまた宇治銀時丼を食べていた。
ヴィータ「・・・ま～たお前らは食べてんのか？」
ヴィータは片眉をあげて言う。

銀時「当たり前だ。甘いもんとらねぇと俺いらいらするから」
フェイト「ヴィータも食べてみたらこのおいしさがわかるのに…」
ヴィータ「絶対お断りだ」
ヴィータは宇治銀時丼など絶対食べないと誓った。

ネプテューヌ「な～んでヴィータはこのおいしさが分らないんだろうね～」
小毬「これおいしいのにね～」
クド「どんとみーとはダメなのです～」
ユイ「味が理解できない人はアホですね☆」
ヴィヴィオ「パクパクパクパク・・・」
ヴィータ「あんなもんあたしは食べる気がしな…って増えてるぅ！！？」
ヴィータがネプテューヌの方へ向くと、何と宇治銀時丼を食べている小毬とクドとユイとヴィヴィオがいた。

小毬「一度食べてみたら甘くておいしいから私好きになっちゃった？」
クド「ネプテューヌさんに勧められたのですがこれはでりーしゃすなのです！」
ユイ「実は私だけでなく岩沢さんも食べてますよ♪」

ヴィヴィオ「おいし～～！♪」
ヴィータ「・・・まさかどんどん増えていくんじゃないだろうな・・・？」
ヴィータはこの先が不安になってきた。

～椎名と定春～

ある日、椎名は定春の前に立っている。

椎名「・・・・・・・・・・・・・・」
定春「・・・・・・・・・・・・・・」
お互い見つめ合って・・・そして、

椎名「とうっ！」
定春「ワン！」
椎名が定春に向かって走り出し、定春は椎名を・・・・・・・バックリと口に入れた。

椎名「あぁ・・・・・・やっぱり幸せだ」
頭から噛みつかれても、血を流してもなお離れない椎名。
銀時達が見つけて抜き取るまで5時間続いた。

～出ちゃった！～

ある日、ネプテューヌが海に向って何かをやっていた。
ネプテューヌ「かめはめ波ーーーーー！」
・・・・・どうやらかめはめ波の練習をしているらしい。

銀時「何やってんだ？」
ネプテューヌ「あ！、銀さん」
銀時がやって来て、ネプテューヌが何やってたかを話すと、

銀時「分ってねーな。いいか、かめはめ波ってのはもっとこう勢いをドーン！と出さなきゃ意味ねーんだよ」
ネプテューヌ「具体的には？」
銀時「今からお手本見せっから、よく見とけよ？」

銀時はネプテューヌの前に立って、
銀時「かーめーはーめーーーー波ーーーーーーーーーーーー！！！！」
かめはめ波のポーズをした。

銀時「どうだ？わかったか？」
ネプテューヌ「う～ん・・・何となく分った」
ネプテューヌは何となく納得したようだ。

銀時「そんじゃやってみろ」
銀時はそう言って、ネプテューヌは準備をする。

ネプテューヌ（イメージは両手の中に力をためて、それを前に突き出し、発射する・・・）
ネプテューヌは目をつぶりながら構えをとる。

そして、
ネプテューヌ「・・・かーーめーーはーーめーーーーーーーーーーーーーーー!!!!」
ネプテューヌが言うと同時に・・・・・・両手の中から紫の光の玉が現れる。それはどんどんと大きくなって、
ネプテューヌ「波ーーーーーーーーーーーーーー

！」
クロノ「原因は何だ！？」
局員「分りません！」
クロノ「質量兵器の誤爆か？」
ネプテューヌは『かめはめ波』を習得した。

～出ちゃった！2～

ネプテューヌ「でね・・・ここをこうやってこうして・・・」
ヴィヴィオ「えっと・・・ここをこうして・・」
ネプテューヌ「そうそう！そんな感じ！」
ネプテューヌとヴィヴィオは、2人してかめはめ波の練習をしていた。

なのは「あれ？ネプちゃんにヴィヴィオ」
後ろからなのは・フェイト・はやて・シグナム・ヴィータ・リインフォース・神楽・新八・桂・エリザベス・月詠・銀時が来た。

ネプテューヌ「あ！銀さんになのはちゃん」
ヴィヴィオ「なのはママ！」
2人は振り向いて答える。

フェイト「2人して何をやっているの？」
フェイトがきくと、
ネプテューヌ「ヴィヴィオにちょっとした教導をやってるんだよ～」

ヴィヴィオ「だよ～」
ネプテューヌが教え、ヴィヴィオはネプテューヌのセリフの語尾を言う。

なのは達は意外そうな顔をしたが、銀時だけは複雑な顔をした。なぜなら銀時はネプテューヌのやってることが理解できたからだ。

ネプテューヌ「それじゃあヴィヴィオ！本番行くよ！」
ヴィヴィオ「うん！」
ネプテューヌの指示に、ヴィヴィオは構えをとる。かめはめ波の構えを。

銀時（あれ？なんかいやな予感しかしねぇ・・・）
銀時は不安を抱く。

ネプテューヌ・ヴィヴィオ「かーーめーーはーーめ――――――――！！！！」
2人が言うと同時に、ネプテューヌは紫色の、ヴィヴィオは虹色の光の玉が現れ、
ネプテューヌ・ヴィヴィオ「波ーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

ドキュウウウウウウウウウウウンッ！！！！！

一斉に砲撃が空に放たれ、

ズドォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！

爆発して・・・・・・星が消えた。

全員「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（@口@；）」

なのは達だけでなく、万事屋組と桂、エリザベス、月詠までもがあんぐり状態になった。
銀時は一度見たが、ヴィヴィオまで出すとは思いもよらなかったらしい。

ネプテューヌ・ヴィヴィオ「どうかなみんな（なのはママ）！！」
全員「ハハハハ・・・・・ホ…本当ニスゴイデスネ～～・・・」
やっぱりみんなは驚きのあまり片言しゃべりになった。

時空管理局本部付近・クラウディア

局員「クロノ艦長！！惑星▼■が消滅しました！！」
クロノ「なんだとっ！？原因は何だ！？」
局員「分りません！！」
クロノ「・・・一体何が起こったって言うんだ！」

ヴィヴィオは『かめはめ波』を習得した。

～はやてのおっぱい万歳記（小毬編）～

はやて「およ？小毬ちゃん」
小毬「あ！はやてさん」
はやてが廊下をうろうろしていると、小毬とであった。

はやて「何処に行くん？」
小毬「鈴ちゃんとお菓子を食べようとしてるところなんです～」
小毬は鈴の部屋に向かい、一緒にお菓子を食べようとしていくようだ。

はやて「さよか。けどな、うちにはそのマシュマロをいただくで～！」
小毬「キャアッ！」
はやては小毬の胸を揉み始めた。

はやて「おおっ！なかなかの柔らかさと大きさをもっとるな～」
小毬「ふえぇぇ～～・・・・・・はやてさ～ん～、やめて～」
小毬はやめてほしいと言うが、はやては止める気なしだった。

はやて「嫌や。このマシュマロはうちが頂くんや」
小毬「そんな～～～・・・・・・私お嫁もらえないよ～～～・・・・」
小毬は涙目で訴える。

はやて「うふふ・・・そろそろ本食ｗ「小毬ちゃんに何すんだ～～～～～！！！！」ガボガァァアアア！！！」
揉んでる間に後ろから鈴のハイキックをくらい、吹き飛んだはやて。
倒れたはやては凛々しい顔をしていたそうだ。

～はやてのおっぱい万歳記（リベンジベール編）～

機動六課・ベールの部屋

はやて「ベェエエエエエエエルゥウウウウウウ！！！」
はやてがすごい形相でベールの部屋に訪れた。

ベール「あら？何でしょうかはやてさん」
勢いよく現れたはやてに対し、ベールはなぜか余裕の表情である。

はやて「ベール・・・・・うちの話をよう聞き。あんた桂さんに胸を押しつけたんやて？」
はやてが嫉妬の念を放ちながらベールに聞くと、
ベール「そうですが何か？」
平然と返事した。

はやて「な、なんやてーーーーーーーーーー！！！！！」
どこかのパン職人の店で突っ込み兼リアクションをする大阪人のような驚きをする。

はやて「う・・・嘘や・・・うちも桂さんにそんなことした事ないのに～～～～！！！」
はやては頭を抱えてシャウトする。

ベール「でしたら何をするのですか？」
はやて「それはこれや～～～～！！」
ベール「キャッ！」
話しかけてきたベールにはやてがベールの胸を鷲掴みにした。

はやて「このドタプンな乳を持ちやがって～～～！この恨みを晴らすべきか～～～！」
ベール「・・・・・・・・・・・・・・・」

ベールの胸をひたすら揉むはやて。逆にベールは顔を赤くして、はやてを見続けている。

ベール「・・・・・・はやてさん」
はやて「ん？」
はやてが見上げると、ベールはグリーンハートに変わる。

グリーンハート「・・・お楽しみはこれからですよ？」
はやて「え？」

なのは「はやてちゃん遅いな～」
一行に現れないはやてを心配し、なのはは迎えに行った。が、はやての部屋にははやてはおらず、たまたま通りかかったネプテューヌがベールの部屋にいると言うことで、ベールに部屋に向かった。

なのははベールに部屋の前に着いた。
なのは「はやてちゃ～～～ん。いるーーー？」
なのはは呼ぶが、返事がない。仕方なく扉の前で耳を澄ますと、

ギシ・・・ギシ・・・ギシ・・・ギシ・・・

ベッドの音が聞こえる。それどころかなぜか嬌声が聞こえる。
なのははこっそり扉を少し開け、中を覗くと、

はやて「ハァ・・ハァ・・・アフゥッ！・・・そんなに動かんといてぇ・・・」
グリーンハート「アンッ・・・まだまだ・・んん・・・終わりませ

んよ・・・ん・・・」
とってもいけないことをやっていました。それも全裸で。
はやてはグリーンハートの胸を揉み、グリーンハートは腰を動かしている。
なのは「／／／

すごい光景（来ヶ谷にとって）をみて、廊下一面に盛大な鼻血を出す来ヶ谷。その時の表情はとても幸せそうだった。

理樹「く、来ヶ谷さあああああああああん！！？？いったいなにがあったのおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！？」

たまたま通りかかった理樹が見つけて、来ヶ谷は貧血からまぬがれた。

～それはダメだろ～

ネプテューヌ「椎名さ～ん。何か遊ばない？」

椎名「・・・あさはかなり」

ネプテューヌが椎名と一緒に遊ぼうとしているが、

ネプテューヌ「し・い・なさ～ん。何かやろうよ～」

椎名「あさはかなり」

椎名はあさはかなりのひとっ走りで、遊ぶ気ではないようだ。

ネプテューヌ「ぶ～。つまんないの～。・・・・・・・・・そうだ！」

ネプテューヌは何かを思い出し、部屋から出て言った。

椎名「？」

椎名はネプテューヌの行動が理解できないが、とりあえず待つことにした。そして、

ネプテューヌ「じゃーん！！これ似合う？」

頭に犬耳、犬の手袋と犬の尻尾、そして露出度の高い犬の毛皮を着たネプテューヌが戻ってきた。

椎名「ゴフゥッ！！！（吐血＋鼻血）」
そんなネプテューヌを見た瞬間、椎名が吐血と鼻血を同時に出し、倒れた。

ネプテューヌ「え？どうしたの？椎名さん！？」
ネプテューヌ自身は、唯、椎名を驚かせる為に犬の衣装を着たのだが、まさか吐血と鼻血を出して倒れるなんて思いもよらなかったのだ。

ノワール「なによ！今の音！」
来ヶ谷「一体何があったのだ？」
ネプテューヌ「あ…ノワール、来ヶ谷さん」
音を聞きつけ、ノワールと来ヶ谷がやって来た。そしてネプテューヌの姿を見た瞬間、

ノワール・来ヶ谷「ガハァッ！！！（吐血＋鼻血）」
椎名と同じように、吐血と鼻血を同時に出し、倒れた。

ネプテューヌ「・・・・・・え～と・・・これ私が悪いの？」
倒れた3人に、ネプテューヌはただ唖然とするだけだった。

～ゆいちゃんと呼ばないで～

小毬「ゆいちゃ～～ん」
来ヶ谷「だからゆいちゃんと呼ぶのはやめてくれ・・・」
何やら小毬が来ヶ谷にゆいと呼んでいるが、来ヶ谷は嫌がっているらしい。

銀時「何やってんだお前ら？」
銀時とネプテューヌがやって来た。

小毬「実は私ゆいちゃんと一緒にお菓子食べようと思って」
来ヶ谷「そう言うことだ。あと小毬君、ゆいちゃんと呼ばないでくれって」
来ヶ谷はまたゆいちゃんという単語に突っ込む。

ユイ「誰か私を呼びました～？」
すると、ユイが来た。

小毬「う～んとね、『ユイちゃん』に用があったわけじゃなくて……『ゆいちゃん』に用事があったの～」
ユイ「……へ？　それって変わらないじゃないですか」
小毬「あれ？　えっと……」
来ヶ谷「つまり、君にではなく私に用があったということだ」

小毬の説明だと、いつまで経っても誤解が解けないと考えた来ヶ谷は、ユイにそう言ったのだった。
するとユイは、

ユイ「ああなるほど！　来ヶ谷さんは名前が『唯湖』だから、小毬さんに『ゆいちゃん』って呼ばれてるんですね？」
来ヶ谷「うう……だからその名前で呼ぶのはやめてくれ。あまり慣れてなくてな……」

ユイにまでゆいちゃんと呼ばれ、歯がゆくなる来ヶ谷。
ネプテューヌ「呼ばれるの恥ずかしいの？ゆいちゃん？」
来ヶ谷「ね・・・ネプテューヌくんまで…」
ネプテューヌにまでゆいちゃんと呼ばれる始末。

銀時「そうなのか？　だったら俺が呼んでやるよ……ゆいちゃ～……」
来ヶ谷「死ぬがいい」
銀時「ぎゃあああああああああああ！！！！」
銀時がゆいちゃんと呼ぼうとすると、来ヶ谷は腰にぶら下げている模造刀を使って……一閃。
銀時はそのまま気絶し、恐らくしばらくの間は身体を動かすことはできないだろう。

ネプテューヌ「あら～。銀さんみたいなむさい男はダメなのか」
ユイ「（うわぁ、この人を敵に回すのだけは絶対にやめよう）」
ネプテューヌは倒れた銀時を眺め、ユイは、心の中で逆らうのはやめようと誓ったのだった。

～ヴィヴィオの修行～

ヴィヴィオ「フッ・・・ハッ・・・とう！」
パープルハート「その調子よ」
機動六課の訓練場で、ヴィヴィオはパープルハートと修行をしていた。ちなみに現在ヴィヴィオは大人化している。

ブラックハート「いい？ヴィヴィオ。唯相手を素手で殴るだけじゃなく、足払いしてこかせたりお得意の魔砲（誤字ではない）で倒すのもあるのよ」
ヴィヴィオ「ハイ！」
ブラックハートから助言をもらい、ストレート、アッパー、ショートニー、回し蹴りなどの攻撃を繰り出し、パープルハートはそれらを受け止める。

ヴィヴィオ「デヤァッ！！」

ズガァンッ！！

次の修行は、破壊力を上げる修行のようだ。担当はホワイトハート。
ホワイトハート「なかなかの力を持ったけど・・・もっと力を溜めればいいかもしれないわね」
ヴィヴィオ「そうですか？では・・・」

ホワイトハートの一言に、ヴィヴィオは右手に力と魔力を溜めて、高く飛び上がり、
ヴィヴィオ「はあああああ……ドリャァッ！！！」

ズガァァァァァァァァァァン！！！！！！

岩ごと地面に叩きつけた。その時地面はひび割れ、地下８０００メートルにまで達した。

ホワイトハート「よしっ！その調子だ！もっと頑張れよ！」

ヴィヴィオ「あ…はい」
割れた地面など気にせず、ヴィヴィオにほめるが、ヴィヴィオ自身はちょっと罪悪感が残った。

グリーンハート「まずは防御力から行きます。ハァッ！」
ヴィヴィオ「くっ！」
次の修行は魔法に関しての修行である。担当はグリーンハート。
ヴィヴィオはシールドを展開し、グリーンハートの攻撃を防いだ。

グリーンハート「まだ終わっていませんよ！！」
槍でシールドをガンガン攻撃するグリーンハート。

グリーンハート「ハアアッ！！」
ヴィヴィオ「きゃあああああああ！！！！」
最後の一撃に、ヴィヴィオは後退された。シールドを展開しながら。

グリーンハート「・・・よくぞここまで登りつめましたね」
ヴィヴィオ「ハハハ…ありがとうございます」
グリーンハートはほめて、ヴィヴィオはボロボロになりながらも笑いを浮かべる。

グリーンハート「次は砲撃魔法ですが…撃てますか？」
ヴィヴィオ「大丈夫！任せて！」
ヴィヴィオは砲撃を撃つ構えをとり、
ヴィヴィオ「ディバインバスターーー！！！」
なのはの十八番でもあるディバインバスターを撃った。

グリーンハート「・・・合格です。なかなかの威力でしたよ」

ヴィヴィオ「ありがとうございました」
こうして、ヴィヴィオの一日の修行は終わるのだった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「短編集なのに、やっちゃいました～。ではアシストは」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオだよ～」

銀八「よし！いくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス「これは良い物を貰った（黒い笑顔）」

ルイージ「（ΣフォックスがドSモードになってる！）」

スネーク「（この時のフォックスの餌食になるのは…）」

フォックス「ファ～ルコ～俺たちの中で思いっきり女体化してるお前が装着してくれ～～と言うかしろぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

ファルコ「おまっ！やめ！ってエンジェやエイン！俺を掴むな…やっ、ヤメロォォォォォ！！！！！！」

させ…あっちは置いといて…まさかのスバルやティアナ他、なのはやフェイトまで女神か！

マリオ「銀時もなったな…ご愁傷様、後、なのは（冥王）は砲撃女神だろ？」

ついに言ってもうたこの人！

ルイージ「退避だよ退避！！」

スネーク「ま☆た☆か」

ネス「と言うか銀さん飛ぶと言う夢が叶ったけどなんとも言えないだろうね～～…皆に質問『作者が『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説の感想を聞かせてくれませんか？なお、鳴神を取った『ソラ』で投稿してるので～』」

フォックス「ふはははははは！！！見よ！ファルコもとい不動の女神姿を！（黒い笑顔）」

不動「っ～～～～～／／／」↑腰まで伸びた青髪に前髪一房が赤くなっていて、青い目、スタイルはそちらの女神化した銀時より上、背中に青い鳥の羽を模した翼を装着している。

エンジェ「あっ、姉貴凄い／／／」

エイン「萌えですね／／／」

フラン「ふわ～～～不動凄～～い」

お空「うにゅ～」

フォックス「ホントこの時のファルコは弄り易いで（黒い笑顔）皆に質問『内のファルコの女神姿はどうだ？』」

ルイージ「…そっちの途中参戦のリトバスメンバーとＳＳＳ団の皆に質問『この時のフォックスはどう思う？』；」『・・・ズバリ、１つ目を答えましょう」

全員が立ち上がる。

全員「微妙・・・に面白い？」

銀八「何で疑問形？・・・まあいいや。２つ目は」

銀時「こりゃすごいことになってんな・・・」

全員「何かすごいね・・・」

銀八「ハイありがと。そして三つ目は」

リトバス組とＳＳＳ団が立ち上がる。

リトルバスターズ・戦線メンバーズ「キモイ」

理樹「フォックスさんがそんな人だなんて知りませんでした（軽蔑）」

音無「俺達に近寄るな（拒絶）」

銀八「同感だ。フォックスに１００スラｔの重りを真上に投下。そして『鳴神ソラ』さん。フォックスを亡きものにしてください」

ヴィヴィオ「ねぇ『スラｔ』って何？」

真王「スライム（ドラクエ）の重さだよ。１スラｔはスライム一匹、５スラｔはスライム五匹で持ち上げられるんだよ」

ヴィヴィオ「ふ～ん」

超短編集2（後書き）

真王「リトバス編が終わり、次の章は『コープス&スプラッター編』に突入！銀時やネプテューヌ達にウエスト博士と呼ばれるものから招待状が送られて、その博士がいるウエスト館へと足を踏み入れるが、そこは化け物の魔窟と化していた。そこで、力を宿したマスク、『ヘルマスク』をつけているリック・テイラーとその恋人ジェニファーと出会い、ネプテューヌ達は彼らの協力の元、再びウエスト館へ向かい、ウエスト博士の野望を阻止するのであった」

ヴィヴィオ「次回『招待されても絶対不気味な屋敷に入るな』ていくおふ！」

第二回、モンスター解説図鑑

真王「第二回、モンスター解説図鑑！！」

ワーーーーーーー！！！！

理樹「って何なのこれ？」

恭介「リトバス編に登場したモンスターを紹介するってコーナーさ」

理樹「成程・・・」

真王「納得できたならいくぞ！」

～ヒンニャー～

第十五訓に登場。
緑色のペラペラな四枚板のモンスター。一体どういう原理で誕生したのかは謎。体を回転させて体当たりをする。マリオの世界のモンスター。

真王「いかがですか」

理樹「成程、理解できました」

真王「よろしい。次だ」

～ハンニャー～

第十五訓に登場。
ヒンニャーと同じく、ペラペラ四枚板のモンスター。体はオレンジで、頭にとげがあるのが特徴。読み方が微妙に『般若』のようである。また、ピンク色で歯がとがっているヘンニャーという亜種が存在する。マリオの世界のモンスター。

鈴「こいつだな。理樹を傷つけた奴は」

恭介「落ちつけよ鈴」

ゆり「次よ」

～グリフォン～

第十七訓に登場。
鷹のような頭と、ライオンの体が合わさったようなモンスター。上空から獲物を求め、鋭い爪で決して逃がさないのが特徴。ドラクエシリーズをモデル。

ネプテューヌ「確かこういうのってキメラって言うんじゃなかったっけ？」

恭介「それもあったが、こうゆうモンスターにはこういう名前が決まったのさ」

～ワイバーン～

第十七訓に登場。

緑色の鱗に大きな爪と羽があるのが特徴のモンスター。唯一ドラゴンと違うのは、炎が吐けないことである。

土方「蜥蜴にしてはザコだったな」

沖田「そりゃあ俺と土方さんが同時にやりましたからね～」

～デスサイズ～

第十七訓に登場。

血の付いた鎌を持つ死神のようなモンスター。ダークソウルによって生み出され、レリックを狙ったが銀時達に倒される。銀時達にこの先のことを言い残し、消滅した。モデルは、『ＤＭＣ』のヘル・ヴァンガード。

銀時「こいつはよく分らんかったな」

ネプテューヌ「あれ？銀さんはゴースト系が苦手じゃなかったっけ？」

真王「銀さんはデスサイズをゴーストとしてではなく、モンスターとして認識したから怖がらなかったんだよ」

ベール「それでは、最後のですわね」

～ジャンクゴーレム～

第十九訓と第二十訓に登場。
体中どれもこれもガラクタでできたようなモンスター。外見とは裏腹に、かなりの防御力と攻撃力を持っているため、油断はできない。
また、必殺技の『ジャンクバスター』は周りのガラクタで相手に発射させる。一見地味っぽいが、危険な技である。顔はドラクエシリーズのゴーレムを機械化し、ボディはロックマン7のジャンクマンをイメージ。

ネプテューヌ「このリトバス編のボスって感じだね」

アイエフ「ある意味ボスなんだけどね」

真王「それでは第三回も会いましょう」

第二十一訓：招待されても絶対不気味な屋敷に入るな（前書き）

真王「ついに新章『コープス&スプラッター編』がスタート！活目してください！」

ヴィヴィオ「『リリカル銀魂』はじまります！」

第二十一訓：招待されても絶対不気味な屋敷に入るな

とある島のとある館

???「・・・足りない・・・全く足りんぞ！」

ある館の研究室らしき部屋で、1人の老人が悩ませていた。白衣を着ていることからおそらく研究者なのだろう。

???「あの馬鹿共のおかげで私の研究に支障ができた。このままでは私の研究がすべて水の泡となってしまう」

老人はある2人を思い出して、苛立つ。その彼の周りにあるたくさんの生体ポッドのようなものの中には、異形が入っていた。

???「・・・・・そうだ。集めればいい。私からではなく、向こうからここにこればいい」

老人はククと笑いだす。

???「手始めにある世界のある場所から招待状を出そう。来るか来ないかはわからんが頭の馬鹿なやつは来ることになりそうだな～、クックック・・・」

老人は狂った笑みを浮かべる。

ウエスト「さぁ来るがいい！・・・この私の・・・ウエスト博士の実験に付き合おうではないか！あはははははははははは！！！」

老人・・・ウエスト博士は狂った笑いを上げた。

???「・・・・・・・・・・・」

唯、それを遠くで、小さな子供がそれを眺めていた。その子供は・・

・青白く・・・半透明だった。

機動六課・ネプテューヌの部屋

ネプテューヌ「う～～～ん・・・よく寝た～～～・・・」
機動六課の朝。ネプテューヌは起き上がる。

ネプテューヌ「今日は何しよっかな～～～♪・・・・・・ん？」
何して遊ぶか考えていると、机に見慣れない手紙があった。

ネプテューヌはその手紙を手に取って見ると、こう書かれていた。

『拝啓　ネプテューヌさま。

あなたは屋敷に招待されることになりました。我が屋敷・ウエスト館で豪華な料理とおもてなしをさせていただきます。場所は〇〇〇の〇〇でございます。是非こちらにいらしてください。

ウエスト博士より』

ネプテューヌはこの手紙が招待状だと理解すると、
ネプテューヌ「よしっ！食べ物いっぱいごちそうするぞ～～～！！」
食べることだけを考えて、いろいろと準備をした。

ネプテューヌ「・・・で、銀さん達も行くことになったの？」
銀時「そうだよ。悪いか？」
実は銀時達も、ネプテューヌと同じ招待状をもらっていた。
招待状をもらったのは、銀時・新八・神楽・桂・エリザベス・月詠・ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ・ヴィヴィオの１３人である。

新八「それにしても・・・なんで僕らにこんな招待状なんか」
アイエフ「確かに・・・そのウエスト博士などうして私達に名前が知ってるのかもへんよ」
新八とアイエフは、招待状をあやしく睨む。
ちなみになのは達はもらっていない。そしてリトルバスターズも戦線メンバーズももらっていない。

アイエフ「きっとこれは罠よ」
新八「そうですね。銀さん、この招待状はあまりのも不自然ですよ。やめといた方がいいんじゃないですか？」
罠じゃないかと悟ったアイエフと新八は、銀時達に言うが、

銀時「その料理にはパフェがあんのかね～」
桂「俺はそばが用意されていると信じているぞ」
神楽「ご馳走食べ放題ネ！」
ネプテューヌ「スイーツスイーツ！」
ベール「どんな料理が待っているのかしら」
コンパ「食べすぎはダメですよ」
ヴィヴィオ「わ～い。食べ物いっぱ～い」
もうすでに行く気満々だった。

新八「オイィィィィィィィィィィィィ!!!薄っすら予想はしてたけどな!!もう少しこの手紙のことも怪しく思えよォォォォォォォォ!!」
新八が怒鳴り、アイエフはダメだこりゃ、と諦めた。

とある世界のとある町

なのは達に許可をもらい、ウエスト館のある世界へとやって来た。
ネプテューヌ「うわ〜。良い街並み〜」
ヴィヴィオ「すごーい」
銀時達は町を眺めていると、町の住人らしき老人に話しかけられた。

老人「あんたら見ない顔だけど観光に来たのかい?」
アイエフ「観光というより招待状を送られたからここに来たのよ」
老人「は?招待状?」
アイエフが老人に説明する。

老人「・・・よう分らんが、場所なら分かるぜぇ〜」
銀時「ホントか?」
銀時がきく。

老人「ほれ、あそこに島があるじゃろ?あの島に大きな屋敷があってな、そこにウエストって言うやつの館があるんじゃ」
老人の指差す方向を見ると、確かに島があった。しかも一ヶ所部分に青っぽい色が見える。

銀時「あそこか…」
ネプテューヌ「船乗ってかないと無理だね」
銀時達はウエスト館のある島を眺める。

???「おいお前ら！」
すると男の声が聞こえた。いかにも漁師さんをやってそうな人だった。

漁師「あの島に行きたいんだったら乗せてやってもいいぞ？」
新八「え！？いいんですか？」
乗せてやるという一言に銀時達は驚く。

漁師「いいって。俺は非番だからな。特別に乗せてやるよ」
ネプテューヌ「わ～い、やった～」
神楽「キャッホオォオォオウウウウウウウ！！！！」
ネプテューヌ、ヴィヴィオ、コンパ、神楽は嬉しそうだ。

ネプテューヌと銀時達は船に乗り、ウエスト館の島へ行くのだが、

銀時・神楽・ヴィヴィオ「オボロロロロロロロロロロロロロロロロ～～～～」
船で十分早々銀時達が吐きました。（´ロ`）

新八「オイィィィィィィィィィィィ！！！！！十分しか経ってないのに何で吐いてんだァァァァァァ！！！それとなんでヴィヴィオちゃんまで吐いちゃったのォォォォォォォ～～～！！」

銀時と神楽が吐くことに突っ込むが、まさかヴィヴィオまで吐くことに驚いた。

ヴィヴィオ「この船に乗るの初めてだから・・・だから気持ち悪くて・・・うぅぅ・・・」
ヴィヴィオは顔を青くして言う。さすがに慣れない船にはまいっているようだ。

銀時「バカヤローヴィヴィオ、慣れないで吐くんだったら強い奴にはなれねーぞろろ

コンパ「大丈夫・・・じゃ・・・ないです。・・・うう・・・・・・もう・・・限界・・・です」
アイエフ「ヤバッ！読者の前で悪いけど思いっきり吐いて！」
銀時「お前何言っちゃってんのっ！？」
コンパはもう限界に達したようで、船の端っこで出そうとしたら、
コンパ「ん・・・ガボロシャァッ！！！」
銀時達よりも盛大に一気に吐いてしまった。
銀時「オイィィィィィィィィィィ！！！ものすっげー出しちゃったよこの子ォォォォォォォ！！！」
コンパの爆発的な〇ロ吐きに青ざめる銀時。今コンパが吐いた量は5リットル分ぐらいあった。
コンパ「・・・あ～、一気に吐いたらスッキリしたです♪（キラキラ）」
出し切ったコンパは表情がスッキリして煌めいていました。
銀時「あぁ・・・そう」
コンパと漁師さん（見てないから）を除く全員は、顔を引き攣らせた。
漁師「お前ら！もうすぐ着くぜ！降りる準備をしとけ！」
漁師さんの言葉を聞き、銀時達はいろいろと準備をした。
漁師「さぁ着いたぞ！」

ウエスト館のある島に辿り着いた銀時達。しかし天気はなんだか曇っている。

銀時「さ～て、そのウェスト伯爵の館ってのはどこだ？」
ネプテューヌ「違うよ銀さん。ウエスト博士だよ。それと館はあそこじゃない？」
銀時の間違いを訂正させて、遠くに見える青い館に指差すネプテューヌ。

漁師「そんじゃ俺はこのまま戻るが…オメェさんらはどうする？」
銀時「決まってんだろ？」
銀時・桂・神楽・ネプテューヌがニヤァ、と笑う。

銀時・桂・神楽・ネプテューヌ「豪華料理を食べるだけだァァァァァァァ！！！」
そう言って、館まで走りだす。

新八「オイィィィィィィィィ！！！ちゃんと集団のことも考えろよォォォォォ！！！」
新八は怒鳴り、先走った４人を追いかけた。
残りの人も苦笑いしながら後追った。

漁師「・・・・・・・・・・・・」
ポツンとその場で立っている漁師。

漁師「あいつらなら・・・ウエスト博士のモルモットにされるだろうな～～」
その漁師はケタケタ笑い始める。すると、

？？？「おい」

漁師「ん？・・・っ！！お前は！！」
声が聞こえてそちらに向くと漁師は恐怖の混ざった驚きをした。
そこにいたのは青い服に、骸骨っぽいマスクをつけた大男。その隣には、赤いロングの髪の白のちょっとボロボロのワンピースを着た女性がいた。

大男「悪いが船はそのままにしてもらおうかっ！！」
漁師「ギャアッ！！」
大男のパンチに漁師は殴り飛ばされた。しかし漁師の血は赤ではなく緑色をしていた。

大男「ちっ！あいつらを脱出させるために用意したのはいいが・・・この後どうするかだな・・・」
大男が考えるしぐさをする。

女性「彼らの後追いましょ。そのあとで説得して脱出させるわ」
女性は大男にどうするかを説明する。

大男「よし！行くぞ！」
大男は銀時達を追いかけた。そして空からゴロゴロと雷が鳴り、雨が降り始めた。

ネプテューヌ「うわーん！なんでこんな時に雨が降るわけ～～！？」
銀時「知るかよ！んなことよりさっさと館まで走るんだよ！」
突然の雨が降り出し、ウエスト館までダッシュで走る銀時達。

そして、ウエスト館の前に着いた。
銀時「何これ？なんだかル〇ージマ〇ションみたいなんですけど…」
新八「銀さんメタな発言はやめてください！！」
周りは暗く、雷が鳴っているため、思わずそんな感想を漏らす銀時に新八が突っ込む。
そして銀時達は中に入った。

ウエスト館・エントランスホール

ノワール「やっと着いたわね」
ブラン「濡れちゃった…」
コンパ「早くしないと風邪ひいちゃうです」
桂「エリザベスは大丈夫か？」
エリザベス『濡れてますけどなんとか』
ウエスト館に辿り着き、何とか雨をしのげた銀時達。しかし、中の様子が変である。

アイエフ「ちょっと・・・みんな周りを見て」
アイエフが言う。中はどれもこれもボロボロで、荒らされた跡らしきものがいっぱいあった。

ネプテューヌ「何これ？豪華料理はいったいどこに？」
新八「あんたはいい加減料理から頭放せっ！！！」
銀時「オイオイこりゃどういうことだ？」
？？？「そりゃここが罠だってことなんじゃないか？」

銀時が疑問に思っていると、第三者の声が聞こえた。銀時に取って聞き覚えにある人の声が。

銀時「何だ大串君か」

土方「土方だっつってんだろ!!しかもその態度もメッチャむかつく!!」

沖田「あ～、旦那じゃないですかい？」

そこに現れたのは土方と沖田と、その奥から山崎とゴリラっぽい男・近藤がいた。

桂は見た瞬間、にがい顔をした。すると土方が気づいて、

土方「テメーは桂っ!!タタっ切ってやる!!」

案の定、土方は刀を振り回して桂を追いかけ、桂は土方から逃げている。

新八「あれ？近藤さん？」

近藤「おお！新八君！久しいな～」

近藤が新八に手を振る。

ネプテューヌ「あれ？知り合い？」

銀時「まぁ知り合いっちゃあ、知り合いだな」

ネプテューヌが土方達を見て銀時に聞き、銀時は肯定する。

近藤「譲ちゃん達は初対面だな。俺は真選組局長・近藤　勲だ」

土方「その副長・土方だ」

沖田「1番隊隊長の沖田で～す」

山崎「僕は密偵担当の山崎です」

近藤と、桂を捕まえて戻って来た土方と、山崎はあいさつし、沖田は若干めんどくさそうに挨拶する。

ネプテューヌ「あ、私たちは・・・」

少女自己紹介中・・・

近藤「なるほどな。よろしく頼むぞネプテューヌ殿」
新八「って、ちょっと待ってください!!!何であれだけで自己紹介終わったことになったの!?」
新八が『少女自己紹介中・・・』の部分に突っ込みだす。

銀時「馬鹿野郎、新八。自己紹介なんてなげーから作者が手をきかせて省いてあげたんだよ」
神楽「読者はみんな長い自己紹介は苦手ネ。いちいちめんどくさいのは嫌アルから」
新八「オイィィィィィィィ!!!メタな発言はやめてくださいよォォォォォォ!!!」
言ってはいけないような発言を新八は突っ込む。

ベール「あと土方さん。桂さんを放してあげませんか?ここで逮捕しても意味などありませんこと?」
土方「・・・・・ここじゃ法律が違うからなぁ・・・ハァ・・・」
土方は世界が違うため、桂を逮捕しても意味がなかった。

山崎「あっ!そう言えばあの子たちは元気にしてますか?」
山崎が言う。あの子たちとはゆり達戦線メンバーズのことである。

銀時「元気すぎて困るほどだけどな」
銀時はそう返事した。すると、

ギィィ・・・

ドアの開く音が聞こえた。

ノワール「やれやれ・・・ようやくお出まし・・・・・・って」
ノワールが開けた者を見て固まり、ネプテューヌ達も固まった。
ドアを開けた人物・・・・・・否、もはや人ではなかった。

異形「ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ・・・・・・・・」
異形がこちらに近づいてくる。

コンパ「な・・・何なのですかこの人は!?」
ネプテューヌ「いやいやいや!どう見たって人じゃないよ!」
コンパが異形を見てそんな言葉を出し、ネプテューヌが突っ込む。

ブラン「・・・あそこ見て」
ブランが指差すと、異形の仲間がたくさんいて、囲まれている。

銀時「おいおい、手厚い歓迎を受けられてんな俺達は」
銀時は少し笑いながら言う。

土方「んで、オメーらはこの後どうするんだ?」
銀時「知るか」
土方がどうするか聞き、銀時は即答する。

ブラン「まとめて倒す…」
ブランがハンマーを構え出す。

ネプテューヌ「おお!でるか?ブランの技が!」

ヴィヴィオ「ブランお姉ちゃん！！」
ブラン「任せな！ウオオオオオオオオオ！！！」
ブランはハンマーを振り上げ、地面に叩きつけて衝撃波を出し、異形達をなぎ倒した。が、

ビキビキビキビキ・・・

全員「え？」
床がひび割れてきて・・・そして、

バゴッ！！

全員「あああああああああああああああああ～～～～～！！！！」
崩れさって、銀時達は落ちた。

銀時「おいーーーーーーーーー！！！なんてことしてくれたんだテメーはーーーーーー！！！」
土方「何で俺達まで巻き込まれなきゃいけないんだよ～～～～～！！！！」
ブラン「うるせーーーーーーーー！！！あたしが知るかァァァァァァァ！！！！」
銀時達は怒鳴り合うが、何も意味もなく、そのまま落下していくのであった。

ウエスト館・地下

ネプテューヌ「う・・ううん・・・」
女性「あ！気が着きましたか？」
ネプテューヌが目を覚ますと、赤い髪の女性が写り込んだ。

ネプテューヌ「えっと・・・私達は確か落ちて・・・あなたは？」
ジェニファー「私はジェニファー、あなた達を助けたのよ」
ネプテューヌは気絶する前に何が起こったのかを思い出し、女性に聞くとジェニファーと名乗るようだ。

ネプテューヌ「ジェニファーさんですか・・・あ！、そう言えば銀さ「何だネプテューヌ」って銀さん！？」
銀時がどこにいるのか聞こうとすると、その銀時が近くにいた。
それだけでなく、新八に神楽にヴィヴィオ、桂とエリザベスと月詠、コンパ達に土方達もいた。

コンパ「ねぷねぷ～。無事でよかったです～」
ヴィヴィオ「ネプねえちゃ～ん」
コンパとヴィヴィオは泣き顔でネプテューヌに抱きつく。

銀時「ったく、誰のせいでこうなったんだかね～・・・」
土方「・・・何で俺達まで巻き込まれたんだか・・・」
ブラン「おい、喧嘩売ってんのか？」
銀時と土方が愚痴をこぼし、ブランがキレ気味になる。

？？？「お？…どうやら無事のようだな」
ジェニファー「あら、リック」
男の声が聞こえ、ジェニファーとネプテューヌ達が振り向く。骸骨のようなマスクをつけた大男・リックが来た。

リック「始めはしてだな。俺はリック・テイラーだ」

ネプテューヌ「あ！私はネプテューヌだよ」
銀時「キャプテン志望の坂田銀時で～す」
リックはあいさつすると、銀時達もあいさつし返した。リックは驚いた顔（マスクをかぶってるため見えない）をする。

リック（こいつらこのマスクのことを怖がってない。普通に接しているな）
リックは不思議そうにネプテューヌ達を見つめる。

新八「あれ？ちょっと皆さん、何であのマスクのことをきかないんですか？」
が、新八は気になったらしく、銀時達に聞く。その時リックの表情（マスクをかぶってるため見えない）はやっぱりか、となるが、

ネプテューヌ「それはリックさんの趣味で着けたからじゃないの？」
新八「いやありえねーよっ！！あんなマスクを趣味で着ける奴いるわけないだろっ！！！」
リック「趣味じゃないんだが・・・ここにいるんだけどな・・・」
ネプテューヌの素っ頓狂な回答に、リックはガクッと倒れそうになる。新八はありえないと突っ込むが、リック自身は複雑な気分になる。ちなみにジェニファーは苦笑いをしている。

？？？『いろいろと面白いことやってんな～、リック』
ネプテューヌ「え？」
何処からか甲高い男の声が聞こえた。リックは頭を支えるしぐさをする。

リック「・・・・・もう少し大人しくできないのかお前は」
？？？『ハンッ！そういうのはお断りだ！』
声の元はリックから・・・リックのマスクから聞こえる。

桂「リック殿、そのマスクはいったい？」
リック「ああ…こいつは『ヘルマスク』、意思を宿したマスクだ」
ヘルマスク『仲良くやろうぜ！クックック・・・』
リックのかぶっているマスク・ヘルマスクが小馬鹿混じりにあいさつする。

銀時「何かイラッとくんな…。つーかお前らは何でここにいるんだ？」
銀時はリック達は何でここにいるのかを聞こうとすると、

リック「・・・今は言わんでくれ・・・」
リックが遠く悲しそうな顔（しつこいようですが、マスクのせいで見えません）をしていた。ジェニファーも表情が暗い。

銀時「・・・そうか。聞かなかったことにするぜ」
リック「それは助かる。あとお前らにこのことを話さなければな」

リックはウエスト博士のこと、銀時に襲いかかった異形・デッドマンのこと、招待状が罠だということなどを説明する。

ネプテューヌ「そんなぁぁぁぁぁ！！せっかく豪華料理を食べられると思ったのに～～～！！」
新八・アイエフ「あんたはいい加減に食べ物から離れろーーーー！！！」
ネプテューヌは別の部分にショックを受け、新八とアイエフはそんなネプテューヌに怒鳴る。

リック「船はそのまま放置させてある。早く脱出した方がいいぞ」
リックは銀時に警告し、脱出するように言うが、

銀時「そいつは出来ねー相談だな」
銀時がはっきりと拒否した。

リック「・・・どういうことだ?」
銀時「俺はなぁ、さっさと逃げろと言われてハイそうですかって諦めると思ったら大間違いだぜ」
ネプテューヌ「そうだよ!私達をだましたからにはバキッ!、とぶん殴らないと気が済まないよ!」
リック「お前ら…」
リックは銀時とネプテューヌが帰る気はないと確信する。それどころか周りにいる全員もそうであった。

銀時「・・・ところでお前等はどうするんだ?」
リック「・・・俺らはここに残ってケリをつけなければならないことがある」
リックは拳をギリギリッと握る。

銀時「・・・だったら手伝おうか?」
ジェニファー「え?」
リック「何だと?」
リックとジェニファーは耳を疑う。

銀時「だからお前らの手伝いをするんだよ」
新八「リックさん達だけで残るだなんて水臭いですよ」
神楽「そうネ!あの腐れ野郎にギャフンと言わせてやるアル!」
桂「俺もリック殿に協力しよう」
エリザベス『ちなみに私も』
月詠「わっちもじゃ」
ネプテューヌ「食べ物の恨みは恐ろしいよ~」

ノワール「私達も手伝うわ」
ブラン「私も」
ベール「私もですわ」
コンパ「私も見捨てられないです！」
アイエフ「乗りかかった船よ。手伝うわ」
ヴィヴィオ「ヴィヴィオも～」
近藤「我ら真選組も協力しよう！」
土方「俺は別に手伝う気はねーが、ウエストってやつをしょっ引かなければならんからな」
沖田「めんどくせーけど俺も」
山崎「あ！俺も」
銀時達はもうすでにリック達を手伝うつもりらしい。

リック「・・・こりゃ説得しても無駄だな」
ジェニファー「リック・・・」
リックはやれやれとなる。

ヘルマスク『そのわりにはお前嬉しそうじゃないか？俺、ああいうやつらが好きだぜ』
リック「うるさい」
ヘルマスクを一喝する。リックは立ち上がり、

リック「もう後戻りはできないぞ。それでもいいのか？」
リックは銀時に言うと、
銀時「そんなもん愚問だ」
銀時はそう答えた。

リック「そうか。ならいくぞ！」
全員「おうっ！！」
リックの言葉に、全員が大きく返事をした。

リック（待ってろよ。今すぐに決着をつけてやるからな）
リックはその思いを胸に、ウエスト館へ向かった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「新章始まって早々始めますよ～。まずアシスタントは」

リック「『スプラッターハウス』の主人公、リックだ」

銀八「よし！んじゃペンネーム『鳴神ソラ』さんからいくぞ。『フォックス「だってな～こう言う時のファルコは弄りたくなるもんだ～」↑全て避けた。

スネーク「まあ…フォックスがこうなったのはある意味作者がとあ

るサイトにあったイラストの中にム〇カ風に言った擬人化フォックスのイラストがあって、それでなのか影響受けたんだろうな…」

フォックス「と言うか…ヴィヴィオとネプテューヌ！かめはめ波出した！！！」

ルイージ「驚きの連発だね」

ふむ…微妙に面白いか…精進せねばな…

マリオ「だな…」

ネス「皆に質問『『作者が『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説でどれか気に入ったのある？』」

フォックス「銀時に質問、『今回の短編集でヴィヴィオとネプテューヌがかめはめ波を出した時はどう言う心境だった；』」

スネーク「真王に質問だ…『スバル達の女神状態では武器は変わらないのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

フォックス「どうなるのやら…」』…ズバリ1つ目を答えましょう」

全員が立ち上がる。

全員「大乱闘スマッシュハーツブラザーズです」

銀八「ハイありがと。2つ目は」

銀時が立ち上がる。

銀時「・・・・・・俺、置いてかれた気分だ」

真王「最後ですが武器の形状が変わるだけで、武器自身は変わりません」

リック「それじゃ、『鳴神ソラ』。廊下に立て」

真王「最近思うんだが、『鳴神ソラ』さんはよく質問来るね」

銀八「だよな。『黒神』さんに『黒龍』さんのも出てるぞ」

真王「だから私は『鳴神ソラ』さんに質問します。『マリオと『魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生物語～』の神とではどちらが勝つと思いますか?』もう一つ、『私が言った『黒神』さん・『黒龍』さん以外にも感想を書いている方がいますか?』の2つです。では」

第二十一訓：招待されても絶対不気味な屋敷に入るな（後書き）

真王「いかがでしょうか？ちなみにヘルマスクは、２０１０版をモデルにしています。もちろんしゃべり方も。ちなみにリックは髪の毛がありますよ」

リック「次回『ホラーゲームにはチェーンソーが必須』テイクオフだ」

第二十二訓：ホラーゲームにはチェーンソーが必須（前書き）

真王「今回はトラウマキャラがやってきます。それではスタート」

第二十二訓：ホラーゲームにはチェーンソーが必須

銀時達はリック達とともに、ウエスト館のどこかにいるウエスト博士に会いに行くのであった。
現在銀時達は地下から出て、ウエスト館へ続く道へときた。

・・・え？原作では途中で拷問部屋があったんじゃないかって？・・・
・悪いがそこはキングクリムゾンだ。

コンパ「ぅぅ……暗くて怖いです…。幽霊が出そうです」
コンパは、真夜中の森におびえている。

銀時「バカヤローコンパ。そんな非科学的な奴なんているわけねーだろ」
銀時はそういうが、若干冷や汗が出てるようなのは気のせいだろうか。

リック「こういうところに限って出るんじゃないか？それが」
銀時「テメッ、何怖いこと言ってんだっ！！」
リックのセリフに銀時は怒鳴り、コンパはさらに震える。実際リックは、頭蓋骨を投げて邪魔する女幽霊『ジョーカー』のことを思い出して言っているのだが。

ガンッ！

ネプテューヌ「ん？」
ネプテューヌの足に何かが当たった。足元を見ると、長い筒状の銃・ショットガンだった。

ネプテューヌ「これ…ショットガン？」
リック「どれ・・・・・これは使えるな。しかもリボルバーも満タンだ。」
土方「もう一本あるぞ」
ベール「こっちはショットガンのストックがいっぱいありますわ」
拾ったショットガンをリックが調べ、土方とベールはもう一本のショットガンとストックを見つけた。

ネプテューヌ「へぇ～、すごいね～」
ネプテューヌはそういうと、銃口を銀時に向けた。

銀時「オマッ、こっち向けるなっ！！危ねーだろっ！！」
ネプテューヌ「はーい」
銀時は銃口にビビって怒鳴り、土方に向ける。

土方「だからって何でこっちに向けるんだっ！！！」
沖田「そのまま引き金を引いて土方さんを亡きものにしてくだせぇ」
土方「総悟ォォォォォォォォ！！！」
土方も銃口にビビるが、沖田の物騒なセリフに青筋を立てて怒鳴る。

リック「そいつを持っとけば先に進む時に便利かも知れんぞ」
新八「え？どういうことですか？」
新八は、この先に行くのに何でショットガンがいるのかとリックに聞くと、リックは答えた。

リック「あいつらを一掃するためさ」
そう言ってリックの指差した先には、

？？？「ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ・・・・・・」
上半身裸で、ジーパンしか着ていない人がいた。それも複数いる。

新八「な…なんですかあれ」
リック「俺には分かる。・・・・・・あれはゾンビだ」

ネプテューヌ・コンパ・ヴィヴィオ・アイエフ・銀時・土方・新八・ベール
「ゾンビ（だと）っ！！？」

目の前にいるものをゾンビとリックは言って、全員が驚く。

アイエフ「2体や3体じゃないわっ！！奥にもいるわよ！！」
アイエフが言い、奥を見ると、ウエスト館まで続く道にゾンビ達がいっぱいいた。

ゾンビ「ヴァア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ァァァァァ・・・」
一体のゾンビが銀時達に襲い狩る。

リック「お前には用はねえよっ！！」

バンっ！！

ゾンビ「バァッ！！！？」
リックはショットガンでゾンビに狙いを定め、ヘッドショットを決めた。肉片が飛び散り、頭を吹き飛ばされたゾンビは崩れ落ちた。

アイエフ「うっ！」
銀時「お…おい！大丈夫か？」
アイエフは頭を吹き飛ばされたゾンビを見て、吐き気をした。ヴィヴィオはネプテューヌに目隠しされている。

ベール「あ…アイちゃんはこういうのが苦手でしたわね」
ベールはしまったっていうようなしぐさをする。

アイエフ「…大丈夫よ。もうおさまったわ」
銀時「そうか…無茶すんなよ」
アイエフ「・・・・・・ありがと」
心配した銀時に、アイエフはお礼を言う。

ゾンビ「ガア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」
しかし、ゾンビはそれを許すわけがない。3体のゾンビは銀時とアイエフに襲いかかる。

ジェニファー「リック!!」
リック「させるかっ!!」
リックはショットガンで、3体のゾンビをヘッドショットで吹き飛ばす。

ヘルマスク『HU〜〜〜♪やっぱヘッドショットは気持ちいぜッ!!♪』
ヘルマスクは楽しそうに言うが、全員スルーした。

ネプテューヌ「?何だろう?」
するとネプテューヌは、黒光りする何かを拾った。何かの機械のようだが…。

ヘルマスク『お?変わったもんを拾ったな。それを敵に向けてボタンを押してみろ』
ネプテューヌ「え?こう?」
ヘルマスクはそれを知っているようで、ネプテューヌは機械をゾン

ビに向けてボタンを押した。
すると画面が現れて、ゾンビの姿が映し出された。

ネプテューヌ「うわっ！」
銀時「なんだ！？」
桂「なんと！」
ジェニファー「これって！？」
全員がネプテューヌの持つ機械に驚いた。画面にはゾンビと、そのゾンビの名前と特徴が映し出されていた。

『マーク』
『一般的なゾンビ』
『頭が弱点』

銀時達を襲ったゾンビはマークと呼ばれるらしく、マークの弱点まで書かれてあった。

ヘルマスク『すごいアイテムを拾ったな。俺は『エネミーサーチャー』と名づけておくぞ』
ネプテューヌの拾ったアイテムは、『エネミーサーチャー（以下、ＥＳ）』と名付けるヘルマスク。

ネプテューヌ「ねぇ。ヘルマスクさんはこれを知っているの？」
ヘルマスク『いや、詳しくは知らんが相手の情報を読み取るらしいんだ』
ネプテューヌ「ふ～ん」
ネプテューヌがヘルマスクに聞くと、ヘルマスクはあまり知らないと答え、ネプテューヌはＥＳを眺める。

ネプテューヌ「…えい♪」

銀時「ちょっ、こっち向けんなっ！！」
ネプテューヌがＥＳを銀時に向け、ボタンを押した。すると、ＥＳに銀時が映し出された。

『坂田　銀時』
『『万事屋銀ちゃん』のオーナー。銀色の天然パーマが特徴。普段はやる気なく、死んだ魚のような目をしているが、本気になると目は侍の目に変わる。攘夷戦争に参加し、敵でも味方でも恐れられたことから『白夜叉』と呼ばれている。甘いもの全般だが、パフェが好き。パチンコでよく金をなくす。ジャンプ愛読者』
『朝起き。積極的な女。怪談・幽霊（スタンド）が嫌い』

新八「うわ～、銀さんのことが書かれてますね・・・」
神楽「おまけに嫌いなものとかもあるアル」
ネプテューヌ「へぇ～（黒）」
ノワール「すごい内容ね」
土方「全くだな」
みんなはＥＳに感心する。しかしネプテューヌは少し黒い笑みを浮かべた気がするが…

銀時「オイィィィィィィィィィ！！！何だこの恥ずかしい内容は！？」
銀時は書かれた内容にシャウトする。

ネプテューヌ「・・・銀さん。後ろに貞子さ「ギィェアアアアアアアアアアア！！！！」」
ネプテューヌが貞子さんと言い切る前に、銀時がどこかの盗賊の『おっさん何時の間にっ！？』なポーズをする。
しかし、なぜか土方、近藤までもが同じポーズをする。

ネプテューヌ「……何やってんのみんな？」

銀時・土方・近藤
「イエ、ナンデモナイデス」

ネプテューヌ「何で片言？」
ネプテューヌは追及することをやめたが、銀時達は幽霊が苦手なんじゃないかと思った。

ヘルマスク『おしゃべりはここまでだ。先へ行った方がいいぞ』
ノワール「・・・そうね」
神楽「私は銃なんて必要ないネ！」
桂「うむ。まずは館へ向かおう」
銀時達はゾンビ達を蹴散らしながら、ウエスト館へ向かったら、

ザバァァァァァンッ！！

溜池から緑色のゾンビが現れた。

ヴィヴィオ「ひゃうっ！」
ノワール「っ！なにこいつ！」
コンパ「何か臭いです！」
ネプテューヌ「え～と・・・出たよっ！こいつは『エビタン』ってやつだよ」
ネプテューヌは池から現れたゾンビをＥＳで調べた。そのゾンビはエビタンというらしい。

銀時「・・・また妙な奴が来やがったな」
銀時はエビタンを見て顔を強張る。

桂「ならばこいつをプレゼントだ」
と、桂は爆弾を取り出し、エビタンに投げつけ、爆発した。巻き込まれたエビタンは体がドロドロに溶けた。

桂「よし、これで…」
コンパ「きゃあああああ!!!足に何かいるです～～～～!!!」
桂が安心していたら、コンパが足に何かが掴まれて、パニックになっていた。
コンパの足をつかんだのは、ミイラのようなゾンビだった。

ネプテューヌ「コンパを放してっ!!」
ネプテューヌはミイラゾンビを踏みつぶした。

ノワール「ネプテューヌ、さっきのは?」
ネプテューヌ「あれは『カゲオ』って言うんだよ。・・・・・・って、あそこっ!」
ミイラゾンビ・カゲオを説明していると、奥から別のゾンビが現れた。

そこにいたのは、マークとエビタンと、先ほどのミイラゾンビ・カゲオ。そして、両手に斧を持ったゾンビと、筋肉質なゾンビと、体のでかいデブなゾンビがいた。

ネプテューヌ「斧を持っているのが『ジョニー』。あの筋肉質なのを『アステカ』。そしてあのデブゾンビは『チャールズ』だよ!」
ネプテューヌが見慣れない三体を説明する。
しかし、もうすでに沢山のゾンビ達に囲まれている。

ヘルマスク『へへっ!、こういう場合はある決め台詞があるんだぜ。

知ってるかい？』
突然ヘルマスクが言いだす。
銀時「・・・どんなんだ？」
銀時は気になって聞くと、ヘルマスクはこう叫んだ。
ヘルマスク『Ｔｈｉｓ　ｐａｒｔｙ　ｉｓ　ｇｅｔｔｉｎｇ　ｃｒａｚｙ！（イカれたパーティの始まりだ！）』
新八「オイィィィィィィィィィィ！！！それもろパクリじゃねえかァァァァァァァ！！！」
ある魔剣士の決め台詞なので、新八が怒鳴る。が、銀時達はにやりと笑う。
銀時「確かにクレイジーな展開だな」
土方「俺はそういうのは嫌いじゃないぜ」
神楽「久々の大暴れネ！」
エルザベス『活躍しましょう』
ネプテューヌ「ゾンビ無双だよっ！！」
ノワール「正直嫌だけどね」
ヴィヴィオ「ヴィヴィオ、頑張る！」
全員はすでにやる気らしい。
銀時『テメーら！！、全部まとめて叩っ切ってやるぜ～～～！！！」
全員「うおお～～～～～～～～！！！」
銀時の掛け声に全員が答え、ゾンビの群れに突入した。
銀時「ハイィィィィ！！次いいいいい！！」
銀時は木刀で、次々とゾンビの群れをなぎ倒していく。
土方「テメーにおいしいとこ取らせてたまるか！」

土方も負けじとゾンビの群れを切り捨てて行く。

リック「俺も負けてらんねーなっ！！」

ジェニファー「私も！」

リックとジェニファーはショットガンでゾンビ達を倒していき、近づいてきたゾンビはリックがパンチで倒す。

ネプテューヌ「どんどん行くよ～！」

ネプテューヌは木刀で次々とゾンビ達をなぎ倒していく。

神楽は体術と傘でアステカやチャールズを殴り飛ばし、近藤と桂は刀で切り捨て、沖田はバズーカでぶっ飛ばし、エリザベスはプラカードで殴り飛ばし、月詠はクナイでゾンビの首を切り落とし、ノワールはショートソードで切り、ブランはハンマーでチャールズを潰し、ベールはパイクでマークやエビタンを切り捨て、アイエフとコンパは銃と注射器で援護し、山崎はミントン（なんで！？）でゾンビを攻撃し、ヴィヴィオは大人化してネプテューヌ達から習った体術でゾンビを倒していく。

始めは躊躇したヴィヴィオだが、ネプテューヌ達の修行のおかげで戦うことができたようだ。ちなみにヴィヴィオが大人化したことに土方達がすごく驚いたことは余談である。

新八「うおおおおおおおおお！！！」

新八は木刀を使ってアステカを攻撃する。が、アステカは木刀を簡単に受け止め、アッパーカットで新八を殴り飛ばした。

新八「何で僕だけェェェ！！？」

吹き飛ばされながら、新八は叫んだ。その時、新八のメガネが外れた。

銀時「新八ィィィ!!大丈夫か!?」
ゾンビを倒しながら、銀時は新八に駆け寄る。

ネプテューヌ「新八君!大丈夫!?」
ネプテューヌ達も、新八に駆け寄った。

新八「う・・うん。大丈夫だよ」
安心させるように、笑って答えながら新八は立ち上がった。

銀時「どうやら無事みてーだな」
屈んで銀時が声をかけた相手は、地面に落ちた新八のメガネだった。

新八「新八こっちィィィ!!」
額に血管を浮かべながら、新八が怒鳴った。

アイエフ「銀さん。ソレは新八さんのメガネなんじゃ・・」
銀時「いやいや、違うぞ」
コンパ「え?違うのですか?」
銀時は首を横に振りながら言った。落ちてる新八のメガネを拾う。

銀時「よく覚えとけお前ら。新八の成分の９５%はメガネだ。つまりこっちが新八だ」
メガネを持ちながら銀時が説明する。

ネプテューヌ「え?そうなの?」
新八「違う違う!違うからね!!普通に僕が志村新八だから!僕が本体だから!!」
新八は全力で否定した。
コンパとノワールとベールとジェニファーは、少し困ったような笑

みを浮かべながら、二人の様子を見ていた。

するとネプテューヌが驚愕な顔して叫んだ。
ネプテューヌ「あっ！銀さんの後ろに！！」
銀時「え？なにが？」
銀時は後ろを振り返ると、

ネプテューヌ「アステカが」

バキッ！！

銀時「ゴフッ！！」
アステカにアッパーカットを喰らった。その拍子にメガネを落とす。

ネプテューヌ「そっちに行ったらチャールズ…」

ズドンッ！！

銀時「ゴハッ！！」
さらにチャールズの体当たりを喰らい、

ネプテューヌ「そこにはエビタン…」
銀時「ギャアアアアアアアアア！！！！」
池に落ちてはエビタンにつかまれていました。（笑）
ちなみにメガネは新八が拾った。

土方「おい、テメーら」
土方が声をかけた。
土方「いつまでふざけてんだ。さっさと先に行くぞ」
見ると既に、ゾンビの群れは全滅していた。・・・・・銀時を捕

まえているエビタンを除いては。

ネプテューヌ「よし！それじゃあ行こう！」

全員「おう！！」

銀時「ちょっと待てェェェェェェェェェ！！！俺を助けろォォォォォォォォォ！！！」

ウエスト館・入り口前

ゾンビの群れを全滅させた銀時達は、ようやくウエスト館にたどり着いた。

ちなみに銀時を捕まえていたエビタンは、銀時にやられました。

銀時「ったく。俺を置いていきやがって」

服が汚れて、銀時は苛立ちの混ざった声で言う。

ネプテューヌ「あはは・・・ごめんね銀さん。さぁ中に入ろっ！」

ネプテューヌは銀時に謝罪し、中へ入ろうとすると、

ブヴヴヴヴン！！ブヴヴヴヴン！！

何処からかチェーンソーの音が聞こえた。

リック「この音……まさかっ！！」

リックは後ろを振り返ってみると、頭からすっぽりと被った布袋に、異常に発達した全身の筋肉が特徴。そして両腕にチェーンソーがつ

けた怪人がいた。
それだけでなく、顔には赤く光る暗視レンズに、全身を青いラバースーツやプロテクターで固め、巨大なチェーンソーを持つ謎の敵がいた。

ＩＢＧＭ：危険なボスｂｙハウス・オブ・ザ・デッド４（Ｈｏｕｓｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｄｅａｄ　４　ｂｏｓｓ　ｔｈｅ　Ｂｏｓｓ　Ｒａｉｄ））

リック「あいつはピギーマン！？何でここに！」
リックは驚愕な顔をする。

銀時「あ？どっちがだって？」
ネプテューヌ「あの布袋をかぶっているやつだよ！！」
布袋をかぶった怪人・ピギーマンを指差すネプテューヌ。

新八「じゃああいつの隣にいるあれは何ですか！？」
ネプテューヌ「えっと…ちょっと待って」
新八は、ピギーマンの隣にいる敵を指差して、ネプテューヌはＥＳで調べると、その敵の正体が明らかになる。

『エンプレス』
『顔には赤く光る暗視レンズに、全身を青いラバースーツやプロテクターで固めたヒューマノイド』
『ＷＥＡＫＰＯＩＮＴ――――――顔』

近藤「ヒュ・・・ヒューマノイドだとっ！？」
近藤はエンプレスがヒューマノイドということに驚く。

銀時「っていうか『エンプレス』って女帝って意味だよね？あいつ

女なのか？」
銀時がエンプレスという名前を気にしていると、
ブヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴン！！！
いきなり二体が切りかかって来た。
銀時「ウオワッ！！」
ネプテューヌ「危ない！！」
リック「ちっ！」
銀時達はギリギリで避けたが、分れてしまった。
ピギーマンはリックとジェニファー、エンプレスは銀時達とわかれた。
リック「ピギーマンは俺達に任せろ！！お前らはそっちを頼むっ！！」
ネプテューヌ「リックさん！！」
ネプテューヌはリックに叫ぶが、それも虚しく戦闘が開始される。
銀時「ちっ！早いとここいつを片づけて行くぞっ！」
銀時は舌打ちして、木刀でエンプレスに攻撃する。
エンプレス「・・・・・・・・・・・・・・・」
エンプレスは、お返しと言わんばかりにチェーンソーを振って反撃する。
銀時「危ねぇっ！！避けろっ！！」
新八「うわっ！」
桂「くっ！」
ブラン「ちっ！」

銀時達はチェーンソーをギリギリでかわす。

銀時「テメーと付き合う暇はねーよっ！！」

ネプテューヌ「私達の前から消えてっ！！」

銀時とネプテューヌは、木刀でエンプレスの顔をたたきつけた。

エンプレス「っ！？・・・・・・（顔を押さえて痛がっている）」

これは効いたらしく、片手で顔を押さえて痛がっているが、大きく隙を作ってしまっている。

銀時「おし！このまま「旦那ぁ、退いてくだせぇ」って、え？」

追い打ちをかけようとした時、沖田がバズーカを取り出して、エンプレスに向けて発射した。

バシュッ！

銀時・ネプテューヌ「おわっ！」

ドガァァァァン！！

エンプレス「ッッ！！！！？？！！！！？」

沖田が放ったバズーカは、エンプレスの顔に命中し、エンプレスは倒れた。

銀時「・・・お前もう少し周りの人を気にして撃ってくれない？」

銀時は沖田をジト眼で見て言う。

沖田「やだな～。俺はそんな余裕なんてないんでさぁ」

銀時「・・・・・・・・・」

ネプテューヌ「・・・まぁ敵も倒したことだし、結果オーライだよ

ね」
沖田のセリフに納得いかない銀時だが、ネプテューヌが宥める。
銀時「…しゃーねーな。早くリックを助けようぜ」
そう言ってリックの援護に向かおうとしたら、
ブヴヴヴヴヴヴヴヴン！！！！
銀時「っ！！！？ちっ！！」
横からチェーンソーの音が聞こえ、銀時は避ける。それは、倒したはずのエンプレスがチェーンソーで攻撃してきたからだった。しかも、エンプレスの持つチェーンソーが２つになっていた。
桂「馬鹿なっ！！あれを喰らって生きていただと！？」
新八「おまけになぜかチェーンソーが２つになってますよ！！」
ノワール「・・・あのチェーンソーはダブルセイバー型みたいね」
新八と桂が驚き、ノワールはエンプレスのチェーンソーがダブルセイバー型だと推測した。
エンプレス「・・・・・・・・・（殺気立っているようだ）」
ブヴヴヴヴヴヴン！！！ブヴヴヴヴヴヴン！！！
エンプレスはチェーンソーを振り回して暴れまわった。
銀時「あぶねっ！！」
ネプテューヌ「うわぁっ！！」
コンパ「きゃっ！」
月詠「まずいっ！！」
ノワール「くっ！！」

土方「うをっ！！」
暴走したエンプレスの攻撃をかわす銀時達だが、暴れる猛獣のようで、一向に攻撃がやまない。

ジェニファー「大変っ！！助けないと！！」
リック「待てジェニファー！！」
ピンチな銀時達を見たジェニファーは、助けに行こうとする。

するとピギーマンがターゲットをジェニファーに変えて、腕を振りおろそうとしている。
リック「ジェニファー！！！」
ジェニファー「え？きゃっ！！」
リックはジェニファーをその場からどかし、ピギーマンの攻撃を止めた（チェーンソーの方ではなく、腕の方）。

リック「ぐうううううううぅぅぅぅぅ・・・・・・」
リックはピギーマンの腕を必死に抑えている。

ジェニファー「リックから離れなさいっ！！！」

バンッ！×5

ジェニファーは起き上がり、ショットガンを拾い上げて、ピギーマンの頭に5発発射した。ピギーマンは頭にダメージを負って、ひるんでいる。

リック「これで終わりだっ！！うおおおおおおおおお！！！」
リックは両腕をハンマーのようにし、ピギーマンの頭に一撃を与えた。ピギーマンは倒れた。

リック「よしっ！次はお前だ！！」
ヘルマスク『おいテメェ！！こっち向きやがれ！！』
リックとヘルマスクはショットガンをエンプレスに向けて撃つ。

エンプレス「っ！！！！？？！！」
エンプレスはダメージを受け、怯んでしまい、隙を作ってしまった。

銀時「ありがとよっ！てぇぇぇぇやぁぁぁぁぁ！！！」
ネプテューヌ「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！！」

バキィィィィィィン！！！

エンプレス「！！？！！！！！？？！？・・・・・・・・・」
銀時とネプテューヌは、木刀で再びエンプレスの顔をたたきつけ、
エンプレスはたまらず倒れた。

銀時「…あ～。ようやくくたばったか」
ネプテューヌ「私少し疲れたよ」
銀時は背を伸ばし、ネプテューヌはその場に座る。

リック「まだ終わってはいないんだが・・・少し休憩してから行くぞ」
リックの言葉に、全員が承諾する。

１０分後・・・

銀時達はウエスト館の中へ入っていった・・・・・・・・・・・・・・・

銀時「・・・・・・・・・（動いてない）」
ネプテューヌ「・・・・・・・・・（動いてない）」
リック「・・・・・・・・・（動いてない）」
全員「・・・・・・・・・（動いてない）」

さっさと動きやがれこの馬鹿共！！！！（怒）（＃、ロ、）

全員「ハイィィィ！！！！」
銀時達は慌ててウエスト館の中へ入っていった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「へ～い。いきなりにアシストを紹介するよ～」

ジェニファー「先生、そのグータラ紹介はやめてください。ジェニ

ファーです」

銀八「だってそんなのメンドクｓ「ナニカ？」スイマセン、調子に乗りました」

ジェニファー「分ればいいわ」

銀八「…よし、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「あいつか……半分半分だな…相手が自分で作り出したのや誰かから力を貰ったのなら無効化出来るけど、見るからに何個かは無効化出来るけどまだまだ本気を見せてないからゼロでも勝てるかどうか分らないから半々だ…」

私が感想を書いてるのは真王さんと黒神さんに黒龍さん以外だと…ウッソ・エヴィンさんにまあさん、光闇雪さんにｓｉｂｕｇａｋｉさん、暮灘雪夜さん、ＪＡＣＫさん、充さんに琥珀さんですね。時たま龍牙さんの所にも書いてます。

スネーク「ちなみにこの中でフォックスが写真を送ってるのは黒龍に光闇雪さんにｓｉｂｕｇａｋｉに暮灘雪夜の所だ…ちなみにどんな写真かは自分の目で確かめてくれ」

マリオ「それにしても俺達のが入れられてるのが良いな♪」

ルイージ「だね…まあ話は変わるけど…新八君、ホント良かった…オタクから抜けて（涙）」

フォックス「最近出番が増えてるからルイージは嬉しそうだな～」

スネーク「そりゃあ作者が見て来たスマブラ小説の中で似た様な扱

いを受けてるからな…並行世界のあいつ（ルイージ）は…」

ネス「それにしても…ルイージマンションとバイオハザートが混じった様な展開だね～」

リュカ「こっ、怖いな（ガタガタ）」

スネーク「軽くヤフーで調べたが…今回の大ボスなウエスト博士や今回出たリックにジェニファーは『スプラッターハウス』のキャラクターらしいな…前のコープスは『コープスパーティー』だと思うが…ホラーだな」

おおう…ホラー系は苦手だ…体中がブルブルだよ；

マリオ「作者はルイージのはともかくな（苦笑）」

それでどう言う風になるのやら…

マリオ「皆に質問だ『『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説で作者が考えたオリジナルライダーでどれが好きだ？理由も言ってくれ』」

スネーク「俺も皆に質問だ、『内の作者が書いてる小説に出るユーノはどう思う？』」

ファルコ「俺からも全員に質問だ…『スマブラXで使える最後の切り札をもし使えるならどれを使って見たいんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「頑張れよ銀時にネプテューヌにリック！」『1，2を答えましょう」

全員が立ち上がる。

全員「1つ目は仮面ライダーディブレイカーで幻想殺しがあるところ、2つ目は・・・・・・・・・シラネ」

銀八「それ酷くね？まいっか。最後は順番に答えましょう」

銀時「俺は『かめはめ波』を出すぞ！」

新八「お通ちゃんの『お前の母ちゃん何人だぁぁ！』を歌います！」↑ジャイアンリサイタルになるが

神楽「『夜兎の覚醒』ネ！」

桂「『カツーラボンバー』を使うぞ！」↑自爆ではない

エルザベス『『グランドバズーカ』を発射します！』

月詠「師匠の技を取って『月蜘蛛の舞』をやろうかの」

ネプテューヌ「『ネプテューン・ブレイク』だよ！」

ノワール「『インフィニットスラッシュ』よ」

ブラン「・・・『ハードブレイク』」

ベール「『スパイラルブレイク』ですわ」

コンパ「『注射器大暴走』なのです！？」

アイエフ「私は特に思いつかないわ」

九兵衛「刹那の見切り。『柳生切り』だ」

なのは「私は『スターライトブレイカー』なの♪」

フェイト「私は『真・ソニックフォーム』かな」

はやて「うちはラグナロクを超えた『グランド・ラグナロク』や」

シグナム「私は『ファルコンストライク』を撃つ！」

ヴィータ「あたしは『ギガブレイク』だ！」

シャマル「私なら『神秘の癒し』かな？」

ザフィーラ「私は『絶対無敗の盾』だな」

スバル「私は『ディバインストライク』かな？」

ティアナ「私はなのはさんと同じ『スターライトブレイカー』よ」

エリオ「僕は『雷王一閃』がカッコイイと思います」

キャロ「私は『ヴォルテール召喚』です！」

ヴィヴィオ「私もなのはママのように『スターライトブレイカー』

だよ」

恭介「俺は『烈火昇竜拳』が使ってみたいと思うんだ」

鈴「あたしは『ねこねこパーティー』だ！」

理樹「僕は『ゴッド・ホームラン』かな」

真人「『筋肉大津波』だァァァァァァ！！！」

謙吾「『刹那の一閃』だな」

小毬「私は『スイーツドリーム』で回復するよ」

来ヶ谷「私は『闇夜切り』だ」

クド「『わんだふるあたっく』なのです！」

葉留佳「『トラップパニック』デスネ」

美魚「『ＮＹＰバズーカ』を発射します」

ゆり「私は『ゴッド・ゆり』ね」

音無「俺は『医療の心得』だな」

奏「ガードスキルの『インパクト』かしら？」

日向「俺は『バッティングショット』だぜ！」

直井「僕は特にないな」

ユイ「『ライブ・オン・デストロイ』じゃあああああ！！！」

松下「俺はないな」

高松「失礼ですが、私もありません」

野田「俺は『ハルバード無双』だ！」

藤巻「俺は・・・・・・駄目だ。全然思いつかねぇ」

大山「僕はなにもないよ」

ＴＫ「『ダンシング・カーニバル』！！」

椎名「『闇夜の瞬殺』…」

岩沢「私は『Ｍｙｓｏｎｇ』で戦意を失わせる」

銀八「長いな…、まいっか。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

第二十二訓：ホラーゲームにはチェーンソーが必須（後書き）

真王「ピギーマンとエンプレスを倒した銀時達。しかし、鏡の間でさらなるトラップが銀時達に襲いかかる」

ジェニファー「次回『たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい』テイクオフよ」

～予告～

ナレーション「どこかで女の子が生者に助けを求めています」

第二十三訓：たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい（前書き）

真王「今回はリック達の過去が明かされます」

ヘルマスク『後アクセスが５００００とユニークが５０００を突破したらしいぞ』

全員「おお～～～～～～～～！！！」

真王「それからコープスからキャラが一人現れます」

？？？「え？まさか俺が？」

？？？「もしかして私かな？」

？？？「いんや～？私かもしれないよ～？」

真王「お前らじゃね～よ！では『リリカル銀魂』」

全員「始まるよ！！」

？？？「私の出番～～～！」

真王「うるさい黙れ」

バキィィィィィィン！！！

？？？「ウギャアアアアアアアアアア！！！！」

第二十三訓：たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい

ピギーマンとエンプレスを倒し、ウエスト館へ侵入した銀時とリック達。回転刃トラップやデッドマンがゆく手を阻むが、難無くクリアした。

現在ウエスト館の廊下にいる。
銀時「ったく。あれで俺達を止めようだなんてなめられてんな～」
沖田「そうですね～。俺は全然足りないんでさぁ」
ネプテューヌ「まだまだ余裕だよ！」
銀時達は余裕そうに廊下を歩く。リックは少し感心する。

リック「その様子だとたとえどんな奴でも倒せそうだな」
リックが言うと、銀時が答える。
銀時「あったりまえだ。俺は天下無双の男だぜ」
新八「天下無双かどうかは知りませんけどまぁ銀さんは強いですね」
新八は一応銀時の強さを認めている。

シクシクシクシク・・・

・・・・・どこかで女の子の声が聞こえる。

ネプテューヌ「あれ？…ねぇ、どこかで声が聞こえなかった？」
銀時「え？なにが？」
リック「俺にも聞こえるぞ」
ヘルマスク『廊下に響いてんなぁ…。どの部屋にいるのか分らんぞ』
ネプテューヌとリックとヘルマスクは声が聞こえたらしいが、彼ら以外は聞こえなかったらしい。
しかも廊下には扉がいくつもある。

ネプテューヌ「…一個一個調べるしかないね」
ネプテューヌはまず近くの扉を開ける。・・・・・・ただの空き部屋。

ネプテューヌ「次行くよ」
２つ目の扉を開ける。・・・・・・これも空き部屋。

ネプテューヌ「次」
３つ目。・・・・・・デッドマン一家の食堂。

デッドマン「オイコラアケンナ！」
全員「あっ、スイマッセーン」
閉めた。

ネプテューヌ「・・・次」
４つ目。・・・・・・トイ「開けるなあああああああああああああああああ！！！！！」バタンッ！！
ネプテューヌ「・・・見なかったことにしよう」
みんなはうんうんとうなずく。

５つ目。・・・・・・テレサ。
テレサ「ケケケケケケ！」バタンッ！
閉めた。
ネプテューヌ「これもやめよ…」

６つ目。・・・・・・セーラー服のドンパッチ。
ドンパッチ「ヒロインの座は私のもｎ「死ね！」ぎゃあああああああああ！！！！！」
ドンパッチをボロ雑巾になるまでに踏みまくり、その場で捨てて閉

めた。

7つ目。・・・・・ドナルド。
ドナルド「ランランルー！」
ネプテューヌ・ヴィヴィオ「ルー！」
新八「なに真似してんのっ！？」
新八は扉を閉めた。

8つm「イヤァァァアアアアアアアアアアアア！！！！！」
ヒゲを生やした緑の男が、デッドマン達に追いかけられていました。
その男はなぜか掃除機を持っていた。
ネプテューヌ「これハズレだね」
緑のヒゲ「ちょっと待って！！僕を助けｔ「バタンッ！！」」
髭の男が何か言ったらしいが、構わず閉めた。

新八「あれ？助けないんですか？」
全員「・・・・・・・・・・・・・」
新八「おい！無視すんなよっ！！」
新八が助けないのかというが、全員がスルー。新八は怒鳴る。

9つ目。・・・・・男とデッドマン。

バシッ！

男「イ〝ィ〝エェァ〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」
デッドマンに攻撃され、天に向かって仰向けでのぼっていった。

ネプテューヌ「…何今の？」
全員がさぁ？と答える。

１０番目。・・・不気味な雰囲気がある部屋。
ヘルマスク『声の発生源はここのようだぜ。調べてみろよ』
ヘルマスクの指示に周りを見渡す。この部屋にあるのは、ボロボロのクローゼットと壊れた机。
そして、部屋の隅っこで泣き崩れている少女の幽ｒ「バタンッ！！」

ネプテューヌ「…どうしたの銀さん…？」
いきなり銀時が閉めたのでネプテューヌがきく。
銀時「いやいやいやいや…ありえないありえない、あんなとこにスタンドがいるわけがない」
銀時はすごい汗を流してブツブツ言い始める。

ネプテューヌ「銀さん？」
ヴィヴィオ「パパ？」
ネプテューヌとヴィヴィオは心配そうな顔で銀時を見る。

銀時「きっと気のせいだ。うん。もう一回開けよう」
銀時は再度扉を開ける。すると少女の幽霊が目の前にいた。

幽霊「あ、あの・・・」バタンッ！！
銀時はまた閉めた。

コンパ「ぎ、銀さん…今、何かいたですよね・・・」
コンパは顔を青くさせ、冷や汗を流す。声も若干震えている。
後ろにいる全員（ネプテューヌ、ヴィヴィオ、リック、ジェニファーを除く）も顔を青くし、冷や汗を流している。

アイエフ「も、もしかして…あの鳴き声はさっきの幽れ「違ーよ！！！」」
銀時はアイエフの言葉を途中で、いつにもなく必死な顔で否定する。

銀時「あ、あれはスタンド！もしくはホログラムかなんかだ！」
コンパ「でも！明らかに半透明じゃないですかー！！」
コンパは涙目で言う。

銀時「は、半透明な奴なんてどこにでもいるだろ。政治家だって汚職とかやって半透明になっているだろ。いるだろ、半透明な女性くらい」
銀時は腕を組んで、冷や汗流しながら言う。

新八「銀さん！それぜんぜん半透明じゃありません！むしろ汚れて見えまくってます！」
ノワール「て言うかそんな政治家いないわよ！！」
新八とノワールが突っ込んでいると、

ネプテューヌ「こんばんはー！」
全員（ヴィヴィオ・リック・ジェニファー除く）「オイィィィィィィィィィ！！！！！」
ネプテューヌが扉を開けた。そこには半透明で、茶色いボブカットの髪と赤いヘアバンド、青色の服を着た少女の幽霊がいた。

ネプテューヌ「はじめまして。私ネプテューヌだよ」
ネプテューヌは少女の幽霊にあいさつしている。

銀時「オィィィィィ！！！ネプテューヌっ！！今すぐそいつから離れろォォォォォォ！！！」
コンパ「ねぷねぷぅぅぅぅぅ！！！早くこっちに来るですゥゥゥゥゥ！！！」
ノワール「ネプテューヌ！！そいつから離れなさい！！」
新八「ネプテューヌちゃぁぁぁぁぁぁん！！！」

近藤「ネプテューヌ殿ォォォォォォォォ！！！そいつはきっと悪霊に違いないぞォォォォォォォォ！！！」
銀時達はリックの後ろに隠れて、ネプテューヌに離れるよう大声を出す。

リック「・・・さっき天下無双って言ってなかったか？」
リックは銀時をジト眼で見て言う。

ネプテューヌ「も～、皆ったらそんなに幽霊が怖「霊って言うなっ！！スタンドだ！！！」」
ネプテューヌが呆れて言う。銀時は幽霊ではなくスタンドと呼ばせる気らしい。

ネプテューヌ「・・・ねぇ、君は何て名前なの？」
ネプテューヌは銀時達をスルーして少女の幽霊に聞く。

由香「あ、はい…私は持田由香です」
幽霊は由香という。

ネプテューヌ「由香ちゃんだね。よろしく」
ネプテューヌは、由香の頭を撫でる。

銀時「待て待て待てっ！！ネプテューヌ！そのスタンドと一緒にいたら呪わｒ「バキッ！！」ぐはっ！」
銀時はネプテューヌに瓶をぶつけられる。

ネプテューヌ「いい加減この子を馬鹿にするのをやめてくれない？かわいそうでしょ？」
ヴィヴィオ「そうだよ！かわいそうだよ！」
由香を抱き寄せてネプテューヌが怒る。

銀時「イヤだからそいつはスタンｄ「バキッ！」ぶっ！「ドガッ！」ぐはっ！「ザクッ！」ぎゃあああああああああああ！！！」銀時が反論しようとしたら、瓶、石、とがった板を順番に投げた。

ネプテューヌ「ごめんね～。ああいってるけどホントはいい人だから安心してね」

由香「は、はい…」

ネプテューヌは由香を撫でて安心させる。リック達はネプテューヌを少し危ないんじゃないかと思った。

ネプテューヌ「ところで、由香ちゃんは何でここに？」

ネプテューヌがきくと、由香はアッ！！、と思い出したような顔をした。

由香「そうだった！由香はお兄ちゃん達を助けようとしてたんだった！」

由香の言葉にネプテューヌ達は驚く。

ネプテューヌ「由香ちゃんのお兄ちゃんがどうしたの！？」

由香「お兄ちゃん達は私を逃がすために変なおじさんに捕まったの！」

リック「変なおじさん……ウエストか！」

由香の必死の説明に、リックはウエストだと確信する。

ネプテューヌ「じゃあ由香ちゃんのお兄ちゃん達を助けに行こう！」

ネプテューヌの言葉に、全員がおうっ！、と答え、由香の兄達を助けに行く。

新八「…ところで思ったんですけど、由香ちゃんは何であそこに？」

銀時「どうせ逃げてる間に迷子になって泣いてたんじゃねーの？」
由香「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
新八が、ふと疑問に思い、銀時が冗談交じりに言うと、由香はなぜか顔をそらした事は追加しておく。

ウエスト館・鏡の間

由香の兄達を助けるために前を進むネプテューヌ達。今現在、沢山の鏡がある鏡の間にいる。

ネプテューヌ「うわ～、此処鏡が多いね～」
ネプテューヌは部屋のところどころにある鏡を見て、感想を言う。

リック「気をつけろ。ここにも敵が潜んでいるからな」
コンパ「ええ！？ここにもですか！？」
リックの一言に、全員が周りを警戒する。すると、

新八「うわっ！この鏡なんか変ですよ！！」
新八が１つの鏡を見て言う。その鏡に映っている新八が、変なポーズをしていたのだ。

銀時「新八、鏡のお前も地味だったみたいだな」
神楽「存在が地味なだけで鏡のお前も地味アルか。私等のを見るネ、立派に映っているアル」
銀時と神楽が、新八に皮肉を言って鏡を見る。鏡に映っている銀時は、ドラゴンボールのスーパーサイヤ人のようになっており、鏡に

映っている神楽は、二年後神楽みたいになっていた。

新八「映ってねーだろっ!!!鏡と現実が全然違うじゃねぇかァァァァァァ!!!」

新八は、額に青筋立てて2人に怒鳴る。

近藤「何やってんだお前ら!その鏡は全然お前達が映ってないではないか!俺の方がもっと立派に映っているぞ!!」

そういう近藤の鏡には、ゴリラが映っていた。

銀時・新八・神楽「オメーが一番映ってねーよっ!!!!」

鏡に映っているのがゴリラだと言うのに映っているという近藤に、3人は怒鳴る。

???「リ〜〜…ック、リ〜〜〜〜…ック」

部屋全体に不気味な声が聞こえた。

コンパ「ひゃっ!な、なんですか!?」

由香「な、何?」

リック「…現れたか」

リックはそういうと、1つの鏡を見た。すると、

バリィィン!!

その鏡から何とリックが出てきた。そのリックは肌が青く、かぶっているマスクは血のように赤かった。

新八「うわっ!リックさん!?リックさんそっくりのが出てきた!」

銀時「何あれ?あれお前のドッペルゲンガーか!?」

桂「ネプテューヌ殿!前に拾ったES(エネミーサーチャー)で調べてくれ!」

ネプテューヌ「分った！」
新八と銀時は驚き、桂はネプテューヌにＥＳを使うよう要求し、ネプテューヌは偽リックを調べた。

『ミラーエネミー』
『鏡に映った人物になって襲いかかる敵。集団で襲うことがある。』
『ＮＯ－ＷＥＡＫＰＯＩＮＴ』

銀時「なるほど。要はリックを真似したモンスターだな？」
銀時は目の前にいるミラーエネミー……いや、リックの姿だからミラーリックを見て睨む。

ミラーリック「ヴォオオオオオオオオオ！！！」
ミラーリックは雄叫びをあげて、リックに襲いかかった。

リック「くおっ！」
リックはミラーリックを押さえ、取っ組み合いになった。

銀時「リック！」
ネプテューヌ「リックさん！」
リック「手を出すな！こいつは俺がやる！」
リックはミラーリックと対峙し、押し合いしている。

リック「うおおおおおおおおおおお！！！」
リックが大声をあげて、ミラーリックの腕を引きちぎった。
ミラーリックの両腕だったとこから血が噴出している。

ミラーリック「ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」
リック「うるさい奴だな！くたばれ！」

リックは、アッパーカットでミラーリックの頭を吹っ飛ばした。
ミラーリックは倒れ、体が溶けて血だまりができた。

アイエフ「……やっぱり慣れないわ…」
ベール「アイちゃん…」
アイエフは血だまりを見て気持ち悪そうな顔をし、ベールはアイエフを心配する。

リック「まだ終わってない！来るぞ！！」
リックが銀時達に警告する。すると3つの鏡から敵が出てきた。
先ほどのミラーリックだけでなく、青い肌をした銀時とネプテューヌがいた。

銀時「え？俺？」
ネプテューヌ「わ、わたし？」
銀時とネプテューヌは目の前にいる偽物に驚く。

ヘルマスク『いや、まだいるぞ！』
ヘルマスクが言うと、またもや鏡から敵が現れた。
何と神楽、新八、桂、エリザベス、月詠、ヴィヴィオ、コンパ、アイエフ、ノワール、ブラン、ベール、土方、近藤、沖田、山崎、ジェニファーの偽物が現れた。

新八「うわっ！僕らのまで！」
土方「自分と戦うってのはどうかと思うが、相手にとって不足はねぇな」
コンパ「み、皆さん顔色が悪いです！」
ノワール「いや、あれはあいつらの皮膚の色だから」
神楽「あれ？由香のがいないネ」
由香「由香は幽霊だから無理だったんじゃないかな」

銀時「スタンドだっつーの！！」
ミラーエネミーの大群に、それぞれ違うを反応する。
ネプテューヌ「いちいち相手するのめんどくさい！ヴィヴィオ！あれやるよ！」
ヴィヴィオ「あれ？・・・あ！分ったネプ姉ちゃん！」
ネプテューヌにあれと言われ、ヴィヴィオはあれの意味が分ったようだ。
新八「え？ネプテューヌさん。あれって一体？」
ネプテューヌ「行くよ～、ヴィヴィオ！」
ヴィヴィオ「いくよ～」
ネプテューヌとヴィヴィオは何か構え出した。その構えはドラゴンボールの…
ネプテューヌ・ヴィヴィオ「かめはめ波ーーーー！！！！」
ドオォォォォォォォォン！！！
ミラーエネミーズ「グア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ァァァァァァ・・・・・」
かめはめ波によってミラーエネミー達が飲み込まれた。その衝撃で部屋中の鏡がすべて割れた。
新八「ちょっとォォォォォォォォ！！！！！かめはめ波で倒しちゃったんですけどォォォォォォォォ！！！！！って言うかそれリトバス編の短編集で使ったやつじゃん！！！」
新八が大いに突っ込む。
ネプテューヌ「だって長い戦いすんのメンドクサイもん」

ヴィヴィオ「メンドクサイもん」
新八「オイィィィィィィ!!!メンドクサイで済むかァァァァァァァァ!!!」
メンドクサイなどという2人に新八は怒鳴る。

???「ヴァアアアアアアア!!!」
全員「っ!!??」
新八とネプテューヌが話し合いをしていたら、土煙からジェニファーそっくりの偽物・・・ミラージェニファーが突っ込んできた。

銀時「なにィッ!!生き残りがいたのか!?」
桂「まさかあの者以外は全員盾になって守ったと言うのか!?」
新八「ああっ!!ジェニファーさん危ない!!」
ミラージェニファー「キシャアアアアアアアア!!!」
ミラージェニファーはジェニファーに切り裂こうとした。

ジェニファー「・・・・・・・・・・・・」
対してジェニファーは無言でミラージェニファーを見つめ、右腕を上げた。
するとジェニファーの右腕が、茶色い大きな腕に変わった。その腕は骨と赤い血が見え、鋭い爪があった。

全員「っ!!?」
ジェニファーの腕が変わったのを見て驚く銀時達。

ジェニファー「あああああああああああああああ!!!」
ジェニファーは右腕でミラージェニファーを引き裂いた。

ミラージェニファー「ギャアアアアアアアアア!!!」
引き裂かれたミラージェニファーは、血だまりへと変わった。

ミラージェニファーを倒したジェニファーは、右腕を元に戻して腕を見つめた。
リック「ジェニファー・・・お前…」
ジェニファー「仕方ないわ…こうするしかなかったの」
化け物のような腕で殺した自分を嫌そうにして言う。

銀時「おい」
銀時がリックを呼ぶ。

銀時「さっきのは一体何だ?オメーらは知ってるみたいだが?」
新八「ちょっと銀さん!」
銀時はジェニファーの腕のことを聞き、新八は止めようとする。

リック「・・・・・・・・」
リックは無言になる。
ヘルマスク『どうせ何時かはばれるぜ。白状した方が楽だ』
ヘルマスクが話した方がいいと言う。しかしいつもより元気がない。

リック「…分かった、話してやるよ。俺達のことを」
リックは過去を語り始めた。

〜回想〜

ウエスト館にいる前のリック達は、とある家に住んでいた。
そこで、リックとジェニファー、そして息子のデイビットの3人暮らしだった。

その時のリックはヘルマスクを被っていなかった。
3人は幸せそうに暮らしていた。だがそれは長く続かなかった。

ガシャァァァァン！！！

デッドマン「グオォォォォォォォ！！！」
デッドマンの大群がリック達の襲いかかったのだ。

デイビット「うわああっ！！」
ジェニファー「リ、リック！！」
リック「なっ！！、何でこいつらがここに！？」
ジェニファーがデイビットを抱きしめ、リックは2人を守ろうと盾になる。
実はリックは今の五年前にデッドマンなどの敵を倒したのだが、それが今この場にいるのだ。

デッドマン「リック、ハカセ、ヨンデル、ツレテ、イク」
一匹のデッドマンが、言葉を発して言った。

リック「っ！？それは一体どういう「ゴッ！」うっ！」
ジェニファー「リック！！」
デッドマンに聞こうとしとら、後ろからもう一匹のデッドマンがリックの頭を殴った。
リックはそのまま気絶した。

デッドマン「ツレテイク、ハカセノタメニ、オマエラモ、ツレテイク」

？？？

リック「……っ…ここは一体？」
リックは目を覚ました。ここはどこかの実験室のようだ。

？？？「ほぅ、目覚めたか」
リック「なっ！？お前はウエスト！！」
リックの目の前に現れたのは5年前に死んだはずのウエストだった。
（原作ではゾンビらしいが）

リック「何でお前が「生きているか…か？」」
ウエスト「そう、私は復活したのだ。こいつのおかげでな」
そう言って取り出したのは、真っ黒な宝石だった。しかしその宝石は禍々しい雰囲気が漂っている。

ウエスト「こいつは『ダークソウル』というものでな。負の力を具現化させるそうなのだ。私が復活したのはこれのおかげなのだ」
ウエストはダークソウルを眺めながら言う。

リック「…お前が復活したのはいいとして、ジェニファーとデイビットはどうした！！」
リックは怒気を放つ。リックが気絶してから2人がどうなったかなんて知らないのだ。

ウエスト「…それはそこにあるやつらのことか？」
リック「？・・・・・ッッ！！！？？」
リックはウエストがさした方向を見て、絶望した。そこにあるのは、デイビットの亡き骸と、デッドマンに実験されているジェニファー

がいた。

ウエスト「子供はようはないから殺したが、女の方はいい実験材料になるからな」

リック「あ・・・・・・ああ・・・」

リックは絶望のあまり、ウエストの話を耳に入らなかった。

ウエスト「・・・まあいい、お前にはこいつをプレゼントしよう」

そう言って取り出したのは、白い骸骨のようなマスクだった。リックにとって見覚えのあるマスクである。

リック「!!、ヘルマスク・・・なぜおまえが」

ウエスト「クックック・・・やつの砕けた欠片から調べて作り出したのさ。そしてこれと適性のあるやつはお前なんだよ」

リックの驚きをよそに、ウエストはヘルマスクのことを語る。実際リックは3回もヘルマスクをかぶっていたが。

ウエスト「さぁ茶番はここまでだ。お前は私の奴隷となれ!!」

ウエストはヘルマスクをリックの顔にあてた。

リック「う、ウオオオオオオオアアアアアアア!!!!」

ヘルマスクをつけられたリックはもがき苦しみんでいる。

やがておさまり、リックの体は筋肉質になった。

ウエスト「フッフッフ…さぁ、私のためにやってもらおうか!」

ウエストは両手を広げてヘルマスクに命令する。

ヘルマスク『やなこったね』

リック「は?」

ウエスト「なに?」

が、ヘルマスクは命令を拒否した。

ヘルマスク『俺は誰かに命令されて縛られるのまっぴら御免なんだよ！ファックユーオーケイ？』

リック「へ、ヘルマスク？何かしゃべり方が違うぞ？」

リックは引き気味になる。昔のヘルマスクは冷静で残虐的な感じだったが、今は口が軽そうなミーハーになっていた。

ヘルマスク『久しぶりだなリック。５年前に俺を倒して以来か？』

リック「…その様子だと5年前までのことを覚えているようだな」

リックはヘルマスクに言う。

ヘルマスク『ああ、覚えているさ。あの時の俺はすべてを支配するためにお前を利用していた。そしてお前に倒されたがコイツが俺を蘇らせたんだ。けどな、俺は利用されるのは大っ嫌いなんでな。あんな奴の命令なんぞ一つたりとも聞きはしねーよ』

ヘルマスクは吐き捨てるように言う。

リック「ヘルマスク…」

ヘルマスク『それに俺の野望はもうとっくに無くなってんだよ。何の計画も無ぇ。だから俺といっしょに行こうぜ！相棒（リック）！』

リック「・・・おう！」

ウエスト「……私が蘇らせたというのに逆らうのか？」

ウエストは苛立ちを立てて言う。

ヘルマスク『ああ、逆らうさ。俺はお前のものじゃねぇよ』

ヘルマスクはウエストを嫌そうに言い放つ。

ウエスト「…残念だ。では死ぬがいい！！」

ウエストは銃を取り出し、リックとヘルマスクに向けた。避けよう

としても間に合わない、そう思ったら、

ビュゥゥゥゥゥバシッ！！

ウエスト「なに！？」

リック「！？」

横から茶色く伸びた腕がウエストの銃を弾き飛ばした。弾いたのはなんと実験されてたジェニファーだった。

ジェニファー「リック！！」

ジェニファーは叫ぶと今度は左腕を変化させ、あたりを壊し始めた。

ウエスト「壊すでない小娘！！止めろ！！」

ウエストはデッドマン達に命令し、ジェニファーを止めようとしたら、

リック「オラアアッ！！！」

デッドマン「ギャァァァァ！！！」

リックがデッドマン達をなぎ倒した。

ウエスト「小娘…なぜ制御できるのだ」

ジェニファー「前に一回実験された経験があるからそのせいじゃない？」

ジェニファーはウエストにニヤッ、と笑う。その笑い方がなぜか殺意と黒さがあった。

リック「（うわ…ジェニファーが実験された恨みで怒ってる）…ウエスト、また会ったらぶっ飛ばしてやるよ」

ヘルマスク『首洗って待ってろよ！』

そう言って、リック達は部屋から逃げだした。

～回想終了～

リック「そうして俺達はここにいるわけだ」
ヘルマスク『んで、俺達に関しての感想は？』
リックは話し終え、ヘルマスクが聞く。

ネプテューヌ「そ、そうだったの」
コンパ「うう、悲しいです」
ヴィヴィオ・由香「う、うう…」
新八「許せません！リックさんをこんな目にあわせて！」
ノワール「ウエストってのはホントに最悪なお頭を持ってるわね！」
桂「おまけにダークソウルだと？この『狂乱の貴公子』桂小太郎が直々に成敗してくれる！」
ネプテューヌ・ヴィヴィオ・コンパ・由香は感動し、アイエフ・ノワール・ブラン・ベール・新八・桂・エリザベス・月詠・近藤・土方・山崎はウエストに対して怒りを表している。

銀時「あ～～？もう終わったのか？」
神楽「マジ長いネ。聞く気もないアル」
沖田「ぐ～～～・・・ぐ～～～・・・Ｚｚｚ」
対して銀時・神楽・沖田はそこらへんで寝転がっていた。

新八「オメェら揃って何そこで寝転がってんだァァァァァァァァァ！！！！！（怒）」

新八は額に青筋立てて3人に怒鳴る。

ネプテューヌ「・・・・・・・・・・・・・・・（無表情）」
するとネプテューヌは、無言で3人に近づいて、

ドガッ！バキッ！ゲシッ！ズドッ！バコッ！ベキッ！

ネプテューヌ「今度からちゃんと話を聞いてね？わかった？（殺意全開）」
銀時・神楽・沖田「ジュ、ジュビバゼンデジダ…」
無表情かつ殺意全開のネプテューヌが注意し、顔全体に痣とたんこぶが出来た銀時、神楽、沖田は謝った。

それを見たリック達はネプテューヌにおびえていた。只、ジェニファーはあらあらと笑っていた。
そんなこんなでリック達は由香の兄を探していくのであった。

～余談～
緑のヒゲ「ハァ…ハァ…死ぬかと思った…ハァ・・・」
緑の男が、掃除機で部屋のデッドマンをすべて倒したのは追加しておく。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「お～し。アシストを紹介するぞ～」

ヘルマスク『よう！ヘルマスクがアシストするぜ？』

銀八「よし！始めるぞ。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問。

『ボーボボ

「おう、今回はこの俺が質問だ！っつぅ訳で質問、なのは、フェイト、シグナム、ティアナの四人に問う。ぶっちゃけ俺達のコラボ見てどう思う？率直な感想を頼む」』」

なのは・フェイト・シグナム・ティアナが立ち上がる。

なのは・フェイト・シグナム・ティアナ「絶対いやです！」

ヘルマスク『相当嫌われてんなぁ…。『ｓｉｂｕｇａｋｉ』。廊下に立ってくれ。次は『鳴神ソラ』からだ。『ルイージ「出たよ…新八君の本体はメガネネタが…ｏｒｚ」

フォックス「それもあるが…うわぁ…」

スネーク「銀時の…当たり過ぎだろ；」

マリオ「それにしても今回出て来たチェーンソー使いのゾンビは厄介だな」

スネーク「まあ、無事に倒せたのが良かったな…それで次回はコープス側のキャラが出るようだな」

マリオ「そうだな…皆に質問だ『『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説で作者が考えたオリジナルライダーでどれに変身したい？ちなみに全員同じのは簡便してくれ』」

ルイージ「僕も気になったのを質問『キャロちゃんが女神化したらどう言う感じになるの？』」

ファルコ「俺からまた全員に質問だ…『スマブラXで俺達スマブラメンバーの最後の切り札をもし使えるなら誰のを使って見たいんだ？』」

ネス「けどホントやばいよね；」

リュカ「ホントだね；」

次回はどうなるのやら…』・・・一つ目はまぁ分けるなら『仮面ライダーハーツ』は万事屋とSSS団一行、『仮面ライダーディブレイカー』なら女神組とリトルバスターズだな。六課組はしないそうだ』

真王「2つ目はキャロはヴィヴィオのように大人になります。赤い

瞳とロングピンクヘアーとフェイトのようなスタイルで武器は杖になります。ちなみにボディの服は白です」

銀八「最後のは長ぇな。順番に答えるぞ」

銀時「俺はマリオのだ」

新八「僕はディディーさんのです」

神楽「私はソニックが無敵になるところネ！」

桂「マルス殿だ！」

エルザベス『ピカチュウのボルテッカーですね！』

月詠「メタナイトじゃの」

ネプテューヌ「私はマリオだよ！」

ノワール「ゼルダとシークのね」

ブラン「・・・カービィ」

ベール「ピーチさんのですわ」

コンパ「プリンさんのをやってみたいです！」

アイエフ「私はメタナイトね」

九兵衛「僕はアイクだ」

なのは「サムスさんなの♪」

フェイト「私はソニックかな」

はやて「うちはルカリオや」

シグナム「私はアイクを使う！」

ヴィータ「ハンマー繋がりでアイスクライマーだ！」

シャマル「私はヨッシーかしら？」

ザフィーラ「波動を極めるルカリオだ」

スバル「マリオさんです！」

ティアナ「サムスさんね」

エリオ「マルスさんのが似合いますね」

キャロ「私はヨッシーさんです！！」

ヴィヴィオ「マリオさんだよ」

恭介「俺はマリオだ」

鈴「あたしはヨッシーだ！」

理樹「僕はネスさんかリュカ君のＰＫスターストームかな？」

真人「俺はクッパにするぜ！」

謙吾「マルス殿だな」

小毬「カービィさんのにするよ～」

来ヶ谷「私はマルスだな」

クド「ピカチュウさんなのです！」

葉留佳「ゲーム&ウォッチさんで葉留佳オクトパスですよ」

美魚「ルイージさんですね」

ゆり「フォックスのランドマスターよ！」

音無「俺はファルコか？」

奏「…メタナイト」

日向「俺はウルフだ！」

直井「神の僕ならピットのだな」

ユイ「ドンキーさんのタルコンガで倒すんじゃい！！」

松下「カービィなら肉うどんを作れるのか？」

高松「私なら美しき筋肉を見せるためにワリオマンのようになりた

いですね」

野田「俺はリンクだ！」

藤巻「マルスってかっこいいな！」

大山「スネークさんかな？」

ＴＫ「カーニバル・デデデ、ダンシング・デデデ！！」

椎名「…メタナイトだ」

岩沢「ドンキーのタルコンガを挑戦してみるか」

銀八「ホント長いな…、まいっか。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ヘルマスク『そうだマリオさんよ。『エンドレス組み手の相手がもしミラーエネミーズだったらどの位の数を撃退できるんだ？』』

銀八「マリオだからミラーマリオだな。本物よりも劣るが本物と同じ技を持ってるんだろ？」

ヘルマスク『そのとおり。マリオ、どれくらい余裕で倒せるか想像してくれよ。じゃあな』

第二十三訓：たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい（後書き）

真王「ミラーエネミーズを倒し、リック達の過去を聞いた銀時達はなぜか協会のような場所に着いた。そこで銀時達に新たな敵が現れた」

ヘルマスク『次回『逆さまの十字架は不吉な意味がある』テイクオフだぜ！』

第二十四訓：逆さまの十字架は不吉な意味がある（前書き）

真王「今回はコープスキャラが全員でてきます」

由香「『リリカル銀魂』始まります」

第二十四訓：逆さまの十字架は不吉な意味がある

銀時達は、由香の兄達を助けるために奥へと進んだ。
ちなみに本来の目的であるウエストのことは忘れております。

銀時達は奥へ進むと、ある場所に着いた。その場所は、聖なる場所と行ってもふさわしく、ステンドガラスと並ぶ蝋燭がある教会みたいなところだった。

銀時「何だここ？協会か？」
土方「ウエストってやつは懺悔なんてすんのか？」
銀時と土方が見た感想を言う。

？？？「う…ううぅ…」
奥から少年の声が聞こえた。銀時達は奥をよく見ると、半透明の少年が苦しそうにしていた。

由香「っ！！お兄ちゃんっ！！」
由香が少年に向かって叫んだ。どうやら少年は由香の兄らしい。

由香の兄「ゆ、由香…」
由香の兄は苦しそうに由香を見る。

由香の兄「由…香…、早く…逃げ……うあああああああああ！！！」
由香「お、お兄ちゃんっ！！？」
由香の兄が奥へ引きずり込まれた。

そして、奥から真っ黒な逆さまの十字架と、由香の兄と一緒に回っ

ている11人の少年少女の霊が、鎖のようなもので苦しそうに縛られ、十字架の周りを回っていた。

ＩＢＧＭ：ＶＳイービルクロスｂｙスプラッターハウス（Ｓｐｌａｔｔｅｒｈｏｕｓｅ　－Ｔｈｅ　ｓａｉｎｔ　ｃｏｍｅｓ　ｍａｒｃｈｉｎｇ　ｉｎ）

銀時「あああああ！！！なんだよあれ！！れ・・・すすす、スタンドがいっぱいいる～～～～！！！！」

銀時は幽れ・・・・・・スタンドを見て指をさしながら声を震わせて言う。

近藤は白目むいて固まり、土方は平常心を保っているように見えるが足がガタガタ震えており、新八と山崎はすごい顔で固まり、コンパ、ヴィヴィオ、ブランは抱き寄せて震えている。ネプテューヌはそんな銀時達をほっといて、目の前の敵をＥＳで調べた。

『ダーククロス』

『もとはイービルクロスという霊が宿った十字架だが、ダークソウルによってパワーアップされている。周りにいる霊たちは、ダーククロスに縛られた守護霊とされている』

『ダーククロス自身が弱点』

ネプテューヌ「またダークソウル！何でこんなとこにダークソウルがあるわけ！？」

ネプテューヌはダークソウルという単語に嫌気がさす。

桂「おそらくダークソウルはウエストというものが持っているかもしれんな」

桂が推測する。

由香「そんなことよりお兄ちゃん達を助けてよ！」
由香が涙目でネプテューヌの服をつかんで言う。

ネプテューヌ「大丈夫！由香のお兄ちゃん達は必ず助けるから！」
ネプテューヌは親指をあげて、由香に安心させる。
するとダーククロスが突っ込んできた。

ネプテューヌ「っ！？危ないっ！！」
由香「キャッ！」
ネプテューヌは由香を抱きかかえて避けた。

銀時「くそ！」
霊「ハァッ！」
銀時「うおっ！」
銀時がダーククロスへ向かおうとしたら、少女の霊がハサミで銀時に襲いかかった。

霊「ケ～ケッケッケッケ」
霊「フヒハハハハハハ」
新八「うわあああああああ！！！」
新八は追いかけてくる幽霊から必死に逃げている。

土方「だ～くそ！」
土方はやけになって、幽霊に攻撃する。

スカッ

が、すり抜けてしまった。

土方「うおふぉおおおおおおおお！！！」

土方は逃げだした。

ノワール「ああ、もう！うっとおしいわね！」
ノワールはいらだって、ダーククロスに銃を向け、発砲した。
ノワール「喰らいなさい！」

パンッ！カンッ！

しかし幽霊がハサミで銃の軌道を変えた。

霊「キャハハハ」
ノワール「ちっ！」
笑う幽霊にノワールは舌打ちする。

桂「ちっ！部が悪い。エリザベス、逃げ続けるぞ」
エリザベス『御意！』
桂とエリザベスは、幽霊から逃げ続けている。

霊「キィェアアア！！！」
すると目に前に大きなハサミを持った幽霊が現れ、

スパンッ！

エリザベスの体を切った。

桂「エ、エリザベスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」
桂が悲痛の声を上げる。

エリザベス『何か？』
しかしなぜかエリザベスが首一（？）からニュッと出てきた。

月詠「カメかお主はっ！！」
月詠はエリザベスに突っ込んだ。

銀時「ったく、これじゃ近寄れねーぜ！」
ネプテューヌ「なんとかあいつに近づいて叩き壊せばいいけど」
銀時は吐き捨て、ネプテューヌは由香とヴィヴィオを抱きかかえている。

するとダーククロスが銀時とネプテューヌに突進してきた。
銀時「やべっ！」
ネプテューヌ「・・・・・・・・・」
ネプテューヌは強く抱きしめ、目を瞑った。

……しかし何も来ない。ネプテューヌは目を開けると、

由香の兄「くぅぅぅ・・・・・・」
由香の兄が、ダーククロスを止めていた。

由香「お兄ちゃんっ！？」
銀時「お前！」
由香の兄「由香を・・・傷つけてなるものか！」
由香を傷つけないために、体を張ってダーククロスを止めたようだ。

するとダーククロスから手のようなものが伸びて、由香の兄の頭をつかんで、
由香の兄「うわあああああああああ！！！！」
黒い電撃を出して、由香の兄を苦しめた。

由香「お兄ちゃんっ！！」

由香が悲痛な声を出す。

由香の兄「は、早く・・・早くこいつを」
由香の兄は苦しみながら、銀時とネプテューヌにダーククロスを倒すように言う。

銀時「分ったぜ。てやあああああああああ！！！」
ネプテューヌ「ハアアアアアアアアア！！！」
銀時とネプテューヌはダーククロスに向かって走り出し、ダーククロスを叩っ切った。

バキャアアアアン！！！

ダーククロスは壊され、由香の兄達を苦しめた鎖が消滅した。

由香「お兄ちゃん！！」
由香は由香の兄に駆け寄る。

由香の兄「う・・・つ・・・」
由香の兄は少しずつ目を開けた。

由香「お兄ちゃん」
由香の兄「由香……無事みたいだな。よかった」
由香の兄は由香を見て、安心した顔をする。

由香の兄「由香と俺らがご迷惑をかけてしまったみたいですね」
由香の兄が銀時達に謝罪する。

銀時「別にいいぞ」
ネプテューヌ「気にしてないよ」

桂「良い兄妹だな」
エリザベス『全くです』
ノワール「あなた達には何も悪くないわ」
ベール「気にすることではありません」
土方「ま、俺からも許してやるよ」
リック「俺もだ」
銀時達は気にしてないと言う。

胸の大きな少女「うん…あれ？…ここは？」
ロールな少女「なな！何事ですか？」
目つきの悪い少年「何だ一体？」
ツインテールの少女「私達何やってたんだっけ？」
変わった髪の少女「あれ？ここどこ？」
銀時達が話をしていると、周りにいる霊たちが起き上がった。

由香の兄「あ、直美！」
直美「え？哲志？」
由香の兄・哲志が少女・直美を呼び、直美は哲志に振り向く。

ロールな少女「お～。感動の再会ですね～。この場で告白しちゃいなさい」
直美「ちょっと世以子！」
哲志「篠原！そういう冗談はやめてくれ！」
世以子「つれないな～もう」
ロールの少女・世以子は2人に冗談交じりで言うが、哲史と直美は、顔を赤くして否定した。

銀時「あの・・・お宅等誰？」
漫才をやってるような哲志達に、銀時が聞いてみた。

哲志「あ、すいません。俺は持田哲志です」
直美「私は中嶋直美よ」
世以子「私は篠原世以子だよ～」
良樹「俺は岸沼良樹だ」
あゆみ「私は篠崎あゆみ。怪談好きなの」
繭「私は鈴本繭です」
哲志達はそれぞれ自己紹介した。

銀時「そんじゃあ次は俺達だな。俺は…」

自己紹介中・・・

銀時「というわけだ。よろしくな」
哲志「あ、はい」
哲志達はお辞儀をした。

新八「ってちょっと待ってください。あれで自己紹介を済ませ「新八君、少し黙ってて」」

キーーーーーーーン!!バタッ!

ネプテューヌから金的を喰らった新八は、口から泡を出して、そのまま倒れた。ほとんどの男達は、顔を青くして、前かがみになった。

ネプテューヌ「さぁ、早く奥に行こうかみんな」
何事もなかったかのように、ネプテューヌは奥へ行った。

ネプテューヌ「ん?」

ふとネプテューヌは立ち止まった。
目の前に、赤い服の少女と、お腹に血が出ている少年と、左目がない少女と、もはや上顎から無くなっている少女が立ち塞がっていた。
しかも何やら黒い気を発している。

哲志「っ！？あいつら！」
銀時「え？どうしたの？」
哲志達が血相を変えて、ネプテューヌの前にいる幽霊たちにおびえる。

直美「あの子たちはよく私たちの襲いかかって来たんです！」
良樹「それに捕まっちまったら即お陀仏だぜ！」
直美と良樹の説明に、銀時達は恐怖した。

子供の霊たち「アアアアアアアアアアアア！！！」
４人の子供の霊が、ネプテューヌに飛びかかって来た。

銀時・新八・桂・月詠・近藤・ノワール・ブラン・アイエフ・リック「ネプテューヌ（さん）（ちゃん）（殿）！！」

銀時達は叫んだが、とても間に合わない。霊たちは一気にネプテューヌをハサミで切り裂こうとした。

ネプテューヌ「舐めんなァァァァァァァァァ！！！！」

バキィィィィィィィン！！！

子供の霊たち「グパァァァァァァ！！」
全員「エエェェェェェェェェェェ！！！？？（ 。ロ 。）」
なんとネプテューヌは、幽霊たちをアッパーカットで殴り飛ばした

のだ。
全員が驚きのあまり、目玉が飛び出た者や、吹いた者までいた。

ネプテューヌ「フンッ！」

ゲシッ！

子供の霊たち「ゲフゥッ！！」
殴り飛ばされた子供の霊たちは、山積みにされ、起き上がろうとしたらネプテューヌに踏まれてしまい、降参の白旗が出た。

ネプテューヌ「いい？何あって相手を殺そうとしたか知らないけど、勝手に人を殺さないの！」
ネプテューヌは４人の子供幽霊を正座させて、説教している。傍から見れば少女が幽霊に説教している光景はシュールである。

銀時「すげぇ。ネプテューヌの奴、スタンドを説教してやがる」
桂「すごい心の持ち主だな。幽霊なんてものともしてない」
銀時達はネプテューヌに関心と驚きを抱いた。

只、哲志達の場合は、あれが俺達を苦しめた子たちなのか？と顔をひきつらせていた。

ネプテューヌ「ということだよ、分った？」
子供の霊たち「・・・・・・・・・・」
ネプテューヌ「返事は？（殺気）」

子供の霊たち「ハイィ！」
ネプテューヌ「よろしい」
説教し終えたネプテューヌは、霊たちに聞いてみると、返事がないので殺気を放ってみると、霊たちは背筋をピンっ！、と伸ばして返事をした。銀時達はあいつ幽霊より強いんじゃないかと思った。

ネプテューヌ「ところで、あなた達は何て名前なの？」
ネプテューヌは霊たちの名前を聞いた。

サチコ「・・・篠崎サチコ」
遼「僕は吉沢遼」
雪「私は管乃雪です」
時子「私は辻時子」
ネプテューヌ「ふ～ん。サチコちゃん、遼君、雪ちゃん、時子ちゃんだね。私ネプテューヌだよ」
名前を聞いて、ネプテューヌも自己紹介をした。

ネプテューヌ「そしてあっちにいるのが…」

少女説明中・・・

ネプテューヌ「というんだよ」
ネプテューヌの説明に、サチコ、遼、雪、時子は、銀時達を眺める。

新八「いやだからそうやって略すのはやめｔ「ガンッ！」グファッ！」
復活した新八がネプテューヌに突っ込みを入れるが、瓶を顔に当てられた。

ネプテューヌ「よしよし。あんな眼鏡さんはほっときましょうね～」
サチコ・遼・雪・時子「ハ～イ」
サチコ達は返事をした。

新八「か～むかつく！ムカつきキングだよこの子！」
額に青筋を立てて突っ込みを入れる。

ベール「…ところで新八さん。その頭にかぶっているのは何ですか？」
新八「え？」
するとベールが新八の頭を指摘され、新八は頭を調べてみると、・・・・女の子の頭がありました。

新八「ぎゃあああああああああああ！！！！！」
銀時「ギャアアアアこっちに投げんなぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
土方「こっちにも投げるなァァァァァァァ！！！！」
哲志「だからってこっちに投げないで！！」
あゆみ「イヤアアアアアアアアアア！！！！」
女の子の頭を掴んでは投げ、掴んでは投げの繰り返し…。そしてネプテューヌのところへ飛んだ。

ネプテューヌ「おっと」
銀時「ネプテューーーーヌ！！そいつを捨てろォォォォォォォォ！！！！」
銀時達が捨てるよう言うが、ネプテューヌは頑固無視！すると、

時子「それ私の頭」
ネプテューヌ「え？そう」
女の子の頭は、時子の頭ということで、頭をつけた。ピッタリはま

った。

時子「頭が見つかってよかった♪」
時子は嬉しそうだ。

ネプテューヌ「嬉しそうだね」
時子「うん！みんなありがとう」
時子はお礼を言った。

ポトッ

頭が外れた。

銀時・新八・土方・近藤・哲志「ぎゃあああああああああああああ！！！！！」
コンパ・直美・あゆみ「いやあああああああああああああ！！！！！」

時子の頭が外れて、銀時達は絶叫した。時子は慌てて頭を戻した。

？？？「まるで修学旅行のような騒ぎ方だなリック」
リック「！？この声は！」
奥から老人の声が聞こえた。そこにいるのは白衣を着た老人、ウエストだった。

リック「まさかこんな所に現れるとはなウエスト！！」
ネプテューヌ「え？ウエスト？」
銀時「おいウエストってまさか」
桂「リック殿やジェニファー殿を苦しめた張本人だ！」
リックは殺気と怒気を放ち、銀時達はウエストを警戒する。

由香「ヒッ・・・・・・」
哲志「あ、あの人は…」
直美「思い出した！私達をさらった奴よ！」
哲志達も驚いて、銀時達の後ろに隠れた。

ウエスト「まさか貴様らがここまでやってくるとは予想外だったよ」
ウエストは銀時達を過小評価していたらしい。

銀時「へっ、そりゃオメーは俺達を舐めてんだよ」
ネプテューヌ「リックさん達をひどい目にあわせたあなたはすぐに倒す！！」
リック「ウエスト！！すぐにこの因縁を断ち切ってやるぞ！！」
ヘルマスク『そのいきだぜリック！』
銀時達は構える。

ウエスト「・・・フンッ、きさまらがここまでこようが、この私のとこまでたどり着けん。せいぜい私の手下たちと遊んだいるがいい」
リック「待て！、ウエスト！」
ウエストがこの場を去り、リックと銀時とネプテューヌは、ウエストを追いかけると、

デッドマン「シャアアア！！」
デッドマンが襲いかかった。

リック「邪魔だ！！」
が、リックと銀時とネプテューヌは、デッドマンをなぎ倒した。しかしウエストはすでに奥へ消えていった。

リック「くそっ！」
ヘルマスク『落ちつけリック。ああいうラスボスに限って決着にい

い場所にいるだろうよ』
新八「ヘルマスクさん、メタな発言はやめてください！」
銀時「んで、どうすんだ？」
銀時はリックに聞く。

リック「もちろん追いかける！あいつとの因縁を断ち切ってやるよ！」
ヘルマスク『俺もやるよ』
リックは力いっぱい答えた。すると、

哲志「俺らもいきます！」
哲志達が突然行くと言い出した。

銀時「おいおい、オメェらが来たって巻き込まれるだけだぞ」
ネプテューヌ「いや銀さん、哲史君達は幽霊だから効かｎ「霊って言うな！！スタンドだ！！」」
ネプテューヌのセリフをかぶらせて、冷や汗流してスタンドと呼ぶ銀時。

ネプテューヌ「それじゃみんな行くよ！」
ネプテューヌが全員に先導しようとすると、

銀時「何でお前が指導者なんだよ。ガキにリーダーは務まらねえよ」
神楽「マジ駄目アル。ねぷっちじゃ失敗するのがオチネ」
桂「失礼ながら俺もリーダーに賛成だ」
銀時、神楽、桂がバッサリと切り捨てた。

ネプテューヌ「・・・・・・・・・サチコちゃん」
サチコ「何？」
ネプテューヌが、サチコ達に向いて、言い放った。

ネプテューヌ「・・・・・・・・・殺れ」
サチコ・遼・雪・時子「ハイ。・・・・・・・・・・・・・・・（呪文唱え中）」
サチコ達は、手を合わせてブツブツと呪文を唱え始めた。

ボウッ！

大きな牙の生えた人魂が現れた。そして銀時達を追いかけ始めた。

人魂「ガウガウガウガウッ！！」
銀時「ギャアアアアアアこっちに来るなアアアアア！！！！」
神楽「ギイヤァァァァァァァァ！！！！」
桂「ウワアアアアアアアアアア！！！！」
銀時達は人魂から逃げ続けるはめになった。

で、結局なんやかんやで、リックがリーダーとなりました。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「よう。Ｓ（質問を）Ｋ（答える）Ｋ（コーナー）の時間でーす。今回のアシスタントは」

由香「はじめまして。持田由香がアシスタントします」

銀八「礼儀正しい挨拶をありがとう。んじゃいくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さんから、『マリオ「ルイージィィィィィィィィィ！！！！！！！！！！！！！」

（バビュン！！）

ああ！マリオがあっち行っちゃったよ！！

スネーク「と言うかルイージ…何時の間に…」

フォックス「俺達が知らない間にか…」

クッパ「質問に答えるならあやつは軽く約５００体以上は行けるだろうな…」

ワリオ「と言うか…色々出たな…ハジケリストやらドナルドやらテレサであげくのはてに短編集で出たかめはめ波を撃つやら…今回はマジで多重クロスだな…」

ネス「それにしても許せないね！ウエスト博士！」

リュカ「うん！（怒）」

ソニック「まったくだな…皆に質問だ、『『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説で作者が考えたオリジナルライダーで誰と戦ってみたい？理由を頼むのと別々に頼むぜ♪』」

スネーク「リリなのメンバー以外に質問だ『もしバリアジャケットを作れるならどう言うのにしたいんだ？』」

フォックス「新八に質問、『ボケとツッコミを１０割で例えるとどう言う割合になる？ちなみに表現はツッコミ：ボケな』

次回を楽しみにしてます♪』…え～。１つ目は、全員がまとめてみたらこうなってました」

『仮面ライダーハーツ：銀時・神楽・桂・エリザベス・月詠・シグナム・ヴィータ…接近戦にちょうどいいから。

仮面ライダーディブレイカー：ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・アイエフ・コンパ・なのは・フェイト・はやて…魔法を打ち消す力があるから。』

銀時「２つ目は俺はそのままだ」

新八「寺門通親衛隊の服です！」

神楽「私はそのままネ！」

桂「キャプテン・カツーラスーツだな」

エリザベス『私はそのままになるけど』

月詠「わっちはこの姿が気にいっておる」

ネプテューヌ「私は成長してパープルハートの服だね」

ノワール「ブラックハートの服ね」

ブラン「・・・ホワイトハート」

ベール「グリーンハートのですわ」

コンパ「ナース服です」

アイエフ「私はそのままがいいわ」

新八「それから3つ目ですけど多分7：3分けじゃないかなぁ…」

銀八「はい。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

由香「次はペンネーム『黒神』さんからの質問です。『銀時へ

もし僕の小説の様に魔導士になれるなら、どんなデバイスがほしいですか？

オリジナル的でお願いします。

神楽と月詠へ

キャロとは仲良くできそうですか？

エンジェル・ビーツ側へ

皆さんは、最強最悪兵器と思わせる『シャマル鍋』を1口食べただけでも耐えられる地震はありますか？
返事を待っています。

以上質問です。』銀さん質問来たよ」

銀時が立ち上がる。

銀時「そうだな～。伝説の剣・エクスカリバーがいいかな」

由香「次は神楽さんと月詠さん」

神楽と月詠が立ち上がる。

神楽・月詠「よく分からん（アル）」

由香「・・・最後にエンジェル・ビーツのみなさん」

ゆり「いやァァァァァ！！！絶対いやァァァァァァァ！！！
（トラウマ）」

音無「初音・・・俺先に逝っちゃいそうだ…」

日向「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ…」

奏「ガタガタガタガタガタガタガタ」

直井「神でもこれは無理だ…」

松下「うおおおおおおおおおおおおお!!!!（頭をガンガンぶつけている）」

高松「私は手を出しません」

野田「こ…これは料理ではない!!」

藤巻「食えるかこんなもん!!」

大山「僕死ぬのかな？」

ＴＫ「オゥ・・・クレイジーディナー・・・」

椎名はいなくなっている。

ユイ「お母さん…」

岩沢「あたしの夢がここで終わるのか？」

銀八「ハイ、ああいう感じに嫌がっているようです。『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

由香「何か…大丈夫かな。お姉ちゃん達…」

第二十四訓：逆さまの十字架は不吉な意味がある（後書き）

エトナ「ダークソウルを使って世界を手に入れようとするウエスト博士。が、その時ウエストの前に世界の美少女・エトナが現れた」

銀時「あれ？次回予告じゃねぇのか？」

エトナ「しかし、多種多様のモンスターが現れ、エトナにピンチが迫って来た！」

リック「偽次回予告か？」

エトナ「けど安心して！正義のヒーローは最終的にパワーアップして、どんなラスボスでも倒せるようになっているのよ！」

ネプテューヌ「私がヒーローだよ！」

ノワール「そこ、張り合わないの」

エトナ「次回『魔界スプラッターエトナ』最終話：闇夜に舞う少女。みんな、絶対見てね♪」

真王「ハイエトナさん。帰ってください」

エトナ「ちょっとォォォォォ！！」

真王「本当の次回は『体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束』です。では」

～つぶやき～

真王「たまには銀魂的短編を作ってみるか…」

特別番外訓：鬼が出たら豆をまけ（前書き）

真王「今回は節分の日にちなんで、この作品を作りました。『リリカル銀魂』スタートです」

特別番外訓：鬼が出たら豆をまけ

ネプテューヌ「う～ん、ちょっと重いな～」
ミッドチルダのグラナガンの街のはずれで、ネプテューヌは両手に大きな袋を持っていた。
はやてから食料調達を受けて、買い物から帰る途中である。

ネプテューヌ「さっさと帰えろっかな……ん？」
ネプテューヌは帰る途中、あるものが目に入った。
それは、うつぶせで倒れている金髪ロングヘアーで黒い腕輪をつけた体操服な服を着た長身の女性と、同じくうつぶせで倒れているオレンジっぽいロングヘアーで黒い腕輪に瓢箪みたいなのを付いた少女がいた。
それだけならよかったのだが、２人はネプテューヌ達とは違っていた。長身の女性には額に赤くて星がほられている角があり、少女の方は歪な２本の角があるのだ。

ネプテューヌ「…なんだろこの人たち…」
ネプテューヌは倒れている２人を見ていると、

グルルルルルゥウウウウウウウウ・・・・・・・・・・

腹の虫がなった。しかしネプテューヌの方ではなく、倒れている２人からである。

ネプテューヌ「この人たちもしかして…」
そう言うと、どこから持ってたのか釣竿を取り出し、針に高級肉をさして２人の前に垂らしてみた。
少しピクリと動いた。

餌を揺らしてみる。ぴくぴく動いている。
もっと揺らす。ぴくぴく動いている。
口に近付ける。ギランッ！と眼が光った。
ネプテューヌ「フィ～～～～～～ッシュッ！！」
2人は肉にかじりつき、それをネプテューヌは釣り上げた。（地面の上だが）
ネプテューヌ「さ、早く銀さんのとこへ行こ」
ネプテューヌは2人を引きずって六課へ帰った。

機動六課・食堂

バクバクバクバクバクバクバクバクバクバクッ！！×2
ネプテューヌに連れてこられた（引きずられてきたと言うべきか）2人は相当空腹だったらしく、買ったばかりの食材を含めバクバク食べていました。
銀時「どんだけ食うんだこいつ等は・・・」
スバル「よほどお腹が空いてたんですね・・・」
銀時とスバルは2人の食いっぷりに唖然とする。
ネプテューヌ「私が拾ったんだもん。感謝してほしいよね」

はやて「それと食料が減ったことは別やけどな」
ネプテューヌ「うぇぇぇ～～～・・・・・・」
はやての痛い一言に、ネプテューヌは渋い顔をする。

長身の女性「いや～、助かったぜ～」
２本角の少女「あのままだったら本当に餓死しそうだったよ～」
２人は空腹を満たし、銀時達に感謝している。ちなみに彼女達の後ろには食後の跡がある。

ネプテューヌ「よかったね」
銀時「んで、オメーらはいったい何なんだ？」
銀時は二人に聞く。

萃香「あ～わたし伊吹　萃香って言うんだよ～」
勇儀「あたしは星熊　勇儀ってもんだ。よろしくな」
２本角の少女は萃香、長身の女性は勇儀と名乗る。

ネプテューヌ「萃香ちゃんに勇儀さんだね。私はネプテューヌだよ」
銀時「俺は銀時だ。銀ちゃん、て呼んでもいいぜ」
ネプテューヌと銀時が自己紹介をする。

・・・え？他の奴ら？・・・めんどくさいからキングクリムゾンだ。
全員「おいっ！！（怒）」

銀時「んで？何でお前らはあんなところで倒れたんだ？」
萃香「え？・・・えっとぉ・・・」

勇儀「あ～、それはだな～・・・」
萃香と勇儀はなぜか歯切れが悪い。何やら顔をそらしている。

萃香・勇儀（スキマの奴が持っていた酒を飲んでしまった揚句怒らせてここに飛ばされたことは言えないな・・・）
ある賢者妖怪の持ってた酒を飲んだことで、ミッドチルダに飛ばされたことを話すのが無償に恥ずかしく思う萃香と勇儀。

新八「何言ってんですか銀さん。大方、どっかの知人を怒らせて無理やりあんなとこに飛ばされたんじゃないんですか？」
萃香・勇儀「ギクゥッ！！！」
新八のほぼ的中なセリフに萃香と勇儀は半端ない汗を流す。

ネプテューヌ「…あれ？２人とも、何でいっぱい汗かいてんの？」
銀時「しかもお前らさっき『ギクゥッ！！！』ってしたよね？」
新八「え？…まさか当たってるんですか？」

ネプテューヌと銀時は萃香と勇儀のリアクションに不審を抱き、新八はまさかと冷や汗を出す。
とうとう萃香と勇儀はハァッとため息をつき、白状した。

銀時「馬鹿だな～。そんなことするからそんな目にあうんだよ」
勇儀「・・・面目ねぇ」
萃香「・・・反省してます。」
２人はネガティブ気味になる。

ネプテューヌ「ねぇ、勇儀さん達をここに泊めない？」
ネプテューヌがこんな提案をしだす。

コンパ「そうです！このままじゃ2人は一文無しです！」
銀時「ちょっとコンパちゃん？一文無しってやめてくんない？その言葉敏感だから」
コンパのセリフに、銀時は突っ込む。

勇儀・萃香「ホントか！？」
勇儀と萃香が乗り出す。

銀時「……あ～分ったよ。ここに泊めてやるよ」
勇儀・萃香「ありがとう！！！」
銀時は許し、勇儀と萃香は土下座した。

コンパ「…ところで、勇儀さんと萃香さんは何で頭に角があるんですか？」
コンパは2人の角を見て言う。

勇儀「これか？この角は鬼の証なんだ」
全員「お…鬼ィッ！！」
銀時達は勇儀と萃香が鬼ということに驚き、コンパは銀時の後ろに隠れた。

コンパ「み…みなさん気を付けるです！！鬼はへそを抜き取ってしまうです！」
ネプテューヌ「えぇ！？本当！？」
勇儀「出来るか！出来たとしてもしねーよ！」
コンパの鬼に対する認識にネプテューヌは信じてしまうが、勇儀が全力で否定する。

なのは「コンパちゃん。それは雷のことでしょ」
コンパ「え？・・・

大きな袋を背負っている勇儀を見て言うはやて。

勇儀「あたしら鬼は力自慢だからな。これくらい朝飯前だ」

勇儀は自信満々に言う。

はやて「さよか。ほんなら次の仕事を手伝ってくれるか？」

萃香「あたしらに出来ることならね」

勇儀と萃香は次の仕事に向かった。

荷物運び

勇儀「やっぱこっちの仕事がしっくりくるよな」

萃香「物運びなら負けないけどね」

勇儀と萃香は、いろいろな大きな荷物や道具を運んでいた。

子供と遊び

ネプテューヌ「それ～い」

ヴィヴィオ「わ～い」

萃香「ホレホレ」

勇儀と萃香は、現在子供たちと遊んでいた。

はやて「楽しそうやな～」

桂「そうだな八神殿」

ベール「微笑ましいですわ」

はやて、桂、ベールは勇儀達を眺めている。すると、

勇儀「ちょっ、おいこら！どこ触ってんだ！」
ネプテューヌ「いや～、勇儀さんって本当におっきいな～って」
ネプテューヌが、勇儀の豊満な胸を揉んでいた。

はやて「んなっ！？ネプテューヌちゃん！！そのおっぱいを揉むのはうちの特権や～～～！！」
はやてはダッシュで勇儀のとこへ向かうが、勇儀ははやてを海へ投げ飛ばした。

休憩

勇儀「ごくごくごくごく・・・ぷは～、やっぱ酒が一番だわ」
萃香「のんどれのんどれ～～／／／／」
勇儀と萃香は、二人で焼酎を飲みあっていた。萃香はすでに酔っ払いになっていた。

新八「あんたら一体どんだけ飲んでるんだっ！！！」
新八が２人に怒鳴る。２人の後ろには、１００本の酒瓶が散らかっていた。

そのあとも、勇儀と萃香はいろいろ手伝いしたり、ドジって何か壊したり、銀時達に無理やり酒飲ましたりとハチャメチャな感じになっていました。

そんなある日、

金髪の女性「ハ～イ。勇儀と萃香はいる？」
銀時「うおっ！？」
なのは「え！？」
ネプテューヌ「？」
金髪で紫の服を着た女性が六課にやって来た。ただ、その女性の後ろにはスキマのような穴があり、中は複数の目玉がギョロッとこちらを向いていた。

勇儀「お？紫じゃないか」
萃香「数日ぶりだね～」
勇儀と萃香は女性・八雲紫と知り合いらしく、いつも通り的な挨拶をする。

ネプテューヌ「勇儀さん、誰なのあの人」
ネプテューヌは紫を指差して言う。

勇儀「八雲紫、妖怪の大賢者って呼ばれてるんだってさ」
全員「妖怪ぃ！！？」
勇儀は紫のことを説明し、全員（ネプテューヌ除く）が驚く。

ネプテューヌ「ふ～ん。要するに偉いおばｓ「ヒュンッ！」」
ネプテューヌが何かを言い来る前に、スキマの穴に落ちた。

新八「あああああああああ！！！ネプテューヌちゃぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」
紫「あらごめん遊ばせ。イラッと来ちゃってつい落としちゃったわ♪」

新八「ついで済む問題かァァァァァァァ！！！」
悪気ありの顔で笑う紫に、新八は青筋立てて怒鳴る。

萃香「ところでネプテューヌはどうしてるんだ？」
紫「今頃私のスキマの中でさまよってるんじゃない？」
全員「なお最悪だァァァァァァァ！！！」
萃香がネプテューヌのことを聞くと、紫の一言に全員がシャウトした。

すると、
紫「ん？」
紫の前に空間がゆがみ、
ネプテューヌ「ウオリャアアアアアアアアアア！！！！」

バキィィィィィン！！！

紫「ゴフェッ！！」
全員「エエエエエエエエエエエエエ！！！？」
そこからネプテューヌが空間を突き破って、紫ごと殴り飛ばした。
勇儀や萃香でさえも驚愕した。

ネプテューヌ「ハァ～、疲れた」
紫「…あなた…どうしてあの空間の中を？」
紫は顔を押さえて、ネプテューヌに聞くと、ネプテューヌは意外なことを口にした。

ネプテューヌ「無理やり突き破った」
紫「・・・・・・・・・・・・・・はいぃ？」
紫はネプテューヌの答えについていけなかった。

紫「・・・・・ま、いいわ。あなたはちょっと非常識な子って言うことにしとくわ」
銀時「ちょっとというより実はかなり「ドガッ!!」ボゲアッ!!!」
紫がつぶやき、銀時は何か補足しようとしたら、ネプテューヌから消火器をぶつけられた。

ネプテューヌ「ところで勇儀さん、萃香ちゃん、帰っちゃうの?」
ネプテューヌは、勇儀と萃香を見ていいだす。

勇儀「ん?ああ、まあな。けどそんなに落ち込むな、またいつか会えるさ」
ネプテューヌ「ホント?」
萃香「本当だよ~////////」
勇儀と萃香は答える。…てか萃香!またあんたは酔っ払っているのか!

ネプテューヌ「そっか。勇儀さん萃香ちゃん、いろいろと楽しかったよ」
ヴィヴィオ「また遊びに来てほし~な~」
ネプテューヌとヴィヴィオは言う。

はやて「その前にあんたらにはこれを済まさなあかんな」
はやてがそう言って取り出したのは、お酒の請求書だった。

勇儀・萃香「それじゃさよなら~~~~!」
はやて「あ!、こら!」
紫「うふふ・・・それじゃ」
勇儀と萃香は、冷や汗流して逃げるようにスキマへ消えた。そして紫もスキマに消え、スキマは閉じた。

ネプテューヌ「・・・行っちゃった」

幻想郷・地獄

帰った勇儀と萃香は、嬉しそうに酒を飲んでいた。

パルスィ「あら?勇儀。嬉しそうだけど何かあったの?」

勇儀の知り合いの嫉妬姫・パルスィが勇儀に聞いた。

勇儀「いんや。面白い奴にあってな、これが嬉しくなくなっていられるか」

パルスィ「…なにがあったか知らないけどなんか妬ましいわ…」

そんな怪力鬼と嫉妬姫の会話だった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「節分の日にやりますよ～このコーナー。そしてアシスタントはこの二人」

勇儀「山の四天王・勇儀と」

萃香「同じく四天王の萃香がアシストするよ～」

銀八「んじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「ついに決着か？」

ルイージ「だね…と言うか新八君…不埒な；」

スネーク「それにしてもダークソウルで作られたモンスターが出て来たな…」

ネス「と言うかネプテューヌさんすごっ！！」

リュカ「うん…どんだけ～～；」

ある意味銀さんと同じだな～；

マリオ「それにしてもハーツとディブレイカーが多いな…」

まあ…ダブルオーとかは紹介の奴がまだＢＢＳの方だけにあるからね（苦笑）

マリオ「んじゃま質問、『前回のソニックの質問で答えたオリジナルライダー以外に2番目に変身したいライダーは何だ?』」

ルイージ「今回のコープス&スプラッターで出た人たちに質問『内の兄さんどう思う?』」

フォックス「真王に質問『今やってる編で出たメンバーは準レギュラーになるのか?』」

マリオ「そんな訳で銀時にネプテューヌとリック!頑張れよ!」』
そんじゃまず一つ目から」

全員が立ち上がる。

銀時「俺は剣を使える剣（ブレイド）だな」

新八「僕も銀さんと同じで」

神楽「私は電王のモモタロスがいいネ!」

桂「ミラーワールドへ行ける龍騎だな」

エリザベス『私はクウガです』

月詠「わっちはキバじゃの」

ネプテューヌ「私はディケイドがいいな」

ノワール「全部よ！！（欲張り）」

ブラン「・・・響鬼」

ベール「オーズがいいですわ」

コンパ「私はないです」

アイエフ「私もよ」

銀八「んじゃ2つ目」

リック、ジェニファー、如月学園組、ゴーストチルドレンが立ち上がる。

リック「…正直どうだろうな」

ヘルマスク『人間か？って思えるよな』

ジェニファー「よく分からないわ」

哲志「俺達が言うのもなんだけど」

如月学園組「あなたは人間じゃないです」

ゴーストチルドレン「…普通のおじさんだけど？」

真王「3つ目は彼らはレギュラーかどうかわかりませんが、リトル

バスターズよりも出番が少ないという感じです」

銀八「だそうだ。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

萃香「次はペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍「リリカル銀魂ライダーの作者の黒龍です。小説全話読ませてもらいました。面白かったです」

ソラ「つうか前回の話はスタンドが出すぎだろ」

銀時「まったくだな」

アリス「まったくあれは幽「違うスタンドだ!!」、まったく」

アリスは頑なに幽霊だと認めない銀時に呆れる。

アリス「それにしても、ブランは本当に面白いチビだなくくく（笑い）」

銀時「お前・・どうなっても知らねぇぞ」

ソラ「とりあえず質問いくぞ。俺から女神四人に質問だ。『黒龍の小説に出ているキャラで対戦してみたいキャラはいるか?』」

黒龍「俺は真王さんに質問です。『たくさんの作品キャラが登場していますけど、やっぱり捌くは大変ですか?』最後にリリカル勢と銀魂勢と女神勢に質問です。
『筋肉となのはを愛するマッチョ男ケン八になった真八を見て皆さんはどう思いますか?』」

銀時「そっちの俺、まぁ頑張れよ」』」

女神組が立ち上がる。

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール「銀さんかソラさんで」

銀八「あれ？他の奴らは？」

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール「あんなザコと戦う理由はない（よ）（わよ）（ですわ）」

きっぱりと言い捨てた４人。

真王「・・・２つ目は、そりゃ大変ですよ。沢山キャラをかいてたら、あれ？でてたっけ？みたいなことになりますから」

銀八「そうか。んじゃ３つ目は」

全員が立ち上がる。

全員「キモイ」

新八「皆さん揃ってひどくありません！？そりゃ確かにこれ僕ぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！？？って思いましたけど」

銀八「そんなもんだ。んじゃ『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

勇儀「これが最後か？ペンネーム『ｓｕｇｉｔａ』からだ。『ネプテューヌは最強ですね。

ガチバトルの場合、白夜叉銀さんとパープルハート、どっちが強い

ですか？』」

真王「互角くらいでしょうか？でもこの２人が手を組んでいたら最強だろうね」

勇儀「そうなのか？だったらあたしはあいつらと勝負してぇ！」

真王「骨は拾ってやるよ」

勇儀「あたし何されるの！？」

真王「それじゃ『ｓｕｇｉｔａ』さん。廊下に立ってなさい」

萃香「一度でいいからパープルハートと白夜叉の銀時と戦いたいよ！」

勇儀「そうだぜ！あたしも戦うぞ！」

真王「欠片は拾ってやるよ」

勇儀・萃香「あたしらどうなるの！？」

真王「それではさよなら～」

特別番外訓：鬼が出たら豆をまけ（後書き）

真王「いかがでしょうか？それでは本編に戻ります」

第二十五訓：体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束（前書き）

真王「ハァ・・・免許習得生活がしんどいな」

銀時「まぁ、頑張れ；」

直美「・・・『リリカル銀魂』始まります」

第二十五訓：体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束

持田哲志達を助けた銀時とネプテューヌとリック達。そこでウエストと出会い、銀時とネプテューヌとリック達は、ウエスト館の奥へと進んでいった。

ウエスト館・図書室

ガタガタガタガタッ　　ヒュウウウウウウウウ！

銀時「だ～！も、うっとおしい！！」

銀時は苛立って本と椅子を叩き落とす。

なぜ苛立って本と椅子をおとすと言うと、実は本と椅子は、ポルターガイストによって、動いているのだ。

ネプテューヌ「こんだけ邪魔されるとエイッ！、ホントイライラするよ、ねっ！」

ネプテューヌも、歩きながら本を叩き落とす。

コンパ「き、気をつけて進むです…キャッ！」

コンパは飛んできたナイフを本で防ぐ。ちなみにコンパの持っている本はただの本である。

新八「早いとこここを抜けないといけませんね…オプッ！」

新八は本に打撃を喰らった。

リック「出口までもうすぐだ」
そうして、リック達はポルターガイストの領域を抜けた。

ウエスト館・ボロボロの廊下

銀時「だ～～！！もうホントしつけぇよ！！」
ネプテューヌ「ああん！もう放してよ～！」
銀時達は掴みかかってくる手を払いのけて進んでいる。
しかもその手は、ウッデイと呼ばれる意思を持った手である。しかもこの場所はウッデイの巣である。

クイクイッ

ウッデイ達は中指を動かして挑発している。

銀時「新八、挑発に乗るな。冷静を保つんだ」
銀時はウッデイの挑発を無視して進む。

ベール「ああ／／／／そこを触ってはいけませんわ／／／／」
後ろからベールの嬌声が聞こえた。

銀時「あん？ベール何やって、っ！！！！？？？」
銀時と新八は後ろを見ると、すごい形相をした。そこにいるのは、

ウッデイによって揉みくちゃにされているベールだった。

ベール「そ、その中に入っては／／／／」
ウッデイはベールに胸の中に入ったり、ウッデイはベールのパンツをめくｒ「ラァァァァァァァ！！！」
・・・・・・る前に銀時達はベールに張り付いたウッデイをはたき落とした。

銀時「脱出じゃ～～～！！」
銀時達はダッシュでこの場から離脱した。

ウエスト館・廊下

銀時達はウッデイの巣から脱出し、今は体を休んでいる。
銀時「あ～。疲れたぜ」
ネプテューヌ「全く！あれで私達を苛立たせようだなんてウエストは許せないね！」
ネプテューヌはぷりぷりと怒る。

リック「今は休もう。そしてウエストをおうぞ」
リックの一言に、全員は休憩した。

１０分後・・・

リック「…よし。みんな行くぞ」
リックの一言に全員立ち上がり、次の場所へ向かおうとしたら、

銀時「えぇ～。もう少し休ませてくれよぉ～。俺眠いんだから」
銀時は動こうとせず、その場で眠りに入った。

ネプテューヌ「・・・・・・サチコちゃ「おし!!みんな早く行こうかっ!!」」
ネプテューヌがサチコを呼ぼうとしたら、銀時は冷や汗流して素早く立ち上がって先へ進んだ。

ネプテューヌ（分かりやす…）
ネプテューヌは表情を隠して笑った。

銀時「・・・・・・・・・・・・（汗）」
銀時は顔を青くして進んでいる。なぜかと言うと、銀時の周りにサチコ、遼、時子、雪がいるからだ。

コンパ「ところで銀さん。何でサチコちゃん達をいやがるんですか？」
コンパが銀時にこんなことを言い出した。

銀時「嫌がる?何言ってんの?銀さんがスタンド共と「ギロッ」イ

ヤ、ナンデモナイ」
銀時がスタンドと言ったらサチコ達が睨み、銀時は片言になった。

ネプテューヌ「…そういえばベールの漫画であるスタンドがいた気がするけど」
銀時「え？どんなの？」
銀時が興味を示した。

ネプテューヌ「えと、確かスター……何だっけ？」
銀時「そりゃスタープラチナだろ」
銀時がスタープラチナという。

ネプテューヌ「そうそう。頭が三角形でブラジャーつけたスターブラチラ」
銀時「スターブラチラって何！？それブラジャーつけた只の変態じゃねぇか―！！！」
ネプテューヌの全然違う答えに、銀時は怒鳴り、周りは苦笑いする。

桂「ん？銀時、何か来たぞ」
銀時「あん？」
桂は奥から足音が聞こえ、銀時達を呼ぶ。奥から来たのは、デッドマン……のようだが、なぜかほとんどのデッドマンが筋肉質である。

リック「なんだあいつらは？」
ヘルマスク『ありゃデッドマンなんだが、何か別の力を感じるぞ』
ネプテューヌ「別の力？だったらＥＳで調べよう」
ヘルマスクが別の力があると言い、ネプテューヌがＥＳで筋肉質のデッドマンを調べた。

『メガデッドマン』

『ダークソウルから力を与えられたデッドマン』
『主に格闘技を使う』

ネプテューヌ「…もう三回目だよダークソウルが出るのは」
ネプテューヌはウンザリそうに愚痴をこぼす。

リック「その愚痴をこぼすのはこの状況を突破してから言えよな！」
リック達は行動を開始した。

ＩＢＧＭステージ１ｂｙスプラッターハウス３
（Ｓｐｌａｔｔｅｒｈｏｕｓｅ　３　Ｍｕｓｉｃ　－　Ｓｔａｇｅ　１）

リック「オラッ！」
リックはメガデッドマンを殴り飛ばす。

メガデッドマン「ゴォォォォ！！」
メガデッドマンは負けじと立ち上がって、リックに攻撃するが、避けられる。

リック「おらよ！」

ドゴッ！

メガデッドマン「ゴォォォォプシュゥッ！」
メガデッドマンは倒れ、緑の血だまりになった。

銀時「テェェェヤァァァァ！！」
銀時は木刀でメガデッドマンをなぎ倒した。

メガデッドマン「ゴォォォォプシュゥッ！」
なぎタオ押されたメガデッドマンは、緑の血だまりになった。

銀時「つーかこれファイナルファイトじゃね？」
新八「言ってる場合ですか銀さん！」
銀時のつぶやきに、新八が突っ込む。

近藤「奥に扉があるぞ！」
ノワール「みんな！早く行くわよ！」
奥の扉へ向かって、銀時達は走り出した。

銀時「あのさぁ。奥に行けたのはいいけどさぁ」
銀時は深呼吸して、言い放つ。

銀時「スッゲー囲まれてるんですけどォォォォォォォォォォォォ！！！」
銀時達の周りには数多くのデッドマンデッドマンデッドマン…もはやデッドマンの大群だった。

リック「…さすがの俺でもこれはこたえるぞ・・・」
ヘルマスク『こりゃ１０００体はいそうだな』
リックはデッドマンの大群を警戒する。

ヴィヴィオ「あ！、あれ！」
ヴィヴィオは何かを指差した。その先には黒いひし形の…

全員「ダークソウルっ！？」
そう、ダークソウルが、グルグル回って浮いていた。

？？？「美しいものだろう？ダークソウルは」
リック「この声は！ウエスト！」
上から老人・・・ウエストの声が聞こえた。ダークソウルはウエストの周りをまわっている。

ウエスト「ダークソウル…私を復活させたもの…実にすばらしいものだな」
ダークソウルを手に載せて、クックックと笑う。リック達は怒りが込みあがってくる。

ウエスト「お前達に見せてやろう。ダークソウルのさらなる力を！！」
ウエストが言うと、ダークソウルの輝きが増した。

リック「くっ、なんだ？」
ネプテューヌ「うわー、目がー！、目がー！」
銀時「チッ、これじゃ見えねぇぜ」
ダークソウルが輝きだして、銀時達は手で覆う。

すると、ダークソウルを中心にブラックホールのようなものが現れ、吸い込み始めた。
ネプテューヌ・ヴィヴィオ・コンパ・由香「きゃあああああああああ！！！！」
土方・近藤・哲志・良樹「うおおおおおおおおおおおお！！！」
銀時「吸い込む量半端ねぇ～～～！！一家に一台ほしいくらいだ！！」
銀時達は、地面でこらえている。

対して、周りのデッドマンはブラックホールに吸い込まれていく。
デッドマンが全員吸い込まれたら、吸い込みがなくなった。

ヘルマスク『オイオイやばいぞ。なんかすげーのが出そうだぜ？』
ヘルマスクがダークソウルを見て言う。

ウエスト「さぁ！ダークソウルよ！お前の力を奴らに見せつけるのだ！！」
ウエストが叫び、ダークソウルの下から魔方陣が展開された。その魔方陣から大きな右手が現れ、さらに左手と来て、ついに体が出た。
それは、全長３メートルはあるデッドマンだった。

ヘルマスク『うわｗでけぇ！ものすっげぇデケぇ！』
ヘルマスクは大きなデッドマンに驚く。

ノワール「ネプテューヌ！」
ネプテューヌ「やってるよ！」
ノワールがネプテューヌを呼び、ネプテューヌはＥＳで大きなデッドマンを調べた。

『ギガデッドマン』
『沢山のデッドマンを融合させた大きなデッドマン。凶暴故、注意が必要』
『頭が弱点』

ウエスト「では貴様らはそのおもちゃと遊んでいるがいい」
リック「待て！ウエスト！」
リックは呼ぶが、奥へと消えてしまった。

ＩＢＧＭボスｂｙスプラッターハウス３
（Ｓｐｌａｔｔｅｒｈｏｕｓｅ　３　Ｍｕｓｉｃ　－　Ｃａｎｎｉｂａｌ　Ｂｏｓｓ　Ｉｎｔｒｏ）

ギガデッドマン「ギガァァァァァ！！！」
リック「うおっ！」
ギガデッドマンが右腕を振りおろしてリックを攻撃する。リックはギリギリかわす。

ギガデッドマン「グオオオオオオオオオオ！！！」
両腕を振り回して、暴れまわっている。

銀時「あんにゃろ！我武者羅に暴れやがって！」
新八「でもあれじゃ近づけませんよ！」
ネプテューヌ「でもさ～、ああいうやつに限って実は馬鹿なんじゃないの？」
銀時・新八「お前が言うな！！」
ネプテューヌの一言に怒鳴る。

ヘルマスク『漫才やってるとこ悪いが、ヤベェの来るぞっ！！』
ヘルマスクが突然叫ぶ。ギガデッドマンを見ると、巨体とは全然似合わないスピードで突進してきた。ショルダーチェッキングのように。

リック・銀時・土方・近藤・桂「ぐわっ！」
ネプテューヌ・新八「うわっ！」
コンパ・アイエフ・ノワール「きゃっ！」
ギガデッドマンの突進に、銀時達は吹き飛ばされた。

ネプテューヌ「いたた…！？サチコちゃん危ない！！」

ネプテューヌが叫ぶ。ギガデッドマンの進行方向先にサチコがいた。

サチコ「!?」

ギガデッドマン「ウオオオオオオオオオ!!!」

桂「まずいっ!?間に合わん!」

銀時「逃げろおおおおおおおお!!!」

銀時が叫ぶが間に合わず、サチコはギガデッドマンにはねられ・・・

スカッ、ドゴッ!

・・・なかった。ギガデッドマンはサチコをすり抜けて壁に激突した。

全員「・・・・・・・・・・・・はい?」

銀時達は茫然とした。

ギガデッドマン「グゥゥゥゥゥゥ・・・・・・」

壁に衝突したギガデッドマンは、頭を押さえている。

ネプテューヌ「今だかかれ~い!」

全員「オラオラオラ~!!」

ネプテューヌの号令に、銀時、桂、神楽、エリザベス、ヴィヴィオ、ブラン、土方、沖田、近藤がギガデッドマンを袋叩きにする。

新八「おいいいいいいいいいい!!!なに滅茶苦茶卑怯なことやってんだ~~~~!!!」

山崎「そりゃボスだから強敵かもしれないけどそれはないでしょォォォォォォォォ!!!」

新八と山崎が突っ込む。

銀時「バカヤロー新八。ボスはさっさと倒す方がいいんだよ。手間省けるし」
新八「結局それかいィィィィ！！！」
銀時の答えに、新八は怒鳴る。

ギガデッドマン「ウガァァァァァァ！！」
すると、ギガデッドマンが起き上がった。

桂「なかなかしぶとい奴だ」
銀時「おいサチコ！もう一回囮になってくれ」
サチコ「銀時が私達と付き合ってくれるなら」
銀時「ガンダーラの如くお断りじゃァァァァァァァァァ！！！（汗）」
桂が愚痴り、銀時がサチコに囮になるよう言うが、サチコの条件に銀時は冷や汗流して断固否定した。

ネプテューヌ「だったら私がなるよ！」
銀時「っおい！」
アイエフ「ちょっ、ネプ子！」
ネプテューヌが囮になると言い出し、銀時とアイエフが止めようとするが、もう行ってしまった。

ネプテューヌ「そこのデカ物！こっち向けぇ！！」
ギガデッドマン「グゥ？」
ネプテューヌが叫び、ギガデッドマンは振り向く。

ネプテューヌ「・・・・・・ベェ～」
ギガデッドマンに向かってあっかんべをした。

新八「オィィィィィィィィ！！！そんな下らないことするんじゃ

ねェェェェェェ！！」
新八は額に青筋立てて怒鳴る。

ギガデッドマン「グヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ」
ギガデッドマンがネプテューヌを殺意混ざりで睨んでいる。

ネプテューヌ「・・・かかってきなさい、木偶の坊！」
ギガデッドマン「（ブチィッ！！）グガアアアアアアアア！！！！」
ギガデッドマンがブチ切れて、ネプテューヌに突進してきた。

銀時「よけろネプテューヌ！！」
ネプテューヌ「・・・・・・・・・」
ギガデッドマン「グルガアアアアアア！！！」
ギガデッドマンが、ネプテューヌに接触しかかった時、

ネプテューヌ「ハッ！」
ネプテューヌがギリギリで避けた。ギガデッドマンは勢いに乗りすぎて止まることができず、

ドゴンッ！！

ギガデッドマン「ゴボッ！？」
壁に激突した。

ギガデッドマン「グゥゥゥゥゥゥ・・・・・・」
ギガデッドマンは頭を抑えている。

ネプテューヌ「ハアアアアアアアアアア、ッセイ！！！」

ズドッ！！

ギガデッドマン「グヴゥッ！！」
ネプテューヌが高くジャンプし、ギガデッドマンの頭を殴り潰した。
ギガデッドマンは跪いた。

銀時「お前やるじゃねぇか！」
ネプテューヌ「まだ油断しちゃダメ！」
ヘルマスク『その通り、こいつはまだ動けるぜ』
ギガデッドマンはグググ、と体を起こそうとしている。

由香「ど、どうすればいいの？」
サチコ「・・・・・・・・・」
サチコがリックに近づく。するとヘルマスクが何かに気づく。

ヘルマスク『おい、リックとゴースト共』
哲志「誰がゴーストだ…って俺達か」
直美「一体何？」
直美達がヘルマスクに聞く。

ヘルマスク『俺が今思いついた賭けがあるんだが…乗るか？』
哲志「賭け？」
良樹「なんだそれは？」
哲志と良樹が聞くと、意外な答えだった。

ヘルマスク『全員揃って俺らに力をくれないか？』
哲志達「・・・はい？」
リック「なんだそのいきなり過ぎる展開は？」
リックは呆れる。

ヘルマスク『まぁ話は最後まで聞け。お前らは俺の中に入ればリッ

クをパワーアップすることができると確信できたんだ』
直美「な、何でそこまで確信できるの？」
直美は聞く。

ヘルマスク『赤服の譲ちゃんが近づいた時に何かピンと来たのさ』
リック「…よく分からんが、やらないよりはマシだろう」
ヘルマスク『そう言うこった。早くしてくれよ、あいつが暴れまわる前に』
哲志達「・・・・・・・・・」
哲志達は向き合う。

哲志「リックさん達のためにも、みんなで力を合わせよう！」
直美達「うん！（おう！）」
ヘルマスク『よくいった！そんじゃ入れい！』
哲志達はヘルマスクの中に入っていった。

リック「くあっ！、こ、これはなんて力だ」
ヘルマスク『すげーぜ！俺の考えに狂いはなかったぜ！！これならいけるぞ！』
リックは体に変化を感じ取る。

リック「ウ、グッ！、・・・ウオオオオオオアアアアアアアアア！！！」
リックが叫んだら体中に大量に血が噴出した。
それと同時に両腕から骨が出てクローのようになり、背中からとげとげした骨が出てきた。そして体はギガデッドマンほどではないが、大きくなっている。

リック「ハァ…ハァ…こ、これは？」
ヘルマスク『ヒュ～～！なんていかした姿なんだ！』

リックは自分の姿に驚き、ヘルマスクはすごく喜んでいる。

哲志『リックさん！』

リック「！その声は！」

頭に哲史の声が聞こえ、リックは驚く。

哲志『ハイ！どうやら僕達はリックさんと会話できるみたいですよ！』

直美『なんでもいいけど早くやっつけちゃいなさい！』

ギガデッドマン「グアアアアアアアア！！！」

哲志と直美と会話してたら、ギガデッドマンがリックに襲いかかって来た。

パシッ！

ギガデッドマン「ガァッ！？」

何とリックはギガデッドマンの攻撃を止めた。それも片手で。

ズバンッ！！

ギガデッドマン「グギャアアアアアア！！？」

リックは腕の爪みたいなものを伸ばし、ギガデッドマンの右腕を切り落とした。

リック「スッゲェ…なんて力なんだこれは」

ヘルマスク『ＨｅｙＨｅｙ！すっごいもんだろこれ！』

リックは自分の力に驚いている。

ギガデッドマン「ギガアアアアアア！！！」

ギガデッドマンは力任せに片方の腕を振り下ろそうとしている。

リック「お前はもうおしまいだ。消え失せろっ！！」
リックはギガデッドマンに飛び込んで、両腕でギガデッドマンをみじん切りにした。みじん切りにされたギガデッドマンは、そのまま血だまりへと変わった。

ヘルマスク『終わった終わった。出してやるぞ』
ヘルマスクがそう言うと、哲志達が出てきた。

哲志「なんとかなりましたね」
直美「私はなんかいやだけど」
世以子「まぁまぁ直美は素直に慣れないツンデｒ「なに世以子？」
いえ、なんでもありません」
哲志達は何ともなかったようだ。

銀時「よかったなあいつら」
桂「うむ、その通りだ」
サチコ「銀時～」
銀時「近寄るな～～～！！」
銀時はサチコから逃げだした。

？？？「…チョウシ・・・ノリ・・・テ」
全員「っ！？」
上から声が聞こえ、上を向くと、ウエストと一緒にいたはずのダークソウルがあった。

ダークソウル「…キサマラ・・・ユル・・・ヌ・・・キサ・・・ラハ・・・シヌ」
銀時「あん？途切れ途切れで聞こえねぇよっ！」
銀時は怒鳴る。

ダークソウル「…キサマラ・・・シネ・・・キサマラハココデシネ！」

ダークソウルが叫ぶと、前に魔方陣が現れ、そこから心臓みたいなのが現れた。

ネプテューヌ「な、何あれ？」

コンパ「気持ち悪いです…」

ほとんどの女性陣は見て嫌がる。

リック「…おい…待て、このパターンはもしや；」

ヘルマスク『十中八九そうだな；』

ジェニファー「いやな予感がするわ；」

リックとヘルマスクとジェニファーは冷や汗を流している。

ダークソウル「…シヌガイイ」

バァァァン！！！ブシャァァン！！

突如上から黒い雷が心臓みたいなのをにあたり、それが破裂した。

そして、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

部屋全体に地響きが出た。

リック「ウオッ！やりやがったな」

ネプテューヌ「うわわわわっ！」

コンパ「地震です！早く机の下に隠れるです！」

新八「いやコンパさん！ここに机はないですよ！」

銀時「オイオイなんかヤベェんじゃねぇの！？」
突然の地震にパニックになる銀時達。

ダークソウル「インネン・・・ソトニイル、インネン・・・キサマラマッテイル」
ダークソウルは消えた。

リック「不味い！お前ら！早くここから脱出するぞ！」
銀時「言われるまでもねーよ！」
銀時達は、ウエスト館から脱出することにした。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「おし！今からアシスタントを紹介する」

哲志「あ、はい。哲志です」

直美「あたしは直美よ」

銀八「と言うわけで、このヘタレとツンデレがアシストしま～す」

哲志「ちょっ、誰がヘタレですか！」

直美「誰がツンデレですか！」

銀八「わーたよ！ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『今回は今日が節分だからそれににちなんだ番外編だったな～

マリオ「それで東方の鬼２人が出たな～後紫」

ルイージ「と言うか…今回のネプテューヌちゃんがチートって思ったんだけど；」

スネーク「確かに、落ちたらほぼ１００％自力では出れないからな…」

マリオ「ちなみに俺はただの冒険好きな配管工の人間だぞ～」

フォックス「（まあ、普通じゃないと言うのが付くけどな…）」

ソニック「Ｈｅｙ！メンバーに質問だ『俺に称号を付けるならどんな奴になるんだ？』」

スネーク「リリカルなのはメンバー以外に質問『もしデバイスが手に入るならどんなデバイスが良いんだ？ちなみに種類も言ってくれ』

」

フォックス「真王に質問『コープス&スプラッターが終わった後はどんな作品のキャラが出るんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます！

ネス「銀さん、今回悲惨だな…」

リュカ「うん；」『…ある意味ネプテューヌはすげぇよな；」

哲志・直美「うん；」

銀八「ま、それはともかく一つ目はこれだ」

紙に、『スマブラの青き閃光』『青ハリネズミ』『マッハスピーダー』『スピード狂？』『アホなカナヅチ』と書かれている。

銀八「次は2つ目だ」

銀時「俺は刀型だ」

新八「僕もです」

神楽「ナックル型ネ！」

桂「刀型デバイスだ」

エリザベス『私も』

月詠「わっちはクナイのデバイスじゃ」

ネプテューヌ「剣型デバイスがいい！」

ノワール「ショーソード型はあるかしら？」

ブラン「…ハンマー型だ」

ベール「私は槍型デバイスですわ」

コンパ「注射器です」

アイエフ「カタール型ね」

銀八「ハイ、次は３つ目」

真王「ネタばらしするつもりはありませんが、特別にお見せします」

紙に、『ワグナリア編』→『魔道機人編』→『不明（宇宙へ行くかも？）』と書かれている。

銀八「ハイ、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

哲志「えっと、次はペンネーム『黒龍』さんから。『銀時「たく、酷い目にあったぜ」

アリス「仕方ない。これ以上不毛な争いが起こらないために、こう言おう、痛かった」

黒龍「そんだけ！？」

アリス（フッ、黒龍からこっそりスターを奪っておいたからな）

銀時「それにしても、ソラの奴どうしたんだ？なんかスッキリした顔してんだけど？」

黒龍「さ、さぁ？（い、言えない！サチコとドッキングしてたんなんて！それが知れ渡れば、フェイト達は間違いなく、般若になる！）

ソラ（やべーよ。あんな事があってから、全然サチコの事が怖くない。どうすればいいんだ？）

黒龍「ま、まぁ、そんな事より、全員に質問です。こっちの小説でかなりのキャラ崩壊をしたフェイトをどう思いますか？次に、皆さんはソラの事をどう思いますか？
そして、ネプテューヌ達は？？機関のゼロに勝てると思いますか？」

銀時「あ、それと、これ復讐とかそんなじゃなくて、純粋な気持ちで、フェイトの物体X贈っておくから」

銀時はカオス色のシチューを贈った。

黒龍「ちょっ！あんなの食べられるのって、ネプテューヌしかいないでしょ！！」

銀時「いいじゃん、別によ～」『…何これ？」

直美「見、見ちゃだめよ哲志！」

銀八「あのガキ一体何しやがったんだ！？ってか物体Xってあの激

マズのアレか！？」

哲志「先生、それは作った本人に失礼です」

銀八「わりぃ。物体Xはネプテューヌが何の躊躇いなく美味しそうに食べました」

哲志・直美「食べたの！？」

銀八「そうだ。んじゃ1つ目」

全員が立ち上がる。

なのは・フェイト「これ私いいいイイイイイイイイイイ！！！！？？？」

それ以外「ご愁傷様です；」

銀八「・・・次2つ目」

全員「仲良くなれそうです」

ネプテューヌ「かっこいいお兄さんかな？」

サチコ「ソラ…キャッ？／／／／」

銀八「・・・何かヤベェ；」

哲志・直美「ハイ…；」

銀八「…3つ目」

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール「楽勝で勝てる（ますわ）」

銀八「即答かよ!!『黒龍』さん。一応廊下に立ってなさい」

第二十五訓：体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束（後書き）

真王「次回はウエストとの決着がつくぞ！」

哲志「次回『ラスボスは最終的に凶暴な姿になる』テイクオフ！」

第二十六訓：ラスボスは最終的に凶暴な姿になる（前書き）

真王「今日で『コープス＆スプラッター編』が終了いたします」

銀時「やっとあんなとこから出れるぜ」

真王「それではスタート」

第二十六訓：ラスボスは最終的に凶暴な姿になる

ダークソウルが心臓みたいなものを壊したら、ウエスト館が崩れ始め、銀時達がウエスト館から脱出していた。

そしてウエスト館から出た。しかし山火事が発生していた。

銀時「今度は火事かよ！？」
リック「言ってる場合か！船まで走るぞ！」
銀時達は船まで走った。

ゴロゴロゴロ！

燃えている丸太が転がり込んできた。
リック「そいつはジャンプでかわせ！」
銀時達はジャンプでかわす。

ネプテューヌ「あ、あれ！」
？？？「ワ〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」
ネプテューヌが何かに指をさす。悲鳴の混ざった声をあげてピョンぴょん飛び跳ねている奴がいた。

銀時「おい、あれデッドマンか？」
桂「そのようだが…」
コンパ「なんか可哀想です…」
銀時達は燃えているデッドマンを見て言い、船まで急いだ。

海岸付近

やっと船のとこまでついた銀時達。ところが、
ウエストがたちはだかった。その上にダークソウルがグルグル浮いている。

ウエスト「待ってたぞ」

リック「ウエストォ…」
リックは殺気を放って言う。

ウエスト「貴様らのおかげで私の研究が台無しになってしまう！もはや一刻も猶予もない！この私が成敗してくれる！」
リック「そりゃ好都合だ。お前を殺して俺達は解放される！」
リックはウエストを指差して言い放つ。

ウエスト「ならば貴様らに教えてやる！ダークソウルよ！貴様の力をすべて私に与えるのだ！！」
ウエストがダークソウルに叫ぶと、ダークソウルは黒い靄のようなものを出して、ウエストを包み込んだ。

ウエスト「う、おお！！…力が湧いてくる！これだ！この力だ！！！」
ウエストが叫ぶと、紫の雷がウエストに当たる。晴れるとそこにいるのは、白い肌に、右手に大きな爪をもった怪物がいた。

銀時「え？ちょっと待てぇぇぇぇぇぇい！！それまんまタイラントじゃん！！」

銀時が突っ込む。

ウエスト「ハッハッハッハ…素晴ラシイ姿ダロウリック！コレゾ私ノ新シイ姿！コレデ私ハ最強ニナッタノダ！！」

タイラント姿になったウエストは高々と言い放つ。

リック「…あいにくテメェの変わった姿見るためにここに来たわけじゃないぞ」

ウエスト「ナニィ？」

ウエストはリックの言葉に顔をゆがませる。

リック「俺はなぁ、お前とのけりをつけるために、ここでくたばってもらうぞ！」

リックは覚醒モードになり、ウエストに向かう。ちなみに哲志達はヘルマスクの中に入っている。

ウエスト「イイダロウ！望ミ通リニキサマヲ葬ッテクレル！！」

ＢＧＭ：大王星の決戦ｂｙスーパーマリオギャラクシー（Ｓｕｐｅｒ Ｍａｒｉｏ Ｇａｌａｘｙ Ｍｕｓｉｃ Ｅｘｔｅｎｄｅｄ － Ｂｏｓｓ － Ｆｉｎａｌ Ｂｏｗｓｅｒ Ｂａｔｔｌｅ）

ウエスト「喰ラウガイイ！」

ウエストは爪でリックに攻撃する。

リック「爪なら爪で返すぜ！」

リックはかわし、ウエストを爪で切った。

ウエスト「グア゛ッ！キサマァ！」

ウエストは負けじとまた爪で攻撃する。

リック「・・・・・・・・・」
リックは難なく爪を使ってウエストの攻撃を防ぐ。

ウエスト「ナゼダリック。私ハダークソウルノ力ヲ身ニ付ケ、オマエヨリモ遥カニパワーガ上ナノニナゼ私ガ押サレルンダ！！」
ウエストはリックに問う。

リック「簡単だ。テメェの軟弱な体でダークソウルを全て制御できねぇし、何よりある物がないからな」
ウエスト「ナ、ナンダトッ！！一体ナンナノダソレハッ！」
リックはウエストに答えを教えた。

リック「それはな、何も心もない強化なんてこれっぽっちもへでもねぇよっ！！」

ゴスッ！！

ウエスト「グハッ！！」

リックはウエストを殴り潰す。

リック「ヘルマスク！！」
ヘルマスク『派手にぶっ潰すぜぇ～～～い！！！』
リック「うおおおおおおおお！！！」
リックの両腕に力が集中する。

リック「ウエストォォォォォォ！！！」
ウエスト「ガハッ！！」

ウエストが殴り飛ばされる。

リック「まずこの拳は銀時達を巻き込ませた分！」
ウエスト「グボッ！！」
リック「こいつはジェニファーの分！」
ウエスト「ガバッ！！」
リック「続いてこいつは殺したデイビットの分！」
ウエスト「ギャヴッ！！」
リック「そしてこの右手の拳は、みんなの思いが詰まった拳だァァァァァァァ！！！！！」

ズダァァァァァァァァァァン！！！

ウエスト「ギャァァァァァァァァァァ！！！！！」
リックはウエストに最後の一撃を与えた。一撃を受けたウエストは、ピクリとも動いてない。

リック「ハァ…ハァ…」
リックは息切れしているが、ウエストの様子を眺めている。

銀時「やったか？」
桂「いや分からん」
銀時達も様子を眺めている。

ウエスト「・・・・・・・・・ヴ・・・ヴヴ・・・」
ウエストはしぶとく生きてた。

リック「・・・しつこいやつだな」
ウエスト「ウゥゥゥ・・・ダ、ダークソウルヨ・・・ワ、私ニモット力ヲ」

ウエストは這いずりながら抱くソウルに近づく。

ダークソウル「・・・・・ラナイ」
ウエスト「エ？」
ダークソウル「オマエ、モウイラナイ」
ダークソウルはウエストに近づいて、ウエストを吸い込み始めた。

ウエスト「グワァァァァァ！！ナ、ナゼ！」
ダークソウル「オマエ弱イ、弱イノイラナイ、イラナイモノ食ベル」
それだけの理由でダークソウルはウエストを吸い込み続けている。

ウエスト「ヤ、ヤメロ！私ニハマデヤルベキコトガ！！」
ダークソウル「ヨワイ、イラナイ、ヨワイ、イラナイ、オマエノヨウナ“クズ”ハエサニナレ」
ウエスト「ヤメロッ！ヤメロォォォォォォォオオオオオオオオオ！！！！！」
ウエストの叫びも虚しく、ダークソウルに喰われた。

リック「・・・哀れな末路だなウエスト。自分が使ってたものに餌にされるなんてさ」
ジェニファー「リック・・・」
リックは喰われたウエストに言い、ジェニファーはリックに寄る。

ネプテューヌ「そんなことより！早くダークソウルを捕まえるよ！エイッ！」
ネプテューヌはダークソウルを捕まえようとするが、上に逃げられる。

ダークソウル「バカナオマエラ、ツカマエラレナイ。オマエラゴトキ、ツカマエラレナイ」

銀時・土方「んだと！」
銀時と土方が切れる。

ダークソウル「オマエラゴトキ、カナワナイ。オマエラゴトキ、“シンノワレ”ニハカナワナイ」
ダークソウルはそう言って、消えた。

銀時「・・・何だったんだあいつは」
銀時が愚痴る。

桂（『真の我にはかなわない』・・・あれは一体どういう意味なんだ？）
桂はダークソウルのセリフに引っ掛かっていた。

リック「・・・終わったな」
リックは周りを見て言う。

リック「あんた達のおかげでウエストの企みを阻止できた。礼を言う」
ジェニファー「ありがとうございました」
リックとジェニファーがお礼を言う。

新八「いやいやいや、リックさん、ジェニファーさん頭下げなくていいですよ」
銀時「俺達はお前らの手伝いをしただけだ」
リック「それでも礼は言わなきゃいけないからな」
？？？「父さんの言うとおりだよ」
何処からか男の子の声が聞こえた。

リック「その声はデイビット！？何処にいるんだ！？」

デイビット「ここにいるよ」
リックはデイビットの声が聞こえるところへ目を向けた。デイビットは銀時の隣にいた。

銀時「ギャァフゥワァァァァァァァ！！！！」
銀時は驚いて5メートル離れた。
ネプテューヌ、ブラン、サチコ、遼、時子、雪、由香は銀時を見て笑っている。

リック「デイビット・・・お前…」
デイビット「ごめんね父さん。こんな姿で」
リック「いや、その姿でもお前に会えてよかったぞ！」
ジェニファー「会いたかったわデイビット」
リックとジェニファーは、涙を流してデイビットに抱きつく。

ネプテューヌ「うぅ・・・・・・泣けるねぇ～・・・」
コンパ「これが家族愛です。・・・グスッ」
ネプテューヌ達はリック達を見て感動し、涙を流している。

沖田「あ～…局長、俺思い出したことがあるんでさぁ」
近藤「何だ総悟、言ってみろ」
沖田「そろそろここでないとまずいと思うんでさぁ」
全員「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
沖田の一言に全員が固まった。そして、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

島が揺れ始めた。

リック「やべっ！みんな早く船に乗れっ！」

新八「島がどんどん沈み始めてますよ！」
コンパ「また船酔いですか？」
ノワール「我慢してね」
哲志「早く行くぞ直美！」
直美「うん！」
由香「由香も！」
サチコ「銀時～！」
銀時「オメェ～は肩に乗っかるなァァァァァァァァ！！！」
銀時達は沈む島から脱出した。

島から離れ、銀時達は今港にいる。ちなみに今は夜なので人はいない。
哲志達はリックと一緒に行くことになった。

銀時「さ～て、やることやったし、そろそろけ～るぞ～」
新八「そうですね。それじゃぁリックさん、ジェニファーさん、さよなら」
ネプテューヌ「サチコちゃんもまたね～」
リック「そちらこそな」
哲志「それではまた」
サチコ「じゃ～ね～」
銀時達とリック達は自分達の居場所へ帰っていった。

コンパ「あ！、リックさ～ん！！ヘルマスクさんはどうするんですか～！？」
全員「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ゛っ」

ヘルマスク『やっと思い出してくれたのかよ畜生…』
・・・そんなこんなで全員帰りました。

数日後・・・

ミッドチルダ・機動六課

銀時「だからよぉ、いつも言ってるだろ。俺たちひどい目にあったんだって」
なのは「嘘だよ！私達に内緒でいっぱい食べてたでしょ！」
フェイト「銀時達だけずるいよ！私達もいきたかったのに」
銀時は2人に分けを説明しているにもかかわらず、2人は信じてなかった。

はやて「なんや騒いどるななのはちゃん達」
桂「大方我々が嬉しそうに食べてたと想像してたのだろう」
ベール「世も末ですわ」
別の場所で桂、はやて、ベールが銀時達を眺めている。すると、

ネプテューヌ「銀さーん。連れて来たよ～」
ネプテューヌがドアから出てきて言った。その後ろにリックとジェニファーが来た。

なのは「あれ？あなた達は？」

リック「どうも。リック・テイラーです」
ヘルマスク『リックのかぶってるマスクは俺、ヘルマスクだ』
ジェニファー「私はジェニファーです」
なのは「あ、こちらこそ。私は」

少女達自己紹介中・・・

新八「だからこれはもういいって！！」
アイエフ「諦めなさい新八」
騒ぐ新八にアイエフが制する。

リック「そうだネプテューヌ。一応友達連れてきたぞ」
ネプテューヌ「え？本当？」
なのは「ネプちゃんに友達？誰だろ？」
なのは達はネプテューヌの友達に会うのを楽しみにした。しかし銀時だけは冷や汗をかいた。

銀時（オイオイオイオイ…友達ってまさか）
そして銀時の予想は的中した。

哲志「えっと・・・ここであってるよね」
直美「しっかりしなさいよ哲志」
世以子「いやいや、立派な建物ですね～」
良樹「…なんかすごいとこだなここ」
あゆみ「たしかに…」
繭「ネプテューヌちゃん3日ぶり～♪」
サチコ「銀時～♪」
遼「遊びに来たよ～」

時子「よ～」
雪「こんにちわ」
哲志達だった。なのは達六課組や、リトルバスターズ、戦線メンバーズは哲志達を見て顔を青く染め、そして、

全員「キィィィィィイヤアアアアアアアアアアアア！！！！！」

絶叫したのは言うまでもなかった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は、は～い元気かな～。きょ、今日はこのアシスタントで～す…」

サチコ「サチコです。みんなよろしく」

銀八「で、では始めようか、うん（ビクビク）。ペ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『投票リセットするんですか？

スネーク「唐突だな…」

ソニック「それにしても最後の称号酷くないか；」

ルイージ「まあ…カナヅチは合ってるしね…」

マリオ「むっ！？この物体ＺＸ…！なんて美味さなんだ！！」

フォックス「ってかそれ黒龍の方に送られてたの！！何時の間にこ

っちに来てて！しかも食べてるんだよ！！」

マリオ「さあ？けどマジ美味い！」

ネス「（汗）…それにしても…もしかして屋敷とダークソウルが合体するの！？」

ルイージ「展開的にありえそうだね…」

リュカ「と言うか喋れたんだね…」

フォックス「メンバーに質問『内のファルコはどう思う？』」

ルイージ「皆に質問『後ろにとてつもなく怖い物があったらどう言う反応する？』…ちなみに僕は全速力で逃げます；」

マリオ「ルイージも慣れて来たが流石に後ろにいたらな…；」

スネーク「メンバーに質問だが…『ポケモンでパートナーにしたいポケモンは何だ？』」

マリオ「そんな訳で銀時にネプテューヌにリックに皆！頑張れよ！！」

ルイージ「…今更だけど…キーワードに百合付けといた方が良いんじゃないかな；」

スネーク「ああ…短編集２であったあれでか…」

フォックス「そして俺の質問での奴で…とてつもない戦いが待って

そうだな…」』ではまず1つ目」

全員が立ち上がる。

全員「ご愁傷様です；」

銀八「それしかいえんな。2つ目は」

全員「全力で逃げる！！」

サチコ「なにが？」

銀八「いや、知らなくていいんだよ（ガタガタ）。次3つ目」

銀時「俺はテラキオンだな」

新八「僕はジャローダです」

神楽「私はゼブライカネ！」

桂「ドリュウズ殿だな」

エルザベス『タブンネですね！』

月詠「わっちはペンドラーじゃの」

ネプテューヌ「私はレシラムだよ！」

ノワール「ゼクロムね」

ブラン「・・・キュレム」

ベール「私はメロエッタですわ」

コンパ「ビリジオンです！」

アイエフ「私はケルディオね」

九兵衛「僕はハハコモリだ」

なのは「私はクリムガンなの♪」

フェイト「私はウォーグルかな」

はやて「うちはコジョンドや」

シグナム「私はナゲキとダゲキだ！」

ヴィータ「あたしはローブシンだ！」

シャマル「私はドレディアかしら？」

ザフィーラ「シンボラーだな」

スバル「私はバオッキーです！」

ティアナ「私はケンホロウね」

エリオ「僕はアーケオスです」

キャロ「私はゴルーグです！！」

ヴィヴィオ「クリムガンだよ」

恭介「俺はエンブオーだ」

鈴「あたしはレパルダスだ！」

理樹「僕はゾロアークかな？」

真人「俺はロープシンにするぜ！」

謙吾「ダゲキだな」

小毬「ドレディアにするよ～」

来ヶ谷「私はデスカーンだな」

クド「アバゴーラさんなのです！」

葉留佳「ランクルスですよ」

美魚「スワンナですね」

ゆり「私はシュバルゴよ！」

音無「俺はギギギアルか？」

奏「…レシラム」

日向「俺はオノノクスだ！」

直井「神の僕ならボルトロスだな」

ユイ「チラチーノですね☆」

松下「シビルドンか？」

高松「私ならランドロスですね」

野田「俺はゼノセクトだ！」

藤巻「ワルビアルだ！」

大山「ヒヒダルマかな？」

ＴＫ「ダンシング・アギルバー！！」

椎名「…サザンドラだ」

岩沢「コバルオンだな」

銀八「ブラック・ホワイトじゃん。それでは『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

サチコ「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからだよ。『何か偉い事になってるうううううううう！大丈夫なのか銀時達は？ってな訳で図々しい質問です

以前「ボーボボ」とのコラボはリリカルメンバーには大不評でしたのででしたら僕が今書いてる「マジンガー」とのコラボはどうですか？皆さんの率直な意見をお願いしますではでは』…ぶっちゃけ言うとね～」

全員「興味ない」

サチコ「そんなわけで『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に立ってゴースト達と遊んで？」

銀八「『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。ゴーストから逃げてください（激汗）」

サチコ「最後にペンネーム『黒龍』さん。『ソラ「アリスの奴、なんで黒龍の所に物体ＺＸを贈ったんだ？」

銀時「それ、たぶんお前が他の女性の料理を食べるのを嫌がったからじゃねぇか？」

ソラ「いや、良く分からなんだが・・・」

銀時「はぁ～、相変わらず鈍感だな」

ソラ「？」

ソラは銀時の言っていることが分からずに首を傾げる。

アリス「私は何もしていな」

銀時「アリス！？お前ラクーンシティーから帰ってきたのか！？」

アリス「ああ、簡単に事件解決ができた♪」

そう言うアリスの体には返り血一つなかった。

銀時（こいつ、人間？）

ソラ「それよりも、さっきのはどういう意味だ？」

アリス「言葉の通りだ。私はあんな不気味な料理に何かするほど愚かではないぞ。それと、あの時の真王達の攻撃は全て避けた」

銀時「いや、だってお前悲鳴上げてたじゃん」

アリス「一つ言っていなかったが、私は何をされても悲鳴は上げないんだ。あれは、やれた振りをするために演出だ」

銀時「お前ってほんとにクールキャラだな」

ソラ「それよりも誰が鳴神ソラさんに物体（あれ）ＺＸを贈ったんだ？」

銀時「ん？黒龍？何お前どこ行こうとしてんだ？」

黒龍「え！？ちょっちょっとトイレに・・・」

ソラ「あ、そう言えばお前、前に必死で何かを小包袋に包んでいたな」

黒龍「ギクッ！！」

銀時「ん?確か鳴神ソラさんの所に贈られたのも小包だったな」

アリス「お前、まさか」

黒龍「いや!俺は知りません!!俺はあんなオバケ料理を鳴神ソラさんの所になんか贈っていません!!・・・・・あっ!!!」

銀時「お前の仕業かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

アリス「貴様、私がどれだけ苦労したと・・・(怒)」

ソラ「黒龍・・・」

黒龍「いや、だってあれ怖かったからつい!」

銀時「ついじゃねぇぇぇぇぇ!!」

銀時は黒龍をボコボコにする。

アリス「私の苦しみを味わえ」

アリスも黒龍をボコボコする。

黒龍「あんぎゃあああああああ

ソラ「それでおわびだが、俺が作ったハンバーグ、スパゲッティ、カレー、シチュー、ラーメン、他にも色々作った料理を食ってくれ」

銀時「ソラの料理はまじでうまいぞ」

ソラ「そして、これは黒龍がするはずだった質問だ。『全員に質問と言うか頼みですが、マッチョ新八であるケン八をそっちに送っておいたから、倒してみてください』・・・ってなんだこれは？」

銀時「質問じゃねぇなこれ・・・」

ソラ「次だ。『女神四人以外に質問。前に言ったゼロを楽勝に倒せるといいましたが、口で言うほどゼロは簡単に倒せんのであしからず。それで、女神四人以外の人はゼロを倒せると思いますか？それと、ゼロはなのは全力の砲撃を防げるほど強いです』・・・なんかしつこいな」

銀時「それよりも最後の質問」

ソラ「ああ、そうだな。『最後にもしゼゼルがそちらに来たら皆さんはどうしますか？』っだ、そうだ」

銀時「ま、自分の作り出したキャラが簡単に倒されるとか言われたのはショックだったんだろうな」

ソラ「それで、あんな行動に走ったと？」

銀時「さぁ？もう送っちまったしわかんねぇ」

ソラ「はぁ～」『・・・まず最初は」

全員「死ねぇ！！」

マッチョ新八「ギャアアアアアアアアアアアア！！！！」

サチコ「・・・ハイ次は」

女神組以外全員「勝てるかどうかわかんない」

サチコ「そして最後は」

全員「即効殺す！！」

銀八「全員揃って物騒だな！？『黒龍』さん。こいつらから逃げてください！」

サチコ「それじゃ～ね～」

第二十六訓：ラスボスは最終的に凶暴な姿になる（後書き）

真王「コープス&スプラッター編が終了し、次はワグナリア編に突入・・・・・・の前にちょっと短編を開始します」

サチコ「次回『怖いものがあったら全力で逃げろ』テイクオフ」

～緊急報告～

真王「申し訳ありませんが、此処で更新をストップします。ネタの整理をしなければいけないので。そして一から1人5票投票していただきます。では」

第三回、モンスター解説図鑑

真王「第三回、モンスター解説図鑑！！」

イエーーーーーーイ！！！！！

リック「・・・確かここはこの章に現れたモンスターを紹介するんだったっけ？」

真王「話が早いね。そのとおり。ではいくよ」

～デッドマン～

第二十一訓から登場。
ウエスト博士が作り出した異形。しかしはっきり言ってザコ。数が多いが、量産型だと思われる。中には体力の高い緑色のグリンデッドマンもいる。

リック「こいつらには苦労したな…」

真王「そうか？次行くよ」

～マーク～

第二十二訓に登場。
上半身裸にジーパンを着ただけのゾンビ。特にこれといった特徴は

ないが、噛みつきをする。中には頭がなくなっても体当たりをする。

リック「これシリーズが違うくないか？」

真王「『ハウス・オブ・ザ・デッド』のゾンビですから」

リック「おいおい；」

ヘルマスク『次もそいつのとこからだぞ』

～エビタン～

第二十二訓に登場。
長時間水につかっているせいか、体中が腐敗し、ヘドロ状になってしまったゾンビ。水辺付近に多く出現する。中には、通常のエビタンよりも小さいコエビタンや、体力の高い黒いエビタンもいる。

ジェニファー「絶対に触りたくないわ」

リック「だな。次もか」

～カゲオ～

第二十二訓に登場。
ミイラ状のゾンビ。通常のゾンビと比べて体力が小さい。中には下半身が崩れて上半身だけのもおり、仮面とカギ爪をつけたケンとい

う改良版もいる。

銀時「仮面はファッションのつもりか？」

真王「違うと思うぞ」

～ジョニー～

第二十二訓に登場。
顔に割れたような赤色があり、両手に斧を持つゾンビ。銃で攻撃しても防がれるが、攻撃する際に撃てばいい。

ネプテューヌ「あれはちょっと焦ったね」

真王「慣れればどうってことないが」

～アステカ～

第二十二訓に登場。
通常のゾンビと比べて体が大きく、体力が高い。主にアッパーカットやストレートやラリアットなどの格闘技で攻撃する。さらに、重い鉄骨や木の棒を持って殴ることができる。

リック「筋肉ゾンビというやつか？」

銀時「知るか」

～チャールズ～

第二十二訓に登場。
通常のゾンビの2倍はある巨漢ゾンビ。体力は高く、分厚い脂肪は穴があいても動く。ドラム缶を投げることがある。

ネプテューヌ「これは厄介だったね～」

ブラン「私もそう思う」

リック「次はあいつだな」

～ピギーマン～

第二十二訓に登場。
両腕にチェーンソーがつけられ、顔に布のかぶり物をかぶっている怪人。巨体に似合わず、かなりの運動能力をジャンプ力を持つ。また、腕がちぎれてもチェーンソーが動いているが、ピギーマンの腕にチェーンソーを入れ込んだと思われる。

ネプテューヌ「激しくトラウマキャラってやつかな?」

リック「だろうな」

～エンプレス～

第二十二訓に登場。
顔には赤く光る暗視レンズに、全身を青いラバースーツやプロテクターで固めたヒューマノイド。巨大なチェーンソー（着脱可能なダブルセイバー型）を使って攻撃する。一定のダメージを与えると、チェーンソーを両手に持ち替えて振り回してくる。名前は訳すと『女帝』という意味だが、実は女性という噂も？

銀時「んで？あいつは女なのか？」

真王「あれはオスです」

銀時「・・・・・・そうか」

～ミラーエネミー～

第二十三訓に登場。
ウエスト館の鏡から現れる敵。映った相手と同じ姿で襲いかかってくる。リックの場合はミラーリックであり、銀時ではミラー銀時、ネプテューヌではミラーネプテューヌとなる。

銀時「ま、俺達の方が強かったしな」

新八「あれネプテューヌさんが倒したんですけどね」

由香「次のモンスターはこれです」

～ダーククロス～

第二十四訓に登場。
ダークソウルの力によって真っ黒になった逆さまの十字架。もとは十字架に霊が宿り、ナイトメアという生首の守護霊が守っていたが、ダークソウルでパワーアップして、哲志達を苦しめ利用した。

哲志「あのときはどうなる事かと」

直美「銀さん達が助けてくれなかったら私たちあいつに苦しみ続けてたわ」

真王「だね。ハイ次」

～ポルターガイスト～

第二十五訓に登場。
霊が宿り、侵入者に対して、しつこく攻撃する。椅子、本、瓶、ろうそく、ナイフなどがある。

銀時「あれはうざいわ」

真王「そうだな。ハイ次」

～ウッデイ～

第二十五訓に登場。
意志を持った手。這いずりまわったり、挑発したり、飛び跳ねたりといろいろな動きをする。どこかの口先の魔術師の『ウッディ』ではない。数が多いのでしつこい。

真王「次行くよ」

～メガデッドマン～

第二十五訓に登場。
ダークソウルによって、筋肉質になったデッドマン。その影響か、格闘技ができるようになった。

真王「ファイナルファイト的な」

銀時「何言ってんの？」

～ギガデッドマン～

第二十五訓に登場。
１０００体のデッドマンを融合させた巨大なデッドマン。しかし力を制御できず、がむしゃらに暴れまわるだけになってしまった。得意な攻撃は突進だが、急には止まれず、顔がぶつかってしまうのが

しばしば。

銀時「でかい図体して頭はアホってことだ」

真王「だね。ハイ次」

～ファイヤーデッドマン～

第二十六訓に登場。
炎に焼かれて悶え苦しんでいるデッドマン。ピョンピョン飛び跳ね、リック達の行く手を阻んでいるように見えるが、実は炎が熱くて跳ねてるだけである。こちらから攻撃できない。

真王「障害物扱いされているな」

銀時「そんなもんだろ」

～ウエスト～

第二十六訓に登場。
リック達を襲い、銀時達を罠にはめた張本人。ダークソウルを使って支配しようとしていたらしいが、逆にダークソウルに裏切られ、喰われてしまった。

真王「哀れな奴だな」

リック「同感だ」

真王「第四回も会いましょう」

第二十七訓：怖いものがあったら全力で逃げろ（前書き）

真王「やっと更新できました。銀魂的オリジナルを楽しんでください」

銀時「って言うか更新が遅れた原因はなんだ？」

真王「前回にも言ったようにネタ整理ですが何か？」

銀時「・・・いやなんでもねぇ」

第二十七訓：怖いものがあったら全力で逃げろ

機動六課・銀時の部屋・夜

銀時はベッドで寝ている。しかし顔がなぜか苦しそうである。

銀時「・・・・・・・・・・・・・・・」

表情がすぐれず、金縛りにでも巻き込まれたかのような苦しみをしている。

銀時「・・・・・・・・・・・・・・ハッ！」

銀時が目を覚ます。

銀時（な、なんだ？この体中に重く感じる感覚は？それに動けねぇ…ってもしかしてこれ金縛り？金縛りなの？）

金縛りにあったことに慌て始める銀時。

銀時（しかし何かホント体が重い。何か重いものが圧し掛かった感じだ。一体何が？）

苦しみながらも、布団の中を覗き込むと、

銀時を睨む7つの目がこちらを向いてました。

翌朝

ネプテューヌ「アハハハハハハハハハハ！ホント銀さん面白いよね！」

ネプテューヌが銀時に笑っている。なぜ笑っているかと言うと、

ネプテューヌ「『サチコちゃん達が銀さんのベッドで悪戯してた』だなんて。あははははははははは！」

サチコ・遼・雪・時子「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

銀時「お前らが笑うな！！なんか怖いんだよっ！！」

そんな理由でネプテューヌとサチコ達が笑い、銀時は怒鳴る。

新八「でもどちらかというとサチコちゃん達のせいだよね？」

なのは「そうだよ。銀さんに迷惑かけないで」

フェイト「銀時、もし何かあったら私達を呼んで」

新八となのははサチコ達に注意し、フェイトは銀時を心配する。

ポンッ

3人は、誰かに肩を置かれた。後ろを振り向くと、サチコ、遼、時子だった。

新八「ギャアアアアアアアアア！！！」

なのは・フェイト「イヤアアアアアアアアアアアアア！！！」

新八、なのは、フェイトはびっくりして離れた。

ネプテューヌ「サチコちゃ～ん。みんな～。プリン食べるよ～」

サチコ・遼・雪・時子「は～い」

サチコ達はネプテューヌに呼ばれ、テーブルに着いた。

銀時「…何であいつらはネプテューヌと仲がいいんだ？」

銀時はプリンを食べているネプテューヌ、サチコ、遼、雪、時子を細目で見る。

新八「・・・よく分かりませんけど、ネプテューヌちゃんがサチコちゃん達を殴り飛ばして以来ですね」
全員「殴り飛ばしたぁぁッ！！？」

新八の一言にネプテューヌ達以外全員驚く。

なのは「ゆ、幽霊を殴り飛ばすだなんて」
銀時「いや違う！スタンドだ！」
フェイト「でもそれってすごいんじゃない？」
恭介「…本当にネプテューヌはすごい奴だなって思ったよ」
理樹「僕もだよ」
来ヶ谷「私は別にいいんだがな（ボタボタ）」
小毬「ゆ、ゆいちゃん鼻血でてるよ…」
入江「幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い…」
ユイ「それ以上言わないで！こっちまで怖くなるよ！」
日向「そうそう、じゃれあう子供と思えばいいさ」

それぞれ感想を言い、日向がポジティブなことを言う。

サチコ「銀時～♪」
銀時「ギャアアアアアアアア！！！こっちくんなあああああああああ！！！！」

サチコは銀時を追いかけ、銀時は逃げる。
銀時は永遠幽霊…スタンドとは仲良くなれないようだ。

夜

はやて「何かよ～分らんこと見たいやけど、うちには関係ないわな」

はやては自室で寝始める。

はやて（・・・なんや？この重くるしい感覚は…）

はやては違和感を覚えた。

はやて（なんかお腹が重いな…）

はやては布団の中を覗き込むと・・・

２つの目がはやてに向いて・・・

朝

ネプテューヌ「も～、駄目だよいたずらしちゃ」

ネプテューヌはサチコ達に叱っている。

はやては寝不足なのか、目に隈が出来ている。
はやてだけでなく、なのは、フェイト、シグナム、リインフォース、
銀時、新八、スバル、桂も目に隈が出来ている。

銀時「あのガキどもよくも俺達をこんな目にあわせやがって」
なのは「お仕置きが必要なの♪」
フェイト「ウフフフフフフフフフ・・・」

銀時はサチコ達に怒りを表し、なのはとフェイトは魔王化している。

新八（怖ェェェェェェェェ！！！なのはちゃん怖いよォォォォォォォォォ！！！）
シグナム（今の高町とテスタロッサは一番怖いな）
はやて（うちらの怖さ思い知らせたる）

リインフォース（覚悟するがいい）

新八はなのは達の殺意におびえる。

なのは「サチコちゃん…（殺気）」

サチコ「何？」

ネプテューヌの叱りが終わったサチコは食事していたので、口に肉を頬張りながら後ろを振り向く。

なのは達ビジョンでは、人肉を喰らうサチコの光景が・・・

なのは・フェイト・はやて・シグナム・リインフォース「スイマセンデシタァ！！」

サチコ「なにが？」

新八・銀時「屈するの早っ！！」

ビジョンを見たなのは達は土下座し、サチコはわけが分からず、新八と銀時は驚いて突っ込む。

夜

はやて「『第六回、チキチキ、サチコちゃん達を驚かせよう大作戦』！」

なのは達「いえ～～～い！」

いきなりな展開である。ネプテューヌの部屋の前にいるのは、なのは、フェイト、はやて、シグナム、リインフォース、銀時、新八、スバル、ティアナ、桂、である。

説明すると、驚かされ続けたはやて達は、サチコ達に仕返ししようという魂胆なのだ。

はやて「今現在うちらはネプテューヌちゃんの部屋の前におる。なぜかと言うとサチコちゃん達はネプテューヌちゃんと一緒に寝てるからや」

桂「そこで我々は悪戯をしかけるのだ」

銀時「よし、そんじゃ入るぞ」

なのは達はネプテューヌの部屋に入った。そこにいるのは寝ているネプテューヌと、一緒に寝ているサチコ達だった。

はやて「寝ておる寝ておる♪」

スバル「それじゃ始めますか」

なのは達はサチコ達に悪戯をしかけようとする。

ネプテューヌ「ぅ～～～ん・・・」

バキッ！

はやて「ぶっ！」

桂「八神殿！？」

ティアナ「部隊長！？」

ネプテューヌがはやてに殴りかかった。

ネプテューヌ「どうだ～！参ったかモンスターめ～～・・・ムニャムニャ」

どうやらモンスターを退治している夢を見ているようだ。

はやて「あかんあかん、うちは大丈夫や」

はやては顔を押さえながら言う。

はやて「さて、どんな悪戯をしようかな～♪」

はやては部屋の置物に手を出そうとする。

カッ

後ろから視線を感じた。

はやて（な、なんや？視線？これは視線？ネプテューヌちゃん寝てるはずなんやけど…）

視線を感じたはやては後ろを振り返ると、

そこには目ん玉開いてぐっすりとベッドで寝ているサチコがいた。

はやて（どんな寝顔ォォォォォォォォォォォ！！！？？）

いくらなんでもあり得ない寝顔にはやては心の奥から盛大にツッコ

む。

なのは「はやてちゃん、どうしたの？」
フェイト「どうしたのはやて？」
桂「どうした八神殿？」
銀時「どうした？」

なのは達ははやての様子がおかしいと感じ、はやてに聞いた。

はやてはサチコを指差して、サチコを見ると、

はやて以外全員（どんな寝顔ォォォォォォォォォォォ！！！？？）

はやてと同じように心の奥で盛大にツッコむ。

銀時（ちょっと待て何かヤベーよこれ！？）
なのは（瞼半開きは聞いた事はあるけど全開だよ瞳孔が！！）
スバル（眼球カッサカッサじゃないのこれぇ！）
リインフォース（メッチャこっち見ているんですけど！？）
シグナム（私達を見てないかこれぇ！？）
新八（カッサカッサの眼球でメッチャ見られてんだけどォォォォォォ！！！）
ティアナ（って言うかすっごく怖いんですけどォォォォォォォォォォ！！！！！）

どうやって寝ればそんな寝顔になれるのか理解できなかった銀時達。

銀時（つうかなんて紛らわしい寝方してんだコイツ！！）
フェイト「まぁ寝ているならまだいける……」
サチコ「ぬ〜ぬ〜」

いびきが出て大きくなっていく。
その様子に銀時はサチコの顔を見て青ざめている。

銀時達（……あれ？やっぱコレ起きてねぇ？……コレ本当は寝たフリをして起きていねぇ？やっぱ起きてない？）
スバル「……サ……サチコちゃ～ん？」
サチコ「う……うーん？」

スバルが呼んでみて、サチコは目をこすって顔をネプテューヌに寄せる。

はやて（よし！あの様子やと寝てるな！驚かしてくれるわ！）

はやては標的をサチコから雪に変える。
はやてが雪の顔を覗き込むと、おめめバックリ開いて寝ていた。

はやて（だからどんな寝顔ォォォォォォォォォ！！！？）

はやてはまた心の中でシャウトした。

さらに雪以外でも、遼と時子の目はバックリ開いているが、寝ているらしい。

はやて「ゼ…ぜぜぜ全軍撤退準備っ！！」
銀時「さ、賛成だ！…こ、こここんなとこ早く出ようぜ！！」
なのは「こここここここ怖くてもう耐えられないの！」
シグナム「も、もうこんなところからオサラバする！！」

寝てるのか起きてるのか分からない且すごく怖い寝顔で銀時達は恐

怖に達し、部屋から出ようとする。

はやて「…あれ？」

桂「ど、どうした八神殿？」

はやて「あ、開かへん！」

全員「ええ！？」

部屋から出ようとしたら、トビラが固くなって動かなくなっている。

銀時「そ、そんなわけあるかよ！ぬおおおおおお！！！」

桂「ぬううううううううう！！！」

銀時と桂が扉を引っ張るが、ビクともしない。

なのは「も…もしかして私達…閉じ込められたの？」

なのはの一言に全員が青ざめる。

銀時「嫌だァァァァァ！！！俺はこんなところで死にたくねェェェェェェェ！！」

フェイト「嫌ァァァァァァァ！！！誰か助けてェェェェェェェェ！！！」

桂「誰か救助呼んでくれェェェェェェェェ！！！」

はやて「ヘルプミィィィィィィィィ！！！」

なのは「ノワールちゃぁぁぁぁぁぁん！！ブランちゃぁぁぁぁぁぁぁん！！ベールさぁぁぁぁぁぁん！！誰でもいいから来てェェェェェェェェ！！！」

銀時達はパニックになり、開かない扉をバンバン当てたり大声出したりしていた。しかし銀時達以外は全員グッスリ眠っており、銀時

達に大声なんて聞こえてないのだ。

ポンッ

銀時達の後ろから肩を叩かれた。
叩かれた銀時達はビクッ、となり、ギギギ、と機械のような感じに
振り向くとそこには・・・・・・

パープルハート「わ〝る〝い〝ごはい〝ね〝えがぁぁ～～～～？？」

ものスッゴイ恐い形相のパープルハートと、

サチコ・遼・雪・時子「キュフフフフフフフフフフ・・・」

相手を恐怖させる笑みを浮かべるサチコ達がいた。

銀時達は顔の青さと恐怖が頂点を越した。

パープルハート・サチコ・遼・雪・時子「・・・イッペン死ンデミル？」

銀時達「あ”あ”あ”

…翌朝

ネプテューヌ「おっはよ～！みんな～♪」

サチコ・遼・雪・時子「おはよう～♪」

ネプテューヌとサチコ達が挨拶する。

アイエフ「おはようネプ子。あれ?銀さん達来てないけど?」
ネプテューヌ「あれ?部屋にいないの?」
ノワール「ちょっと探しに行ってくるわ」

アイエフとノワールは、なのは、フェイト、はやて、シグナム、リインフォース、銀時、新八、スバル、ティアナ、桂が来てないことに疑問を抱き、探しに行った。

そしてネプテューヌの部屋に来て・・・・・・・・・・・・・・大惨事を見てしまった。

ネプテューヌの部屋は真っ赤な色になり、銀時達は吊るされた血だらけの死体のようにぐったりしていた。

アイエフ・ノワール「な、何があったのォォォ

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「どうも～。一週間ぶりのこのコーナー。んじゃアシストする方は」

サチコ「また私だよ♪」

銀八「そ、それでは始めるか（ガタガタ）ペ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「真の我？ダークソウルはまだ不完全なのか？」ソニック「言葉通りならそうだろうな…きっと負の感情で力を蓄えるんじゃないか？」

スネーク「ありえそうだな…」

ネス「それにしても…ちょっとした休憩に入るんだね…」

こっちは気長に待ってますので！！

マリオ「皆に質問『俺達とスポーツやるなら誰と組みたい？』」

ルイージ「銀さんに質問『機動六課に来て、苦労してる事ありますか？』」

ネス「僕から皆さんに質問『超能力使えるならどんな事してみたい？』」

そんな訳で次回を待ってます♪』それじゃあまず2つ目から答えましょう」

銀時「苦労だと？あいつら（銀時ラバーズ）のせいでいろいろと疲れてんだよ。それにサチコのおかげで眠りずらくなったし！！」

サチコ「私を呼んだ？」

銀時「ぎゃああ！！！！！！！」

銀時は逃げだした。

銀八「・・・っ、次は1と3番目…」

全員が立ち上がる。ちなみに銀時はすぐに戻って来た。

銀時「俺はマリオと組んでかめはめ波を出せる能力がいい！」

新八「僕はルイージさんですね。能力は目立つことです！」↑意味なし。

神楽「私はクッパと組むアル！どんなものでも持ち上げられる能力

が欲しいネ！」

桂「マルス殿だな。爆弾を作れる能力だ」

エルザベス『ピカチュウですね！能力は特にいりません』

月詠「わっちはアイクじゃの。能力はいらぬ」

ネプテューヌ「私はマリオと組むよ！どんな剣でも作れる能力がいい！」

ノワール「私はメタナイトね。スピードの能力よ」

ブラン「・・・ピカチュウ。破壊の能力」

ベール「私はマルスで砲撃能力を持ちたいですわ」

コンパ「ピーチさんです！治癒能力はあるですか？」

アイエフ「私はメタナイトね。能力は…斬撃かな？」

九兵衛「僕もメタナイトだ。欲しいのは体を変える能力だ！！」

なのは「私はどちらかと言うとスポーツはやらないの。運動能力が欲しいな～」

フェイト「私はソニックかな。そして電撃能力が欲しいかな」

はやて「うちはゼルダや。とりあえずなのはちゃんと同じや」

シグナム「私はアイクと組み、炎の能力が欲しいぞ！」

ヴィータ「あたしはディディーだ！衝撃（攻撃な意味で）の能力が欲しい！」

シャマル「私はスポーツしないわ。もっと強い治癒能力が欲しいけど」

ザフィーラ「ルカリオだな。そして絶対防御能力を望む」

スバル「私はマリオです！特に能力は要りませんが」

ティアナ「私はフォックスね。飛行能力が欲しいわ」

エリオ「僕はファルコです。ソニックさんのように音速を超えるスピードが出したいです」

キャロ「私はリザードンです！！魅力の能力を！！」↑意味無い

ヴィヴィオ「マリオだよ。あらゆるパワーを操作する能力が欲しい」

銀八「はいそんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

サチコ「次はペンネーム『黒龍』さんから『アリア「次そっち・・・」

ヤミ「中々乗りごこちがいいですね」

ラオシャンロン「ぎゃお♪」

アリアとヤミはラオシャンロンに乗って楽しんでいた。
思いっきり二人のペットに成り下がった竜王。

黒龍「す、すごい・・・」

銀時「どんだけだよ」

新八「でも、あの人達はもっと凄いですよ」

新八が指差すと・・・

ソラ「ラオ、ご飯だ」

アリス「ラオ、次は私を乗せてくれ」

ラオシャンロン「ぎゃお♪」

ソラとアリスの言うことを素直に聞いていた。

銀時「ソラは分かるけど、アリスまでぇぇぇぇぇ!!?」

新八「ある意味最強ですよ、あの人たち」

近藤「はっはっはっはっ!!中々かわいいもんじゃないか!ようし俺も、ら「ぐがァァァァァ!!」ぎゃあああああああ

山崎「局長ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

黒龍「あははは（苦笑）」

銀時「近藤（ゴリラ）はダメなんだな」

黒龍「じゃあ質問します。奏は原作ではバリバリヒロインとして活躍していたのに今全然目立っていないですよね。そこんとこどう思いますか（黒笑）」

銀時「いかなり怒りに触れる質問したな」

黒龍「次、サチコ達ゴーストチルドレンて実際美少女なんですか？サイト見てみたんですが、サチコ達の画像が無くて分からなくて・・・」

銀時「全然知りたくないんだけど」

黒龍「それと、ゴーストチルドレンのサチコだけじゃなく、真王さんの小説の他の女性キャラにもフラグを『ソラ』に立てさせようと思っているんですが、どうですか？」

銀時「何それ！？嫌がらせ！？」

黒龍「それではまた次回も楽しみにしています。後、別に更新が遅くて構いません。真王さんは真王さんのペースで進めてください」『…奏ってこっちの？」

奏（オリ）「いやいや、Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓの奏だよ」

奏（A）「黒龍を殺していい？（殺気）」

真王「駄目だって。２つ目は美少女かどうか知りませんが、暗い雰囲気を取ったらかわいい女の子になりますね。見たいならＰＩＸＩＶでサチコと検索すれば出ますけど」

銀八「成程な」

真王「それと3つ目ですが皆さんどうですか？」

女性陣「全力で断る！」

ネプテューヌ「私は別にいいけど」

真王「いいのかよ…」

奏（A）「ねぇ、黒龍を殺していい？」

サチコ「だったら私がやろうか？」

奏（A）「よろしく」

銀八「『黒龍』さん！！サチコから逃げる準備をしてください！！！」

真王「おっとそうだ！実はキャラ台詞バトンをしようと思いましたので見てください」

『［キャラクターバトン］
目にタコができそうなルール←
最近のゲームのキャラクターは何か行動起こすたび台詞が用意されててなかなか凝ってるモノがあります。
このバトンはあなたのキャラクターにゲームのように台詞考えてみようというモノです。
台詞じゃなくとも掛け声や叫び声でもＯＫ。
どんな状況かを妄想しながら考えると台詞出てきやすいかも?
結構多めですががんばってください。
ちなみに一つの答えに二つ以上の回答をしてもＯＫです!
指定↓銀時（上）、新八（中）、神楽（下）

■０．キャラクター選択時
「俺の番か?」
「僕の番ですね」
「私の出番ネ!」
■１．エンカウント・通常
「おし、始めるか」
「行きますよ!」
「勝負ネ!」
■２．エンカウント・格上
「あれ?なんかやばくね?」
「か、勝てるでしょうか…」
「強そうアル…」
■３．エンカウント・格下
「ザコ倒すのメンドクセ!」
「これなら楽ですね」
「運動不足にちょうどいいアル」
■４．勝利

「よ～し。け～るぞ～」
「僕達の勝ちです！」
「歌舞伎町の女王・神楽アル！」
■５．楽勝
「あれ？弱くねこいつ等」
「これくらいなら楽勝ですね」
「なんか物足りないアル…」
■６．辛勝
「チッ、やばかったぜ」
「な、何とか勝てました…」
「まだ私は立ち上がるね」
■７．戦闘不能
「ぐ・・・くそ・・・」
「そ、そんな・・・」
「私が…負けるアルか？」
■８．戦闘復帰
「どっこいせっと」
「ありがとうございます！」
「私は不死身ねーーー！！」
■９．エンカウント・奇襲
「テメッ！卑怯だぞ！」
「いきなり奇襲ですか！？」
「正々堂々勝負するアル！！」
■１０．アイテム使用・自分
「これ使ってみるか」
「これ使えるでしょうか…」
「このアイテムの出番ネ！」
■１１．アイテム使用・相手
「おい、これを使え」
「これ使ってください！」

「このアイテムを使うね」
■１２．宝箱・普通
「お！いいもんゲットだ」
「宝箱ですか」
「お宝ゲットアル！」
■１３．宝箱・レア
「おお！こりゃすげーぜ！」
「こ、これは！」
「凄いのゲットネ！」
■１４．宝箱・レジェンド
「うおおおおおお！！！億万長者の気分だ！！！」
「す、すごい！！これは夢じゃないですよね！？」
「凄過ぎて言葉が出ないネ！！」
■１５．弱攻撃
「ほれ」
「えい！」
「ほい」
■１６．中攻撃
「おらっ！」
「でやぁ！！」
「ホワタァ！！」
■１７．強攻撃
「てぇやぁぁぁぁぁ！！！」
「ウオオオオオオ！！！！」
「ホワチャアアアアアアア！！！」
■１８．コンボリンク
「ハイ次いいいい！！！」
「まだ行きます！！」
「まだ終わってないネ！！」
■１９．バトンタッチ

「んじゃ後は任せるわ」
「すいません！交代します！！」
「誰か私と代わるね」
■２０．弱ダメージ
「いてっ！」
「おぷっ！」
「アウチッ」
■２１．中ダメージ
「ぐはっ！」
「ゴフゥッ！！」
「グァ！！」
■２２．強ダメージ
「ぐあああああ！！！」
「ぎゃあああああああ！！！」
「ギャヴッ！！？」
■２３．ダウン起き上がり
「やったなこのやろ！！」
「負けませんよ！！」
「許さんね！！」
■２４．受け身
「おっと」
「うわっと」
「まだまだいけるネ！」
■２５．瀕死
「くっ、まずいな…」
「ううぅ・・・まずいです」
「力が入らないネ…」
■２６．回復
「サンキューな」
「ありがとうございます」

「元気をもらったアル！」

■２７．自己回復

「めんどくせーけどやるしかねぇか…」

「か、回復します！」

「元気パワーを溜めるネ！」

■２８．味方回復

「ったく、手間かけさせんじゃねぇよ！！」

「今回復してあげます！！」

「私の元気をあげるネ！」

■２９．防御

「ほれ」

「うわっと！」

「効かないネ！」

■３０．完全防御

「効かんな～～♪」

「全然だめですね」

「全然効かないネ！！」

■３１．回避

「ちっ」

「うわたった！」

「緊急回避ネ！」

■３２．完全回避

「遅ぇよ！」

「何処狙ってるんですか？」

「あくびが出るネ」

■３３．毒、ＤｏＴ状態

「ウェ…気持ち悪…」

「う！、毒ですか…」

「なんか吐きそうね…」

■３４．スタン、ピヨリ状態

「あれ？目があわねぇ…」
「目、目が…」
「はらほろひれはれ…」
■３５．よろけ、レバガチャ状態
「う！、気分悪ぃ」
「あ、頭が…」
「頭が変ね…」
■３６．スタミナ切れ、ＭＰ切れ
「あ～ダメだ。もう一ミリも動けね～…」
「ゼェ…ゼェ…ゼェ…」
「なんか疲れたネ…」
■３７．パワーアップ
「オッシャー！どんどん行くぜぇー！！」
「パワーアップです！！」
「ヤル気パワーアップネ！！」
■３８．コンティニュー
「オイオイこれで良いのか？」
「まだ終わりませんよ！」
「まだいけるネ！！」
■３９．死亡、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ
「え？これで終わりなの？」
「ま、マジですか！？」
「まだ終わりたくないネ…」
■４０．怒り、覚醒状態
「テメーは絶対ゆるさねぇ…」↑白夜叉化
「童貞舐めんなぁァァァァァァァァ！！！！！」
「キャハハハハハハハハハハハ！！！」↑真・夜兎化
■４１．待機
「ア～・・・かったるいな～」
「お前の母ちゃん何人だ～♪」↑歌い中

「なんか暇アル…」

■４２．挑発

「なんだ？オメーはその程度か？」

「どうしましたか？もう終わりですか？」

「さっさとかかってくるヨロシ」

■４３．必殺技

「こいつでしめーだっ！！」

「僕の必殺技を受けてみてください！！」

「まとめて潰してやるネ！！」

■４４．クエストクリア・ランクＥ

「うわマジ最悪だわ…」

「今月の会計大丈夫かな…」

「納得いかないネ！！もっと上を行くアル！！」

■４５．クエストクリア・ランクＤ

「Ｄなんてまだだっつーの！」

「何か物足りませんね」

「まだ納得しないネ！」

■４６．クエストクリア・ランクＣ

「まぁまぁレベルか？」

「なんか地味ですね…」

「半々ね」

■４７．クエストクリア・ランクＢ

「やるじゃねえか。もっと上をいけるかもな」

「いい感じですね。頑張ってください」

「一応納得できる範囲ね」

■４８．クエストクリア・ランクＡ

「ランクＡってやるなぁ」

「凄いですね！おめでとうございます！」

「なかなかの評価アル！私も文句ないネ！」

■４９．クエストクリア・ランクＳ

「え?嘘、マジでSランク!?いよっしゃーーーーー!!!」
「す、すごい!!ランクSおめでとうございます!!!」
「凄いアル!!文句なしのSランクゲットアル!!」
■５０．回す人
「『黒龍』さんの俺だ」
「同じくのソラさんです」
「３人目は誰でもいいネ」

どうでしょうか?ではまたお会いしましょう。』

真王「いかがでしょうか?活動報告にも載せてありますので見てください」

銀八「ところで『鳴神ソラ』さんは活動報告見れるのか?」

真王「イヤ、分からん」

第二十七訓：怖いものがあったら全力で逃げろ（後書き）

真王「次回はワグナリア編始まります！」

繭「それじゃあ私が。次回『店が個性的なら店員も個性的』テイクオフだよ！」

第二十八訓：店が個性的なら店員も個性的（前書き）

真王「ワグナリア編スタート！この時ネプテューヌに悲劇が？」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ」

第二十八訓・店が個性的なら店員も個性的

ここは地球の北海道のとある店・ワグナリア

パープルハート「…なかなかの店の食べ物ね、ここ」

そこでパープルハートが食事をしていた。
なぜパープルハートがここにいるのかと言うと、なのはが地球のチラシを持ってきて、ネプテューヌがワグナリアの人気メニューを見てさっそくここに来たのだ。ちなみになのは達から許可をもらっている。

そしてパープルハートはいつもの戦闘服ではなく、青いフード付きジャンパーと胸部に紫のNのトレードマーク付きの白いTシャツに青いジーパンと言うなかなかクールな服装を身に着けていた。

なぜパープルハート姿かと言うと、本人曰く、子供扱いされないからだと。しかし、

男1「お？あんたスッゲー美人じゃねぇか。俺らと付き合わない？」

ガラ悪そうな男達にナンパされてしまった。

パープルハート「…悪いけど間に合っているわ。それどころかあなたたちじゃ私と付き合えると？」

男2「面白いこと言うな。って言うか俺らと付き合えよ」

男達はパープルハートをしつこくナンパする。

パープルハート「・・・・・・・・・・・・・」

パープルハートは無視して食事を進めようとしたら、

男1「おいこら！無視してんじゃねぇぞ！！」

1人の男がテーブルをバンッ！、と叩く。その時パープルハートの頼んだ料理が男の手に当たり、宙を舞った。
そして地面に落ちた。

パープルハート「あ・・・・・・・・・・・」

パープルハートは落ちた料理を切なく見つめている。

男1「おいこら。さっさとこっち来い」

男がパープルハートの手をつかもうとしたら、

ガシッ！

逆にパープルハートが男達の腕をつかんだ。しかも殺意全開で。

パープルハート「き～～さ～～ま～～ら～～～～！！」

パープルハートは右手の拳をギリギリと握って、

パープルハート「私の食べ物をどうしてくれるんじゃボケェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！！！」

男達「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！！」

男達を店の壁ごと殴り飛ばした。
周りから歓声が上がる。

パープルハート「・・・フゥ」
？？？「おいそこのお前」

パープルハートは後ろから女性の声が聞こえ、振り向く。
その女性は他の従業員と違う服を着ているようだ。

白藤「私は店長の白藤だが、お前それ」

白藤はある場所を指差す。
パープルハートは冷や汗流して振り向く。
そこにあるのは壊れたテーブルとガラスと壁、つまりは、

白藤「お前弁償な」
パープルハート「ＮＯ～～～～～～～～！！！」

パープルハートは頭を抱えて絶叫した。

ワグナリア・着替え室

パープルハート「何でこんなことに…」

パープルハートはテンション低く言う。
そりゃ店を壊して弁償させられるからテンション下がるよね。

ちなみにパープルハートは今作業服を着ている。

背の小さな店員「ま、まぁまぁ元気だしなよ」
メガネの店員「そうですよ。あなたはあのやさぐれ達を倒しただけで十分ですから」

2人の店員がパープルハートを慰める。

パープルハート「・・・・・・まあいいわ。ところで…えっと…」
ぽぷら「あ！私は種島ぽぷら、17歳、高校生です！」
宗太「小鳥遊(たかなし)宗太です。あとたかなしって言っても『高梨』じゃなくて『小鳥遊』ですよ」

2人の店員・ぽぷらと宗太は自己紹介する。
パープルハートも自己紹介する。

パープルハート「ふ～ん。あ、私はパ…ゲフン、ネプテューヌよ。よろしく」
宗太「ネプテューヌさんですか。よろしくお願いしますね」
ぽぷら「よろしくね！ネプトゥ…ねぽ・・ネ…えっとぉ…」

ぽぷらはネプテューヌと呼び辛いらしい。しかし隣の宗太はなぜかぽぷらを見て顔を赤くしているが。

パープルハート「・・・あなたの呼びやすい呼び方で良いわ」
ぽぷら「ホント？じゃぁえっと・・・・・・・・ねぷねぷちゃんで！！」

ぽぷらはパープルハートをねぷねぷちゃんと呼ぶことにした。パープルハートは少し複雑な顔をしたが、コンパからねぷねぷと呼ばれ

ているので気にしなかった。

パープルハート「それじゃあなた達を宗太、ぽぷらと呼ぶことにするわ」

宗太「いいですよ。あ、先輩、ネプテューヌさんにいろいろと教えましょう」

ぽぷら「わかったよかたなしくん！」

パープルハート「・・・小鳥遊じゃなかったの？」

宗太「あはは…先輩はそれで良いんですよ」

パープルハート「・・・・・・・・・」

パープルハートはここでやっていけるのか不安になった。

ぽぷら「それじゃぁまずこの食器をかたずけることを教えるよ！」

パープルハートはぽぷらと宗太に店でやっていくことを教えてもらっている。

ぽぷらは手に持つ食器を棚に戻す作業をするのだが、

ぽぷら「ううう・・・うう～～～～ん！」

全然棚に届いてなかった。

パープルハートはとりあえずその食器を棚に戻した。

ぽぷら「次はこのケースを運ぶよ！」

今度は食器の入ったケースを運ぶ作業なのだが、

ぽぷら「ぬぐぐ・・・うう～～～～ん!!」

全然持ち上げられてなかった。

パープルハート「ぽぷら、あなたもしかして力無いの?」

パープルハートの一言にぽぷらはグサッ!と心にダメージを受け、ヨヨヨと涙を流してへたり込んだ。

パープルハート「あ…言ってはいけなかったのかな…って宗太はなぜ赤くなっているの?」

宗太「い、いえ何でもありません!(先輩かわいい!)」

パープルハートは深く追求しないようにした。

???「お?新人か?」

厨房から金髪の男が顔を出した。

パープルハート「新人じゃなくて借金返済人かしら」

佐藤「ああ、あれか。俺は佐藤潤、よろしくな」

???「へぇ～?君がそう?」

今度は青髪の青年が鍋を持って顔を出す。

相馬「僕は相馬博臣、よろしく」

パープルハート「私はネプテューヌよ」

パープルハートはとりあえず挨拶する。

相馬「外国人なんだね。男に絡まれて挙句に弁償させられたみたいだけども」

パープルハート「・・・あなた何時から知ってたの？」

相馬「さぁ？」

パープルハートはなぜ相馬が知っているのか疑問に思った。

佐藤「ところで相馬、出来たのか？」

相馬「え？あ、まだだよ」

佐藤が相馬を呼んで、相馬は鍋の中を覗いて言う。

ポーン

37番の呼びだしベルが鳴った

ぽぷら「あ、私お客さんのオーダーするからかたなし君よろしくね！」

宗太「分かりました先輩」

ぽぷらはせっせと客のテーブルへ向かった。

パープルハート「それじゃぁ宗太、次は何するの？」

宗太「次はこちらで」

パープルハートは宗太の指示に従った。

パープルハート・宗太「ありがとうございました」

パープルハートと宗太は客の接待をしていた。

パープルハート「意外と簡単ねこの作業」

宗太「それならいいですが」

？？？「あら？あなたは新人さん？」

隣から金髪で目をつぶっているように見える女性従業員が話しかけてきた。

八千代「はじめまして、私はチーフの轟八千代です」

パープルハート「はじめまして、ネプテューヌよ」

パープルハートも挨拶する。

八千代「杏子さんから聞いたわ。あなたあの不良をやっつけて弁償させられたんでしょう？」

パープルハート「まあ、そう言うことよ。・・・ん？杏子？」

宗太「店長のことですよ」

パープルハート「・・・・・・あぁ、あの人」

パープルハートは杏子のことを白藤と言う店長だと知った。

八千代「初めてかもしれないけど、分からないことや気になることでもあったら私に聞いてね」

パープルハート「そうね。じゃぁまずその腰にある刀はなんなの？」

パープルハートは八千代の腰にある刀を指差して言う。

宗太（うわ！この人スバッ！てチーフの刀のこと言っちゃったよ！！）

宗太はズバッ！と言ったパープルハートに驚く。

八千代「あらごめんなさい。私、実家が刃物店をやってる店があるから『轟刃物店』のキャッチコピーで」

パープルハート「それと刃物は何の関係があるの？」

八千代「・・・ほら！世の中何かと物騒だから」

パープルハート「…あなたの頭が物騒よ」

八千代の答えにパープルハートがズバズバと言い放つ。

宗太（うわ～…、この人もしかして怖いもの知らずでしょうか…）

宗太は顔を青くし、パープルハートにそんな位置づけをした。

八千代「あ、それはともかくあなたオーダーやってみる？」

パープルハート「え？あ、やってみるわ」

宗太「俺も手伝いますよ」

パープルハートはオーダーをやってみることにした。

パープルハート「ご注文はストロベリーパフェとハンバーグでよろしいでしょうか？」

男性客「あ、はいそうです」

パープルハート「かしこまりました」

パープルハートは順調にオーダーをやっていた。それどころかほとんどの客がパープルハートに集中している。

ぽぷら「ほえ～。ねぷねぷちゃんすご～い」
宗太「まだ数時間しかたっていないのに順応早いですね～」
佐藤「熱心だな」
相馬「って言うかほとんどネプテューヌさんに向いてない？」
杏子「ほう？なかなかなやつだな。あとで人材採用してみるか…」

宗太達はパープルハートを見てそれぞれ感想を言う。

佐藤「おいネプテューヌ、ストロベリーパフェとマンゴープリンを頼んだ３２番テーブルの客に運んでくれ」
パープルハート「分かったわ」

パープルハートはパフェとプリンを３２番テーブルへ運ぶ。

パープルハート「ん？」

…が、その前に３２番テーブルの人を見て固まった。そこにいたのは、

銀時「なんか人気あるね～、この店」
神楽「ホントある。この店の食べ物はおいしいネ！」
新八「神楽ちゃん、ちゃんと控えてね」

何と銀時、神楽、新八の万事屋トリオであった。
それだけではない。
桂、エリザベス、月詠、なのは、フェイト、はやて、スバル、ティ

アナ、エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフが席に座っている。

なのは「このファミレス始めてきたね～。アリサちゃん達にも誘ってあげようかな～」
フェイト「いいね。開いたらここに寄ろうよ」
スバル「ふぉふぉふぉふぁふぇひーほひひ～♪（このスパゲティーおいしー♪）」
エリオ「ふぁい、ふぉいひーへふ！（ハイ、おいしいです！）」
ティアナ「あんた達食べながらしゃべるな！」
ノワール「悪くないお店ね」
アイエフ「ホントすごい人気ね」

銀時達は満足そうに食べている。

新八「それにしてもネプテューヌちゃんは何処にいるんでしょうか」
銀時「どうせどっかで食べてるんじゃねぇの？」

銀時は鼻糞ほじりながら言う。

パープルハート「あら？私をそんな感じに見てたの銀時」
銀時「そりゃそうとしか思えね・・・・・って何でお前がここにィィィィィィィィィ！！！！？」

銀時はパープルハートがここにいたことにビックリし、なのは達も驚く。

パープルハート「私がここにいちゃまずいのかしら？」
銀時「まずいも何も何でお前がここにいんだよ！ってか何でここの作業服着てんだ？」

銀時の質問にパープルハートは顔を引き攣らせるが、諦めて銀時達に話した。

新八「…そうだったんですか」
なのは「大変だねネプちゃん…」

なのは達はパープルハートを心配した。

パープルハート「でもまあここの人たちはみんな個性的だから特に心配はないけど」
銀時「いや、個性的ってちょっと不安なんだけど…」

銀時は少し不安になる。

ポーン

呼びだしベルが鳴る。

パープルハート「あら?呼び出しが来たから銀時、また今度ね」

パープルハートは別のテーブルへ向かった。

銀時「…なんだかなぁ」

銀時はひとり呟く。

パープルハートは次の仕事に取り掛かろうとした。

パープルハート「ん？」

すると、さっきからオドオドしている少女とそれを眺める少女がいた。

パープルハート「…何やっているの？」
オレンジの少女「ひゃっ！？」
濃い紫の少女「お！？」

パープルハートは声をかけると2人はビックリした。

オレンジの少女「あ、あなたはたしか…」
パープルハート「ネプテューヌよ」
まひる「あ、私は伊波まひるです」
葵「私は山田葵です」

パープルハート達はお互い挨拶した。

パープルハート「ところであなたさっきから店内見てオドオドしてたけどあれどういうこと？」
まひる「あ、えと、それは・・・」

まひるはなんだか歯切れが悪い。すると葵が、

葵「まひるさんは男が嫌いな体質なんですよ」
パープルハート「・・・・・・は？」
まひる「い、いや、体質と言うわけじゃなくて私男性恐怖症なの！」
パープルハート「・・・なるほど」

赤くなって必死に言うまひるに、パープルハートは理解した。

パープルハート「要は店にいる男が怖くてオドオドしていると？」
まひる「…恥ずかしながらそうです…」
銀時「おいネプテューヌ、そこで何やってんだ？」
宗太「ちょっとお客さん！」

銀時が客立ち入り禁止のエリアに来たのにもかかわらず、堂々と入って来た。
そして運悪く、まひると対面してしまった。

パープルハート「あら？」
宗太「あ゛ッ！」
銀時「ん？」
まひる「い、いやあああああああああああああああ！！！！！」

バギィンッ！！！

銀時「グビャアアアアアア！！！！」

まひるが銀時を見るなりグーで顔面を殴り飛ばした。

なのは「え？」

フェイト「ぎ、銀時!?」
新八「銀さん!?」
桂「なんだ?」

銀時の異変に気づいたなのは達は駆け寄る。

まひる「ご、ごめんなさ～～～～～～～い!!!」

まひるは逃げだした。

パープルハート「…宗太、あれどういうこと?」
宗太「すいません、伊波さんは男性恐怖症で男を見るなりすぐ殴り飛ばす癖を持っちゃったんですよ」
銀時「何だその危ない癖!!」

銀時は起き上がって怒鳴る。

宗太「いや別に伊波さんは好きであの癖付けたんじゃないですよ!あれは伊波さんのお父さんのせいなんです!」

宗太は伊波の父のことを説明する。

何でも伊波の父親は、強度の溺愛者らしく、伊波に近づく男達をくっつけさせないために男嫌いにさせた張本人である。
それを聞いた銀時は、

銀時「ふざけんじゃねぇよっ!!そのせいで俺殴られたんかいィィィィ!!!」

まひるの父親に対して切れた。

しかしなのはとフェイトは、強度のシスコンの兄を思い出してしまったが。

宗太「まぁ俺がその男性恐怖症を直すためにいろいろ努力してるんですがね」

パープルハート「…その努力は殴られる回数のこと？」

宗太「・・・・・・・・・・・・・・・」

パープルハートの一言に、宗太は顔をそらす。

パープルハート「・・・まぁそれはともかく、まひる、そこで隠れてないで出てきなさい」

パープルハートが壁の奥にいるまひるに声をかける。

まひる「で、でも、男って大きいし、強そうだし…乱暴だもん！」

銀時・新八・アイエフ「お前（あんた）が言うなっ！！」

銀時と新八とアイエフが突っ込む。

パープルハート「大丈夫よまひる。もしそんな男と出会ったら問答無用でなぶり殺していいから」

まひる「ええっ！？」

銀時「お前何言っちゃってんの！？」

パープルハートの物騒すぎる一言に、まひるは驚き、銀時は突っ込む。

すると、パフェを頬張る杏子がやって来た。

杏子「まぁよく分からんが、ネプテューヌ、仕事に戻った方がいい

ぞ」
パープルハート「あら店長」
新八「店長っ!!?あれ店長!?」

新八が杏子を指差してパープルハートに聞く。杏子は片眉をあげる。

パープルハート「彼女は正真正銘の店長よ」
新八「いやこの人が店長なのは分かりましたが、この店のパフェ食べてる店長がいるわけないだろ!!」
杏子「パフェを食べて何が悪い。あ、八千代、おかわり」
八千代「は～い、杏子さん♪」

杏子は八千代にお変わりのパフェをもらう。そして食べる。

新八「オイィィィィィィィ!!!!店員使ってパフェ食べてんじゃねぇぞあんたァァァァァァァァ!!!!」

新八は傲慢な杏子に怒鳴る。が、

チャキッ

八千代「ちょっとそこのあなた。杏子さんに向かってあんたって何？（殺気）」

八千代が殺意の波動を出し、新八の首筋に刀を当てる。
しかも真剣である。
新八や周りのなのは達は真っ青になる。
ただ杏子はパフェを食べているため見ていない。
そしてパープルハートは本物なのねと刀を感心する。

杏子「八千代、次はイチゴを頼む」
八千代「ハイ！杏子さん！」

杏子の頼みに八千代は刀を鞘に戻し、すぐに厨房へ向かった。
新八は助かったことでへたり込んだ。

パープルハート「忠実なのねあのチーフは」
銀時「いやいやいやいや、忠実で済む問題じゃねぇよ！」
桂「あの2人は何の関係があるか知らんが、仲が宜しければいいだろう」

桂は八千代と杏子の関係を評価する。

パープルハート「どうでもいいけど、まひる後ろよ」
まひる「え？」

まひるは後ろを振り向くと、桂と眼があった。

まひる「きゃあああああああああああ！！！」

バキッ！バキッ！ドカッ！！

桂「ゴブァアアアアアアア！！！」
はやて・ベール「桂さんっ！？」

桂はまひるにぶっ飛ばされ、はやてとベールが駆け寄る。

ファミリーレストラン『ワグナリア』、今日も一日平和である。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

宗太「こんにちわ、ＷＯＲＫＩＮＧ！から小鳥遊宗太と」

ぽぷら「種島ぽぷらがお送りするよ！」

銀八「おしいくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『大丈夫です。登録しなくてもちゃんと見れるようです。…と言うか

鳴神ソラ&ツッコミトリオ「どんな寝顔ォォォォォォォォォォォ！！！？？Σ（ 口 ；）」

ネス「ありえなさ過ぎる；」

マリオ「そうか？俺も時たましちゃってる時があるって冒険中に仲間から言われてるぞ？」

リュカ「（しちゃってるの！？）」

ドクター「…銀時君達に完治する薬をおくっとこう；」

ルイージ「新八君…此処の君は目立ってるから気を武器に纏わせる様な能力が良いんじゃない（涙）」

マリオ「皆に質問『前回の質問で答えたキャラでどんなスポーツをやる？』」

ルイージ「銀さん達に質問『…ネプテューヌさん達にどんな目にあってああ言う風になったの；』」

フォックス「皆に質問『作者が『月夜に舞う龍』で書いてる作品でどれがお気に入り？ちなみに3作品答えてくれ』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

スネーク「見るからに店番か？」』よし、まずは1つ目だ」

銀時「野球だ」

新八「僕もです」

神楽「ハンマー投げネ！」

桂「野球だ」

エルザベス『ポケモンマラソンですね』

月詠「卓球じゃの」

ネプテューヌ「野球だよ！」

ノワール「スキージャンプかしら？」

ブラン「・・・バレーボール」

ベール「フィギュアスケートですわ」

コンパ「ス、スポーツはちょっと…」

アイエフ「卓球ね」

九兵衛「二人三脚だ」

なのは「私はやらないよ」

フェイト「マラソンランナーかな」

はやて「スケーターやってみよっかな？」

シグナム「騎馬戦か？」

ヴィータ「ハンマー投げだぜ！」

シャマル「私はしないわ」

ザフィーラ「マラソンだ」

スバル「野球です！」

ティアナ「彼と二人三脚かしら」

エリオ「１００メートル走です」

キャロ「グライダー飛行です」

ヴィヴィオ「野球だよ」

銀八「なるほど。２つ目は」

ガタンッ！

なのは、フェイト、はやて、シグナム、リインフォース、銀時、新八、スバル、ティアナ、桂が白目むいて気絶した。

銀八「・・・え～、言葉にできないほどのようです；」

宗太・ぽぷら（一体何があったんだ（の）っ！？）

銀八「気を取り直して３つ目はこれです」

紙に、

『 魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ ～集まりし仮面の戦士～』

『東方魔弾戦記』

『とある科学と魔術と鍵の勇者』

…と書かれている。

銀八「そんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

宗太「そ、それじゃ次はペンネーム『ｓｄｆｇｆａｓｄｇ』さんからの質問。『銀さんはスタンド温泉の時のようにサチコたちも憑依できますか？
できるとしたら、閣下になりますか？』…ってなんだこれ」

真王「私が答えます。無論サチコ達はその気になれば憑依できますよ。もしかしたら閣下のも成っちゃったり」

ぽぷら「閣下？閣下ってあのアイドルの…」

宗太「違います先輩。デーモンの方の閣下です」

ぽぷら「あ、そっか」

宗太「では『ｓｄｆｇｆａｓｄｇ』さん。あなたはスタンドにならないでください」

ぽぷら「次はペンネーム『黒龍』さんから、『サチコ「黒龍さんいる～～♪」

ソラ「ん？サチコか」

サチコ「あ！ソラお兄ちゃん！♪」

サチコはソラを見つける。
そしてなぜだがソラの前では暗い雰囲気がなくなっていた。

ソラ「どうした？」

サチコ「黒流さんに～お仕置きに来たんだよ～♪」

ソラ「黒龍ならいないぞ。それとお前に置手紙だそうだ」

サチコ「どれどれ～」

サチコは置手紙を見た。

『俺を捜さないでください。Ｐ．Ｓ．銀さん達も俺と一緒です』

サチコ「ええ～」

サチコは残念そうにする。

ソラ〈俺には声が掛からなかったが、囮か〉

ソラ「いないなら仕方ないだろ」

サチコ「しょうがないか～。あ！そう言えば私が贈った料理はどうだった～？」

サチコは期待の目でソラを見る。

ソラ「ん？ああ、あれか。気絶する程マズかったな」

サチコ「そ、そんな～（涙）」

サチコは泣きそうになる。

ソラ「だから、今度料理の仕方を教えてやるよ」

サチコ「え！？」

ソラ「お前だって人の苦しむ姿より、喜ぶ姿で食べてもらうほうが嬉しいだろ」

サチコ「お、お兄ちゃん（涙）」

サチコは嬉しいそうな顔になる。

ソラ「だから今度教えてやるよ」

ソラはサチコの頭を撫でる。

サチコ「うん！」

ソラ「まぁ、俺はこれから黒龍が聞くはずだった質問言わないといけないから、教えるのはまた今度だ」

サチコ「分かった～♪」

ソラ「じゃあ、質問だ。『皆さんに質問です。ソラの女の姿をどう思いますか？』ってなんだこれは？」

ソラは呆れる。

ソラ「次、『あの、ロリコンエロ仙人である、洞爺湖仙人がそっちの皆さんに必殺技、ゴットハンドクラッシャーを教えてに行きまし

たがどうしますか?』また、あいつか・・・」

ソラは間を空けて最後の質問を言う。

ソラ「最後、『ゼゼルが前にザコ呼ばわりされたので、皆さんを幽霊になってふっ倒しに行きましたどうしましょう?』・・ろくな質問がないな・・・」

ソラは呆れる。

サチコ「じゃ～私は帰るね～」

ソラ「ああ、帰る前にこれを渡しておく」

サチコ「ん～?」

ソラ「生身になれる薬と大人（しかもかなりの美人）になれる薬を黒龍からプレゼントだそうだ」

サチコ「ありがとう～♪」

サチコは薬を合計二百本貰う。

ソラ「じゃあな」

サチコ「じゃ～ね～♪」『って私もその薬欲しい～!」

宗太「駄目です先輩!先輩はそのままがいいです!てかむしろその身長のままにしてください!」

銀八「ロリコンかよ…、ま、いいや。まず一つ目」

全員「カッコ良くて奇麗だ」

真王「なかなかの人ですね」

幽香「私とどっちが強いかしら」

真王「コラコラ出てくるな」

幽香「ちっ」

銀八「・・・次、２つ目はその仙人は教えているにもかかわらず、全員うざくてその仙人をぶっ飛ばしましたよ」

真王「一名はあれだけど」

ネプテューヌ「ゴッドハンドクラッシャー！！」

ザコ敵「ぎゃあああああああああ！！！！」

巨大な黄金の手がザコ敵を潰した。

銀八「えええええええええええええええ！！？マジで習得したのかあいつ！？」

真王「３つ目だけどザコ敵に紛れて潰されましたね」

ぽぷら「（本当に大丈夫かな…）『黒龍』さん。廊下に立ってね」

真王「最後は『黒神』さんからだ。『九兵衛へ
チンクとは仲良く出来そうですか？
マヨラーへ
自分は九兵衛さんに負け、銀さんはその九兵衛を倒しましたので、銀さんに剣が劣っていると認められますか？
みんなへ（シャマルを除く）
もしシャマル鍋を必ず食べなきゃ行けない試練が来た場合、生きて帰れる自信はありますか？』…まず九兵衛」

九兵衛「仲良くする気はない！」

真王「・・・次土方」

土方「認められるか！！」

真王「・・・そして最後に全員」

全員「ム、無理だ…」

ネプテューヌ「え？おいしいよ？」

真王「平気なのはあんただけ。『黒神』さん。ネプテューヌに鍋の準備を。

それと『鳴神ソラ』さんからキャラバトンを公開します」

『キャラセリフバトンですけど…こっちなら…マリオ、ルイージ、ソニックで…

■0．キャラクター選択時
「俺だな」
「あっ、僕？」
「ＯＫ，俺だな」
■1．エンカウント・通常
「良し！行くぞ！！」
「出て来たよ！」
「パーティの始まりだぜ」
■4．勝利
「ＷＩＮ♪」
「やったね」
「俺達の勝利だな」
■5．楽勝
「今回は楽勝だったな」
「楽勝に終わって良かったね」
「楽勝だったぜ」
■7．戦闘不能
「マンマミ～ア」
「ゴメン、体力が…」
「ノォ～～」
■8．戦闘復帰
「サンキュー！」
「助かったよ」
「センキュー♪」
■19．バトンタッチ

「此処は任せたぜ○○○」（○○○の部分は交代する仲間の名前）
「任せたよ！」
「バトンタッチだ」
■４３．必殺技
「これで決めるぜ！」
「いっくよ！！」
「決めてやるぜ！」
■５０．回す人
「真王の銀時にパスだ！」
「それじゃあ真王さんの新八君に回すね」
「真王のネプテューヌに回すぜ♪」』

真王「いかがでしょうか。次回もお楽しみに」

第二十八訓：店が個性的なら店員も個性的（後書き）

真王「ワグナリアでタダ働きすることになったパープルハート。そこで客のようだけど只の客と思えない人たちが」

ぽぷら「次回『個性的な客の対応は難しい』テイクオフだよ！」

～予告～

ナレーション「ワグナリアにＳＯＳ団と達人揃いと悪魔っ娘宇宙人となのはの友達・ご両親がやってくるそうです」

第二十九訓：個性的な客の対応は難しい（前書き）

真王「何かいろいろと現れそうです」

ぽぷら「『リリカル銀魂』始まるよ！」

第二十九訓：個性的な客の対応は難しい

前回、

パープルハートはやさぐれに絡まれ、料理を倒され、怒りでやさぐれたちを倒したものの、壁ごと壊してしまい、ワグナリアでタダ働きする羽目になった。

パープルハート「はぁ・・・」

パープルハートは箒を持ってため息をつく。
今、外で宗太と拭き掃除をやっているのだ。
ちなみにワグナリアは開店時間前である。

宗太「どうかしましたか？」
パープルハート「どうしたもこうしたも、何でこんなことになったのかな～、って」
宗太「・・・・・・・・・・・・・」

宗太は少しパープルハートに同情する。

宗太「そろそろ開店時間ですね」
パープルハート「そうなの？だったら準備しなければいけないわ」

宗太とパープルハートは、店の裏入口へ入っていった。

ワグナリア・休憩室

杏子「お？ネプテューヌ、お前に新人が来たぞ」
パープルハート「新人？」

杏子に新人が来たと言われ、中を覗き込むと、

ブラックハート「あら、ネプテューヌ」
ホワイトハート「もう来たの」
グリーンハート「お待ちしてましたわ」

作業服を着たブラックハート達がいた。パープルハートは驚く。

パープルハート「あなた達…、どうして」
ブラックハート「ネプテューヌだけだといけないから来ただけよ。あと別に寂しいからじゃないからね！」
ホワイトハート「私は只の付き添い」
グリーンハート「店長さんにネプテューヌの知り合いって言って一緒に借金返済をさせようと思いまして」

どうやらパープルハートを助けるために来たらしい。
パープルハートは自然に笑みをこぼす。

杏子「挨拶は済んだか？始めるぞ」
女神組「はい店長」

ワグナリア店内

女神組「ありがとうございました」

パープルハート達は客の接待、オーダー、ウェイターなど様々な仕事をこなしていた。

そして、そんな時、

ピロピロピロピロ～～～ン♪↑自動ドアの開く音

パープルハート「いらっしゃいませ」

ワグナリアに5人組の学生集団が来た。

リーダーっぽい少女「へぇ～、此処ワグナリアって言うのね」

銀時声の少年「看板に書いてあっただろハルヒ」

ハルヒ「それくらい知ってるわよキョン」

パープルハート「（銀時？…そんなわけないよね）5名様ですね」

キョン「あ、はい。長門、朝比奈さん、そしてホモ野郎、早く座るぞ」

ホモ？「ホモだなんて失礼ですね。私は古泉　一樹と言う名前がありますよ？」

何かいろいろと会話があるが、キョンたち「ハルヒ達よ！！」・・・

ハルヒ達は席に座った。

グリーンハート「それではお客様、ご注文はどうされますか？」
ハルヒ「う～ん…ウーロン茶とこのスパゲティーね」
朝比奈「わ、私はハンバーグです！」
長門「…たらこスパゲティー…」
小泉「私はカルボナーラですね」
キョン「俺はこのイチゴパフェをお願いします」
グリーンハート「かしこまりました。（本当に銀さんそっくりの声ですわね）」

グリーンハートはそう思いながら厨房へ向かった。

ハルヒ「さて、我らがＳＯＳ団は、本日ここでミーティングを開始する！」

いきなりハルヒが言いだした。

キョン「おいおい、なぜにそんなん始めんだ？」
ハルヒ「このＳＯＳ団にあってはならないのは退屈なことよ！退屈だと何をやるべきか考え込んでしまうものなのよ！」
小泉「分からない訳ではありませんね」
キョン「だからってなんでなんだ？普通に落ち着くことができないのか？」

キョンの一言に、ハルヒが喝を入れる。

ハルヒ「落ち着く？そんなんお断りよ！この私が黙ってじーっとしているなんて存在が許さないわ！」

ハルヒはテーブルに足を乗せて言う。

パープルハート「…お客様、ご迷惑なのでお静かにしてもらえますか？」

たまたま通りかかったパープルハートが、ハルヒを注意する。

ハルヒ「すいませんが私はこれでも忙し」

ガシッ

パープルハート「お静かにしてもらえますか？（殺気）」

もう一度ハルヒに注意するパープルハートは、後ろに鬼神が見えるくらいの殺気を放つ。

ハルヒ「ハイ、スイマセンデシタ」

ハルヒは片言になって席に座った。朝比奈と長門、そして周りの客達はガタガタ震えている。

キョン（逆らったら命が危ないな…）

キョンは殺気を放ったパープルハートを見て、冷や汗流してそう思った。

グリーンハート「いらっしゃいませ」

ワグナリアに客が入って来た。入って来たのは、中高学生くらいの少年と少女、そして、

何かすごそうな老人「ふむ、此処はいいところじゃの」

老体ではありえない背の高さを持つ老人とその他が入って来た。

極道顔の男「おい今その他扱いされた気がするぞ」

白目の男「うむ、私もそう思った」

中華人「おお～、いいお譲ちゃんがいるね」

変わった外国人「駄目だよ剣星、手を出しちゃ」

ひ弱そうな少年「師匠達の会話がなんか気になるけど、美羽さん、どうしますか？」

美羽「何でもいいですわ。一緒に入りましょう兼一さん」

入って来た客達は、只の客とは思えない気迫を出している。（2人は除く）

グリーンハート「え～っと、ひ～、ふ～、み～……8（●）名様ですね」

グリーンハートは入って来た客の数を数えて、8名だと答える。

しかしこの場にいるのはグリーンハートを除くと7人しかいない。

兼一「え？8名？7名じゃなくて？」

グリーンハート「あなた方と上にいる方ですよ」

グリーンハートはそう言うと、箒をもって天井をつつく。

すると張り紙みたいなものが剥がれ、忍者服の女性が張り付いていた。

クノイチ？「見つかっ…た」

兼一「し、しぐれさん!?なんでそこに!?」
白目の男（ほぅ、しぐれの居場所を見破るとは、この者かなりの達人だろうな）

兼一は天井に張り付いている忍者服の女性・しぐれに驚き、白目の男・岬越寺　秋雨はグリーンハートを評価する。

グリーンハート「では、こちらへどうぞ」

兼一達は席に座る。

兼一「…この店なんかすごいですね～。何時かほのかもつれて来ようかな?」
アパチャイ「賛成だよ!ほのかもきっと喜ぶよ!」
しぐれ「…コクッ」

兼一の妹・ほのかも連れて来るべきかと思う兼一に、アパチャイとしぐれが同意する。

ブラックハート「ご注文はお決まりでしょうか」
兼一「あ、それじゃあ」

以下略…

ブラックハート「かしこまりました」

ブラックハートは厨房へ向かった。

数分後…

ホワイトハート「ハンバーグ定食・・・お持ちしました」

ホワイトハートが料理を持ってきた。

兼一「え?こどm「あ?」いえすいません、ごめんなさい」

子供と言いかけて、ホワイトハートに睨まれ、謝る兼一。

隼人（ふむ、あの娘達は相当な強さを持っておるの）

美羽の祖父であり、彼の道場・梁山泊の主である風林寺隼人は、パープルハート達を見定めている。

パープルハート「いらっしゃいま…あら銀時」

銀時「ようネプテューヌ」

次に入って来たのは銀時と、新八、神楽、ヴィヴィオ、なのは、フェイトだった。

グリーンハート「あら銀さん、なのはさん達もご一緒で」

なのは「ベールさん、こんにちわ」
新八「何かいろいろ来てますね」
ヴィヴィオ「ママ～、早く座ろうよ～」
フェイト「フフッ、もう少し待ってねヴィヴィオ」

銀時達は席に座ろうとした。

ピロピロピロピロ～～～ン♪

パープルハート「いらっしゃいませ、6名様ですか？」

男「はい、そうです」

6人の客が入って来た。なのははその男の声に聞き覚えがあった。

なのは「その声、お父さん！？」
なのはの父「む？なのはか！」
なのはの母「あらあら」
なのはの兄「なのはだと？」
なのはの姉「わ～、なのはお久しぶり～？」
紫髪の少女「え？なのはちゃん？」
金髪の少女「なのは！？」

なのはが声をかけ、なのはのご家族と友達も気づいた。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃんまで、何でここに？」
なのはの父「いや何、ちょっとした家族旅行なだけさ。ちなみに店は閉店にしてあるから」
アリサ「そしてこの店に着いたらなのはがいたんだもん」
すずか「ちょっとびっくりしちゃったよ」

なのはの父・士朗は答え、アリサとすずかも答える。

士朗「おや？貴方は・・・銀時さんじゃないですか？」

銀時「おお、久し振りだな」

士郎は銀時の事を知っているようである。

詳しくは赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは～魔法少女と銀髪の侍～』の『第三十四訓：引っ越しといえば引っ越しそば』で。

１０年前とは全然変わっていない銀時に不思議がる士郎だが・・・

それは気にしないで置く事にした。

パープルハート「あら、銀時の知り合い？」

銀時「ん？まぁ知り合いっちゃあ知り合いだな」

士朗「はじめまして、なのはの父親の高町士朗です」

桃子「その妻の桃子よ」

恭也「兄の恭也だ」

美由希「姉の美由希で～す♪」

アリサ「私はアリサ・バンニグスよ」

すずか「私は月村すずかです」

パープルハート「丁寧にどうも、ネプテューヌよ」

パープルハートも挨拶する。

士朗「しかし銀時さんがなのはと一緒にここにいるなんて・・・今日は何様で？」

士郎がそう言うと銀時がその訳を言おうとした瞬間、

なのはは銀時の関係を言いだす。

なのは「銀さんは私の未来の旦那様だよ♪」
なのはがそう言うと銀時とフェイトは氷づくのである。

士朗・恭也「何!?」

士郎と恭也は銀時を睨みつける。アリサとすずかと美由希は唖然とし、桃子は小悪魔のような笑いを浮かべる。
なのはは両手を顔の頬っぺたにつけて顔を真っ赤に染めてニヤける。
青ざめた銀時はなのはを言い出す。

銀時「おいぃーー!?何普通に嘘ついてんだ!」
なのは「にゃはは、大丈夫だよ♪これから本当になるから♪」
銀時「え?何?銀さんの未来はもう決まっているの!?」
フェイト「なのは!!なにいきなり抜け駆けしてんの!!」
なのは「フェイトちゃん、銀さんは渡さないよ」
フェイト「なのはにも渡す気はないよ!」

なのはとフェイトは言い争いを始めた。
そしてなのはの父と兄が殺気が銀さんに突き刺さって来くる。
何?　この殺気。めっちゃ怖いんですけど!
すると二人はメッチャ早く銀時に近づきだして・・・・

士朗・恭也「娘（妹）は、やらないぞ!!」
銀時（親バカとシスコンがいたー!）

そして2人とも力いっぱいに肩を掴みだそうとした。

ガシッ

パープルハート「・・・ちょっとあなた達」

しかしパープルハートが2人の腕を掴んで止めた。

パープルハート「どういうことかしらないけど、銀時に手を出すな」

パープルハートは、まるで獲物を狙う獣の目をして、殺気を出して士朗達を睨む。その目を見た士朗達は驚く。

士朗（この娘、只の店員ではないな。戦いに慣れている程度ではなさそうだ）

秋雨「おや？もしかして御神流のものかね？」

士朗はパープルハートを見てそう思った。

秋雨が士朗達に声をかける。

士朗「む？どうしてその名……あなたはもしかして岬越寺　秋雨さんでは！？」

秋雨「ほう、わたしをしっているとは」

銀時「え？どゆこと？」

なのは「お父さん、この人知ってるの？」

なのはが秋雨のことを聞く。

士朗「知ってるも何も、この方は『哲学する柔術家』という二つ名を持つ有名人で、しかも書画・陶芸・彫刻・演劇・音楽・茶道と何でもこなし、『書・画・陶芸・彫刻のすべてを極めたと謳われる天才芸術家』と謳われ芸術家として著名な方なんだ」

銀時「えぇ～～～！マジでっ！！？」
なのは「そ、そんなに有名人だったの！？」

銀時となのはと、周りの客、宗太達も驚く。

恭也「その天才芸術家と会えるだなんて、俺夢見た気分だ…」
美由希「私もそう思った」
アリサ「彼の芸術作品はすべて一位取りみたいね」
ハルヒ「じゃあ、そこに座っているのは達人揃いがいると言う『梁山泊』って人たちかしら」
朝比奈「ええ！？」
長門「…ユニーク・・・」
兼一「あはは、僕はその弟子なんですけどね…」
美羽「兼一さん、それフォローになってませんわ」
宗太「凄い有名人を入れてしまったな…」

周りはそれぞれそんなことを言う。

パープルハート「ま、それはともかく、席に座りますか？」
士朗「あ、ああ、すまない」

士朗達は席に着いた。秋雨も席に戻った。

そのあとも、いろいろとなんかやっちゃったりする。

ララ「待ってよリト！」
リト「いやだから駄目だって！」

２人の少年少女が、なんだか少年が逃げ、少女が追いかけている。

リト「うわ！っぷ！」

運悪く足を踏み外し、ブラックハートの胸にダイブ。

ブラックハート「き、きゃあああああああああ！！！！」

バキッ！

リト「おごっ！」

ブラックハートは顔を赤くして、リトを殴り飛ばした。
しかもその先にはまひるが、

まひる「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

バキバキバキバキバキバキバキバキバキバキドガッ！！

リト「ぎゃあああああああああ！！！！」
ララ「リトッ！？」
まひる「ごめんなさ～～～～～い！！」

リトを殴り飛ばしたまひるは、そのまま逃げだした。

ブラックハート「…殴った本人が言うのもなんだけど、大丈夫？」

新八「いやいや、これどう見ても大丈夫じゃありませんよ！」
パープルハート「・・・・・あら大変。この子心臓止まってるわ」
新八「最悪だ～～～～～～！！！」
ララ「リトーーーーーーー！！！」

神楽「おいテメー、その大きなもんをこっちによこせヨ」
キサラ「そうだ牛乳。てかそれ亡くせ」
美羽「なに言ってるんですか…ってキサラさん！？何でここに？」
新島「俺らもいるぜ～、白浜」
兼一「うわ！新島！？」
新島「お前らだけ楽しもうだなんてそうはいかないぜ。『新白連合』勢揃いだぜ？」
秋雨「兼一君の友達はホント元気がいいね」
兼一「そういう問題ですか！！」

銀時「・・・・・・」
キョン「・・・・・・」
グリーンハート「似てますね」
ハルヒ「似てるわね、雰囲気が」
銀時・キョン「似てねぇよっ！！」
グリーンハート「ハモリましたわ」
ハルヒ「おまけに声そっくりね」

しんのすけ「奇麗なお姉さ～～～ん！」

パープルハート「あらあら、いきなりのナンパね」
ひろし「しんのすけ、失礼だろ」
パープルハート「そう言うことだから降りてくれない？」
しんのすけ「え～、もっとお姉さんと「さっさと降りなさい」…ハイ」

殺気出してしんのすけを降りさせる。

ひろし（こ、こえ～・・・）
みさえ（しんのすけが素直に降りたわ…）
ひまわり（たやぁ・・・）

マリオ「うめ～！このキノコソテーうめ～～！」
ルイージ「兄さん少しおちついて食べてよ。それじゃ喉が詰まるよ」
マリオ「悪ぃ、そうするわ」

ゆり「・・・・・・・・・」
ハルヒ「・・・・・・・・・」

ガシッ

ゆりとハルヒはお互い見あった後、握手した。

キョン「ハルヒが2人になった気がする」
音無「俺はなんだかゆりが2人に見えたぞ」

こなた「銀時っ!?本物の坂田銀時だ!!サインください!!」
銀時「・・・何だこのガキは?」
かがみ「すみません、この子オタクですから」

コンパ「・・・・・・・・・」
朝比奈「・・・・・・・・・」

ガシッ

コンパ「お互い頑張りましょうです」
朝比奈「はいです」
小泉「こっちも似た者同士がいますね…」

宗太「今日は大繁盛ですね」
パープルハート「そうね」

ファミリーレストラン『ワグナリア』、今日も一日平和である。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

八千代「ハイ、アシスタントするのは杏子さん大好き・轟八千代と」

まひる「い、伊波まひるです」

銀八「あ～、暴力女で有め「バギッ」ごはっ！！」

まひるに殴られ、銀八は気絶した。

八千代「先生をほっといていきましょう。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『ルイージ「ネプテューヌ、大変だな；」

フォックス「良い事したけど弁償でな…と言うか今回出て着たの確かに個性あり過ぎだなおい！！」

スネーク「それで良いのか？と突っ込まざる負えないな…

ネス「それで男性恐怖症とは…」

リュカ「殴られた人たちご愁傷様；」

スネーク「今回（ワグナリア編）に出てきたメンバーに質問『銀時達を見た第一印象はどんな感じだった』」

ルイージ「サチコちゃんに質問だけど『ネプテューヌがいない時って普段何してるの？』」

フォックス「そんで俺から皆に質問『前回の質問で選んだ3作品の理由を言ってくれ、なお、3作品一纏めての感想じゃなく別々でなおかつ長め（5文字以上）に頼む』」

させ…次回は色々来るらしいね…

リュカ「どうなるのかな？；」『ではまず一つ目から」

宗太「銀さんは普通の人ですね」

まひる「え？あんな凶暴な人が？」

宗太「違います伊波さん。新八君はなぜか俺と同じ感じがしますね」

杏子「あのチャイナはかなりの胃袋もちだな」

佐藤「俺は桂が気になるな」

相馬「エリザベスさんって不思議だよね」

ぽぷら「月詠さんは顔に傷があるけど奇麗だったな～」

杏子「私はネプテューヌと食い友達になれる気がするぞ」

相馬「ノワールさんはツンデレだね」

宗太「ブランちゃんは僕の好みに入りますね」

ぽぷら「ベールさんは大きい人だね！（違う意味で）」

八千代「コンパさんはおっとり性ね」

宗太「アイエフさんは突っ込み担当ですか？」

真王「なのは達はカットします。２つ目はサチコ」

サチコ「お姉ちゃんがいないときは銀時と遊ぶか、なのはさん達を驚かすかだよ～♪」

まひる「ものスッゴイ迷惑行為ですよね！？」

真王「最後の三つ目ですが、バラバラ答えはめんどくさいので私がすべて答えます。

まず、『とある科学と魔術と鍵の勇者』ですが、これは銀時、ネプテューヌ、新八、スバル、なのは、フェイトが選びました。主人公のヴェントゥスとヴァニタスが仮面ライダーになって戦うことが印象です。あと私キングダムハーツ好きですよ。

次に『東方魔弾戦記』ですが、これはノワール、ブラン、ベール、桂、エリザベス、月詠が選びました。リュウケンドーとゼロの模擬戦で火がついたらしいそうで、ぜひ挑戦したいそうです。あとファルコ、いろいろご愁傷様です。

最後に『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～集まりし仮面の戦士～』ですが、これはネプテューヌ、銀時、桂、神楽、なの

はが選びました。なのはと仮面ライダーのコラボが面白かったそうだ。私はなのはと書かれてたから見ただけだが」

まひる「えっと・・・『鳴神ソラ』さん。ろ、廊下でお殴りしてよろしいですか？」

真王「宜しくない！」

まひる「ごめんなさい…」

八千代「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんから質問。『質問です

スカリエッティとナンバーズは何時出るんですか？
そして出る時は敵なのですか？それとも味方なのですか？
以上です』」

真王「ナンバーズはまだですが、スカリエッティは次回の次回で出します。それとこういう物語（ストーリー）にはスカリエッティ達は味方もんですよ」

まひる「で、では『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下で立って殴られてください」

真王「止めろっつーのっ！！」

第二十九訓：個性的な客の対応は難しい（後書き）

真王「今回登場したのは、『Ｔｏｌｏｖｅる』『涼宮ハルヒの憂鬱』『史上最強の弟子ケンイチ』『クレヨンしんちゃん』『らき☆すた』『マリオ』でした。次回は店の裏に酔っ払いが倒れていた。だが宗太はその酔っ払いとはいやな関係らしいが…」

まひる「じ、次回『いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う』テ、テイクオフ！」

第三十訓：いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う（前書き）

真王「本編が少し短いですが見てください」

第三十訓：いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う

八千代「ごめんね、一緒に買い物付き合っちゃって」
パープルハート「いいのよ、気にしないで」

パープルハートと八千代は買い物袋を持って歩いている。材料補給のためにワグナリアへ帰るところらしい。

パープルハート「ん？」
八千代「どうかしました？」
パープルハート「あそこで何か動いたような…」

パープルハートは草場を指差す。しばらく見ていると、

ガササッ！

パープルハート・八千代「！？」

草場から手が出た。

ワグナリア・休憩室

そこでパープルハートやぽぷら達が集まっている。そこで宗太が遅れてやって来た。

宗太「おはようございまーす。ってどうしたんですか？」
ぽぷら「あ、かたなしくん」
パープルハート「小鳥遊、酔っ払いが近くで倒れてたのよ」
宗太「酔っ払い…」

宗太が酔っ払いと聞くと、少し元気がなくなってきている。とりあえず宗太はその酔っ払いを見ると、オレンジのロングではしたない恰好をした女性が寝ていた。そして徐背は目を覚まして宗太を見た。

女性「宗太ーーーーーーー！！」
宗太「うわっ！」

いきなり女性が宗太に抱きついた。

パープルハート「…知り合いなの？」
宗太「あ、いえ、この人は俺の親戚ですから。酔っ払うと何かいろいろあれになっちゃうんですよ」
ブラックハート「あれってなにっ！？」
宗太「それはともかく、この人は俺が何とかしますから、仕事に戻ってくれませんか？」

パープルハート達は一応従い、仕事場に戻った。そして宗太は酔っ払いの女性へ向いて、怒気混ざりに聞いた。

宗太「何でこんなとこにいるんだよ…」
女性「だってだって、彼氏に振られちゃって宗太に慰めてもらいたかったんだもん」
宗太「帰れよ、梢姉さん」

酔っ払いの女性・梢は泣きながら言うが、宗太は冷めた口調で言う。

パープルハート「へぇ～、その人あなたの姉さんなのね」
宗太「ええ、うちの……ってネプテューヌさん!?それにノワールさん達もいつから!?」
パープルハート「一応気になったから戻って来たのよ」
パープルハート達は宗太達の話を聞いてたようだ。

梢「宗太の姉の小鳥遊梢で～す♪」
宗太「ちょっ!なんでいきなり自己紹介…グオワ!」
宗太が止めようとしたら、梢が後ろをついてサブミッションで絞めた。

梢「全く、何で宗太はこんなに冷たくなったのかな～。昔はこんなに可愛かったのに…」
梢が一枚の写真を取り出して見ている。ところが宗太は顔を青くした。

宗太「ちょっ待て!それは「それ♪」ああっ!!」
梢がパープルハート達へ写真を飛ばす。拾ったパープルハート達は写真を見ると、1人の女の子が映っていた。

グリーンハート「あらあらこれは」
ホワイトハート「幼女時の写真か?」
ブラックハート「け、結構かわいいわね」
梢「そうでしょう?それ宗太」
女神組「っ!!!??」

映っている女の子が宗太と言われ、ありえないような顔をする。

宗太「ネプテューヌさん！」

梢「あら？いつの間に」

いつの間にかサブミッションから抜け出した宗太が、汗流してパープルハート達に言う。

宗太「このことは誰にも言わないでくださいよ！姉のこととか、この写真のこととか！」

宗太は必死な顔で言う。相当嫌な思い出らしい。

パープルハート「…わかったわ」

パープルハート達は承諾し、酔いがさめた梢は家に帰った。

宗太「全く、何で梢姉さんが来るんだよ…」

パープルハート「よほどあなたの姉が嫌いみたいだけど何かあったの？」

皿洗いをしているパープルハートは、宗太に聞いてみた。

宗太「嫌いと言うよりあの人は超が付くほど飲んだっくれですよ！！それどころか俺の居ぬ間に大量の酒買いやがって！ハァ…今月の

会計大丈夫かな・・・」
パープルハート（何か・・・いろいろ大丈夫かしら？）
パープルハートは心配になった。

夜

パープルハート「閉店時間ね」
ぽぷら「それじゃあみんなさようなら～！」
宗太「さようなら先輩！伊波さん、来ましょうか」
まひる「う、うん…」

そう言う宗太とまひるの手には、マジックハンドが握られていた。

ブラックハート「・・・なにそれ？」
ホワイトハート「新手の遊び？」
グリーンハート「あらあら…あなた達その様な趣味が」
宗太「違います！伊波さんは男性恐怖症だからこれを使ってるだけです！」

女神たちはジト眼で宗太を見て言うが、宗太は否定する。

パープルハート「・・・直接は駄目なの？」
まひる「ごめんなさい・・・そう言うのはとても…」
パープルハート「あ～はいはいわかったわ」

パープルハート達は一応承諾した。

宗太「それではまた明日」
まひる「そ、それじゃあ…」

宗太とまひるは帰った。

パープルハート「・・・やっぱ心配だからおうわよ」
ブラックハート「大丈夫よネプテューヌ、私達もそう思ったから」

女神たちは宗太とまひるを追いかけた。

まひる「ありがとう小鳥遊君。また明日」
宗太「伊波さんもまた明日」

宗太とまひるが別れた。まひるは実家へ帰った。

グリーンハート「まひるさんは無事に帰りましたわね」
パープルハート「ついでだから宗太の家にお邪魔しようかしら」

パープルハート達は宗太を追いかけた。

宗太「ただいま～」

宗太はある一軒家に帰った。どうやら宗太の家らしく、名札に小鳥遊と書かれている。

パープルハート「ここなのね」
ブラックハート「見る限り普通の家みたいだけど…」
グリーンハート「それではお邪魔しましょうか」

女神たちは宗太の家にお邪魔しようとする。

ピンポ～～～ン♪

入る前にベルを鳴らす。

???「は～いどちら様ですか～？」

扉から宗太と同じくらいの少女が出てきた。

宗太「なずな、誰か来…ってネプテューヌさんっ！？」
パープルハート「どうも」

宗太が来て、パープルハート達が来たことに驚く。

なずな「あれ？お兄ちゃん知り合い？」
宗太「ああ、紫の髪の人がネプテューヌさんで、銀髪の人がノワールさん、水色がブランさん、緑色がベールさんだよ」
なずな「へぇ～、はじめまして、妹の小鳥遊なずなです」
パープルハート「ご丁寧にどうも。ネプテューヌよ」
ブラックハート「私はノワールよ」
ホワイトハート「…ブラン」
グリーンハート「ベールと申しますわ」

なずなとパープルハート達は自己紹介した。

梢「あら～、あなたたちこの間のじゃない～」

奥から宗太の姉・梢が出てきた。
しかし足取りが悪く、顔も赤い、つまり酒酔いしている。

宗太「また飲んでたのかよ！梢姉さん！！」
梢「何言ってんの～！二日酔いには酒が一番よ～！」
宗太「何処が一番だ！！それどころか余計悪化するわっ！！」

宗太が新八みたいに、梢に突っ込みを入れる。

？？？「何だ？誰か来たのか？」

奥から宗太と同じように眼鏡をかけた女性が出てきた。

宗太「か、一枝姉さん」
梢「あら～、一枝じゃな～い」
一枝「…お前まだ酒飲んでるのか？」

一枝は酒酔いしている梢にジト眼で見る。

梢「いいじゃな～い、飲んだって～。あなた達もそう思うよね～」
女神組「黙れ飲んだっくれ」
梢「即答っ！？しかも酷いっ！」

女神組のピッタリなハモリと冷たい一言に梢は泣く。

ホワイトハート「…寒い」
なずな「寒い?…あ～、ドアが開いてるからだね。お茶あげよっか?」
ホワイトハート「ありがとう」
ホワイトハートが優しそうな笑顔でお礼を言った。
一枝・宗太（か、可愛い・・・／／／）
その笑顔を見た2人は顔を赤くした。
ホワイトハート「ん?」
ホワイトハートはある一つの扉を見た。“開けないで”と書かれた扉が。
ホワイトハートは気にせずその扉を開けると、紙の雪崩と、黒い服の女性が出てきた。
宗太「・・・何やってるんですか泉姉さん」
泉「原稿…終わらない…」
どうやら宗太の姉らしいが、なんだか黒くなっているし、やつれている。
泉「一生懸命と言う物の・・・周りにあるのは失敗作・・・・・・けれど私は諦めない・・・なぜなら私は恋愛小説家だから・・・」
夢のなさそうな生活を送っているような泉。
ホワイトハート「立派な頑張りね。私も応援するから」

ホワイトハートが励ましの言葉を言うと、泉はホワイトハートと手を握った。

泉「ありがとう！おかげで自信が付いたわ」
ホワイトハート「ええ！」

2人の絆がここに芽生えた。

パープルハート「…何？この状況…」
ブラックハート「2人に何か共通点があるのかしら？」

只、パープルハート達や宗太達は何が何だか分からなかった。

とりあえず、パープルハート達は小鳥遊家に居座っている。

パープルハート「え～と、一枝さんは長女で弁護人を役職、次女の泉は恋愛小説家、三女の梢は無職で飲んだっくれね」
梢「ちょっと飲んだっくれはないでしょ」

梢は突っ込む。

なずな「まぁまぁお姉ちゃん、はいお茶」
パープルハート「あらありがとう」
グリーンハート「なずなさんは偉いですわね。宗太さんとは同じ感じですわね」
なずな「あはは、なずなはこう見えて小学生なんだよ？」

女神組「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

一瞬なずなは何か言った気がしたが、もう一回聞いてみた。

グリーンハート「なずなさん？さっきなんて言いました？」

なずな「だから私は小学生なんだよ？」

なずなは自分を小学生と言った。宗太とほぼ同じ身長なのに。

パープルハート「なずな、きっとあなた頭が壊れているわ。直さないと」

なずな「え？」

パープルハートはナズナの頭を持って殴る準備を、

宗太「待て待て待て待て！！なずなはこういうなりだけどもれっきとした小学生だから！」

宗太はパープルハートを止める。

パープルハート「そうなの？分かったわ」

宗太はそれを聞いて安心した。

パープルハート「じゃあ頭を解体しなきゃ」

なずな「ええっ！？」

宗太「分かってねぇ～～～～～～～～～！！！！」

宗太はシャウトした。

泉「…個性豊かね…宗太の友達って」
一枝「豊かにもほどがあると思うが・・・」
梢「楽しそうね～」

小鳥遊姉妹はそれぞれ感想を漏らした。

グリーンハート「お世話になりました」
一枝「いやいや、どうってことないから」

女神組はそろそろ帰ることになった。

なずな「ネプテューヌさん、お元気で」
パープルハート「ええ」
なずな「あ～、早く支度をしなくっちゃ～～」

なずなはパープルハートに別れをいった後、まるで子供のような口調で部屋に戻った。

女神組（・・・ホントに小学生ね（だな））

パープルハート達はなずなを見てそう思った。

ホワイトハート「泉、夢をあきらめないでね」
泉「分かったわ」

ホワイトハートと泉は握手した。

パープルハート「それじゃ」
小鳥遊家「さよなら～」

パープルハート達は小鳥遊家を後にした。

グリーンハート「いいご家族でしたわね」
パープルハート「ホントにね」
ブラックハート「宗太はなんだかいやいやそうみたいだったけど…」
ホワイトハート「ま、早く戻ろう」

そんな四人の小鳥遊家に対する感想だった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

なずな「は～い、今回のアシスタントは宗太お兄ちゃんの妹の小鳥遊なずなです」

銀八「おし行くか。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「いや～～美味かったな～」

ルイージ「そうだね兄さん」

フォックス&スネーク「ちょっとまてぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

マリオ「何だよ？」

フォックス「いや、こっちが何だよだよ！！」

スネーク「今回は個性豊かな人が多かったがまさかお前達2人が出てた事に驚いたぞ！」

ルイージ「そりゃあ驚くよね（苦笑）」

ってか…声優ネタ着たね～～～

ネス「そしてハルヒさん押されてたね～～」

リュカ「…これ、オールスター編の方が良いんじゃないかなと思ったんだけど；」

スネーク「そうだな…今回出て来た高町家やなのはの親友に質問『内のマリオはどう思う？』」

フォックス「銀時に質問『今回出たキョンと出会ってどう思った?』」

ルイージ「皆さんに質問『作者が書いてる小説でこの人と対話してみたいって言う人はいますか?いるなら答えてください』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』…ズバリ一つ目を答えましょう」

恭也・美由希・アリサ「…ホントに人間か?」

すずか「あの人の血は何味なんだろ…」

士朗「修羅を乗り越えたものかもしれんな」

桃子「あらあら、面白い方」

なずな「一部危ないセリフを言った人がいた気がする…」

銀八「スルーしとけ。2つ目だ」

銀時が立ち上がる。

銀時「声がそっくりなとこはムカついたが、何か苦労してるなって思った」

なずな「中の人繋がりは嫌なのかな?それじゃあ3つ目」

全員「ない」

ネプテューヌ「私は誰でもいいよ」

サチコ「わたしも～」

銀八「はい、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

なずな「次はペンネーム『レイガン』さんからの質問だよ。『1ネプテューヌ達に質問です。
銀時をどう思っていますか？
2銀時に質問です、今の状況（ハーレム）をどう思いますか？』」

ネプテューヌ「私、銀さん大好きだよ」

ノワール「チャランポランだけど、まぁ許す程度よ」

ブラン「・・・面白い人？」

ベール「それなりに強いと思ってますわ」

銀時「今の状況か？嬉しかったり忙しかったりひどい目にあったり俺疲れたぜ」

なずな「・・・苦労してるのかなぁ・・・？あ、『レイガン』さん。廊下にたってください」

銀八「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからだ。
『甲児
「あのアパチャイっての俺と同じ声だったな」

何呟いてるんだこの人は
関係ないので質問行きます

ぶっちゃけた事言います
リリカルメンバー此処だと影薄いね
このまま主役の座をネプチューヌ達に取られるのかなぁ？
楽しみです（ニヤニヤ）

では次回も頑張って下さい』・・・・・・・・・・・・」

銀八は青ざめる。なぜならなのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、スバル、ティアナ、リインフォース、アルフがものすごい殺意のオーラをまとっているからだ。
なずなは教室の隅っこで真っ青になって震えている。

銀八「『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん！！彼女達を怒らせるようなことはやめてください！」

真王「俺が殺ろうか？」

銀八「いや駄目だって！」

真王「冗談だ。おっとそうだ。読者のみなさんにアンケートを取ります」

銀八「アンケート？」

真王「次の章『魔道機人編』の次に始める章はどれにするかってことでアンケートを取ります」

銀八「なるほどな」

真王「そんなわけで、アンケートは以下のとおりです」

1：パンドラ編

福引で宇宙旅行のチケットを貰ったネプテューヌは、銀時達と一緒に宇宙旅行へ向かう。しかしテロリストのおかげで惑星・パンドラへ墜落してしまった。銀時達は助かったものの、ネプテューヌは行方不明になってしまう。ネプテューヌはパンドラのナヴィと呼ばれる住民に出会い、共にすごすことになる。

（クロス元：アバター）

2：銀河編

ミッドチルダに巨大宇宙生物が襲撃した。襲撃後、ネプテューヌ達は星の子・チコと出会う。そしてネプテューヌ達はチコとともに宇宙の平和を取り戻しに行くのだ。

（クロス元：スーパーマリオギャラクシー（2も有り））

3：ネプ銀編

ある日ネプテューヌは、謎の商人に不思議なキノコを買い、それを

食べて自我を失い、銀時達を吸い込んでしまった。吸い込まれた銀時はネプテューヌの体の中に入ってしまう。そして目覚めたネプテューヌはキノコを食べさせた張本人・ゲラビッツの目的を知り、体の中の銀時達とともにゲラビッツの目論みを阻止するのだった。
（クロス元：マリオ＆ルイージＲＰＧ３）

真王「そんなわけで募集しております。ちなみにどっちでやるかは順番に決めてください。私的には３→１→２がしっくりきますが」

銀八「そんなわけで、質問コーナー終わりま～す」

第三十訓：いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う（後書き）

真王「アンケート募集しております！活動報告にも載せます！さて次回は、ワグナリアに危機が迫る！？そして杏子のライバル登場！？そして始まるはパフェ大食い対決だ！」

なずな「次回『パフェの食べすぎにご用心』テイクオフだよ」

第三十一訓：パフェの食べすぎにご用心（前書き）

真王「これは長いです。それでは」

第三十一訓：パフェの食べすぎにご用心

今日のワグナリアはやっぱり平和・・・・・・・・・・ではなかったりする。
なぜなら、

パープルハート「お客さん来てないわね・・・」

ワグナリアに来ている客が激低しているのだ。

宗太「そうですよね～。どうしたんでしょう？」
なずな「お客さん来ないね」
パープルハート「そうね。……ってなずな？何でここに？」
なずな「私はお手伝いできてるんだよ～」

パープルハートはそうなの…と言って納得する。

杏子「ま、私のパフェが食えるならまだいいが」
宗太・新八「もう食うなっつうの！！」

宗太と新八が同時に怒鳴る。
なずなは新八を見て、お兄ちゃんそっくりだね、と思ったそうだ。

ホワイトハート「みんな、ちょっとこれ…」

ホワイトハートが一枚のチラシを持ってこっちにくる。
すると、誰かが入ってきた。

？？？「オ～ホッホッホッホ、久しぶりですわね杏子さん？」

金髪ロールでいかにもお嬢様風味の女性が入ってきた。杏子の知り合いみたいだが本人は、

杏子「・・・・・・・・・誰だ？」

ズテンッ！！

その女性は見事にずっこけた。

蓮香「あ、あなたお忘れですの！？この気高き貴公子・宇野宮　蓮香のことを！！」

杏子「・・・・・・・・・

新八「屈辱って何これェェェェェ！！？？他人の食べ物を盗み取ってるだけじゃねぇかァァァァァァァ！！！」
宗太「店長ォォォォォォォォォォォ！！！あんた昔一体何をしたんだァァァァァ！！！？？つうか三つ目明らかに不法侵入してるじゃねぇかァァァァァァァ！！！」

宗太と新八が杏子に怒鳴る。
なずなはやっぱり似てるよね、と宗太と新八を眺めてそう思った。

蓮香「あなたに与えられ続けたこの屈辱の恨み！きっちり払って差し上げますわ！」
杏子「食べ物以外など興味はない」
蓮香「・・・フ、フン！その余裕なことを言うのは今のうちですわ。後どうでもいいことですが年増のあなたは今の私にかないませんでしてよ！」

蓮香は余裕そうに言い、杏子は年増と言う単語に青筋を立てる。

宗太「何言ってるんですか。店長と同級生の時点であんたも年ｍ「ズドッ！！」ゴバァッ！」
なずな「お兄ちゃん！？」

宗太が言ってはいけないことを言い、杏子と蓮香に蹴られた。

蓮香「さぁ、このわたくしの『レバイアタン』と勝負ですわ」
宗太「れ、レバイアタンですって！？」
ブラックハート「復活早っ！！」
銀時「てかレバイアタンって何？」

銀時が聞くと、宗太は説明する。

宗太「ファミリーレストラン・レバイアタン、それは世界中の料理を集め、そのまま喫茶店にした人気の店。そしてそれを経営しているのは、先代レバイアタンのオーナー・宇野宮　健八。今思い出したんですが、その方は宇野宮健八の一人娘でレバイアタンの後取り、宇野宮　蓮香さんですよ！」

蓮香「説明ありがとう。この私はあなたに復讐するためにレバイアタンの後お次、そしてあなたを陥れるために、決闘を申し込みますわ！！」

蓮香は杏子を指差して決闘を申し込んだ。

杏子「・・・八千代、バット持ってきてくれるか？」

宗太「いやいやいやいや店長！決闘ってそっちじゃないから！！」

宗太はバットを持とうとする杏子を止める。

蓮香「・・・ちょっと説明不足でしたわね。決闘内容はチラシに載せてありますからそれを見てくださいね。それではまたごめん遊ばせ！！おほほほほほほほほほ！！！」

蓮香は高笑いをあげながらリムジンに乗ってどこかへ去った。

パープルハート「・・・さてさて、面倒な物を申し込まれたわね」

杏子「私は別にどうってことないぞ」

ホワイトハート「そう言うわけにもいかない」

ホワイトハートがさっき持ってたチラシを見せる。

宗太達はそのチラシの内容をみてみた。

『第1回　大食いパフェ対決！
『レバイアタン』ＶＳ『ワグナリア』
舞台は○◎神社。
ルールは多くパフェを渡した店の勝利。
ケーキ内容はシンプルにパフェ全般。
負けた方の店は廃墟とされる。
審査員は観客としてきてくれた貴方。
貴方がどれだけケーキを食してくれるかで勝負は決まります』
相馬「何か知らないけど負けたらこの店潰れるのかな？」
葵「何ですかそれ！？山田は絶対反対ですよ！！」
葵は騒ぎ始める。確か家出してこのワグナリアに居候してるんだったっけ？
杏子「私には関係ないがな」
パープルハート「そうはいかないわよ店長」
杏子「？なんでだ？」
パープルハート「だってこの店潰れたら食べ物食べられないわよ」
パープルハートの一言に杏子は考え、そして、
杏子「…な、なんだってーーーーーーー！！！？？」

背景に雷が落ちたようにショックを受けた。

杏子「い、いかん！それだけは何としてでも阻止せねば！！」

八千代「そ、そうですわね杏子さん！！」

食べモノ好きな杏子にとってそれだけは痛い事らしい。八千代も同意する。

銀時「なぁ、ネプテューヌ」

パープルハート「なに？」

銀時がそのチラシを見てこう思う。

銀時「それってさぁ・・・・パフェ食い放題って訳じゃねぇ？」

銀時がそう言うと、座っていた神楽が目を輝かせた。

とある神社・イベント会場

そこではある大会が行われる。

それは『レバイアタン』と『ワグナリア』のパフェバトルコロシアムが始まるのである。

『ワグナリア』では杏子と宗太達とパープルハート達がいて、たくさんのパフェを並んでいる。

しかし，なぜか行列はなかった。

そして一方の『レバイアタン』には『宇野宮　蓮香』を率いるパフェ職人5人がいる。
しかもパフェは見たことがない珍味のパフェばかりで行列がたくさん出ている。

蓮香は勝ち誇ったかのように高笑いする。

蓮香「おーっほっほっほ！杏子さん！貴方の食べ物もどうやら飽きてしまわれましたわねぇ♪」

その言葉に杏子の額に血管が浮かび上がる。

蓮香「まぁ，今日はあれですわ。攻めての最後の情けに貴方の店を守る最後のチャンスを上げましたし，敵に塩を送るとはまさにこの事ですわ♪」

さらに桃子を見下す言葉に杏子は怒り出す。

蓮香「でも，貴方のような二流のパフェに私の一流のパフェに叶えるとは・・・相当思えませんは♪せいぜい最後まで醜く抗うと良いですわ。おーっほっほっほっほ！」

言いたい放題の守子に杏子の額には大量の血管が浮んでくる。
宗太と八千代とまひるも殴りかかりそうな感じで怒り出しており、相馬と佐藤とぽぷらと葵はそれ以上に杏子の怒りに恐怖している。

宗太「伊波さん、普通はやってはいけませんが、完膚なきまでに叩きのめしていいですよ」
まひる「確かに駄目だけど、本当に殴ってもいいよね？」
八千代「あの女（アマ）ぁ…、切る！」

相当なまでに答えている3人も我慢の限界である。
杏子はなんとしてもこの勝負は絶対に負けられないのである（食べ物死守のために）。
だが、肝心な客が1人もいないのであれば・・・勝負にはならない。

蓮香の部下「蓮香様・・・『ワグナリア』の所には列が無いどころか1人もいませんね」

部下らしき者が蓮香と話して『ワグナリア』を見縊っている。

蓮香「ふふふ・・・この勝負は杏子の人生を完膚なきまでに破壊するための儀式なもの。しかしこうも圧倒的な差があると、これはもう勝負が始まる前に勝ったのも当ぜ・・・・」

守子がそう言うと、目の前には奇妙な連中が眼に映った。
その連中とは、銀時、桂、なのは、フェイト、はやて、スバル、神楽、新八、エリザベス、月詠、ティアナ、エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、リィンフォース、コンパ、アイエフがいた。
全員それぞれ頭に糖分とかかれた鉢巻を駆けている。
そして銀時達はゆっくりと『ワグナリア』に向かう。

蓮香「あんな時代遅れのファミレスに向かうなんて・・・大した食卓ね」

蓮香がそう言うと、銀時達は『ワグナリア』の目の前に立つ。

宗太「銀時さん・・・」
銀時「マジでタダだろうな」
宗太「はい、色々と世話になりました・・・思う存分食べてくださ

い」

宗太がそう言うと、銀時、スバル、神楽、エリオは眼を強く光らせる。

只、杏子とパープルハートは今食べられないことに悔しがる。

近藤「えー，それでは第1回『大食いパフェ対決！』を始めたいと思います！実況はこの俺、真撰組局長！近藤勲と・・・」

ルーテシア「自分の暗い生活を変えたい少女、ルーテシア・アルピーノ」

スカリエッティ「そして大爆笑的な面白イベントを強く求める男，ジェイル・スカリエッティ」

近藤・ルーテシア・スカリエッティ「俺（私）達が勤めさせていただきます」

銀時達「色々ちょっと待てぇーーーーーーーーーーーー！！！！」

3人の実況に銀時達がツッコみ出す。

銀時「お前、何当たり前のように出ているんだ！つうかなんで実況をしているんだ！」

銀時の怒鳴りに近藤が銀時の存在に気づく。

近藤「おお、万事屋達か。こんなところで会うとは偶然だな」

桂「うむ、それにしてもお主達とこうもめぐり合わせるとは・・・何やらの縁があるようだ。して、近藤殿はどうしてここに？」

近藤「いやー、実はルー殿とスカ殿が近々とある神社で大会らしき物が始まると聞いて，2人が興味を持って司会者を勤めさせようと来ちゃって、ついでに俺も司会者として勤めさせてもらった訳！」
神楽「お前，本当に真撰組の局長アルか?仕事を思いっきりサボる為に来たのと一緒ネ！」

桂の質問に近藤が答えると、神楽は毒舌で近藤に呆れる。

土方「…一理あるのは認めるがな…」
沖田「あきらめやしょう土方さん」
山崎「大丈夫かなぁ…」
パープルハート「あ、土方達も来てたんだ」

土方達が来てたことにパープルハート達も驚く。

スカリエッティ「まぁともあれ、ここで君達と会えるのは偶然だか、思いっきり楽しむと良い」
ティアナ「まぁ，そうさせてもらうわ・・・・って言うよりなんでアンタがここにいる!?」

スカリエッティの存在にティアナがツッコみだす。

リインフォース「貴方確か広域次元指名手配犯じゃないですか!何この世界で普通に実況をしているんですか!?」

リィンフォースがスカリエッティにどうしてここにいるのかを聞き出す。

スカリエッティ「うむ、実はこの世界で面白いイベントが起こりそうな気をしてみれば、この大会の実況を頼まれてな・・・せっかく

だからやってみたのだ。」

面白そうに笑うスカリエッティに銀時達は呆れる。

ティアナ「って、貴方確か『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』ではボスキャラじゃなかったの？何でタダのボケキャラとして登場しているの？」

スカリエッティ「なんか中途半端な悪役には飽きたから最初からボケキャラの方が楽で良いしね」

ティアナ「おぃいいいいいいいい！言っちゃったよ！この人自分のことボケキャラと言っちゃったよ！もう悪役の欠片も全然ないよ！」

もはやスカリエッティは悪役の欠片がなく、ティアナはツッコむしかなかった。

なんやかんやで銀時達はワグナリアのほうに戻り、ルーテシアはコングを鳴らす。

近藤「さぁ、始まりました！試合開始です！」

近藤がそう言いだすと、『レバイアタン』に並んでいた客が一斉に『レバイアタン』のパフェを取り出してきた。

ルーテシア「『レバイアタン』の客が殺到！！次々と皿がなくなっていきます！」

客が次々と皿を取り出して行き、だんだんとレバイアタンのパフェが無くなって行く。

近藤「一方の『ワグナリア』は・・・・ああああああああ！！！」

近藤は銀時達を見ると、その眼には銀時、桂、なのは、フェイト、はやて、スバル、神楽、新八、エリザベス、月詠、ティアナ、エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、リィンフォース、コンパ、アイエフが凄い勢いでケーキを食べているのが移っている。
そのスピードは異常なまでにも速く、次々と『レバイアタン』の皿を上回るのである。

山崎「早ぁあああああああああ！めっちゃ早っ！！たった17人で『レバイアタン』を対抗しているよ！」
宗太「銀時さん！みんな！」

宗太は驚きだす。

銀時「テメーらァァァ！三日は何も食わなくて良い位にたらふく食っとけぇぇ！」
全員「はいいい

白く笑う。

観客「もうこっちのは良いや！あっちのパフェを頂くぞ！」

近藤「おーっとここで『レバイアタン』の客がどんどんと『ワグナリア』に向かっていく！」

近藤もこれは『ワグナリア』の勝利になると確信した・・・その時だった。

銀時「坂田家の食卓に・・・・」

パープルハート「手を出すなぁぁ！！」

銀時とパープルハートが回転蹴りをして観客達を蹴飛ばす。

宗太「おいいいいいいいいいい！！何やっているのぉ！！」

宗太が思わず叫びだす。

ぽぷら、まひる、八千代、佐藤、葵も眼を開くかのように驚きだした。

近藤「何やっているんだぁぁぁぁぁぁぁ！せっかくの客が来たんだよ！何追い返しているの！？」

近藤も思わずツッコみだす。

その原因を銀時とパープルハートが言い出す。

銀時「ここはウチの食卓だぁぁぁ！」

パープルハート「何人たりとも入らせてたまるかぁぁ！！」

山崎「食卓宣言かよォォォォォォ！？つうかこれ皿の数が多い人の勝ちなんだよ！あんた等の食卓用じゃないんだよぉぉぉぉぉぉぉぉ

！？つーかネプテューヌちゃん何であんたが手を出してるのォォォォォ！？？」

２人の言い分に山崎がツッコみだす。

杏子は陰でグッジョブ！、と親指をあげた。

ぽぷら「２人ともぉぉ！今はそんなことを言っている暇はないって！」

ぽぷらが２人にそう言いだすと、ある不自然な事に気づく。

神楽「銀ちゃああん！ご飯とも会うよぉこれェェェェェ！」

エリオ「本当です！一度試してみてくださいィィィィィ！」

神楽とエリオは何故かパフェとご飯を一緒に食べている。

月詠「色々待てェェ！主らなんでケーキと一緒にご飯を食っておるんじゃ！！」

月詠があり得ないような感じでツッコみだす。

神楽「白米食べないとご飯食べた気がしないネ！」

エリオ「欧米食なんかクソ喰らえです！」

月詠「おぬし等の味覚はどうかしとるわァァァァァァァ！！！！！」

近藤「だからこれ飯を食わせる大会じゃないって！」

神楽とエリオのボケにツッコみを入れる月詠と近藤。

桂「リーダーよ！いくらなんでもケーキにご飯は合わないと思う！」

エリザベス『その通り！』

桂とエリザベスがそう言うが、リィンフォースがツッコみだす。

リインフォース「そう言う貴方達こそ何をしているんですかぁ！」

リィンフォースがツッコみだしたのは、桂とエリザベスが何故か、かけそばの中にケーキを入れて一緒に食べていたからである。

桂「武士たるとも、甘ったるい物だけを食しては心が腐ってしまう！」

エリザベス『常に心を強く！』

リインフォース「それ以前に理性を腐らしているでしょうがァァァァァァァ！」

宗太「見ているだけで吐き気するわァァァァァァァァ！！！」

額に血管を浮かべてツッコみだして怒鳴るリィンフォース。

ティアナ「あんた達、いくらなんでもおかしいでしょ！炭水化物と炭水化物を一緒にとるなんてありえないでしょ！」

新八「そうですよ！体に悪いですよ！」

近藤「そう言うあんた達は何タッパーにつめこんでテイクアウトしているんだぁぁ！？」

神楽達の食べ方に呆れるティアナと新八に近藤はティアナにツッコみだす。

それはティアナと新八が無数のパフェをタッパーにつめこんでいるのである。

ティアナ「冷蔵庫に保存すればいつでも食べられるでしょ！」

新八「保存食はいつでも食べられますよ！」

近藤「今食えェェェェェェェェェ！！！！そんなことすればパフェが腐るって！なんだそのビンボーくせー発想！」

さっきからツッコみばかりしている近藤は疲れてルーテシアとスカリエッティのところに戻る。

一方、宗太はその発想はありか！、言うような顔をした。

そして徐々に皿の数が『ワグナリア』のほうが多くなって徐々に大きな差を広げていく中、蓮香が動く。

蓮香「まさかこんな展開になるなんて・・・だけど手は打っているわ！」

蓮香がそう言うと、突如後ろから何かか近づいてくる。

？？？「はい、どいたどいたー！」

後ろから客を押してどかすのは、１０人の力士であった。

スカリエッティ「おおーっとあれは、力士だ！力士が現れたぞー！突如現われた力士の集団が人ごみを押しのけテーブルを占領！」

そしてパフェを取り出して一斉に食べ始める。

近藤「凄まじい勢いでケーキを食べつくしていく！まるでケーキが小さな苺に見える！怪物！まさに怪物だぁ！」

スカリエッティ「『レバイアタン』は６００皿で、『ワグナリア』は５００皿。『レバイアタン』がリード。」

このままではヤバイとワグナリア組は慌てる。

そんなワグナリア組に銀時が言い出す。

銀時「そんな顔をすんな・・・ここまでは腹ごしらえだ」

っと言うが、銀時はお腹一杯で桂、なのは、フェイト、はやて、新八、エリザベス、月詠、ティアナ、キャロ、ヴィヴィオ、リィンフォース、コンパ、アイエフは限界が来て倒れている。

宗太「って、もうダメダメモードじゃん！」

宗太がそう言うと、銀時は立ち上がる。

スバル「銀さん、ネプテューヌさん、いつでも良いですよ！」
神楽「カモーン、前菜の時間はおしまいだヨ」
エリオ「準備完了です！」

スバル、神楽、エリオは銀時達から少し離れた場所で立っている。
そして・・・・

銀時「ネプテュウウウウウウウウヌ！！！」
女神組「はいィィィィィィィィィィ！！！」

パープルハート達は大量のパフェを銀時の左手に持っている大きな皿に移し変え、そして銀時がスバル達に投げる。

銀時「たらふく食いやがれェェェェェ！」

そして投げられたケーキはスバル、神楽、エリオの口に入り込む。

近藤「なんじゃこりゃあああああああああ！？４人は多くのケーキを１つの大皿に乗せ、１人がそれを絶妙のコントロール果断な

く少女達の口の中に放り込んでいく！つうかスゲェよ！ある意味スゲェコンビネーションじゃん！メッチャとんでもねぇ速さだよ！」

近藤がそう解説すると、それを聞いたかのように力士達が負けじと食べるスピードを速める。

両陣営一歩も引けをとらないせめぎ合いになった！

近藤「特に凄いのが万事屋達だ！夜兎族であるチャイナの胃袋はとんでもなく化け物並みで空腹が大きい！それに負けじとあの青髪の少女と赤紙の少年もチャイナに引けをとらない食欲をしている！力士を軽々しく超えている・・・ってあ！！」

今度は、神楽とエリオが白米を食べながらケーキを食べているのと、スバルはアイスを食べながらケーキを食べている。

近藤「何やっているんだァ！？ケーキと一緒にご飯とアイスを食べるのはおかしいだろ！」

大食い組「欧米流なんてクソくらえじゃ（ですぅ）！！！！！」

近藤のツッコみに3人は良い返す。

しかしなんやかんやで力士は限界に来て次々と倒れていく。

このままではヤバイと知った蓮香は最終手段としてしょうが汁入りの水鉄砲を2つ出した。

蓮香「そうはさせないわよ！」

そして2つの水鉄砲を同時に3発放ち、絶妙なコントロールでスバル、神楽、エリオの両目に的中させる。

スバル「うぁあああああああ！」

神楽「眼が・・・眼がァァァァ！」
エリオ「眼にタレがァァァァァ！」

銀時「スバルゥ、神楽ァ、エリオォ！」
ブラックハート「みんな大丈夫！？」
ホワイトハート「・・・あいつら…」

銀時とブラックハートは思わず倒れている3人に駆けつける。

スカリエッティ「おおーっと、眼にタレがはいったァ！！これは痛い！」

スカリエッティが白熱して解説した。

銀時「ちぃ！このままじゃ時間切れで敗北してしまう！どう何すれば・・・ってネプテューヌ、何やってんの？」

どうするか焦る銀時は、携帯をいじっているパープルハートに聞いてみる。

パープルハート「フッ、頼もしい援軍よ」

パープルハートは勝ち誇った顔で言った。

？？？「ここが会場か？」
？？？「うわ！人がいっぱいだ！」
？？？「面白そうなところじゃない」
？？？「人が多いな…」

？？？「わ～、ネプテューヌ姉ちゃんだ～」
？？？「ここにきていいのかな～？、俺達」
？？？「来るしかないでしょ？」

イベント会場に聞き覚えのある声が聞こえた。そこにいたのはなんとリトルバスターズ、戦線メンバーズ、リック、ジェニファー、哲志達、サチコ達だった。ちなみに哲志達とサチコ達は実体化できる薬のおかげで触ることができる。
無論食べることもできる。

銀時「お、お前ら！」
恭介「フッ、俺達に内緒で楽しむだなんて水臭いぞ」
鈴「よく分からんがこれ食べ放題なのか？」
ユイ「おお♪パフェがいっぱいあるじゃないですか！♪」
サチコ「食べ物いっぱ～い！」
リック「あと来たのは俺達だけじゃないぜ？」

そして会場にまたある人達が来た。

ハルヒ「こんな面白いイベントを見逃すハルヒ様じゃないわ！」
兼一「なんだかよく分かりませんが、一応参加してもいいんですよね？」
新島「パフェ大食い大会か。ニッヒッヒッヒッヒ」
ララ「パフェがいっぱいだ～」
マリオ「食い放題だぜ♪」
士朗「失礼ながら、我々も参加しよう」
アリサ「なのはがお世話になった店が潰されてたまるもんですか」
すずか「私達も参加するよ、なのはちゃん！」

さらにハルヒ等ＳＯＳ団、梁山泊チーム、新白連合、高町家、アリ

サ、すずか、マリオ、ルイージ、ララがやってきた。

パープルハート「あなた達！無礼講気分で食いつくしなさい！！」
全員「うおおお

そして・・・・

ピィ～～～

ルーテシア「終了～～」

ルーテシアが終了合図をすると、スカリエッティが皿の数の発表をする。

スカリエッティ「結果を発表します。『レバイアタン』は７００皿。そして『ワグナリア』は１０００皿！」

近藤「よってこの勝負！『ワグナリア』の勝利ぃ～～～！」

近藤の勝利宣言に誰もが騒ぎ出す。

ワグナリアメンバー「ぃやったーーーーーーー！！！」

ワグナリアメンバーは喜びに飛び上がった。

こうして、ワグナリアは勝利した。

～余談～

宗太「ところでネプテューヌさんはどうして携帯で呼んだんですか？て言うかあの人たちのメアド知っているんですか？」

パープルハート「後ろの情報提供者に聞きなさい」

パープルハートは後ろを指差すと、相馬が携帯を持ってVサインをしていた。

宗太（相馬さん、もう犯罪決定ですよ…）

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「お～し、じゃあ特別アシスタントを紹介するぞ～」

マリオ「よう♪このマリオ様がアシストするぜ♪」

銀八「そんじゃいくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ「まあ…色々と修羅場を越えてるからな…師匠……」

今はいない師に思いを果ててるよ…

ルイージ「今回はわりと普通だったね」

スネーク「まあ…ちょっとした家庭と友情を見たな…」

フォックス「と言うか…最近コンパやアイエフの出番が少ないな；」

ルイージ「それでベールさん達に質問だけど…『何で女神姿でアルバイトするの？普通に行けると思うんだけど？』」

スネーク「コンパやアイエフに質問だ…『最近、何してる；』」

フォックス「作者の真王に質問『前黒神にリクエストされた４つはどう言う風に書いて行くんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「最近、あちら側の珍しい食べ物が来ないな…」

ルイージ「止めてよね兄さん、見てるこっちが辛くなるから；」『…なんでもネプテューヌだけじゃ不公平だから女神姿にしたって言ってたぞ」

コンパ「私は六課で医学の自習をしてました」

アイエフ「私はミッドチルダを回っていたわ」

真王「最後のですが、１はまぁ、それなりとして２はこの後が目に見えているので立てません。３の場合はベールは桂に好意を寄せ、

ノワールは桂を気にしており、ブランもノワールと同じく。そして4はネプテューヌとコンパとベール（？）がボケ役でそれ以外が突っ込みということになっています」

銀八「そんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「んじゃ次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからだ。『お～、いてて・・・ったく、折角の一張羅が焦げちまったじゃねぇか！
んまぁそんな事より今回も質問行きますか

「質問しまぁす。その内きっとリリカルメンバーとネプチューヌメンバーが銀時を取り合って戦った際どっちが勝ちますか？まぁ僕はリリカルメンバーが負けると思ってますが（ニヤニヤ）」『…」

真王「ハイ、その通り。リリカルメンバーは負けます」

銀八「即答かよっ！？」

マリオ「…んじゃ『ｓｉｂｕｇａｋｉ』。廊下に立て。次はペンネーム『レイガン』だ。『今回は銀時達が出ていませんでしたが、ネプチューヌメンバーメインの話ですから、いなくても大丈夫ですね。

今頃なんですが、スプラッターハウスを知っているのはビックリしました、そしてここに出てきたリックはスプラッターハウスシリーズのリックだったことも驚きました。
そういえばジェニファーもスプラッターハウス1の時、一度モンスター（？）にされたから、モンスターにならなくて大丈夫だったんですね。

質問です。
ネプチューヌメンバー達に質問です。
自分を銀魂メンバーで例えると誰になりますか？
銀魂メンバーに質問です。
理想の自分は何ですか？』」

ネプテューヌ「私は銀さんかな？」

ノワール「土方ね」

ブラン「・・・定春」

ベール「桂さんですわ」

コンパ「新八さんのお姉さんでしょうか？」

アイエフ「九兵衛さんね」

銀時「かめはめ波を撃てること！」

新八「お通ちゃんに会いを注ぐこと！」

神楽「食べ物をたくさん食べること！」

桂「そばをたくさん食べること！」

エリザベス『定春より目立つこと！』

月詠「黄金のキセルを手に入れることじゃ！」

銀八「理想っつーか願望じゃね？『レイガン』さん。理想の自分を見つけてください」

真王「ありがとうございましたマリオさん。特製のマッシュバーグをプレゼントだ」

マリオ「お！サンキューな。それじゃ」

真王「じゃあなー」

第三十一訓：パフェの食べすぎにご用心（後書き）

真王「アンケートはまだ続きます。次回はワグナリアとの別れが…」

杏子「次回『心ある料理は一番うまい』テイクオフ」

第三十二訓：心ある料理は一番おいしい（前書き）

真王「一応言っておくが、俺シリアス物はあまり好きじゃないんだよ」

銀時「そりゃ銀魂はギャグものが多いからな」

ネプテューヌ「銀魂はシリアス3割ギャグ7割でできているからね」

真王「…ハァ…頑張るしかないか」

銀時「そうだ。んじゃ最後のワグナリア編始めっぞ～」

ネプテューヌ「それではスタート♪」

第三十二訓：心ある料理は一番おいしい

大会後、スカリエッティは銀時と2人で話があると言い出し、話をすることにした。

スカリエッティ「坂田銀時君・・・私が君に話したいこと分かるであろう」
銀時「・・・・高杉の事か？」

銀時は真剣な表情でかつての同士の事を言い出す。
スカリエッティの話の内容はまさにその通りであった。

スカリエッティ「察しが良いね。・・・君も知っていると思うが・・・ガジェットは私が生み出した機械兵器だが・・・実はその事である覚えのない罪を着せられちゃってね。ホテル・アグスタにガジェットが襲ってきたのを知っているだろう？」
銀時「ああ・・・」
スカリエッティ「実はそのガジェットは、私のではなく鬼兵隊が作り上げた物だ」
銀時「な！？」

衝撃の余りに驚きだす銀時。
スカリエッティが嘘を言っているのか、本当の事を言っているのかは知らない。
だが、特殊な武装を作りだす『鬼兵隊』ならあり得るであろうと銀時は考える。

スカリエッティ「あの時に襲ってきたガジェット達はまだ模造品のようだ。なぜなら我々の予想を超えた技術力で作られた『鬼兵隊』

のガジェットは私のガジェットよりも戦闘力を上回り、我等のアジトを襲ってきた」
銀時「高杉が・・・・」

タダさえ恐ろしい兵器を作り出す鬼兵隊にガジェットの技術力を加わればとんでもない強さを誇るであろう。

スカリエッティ「その後、『鬼兵隊』の襲撃に襲われた私達は何とか返り討ちにしたが・・・相当なまでに酷い負かでをおってしまった。しかもわずか4機のガジェットに、私が作ったガジェット達は9割が破壊されてしまった。もし『鬼兵隊』があのガジェットを何千機・・・いや何万機も作り上げられたら・・・ミットチルダだけじゃなく君の世界にも恐ろしい影響を齎(もたら)すであろう」

まさか高杉がそこまでの技術を作り上げたとは思いもよらなかった銀時。
だが銀時もスカリエッティも『鬼兵隊』にはがジェットよりも恐ろしい兵器を開発しているのを知っている。
それは・・・・。

銀時「確かにガジェットの大群は厄介だな・・・けどやつ等の恐ろしさはあんなポンコツなんかじゃねぇ・・・・」
スカリエッティ「『紅桜』か・・・あれには私も驚かされた。・・・だが，妖刀の名に恥じない狂的な力厄介だ」

スカリエッティはそう言いながらポケットからある者を出す。
そしてそれは銀色の剣の形をしたオブジェだった

スカリエッティ「『紅桜』の恐ろしさはある人物から聞いた」
銀時「ある人物だと？」

スカリエッティ「その人物に協力を求めて君様のデバイスを完成させた。・・・これを受け取ると良い」

銀時は剣のオブジェを受け取ると不思議そうに見る。

銀時「何だそれは？」

スカリエッティ「・・・・これこそ対『紅桜』様に作られた君だけのデバイス。『【銀】の魔道剣』・・・通常『シルバーブレイド』だ」

銀時「『シルバーブレイド』…なんかスッゲーカッコ良くね？」

デバイス名に感心する銀時。

スカリエッティ「では、私は近藤君と一緒にそろそろ元の世界に戻るとしよう。・・・・所でエリオ・モンディアルは元気そうだね。その様子だと・・・フェイト・テスタロッサも元気でいるだろう」

銀時「お前・・・何であの2人の事を・・・」

どうして2人の事をスカリエッティは言い出すのかを銀時は説明すると、スカリエッティは全ての事を言い出す。

自分がプロジェクトFのベースとなる、基礎論理を構築した人物である事を。

ある組織がスカリエッティの研究に興味を持ってプロジェクトFを任せられたのである。

それにはさすがの銀時も驚きを隠せなかった。

まさかスカリエッティが2人の生みの親とは思いも知らずに・・・

しかしスカリエッティは強く後悔をしているようであった。

スカリエッティ「あの時の私はどうかしていたようだ。己の能力に自惚れてしまったのか悪い誘いを受けてプロジェクトFのベースを

作り上げてしまった。命を作って弄ぶ事はかなり残酷さを感じる。・・・だが、それでも私の罪は消えることはないであろう・・・私はプロジェクトFのベースを真の目的を知り、ガジェット達を生み出して組織に反乱を起こし、残りのプロジェクトFのベースを奪い上げた。どこかでアジトを作り上げて身を潜めさせてもらっている」

銀時「お前・・・・」

スカリエッティ「とにかく、今の『鬼兵隊』は君が思っている以上に恐ろしい軍勢になっている。必ずそのデバイスが役に立つから受け取ってくれ。そしてフェイトとエリオが必ず君の力になるだろう。ではこれで」

スカリエッティはそう言って後ろを振り向いてこの場を去ろうとしたら、その場で足を止めて言った。

スカリエッティ「ところで銀時君、彼女達は元気にしてるかね？真っ先に突進しそうな白いベレー帽をかぶった彼女は」

銀時「…ゆりのことか？…元気すぎて困るほどだけどな。てか何で知ってんだ？」

スカリエッティ「彼女等は前に我々のアジトに泊まってたからね」

銀時「…そうかい、じゃあな」

銀時は手を振って、その場を去った。

イベント会場

銀時はネプテューヌ達のいるイベント会場があったところへ戻った。

パープルハート「あら銀時」
銀時「よう、元気そうだな」

銀達が声をかける。宗太達は銀時に駆け寄ってお礼を言う。

宗太「皆さん、本当にありがとうございました」
ぽぷら「これでワグナリアは守られたよ～」
まひる「お、お礼にお殴りしてもよろしいですか？」

銀時・新八・宗太・アイエフ・なのは・フェイト
「宜しくないっ！！」

まひる「ごめんなさい…」
銀時「ま、それはともかく、あれはどうなんだ？」

銀時は、ショックを受けて座り込んでる蓮香と、隣で立っている杏子を指差す。

パープルハート「あの人たちはあの人たちなりの話にしときなさい」
銀時「・・・そうかい」

銀時は2人を眺める。

蓮香「・・・・・どうして、どうして負けてしまったの？」
杏子「・・・・・・」
蓮香「私の『レバイアタン』はどんな料理店をも凌駕するのに、あなたの店よりも上なのに、なのに、どうして！」

蓮香は顔を押さえ、悲痛の言葉を杏子にぶつけている。

杏子「・・・蓮香、一応お前のとこのパフェ食ってみたんだがうまかったぞ？」

蓮香「・・・・・・・・・・」

杏子「けどな、……あ～、あれなんて言うんだっけ？おいしいのに何かが足りないんだよな～？」

杏子の一言に蓮香は杏子に詰め寄る。

蓮香「足りない？何が足りないって言うのよ！！あの料理達にはすべて私の、私達『レバイアタン』のためだけのものなのよ！！調理も道具も完ぺきよ！！それなのに何が足りないのよ！！」

蓮香は怒り混ざった声で杏子に言う。そして杏子が取った行動は、

ドゴッ！

蓮香を殴った。しかもグーで。これにはワグナリアメンバーも驚いた。

杏子「よ～し、これで落ち着いたか？」

新八「あんた何やってんのォォォォ！！！？って言うかグーで殴って落ち着く奴がいるかァァァァァ！！！」

新八は怒鳴り、宗太は同意する。

杏子「お前の話を聞いて少しわかったことがあった。お前料理を自分らだけのためにしか見てないだろ」

杏子の言葉に蓮香は目を見開く。

杏子「いいかよーく聞け。確かにお前の料理はうまいし客も大喜びだ。そりゃ珍しいものやおいしいものには目がないことぐらいわかる。だが客は同じものを食べれば飽きて別のを頼むことがあるし、もしくはもう店に来なくなる」

蓮香「だ、だからなんだってんのよ！！」

パープルハート「あなたの料理は心がないことよ」

疑問を答えたのはパープルハートだった。

パープルハート「あなたは、ただ勝ちたいという信念を抱いて料理を作っていた。そう、ただひたすら上を目指し続けて、数年もすれば世界一になれるかもしれない。けど時に飽きが来て店はつぶれる。なぜならあなたは客の気持ちより自分しか見てないから！」

蓮香「！？」

パープルハート「己の気持ちを先に立たせ、他人のことは無視して作った料理なんて飽きるわ。料理というものは、相手に心を与えるものなのだから」

蓮香「・・・・・・・・・」

蓮香はパープルハートの言葉に心を撃たれた。

自分は昔、人のために料理を作りたかった。母や他の人たちにもおいしいという気持ちを料理で伝えたかった。それがどうだこの様は。勝利に執着して、勝負を挑んだらあっさり負けてしまった。もう私に残されたものなんて何も…。

パープルハート「何も無いなら作ればいいんじゃない？あなたの目指す物に」

パープルハートは蓮香に手を差し伸べた。その時のパープルハートはまるで女神様のような顔だった。・・・実際女神ですが。
蓮香はその手を取ろうとすると、

???「…無様に落ちたもんだな、蓮香」
蓮香「っ!!?」

男の声に蓮香はビクッ、と震わせた。その男は、グラサンをかけていた。

蓮香「お、お父様…」
全員「え?」
宗太「え!?あの人が初代レバイアタンのオーナー・宇野宮健八さん!?」

誰もが驚いた。その男は、初代レバイアタンのオーナー・宇野宮健八なのだ。健八は蓮香に近づいて、

パシッ

蓮香「あうっ!」
全員「ッッッッ!!!!!!?!!!?」

蓮香を引っ叩いた。

健八「失望したよ蓮香。何時か君なら次期オーナーになれると期待していたのに、あろうことか無意味な挑戦でレバイアタンを廃店させるとは愚かなことを」

健八の一言に、杏子は苛立ち交じりに問い詰める。

杏子「おい、無意味という意味はどういうことだ？」
健八「『ワグナリア』の白藤杏子か。蓮香から聞いている。いいかよく聴け、我がレバイアタンは常に世界一でなければならない。世界中の職人たちで作りあげるこのレバイアタンで、レストラン界の王者になるんだ。だが、一つのくだらないことでこの私に泥を塗りおって。もう私は役立たずな者には用はない」

無意味、くだらない、役立たず、その言葉に全員は怒りを覚える。蓮香が杏子に挑戦したことは事実だが、その戦いを下らないと言い張った健八を殴りたくなった。杏子が前へ出て殴ろうかと思ったら、

パープルハート「歯ぁ、食い縛れぇぇぇっ！！！」

バキッ！！！

健八「ごはっ！」
全員「・・・・・・え！？」

何とパープルハートが健八の顔面をグーで殴った。これに全員が驚く。

パープルハート「無意味？くだらない？…そんなのあなたが…蓮香の頑張りを見てないだけよ」

パープルハートが溢れんばかりの怒りと怒気を言う。蓮香は唖然とする。

パープルハート「蓮香は、世界一になることよりも、ただ作った料

理で人々を幸せにしてやりたかった。人々の笑顔を見たかった。そしてただ杏子と楽しく勝負したかった」

蓮香はパープルハートの話を聞いて、目を見開く。
杏子は納得したような顔をした。

パープルハート「その蓮香の気持ちを踏みにじる父親は、ただの下郎よっ！！！」

倒れた健八を指差して、怒気を言い放つ。しかし健八はすでに気を失っているが。

パープルハート「・・・・・・・・・・・・」
杏子「よ～し、よく言った。お前がぶっ飛ばしたせいかこっちもすっきりしたぞ。礼に八千代がパフェ食わせてやる」
パープルハート「・・・ありがと」

杏子はパープルハートの肩を叩いてお礼を言い、パープルハートはお礼をもらう。

蓮香「・・・・・どうして？私のために…」
パープルハート「違うわ」
蓮香「え？」
パープルハート「…親子でありながら、自分のことしか見ていない奴が気に入らないだけよ」

パープルハートの手は、ギリギリと音を立てる。

杏子「ところでそこ～、何やってんだ～？」

杏子はエプロンをしていて頭にバンダナをかけていて、本格的にケーキを作っている銀時に言った。
ちなみに彼が作っているケーキは『銀魂特製～ショコラ・ランド～』っというチョコをメインとしたケーキである。
スポンジはココアパウダーをタップリ入れており、中にはトロリととろけるショコラソースがタップリ。
しかも外側もチョコレートクリームタップリを付けて最後はケーキの外側をい半分にスライスした苺を付けて、そして上にはアーモンドを駆けて、キャラメルソースで絵を描くかのように乗せて、しかもバナナを一口さいずにスライスした物を2つのせ，そして最後に木の形をしたチョコを4つ乗せて家の形をしたチョコを乗せて、ど真ん中に銀時の使用している木刀の形をしたチョコレートを突き刺せば完成。

銀時「いや、一日甘い物を食べないと落ち着かないもんで」

そう言って銀時は1人用にスライスせずにそのままフォークに刺して食べ始める。
興味を持った宗太達が近づく。

宗太「なんだかおいしそうですね。一口いいですか？」
銀時「ん？食ってみるか？」

銀時は許可を出し、宗太、ぽぷら、まひる、葵、相馬、佐藤、八千代、杏子はフォークで銀時の『銀魂特製～ショコラ・ランド～』を一口頂く。
その味の評価は・・・

宗太「う、うまい！」
ぽぷら「おいしい！」

まひる「こんなにおいしいの始めて…」
葵「しょ、将来パティシエになれるプロです！」
相馬「いや～、おいしいね～♪」
佐藤「メニューに追加しておくか？」
八千代「わ、私のパフェよりおいしい…」
杏子「む！、これはいけるぜ！」

かなりの評価の良さであった。
実際に銀時は新八（ヘタレメガネ）と最初にあった時にケーキを作ってたり、フェイト達に手料理を作った事がある。
つまり銀時はどんな料理でも作ろうと思えば作れる。
それは、『万事屋やめてケーキ職人になれよ』っとツッコみたくなるぐらいである。

新八「誰だ今僕をヘタレメガネって言った奴は！！」

新八は怒鳴るが全員スルー。
すると蓮香が立ち上がる。

蓮香「・・・あなたのおかげで本当の自分を見つけられた気がするわ。ありがとう」
パープルハート「礼を言われることはしてないわよ」

パープルハートはウインクで答える。

蓮香「・・・それでは私はこれで。あ、お父様を病院に連れて行かなきゃ」
パープルハート「・・・いいの？」

蓮香は部下に指示を出して、健八を運ばせる。蓮香は言う。

蓮香「それでも、私は宇野宮健八の娘・宇野宮蓮香だから」
パープルハート「・・・そう」

パープルハートは笑みをこぼす。

蓮香「今度から、勝つことにこだわらず、お客様のために料理を作るわ。そして、『ニュー・レバイアタン』の結成を宣言するわ！」
パープルハート「フッ、そのいきよ。ネーミングはいいとして」
蓮香「それではごめん遊ばせ！！オ～ッホッホッホッホッホ！」

蓮香は高笑いしながらリムジンに乗ってどこかへ去った。

杏子「・・・昔っから変わってないなあいつ…」
パープルハート「忘れてた本人がそれを言う？」
杏子「ほっとけ」

杏子はケーキを食べながら蓮香のことを言い、パープルハートは友達を忘れてた杏子に突っ込む。

杏子「ま、私の店を守った礼だ。自分家に帰っていいぞ？」
パープルハート「ありがとう」

パープルハートはお礼を言った。

葵「銀時さん！是非とも山田の父親になってください！」
銀時「なんでオメーの父親になるんだよ！」
ぽぷら「でもどうせならお義父さんの方が…」
宗太「せんぱーーーーーーい！！それはゆるしませーーーーーん！！！」

フェイト「お、お義父さん？・・・それともダーリン？、あなた？…は、恥ずかしい…／／／／」
なのは「にゃはは、フェイトちゃん呼びやすい方がいいよ」
葵「銀時さん！私は銀時さんに娘に！」

なのは、フェイト、ティアナ、スバル、パープルハート
「させるかーーーーーーー！！！！」

銀時「テメエらいい加減にしろォォォォォォォォ！！！！（怒）」

何だがグダグダな展開だが、銀時達はミッドチルダへ帰りました。

～余談～

北海道の病院

蓮香「お父様…」

蓮香は病室で寝ている健八のお見舞いに来ていた。ちなみに健八は目を覚ました。

健八「…蓮香」

蓮香「…はい」
健八「何者かは知らんが、殴られた時私の中の忘れられていたものが目を覚ましたみたいだ」
蓮香「!?それじゃあ」
健八「ああ、何時だったであろうな。勝つことに固執し、世界一になるだなんて」
蓮香「・・・・・・・・・」
健八「その者のおかげで私は一からやり直そうと思っている。手伝ってくれるか?蓮香」
蓮香「・・・もちろんですわ!!」

蓮香は涙を流して、父親に抱きついた。

【ワグナリア編：ＥＮＤ】

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「『ワグナリア編』終了！そんじゃアシスタントの紹介だ」

杏子「ワグナリア店長の白藤杏子だ」

銀八「おし行くぞ。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。『あて・・・天の助ガードが効かなかったか・・・・暫く質問は控えようっと

首領パッチ「質問するわよ！貴方達の中で真のヒロインは誰なの？教えなさい！あ、因みに言うけど此処、リリカルボーボボのヒロインは勿論・・・わ・た・し・よん♪まぁ、田舎娘達の貧相な感覚じゃ私の美貌は分からないでしょうけどね・・・オ～ホッホッホッホ」

・・・し～らねっと』…え～と、ヒロインと言えば」

女性陣「私だよ（うちや）（あたしだ）！！」

真王「ヒロインはネプテューヌとなのはとフェイトですが？なにか？」

ネプテューヌ・なのは・フェイト「やったーーーー！！！」

はやて「ちょい待ちぃ！！何でうちがヒロインやないねん！！」

シグナム「納得がいかん！！私がヒロインだ！」

アルフ「あたしがヒロインだよ！！」

ティアナ「私もヒロイン・・・・・・かなぁ？」

スバル「何で疑問形？」

リインフォース「私がヒロインだ！！」

シグナム「いや私がヒロインだ！」

アルフ「あたしだよ！」

真王「さて、シグナム達を村人Ａにしてやるか…」

シグナム・アルフ・はやて・リインフォース・スバル・ティアナ「すいません！！それだけは勘弁してください！！」

６人は真王に謝った。

杏子「ちなみにこっちのヒロインは種島と伊波だと思うが。まあいい、『ｓｉｂｕｇａｋｉ』、バケツ持って廊下に立て」

銀八「次はペンネーム『レイガン』さんからの質問だ。『質問です。

ネプテューヌメンバーに質問です。
今度は自分達をリリカルメンバーに例えると誰になりますか？
銀時に質問です。
一回変身してたい物を選んでください。
1．仮面ライダー（改造人間にされる前提）
2．ヘルマスクを被りのリックのような体になること。
3．ＮＥＶＥＲ（一回死ぬこと）
さあどれ？』」

ネプテューヌ「う～ん、スバルさんかな？」

ノワール「フェイトかしら？」

ブラン「ハンマー繋がりでヴィータ」

ベール「私はエリオですわ」

銀八「成程。次は銀時だ」

銀時「まず1番はかっこいいから選ぼうとしたんだが改造は嫌だ。
2番はつけたくねぇよ、あんな仮面」

ヘルマスク『仮面って言うな、ヘルマスク様と言え！』

銀時「そして3だがこれ死ねって言ってんのかァァァァァァァァァァ！！！！（怒）」

銀時は『レイガン』のお便りを破った。

杏子「じゃあ『レイガン』。バケツ１０キロで廊下に立て。次はペ

ンネーム『鳴神ソラ』だ。『マリオ「美味い！！」

フォックス「また出たよ；」

スネーク「しかもアシスタントでも出たよこいつ！！」

ルイージ「いや～ネプテューヌにかけられた時は驚いたよ；」

ネス「まあ、無事に終わってめでたしめでたしだね～～」

リュカ「と言うかコンパさんやアイエフさん…出たけどほとんどセリフと言うセリフがなかったな；」

フォックス「まあ…きっと次章とかで沢山喋れるだろう；」

マリオ「真王に質問『スバル達って何時位にパワーアップ予定なんだ？』」

ルイージ「皆に質問『それぞれコンビネーション技を出すなら誰と組んでどんな奴にする？』」

スネーク「ネプテューヌに質問『マリオはどう言う風に食べてた？後ルイージも』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

真王「スバルたちですか？・・・・・・物語の進み次第でパワーアップします」

銀八「何だその他人事みたいなのは？…まいっか、次」

銀時「ネプテューヌと組んでアバババンを倒したあれでやるぜ」

新八「ぼ、僕はちょっと無理です；」

神楽「ブランと組んで巨大な衝撃波を出すネ！」

桂「エリザベスと組んで爆弾をバラまかせる！」

エリザベス『上と同じく』

月詠「わっちには連携は無理じゃ」

ネプテューヌ「銀さんと組んで技は『銀戦乱舞』って名前にするよ！」

ノワール「私はフェイトさんと組んで切り刻んでやるわね」

ブラン「ヴィータと敵をいっきに潰す」

ベール「特に相手はいませんねぇ…」

コンパ「シャマルさんと回復技を出そうと思うです！」

アイエフ「私はいないわねぇ…」

ネプテューヌ「マリオさんとルイージさん？マリオさんはものすごいスピードで食べててルイージさんは普通に食べてたよ？」

銀八「そんじゃまぁ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

杏子「次はペンネーム『黒神』だ。『質問します。

銀さんへ

1：もし自分が『●レイブルー』のラグナと同じ衣装を着たらコスプレと思われて嫌ですか？

2：僕の小説では貴方も魔導士化（正確には魔剣士化）しました。魔法侍となった気分はどうですか？

3：今だ僕の小説ではマヨラーは本編に出ていません。どんな気分ですか？』」

銀時「嫌に決まってんだろうが！！魔道士化？そんなん知らねぇけどあのマヨラーがいないならいいかもな？」

銀八「はい、『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

杏子「あ～腹減った～。八千代～、パフェくれ～」

八千代「は～い杏子さん♪」

銀八「オマッ、ずるいぞ！俺にもくｒ「おとりよせぇぇぇぇぇぇ！！！」ぎゃあああああああ！！！！」

銀八は八千代に切られた。

杏子「・・・やっぱパフェが一番だわ」

第三十二訓：心ある料理は一番おいしい（後書き）

真王「『ワグナリア編』終了！ミッドチルダに戻った銀時達はある依頼を受けることになった」

杏子「次回『河童寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？』テイクオフ」

真王「アンケートはまだ続くよ」

第三十三訓：カッパ寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？（前書き）

真王「舞台は寿司屋！ここで銀時達は何を作る？」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ♪」

第三十三訓：カッパ寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？

ミッドチルダに帰って5日後、銀時達はある依頼を受けた。
その依頼人は寿司職人であるそうである。

そして場所はミッドチルダのとある回転寿司。

そこに銀時、フェイト、なのは、桂、スバル、神楽、新八、月詠、ティアナ、はやて、エリザベス、エリオ、リィンフォース、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ヴィヴィオ、サチコ（実体化状態）が客席に座っていた。
そして店長はサングラスを賭けていて髪が白髪である。
その人物こそが、今回の依頼人の関口勝男（せきぐちかつお）である。

勝男「イヤー、わざわざ来てくれてありがたいねぇ。依頼は言うまでも無くつい最近客が少なくなってて・・・何が原因なのか分からなくて・・・」
銀時「っで，今回は客を寄せ集めてきてこの店を行列にするほど人気店にして欲しいって訳か？・・・まぁ良いぜ。とりあえずまずはアンタの寿司がどんなのかを見せてもらおうじゃねぇか」
フェイト「確かに，店は綺麗だしちゃんとしっかりとしている。っとなると問題は寿司か・・・・」

銀時とフェイトは問題は寿司にあると考える。
それには桂達も同感である。

桂「同感だな。店長殿、すまぬがお主の寿司にどのような物か見せてもらおう」
スバル「確かに見た眼が良くても味に問題ある料理や美味しくても

見た眼が悪すぎる料理もありますしね」
はやて「そやな。ウチはこう見えても味覚には結構な自信があるんやで♪」
ティアナ「それに、回転すしは時間が経つと美味しくなくなるのもあるし、人気店にするには相当に難しいと思うわ」
エリザベス『味と見た目にバランスあり！』

桂、スバル、はやて、ティアナ、エリザベスも銀時とフェイトの意見に賛成する。

コンパ「それに、久し振りの寿司です。ジャンジャンと食べられるチャンスです♪」
アイエフ「コンパ、少しはしたないわよ」

コンパに注意するアイエフ。
神楽は大喜びである。

神楽「きゃほー！久し振りの寿司ある！ジャンジャン食いまくるね！エリオも遠慮なく食うと良いね！」
エリオ「はい♪」
ネプテューヌ「早く寿司はこないの～？」
ヴィヴィオ・サチコ「の～？」
月詠「主ら・・・依頼である事を完全に忘れておるんな」
ノワール「ネプテューヌ、あんた食うことが目的なの？」

ワクワクして楽しむ神楽とエリオと、足をパタパタさせているネプテューヌとヴィヴィオとサチコに月詠とノワールがツッコみだす。

そして回転寿司が回りこんできた。

スバル「あ・・・カッパ寿司」
ティアナ「ふーん、まずは前菜って感じだね？」

スバルとティアナはそう言うと、はやてとネプテューヌはカッパ寿司を取って食べ始める。

はやて「う～ん、普通って感じやな？」
ネプテューヌ「きつすぎる訳でもなく、凄すぎる訳でもない・・・・どっちかと言うと美味くも無くて不味くもないって奴かな？」

味の感想を言い出す2人に月詠とリィンフォースとベールはジーっと見つめる。

リインフォース「形に問題はありません。むしろ綺麗に切られて食べやすくしています」
月詠「確かに，形だけはちゃんとしているようじゃ」
ベール「プロレベルですわね」

見た目は合格点である。

ノワール「まぁカッパ寿司は大丈夫として，次はぁ・・・・」

良く見ると、さっきからカッパ寿司しか回ってこない。
いくら待っても現れるのはカッパカッパカッパカッパ・・・・・・完全にカッパ寿司だけしかない。

全員「沙悟浄かァァァァァァァ俺―（私）―（僕）達はァァ！？（激怒）」
エリザベス『なめてんのか、ごるァァァ！！！！』

怒り出した銀時に続いて、フェイト、なのは、桂、スバル、神楽、新八、ティアナ、はやて、エリザベス、エリオ、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ヴィヴィオ、サチコが怒り出して勝男に突きだす。
月詠、リィンフォース、アイエフ、コンパは唖然として突っ立っている。

フェイト「カッパ巻きがガンダーラまで続くってどういう事ですか！」

普段は滅多に怒らないフェイトでもこればかりは我慢ならなかった為、額に青筋が浮んでいる。

エリオ「何ケチっているんですか！」
神楽「トロ出せェ！ウニ出せェ！」

エリオも神楽も怒りが大爆発である。

ネプテューヌ「マグロ出せぇ！ハンバーグ出せぇ！天ぷらエビ出せぇ！納豆出せぇぇ！！」
新八「ちょっと待てェェェ！！！それもはや寿司じゃねぇよ！！」
ノワール「カッパ寿司って店にそんなネタがあったわよ」
新八「あるのっ！？」

ネプテューヌが寿司ではなさそうなものがあるため新八は突っ込むが、ノワールがあると言って驚く。（実話）

ティアナ「何のためにあんたの依頼を受けたと思っているの！？まさか私達に嫌がらせする為じゃないでしょうね！」

倒れている勝男に『クロスミラージュ』を構えているティアナ。
そして涙を流しながら勝男は言い出す。

勝男「カッパしか・・・握れねぇーんだ・・・俺・・・本当はまだ寿司は握れねーんだよ」
全員「はぁ！？」

勝男は本当の事を話し出す。
実は自分は店長ではなくて唯の店員であった。
本当の店長は病で入院中だが明日にかえって来るそうである。
客に問題は無かったが、問題は寿司マシーンって言う機械があったのだが、昨日間違えて地面に強く叩きつけるかのように落としてしまい、壊れてしまったのである。

勝男「もうすぐ開店の時間だって言うのに・・・このままじゃここは、まるでダメなお寿司屋、通称『マダオ』になってしまう！本当の依頼は２つあるんじゃが・・・・」
ベール「１つはその機械の修理、そんでもう１つの依頼は・・・まさか・・・」

ベールは本当の依頼が何なのか理解する。

勝男「そう・・・もう１つの依頼って言うのは・・・・今日一日，俺と一緒に寿司を作ってくれぇ！」
全員「何ィィィ

調理場

そこには勝男と店員の衣装を着ている銀時、フェイト、なのは、スバル、神楽、新八、ティアナ、はやて、エリザベス、エリオ、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ヴィヴィオ、サチコがいた。
しかし桂だけは何やらレストランの店員のような衣装を着ている。
アイエフとコンパは何故か店員役をしていた。

ちなみに月詠は煙管を加えていなかった。
さすがに調理場で煙はヤバイと確信したのである。

勝男「まぁ、回転寿司に誰もそこまで完成度もとめてねーし、上にネタが乗ってて形さえ取り繕ってりゃなんとかごまかせるしよ」
はやて「確かにそうやな」
新八「ここは直接客の前で握る訳じゃないからごまかせられるし・・・素人の僕達も何とかなるんじゃないでしょうか？」

勝男の言う事にはやてと新八も感心する。

フェイト「勝男さん、すみませんけど最低限だけでもシャリの握り方教えてください」
リインフォース「カッパ寿司しか握れなくても、形だけは親方さんを見て知っていそうですし」
ノワール「とりあえず手本を見せてもらえるかしら？」

フェイトとリィンフォースとノワールは寿司の握り方を教えてもらう事を要求する。

勝男「よっしゃ！見よう見マネだが・・・見ててくれ！」

そう言うと勝男はシャリを握りだす。

勝男「まずシャリを取る。この時あまり取り過ぎないように気をつけてくれ。強すぎず弱すぎない加減で片手で空気を含むように握るのがポイントだ」

そして勝男はもう片方の手でわさびを付け、次にネタであるマグロを乗せる。

勝男「わさびを付け、ネタを乗せる。ひと握り」

握りだして完成したのは、マグロ寿司・・・ではなくカッパ巻きであった。

勝男「完成だ」

銀時・新八「何でだよォォォォォォォォォォォ!!」

思いっきりあり得ない感じで銀時と新八はツッコみだす。

ティアナ「何であそこからカッパ巻きが完成するのよ!」

新八「今カットの間に何があったんだ!?」

ティアナと新八は額に血管を浮かべてツッコみだすと、勝男はしゃがみだす。

勝男「ダメだ・・・俺、やっぱりカッパ巻きしか作れねぇ!!」

ノワール「今，思いっきりマグロを乗せていたじゃない！何できゅうりに変わっているのよ!!!!」

どうしてマグロがきゅうりに変わったのか理解できないノワール。
ブランはこう感じた。

ブラン「もしかして先祖が河童を殺して呪われてるんじゃない？」

そう言い出すと誰もがそう感じる。
それとは別に勝男のやり方を見てネプテューヌ、なのはは寿司の握り方を覚える。

ネプテューヌ「でも雰囲気伝わったよ。やっぱ寿司と言えば魚類系が多かったりするよね？」
なのは「作るの初めてだけどおいしければそれでもないよ～」

そう言って2人はシャリを握り始める。

ネプテューヌ・なのは「空気を含むように握り、わさびを付ける。ネタを乗せて一握り」

わさびを付けて、マグロのネタを乗せた後に一握りし、そして完成したのは・・・・・ネタがケーキになっていた。

ネプテューヌ・なのは「完成だよ♪」
新八「だからなんでだよォォォォォォ！！！何でマグロからケーキに変わってんだよ！！」
ティアナ「なんでマグロからケーキに変わってるの！？カットの間にマジックでもやったの！？」

さすがにありえないことに突っ込むが、ネプテューヌとなのはは言い切る。

ネプテューヌ・なのは「たまには自分のオリジナルを凝って作ってみたんだよ」
新八「凝り過ぎなんだよ!!帰れ!!今すぐ病院へ行ってください頭のっ!!」
新八は頭に血管をうかばせて怒鳴る。
銀時「テメェら、素人のくせに色気づきすぎなんだよ」
桂「我等は不味くても形さえ繕えば良い」
そう言って銀時と桂はシャリを握ってわさびを付けてネタを載せて一握りすると・・・何故かパフェとかけそばになった。
銀時「ほら」
新八「形を守れェェェェェェェェェ!!!」
さらに新八がツッコみだす。
新八「これほとんど寿司じゃねぇよ!銀さんも桂さんも完全にやる気ないでしょ!」
ティアナ「完全にサイドメニューじゃない!」
あり得ないばかりにツッコむ新八とティアナに銀時と桂は言い出す。
銀時「文句を言う前にまず食べてみてください」
桂「同じことを言えるでしょうか?」
新八「食べねぇよ!」
ティアナ「何パティシエ試験みたいなカンジかもしているのよ!」
銀時と桂のパティシエボケに呆れてツッコむ新八とティアナ。

なのは「じゃあ、桂さんのかけそばと銀さんのパフェはサイドメニューに回すとしよっか♪」
フェイト「肝心な寿司は如何するの！？」

なのはがそう言いだすとフェイトがツッコみだす。
そして神楽とエリオが何かを作っているかのようにしている。

月詠「神楽、エリオ・・・何をしているのじゃ？」

月詠が聞き出すと、神楽とエリオは振り向く。

神楽「ん？エリオと一緒に寿司を作っているネ」
エリオ「どうでしょうか？」

2人が作ったのは、まさに立派な寿司であった。

月詠「おおー、こいつは見事な寿司じゃ！」
なのは「すごいよ2人とも！どう見ても立派な寿司だよ！」
ベール「見た目も良いし凄くおいしそうですよ！」

月詠、なのは、ベールは感心するかのように言い出す。
その寿司は通常の大きさではなく・・・・・・調理場の場を大きく埋め尽くしそうなカンジにある寿司である。

はやて「これなら行けそうやないか♪」
新八・ティアナ「いや、デカ過ぎじゃァァァァァァァ！！！！」

額に血管を浮かべて怒鳴りだしてツッコむ新八とティアナ。

フェイト「え・・・エリオ、神楽・・・こんな大きいマグロの切り身をどこから持ってきたの？」
エリオ「前からの夢だったんです」
神楽「でかい寿司をかぶりつくのネ」
ティアナ「あんた等の為に作っているんじゃないのよ！こんなの食べられる人はどこの世界にもいないんだよ！」

苦笑しながらフェイトが質問すると、神楽とエリオがそう答えてティアナが大きくツッコみだす。
さすがにこの巨大な寿司を食べる者はいな・・・

パクッ

ネプテューヌ「ごちそうさま」
全員「いたァァァァァァァァァァァァ！！！！！？」

何とネプテューヌが一口で巨大寿司を平らげました。あの小さな体であの大きな寿司を平らげるネプテューヌの胃袋は怪獣レベルか？と思った一同。

エリオ「そ、そんな・・・」
神楽「私達の…夢が喰われたネ…」

エリオと神楽は食べられたことにショックを受けた。

サチコ「ねぇ、私の寿司食べてみる？」

サチコは銀時達を呼んでサチコの寿司を見せる・・・がそれは茶色い芋虫しか見えない…というか芋虫そのものだった。

新八「ちょっと待てェェェェェェェェェ！！！！サチコちゃんなんですかそれっ！！？」

新八は芋虫（？）を指差して言う。

サチコ「私の自信作だよ♪食べる？」

サチコは芋虫（？）を新八にさし出す。その芋虫（？）は生きているように動いている。

ティアナ「ってこれ動いているじゃないの！！その辺の芋虫拾って茶色く塗ったｄ「いただきま～す」」

全員「ってあああああああああああああああああ！！！！」

ティアナが突っ込んでいる最中、ネプテューヌが芋虫を手に取って食べる。銀時達は思わず叫び、そしてネプテューヌは、

ネプテューヌ「あ、これチョコ味だねサチコちゃん」

サチコ「えへへ～♪」

おいしそうに食べてました。

新八「・・・え？何で平気なの？」

ネプテューヌ「何で？っておいしいよ？ホラ」

ブラン「モグッ・・・・・チョコ味がする」

なのは「ちょっと貸して・・・モグッ・・・あ、おいしい」

新八・ティアナ「マジで！？」

まさかあの芋虫（？）がおいしいだなんて思わなかった2人。

その後も、フェイト、ティアナ、リィンフォースもやったが、何故か不器用なのか形になれずに完成する時間もかなりかかる。そんなとき、コンパとアイエフが入ってきた。

コンパ「大トロ、エビ、鯛、そして蛸が入ったです！」
アイエフ「こっちはサーモンとイカと鮭が入ったわ」

そう聞くと勝男は慌て始める。

勝男「どうすんだよ！まだカッパ巻きにケーキとチョコパフェ、そしてかけそばしか出来てねぇよ！」
新八「あのサイドメニューも出す気か！？」

勝男の言う事にツッコむ新八。
すると・・・・

ノワール「今度は私がやって良いかしら？」
ベール「私もやりますわ」
エリザベス『自分もやります』
月詠「まぁ、仕方がないか」
はやて「こんなときこそウチの出番や！」

ノワール、ベール、エリザベス、月詠、はやてが手を上げる。
はやては料理を作れるからわかるが、フェイト達は最初はノワール、ベール、エリザベス、月詠の４人が寿司を作れるのか疑っている。
しかし、銀時と桂はエリザベスならできそうな気がする。
戦闘力だけじゃなく器用であるため、もしかすれば寿司も作れるかも知れないと考える。

銀時「まぁ、５人とも作ってみな」

銀時がそう言うと、５人は台所に立つ。
すると、・・・ノワールは眼にも映らない神速の速さで一瞬にマグロを作り出し、エリザベスは口から人間の両手を出し、寿司を握ってエビを完成させ、月詠とはやてとベールは２人と違って平凡的でそんなに早くないが、丁寧に握りだし・・・それぞれ鯛と蛸を作る。

ノワール「完成よ」
ベール「完成しました」
エリザベス『出来ました』
月詠「一応・・・こんなカンジじゃ」
はやて「完成や」

フェイト、ティアナ、リィンフォース、エリオ
「色々ちょっと待てエエエエエエエエエエエエエ！」

立派な寿司を完成させたノワール、ベール、エリザベス、月詠にフェイト、ティアナ、リィンフォース、エリオがツッコみだす。

ティアナ「ノワールさん、何でアナタがこんな立派な寿司を握りだすんですか！？」
フェイト「いくらネプテューヌの次に強いからってそれはないでしょ！」

ティアナとフェイトはノワールのあり得ない器用さに言い出す。

ノワール「ちょっと料理界の達人におしえてもらって習得したのよ。・・・以外にも慣れれば誰だって出来るわよ」

フェイト「屈辱的な事を言わないでよ！料理をまともに出来ない人が聞くと涙が出てくるよ！」

フェイトは涙を流しながらそう言う。
どうやらまだ出来ていないようである。
そしてさらに驚くべき事を聞き出してエリオが言い出す。

エリオ「ってエリザベスさんの口から人の腕が出てきましたよ！」

そう、エリザベスが口から人間らしき両手が出てきたことに驚いているのである。
これにはフェイト達が黙っていられない。

フェイト「これ思いっきり人形を被った人じゃないですか！完全に動物じゃないよ！」
桂「人じゃないエリザベスだ」
フェイト「絶対人ですよ！よくよく考えてみればそんな生き物絶対にいませんって！時々見えてくるおっさんらしき足は幻覚だったのかと思いきや、やっぱり人じゃないですか！」
桂「それは見間違いだ！」
リインフォース「何でそこまで言えるんですか！」

フェイト、リィンフォースは桂にエリザベスは実は人ではないかっと疑いだす。
そして銀時と神楽は意外そうに月詠を見る。

銀時「お前、寿司とか握れたっけ？」
神楽「ツッキーもキャラ設定の崩壊アルか？」
月詠「おい・・・まさか主らはわっちが料理できないとでも思ったか？・・・まぁわっちも最初は出来ぬ女じゃったが、日輪に料理の

作り方を教わって、それで多少はできるようになったんじゃが・・・」
神楽「多少ってレベルじゃないアル」
確かに月詠の寿司もノワール、ベール、エリザベスと並べられるほどの出来の良さであった。
ネプテューヌ「ベールって料理できたっけ？」
ベール「昔は全然だめでしたけど料理の知識を学んで上手になりました」
ネプテューヌ「成程～。ブランは？」
ブラン「めんどくさい」
ブランはネプテューヌの問いを一蹴した。
銀時「まぁ、見た目は良さそうだし・・・とりあえず出させてもらうぜ。オメェらもしっかり作ってろよ」
銀時はノワール、ベール、エリザベス、月詠、はやての5人にそう言うと、客席沿いに設置されたチェーンコンベアの上に5人の寿司を乗せる。
そして客室には何故か、赤い帽子と青いオーバーオールのヒゲ男・マリオと、バンダナをつけた男・スネークが、ノワールの作ったマグロ寿司を取る。
そして1人で1つずつ取って、寿司を口に入れて食べる。

するとその味の感想は・・・・

マリオ・スネーク「美味い！！！！」

2人をうならせた。

マリオ「何だここ新食感！今まで食べた事がない味だ！」

スネーク「ネタとシャリが絡み合うかのようにとろけて一心同体の如くの旨みを引き出し、力強い濃くさとあっさりとした味わい！何だこれは！？」

マリオ・スネーク「寿司の革命だァ！」

予想以上の評判の良さであった。

さらにエリザベスのエビ寿司、月詠の鯛寿司、はやての蛸寿司も中々の評判であった。

客1「おい！俺にもそれをくれ！」

客2「自分も！」

客3「私も！」

客から予想以上の客からの注文にカウンターにいるコンパとアイエフは驚きだす。

コンパ「な・・・なんですかいきなり！？」

アイエフ「中の銀さん達は何かやったのかしら？」

神楽「奇跡ネ・・・・」
エリオ「奇跡が起こりました・・」

裏方の出口から神楽とエリオはそれを見て唖然とそう言う。
同じく銀時と勝男は予想外の展開に唖然と驚く。
そして一世一代のチャンスに勝男は希望を持った。

勝男「いける！これはいけるぞ！姉(ねぇ)ちゃん達、ジャンジャンと作れぇ！遠慮なく作れぇ！」
ノワール「しょうがないわね！」
ベール「もっと材料を持ってきてください」
エリザベス『合点承知！』
月詠「この際、どんと来いじゃァ！」
はやて「やったるわ！」

ノワール、ベール、エリザベス、月詠、はやての5人はさらに寿司を握って作り出す。
特にノワールは、ある料理界の師から鍛え上げた神速の速さで次々と寿司を握り出す。
エリザベス、月詠、はやて、ベールはノワールについて行くかのように作り出す。

隣では、フェイト、ティアナ、リィンフォースの3人が女としての敗北を味わって落ち込む。
桂とエリオはどう声をかければ良いのか苦笑しながら考える。

ネプテューヌ「おおー、飛ぶように皿がさばけられているよ！」
神楽「店の前も長蛇の列ネ！」
銀時「来たァァァァァ！これ来たァァァァァァァァァァァ

ァァァァ！」

結果は大成功だと思いきや・・・・

桂「大変だ！余りの客足に材料がつきかけているぞ！」

全員「何ィ！？」

桂がそう言うと、勝男は壁を思いっきり殴って悔やむ。

勝男「チクショウ！一世一代の大チャンスなのに・・・俺は所詮、まるでダメなお寿司職人・・・マダオなのか！？」

銀時「行けよ」

勝男に銀時が声をかける。

銀時「アンタは何としてても、材料をかき集めて来い。それまで俺達がこの場をもたせてみせる」

銀時がそう言うと、落ち込んでいたフェイト、ティアナ、リィンフォースの3人は立ち上がる。

桂、スバル、神楽、月詠、はやて、エリオネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ヴィヴィオ、サチコも銀時も勝男を見て任せるように見る。

銀時「早く、行けェェ！」

宗汰「・・・・頼んだぜ！」

銀時達にこの場を任せた勝男は走って店を出て食材集めに行く。

そして銀時は如何すれば良いのかを考える中・・・

コンコン

誰かが扉を叩く音が聞こえ、フェイトはその扉を開くと・・・・

漁師達「どうもこんにちは！親方様のご依頼の品物を届けてきました！」

全員「へ？」

何やら品を届けに来た漁師達であった。

そして車からマグロ、鯛、蛸、エビなど様々な海の幸のネタが着ていた。

それを見た銀時達は・・・・

全員「え・・・・何このオチ？」

っと言うしかなかった。

実はこれは入院中のこの店の親方がもうすぐネタが切れると思って注文した物ばかりであった。

もちろんお金は先払いしており、銀時達はとりあえずこれで何とかすると作業に戻る。

銀時、桂、はやて、ネプテューヌ、ブラン、は魚をさばいて寿司が握れるようなカンジで切り出す。

それを、スバル、エリザベス、月詠、ノワール、ベールは握りだして、神楽、エリオ、ヴィヴィオ、サチコはその寿司が載せられた皿をチェーンコンベアに乗せる。

かくして無事に見せも閉まり、無事に依頼を為し遂げられた。

フェイト、ティアナ、リィンフォースの３人は今回は役に立てなかった事に強いショックを受ける。

そんな３人に如何声をかければ良いのか銀時達は苦笑して考える中、

ベールが突然・・・・

ベール「・・・外見が良くても中身はヤバそうな存在は誰だってありますから、落ち込まないでくださいね・・・・・・・・・・・・・・・・・負け犬♪」

フェイト・ティアナ・リインフォース「うわあああああああああああああああん!!!!!!（豪泣き）」

ベールの一言に3人はショックで大泣きしてしまう始末なのであった……

勝男「ウォオオオオオオオオ!!!」

勝男はイカダに乗って銛を握り、海から跳ねている黒マグロに飛び込む。

勝男「待っていろ皆!今すぐに行くゥ!」

・・・店長の配達に気づくのは帰ってからだった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「は～い♪アシストするのはこの私ネプテューヌと」

ヴィヴィオ「銀時パパの娘ヴィヴィオと」

サチコ「幽霊なのにボケの領域に入ったサチコの」

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・サチコ
「私達『仲良しデコボコトリオ』がアシストしま～す！」

銀八「自分でデコボコって言っちゃったよ！まいっか。一応始めっぞ～」

ネプテューヌ「じゃあまずはペンネーム『黄色いのなにか』さん・・・って何このネーミング？まいいや。
『童貞眼鏡（新八）に質問です。

なのはにふられてネプティーヌ達を襲わないんですか？』・・・・・・」

ネプテューヌは新八を軽蔑するような目で見る。

新八「ちょ、僕を軽蔑しないでくださいよ！！って言うか襲うだなんて何でですか！？僕はこれっぽっちも思ってませんからね！！後童貞舐めんなぁァァァァァァァァァァ！！！！」

ネプテューヌ「・・・『黄色いのなにか』さん。とりあえず飛び降り自殺して…」

銀八「お前何言ってんの！！？」

ネプテューヌの物騒すぎる言い方に銀八は青ざめる。

サチコ「お仲間が増えるかな？じゃあ次、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『良かった良かった。

マリオ「うんうん、ネプテューヌは良い事言った。俺は料理は食べて貰う人が幸せになれる様に願った物が一番美味いと言うのが俺的考えだ」

ルイージ「（それで僕達は撃沈されます；）」

クッパ「（吾輩達には強過ぎる；）」

フォックス「まあ、めでたしめでたしで…次は寿司関連のお話か？」

スネーク「だろうな…今まで出た一同に質問『『月夜に舞う龍』で

作者が書いてる小説にもしいけるとしたらどこに行く？ちなみに1つの小説で2組までだからな』」

ファルコ「真王に質問だが…『銀時は戦いの中で女神モードにならなきゃ勝てない敵とか出て来るのか？；』」

ルイージ「皆に質問『自分の料理の腕前を次の3つの評価で表すならどれ？　1：凄く美味い、2：普通、3：だめだめ』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

フォックス「どんなハチャメチャが待ってるのやら…」『」

真王「『とある科学と魔術と鍵の勇者』ではリトバスメンバーと戦線メンバーズが、
『東方魔弾戦記』ではリック達と如月学園組が興味があるようです。
あと銀時？女神モードにならなくても強いですよ？あ、そうそう、彼らの料理の腕はこんな感じです」

『1：銀時・桂・ノワール・ベール・なのは・はやて・エリザベス・月詠

2：神楽・新八・ネプテューヌ・ヴィヴィオ・スバル・エリオ・コンパ・アイエフ

3：フェイト・ティアナ・リインフォース・シグナム・ヴィータ・ブラン

屑以下：シャマル

』

シャマル「ちょっと待ってください！！私の料理が屑以下ってどういうことですか！？」

真王「だったらこれ食え！」

真王はシャマルにシャマル鍋を口に放り込む。

シャマル「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

あまりの不味さに倒れる。

サチコ「また仲間が増えるかな？『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってね♪」

ヴィヴィオ「次はヴィヴィオだよ～♪ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。『えぇと、今回の質問で首領パッチが何もされなかったので今回あいつは調子に乗ってます

首領パッチ
「うっふ～ん、銀時さんに質問♪
バレンタインだけど、チョコを貰うなら誰が良い？
そして、私は貴方にチョコと一緒にわ・た・し・をプレゼントしてあ・げ・る♪」

・・・誰かコイツに裁きの鉄槌を下してくれ
見てて吐き気がしてきた』・・・・・・・・・」

真王「ええ…はい、あの糞パッチを絞めてください。無論殺す程度で、はい」

真王はニコニコしながら携帯で電話している。全然目が笑ってない笑顔を見て、全員超青ざめて震えている。

銀時「え、えっと…お、俺的には何でもいいんだが…って言うかもらいたいし、チョコ」

なのは・フェイト・シグナム・アルフ・リインフォース・スバル・ティアナ
「だったら私の！！」

真王「静かにしてくれるか？（ニコッ）」

なのは・フェイト・シグナム・アルフ・リインフォース・スバル・ティアナ
「ハイ、スイマセンデシタ」

銀時ｌｏｖｅｓは素直に席に座った。

ヴィヴィオ「し、ししし『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。ゼ、ぜぜ絶対に作者さんを怒らせないでください…」

ネプテューヌ「そ、そそそれじゃつつ次行こうか。うん・・・ペンネーム『レイガン』さんの質問。『質問です。桂さんに質問です。
一度なりたいものを３つ選んでください。
１．仮面ライダーオーズ（グリードに襲われるようになります）

2．ボケ殺し（魚雷ガールの所で修行すること）
3．ウルトラマン（選ばれるか分かりません）
銀魂メンバーに質問です。
ネプテューヌ達のように女神モードになりたいですか（銀時除いて）？』」

桂「俺か？1がいいな。仮面ライダーはかっこいいからな」

新八「ぼ、僕が女神!?つまり女の子になるんですか!?そ、それはちょっと無理です!!」

神楽「これなら私はなのはのようなボディになれるネ!」

桂「俺は別に何でもいいが…」

エリザベス『女神になったら私は人になるんでしょうか？』

月詠「わっちは興味ないぞ」

九兵衛「胸が大きくなるなら使うぞ!!」

銀八「ハイ『レイガン』さん。女神姿の奴らを想像しながら廊下に立ってなさい」

真王「ではアンケートはここまでにします。結果このようになりました」

ネプ銀編
←
銀河編

←
パンドラ編

真王「それではまたお会いしましょう」

一方、

ディオ「ロードローラーだ！！」
言葉・レナ「あはははははははははははははは！！！！」
バルバトス「今死ね！すぐ死ね！！骨まで砕けろぉぉ！！！」
ラオシャンロン「あんぎゃあああああ！！！」
マリオ「ギガマリオファイナル！！」

ドンパッチ「イ゛イ゛ィェエ゛エ゛ア゛ア゛アアアアアアアアアアアア！！！！！」

哀れ、ドンパッチ。安らかに眠れ。

第三十三訓：カッパ寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？（後書き）

真王「次回はスカリエッティ達が銀時達と解釈します」

ネプテューヌ「次回『グダグダな自己紹介は最後までグダグダ』テイクオフだよ」

第三十四訓：グダグダな自己紹介は最後までグダグダ（前書き）

真王「スカリエッティとナンバーズ達の解釈が始まります」

スカリエッティ「では、『リリカル銀魂』を始めよう」

第三十四訓：グダグダな自己紹介は最後までグダグダ

ある日、機動六課の前に銀時、桂、神楽、新八、月詠、エリザベス、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ヴィヴィオ、機動六課のメンバーはもちろん、真撰組局長ごと近藤勲、土方、沖田、指名手配犯にされているはずのスカリエッティにルーテシアにアギト。そしてナンバーズ達が来ている、

ノーヴェ「おい・・・なんで私達がこの場所にいるんだ?何で初登場がこんな敵の奇襲とはほど遠い存在なんだ?」

何で自分達がこの場所に存在するのかと考えている、戦闘スーツを着た赤髪の少女、ノーヴェが言い出す。

クワットロ「仕方がないですよ～。なんかこの小説の作者が私達を悪役になるより味方である方がいい、って犯罪者扱いされていないですようですよ」

っと、眼鏡をかけた女性であるクアットロが言い出す。

ノーヴェ「はぁ?何を考えているんだあの馬鹿作者は?」

ウーノ「まぁ、それもしょうがないでしょう?作者も色々と考えているんでしょうけど…」

呆れて言うのは他のナンバーズとは違って衣装が隊長服のような雰囲気をしているウーノ。

ナンバーズの姉的な存在である。

ウーノ「それに・・・妹達もあの様子だしね」

ウーノはそう言うと、隣に顔を向く。
そこには銀時達に近づいて尊敬する眼で見るセイン、セッテ、ウィンディ、ディードは銀時と話をしていた。
チンクは隠れながら遠くから顔を真っ赤にして銀時を見ていた。

セイン「本物の坂田銀時だぁ！」
ウエンディ「すごいっす！まさか本当に会えるなんて！」
ディード「魔法を使わずに剣だけで、数多くの事件を解決は本当ですか？」
セッテ「是非、その剣の実力見せてください！」

メッチャ尊敬しているようである。
彼女達の尊敬する眼線に銀時は少し照れて如何すれば良いのか戸惑っている。

銀時「え・・・何この歓迎？マジ・・・ちょ・・・嬉しいのか恥ずかしいのかどっちなんだろう？」

自分がいた世界とは大違いな歓迎振りに銀時は慣れていないのか如何すればいいのか分からないのである。
自分はただの万事屋だが、この世界の人物から見れば銀時はオーバーSランクであるゾーマを倒した英雄的な存在である。
その光景に、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォースはどす黒い殺気・・・・じゃなく嫉妬心を燃やしていた。

フェイト「また銀時につきまとう害虫が増えたわね・・・・」（ゴ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
なのは「敵じゃなかったら駆除してやるんだから・・・」（ゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴゴ
スバル「殴りがいがありますね・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
ティアナ「脳にでっかい穴を開けてやろうかしら・・・・」（ゴゴ
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
アルフ「甘ったれた顔面を殴り飛ばしてやろうかい・・・・」（ゴ
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
シグナム「命の欠片も残さん・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
リインフォース「銀時と合体できるの私だけですから・・・・」（
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ノーヴェ「ちょ、何だあの七人!?」
クワットロ「怖ァァァァ!!」

ノーヴェとクアットロはフェイト達のどす黒い嫉妬心に恐怖を感じた。
他のナンバーズはもちろん、隣にいる新八、神楽、月詠、エリオ、キャロ、フリード、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィン、ユーノ、九兵衛、ヴィヴィオ、コンパ、アイエフもガタガタと震えて怖がっていた。
しかし桂とはやてとベールだけは笑っていた。

トーレ「なぁ・・・3人はどうして笑っていられるんだ?あの7人の何が面白いんだ?」

長身で他のナンバーズよりも頭一つ分大きいナンバーズの1人であるトーレは桂とはやてとベールに聞き出す。

桂「うむ、より争奪戦が大きくなるようで面白いからな」
はやて「それに銀ちゃんがこの後大変な事になるしな・・・想像するだけでワクワクしてしまうんや♪」
ベール「嫉妬で戦争を起こすのは面白そうですし♪」
トーレ「貴様ら3人は最悪だな、オイ！」

3人の腹黒さにツッコむトーレ。

ルーテシア「近藤・・・どうしてあの人達は怒っているの？」

ルーテシアは近藤にフェイト達の怒りの原因を聞きだす。
近藤は左手をルーテシアの頭に乗せて、涙を流しながら言い出す。

近藤「ルー殿・・・大人になれば分かる事だ」

ルーテシアはそれがどういう意味なのか分からないが、アギトは7人を見てこう思った。

アギト「もし・・・このまま敵に回っていたら私達とんでもない眼に合っていたような・・・・」

アギトは想像しただけで自分はルーテシア、ナンバーズとスカリエッティが血まみれになって倒れてるのしか思い浮かばずに青ざめる。

ネプテューヌ「ま～、止められるのは私かサチコちゃんたちぐらいだけど…」
ノワール「余計な逆鱗を触れては駄目よ」
ブラン「銀時が好きなのは分かってても、自重しない女は嫌われる。・・・ククク」

ネプテューヌは余裕そうにつぶやき、ノワールはネプテューヌに注意し、ブランはこの後のことに笑いをこらえる。
が、なのは達はネプテューヌ達のセリフを聞かない訳がない。

フェイト「ネプテューヌ、それどういうこと？・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
なのは「ネプちゃん、お話ししようか・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
スバル「ネプちゃんでも許さないよ・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
ティアナ「穴を開けてあげましょうか・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
アルフ「骨までっ食ってやろうか・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
シグナム「命の欠片も残さん・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
リインフォース「銀時と合体できるの私だけですよ・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ネプテューヌに対して殺気を出すなのは達。

銀時（ネプテューヌゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！）
新八（ネプテューヌちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！逃げてェェェェェェェ！！！）
コンパ（逃げるですねぷねぷゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！）
ノーヴェ（紫ィィィィィィィィ！！！逃げろォォォォォォォォ！！！）

銀時達は青ざめてネプテューヌに逃げろと心の叫びを出す。
しかしネプテューヌは怖がることもなく、なのは達に指をさしている。

なのは「？何指差してるの？」
ネプテューヌ「後ろ」

ネプテューヌは後ろを指差し、なのは達は後ろに振り向くと・・・・・なのは達の肩を掴むサチコ達が。

フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース
「イヤアアア

ネプテューヌ「失礼だねも～。さ、サチコちゃん。あの人たちに挨拶」
サチコ「こんにちは、サチコです～♪」
遼「遼です」
雪「私は雪」
時子「時子だよ～♪」
ノーヴェ「あ、ああ、こちらこそ…」

ノーヴェは怖がりながらもとりあえず自己紹介した。

理樹「ねぇ、今悲鳴が聞こえたんだけど？」
真人「何だ？なんか怖いものでもあったか？」
音無「何かあったのか？」
ユイ「何事でござーましょうか？」

なのは達の悲鳴を聞きつけ、リトルバスターズと戦線メンバーズが集まる。
するとゆりがスカリエッティを見つける。

ゆり「あら？スカリエッティじゃない？元気にしてた？」
スカリエッティ「仲村君かね？まぁ元気さ」
新八「あれ？ゆりさん、知ってるんですか？」
ゆり「知ってるも何も私たち前にスカリエッティのとこにいたのよ？」

ゆりの一言に戦線メンバーズ位以外の全員が驚く。
銀時はスカリエッティから聞いたため驚いてはいなかった。

土方「そういや山崎とあの女は？」

沖田「もうすぐ着くと思いやすぜ？」

土方がいまだ現れない山崎とナンバーズのディエチのことを沖田に聞いた。

？？？「いやぁー、やっとついた」

？？？「・・・・遅れて申し訳ございません」

突如、後ろから2人の男女がようやくついたかのように言い出す。

男の方は、山崎退（やまざきさがる）であり、女の方は・・・何やら他のナンバーズ達とは違って女の子らしい服装を着ている頭に赤いリボンがついている少女・・・もどいナンバーズの1人であるディエチっである。

黒と白をメインとしたマルチボーダーセーターにレギンス付の黒いスカートに靴はダークブラウン。

どこにでもいる可愛らしい少女の姿であった。

ウーノ、トーレ、チンク、オットー、ノーヴェ「ちょっと待てェェェェェェェェェェ！」

ウーノ、トーレ、チンク、オットー、ノーヴェが怒鳴ってツッコみだす。

スカリエッティとクアットロは唖然としていた。

チンク「ディエチ！なんなんだよその格好！何でいつもの戦闘スーツにならないんだよ！」

オットー「その服は如何した！？」

チンクとオットーは理由を聞き出す。

どうしてこのような格好をしているのかを聞かれたディエチはその理由を聞き出す。

ディエチ「じ・・・実は・・・山崎さんがせっかくだからっと私の為に可愛らしい服装を選んでくれて・・・この格好をみんなに見せようかなっと思って・・・似合う？／／／」

ウーノ「うん・・・女の子っぽくて可愛いわ・・・・ってそんな理由で遅れてきたんかいィィィィィィィィ！！」

ディエチの理由に噴火するかのような怒りを表して額に血管を浮ばせてツッコむウーノ。

ドゥーエ「まぁ良いじゃない？彼氏に買ってもらった服し♪・・・それに、似合っているじゃない♪」

ウーノの後ろからそう言いだすのは、ドゥーエであった。

ニヤニヤとディエチを見ると、ディエチは顔を真っ赤に染めてしまう。

ノーヴェ「おい、山崎！テメェ、ディエチになんて格好をさせてたんだ！」

ノーヴェは怒鳴って山崎の服を引張り上げて理由を聞き出す。

山崎「あ・・・いや・・・そのう・・・なんかディエチが羨ましそうに女の子の服を見ていたから・・・何とかしてあげたいと思って今日ここに来る前に買って上げたんです！」

ノーヴェ「余計なお世話するんじゃねェェェェ！！！！」

ドカァ！！

山崎「あらぶぁあああああ！！」

ノーヴェは思いっきり殴って山崎を吹飛ばす。

ディエチ「の・・・ノーヴェ！山崎さんにそこまでしなくても！」

暴れているノーヴェを抑えるディエチ。
そして倒れている山崎を起こす銀時、神楽、桂は興味ぶかそうに山崎を見る。

山崎「あ・・・旦那・・・」
銀時「なぁ・・・お前いつの間に彼女とか出来たの？」
山崎「え！？／／／／」

銀時が憎たらしい顔で山崎にそう言うと、山崎は顔を真っ赤にしてどのように何説明すればいいのか分からなくなった。

神楽「とりあえずお前もう地味キャラ卒業ネ。卒業おめでとうアル」
山崎「え・・・なんで！？」
銀時「いや、地味キャラが女出来たらおかしいだろ？だからそう言う奴は強制的に地味は卒業っとなっているの。地味キャラ脱出なの」
山崎「そんな理由ですかぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

銀時と神楽の地味的な存在の卒業理由にツッコむ山崎。

新八「チクショォォォォォォォォ！！！僕だって！僕だってェェェェェェェ！！！（豪泣き）」

彼女の出来ない新八は頭をガンガンぶつける。その新八にサチコが新八の肩に手を置く。
愉快そうに笑う近藤が近づく。

近藤「だぁーはっはっはっはっはっはっはっはっは！いやー、山崎には先を越されたよ！俺もいつかお妙さんと結ばれたいものだ！」
神楽「ゴリラには無理アル」

山崎に負けじと妙と結ばれたいと考える近藤に対して神楽が毒舌のツッコミをする。

銀時「ところでお前はなんであいつと？」

銀時は山崎とディエチの関係を聞き出す。

山崎「ああ、それはですねぇ・・・」

メンドクセぇので省略…

銀時・新八・神楽・ヴィータ・シグナム・なのは・フェイト・ティアナ・月詠・チンク・ノーヴェ・オットー・ウーノ・トーレ・ドゥーエ・エリオ・土方・近藤
「ちょっと待てエエエエエエエエエエエエ！！！！！作者手抜きすなぁアアアアアアアアアア！！！」

・・・・・こいつ等を村人A扱いにしておくか…。

銀時・新八・神楽・ヴィータ・シグナム・なのは・フェイト・ティアナ・月詠・チンク・ノーヴェ・オットー・ウーノ・トーレ・ドゥーエ・エリオ・土方・近藤

「止めてエエエエエエエエエエエエエ!!!!!俺―（私）―（僕）達が悪かったよォォォォォォォォォォォォ!!!」

山崎「えっと…みなさん何に向かって叫んでるんですか?」

空に向かって叫ぶ銀時達に山崎がネプテューヌに聞いてみる。

ネプテューヌ「手抜きした作者を怒らせて出番がなくなることに叫んだんじゃない?」

山崎「・・・・・・・・・」

ネプテューヌの答えにどうするべきか迷う山崎。

桂「はっはっは~!全く銀時は作者を怒らせるからだ」

はやて「ホンマや。銀ちゃんそのうち存在が消されるかも知れんで~♪」

山崎「黒っ!?あんた達腹黒っ!!?」

桂とはやての腹黒さに山崎は突っ込む。

ネプテューヌ「でもそう言う人に限って実はひどい目にあったりするよね~」

ヴィヴィオ・サチコ「ホントにね~」

葉留佳「馬鹿は死んでも治らないって言いませんか?」

真人「そうか?」

クド「のーぷろぶれむなのです？」
ユイ「ようはアホですね☆」
関根・入江「ね☆」
ウエンディ「馬鹿は馬鹿にしか分からないっす」
セイン「そりゃ言えてるね」
ベール「私は嫌いではないですよ」
ブラン「・・・・・・・・・・」

そんな腹黒コンビにネプテューヌ達が言う。

はやて「・・・あんたらいつの間に仲良くなったん？」

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・サチコ・葉留佳・真人・クド・ユイ・関根・入江・ウエンディ・セイン・ベール・ブラン「さぁ？成り行きかな？（っす）」

素っ頓狂なことを言う大ボケ組なのであった。

銀時はそれで良いのか？って思った。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

スカリエッティ「原作では悪役であり、研究者であるこの私がアシストしよう」

銀八「そんならとっとと始めるか。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス「今度はお前もかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！！！！！」

スネーク「うむ、何時の間にかな…」

マリオ「マジで美味かったぜ♪」

フォックス「…何か俺も何時の間にか出そうな気がする…；」

ルイージ「あ～～ありえそうだね；」

ネス「それにしても…だめだめより下に行ってるねシャマルさん；」

リュカ「最近出番が少ないしね；」

新八のツッコミが炸裂した日だったな～～～

ルイージ「ホント…新八君が普通になって良かった（涙）」

フォックス「それで3人共、ベールの一言に泣いたな最後；」

マリオ「俺から皆に質問『俺のゲームで出たアイテムでどのアイテムを使って見たい物はあるか？』」

スネーク「俺は今回出てない皆に質問だが…『今回の銀時達の寿司を握るシーンを見てどう思う？』」

ルイージ「ナンバーズに質問『内の兄さんどう思う？』」

次回はスカさんとナンバーズとの出会いだね～

ネス「どうなるのやら～」『…んじゃ最初の質問だ」

銀時「俺はどちらかというとスターがいいな」

新八「こうらアイテムで身を守れますね」

神楽「ファイアーバールを打ちたいネ！」

桂「スケスケアイテムなら隠れられて便利だな」

エリザベス『スーパーキノコですね』

月詠「わっちはいらんぞ」

ネプテューヌ「巨大キノコで大きくなりたい！」

ノワール「ファイアーフラワーで燃やしてやろうかしら？」

ブラン「ネプテューヌと同じ」

ベール「スターが欲しいですわ」

コンパ「雲コンパになって空を歩きたいです」

アイエフ「私は要らないわ」

銀八「次は2つ目」

リトルバスターズ・戦線メンバーズ・リック達・如月組（サチコは除く）
「なんでそうなるのォォォォォォォォォォ（んだァァァァァァァァァァ）（んですかァァァァァァァァ）！！！？」

スカリエッティ「ま、まぁそういう反応だね…3つ目は」

ナンバーズ「あんた（あなた）ほんとに人間か（ですか）？」

銀八「・・・『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

スカリエッティ「次のは久しぶりに『黒龍』さんからだね。『ソラ「久しぶりの感想だな」

銀時「黒龍のヤローのテストがやっと終わったからな」

ソラ「って、結果はどうだったんだ黒龍？」

黒龍「・・・・せぇよ・・・」

ソラ「ん？なんて言ったんだ？」

黒龍「うるせぇって言ってんだよ！！！」

銀時「えええええええ！！？お前そう言うキャラだったっけ！？」

黒龍「こっちはテストの結果が悪くて追試になりかけてイライラしてんだよ！！」

ソラ「・・・悪かったんだな」

黒龍「うるせぇよ！！さっさと質問いくぞ！！」

銀時「おいおい、完全に八つ当たりモードだな」

黒龍「一つ目！！新八に質問だ！！少しは目立つように努力しろ！！」

銀時「それ質問じゃなくね！？」

黒龍「うるせぇ！！二つ目！！サチコはソラのどこに惚れたんだ！！？そして三つ目！！銀時お前主役の一人なのに最近全然活躍してないな！！」

銀時「ってめぇー！！それどう言う意味「うるせぇ！！」ぎゃあああああああああああああああああああああ！！」

黒龍は銀時を珍しくボコボコにした。

ソラ「はぁ～こりゃ相当キレてるな」『・・・・・・・・・」

銀八「あら～、こりゃ大丈夫か～？」

真王「大丈夫ですよ。私が黙らせました♪」

銀八「そ、そうなのか？（恐ぇ～…）じゃ、じゃあ1つ目」

新八「僕だって活躍したいですよォォォォォォォォォォ！！！！」

銀八「むなしい叫びだな…。2つ目と3つ目」

サチコ「別に。私はソラお兄ちゃんと楽しく遊んでるだけだよ～」

銀時「てめーー！！活躍してないってどういうことだぁぁぁぁ！！
俺は十分活躍してんだよォォォォォ！！！」

真王「それじゃあ『黒龍』さん。一度落ち付いて滝に打たれなさい」

銀八「っおい！・・・まぁいいか。ペンネーム『月光閃火』さん。
『よぉ…月光閃火だ。

とりあえず言おう…言葉とレナ、落ち着け。（そういって、遠隔技法で言葉とレナのおでこにキンキンに冷えた５００ｍｌのペットボトルジュースを当てる）

輝刃「…完璧にベタな学園恋愛モノのワンシーンが入ったな…。ヤンデレは怖ぇぞ…（汗）。」

へへっ♪何とかなるさ♪とりあえず俺から質問だ。

1．スカリエッティに質問だ。銀時達の寿司屋での話を見ての感想を科学者張りに答えてくれんか？

輝刃「やはりその方でいくか…では次は俺から質問だ。」

2．マジェコンヌに質問だ。初登場からあまり出番が少ないように見えるが、今の自身の状況下をどう思っているんだ？あと、俺の特製ミートパイ…食うか？味は保証するぞ？

ハハハ…輝刃は料理が得意だもんな♪

輝刃「まぁな…一人暮らしをしてれば、自然と家事全般は上手くなるし。」『ズバリお答えしましょう」

スカリエッティ「確かにあれは不思議だが、私の科学では導けなかったよ」

マジェコンヌ「私か？そうだな、状況は特にこれといったことはないが、ボスは最後に現れるのがモットーだ。後ミートパイだが高評価だな」

銀八「はい、『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

第三十四訓：グダグダな自己紹介は最後までグダグダ（後書き）

真王「次回はシリアス章『魔道機人編』がスタート！謎のテロ集団『シグマーズ』が銀時に襲い掛かる！

実力はゾーマ越えの銀時級！？

現れるは魔道機人とイリスと呼ばれる魔剣士！

果たして銀時達は！？そしてネプテューヌは！？」

銀八「次回『どんな秘密があっても優しく接する方がいい』テイクオフ」

第三十五訓：どんな秘密があっても優しく接する方がいい（前書き）

真王「『魔道機人編』始まります！」

第三十五訓：どんな秘密があっても優しく接する方がいい

訓練所では、いつもどおりフェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、ヴィータ、リィンフォース、エリオ、キャロは、朝練をする事になった。
しかしネプテューヌは美味しそうな食べ物があるかどうか見てくる！と言ってどこかへ行ってしまい、ここにはいない。
銀時は何やらスカリエッティから重要な話があると聞かされてスカリエッティのアジトに向かっていき、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ベール、ブラン、イストワールも共に向かうことにした。
そして九兵衛、コンパ、アイエフ、リトルバスターズ、戦線メンバーズは機動六課の訓練の見物をする事にした。
そんな中、陸士１０８部隊から１人、フォワード部隊の新人としてやってきた１人の女性が挨拶する。
その人物こそ、スバルの姉であるギンガ・ナカジマであった。

スバル「ギン姉！？」
ティアナ「ギンガさん！？どうしてここに！？」

まさかのギンガがいる存在に驚きを隠せなかったスバルとティアナ。

ギンガ「今日から私もフォワードメンバーの１人としてここに出向した訳。はやてさんの依頼で」
スバル「はやて隊長から？」

実は、はやてはスバルとギンガの父、ゲンヤに依頼を申し込んでギンガだけじゃなくマリエル・アテンザを出向する事になった。

ティアナ「それよりティアナ、久し振りだね」
ティアナ「あ・・・はい！お久し振りです！」

ティアナもギンガの存在を知っている。
陸士訓練校の頃、何度か顔見知りになったのであるからだ。
エリオとキャロはフェイトに質問する。

エリオ「フェイトさん。ギンガさんって、あの時空管理局・陸士１０８部隊所属の捜査官で・・・・」
キャロ「スバルさんのお姉さんである・・・・あのギンガ・ナカジマですか？」
フェイト「うん、母であるクイント・ナカジマの意志と格闘技法『シューティングアーツ』、そして形見である篭手型のデバイスの一つ『リボルバーナックル』を受け継いだんだって。ってその強さは魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦Ａだそうだよ」

フェイトの質問に納得するエリオとキャロ。
スバルと同じく、ギンガも母の意志を受け継いで体術を習ったそうだ。

ギンガ「それにしても、スバルは１人で修行をする為に１人旅をしていたとは聞いていたけど・・・まさか『機動六課』に入っていたなんて・・・」
スバル「あ、あははは・・・」

スバルは大切な妹の為、ギンガは最初はスバルが１人旅に出るのは猛反対していた。
だがスバルの意志が本物と見抜いたゲンヤに許可をもらった為、反対できなかった。
そのスバルがまさか『機動六課』に所属していたとはさすがに驚い

ていた。

ヴィータ「うっし、じゃあとりあえず新しくメンバーが加わった所だし、いつもどおりに訓練するぞ」

F「はい！」

ヴィータが張り切って言い出すとフォワード部隊ははっきりと返事をする。

ギンガ「フェイトさん。そう言えばここにある女の子がいるって聞きましたけど…」

フェイト「ネプテューヌのこと?ごめんね、今出かけているのよ」

ギンガは六課にいた女の子・ネプテューヌのことをフェイトに聞くが、ネプテューヌはいないと答える。

ギンガ「そうですか・・・どんな人か見てみたかったんですか…」

ギンガはため息ついてあきらめた。

スカリエッティのアジト

アジトの外は、瓦礫と化した大量のガジェットのスクラッチであった。

『鬼兵隊』の作り上げた最新ガジェットによる奇襲攻めが原因であ

った。
だが何とか追い出せたがいつ襲ってくるのかまた分からない為厳重に見回りをしている。
中は沢山の生体ポッドが壁際にズラリと並んでいて、ポッドの中には裸の女性が一人ずつ入っていた。
原因によれば、最高評議会という連中が戦闘兵器用に作り上げた人造生命体のサンプル達と作りかけでであった。
スカリエッティはそれを良しとせずにそのデーターを全て奪って自分で作り出し、彼女達を１人の人間のように生まれさせようとしたのである。
それは銀時の世界の幕府の裏の連中がやる行動と同じな為、銀時はスカリエッティのやり方に納得するのであった。
銀時、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ベール、ブラン、イストワールの１０人はスカリエッティから話がある為、この場に来た。

一方のナンバーズは外の警備をしていた。
チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードは銀時が来たことには喜んでいる。
クワットロは銀時の身体能力の高さを調べる絶好のチャンスだとどす黒い感情で笑っている。

そして、銀時達はスカリエッティの部屋に入りだす。
そこにはスカリエッティはもちろん、近藤に土方に沖田に山崎、それに機動六課のメンバーであるシャーリーとギンガと同じく機動六課に出向したマリエル・アテンザ、愛称はマリー、そしてスバルとギンガの父であるゲンヤもいる。
時空管理局本局メンテナンススタッフと自称『メカニックデザイナー』、さらには陸士１０８部隊部隊長までもを呼ぶ事は何やら重要な事があるかもしれないと確信する。

スカリエッティ「今日ここに集まってもらった君達にはどうしても話しておかなければならないのさ。特に異世界から来た銀時達と陸士１０８部隊部隊長であるゲンヤ殿には」

スカリエッティのいつものニヤけた表情はなく、真剣な表情である。

ゲンヤ「銀時達は構わないが、何で俺まで聞かなきゃいけないんだ？」

スカリエッティ「それは、今回話しておく事は、君の娘であるスバルに関わるスバルの事であるからさ」

ゲンヤ「スバルだと？」

なぜ、スバルの事で話があるのかをゲンヤは驚きだす。

銀時達もなぜスカリエッティがスバルの事で話があるのかを聞き出す。

銀時「おいおい、何でお前がスバルの事で話をするんだ？」

スカリエッティ「その理由は、話せば分かる事だ。今回話す事は二つ。１つはスバルのことだが・・・その事はゲンヤ殿は知っているだろう」

スカリエッティがそう言うと、ゲンヤのほうを振り向く。

スカリエッティ「ゲンヤ殿、君の娘は銀時達にお世話になっている。だから父親として、銀時達には話しておくべきたど私は思うが・・・」

ゲンヤ「・・・分かった」

スカリエッティがそう言うと、ゲンヤは父として話すことを決意す

る。

近藤「スカ殿、スバルってあの格闘技を使うお譲ちゃんの事か？」
山崎「あの子が一体なんなんですか？確かに身体能力は新人とは思えないほどの高さで・・・あの子に何が・・・」

近藤も山崎も理由を聞きだすと・・・・

ゲンヤ「実は・・・スバルは、私の本当の娘じゃないんだよ」

ゲンヤの衝撃的な一言に銀魂組とノワール、ベール、ブランとシャーリーは驚きだす。
スカリエッティは、やはりと思ってあんまり驚かない。

桂「ゲンヤ殿の娘じゃないだと？」
エリザベス『マジで！？』

桂とエリザベスはその真実に驚く。

月詠「じゃあ、スバルは一体誰の子じゃと言うんだ？それにどうして突然その事を・・・・」

月詠もその理由を詳しく聞こうとする。

ゲンヤ「スカリエッティの周りにいるナンバーズが戦闘機人である事は知っているだろ。スバルは彼女等と同じ戦闘機人、『タイプゼロ』と呼ばれた人造生命体だ」
銀時「なぁ！？」
近藤「何ィィィィィィィィ！？」
桂「スバル殿が人造生命体！？」

ゲンヤの口から出されたスバルの正体に驚きを隠せなかった銀時、近藤、桂。
それはフェイトとエリオのように『プロジェクトF．A．T．E』で生み出されたクローンと同じ存在である人造生命体であった。
ゲンヤの話によれば、スバルは姉のギンガ共々クイント・ナカジマの遺伝子から生み出された人造生命体。クイントが生前に追っていた戦闘機人事件の捜査過程でギンガと共に発見・保護され、その後子供の出来なかったナカジマ家に2人揃って引き取られたようである。

新八「・・・スバルさんが…」
神楽「スバルが・・・人造生命体だったなんて・・・・」
エリザベス『そんなことが』
土方「あの譲ちゃんがねぇ…」
沖田「道理で強いわけだ」
山崎「正直言って信じられないな・・・・」

新八、神楽、エリザベス、山崎も今でも信じられなかった。
土方と沖田はなんとなく納得したらしい。
人間のように元気で明るいスバルが、まさかの人造生命体だったとは・・・

イストワール「・・・スバルさんが戦闘機人。その姉のギンガさんも・・・ですか」

イストワールは話を聞いて、あの動きの速さと攻撃力を持つスバルに納得する。

ノワール「・・・なるほどね」

ブラン「そんなことか」
ベール「まぁ、そうなのですか」

話を聞いたノワールとブラントベールは、なぜかリアクションが薄い。

スカリエッティ「・・・君達リアクションが薄いね。どうして驚かないんだい？」

スカリエッティは片眉をあげてノワール達に聞く。

ブラン「簡単な話。スバルが普通と違うの知ってた」
ノワール「それにネプテューヌだったらこう言うわ。『たとえ戦闘機人であってもスバルはスバルだよ！』ってね」
ベール「どうあれスバルさんはゲンヤさんの娘でいいじゃないですか」
ゲンヤ「・・・・・・・・・ありがとう」

“戦闘機人であってもスバルはスバルである”という言葉に、スバルを人として接している3人にゲンヤは感謝する。

ゲンヤ「・・・ところであの紫の…ネプテューヌって譲ちゃんだが、何処にいるんだ？」

ゲンヤはネプテューヌが何処にいるか聞く。

ノワール「ネプテューヌならグラナガンでたべものを探してるんじゃない？」

ノワールの答えに、周りは唖然、苦笑いを浮かべた。

一方、ネプテューヌはというと、

ネプテューヌ「ハムハム♪このタイヤキおいしいな～♪」

グラナガンで食べ物を食べながら歩いていました。
右手にはタイヤキを持ち、左手には勝ったものであろうお菓子がいっぱいであった。

ネプテューヌ「ん？」

ネプテューヌが六課へ帰る途中、公園のベンチで座っている一人だけの金髪の少女を見つけた。
ネプテューヌはとりあえず声をかけてみる。

ネプテューヌ「あの～、こんなところで何やってるんですか？」
金髪の少女「私ですか？この自然の空気を感じてるんです」

少女はネプテューヌに気づいて答える。

ネプテューヌ「へぇ～、もしかして動物も好き？」
金髪の少女「好きと言えば好きですね。特にかわいい生き物が」
ネプテューヌ「そうなんだ。あ、私ネプテューヌだよ」
イリス「私はイリスです」

ネプテューヌと金髪の少女・イリスは自己紹介をする。

キュウウウウウウウ・・・・・・

ネプテューヌ「ん？」

イリス「／／／／／／／」

何処からか変な音が聞こえ、ネプテューヌは周りを見渡し、…なぜかイリスが顔を真っ赤に染めていた。

ネプテューヌ「イリスさん、今の…」

イリス「あ、あはははははは／／／／／お、お恥ずかしいものを聞いてごめんなｓ「はい」…ってえ？」

イリスが誤魔化そうとしたら、ネプテューヌがタイヤキを出す。

ネプテューヌ「お腹空いたんでしょ？一応残ってたからあげるよ」

イリス「え？そんなの悪いです」

ネプテューヌ「いいからいいから♪」

イリスは遠慮するが、ネプテューヌが無理やりイリスにタイヤキを持たす。

イリス「じゃ、じゃあ・・・・・・いただきます…」

イリスは仕方なくネプテューヌのタイヤキを食べる。

イリス「・・・おいしい」

ネプテューヌ「だよね♪このタイヤキ、餡子も含めておいしいもん」

ネプテューヌはベンチに座り、イリスとタイヤキを食べる。

イリス「・・・初めてですよ。こんな美味しいもの食べるのは…」
ネプテューヌ「ふ～ん、でもイリスさんなんで泣いてるの？」
イリス「え？」

イリスは自分の目を触る。冷たい雫、つまり自分の涙である。

イリス「あれ？どうしてかな？何で私泣いているのかな？」
ネプテューヌ「簡単だよ」

ネプテューヌがイリスの泣いている理由を答える。

ネプテューヌ「『人から温もりを貰ったことが嬉しくて泣いた』んだよ」
イリス「ぬく、もり・・・」

イリスは呟きながらタイヤキを食べる。食べてる際にどんどん涙が出る。

イリス「・・・始めて、味わりました。こんなに、こんなに温かいものだなんて…」

泣きながら食べるイリスに、ネプテューヌがイリスの背中をさする。

ネプテューヌ「よしよし、嬉しいならうれしくて泣いていいんだよ」

ネプテューヌの言葉を聞いた瞬間、イリスはネプテューヌの体に顔を入れて泣いた。

数分後…

イリス「ほ、ほんとにごめんなさい。恥ずかしい／／／」
ネプテューヌ「いいっていいって」

泣きやんだイリスは謝り、ネプテューヌは気にしてないと言う。
イリスは時間を見ると、思い出したかのようにネプテューヌに言う。

イリス「もうこんな時間ですか、ネプテューヌさん、私は行かねばなりません」
ネプテューヌ「仕事でもあるの？」
イリス「・・・ええ、とても忙しい仕事です」

イリスは少し暗く答えるが、ネプテューヌは気付かない。

ネプテューヌ「そっか。それじゃあイリスさん、またお話ししようね～」

ネプテューヌはイリスに別れを行って、公園から去った。

イリス「・・・ありがとう、ネプテューヌさん」

イリスは一人、ネプテューヌにお礼を言い、公園から去った。

スカリエッティの話が終わった銀時達は別々の行動をしていた。

近藤と土方と沖田と山崎はスカリエッティのアジトで待機していた。
桂、エリザベスは瓦礫と化したガジェットの破片を集めていた。
新たな爆弾を作る為に。
イストワールと新八と神楽と月詠はせっかくだからとナンバーズと話をしていた。

そして銀時とノワールとブラントベールは、一緒の行動で散歩をしていた。

銀時「人造生命体ねぇ・・・・人間のように明るく性格をしたスバルがなぁ・・・・」

とても想像できない銀時。
ナンバーズが戦闘機人である事は以前にナンバーズから聞いた事があるが、まさかスバルも戦闘機人であることは想像できなかった。

銀時「世の中物騒な事ばかり・・・・ん?」

銀時が不思議そうに感じて散歩をしている間、楽しそうにスキップするネプテューヌを見つけた。

ネプテューヌ「あ、銀さん♪」
ノワール「やっと見つけたわよネプテューヌ」

ネプテューヌ「・・・ノワールゥ…どこかのライバルキャラがいいそうなセリフをよく言えるね」
ノワール「大きなお世話よ」
銀時「って言うかお前何やってたんだ？」

銀時は楽しそうだったネプテューヌに聞いてみた。

ネプテューヌ「実はこのミッドチルダに一番おいしいタイヤキ屋があってね。六課に帰る途中にイリスさんって言う人と話し合ったんだよ♪」
銀時「へぇ～、そうなんだ。」

銀時とノワールとブランとベールはあまり興味ないが一応話を聞いた。

銀時「ま、六課に戻るぞ。あいつら待ってるし」

銀時がそう言い、ネプテューヌ達は六課へ帰る。

ネプテューヌ（そう言えばイリスさん、なんだか物悲しそうな顔をしてたけどあれなんだろ？）

ネプテューヌはイリスのことを考えていたが、なんなのか分からなかった。

だが、ネプテューヌとイリスの出会いに、とんでもない事件が起こるなど知るよしもなかった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「ハイ！またネプテューヌがアシストするよ♪」

銀八「んじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス「…どう反応すれば良いんだろうか？」

ルイージ「まあ、流石に銀さん達の世界以外じゃあ普通に出れないもんねフォックスは；」

スネーク「しかし…タイトル通りグダグダだったな…」

次から『魔道機人編』が始まるけど…これでスバル達が強くなるのかな？

ネス「そうじゃない？ナンバーズとスカさんに質問『内の作者が『月夜に舞う龍』で書いてる小説に出るオリジナルのライダーで好き

なのはどれ?後、なるべくライダーは全員一緒とか半分半分じゃない他オリジナルライダー2人だけと言うのは止めてください』」

リュカ「同じくナンバーズとスカリエッティさんに質問『スマブラXでの最後の切り札で誰のを使ってみたいですか?後、自分で最後の切り札出せるならどう言う風になりますか?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ソニック「頑張れよ!」』では答えてあげましょう」

スカリエッティ「私はディブレイカーが興味あるね。そしてガノンドロフ君のを使うね。後すべての敵を縛る技がいいね」

ウーノ「私もドクターと同じで。技はルイージさんのと相手を状態異常にさせる技がいいわ」

ドゥーエ「ハーツかしら?メタナイトの技と私が相手に化けることかしら?」

トーレ「私もハーツだ!技はソニック、そして『ライトインパルス』ですべてを裂く!」

クワットロ「ディブレイカーですわ♪ルイージさんの技と相手を混乱させる技がいいですわ」

チンク「キバのシュベルトフォームだな。ルカリオ殿の技と私のISですべてを吹き飛ばす技を使う」

セイン「ディブレイカーだね。ヨッシーの必殺技と相手を引きずり

こんでボンっ！！だね」

セッテ「ハーツです。リンクの技と『スローターアームズ』で敵を殲滅します」

オットー「僕はハーツ。ネスのと一緒で『メガレイストーム』を出そうかな？」

ノーヴェ「クイントフォームのキバだ。マリオのとあたしが拳を地面にぶつけて大地震を起こしてやる！」

ディエチ「ハーツ。サムスの技とそれと同じように巨大砲撃を出す」

ウエンディ「あたしはディブレイカーっす。フォックスがランドマスターを呼びだすのと同じようにあたしもすごい乗り物に乗って大暴れしたいっす」

ディード「リーゼフォームのキバです。アイクさんの技と同じく私も『ツインブレイズ』で相手を倒します」

銀八「はい、『鳴神ソラ』さん。廊下にたってなさい」

ネプテューヌ「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんだよ。『首領パッチ「・・・・・」

返事がない、只のしかばねのようだ
あんな事言うからだよなぁ
さぁて、それじゃ今度は誰が質問するのかなぁ？

田楽マン
「今回は僕が質問するノラァ
まずはこの小説に出てくるチビッコたちに質問なのら
『僕と友達になってぇぇぇぇ！』」

それ質問じゃねぇだろう！
お前もう帰れ！

天の助
「リリカルメンバーが目立てない理由は俺は良く知ってるぞ」

ほほぅ、何だよ？

天の助
「ズバリ！あいつ等はところてんを食べてないからだ！だから小説で目立ちたかったらところてんを食べるんだ！」

ありえねぇ
っつぅ訳で作者である真王さんにはこいつらが隠れてやってた「ネプチューヌのコスプレ（天の助）写真集」を差し上げます
ではでは』ところてんで目立てるわけないよ。って言うか写真いらないし。あと友達になってもいいよ」

銀八「いいのかよっ！？」

サチコ「私も～♪」

銀八「お前もか！・・・『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。一応、田楽マンの友達になれるのＯＫだそうです。こいつらが」

ネプテューヌ「次はペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍「いてて、酷い目にあった」

銀時「俺をボコボコにするからだ」

ソラ「まぁ次のテスト頑張ればいいだろ」

アリス「まぁどうせだめだろうがな（黒笑）」

黒龍「・・・・ｏｒｚ」

アリア「あ、へこんだ」

銀時「ダメだなこりゃ」

サチコ「ソラお兄ちゃん。新しい料理を作ったから食べてくれない？」

ソラ「ん？分かった」

ソラはサチコの作った、マグマのようにドロドロしたよくわからな塊を食べた。

ソラ「ゴハッ！（吐血）」

銀時「ソラァァァァァァァァァァ！！！！」

アリス「大丈夫か！？」

ソラ「さすがにパンチが効いたな」

ソラは口から垂れている血を吹きながら言う。

サチコ「ぅぅ・・また失敗した（涙）」

サチコは悲しそうにする。

ソラ「これからだな」

ソラはサチコの頭を撫でる。

サチコ「ん・・／／／／」

サチコは顔を赤くして嬉しそうに目を細める。

ソラ「俺だけの意見じゃなくて、他の奴の意見も聞いてきたらどうだ？」

サチコ「例えば？」

ソラ「やっぱり真王のところの銀時達だろ」

サチコ「分かった～♪」

ソラ「ああ、それとフェイトの作った料理も持って行ってくれ。なんでも真王の所の銀時達の意見も聞きたいそうだ」

サチコ「うん♪」

サチコはフェイトの作った、もぞもぞ動くパスタを持っていきながら真王さんの所に帰って行った。

銀時「おい、大丈夫か？」

アリス「私はあいつらがどうなろうが知ったことではないしな」

アリア「・・・冥福」

黒龍「じゃ、じゃあ質問いきます。

1．ネプテューヌはどれくらい食べると満腹になるんですか？

2．女神四人の称号を考えてみました。

ネプテューヌ：暴食女神

ノワール：ツンデレ女神

ブラン：暴力女神

ベール：腹黒女神

どうですか？

3．九兵衛最近全然出番ないですけど、出てきた意味ありますか？（黒笑）」

銀時「2と3はかなりロクな質問じゃないな」

ソラ「ま、あいつが面白いと思っているからいいんじゃないか？」

アリス「どうなるか楽しみだ。くくく」『え～、私のお腹を満たすのはどんな感じか分からないや」

真王「彼女の胃袋は桂木弥子のちょっと手前レベルです」

全員「どんだけーーーーーーーーー！！！！？」

真王「ハイ、リアクションありがとう。んで2と3は」

ネプテューヌ「失礼だね！私が暴食だなんて！」

ノワール「だだだ誰がツンデレよーーー！！！／／／」

ブラン「テメッ、喧嘩売ってんのかゴルァーーーー！！！（激殺）」

ベール「私を腹黒だなんていい度胸してますわね・・・（超黒）」

九兵衛「貴様ぁ、我が柳生剣の錆にしてくれる！」

銀八「『黒龍』さん！！彼女達を怒らせないでください！！」

銀八は真っ青で『黒龍』に叫ぶ。

ネプテューヌ「じゃあ次はペンネーム『月光閃火』さん。『よぉ…月光閃火だ。

というか…良かったな輝刃、高評価だったぞ？

輝刃「まぁな…料理には、少しばかり自信があったしな…。」

なるほど…俺もこの世界じゃ、結構料理は得意な方だが…やっぱ輝刃のが一番だな。とりあえず、今回はまず俺から質問だ。

1．作者に質問だ。次のシリアスストーリー『魔道機人編』に関してなんだが…新八に何かしらのフラグみたいなモノは立つのか？銀魂の原作にあった『文通編』みたいな感じのフラグが…。

輝刃「ああ…あの話か。確かにあの話は新八にとって大きな心の転機みたいなモノがあった話だからな…。次は俺からだ。」

2．ネプテューヌ達女神陣（マジェコンヌも含む）に質問だ。ウチの閃火の基になった奴（書き手）は自分なりの造語で部屋の照明の灯りをオレンジっぽい光を灯すちっこい豆電球だけの状態にする事を【赤ポチ】なんて言うのだが…ネプテューヌ達も自分なりの造語みたいなモノを持っているか？

あ～…確かに俺の基になった奴（書き手）って、昔っから妙ちくりんな自分なりの造語をたくさん持ってるからな…女神陣にもあるのか少し気になる所だ。』」

真王「一応はっきりいいます。気分次第で」

銀八「ホントにはっきり言ったなおい！」

ネプテューヌ「2つ目だけど、分かんない」

ノワール「興味ないわ」

ベール「知りませんわ」

ブラン「没だ」

マジェコンヌ「しらん」

銀八「『月光閃火』さん。廊下に立ってください」

ネプテューヌ「質問タイムここで終わりま～す」

第三十五訓：どんな秘密があっても優しく接する方がいい（後書き）

真王「イリスと別れたネプテューヌ。その後、ＳＳ級の緊急事件発生！ゾーマを超える最強の敵が銀時達の目の前に現れる！？」

ネプテューヌ「次回『奇襲を受けたら対応が難しくなる』テイクオフ！」

～報告～

真王「考えていた『パンドラ編』ですが、時期的にも合わないため没にしました。期待していた人すいませんｍ（＿＿）ｍ」

第三十六訓：奇襲を受けたら対応が難しくなる（前書き）

真王「ついに起こった最大の事件！実力はゾーマ越え！？そして仮面の少女の正体が明らかに！」

銀時「『リリカル銀魂』始めるぜ」

第三十六訓：奇襲を受けたら対応が難しくなる

機動四課

そこは、はやてと同じくエリート魔導師達が新設した部隊。
ロストロギアの探索・調査・確保を任務とする部署。その任務上、選りすぐりの優秀な魔導師が所属するエリート部署の１つである。
その強さは機動六課には及ばないが、数多くの成績を誇っている。

そんな機動四課の隊員は銀時達の話をしていた。

隊員「なぁ、機動六課の連中にあの坂田銀時がいるって噂があったが本当か？」
隊員「ああ。しかもそれだけじゃなく桂小太郎、神楽、エリザベス、柳生九兵衛など『ゾーマ事件』を解決した伝説の人物もいるそうだぜ！」

銀時達の噂は正にミッドチルダでは知らぬものはいないと言われる程である。
しかしその半分が銀時の噂を信じない者も存在する。

隊員「けど俺達、魔導士は魔法を使って戦うのが当たり前なのに、魔法を使わずに剣だけで対決したなんてあり得ねぇだろ普通？」
隊員「そうそう。それに魔法を使えないくせに良くもまぁ英雄気取りができた者だ」
隊員「俺達、魔導士にとっては気に食わない存在だ」

魔法使えないのにオーバーＳランク級の実力を誇る銀時の存在を気

に食わないのであった。
表の感情があれば裏の感情もそんざいする。
人間には言わば綺麗な心と汚い心が存在する。
どの世界でもそれは変わりはないのであった。

？？？「本当に、時空管理局の裏の連中は嫌になりますね」

１人の少女の声が聞こえて隊員達がその声のほうを振り向くと、一瞬にして６人の魔導士達が真っ二つに斬られて、上半身の胴体がドスっと倒れてしまう。
そして大量の血が噴射するかのようにあふれ出ると、６人の下半身の後ろには、仮面をかけた赤い大刀を持っている１人の少女がいた。

隊員「う・・・うわぁあああああああああ！」
隊員「敵襲だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

誰もが恐れて悲鳴を上げる。
そしてデバイスを出して魔法で追撃しようとした瞬間、眼にも止まらない速さで少女が大刀を超高速に振り出すと、持ち上げた大刀を思いっきり下に向けてふると、一瞬にして４５人の魔導士達が斬り殺されてしまった。

隊員「ば・・・馬鹿な！」
隊員「剣技だけで、一瞬で４０人以上を・・・・」

恐怖を絶望が混ざりきった感じで言い出し、誰もが少女の強さを恐れる。

？？？「悪いけど、今日限りで機動四課は壊滅させてもらう・・・・・『ゼロセイバー』！」

≪了解しました≫

そして『ゼロセイバー』という大刀のデバイスを持った魔導士は人間の常識を超えた速さで大地を蹴り飛ばすかのように素早く機動四課の隊員達に突進した。

３０分後

訓練所

ピー　ピー　ピー　ピー

突如、緊急警報が鳴り始め、訓練中であったなのは達が驚きだす。

フェイト「緊急警報!?」

シグナム「一体何があったんだ?」

フェイトとシグナムは不思議そうにそう言いだす。

アイエフ「どうやら、ただ事じゃないみたいね」

アイエフがいつもとは違った真剣な表情で言い出す。

空にモニターが映し出され、そこにはシャマルが写っていた。

シャマル【大変です！緊急事件が発生しました！】
フェイト「緊急事件！？」
ヴィータ「一体何があった！」

シャマルの異常な慌てようにフェイトとヴィータが言い出す。

なのは「どうしたの？何か様子が変だけど大丈夫！？」

なのはがシャマルの慌てように、その訳を聞き出す。

シャマル【そ・・・それが、機動四課に侵入者が現れて大量殺人事件が発生したんです！】
スバル「ええ！？」
ギンガ「何ですって！？」

大量殺人事件の発生に驚くスバルとギンガ。
フェイト達も驚きを隠せなかった。

シャマル【敵は1人でまだ少女ですが・・・見たことがない剣を持っていて、しかも異常なまでに強すぎです！このままじゃ機動四課が壊滅してしまうぐらいに・・・他の機動部隊も応援してきますので機動六課もすぐに出動をお願いします！】

シャマルが状況確認と出動要望をすると、なのはとフェイトがフォワード部隊に言い出す。

なのは「皆、訓練は一旦中止！すぐに出動するよ！」
フェイト「敵は1人だけだけど、かなり手強いそうだから気を抜けないで！」
F＋ギンガ「はい！」

2人の隊長が言い出すと、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガの5人は力強く返事をする。

コンパ「私達もほうっておく訳にはいかないです！」
アイエフ「全くそのとおりね！」
九兵衛「よし、僕も参加しよう」

九兵衛とコンパとアイエフもこの事件の解決の為に共に行く事を決意する。

ヴィータ「シャマル！お前はすぐにネプテューヌと銀時達を呼べ！」
シグナム「一刻も争う状況だ！」
シャマル【は・・・はい！】

ヴィータとシグナムにネプテューヌ達を呼ぶように頼まれたシャマル。
そして機動六課はすぐに出動した。

ヘリコプター内

その中にはバリアジャケット状態のスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、シャマル、リィンとアイエフ、九兵衛もいた。
コンパは乗り物酔いで横になっている。
パイロットはヴァイス・グランセニックと言う青年である。

そして出動してから5分がたった。

ヴァイス「それにしてもたった1人で機動四課に喧嘩売るなんて・・・自殺行為にもほどがあるだろ？」

ヴァイスが信じられないような事を言い出すと、リィンはあり得ないような感じの顔をする。

リイン「そ・・・・それが・・・・信じられないことに、機動四課がもう壊滅状態まで追い込まれているそうです」

エリオ「機動四課の壊滅状態！？」

まさかあの機動四課が壊滅まで追い込まれているとは思いもよらなかった。

エリオは思わず大叫びする。

さらに信じられない事をリィンは言い出す。

リイン「しかも、他の機動部隊の援護でも次々と返り討ちにされて・・・・１５００人以上の死者が出ています！」

ティアナ「な・・・何よそれ！？思いっきりヤバイじゃない！」

キャロ「敵が・・・・よほどの手誰であると考えるべきですね」

あり得ないと大きな声で言い出すティアナに冷静に判断するキャロ。

九兵衛「それで、敵の特徴的な事はなんだ？」

九兵衛が敵はどういう人物なのかを聞き出すと・・・・

リイン「敵は、使用するデバイスは紅く輝く大刀、さらには金髪の長髪で仮面をかけているそうです！」

敵の特徴を聞いて、相手は剣で戦う魔導士であると分かったフォワード部隊。

アイエフ「・・・ネプ子、早く着けばいいけど…」

早く来てほしいネプテューヌに心配するアイエフであった。

一方ネプテューヌと銀時達は六課へ帰る途中、シャマルから携帯が鳴った。

ネプテューヌ「はい、もしもし？」

シャマル≪ネプテューヌちゃん！大変なの！！≫

ネプテューヌ「え！？何があったんですか！？」

シャマル≪そ・・・それが機動四課が何者かに襲撃されて今でも壊滅状態なの！≫

ネプテューヌ「ええ！？」

まさかの事件に驚くネプテューヌ。

どうして機動四課が突如襲われたか理解できないが、ただ事じゃないようなのは確かである。

シャマル≪機動六課も応戦しに来たからネプテューヌちゃんも急いで！銀さんにも後で連絡するから急いで！≫

ネプテューヌ「分かったよ！今、銀さんと一緒にいるから機動四課に応戦しに行きます！」

シャマル≪お願い！≫

そして携帯を切り、ネプテューヌは銀時を振り向く。
何やら事件が起こったようであると銀時も思い込む。

ネプテューヌ「銀さん！機動四課が何者かに襲撃されて今、壊滅状態に追い込まれています！」
銀時「機動四課？おいおい、それって機動六課以外にも機動部隊が存在するのか？」
ノワール「たしか機動部隊はそれぞれ、一課、二課、三課、四課、五課、六課の六部隊があったわよ」
ベール「それより早く機動四課を助けますわ！銀時さん！」
銀時「おし！急ぐぞ！」

銀時とネプテューヌ達は急いで走り出し、機動四課に向かう

機動四課

そこは地獄の光景へと変化していた。
炎に包まれているかの様な崩壊していく基地。
数多くのバラバラに斬られた死体に、重傷で倒れている魔導士もいた。
火事の消火活動や怪我人の治療など数え切れないしなければならない事が山ほど存在する。
そこにははやて、ザフィーラ、リィンフォースの3人も救助活動を手伝っていた。それほどまでに人手が足りないのである。
到着したフォワード部隊のスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フ

リード、ギンガ、それにリィン、シャマル、ヴァイス、コンパ、アイエフ、九兵衛はむごい光景に残酷さを感じた。

スバル「何・・・・これ？」
エリオ「こんな事が・・・・起こるなんて・・・・」
キャロ「酷い・・・・」

スバル、エリオ、キャロの３人もあり得ないと思えるほどの信じられない表情をする。
こんな酷い事を・・・・しかも１０００以上の機動四課の魔導士達を全て１人で倒した事が尚更信じられないのである。
アイエフと九兵衛は地獄のような光景に苦しそうな表情をするが、コンパは悲しそうな眼でその光景を見る。

コンパ「なにをしているんですか・・・・・・」

コンパが全員に言い出す。
スバル達はコンパに振り向くと・・・・そこにはいつものコンパとは思えない真剣な雰囲気を表している。

コンパ「じっとしている暇があるなら、早く助けてあげるです！」
スバル「は・・・・はい！」
九兵衛「そ・・・そうだったな」

静けさに真剣な声で言い出すコンパ。
そしてティアナ達は急いで救助活動をした。
ヴァイスも流石に見過ごせないのか参加する。
スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、九兵衛、コンパ、アイエフは基地内にまだ取り残されている人の救助に向かい、シャマルは怪我人達を治癒魔法で治すのであった。

リィンはシャマルとユニゾンしてシャマルの治癒魔法の効力を上げていた。

ヴァイス「一体、誰がこんなことを・・・・」

誰がこんな酷い事をしたのかは、怪我人を運びながらヴァイスは考える。
そして安全なところまで運び出すとこう思い込んだ。
1人でこれほどの被害を出すこと以前にどうしてこんな卑劣な事をしたのかを考える。

アイエフ「分からないけど言えることはたくさんあるわ」

そんなヴァイズにアイエフが言い出す。

アイエフ「死体を見て調べたんだけど・・・刃物による切傷と体が切断されているのが多いわ。つまりそれは相手が剣を使う魔導士である事は間違いないわ」
ヴァイス「マジかよ？」

アイエフの予想にヴァイスが驚きだす。
だとすれば相手は剣の達人な上に相当な魔力を持っているのに違いないであろうと考える。

アイエフ「それより・・・・どうやらさらに厄介のがくるみたいね」

アイエフが空を見上げてそう言うと、そこには数多くのガジェットがこの機動四課に襲って来ている。
そのガジェットは新型である。人型をしていてそれぞれ別々の武器

を持っているものや、二足歩行のもの、胴体部分が大きいものがいた。
おそらくあれは『鬼兵隊』の作った最新兵器のガジェットであり、戦闘力はかなり高そうであった。
機動四課の隊員達は怯えだして体を震わせている。
無理もない、唯さえ壊滅状態に追い込まれたあげくにさらにガジェットによる襲来は、今の機動四課では戦力にならない。
アイエフはカタールを取り出して戦闘モードに入る。

アイエフ「ここで死んだら元の子もないわよ！」
ヴァイス「・・・・・俺も加勢するぜ！」

ヴァイスはそう言って、狙撃銃のデバイス『ストームレイダー』を撮り出す。
実はヴァイスはヘリパイロットを勤める青年で，ヘリ操縦士としては最高位のＡ級ライセンスを保有している。
しかし過去に武装隊に所属しており，スナイパーとしての腕も確かであった。
だが立て篭もり犯を狙撃する任務でミスショットし、人質であった妹ラグナの左目を潰したことがトラウマとなり武装隊を辞めた過去を持つ。
今回はこれ以上の被害を食い止めるために自分もヘリパイロットではなく元武装隊のメンバーとしてガジェットの排除をすることにした。

一方の銀時とネプテューヌ達は急いで走って機動四課の基地に向かって走っている。

一般人は幸い非難している為，誰もいない。
だがもうすぐ到着する中、ガジェットが機動四課に襲ってきているのが分かる。

銀時「おい、なんかガジェットがジャンジャン襲ってきていねぇか？」
ネプテューヌ「ヤバイよ！早く到着しないと！」

大急ぎで機動四課の基地に向かう5人。

？？？「悪いがここで通行止めだァァァァァ！！！」

銀時・ネプテューヌ達
「っ！！！？？？」

突如上から声が聞こえ、銀時とネプテューヌ達は瞬時に下がる。
そして一瞬何かが地面に突撃し、火柱が立った。
そして火柱がおさまると、中心に赤い髪の女性がいた。

ブラン「誰だお前！」
バーニン「あたしの名はバーニン、『業火の破壊者』のバーニンさ！」

赤髪の女性・バーニンは両手に炎を出して言い放つ。

銀時「てめー、問答無用で突っかかってきやがって、戦闘機人ですかこのヤロー」

喧嘩を売るような口調で挑発する銀時。だがバーニンは別の部分に反応する。

バーニン「戦闘機人？ちげーよ。あたしはそんなもんじゃねぇ。戦闘機人よりも高度な技術で作られた『魔道機人』さ！」
銀時「魔道機人？つーか戦闘機人より強いだと！？」

初めて聞く魔道機人が戦闘機人より強いということに驚く銀時。

バーニン「そのとおり！なんせ魔道機人は…魔道機人は……」
銀時・ネプテューヌ達「？」

バーニンは何か説明しようとしたら、固まった。銀時たネプテューヌ達は首をかしげる。そして、

バーニン「うがァァァァァァァ！！！分かるかちくしょォォォォォォ！！！！」

隣のビルにやつあたりで壊すバーニン。

銀時「おいィィィィィィ！！やつあたりで壊しちゃったよォォォォォォ！！！」
ネプテューヌ「あははは！もしかして頭が悪いのかな？あははは！」
バーニン「うっせェェェェェェェ！！！テメェ黙れェェェェェェェェ！！！！」

銀時はやつあたりのバーニンに突っ込み、ネプテューヌは笑い、笑うネプテューヌにバーニンは顔を赤くして怒鳴る。

？？？「あはははは！！バーニンったらホント馬鹿だね～♪」
？？？「本当に一方通行な奴だな。クックック」

何処からかバーニンを馬鹿にする声が聞こえる。

バーニン「うっさい黙れ！！あたしの喧嘩の邪魔すんなよ！！」

バーニンは上に向かって咆哮を出す。

銀時達は上を見上げるとそこに水色の髪の少女と、紫髪の少女がいた。

銀時「仲間がいやがったのか！？」

？？？「いや、まだいるぞ」

今度は正面から声が聞こえた。

そこから、腰まである白髪で左目に眼帯をつけている軍人的な女性と、一番身長が高く茶色っぽい髪の女性と、黒い髪で装備が堅そうな女性がいた。

水色の髪の少女と紫髪の少女が降りてきて、バーニンは女性達のところへ行く。

ファルコリア「私の名は『大空の旋風者』ファルコリア。『魔道機人』のリーダーをやっている」

ランドル「わしは『歩く隕石獣』のランドルじゃ」

メーティア「『鋼鉄の重戦士』メーティアです」

バーニン「さっき言ったと思うが、『業火の破壊者』のバーニンだ」

アイシー「『絶対零度の闘士』のアイシーだよ♪」

シャチール「『闇夜の暗殺者』のシャチールだぜ？」

女性達はそれぞれ二つ名と自己紹介をする。

銀時「おいおい、魔道機人勢揃いですか？」

ノワール「油断しないで。こいつら強いわよ」
銀時「わーってるよ！」

銀時達は武器を構える。
だが、銀時とネプテューヌ達はある気配を感じて横を振り向いた瞬間・・・・・

銀時・ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール
「！！？？」

紅い大刀を持った仮面をかけた少女が、もの凄いスピードでこちらに襲ってきている。
銀時とネプテューヌ達は流石に驚きだしている。
そして少女はそのまま大刀を大きく素早く振ると、

ガキィン！

そのままスバルに振り下ろされた。
だがネプテューヌは木刀を少し抜いて、一太刀を受け止める。

銀時「ネプテューヌ！」

銀時はネプテューヌの名を叫びだす。

ネプテューヌ「ぅう！！」

しかしその一太刀は異常なまでに重かったが、苦しみながらもネプテューヌは木刀を抜き出し、そのまま大きく振るうと少女は押し返されて、宙に飛ばされるが逆回転して陸に着地した。
銀時は木刀を抜いて片手で強く握って構える。

そのまま少女を見るが、銀時はある事を気づく。
とてつもない威圧感に強い闘志。
こいつは只者じゃないって言うものじゃない。

強い修羅。

とてつもない血の匂いと絶対的な覇気は夜兎族（やとぞく）や茶吉尼族（だきみぞく）、そして辰羅族（しんらぞく）にも匹敵する強い気を感じるのであった。
ただの人間じゃない、もしくはファルコリアとかバーニンとかと同じ魔道機人。
いずれにしても銀時はその少女がゾーマ以上に危険な人物である事を確信する。
一方のネプテューヌは只者じゃないとは知っているが、何やら親しい雰囲気を表しているのは気のせいかと思い込む。

ファルコリア「お戻りになられましたか」

ファルコリアが少女に言う。
どうやら少女はファルコリア達のリーダーだと思われる。
そして少女は喋りだす。

？？？「まさか、こんなところでネプテューヌさんにお会いするだなんて思いもよりませんでした・・・」

少女が喋りだすと、ネプテューヌは信じられない表情をして驚きだす。
どうして少女がネプテューヌの名を知っているのか？
それに少女の声は、どこかで聞き覚えがある。

ネプテューヌ「・・・・・なんで私の名前を・・・・・って言

うか今の声・・・・まさか・・・・・」

信じられないかのような表情をするネプテューヌは眼を大きく開けて恐る恐ると少女に聞き出す。
そして少女は仮面を取り出す。
その顔は、さらさらとした長い金髪に翡翠色に輝く瞳。

ネプテューヌ「・・・イリス・・・さん・・・？」

ネプテューヌが公園で出会った少女・イリスなのだから。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

イリス「こんにちは、オリジナルキャラクターのイリスです」

銀八「つーか真王、なんで悪役な奴を入れるんだ？」

真王「教えません、ネタばれだから」

銀八「・・・・・じゃあ行くか。ペンネーム『黒龍』さん。『黒龍「どうやら報復にこなかったか」

銀時「来たらどうしたんだ？」

黒龍「そりゃあフェイトの物体X最強バージョンで撃退してた」

銀時「・・・・・・（真っ青）」

ソラ「それはそうと、サチコの料理のレベルが少し上がったみたいだ」

サチコ「そうなんだよ～♪」

銀時「マジで！？つうか、なんか感想でサチコがレギュラーみたいになってんのもおかしくね？」

ソラ「まぁそこは置いとけ」

サチコ「じゃ～私は戻って皆に食べてもらうね～♪」

ソラ「ああ、今度こそうまいと言わせろよ」

サチコは真王さんの所に戻って行った。

銀時「なぁソラ。実際食える位にサチコの腕は上がったのか？」

ソラ「ああ、一応泡吹くぐらいまでにはなったな」

銀時「あんま変わってなくない！？」

黒龍「ソラはよく意識を保っていられるな」

ソラ「なんだか最近耐性が付きつつあるようだ」

銀時「うわ・・もう末期だな」

黒龍「じゃ、じゃ感想いきます。

1．銀時ラバーズと女神人は皆処女ですか（黒笑）

2．真王さんのフェイトもこっちのフェイトと同様に物体X級の料理を作るんですか？

3．ぶっちゃけ九兵衛いらなくね？（黒笑）

どうですか？」

銀時「どれもまともな質問じゃないんですけどおおおおおおおおおおおおおお！！！！（真っ青）」

ソラ「こっちに報復に来たらどうするきだ？」

黒龍「その時はフェイトの物体Xで迎え撃つ」

銀時「完全フェイトイジメだよこいつ」

ソラ「はぁ～」『」

なのは・フェイト・シグナム・アルフ・リインフォース・スバル・ティアナ・ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール

「誰が処女だァァァァァァァァァァァ！！！！！（殺怒）」

なのは・フェイト・シグナム・アルフ・リインフォース・スバル・ティアナ・ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベールは怒り出して黒龍に向かって超巨大な砲撃を出した。

黒龍「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！」

何処からか黒龍の悲鳴が聞こえた。銀八とイリスは真っ青になっておびえる。

真王「2つ目と3つ目ですがこちらのフェイトはそんなの作れません。出来るのはシャマルだけです。そして九兵衛はこの先いるよ」

銀八「『黒龍』さん！次からはまともな質問をしてください！！」

イリス「つ、次はペンネーム『鳴神ソラ』さん。『今回の話は嵐の前の静けさを表してるな…

マリオ「ホントだな…」

スネーク「どう言う奴らが出て来るんだろうな…」

ネス「予想出来ちゃうけど…」

リュカ「言っちゃ駄目だよ…」

ルイージ「ナンバーズの皆に質問『バリアジャケットを作れるならどう言うのにする？』」

フォックス「スカリエッティに質問『内のマリオ見てどう思う？』」

ネス「銀さんとネプテューヌ達を除いた皆に質問『真王さんが知ってる漫画、アニメの世界に行けるならどこに行く？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

ナンバーズ「いらない（わ）（ぞ）（っす）」

真王「いつもの戦闘服でいいってことさ。んじゃスカリエッティ」

スカリエッティ「是非興味があるね。彼を連れて解剖させてくれるかい？」

真王「だめ。３つ目」

新八「僕は藍藍島がいいです！」

神楽「私は何処でもいいね」

桂「俺も何処でもいい」

エリザベス『桂さんと同じく』

月詠「『天誅シリーズ』の世界じゃの」

なのは「私は銀時と同じところがいい」

フェイト「わ、私も／／／／」

はやて「うちは桂さんと一緒がいいんや／／／／」

シグナム「オリンポスコロシアムだ」

ヴィータ「マリオだな」

シャマル「『ディスガイア』の世界で回復魔法の修行をしようと思います」

ザフィーラ「『テンガン山やりのはしら』で修行だ」

リインフォース「わ、私も銀時と・・・ゴニョゴニョ／／／／」

スバル「アデルさんのとこです」

ティアナ「ダンテさんのところね」

エリオ「特にありませんね」

キャロ「私もないです」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃんのとこがいい」

イリス「いろいろありますね。では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってください」

銀八「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問だ。『返答有難う御座います
田楽マンは喜んでその辺と飛び跳ねていたので鬱陶しかったから蹴り飛ばしておきました
さてと・・・それじゃ質問です

魚雷ガール
「この小説に出てくる女の子達に質問するわ！私の後継者となってボケ殺しになりたい子は居ない？いたら先生とマンツーマンで修行してあげるわよん♪」

絶対に居ないと思いますよ魚雷先生
・・・さて、続いての質問は？

Ｊ
「我が名はＪ。貴方達に問いたい。貴方達はその両の拳で何を語っているのか？」

返答に難しい質問だなぁこのタマネギ野郎は・・・
んじゃ今回はこの辺で失礼しまぁす』・・・まぁぶっちゃけ２つい っぺんに言うと」

全員「やらないし知らない」

イリス「同意します」

銀八「んじゃ『ｓｉｂｕｇａｋｉ』。廊下に永遠に立て」

イリス「最後です。ペンネーム『黄色いのなにか』さんからです。『ネプテューヌに質問
なのは達の目の前で銀時に濃厚なでぃーぷキッスとかしないんですか？そうすればより今まで以上に修羅場が見れますよｗｗ』…ってなんですかこれ？」

質問の内容に疑問を抱くイリス。

ネプテューヌ「私に喧嘩を売れと？でもいいよ。潰してやるから」

銀八「いいのかよ！？『黄色いのなにか』さん。もう少しまともな質問をしてください！」

第三十六訓：奇襲を受けたら対応が難しくなる（後書き）

真王「銀時とネプテューヌ達の前に現れたイリスと魔道機人達。彼女達の秘密にネプテューヌは・・・。そしてイリス達のマスターの正体が」

イリス「次回『人は怒り出したら止まらない』テイクオフです」

第三十七訓：人は怒り出したら止まらない（前書き）

真王「銀時は白夜叉へと覚醒！謎の黒幕、シグマが登場！蘇る高杉との思い出！そしてネプテューヌに異変が起きた！」

イリス「『リリカル銀魂』、スタートです」

第三十七訓：人は怒り出したら止まらない

ネプテューヌ「・・・・何で・・・・何でイリスさんが・・・・それにどうしてここに・・・・」

なぜイリスがここにいるのか理由を聞き出すと、イリスは顔色変えずにこたえる。

イリス「・・・先ほど、『機動四課』の所に襲撃して数多くの魔導士達を斬り倒してきた所です」
銀時・ノワール・ブラン・ベール「な!?」
ネプテューヌ「!!」

イリスの質問の答えに銀時とノワールとブランとベールは驚きだして額に汗を流し、ネプテューヌはイリスの衝撃な発言に信じられない表情をする。

イリス「機動部隊は幹部と同じく裏の部分があった。そのせいで私達の知らない所で人々は苦しんでいて数多くの者が亡くなった。そんな連中は生きていく価値はなく、『機動四課』を壊滅させようとした。それだけの事です」
ネプテューヌ「・・・・・・」

イリスの答えにネプテューヌは無言になる。

イリス「それにこの機動四課の壊滅はマスターの命令による物です」
銀時「そのマスターの命令の為なら、人を殺すのもためらわないって訳か？」

銀時が睨みつけてイリスに質問すると・・・イリスは答えだす。

イリス「ええ、その通りです。今回マスターが私に命じた任務（ミッション）は『機動四課』の壊滅です」

イリスは残酷に言い放つ。

ネプテューヌ「イリスさん・・・なんで・・・・」

イリス「言ったはずです。マスターの命令を受けたまでです」

ネプテューヌは聞くものの、イリスは一蹴する。

バーニン「もしかして頭悪いのか？あん？」

アイシー「そりゃあんたじゃないの？」

バーニン「んだとぉ！！」

後ろで喧嘩し始めたが、全員スルー。

ネプテューヌ「あんなにやさしそうに・・・あんなに嬉しそうにしてたイリスさんが・・・・・・なんで・・・・」

ネプテューヌはプルプル震えてイリスに言い放つ。

ネプテューヌ「なんで・・・何でこんなおふざけみたいなことするの！！！」

・・・ものすごくどうでもいいツッコミであった。

銀時・ファルコリア・バーニン・メーティア

「いやなんでだぁァァァァァァァァァァァァァァ！！！！

！」

アイシー・シャチール
「あははははははははははは！！！！！ヒィ～！！、ヒィ～！！」

銀時とファルコリアとバーニンとメーティアは額に青筋立てて怒鳴り、アイシーとシャチールは地面に手を叩いたり腹を抱えたりと大笑いし、ランドルとノワールとブランとベールはやれやれな感じになる。

イリス「・・・話はここまでにして任務（ミッション）を遂行したい所ですが・・・・以下に私といえどもあの坂田銀時とネプテューヌさんのコンビと戦うのは苦戦します。・・・・ならば確実に1人を仕留める為に1対1で戦うのみ！」

するとイリスは左手を地面に触れると、そこから真紅に輝く魔法陣が浮かび上がる。
それはネプテューヌとイリスだけを囲みだし、銀時とノワールとブランとベールはその魔法陣が広がると、まるで入ってはいけないかのように特殊な透明な壁に押されて吹飛ばされる。

銀時「どわぁあああ！」
ノワール「きゃあああ！」
ブラン「うわぁ！」
ベール「きゃっ！」
ネプテューヌ「銀さん！？ノワール！？」

その広場は闘技場並みの広さであり、一対一で戦うには申し分ない広さである。
すぐに銀時達は起き上がる。

銀時「おい、ネプテューヌをどうする気だ!?」

銀時はその魔法陣に入ろうとするが、特殊な透明な壁が防いで銀時を入らせないでいる。

銀時は木刀を振ってその壁を破ろうとするが、見えない壁が木刀を防ぐ。

イリス「ワンウォーコロシアム。一対一で戦う為の結界魔法。坂田銀時はそこで見ているが良い。私とネプテューヌさんの殺し合いを・・・」

イリスはそう言ってゼロセイバーを構えだす。

ネプテューヌ「イリスさん、私はあなたと戦う理由はないよ…」

イリス「問答無用です。・・・覚悟しろ!」

ＩＢＧＭ：ＶＳイリスｂｙロックマンＸ４
（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ４　ＯＳＴ，　Ｔ２７：　Ｉｒｉｓ）

すると凄まじい勢いで飛び掛ってイリスはゼロセイバーを大きく振り、ネプテューヌを襲う。

ネプテューヌ（・・・やるしかないね!）

ネプテューヌはその一太刀を受け流す。

そしてそのまま体を回転させて木刀を峰のほうに構えて神速の速さでアーサァの後頭部を狙って振るう。

だが、

イリス「甘い！」

イリスも神速の速さで移動してネプテューヌの一太刀を交わす。
背後の気配を感じて後ろを向くと・・・・そこには跳躍していてゼロセイバーを構えているイリスの姿があった。

イリス「はぁあああああああ！」

イリスは神速の一太刀を炸裂させるが、

ネプテューヌ「甘いのはあんただよ！！」
イリス「何！？、ぐあ！」

わずか数ｃｍギリギリでかわし、イリスの顔面を殴り飛ばす。
しかしそこでネプテューヌは神速並みのスピードで木刀を振り下ろすが、イリスは持ち直してゼロセイバーで防ぐ。

イリス「やってくれましたね。『ゼロセイバー』！」
ゼロセイバー≪承知した≫

ガシャン

イリスは反撃でゼロセイバーのカートリッジをロードし、ゼロセイバーに炎が纏う。
ネプテューヌはそれを見て防ごうと思ったが、

イリス「無駄です！烈火塵！」
ネプテューヌ「うわぁっ！！」

炎の斬撃の衝撃に吹っ飛ばされた。

銀時「まずいな。ネプテューヌを助けねぇと」

このままじゃまずいと銀時は判断してスカリエッティから貰ったデバイスを使用する事を決意する。

だが突如、銀時の後ろから大量のガジェットが現れた。

銀時「!?・・・・こいつ等!」

突如現れたガジェットに銀時達は驚きだす。

しかも最新型であり，武器を持っている人型や、二足歩行型、胴体部分が大きいものがいた。

おそらくはスカリエッティが言っていた『鬼兵隊』が作り上げたガジェットのようである。

銀時「テメェら邪魔すんじゃねーーーー!!!」

そのガジェットが銀時を襲いだし、銀時とノワール、ブラン、ベールは仕方がなく対抗するかのように木刀とショートソード、ハンマー、パイクを強く握ってガジェットの軍勢に飛び掛る。

ネプテューヌ「やあああああああああああああ!!!」

イリス「はあああああああああああああああ!!!」

一方、ネプテューヌとイリスの戦いではすさまじくなっている。

ネプテューヌ「いやぁあああああああああああああ！」

ネプテューヌの神速剣技による連続攻撃は容赦なくイリスに炸裂する。

だがイリスはそれをゼロセイバーで防ぎだし、ときには瞬間移動の動きで交わしだす。

イリス「はぁあああああああああああああああ！」

イリスが後ろからゼロセイバーを左斜め上から振り下ろすが、ネプテューヌは気配を感じで地面を強く蹴るかのように右横に避ける。

そして振り下ろされたゼロセイバーは大地が大きく砕けてしまった。

ネプテューヌはさらに地面を強く蹴り出すかのような瞬発力の高いダッシュで、猛スピードでイリスに突撃する。

ネプテューヌ「てぇえええええええええええええ！」

イリス「うぉおおおおおおおおおおおおお！」

ネプテューヌの神速の一太刀に対するイリスの凄まじい一太刀がぶつかり合う！

イリス「『ゼロセイバー』、カートリッジロード！」

ガシャン×2

ゼロセイバーのカートリッジが2回ロードされた。

すると、上から3つの炎の塊が現れ、

イリス「バーンストライク！」

ネプテューヌに向かって飛んでいく。

ネプテューヌ「そんなの効かないよ！！」

しかしネプテューヌは木刀で野球のように撃ち返した。
そして撃ち返した物の一つ一つは、

バーニン「ぎゃあああああああああああ！！！」

全部バーニンにあたった。

アイシー「あの子なかなかやるね」
ファルコリア「うむ、余程の修行をしてきたと見えるが、イリス様はまだ強い」
ランドル「いや、まだ勝負は分からんぞ？」
バーニン「おい！すこしはこっちの心配をしろよ！！」

バーニンは怒鳴るが、みんなスルーである。

その後、ネプテューヌとイリスから爆発が起きた。
晴れると、ネプテューヌの左肩が少し斬られて血が少し出ていて、
イリスの右腕の部分も浅く斬られた。
そして互いに起き上がると振り向いて見届ける。

イリス「なるほど、剣術の腕も魔力もまず隊長級は言っても良いでしょう。・・・・・ですが貴方が私に勝つ事は不可能です」
ネプテューヌ「言ってくれるね！どうしてそんなことが言えるの！」

ネプテューヌはイリスに問う。

イリス「理由は1つ。それはマスターの行っている研究の1つであ

る『プロジェクトＤＮＡ』だ！」
ネプテューヌ「『プロジェクトＤＮＡ』？」

聞いた事がない特殊な研究に頭をかしげるネプテューヌ。
その研究は恐ろしいものであった。

イリス「『プロジェクトＤＮＡ』・・・それはＤＮＡと他人のＤＮＡと合成させて、戦闘力を急激に増す強化研究の事です」
ネプテューヌ「え！？」

そんな事が出来るのかっと言うばかりに驚くネプテューヌ。
つまりイリスはその研究によって大幅に強くなったとネプテューヌは考えるが、そんな甘い程度じゃなかった。

イリス「特殊な生体ポッドの中にいれ、他人の血液を体内に注入させ、そのまま一ヶ月ぐらい眠らせるだけで、急激に戦闘力を上げられます。その研究の実験台になった人は１０００人。ですがその内、成功したものは私１人。他の９９９人の人はその研究に耐え切れなく息絶えて亡くなった」
ネプテューヌ「なっ！？」

まさに命を玩具のように扱ってまでの残酷な研究である。
どうしてイリスだけが研究に成功したのかをイリスは言い出す。

イリス「何故私以外の戦闘機人が研究に耐え切れずに死んだのかを、研究の実験台として成功させた私にマスターが教えてくれた。成功させるに合成させるべきＤＮＡの持ち主は、魔力の高い者や頭が冴える者のＤＮＡではない。人間の常識をはるかに超えた潜在能力が高い者のＤＮＡでなければ研究が成功しない。それもあの生物型ロストロギアである魔導生物兵器『ゾーマ』をも上回る潜在能力の持

ち主のＤＮＡが・・・・」

イリスが研究の失敗原因を言い出すと、ネプテューヌは驚きと信じられない衝撃が交じり合ったかのような表情をする。
ゾーマを上回る身体能力の持ち主。すなわち魔法なしでゾーマを倒せる実力者。

イリス「そう、『プロジェクトＤＮＡ』の研究でマスターが私のＤＮＡに合成させたＤＮＡの持ち主は・・・・貴方に守る強さを教えた尊敬すべき人物・・・『白夜叉』坂田銀時のＤＮＡだ！」
ネプテューヌ「銀さんの・・・ＤＮＡ！？」

まさかの衝撃的な真実。
銀時の潜在能力の高さはＳＳ＋級に当たり、そんなのを合成させればイリスはまちがいなくゾーマをも上回る。
ただ、一つになる事は銀時のＤＮＡと合成させた事である。
銀時のＤＮＡって事は、銀時の血液などを利用した事になる。
だとすれば、一体どこで銀時の血液を手に入れたのかは不自然に思うネプテューヌ。

イリス「話はここまでだ。マスターの為、今ここで私は貴方を討つ！」

イリスはそう言って、カートリッジの弾丸をゼロセイバーに2発装填させると、

イリス「『ゼロセイバー』、カートリッジロード！」
ゼロセイバー≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫

ガシュン×９

アーサァはカートリッジを9発ロードする。
すると、ゼロセイバーの刀身から、真紅のまばゆい光が大きく溢れ出る。
とても異常なまでと言えるほどに光が凄まじい勢いで輝きだしている。

銀時「てゃあああああああああああ！」

ズバァーン！

一方の銀時達は大急ぎでガジェットを破壊した。

銀時「ちぃ、何とか片付いたか！」

今ので最後の一体であり、全てのガジェットを破壊した銀時達はネプテューヌの救出に向かおうとするが、そこには魔力を最大限に収束しているイリスがいた。

ノワール「な、何よあれ！」
ベール「何ですのこの力は…」
ブラン「嫌な予感がする・・・」

ノワール、ブラン、ベールはイリスの力に驚く。

ファルコリア「あれはイリス様の必殺技、『ゼロブレイカー』を放つつもりだ」
シャチール「必殺技を出させるだなんて相当な奴だったってわけだ

な？」
銀時「テメエら、どういう意味だ！」
メーティア「みてればわかる」

イリス「これで終わりです。ゼロブレイカー！！！！！」
ネプテューヌ「うわあああああああああああああああああああああ！！！！！」

ゼロセイバーからは極大な紅き閃光が放たれる。
ネプテューヌはその閃光に飲み込まれる。
イリスの張った『ワンウォーコロシアム』でさえもあっという間に粉々に破壊されて大爆発する。
やがて爆風は消え、風がおさまる。銀時達が伏せていた顔を上げた。
そこにいたのはほとんど焼け焦げていて、ふらふらと揺れているボロボロのネプテューヌだった。

銀時「ネプテューヌーーーーー！！！」

銀時はネプテューヌに叫ぶ。

イリス「驚きました。まさか、我が『ゼロセイバー』を受けてまでまだ立っていられるとは・・・・」

いつの間にかイリスがネプテューヌの前にいる。
そして・・・・・

イリス「ですが、やはり私に勝つ事は不可能でしたね」

イリスはネプテューヌに手を出そうとした。

ブシュ！

突如、左手に木刀が刺さりだした。

銀時「オイ」

声が聞こえた。
その声の持ち主は銀時であった。

銀時「・・・・・その手で・・・・・触んじゃねぇ」

相当な怒気を放っており、それはイリスをも圧倒する。

銀時「その綺麗に見えそうな薄汚く染まった手で、ネプテューヌに触んじゃねェ」
イリス「あ・・・貴方は・・・！？」

今の銀時はいつもの銀時じゃなかった。
怒りによって覚醒した伝説の白夜叉そのものであった。
そして左手を突き刺した木刀を抜き、イリスの左手から血があふれ出て来ると・・・・
直後、大きな打撃音と共にイリスが吹き飛んだ。

イリス「ぐはぁあああっ！！」
魔道機人組「イリス（様）！？」

イリスは、十数メートル先まで吹き飛ばされる。

魔道機人組はイリスに駆け寄る。
イリスが、頭を押さえながら起き上がった。
頭には血が溢れていて、相当な一撃を喰らったのである。
動揺しながら震える足で、何とか立ち上がった。
その時、

銀時「テメェ・・・今、自分がやった事を分かっているのか?」

銀時のドスの効いた声が聞こえた。
イリスは銀時を見た。その瞬間、銀時から凄まじい怒気を感じ、イリスは恐怖を感じながらも警戒する。

銀時「テメェはネプテューヌとどういう関係か知らんが、優しくしたネプテューヌをその手で傷つけたんだぜ?」

躊躇いもなくネプテューヌを傷つけたイリスの事を、銀時は許せなかったのである。
ネプテューヌを傷つけたイリスは、かつての戦友であった高杉と重なり合ったからである。

銀時「それがどれ程までに、とんでもない事であるかを・・・分かっているのか?」

今でも斬りかかりそうな銀時の怒り。
それは正に獲物を狩る獣の眼をしている夜叉その者である。
ノワール達も、ファルコリア達も、銀時の怒りにたじろいでいる。
銀時と双璧の実力を持ったイリスと言えども、今の状況では銀時に勝てるかどうか分からない。
いや、万全な状況でも、白夜叉として覚醒した銀時と戦う事が無謀である。

このままでは殺されると思ったその時であった。

???「ほう?これはこれは・・・・あの有名な『白夜叉』にお眼を合わせることが出来るとは・・・・・・」

突如、イリスの後ろから1人の男が現れた。
その男は、メカっぽい体にマントを羽織り、ハゲな頭で額に赤くて丸いクリスタルとケツアゴがあるが、いかにも悪人面をしていた。

イリス・魔道機人組「マ・・・・マスター!」

イリスとファルコリア達はその男を見て、『マスター』と言い出す。
それを聞いた銀時達は、この男がイリスが言う『マスター』である事を知る。
そして男は銀時に礼儀正しく挨拶をする。

シグマ「始めましてだな、坂田銀時。私はシグマだ。以後、お初めに申しよう」
銀時「・・・・テメェか・・・・イリスに機動四課の壊滅の命を出したのは・・・・・・」

怒りに睨みつける銀時はイリスに聞きだすと・・・・イリスは素直に答えだす。

シグマ「フッフッフ、その通りだ。・・・・それより如何かな?私の作り出した作品を?」
銀時「作品?」

イリスの『作品』って言葉に銀時は片眉を上げた。

シグマ「イリスは私が作り出した『プロジェクトＤＮＡ』を組みこませたのさ」
ノワール「『プロジェクトＤＮＡ』？」

『プロジェクトＤＮＡ』の事を説明するシグマ。

シグマ「しかし、そこの子供には驚かされる。『プロジェクトＤＮＡ』を受けていないのにも関わらずにイリスと互角に渡り合えるとは・・・・興味があるな」

ネプテューヌの身体能力に興味深そうにシグマは言って笑みを浮かべた。
その時、シグマは凄まじい怒気を感じた。
ネプテューヌから目を離し、目の前にいる銀時を見た。
怒気を放ちながら、銀時はシグマを睨んでいる。

銀時「……テメェがイリスを作品なんて呼ぶんじゃねェ」

凄みの加わった声で、銀時が言った。
シグマは、銀時の怒気に怯む事なく、真っ直ぐに銀時を見ている。

銀時「確かにイリスもそいつ等も、テメーの論理が基になってる技術で生まれた。けどな…」
シグマ「……」

シグマは、黙って銀時の話を聞いている。

銀時「コイツらを物扱いする野郎は、俺が許さねェ」
？？？「同感だ！」

銀時の背後から1人の男の声が現れる。
その男はすぐにシグマに斬りかかるが、気づいたメーティアがシールドでその男の一太刀を防ぐ。
だが、右手だけじゃその男の一撃は防ぎきれずに後ろに吹飛ばされるが着地する。

銀時「ヅラ、いつの間に！」
桂「ヅラじゃない桂だ！」

その男、桂小太郎が現れたのであった。
だが桂の様子が全く違うと銀時は理解した。
表情では表していないが眼を見ただけで桂の怒りが伝わってきている。

シグマ「これはこれは『白夜叉』に続いて、あの『狂乱の貴公子』ごと桂小太郎に会えるとはな・・・・」

大物にこうも会える事にシグマは喜びだす。

桂「まさか貴様のような下種な男が、イリスとその者たちの生みの親だとは・・・」

シグマの様な人の命をなんとも思わない人物によってイリスが生み出された事に呆れる桂。
それと同時にシグマに対する怒りを表している。

桂「作品だろうが人造人間だろうが・・・・貴様はその娘の父親であろうに、作品扱いするなど・・・・人の命を作品扱いした貴様をこの桂小太郎が天誅を下す！」

刀をウゼルに向けて構える桂。

シグマ「・・・本当ならそこのネプテューヌという小娘を回収したかったが致し方あるまい。帰るぞ」

イリス・ファルコリア達
「・・・了解しました、マスター」

シグマとイリス達は魔方陣を展開し、ここから出ようとしたら、

ネプテューヌ「・・・・・・ないで」
シグマ「む？」
銀時「ネプテューヌ？」
ネプテューヌ「ふざけないでーーーーー！！！！」
全員「っ！！！？」

ネプテューヌが叫び出して、シグマに向かって走り出した。

ネプテューヌ「イリスさんを、作品だなんて言うなぁぁぁぁあああああああああああああ！！！！！」

ネプテューヌが木刀でシグマに叩き切ろうとしする。
見かねたメーティアがシールドで防いだ。

メーティア「無駄だ。我がシールドはお前ごとき攻撃で壊れることｎ「あああ！！！！！！！！！」」

ネプテューヌはメーティアの言葉を遮り、力任せに木刀を振り下ろそうとした。

その時ネプテューヌの目は、まるで白夜叉の銀時のような獣の目をしていた。

ネプテューヌ「あああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

バキャーーーーーーーーーーン！！！！！

メーティア「ぐあああああああああああああああああ！！！！！」

力任せに振り下ろしたネプテューヌの攻撃は、メーティアのシールドごとぶっ飛ばした。

銀時や桂やノワール達、シグマとイリスにファルコリア達が驚く。

ファルコリア・シャチール・アイシー「メーティア！！！？？」

銀時・桂・ノワール・ブラン・ベール「ネプテューヌ（殿）！！！？」

シグマ（なんと！？メーティアのシールドを破っただと！？彼女のシールドはＳＳ級の砲撃を難なく耐え抜く防御の硬さをあんな棒きれで破壊するとは…）

メーティアが倒されたことに驚くシグマ。

そしてネプテューヌの潜在能力なのかと興味を持つ。

ネプテューヌ「がああああああああああああああああ！！！！！！」

ランドル「やれやれ、落ち着かせないかんのぅ……フンッ！」

ネプテューヌ「がぁっ！？」

暴走するネプテューヌをランドルが一撃で沈める。

ランドル「・・・・・・・・・・・・」

その時ランドルが何かネプテューヌの耳につぶやいたように見えたが、銀時達は聞こえなかった。

銀時「ネプテューヌ！！」

ランドル「安心せい。加減して気絶させただけじゃ」

銀時達が駆け寄り、ランドルが銀時達に安心させるように言う。

桂「本当だ。腹部に軽いあざがあるだけだ」

銀時「そうか…」

銀時達は安心する。

ランドル「・・・次に会うときはお主らと戦うことになるじゃろう。さらばじゃ」

ランドルはそう言って、シグマ達と共に消えた。

銀時達はそれを追わずにネプテューヌを心配する。

神楽「銀ちゃんんんんん！！」

後ろから、神楽が駆けつけてきた。

神楽だけじゃない。エリザベス、月詠、近藤、土方、沖田、山崎、スカリエッティ、ルーテシア、ナンバーズが駆けつける。

月詠「銀時、桂、大丈夫か！」
チンク「怪我はないか！？」

月詠とチンクが心配そうに声をかけると・・・・

桂「俺と銀時は大丈夫だ」
銀時「それより、ネプテューヌが！」

銀時と桂はネプテューヌの事を心配していた。
傷はかなり重傷で一刻も早く手当てが必要である。

近藤「なぁ！ネプテューヌ殿！！」
ウエンディ「大変っす！早く治療をしないと！」

近藤やウェンディもネプテューヌの酷い怪我に驚きを隠せなかった。
その後も機動六課もすぐに援護に来たが、ネプテューヌの重傷に驚きを隠せなかった。
特にコンパは涙が流れそうな程、心配していた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

バーニン「オッス。『業火の破壊者』バーニンがアシストするぜ？」

銀八「そんじゃ、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問、『よぉ…月光閃火だ。

っていうか、興味無いって…クッ…（涙）！！

輝刃「あ～あ～…閃火の奴男泣きしてしまったな…。とりあえず、まずは俺から質問だ。」

1．イリスに質問だ。銀魂の原作本読んでの感想は如何程だ？あと作者よ…もし新八にデバイスを持たせるなら、ぜひＶ２ガンダムみたいな感じでプリーズだ！

クッ…（涙）！声優ネタか…悪くないな…。次は俺からだ！

2．ノワールとティアナに質問だ。二人はよく『ツンデレ』だと言われてるが…俺は嫌いじゃねぇぞ『ツンデレ』は。っていうかむしろ俺の好みのタイプにどストライクだ！（親指を立てて『Ｇｏｏｄ！』のポーズをしながら、白い歯を輝かせた左ウィンクの笑顔を見せる）

輝刃「…あまりキザなポーズはせん方がいいと思うぞ？古臭いと言

われかねんからな…（汗）。」『」

イリス「そうですね。面白かったです」

真王「新八のデバイス計画ですが、考えておきます。って言うか新八は魔力なくてもてるのか？」

銀八「知るかよ。２つ目だ」

ノワール・ティアナ「誰がツンデレよっ！！！つーか古いわぁ！！」

銀八「だよね。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

バーニン「本当に古いよな。んじゃペンネーム『鳴神ソラ』だ。『予想していた通りになったな…

マリオ「だが…敵は複数だな…」

ソニック「ＹＥＳ！色々と曲者揃いなメンバーだな」

スネーク「実力もそうだが…口調も色々とあるな；」

フォックス「確かに！」

ルイージ「どうなるんだろうね…」

ネス「なのはさん達魔法使いの皆に質問『もし自分が魔法と関わってなかったら他にどう言う職業に就いてた？』」

リュカ「ナンバーズの皆さんに質問『自分の武器以外で銀さん達の

誰のを武器を使ってみたい？』」

マリオ「銀時とネプテューヌ達に質問『スーパー戦隊に変身するなら誰にする？』」

それでは次回を楽しみにしてます♪』」

なのは「私は翠屋で店長をやってたかな？」

フェイト「旅人かな？」

はやて「うちは保育士や」

シグナム「剣道の師だな」

ヴィータ「ゲートボールアイドルをやってたかな？」

シャマル「看護師ですね」

ザフィーラ「私は犬のままなのか？」

リインフォース「主と同じ保育士ですね」

スバル「武道家かな？」

ティアナ「軍兵をやるわね」

エリオ「環境保護家をやってます」

キャロ「私も」

ウーノ「武器は要らないわ」

ドゥーエ「アイエフのカタールね」

トーレ「アイエフが所持するクローを使う」

クワットロ「コンパの注射器を使おうかしら？」

チンク「アイエフ殿のカタールだな」

セイン「月詠さんのクナイをナイフ代わりに使うね」

セッテ「『スローターアームズ』以外、武器を握る気はありません」

オットー「武器は無理…」

ノーヴェ「スバルのリボルバーナックルだ」

ディエチ「レイジングハートで砲撃撃てるかな？」

ウエンディ「あたしには武器がないっす…」

ディード「銀時とネプテューヌの木刀を使います」

銀時「俺は『百獣戦隊ガオレンジャー』の方だ」

ネプテューヌ「私は『侍戦隊シンケンジャー』だよ」

ノワール「『電磁戦隊メガレンジャー』。・・・（ボソッ）かっこ

いいかも」

ブラン「『百獣戦隊ガオレンジャー』」

ベール「『超力戦隊オーレンジャー』ですわね」

バーニン「んじゃ『鳴神ソラ』。廊下に立て」

銀八「ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問。『フェイトとなのはに質問です
こちらの小説「リリカルボーボボ」で遂にフェイトまでがハジケました
それについてどう思いますか？
それから、ハジケたい人が居たら是非挙手して下さい
ハジケさせますから
以上です』・・・」

フェイト「これ私ィィィィィィィィィィ！！！！？？」

なのは「ど、どんまいフェイトちゃん・・・」

銀八「だよな～。って言うかハジケたい奴なんていないよな～」

銀八はバーニンのとこを見ると、

ネプテューヌ・サチコ・ヴィヴィオ・バーニン
「ハジケハジケハジケハジケ（×３）・・・」

銀八「オイィィィィィィィィ！！？何やってんのぉぉぉ！？『ｓｉｂｕｇａｋｉ』ィ！こいつ等をハジケさせるなぁぁぁぁ！！」

バーニン「何やってんだ?まいっか。次はペンネーム『黒神』からだ。『質問します。

この物語には関係ありませんが、アニメ『戦国ＢＡＳＡＲＡ弐』を見て、皆さんはどこら辺が一番良かったかを教えてください。』」

真王「この際はっきり言いますが、戦国ＢＡＳＡＲＡなんて知りません!ごめんなさい!」

銀八「しらねぇのかよ!」

バーニン「情けねぇ!『黒神』、とりあえず廊下に立たなくていいから!」

真王「しかしだからと言って見る気もありません」

銀八・バーニン「オイィィィィィィィィィィィィィ!!!!!!」

第三十七訓：人は怒り出したら止まらない（後書き）

真王「倒れたネプテューヌは病院で目を覚ます。銀時と桂は高杉との過去を話す。そしてある2人が現れる」

バーニン「次回『病院で騒ぎを起こすのはよくない』テイクオフだ！」

第三十八訓：病院で騒ぎを起こすのはよくない（前書き）

真王「今回はイリスのデバイス『ゼロセイバー』ほ秘密が明らかに？そしてシグマのとこに不安を抱くものが・・・」

ファルコリア「『リリカル銀魂』始めるぞ」

第三十八訓：病院で騒ぎを起こすのはよくない

聖王病院の一室。
窓際にベッドが一つ。その上に、ピンクっぽい紫の髪の少女、ネプテューヌが眠っていた。
ネプテューヌは意識を取り戻し、目を覚ました。
目に入ったのは白い天井。

ネプテューヌ「・・・・ここは・・・・？」
銀時「気づいたか、ネプテューヌ」

横から声をかけられ、その声がしたほうを振り向くと・・・そこには銀時とコンパがいた。
後ろには桂とエリザベス、ノワール、ブラン、ベール、アイエフもいる。

ネプテューヌ「銀さん・・・コンパ・・・・桂さん・・・・エリザベスさん・・・・ノワール・・・・ブラン・・・・ベール・・・・アイちゃん・・・・」
コンパ「ねぷねぷ～～～～！！無事でよかったです～～～～～！！（泣）」

ネプテューヌが眼を覚ました事に安心するコンパは同時に涙を流す。
銀時もネプテューヌの意識が取り戻した事に安心感を感じた。

銀時「すまねぇ」
ネプテューヌ「え？」

突如、銀時の謝罪に驚きだすネプテューヌ。

どうやら今回の件に大きな責任を持っているようである。
ガジェットの邪魔が入ったとは言え、ネプテューヌがこんなにも重傷を負ったのは自分のせいであると考える。

銀時「あの時、もっと手っ取り早くガジェットを倒していれば・・・・お前をこんなにも重傷を負わせる事は・・・・」
ネプテューヌ「い・・・・良いんですよ！・・・・・銀さんのせいじゃないですし！」
コンパ「そうですよ！銀時さんが自分自身を責めることはないです！」

責任を感じる銀時に、ネプテューヌとコンパは銀時を慰める。

桂「それ以上に敵の実力が相当なまでに高かった。だからネプテューヌ殿は無傷でいられなかった。それだけのことだ」
エリザベス『そうですね』

桂もエリザベスもネプテューヌの実力は知っていた。
そんなネプテューヌをも負かす相手は相当な手誰であると桂とエリザベスは考える。

銀時「・・・・しかしまさか、イリスが高杉の野朗と一緒になってしまったとはなぁ」
ネプテューヌ「高杉・・・・あの、『鬼兵隊』のリーダーである高杉晋介ですか？」

高杉の名にネプテューヌは驚きだす。
今までの事件の黒幕であり、銀時と桂の因縁の相手である『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋介。
以前にその姿を見たことがあるが、とても異常なまでに危険な人物

であった。
強いとか言う次元ではない。憎悪、憎しみ、憤怒など数え切れないほどの大量の負の感情が1つの塊となった人間の姿をした黒い獣その者であった。

ノワール「銀時、桂、あの高杉って人と知り合いだったけど・・・・一体どういう人物なの？」
銀時「・・・・・・」

ノワールが銀時にそう言うと、銀時は黙り込む。

銀時「……世界に喧嘩を売った大馬鹿野郎さ」

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・アイエフ・コンパ「え？」

銀時がそう言うとネプテューヌ達は驚きだす。

銀時「以前、俺やヅラに辰馬が高杉と友に攘夷戦争で天人と戦った事を知っているよな？」

ネプテューヌ達は小さく頷いた。

桂「その攘夷戦争で、俺達は大事な人を失った……最も尊敬する恩師を」

過去の記憶を思い出しながら、銀時と桂は語った。

銀時「護る事が出来なかった……その後、俺も仲間と一緒に戦に出た。そこで、また大事な仲間を失っちまった……その戦で、変わっ

ちまった奴もいる……その1人が高杉だ」

恩師である松陽の姿、かつての仲間達の姿、高杉の姿が頭に思い浮かんだ。

銀時「その恩師は俺とヅラや高杉にとってもかけがえのない人で、剣術を教えてくれた人だ。だけど、幕府によって江戸送致されて死刑されてしまった。それが始まりとなって高杉は変わってしまったかも知れねぇ」

高杉が変わってしまった原因を銀時は言い出す。

銀時は自分達の事を他人に話さない。それをネプテューヌ達に話したことを桂は流石に驚いている。

銀時「その高杉とイリスが重なってしまったんだよ」

ネプテューヌ「え？」

高杉の世界に対する憎しみと、主の命だけで人を殺めるイリスの存在が一緒である。

銀時「この思いは誰にもさせるわけにはいかなかった・・・けど、結局ネプテューヌにもさせてしまった」

あの時、容赦なくネプテューヌを攻撃したイリスの姿が世界を憎しむ黒い獣に変わった高杉と同じに見えたのである。

銀時「だから・・・ネプテューヌに俺と同じ思いはさせたシグマの野朗だけは絶対に許せねェ」

シグマに対する怒りが芽生えた銀時。

桂やエリザベス、そしてノワール達もシグマの卑劣なやり方を許す訳には行かなかった。

ここで、機動六課のメンバーとナンバーズのメンバーが現れた。

フェイト達もネプテューヌの事が心配でお見舞いに来たのである。

幸い，シャマルの治療魔法によって傷は治っており，一週間後には退院できるようである。

ギンガ「いつも妹がお世話になっています。私はスバルの姉であるギンガ・ナカジマです」

丁寧に挨拶するギンガ。

ゲンヤからスバルには姉がいると聞いたが、まさかギンガであるとは思いもよらなかった。

銀時「どうも、坂田銀時で～す。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してます」

あいも変わらずのだらけた挨拶にギンガは唖然とする。

桂「俺は桂小太郎。好物はソ・・・ぶぁふぁあああああああ！」

ヴィータ「だからいちいち好物言う必要があるかぁ！」

ヴィータは思わず桂にとび蹴りをする。

ヴィータのツッコミに思わず驚くギンガ。

普段のヴィータとは思えない行動に見られないのである。

エリザベス『始めまして、エリザベスです』

そう書かれたボートを出すエリザベスに気味悪く苦笑するギンガ。

ギンガ「あ・・・あははは・・・それにしても、あの有名な『白夜叉』ごと坂田銀時に『狂乱の貴公子』桂小太郎が本当に会えるなんて・・・・」

本物の英雄に会えた事は凄くが、イメージが全く違う事に驚く。

ギンガ「それで、あなた達は・・・」
ネプテューヌ「私はネプテューヌだよ」
ノワール「ノワールよ」
ブラン「ブラン…」
ベール「ベールですわ」
コンパ「ねぷねぷの友達のコンパです」
アイエフ「アイエフよ」
ギンガ「スバルの姉のギンガです」

ギンガとネプテューヌ達も自己紹介した。

チンク「さて、問題なのはそのシグマって男だが…」

チンクはシグマの名を口にする。

ウーノ「確かに、今回イリスに機動四課の命令を出したのもシグマって男のようだね。彼は一体・・・・」

ウーノはシグマが何者なのかは知らないが、考える事はただ1つ。
シグマも間違いなくかなり危険な人物である事は確かである。

???「今回の敵もかなり厄介なようだな」

扉の外から声が聞こえてきた。
銀時達には聞き覚えのある声。
扉が開いて、ゴーグルをかけた老人が入ってきた。
平賀源外である。

銀時「じーさん！」

銀時は驚きの声を上げた。

新八「源外さん！？」
神楽「あ・・・老いぼれアル！」
桂「源外殿！？」
エリザベス『何故ここに！？』
月詠「主もここの世界におるとは・・・」

神楽、桂、エリザベス、月詠も驚きを隠せなかった。
そう、源外こそ銀時達にこの世界を飛ばした原因人物の1人である。

源外「よォ。元気か野朗共？」

源外が挨拶した。

銀時「俺達はな・・・でもここにいる奴らは・・・・」
源外「分かっている。随分と派手にやられたもんだな・・・今回の事で役に立てるかは知らないが、あの譲ちゃんが持つ『ゼロセイバー』の事である重大な情報が分かった」
ザフィーラ「本当か？」

トーレ「それは一体！」

源外の言葉にザフィーラとトーレはその事を注目する。

源外「そこの紫の字を負かしたあのデバイス・『ゼロセイバー』を作ったのはウェイリーと言う野朗だ」

源外は、イリスの持つ『ゼロセイバー』が作ったのはウェイリーだと言う。

ちなみに紫の字とは、ネプテューヌのことである。

源外「ウェイリーは１００年前に管理局の研究者をやっていたが、ある日管理局をやめ、己の尊重を認めさせるために全力をかけてあのデバイス、『ゼロセイバー』を作りだしたそうだ」

ノワール「成程、要は認められたいからあのデバイスを作りだしたのね」

ノワールは源外の説明に、納得する。

源外「そんで、ウェイリーの死後、その『ゼロセイバー』はロストロギア級に値する部品として管理官に保管されたんだが・・・・１０年前に奪われたそうじゃ」

銀時「１０年前・・・・まさか」

最後のデバイスが奪われたのが１０年前であると聞き、その未完成品のデバイスを奪った犯人が誰なのかを銀時は理解した。

源外「銀の字、お前の感が正しければ間違いなく奪った犯人はシグマかもしれない」

フェイト「シグマが！？・・・・どうして！」

源外「そこまでは分からん。ワシが知った情報はここまでだ」

シグマがそのデバイスを奪った犯人である事に驚くフェイト。
源外の知っている情報はここまでのようである。

銀時「それにしても爺さん・・・・どこでその情報を・・・・」
源外「何・・・・俺と同じくこの世界に飛ばされたくの一に頼んでもらい、調べさせてもらっただけよ！」

くの一って台詞に銀時は呆れる。
銀時が思い当たる自分の世界のくの一の存在は間違いなくあの人物である。
そして・・・・

パリィーン

？？？「銀さ～ん！」

その人物が窓を破って現れた。
そして思いっきり銀時にタックルするかのように抱きつく。

銀時「ごふぁあああああ！」

銀時は吹飛ばされそうだったが何とか持ちこたえる。
突如の襲撃に誰もが驚く。
特にフェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、アイエフ、コンパは銀

時にある人物が抱きついてきた事に驚く。
その人物は女性で、ロングヘアで眼鏡をかけているなかなかの美人。
女性を見て、銀時は苦い顔をした。

銀時「げっ！お前……！」
？？？「ついに見つけたよ銀さん！こうして会えるなんて正に結ばれた愛の運命だわ！」
銀時「結ばれていねぇよ！」

銀時に抱きついているのは猿飛あやめ。通称さっちゃん。
元お庭番衆のくの一で、現在は始末屋をやっている。
銀時に惚れているストーカー女である。

猿飛「照れなくても良いじゃない！私達、ＳＭプレイを一緒に楽しんできた仲じゃない！」
銀時「ＳＭプレイなんてした覚えはねーよ！！」

勝手な事を言うさっちゃんに、怒鳴る銀時。
体から離そうとしているが、中々離れない。
幸せそうに抱きつくさっちゃんだが・・・

ガジ！

フェイトとなのはに、力強く背中を握られる。
そして・・・・

フェイト・なのは「うぉりゃあああああああああああああああああああ！」
猿飛「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

フェイトとなのははは思いっきり猿飛を投げつける。
猿飛は吹飛ばされて壁に衝突した。

さらに銀時はこの光景だけはフェイト達だけには見せる訳にはいかなった。
なぜならフェイトとなのははどす黒い感情を表しているのである。
2人だけじゃない、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォースももの凄く怒りを表している。
スバルとコンパは猿飛の大胆な行動に顔を真っ赤に染めている。
チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードはそんな猿飛に少し妬く。

フェイト「銀時・・・この人とどういう関係？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
なのは「銀さん・・・また女が出来たんだ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
ティアナ「兄さん・・・その悪い癖を直してあげようか？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
シグナム「銀時・・・この女の事を詳しく話してもらおうか？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
アルフ「銀時・・・どんだけ女作れば気がすむんだい？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
リインフォース「銀時・・・私との合体じゃ不満？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

正に女修羅に哀れに迷い込んだ銀時。
フェイト達の恐るべきな殺気・・・じゃなく嫉妬に青ざめるギンガ。

ギンガ「ちょ・・・フェイトさん達が異常なまでに怖いんだけど！？」

ネプテューヌ「ギンガさん・・・・あれがいつものなのはさん達だよ」

ネプテューヌは呆れてギンガに言い出す。
女の怒りがどれ程恐ろしいのか分かっている証拠である。
新八、神楽、月詠、エリオ、キャロ、フリード、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、源外、九兵衛、近藤、土方、ギンガ、山崎、リィン、ヴィヴィオ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ディエチ、ノーヴェ、ルーテシア、アギト、コンパ、アイエフは巻き込まれる前に病室から脱出する。
桂、エリザベス、はやて、沖田の４人は面白そうな為ここで待避する。

銀時「ち・・・違う、誤解するなよ。こいつはただの納豆臭い変態ストーカー女で俺はストーカー被害にあってる被害者だ」

銀時がフェイト達にそう言うと、フェイト達は安心する。

フェイト「良かったぁ！」
なのは「安心したぁ！」

嬉しそうに銀時に抱きつくフェイトとなのは。
そんな２人にティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースがツッコミ出そうとするが・・・・

猿飛「貴女等も何を土壇場でやっているのぉ！」

思いっきり猿飛はフェイトとなのはにドロップキックをする。

フェイト「うぁあああああああああああ！」

なのは「にゃあああああああああああ！」

猿飛のドロップキックを喰らったフェイトとなのはは吹飛ばされて気絶する！

そして猿飛はティアナ達に忠告する。

猿飛「貴女達、銀さんとはどういう関係か知らないけど、アナタ達なんかに銀さんは渡さないわ！！貴女達なんかより、私の方が銀さんのメ○豚に相応しいんだから！銀さんのおち○ち○は私のも…」

ティアナ・アルフ「ふざけんな、このストーカー！」

突如、ティアナとアルフが2人係で猿飛にラリアットを炸裂させて、首を強くはさみこんで強烈に直撃する。

猿飛「ぐはぁあああああああああああ！」

バタリ！

これには流石の猿飛も答えて倒れる。

猿飛「ゲホッゲホッゲホッ！・・・やってくれたわね、小娘共！」

アルフ「やかましいわ！あんたのような変態女が銀時に近づくな！」

ティアナ「兄さんを汚すなストーカー！」

額に青筋を浮かべて怒り出す猿飛、アルフ、ティアナ。

猿飛「上等じゃない！まずは邪魔虫である貴女達を駆除してやる！」

ティアナ・アルフ「それはこっちの台詞だぁ！」

そして3人は飛びかかって銀時を賭けた戦いが始まる。

銀時「おいいいいいいいいいいいいいい！何病室で騒いでいるんだ！？」
シグナム「いかん！このままでは遅れをとってしまう！」
リインフォース「私も負けられません！」

シグナムとリィンフォースも乱戦してきた。
銀時は止めようにもまさかのシグナムとリィンフォースの乱入に唖然とする銀時。
そして『金色の死神』と『白い悪魔』が眼を覚まして、とてつもない殺気を放ってデバイスを構える。

フェイト「ふふふふふふ・・・・・やってくれたわね！」
なのは「にゃはははは・・・・・愚か者には裁きなのぉ！」

そして2人は飛びかかってティアナ達の乱戦に入り込む。

チンク「まずい！このままでは私達は余り扱いされてしまう！」
セイン「こうなればいくしかない！」
セッテ「その通りだ！」
ウエンディ「じゃあ私達も行くっす！」
ディード「負ける訳には行かない！」

そしてナンバーズごとチンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードが乱戦。
１２人の驚異的なバトルは異常なまでに大きく、もはや銀時では止めることはできない。

？？？「グルァアアアアアア！」

扉が勢いよく開かれ、誰かが怒鳴りながら入ってきた。
全員の注目が扉に集まった。入ってきたのは聖王病院の婦長。見た目は『銀魂』の婦長にそっくり。額に青筋を立てて、眼鏡を光らせて怒っている。

婦長「あんた達ぃぃぃぃ!!何病院で大喧嘩しているんだぁぁぁぁぁ!!」

怒気を放つ婦長が鬼神の如く襲ってきた。
鉄拳、蹴り、頭突き、目潰し、枕、タライと婦長の嵐のような攻撃が全員に襲い掛かった。
もちろん銀時にも。

銀時ラバーズ「ぎゃあああああああああああああああああああああああ!!」
銀時「何で俺までェエエエエ!?」

病室、いや病院全体に銀時達の悲鳴が響渡った。

ネプテューヌ「・・・良い子は絶対に病院で暴れないでね」

射程外のネプテューヌは読者に忠告するのであった。

シグマの本拠地・研究場

かなり広くて無数の剣型のデバイスがざら理と並んでいる。

その中心部にシグマとイリスがいた。
シグマは愛しそうに，大きな赤いカプセルを眺めている。
そのカプセルを繋ぐ無数のコードは別の装置と繋がっていた。
それは装置に突き刺し立っているイリスの『ゼロセイバー』であった。
『ゼロセイバー』から何やら特殊な魔力を装置に流し込むかのように注入し，しかもその魔力がコードに流れてカプセルの中に入り込む。

シグマ「いやはや、白夜叉と狂乱の貴公子がこの世界に来ていたとは・・・しかもあの小娘に驚かされたな。まさかメーティアを一撃で倒すとは・・・イリスが予想以上に深手を負ったのも分かる」
イリス「はい、マスターが来てくれなければおそらくは私は白夜叉に・・・・」
シグマ「しかし、あの小娘はイリスと互角近くにまで対抗に交えるとは・・・・まぁ良い。メーティアが完全復活し次第、いつでも出撃できるだろう」

申し訳なさそうに言い出すアーサァに対してウゼルは愉快そうに言い出す。

シグマ「イリスよ。メーティアはどうしてる？」
イリス「ファルコリア達が診ています」

治療室

ファルコリア「大丈夫かメーティア」
メーティア「まだ痛みは残りますが、大丈夫です」

ファルコリアは治療ポッドの中にいるメーティアに声をかけ、メーティアは答える。
ネプテューヌから顔面に一撃を受け、今ここで治療を受けているのだ。

ランドル「その様子では大丈夫そうじゃが、戦闘に出れそうにないな」
メーティア「ええ、凄い一撃でした。まさか私の防御を破壊するなど・・・・・・」

メーティアは体を震わせた。

ファルコリア「どうしたメーティア」
メーティア「あの子供、彼女が一瞬出したあの目・・・まるであの白夜叉の目でした。そう、まるで獲物を狙う獣の目を・・・」

ネプテューヌの目が白夜叉の目をしていたとメーティアは言う。
その目を想像すると、メーティアの震えが止まらなくなる。

メーティア「く…体の震えが止まらない。私はあの子供に恐れていると言うのか！」

必死に体を押さえるものの、あまり止まらない。
やがて、少しずつおさまる。

メーティア「ふぅ・・・お見苦しいところを申し訳ございません」

ファルコリア「いや、いいんだ。ところでランドル、例の事を彼女に伝えたのか？」

ファルコリアがランドルにあることを言う。

ランドル「ああ、あやつの耳にこっそりあの場所を教えた」

ファルコリア「そうか。彼らに託すのは少し不安があるが、シグマの企みを止められるのは彼らしかいないのだからな」

メーティア「シグマは殺しでも躊躇しない残虐ものですからね。あの腐った仁義にはついていけません」

3人はシグマのやることに不審を抱き、銀時達にある場所を教えたようだ。

ファルコリア（もう我々ではシグマを止められない。どうか彼女に本当の優しさを教えてください、博士…）

ファルコリアは恩師であるある研究者を思い出し、祈りを与えるのであった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ファルコリア「魔道機人リーダー『大空の旋風者』のファルコリアがアシストしよう！」

銀八「よし、ペンネーム『黒龍』さんだ。『黒龍「一気にシリアスになってきたな」

ソラ「黒神の所スバル編と違って強そうな奴らが多いな」

銀時「約一人バカなのがいたけどな」

セイバー「あのネプテューヌ達でも苦戦をしいるでしょうね」

ソラ「しかし、今回新八の奴は活躍できるのか？」

銀時「無理だろ。あったとしてもツッコミか、ヤムチャみたいな戦いを横から解説するポジションだろ」

ソラ「いや、天津飯位は役に立つんじゃないか？」

銀時「天さんもヤムチャもあんま変わんねえだろ」

サチコ「結局の所役立たずってことだね～～」

サチコ（実体化）が現れる。

黒龍「うわ、いきなり現れてサラッと酷いこと言うな・・・」

ソラ「そんな事より質問いくか」

銀時「そうだな。じゃあ俺からはやて（たぬき）に質問。お前ぶっちゃけヅラのどこら辺に惚れたんだ？」

ソラ「俺はヅラに質問だ。少しは蕎麦以外のモノも食べたらどうだ？体に悪いぞ。折角だからフェイトの物体Xを贈っておこう」

黒龍「最後に俺からフェイトに質問。もしこっちのフェイトに会ったらどうする？それとなのは達、前回はよくも一斉砲撃食らわせてくれたなぁ。だったらこっちもお返しじゃー！！出てこい！オール怪人！」

オール怪人

『『きしゃあああああああああああああああ！！！！』』

黒龍「ゴー！！」

オール怪人はなのは達を懲らしめに行った。

ソラ「やってること完全に悪役だな」

銀時「しかも報復を恐れて逃げる始末」

セイバー「それにアリアとヤミとフェイトとアリスを強引に護衛に連れて行きましたよ」

銀時「真王さーん。黒龍はどうでもいいけど、フェイト達には何もしないでくれないかー」

ソラ「俺からも頼む。お詫びに高級食材で作った中華料理フルコースを贈る」

銀時「アイツらソラのコスプレ写真を渡せばたぶん寝返るぞ」

サチコ「私も写真欲しいな～～」『…っておい！怪人たちとあいつらがくんのか！？」

真王「脅して追い返しました♪彼女達はソラの写真で黒龍を叩きに行きました♪」

銀八「黒っ！あんた腹の中黒っ！」

ファルコリア「なんだこのカオスは・・・」

銀八「…まあいいや。質問に答えようか」

はやて「誰がたぬきや！って桂さんの惚れたとこか？全部や？」

真王「答えになりにくいな。次」

桂「健康のバランスはとってあるぞ」

フェイト「とりあえずお友達になります」

銀八「ハイ、『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ファルコリア「次はペンネーム『鳴神ソラ』から質問だ。『思いっきりロックマンXに出たボスキャラみたいなボスキャラ出たぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

ネス「そして久々発動シリアスブレイカー；」

リュカ「他にもあるよね；」

フォックス「しかし相手は複数だからそれぞれ個別に戦う事になるな…」

スネーク「だが…そいつに不満を持ってる奴がいるな…」

マリオ「俺も許さねえ…意思や命を持つ者は生み出したからにはそいつ等は1つの生命なんだ！作品なんかじゃねえ！！！」

ソニック「ＹＥＳ！俺も同感だぜ！」

ネス「銀さんに質問『ネプテューヌさんのシリアスをぶち壊す所はどう思いますか？』」

リュカ「真王さんに質問『イリスさん達って何を元にしたキャラなんですか？』」

ファルコ「俺も真王に質問『銀時のＢＪはコスプレじゃなく普通のか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「銀時にネプテューヌ！！馬鹿な事言うシグマ（バカ）をぶっ飛ばせよ！！」

ソニック「応援してるからな！」『…ふむ、シグマを倒したい人がいるな…」

銀八「そりゃあいつは許せない存在だからだ。んじゃ答えるぞ」

銀時「・・・なんて表現すればいいかわかんねぇ…」

真王「２つ目のイリス達はこんな感じです」

イリス：ｆａｔｅのセイバーをロングで胸を少し大きくした感じ

ファルコリア：ＩＳ（インフィニット・ストラトス）のラウラ・ボーデヴィッヒを大人な感じにした

アイシー：東方のチルノを大人にした感じ

バーニン：東方の妹紅の髪を赤くした感じ。胸はでかい

ランドル：東方の勇儀の髪を茶色くした感じ

メーティア：ディスガイア３のサファイアの髪と目を黒色にした感じ

シャチール：セインの髪を紫にした感じ。胸はでかい

真王「３つ目は…まだ出してねぇよ！！」

ファルコリア「・・・『鳴神ソラ』よ。廊下に立つのだ」

銀八「・・・じゃあペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからだ。
『今回はマジメな質問にしますか
スバルに質問
僕が書いてる「リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」で今スバルは人間じゃなく「マジンガー」になってます
どう思います？』」

スバル「これ私ィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！！？？？」

真王「…ッと、あんな感じに自分とのギャップについていけてません。『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に立ってください」

ファルコリア「次はランドル達もアシストさせるか」

銀八「んじゃ質問タイム終わりま～す」

第三十八訓：病院で騒ぎを起こすのはよくない（後書き）

真王「次回はシグマが使っていた研究所に潜入！そして銀時達に新たな乱入者が！」

ファルコリア「次回『戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない』テイクオフだ！」

第三十九訓：戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない（前書き）

真王「今回はシグマ達の研究所に突入します！あ、別の本拠地じゃないから」

アイシー「『リリカル銀魂』始めるよ～」

第三十九訓：戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない

猿飛の参戦に、フェイト、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードはある意味では最大の恋のライバルが現れたと考える。
桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、九兵衛、近藤、土方、沖田、山崎は源外にどうしてこの世界に飛ばされたかを聞き出す。
源外からの話によると、まず自分は事故で故障した転送装置の修理をしている間に変な光に飲み込まれてこの世界に飛ばされた。
そこで同時に飛ばされた猿飛と一緒にスカリエッティのアジトでしばらくスカリエッティ達の厄介になる事にした。

さらに源外は猿飛からどうしてこの世界に飛ばされたかを聞くと、猿飛もまた始末屋の仕事を終えた後、銀時達が行方不明になっていると言う情報を聞き入れた。
そして猿飛は必死に銀時を探していた。愛する者が行方不明である事に凄く死ぬほど心配していたのである。
眼鏡を落として探していて、見つけた途端に変な光に包まれてしまい、この世界に飛ばされたようだ。

猿飛「銀さんがいなくなってかなり心配したから必死に追い続けていたのよ！・・・・あ、でも、カレー忍者がいなくなってから攘夷志士達はかなり困ってたわ。ゴリラストーカーやマヨラーやドSや（元）地味もいなくなって真撰組も大慌てだわ」
桂「誰がカレー忍者だ！」
近藤「ゴリラ言うな！後、俺はストーカーではないぞぉ！」
山崎「（元）をつけるなら地味言うな！」

猿飛の発言に桂、近藤、山崎が、額に血管を浮かべてツッコム。

カレー忍者とは、以前エリザベスが捕まったって猿飛に助太刀の手伝いをさせる為に忍者の変装をして、勝手に猿飛にあだ名をつけられた桂の忍者ネーム。
ゴリラストーカーとは、ゴリラのような存在で妙にストーカーをする近藤の事。
地味は言うまでもなく元地味の山崎。
ちなみにマヨラーは土方、ドSは沖田である。

猿飛「貴女もいなくなって、吉原の遊女達と『百華』はかなり心配していたわよ？」
月詠「・・・・・・そうか」

猿飛にそう言われたら、月詠は吉原に残していった日輪と晴太、そして吉原自警団『百華』や遊女達を思い出す。
自分がいなくなってからどれ程経ったのかを。
桂とエリザベスも攘夷志士達は今頃どうしているのか考え、近藤も土方も沖田も山崎も真撰組の連中はどうしているかを心配している。
九兵衛も柳生道場では皆どうしているかを考えていた。
特に東城などは暑苦しく涙を流しているようである。

そして神楽も元の世界に残していった星海坊主、定春、妙、お登勢、たま、ついでにキャサリンなど様々な仲間の心配をする。

フェイト達は、そんな桂達を見て、いつも助けてばかりなのに銀時達の力になれないことに強く責任感を感じる。
だが・・・・

桂「だが、今すぐにもとの世界に戻れるとしても・・・・我々はこの世界でやらなければならないことが山ほどある」
エリザベス『その通り！』

桂とエリザベスは自分のやることがなんなのかは最初っから決まっていた。

はやて「桂さん」
リイン「エリザベスさん」

はやてとリインは唖然とした表情で2人の名を言い出す。

近藤「桂の言う通りだ。元の世界に戻れたとしても今の状況をほうっておく訳には行かん！」
月詠「散々世話になった身じゃ」
九兵衛「お妙ちゃんには早く会いたいけど・・・この状況を黙ってみておく訳には行かないからな」
神楽「助け合うのが仲間アル！」

近藤、月詠、九兵衛、神楽も元の世界に変える前に、まずはシグマの起こした事件を解決する事を決意する。

猿飛「私には関係ない事だけど・・・シグマのやっている事を見逃せば外道そのもの。外道を始末するのは同じ外道を進んだもの役目。ここで会ったのも何かの縁だから私も手伝うわ」

フェイト達は恋の宿敵だが、高杉やシグマのような過激な行動は猿飛から見れば外道そのものである。
始末屋としてこの件の事件解決に協力する事を決意した。

アルフ「皆・・・・・」
シグナム「・・・・恩にきる」

アルフとシグナムは自分達の世界の為に戦う事を決めた神楽達に強い感謝をする。
2人だけじゃない、機動六課やナンバーズもそうである。

源外「良いのか、銀の字？」

源外はそれで良いのかを銀時に言い出す。
そして銀時は・・・・・

銀時「別に良いじゃねぇの？もし戻れなくてもその時はその時だ。・・・それにシグマの事だけじゃねぇ。この世界には高杉もいやがるぜ」
源外「あの男が？」

源外は高杉の名を聞いて驚く。
そう、高杉は源外とはある知り合いであり、正確に言えば源外の息子が鬼兵隊の一員であったのである。

平賀三郎（ひらが さぶろう）

江戸一番の発明家・平賀源外の息子であり父に劣らずかなりのカラクリ好きであった。
だが天人の襲来に、源外のカラクリに対する姿勢に反発して家を飛び出し、鬼兵隊に入る。
剣の腕はそれ程でもないが、機械の扱いには長けていた。
幕府により粛清され、その首は江戸の川原に晒され、それを見た源外の復讐の火種になる。

源外「野朗が行方不明になっていると聞いたが、まさかこの世界に・・・・」
銀時「ああ、このままほうっておいたらミッドチルダはとんでもない事になってしまう・・・・」

世界を憎む高杉にとってはミッドチルダも破壊する対象としか見えない。
松陽を失った悲しみが、高杉を破壊を繰り返す黒い獣と変貌させたのである。

するとネプテューヌがフェイトに言う。

ネプテューヌ「ねぇフェイトさん、何か場所を調べるコンピューターとかない？」
フェイト「え？あるけどなんで急に？」
ネプテューヌ「ちょっと気になることを思い出して…」

ネプテューヌは気になることがあると言ってエリアサーチを要求。
そしてエリアサーチの装置がネプテューヌの前に置かれる。

ネプテューヌ（えっとたしか・・・）

ネプテューヌはあるエリアの場所を思い出そうとする。
それはランドルがネプテューヌを気絶させる際に言ったあの言葉、

ランドル『ミッドチルダの２４地区の山脈に秘密が隠されている。探して見るんじゃ』

ネプテューヌは思い出して、ミッドチルダの２４地区の山脈地帯を調べた。
すると、そこに白い建物が映った。

ネプテューヌ「これって…」
銀時「何だこれは？」

銀時達はその建物を見て不思議に見ていると、
狼を思わせるような印にΣの文字が刻まれていたマークが映った。

ネプテューヌ「！？これって！」

全員「シグマのマーク！！？」

全員シグマのマークに驚く。

銀時「ネプテューヌ、何でこいつを？」
ネプテューヌ「えっと・・・それは・・・」

ネプテューヌは歯切れ悪くなる。
何せ教えたランドルは敵なのだからどう教えるのか分からない。

桂「なにはともあれ、シグマの研究所があるなら、そこに秘密がある筈だ」
エリザベス『まずはそこに行きましょう！』
銀時「うし！そうときまれば出発準備だ！」

銀時、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフが出かける準備を始める。
するとネプテューヌが、

ネプテューヌ「あ、あの、出来れば私も連れてってくれないかな？」
フェイト「！？何言ってるの！ネプテューヌは怪我してるんだよ！」
シャマル「ネプテューヌちゃん！絶対に安静にしてください！」
いきなりそこに行きたいなどと言いだすので、フェイト達は猛反対。
ノワール「何やってるのネプテューヌ！早く準備をしなさい！」
だがノワールはネプテューヌに準備しろと言い出すのでフェイト達は驚く。
フェイト「ノワール！本気なの！？」
ノワール「私は至って本気よ」
ブラン「ネプテューヌは連れて行く」
ベール「もうほとんど傷は治ってますし、いいんじゃないですか？」
シャマル「良くありません！なのはちゃんもコンパちゃんも止めてください！」
ノワール達は引く気はなく、ネプテューヌを連れていくつもりである。
シャマルはなのはとコンパに止めてもらうように言うが、
なのは「私はいいよ別に」
コンパ「ねぷねぷは言い出したら止まる気はないです。て言うか私は止めないです」
2人は止める気は一切ないようだ。
フェイト「い、いいのなのは！？」

なのは「良いんだよフェイトちゃん。ネプちゃんは銀さんみたいにまっすぐな子だから」
ネプテューヌの目が、銀時のようにまっすぐな目をしているとそう思うなのは。
フェイトとシャマルは諦めた。

ネプテューヌ「ありがとう、行くよみんな！」

銀時・桂・新八・神楽・エリザベス・月詠・ノワール・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ
「おう！／ええ！／はい！／ハイです！／うむ！」

銀時達は病院から出た。
なのは達は銀時達を見送った。

ミッドチルダ・第２４地区・山脈地帯

銀時達はシグマの研究所のある山奥へ向かった。
そしてその研究所へたどり着いた。

ＩＢＧＭロボット博物館ｂｙロックマン７
（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　７　Ｒｏｂｏｔ　Ｍｕｓｅｕｍ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ）

銀時「ここか…」
ネプテューヌ「かなり大きいね…」
桂「よし、潜入するぞ」
銀時達は中へ入った。

シグマの研究所・モンスタープラント

銀時達は中へ潜入したが、そこで信じられない物を見た。

アイエフ「何よこれ・・・」
コンパ「こ、怖いです」

水槽カプセルの中で眠っていると思われるモンスターがいっぱいいるのだ。
それも小さなものから大きなものまである。

銀時「シグマの奴め…こんなもんまで作ってたのか！」
桂「何ということを・・・」
新八「これは酷いというレベルではありませんよ」

銀時と桂はシグマに怒りを覚える。
何種類ものモンスターが作られていることに。
そしてそれぞれのモンスターにはいろいろな名前のプレートが書いてあった。

『スライム』『クリボー』『ノコノコ』『グリフォン』『シャドウ』『キメラ』『エリンギャー』『クレムリン』『ボスパックン』

『ガードアーマー』『コープス』『アルラウネ』『プリム』
『ファイアプリム』『アパロイド』『メタルギア』『マンドレイク』
『リオレウス』『ファフニール』『ガーゴイル』『ワイバーン』
『ファウロン』『ゼグダリア』『トゲノコ』『バキエル』
『ファントム』『ババコンガ』『ラプトル』『ワーキャット』

その他いろいろなモンスターがいた。

銀時「あの野郎！絶対にゆるさねぇ・・・」

銀時はシグマに怒りを出す。

ネプテューヌ「私あっちの方を探ってみるから後お願いね」
銀時「…分かった」
新八「気を付けてください」

銀時は怒りを抑えて承諾し、ネプテューヌは別のところへ捜索する。

神楽「銀ちゃん、ヅラ、こっちに扉があるネ」
桂「ヅラじゃない桂だ」
銀時「どっかへの道か？」

銀時はボタンを押して扉を開ける。
その部屋はドーム状の部屋だった。

ノワール「…ここは何かの訓練場かしら？」
アイエフ「確かに、頑丈そうな構造ね」
？？？「そう思うかお前ら！」

銀時、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ブラン、ベ

ール、コンパ、アイエフ
「ッ！！！！？？」

突如上から炎と氷が降ってきて、１１人は何とかかわす。
攻撃を仕掛けたのはバーニンとアイシーであった。

ＩＢＧＭボス登場ｂｙロックマンＸ
（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ１９：　Ｂｏｓｓ　（Ｉｎｔｒｏ））

バーニン「ここであったが１００年目ってか？」
アイシー「悪いけどマスターがここの警備しろって言われててねー。あんた達を始末してやるよ！」

バーニンとアイシーがそれぞれ炎と氷の塊を出す。
もう戦闘態勢状態だ。

銀時「チッ！テメェら、さっさと片付けるぞ！」
バーニン「やれるもんならな！！」
アイシー「あははは！バトル開始だよ～♪」

銀時達とバーニンとアイシーの戦いが始まった。

ＩＢＧＭボスｂｙロックマンＸ５
（Ｍｅｇａｍａｎ　Ｘ５　Ｂｏｓｓ　Ｂａｔｔｌｅ　Ｍｕｓｉｃ　ＥＸＴＥＮＤＥＤ）

バーニン「どうしたどうしたぁぁ！！！？」
銀時「チィッ！！」
新八「うわわわっ！！」
コンパ「熱いですぅぅ！！」

バーニンは炎の塊を銀時、新八、神楽、ノワール、コンパに向けて発射させている。
銀時達は必死で避ける。

アイシー「これはかわせるかなぁ～？」
桂「まずい！避けろ！！」
エリザベス『あぶなっ！？』
ブラン「しつこい…」

別のとこで、アイシーが氷の飛礫を桂、エリザベス、月詠、ブラン、ベール、アイエフに発射させる。
桂達は必死で避ける。

月詠「く、これでは近づけん！」
アイエフ「向こうは遠距離の攻撃と接近戦が得意みたいだし、これはきついわ…」
バーニン「おしゃべるする暇があるのか！？」
月詠・アイエフ「ッ！？」

上からバーニンが手に炎を纏って拳を振り下ろすが、月詠とアイエフは気付いて避ける。
拳を地面に当てたら炎の衝撃波が出る。

アイエフ「うあっ！」
月詠「炎の衝撃波じゃとっ！？」

バーニン「どうだすごいだろ？」

アイエフは巻き込まれ、月詠は驚き、バーニンは自慢する。
すると、バーニンの横から銀時が現れて、バーニンは銀時が振り下ろす木刀を白刃取りする。

バーニン「あぶねぇあぶねぇ…もう少しで当たるとこだったぜ」
銀時「んだよ、お前なら当たるんじゃないかって思ったのに…」

銀時はそう言うが、バーニンはそれを聞いて顔を引き攣らせる。

バーニン「おい、そりゃあたしがアホだって言いたいのか？」
銀時「そうだよ」
バーニン「よし！アッタマきた！まずテメェをぶちのめし…たブゥアアアアアアアアアア！！！！」

バーニンは銀時を殴ろうとしたら、横から来た氷の塊に当たった。

アイシー「あ～、ごめんね～…？」
バーニン「…テンメェ…あたしに攻撃するとはいい度胸だな？ああん？」

バーニンは爆発寸前でアイシーを睨む。
さっきの氷の塊はアイシーが飛ばしたものである。

バーニン「よし！テメェから先に殺ってやろうかァァァァァァ！！！（怒）」
アイシー「あははは、やれるもんならね！♪」

バーニンは怒ってアイシーに突進し、アイシーは氷を腕に纏う。

そして2人はお互い殴り飛ばそうとして、

銀時・新八・神楽・桂・エリザベス・月詠・ノワール・ブラン・ベール
「オラァァァァァァァァァァァァ!!!!!」

バキィィン!!

バーニン・アイシー「ぐはあああああ!!」

銀時、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、ノワール、ブラン、ベールにぶっ飛ばされた。
コンパはオドオドして、アイエフはため息をつく。

バーニン「て、テメェら何しやがるっ!!」
銀時「え?喧嘩し合っているオメェらをすぐに叩くんだよ」
神楽「世の中はなぁ、弱肉強食の時代なんだヨ」
エリザベス『すぐ、ググれ!』
ブラン「お前らうざい」
ベール「喧嘩を待つのはあまり感心しませんわ」

銀時達は只喧嘩を待つのはめんどくさいので早めに2人を潰す気らしい。

バーニン「よし!テメェらの言いたいことはよ~く分かった。ぶっ殺してやる!」
アイシー「私達に潰されな~♪」

バーニンは怒って全身に炎を纏い、アイシーは氷を全身に纏い始める。

そして2人はいっせいに銀時達に襲いかかっていく。

???「悪いが潰されるのはお前らだ」

バーニン「あ?」

アイシー「ん?」

ピュンピュン!ドンドン!

バーニン「ぐあっ!」

アイシー「きゃあっ!」

銀時・新八・神楽・桂・エリザベス・月詠・ノワール・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ

「っ!!?」

突然男の声が聞こえ、直後に光の球がバーニンとアイシーに直撃する。

ＩＢＧＭＶＡＶＡ登場ｂｙロックマンＸ

（Ｍｅｇａ Ｍａｎ Ｘ ＯＳＴ，Ｔ０５：Ｖｉｌｅ（Ｉｎｔｒｏ））

（Ｍａｖｅｒｉｃｋ Ｈｕｎｔｅｒ Ｘ ＯＳＴ，Ｔ０５：Ｔｈｅｍｅ ｏｆ Ｖｉｌｅ（Ｉｎｔｒｏ））

???「クハハハ、油断大敵ってやつだなお前ら?」

バーニン「なん・・・だと・・・」

アイシー「あ、あんたは・・・」

バーニンとアイシーは体中に火花を散らして、男を見て驚愕した。
その男はシグマと同じようなロボットのような体で、紫が主色で顔はT字の穴（？）があり、で右肩にバズーカ砲のようなものがあり、額部分にVのマークが描かれていた。

バーニン「お前は…ＶＩＶＩ…」
アイシー「なんで・・・あんたが・・・ここにいるの・・・ＶＩＶＩ・・・」

バーニンとアイシーは男の名を言う。
その男・ＶＩＶＩは2人を見ると笑い始める。

ＶＩＶＩ「クックック…油断していたとはいえ、ずいぶん情けない恰好になったなお前ら」
バーニン「な・・・に・・・」
ＶＩＶＩ「まぁいずれにしろ、シグマもエグイことするよなぁ？」
バーニン「何…そりゃどういうことだ！」

ＶＩＶＩのつぶやきにバーニンは突っ掛かる。

ＶＩＶＩ「簡単だ。もしここに侵入者が入ってきたらお前ら諸共潰すように爆弾を発動させるんだとよ」
全員「っ！！！？？」

研究所の爆破。それはつまり、銀時達だけでなく、バーニンやアイシーまでも巻き込ませるというのだ。

バーニン「なん・・・だと・・・」
アイシー「そんな・・・」

バーニンとアイシーは絶望な顔をする。
慕ってくれたシグマが2人を捨てるだなんて思わなかったのだ。

ＶＩＶＩ「爆発で死ぬより敵に撃たれてやられたってことにしてやるから安心しろ」

ＶＩＶＩはそう言って2人にバズーカ砲を向ける。

バーニン（すまねぇリーダー、あたしら先に逝っちゃいそうだ・・・）
アイシー（ファルコリア…シャチール…メーティア…ランドル……ごめん…）
ＶＩＶＩ「祈りは済んだか？では、死ねぇ！！」

2人は諦め、ＶＩＶＩは2人にバズーカを発射・・・

銀時「オラァッ！！」
ＶＩＶＩ「！？くっ！」

出来なかった。銀時が乱入してＶＩＶＩに攻撃し、ＶＩＶＩは避けた。
そして銀時はバーニンとアイシーを庇う様にＶＩＶＩの前に立つ。

バーニン「な！何のつもりだお前！」

バーニンは銀時に叫ぶ。

銀時「俺はなぁ、相手さんの事情なんてどうでもいいが、人の命を簡単に捨てるような奴が気にくわねぇだけだ」

銀時はシグマの非道なやり方に怒る。

ＶＩＶＩ「…お前が庇っているのはその非道なことをした奴の手下だぞ？」

ＶＩＶＩはもっともらしいことを言うが、銀時は言う。

銀時「確かにな、けどな、たとえそいつが暗殺者の子供だろうが腐った権力者の息子だろうが、お尻ペンペンで更正させて拾ってやるだけだ」

コンパ「ぎ、銀さん！！／／／／」

ノワール「クスクス、言えてるわね」

銀時の一言にコンパは顔を真っ赤にしてツッコミ、ノワールはクスクスと笑う。

バーニン「お前…」

ＶＩＶＩ「・・・チッ、まあいい。おいお前、なんていうんだ？」

ＶＩＶＩは銀時に名を名乗れと言っているようだ。

銀時「俺は坂田銀時だ」

ＶＩＶＩ「銀時？あのゾーマを倒したと噂されているあの白夜叉か！成程な…」

ＶＩＶＩは銀時を見て納得する。

ＶＩＶＩ「クックック…では貴様を白夜叉と呼ぶことにしよう。白夜叉！この俺と殺し合いを始めようか！！」

銀時とＶＩＶＩの戦いが始まる。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

アイシー「今日はアイシーがアシストするよ～」

銀八「いくぞ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんからの質問だ。『神楽に質問です。神楽はヒロインとしての素質が欠片も見つからないのにどうして人気があるのですか？』」

神楽「コルァ、ヒロインの欠片もないってどういうことだコルァ。って言うかそんなん知らないネ。嬉しいけど」

アイシー「それじゃあ『黄色いのなにか』さん。廊下に立ってなさ

い。次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんだよ。
『皆さんに質問です
もし銀さんが「銀タマン」みたいなキャラになったらどうしますか？
それでも好きで居られますか？』…銀タマンって何？」

真王「これだ」

真王は全員に銀タマンを見せる。

全員「絶対に嫌だっ！！！！！」

全力で拒絶した。特に女性組が。

銀八「・・・『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。銀さん像を壊さないでください。次はペンネーム『鳴神ソラ』『大体の流れは黒神さんの所の小説の『スバル編』を参考にされてるから分かるけど…きっとボスキャラ戦は凄い事になるだろうな…

スネーク「そうだな…それで、やはりいたようだな…」

フォックス「彼女達が伝えた事って…」

リュカ「何だろうね？」

ネス「銀さんＬＯＶＥズに質問『今回出て来たあやめさんを見てどう思う？』」

フォックス「源外さんに質問だ『もしデバイスを作るならどんな感じのを作る？』」

ルイージ「ヴィヴィオちゃんに質問『なのはさん達のデバイスで使ってみたいデバイスは何?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』では順番に答えましょう」

銀時ラバーズ（猿飛除く）「私達の敵だっ！！！」

源外「そりゃデバイスを改造して醤油を出せるぞ?」

アイシー「何で醤油!?」

源外「じゃがリクエストで醤油以外のも出せるぞ」

アイシー「だからなんで醤油にこだわるの!?」

ヴィヴィオ「私はなのはママのレイジングハートだよ～」

真王「第二の魔王降臨だね」

銀八「ちょっそれだけは勘弁してくれ…」

アイシー「・・・良くわかんないけど『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『月光閃火』さん。『よぉ…月光閃火だ。しかし…猿飛の嬢ちゃんまで来たか…何つーか、こっち（銀魂&

輝刃「というか…彼女（猿飛あやめ）には、少々真っ当にさせる必要がありそうだな…。」（そういって、お仕置きモード寸前で不敵な笑みを浮かべる輝刃（汗）

あ～…ほどほどにしとけよ?んじゃ…まず俺から質問だ。

1．魔道機人の皆に質問だ。もし自分達が最初っからシグマ側にならずに銀時達の側に居たら、誰に興味を持っていたんだ?ちなみに、恋愛・友情それぞれで答えてくれ。

輝刃「確かに、そういったＩＦも考えられるな…。次は俺からだ。」

2．バーニンの嬢ちゃんに質問だ。戦闘機人の方に『ノーヴェ』というバーニンの嬢ちゃんと性格がモロ被りの嬢ちゃんが居るんだが…互いに（性格的）同族嫌悪とかあるのか?あと、『己の信念を頑なに貫く男』についてどう思っている?正直に答えてくれ。

あ～…確かに、特に銀魂勢の男性陣って銀時や新八を筆頭に『己の信念を頑なに貫く』所を持つ男が多いからな…。』…2つ目を答えましょうか」

バーニン「なんでだ?確かにあたしと似ちゃいるが別に嫌悪を出す気はないぞ?あと、『己の信念を頑なに貫く男』ってあるやつをスタンドだって言い張るやつのことか?」

バーニンはそう言って銀八を見る。

銀八「・・・何でこっち見てんの?て言うかその噂、誰が流したんだよ」

バーニン「赤服のガキだ」

銀八「サチコォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！」

銀八は絶叫をあげた。

バーニン「1つ目に戻るが、あたしはシグナムだな。恋相手は銀髪（銀時のこと）になるな。ちなみに友情・恋愛の順番だ」

イリス「私はネプテューヌさん。そして銀さんです」

ファルコリア「私はシグナム、高町なのは、ティアナ・ランスターとだな。あと坂田銀時が気になる」

アイシー「ネプテューヌとネプテューヌ達大ボケ組かな？あと銀さん」

ランドル「ワシはスバルかザフィーラじゃ。後、桂じゃの」

メーティア「スバルさん、ネプテューヌさん、なのはさん、フェイトさんですね。そして銀時さんですね」

シャチール「私はアイシーと同じだね」

銀八「んじゃ『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

アイシー「次はペンネーム『黒龍』さん。『黒龍「真王さん。なんでもできる作者だからって、やって良いことと悪いことがあるんですよ」（ゴゴゴゴゴゴ

銀時「おお、黒龍の奴今回はかなり怒ってるようだな」

黒龍「と言うことでサチコ！！」

サチコ「なに～？」

黒龍「女ソラのコスプレ写真＋ソラのコスプレ写真あげるから真王さんにキツいお仕置きをしてきてくれ！！」

サチコ「ホント！！？分かった！！！」

サチコは真王さんを呪いに行った。

銀時「結局他人頼りじゃねぇか！！」

セイバー「ん？そう言えばソラはどうしたんですか？まだ一言も喋っていないんですが・・・」

黒龍「ソラならあっちでムッツリーニを血祭りにあげてる」

ソラ「・・・・・・・・」

ムッツリーニ「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

ソラは無言でムッツリーニ君を木刀の餌食にしていた。

黒龍「コスプレならまだしも、全裸は恥ずかしかったらしい」

銀時「自業自得だな」

黒龍「それじゃあ質問いきます。銀時ラバーズに質問。もし銀さんが死んだらどうしますか？」

セイバー「私から女神四人に質問です。あなた達はどんな信念を持って戦っているんですか？」

黒龍「最後に俺から皆さんに質問です。ソラに称号を付けるどんなのになりますか？」

ソラ「質問終わったか？」

銀時「お前服にべっとり赤いモノが付いてんだけど・・・」

ソラ「気のせいだろ」

銀時「・・・・・・・・・」『…って作者あああああああああああ！！！！！何やらかしたんだーーーー！！」

真王・サチコ「なにが？」

サチコはケーキを食べていた。

銀八「何でサチコはケーキ食べてるわけ！？」

サチコ「美味しいから」

真王「はいはい、質問の答えを言いましょう。まず最初は」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ、シグナム・アルフ・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウェンディ・ディート・猿飛

「殺した奴をぬっ殺す！！！！！！！！！（超殺気）」

アイシー「恐っ！！この人たち恐っ！！！（真っ青）」

銀八「ほ、本気で怖いな（真っ青）。つ、次は」

女神組「世界の平和と（食べ物／声優／小説／ゲーム）のために！」

真王「今願望が聞こえた気がした」

銀八「俺もだ。次」

紙に『青夜叉』『（一部の）ゴーストを克服した男』『甘党』『サド？』『キーブレイドに選ばれし者』『仮面ライダークウガ』『マトリックスマン？』『ハーレム男』と書かれている。

真王「はいでは『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

アイシー「次はランドルがやるよ～」

真王「それじゃあ次回もまた会いましょう」

第三十九訓：戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない（後書き）

真王「次回はネプテューヌが新しい武器を手に入れる！そして研究所から銀時達と脱出を開始するが…」

アイシー「次回『脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある』テイクオフだよ♪」

～報告～

真王「今日から『魔界戦記ディスガイア４』の発売日だ。なので私はそれ買ってやるので更新が遅くなります。申し訳ございません」

第四十訓：脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある（前書き）

真王「今回ネプテューヌは新たな武器を手に！そして変わったのも…。さらには脱出にあるモンスターが！」

ランドル「『リリカル銀魂』始めるかの」

第四十訓：脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある

銀時とＶＩＶＩが戦いを始めるちょっと前、ネプテューヌは、

ネプテューヌ「いや～、まさかこんな所に落ちるなんてね～…」

廃棄処理場にいた。
いろいろ触っている際、スイッチを押してしまい、ここに落ちてしまったのだ。

ネプテューヌ「さて早くここを…ん？」

ネプテューヌはここから脱出しようとしたら、大きな青いカプセルを見つけた。
ネプテューヌは気になってそれを触ってみると、

プシュッ！

カプセルから音が出て開いた。
そして半透明の白いひげと髪の老人が映し出された。

ＩＢＧＭＤｒ．ライトｂｙロックマンＸ（Ｍａｖｅｒｉｃｋ Ｈｕｎｔｅｒ Ｘ ＯＳＴ，Ｔ３５：Ｄｒ．Ｌｉｇｈｔ（Ｃａｐｓｕｌｅ Ｔｈｅｍｅ １．０－ｒｅ））
（Ｍｅｇａ Ｍａｎ Ｘ ＯＳＴ，Ｔ３１：Ｄｒ．Ｌｉｇｈｔ（Ｃａｐｓｕｌｅ Ｔｈｅｍｅ））

レイト『わしの名は、トーマス・レイト。このメッセージを、未来に託す…』
ネプテューヌ「レイト？（この人どっかで見たような・・・）」
レイトを見てどこか引っ掛かるネプテューヌ。
レイト『このカプセルが開かれたということは…、すでに逃れられない戦いが始まったと思われる…』
ネプテューヌ「…」
ネプテューヌは黙ってレイトの話を聞く。
レイト『ワシがこのカプセルに遺した力を…正しく使ってくれると信じて授けよう…』
カプセルが光り始め、中から『ゼロセイバー』とよく似た青い大刀型デバイスが出た。
そしてそれは、鞘の部分にXのマークがあった。
レイト『ワシが遺した希望のデバイス…、『無限の剣（つるぎ）』、通称『エックスセイバー』だ…』
ネプテューヌ「エックス…セイバー…」
ネプテューヌはエックスセイバーを見つめる。
レイト『ワシの託した『エックスセイバー』で…未来を正しい方向へ導いておくれ…頼んだぞ、希望の者よ…！』
レイトは話し終わると消えた。

ネプテューヌはエックスセイバーを手に取る。

ネプテューヌ「…分かりました、レイトさん！必ず未来を正しくさせます！行くよ！『エックス』！」

エックスセイバー≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ！！　Ｎｅｗ　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！！≫

ネプテューヌは新たな相棒、『エックスセイバー』と共に未来を託され、進んでいくのであった。

ネプテューヌ「まずは銀さん達を探さないと・・・」

ネプテューヌはエックスセイバーを受け取り、廃棄処理場から出て、研究所内にいる銀時達を探すことにした。

しかし広いので何処に銀時達がいるのか分からない。

ネプテューヌ「ん？ここは・・・」

ネプテューヌは映像がいっぱいある部屋に着いた。

どうやらコンピューター室らしい。

モンスタープラントがいっぱい映っているが、大きな画面にはタイマーが映っていた。

ネプテューヌ「何これ？タイマー？」

エックスセイバー≪おそらくタイムリミットに爆発する仕掛けになっているでしょう≫

ネプテューヌ「ええっ！？」

画面に映っているタイマーが爆発までの時間だと知って驚く。
しかもタイムリミットがあと００：１５：００である。

ネプテューヌ「どうしよう！あと１５分しかない！銀さんは・・・いた！」

ネプテューヌは銀時を探すと、バトルドームに銀時と紫色の魔道機人・ＶＩＶＩが映っていた。

ネプテューヌ「銀さんもやばいかも！早く合流しなくっちゃ！」

ネプテューヌはコンピューター室を後にして、銀時達にとこへ向かった。

シグマの研究所・モンスタープラント

ネプテューヌは銀時達に向かおうとしたら、ここで足を止めた。
ここにいる生き物たちはどうするか考えていた。
作られたものとはいえ、れっきとした生き物なのだ。
放って置くのはかわいそうである。

ネプテューヌ（なんとかしてこの子たちを助けないと……あれを使おう！）

ネプテューヌは装置らしきものを見つけ、それを操作して中のモンスターたちを解放させてあげようと考えたのだが、残念なことに、

どう操作すればいいのか分からなかった。

ネプテューヌ「・・・・・ああ！もう！」

ネプテューヌはやけになって装置を殴る。

プシューーーーーー！

すると装置が反応し、一つのポッドが煙を出した。
そのポッドの中にいるのは、曲がった角と悪魔のような羽と尻尾があり、まるで人間の女性のようなモンスターが入っていた。
その女性モンスターは目を覚ましてネプテューヌを見る。
そしてそのポッドの水が無くなっていき、周りのガラスが開き、女性モンスター・サキュバスは倒れこむ。

ネプテューヌ「おとと・・・わぷ！」

ネプテューヌは倒れ込むサキュバスを抑えようとするが、ネプテューヌも巻き込まれ、サキュバスの豊満な胸がネプテューヌの顔に埋まる。
ネプテューヌは起き上がる。

ネプテューヌ「・・・っと…とりあえず早くしないと…」

ネプテューヌはとりあえずサキュバスを持ち上げる。
サキュバスはもう寝てしまったらしい。
あたりを捜索すると、大きなものが見えた。
それは４メートル位ある大型で人型の乗り物・ガジェットウォーリアーだった。
ネプテューヌはサキュバスを連れてガジェットウォーリアーに乗り

込む。

ネプテューヌ「えっと・・・どうするんだろ・・・」

ネプテューヌはどう操作するか迷っていると、あるメモを見つけた。

ガジェットウォーリアーの操作説明である。

ネプテューヌ「えっと・・・ふむふむ・・・なるほど・・・」

ネプテューヌは操作説明を把握した。

ネプテューヌ「よし！いくよ！」

ネプテューヌはレバーを前に倒し、前進させようとした。

ギュィィイイーーーーーーーーーン！！！

しかしそれは歩くよりダッシュだった。

ネプテューヌ「うわーーーーー！！とまらなーーーーい！！」

ネプテューヌは壁に激突、そして、

ドゴーーーーン！！！

ＶＩＶＩ「なんだ！？」

銀時「！？」

ノワール「なにあれ！？」

銀時達のいるバトルドームに着いた。

ネプテューヌ「銀さん!?やっと着いた!」
銀時「おいネプテューヌ!お前今までどこに行ってたんだ!」
ネプテューヌ「そんなことよりみんな脱出するよ!あと5分で爆発しちゃう!」

タイムリミットが5分切ったことに銀時達は驚く。

コンパ「た、大変です!早く出るです!!」
桂「その通りだ!ここに場合はここからオサラバするに限る!」
ノワール「みんな!あれに乗るわよ!」

ノワールの一声に、銀時達はバーニンとアイシーを背負って、ネプテューヌの乗るガジェットウォーリアー（以下、ウォーリアー）に乗り込む。

ネプテューヌ「あれ?その人たちは?」
銀時「野暮用だ!早く行くぞ!」
ネプテューヌ「・・・良くわかんないけど、それじゃあいっくよ～!!」

ネプテューヌはまた発進させる。
そしてまた壁にぶつかる。

新八「あんたもっと運転上手になれェェェェェェェェェェェェ!!!!」

新八のツッコミが木霊する。
残されたＶＩＶＩは一人だけになる。

ＶＩＶＩ「白夜叉・・・クックックック・・・」

ＶＩＶＩはひとりでに笑う。

ＶＩＶＩ「白夜叉ぁ！！お前とまた会うときは必ず貴様を倒してやるからな！！クハハハハハハハハハ！！！」

ＶＩＶＩは笑いながら紫の光となってどこかへ消えた。

ネプテューヌ「ここの子たちも出してあげるよ！」

ネプテューヌはウォーリアーから機関銃を出してモンスターに当たらないようにポッドうつ。

ポッドか壊され、出てきたモンスターたちは目を覚まし、興奮している。

ネプテューヌ「みんな！早く逃げるよ！！」

ネプテューヌの言葉に反応したのか、モンスターたちは研究所から逃げだした。

そしてネプテューヌ達も研究所から出た。

研究所から出て数秒後、研究所から大爆発が起きた。

ミッドチルダ・第２３地区・高速道路

新八「いやー、あのままあそこにいたら僕たちどうなっていたことか」

エリザベス『まさに危機一髪』

コンパ「恐かったです～」

アイエフ「はいはい」

新八とエリザベスは安心し、コンパは緊張が切れて泣き始め、アイエフはコンパを慰める。

ネプテューヌ「…ところで銀さんなんでその人たちも？」

ネプテューヌは銀時にバーニンとアイシーのことで聞く。

銀時「・・・言ったろ、野暮用だって」

ネプテューヌ「・・・そう」

ネプテューヌは銀時の言ったことを理解した。

バーニンとアイシーは捨て駒にされた。

そのことにネプテューヌのレバーを握る手が強くなる。

バーニン「・・・いいのか？あたしたちなんかを・・・」

バーニンが悲しそうな顔で銀時達に聞く。

銀時「いいんだよ。捨てられたなら面倒せぇけど俺達が面倒みてやるからな」

ネプテューヌ「もうあなた達は敵じゃなくなったんだからね」

バーニン・アイシー「・・・・・・・・・」

バーニンとアイシーは沈黙する。

銀時「・・・ところでネプテューヌ、何だそれは？」

銀時はネプテューヌの傍で寝ているサキュバスをさして言う。

ネプテューヌ「あ～、なんて言うのかな～…。とりあえず連れて行くことにしたって言うか～…」

銀時はネプテューヌに呆れる。

すると、

？？？「キイィィィーーーーーーーーーー！！！！！」

ネプテューヌ「うわっ！！」

桂「な、何事だ！？」

後ろから奇声が聞こえ、ウォーリアーの前に通り過ぎた。

そしてそれは蛾でも蝶でもない金属でできた紫色の機械生物だった。

ＩＢＧＭアパロイド戦ｂｙスターフォックスアサルト（Ｓｔａｒ　Ｆｏｘ　Ａｓｓａｕｌｔ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｓｓ　３）

バーニン「あいつは研究所にいた奴じゃないか！」

アイシー「何でここに！？」

バーニンとアイシーは声をあげる。
目の前の機械生物・ゼグダリアはシグマの研究所にいたもののようだ。
しかもそのゼグダリアはネプテューヌ達を睨んでいるように見える。

ネプテューヌ「…ねぇ、何かこっち見てない？」
桂「大方我々を餌として見ているのであろう」
新八「冷静に言ってる場合か「キィィーーー！！」…ってうわ！！」
ノワール「危ない！避けてっ！！」

ゼグダリアから超音波のような攻撃から避けるが、ウォーリアーの右腕を掠る。

ネプテューヌ「あっぶな…やってくれたね！お返しだよ！」

ネプテューヌは反撃にウォーリアーの右腕から機関銃を出し、ゼグダリアの羽を攻撃する。

ゼグダリア「ギィィィィーーー！！！！？」

ゼグダリアはダメージを受けたようだ。

ゼグダリア「ギギイィィーーー！！！！」

ゼグダリアはお返しと言わんばかりにお尻部分からオレンジのレーザー光線を出す。
光線は赤い線を描くと、その線から爆発が起きる。

銀時「ちょっ待て！あんなもん当たったらスパッと切れるってレベ

ルじゃねぇぞ！！」
新八「ネプテューヌさん！避けてください！！」
ネプテューヌ「分かってるよ！！」

ネプテューヌはゼグダリアの攻撃を必死で避ける。
進みながら右へ左へしゃがんで飛んで、そしてゼグダリアは攻撃をやめた。

ネプテューヌ「待ってたよ！くらえ！」

攻撃をやめたゼグダリアに、腕からミサイルを発射した。
ゼグダリアの羽が全部破壊された。

ゼグダリア「ギギギィィィーー！！」

ゼグダリアは悶え苦しむ。
その後、ゼグダリアは銀時達から離れる。

桂「安心するのはまだ早いようだ。見ろ！！」

顔を強張る桂が警戒を怠るなと言うと、ゼグダリアは地面に向かってレーザー光線を出す。
するとそこから燃え盛る岩石群が火山のように吹き出てきた。
しかもネプテューヌ達の方へ落ちてきている。

コンパ「エエェェェェェ～～～！！？？（◎口◎；）」
アイエフ「ちょっ！？何よあれ！？」
エリザベス『こっち来るよ！！』
月詠「ネプテューヌ！！」
ネプテューヌ「うわわっ！！」

ネプテューヌはウォーリアーを操作して燃え盛る岩石群をよける。
その後ゼグダリアは急接近してウォーリアーにしがみ付いた。

新八「うわぁ！」
銀時「こいつ！」
桂「不味い！早く振りほどかなければ！」

銀時達はウォーリアーにしがみ付いたゼグダリアを追い払おうとする。

ゼグダリア「ギイィエアアアーーーーーーーー！！！！！」
銀時達「ぐあああああああああああ（きゃあああああああああ）！！！！！」

ゼグダリアは超音波で銀時達を苦しめる。

新八「あ、頭が割れる…」
コンパ「い、痛いですぅぅ…」
銀時「ピーピーピーピー鳴きやがって！」
桂「くそ！この超音波を止めなければ…」

銀時達は耳を押さえて耐えている。
だがいつまでも続いていると耐えられない。
やがて少しずつ限界が来た。

銀時（ヤベッ、意識が…）

銀時は意識を失いかける。
その時、

？？？「・・・うるさい」

ガシィッ！

ゼグダリア「ギィッ！！？？」

銀時達「え？」

突然濃い紫色の大きな腕がゼグダリアの超音波を止めた。
その手の正体は、ネプテューヌが連れてきたサキュバスの羽が変化したものだった。

サキュバス「うるさくて眠れない・・・・・・静かにして」

スパンッ！

ゼグダリア「ギギィィーーー！！？」

サキュバスは片方の羽を刃物に変え、ゼグダリアの頭を切り落とし、
ゼグダリアは苦しむ。
その時、ゼグダリアの頭にコアらしき赤い玉が出た。

アイエフ「銀さん！きっとあの赤い玉が奴の弱点よ！」
銀時「よし！そうときまｒ「まって銀さん」ってネプテューヌ？」

銀時達が行動を起こそうとしたら、ネプテューヌが止める。

ネプテューヌ「桂さん、運転代わって」
桂「あ、ああ…」

ネプテューヌは桂と代わり、高いところに立つ。

ネプテューヌ「助けてあげたとはいえ、私達の邪魔するならあなたでも容赦しない。行くよ、エックスセイバー」
エックスセイバー≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ！≫

ネプテューヌはエックスセイバーを取り出し構える。
銀時達はエックスセイバーを見て驚く。

銀時「ネプテューヌ・・・お前それ」
ネプテューヌ「見ててよ銀さん。エックスセイバー、カートリッジロード」
エックスセイバー≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！（了解！）≫

ガシャン！

ネプテューヌはカートリッジをロードする。
足元に魔方陣が展開し、エックスセイバーを構える。

ゼグダリア「ギ・・・ギギ・・・」

ゼグダリアは逃げだそうとするが、サキュバスに捕まれて逃げられない。

ネプテューヌ「エックススラッシュ！！」

ネプテューヌはゼグダリアにエックスセイバーを振り下ろす。
そして、ゼグダリアの体に一筋の線が浮かび上がり、
真っ二つに割れた…いや、切られた。

ドガーーーーーン！！！

切られたゼグダリアは爆発した。

コンパ「・・・か、かっこいいです・・・」

ノワール「ネプテューヌ…その刀は一体・・・」

ノワールが聞くと、ネプテューヌは言う。

ネプテューヌ「この先の未来を正しく変えるデバイス『無限の剣（つるぎ）・エックスセイバー』だよ」

エックスセイバー≪以後、お見知りおきを≫

銀時「あ、どうもご丁寧に…」

銀時達はちょっと困惑したが、一応挨拶した。

クイクイッ

ネプテューヌ「ん？」

ネプテューヌの袖を引っ張る人がいる。サキュバスだ。

サキュバス「なまえ、何？」

サキュバスがネプテューヌの名前を聞いている。

ネプテューヌ「え？私はネプテューヌだよ」

サキュバス「ネプ・・・テュー・・・ヌ・・・」

サキュバスはネプテューヌを見ながら、

サキュバス「・・・・・・・母さん…」
全員「・・・・・・・・・・・・・え？」

爆弾発言を投下した。

サキュバス「母さん♪」
ネプテューヌ「うわ！」

ネプテューヌはサキュバスに抱きつかれる。

コンパ「ふぇ！？ふぇぇ！？ふぇぇぇぇぇぇぇ！！？」
アイエフ「何やったのよネプ子…」
ノワール「全くね…」
ブラン「・・・・・・・・・」
ベール「あらあらあら♪」

コンパはわけが分からず、アイエフとノワールは呆れ、ブランは無言だが殺気を放ち、ベールは邪な笑みを浮かべる。

ネプテューヌ「ち、違うよ！これはだね…」
エックスセイバー≪彼女がマスターを見た時、親だと認識したそうです≫
ネプテューヌ「そう、それ！」

エックスセイバーの説明にネプテューヌは肯定する。

桂「成程な。つまりこの者は生まれたての子供みたいなものだ」
銀時「んでネプテューヌが母ちゃんだってことか？ネプテューヌ、どうすんだ？」

桂達は納得し、ネプテューヌは聞かれて考え込む。

ネプテューヌ「う～～～もう分かったよ！私が責任持つよ！」

ネプテューヌはやけくそで答えた。

銀時「言ったな？ちゃんと面倒見ろよ？」

ネプテューヌ「分かったよ！」

銀時はネプテューヌに言うが、ネプテューヌは少し拗ねる。

銀時「おい拗ねんじゃｎ「ザクッ」ぎゃあああああああああああああ！！！」

銀時が言おうとしたら頭に刃物が刺された。

サキュバス「母さん、いじめる、駄目」

サキュバスが羽を刃物に変えて銀時をさしたのだ。

銀時「何しやがるテメェ！俺を殺す気かっ！！」

サキュバス「・・・・・・・・・」

サキュバスは無言で羽を刃物に変えて構える

銀時「スマン！悪かった！この通りだからそれ向けるのやめて！」

銀時は土下座する。

ノワール「・・・さっ、早いとこ六課に合流するわよ」

ネプテューヌ達は機動六課へ戻った。
だが、サキュバスのこととそのサキュバスがネプテューヌを母だと呼ぶことにまた騒ぎが起きたのは言うまでもない。

シグマの本拠地

シグマ「・・・なるほどな」
ファルコリア「ハイ、バーニンとアイシーは寝返り、六課軍に着いたとの事です」

ファルコリアとシグマが密会をしている。

シグマ「…大方あの馬鹿共が命を助けたということか」
ファルコリア「…そうですね（…無事でよかった…バーニン…アイシー…）」

ファルコリアは自分の仲間が助かってたことに安心する。

シグマ「報告ご苦労。下がれ」
ファルコリア「はっ」

ファルコリアは部屋を後にする。

シグマ「・・・フフフ、面白いことをしてくれるではないか」

シグマは誰もいなくなると、銀時達のことで笑う。

シグマ「だがもう遅い。我が計画は確実に進んでいるのだからな」

？？？「フンッ、誰もお前の計画など興味は無いと思うがな」

笑うシグマに吐き捨てるような声が聞こえた。

シグマ「・・・ずいぶんと減らず口を言う様になったなＶＩＶＩ」

シグマは笑いながら振り返る。そこにいるのは研究所にいたＶＩＶＩだった。

ＶＩＶＩ「お前の『プロジェクトＲ』はあいつらにとっちゃあまりいいことにはおきんと思うぞ？」

シグマ「ふん、あやつらが私のことに不審を抱いておるのは知っておるわ」

ＶＩＶＩとシグマは話しあう。

ＶＩＶＩ「それから白夜叉は俺が倒す。あいつのは興味があるんでな」

シグマ「・・・好きにしろ」

ＶＩＶＩ「ああ、そうさせてもらう」

ＶＩＶＩはそう言って去る。

シグマ「・・・準備は整った。さぁ、宴を始めようか！あはははははははは！！！」

シグマの狂った高笑いが響き渡る。
シグマとの決戦が近くなるのだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ランドル「今回はワシが担当しよう」

銀八「いくぜ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『させ感想だが…

マリオ「俺の怒りが…もうビッグバンまじかだぜ！！」

きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！今回出て来たＶＩＶＩの行動が
マリオの怒りに触れた！！！

マリオ「殴りて…あのＶＩＶＩって言うヴィヴィオが主人公の漫画の名前と被りそうな奴を殴りて…！！」

ソニック「それには俺も参加させてくれるかマリオ？」

マリオ「ああ…」

スネーク「同情出来んな…ＶＩＶＩには」

ルイージ「マジでムカつくよねシグマは！！」

フォックス「まったくだ！」

ネス「自分で生み出した生命を何だと思ってるんだって話だね！＃」

リュカ「うん！！＃」

ワリオ「主要メンバーが怒ってるから俺が変わりにメンバーに質問『スマブラＸにて出たアシストフィギュアで出て来て欲しい奴は何だ？』」

リンク「私からも皆さんに質問『スマブラで戦ってみたいスマブラキャラは誰ですか？』」

クッパ「我輩から皆に質問『マリオカートでレーサーになったら自分達はタイプは何級だと思う？ちなみに女性メンバーは無理なら答えなくて良いのだ』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「銀時と一緒に戦いたいもんだ」

ソニック「ＹＥＳ」『」

銀時「俺はゴッドハンドを出す奴だな。相手はアイクで、重さは重量型か？」

新八「僕はハンマーブロスさんです。ルイージさんで重さは中型です」

神楽「私はメトロイドね。相手はドンキー、そして中型ネ！」

桂「俺はサムライ・ゴローだな。相手はマルス殿で、重量型だと思う」

エリザベス『私はマッハライダーですね。ゲームウォッチさんで、重量型です』

月詠「わっちはサイボーグ忍者じゃ。メタナイトと戦うがカートの重量なぞ教えん」

ネプテューヌ「私はハンマーブロスだよ。マリオと戦って軽量型かな？」

ノワール「アンドルフかしら？相手はリンクだけど教えないわよ！！／／／」

ブラン「ハンマーブロス。アイスクライマーで軽量型」

ベール「私はリンさんですね。相手はゼルダさんですけど教えるわ

けありませんわ」

コンパ「建物をドーン！と立てる人です！ピーチさんと戦うです！後体重は教えないです！！／／／／」

アイエフ「シャドウね。相手はメタナイトだけどレディにその質問はどうなの？」

銀八「ハイ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ランドル「次はペンネーム『月光閃火』からじゃの。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…あの二人（バーニン＆ａｍｐ；アイシー）、完全に銀時にフラグ立てたな…。

輝刃「確かにな…このままでは他の魔道機人達も…（汗）。」

…あり得るね…（汗）。とりあえず、まずは俺からだ。

1．作者に質問だ。…頼む。早く新八にも何かしらの異性とのフラグを…ガクッ。（気絶）

輝刃「閃火ァアアアアアアアアアアアアアア！？！？んじゃ…次は俺からだ！」

2．ランドルに質問だ。君はよく『ワシ』とか『～じゃ』とか、何となく【お爺】な言葉遣いをするが…正直言ってファッションとか流行とか気にしないのか？あと好きな食べ物も聞いておきたい。

ああ…確かにランドルって、妙に古風な言葉遣いが多いよな?さすがに女の子で自分の事を『ワシ』と呼んでいるのは、少々違和感があるな…。まぁ、大人びてて知的な可愛さがあるからいいが…。(オイ…／ツッコミ)』ワシの場合はこの口調が気に入ってるからいいんじゃ。それにワシ以外にもわし口調のお姫様がいるらしいぞ?」

真王「新八の異性フラグですが…とりあえず考えておく」

ランドル「では『月光閃火』、廊下に立って置くんじゃ。次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』じゃ。『質問です もしも銀さんがボーボボ並にハジケたら皆さんどう思いますか?

質問その2

この中で使いたい真拳を言ってください(必ず一つ言う事)

鼻毛真拳
腋毛(わきげ)真拳
すね毛真拳
髪の毛真拳
胸毛真拳

以上です』…あやつらならこう言うぞ」

全員「どっちもいやじゃーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!」

ランドル「では『ｓｉｂｕｇａｋｉ』、そんな汚い技を要求せんようにな。次はペンネーム『黒龍』からじゃ。『ソラ「いや、俺は別にハーレム作ってないんだがな・・・」

銀時「いや、充分ハーレム作ってるだろ」

黒龍「自覚持った方がいいぞ」

ソラ「・・・・・・」

銀時「にしても、命を粗末にするシグマのやり方は気にくわねぇな」

黒龍「さすがに俺も今回は怒りを感じたな」

ソラ「ま、ああいうタイプはロクな最後を迎えないな」

黒龍「それと真王さん。ケーキありがとうございました」

銀時「美味しく食べさせてもらったぜ」

ソラ「黒龍の怒りも収まったしな」

黒龍「ては、質問いきます。

1、アリスに称号を付けるならどんなのになりますか？

2、新八対マッチョ新八（ケン八）ならどちらが勝ちますか？ケン八をそっちに送ったので試してみてください。

3、銀さんに質問。銀時ラバーズがヤンデレ化したらどうしますか？」

銀時「ん？ソラ。お前どこ行くんだよ？」

ソラ「ケーキの礼にネプテューヌ達に料理を作ってやろうと思ってな」

銀時「なるほどな」『では2つ目と3つ目を答えようではないか」

真王「ケン八と新八がバトルして引き分けになりました」

銀時「俺Ｎｉｃｅ．ｂｏａｔされちゃうーーーーー！！！」

ランドル「・・・首だけになるのか？」

真王「物騒な・・・次はアリスの称号だがこれだ」

紙に『Ｃ．Ｃもどき』『サディスト』『クールビューティー』『一方通行の片思い』と書かれている。

真王「では『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『ああああ』さんからの質問だ。『銀時ラバーズって、まだ、増えますか？
銀さんのシルバーブレードとユニゾンって、一緒に使うこと出来ますか？出来るとしたらどれ位強くなりますか？』」

真王「増えるか増えないかは私に気分次第。あとシルバーブレイドとユニゾンならば夜王と互角かもしれませんね」

ランドル「では『ああああ』よ。廊下に立つのじゃ。次はペンネーム『黄色いのなにか』からじゃ。『真王さんに質問です。
リリカル組みと銀魂組みで嫌いなキャラっていますか？』」

真王「いません。ユーノ、クロノ、プレシアは出てないですけど嫌いではないですよ」

銀八「じゃ、『黄色いのなにか』さん。廊下に立ってなさい」

ランドル「次のアシストはシャチールのするかの。ではまたな」

第四十訓：脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある（後書き）

ネプテューヌ「研究所から脱出後、私がサキュバスのママになっちゃってさぁ大変！生まれたての子供のような彼女をどう育てようとするか！」

銀時「ってまた偽次回予告かよ！！」

ネプテューヌ「ネプテューヌはやけになって保護するものの、彼女は周りの人に迷惑かけては男のアレを取ることが日に日に起きていく！」

新八「アレってなんですか！？いやな予感しかしないんですけど！？」

ネプテューヌ「そんな時登場したのがこの『ペプシマンX』！ペプシマンXは飲めばおとなしさを取り戻す唯一の必須アイテムなの！」

フェイト「絶対ガセものだよそれっ！！」

はやて「只の炭酸やないか…」

ネプテューヌ「次回『ネプママ戦記』、第三十九話『子育ての大変さって難しい』。用意するのはまずミルクが一番！！」

サキュバス「私どちらかというと銀髪の男がいいんだけど？」

銀時「え！？俺狙われてるの？」

サキュバス「女の子でもできるよ？」

なのは「まさかの両刀使いだよ！！」

真王「本当の次回は『宣戦布告を受けたら準備してかかれ』。ではまた」

第四十一訓：宣戦布告を受けたら準備してかかれ（前書き）

真王「シグマとの決戦の序盤のスタートです！」

シャチール「『リリカル銀魂』始まるぞ？」

第四十一訓：宣戦布告を受けたら準備してかかれ

銀時達がシグマの研究所から帰宅後、今場に緊張が走っていた。
それはバーニンとアイシーである。
2人は元はシグマの部下だったため、何をするか分からないからまわりは少し警戒している。

バーニン（どうすんだよこの状況…）
アイシー（緊張するけどもこの場を乗り切るのよ。・・・まずバーニンから）
バーニン（おい！・・・まあいいか）

バーニンは勇気を持って口を開く。

バーニン「あ～、あたしはバーニン。一応拾われたものだ」
アイシー「一応って…私はアイシーだよ」

バーニンのぎこちない答えにちょっと困惑するが、とりあえず挨拶するアイシー。

アイシー「好きな物はアイス。そして将来の夢はアイス王国を作ること！！」

一気に緊張が吹き飛ぶような答えが出た。

新八「ちょっと待てエエエエエ！！！何でアイス限定なんだよ！！」
アイシー「何を言うか眼鏡君。私は至って真剣に言ってるんだよ。アイス大好きの乙女心が理解できないの？」

スバル「そうだよ新八君。アイスは美味しいんだよ」
新八「理解したくないししたくもねぇ！って言うかスバルさん！なんでそっち側に！？」

スバルはなぜかアイシーの隣にいる。

アイシー「君話が分かるね。一緒にアイス同盟でも結ぼうか」
スバル「うん！結ぼう！」
ヴィータ「待て待て！あたしも入れてくれ！」

アイシー、スバル、ヴィータはアイスを愛してアイスを食す『アイス同盟』が結ばれました。

バーニン「全くあいつは…ちなみにあたしは強い奴と戦うのが好きだ。だからそこのピンクポニーの奴！あたしと勝負しろ！」
シグナム「ほぅ？いい度胸だ。その挑戦受けて立つ」

バーニンとシグナムが戦闘態勢に入った。

はやて「止めんか！」
シグナム・バーニン「ッツ！」

はやてがチョップで2人を止めた。

はやて「全くあんたらはここで暴れたら六課の被害費が馬鹿にならんやで？そこ分かっとき」
シグナム「も、申し訳ありません、主」
バーニン「ちっ、わかったよ」

シグナムは謝り、バーニンは邪魔されたことに苛立つが、とりあえ

ず承諾した。

はやて「…にしてもネプちゃん、それ大丈夫なん？」

はやてがネプテューヌに心配そうな目で見る。

なんせネプテューヌの背中に研究所から連れてきたサキュバスが抱きついているのだ。

ネプテューヌ「あはは・・・ま、まぁ私が責任取るんだし、それに私はリリスのママになっちゃったんだからちゃんとしなくちゃいけないしね」

はやて「成程な～。・・・・・・・・・ん？リリス？」

はやては納得するが、ネプテューヌが一瞬サキュバスをリリスって呼んだことに引っ掛かる。

ネプテューヌ「うんリリス。サキュバスって名前じゃあんまりしっくりこないから私が名付けたの。だよねリリス♪」

リリス「うん♪」

サキュバス…リリスは笑顔で答える。

新八はこれを見て顔を赤くしたとかしないとか。

リリス「母さん、お腹空いた」

ネプテューヌ「プリン食べる？」

リリス「食べるっ！！」

リリスがお腹空いたといい、ネプテューヌがプリンを出して言うと、リリスは目を輝かせて食べる。

まるで子供のような行いだが、傍から見てもリリスは大人でネプテ

ユーヌは子供なのだが。

銀時「・・・何あいつ子供みてぇなことやってんだ?」
フェイト「まぁ彼女は精神年齢が私達より幼いからだけど…」

銀時は呆れ、フェイトはとりあえずフォローする。
すると、源外とスカリエッティとイストワールがやってきた。

源外「おい紫の字と銀の字、面白いのが出来たぞ」
ネプテューヌ「え?面白いもの?」
銀時「どうせ碌でもないもんだろ?」

源外が面白いものが出来たといい、ネプテューヌは興味を持つが、銀時は切り捨てるように言う。
なんせ銀時は源外の発明は碌でもないやつだと経験してるからである。

ネプテューヌ「夢が無いね銀さん。早く行こうよ、リリス」
リリス「銀髪、早く行く」
銀時「イダダダダダダ行くのは分かったから髪の毛引っ張るな!!!」

銀時はリリスに髪を引っ張られて無理やり連れてこられる。
なのは達は苦笑いを浮かべる。

バーニン(こいつらこんな楽しそうにしてやがる・・・)
アイシー(私達のとこには無かったな~、こういうの)

バーニンとアイシーは、銀時達のやり取りに羨ましく思った。

源外達に案内され、銀時とネプテューヌとリリスは外に出た。
そして大きな風呂敷を見つけた。

銀時「爺さん、もしかして」
源外「そのまさかだ。それ！」

源外は風呂敷をめくった。
そこにあったのはネプテューヌが乗って帰ったガジェットウォーリアーとよく似た機械だった。

ネプテューヌ「あ！、これって」
スカリエッティ「ネプテューヌ殿が持って帰ったこのガジェットを我々が改造したのだ」
イストワール「いろいろと改良してさらに操縦しやすくなりました（＾ロ＾）／」
源外「ワシらが改良したこいつを総じてガーディアンと呼ぶぜ？」

青色だったボディが堅そうな黒に変わり、背中には飛行が可能な羽が付いている。
ウォーリアー改め、ガーディアンが完成した。

ネプテューヌ「かっこいい～～～～！！」
リリス「ホントだ！凄いかっこいい！」

ネプテューヌとリリスは目を輝かせる。
しかし対して銀時はつまんなそうな顔をする。

銀時「んだよそれ、どうせくだらないポンコｔ「バキッ！」ゴフォアッ！」

銀時はネプテューヌとリリスに殴られた。

ネプテューヌ「それじゃあ乗ってみてもいい？」

源外「いいぞ」

源外から許可をもらい、ネプテューヌとリリスはガーディアンに乗り込む。

そして機動スイッチを押して、ガーディアンを起動させる。

ガーディアンが立ち上がる。

ネプテューヌ「おお～！すご～い！」

ネプテューヌはガーディアンの操縦に興奮する。

源外「どうじゃ？ワシ等の機械（からくり）は？」

ネプテューヌ「もう最高だよお爺さん！」

ネプテューヌは満足したようだ。

ネプテューヌ「あ、銀さん起こさなきゃ」

ネプテューヌはそう言って、ガーディアンの右手をショットモードに変えて銀時に向ける。

銀時「あいつつ…一体なんだか……ウオオオオオオオオオおおおおお！！！！！」

銀時は目を覚まし、銃口が向けられてる事に驚いてバックする。

ネプテューヌ「あ、起きた銀さん？」
銀時「おかげさんで眠気と共に飛んでいったよ！！つーかあぶねぇだろっ！！」

銃口を向けられたことに怒鳴る銀時。
次の瞬間、周りの街の電気が消えて言った。もちろん六課も。

銀時「あれ？」
ネプテューヌ「うわ暗っ！」
スカリエッティ「こ、これは一体？」

銀時とネプテューヌ達は突然の停電に不自然に感じる中・・・・突如、モニターが現れた。
そのモニターにはビームソードを持っているシグマに、後ろには数多くの『鬼兵隊』作のガジェットとシグマ作の魔道兵士が存在する。

シグマ≪ミッドチルダに住む者たちよ、聞くが良い。これよりミッドチルダは我々『シグマーズ』の手によって支配される≫

それはシグマの宣誓布告であった。
突如の停電に驚きだし、さらにはテレビやモニターにシグマが映し出されたことで驚いたのは銀時だけじゃない。
機動六課に待機していたフェイト達もである。

シグマ≪君等に残された手段はただ１つ。我々に従って我々と共に生を受けるか、反抗を起こして死を受け入れるか・・・・２つに１つだ≫

忠告の言葉を言い出すシグマ。

シグマ≪この腐りきったミッドチルダは我々の手によって全てを受け止める楽園と化すのである。我はミッドチルダの王に・・・いや神に等しき存在となる！≫

シグマは高々と宣言する。

ネプテューヌ「・・・銀さん、あれ私達に宣戦布告してるよ」
銀時「そうか、なら話は簡単だ。さっさと殴りこみに行くぜ」

銀時は木刀を、ネプテューヌはエックスセイバーを握りしめる。
すると、モニターが映し出されると・・・・そこにはバーニンとアイシーが映し出されている。

バーニン≪おいお前ら！！空に大きなもんが見えるか！？≫

バーニンが慌しい表情で言い出すと，指を刺して言い出す。
指を刺した場所には天空を舞う城らしき超大型空中要塞を中心に数多くの巨大な飛行要塞が空に浮んでいる。
そこから無数のガジェットがこちらに向かってきているのが分かる。

アイシー≪あれはシグマの空中要塞『シグバール』だよ！シグマは無関係な一般人ごとミッドチルダに攻撃しかけて来るよ！≫
バーニン≪お前ら！一応聞いておくがどうする気だ？≫

アイシーとバーニンは銀時達に聞いてみると・・・・・

スカリエッティ「ナンバーズに伝えてくれ、機動六課と共に『シグ

マーズ』の侵入を阻止して全て撃墜せよ！我々はこれから銀時と共に敵の本局に向かう！」
アイシー≪りょ・・・了解　！≫
バーニン≪分かったよ！≫

モニターが消えると、スカリエッティは準備を始める。

スカリエッティ「ウーノはここで機動六課とナンバーズのサポートを頼む！」
ウーノ≪了解しました、ドクター！≫

スカリエッティはウーノに機動六課とナンバーズのサポートを命じる。
彼女はナンバーズでもリーダー格である。実務指揮を執るがその戦闘力は低い。
だが彼女の持つＩＳ『不可触の秘書（フローレス・セクレタリー）』はセンサー類の探知を回避するステルス能力と、知能加速・情報処理能力を向上・チューンさせる能力である。

スカリエッティ「銀時、源外殿、イストワール殿、ネプテューヌ、一刻を争う状況になってきた。ガジェットと戦闘機人は仲間達が何とかしてくれる。その間に我々は敵本陣に突入する」
銀時「だけどどうやって行く？」

スカリエッティは５人と共にウゼルの本拠地に突入しようと考えるが、どうやって行くのか質問する銀時。
そんな銀時に源外が胸を張って言い出す。

源外「安心しろ銀の字。こんなときじゃからこそ、この江戸随一の発明家であるこの俺の出番だろ？スカリエッティ！今こそこいつの

お披露目だ！」
スカリエッティ「もちろんだとも！」
ネプテューヌ「よ～し！それじゃあ逝くよ～～！！」
銀時「ちょっと待てぇぇ！字が違ァァァァァァァァァァウウウウウウウウ・・・」

銀時はネプテューヌのセリフに突っ込みを入れるが、ガーディアンはダッシュでシグマの本拠地、『シグバール』まで飛んでいった。

ＩＢＧＭΣステージ１ｂｙロックマンＸ
（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｓｉｇｍａ　Ｆｏｒｔｒｅｓｓ　１）

一方のフェイト達は大激戦である。
数多くのガジェットと魔道兵士が山のように襲ってきていることが分かっている。
ガジェットは『鬼兵隊』の作り上げた最新兵器であり、
さらに天空からは空中要塞同士が戦っている。
機動六課やナンバーズだけじゃなく、陸士１０８部隊や他の機動部隊（機動四課は除く）、Ｌ級次元航行船『アースラ』を含めた数多くの戦艦も戦っていた。
地では魔導士達が、そして天では戦艦が戦っていた。
もちろん銀魂メンバーもネプテューヌメンバーも一緒である。

それぞれバラバラに分かれて戦い、数多くのガジェットと魔道兵士と戦っていた。

ミッドチルダ・第４起動高層ビル

そこにはいまだ逃げ遅れていた人々が数多く存在する。
人々は怯えて慌てて逃げている。
そんな中，２人の少女が５体のガジェットに教われいく中・・・・

フェイト「はぁあああああああ！」

突如、三日月型の金色の刃が５体のガジェットを切り裂く。
そう、ガジェットを破壊したのは他でもない、フェイトだった。

フェイト「ここは私達に任せて！早く逃げてください！」

フェイトがそう言い出すと、少女は安全なほうに逃げ出す。
そしてフェイトは、ガジェットとの軍勢を睨みつける。

アルフ「うりゃあああああああああああああ！」

アルフも加勢して魔道兵士を次々と破壊する。時には変身して狼となってガジェットを次々と噛み砕いていく。

神楽「ほぉわちゃーーーーーーーーーー！」

神楽は傘を大きく振り回して次々とガジェットを破壊して魔道兵士

をも撃破する。その数は誰よりも多いのである。
機動六課最強の名は伊達ではなかった。

神楽「このミッドチルダは『歌舞伎町の女王』である私がいる限り傷つけさせないアル！」

傘を敵軍勢に向け、神楽が言い放った。
それを無視して恐れず神楽を襲いだす魔道兵士とガジェットだが・・・

エリオ「サンダー・レイジー！！」

エリオは『ストラーダ』を構え、思いっきりサンダー・レイジーを放った。これにより数多くのガジェット達は破壊される。

神楽「エリオ！」

神楽は援護してきたエリオの名を嬉しそうに呼ぶ。

エリオ「神楽さんには指一歩も触れさせはしない！一緒に戦いましょう！」
神楽「追うアル！」

そして神楽とエリオの傘と槍の連携攻撃により、さらに次々と破壊されていく。

月詠「綺麗な薔薇には・・・・」
猿飛「棘があるわよー！」

月詠と猿飛は互いに数多くのクナイを一斉に放って数十体のガジェ

ットを破壊し、接近してくる魔道兵士には月詠の小刀と猿飛の体術が連係して返り討ちにする。

月詠「流石は元お庭番衆。以前に出合ったあの忍びに衰えない素早い動きをする」

月詠は猿飛の強さを、以前に地雷亜の件で助けてくれた全蔵と双璧となる実力であると認める。

猿飛「貴方に褒められても嬉しくないし、どうせだったら銀さんに褒められたいぐらいよ！むしろ、汚されてみたい！」

M的な発言をする猿飛に少し青ざめる月詠。

猿飛「・・・けど今回は貴方とは協力しなくちゃ解決できないようね。あのフェイトって女はまちがいなく私の最大の恋愛敵。それでも始末屋として目の前にいる外道な輩を見過ごす訳には行かない」

猿飛は今回のシグマの起こした悪党な事件を許す訳には行かなかった。

弱き者を苦しめる外道な輩を退治するためなら自らも外道の道を進むのが始末屋。

例えそれが守るものがフェイト達であろうと外道を倒すのが月詠である。

猿飛「弱き者を救う為、自ら外道の道を進むのがこの私、始末屋さっちゃん！」

そう言いながら猿飛はクナイで接近して魔道兵士を破壊し、時には納豆で魔道兵士の顔にぶっ掛けさせて気絶させる。

猿飛「たとえそれが恋愛敵でも、私が汚れて誰かを救えるというなら、喜んでこの手を地に染めるわ！」

そして魔道兵士1体を踏み台として猿飛はクナイをさらに大量に放ってガジェットを破壊する。

月詠「お主のやり方には同感じゃ！わっちも日輪を守る為に女を捨て、修羅の道を選んだ身じゃ！今回のシグマのやり方はわっちも見過ごせぬ！」

外道を進んで民を守る為悪党を始末する猿飛と動揺に、月詠も女を捨てて日輪と吉原を守る番人となった。
月詠も援護してさらにクナイを放って魔道兵士を串刺しにする。

猿飛「貴方とはこう言う事は案外気が合うわね・・・だったら目の前にいる敵は1人も残さず始末しまくるわよ！」

2人の美しき女が共鳴し合うかのようにさらに暴れまくり、次々と敵をなぎ倒していく。

キャロ「フリード！」

キャロは『竜魂召還』で、詠唱と共にフリードリヒをチビ竜から真の姿『白銀の竜（飛竜）』に召喚が召喚される。
そしてフリードは口からブラストフレアを放って次々とガジェットと魔道兵士を破壊していく。

トーレ「たとえ魔道兵士でも！」
ディード「容赦はしない！」

トーレとディードは『インパルスブレード』と赤い光の双剣で、魔道兵士を切り裂いていく。

スバル「やあああああああああああああ！」
ギンガ「はぁあああああああああああああ！」
ノーヴェ「おりゃあああああああああああ！」

スバルとギンガとノーヴェは連係しあって『ウィング・ロード』を放って『マッハキャリバー』と『ブリッツキャリバー』と『ジェットエッジ』で滑り出し、次々とガジェットを破壊していく。
隠れていたところに2人の魔道兵士が奇襲攻撃でフェイト達を攻めようとするが、

ザクリ！

1人の魔道兵士が突如、後ろから何者かに突き刺されてからだが貫通される。
実はその正体は姿を変える変装能力「＞ＲＵＢＹ＜＞ＲＢ＜偽りの仮面＞ＲＴ＜ライアーズ・マスク＞／ＲＵＢＹ＜」で変装していたドゥーエであった。

ドゥーエ「悪いけど、貴方達『カリバン』の思う通りにはさせないわ」

そう言ってドゥーエは血に染まった『ピアッシングネイル』を構え、フェイト達の加勢に向かう。

聖王教会

この教会には数多くの避難民が地下に非難していた。
クアットロ、アギト、カリムは逃げ遅れた避難民を教会に連れて救助している。
クアットロは流石に今回のシグマのやり方が気に食わない為、救助活動を手伝っている。
幻想でスカリエッティ作のガジェットで魔道兵士とガジェットの注意を払ってその隙に避難民を連れて逃げている事が多い。
そして数多くのガジェットが中心となって襲ってきているが・・・・
なのは「ディバイン・バスター！」
なのはが『レイジング・ハート』から桜色の魔導砲を放ち、１０体以上のガジェットを破壊する。
ユーノ「チェーン・バインド！」
そこでユーノが大量の魔力の鎖を放って数多くのガジェットの動きを封じる実はようやく機動六課にタイミングよく戻ってきて、それでなのは達の援護をした。
・・・久しぶりの登場かもしれない。
ヴィータ「まとめてぶちこんでやるぁあああああああああ！」
ヴィータは８つの鉄球を出し、グラーフアイゼンを振って全てを打ち放った。全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。シグナム

と九兵衛は互いに行きピッタリにガジェットを次々と切り倒す。

シグナム「レヴァンティン！」

シグナムは『レヴァンティン』を連結刃形態『シュランゲフォルム』と変形させ、ヘビのような動きで次々と切り倒す。

ティアナ「クロスファイアーシュート！！」

ティアナはクロスミラージュで魔道兵士達を打ち抜いていく。

九兵衛「貴様等の好きにはさせない！」

九兵衛も神速の剣技で次々とガジェットを斬る。
そしてガジェットは左右から大砲を表し、一気にレーザー光線を放つが・・・・

ザフィーラ「そうはさせん！」
シャマル「風の護盾！」

ザフィーラは方向を上げ、地面から光の柱が現れる。シャマルも大量の防壁を展開させる。
２つの壁が全てのレーザー光線を防ぐと・・・・

セッテ「今だ、セッテ、ウェンディ！」
セイン「了解！」
ウェンディ「分かっているッス！」

ガジェットの大群の背後からセイン、ウェンディ、セッテが現れる。
セインのディープダイバーで、地面の中を移動してガジェットの大

群の背後の地面から出たのだ。
セッテが、ガジェットに目掛けて『ブーメランブレード』を放つ。
高速で飛来してくる『ブーメランブレード』が次々とガジェットを一閃して破壊する。
そして『ブーメランブレード』は、セッテのＩＳ『スローターアームズ』で軌道を変えてセッテの元には戻らずにそのまま追撃してガジェットをさらに多く破壊する。
ウェンディは『ライディングボード』の砲身からエネルギー砲を放ち、一気にガジェットは数体も破壊する。

ルーテシア「行って」

ルーテシアがそう一言を言うと、召喚されたガリューは素早い動きで腕から伸びる長大な爪で次々とガジェットを破壊していく。

シャッハ「全てを駆除する！」

シャッハは『ヴィンデルシャフト』を振り回し、次々と撃墜していく。

全てのガジェットの破壊が成功したら、次のガジェットの大群が現れる。
だが・・・・・

新八「ウオリャアアアアア！！！」
アイエフ「せやぁぁぁぁ！！」
コンパ「いくです！！」

新八とアイエフとコンパがガジェット軍をなぎ倒した。

なのは「新八君！アイちゃん！コンパちゃん！」

なのはが驚いて3人を呼ぶ。

新八「僕等もここで活躍しますよ！うおおおおおおおおおおおお！！！」

アイエフ「はいはい、そんなに慌てないの」

コンパ「皆さん命を大事にで行くです！」

なのは「分かった！」

なのは達は再びガジェット達に攻め入れる。

ミッドチルダ・臨海第2空港

空港の外には数多くの魔道兵士が桂、エリザベス、はやて、リィン、近藤、土方、沖田を囲んでいる。

桂「ふ・・・この程度で我々を囲んだつもりか？」

桂は懐に手を忍ばせた。そして『んまい棒』を取り出した。

桂「んまい棒、鎖羅魅（サラミ）！！」

んまい棒を床に投げ、屋上は煙に包まれた。

突然煙に包まれ、魔道兵士達は混乱する。

すると丸い玉のような物が魔道兵士達の前に投げられ、玉に表示されている数字がゼロになった瞬間、

ドカァアアアアアアアアアアアン！！

玉は大爆発を起こし、魔道兵士達は吹き飛んだ。
爆発で煙も消え、そこから桂と近藤が戦闘で斬りかかる。

桂・近藤「オオオオ

放たれる衝撃は斬るだけじゃなく数多くの魔道兵士達を吹飛ばす。

エリザベス『おるぁあああああああああああああああ！』

そうか書かれたプラカードを豪快に剣のように振り回しながら、エリザベスも続くかのように次々と魔道兵士を破壊していく。

後ろからの奇襲も回転蹴りをお見舞いして返り討ちにする。

はやて「リィン、私達も行くで！」

リイン「はい、はやてちゃん！」

リインは、はやての目の前に移動した。

はやて・リイン「ユニゾン・イン！！」

二人の声が重なり、白い光に包まれる。

やがて光が収まり、ユニゾンしたはやてが姿を現した。ユニゾンによって、髪の色が少し薄くなっている。

そしてはやて前に魔方陣が出現する。

はやて「ラグナロク！」

その魔法陣から強大な魔導砲が放たれると、一気に数多くの魔道兵士を倒す。

そしてリィンフォースも反対側から魔法を放つ。

リインフォース「デアボリック・エミッション、闇に、染まれ！」

掲げた手の上に球状の魔力を発生させ、それを一気に巨大化させて範囲内を魔力爆撃する。

その威力はかなり大きく、一気に３０人以上の魔道兵士が破壊された。

ヴァイス「かぁー、旦那方やってくれるぜぇ！っしゃ、俺も行くぞぉ！」

ヴァイスはかなり離れた場所から『ストームレイダー』を打ちまくり、次々と魔道兵士の頭をぶち抜いた。

オットー「哀れな者達だ。せめて安らかに眠ると良い」

オットーはそう言い、『レイストーム』を問答無用に放って次々と魔道兵士を倒しまくる。
その隣ではディエチが『イノーメスカノン』からエネルギーを収束するしている間に１０人以上の魔道兵士が襲い掛かってきた。
オットーが返り討ちにしようとするが・・・

山崎「てやぁあああああああああああああああああああああああああ！！」

突如、山崎が飛びかかって二刀流を炸裂させ、デタラメに振り回すが力が入っていて、襲ってきた全ての魔道兵士達をなぎ払うかの様に吹飛ばす。
両手に持っているのは、右手にミントンラケットを持っていて左手には刀を持っている。

オットー「何でミントンラケット？」

オットーは哀れみにツッコム。
だが今の山崎の強さは土方と沖田に次ぐほどの力を発揮していた。

ディエチ「山崎さん！」

ディエチは山崎に助けられた事で驚きだす。
普段の山崎は戦いに関してはナンバーズよりかなり衰えており、そんなに強くはないと思っていたが・・・・今の山崎の姿は全くの別人に思えた。

山崎「ディエチちゃん・・・・俺はこう見えても頼りがない地味な男だよ・・・・けど、そんな僕でも侍だ」

山崎はミントンラケットと刀を強く握りだす。

山崎「侍は、普段では一般人と変わりはない。でも、大切なものを・・・・ましてや大切な女の為に戦う為ならば・・・・・たとえ地味野朗でも、１００倍以上に強くなれるんじゃぁあああああああああああ！」

そう叫びだすと山崎はミントンラケットと刀を構えて、素早い動きで次々と魔道兵士を吹飛ばす。
本来山崎は一刀流で普段は二刀流は出来ない。だがディエチと言う女と出会い、お互いに一目惚れになった。
それと同時に山崎の中に新たな力が芽生えた。（言うなれば愛の力？）
次々と魔道兵士を倒しまくる。

山崎の魂の叫びを聞いたディエチは少し顔を真っ赤になり、オットーは唖然としていた。

オットー「・・・・なるほど、侍は強しって感じだな・・・・で、

その侍に守られている人が何ボーっとしている？」

オットーにそう言われると、ディエチは我に返ってディエチは『イノーメスカノン』を構えて撃つ。

ディエチ「ターゲットロックオン・・・・発射！」

そして『イノーメスカノン』から巨大なエネルギー砲が放たれた。
その威力はなのはの『エクセリオンバスター』と互角であり、３０体以上の数多くの魔道兵士が吹飛ばされて行く。

ノワール「なかなかやるわねあの子たち。私達も負けてられないわ！」

ブラン「まとめて潰す…」

ベール「踊りましょうか」

ノワール達も桂達に負けておらず、ノワールはショートソードで切り裂き、ブランはハンマーでなぎ倒し、ベールは槍で次々と倒していく。

シグマとの決戦はちかい。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

シャチール「よう！『闇夜の暗殺者』シャチールだぜ？」

銀八「おし、ペンネーム『鳴神ソラ』さんから、『マリオ「ネプテューヌに新しい相棒と家族が出来たな…それで…俺殴りたいから出たい」

ソニック「俺も擬人化してでも行きたいぜ」

まあ…2人共怒りが凄いな…

ルイージ「それにしても…銀さんが（性＋食的な意味で）狙われてるよ；」

フォックス「どうなるのやら…」

スネーク「しかしシグマの奴はどうやって別世界のモンスター達のデータを手に入れたんだ？」

ファルコ「確かに…アパロイドなんてそう簡単に手に入らないよな…」

スネーク「そんな訳でバーニンやアイシーに質問『シグマの奴はど

うやってモンスターのデータを手に入れたんだ？』」

ルイージ「真王さんに質問『ゼロセイバーやエックスセイバーのモチーフはやっぱりゼロとＸですか？』」

クッパ「我輩は答えなくて良いのだと言ったぞ（汗）…それでネプテューヌに質問『家族となったサキュバスをどう言う風に育てるのだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「準備は？」

ソニック「ＯＫ」

…ソニックは無理だと思うぞ；』ズバリお答えしましょう」

バーニン「シグマは異世界へ渡る装置を創り上げて行ったんだ」

アイシー「そしてモンスターの遺伝子を取って製造していたんだよ。あと機械生物とかはそのプログラムを取って造ったんだよ」

真王「２つ目ですが、その通り。『ゼロセイバー』と『エックスセイバー』は『ロックマンＸ』のゼロとエックスをモチーフにしました」

ネプテューヌ「３つ目だけどとりあえず家族の一員みたいにしようかと思うんだ」

銀八「はいでは『鳴神ソラ』さん。廊下に立つ前に２人を押さえて

てください」

シャチール「やり方が気に喰わないみたいだな?次はペンネーム『月光閃火』だ?『よぉ…月光閃火だ。

しかし…まさかの“サキュバス”とはな…。シグマの野郎…一体何処まで手を出す気なんだ?

輝刃「全くだな…いくら科学者と言えど、生命(いのち)を冒す所業は許されたモノではない…。」

とは言っても、生まれちまったもんは仕方ねぇけどな…どんな過程があれど、生まれた生命(いのち)はその生まれた奴のもんだからな…。あ…とりあえず、まずは俺からだ。

1.シグマに質問だ。お前いろんな分野にヒョイヒョイ手を出してるけど、正直言って『これは手こずった』って分野はあるのか?あったらその時の苦労話をコンパクトに話してくれ。

輝刃「確かに…敵と言えど、そういった話の一つや二つはありそうだな。で、次は俺からだ。」

2.作者に質問だ。4月にスパロボの新作が出るんだが…正直言ってスパロボ好きか?そうだったら、好きなバンプレストオリジナルキャラは誰なんだ?

ああ…そういや新作出るよな…『スパロボZ』の続編の前編が。俺も注目しているタイトルだ。何せ、新参戦作品が豪華だし。

輝刃「というか…『グレンラガン』の名前見た時はビックリしたぜ

…。だって規模がデケェし…（汗）。」

ああ…あの規模のデカさはヤバすぎだろ…（汗）。』１つ目の方は確かマスターはラオシャンロンに挑戦して何とか遺伝子を手に入れた見たいだ？」

真王「２つ目ですが、嫌いです。それどころか興味ありません」

銀八「・・・『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

シャチール「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』だ？『やってくれたなぁ此処のお嬢ちゃんたち
おいらの質問にあんな回答するなんざぁ名指しで喧嘩売られたようなもんだぜぃ

ボーボボ
「あ、作者がドＳモードになった」

ってな訳で今回はもっと凄い質問しちゃうぞぉ！

質問その１

ヒロインズに質問です
この中で「これならマシだな」と思う物は何ですか？

？「Ｔウィルス」
？「ブラーガ」
？「赤い水（屍人化）」
？「ハジケウィルス」

追伸：どれか一つは絶対にお答え下さい
でないとサービスマンを投下します

質問その２

もしも銀時が木刀ではなく鼻毛で戦っていたらそんな銀時に惚れますか？
惚れませんか？』・・・まず言えることは」

ヒロインズ「どっちも嫌だっての！！！」

銀八「待て待て！そんなこといったｒ「もう遅い！！」何！？」

サービスマンが現れた。

サービスマン「では喰らえ！サーーーービｓ「オリャァッ！！」」

キーーーーーーーーーーーーーン！！！！！バタッ！

サービスマンは、ネプテューヌ、ヴィヴィオ、リリスから金的を喰らって倒れた。

ネプテューヌ「もう二度と来ないでね」

サービスマン「・・・・・・・・・」

返事がない。もう屍になったようだ。

シャチール「・・・『ｓｉｂｕｇａｋｉ』、これからはちゃんとし

た質問を来いよな？」

銀八「まぁ…結果オーライだな、うん。次はペンネーム『黒龍』さんから。『黒龍「ネプテューヌがお母さんて、はっきり言って似合わない」

なのは「なんだか、妹とかお姉ちゃんの方が合ってる気がするの」

黒龍「でも、歳とか数千万位いくんだからいいんじゃね？」

なのは「あれ？ネプテューヌちゃん達ってそんなに歳取ってたっけ？」

黒龍「あ、歳だけ考えるなら曾曾曾

ん！どうか安らかにミイラになってください！」

ソラ「いや、さすがにそれは考えすぎじゃないか？」

黒龍「まぁそう言う死に方もありかなって」

ソラ「笑い話にしかならないな」

黒龍「取りあえず質問いきます。

1．ネプテューヌに質問。イリスと戦った時になんでパープルハートにならなかったんですか？

2．リリカル組に質問。戦闘シーンでまったく活躍してないから、ただのギャグ要因に成り下がってますけど大丈夫ですか？

3．銀さんラバーズ（フェイト以外）に質問。ぶっちゃけ、フェイトは『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～白夜叉鎮魂歌～で銀さんと結婚してるから、他の人にチャンスないですよね？

それともし、この質問で報復に来るようなら、特別ゲストの『帝王フリーザ様』、『完全体セル』、『魔人ブー（暴走体）』がお相手をします」

ソラ「よく呼べたな」

黒龍「作者権限フルに使った」』…って『黒龍』さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！なんてこと言ってんだァァァァァァァァァァ！！！！！（超真っ青）」

シャチール「あれ明らかに喧嘩売ってるな？」

真王「不味いな、早くネプテューヌが修羅になる前に止めないと…」

修羅ネプテューヌ「あはははは、もう遅いよ♪」

真王「何っ！？」

修羅ネプテューヌ「あはははは！エンド・オブ・ザ・カオス！」

黒龍に向かって真っ黒な砲撃が出された。

黒龍・帝王フリーザ様・完全体セル・魔人ブー（暴走体）

「ギャアアア

銀八「・・・・・・つ、つつ次行こうか。ペンネーム『黒神』さんからの質問。『質問します。

ベールへ、僕の小説では今『狂乱編』と言う桂を中心としたシリアスが進んでいます。
桂の活躍を見てどう思いますか？』」

ベール「相変わらずですね桂さん♪」

真王「はい、あんなリアクションです。『黒神』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黄色いのなにか』さんからの質問だ。
『ネプテューヌに質問
サキュバスの母親になって後悔とかありませんか？』…で、どうなんだ？」

ネプテューヌ「後悔なんかしないよ。リリスのために精一杯頑張るんだから」

真王「『黄色いのなにか』さん。ネプテューヌを応援してくださいね」

シャチール「次はメーティアにさせようと思ったが、あいつ『私はそんなもの柄じゃない』って言ってほっといたそうだ」

銀八「んだよそりゃ。しゃーねぇ、リリスにさせるか」

真王「それじゃあ次回会いましょう」

第四十一訓：宣戦布告を受けたら準備してかかれ（後書き）

真王「次回もまだまだ戦争じゃ」

リリス「次回『戦いにはＢＧＭが一番』テイクオフ♪」

第四十二訓：戦いにはＢＧＭが一番（前書き）

真王「今回桂達が活躍か？」

リリス「『リリカル銀魂』始まるよ～♪」

第四十二訓：戦いにはＢＧＭが一番

六課と新八たちがそれぞれ戦っている中、銀時、ネプテューヌ、源外、スカリエッティ、イストワール、リリス、ヴィヴィオはと言うと・・・・

源外「どきやがれ、ガラクタ共ぉ！」

源外が荒っぽく言い出すと、何やら飛行物体を運転していて次々とガジェットをひき当て破壊していく。
ネプテューヌ達の乗るガーディアンで、ガジェットと魔道兵士達をなぎ倒していく。
しかも陸戦様としても足にキャタピラーが付いており、魔道兵士達を轢いていく。

スカリエッティ「ははははははははははははは！見たか鬼兵隊よ！君達の技術で作られたガジェットなど、私達のガジェットにかかれば一撃粉砕さ！」
源外「要塞・大砲・キャタピラ・・・・これが男の機械（からくり）じゃあああああああああ！」

愉快そうに笑い出す源外とスカリエッティに対し・・・・

銀時「ジジイ共ォォォォォォォ！男の機械（からくり）は結構だがもうちょっとデリケートな運転できねぇのか！？」
ネプテューヌ「もう少しゆっくり運転してよ！！」
イストワール「源外さん！私まで落とす気ですか！！」
リリス・ヴィヴィオ「キャーーー！♪キャーーーーー！！♪♪」

源外の荒っぽい運転に銀時とネプテューヌとイストワールは落ちそうになっている。
しかしなぜかリリスとヴィヴィオだけは楽しそうにしている。
後なぜリリスとヴィヴィオがいるのかと言うと、勝手に付いて来たのだ。

スカリエッティ「安全な運転で命が助かるなら最初からそうしているさ！でも今回ばかりは一刻も争うのだよ！だから危険を冒してまでやらなきゃ行けない事もあるのさ！」
源外「前にも言ったが機械（からくり）の扱いは喧嘩と同じよ！ナメられたら終めーだ！」

２人がそう言うと前から鬼兵隊作のガジェットが無数に現れるが、ガーディアンの右腕からレーザー光線を放って返り討ちにする。
そして後ろからも現れると・・・
源外「銀の字！少しお前の木刀を改良させてもらった！その木刀の柄を押せェェェェ！」
銀時「おい、まさかまた醤油じゃねぇだろうな！」
源外「良いから押せェェェェ！」
源外に大きく命令され、銀時は「しゃあねぇ！」っと言って立ち上がり、木刀をガジェット達に向けて柄を押すと・・・
銀時「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

ぴゅう！

木刀の先から黒い液体が出る。
銀時はもちろんネプテューヌもイストワール唖然とする。

源外「砂糖醤油が出る」
銀時「やっぱり醤油かい！」

怒鳴ってツッコム銀時は八つ当たりにガジェットを全てなぎ払う。

イストワール「何で醤油ですか！？これただの醤油出る棒といっしょじゃないですか！（＃、ロ、）」

額に青筋を浮かべて怒鳴りだすイストワール。

源外「時間がなかったんだ。それになぁ、銀の字は甘いものが好きだからあえて砂糖醤油にしたんじゃ。改造してやっただけでもありがたく思え」
銀時「ありがたくねーよ！好物を利用された気分で最悪な悪戯だろうがァ！」

源外の改造に銀時が怒鳴る。
そして目の前にはシグマがいる超大型飛行要塞の門の前が見える。
ついに銀時達はシグマのいる超大型飛行要塞の門にたどり着いた。
ガーディアンの右腕についている大砲から砲弾が発射され、門を無理矢理に穴を開ける。
そしてその穴から銀時達は侵入した。要塞内は正に機械で作られたと思わせる雰囲気である。

襲い掛かってきているガジェットもそんなに多くはないため、銀時が木刀でなぎ払い、ネプテューヌがエックスセイバーでなぎ倒す。

源外「ガハハハハハハハハハハハ！かかってきやがれ！雑魚ガジャットなど一毛打順よ！ここはどうやら近道だろう！要塞内は警備

が手薄のようだ！たとえ敵が出てきてもそれほど厄介な相手はいな・・・・」

愉快そうに言い出す源外だが・・・・

ネプテューヌ「おじいちゃぁぁぁぁぁぁぁぁん！？」

ネプテューヌが大きく叫びだすと、後ろから巨大なガジェット・・・と言うより巨大ロボットがいた。ゴリラっぽい体で、その大きさはカラクリ家政婦の参丸七號，通常『ウドちゃん』並である。

ネプテューヌ「どこが近道！？って言うより何なのあれ！？」

青ざめてツッコムネプテューヌに対し、スカリエッティは巨大ロボットを見て驚く。

スカリエッティ「あれは・・・・対戦艦用に以前に私が作ろうとしたが、作るのを中断したはずの『コング・ガジェット』通常『ガレオム』。オーバーSランク級の魔法攻撃をも防げる『ＡＭＦ』を装備されている上にその強さは超大型戦艦をも破壊できる破壊魔神だ」

銀時「ガレオム！？あんたスマ○ラやってたの！？」

源外「まさかとは思うが，あれは『鬼兵隊』が作り上げたガジェット！？・・・まさかここまでガジェット技術が進んでいるとは・・・・」

スカリエッティは『鬼兵隊』のガジェット技術に驚きだす中、『ガレオム』が大暴れする如くに銀時達を襲いだす。

ネプテューヌ「うわあああああああああああああああああ！おじいちゃん何とかしてぇ！」

絶叫して叫びだすネプテューヌ。
そして源外は・・・・・

源外「紫の字！コイツの柄を押せ！」

っと源外はネプテューヌに木刀を手渡す。

ネプテューヌ「ちょ・・・・まさか私のほうも」
源外「安心しろ！お前さんのは醤油が出るのじゃねぇ！もっと面白いものだ！」

その言葉を少し信じてネプテューヌは『ガレオム』に向けて木刀を構えて柄を押す。

ネプテューヌ「ウォオオオオオオオ！」

ぴゅう！

出て来たのは確かに醤油じゃない。何故かグレープジュースであった。

源外「グレープジュースが出る」
イストワール「何でグレープジュースゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！？」

青筋を浮かべて怒鳴りだすイストワール。

源外「だって紫の字って紫のイメージがあっただろう？だからグレープジュースが好きかと思って・・・・」

イストワール「別にネプテューヌさんは好きじゃないです！何の役に立つんですか！」
ネプテューヌ「そうだよ！これじゃあコップ出して飲むとき困るじゃん！」
イストワール「ネプテューヌさんそれ突っ込むところおかしいです！」

銀時達がギャーギャー騒いでいるうちに『ガレオム』が襲い掛かってくる。

源外「スカリエッティ！」
スカリエッティ「承知した！」

スカリエッティはＤＶＤらしき物を取り出してＣＤにセットする。
すると銀時とネプテューヌの後ろからガジェットが現れる。

銀時「おおぉ、コイツはまさか！」

そのガジェットから特殊なレーザー光線を放つと銀時は一瞬思った・・・が・・・・

パン　パッパパパン　パパパッパパカン
パン　パッパパパン　パパパッパパカン
パッパパパ　パパ　パパーカーン
ドゥルルー　ドゥルルー

ドゥルルル　ドゥルルル　ドゥッドゥルルー
ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥルールー

銀時「って、またロッキーかいぃ！！！！」

額に血管を浮かべて怒鳴る銀時に唖然と呆れるイストワール。

ネプテューヌ「ねぇ銀さん。源外さんってこう言う人なの？」
銀時「・・・ああ、江戸随一のカラクリ師だが発明するのは大抵はどうでも良いもんばかりだ。つうかなんでまたロッキー？」

銀時が源外に聞いてみると・・・・

源外「聞いているだけでやる気が出てくるだろ？」
ネプテューヌ「これただの音楽再生機だよ・・・」

ネプテューヌが呆れて言うと・・・・

ガジェット≪フェニス～もんじゃ～！フェニス～もんじゃ～≫
ネプテューヌ「しかもこのガジェットは歌うだけ？うろ覚えじゃん。ヤル気出ないよ」
銀時「なんか腹立つだけで全然戦意昂揚しないんだけど！！」

歌うガジェットにつまらなさそうにツッコむティアナと怒り出す銀時。
そんな間に徐々に『ガレオム』が近づき、そして一気に剛拳を振り下ろそうとする。

ガキィン！！

ネプテューヌ「しつこいよ！エックスセイバー！」
エックスセイバー≪御意！≫

ネプテューヌが受け止め、カートリッジをロードする。
そしてガレオムの上に飛んで、

ネプテューヌ「竜巻破裏剣！！」

上からエックスセイバーをさし、プロペラのようにガレオムごと回って上へあがり、そして下に向かって思いっきり投げる。
ガレオムは叩き付けられ、爆発した。

ネプテューヌ「さ、早くいこ」
銀時「お、おう…」

銀時達はとりあえず先へ進んだ。
ヴィヴィオとリリスは目を輝かせた。

ミッドチルダ　第４起動高層ビル

一方の桂達は鬼神の如くの強さで次々と現れてくる魔道兵士を破壊していく。その敵の数は後わずかであり，このまま行けば全滅であると思ったそんなときであった。

ドォオオオ

ランドルの雰囲気が変わる。そしてランドルから膨大な威圧と魔力を感じた。

ランドル「今のワシ等の関係は敵同士じゃ。もうお主らとの慣れ合いもここまでじゃ！」

叫ぶと同時に地面がひび割れ、コンクリートなどの石礫がランドルの周りに集まる。
そしてその石礫がランドルを覆い始め、両腕と体に大きな岩の爪と岩の鎧を身につけた。

ランドル「問答無用でかかってこい。生半可な覚悟では怪我では済まぬぞ！」

ランドルは中指を動かして挑発する。

桂「・・・その挑戦、甘んじて受けよう！『狂乱の貴公子』桂小太郎、参る！」

桂はランドルの挑戦を受け、ランドルに切りかかる。

ランドル「遅いっ！！」

ランドルは重たそうな鎧を身につけているにもかかわらず、神速級のスピードでかわす。

ランドル「喰らえ！！グランドクエイク！」

ランドルは両腕を合わせ、地面に向かって振り下ろす。
地面に当たった後、とがった石柱が連鎖して桂達に襲いかかった。

桂達はギリギリかわす。

ランドル「まだワシの攻撃はおわっとらんぞ！」

桂「くっ！」

ランドルが飛び出してきて右手を槍のようにとがらせて桂に襲いかかる。

ランドル「どうした！『狂乱の貴公子』の力はその程度か？」

ランドルのラッシュは止まる様子はない。そのとき、

ランドル「むっ！？」

横からバズーカが発射され、ランドルは気付いて身を守る。

沖田「チッ、しくじったか」

発射したのは沖田だ。

ランドル「・・・勝負に横槍を入れるとは」

卑怯なやり方をする沖田に苛立つが、ぺつのとこから魔力を感じた。

はやて「ディアボリックエミッション！！」

リインフォース「ブラッティダガー！」

ランドル「ぬ！」

今度ははやてとリインフォースがランドルに攻撃するが、防がれる。

グリーンハート「これで終わりです」
ランドル「なに！グォッ！！？」

そこに隙をついてグリーンハートが魔力のこもった突きをランドルの腹に一撃を入れ、鎧は砕け、ランドルは吹き飛ばされた。

ランドル「グフッ……見事な一撃じゃ。・・・ところで主らは一体何のために戦うのじゃ？」

不意にランドルがこんなことを言い出した。

はやて「何言ってんねんや、うちらは大切な物を守るために戦うんや！」
近藤「その通りだ！」
土方「守るべきものは守るって俺達の侍魂があるんでな」
桂「刀は敵を切るものではなく、弱き己を切るためにある。そして我々はその魂を守る信念がある」

桂達は答える。

ランドル「信念…魂…か…。成程の…。ならば！」

ランドルは理解した後、魔力がドーンと上がり、空高く飛び上がる。

ランドル「その信念がどれほどのものか！そしてお主らの絆がどれほどか見極めさせてもらうぞ！！」

ランドルは両手を広げ、巨大な魔力の塊を作り、そしてそれは大きな丸い岩となる。

ランドル「メテオプレッシャー！！」

そしてランドルは巨大岩と一緒に落ちてくる。

桂「ブラン殿、ハンマーを貸してくれるか？ベール殿、その槍を」

ブラン「やる」

グリーンハート「…何に使うか知りませんが」

ブランは桂にハンマーを渡してもう一つのハンマーを出し、グリーンハートは指示どおりに槍を構える。

桂「活目せよ！！」

ブラン「これが本当の！！」

ハンマーを構え、グリーンハートは軌道上に槍を放す。

そしてハンマーは槍の柄に当たる。

桂・ブラン「ゲートボールじゃあああああああああああああ！！！！！」

飛ばされた槍はまっすぐ巨大岩に向かう。

槍は巨大岩に接触したが、勢いは止まることなく、巨大岩を貫通し始める。

ランドル「なんじゃとっ！？」

ランドルは巨大岩が貫通されていくことに驚き、そして槍はランドルの体に命中した。

ランドル「ぐあああああああああああああああああ！！！！！

！」

鎧は砕け、巨大岩も砕け散ってガラガラと崩れおちる。

やがて煙がはれるとランドルが倒れていた。

ランドル「・・・ワシが負けたか…」

桂「そうだ、負けたのだ」

桂はランドルにそう言う。

ランドル「・・・いや～、ホントに負けるだ何と思わなかったの♪」

ランドルはなぜか軽い口調で負けを認めた。

これにはやて達はずっこける。

はやて「なんやその余裕っぷり」

桂「・・・まさか本気出してなかったのか？」

ランドル「いやいや、ワシは本気を出した。あれを壊したことは驚いたが、まぁなんにせよ主らの勝ちじゃ」

ランドルは起き上がって言う。

ランドル「それに、ワシが負けたことに向こうも対処をし始めたしの」

桂「！？まさかっ！」

ランドル「そのまさかじゃ。ワシも敵と見なされた」

ランドルと桂達の周りにはガジェットと魔道兵士たちが囲んでいた。

ランドルは立ち上がって桂に言う。

ランドル「お主、…桂と言ったか?この戦いを終わらせるには、まずシグマを倒さねばいかん」
桂「承知している。俺の親友とネプテューヌ殿がそちらに行った」
ランドル「あの紫の子か…」

ランドルはネプテューヌを想像する。

ランドル「・・・なにはともあれ、やつらが決着を付けるまで耐えるぞ!桂小太郎!」
桂「承知!!」

ランドルも戦いに加わって、桂達はガジェット達を破壊しつづけた。

~おまけ~

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!」

リリス「こんにちわ～♪ネプテューヌ母さんの養子の夜魔族のリリスがアシストしま～す♪」

銀八「あ？夜魔族？なんじゃそりゃ？」

真王「相手を誘惑する女性型の魔物です。ディスガイア作法です」

銀八「・・・じゃあ始めるか。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『ついに始まったな

マリオ「そうだな…」

ソニック「ＹＥＳ，銀時には俺達の分もシグマに入れて欲しいぜ」

ルイージ「それにしてもスカリエッティに源さんも凄いよね」

フォックス「そうだな、あの２人の腕が合わされば凄いのが作れそうだしな」

スネーク「それで銀時達は突入だな」

クッパ「しかし…銀八先生のコーナーで我輩達以外の質問は色々とトゲが多い質問があるな；」

ネス「…僕達も気を付けないとああなっちゃうね」

リュカ「（ガクガクブルブル（ ゜Ａ ゜；））」

フォックス「そんな訳で発明家２人に質問『新しい発明をするなら

どう言う発明をする？』」

マリオ「メンバーに質問『次の内、戦うならどれにする？
1．アパロイドマザー（スターフォックスアサルト）
2．ゼルエル（新世紀エヴァンゲリオン）
3．Uキラーザウルス（ウルトラマンメビウス&ウルトラ兄弟）』」

ネス「なのはさん達に質問『リリスを最初に見た時どう思った？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

源外「そりゃまぁスカリエッティと協力して巨大な機械（カラクリ）を作るんだ。たとえばほら、ビームサーベルとシールドとファンネルとか…」

リリス「おじいちゃんガンダム作りたいんだね」

真王「2つ目だけどそりゃ無理でしょ、大きさ的にも（1は除く）。あ、でもネプテューヌならいけるのか？」

なのは「3つ目だけどそれは驚いたね」

フェイト「頭に角が生えてたんだもん」

はやて「あれはシグナムに引けを取らないデカさやったな～（別の意味で）」

シグナム「一瞬見た時焦った」

ヴィータ「あいつすっげー恰好をしてたぞ！！／／／／」

シャマル「あんな露出の高いの一体なんですか！／／／／」

ザフィーラ「私はとりあえず魔物の類だと分かった」

スバル「頭の角生えてたよ！尻尾も生えてたよ！」

ティアナ「人なのかモンスターなのか分からなかったわ」

エリオ「な、何手露出の高い人が…／／／／／」

キャロ「なんか負けた気がします…」

ギンガ「なんですかあんなはしたない恰好は！！／／／／」

リリス「なんか私褒められてる？」

銀八「何処がだよ！！褒められてる要素が全然ねぇよ！！」

リリス「『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってね♪次はペンネーム『月光閃火』さんだよ～♪『よぉ…月光閃火だ。

…修羅ネプティーヌ、少々ゾッとしたぞ…（汗）。しかし…まぁ、それでも俺とは互角にイケそうだな…。

輝刃「…俺は知らんぞ…（汗）。とりあえず、まずは俺からだ。」

1．リリスに質問だ。今現在の銀魂キャラ達に対する好感度一覧を聞かせてくれんか？

ああ…それはちょっと気になるかも…。っていうか…新八おもいっ

きり下位じゃねぇといいな…。次は俺からだ。

2．作者に質問だ。銀魂の原作でやっていたガン○ムネタ…こっちでもやるのか?あとこ○亀ネタも。

輝刃「確かに、銀魂の原作は色んな作品のパロディネタが豊富だからな…。」

というか…銀魂の2期目、4月から放送開始するよな?…何かまたパロディネタやりそうな気が…（汗）。

輝刃「いや…必ずやるだろうな…露骨なの含めて…（汗）。」『好感度?そうだね～。まず銀髪さんは母さんみたいに面白い人だから仲良くなれそうかな?」

銀八「何に対して面白いんだよ…」

リリス「それから眼鏡君はよくわかんないけど私を見るなり顔を赤くしてはなれていったよ。でもなんだかおいしそう…」

銀八「エ゛…新八狙われてる?」

リリス「神楽ちゃんはなんだか私に黒い気を発しているんだけどなんだろ?」

銀八（そりゃきっとお前のボディ自身のせいだと思うが…）

リリス「後あの髪っぽい人なんかアホっぽいから分かんない」

銀八「アホっぽいって…ククク・・・」

リリス「ペンギンさんは遊び相手！」

銀八「おもちゃ扱いかよ…」

リリス「月詠さんだったっけ？恐そうに思ったけど母さんのおかげで優しく接してくれたよ」

銀八「そりゃよかったな」

リリス「あの眼帯の子はなんで私に殺気を出してるのか分かんない」

銀八（そりゃお前の体のせいだ）

リリス「あのゴリラさん……なんだか私の本能が疼き出す…」

銀八「狙われてるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

リリス「あのマヨさんマヨネーズ臭いから嫌い」

銀八「あ～、分かるわかる」

リリス「そのマヨさんをちょっかい出してる人はよくわかんない」

真王「そうですか。パロディは一応適当で」

銀八「オイィィィィィィィ！！！なんで手抜きしてんだよ！！」

真王「パロディ教えたら面白さなくなるじゃん」

リリス「そうだね。『月光閃火』さん。廊下に立って。次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんだよ。『どうも、前回の質問のあとこちらのツッコミ組みに半殺しにされて目が覚めた作者です
これからは少しですがマジメなのも混ぜていくつもりです
では早速

質問
今回仲間になったバーニンとアイシーですが、これから正式に仲間になった場合、他のヒロインズみたいに誰かを好きになったりするんですか？やっぱり年頃の乙女だし
今回は以上です
では』多分なるんじゃない？」

真王「なるだろうね」

銀八「うわスッゲーむかつく。『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に１０年立ってろ」

真王「八つ当たりかい」

リリス「次はペンネーム『黄色いのなにか』さんだよ。『真王さんに質問です。
リリスの名前ってもしかして『ヴァンパイアハンター』の『モリガン』をモデルにしているのですか？』」

真王「違います。『魔界戦記ディスガイア３』の『エンプーサ』をモデルにしています」

リリス「ピンクっぽい髪と服がチャームポイントだよ～」

銀八「服っつーかほとんど水着じゃねぇか！！」

真王「夜魔族はそう言う服装なんだよ」

リリス「それじゃあ『黄色いのなにか』さん。廊下に立ってね♪」

銀八「んじゃ次のアシストはイリスに頼むわ」

リリス「名前一字しか違ってないね。それじゃあまた次回～♪」

第四十二訓：戦いにはＢＧＭが一番（後書き）

真王「次回はイリスとネプテューヌの一騎打ちが始まります！！」

リリス「次回『己の魂は輝くもの』テイクオフ！」

第四十三訓：己の魂は輝くもの（前書き）

真王「ＰＶ１０万とユニーク１万人突破しましたーーー！！！」

ワーーーーーーーーーーーーー！！！！！

ネプテューヌ「すごーーい！！もうそんなにいったの！？」

銀時「すげぇぜ！俺らもう感激だ！！」

新八「読者の皆様！ありがとうございました！！」

真王「盛り上がったところで、今回の話はネプテューヌとイリスの一騎打ち！では『リリカル銀魂』」

全員「始まるよ（ぞ）（っす）（ぜ）！！」

第四十三訓：己の魂は輝くもの

シグマーズ空中要塞・バトルコロシアム

そこは，巨大な闘技場コロシアム。
全て石で作られているため，まるで古代の遺物のような雰囲気を出している。
そこに1人，『ゼロセイバー』を地面に突き刺し，柄の先に両手を乗せているイリスがいた。

シグマ≪どうやら，白夜叉がここに来るそうだ。奴は最重要素材として捕獲しろ。場合によれば殺しても構わん≫
イリス「・・・・了解、マスター」

パスを通じてシグマの命を従うイリス。
白夜叉ごと銀時の強さはイリスは分かっていた。
銀時の怒りの一撃を受けた時に伝わってきた鬼神の如くの闘志。あれは間違いなくわずかだが自分をも上回る潜在能力の塊である。
銀時の対策を考えている中，目の前にある巨大な門から何かとてつもない轟音を感じ取る。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

門が大爆発して，巨大な穴が開く。
そしてそこから大きなロボット、ネプテューヌ達の乗っているガジェットガーディアンだった。

イリス「やっと来ましたか…」
ネプテューヌ「あ、イリス！」

ネプテューヌはイリスに気付き、飛び降りる。

イリス「まさかあなたもここに来るとは思いもよりませんでした」
ネプテューヌ「私もイリスがここにいるだなんて思わなかったよ。普通参謀クラスがいるはずなんだけど…」

ネプテューヌは周りを見渡しながら言う。

イリス「ファルコリアは別のところへ向かいました。まぁどちらにしろ、今のあなたでは私に勝てません」
ネプテューヌ「・・・・・・・・・」

ネプテューヌはイリスの話を聞いて無言になる。

リリス「あの人だれ？」
ヴィヴィオ「ねぇパパ、あの人だれなの？」

リリスとヴィヴィオが銀時に聞いてきた。

銀時「あいつはイリスって言うんだ」

銀時はとりあえず言った。

リリス「・・・・・・・・・」

リリスはイリスを見る。

リリス「・・・ッ！？」

するとリリスに頭痛が走った。
そして、荒れた荒野に立つサキュバスの映像が過ぎった。

リリス（・・・今の…私の記憶？）

今の映像がリリスの記憶なのか分からない。
リリスは無かったことにした。

ネプテューヌ「・・・ずいぶんと余裕ぶってるねイリスさん。でもそう言う人には最終的にやられちゃうけど？」
イリス「私は負けることなどありえません。しかし、白夜叉と戦えば少し苦戦しがちですが…」
ネプテューヌ「銀さん強いからね。でもね…」

ネプテューヌはパープルハートへと変身する。

パープルハート「私の方も断然強いわよ」

パープルハートは宣言する。
イリスはパープルハートを警戒する。
イリスはパープルハートから何かすごい気を感じ取る。坂田銀時と同じような・・・白夜叉の気配がするのだ。

銀時「おいネプテューヌ」
パープルハート「手を出さないで銀時。この子は私が相手をするから。よね？エックスセイバー」
エックスセイバー≪仰せのままに≫

パープルハートはエックスセイバーを起動モードにする。
イリスはエックスセイバーを見て驚く。

イリス「『ゼロセイバー』と形状が同じ……あなたそれを何処で？」

パープルハート「間違った世界を正してほしいって人が遺した遺産よ」

パープルハートは答える。

イリス「・・・どんなものであろうと、私はあなたに負けない！ハアアアアアアアアアアア！！！」

イリスはパープルハートに飛びかかってくる。
しかしパープルハートはなぜか目を瞑った。

イリス「敵を前にして目をつぶるとはあなたは馬鹿ですか？」

イリスは問答無用で攻撃する。

スカッ

しかしパープルハートは目を瞑ったままイリスの攻撃を避けた。
イリスはかわされたことに驚く。

イリス「ハァアアアアアアアアアアアア！！！」

イリスはパープルハートにゼロセイバーをふるうが、パープルハートの持つエックスセイバーに防がれる。

パープルハート「今度はこっちの番よ」

パープルハートはそう言った瞬間、消えた。

イリス「!?一体どk「ズドッ!!」グアァッ!!」

イリスは消えたパープルハートを探そうとしたら吹き飛ばされた。
パープルハートは見えないほどの神速で、イリスをエックスセイバーの峰でうち飛ばしたのだ。

パープルハート「本気で来なさい、あなたのお遊びに付き合う暇はないの」

パープルハートはイリスを挑発する。
彼女は完全に本気モードである。

イリス「成程、確かに凄い力を持っているようね。なら…」

すると、イリスから膨大な魔力を感じ取った。
今までリミッターをかけていたらしい。

イリス「わたしの全力であなたを落とします」
パープルハート「・・・やってみなさい」
イリス「では、ゼロセイバー、カートリッジロード」
ゼロセイバー≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ!!≫

ガシャン!

ゼロセイバーにカートリッジがロードされる。
そしてイリスの足元に魔方陣が展開し、ゼロセイバーに炎が纏われ

る。

イリス「烈火天衝！」

イリスの魔法剣技が炸裂する。
三日月形の炎の刃は真っ直ぐパープルハートに向かっていく。
しかしパープルハートは避けようとせず、そのままエックスセイバーを構えて、

パープルハート「セエェイイッ！！！」

エックスセイバーを振り下ろして炎の刃をたたき切った。

イリス「なっ！？」

さすがのイリスも、炎の刃をたたき切ったことに驚く。

パープルハート「今度はこっちの番よ！」

パープルハートはそう言うとすぐに消えた。

イリス（ど、どこへ・・・・・・・・・！右！）

イリスは気配を感じて右に向くと、パープルハートがエックスセイバーを構えて振り下ろそうとしているのが見えた。

ガキィンッ！！！

イリス「ぐぅぅぅ！」

イリスはゼロセイバーで防ぐが、パープルハートの重い一撃に後退させられる。

イリス（なんて重い一撃…あのデバイスのせいなの？）

イリスはエックスセイバーを見ようとしたら、いきなりパープルハートが来た。

イリス「っ！！？ぐぅ！！」

いきなり来たパープルハートに驚くがとっさに防ぐ。
パープルハートは防がれているのも関わらず強いラッシュを繰り出す。
その一撃一撃には、まるで大きなダイヤモンドをぶつけてきているようだ。

イリス「くっこの！！」

イリスは負けじとゼロセイバーを振うが、神速でかわされ、後ろからまた峰でうち飛ばされる。

イリス「きゃあっ！！」

イリスは飛ばされるも何とか持ちこたえる。
しかしパープルハートはそれを許すわけもなく、重い一撃を与える。

イリス「くっ……ちっ！」

イリスはパープルハートから離れる。

イリス「少々侮っていたみたいです。ゼロセイバー、カートリッジロード！」

ガシャン！×３

カートリッジを3回ロードする。
すると、纏う炎が先ほどよりも強くなっている。

パープルハート「エックスセイバー、カートリッジロード」
エックスセイバー≪ＡＬＬ　ＲＩＧＨＴ！！≫

ガシャン！×３

パープルハートもカートリッジを3回ロードする。
足元に紫の魔方陣が展開し、エックスセイバーから紫色のオーラが出ている。

イリス「何を出そうが、この攻撃はかわせまい！烈火一閃！！」

イリスはシグナムとは違う一閃攻撃『烈火一閃』を放つ。

パープルハート「かわすのが駄目なら」

パープルハートは紫のオーラを放つエックスセイバーを後ろに回して、

パープルハート「その技を壊すのよ。ギガスラッシュ！！」

一回転して大きく振る。
その時エックスセイバーから紫の大きな刃が出てきて、イリスに向

かっていく。
そして烈火一閃とギガスラッシュが接触した後、どんどんギガスラッシュが押していき、

イリス「きゃあああああああああああああああああ！！！！」

イリスは壁まで吹き飛ばされた。

源外「なかなかやりおるな紫の字」
スカリエッティ「彼女は…多分ＳＳＳ級以上の実力かと思えるな」

スカリエッティと源外はパープルハートとイリスの戦いを見て驚いている。
源外も圧倒されるほどの戦いは、入り込んだら巻き込まれて唯じゃ起きないと思わせる。
スカリエッティも２人の強さは戦闘機人どころがゾーマをも瞬殺出来るほどに達成していると考える。
２人がそう考える中、銀時はこの戦いを見て・・・

銀時「…似ていやがるな……あの２人の戦いは」

銀時は確信したかのように何かを言い出す。

リリス「え、似ているって何がなの？」
銀時「あの２人の戦いを見て思いだしきまった。１０年前、なのはの世界で全てのジュエルシードを賭けて戦い抜いたフェイトとなのはの姿を」

ヴィヴィオ「なのはママとフェイトママの？」

『ジュエルシード事件』でフェイトとなのはは、海鳴臨海公園で互いの信じる思いをぶつけ合い戦った。

パープルハートとイリスの決闘はまさに１０年前のフェイトとなのはの決闘そのものであった。

２人の戦いを見て銀時の頭の中には１０年前の２人の少女の決闘を思い出す。

イリス「……こんな……ことが…」

一度は倒したネプテューヌにここまで苦戦させられている事に戸惑っているイリス。

イリス（いくらデバイスでパワーアップしたとは言え、私は白夜叉のＤＮＡを受け継ぎ、白夜叉の力を最大限にまで出し切っているはず。それなのに、彼女のこの強さ……白夜叉に匹敵するだと？）

パープルハートの底知れない強さに戸惑い始めるイリス。

一体彼女のこの強さはなんなのか理解できないが……１つ分かった事があった。

イリス（殺らなければ…殺られる！）

地面に突き刺した『ゼロセイバー』を構える。

イリス「ゼロセイバー、カートリッジロード！」

ゼロセイバー≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫

ガシュン×9

イリスはカートリッジを9発ロードすると、『ゼロセイバー』の刀身から、真紅の炎が大きく溢れ出る。
とても異常なまでと言えるほどに炎が凄まじい勢いで燃え上がっている。

ヴィヴィオ「カートリッジを9発?」

カートリッジを9発ロードしたイリスを見ると、銀時はある事を思い出す。
それはイリスの最強の魔法を炸裂させる条件である事を。
イリスからあふれ出す強大な魔力にスカリエッティはあり得ないと驚く。

スカリエッティ「この魔力は……SS……いやSSS級に達成する!」

それは機動六課の隊長であるフェイト、なのは、はやてでさえも届かない魔力数値である。
それはつまりなのはの『スターライト・ブレイカー』を上回る威力を起こる魔法を放つ合図でもあった。

銀時は助太刀をしなければと下りようとするが、イリスの究極魔法の前に臆しないパープルハートを見てここは手出しはしない事を決断する。

リリス「母さんなんだか全然恐れてない」
銀時「わかるのか?」

銀時が聞くと、リリスは肯く。

リリス「わかる。母さんは目の前のことを恐れていない。私母さん信じる」

リリスはそう言ってヴィヴィオと一緒にパープルハートを見守る。

一方のパープルハートはイリスがこれから放つ魔法の正体を知っていた。

全てを無にかすかのように焼き尽くすイリスの最強の魔法『ゼロブレイカー』。

その威力はなのはの『スターライト・ブレイカー』をも上回るとんでもない一撃である。

だがそれでもパープルハートは決して臆せず、『エックスセイバー』を前に向けて刀身を抜く構えをする。

イリス「正気ですか、ネプテューヌさん？今から放つ魔法は貴方の最大魔法をも勝る一撃です。それでも貴方は諦めないのですか？」

パープルハート「分かっているわ。その魔法がＳＳＳランクに達成するほどの魔力を込めていても・・・・あなたは私に劣る」

イリス「何故です！以前にも言ったはずです！私の力は『プロジェクトＤＮＡ』により白夜叉のＤＮＡを受け継ぎ、その力は白夜叉と双璧にあたる！いくら貴方でも……」

パープルハート「それは違うわね、イリス」

イリスが言う事をはっきりと断言して言い出すパープルハート。

パープルハート「本当にイリスが銀時と同じぐらい強いなら……すでに私は負けている…けど、イリスのその強さは銀時そのものじゃない。ただの偽りの強さ」

パープルハートの言う事にイリスは少し驚いた表情をする。

パープルハート「イリスが『プロジェクトＤＮＡ』で銀時の力を得ても、ゾーマをも倒せる力を得ても……それはイリス、あなた自身の力ではない！」

パープルハートの言葉を聞いて、イリスは顔をしかめた。

イリス「何をたわげた事を……それで私の力を偽りの強さだと言うのか？」

鋭い目つきでイリスはパープルハートに言い出す。

パープルハート「本当に銀時の意志を受け継ぐのは、剣術でも強さでもない。……誇り高い侍の魂」

それは、パープルハートが銀時の強さを分かっているからこそ言える事である。

パープルハート「切るものは敵ではなく弱き己、そして守るのは己ではなく己の魂…」

パープルハートはエックスセイバーを横に構える。

パープルハート「あなたのような銀時の血に頼る馬鹿如きに私は負けない！」

そう言うパープルハートの目には獲物を狙う獣の目をしていた。
イリスはその目を見て驚いた。
そう、まるで坂田銀時のような白夜叉の目をしていた。

イリス「・・・ならば，その魂ごと倒すまで！」

すると『ゼロセイバー』の刀身を包む真紅の炎がさらに巨大に大きくなる。
それは以前にネプテューヌに放った『ゼロブレイカー』をもはるかに上回る程である。

パープルハート「（すごい熱気と魔力ね……でもあの子もしかして……やるしかないわね）エックスセイバー、カートリッジロード！」
エックスセイバー≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！！Ｆｕｌｌ　ｐｏｗｅｒ　ｍｏｄｅ！！≫

ガシャン×１０

するとあろうことか、パープルハートは7発のカートリッジをロードしただけでなく鞘からも3発のカートリッジをロードした。
するとパープルハートの足元から紫に輝きだす魔法陣がいつもの３倍は大きく浮かび上がる。
だがカートリッジを多くロードする事は、それほど強大な魔法を発動することだが負担が異常なまでにかかる。
イリスは臆せずに、

イリス「我が究極の一撃を受けてみろ！」

竜王の如くの気迫で叫びだし、『ゼロセイバー』を大きく構えだし、

イリス「ゼロブレイカー！！！！」

そのまま大きく振るう。

全てを焼き尽くすかのような業火が包まれた超極大な紅き閃光が放たれる。

銀時「ネプテューヌ！！魔法ごとぶった斬れぇー！！！！」

銀時がありったけの大声で叫びだすと……

パープルハート（……銀時）

銀時の声が聞こえたかのように銀時を思い込む。

そして眼を瞑ってゆっくりと『エックスセイバー』の柄を握りだす。

そして、エックスセイバーをあげて、

パープルハート「エックスカリバー！！！」

信じられない事に超極大な紅き閃光が巨大な紫の閃光により一刀両断される。

イリス「馬鹿な！」

あり得ない光景にイリスは信じられないと驚きだす。
そしてその閃光はイリスに向かってきた。

イリス「ぐぅううううううううううううううううううう！！！！！！」

イリスはゼロセイバーで防ぐが、パープルハートの放ったエックスカリバーが断然パワーが強いため、壁まで後退させられる。

イリス「ぐぅあああああああああああああああああああ！！！！！！」

壁まで飛ばされたイリスは耐え切れず、直撃を受けてしまう。
しかしＤＮＡのおかげなのか、なんとか立ち上がる。

イリス「ぐ・・・・・・うう・・・」

しかし完全に立てるのがやっとな感じである。
するとパープルハートが砂塵から迫ってきた。
イリスはとっさに身構えるが、パープルハートの目を見た。
敵（えもの）を狙う夜叉（しゅら）の目を。

イリス「っ！！！！！？？？！！？」

イリスは見た瞬間全身に恐怖が走った。
幻想なのか、白夜叉にも引けを取らない獣。否、阿修羅（おに）がそこにいた。

イリス（こ…殺される…！！！）

修羅の目に睨まれたイリスは恐怖に支配され、動けない。
修羅の目をしたパープルハートがした行動は、

パープルハート「イリスーーーーーーー！！！！」

大きくイリスに叫び、右手を握って魔力を溜めて、

パープルハート「歯ぁ、食い縛れぇエエエエエエエエエエエエ！！！！！」

魔力の籠もったパンチをイリスの顔面に当ててぶっ飛ばした。

イリス「ぐあああああああああああああああああああ！！！！」

殴られたイリスは壁までぶっ飛ばされた。
そして殴ったパープルハートは只その場を突っ立っている。

スカリエッティ「……なんて技だ……完全にＳＳＳは達成している」
源外「ああ、正直ワシも驚いた」

スカリエッティと源外はパープルハートの『エックスカリバー』に感心すると、ヴィヴィオとリリスは余りにもデタラメ的な強さに黙り込んでお驚き出す。
銀時はそれ以上にパープルハートのが勝った事に安心する。
そして『ガジェット・ガーディアン』はゆっくりと着地すると、パープルハートは銀時達に気づく。

パープルハート「……銀時……」

パープルハートは「本当に良く戦ったなぁ…自分の信じた強さで本当に勝っちまたんだ……胸を張って誇っても良い」

銀時の言葉に安心そうに少し笑うパープルハート。
その光景に微笑む源外とスカリエッティ。

イリス「う……うう……」

突如、イリスが苦しそうに声を出す。
それに気づいた銀時とヴィヴィオとリリスが臨時体勢を構えるが、

パープルハート「もう良いわ……銀時……彼女はもう戦えないわ」

パープルハートがそう言うと3人はパープルハートの方を振り向く。
するとパープルハートはイリスに近づく。
そんな近づいてくるパープルハートにイリスは、

イリス「……どうやら……私の完全なる敗北ですね……」

パープルハートに敗北したのを受け入れたようである。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

イリス「では今回、私がアシストします」

銀八「んじゃ始めるか。ペンネーム『鳴神ソラ』さんから。『マリオ「張り切ってるなスカリエッティに源外博士」

ルイージ「と言うか…ガレオム出て来てるし；」

フォックス「そしてジュースや醤油が出るのはデフォだな…；」

ネス「それで外では桂さん達がランドルと戦って勝利！」

リュカ「そこにシグマのガジェットの大群が！」

クッパ「とことん卑劣なのだ！…銀時に質問『科学者2人にどうせならこう言うのを作ってくれと言うのはあるか？』」

フォックス「バーニンやアイシーに質問『何でランドルはあの喋り方なんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』ズバリお答えしましょう」

銀時「あいつらに作らせるってのはあんま信用できんが、どうせな

ら『パフェ製造機』を作ってくれ」

銀八「俺もそう思う。次だ」

バーニン「しらねぇよ。もとからあのしゃべり方だよ」

アイシー「なんか年寄りっぽかったけどランドルに聞いたら『さぁ分からん』だって」

イリス「ワシ口調の魔物の遺伝子でも組み込まれたのかしら?」

銀八「知らんのかよ。んじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

イリス「ではペンネーム『月光閃火』からの質問です。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…源外の爺さんとスカリエッティ、どんどんカオスの深みに填まっていってるような…（汗）。

輝刃「…多分、おもいっきり填まっているだろうな…。と…まずは俺から質問だ。」

1．作者に質問だ。もし鴨太郎が生き返ってミッドチルダに辿り着くとしよう…その時にデバイスを持っていたら、やはり中の人関連のネタを放り込むか?例えば、セットアップするとデモンベインのデザインそのまんまのバリアジャケットになったりとか…。

…何だろう…作者だったら無茶を通してでもやりそう…（汗）。次は俺からだ。

2．源外の爺さんに質問…っつーか提案だ。どうせミッドチルダに来たんだしデバイスの技術と知識吸収して、オリジナルのデバイス作ってみたらどうだ？もしかしたら人気出て親しまれるかもしれんぞ？

輝刃「…いや、あの爺さんの事だ…ロクなもんしか作んねぇだろ…（汗）。」『・・・なんですかこれ？」

イリスは質問の内容に困惑する。

真王「まぁもしそいつを復活させたら……あとは知らん」

イリス「ぶっちゃけましたね」

源外「そうだな、ワシのオリジナルはビームサーベルとかプラズマ砲とかだな」

イリス「それってガンダムですか？」

銀八「・・・『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

イリス「いまいち納得しかねますが、質問コーナーはこれで終わりです」

真王「今回は短いな…。そして次回のアシストはＶＩＶＩにします」

銀八「おいそいつ敵キャラだろ！？」

真王「成り行きです。ではまた」

第四十三訓：己の魂は輝くもの（後書き）

真王「さて次回はシグマとの戦いが近くなったよ！・・・後シグマと直接じゃないですが…」

ＶＩＶＩ「フン…次回『怒り出した人は凄い力を発揮する』テイクオフだ」

第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する（前書き）

真王「自動車教習で仮免許の試験合格しました」

ネプテューヌ「つぎは第二段階だっけ？」

真王「はい。リリカル銀魂始めますよ」

第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する

激戦のゆえに敗北したイリスは体中から血が溢れていて立ち上がる力はない。
１m先にある地面に突き刺さっているイリスの愛剣『ゼロセイバー』を見つめ、パープルハートに言い出す。

イリス「本当に守りたいもの……その為だけに貴方はこれほどまでに強くなったんですね……」

敗北によって理解したパープルハートのこの強さ。
自分の大切なものを守れる為ならどんな相手であろうと打ち勝つ強い心。
銀時とパープルハートにはあり、イリスにはなかった強さ。

イリス「貴方の言う通り……私のこの力は白夜叉の力を真似した偽りの力……どんなに強くなろうとも……消して私は貴方と白夜叉には敵わない……今ようやく気づきました」

パープルハートの言う事がもっともであったと理解したイリスは右手を強く握り締め、己の心の弱さに悔やみだす。
それは人造生命体としてでもないイリス自信の感情である。

パープルハート「そう…あなたは銀さんの力を持っても勝つことができない。でももう一つあなたには私に勝てない理由があるわ」

パープルハートはイリスが勝てないもう一つの理由があるという。

パープルハート「・・・あなた私を殺すのを躊躇っていたでしょ？」

イリス「っ！！？」

イリスは驚く。
パープルハートを殺すのを躊躇っていた？なぜ？
イリスはなぜなのか考えていると、

パープルハート「答えはそう、初めて会った時のアレのおかげで自分の良心が出来たのよ」
イリス「！！」

イリスは思い出す。
初めてネプテューヌと出会ったあの日、公園でタイヤキをくれた時の嬉しさで、いつの間にか良心が出来てしまったのだ。
目的のために敵を殺すことをし続けてきたイリスに、やさしさと良心を与えてくれた彼女（ネプテューヌ）を殺すことを躊躇った。
それどころか殺したくないと自分の心が叫んでいた。

イリス「・・・初めて知りました。私にも…人間らしさがあるんですね…」
パープルハート「・・・生まれは違っても、イリスもあの人たちも人と言う生き物なのよ」

パープルハートはそう言うと、イリスは泣く。
自分にも人間らしい一面があるんだと、そう思って涙を流した。
そんなときであった。

銀時・パープルハート「！？」

銀時とパープルハートが何かを感じて、後ろを振り向く。
そしてパープルハートは……

パープルハート「イリス！」
イリス「！！」

パープルハートはイリスを前に押すと、突如後ろからエネルギー弾がパープルハートに直撃する。

銀時「ネプテューヌー！！」
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！！」
リリス「母さん！！」

銀時とヴィヴィオとリリスは思わず叫びだす。
そして『エックスセイバー』は銀時の目の前に落ちてくる。

？？？「これは驚いた。まさか私の最高傑作がやられるとは……これが彼女の力と言う訳か」
？？？「俺も少しは驚いたがな」

聞き覚えのある声に銀時とスカリエッティは声が聞こえた方を向く。
そこにはシグマとさっき放たれたエネルギー弾によって大きな穴をあけたＶＩＶＩがいた。

銀時「シグマ…」
シグマ「またあったな白夜叉君」

銀時はシグマを見て殺気を出すが、シグマは平然としている。

シグマ「まさか最高傑作であるイリスがその小娘…いや、ネプテューヌに破られるとは思いもよらなかったが、だが逆に都合がいい！
彼女と白夜叉の遺伝子を使って私の『プロジェクトＲ（レブリロイド）』を築きあげ

るに相応しい！！」
スカリエッティ「『プロジェクトR（レプリロイド）』だと！？」
『プロジェクトR（レプリロイド）』と言う単語に驚くスカリエッティ。
シグマ「そうだ、レプリロイドとは戦闘機人のように半人半機械の存在だ。人間よりも強く、我が駒となるための存在。人間なんぞもはや不要。我が手足となり、真なる史上最強の部隊を築きあげるために、そして世界は私の自由自在になるのさ！あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」
この世から人間を消し去り、己の世界を創り上げる。
それこそがシグマの最大の目的である。
イリスはシグマを今見ると、苦しそうな表情をする。
銀時「それはつまりそいつ等を道具のように使うってことか」
殺意の籠もった眼つきでシグマを睨む銀時。
シグマ「何とでも言うと良い。とりあえずイリスは用済みだ。そいつは回収させてもらおう」
シグマがそう言うと、銀時はパープルハートのほうを振り向く。
そこには1体のガジェットが気を失っているパープルハートを抱えている。
そのガジェットはシグマの前に近づく。
イリス「ネプテューヌさん！」
銀時「テメェ！ネプテューヌをどうするつもりだ！」

イリスはパープルハートの名を言いだすと、銀時は怒鳴りだしてシグマに言いだす。

シグマ「もちろん彼女にも『プロジェクトＤＮＡ』を受けさせてもらうのさ。銀時君、君の血を利用してね。最上階にまで待っている。そこで君1人で来ると良い。はーっはっはっはっはっはっはっはっは！」

すると、シグマはパープルハートとガジェットと共にテレポートしてこの場から消える。
おそらくは最上階で銀時を待ち伏せするのであろう。

そしていつの間にか回りから数多くのガジェットと魔道兵士が囲んで来た。
その数はかなり多くて対抗できるかどうか分からない。
だがどうしてパープルハートを回収してイリスを回収しなかったのかは不思議に考える中……イリスが銀時に言い出す。

イリス「白夜叉……いえ、銀時……マスターはおそらく私の代わりにネプテューヌさんを新たな『シグマーズ』の忠誠なる戦闘員にさせるつもりです。『プロジェクトＤＮＡ』を受けずにあれだけの力をもっているんです。マスターは、そのネプテューヌさんに貴方のＤＮＡを受けさせたらどれだけ強くなれるかを興味を持ち始めたんでしょう」

それを聞いて銀時は眼を大きく開いて驚きだす。
それと同時に何かの感情が表す。

源外「なるほど……そうなってしまえば取り返しの付かない事になってしまう。シグマは己の興味のある者のためならばどんな犠牲を

払ってでもやるつもりか」

源外がシグマがそう言う男であると言い出すと……

銀時「ネプテューヌを取り戻し……そしてシグマの計画を止める方法を教えてやろうか？」

銀時がその問題解決法を言い出す。

銀時「シグマをぶっ殺すんだよ」

ヴィヴィオ「パ……パパ？」

突如雰囲気が思いっきり変わりだした銀時を見てヴィヴィオが一瞬だが恐怖を感じた。

ヴィヴィオだけでなく、スカリエッティやイリスも一緒である。

対してリリスは銀時を恐怖しなかった。

まるでその恐怖を体験しているかのような感じに。

ＶＩＶＩ「おしゃべりをする暇があるか？行け！」

そして数多くのガジェットと魔道兵士が武器を構えて一斉に銀時達を襲いだすと。

ドゴォォォ

銀時「爺さん、俺はこいつをネプテューヌに返してやらなきゃいけねぇ。……後、こいつ等の始末を頼んでも良いか？」

銀時が振り向かずに頼みごとをすると、イリスは『ゼロセイバー』を抜き出して構える。

イリス「承知しました。……できることなら私も助太刀する所ですが、今の私では貴方の力にはなれません。ですから……ネプテューヌさんを……彼女を助けてください」

力になれないことで悔やむイリスは銀時にパープルハートの救出を託すと、銀時は「ああ」っと一言を言い出す。

ヴィヴィオ「パパ、危険だよ！さっきのアレはとんでもなく危険だよ！さっきも見たでしょ？圧倒的な威りょ……・・・」

ヴィヴィオは止めようとするが、木刀を握っている銀時の右手の震えを見て言うのやめる。

ヴィヴィオ「……パパ？」

いつもと様子が違う銀時にヴィヴィオは額に汗を流す。

銀時「……気にいらねェ」

銀時の中からとてつもない怒りが現れ、それと同時に小さい頃の自分を思い出す。

銀時「全くもって、気にいらねぇ」

剣道の特訓をして、その銀時を見守るかのように剣道の稽古に付き合う父のような存在である松陽の姿を。

銀時「ヤローだけは……死んでも思い通りにはさせねェ」

その眼は戦場に立つ伝説の侍、『白夜叉』その者であった。

ＶＩＶＩ「ほう？あの時の死んだ魚の目から獣の目に変わってるな。それが白夜叉の目か」

ＶＩＶＩは銀時の目を見て言う。

ＶＩＶＩ「あの小娘のとこに行くのは構わんが、先に行きたいなら俺と戦え！白夜叉！」

銀時に指差して言い放つＶＩＶＩ。

銀時「テメェと付き合う暇はねぇよ！！」

銀時はＶＩＶＩなど無視して先へ進もうとするが、

ドォン！！

ＶＩＶＩの放ったエネルギー弾によって阻まれる。

ＩＢＧＭＶＡＶＡ戦ｂｙロックマンＸ

（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ０６：　Ｖｉｌｅ）

ＶＩＶＩ「先に進むなら俺と戦えよ」
銀時「邪魔すんじゃねぇ！！」

銀時はＶＩＶＩに攻撃する。

ＶＩＶＩ「うおっ！？」

ＶＩＶＩは銀時の攻撃をギリギリで避けた。
ＶＩＶＩは銀時から離れる。

ＶＩＶＩ「成程な。その素早い動きと能力と夜叉の目、お前が白夜叉と呼ばれるのは少し納得がいくな」

神速の如くの攻撃を一目で見たＶＩＶＩは納得する。

イリス「・・・負けた私が言うのもなんですが、ＶＩＶＩ！貴方はマスターと世界を手にする気ですか！」

イリスはＶＩＶＩに向かって吠える。
しかしＶＩＶＩはどうでもよさそうな顔をする。

ＶＩＶＩ「知ったこっちゃないね」
イリス「え？」
ＶＩＶＩ「世界がどうなろうが俺の知ったこっちゃない。ただひとつ言えることは俺は世界の頂点に立つことを望んでいるのだ！」

ＶＩＶＩは手を握って言う。

ＶＩＶＩ「シグマは俺を利用しているつもりだろうが俺はあいつの思い通りになるのはごめんだ。俺は俺のやり方でいかせてもらう。だがその前に白夜叉！お前を倒して俺が頂点に立ってやる！」

ＶＩＶＩはそう言って銀時にエネルギー弾を撃ち、銀時はそこから逃げる。

銀時「要はあれか？オメェホントは誰かに認めてもらいたいのか？」
ＶＩＶＩ「そうだ。俺は認めさせるためにあえてシグマの案に乗った」

ＶＩＶＩは銀時に撃ちながら言う。

ＶＩＶＩ「そして俺は世界のジョーカーになるんだ！」

銀時はそこで止まる。

銀時「オメェ…」
ＶＩＶＩ「遊びはここまでだ。お前は俺に倒されるがいい」

ＶＩＶＩは銀時にバズーカ砲を向けて発射させようとした。
が、右足に何か掴まれた。

シャチール「捕まえたー？」
ＶＩＶＩ「な！くそ放せ！」

何とシャチールが地面からＶＩＶＩの右足をがっちりつかんでいた。
ＶＩＶＩは振りほどこうとするが、シャチールは離さない。

シャチール「おい銀髪！サッサとやれ！」
ＶＩＶＩ「！？」

すると銀時が木刀を持ってＶＩＶＩに向かってきた。

銀時「くたばりやがれエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！」
ＶＩＶＩ「グワアアアアアアアアアアア！！！！！」

ＶＩＶＩは一撃を喰らい、ぶっ飛んでいった。

銀時「サンキューな。おかげでさっさとかたづけたぜ。ってかなんで？」
シャチール「しらねぇよ。ファルコリアが『もしＶＩＶＩが何かしでかす前に隙をついて捕まえてくれ。場合によっては破壊してもいい』って言っててそうしただけだよ」

シャチールはそう言う。

イリス（ファルコリア…まさかこのことを読んで・・・？）

イリスは考え込む。

銀時「けどいいのか？オメェも敵と見なされてるぞ？」

銀時の言うことはもっとも。ガジェットと魔道兵士が囲んでいる。

シャチール「別にいい。シグマの計画なんてこれっぽっちも興味な

いし。何よりあのおっさんうざいし」

シャチールの毒舌に銀時は少し苦笑いを浮かべる。

源外「なにはともあれ、先へ進めるようになったんだ。決着（ケリ）つけてこい」

ヴィヴィオ「パパ、頑張って」

リリス「母さん助けて」

スカリエッティ「頼んだぞ」

銀時「おう、任せとけ」

銀時は託されてシグマのいる最上地へ向かう。

そして銀時にぶっ飛ばされ、瀕死の状態のＶＩＶＩは目を覚ます。

ＶＩＶＩ「白・・・夜叉・・・・・半信半疑だったが・・・噂は・・・本当だった・・・んだな…」

身体中に火花を散らし、苦しそうにつぶやく。

イリスはＶＩＶＩに近づく。

イリス「ＶＩＶＩ、あなたは一体何がしたかったの？」

イリスが問うと、ＶＩＶＩは苦しみながらも答える。

ＶＩＶＩ「俺は・・・世界がどうなろうと・・・知ったこっちゃ・・・ない。只俺は・・・認められたかっただけなんだ・・・」

ＶＩＶＩはイリスの手を向ける。

ＶＩＶＩの視界は真っ赤に染まり、どんどんノイズが酷くなってい

く。

ＶＩＶＩ「俺は・・・ＶＩＶＩ・・・・・・世界の・・・頂点に・・・立つ・・・男・・・・・・俺は・・・・・・俺・・・は・・・・・・・・・・」

そのまま倒れ込み、二度と動かなくなった。

イリス「・・・ごめんなさい、もっと早く気づいていればこんなことにはならなかったかもしれません」

イリスは動かなくなったＶＩＶＩを見て悔やむ。

イリス「けれど、私達は立ち止まりません。私は信じます。坂田銀時が、彼女を救ってくれると！」

そう言って、源外達の援護に向かった。

シグマーズ空中要塞・ファイナルプラント

ＩＢＧＭシグマステージ４ｂｙロックマンＸ（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ２７：　Ｓｉｇｍａ　Ｓｔａｇｅ　４　（Ｐａｌａｃｅ　Ｈａｎｇａｒ））

そこはかなり広くて無数の剣型のデバイスがザラリと並んでいて，その中心部には特殊な水色の液体が入っているカプセルの中に入っているパープルハートとそれを眺めるシグマがいた。
シグマは興味深そうにパープルハートを見つめる。

シグマ「にしてもまさか貴様があのイリスに勝る戦闘能力を誇っていたとは……なんとも興味深い事だ」
パープルハート≪……≫
シグマ「まぁ良い……いずれにしろ、もうすぐ白夜叉はここに来る。……やつの死体から数多くのＤＮＡを抜き取り、究極のレプリロイド集団は完成される……貴様を初めとしてな！」

シグマはカプセルの中に入っているパープルハートを見つめて言い出す。
確かに銀時の血とパープルハートの血の中の遺伝子に『プロジェクトＤＮＡ』に受けさせれば一気に最強の戦闘集団が完成する。
それはまるで何百人の銀時がいる戦闘集団と一緒であった。

シグマ「しかも貴様はその『プロジェクトＤＮＡ』を受けている訳でもなく、あのイリスに勝った。貴様は間違いなく世界のイヴになるだろう……ふはははははははははははははははは！」

狂わせた笑いをするシグマ。

パープルハート≪・・・下種な男、何処まで人間を憎めば気がすむの！≫

パープルハートは怒り混ざった声で言う。

シグマ「・・・私が人間を憎いと気付いたな？」
パープルハート≪当たり前よ。魔道機人だの『プロジェクトR（レプリロイド）』だの・・・あなたは彼女達（イリス）を人として見ていない。それだけで人間を憎いと言ってるようなものよ≫
パープルハートはそう言うと、シグマは笑いだす。
シグマ「くははははは！ああその通りさ！人間とは愚か過ぎる生き物だ！人間とは己の欲を満たすためだけの存在にすぎん！」
シグマはさらにと言う。
シグマ「そして人間はよくを満たすためだけに殺戮、暴力、略奪、挙句の果てに戦争を起こすのだ！私はそれを見て人間は不要だと悟った。だから人間をこの世から消し去り、新たな世界を築き上げるために！」
シグマは本当の計画を語る。
この世から人間の存在を消し、レプリロイドという新たな人類を作るために。
パープルハート≪・・・確かに人は傲慢よ。自分の利のために罪を犯す者も沢山・・・≫
パープルハートは悲しそうな顔で言う。
シグマ「話が分かるではないか。ならばなぜその人間達に加担する？人間にも何かあるというのか？」
パープルハート≪あるわ、それは・・・≫

ドカァアアン！！

突然扉が豪快に蹴り飛ばされて開けられる。
現れたのは，１人の侍……いや、攘夷戦争でも伝説の武神として名を高め，世界を救った英雄『白夜叉』ごと坂田銀時であった。

パープルハート≪誇り高き魂を持つ人間（さむらい）がね≫

パープルハートは銀時に対して言う。
だが、様子がおかしく感じる。
シグマには分かっていない様だが、銀時からは静かな怒りを感じとる。

シグマ「良くぞここまで来た……ワザワザ私に殺される為だけに来た事に感謝しよう」
銀時「……」

ご丁寧に挨拶するシグマだが、銀時はただ単に黙り込むだけであった。

シグマ「いや、言い方を変えよう。君の存在には凄く感謝している。あのオーバーSランクであるゾーマをも上回るその身体能力のお陰で私の『プロジェクトＤＮＡ』は成功し、『プロジェクトＲ（レプリロイド）』を立てなくても理想の究極戦闘集団を作れる。そして……その計画の為には君は死んで貰わなければならない」

シグマは笑いを止められず、ゆっくりと『ビームソード』を構えだし……

シグマ「全ては、貴様が死ねば住む事だ！」

その剣先を銀時のほうに向ける。
シグマから見ても銀時はもはや最重要なサンプルしか見えなくなった。

シグマ「……時は来た。これより『プロジェクトＤＮＡ』の最終段階に移行する……究極の魔道機人を作り出すために！」

全ては己の理想の為、シグマはこの手で銀時を倒す事を考えている。
が、銀時から異様な気配を感じた。

銀時「てめェがどこで復讐しようが構いはしねェ。機動四課だろうが管理官だろうがどうぞどうぞ好きにやりゃ良い……」

ただ単に冷静に口を出して言い出す銀時に少し意外そうな表情をするシグマ。

銀時「だがその手で作り出した魔道機人共は全ててめェの子に変わりはねェじゃねぇか？それにも関わらずに……てめェ……子を道具扱いしやがったな」

シグマの狂った活動原因がどうであろうと、銀時にとっては許せない光景である。

銀時「お前によって生み出されたイリス（アイツ）を……てめェ…見捨てたな」

物心を付いた時にはすでに親は亡くなり、戦場の中で自分を拾ってくれた恩師、松陽を思い出す。

銀時「そんなもん……父とは呼べねェ……そんなもん、親子とは呼ばねぇ……」

絶対に認められないシグマのやり方……そして絶対に許せないシグマの非道さ。

銀時「……消えろ」

怒りを込めた一言を口にする銀時。

銀時「俺とネプテューヌの前から……さっさと消えろってんだ腐れ外道」

鋭い目つきからはとてつもない殺気が放たれている。それを見たシグマは思わず驚きだす。

シグマ（凄まじい殺気だ……！）

銀時の殺気は、最初に出会った時に放たれた殺気とは比べ物にならない程に大きい。

シグマ（なるほど、戦う前から分かる！おそらくイリスが白夜叉と戦っても確実に負けるやも知れぬ）

さらに異変に気づいたかのようにシグマは回りに刺さっている剣を見ると、剣がちょくちょくと震えだす。

シグマ（剣が……震えている？……何かの衝撃でもなく、この要塞が震えているでもない……何かに共鳴されるかのように剣自身が震え上がっている）

その異変は全て銀時の放った殺気にある。
絶対的な強大な修羅を通った銀時だからこそ放てる圧倒的な殺意の闘志。
得物を狩る獣の眼。そして白く染まった鬼神の如く眼。

シグマ（あれは……あの眼は）

シグマはそれがなんなのかを考える中、幻想なのか……銀時の後ろから大きな白い獣の姿が見えた。
その獣は狼の姿をした夜叉（おに）のようであった。

シグマ「！！」

これはシグマも驚きを隠せなかった。
それは銀時の殺気と闘志が重なり合って生み出された幻想である。
一方のパープルハートも異常なまでの怒りを表す銀時を見て驚きだす。

パープルハート（凄い闘志と殺気……怒っている……銀時が本当に怒っている……シグマのやり方に銀時が怒りだしている）

パープルハートですら見た事がない銀時の絶大な殺意に満ちた怒り。
これこそが、銀時のもう1つの姿、伝説の白夜叉である。

パープルハート（これが……銀時が白夜叉と呼ばれた姿……）

今になれば分かる。
本気を出した銀時の強さはイリスをはるかに上回る強さを発揮する。

銀時「……シグマ……殺されるのはてめェの方だ。」

そしてその殺意に満ちた目ついでシグマを見つめる。

銀時「俺の中に眠る白い獣の逆鱗を触れたからには……楽に死ねると思うな」

そして銀時は居合いの構えで木刀を握り、

銀時「薄汚いオイルをぶち撒いて、くたばりやがれ！」

白夜叉の怒りは最大限に達成している。

シグマはニヤリと笑う。

シグマ「クククククク・・・成程！それが白夜叉と呼べる能力（ちから）か！面白い！ならば白夜叉よ！貴様を倒してサンプルにしてやる！」

そしてシグマとの最後の戦いが始まった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ＶＩＶＩ「よう、なぜかこの俺がアシストすることになった。て言うか何で俺がやられるんだ！」

真王「それがあんたの運命さ」

ＶＩＶＩ「ぐぅぅぅ・・・」

銀八「まぁまぁその辺にして。とりあえず質問行こうか」

ＶＩＶＩ「フン、ペンネーム『月光閃火』だ。『よぉ…月光閃火だ。しかし…アリマも可愛いがイリスも『凛々しい美女』って感じで綺麗だよなぁ…。

輝刃「…後でアリマにどやされても知らんぞ…（汗）。とりあえず、まずは俺から質問だ。」

1．イリスに質問だ。パープルハート（ネプテューヌ）との勝負に敗れた訳だが、正直言って今の感想を答えてくれ。

確かに、その感想は気になる所だな…。次は俺からだ。

2．作者に質問だ。…新八のフラグ…全然立つどころか、フラグの『フ』の字も感じないのだが…現時点での近況を聞かせてはくれね

ぇか…（漆黒）？（漆黒笑×∞∞∞∞）

輝刃「…閃火…とりあえず、落ち着け…（汗）。その漆黒はあまりにも酷だ…（汗）。…主に作者が…（汗）。」『新八ってあの眼鏡のガキか。とりあえずこれは笑えるな。クックック・・・」

銀八「そう思うか？イリス、出番だ」

イリス「彼女に負けて悔しかったです」

銀八「それだけかよ…」

真王「新八のフラグまいつか立てるつもりです。・・・・・・多分」

銀八「多分かい！『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ＶＩＶＩ「次いいか？ペンネーム『鳴神ソラ』だ。『マリオ「勝ったなネプテューヌ…まっ、自分の中にある他人の力に合わせて成長せずにそのまま頼る奴は勝てないさ…そう言うもんは使ってる者の様に使いこなせる様に自力で修行をしなきゃあどんな強い力を持っていても銀時やネプテューヌに負けるな」

けれどまあ…リリスが見た記憶とは一体…

ルイージ「何だろうね？」

フォックス「疑問もあるが桂側になるみたいだな…」

ファルコ「イリス達女性陣に質問『なのは達とネプテューヌ達が使っている武器で使ってみたい者はあるか？』」

クッパ「リリスに質問なのだ『自分の父親になって欲しい男性はいるか？』」

マリオ「銀時に質問『ネプテューヌとリリスをパワーとスピードで表すならどちらがどれに当てはまる？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』…確かマリオってやつは俺を敵対してたな」

真王「ですね。では順番にお答えしましょう」

イリス「私はネプテューヌさんの持っているエックスセイバーです」

ファルコリア「私は特にないな。しいていえば白夜叉の木刀がいいな」

ランドル「ワシはスバルのガントレット（リボルバーナックルのこと）じゃ」

メーティア「私はエリオさんかベールさんの槍です」

バーニン「あたしはシグナムの剣だ」

アイシー「スバルのリボルバーナックルだよ～」

シャチール「特にないぞ？」

リリス「ん～、銀髪の人かな？」

銀時「ネプテューヌはパワーでリリスはスピードだと思うな俺は」

真王「では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ＶＩＶＩ「次のペンネームは『黒龍』からだ。『黒龍「修学旅行から帰ってきたぜ！」

銀時「それで、ご感想は？」

黒龍「あんまり面白くなかった」

ソラ「あんた一度京都行ったからな」

黒龍「やっぱ一度見た物をもう一度見るのは面白味に欠けたな」

ソラ「まぁ修学旅行の話はその辺にして、ついにネプテューヌとイリスの決着がついたな」

銀時「まぁ大元はまだ残ってるけどな」

リリス「それにしても、あのサキュバスさんが、私と同じ名前になった事には驚きました」

銀時「体つきはある意味真逆だけどな」

リリス「ふぇぇぇぇぇん！！悔しい上に銀さん酷いですぅぅぅぅぅぅ！！！（涙）」

ソラ「銀時・・・（ジト目）」

黒龍「銀さん・・・（ジト目）」

銀時「ちょっ！その目やめてくんない！！」

黒龍「まぁこんなデリカシーのない人はほうっておいて、質問いきましょう。

1．リリスに質問。もう誰か食べちゃいましたか？（性的な意味で）」

2．リトルバスターズとａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓのメンバーに質問。最近まったく活躍してるとこ見てないんですけど、消えましたか？

3．銀さんに質問。ネプテューヌと恋愛的な意味で進展ありましたか？

ちなみに2の質問でキレて攻撃してきても簡単に返り討ちにできるんであしからず」

銀時「おお、作者もやられっぱなしじゃないって事だな」

黒龍「それと、お土産の生八橋と八橋をプレゼントします」『」

リリス「たべる？なにを？」

真王「この時のリリスはまだ知っていません。あと彼らは消えてませんよ！まだ存在しています！」

銀時「ネプテューヌと恋愛？知らんな～」

ネプテューヌ「酷いよ銀さん」

真王「あ～、『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ＶＩＶＩ「次はペンネーム『黒神』だ。『質問します。

音無と奏へ

２人はどのような関係まで進んでいますか（笑）

新八へ

ディエチと良い感じになっている山崎が羨ましいですか？

ネプテューヌへ

ゲストとして他の人の小説に出てみたいと言う気持ちがあれば、どこが良いですか？

以上です。』」

音無「お、おれと奏か？どうって言われてもな…／／／／」

奏「結弦…／／／／」

新八「羨ましすぎますよ！そして悔しいです！」

ネプテューヌ「どちらかと言うと黒龍さんか黒神さんのとこだね」

銀八「さり気無く１つ目ムカつく。『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

真王「あと『鳴神ソラ』さんに質問します。『自分のスキル（魔ビリティーと言うべき）はどんな感じですか？』例えば、

真王：作者の権限（味方キャラの数によって能力が上がる）

ヴァルバトーゼ：バトルオブブラッド（倒した敵の数によって５％攻撃力が上がる）

フェンリッヒ：暴君のしもべ（ヴァルバトーゼが近くにいると、３０％能力が上がる）

こんなかんじです」

銀八「なぁ、俺はどんな感じなんだ？」

真王「銀八の場合は『教師指導』で生徒の能力を２０％上げるそうだよ」

銀八「成程な」

真王「後ＶＩＶＩの場合は『復讐者の攻防』で自分よりレベルが高い相手に与えるダメージが５０％アップするんだ」

ＶＩＶＩ「ほう？すごいな」

真王「ではまた次回会いましょう。あ、次回のアシストはリリスのやらせます」

第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する（後書き）

真王「次回はシグマと銀時のラストバトルだ！！」

リリス「次回『見た目はコスプレでもすごい力が秘められている』テイクオフ！！」

第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている（前書き）

真王「地震のせいで更新が遅くなる可能性があります」

ネプテューヌ「凄い津波だったね」

真王「そのおかげで電気使用の制限がつけられます。『リリカル銀魂』スタートです」

第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている

ＩＢＧＭシグマ戦ｂｙロックマンＸ（Ｍｅｇａ　Ｍａｎ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ２８：　Ｓｉｇｍａ　１ｓｔ　（Ｏｒｉｇｉｎａｌ））（Ｍａｖｅｒｉｃｋ　Ｈｕｎｔｅｒ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ３２：　Ｓｉｇｍａ　Ｂａｔｔｌｅ　１　（Ｓｉｇｍａ　１ｓｔ））

シグマはソードを振り下ろし、銀時を襲うが、銀時はなぎ払うかのように木刀を振ってシグマは吹飛ばされるが体を逆回転させて着地。今度はシグマは銀時の急所を狙う感じに襲いかかるが、銀時は気付いてそれを防ぐ。
しかしシグマは銀時を蹴り飛ばして再び襲いかかるも、銀時はすぐさま復帰して避ける。

シグマ「やるではないか白夜叉よ。伊達にそう呼ばれてはおらんか」
銀時「…」
シグマ「だが私はこんなものではないぞ！」

そしてシグマは猛突進して銀時をおどい出す。
豪快にだが、竜巻のような素早い連続攻撃を炸裂させる。しかもその一撃一撃がかなり重い。
対する銀時もその剣撃を木刀で防ぐのではなく叩き返す。

シグマ「成程な、ランクＳクラスのゾーマを倒しただけのことはある。ならこれはどうだ」

シグマはソードを思いっきり振って大きな閃光を出す。

それはなのはの『スターライトブレイカー』よりも強力な攻撃である。
銀時は閃光を見つめ、木刀を持ち替えて、居合いに似た構えを再び炸裂する。閃光が当たる直前、銀時は木刀を振り抜き、閃光は切り裂かれた。二つに割れた閃光は、銀時の後ろで消滅する。

シグマ「なんと！」

いくらなんでもあり得ない光景であった。
本来の銀時では不可能な行動だが、白夜叉と化したことで全ての潜在能力を３０％から１００％にまで引き出しているため、木刀でもＳＳ＋ランク級の魔法を切り裂く事が可能になったのである。

シグマ「・・・やはり白夜叉は侮れんと言うことか」

シグマは呟くと、銀時は突き刺さっている1本の剣を抜き出してシグマに向けて思いっきり投げる。

シグマ「ぬぅ！」

対するシグマはビームソードを振り、その剣を織り出す。
白夜叉とは思えない小細工に銀時を見ると、いつの間にか目の前にいた。
なぜなら銀時は剣を投げた瞬間に人間ではあり得ない速度でダッシュして走り出し、走りながらもう1度剣を抜き出したのである。

ザク！

シグマ「ぬぅ！……剣を……」

左手に持っている剣をシグマの左足に串刺しする。
そして銀時はシグマを見て、

銀時「つ～かまえた」

その一言を言い出すと、

ドゴオオオオオオ!!!!

右手で木刀を強く握り、怒りと殺意を満ちた木刀の一太刀を浴びせる。
その一撃は下手すれば人を簡単に殺せるほどの威力を持っていた。

銀時「さァ、拷問死刑の時間だ……たっぷりと生き地獄を見せてやるよ」

剣(そいつ)の本当の使い方をしりたきゃ付いてくるといい

敵を斬るためではない

弱き己を斬るために

己を護るためではない

己の魂を守るために

銀時の頭の中に思い出す、最初にであった時に松陽が言い出した言葉を思い出しながら、シグマを容赦なく攻撃する。
木刀による連続攻撃が炸裂し、全てがシグマに直撃する。

銀時「おおおお

銀時は木刀をそのまま振って、シグマの体に大きな一撃を与えた。

シグマ「あああああああああ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・フ、フフ、ハハハ

パープルハート≪ジュエルシード？≫

シグマの体の中には９個のジュエルシードが入っていることに驚く銀時。

以前、ユーノが発掘し、その後の事故で海鳴市周辺に漂流する。

『ジュエルシード事件』を起こしたロストロギアであり，９個が失われている。

残り１２個が時空管理局に保管されている。

しかし何故、失われた９個のジュエルシードがシグマが持っているかに疑問を持つ。

シグマ「そう！この９個のジュエルシードは、２ヶ月前に『鬼兵隊』が忘れられし都『アルハザード』で全て発見された。そこで，万斉という男にその全てのジュエルシードを渡された」

銀時「あのヘッドホン野朗が……」

シグマ「そして私はこれを機会に，９個のジュエルシードを治癒能力様のロストロギアに改造し，全てこの身に移植した。その結果……私の体は不死身となった訳なのだよ！」

パープルハート≪なんですって！？≫

銀時「ちぃ，つまり簡単に言えばゾンビ野朗になった訳かい！！」

舌打ちして言い出す銀時。

だとすればこれはかなり厄介な事になる。

以下に銀時がシグマを何度も倒そうとも，そのくり返しが銀時に疲労が襲いだし，下手をすればシグマに殺される。

ある意味今まで戦ってきた敵の中でも厄介かもしれない存在である。

シグマ「さぁ、どこまで足掻けるかを見せてみると良い！」

シグマはソードで銀時に切りかかる。

銀時「舐めんじゃねぇよ！！」

銀時はかわしてシグマに攻撃するが、シグマが消えた。

シグマ「こんなものか白夜叉よ」

ブシュッ！！

銀時「ぐおおおおおおおおおおおお！！！！」

パープルハート≪銀時！≫

シグマ「フハハハハハハハハハハハハハ！！」

シグマは後ろからソードを突き刺す。

シグマは神速級のスピードで銀時の後ろに回ったのだ。

シグマ「以下に身体能力が高くても、不死となった私には勝ぬ！もはや君が残された道はただ一つ！この場で殺されて我が研究のサンプルとなるが良い！」

勝ち誇ってソードを銀時に向ける。

確かに不死の肉体にはいくらなんでも対様できないが、それでも銀時はゆっくりと起き上がり……

銀時「うるせーよ」

シグマ「何？」

銀時「さっきからサンプルになれサンプルになれってうるせーんだよ！」

足に力を込め、傷口から血を流しながら立ち上がる。

銀時「味方を捨てた事やロストロギアの力に頼っているテメェだけには……ぜってぇーに負けられねぇ！！」

力強い目でシグマを見る。

シグマ「ふはははははははははは！流石は白夜叉！ますます興味深くなった！しかしいくら貴様の強さがＳＳＳ＋ランクに入ろうが，私の不死の力の前でどうするというのだ？」

確かに不死の肉体を持った相手とは今まで闘ったことはなかった銀時。

しかしそれはよくよくと考えてみれば、それは９個のジュエルシードによる影響であると銀時は確信した。

その不死の元凶となるジュエルシードを全て取り除けば、シグマは不死の力を失うことになる。

銀時に残された手段は、スカリエッティから貰ったデバイスを使用するしかなかった。

するとシグマが壁を見る。

シグマ「どうやらお前の仲間が来るようだぞ？」

ドガアアアアアン！！！

源外・スカリエッティ・シャチール「ドワァァァァァァァァァ！！！」

壁からガーディアンと、それを操縦している源外、スカリエッティ、イリス、シャチール、イストワール、ヴィヴィオ、リリスがでてきた。

銀時「ジジイ共！」
パープルハート≪イースン！？ヴィヴィオにリリスも！≫
シグマ「…イリスまで来るか…」

銀時とパープルハートは驚く。

源外「むっ、銀の字！」
スカリエッティ「銀時君！？」
リリス「母さん！」
イリス「…シグマ」

源外達も気づく。

銀時「なんでこんなとこに来たんだよ！」
源外「うっせーな！色々とやってたらこんなとこに来ちまったんだよ！それより銀の字もうボロボロじゃねぇか！」
銀時「余計なお世話だ！」

銀時と源外は怒鳴り合う。

シグマ「クックック・・・愉快な奴らじゃないか。だがこれだけではいかん」

シグマはパチッと指を鳴らすと、ヴォン！と上にモニターが出てきた。

シグマ「このミッドチルダ全域に私と白夜叉の戦いが報道される。そして最後に映るのは白夜叉よ、貴様の死体になるのだ」

シグマはニヤリと笑う。
銀時はどうするか悩んでいると、
スカリエッティ「銀時君！前に私達があげたデバイスを使いたまえ！」
スカリエッティが叫ぶ！銀時はそれを聞いて懐からスカリエッティから貰ったデバイスを取り出す。
銀時「しゃーねぇな。あんま使いたくはなかったんだが…」
銀時は決意して、デバイスを発動する。
銀時「『シルバーブレイド』、起動！！」
銀時が剣型デバイスを起動させると、
銀時「うおおお

イストワール「すごい！やっぱり私の目に狂いはありませんでした！」

スカリエッティ「出るか！？銀時君の新たな力が！」

イリス「こ、これはＳＳＳ級よりも超えている！？」

源外達も銀時の魔力に驚く。

そして銀色の魔力は消えて、目の前には銀時の姿が現れた。

背中には銀色の羽、足には銀色のフットパーツ、胴体には銀色のアーマー、そして銀色の刀が握られていた。

っというより正確にいえば銀時のバリアジャケットはＩＳ（インフィニットストラトス）の主人公・織斑（おりむら）　一夏（いちか）が使う白式（びゃくしき）であり、武器は同じく雪片弐型（ゆきひらにがた）である。

つまり銀時のバリアジャケットはまんまＩＳ（インフィニットストラトス）の白式（びゃくしき）である。

銀時「……てこれ、バリアジャケットじゃなくタダのコスプレじゃねぇかぁーーーーーー！」

自分のバリアジャケットを見てツッコム銀時。

これには流石のパープルハートやシグマやイリスも呆れている。

銀時「どうして俺が良い歳こいてコスプレしなきゃいけないんだよ！？大体武器も『ＩＳ（インフィニットストラトス）』の剣だしぃ！何か色々と言われるじゃねぇかぁーーーーーーーーーーー！」

取り乱してツッコミまくる銀時。

そしてはっと何かを思い出す。

銀時「ちょ、待て。確かミッドチルダ中に流れてるんだよね？つまりコスプレしてる俺が撮られてるわけ？最悪だーーーーーーーーーーーー！！！！」

自分のバリアジャケット（コスプレだと思い込んでる）を全国に映されて頭を抱える銀時。

イストワール「何言ってるんですか銀さん！もっと堂々としてください！ｄ（＾ロ＾）」
源外「銀の字！敵は目の前だ！一気に行けよ！ｄ（＾ロ＾）」
スカリエッティ「銀時君！是非とも頑張りたまえ！ｄ（＾ロ＾）」
銀時「むかつく！顔文字がメッチャむかつく！」

銀時の額に血管が浮かぶ。
ヴィヴィオを見ると、スッゴイ目を輝かせている。
リリスは不思議そうに見ている。

シグマ「・・・何の小細工か知らんが、試してみるか…」

シグマは様子を見て魔力刃を飛ばす。

パープルハート≪銀時！≫
銀時「！」

銀時は魔力刃に気づくが、爆発した。
シグマは様子をよ～く見ると、薄い銀色の膜につつまれた無傷の銀時がいた。

シグマ「なんと！」
パープルハート≪あれは…プロテクト？≫

銀時以外の全員が驚く。
そして銀時も驚いている。

銀時（スゲェ……体の中から力が溢れ出てくるみてェだ……これはリィンフォースとユニゾンした時と同じ……）

リィンフォースの合体の時と同じく、銀時の身体能力が上がってくる。

それだけではない、魔力もついていることで完全なる魔導剣士と化していた。

その魔力は間違いなくなのはとフェイトを上回っており、シグマは銀時には魔導師としての素質が高まっていたと驚きだす。

シグマ「まさか……貴様が魔導師に目覚めるとはな・・・だが私には不死の力を持っている。それを突破しない限り勝ち目はないぞ？」

シグマの言うことはもっとも、ジュエルシードによって不死の力を持っている。

すると、銀時の腰にあるエックスセイバーが光りだす。

エックスセイバー≪銀時様、シグマに勝つ方法をお教えします≫

銀時「本当か！？」

銀時はエックスセイバーの話を聞く。

エックスセイバー≪私をマスターのところへ、お願いします≫

銀時「マスター？マスターって…」

エックスセイバー≪はい、ネプテューヌ様でございます≫

銀時「・・・・・・しゃーねぇ！ネプテューヌ！受け取りやがれェェェェェェェェェェ！！！」

銀時は思いっきりエックスセイバーをパープルハートまで投げる。

そしてエックスセイバーがガラスに接触した後、ガラスが割れるが、

パープルハートには当たらず、パープルハートはキャッチする。

パープルハート「ありがとね！銀時！」

パープルハートはすぐさまカプセルから出て、シグマに切りかかるが、シグマは防ぎ、パープルハートは反動を利用して銀時のとこまで着地する。

シグマ「2対1・・・。いくら不死に私でもさすがに不利だな」
パープルハート「あら？諦めるの？」
シグマ「ぬかせ！」

シグマはソードを構える。

銀時「・・・さてと、こっからが正念場だな」
パープルハート「そうね、イリス」
イリス「はい？」
パープルハート「あなたの剣（ゼロセイバー）を借りるわ」

パープルハートはゼロセイバーを左手に持つ。

シグマ「二刀流か。だがそれで私を倒すと？」
パープルハート「二刀流でもあなたを倒せるけどエックスセイバーが凄いのを教えてもらってねぇ」
シグマ「なに？」
パープルハート「青の無限（エックス）と赤の破壊（ゼロ）は創りは違えど、その二つを合わせると真の力を発揮する」

パープルハートは2つのデバイスを平行にする。
そして2つを重ね合わせ、

パープルハート「デバイス融合！！」

エックスセイバー・ゼロセイバー

≪Ｅｘｔｒａ　ｆｏｒｍ！！！≫

パープルハートが叫ぶと、赤と青の強力な光が周りを覆い尽くす。

銀時「こ、こいつは！？」

シグマ「な、何なのだ一体！？」

ヴィヴィオ「眩しくて見えないよ～！」

スカリエッティ「な、なんという魔力だ！これは・・・・・・・・・・

測定不能だと！？」

周りの全員がまぶしさに目を覆う中、スカリエッティはパープルハートの魔力数値を見て驚いた。

測定不能…最高ランクであるＳＳＳ（トリプルエス）ランクを超えたランク…ＥＸ（エクストラ）ランクであるのだ。

パープルハート「これが、エックスとゼロの二つが合わさった究極の力。その名を『ゼクスセイバー』！」

煙がはれて、パープルハートに手に黒くて大きくて、刀身の部分に金色の文字らしきものがあり、バリバリッと黒い電気らしきものが出ている刀があった。

言うなれば、『魔界戦記ディスガイアシリーズ』の最強の武器・『魔剣良綱』を刀型にした感じである。

シグマ「ゼ、ゼクスセイバーだとっ！？」

さすがのシグマも知らなかったらしく、驚いている。

パープルハート「さぁゼクスセイバー、初仕事に一発かますわよ」

ゼクスセイバー≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！≫

ガシャン×１０

ゼクスセイバーにカートリッジが１０発ロードされる。

そしてパープルハートの足元に紫の魔方陣が展開され、パープルハートはゼクスセイバーを腰の後ろへ構えると、

ビュン、ドォン！！

いきなり神速の如くのスピードで消えたと思ったら壁に穴が開いた。

それはパープルハートが音速を超えたスピードで壁を抜けたからである。

マッハのスピードでシグマーズの空中要塞を回っていると、剣から紫の強烈な光が長くのびる。

そしてパープルハートはその場で止まり、シグマーズに向かって技を繰り出した。

パープルハート「超マッハ次元斬！！！」

パープルハートがゼクスセイバーを振ると、纏っていた紫の光は、シグマーズの空中要塞へと向かい、

バアアアアアアアアアアン！！！！！

要塞が斜め真っ二つに割れた。

そして上部分はガラガラと崩れおちた。

全員「・・・エエエエ

パープルハートと銀時はいっせいに駆け出す。

パープルハート「行くわよ銀時！一文字スラッシュ！」
シグマ「ぬぅ！？」
銀時「うおらぁ！！」
シグマ「ごはっ！」

パープルハートは一閃攻撃でいき、シグマは防ぐが銀時から攻撃を貰ってしまう。

パープルハート「真空ぶった切り！」
銀時「月牙銀衝（げつがぎんしょう）！」
シグマ「ぐおおおおおおおおお！！！！」

パープルハートと銀時がそれぞれ紫と銀色の斬撃を飛ばし、シグマは防ぎきれずに壁まで後退させられる。

パープルハート「あとはよろしくね銀時」
銀時「まかせろ」

パープルハートは後退し、銀時に譲った後、銀時は刀を地面に突き刺し、右手が赤き血の爪が生えている悪魔の腕と化し、それが伸ばされてシグマを捕らえてつかみ出し、自分の元に引っ張り出す。

シグマ「なぁ！？」

銀時の能力に驚きだすシグマに、銀時は鋭い目つきでシグマを睨みつける。

銀時「不死の再生能力も……体内に入っているジュエルシードを全てテメーの中から取り出せば不死じゃなくなるんだろ？」
シグマ「な……何をする気だ！？」
銀時「こうすんだよ！」

銀時はシグマを掴んでいる赤き悪魔の腕を上げてると、足元には銀色の魔法陣が現れる。

銀時「テメェのそのうす汚ねェ欲望と共に……」

そしてそこから一気に今の銀時が放てる最強の魔法が放たれる。

銀時「魔法に食われろ！」

銀色の魔法陣から銀色に輝く魔力が一斉に放射されてまるでシグマを銀色に染めるかのように，シグマも体を容赦なく切り裂く。

シグマ「ぐあああ！」

体中から大量の血が放射される。
同時にシグマの体内に入っているジュエルシードも破壊こそは出来なかったが全てシグマの体からあふれ出る。

そして銀時はシグマを地面に叩きつけるかのように放り投げる。

銀時「……コイツが魔法の力……かぁ……」

確かにかなり強力だが、それは同時に危険であるため、銀時は無闇に使わないでおこうと考える。

そして地面に突き刺さっている刀を抜いて鞘に納刀する。

すると、

シグマ「こ、これが魔道士となった白夜叉とゼクスセイバーの力か…」

シグマが強引に立ち上がっている。

体中から大量の血があふれ出て、致命傷を数多く受けている。

シグマ「だが…私はまだ諦めん。いつか私を受け継ぐものが現れるだろう…」

パープルハート「いやしないわ。いたとしても私達がその人の野望を打ち砕くわ」

銀時「どんな理由にしろ、テメェの腐った理想は俺がぶっ潰す！」

パープルハートと銀時はお互い刀を構えて、

パープルハート・銀時

「地獄に堕ちろ！！」

2人が一斉に刀を振ると、銀色の閃光がシグマに当たって光がシグマを覆った。

シグマ「うおおお

ははははははははははは！！！」

シグマが狂った笑いを出す。
シグマの体がどんどん欠けてきている。

シグマ「白夜叉！そしてネプテューヌとやら！たとえ私を倒したとしても貴様らはいつか私と同じく地獄に落ちる！せいぜい贖ってみるんだな！さらばだ白夜叉よ！フフフハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

シグマは笑いながら光によって消滅した。

銀時「・・・悪いが俺達は地獄に落ちるのはまっぴら御免だ」
パープルハート「地獄へのお誘いは全く持ってお断りよ」

銀時とパープルハートはそう言った。

かくして銀時達と『シグマーズ』の決戦は無事に幕を閉じた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リリス「は～い、リリスがアシスタントしますよ～」

銀八「んじゃペンネーム『鳴神ソラ』さんから、『ないない、そんなに強力なのないですよ…ただハジケリスト（首領パッチ）を盾にするだけの臆病なだけっス…後、何かを投下するだけ

マリオ「俺は許せないのは…人の命をなんとも思ってない奴と人を殺す事を罪悪感を感じない者、ただ人を物とか道具としか見てない奴、そして…ただ神様から貰った力なのにそれを修行せずに使って自分の物と勘違いしている者だ…後、シグマをマジであっち行ってぶん殴りてぇぇぇぇぇぇぇ！！！！＃」

スネーク「こればっかりは俺も同意だな」

ルイージ「マジで許せない！」

ネス「さっさといなくなって欲しい」

フォックス「デビルランチャーで撃つ！」

リュカ「ＰＫスターストームで…」

ソニック「スーパーソニックで」

リンク「トライフォースラッシュ＋ロイヤルストレートフラッシュで」

ヨッシー「擬人化＆龍騎サバイブに変身してドラゴンファイヤーストームを☆」

ワリオ「ワリオマンで連続ラッシュじゃ！＃」

カービィ「そんな訳でネプネプに質問『もし銀さん達がネプネプ達の世界に着たらどこを案内する？』」

リュウケンドー「真王に質問『ネプテューヌ達６人とマジェコンヌ以外にネプテューヌ達の世界の住人は出ないのか？』」

ファルコ「（リュウケンドーに変身して言うのかよソラ（キングダムハーツの方）…）イリス達に質問『今絶賛怒ってる内のリーダーこそマリオを見てどう思う？』」

そして次回は…うん…コスプレなんだな結局…

トゥーン「どんなコスプレになるんだろう；」『」

ネプテューヌ「私のとこのプラネテューヌだよ。あとノワール達のとこも案内するよ」

真王「出すか出さないかと言うと出す可能性はあります」

銀八「そうか。３つ目は」

イリス「申し訳ございません」

イリス達は謝った。

真王「やったのはシグマなのにな。『鳴神ソラ』さん。とりあえずマリオ達の怒りを鎮めてください」

リリス「次はペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍』「ついにシグマとの最終決戦ですね」

銀時「しかし、シグマの野郎はとんだ外道だな」

ソラ「ま、あっちの銀時が軽く倒すだろ」

銀時「けどよ、あっちの俺がスカリエッティから貰ったデバイスがコスプレじゃなきゃいいんだがな」

ソラ「・・・・・・・まぁたぶん大丈夫だろ」

銀時「何その間!?」

黒龍「じゃあ質問いきます。

1. ギンガに質問。あなたは黒神さんの小説のギンガと同じように百合ですか?

2. ネプテューヌに質問。銀さんに好きになってもらうようになんらかのアプローチはしていますか?

3. スカリエッティに質問。同じ科学者として、シグマの事をどう思いますか?」

銀時「お、今回は比較的にマトモな質問だな」

黒龍「毎回毎回酷い質問するほど、俺も黒くないよ」

ソラ「まぁギンガの質問は正直微妙な気がするがな」『」

ギンガ「私は百合じゃありません！！／／／／」

ネプテューヌ「それなりに頑張ってるつもりだけど…」

スカリエッティ「レプリロイド技術はいいが、捨て駒にするのはよくないな」

リリス「それじゃあ『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

真王「次はファルコリアがやります。ではまた」

第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている（後書き）

真王「次回は魔道機人編の最後です！」

イリス「次回『友達の絆は消えない』テイクオフ！」

第四十六訓：友達の絆は消えない（前書き）

真王「魔道機人編の最後です。そして裏では異変が起きる？」

第四十六訓：友達の絆は消えない

ミッドチルダ　第４起動高層ビル

突如、ガジェット達が逃げ去っていくように一匹残らず退場していく。

これにはフェイト達も異変に気づく。

フェイト「ガジェット達が……逃げていく！？」

アルフ「って事は、銀時達はやったんだね！」

突如の異変に驚くフェイトと喜びだすアルフは、銀時達がシグマの野望を止めたと考える。

その証拠にパスを通じてなのはとはやてが緊急報告をする。

なのは≪フェイトちゃん！ガジェット達が次々と撤退していくよ！≫

はやて≪こっちも魔道兵士が次々と動きが止まっていて戦闘不能になってきているよ！銀ちゃん達がやってくれたんや！≫

２人とも嬉しそうにはしゃぎだす。

その証拠に敵陣の飛行要塞が全て停止して次々と味方の戦艦の攻撃を受けている。

神楽「よっしゃー！私達の勝利アル！」

エリオ「やりましたー！」

コンパ「ねぷねぷはやったのですー！」

神楽とエリオとコンパも大はしゃぎで喜びだしており、スバル、キャロ、フリード、ディード、ノーヴェ、ギンガ、その他の機動六課

のメンバーも喜びだしてはしゃぎだす。
トーレとドゥーエは安堵した。

ティアナ「やったのね兄さん…」
猿飛「ああぁ、銀さんがやってくれたんだね。流石は私の銀さんだわ」
月詠「それ、フェイト達に聞かれたら殺されるぞ？」

銀時の事を思って自分のものと言い出す猿飛に呆れてツッコむ月詠。
だが銀時が無事にいることに安心する月詠は口に煙管をくわえる。

一方の源外達も逃げ去っていくガジェットと停止して動かなくなった魔道兵士達に驚きだす。
その様子にイリスはある事を確信する。

イリス「どうやら、銀時がマスターを倒したようです。これで『シグマーズ』の恐怖は消えましたね」
ヴィヴィオ「パパ！」

イリスの言葉を聴いてヴィヴィオとリリスは喜びだす。
源外やスカリエッティやイストワールも安心してホッとする。

源外「どうやら、シグマの野望は食い止められたようじゃな」
スカリエッティ「ああ、これでミッドチルダの平和も護られただろう」

源外とスカリエッティは安心する。

？？？『やったじゃないか銀時！』

？？？『味方ながらあっぱれだな』

何処からか声が聞こえた。

と言うかこの声は恭介と来ヶ谷の声である。

？？？『わふー、らすとさむらいなのです～』

？？？『それ微妙に違うと思うぞ…』

？？？『おい天パ野郎！しっかり勝ったんだろうな！』

？？？『お姉ちゃ～ん、映ってる～？』

今度はクドと日向と野田とサチコの声が聞こえた。

銀時「天パ言うんじゃねぇ！それと何処にいんだよお前ら！」

ゆり『ミッドチルダよ！映像まだ？』

？？？『すぐに終わります……完成です』

銀時達の真上にゆり達が映った。

ゆり『はぁ～い、銀時』

理樹『銀さんいきてますか？』

鈴『あの天パが死ぬか』

銀時達は驚く。

銀時「お前ら一体何してんだ！？つーか何でお前らが映像を握ってんだよ！」

ゆり『簡単よ。そこら辺にあるカメラと魔道兵士達の部品で竹山君

がいろいろとハッk・・・・・いろいろと改造したのよ』
銀時「おい今一瞬ハッキングって言いかけただろ」

銀時は突っ込む。

ゆり『それはともかく、まずは上々ね竹山君』
竹山『抜かりはありません。後僕のことはクライストとお呼びください』
銀時「・・・・・・・・・・」

銀時はゆりの仲間の高松と同じ眼鏡を付けておかっぱな橙色の髪の少年に、どう突っ込むべきか迷った。

フェイト『銀時!!』
銀時「うお!」

いきなりフェイトが現れて銀時は驚く。

フェイト『やったね銀時!』
なのは『銀さん大丈夫?』
新八『銀さん無事ですか!?』
ノワール『ネプテューヌ!あんたやられてないでしょうね!』
アイエフ『ネプ子、そっちも大丈夫?』

そしてほとんどの人が映る。

イリス「これが……貴方の仲間なんですね」
ネプテューヌ「イリス?」

イリスが羨ましそうにネプテューヌに言い出す。

ちなみにゼクスセイバーはエックスセイバーとゼロセイバーに別れ、ゼロセイバーはイリスが持っている。

イリス「……私は……これからどうすれば良いのか迷っています。マスターも死んで、ネプテューヌさんをこの手で傷つけ、さらにはマスターの命令とは言え数多くの人々の命を奪ってしまった」

悲しそうにシグマの死と自分の過ちを悔やむイリス。

イリス「……これで……良かったんでしょうか？……私は……これからどうすれば良いんですか？」

もう居場所がなくなったように苦しそうに言い出す。

イリス「胸が苦しい……悲しみの感情しか表せません……どうすれば、この苦しみの感情が消えるんですか？」

ネプテューヌ「……苦しいほど悲しむのは、人間の感情だよ……イリス」

悲しそうに怯えるイリスに、心優しく声をかけるネプテューヌ。

ネプテューヌ「イリスがシグマがいなくなって悲しんでいるのは、それこそ人間としての感情が芽生えているからだよ」

イリス「人間の……感情？」

ネプテューヌ「シグマは私達にとっては敵でしかなかったけど、イリスにとってはかけがえのないたった1人の父親的な存在。たとえシグマがイリス自身を愛してくれなくても、イリス自身はシグマを父のように愛していた。自分自身がそれに気づかずに……」

シャチール「イリス…」

魔道機人として生まれた人造生命体とは言え、イリスも人間として生きている。
銀時、ヴィヴィオ、リリス、源外、スカリエッティ、イストワールもイリスの苦しみを理解する。
イリスはシグマの忠実な魔道機人ではない。ネプテューヌの友達である事を。

ネプテューヌ「だからその苦しみの中には大切なものが入っている事を忘れてはダメ。誰だってめんどくさい物を背負って生きているんだよ。それでも涙が流れる事があれば、好きなだけ流せば良いよ」

ネプテューヌの言う事を聞くと、イリスの眼から涙が溢れてくる。

ネプテューヌ「それでも止まらない時には、私達がその悲しみを抑えてあげるよ」
イリス「…う、うえぇぇ～～～～～ん！」

緊張が切れたのか、ネプテューヌに抱きついて泣きだすイリス。
その光景を微笑むように見る源外とスカリエッティとイストワール。
特に源外はこの光景を見覚えがある。

かつて流山が死んでたまが人間としての感情で悲しむ中、銀時達がたまの悲しみを受け止める光景であった。
ネプテューヌを見ていると、ネプテューヌの中に眠る銀時と同じ侍としての意思が見えてくる。

？？？「ビ…ギ・・・ガ・・・」

何処からか妙な音が聞こえた。
ネプテューヌは音が聞こえたところを見ると、全長５メートルある

丸くて黒くて赤い目の周りには緑色の刺青みたいなものがある何かだった。

？？？「ギギギ・・・」

そいつは右腕をトゲ鉄球に変えると、

ドカァーーーーーーン！

全員「！？」

装置に向かって思いっきり振りおろし、壊し始めた。
銀時達は謎の敵に気付いた。

銀さん「なんだこいつ！？」

謎の敵の行動に驚きだす銀時。

シャチール「あれは確かウェイリーが作ったとされる『ダークデビル』ってやつだっけ？」
ダークデビル「ビギビギ…」
スカリエッティ「ダークデビル！？そんなの私でも知らなかったぞ！」

スカリエッティはダークデビルという存在に驚く。

シャチール「マスターがウェイリーの研究資料を見てたからな。ってかあいつはゼロセイバーができても未完成のまま封印されてたはずだが・・・」
？？？「ソレハ我ガヒロッタ」

ネプテューヌ「ッ！！その声は！？」

聞き覚えのある禍々しき声が聞こえ、ダークデビルの方を向くと、ダークデビルの手に４つのダークソウルがあった。

ネプテューヌ「ダークソウル！？」

銀時「なんでテメェが！？」

ダークソウル「コイツハ我ニトッテ都合ノイイ存在ダ。不完全ナ我デハウマクウゴケナイガ、コイツハ我ノ忠実ナ僕トナッタ。手始メニコノ「シグマーズ」ノ機械ヲコワシテエネルギー暴発ヲサセテヤル」

ダークソウルがそう言うと、イリスが信じられないように驚きだす。

イリス「暴発！？これだけの要塞を動かすにはそれ相当の大量のエネルギーが必要不可欠なはず！そのエネルギーが暴発すれば、全ての『シグマーズ』の要塞もろとも大爆発して……ミッドチルダが吹っ飛んでしまいます」

ネプテューヌ「えええぇぇぇ

ダークソウル「・・・無駄ナアガキ。止メニイクノハ貴様ラノ仲間ヲ失ウノダカラナ。精々アガイテミセロ、コノ我ノタメニ…」

ダークソウルはダークデビルとともに消えた。

シグマーズ空中要塞・エネルギー制御室

そこは要塞のエネルギー制御室。
場所的な雰囲気はまるでターミナルの地下に似ている。
『ガジェット・ガーディアン』はゆっくりと地に下りて、銀時達は急いで制御装置に走って向かうが、あたりがエネルギーの暴発によってエネルギーが地を走りまくって囲んでいる。

銀時「ちぃ、これではうかつに近づけねぇ！」
ネプテューヌ「どうすれば良いの！？あそこに言って暴発を防がなきゃいけないのに！」

銀時とネプテューヌも万事休すにまで追い込まれる。
するとスカリエッティが決心して『ガジェット・ガーディアン』に下りる。

スカリエッティ「諸君は『ガジェット・ガーディアン』に乗って逃げるんだ！」
イストワール「スカリエッティさん！」

どうやらスカリエッティは自分が制御システムを起動させるつもりである。
その周りはエネルギーの暴発でうかつに近づけば肉体がボロボロになって最悪の場合は消えてなくなる。
それでもスカリエッティはこの暴発を止める責任を感じている。

スカリエッティ「研究者が起こした事態だ。研究者が何とかしなきゃいけないだろう？」
ヴィヴィオ「無茶言わないでよ！制御装置付近は危なくて近づけないよ！」

必死に止めるヴィヴィオに死を覚悟を元に制御装置に向かうスカリエッティだが……

ドカーン！

銀時達「！？」

銀時達の目の前の柱が大爆発する。
すると爆破後には柱が遠く離れてしまうほど割れてしまった。
一体どうしてなのかを目の前を見ると、そこには自分たちとは別の場所にいるイリスがいた。

ネプテューヌ「い……イリス！」

ネプテューヌは驚いてイリスの名を言い出す。

イリス「マスターが引き起こした事態です。僕（しもべ）が何とかしなきゃならないんですよ……」

そう言いだすとイリスは笑って、ネプテューヌに『ゼロセイバー』を投げ渡す。
そして『ゼロセイバー』は大剣から剣の首飾りとなる。

イリス「ネプテューヌさん、それは貴方に渡します。それとスカリエッティ、これを」

イリスは懐から無線機らしき物を取り出すとスカリエッティに投げ渡す。

イリス「無線機です。指示をお願いします」

そう言って後ろを振り向く。

ネプテューヌ「ちょっと待って！何をする気なの！？イリス！」

ネプテューヌは駆けつけようとすると、銀時とヴィヴィオとリリスとシャチールは黙ってネプテューヌの肩を掴んで止める。

ネプテューヌ「銀さん！ヴィヴィオ！リリス！」
シャチール「イリスは覚悟を決めたんだ。何も言うな」

ネプテューヌは3人の名を言い出すと、銀時とヴィヴィオとリリスは黙りこむ。
そして銀時達は『ガジェット・ガーディアン』に乗り込む。

イリス「銀時、ヴィヴィオ、リリス、源外、スカリエッティ、イストワール、貴方達に最初で最後のお願いがあります。私の代わりにネプテューヌさんを……私の大切な友を護ってください……」
銀時「……ああ」

銀時達にネプテューヌを護って欲しいと頼みだすイストワール。
その頼みを銀時は聞き入れると同時に『ガーディアン』が動き出す。

ネプテューヌ「やだよ！離して銀さん！！……イリスゥゥゥゥゥゥ！」

涙を流してネプテューヌはイリスの名を呼ぶ。
そして『ガジェット・ガーディアン』はこの場を脱出する。

イリス「護りたい気持ちは人を強くさせる。それは人間でも人造生命体でも変わりはしない。マスターの魔道機人として生まれた私には理解できなかった事ですが……ネプテューヌさんのお陰で理解しました」

無線機を通じてイリスは喋りながら制御装置に向かうが、エネルギーの暴発に触れて徐々に衣装がボロボロになって行き、肉体も削り取ってしまいボロボロとなる。

イリス「私も護りたいものがあったんです」

無線機を通じて銀時達はイリスの最後の遺言を聞きだす。
無線機を持っているネプテューヌさんは涙を流しながらも、イリスの最後の台詞を聞き逃さないでいる。

イリス「何度改造されても、実験によって体を変えられても、この身を滅ぼうと忘れない……だから」

イリスは笑いながら制御装置を起動させてシステムを作動させる。
するとさらに体中がボロボロとなって内部も骨も削られていく。

イリス「だから……ネプテューヌさんも…私…のこと…忘…れない…で…くだ…さい」

涙を流しながらイリスはネプテューヌさんに言い出す。

イリス「そうすれば……私の魂は……」

悲しみながらイリスは、ネプテューヌと出会った時の話し合いと戦いを思い浮かべる。

タダの魔道機人として生まれた自分でも、人間としての思い出があったと理解した。

イリス「ずっと、貴方の中で……生き続けますから」

ネプテューヌ「イリスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

涙をあふれ出し、悲しみながらもネプテューヌはイリスの名を叫びだす。

無線機から親友の声を聞いて、最後のシステムを押して起動させると、徐々に下半身から体が削られるように消えて行き、もう身動きは取れない。

イリス「……ネプ…テュー…ヌ…さん……私…達の…絆…は…貴方と……共に……」

最後に笑顔で笑いながらそう言いだして、完全に消滅しようとした。

？？？「勝手に死ぬのはもったいないですよ。イリス様…」

一方の鬼兵隊の戦艦では、高杉の前にマジェコンヌが愉快そうに笑い出しながら姿を現した。

高杉「……随分と遅く帰ってきたそうじゃねぇか？しかも何やら面白いもんを持っているようで……」

煙管を口から話して煙を吐く高杉は、マジェコンヌを向くと、何故かその手には何かのチップと9のジュエルシードを持っている。

高杉「まさかとは思うが、お前シグマを利用して初めからそれを奪うつもりだったのか？」

マジェコンヌ「ああ、腐りきった世界を今更支配するような輩の手など貸すつもりはない。私は他人にも厳しい性質でな？」

持っているチップと9個のジュエルシードを高杉に渡すマジェコンヌ。

実は銀時とシグマの対決を気づかれないように観察しており、銀時とネプテューヌがその場を出て行った後、そのままチップと9個のジュエルシードを取り出してその場を退散したのである。

マジェコンヌ「……まぁいずれにしろ私は最初からシグマに力を貸すつもりはなかったわけだが・・・」

高杉「くくくくくく……お前も随分と俺に似てきたなぁ？まぁ俺も同じさ。誰がどうしようと俺には関係ねぇ。『シグマーズ』もこの腐った世界を潰す為の駒にしかすぎねぇからよ」

不気味に笑い出す高杉。

世界を壊す為なら『春雨』だろうと『シグマーズ』だろうと利用する。

マジェコンヌはある事を思い出して高杉に言い出す。

マジェコンヌ「そうだ、おまえに話しておかなきゃいけない事がある。何やら白夜叉も魔導師に目覚めたようだぞ？」

高杉「何？」

ピクリと高杉は表情を変える。
銀時が魔導師に目覚めた?侍であるあの男がどうして魔導師に?
高杉はマジェコンヌからその話を詳しく聞くのであった。

ミッドチルダ

あれから『シグマーズ』の要塞はエネルギーの暴走がおさまり、アースラによって破壊された。
そしてネプテューヌは六課の外で空を眺めていた。

???「ここにいたか、ネプテューヌ」

聞き覚えのある声にネプテューヌは振り向くと、銀時とフェイトとバーニン達がいた。
銀時は申し訳なさそうな表情でスバルを見る。
あの時、イリスを止めようとしたネプテューヌを止めた結果、結局イリスは死んでしまったからである。
そしてフェイトがネプテューヌに話しかける。

フェイト「銀時から話は聞いたよ……ずいぶんと辛い目にあったんだね。イリスの事はお気の毒に……」
ネプテューヌ「……生きてるよ」
フェイト「え?」

突然ネプテューヌが言いだす。

ネプテューヌ「イリスは生きている。・・・何でか知らないけどそう思うんだ」
コンパ「ねぷねぷ・・・」

ネプテューヌは空を見上げる。

バーニン「あれ?思い出したんだがリーダー何処行ったんだ?」
ランドル「・・・・・あ、忘れとったわ」
スバル「リーダーってアイシーが言ってたファルコリアさんのこと?」
アイシー「そう。でも確かにリーダー何処行ったのかな?・・・まさか死んだんじゃ」

アイシーが碌でもないことを言うと、

?「勝手に殺すな馬鹿もの」
全員「!!?」

バーニン達にとって聞き覚えのある声が聞こえた。
声のした方へ向くと、羽らしきものが生えているが体中ボロボロ状態のファルコリアと、もはや下半身がなくなっているボロボロの少女…イリスであった。

バーニン「リーダー!?」
ランドル「ファルコリアと・・・イリスか!」
銀時「なに!」
ネプテューヌ「イリス…!」

銀時達は驚く。

ファルコリア「イリス様も無茶をしますね。かく言う私も人のことが言えないがな」
ネプテューヌ「イリスは…無事なの？」
ファルコリア「安心してください。かろうじて生きております」
ネプテューヌ「・・・良かった」

ネプテューヌは安心する。

イリス「・・・ぅ・・・ぅぅ・・・」
ネプテューヌ「！・・・イリス！」

イリスが目を覚ました。

イリス「・・・ぁ…私…は一体・・・？」
ファルコリア「お気づきになられましたか、イリス様」
イリス「ファル…コリ…ア・・・」

ボロボロ状態なため、うまくしゃべれない。
そしてネプテューヌに気づく。

イリス「ネプ…テューヌ…さん・・・そう・・・私・・・ファルコリアに…助けられた…のね」

イリスは今の現状を把握する。

ネプテューヌ「イリス…」
イリス「…ネプテューヌさん…」

ネプテューヌはイリスに抱きつく。

ネプテューヌ「良かった…無事でよかったよイリス…」

涙交じりで言うネプテューヌ。

イリス「ネプテューヌさん…」

イリスも泣きながら右腕となくなっている左腕で抱きつく。

銀時達とファルコリア達はほほ笑む。

かくして、感情のない少女に感情を与えた女神は、その少女と泣きながら抱きあったのであった。

【魔道機人編：ＥＮＤ】

？？？

ここは何もない空間。そしてその場所に黒い影がいた。

？？？「・・・生キテイタカ。マアイイ。我ノ完全ナル姿ヘトモドルニハモットアツメナクテハナルマイ…」

その黒い影は紫の少女と金髪の魔道機人を見ていた。

？？？「ソウイエバ我ノ欠片ヲアツメオッタバカナ奴ガイルガ・・・高杉トイッタカ？マァドチラニシロアヤツハ我ノ駒ニシテヤル」

その影は幾多の世界を見て、狂ッタヨウナ笑イヲダシタ。

？？？「完全ニ蘇ッタ我ヲトメルナドモハヤ不可能。ソレドコロカ我ヲ支配スルナド不可能。精々足掻イテミセロ。ダレモ我ヲトメラレナイノダカラナ！フハハハハハハハハハハハハ！」

ソノ影ハ・・・世界ト・・・次元ト・・・時間ヲ・・・スコシヅツ・・・喰ラッテイクノデアッタ。

ソノ影ハ・・・『科学ト魔術ノ交差スル世界』ト、『星ノ戦士ノ住ム平和ナ世界』ト、『未来世界ノ猫型ロボットガイル世界』ヲ喰ラ

ッテイクノダッタ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ファルコリア「『魔道機人編』の終わりが来たため、私がアシストすることになった」

銀八「だったら行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さんから、『マリオ「因果応報、人を道具と見て命をなんとも感じない者の末路だな…」

ルイージ「それにしても…黒神さんの所ではブレイブルーでこっちだとＩＳなんだね；」

リュカ「けれど凄いですね」

ネス「それを言うならネプテューヌさんもね」

スネーク「ロックマンＺＸのデバイス版を登場させて銀時と力を合わせて勝利だな」

フォックス「だが…これで終わった訳じゃないだろうな…何かあると俺は思う」

マリオ「確かに…ああ言う輩は自分が死んだ時に何かしてそうだもんな…」

カービィ「イリス達に質問だよ～『真王が知ってるアニメ・漫画、小説やゲームでこんな奴とは戦いたくないって奴いる？ちなみにキャラ名で答えてね～』」

ネス「真王さんに質問『次の章ではリトルバスターズとａｎｇｅｌｂｅａｔｓなど他のメンバーは出ますか？』」

ソニック「俺からも真王に質問『ゼロセイバーやエックスセイバー以外に他にライブメタルを模したセイバーが出るのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』まず一つ目からお答えしましょう」

イリス「私はとてもじゃありませんが、ドラゴンボールのブロリー（サイア人モード）です」

ファルコリア「私はＤＩＯだな」

ランドル「ワシは東方の八雲紫がどうも無理じゃな」

メーティア「私はフランドールですね」

バーニン「あたしはランドルと同じのだ」

アイシー「あたしも～」

シャチール「私はいないぞ？」

真王「彼らは次の章でも出しますよ。そして3つ目は出しません。あれらだけです」

ファルコリア「では『鳴神ソラ』よ。廊下に立つのだ。次のペンネームは『月光閃火』からの質問だ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…最後のシーンは完璧に『芙蓉編』の終盤のシーンだな…。とりあえずシグマ…来世ではまともな研究しろよ…。

輝刃「だな…。とりあえず、質問いくか…まずは俺から…。」

1．ファルコリアに質問だもし自分が『恋をしたい』と思った時、頭の中に浮かぶ男性は誰だ？

なるほど…どうなんだろうな…。次は俺からだ。

2．作者に質問だ。何か新八の出番が薄い気が…大丈夫なんだろうか（汗）？（頭カキカキ）

輝刃「確かに…何か、新八の出番が薄いな…（汗）。さすがにこの

ままフェードアウトはマズいだろう…（汗）。」

というか…他にも出番が薄い人が居そうな気が…（汗）。』…なんだこれは」

ファルコリアは1つ目の質問に呆れる。

銀八「で、どうなんだ？」

ファルコリア「答えられるわけないだろ！思い浮かぶと言えば銀髪の・・・あ！」

銀八「言っちゃったよこの人！自分の好みの人を言っちゃったよ！」

ファルコリア「／／／／／『月光閃火』！！永遠に廊下にたちゅぇ・・・／／／／」

真王「あ、噛んだ。新八の出番は大丈夫と思うよ。あとで新八が主人公のも書くか」

銀八「ファルコリアが復帰するまで俺がやるか。ペンネーム『黒龍』さんからだ。『銀時「結局コスプレなのかよ・・・」

黒龍「しかも、ミッドチルダ中に放映されてちゃったしね」

ソラ「最悪だな」

アリス「ある意味不運だな」

銀時「ちくしょう・・・・」

黒龍「それにしても、ブリーチとかそう言うのだと思ったけど、まさかＩＳだったとはさすがに予想外だった」

ソラ「まぁＩＳは最近かなり話題になっているしな」

黒龍「まぁコスプレでも、本格的なコスプレなんだから、元気だしなて銀さん」

銀時「・・・そう、だな」

アリア「・・・オタク」

銀時「グハッ！！」

黒龍「アリアの言葉が銀さんの心にクリティカルヒットした！！」

銀時「・・・ｏｒｚ」

ソラ「こうなったらほっとくしかないな」

黒龍「じゃあ質問いきます。

1．銀さんに質問。ＩＳのコスプレして正直どうしたいですか？

2．銀さんラバーズに質問。銀さんのコスプレ姿を見て正直どう思いましたか？

3．土方に質問。なんか土方さんだけやたら、活躍シーンがカットされている気がしますけど、気のせいですか？」

ソラ「それと最後に俺から、性転換薬を贈ろう。まぁ何かに使ってくれ」

黒龍「何にも使えないと思うけどね」』」

銀時「もうコスプレはコリゴリだっての！」

真王「ああいう感じに嫌がっていますが、周りのみなさんの反応はこうです」

銀時ラバーズ「凄く…カッコ良かった（です）（っす）」

銀時「え？なんで？」

真王「あと土方の場合は気のせいです。気にしないで」

ファルコリア「そうなのか？」

真王「あ、戻った」

ファルコリア「平常心取り戻すのに手間がかかった。では『黒龍』よ。廊下に立て」

真王「次は短編に突入し、アシストはリリスとゲスト2人を出します」

銀八「またキャラ増やすのか？」

真王「まぁね。では次回会いましょう」

第四十六訓：友達の絆は消えない（後書き）

真王「次回の話はリリスのエピソードです。そして新たな家族も・・・」

リリス「次回『ああ、やっぱ家族が一番だわ』テイクオフ」

～予告～

ナレーション「新たにネコな女性と植物な女の子が加わりそうです」

魔道機人設定

～アイシー～

氷を使う『絶対零度の闘士』の魔道機人。肩まである水色の髪が特徴。魔道機人の中で彼女はムードメーカーな存在。大好物はアイスらしく、アイス好きのスバルと仲良くなる。バーニンをからかうことがあるが、スキンシップの一つである。

～ファルコリア～

超高速のスピードを持つ『大嵐の旋風者』の魔道機人。長い白髪で左目に眼帯がある。魔道機人達の中でファルコリアがリーダー。シグマの行動に不審を抱いている。

～ランドル～

土の力を持つ『歩く隕石獣』の魔道機人。膝あたりまである橙色の髪で、某怪力神の鬼級の怪力をもつ。常に落ち着いた感じで、戦闘でも冷静な行動と判断力を持つ。シグマの行動に不審を抱いている。

～シャチール～

無機物内を泳ぐ『闇夜の暗殺者』の魔道機人。アイシーとは仲がいい。こっそりと相手の部屋に入っては悪戯したり、時には弱みを握ることもあるサディストな性格を持つ。

～メーティア～

一番の防御力を持つ『鋼鉄の重戦士』の魔道機人。仁義に熱く、曲がったことが大嫌いな性格。シグマに対しては曲がった仁義に嫌気をさしているため、ファルコリアとランドルとともに不審を抱いている。

～バーニン～

戦闘大好きな『業火の破壊者』の魔道機人。赤いロングが特徴的。常に戦うことが好きで、シグナムにも負けを取らない戦闘狂。しかし頭が悪く、簡単な挑発でも反応するので逆ギレしたり八つ当たりしたりする困ったさん。何時もからかうアイシーをうざそうにしているが、実はアイシーと仲良くなりたいと思っている。しかしなかなか素直になれない。

～ＶＩＶＩ～

破壊を好む魔道機人。気にいらない物は潰して自分が頂点に立つことを望んでいる。白夜叉となった銀時に敗れ、機能停止となったが、事件後、行方が分からなくなっている。

～イリス～

シグマに作り出された魔道機人最強の存在。プロジェクトＤＮＡで

坂田銀時のＤＮＡと融合し、さらにＤｒ．ウェイリーが作り出した『ゼロセイバー』で最強の存在となった。だがネプテューヌとエックスセイバーに敗れ、以後人間らしく生きることを誓う。

～シグマ～

イリスに機動四課の破壊を出した張本人。『プロジェクトＲ（レプリロイド）』を築き上げ、すべてを我が物にしようとした。

魔道機人設定（後書き）

真王「なんか短い気がしますよね。そこは温かい目で見守って！」

第四回、モンスター解説図鑑

真王「第四回、モンスター解説図鑑！！」

ＹＥＡＲ－－－－－－－－！！！

ネプテューヌ「・・・なんで英語読み？」

真王「気にするな。んじゃ行くぞ」

～ガジェットアタッカー～

第三十六訓から登場。
鬼兵隊が作り上げた一般的な人型ガジェット。さまざまな武器を使いこなす。中には運転できる者もいる。

ネプテューヌ「次も量産型だよ」

～ガジェットランナー～

第三十六訓から登場。
走ることを特化した二足歩行のガジェット。最大スピードは通常の車を超えるレベルである。機関銃で攻撃するほか、キックや回し蹴りで攻撃することがある。

真王「次行くよ」

～ガジェットタンカー～

第三十六訓から登場。
重量型ガジェット。防御の硬さは他のガジェットよりも硬い。攻撃はミサイルと電撃玉とグレネードを出す。モデルはロックマンXのガンボルド。

真王「次はこんなガジェットだ」

～ガジェットウォーリアー～

第四十訓から登場。
全長４メートルある大型ガジェット。とは言ってもガジェットアタッカーが操縦する乗り物である。四十訓に登場し、ネプテューヌが乗ったガジェットウォーリアーは試作機らしいが、源外とイストワールとスカリエッティによって、ガジェットガーディアンへとバージョンアップした。

真王「次はあいつか」

～ゼグダリア～

第四十訓に登場。

蝶とも蛾ともつかない機械生物。もとは“アパロイド”と呼ばれる機械状の生物だが、シグマがアパロイドのデータチップを抜き取ってアパロイドを製作した。

ネプテューヌ「次はこいつだよ」

～ガレオム～

第四十二訓に登場。
ゴリラっぽい巨大ロボット。ガッツ溢れるが故にしつこい性格なため、敵を見失うまで追いかけ続ける。しかしネプテューヌとエックスセイバーの前にあっさり破られる。

真王「なにしに出てきたんだ？は無しの方向で」

ネプテューヌ「次も載せるよ」

～ダークデビル～

もとはウェイリーが作り出したものの未完成で封印されていたが、ダークソウルがこれを見つけて命を吹き込み、今は忠実な僕となっている。ダークソウルの命令を聞き、必要とあらば世界を破壊する力を出す。

真王「これはロックマンＸ５のシャドウデビルをモデルにしていま

す。では第五回も」

第四十七訓：ああ、やっぱり家族が一番だわ（前書き）

真王「リリスエピソードな感じです。ではスタート」

第四十七訓：ああ、やっぱり家族が一番だわ

あのシグマ率いる『シグマーズ』の事件・『R（レプリロギダマ）・S事件』のあと、機動六課の名は大きくなった。

その中でも最も注目されたのが銀時、ネプテューヌ、桂、神楽、エリザベス、月詠であった。

銀時は魔法を使わずに剣だけで活躍をした為、伝説の英雄の存在は本当であった事を確信する人物も増えた。コレにより剣で戦う魔導士達が刺激されて剣術をさらに磨き上げる物が多くなった。あと銀時のバリアジャケット（銀時自身はこれをコスプレだと思っている）は、超が付くほど人気が出て、今には銀時のバリアジャケットそっくりのバリアジャケットを考える人が出たりグッズが出たりしている。当の本人は「え？何で？」と不思議になったが、とりあえず相手はあの姿をかっこいいものと認識されているようだ。

ネプテューヌは銀時に負けを取らない剣術と要塞と叩き切った魔法でミッドチルダ中を覆いに熱狂させた。ネプテューヌの活躍を見た人々はネプテューヌに注目し、その実力は機動六課最強と噂されて人気が高まった。中には隠れファンがネプテューヌかパープルハートのなどのグッズを作っているとかいないとか。

桂は銀時同様、優れた剣術だけじゃなく特殊な爆薬を使いこなすなど、まさに『狂乱の貴公子』としての名に相応しい戦いぶりをした為、誰もが憧れる人物として注目される。

神楽もスバルと同様に潜在能力は機動六課の中でも最強と評価されており、まさに『歌舞伎町の女王』の名に相応しく、『ミッドチルダの女王』として注目を浴びせられた。

エリザベスは外見とは裏腹に、プラカードとキャノン砲を使いこなすと言う桂のペット（！？）に名に恥じない『狂乱の聖獣』として、特に子供達のヒーロー的な人気を持つ。

月詠はクナイと言う飛び道具を自由自在に操って敵を翻弄する活躍をし、その美しきさに男性は見惚れて数多くの隠れファンクラブが作られた。

あとノワール達もネプテューヌの煽り（？）でファンが出来てしまったのは言うまでもなかったりする。
ちなみに本人達は恥ずかしかったらしいが、満更でもない。

新八の場合は・・・・・・・・目立ちたかったにもかかわらず、目立ち過ぎるのは恥ずかしいため辞退したらしい。

かくしてなんやかんやで事件は解決した。

そして事件から三日後の夜。

銀時は自室で寝ていた。

銀時「あ～・・・ダリィ～…」

まだ事件の疲れが残っているのか、そんな言葉を出す。
すると、何か重たいものを感じた。

銀時「あれ?何か重い・・・ってまさか（汗）」

銀時は汗を流して布団をめくる。
中にいたのは赤い髪の女性。っと言うかリリスであった。

銀時「なんだリリスか。サチコかと思った。・・・・・てか何でこいつがここに!?」

今頃気づく銀時。
すると、リリスが銀時に這い上がってくる。

銀時（ちょ、こいつ何やってんだ!?）

銀時は焦る。もしこんな状況をなのはかフェイトが見たら確実に殺される。
銀時は慌ててリリスをどかそうと思ったら、よく見るとリリスの様子がおかしい。

銀時（なんだ?）

銀時はリリスの顔を見る。
リリスは銀時を見て、にっこりと笑い、

銀時に犬歯を立てた。

翌朝

イストワール「それは災難でしたね」

イストワールが呆れの声で銀時に言う。
銀時は体中噛まれ跡がいっぱいあった。
言うなれば不幸の幻想殺しがシスターにやられてる感じで。
フェイト達は銀時を心配し、リリスはと言うと、ネプテューヌと遊んでいる。

フェイト「それにしても何でリリスが・・・」
イストワール「それはサキュバスの性ですよ」

イストワールが説明する。

イストワール「サキュバスは夜の時にある条件を満たすと本能が出るんです。その条件は満月の日に現れます」
銀時「何それ？狼男かよ」

銀時は突っ込む。

ランドル「要はあれじゃろ？夜になったら気をつけろってことじゃ」
ファルコリア「銀時殿はある意味人気があるようだな」
イリス「少し同情しますね」

イリス達は銀時に同情する。

ちなみにイリス達は事件後、別世界でマイホームを築き、今もゆっくりと暮らしている。
イリスは体が元に戻ったが、大怪我した影響か、今車椅子に乗っている。
リハビリを行って少しずつ回復している。

銀時「同情すんのやめてくんない？何かこっち沈むよ・・・」
フェイト「ああ、銀時しっかりして」

銀時は顔を沈める。
なんやかんやでも一応平和である。

夜

真夜中で一人起きているのがいる。リリスである。

リリス「またあの夢・・・」

頭を抱えるリリス。
彼女はよく良く夢を見る。
夢の内容は、血まみれで沢山の死体を眺めるサキュバスの光景が。

リリス「私の過去の記憶と関係が・・・？」

リリスは考え込むが、答えは導けなかった。

翌朝

新八「おはようございまーす」
フェイト「おはよう銀時」
銀時「うぃーすおはよう」

みんなそれぞれ朝の挨拶をする。
銀時があたりを見渡す。

銀時「あり？ネプテューヌは何処だ？」
はやて「ネプちゃんなら買い物に行かせたで？」

はやてが言って、銀時はそうかと言う。
銀時は外を見ると、ネプテューヌを見つけた。リリスもいる。
銀時達は外に出る。

ネプテューヌ「そんで、銀さんはいろいろとチャランポランだけどいい人なんだよ」
リリス「そうなの～？」
ネコ？「チャランポランじゃ分らんニャ」
植物な女の子？「なんか興味あるね～」

ネプテューヌはリリスとリリスのようにほとんど裸に近い猫耳と尻尾の生えた女性と、全身緑色で２つのつぼみのお団子と下半身が花のような少女が話し合っていた。

銀時・新八「ちょっと待てェェェェェェェェェェ！！！」

銀時と新八が大いに突っ込む。

ネプテューヌ達がきづく。

ネプテューヌ「あ、銀さん」

銀時「あ、銀さん、じゃねぇよ！！お前そいつらどうしたんだよ！！」

銀時は猫な女性と植物な少女を指差す。

ネプテューヌ「拾った」

ネコ？・植物な女の子？「拾われた（ニャ）」

新八「捨て猫かよ！！明らかに猫っぽいのがいるけどね！」

新八は突っ込む。

ミーニャ「あたしはミーニャって言うニャ」

アルラ「私アルラ、よろしく」

銀時「あ、どうもご丁寧に・・・って違う違う！そうじゃなくて！ネプテューヌ、お前こいつら拾ったのは分かったが、一体何なんだ？」

銀時はネプテューヌに説明を求める。

ネプテューヌ「実はあの子たちはリリスと同じあそこで作られたみたいで、仕方なく私が預かることにしたの」

ネプテューヌの言うあそこことは、シグマが使っていた研究所のこと。

銀時は無言になる。

ミーニャ「ニャニャ、ネプテューヌ、この天然はなんニャ？」
銀時「天然って何？パーマか？天然パーマって言ってんのか？」

銀時はミーニャの一言に突っかかる。

ネプテューヌ「あはは、この人はさっき言ったように銀時って言うんだよ」
アルラ「ふ～ん・・・」

ネプテューヌが紹介し、アルラは興味深そうな顔をする。

ミーニャ「こいつがニャ？とても強そうには見えないニャ」
ネプテューヌ「見た目に反してすっごく強いんだよ銀さんは」
銀時「見た目に反しては余計だ」

銀時はネプテューヌにツッコム。

ミーニャ「なるほど。強いならきっと体も頑丈そうニャ。だからサンドバックになるニャ」
銀時「なんでそうなるんだよ！サンドバックは新八でいいだろ！」
新八「オイィィィィィィ！！僕を犠牲にするなァァァァァァァァ！！！」

新八はバトンを渡した銀時に怒鳴る。

ミーニャ「誰ニャ？その新八って」
銀時「新八とは地味な駄目ガネのことだ」
新八「何誤解を招くようなこと言うの！」
ミーニャ「お前が新八ニャ？」

ミーニャは新八に顔を近づけて見る。
ミーニャと眼が合った新八は、間近に女の子が顔を近づけてきたことに心臓の鼓動が速くなる。

新八（お、女の子の顔が僕の近くに!?落ち着け!ＣＯＯＬになるんだ志村新八!!）

女の子の免疫はあまり少ない新八にとって、どうするべきか戸惑う新八。

モニュ

ミーニャ「ニャ?」

誰かがミーニャの胸を揉まれる。神楽だ。

神楽「おいテメェ、いい乳持ってんなぁ〜。それこっちによこせヨ〜」
新八「神楽ちゃん何やってんの!?」

物干し奏にミーニャの胸を揉み続ける神楽。
新八とフェイト達はこの光景に顔を真っ赤にする。

ミーニャ「お前こんな脂肪の塊に興味があるのニャ?変わったやつニャね」

ミーニャ自身は揉まれても全く動じず、自分の豊満な胸を脂肪の塊にしか見てないらしい。

アルラ「ホントその胸は羨ましいわね～」
ミーニャ「…アルラもなにするニャ」

背後から胸揉みされるミーニャ。

銀時「お前らだけで勝手にやってろ」

銀時は手を振ってこの場を立ち去ろうとした。
が、アルラが手を伸ばして、と言うよりツタを伸ばして銀時を捕まえて体に寄せる。

アルラ「そんなこと言わないでよ銀時。一緒に遊びましょう?」
ミーニャ「何やってるニャアルラ!そいつはあたしが使うんだニャ!」
リリス「だ～め。銀時は私の～」
ネプテューヌ「ちょっと!銀さんは私のだからね!」
銀時「いつから俺はお前らの物になったんだよ!」

銀時はネプテューヌ達に取り合いにされる。
しかしこれを見たフェイトは黙っているわけがない。

フェイト「銀時は私のだよ!!」
なのは「フェイトちゃん、抜け駆けはいけないなの♪」
シグナム「何かやってると思えば、銀時は私のだ!」
リインフォース「あなた方に銀時は渡しません!」
ティアナ「兄さんは渡さない!」
スバル「銀さんは私のだよ!」
猿飛「何かやってると思ったらあなた達何やってるのーー!!」

もはやしっちゃかめっちゃかである。さらにナンバーズも加わって

さらにバトルまで展開した。ちなみにネプテューヌとリリスとミーニャとアルラは参加してません。
そしてその戦いは夕方まで続いたとか。

そして夜。ミーニャとアルラが加わってさらに賑やかになった。

そして深夜、リリスは眠りに入り、夢を見る。

何も無い荒野。そこに沢山の死体があった。そしてそこに一人の女性が血まみれで立っていた。

???「・・・またたくさん殺したのね・・・」

女性は立ったまま呆然と死体を見る。
女性はボロボロのローブを身に纏っているが、頭に角が生えていた。
そして手には引き裂いたかのように血がべっとり付いている。

???「・・・どちらにしろこの場所に用はないわ・・・」

女性・・・いや、サキュバスはこの場を去ろうとした。

サキュバス「…ところで私に何の用？」

サキュバスはふりかえらず言う。

？？？「フッフッフ…君をサンプルにするものだよ」

そこにいたのはシグマとイリスである。
ちなみにファルコリア達はおらず、今の時期は１５年前である。

サキュバス「私を？」
シグマ「そうだ。だがもう死ぬがいい」

シグマが言うとイリスがもう突進で神速の如くゼロセイバーを振る。
サキュバスは気配を感じてかわす。

サキュバス「本気のようね。だったら遠慮なく…倒(ころ)してあげるわ」

サキュバスは爪を立てて殺気を放つ。
そしてイリスにも負けない神速でイリスを切り裂こうとする。
イリスは殺気を感じてゼロセイバーで防ぐが、重い一撃を受け、交代する。

イリス「クッ、強い・・・」
シグマ「素晴らしいな。やはりサンプルにふさわしい」

その後もサキュバスとイリスは爪とゼロセイバーで攻撃しあう。

サキュバス「しつこい、これで終わりにする」

サキュバスは右手に氷の魔法、左手に炎の魔法とその間に蝙蝠を出し、合体させると白い槍みたいなものができる。

イリス「！これは強力だ！ゼロセイバー！」

ガシャン×１１

イリスは異変に気付き、カートリッジを１１回ロードする。
ゼロセイバーに炎が纏い、両者技を繰り出した。

サキュバス「ツインアトリビュート！」
イリス「ゼロブレイカー！！」

２人の技が直撃後、

ドオオオ

切られたサキュバスは倒れる。

シグマ「フフフ、ではサンプルを回収するか」

薄れゆく意識の中、サキュバスは思う。

サキュバス（もうこんなの疲れたわ。せめて私は楽しく暮らせることをしてみたい。もし転生できるならそんな生活をしてみたい。そして・・・優しいお母さんと・・・過ごして見たい・・・）

今の人生を諦め、サキュバスは二度と目覚めない眠りについた。

リリス「!!?」

夢から覚めると、体から汗が出る。

リリス「・・・今のは私に記憶なんだね・・・」

リリスは思い出す。あの夢は自分の記憶なんだと。

ネプテューヌ「何か悪い夢でも見た?」

リリス「!」

寝ていたはずのネプテューヌが声をかけてきた。

リリス「…何時から」

ネプテューヌ「リリスが起き上がった時」
リリス「それ思いっきり最初じゃん」

リリスは突っ込む。

リリス「あのね、思い出したんだ。自分のこと」
ネプテューヌ「・・・」
リリス「でもね、私母さんと一緒に過ごしたいんだ。あのとき楽しかった」

リリスはネプテューヌと話し合った時のことを思い出し、涙が出る。

リリス「だからわたｓ「いいよ」…え？」
ネプテューヌ「記憶がどうだろが、リリスはリリスだよ。それに・・・」

ネプテューヌは言う。

ネプテューヌ「リリスっておっちょこちょいなとこがあるしね」
リリス「母さん！！」

さっきのシリアス壊したことに怒るリリス。
同時に嬉しさが出る。

リリス（ありがとう）

リリスは静かにお礼を言った。

ネプテューヌ（（ボソッ）どういたしまして）

ネプテューヌは聞こえない程度で返した。

翌朝

ミーニャ「ニャー」
新八「クォラ待てこの泥棒猫がァァァァァァ！！！」
鈴「待てと言われて待つ馬鹿はいない！いると言えば真人位だ」

ミーニャと鈴が新八から逃げている。
あとなぜかミーニャと鈴は仲良くなっていた。ネコ繋がりだからだろうか。
あと逃げてる原因？ミーニャが新八のメガネを盗んだからだ。

クド「わふ～、アルラさんいい匂いがするです～」
アルラ「そうでしょ？」
ユイ「はぁ～、いやされる～」

クドとユイはアルラからはっする香りに癒されている。

ネプテューヌ「順応早いね」
リリス「そうだね」

ネプテューヌとリリスは眺めて笑っている。

ネプテューヌ「これからもよろしくね、リリス」
リリス「うん♪」

2人は顔を見合わせ、にっこり笑った。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リリス「は～い、アシストするのはリリスと、」

ミーニャ「新しく入ったネコマタのミーニャと」

アルラ「アルラウネのアルラがアシストするよ」

銀八「じゃあペンネーム『月光閃火』さんから行くぞ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…慌てて紅くなっているファルコリア、スッゲー可愛いな…

（照）。

輝刃「あ…何処からともなく魔力砲撃が…（汗）。」

へ？…のぎゃあああああぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーー！？！？！？（何処からともなく飛んできた魔力砲撃をモロに喰らい絶叫する（汗）

輝刃「やれやれ…さて、まずは俺から質問だ。」

1．イリスに質問だ。今回の話のラストで下半身をガップリ失った訳だが…直すアテはあるのか？

あ～…確かにそれは気になるな～。（黒焦げ）

輝刃「…大丈夫なのか？」

まぁな…伊達に【万達者（オール・マスター）】持ってねぇし。あ…次は俺から質問だ。

2．作者に質問だ。…ぶっちゃけ、オリキャラ投稿してもいいかな？何か読んでいく内に沸々とアイディアが浮かぶんだよなぁ…。

輝刃「…お前は相変わらずオリキャラ設定の泉が頭ん中でわんさか浮かぶよな？」

ああ…その代わり、文才はまるっきしゼロに近いけどな…（汗）。』

」

アルラ「なにそれ？アイディアは出来ても文章の才能はないってこと？」

銀八「ちょっとそれ駄目だって！『月光閃火』さん傷つくから！」

アルラの毒舌に銀八は冷や汗流して突っ込む。

イリス「今回の話で分かるように元に戻っています。そして慣れるためにリハビリをしています」

真王「『月光閃火』さんの考えたオリキャラですが、とりあえず参考にしようかと思います。何処に出すかなんて知りませんですけど。そしてオリキャラのプロフィールをいただきました」

『名前：エルダー・ザイン
正式名称：対魔導戦式強化人間【アルファード】
年齢：見た目１０代後半くらい（実際年齢ウン千歳（汗）
性別：♂
容姿：『．ｈａｃｋシリーズ』のハセヲを大人っぽくした感じ
性格：寡黙で近寄りがたいオーラを漂わせているが、曲がった事が大嫌いで正々堂々を好む
魔力ランク：ＳＳＳＳ
希少能力：【魔導錬装（マルチ・タスク・マジカ）】【魔装具】と呼ばれる魔力を帯びた武器や防具を錬成し纏う能力、練り込む魔力の量によって【魔装具】のランクは上がっていく、またオリジナルの【魔装具】を作り上げる事も出来るがその際一から作り上げる為最初は少々時間が掛かる、錬成する【魔装具】には全て“非殺傷”・“殺傷”に切り替え可能）
詳細：この所頻繁に起こっている【管理局員傷害事件】の元凶であり、強者を求めて流離う【魔導錬装士（マルチ・タスク・ウィザード）】の青年
その正体はかつてとある研究者によって立ち上がった【プロジェクトＭＴＷ（マルチ・タスク・ウィザード）】の唯一の成功体であり、それ以前の記憶は全く無い（元々はごく普通の硬派な青年武闘家だった）

また、生まれ持っての不老不死の体質持ちであり、死ぬ事も老いる事も出来ない（とは言っても普通に病気は出るし怪我もする）好きな女性のタイプは『シャマル』のようなおしとやかな人余談だが、舌と内蔵がとてつもなく頑丈でどんなにトンデモ料理でも平気で平らげる（が、さすがに『シャマル鍋』を食べたあとは数時間下痢に悩まされそうだが…（汗）

こんな感じだ。ちなみに、イメージＣＶは『櫻井　孝宏さん』で…検討よろしく頼む。（一礼）』

ミーニャ「それじゃあ『月光閃火』、廊下に立つニャ。次はペンネーム『鳴神ソラ』からニャ。『良かった…黒神さんの所の様にならなくて…

ネス「あれは悲しかったよね…」

リュカ「うん…」

カービィ「と言うか！ダークソウルっぽいのが喰らっていた奴に！！？」

スネーク「しかも後の２つも見覚えのある世界だな…」

マリオ「…最後の奴が最後に戦う相手かもな…」

フォックス「そんな訳で質問『イリス達は銀時やネプテューヌ達以外のメンバーを始めて見た印象はどんな感じ？』」

カービィ「真王に質問だよ～『ネプネプ達以外のネプネプ達の世界

の住人が出る可能性はあるって言ったけど…どんな人が出る可能性あるの？』」

スネーク「もう1つ真王に質問『イリス達は誰かに好意を寄せる事は考えてるのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

イリス達「ある意味普通の人たちかと…」

ランドル「ワシ的にはどこか潜在能力が隠れているように思えるが…」

真王「住人と言えばアイテム売りの少女とか自称正義のヒーロー（ペッタンコ）がいますね」

銀八「おい今正義のヒーローと書いてペッタンコって読まなかったか？」

真王「イリスたちのことなら銀時を計画しています。ランドルだけは桂です」

銀八「・・・『鳴神ソラ』！廊下に立て！」

ミーニャ「（それは只の八つ当たりニャ）…ペンネーム『黄色いのなにか』からニャ。『新八に質問。新八は分身の術とか使わないんですか？眼鏡を大量に買って置くだけで充分ですし、案外敵も騙されると思いますよ』それ本人が聞いたらありがた迷惑ニャ」

アルラ「それどころか余計本物の存在が薄くなるわよ」

リリス「う～ん、それじゃあ『黄色いのなにか』さん、新八を応援してね♪」

真王「次回のアシストはサチコです。では」

第四十七訓：ああ、やっぱり家族が一番だわ（後書き）

真王「次回はペッタンコ組が卒業します！？」

ミーニャ「次回『体と胸は比例できるものじゃない』テイクオフニャ」

～予告～

ナレーション「リリスが何やら新しい魔法を習得したようです」

第四十八訓：体と胸は比例できるものじゃない（前書き）

真王「リリスの新魔法をお披露目です」

第四十八訓：体と胸は比例できるものじゃない

銀時「フゥワッハ～～～……」

機動六課の朝、銀時は外であくびしている。

銀時「朝日さんおはようございま～す・・・・・・・・・・ってか？」

ちょっとおふざけを言う銀時。
とりあえずそう言って部屋でまた寝ようと思ったら、視界に黒い長髪で赤い服の女性を見つけた。
女性は銀時に気づいて走り出した。

？？？「銀時～！」
銀時「おわっ！」

いきなり女性が銀時に抱きついた。

？？？「えへへ～、やっと銀時に抱きつけた～」
銀時「誰だよおい！いきなり抱きつきやがって！」

銀時は女性に怒鳴る。

銀時「ん？いや待て。なんか見覚えがある様なない様な…」

銀時は女性を見て引っ掛かる。
女性をよく見ると、一ヶ所だけ特徴的な髪形、見覚えのある赤い服、そして肌が青白い気がする。

銀時「・・・お前、まさかサチコか？」
サチコ？「そうだよ銀時～」

銀時は聞いてみると女性はサチコだと答えた。

銀時「ギャフワアアアアアアアアアアアアアア！！！」

当然銀時は絶叫してサチコから離れた。
勢いあまって壁に衝突したが。

フェイト「銀時！？」
新八「どうしました銀さん」
ネプテューヌ「銀さんどうしたの～？」

ぶつかった音なのか叫び声なのか、フェイト達がやってきた。
が、それが一番不味かった。

フェイト「銀時、誰なのその人…」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
なのは「銀さん私達がいながら…」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
シグナム「返答によってはただでは済まんぞ…」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
リインフォース「私とじゃ不満ですか？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
アルフ「覚悟はいいかい？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
スバル「酷いよ銀さん・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
ティアナ「これはどういうことかな兄さん…」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

フェイト体はサチコに抱きつかれている銀時を見るや否や、悪魔でも殺せる殺気を出している。
なのは達の殺気に新八たちは真っ青にしてガタガタ震えている。（

ネプテューヌは除く）
しかしなのは達はサチコだと気付いていない。銀時は訳を説明する。
銀時「待て待て待て！お前らよく見ろ！こいつこう見えてサチコだから！」
銀時は説明するが、なのは他の殺気が消えるどころかグンッと上がった。
あるぇー？なんで消えてないの？なんで殺気が増えてるわけー？
もはや絶体絶命かと思ったら、
リリス「サチコちゃーん」
サチコ「あ、リリスちゃーん」
リリスがサチコを呼んでサチコは銀時から離れて行った。
なのは「え？今のサチコちゃん？」
なのは達の殺気が消える。
サチコ「そうだよ～」
リリス達と一緒に来たサチコが答える。
フェイト「え？でもなんでその姿？」
サチコ「え～と、リリスちゃん」
リリス「わかった。解除」
リリスがサチコに手を向けて言うと、サチコは元の小さな小学生くらいの大きさにもどった。

なのは「ふえええええええええ！！？」
銀時「おい、もしかして今のお前がやったのか？」
なのは達はおどろき、銀時はリリスに聞いてみる。
リリス「うんそうだよ。これは相手の体を大きくする魔法なんだ」
リリスが説明すると、神楽と九兵衛がガバッとリリスの手を握る。
神楽「それ本当アルか！？だったら今すぐやるネ！」
九兵衛「頼む！この僕に胸をくれぇエエエエエエエエエエエ！！！」
必死な顔で要求する2人。
リリス「う～ん、分かった。でもその前に・・・」
リリスは離れて呪文を唱える。
リリス「ボディアップ」
リリスは神楽と九兵衛に・・・ではなくネプテューヌとサチコに魔法をかけた。
ボボーン！
煙が発生し、晴れるとそこに大人になったサチコと、膝まであるピンクよりの紫の髪に身長と胸がなのは並になったネプテューヌがいた。

なのは「ホントに大きくなった…」
なのは達が驚いていると、
大人サチコ「銀時〜」
銀時「ごふっ！」
大人サチコが銀時にタックル（本人は抱きついてるつもり）してきた。
銀時は倒れ込む。
大人サチコ「えへへ〜、銀時〜」
銀時「ちょ、おま、止めて。ホントこっちこないで。お願いだから、３００円あげるから！」
顔をいっぱい汗かいて超真っ青にしてさっさと離れるよう言う銀時。
大人サチコ「だめなの？（涙目）」
銀時「ヴっ！」
サチコの涙目を見て精神に深いダメージを負う銀時。
大人になったサチコは魅力的になり、胸も大きい。
すると誰かが銀時の手をひっぱりだした。
それは大人になったネプテューヌである。
大人ネプテューヌ「大丈夫銀さん？」
銀時「あ、ああ、まぁな……って何やってんの？」
なぜかネプテューヌが銀時にくっついている。

大人ネプテューヌ「一つ聞くけど銀さん、私って…どうかな？」

大人になったネプテューヌは、パープルハート並に美しく可愛くなっている。

風によってさらさらと流れる髪はさらに美しい。

銀時「えっと、まぁ…奇麗じゃね？」

大人ネプテューヌ「／／／／／／」

ネプテューヌは褒められて顔を赤くする。

そしてなのは達は悪魔でも殺せる殺気を出す。

ミーニャ「他にも誰かなるやつはいるかニャ？」

？？？「ハイハイハイハイハイィィィィィィィィ！！！」

そう大声をあげて手をあげているのはヴィータであった。

そして隣にブランがそっけなく手をあげている。

ミーニャ「じゃあその二人ニャ」

神楽「んだよ～、私にもさせろよ～」

九兵衛「そうだ！僕にも今すぐだ！」

ミーニャ「駄目ニャ」

神楽と九兵衛が要求するが、ミーニャが打ち止めする。

リリス「それじゃあ、ボディアップ」

ボボーン！

ヴィータとブランの体が変化した。

2人とも体が大きくなり、出ると子は出て引っ込んでいるところは引っ込んでいる。

ヴィータ「うおーー！すげーー！！」

ヴィータは大きくなった体に喜ぶ。
ブランは無表情だが、少し嬉しさが見える。

モニュ

はやて「ホンマに大きくなりおったなヴィータ」
大人ヴィータ「はやて！？」

いきなり後ろからはやてがヴィータの胸を揉み始めた。

ヴィータ「あ、ちょ、はやて！そんなに揉むな／／／／」
はやて「いや～、こんな揉み応えのある胸は初めてや。そしてムカつくな～」
大人ネプテューヌ「それ嫉妬だね」
リリス「嫉妬だね」
ミーニャ「嫉妬ニャ」
はやて「そこ、黙らっしゃい」

はやては突っ込みながら胸を揉む。

リリス「次はあなた達？」
神楽「そうネ！早くやるヨロシ！」
九兵衛「頼む！この僕に胸を！」

2人はしつこく要求してくる。

リリスは魔法の準備を始めようとすると、後ろからアルラが耳元で囁いた。
そしてリリスは魔法を使う。

リリス「行くよ。ボディダウン」

ボボーン！

2人の体が変化した。
2人とも体が大きく……なっておらず、逆に小さくなっているのだ。そりゃもう小学生レベルに。

チビ神楽「な、なんじゃこりゃーーーーーーーーーーー！！！！」

小さくなった神楽が叫ぶ。
そのせいか声が少し高い。

チビ九兵衛「なんだこれはーーー！！！なんで僕等は小さくなっているんだ！！あと何で名前にチビが付くんだ！？」

小さくなった九兵衛も叫ぶ。

リリス「これは体を大きくするボディアップと真逆の魔法、ボディダウンっていうんだよ」
チビ神楽「なんで私達が小さくされなきゃならないネ！」
アルラ「どうせなら大きくなるより小さくなった方が面白いと思って。クスクス・・・」
チビ九兵衛「犯人は貴様かーーーーー！！！」

九兵衛と神楽は主犯であるアルラを追いかけるが、小さくなったせ

いかスピードが遅くなっている。

ミーニャ「まぁあいつらはほっといて、あんたはいつまでやってるニャ」

はやて「アウチッ！」

いつまでもヴィータの胸を揉み続けるはやてにチョップするミーニャ。

はやて「いいやんかあんな羨ましい胸を持って。しゃーない。ミーニャちゃんにすばらしい胸を…」

ミーニャ「さわんニャボケーーーーーーーーーーーー！！！！！」

はやて「ウギャァァァァァァァァ！！！！！」

ミーニャは虫唾が走ったのかはやてを蹴り飛ばした。

翌日

六課の外でネプテューヌとリリス達、そして銀時とリトルバスターズと戦線メンバーズとサチコ達がいた。

ちなみにネプテューヌ達は元の大きさに戻ってます。

理樹「えっと、リリスさんが魔法で体を変える力があると？」

リリス「そうだよ」

理樹が質問するとリリスは答える。

ミーニャ「百聞は一見に如かず、まぁクドちゃんが見本にするニャ」
クド「わふっ!?私なのですか!?」
アルラ「そうよ。リリス、やっちゃって」
リリス「ボディアップ」
クド「ちょ…ま…」

ボーン！

クドが止めようにも虚しく魔法がかかった。
そして煙がはれると、もうボン！キュッ！ボーン！な体を持ったクドがいた。

大人クド「わふー！ホントに大きくなったのです～」
理樹「・・・ホントに大きくなった」
葉留佳「こりゃグラマーレベルだね～」
椎名「あさはかなり」
ユイ「なんだろう・・・この敗北感」

周りはそれぞれ感想を漏らす。
すると小毬が来ヶ谷の様子がおかしいことに気づく。

小毬「ゆいちゃん？」
来ヶ谷「あははははは…大きくなったクドリャフカ君はクドリャフカ君ではない。これは夢だ、幻想なんだ。アハハハハハ・・・」
小毬「ゆいちゃんんんんんんんんんん！！！！！」

大人になったクドのギャップについていけず、壊れかけている来ヶ谷。
周りは苦笑いを浮かべる。

アルラはさっきから理樹をじーっと見ている。
理樹はアルラに気づく。

理樹「あの…僕の顔に何か付いてますか?」
アルラ「いや別に。只あなたのその顔と……（ニヤッ）」

アルラは何かを思い出す。
その時理樹は嫌な予感がする。

アルラ「ミーニャ、何でもいいからドレス持ってきてくれない?」
ミーニャ「はやてのとこからメイド服ならあるニャ」
アルラ「じゃあそれで」
理樹「いやいやいやいや、何やろうとしてんの!?そしてなんでネプテューヌさんとリリスさんは僕をとらえてんの?」

ミーニャはメイド服を取りに行って、理樹はネプテューヌとリリスに捕まっている。

ネプテューヌ・リリス「面白そうだから」
理樹「えええええええええええええええ!!!??」
ミーニャ「持ってきたニャ」

ミーニャはメイド服を持ってきた。

ネプテューヌ「それじゃあリリス」
リリス「結界発動!」
理樹「ちょっと待ってって嫌あああああああああああああああ!!!!!」

女の子っぽい悲鳴をあげて理樹は結界に閉じ込められました。

銀時「・・・なぁ、この後何が始まるんだ？」
恭介「これが開いたら分かる」

恭介達はこの後理樹がどうなるか知っているようだ。
そして、結界が解除された。

リリス「それじゃあお披露目～」

リリスが羽を広げると、そこに黒に短髪でかわいらしい顔を真っ赤にしてメイド服を着た女の子がいた。

銀時「え？誰？」
？？？「すみません銀時さん。僕です。直枝理樹です」

女の子は理樹と名乗る。
銀時はしばらく沈黙後、

銀時「エエエエ

今の理樹の姿はどっからどう見ても立派な女の子にしか見えない。

新八「どうしたんですか銀さん。また変な物拾ったんですか？」
フェイト「どうしたの銀時？」

銀時の大声を聞いて新八たちとフェイト達がやってきた。
そして女装姿の理樹を見る。

新八「銀さん誰ですかその子！しかも可愛い！」
フェイト「銀時、もしかしてその子迷子？」
神楽「なんだヨ～。私よりかわいい奴連れて来やがって～」
なのは「わぁ～、お人形さんみたいだ～」
桂「見事なかわいさだな」
エリザベス『全くです』

みんなそろって理樹だとは気付いていない。
理樹は可愛いと言われて俯く。恥ずかしさなのか、ショックなのか。
そこで鈴が言った。

鈴「可愛いように思えるが、こいつは理樹だぞ」

その一言に周りはまた沈黙した。
そして、

新八たち・フェイト達「エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！？？」

大絶叫した。

新八「理樹さん！！？マジで理樹さん！？ってエエエエエエエエエ

エエエエエエ！！？」
フェイト「嘘！？ホントにあの理樹なの！？」
桂「何と！？しかし全然違和感を感じん…」
シグナム「なんだと…しかしやっぱり」
九兵衛「なんだこの無駄なかわいらしさは…」
スバル「うぇぇぇぇぇぇ！！？理樹君！？ホントなの！？」

銀時とほぼ同じリアクションをする人たち。

理樹「・・・もう好きにして…」

理樹は諦めた顔になり、銀時は理樹の肩に手を置いた。

余談だが、ヴァイスが理樹の写真を撮って売ってみたところ、ものすごい人気があり、隠れファンが理樹を狙っていることなど理樹はしるよしもない。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

サチコ「は～い、今回私がアシストすますよ～」

銀八「もう一緒にいるから少し慣れたな…。んじゃペンネーム『月光閃火』さんから始めっぞ。『よぉ…月光閃火だ。良かった…参考にしてくれるようで。」

輝刃「だな…やはりやってみなければ分からない…という事だな…。」

だな…あ、今回も質問…行きまーす！

1．作者に質問だ。今後出てくるだろうキャラ（特に女性陣）の中で、新八に惚れる（またはそれに準ずる）キャラって…居る？

輝刃「…余程新八の扱いに危機感を感じているようだな…。次は俺からだ。」

2．リリスに質問だ。今回銀時の生気を啜った訳だが…やはり他の男性陣の生気も啜るのか？

あ～…確かに、リリスって『サキュバス』だからな…。…俺の生気って彼女（リリス）にとって、どんな味なんだろう？

輝刃「…根こそぎ吸われるなよ？」』」

真王「新八に惚れるというより気にしている人がいるならミーニャとアルラですかね。と言うかミーニャとアルラは新八を気にいっていると言えばいいんでしょうか。あと言っておくがリリスは生気を吸ってません。あれは噛んだだけです」

サチコ「『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい。ペンネーム『黒神』さんから質問だよ。『質問します。

銀時へ

今回デバイスを手に入れ、バリアジャケットはコスプレになっちゃいましたけどどう思いますか？

奏へ

麻婆茄子の存在は認めますか？

新八以外の皆さんへ

新八が彼女出来る可能性はあると思いますか？
それぞれの予想を聞かせてください。

以上。』まず順番に答えるよ～」

銀時「もう痛い視線を向けられるのはやだよ…」

真王「よほど嫌いなのか。２つ目」

奏「おいしいわ」

真王「麻婆なら何でもいいのか？３つ目」

新八以外全員「分かりません」

真王「ああ言っても新八に春が来る可能性もありますから。では『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『鳴神ソラ』さんからだ。『なるほど…リリスが見ていたのは前世の記憶だったか…

マリオ「新しい家族も増えたな～いや～こりゃあ賑やかになるな～」

ルイージ「（…苦労しそうだな銀さん；）」

フォックス「（あの状態を見るからにな…）」

ネス「それにしても良かったよね～銀さんはＢＪが変な目で見られなくて」

リュカ「それで次回はリリスが手に入れる魔法って…」

スネーク「成長魔法か…もしくは幻惑関連の魔法か？」

マリオ「そんな訳で質問『リリスは新しく家族に加わった２人の第一印象はどんな感じだ？』」

ルイージ「皆に質問『銀さんとネプテューヌを四字熟語で表すならどんな四字熟語？』」

ネス「イリスさん達に質問『銀さん達やなのはさん達以外で自分達と気が合いそうな人は誰？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「どんな魔法か気になるな～」『ズバリお答えしましょう」

リリス「ネコマタとアルラウネだけどいい人たちだったよ」

真王「銀時の場合はまだ不明ですが、ネプテューヌの場合は『鯨飲馬食』だとの事です」

イリス「私はどちらかと言うと恭介さんかゆりさんかネプテューヌさんと思います」

ランドル「ワシは来ヶ谷じゃの」

ファルコリア「私はイリス様と同じだ。あ、チンクもだな」

メーティア「真人さんと謙吾さんでしょうか」

バーニン「あたしは真人とノーヴェだな」

アイシー「私はユイと理樹と小毬とクドとネプテューヌだね」

シャチール「どっちかというと大山とか遊佐とか美魚かだな」

銀八「では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

サチコ「最後行くよ。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんだよ～。『リクオ「亀鳥虎龍先生が新たに書く『万事屋奇譚幕』の奴良リクオです。はやてさんに質問です。　人の上に立つ人として、どんな責任を背負えばいいんでしょうか、教えてください！！　これは奴良組若頭として、真剣に言ってるんです！！」

阿良々木
「同じく『万事屋奇譚幕』の阿良々木だ。　そっちの新八に質問！　銀さんがこっちの新八より、僕のツッコミを求めるんだけど、どうすれば良い？？」『」

はやて「それはな、自らがボケのトップを目指すんや」

真王「はい全然参考にならない答えです。私から答えますと、人の上に立つための覚悟が必要だと思います」

新八「あと阿良々木さん、どうすればいいって言われても僕はどうするつもりもありません！」

真王「では『亀鳥虎龍』さん。初めての感想をありがとう。次回は理樹をアシストにします。それから『鳴神ソラ』さんに前回の『第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する』の質問ですが今度は『マリオたちならどんな能力ですか？』そしてもう一つ、『『スーパーマリオくん』を持っていますか？持ってるならそれは好きですか？』」

サチコ「たしか『沢田ユキオ』って作者の漫画だよね？」

真王「ええ、私あれ大好きです。ではまた会いましょう」

第四十八訓：体と胸は比例できるものじゃない（後書き）

真王「次回は何とランキングバトルを開始します。ではまた」

ランキングバトルその1（前書き）

真王「ランキングバトルの始まりだ！」

ランキングバトルその1

ある日、恭介が、

恭介「何時もシリアスとかギャグもんとかよりももっと凄いものでもやりたい！そんなわけでいきなりにランキングバトルを始めるぞ！」

っと、いきなりな展開で始まってしまいました。

ネプテューヌ「ハイこの通りいきなりな展開が始まっています」
ユイ「誰に言ってんの？」

ネプテューヌとユイが対峙する。
ネプテューヌはハリセンを、ユイは輪ゴムガンを持っている。

ネプテューヌ「まぁなにはともあれ行くよ」
ユイ「おっしゃ行くぞ！」
ネプテューヌ「その言葉づかいどうなの？」

スイーツ大好き小学生
ネプテューヌ
ＶＳ

荒ぶる小悪魔
ユイ

ネプテューヌ「称号変わってない…」
ユイ「クォラ！荒ぶるってどういう意味じゃぁぁ！！」

ネプテューヌ「まあいいや。行くよ！」

ネプテューヌの攻撃。

ユイ「いて！」

ユイに１００のダメージ！

ユイ「喰らえ！」

ユイの攻撃。
ユイは引き金を引き、輪ゴムを放った。

ネプテューヌ「いたっ！」

ネプテューヌに８０のダメージ！

ネプテューヌ「なんの！」

ネプテューヌの攻撃。

ユイ「ブホッ！」

ユイに２００のダメージ！

ネプテューヌ「レベルアップ！」

ネプテューヌはハリセンの使い方のレベルが上がった。

ユイ「舐めんな！」

ユイの攻撃。
ユイは引き金を引いて、輪ゴムを放った。

ネプテューヌ「余裕だよ♪」

ミス！
ネプテューヌはハリセンで防いだ。

ネプテューヌ「これでとどめ！」

ネプテューヌの攻撃。

ユイ「いて！ぐはっ！」

ユイに３００のダメージ！
ユイに４００のダメージ！

ユイ「やられた～…」

ユイは倒れた。

ネプテューヌ「わ～い、勝った～」

ネプテューヌ、ＷＩＮ！！

ネプテューヌ「はい、じゃあこの称号をあげるよ」

ユイは『チビ悪魔』の称号を手に入れた。

ユイ「ちくしょーーーーーーー！！！」

ユイはショックを受けた。

バーニン「ネプテューヌが面白い遊びがあるって聞いてきてみれば何でこうなってるんだ？」

ノーヴェ「あたしがしるか」

別の場所でバーニンとノーヴェが対峙している。

バーニンはユイと同じ輪ゴムガンを、ノーヴェは水鉄砲を持っている。

バーニン「まぁなんにせよ、いざ尋常に」

ノーヴェ「勝負だ！」

？

バーニン

ＶＳ

荒ツンデレ

ノーヴェ

バーニン「？ってなんだ？」

ノーヴェ「誰がツンデレだこらーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

バーニン「まずはあたしだ！」

バーニンの攻撃。

バーニンは引き金を引き、輪ゴムを放った。

ノーヴェ「ちっ！」

ノーヴェに１２０のダメージ！

ノーヴェ「今度はこっちだ！」

ノーヴェの攻撃。

ノーヴェは引き金を引き、水鉄砲を放った。

バーニン「うわ冷めたっ！そして痛っ！」

バーニンに２００のダメージ！

バーニン「お返しだ！」

バーニンの攻撃。
バーニンは引き金を引き、輪ゴムを放った。

ノーヴェ「いてっ！」

ノーヴェに１６０のダメージ！

バーニン「成程な」

バーニンは輪ゴムガンの使い方のレベルが上がった。

ノーヴェ「これもしかして詰めなきゃ攻撃できないのか？」

ノーヴェは水鉄砲の準備をしている。

バーニン「だったらあたしは攻撃できるな」

バーニンの攻撃。
バーニンは輪ゴムガンを二回撃った！

ノーヴェ「いてっ！ちっ」

ノーヴェに１８０のダメージ！

ノーヴェに１７０のダメージ！

ノーヴェ「ならこれでどうだ！」

ノーヴェの攻撃。
ノーヴェは引き金を引き、水鉄砲を放った。

バーニン「ぐわっ！」

バーニンに３００のダメージ！

バーニン「なんのっ！」

バーニンの攻撃。
バーニンは輪ゴムガンを二回撃った。

ノーヴェ「いて！グハッ！」

ノーヴェに１６０のダメージ！
ノーヴェに２００のダメージ！

ノーヴェ「また詰めなきゃいけないのか？」

ノーヴェは水鉄砲の準備をしている。

バーニン「それがあんたの敗北だ。くたばれ！」

バーニンは輪ゴムガンを二回撃った。

ノーヴェ「イテッ！ガハッ」

ノーヴェに２００のダメージ！
ノーヴェに１８０のダメージ！

ノーヴェ「畜生…」

ノーヴェは倒れた。

バーニン「あたしの勝ちだな」

バーニン、ＷＩＮ！！

バーニン「確か負けた奴に称号を…だったか？ならこれだな」

ノーヴェは『赤ツンデレ』の称号を手に入れた。

ノーヴェ「何か前のと変わってないような…まあいいか」

ノーヴェはとりあえず気にしないことにした。

沖田「どうもいまいち何かが欠けると思うんだが、まぁ気にしないことにしますか」
土方「何がだ総悟」

沖田と土方が対峙している。
ちなみにスカリエッティに誘われ、現在の状況にある。
土方には木刀を、沖田にはピコピコハンマーを持っている。

土方「ま、俺が勝手テメェに恥ずかしい称号をくれてやる」
沖田「そのセリフをそのまま返しますぜぇ」

クソマヨラー
土方
VS
S
沖田

土方「クソマヨラーってどういうことだコラーーーーーーー!!!!!」
沖田「あれ？俺は一文字だけ？」

土方「死ね総悟ーーー!!」

土方の攻撃。

沖田「甘いですぜ」

ミス！

沖田はピコピコハンマーで防いだ。

沖田「死んでくだせぇ」

沖田の攻撃。

土方「オボォッ！！」

土方に７００のダメージ！

土方「ちょっと待てェェェ！！なんでそんなハンマーであのダメージなんだよ！お前何かしたのか！？」

沖田「酷いなぁ。俺はなんも知らないですぜぇ？」

土方「納得できるか！死にやがれェェェ！！」

土方の攻撃。

沖田「ちっ！」

沖田に３００のダメージ！

沖田「これで終わりでさぁ」

沖田の攻撃。

土方「アラバァッ！」

土方に８００のダメージ！

土方「ぐあああああああああ！！！！」

土方は倒れた。

沖田「あっけないねぇ」

沖田、ＷＩＮ！！

沖田「じゃあ土方さんにはこれで」

土方は『ちんかす』の称号を手に入れた。

土方「ちんかすってテメェーーーーーーーー！！！」

土方は怒り出して沖田を追いかけた。

コンパ「き、緊張するです…」

アイエフ「落ち着きなさい」

緊張しているコンパにアイエフが落ち着かせる。

コンパはピコピコハンマーを、アイエフはおもちゃナイフを持っている。

なお、恭介曰く、ダッグを組むのもありだとの事。

近藤「やや、コンパ殿とアイエフ殿と対戦か」

エリザベス『意外な組み合わせだね』

向こうから近藤とエリザベスのペアが現れる。
近藤には割り箸を、エリザベスにはマジックハンドを持っている。

アイエフ「そっちも意外すぎるけども…」
コンパ「が、頑張るです」
近藤「このゲームだ。女子と言えど容赦は出来ん」
エリザベス『尋常に勝負！』

ゴリラ（笑）
近藤

オバQモドキ
エリザベス

VS

ドジっ子看護師
コンパ

気高き乙女
アイエフ

近藤「なんでーーー！！？なんでゴリラになってんのーーー！？そして（笑）って何！？」
エリザベス『私はオバQではありません』
コンパ「私はドジっ子ですか…」

アイエフ「乙女って何!?恥ずかしいんだけど!!／／／／」

コンパ「まずは私から行くです！」
近藤「フッ悪いがお譲ちゃん、勝つのは俺達だ」

近藤は余裕そうに笑う。

コンパ「え～～い！！」

コンパの攻撃。

ズゴッッッ！！！

近藤「ボブァッッ！！」

近藤に1億のダメージ！
近藤は倒れた。

アイエフ「いや待てェェェェェェェ！！なんでコンパの攻撃が1億もいくのよ！コンパ、あんた何をしたの!?」
コンパ「わ、私に聞かれても知らないです！」

アイエフはありえないことにコンパに問い詰めるが、コンパは手を振って否定する。
近藤は完全に気絶している。

エリザベス『隙あり！』
アイエフ「え?きゃ！」
コンパ「いたっ！」

エリザベスの不意打ち。
アイエフに２００のダメージ！
コンパに２００のダメージ！

アイエフ「やってくれたわね！」

アイエフの攻撃。

エリザベス『見切った！』

ミス！
エリザベスはマジックハンドで防いだ。

コンパ「今度はこっちです」

コンパの攻撃。

バキャッッ！！

エリザベス『アギャブラァッッ！！！』

エリザベスに１０億のダメージ！
エリザベスは倒れた。

アイエフ「だから待てぇエエエエエエエエエエ！！！なんでコンパの攻撃がそんなに高いのよ！！そして1桁上がってるし！！」

なにはともあれ、コンパ、アイエフペア、ＷＩＮ！！

近藤は『駄目ゴリラ』の称号を手に入れた。
エリザベスは『マスコット以下』の称号を手に入れた。
しかしなぜかコンパの称号が『破壊神』に変わった。

コンパ「なんですかこの称号はーーーーーーー！！！」

コンパは怒って近くのテーブルをたたき割った。
ピコピコハンマーなのに。
アイエフは苦笑いしながらコンパの暴走を止めるのだった。

桂「何と…。エリザベスがやられてしまっただと」
はやて「近藤さんとペアかいな。なにやっとんねんなあのゴリラは」

桂はエリザベスがやられたことを悔やみ、はやては近藤に文句を言う。
桂にはマジックハンドを、はやてにはハリセンを持っている。

サチコ「見〜つっけた〜♪」
リリス「あ、鬘と狸さん」

サチコとリリスのペアが現れた。
サチコには謎の本を、リリスには・・・なぜかレンゲを持っていた。
ちなみにレンゲとは、中華料理を食べる時に使われるアイテムです。

桂「字が違う、桂だ」
はやて「うちは狸ちゃうがな」
サチコ「それじゃあ行こうかな？」
リリス「始めるよ～」

狸部隊長
八神はやて

ヅラ男
桂小太郎

ＶＳ

自称ネプテューヌの僕
サチコ

目立ちやすい色女
リリス

はやて「前と変わってないがな…」
桂「ヅラじゃない桂だ！」
サチコ「リリス、準備はいい？」
リリス「ＯＫ」
はやて「あれ？自分の称号にたいして突っ込みはないんか？」

桂「まずは俺からだ」

桂の攻撃。

サチコ「おっと」

ミス！
サチコは謎の本で防いだ。

サチコ「今度はこっちだよ～」

サチコの攻撃。
サチコは謎の本を読み始めた。

サチコ「そしておばあさんはお城に入って・・・以下ストップ」
はやて「なんやそれ！続き聞かせてぇな！」
桂「八神殿！それは罠だ！」

ミス！
桂にダメージを与えられない。
はやてに２００の精神的ダメージ！

リリス「次は私だね」

リリスの攻撃。
リリスは素早い動きで、レンゲを桂の口に突っ込んだ。

桂「ゴフォッ！」

クリティカルヒット！
桂に９９９９のダメージ！

桂「八神殿・・・後は任せたぞ」

桂は倒れた。

はやて「桂さあああああああああああああん！！」

サチコ「やるじゃんリリス♪」

リリス「それほどでも♪」

はやては叫び、サチコとリリスはハイタッチする。

はやて「桂さんの仇や！」

はやての攻撃。

サチコ「いたっ」

リリス「きゃっ！」

サチコに３００のダメージ！

リリスの３００のダメージ！

サチコ「今度はこっちの番だよ～」

サチコの攻撃。

サチコは謎の本を読み始めた。

サチコ「おばあさんは城に入って・・・後ろからゴーストがおばあさんを引き裂いた！！」

はやて「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」

クリティカルヒット！
はやては９９９９の精神的ダメージ！
はやて「恐いの嫌や…」
はやては倒れた。
リリス「イエ～イ♪」
サチコ「勝った～♪」
リリス、サチコペア、ＷＩＮ！！
サチコ「えっと…これかな？」
リリス「はやてさんにはこれかな？」
桂は『まさにヅラ！』の称号を手に入れた。
はやては『ちびグソ狸』の称号を手に入れた。
桂「ヅラじゃない桂だ！！」
はやて「嫌やあああああああああああ！！！」
そして、その２まで続く。

全員「続くんかいィィィィィィィィィィ！！！！！」

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

理樹「こんにちは、リトルバスターズの直枝理樹です」

銀八「んじゃいくか。ペンネーム『鳴神ソラ』さんからの質問だ。『う～～～ん…能力なら…2人代表で…

マリオ：チートブレイカー（全てのチートやチートな能力を無効化する。また、転生者なら本人（マリオ）の意思次第で無効化する）

ソニック：虚無のルーン（ゼロの使い魔に出る4つの虚無のルーンの能力が使える）

それと…スーパーマリオくんは全て持っていて大好きです！！

スネーク「成長魔法だったな…それって自分の意思で好きなスタイルに出来るのか？」

フォックス「見るからにそうじゃないか？」

ルイージ「それで次回はランキング…；」

マリオ「…何か色々とツッコミ所満載な事が起きそうだな…；」

スネーク「（お前が言うな…）特に近藤とか山崎が心配だな…；」

ルイージ「大丈夫だよ…きっと；」

どうなるんだ一体；

スネーク「リリスに質問だが…『成長魔法だが体型とかは自分の意思で変えられるのか？』」

フォックス「九兵衛と神楽に質問『もし自分が成長した姿はどんな感じだと思う？』」

ルイージ「リリスちゃんに質問『成長魔法って自分にはかけられないの？』」

次回を楽しみにしてます♪

マリオ「どうなるのやら…」『じゃあまず1つ目と3つ目をお答えしましょう」

リリス「2つとも出来るよ。それでみんなを脅かしたりするし」

銀八「迷惑かけんなよ？んじゃ2つ目」

神楽・九兵衛「もちろんムチムチのグラマーモデルアル（だ）！！」

理樹「よほど大きくなりたかったんだね…。それじゃあ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってください。次のペンネームは『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんです。『アクセル
「久々に質問・・・って、今回俺かよ！」

ランド
「まぁそう言うなよ先生、今回はこのザ・ヒートも居るからよぉ」

アクセル
「ったく、どうせなら可愛い子ちゃんの方が良かったぜ・・・んじゃ質問

『今回ナンバーズで誰にも惚れてない人達（ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、ノーヴェ、オットー）達はこれから先誰かに惚れる事、又は恋する事はありますか？』」

ランド
「良いねぇ、恋する乙女は綺麗だからなぁ」

アクセル
「まぁ確かになぁ、ナンバーズの嬢ちゃん達皆可愛いもんな」

ランド

「んじゃ次俺な
『質問、クロノってこの先出ます?自分結構好きなキャラなので是非出して欲しいです』」

アクセル
「これまんまｓｉｂｕｇａｋｉの願望じゃねぇか！」

ランド
「まぁそんな時もあるさ」

アクセル
「おいおい・・・んまぁそんなトコだな」

ランド
「それじゃ・・・ヒートスマイルでさよならだぜ」

アクセル
「うぉっ、暑苦しっ！」『・・・えっと作者さんどうですか?」

真王「ウーノは無理です。でもそれ以外なら可能性があると思います。あとクロノ?何時だすか分りませんが、出す可能性はあると信じてください」

銀八「そうか。『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。一応期待してください。んでペンネーム『月光閃火』さんからだ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…リリスにそんな魔法が使えたとは…。というか…ちっこい神楽と九兵衛、スッゲー面倒見たくなるのは…俺だけか?

輝刃「確かに…保護欲を駆り立てられるな…。とりあえず、質問行

くぞ?まずは俺からだ。」

1．ミーニャとアルラに質問だ。新八の事を気に入っているそうだが…どっちの部類の好意に入るんだ?

あ～…確かに、そこは気にはなるよな…。次は俺からだ。

2．リリスの魔法で大人になった面々に質問だ。正直なった時の感想をプリーズだ。

輝刃「ふむ…確かに、一刻一刻の感想は気になる所だな…。」『」

アルラ「私の場合いじりがいがあるから面白くって」

ミーニャ「あいつの男儀と言うのが気になるニャ。だからあたしが鍛え直してやるニャ」

ネプテューヌ・ヴィータ・ブラン・クド
「超嬉しいです（ぞ）！」

サチコ「嬉しいな～。でもはやてさんなんか手をわきわきしながら見てたけど…」

真王「またかあの狸は…。では『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ランキングバトルその1（後書き）

真王「次回はネプ銀編に突入・・・ではなく、ちょっとした裏エピソードをご覧あれ」

理樹「次回『似た者同士は一緒に行きやすい』テイクオフ」

～予告～

ナレーション「あの魔道機人が誰かに拾われたようです」

裏第一訓：似た者同士は一緒に行きやすい（前書き）

真王「あの魔道機人が復活か！？そして『月光閃火』さんからオリキャラ登場だ！！」

裏第一訓：似た者同士は一緒に行きやすい

なにもない空間。
それどころか真っ暗だった。

???「なんだこれは・・・俺は死んだのか？」

その中で一人の男がいた。

???「俺は・・・一体何をやっていたんだ？」

男は考えると、一つの光が見えた。

???「なんだあの光は？いや、よく分からんがあれに向かえば何か分かるだろうな」

男は光に向かうと、全身につつまれた。

どこかのラボ

目が開けるとそこには緑色の明るさで映る天井、横に向けば生体ポッドらしきカプセルと何やら機械が多い。
そして腰くらいあるピンク色のアホ毛がある髪に白衣を着た女性が視界に入った。

？？？「あ、気が付きましたか」

若干子供っぽいしゃべり方だが、女性は心配しているようだ。

男「・・・何処だここは？俺はあの時機能停止してたはずだが…」

？？？「まぁ自分の状況整理も必要ですが、その前に名前、分かりますか？っと、ミサカはミサカはあなたに聞いてみたり」

女性は男に名前を聞いてきた。

男は答える。

男「・・・フンッいいだろう。俺はＶＩＶＩだ」

男はＶＩＶＩと名乗った。

そう、シグマと協力し、自ら世界を手に入れようとした魔道機人・ＶＩＶＩなのだ。

ミサカ「ＶＩＶＩって言うんですか。私はミサカっていいます。っと、ミサカはミサカは挨拶してみたり」

女性はミサカと名乗る。

しかし語尾に名前を2回言うのもどうかと思うが。

ＶＩＶＩ「で？そのミサカが何で俺を助けたんだ？」

ミサカ「確かにあなたなら助けたに思えますが、私的には拾ったと言います。っと、ミサカはミサカは一応言ってみたり」

ＶＩＶＩ「あんま変らんだろうが…」

ＶＩＶＩはミサカにツッコム。

ミサカ「でもあなた面白い体でしたので私がいろいろと改造しました。っと、ミサカはミサカは面白く言ってみたり」
ＶＩＶＩ「改造・・・確かに動けるようになったな」
ＶＩＶＩは手足を動かしてたしかめる。
ＶＩＶＩ「だがお前はただの人間ではないな？」
ミサカ「なぜそんなことが言えるのですか？っと、ミサカはミサカは尋ねてみたり」
ＶＩＶＩの一言にミサカは尋ねる。
ＶＩＶＩ「俺は高度な技術で作られた魔道機人だ。並の製作者でも手を焼くほどなんだが…」
ミサカ「それはですね。私は戦闘機人だからなんです。っと、ミサカはミサカは自慢してみたり」
ミサカは自分を戦闘機人だと答えた。
ＶＩＶＩはこれに驚く。
ＶＩＶＩ「戦闘機人だと!?馬鹿か!戦闘機人は常に戦うだけの存在なはずだろ!」
ミサカ「ところが私の場合イレギュラーな存在になってしまったんです。っと、ミサカはミサカは語ってみたり」
ＶＩＶＩ「イレギュラーだと？」
ＶＩＶＩはミサカがイレギュラーと言うことに疑問に思うと、ミサカが答えた。
ミサカ「ミサカはなぜか他の子達と違って人間らしさと天才顔負け

の頭脳を持ってしまったんです。っと、ミサカはミサカは言ってみたり」

ＶＩＶＩ「…そのイレギュラーな物があるから仲間外れにされて追い出されたと？」

ミサカ「まぁそんなとこです。っと、ミサカはミサカは語ってみたり」

あとね、っとミサカは続ける。

ミサカ「一度捨てた私を拾いに来る輩もいますけど、あれは私の技術力を利用してくる奴らばかりです。っと、ミサカはミサカは怒り混ざったり」

ＶＩＶＩ「…確かに、俺を直したお前の技術力も納得がいくな」

ＶＩＶＩはミサカの技術力を納得した。

ミサカ「なんですか？私にねだててもあげませんよ？っと、ミサカはミサカは否定してみたり」

ＶＩＶＩ「ねだる気はねぇよ。奪う気はあるがな」

ＶＩＶＩは笑う。

ミサカ「あなたちょっとおかしな人です。っと、ミサカはミサカは皮肉に言ってみたり」

ＶＩＶＩ「おかしいのはお前も同じだろう？」

ミサカ「あちゃ～、こりゃ一本取られた～。っと、ミサカはミサカはショックを受けてみたり～」

？？？「お前おふざけにはほどほどにしたらどうだ？」

扉から白髪に課のに赤い刺青のある男が現れた。

簡単にいえば『．ｈａｃｋシリーズ』のハセヲを大人っぽくした感じで。

ＶＩＶＩ「誰だお前は？」

ミサカ「あ、彼はエルダーって言うんだよ。っと、ミサカはミサカは紹介してみたり」

エルダー「俺はエルダー・ザイン。君と同じく拾われたものだ」

ＶＩＶＩ「フンッ、ＶＩＶＩだ」

エルダーとＶＩＶＩはとりあえず握手した。

ＶＩＶＩ「おいミサカ。まさかこいつもわけありものか？」

ミサカ「そうですよ。っと、ミサカはミサカは答えてみたり」

ミサカはエルダーのことを説明する。

ミサカ「まず第一に、この所頻繁に起こっている『管理局員傷害事件』と言うのを知っていますか？っと、ミサカはミサカはあなたに聞いてみたり」

ＶＩＶＩ「ああ、管理局の連中を大量虐殺した奴がいると来たが…まさか」

ミサカ「そ、その正体は彼、エルダーくんなんだよ。っと、ミサカはミサカはエルダーくんに指差したり」

ミサカはエルダーを指差す。

エルダー「その後は俺が話す。俺はそれが起こる前、ある研究の実験にされたんだ。それはかつてとある研究者によって立ち上がった『プロジェクトＭＴＷ（マルチ・タスク・ウィザード）』、そして俺はその唯一の成功体なんだ」

真剣な顔で語るエルダー。

エルダー「そのおかげか老いることも死ぬこともできない、言わば不老不死だ。まぁ病気は出来るけど」
ＶＩＶＩ「で?管理局の傷害はなにを求めてたんだ?」

ＶＩＶＩが聞くとエルダーは答えた。

エルダー「決まってる。俺は強い奴と戦いたいんだ」
ＶＩＶＩ「・・・戦闘狂か」

ＶＩＶＩはそう言うが、内心嬉しそうだ。

エルダー「話を戻すよ。その後彷徨ってるうちに彼女(ミサカ)に拾われちゃってな。今も一緒にいるだけだ」
ミサカ「いや～、そんなに褒めても何も出ないですよ～。っと、ミサカはミサカは照れてみたり～」
エルダー「…まぁこのように本当に大丈夫か?って不安になりがちだが」
ＶＩＶＩ「・・・・・・・・・」

ＶＩＶＩは不安になった。
するとＶＩＶＩは何かを思い出していった。

ＶＩＶＩ「そうだ。お前魔道機人である俺を直しただろ?」
ミサカ「改造の要求ですか?っと、ミサカはミサカは尋ねてみたり」
ＶＩＶＩ「強化の要求だ!俺も強い奴と戦う。あいつを倒すために。そして世界を手にするために」

ＶＩＶＩは拳を握る。

脳裏に浮かぶのは銀髪の男。
その男とリベンジを果たすために。

ミサカ「世界を手に?あなたも面白い計画があるね。っと、ミサカはミサカは面白半分に言ってみたり」
ＶＩＶＩ「も?誰かいるのか?」
ミサカ「もちろん私だよ?っと、ミサカはミサカは答えてみたり」

ＶＩＶＩは若干疑ったが、一応聞いてみる。

ＶＩＶＩ「なぜ世界を手にすると?」
ミサカ「私今の世界ってのがあんまりしっくりこないの。だから私…じゃなくて私達が世界を手に入れていっぱいやろうと思って。っと、ミサカはミサカは宣言してみたり」
エルダー「俺はその時強い奴がいるならどっちでもいい」

ミサカとエルダーの答えにＶＩＶＩは笑う。

ＶＩＶＩ「ククク・・・いろいろと似た者同士だな」
ミサカ「あなたが言わないの。っと、ミサカはミサカは怒ってみたり」
エルダー「確かに似た者同士だな俺らは」

３人はお互い笑い合う。

どがーーーん!!

爆発音と地響きが同時に発生した。
ミサカは慌ててモニターを見ると、複数の管理局員がいた。

ミサカ「あちゃ～、いつまでも隠し通せないと思ってましたが、早かったですねぇ～。っと、ミサカはミサカは感心したり」
ＶＩＶＩ「いい機会だ。邪魔された腹いせとして皆殺しにしてやる」
エルダー「俺も参加しよう」
ミサカ「私だって戦闘機人です。戦うことは出来ますよ。っと、ミサカはミサカは自慢したり」
ＶＩＶＩ、エルダー、ミサカは武器を持ってその場を後にした。

局員隊長「ここで間違いないのか？」
局員「はい、ドクターミサカ氏の隠れ家と思われます」
局員たちはミサカの隠れ家の入り口前で話し合っている。
局員隊長「よし、では作戦開始だ」
隊長が命令し、部下達は中に入ろうとした。
すると、
ドドド

ものを持ってるミサカと、右肩にバズーカ砲を持ったＶＩＶＩがでてきた。

ＩＢＧＭオープニングステージ（ＶＡＶＡ編）ｂｙロックマンＸ（Ｍａｖｅｒｉｃｋ　Ｈｕｎｔｅｒ　Ｘ　ＯＳＴ，　Ｔ０４：　Ｏｐｅｎｉｎｇ　Ｓｔａｇｅ　Ｖｉｌｅ　（Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｈｉｇｈｗａｙ））

ＶＩＶＩ「わざわざご苦労なこったな。だがここがお前らの墓場だ」
エルダー「さて、強い奴はいるかな？」
局員隊長「な、何者だ貴様ら！」

隊長が叫ぶと、ミサカが答えた。

ミサカ「それは私の部下ですよ。っと、ミサカはミサカは答えたり」
ＶＩＶＩ・エルダー「誰がだ！」

ＶＩＶＩとエルダーがタイミングよく突っ込む。

局員隊長「ドクターミサカ！やはりこの場所で隠れていたか！ここで投降しろ！」
ミサカ「悪役はそう言われて投降する人はいません。っと、ミサカはミサカは正論を言ってみたり」
ＶＩＶＩ「ククク・・・確かにそうだな」

ＶＩＶＩは笑う。

ＶＩＶＩ「そう言うわけだ。さっさと消えろ」

ＶＩＶＩはバズーカを局員たちに向ける。

局員隊長「投降の色なしか。ならば強行手段！全部隊！ドクターミサカ含む3人を再起不能にし、捕らえよ！」

隊長の命令に、局員たちは一斉に襲い掛かるが、ＶＩＶＩとエルダーがすぐに行動を起こし、局員たちをほとんど倒す。

ＶＩＶＩ「その程度か？管理局は」
エルダー「弱くて話にならない」
局員隊長「く、くそ！行け！行け～！！」

隊長はそう言って後退する。

ＶＩＶＩ「逃げる気か？」
ミサカ「あの人を追いかけると面白いイベントがあるかも。っと、ミサカはミサカは推測してみたり」
エルダー「そっちに強い奴いるかな？」

3人は局員隊長を追いかけた。

局員隊長「ハァ・・・ハァ・・・ここまでくれば…」
ＶＩＶＩ「残念だったな。もう追いつかれたぞ？」
局員隊長「なに！？」

後ろを振り返ると、ＶＩＶＩ達がいた。
もはや万事休す、そう思ったら、

？？？「邪魔だよお前」
局員隊長「なｎ…ぎゃあっ！」

声が聞こえて振りかえろうとしたら切られて絶滅した。

？？？「一応どんな強い奴なのか見てみたらなかなかのカモがいるじゃないか。このオルギ様と相手しろよ」

肩ぐらいあるツンツンな黒髪にカギ爪型のデバイスと言う珍しいデバイスを装備している局員がいた。

ＶＩＶＩ「ほぅ？他のザコ共よりも骨がありそうだな？」
ミサカ「オルギは管理局で珍しいカギ爪型デバイス・スケアクロウを持つランクＳＳＳ級の超大物でミッドでは英雄と呼ばれるそうだよ。っと、ミサカはミサカは説明したり」
ＶＩＶＩ「英雄…か…」
ミサカ「とは言っても表向きの話。裏では犯罪者だろうが容赦なく殺す管理局裏組織の人だよ。っと、ミサカはミサカは真実を話したり」
オルギ「俺を調べたのか。さすがハズレ戦闘機人だな」

オルギはミサカを評価する。

ミサカ「あなた方のような私を作りだした人に褒められる筋合いはありません。っと、ミサカはミサカは拒絶したり」
オルギ「フンッ本当なら貴様はなにもしなければいいものを」
ミサカ「なにもしないのは私的にあまりい感じがしないのです。だ

から私は自ら革命を起こしたいって思ったの。っと、ミサカはミサカは胸を張ってみたり」

ミサカは胸を張って答える。

オルギ「小娘が。なら死ね」

オルギはカギ爪デバイス。スケアクロウを構えてミサカに切りかかる。

が、ＶＩＶＩとエルダーに止められた。

オルギ「なんだ貴様ら！放せ！」

オルギは放そうとするが、振り切れない。

ＶＩＶＩ「悪いがそいつを殺させは死ねぇよ」

エルダー「そうだ。そいつは命の恩人。それをテメェは」

ＶＩＶＩ・エルダー「勝手に殺そうとすんなぁ！！」

オルギ「グバッ！！」

オルギは2人にぶん殴りに上空にぶっ飛ばされる。

ＶＩＶＩ「こいつはお土産だ。チャージショット！」

エルダー「スラッシュブレイド！！」

ＶＩＶＩから大きなエネルギー弾を、エルダーから黒い魔力刃を出して、オルギに命中する。

オルギ「ぎゃあああああああああああああああああ！！

！！！」

オルギは2人の攻撃にあたり、絶命した。

ＶＩＶＩ「ふん、英雄と言いながら聞いてあきれる」
エルダー「そりゃ俺達が強すぎたからじゃない？」
ＶＩＶＩ「だな」

ＶＩＶＩとエルダーは意気投合する。

ＶＩＶＩ（それにしても管理局か。戦闘機人、人造魔道士と言う違反研究をしていたのは知っていたが、実際に受けられた奴が近くにいたのは初めてだな）

ＶＩＶＩはエルダーとミサカを見て思った。

ミサカ「さぁ皆さん。次はどんな場所へ行こうかな～？っと、ミサカはミサカはふざけてみたり」
ＶＩＶＩ「子供か！！」
エルダー「そしてふざけんな！！」

ＶＩＶＩとエルダーはふざけるミサカに怒鳴る。

ＶＩＶＩ（まぁどちらにしろ、いつか必ずお前を倒して見せるぞ！白夜叉！）

ＶＩＶＩは空に向かって銀髪の男・坂田銀時にリベンジを果たすことを誓った。

そしてＶＩＶＩ達はこの場を後にした。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ミサカ「皆さんこんにちは。アシストするのはミサカと、」

ＶＩＶＩ「復活した魔道機人・ＶＩＶＩと」

エルダー「『月光閃火』からのオリジナルキャラ・エルダー・ザインがアシストしよう」

銀八「うわ～、悪役３人組だな～」

エルダー「俺はいきなり悪役扱いかよ」

ミサカ「プロフィールには傷害事件の元凶って書いてあったから悪着でしょ?っと、ミサカはミサカは正論を言ってみたり」

エルダー「・・・否定しない」

銀八「と、とりあえず、話を進めるか。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問だ。『トーマ
「はじめまして、今回は『真マジンガー　衝撃！Ｆｏｒｃｅ編』の主人公のトーマ・アヴェニールが質問します」

質問、前回の質問でウーノは無理と言いましたが・・・もしかしてウーノはジェイル博士にゾッコンラブなんですか?

以上です』ああ、ウーノはスカリエッティ一筋だということだ。んじゃ『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん。廊下に立ってなさい」

ミサカ「次はペンネーム『鳴神ソラ』さんからの質問だよ。っと、ミサカはミサカは質問の内容を読んだり。『マリオ「あれじゃなかったな」

フォックス「銀魂で起きたのじゃなく前回起きたあれか…」

ルイージ「ってか兄さんの言った通りツッコミ所満載だ;」

スネーク「と言うかその2に続くと言いながら次回は別のなんだな;」

マリオ「ってか近藤の奴、ゴリラじゃないだろ…そりゃあゴリラになったけどどこがゴリラなんだよ?それは失礼だろ?」

ルイージ「そんな訳で銀さんＬＯＶＥズに質問、質問『リリスちゃんの魔法で銀さんが子供になったらどうしますか？』」

スネーク「リリスに質問『もし他人を動物にする魔法を覚えたらどうする？』」

フォックス「今回負けたメンバーに質問『もし自分が勝ったらどう言う称号を付けてた？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ソニック「どうなる事やら…」『ズバリお答えします。っと、ミサカはミサカは皆さんに質問を言わせてみたり」

銀時ラバーズ「保護して私の息子に！！！」

真王「やっぱりか。次」

リリス「特徴に合った動物に変えるよ」

真王「次は負け組、出番だ」

ユイ「『駄目なお子ちゃま』ですね☆」

ノーヴェ「『ド馬鹿野郎』だ。ってやっぱ変わってなくね？」

土方「『ノミ以下』だ（黒笑）」

近藤「俺はコンパ殿に『お妙さん２号』だ！」

エリザベス『アイエフさんに『ツッコミだけの存在』と』

桂「俺はサチコに『歩く恐怖人』をつけた」

はやて「リリスに『おっぱい揉み娘』や」

真王「正確にははやてがリリスに揉むということかよ。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってな」

エルダー「次は俺を出してくれた『月光閃火』からだ。『よぉ…月光閃火だ。

ランキングバトルか…もし俺らに称号が付くなら…。

月光閃火（俺）：何でもアリのブサイケメン（え…（汗）

月臣輝刃：妹愛でな人狼闘士（ワーウルフ・ファイター）

って感じだろうな…。

輝刃「俺はともかく、閃火のは何故？」

だって俺の場合、それしか浮かばんし…。

輝刃「確かに…妙な所でカッコイイ所があるからな…。とりあえず…まずは俺から質問だ。」

1．作者に質問…銀魂側で死んだキャラが、リリカルなのは側で生きている…なんて展開はあるか？

確かにねぇ…特に“ミツバさん”とか“鴨太郎（漢字合ってるかな？（汗））”はそうであって欲しいかな。次は俺からだ。

2．イリス達『魔道機人ガールズ』に質問だ。自分達をアニメやゲーム等のキャラに当て嵌めると、誰になるんだ？

輝刃「なるほど…確かに面白そうな質問だな…。」『どうなんだ作者」

真王「ありません。そんな企画ありません」

イリス「わたしはＦａｔｅのセイバーです」

ファルコリア「私はインフィニットストラトスのラウラと言うものだ」

ランドル「ワシは東方の勇儀じゃの」

バーニン「あたしは東方の妹紅だ」

アイシー「東方のチルノかな？」

メーティア「私はディスガイアのサファイアと言う者です」

シャチール「私は…瀬戸の花嫁のシャーク藤代？」

エルダー「・・・『月光閃火』、俺を作ってくれてありがとな」

ＶＩＶＩ「次はペンネーム『黒神』だ。『質問します。

ネプテューヌへ

貴女に弱点はないですか？

マヨラーへ

僕の小説で貴方はまともに出番が無いのに、近藤と山崎は出番あります。そんな2人にどう思っていますか？（黒笑）』」

ネプテューヌ「ないよ？私は敵なしだからね」

真王「あ、後ろにピーマンの幽霊が」

ネプテューヌ「え？何処何処！？ピーマン嫌い！」

ＶＩＶＩ「…弱点じゃなくて嫌いな物だろこれ」

土方「くっそ～、山崎の奴俺より目立ちやがって！」

土方は怒って無敵スターとアイアンシールド（物体Ｘを防げる効果があるらしい）を持って『黒神』のとこの山崎とついでに黒神をぼこりに行った。

真王「あらら、『黒神』さん。土方に気を付けてください」

ミサカ「ラストォ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だよ。っと、ミサカはミサカは質問の内容を読んだり。『黒龍「いや～面白いですね～」

銀時「いや～俺もマヨ方に変は称号が付いて嬉しいぜ♪」

ソラ「コンパ強いな」

銀時「破壊神って言うのも頷けるな」

黒龍「さすがにサチコとリリスペアは最強ですね」

ソラ「質問いくか」

黒龍「チンカス（土方）に質問です。
マヨネーズとタバコを止めたらどうですか？
出番増えると思いますよ」

銀時「近藤（駄目ゴリラ）に質問。
お前はお妙諦めて新しい恋を目指したらどうだ？」

ソラ「リリスに質問だ。こっちにいる、お前と同じ名前のリリスをどう思う？」

黒龍「じゃあこの辺で」』」

真王「土方はいないので私が代りに。多分彼に言っても無駄でしょう」

近藤「俺はゴリラじゃない！そして俺はお妙さん以外などいらん！」

真王「筋金入りだな。リリス」

リリス「わぁ～、ちっちゃい」

真王「本人が気にしてる事平気で言ったなこの天然。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ミサカ「では次回のアシストはネプテューヌさんですよ。っと、ミサカはミサカはアシスタントを予告したり」

ＶＩＶＩ「あいつか、俺は好きになれん」

エルダー「俺的には面白い奴だな」

真王「ではまた次回で」

裏第一訓：似た者同士は一緒に行きやすい（後書き）

真王「見て分かるかと思いますがあのやり取りは『とある魔術の禁書目録（インデックス）』の一方通行（アクセラレーター）と打ち止め（ラストオーダー）な感じでしたね。さぁ次回はお待ちかねの『ネプ銀編』の突入だ！」

ネプテューヌ「次回『吸引力が変わらないどころか強すぎ』テイクオフ！」

～予告～

ナレーション「謎の商人が何かをし始めるようです」

第四十九訓：吸引力が変わらないどころか強すぎ（前書き）

真王「ついに『ネプ銀編』の始まりだ！」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ！」

第四十九訓：吸引力が変わらないどころか強すぎ

ミッドチルダの商店街。
そこからネプテューヌが買い物帰りをしていた。

ネプテューヌ「う～ん、いっぱい買っちゃったかな？」

手にはたくさんの買い物したものがたくさんある。
帰ろうかと思い、六課へ行こうとしたら、

？？？「おめでとうございま～～～す！！！」
ネプテューヌ「え？」

いきなり大きな声が聞こえた。
ネプテューヌは声のした方へ向くと、フードをかぶってて見えないが、特徴的なグルグル眼鏡が見える商人みたいな人だ。

？？？「大あたりでございま～～～す！！！」

何か当たったという謎の商人。
しかし周りにはだれもおらず、いると言えばネプテューヌだけである。

商人？「お客さん本日はラッキーですね！それを記念してこれを差し上げますよ！」

そう言って取り出したのは黄色く紫の斑点のあるキノコだった。

ネプテューヌ「なんで？私買ってないけど…」

商人？「細かいことは気にしない！これは世にも珍しい『ラッキーキノコ』。どんな幸運でも現れ、気が付けば億万長者になったりあなたの理想が形になれたりします！」

いかにも常識人な新八からすれば絶対偽物だと叫ぶだろが、ネプテューヌの場合、

ネプテューヌ「え！？ってことは食べ物食べ放題とか！」

思いっきり信じていたりする。

商人？「その通り！あとお金は要りませんので一応食べてくださいね。それも一気に」

ネプテューヌは商人の指示通りにキノコを食べた。

ネプテューヌ「モグモグモグ・・・・・・・・・ん！？」

ネプテューヌに異変が起こった。

ネプテューヌ「むぐ！？むググ・・・ググ・・・」

商人？「ハハハハハハ、うまくいった！案外簡単に乗ったな。さぁお前は機動六課にくんだな」

商人はフードを取って研究員の服に変わり、飛行機（ゲラコビッツが乗ってたあれ）に乗ってどっかへ飛んでいった。

そしてネプテューヌは、

ネプテューヌ「ウガァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

そこで銀時達はいつものようにだらけていた。
そこでコンパが来た。

コンパ「銀さん！このところ血糖値が日に日に上がってるです！」
銀時「仕方ねぇだろ。甘いもんとらねぇとイライラするから」

銀時はめんどくさそうにコンパの言葉をスルーする。

コンパ「駄目です！いつまでも糖分取り過ぎると体に悪いですよ！それどころかたまり過ぎると血管が詰まって死んじゃうですよ！例えば膀胱が破裂するとか…」
銀時「え？たまり過ぎると破裂すんの？うわ、なんかやべっ」

銀時は冷や汗を出す。

新八「そうですねコンパさん、銀さんに甘いもの摂取の制限を付けましょうか」
コンパ「それがいいです」
銀時「いいわけねぇだろ」
コンパ「守らなかったらリリスさん達から魔法の実験台にさせて…」
銀時「止めてくんない！？それ！」

銀時はコンパの一言に顔を青くする。

フェイト「う～ん、でも確かに銀時はとり過ぎはよくないよ」
なのは「そうだね、いざという時に症状が出たらもとの子もないよね」
銀時「お前らまで…」
銀時は頭をかいた後言った。

銀時「あ～分ったよ！しばらく取らない方がいいだろ！」
コンパ「それがいいです。あ、私ちょっと部屋の整理するです」
コンパはそう言って部屋へ行こうとしたら、

ヒュン！

コンパが通路に吸い込まれるように消えた。

銀時「あれ？消えた？」

銀時達はそう思ってると、ネプテューヌが現れた。
しかし何やら足取りが悪く顔が俯いている。
そしてネプテューヌが顔をあげると、

ネプテューヌ「んがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

某ピンクの悪魔兼ブラックホールの如く吸い込み始めた。

銀時・新八「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」
なのは・フェイト「きゃあああああああああああああああああ！！！」

突然の吸い込みに驚きながら身近にある物をしっかりつかまる銀時達。

なのは「にゃぁぁぁぁぁ！！！なんなのこれェェェェ！！？」
フェイト「一体何があったのぉぉぉ！？」
銀時「吸い込む量超半端ねぇ！！一家に一台じゃ足りないくらいだ！！」

必死にしがみつく銀時達。
すると、

神楽「ぎゃあああああああああああ！！」
桂「吸い込まれるゥゥゥう！！」
ブラン「・・・・・・・・・」
アイエフ「ななな何事ォォォォォォォォ！！？」
スバル「銀さぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」
ティアナ「兄さァァァァァァァん！！」
エリザベス『何事だァァァァァァァ！！？』

桂達が吸い込みに巻き込まれたようだ。
そして銀時にしがみ付く。

銀時「何やってんだお前ら！！何で俺に掴むんだよ！あとヅラ！！テメェは放せ！」
桂「ヅラじゃない桂だ！！」
猿飛「銀さぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！抱きつくなら私に…」

銀時・なのは・フェイト・シグナム・リインフォース
「テメェは駄目だ！！」

ドガァッ！！

猿飛「あ～～～～れ～～～～～～～～～！！」

猿飛は銀時達に蹴られてネプテューヌに吸い込まれた。
そしてネプテューヌの吸い込む力が大きくなっていく。

銀時「あ～！！、まるでブラックホールが近くにあるみたいだ！」
フェイト「こんな身近にブラックホールがあるんだね！！」
なのは「それに吸い込まれたら生きて帰れないよね！私達！」
新八「銀さん！！フェイトさん！なのはちゃん！気をしっかり持って！！」

涙交じりに諦めかける銀時達。
しかし銀時の掴んでいる手が少しずつ離れていく。

銀時「あ゛～～！！駄目～！俺もう限界だ～～！」
桂「諦めるな銀時！諦めたらそこで終わりだ！」
神楽「天パ！どうせ死ぬならお前も道連れじゃぁ！！」
スバル「死ぬぅぅぅぅぅぅぅ！！死んじゃうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

銀時は諦めずに必死に手に力を込めるが、

ポロッ

全員「あっ」

離れた。（笑）

全員「あ〜あ〜あ〜

あああああああああ「ドゴッ！！」ぶへっ！！」

吸い込まれた銀時はどこかへ落ちた。

銀時「あい…つつつ…ここどこだ？」

銀時は痛がりながらも起き上がる。
周りを見渡すと、壁（？）も地面（？）も赤く、板やらお菓子やらテーブルやらなどいろんなものがある。
それぞれ吸い込まれたものらしい。

銀時「お～～い！！誰かいないか～！」

銀時は大声で叫ぶ。
返事は…ない。

銀時「・・・探すしかねぇか」

銀時は捜索を開始した。

5分くらい捜索していると、

イストワール「ちょっと放してください！」

イストワールがスライム状の何かに捕まっていた。

銀時「イストワールか！待ってろ！」

銀時は駆け寄ってスライム見たいなのを引っぺがす。
スライムみたいなのは逃げだした。

イストワール「ありがとうございます銀さん」
銀時「ああ、無事でよかったな」

銀時は安心する。

銀時「ところでここは何処なの？」
イストワール「ここはネプテューヌさんの体の中です」

イストワールが答える。
銀時はあまり信じられないが、ネプテューヌに吸い込まれたことを思い出した。

銀時「あ～、吸い込まれたらこんなとこにくんわな」
イストワール「安心してはいられません。さっきの私のように襲われている人がいるかもしれません」
銀時「そうだな。急ごうぜ」

銀時はイストワールと奥へ進んだ。

ネプテューヌの体内・ガラクタスペース・中層地帯

銀時とイストワールが奥へ進んでいると、神楽とさっきのスライムみたいなのに頭から捕まっている新八を見つけた。

神楽「銀ちゃん！！」
銀時「無事だったか神楽。それと新八、なに遊んでんだ？」
神楽「そうアルよ。変な奴と遊んでんじゃないアル」
イストワール「・・・あなた達ふざけて言ってますか？」

イストワールは眉間にしわ寄せて言う。

銀時「わーったよ。よいしょ」

銀時は新八をひっぱりだす。
引っ張り出された新八は気を失っているが、すぐに目を覚ます。

新八「ぎ、銀さん！」
銀時「よう新八」
神楽「オラ駄目ガネ、さっさと立つヨロシ」
新八「助けた人に対して何その態度！！神楽ちゃん助けてないけどね！」

新八は神楽に怒鳴る。

フェイト「銀時～！」
なのは「銀さ～ん！」

奥からフェイト、なのは、スバル、ティアナ、コンパ、アイエフ、ノワール、ブラン、ベールが現れる。

新八「なのはちゃん！」
銀時「無事かお前ら！」
フェイト「私達は無事だよ」

アイエフ「でも他は見てないわ」
銀時「…そうか。だがあいつらは簡単にくたばらん。少し奥へ進んでいくか」
銀時達は奥へ行こうとしたら、さっきのスライムが5体たちはだかった。
ＩＢＧＭマリオ&ルイージ戦ｂｙマリオ&ルイージＲＰＧ３（Ｍａｒｉｏ　&　Ｌｕｉｇｉ‥　Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ　Ｉｎｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｍａｒｉｏ　&　Ｌｕｉｇｉ　Ｂａｔｔｌｅ）
銀時「なんだ?邪魔すんのかよ」
銀時はジト眼でスライムを睨む。
するとスライムはプルプル動いて銀時に体当たりをした。
銀時「ぼへっ!」
フェイト「銀時!」
銀時「いてて・・・テメ!やったなこのやろ!」
銀時はおこって細胞のようなスライム・スラサイボーをなぎ倒す。
銀時「うわ弱っやっぱスライムだけあってやっぱザコ「ブスッ」あああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!」
銀時のお尻に尖ったものが刺さった。刺した犯人はとげとげした帽

子（？）を付けたスラサイボー・トゲスラサイボーである。通常のスラサイボーと違って青色をしている。

銀時「テメェ何しやがるんだこのやろ！！おかけでケツ真っ二つに割れちゃったじゃねぇか！！」
新八「銀さん元から割れてます」

トゲスラサイボーに向かって怒る銀時に新八は冷静にツッコム。

ノワール「お相手さんも馬鹿じゃないみたいよ」

ノワールが言うと、あたりにスラサイボーの大群がいっぱいいた。
その数は１０００体以上いる。

神楽「いっぱい気持ち悪いのがいるネ」
なのは「これは数で押す作戦いみたいだね」
ブラン「面倒な…」
ティアナ「考えたねあのモンスターたちは」
銀時「んなこと言ってねぇでさっさと始めっぞ！」

銀時達はスラサイボー達の掃討を開始した。

そして数十分後…
そこっ、手抜きだと言わない。

銀時「よ〜し、とっととけーるぞ」

銀時達に周りには倒されたスラサイボー達がいっぱいいた。
そして銀時達はガラクタスペースから出た。

新八「やっと出られましたね」
なのは「それじゃあみんなのところに戻ろうか」
銀時「みんな？どういうこった？」
フェイト「来てればわかるよ」

ネプテューヌの対内・ショップ広場

理樹「あ、なのはさん」
恭介「生きてたか銀時」
ゆり「神楽も新八も無事ね」

銀時達はなのは達に案内されると、リトルバスターズと戦線メンバーズが出迎えた。
その他にも吸い込まれたと思われるミッドチルダの住人がいる。

銀時「お前ら何やってんだ？」

理樹「僕等はまきこまれた人たちと協力して吸い込んだアイテムを集めてるんです」
ゆり「出かけるときは腕の立つ用心棒を連れて探索するからね」
恭介「今集まったアイテムは食器、料理用具、食糧、材木、デバイス、そしていろいろある」
新八「そうですね、食料があれば何とかしのげます」

新八は安心する。

銀時「ところでヅラはどうした？」
桂「ヅラじゃない桂だ」
銀時「…って何だいたのか」

銀時の後ろに桂、エリザベス、はやて、月詠、九兵衛、シグナム、ヴィータ、リインフォース、リインがいた。
シャマルとザフィーラとエリオとキャロはけが人の手当てをしている。

なのは「はやてちゃん、どうだった？」
はやて「いろいろと吸い込まれたもんがいっぱいあったで」

はやてはエリザベスが引いている荷馬車を指差す。
中には様々なアイテムがある。

銀時「こんなに吸い込みやがったのか？」
はやて「それにいろいろとこの肉の壁や地面に刺激を与えたんやけどびくともしなかったで」
イストワール「それは完全に気を失っているからでしょう。弱い刺激では反応がありません」
桂「ではどうするのだ？」

イストワールが考え込むと、真人とクドが走ってきた。

真人「お～い、おもしれぇもんが見つけたぞ～」
クド「まさにあんのうんなものなのです～」
銀時「面白いもの？なんだそれ」
真人「来てみれば分かるぜ」

銀時達は真人に案内された。

ネプテューヌの体内・オドロキボーン

真人とクドの案内にやってきたのは固い灰色の地面と壁がある場所だった。

なのは「ココ硬いね」
はやて「これは骨やな」
銀時「んで、面白い物ってどれなんだ？」
真人「まぁ待てって。っと着いた、あれだ」

真人が指差した。そこにはビクビク動いている白っぽい物体が骨から突き出ていた。

銀時「うわなんだこれ気持ち悪」
真人「こいつは面白いだろ？」
なのは「それはともかくこれはネプちゃんの何処の部分のだろう」

なのはは白い物体を見て言うと、イストワールが答える。

イストワール「これはネプテューヌさんの大神経に当たります」
フェイト「大神経？あ、脳に伝えるあれだね」
イストワール「そうです。これに刺激を与えればネプテューヌさんは目を覚ますと思いますが…」
銀時「それならヴィータ、ブラン、出番だ」
ヴィータ「よーし、やるか」
ブラン「・・・」

ヴィータとブランはハンマーを構える。

ヴィータ・ブラン「オリャァッ！！」

そして一斉にハンマーを大神経に凄い刺激を与えた。

ネプテューヌ「ビギャァァァァァァァァァァァ！！！！！」

突然全身に響き渡り、飛び跳ねるネプテューヌ。
なにが起こったか分からず、あたりを見渡す。

銀時「お～し、反応ないならもう一回だ」
ヴィータ「分かった」

ドガッ！

ネプテューヌ「ふぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

また飛び上がるネプテューヌ。そして全身を押さえる。

ネプテューヌ「何これ・・・まるで全身響き渡るような感覚は…」

銀時「よし、もう一回」

ドガッ！

ネプテューヌ「ニ〝ャアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

また飛び上がる。

イストワール「あの、ネプテューヌさんはもう目を覚ましましたからこのへんで」

イストワールが銀時達を止める。

イストワール「ネプテューヌさん！聞こえますか！」

イストワール（ネプテューヌさん！聞こえますか！）

ネプテューヌ「え？この声イースン？なんで私のお腹に？」

イストワール（それはネプテューヌさんが私達を吸い込んだからです！）

ネプテューヌ「ええ！？吸い込んだぁ！？ないないないありえないからそれ」

ネプテューヌは否定する。

イストワール（ネプテューヌさんは気絶する前何があったんですか！）

ネプテューヌ「え？私？確か変なローブを着た商人がいきなり当たりだ！とか言ってキノコを食べさせられたけど…その先覚えてない」

ネプテューヌは今まで起こったことをいった。

イストワール「どうやらネプテューヌさんは誰かに騙されて当時の記憶がないようです」

イストワールは銀時達に教える。

イストワール（ではネプテューヌさん！今いるとこは何処なのか分かりますか？）

ネプテューヌ「ここ？ここは…」

ネプテューヌはあたりを見渡す。
ごつごつした壁に地面があり、少し薄暗い場所。

ネプテューヌ「洞窟だね」
イストワール（洞窟ですか！？）

イストワールも銀時達も驚く。

銀時（おいネプテューヌ！）
ネプテューヌ「銀さん！！？なんで銀さんがお腹の中から声が聞こえるの！？」
銀時（お前に巻き込まれたんだよ！それと、さっさと洞窟から出た方がいいんじゃねぇのか？）
ネプテューヌ「あ、それもそうだね。さて、さっさと出るかな」

ネプテューヌは銀時の命令に従い、外に出ようとする。

しかしネプテューヌはまだ分かってなかった。
ここは邪悪なるものが集まる魔の世界、魔界だと。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「こんにちわ～。今回は私がアシストするよ～」

銀八「いくぞ。ペンネーム『月光閃火』さんだ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…ミサカか…。何か元ネタが想像出来るな…しかも可愛いし…。

輝刃「というか…まんまだな…。とりあえず、質問行くぞ？まずは俺からだ。」

1．バッチリ復活を遂げたＶＩＶＩに質問だ。何か振る舞いがホントに『とあるシリーズ』の『一方通行（アクセラレータ）』に近づいているが…その所どう思っているんだ？

確かに…特にツッコミの所が…（汗）。次は俺からだ。

2．作者に質問だ。ミサカ達のグループ、メンバー増員とかあったりする？

輝刃「ふむ…確かに、さすがにあの人数でそのまま…という事は無いだろうな…。」

っていうか…やり取りがますます『一方通行（アクセラレータ）』と『打ち止め（ラスト・オーダー）』のやり取りに近づきそうだな…（汗）。』ズバリ彼がお答えしましょう」

モニターが現れてＶＩＶＩが映った。

ＶＩＶＩ「あいつと同じ奇遇になるのは気に喰わん！」

真王「ようは苦労人になるのは嫌だということだ。ミサカ達のメンバーは考えていますので。では『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だよ。『黒龍「悪役がまた増えた」

銀時「いいんじゃねぇの。良い役多いんだから、悪役増やさないと他の奴に戦闘での出番こないだろ」

ソラ「それにしても、そうとう強くなってるな」

銀時「ああ、それに管理局の英雄とか言う奴が秒殺だもんな」

黒龍「高杉と手を組んだらかなり厄介ですね」

銀時「そんじゃま、質問いくか。俺から真王に質問。真王はもう最終決戦とか最終回あたりの話は考えてるか？」

ソラ「俺から質問だ。ヅラは魔導師化する予定はあるか？」

黒龍「最後に俺から質問です。人気投票はやらないんですか？」

ソラ「それと、俺からそっちの銀時達に親子丼とカツ丼贈っておくぞ。ちなみに俺が作ったやつだ」『」

真王「はい、最終回考えてますよ。期待してください。あと桂の魔道士化と人気投票はやりません。あしからず」

銀八「・・・『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『鳴神ソラ』さんからだ。『マリオ「ああ…英雄って呼ばれた奴は当てはまるな…なんたってそう言う称号は一部を除けば大量殺人者に付くもんだからな…（苦笑）」

ルイージ「苦笑して言う事じゃないと思うんだけど；」

と言うか…思いっきりラストオーダーだなおい；

スネーク「確かに…しっかし…ボケ1人・ツッコミ2人な悪役トリオだな…」

ロケット団のトリオみたいだよな～

リュカ「確かに女1人で男2人だけどさ；」

ネス「それにしても…どうなるんだろうね…」

マリオ「さあな…」

ルイージ「今回出たミサカさんに質問『2人以外に善悪関係なく気が合いそうな人は誰？複数で良いよ』」

フォックス「今回出た3人に質問『自分達的に最後の切り札は何？』」

ネス「リリスに質問『動物にする魔法で誰がどんな動物になると思う？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』ズバリ、彼女らが答えましょう」

またモニターが出てミサカ達が映る。

ミサカ「私は基本的に面白そうな人とかがいいなと思います。っと、ミサカはミサカは好みを言ってみたり。例えば銀髪の男とか鬘みたいな人とか。それから最後の切り札は『ファイナルズウェポン』といって沢山の武器を乱射します。っと、ミサカはミサカは興奮してみたり！」

ＶＩＶＩ「こいつは…。俺ならサムスのように巨大砲を発射してやる。…だからと言って体が粉々になることはないぞ？」

エルダー「俺はそうだな。完全開放してソニックみたく無敵になることかな？」

真王「中々強そうな感じだな。次リリス」

リリス「う～ん。銀時はよく寝てる事からナマケモノで神楽は強そうだからゴリラで新八はメガネザルで桂はカモノハシ（適当）でエリザベスはペンギンで月詠さんは蝙蝠でゴリラさんはゴリラであのマヨラーさんは目が怖いから豹で沖田さんはオオカミかな？」

真王「いろいろだな。では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい。次のペンネームは『亀鳥虎龍』さんからです。『銀時「『万事屋奇譚幕』の坂田銀時だ!そっちのオレ聞いてくれ。こっちだとオレ主人公じゃねーんだよ!主人公は『とある魔術の禁書目録』の上条当麻で、ヒロインはインデックスで、ツッコミが阿良々木暦なんだよ!しかも、『真選組』以外に女隊士だけの『天草組』に妖怪だらけの『奴良組』まであって、そこの連中がメッチャ目立ってんだよ!因みに質問だが、オレと上条の主人公としての違いって何!?後『万事屋奇譚幕』読んでみろ!オレの活躍がメッチャ少ねえぞ!!(泣)」』・・・削除されている作品に答えは出ません。ごめんなさい」

銀八「アレ消えたのか!?ちょっとおもしろかったのにな。と言うわけで『亀鳥虎龍』さん。申し訳ございません」

ネプテューヌ「最後はペンネーム『白騎士君』から初めての質問だよ。『作者「今日は僕からの質問。銀さん達へもしこっちに白騎士物語に出て来るギガースが現れたらどうする?質問はこれだけです」

レナード「ん?」

レナードは落ちてた紙を拾った。

P.S そっちにギガース7体送ったから頑張ってね♪

レナード「なにやってるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!あの馬鹿作者は!!!」

レナード「俺からのアドバイスだ、ギガースは異界に棲む魔獣だ!それとやつらはそれぞれ武器を持っている後、体力や魔力を吸収す

るそれにやつらには闇の衝撃波があるそれに当たると体力か魔力が減少するそれとやつらの身長は約7メートルだ気をつけてくれ」』
ギガースってあれのこと？」

ネプテューヌは後ろで丸焦げにされた7体のギガースを指差す。

真王「そういえば『黒龍』の件で怒り爆発してたな。大切な家族を傷つけた（ミーニャの自業自得なのに）ことに、『白騎士君』さん。初めての質問ありがとう」

ネプテューヌ「次回のアシスタントは秘密だよ」

真王「ではアシスタントが誰なのかヒントをあげます。かつて暴君と呼ばれた吸血鬼です」

ネプテューヌ「答えを知りたいときはディスガ〇アを調べてね」

真王「ではまた会いましょう」

第四十九訓：吸引力が変わらないどころか強すぎ（後書き）

ネプテューヌ「突如現れた謎の商人はネプテューヌに奇妙なキノコを食わせてあろうことか銀時達を吸い込んでしまってさぁ大変！」

銀時「いきなり過ぎる展開だなおい！」

ミーニャ「てか今回あたしら出てないニャ」

ネプテューヌ「しかもその商人はネプテューヌの大ファンだといい、すべてはネプテューヌのためだと言って銀時達を亡き者にしようと考えたのだ！」

ノワール「そりゃあのシグマの戦いでネプテューヌは有名になったからね」

新八「なに冷静に解説してんの！？僕ら死人扱いされてるし！」

ネプテューヌ「そして、ネプテューヌはお腹の中の銀時達と共に世界中の食べ物を食べつくすために旅立ったのだ！」

アルラ「カービィ顔負けの喰いっぷりなのね」

ネプテューヌ「次回『暴食少女ネプテューヌ』第一話、『スイーツは別腹の元』、甘いお菓子は女の子の醍醐味だ！」

神楽「私は酢昆布で十分アル」

新八「なに張り合ってんの神楽ちゃん！！」

なのは「でも女の子には甘いものが好きだもんね」

銀八「おれもすきだ」

ミーニャ「てかどんどんこれがレギュラーになってニャいか？」

？？？「ところで俺様達の出番はまだか？」

真王「まだです」

？？？「そうか」

真王「本当の次回は『懐かしい奴は碌でなしが多い』です」

第五十訓：懐かしい奴は碌でなしが多い（前書き）

真王「今回で五十訓を達しました」

ネプテューヌ「長いような短いような・・・」

銀時「なんにせよこんなにも進んだからなぁ」

真王「これも皆さん読者のおかげです。では『リリカル銀魂』」

ネプテューヌ・銀時「始まるよ（ぜ）」

第五十訓：懐かしい奴は碌でなしが多い

前回のあらすじ、

ネプテューヌは謎の商人にキノコを貰い、食べたら意識を失って銀時達を吸い込んでしまった。
そして現在洞窟の中で捨てられたようだ。

ネプテューヌ「全く、こんな薄気味悪いとこに捨てるだなんてひどい奴だね」
エックスセイバー≪酷い以前に鬼畜ですね≫

相棒のエックスセイバーも同意する。

ネプテューヌ「ま、それはともかく出るよ」

ネプテューヌは外へ出た。
そして周りはごつごつした岩肌が目に見える。

ネプテューヌ「・・・・・・・・」
エックスセイバー≪マスター？どうしました？≫
ネプテューヌ「なんでもないよ（この場所って確か…）」

ネプテューヌは何かを思い出そうとすると、遠くに何かが飛んできた。

ＩＢＧＭゲラコビッツのテーマｂｙマリオ&ルイージＲＰＧ３
（Ｍａｒｉｏ　&ａｍｐ；　Ｌｕｉｇｉ　Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ　Ｉｎ

side Story Soundtrack － Fawful's Theme）

???「おやおや、もう目覚めたのか？」
ネプテューヌ「あ！貴方はさっき私にキノコをあげた奴！」

ネプテューヌはグルグル眼鏡を見てさっきの商人だと気付く。

???「フフフ、その通り。あのキノコは『バキュームキノコ』、何でもかんでも吸い込んじゃうキノコだよ」
ネプテューヌ「何のためにこんなことを！」

ネプテューヌは言うと男・ゲラビッツは答えた。

ゲラビッツ「我の目的は、ミッドチルダを征服すること！」
ネプテューヌ「！」

ネプテューヌは驚く。
一方中の銀時達は、

銀時「ようは世界征服か？地味だな」
神楽「ああいうやつはよくダメなやつね」
新八「ああいう人に限って最終的に落ちちゃうんですね」
フェイト「そ、それいっていいのかなぁ？」

3人の毒舌に苦笑いするフェイト。
ネプテューヌの中なため、ゲラビッツには聞こえてません。

ネプテューヌ「ミッドを征服！？そんなこと許されないよ！」

ゲラビッツ「なんとでも言うがいい。と言いたいとこだけど起きる時間が早い。だからすぐに眠らせてやる。メタブス！来い！」

ゲラビッツが叫ぶと、メタボリックな体にイノシシのような生き物が立ち塞がった。

メタブス「フガ～～～！！イイカ！ヨクキケ！ミッドチルダハゲラビッツサマノモノ！オマエ、イラナイ！。オマエ、ココデタオサレル！」

ネプテューヌ「なにがなんだかわかんないけど、邪魔するなら容赦はしな…い…」

ネプテューヌはふらふらと揺れる。

ゲラビッツ「お～、効いてきた効いてきた♪」

ネプテューヌ「ぅぅ…気持ち悪いし頭だるいしうまく動けない…」

ゲラビッツ「実はキノコ食べる際に時間制の毒を入れ込んだのさ。毒に苦しんでメタブスに倒されるんだな」

どうやらネプテューヌはバキュームキノコに含まれた毒に犯されたようだ。

銀時「あの野郎！」

なのは「なんてひどいことを！」

はやて「シャマル！」

シャマル「無理です！小さくなった私じゃ追いつけません！」

今や豆粒以下になったシャマルじゃ毒は消えない。

メタブス「オマエココデキエロ！！」

メタブスは飛び上がってボディプレスを繰り出そうとする。
ネプテューヌはもはやこれまでかと諦めかけた瞬間、

キキーーーーーーーーーーー！！！

突然蝙蝠の大群がメタブスに襲いかかった。

メタブス「ナ、ナンダ！？」

メタブスは驚いて思わず着地する。
そして蝙蝠の大群は一ヶ所に集まり、やがて人になった。
ツンツンな頭に尖った耳、胸の部分赤い大きなボタンがある青年だった。

？？？「ずいぶん懐かしい奴がいたと思ったらまさかお前だったはな」
ネプテューヌ「あ、あなたまさか…」

ネプテューヌは突然現れた人物を知っているようだ。
そしてその青年の名を言った。

？？？「久しぶりだなネプテューヌ」
ネプテューヌ「ヴァルっち君！！」

ネプテューヌは青年をヴァルっちと言った。
ゲラビッツは青年・ヴァルバトーゼを見て驚く。

ゲラビッツ「なんで！？こんなところに暴君ヴァルバトーゼがくるだなんて知らないよ！！」

ヴァルバトーゼ「愚問だな。たまたま通りかかったプリニーがお前とネプテューヌを見かけたと聞いて飛んできたからな」

ヴァルバトーゼは誇らしげに言う。

ゲラビッツ「予定が全然違うよ！メタブス！戻って作戦をたてなおすよ！」

メタブス「ワカリマシタ！」

ゲラビッツとメタブスはどこかへ去った。

ヴァルバトーゼ「…さてと、改めて久しぶりだなネプテューヌ」

ネプテューヌ「うん！何年ぶりかなヴァルっち君」

まるで友達気分に話し合うネプテューヌとヴァルバトーゼ。

銀時「あいつ誰だ？」

ネプテューヌの中にいる銀時達がヴァルバトーゼを見て首をかしげる。

ノワール「あの人はヴァルバトーゼ。まぁネプテューヌの友達かしら」

新八「友達ですか？」

ブラン「友達って言ってもあれ吸血鬼だけどね」

ノワール、ブラン、ベール以外全員

「きゅ、吸血鬼ィィィィィィィィィィ！！？？」

3人以外の全員が驚く。

ベール「ええ、狼男に自称ラスボスの女の子に死神に天使までも友達ですのよ私達」

ノワール、ブラン、ベール以外全員

「ま、マジですか！？」

またも驚く銀時達。

ネプテューヌ「ところでフェンリっち達は元気？」

ヴァルバトーゼ「あいつらなら元気だ。挨拶しておけ」

ネプテューヌ「は～い」

ネプテューヌはヴァルバトーゼについていった。

地獄

それは、罪を犯した人間達が魂となり、ペンギンのような姿をしたプリニーとなって教育させる場所。

厳しい指導を受けたプリニーは魔界、もしくは天界に出荷され、いつもなく重労働を行うのだ。

ちなみにプリニーの労働時間は一日２０時間で給料そこそこ、そし

て褒美はイワシ一匹と言うらしい。
そしてその地獄を拠点として魔界中をとどろかせたある吸血鬼、それは暴君ヴァルバトーゼである。

彼は以前、魔界政腐（誤字にあらず）の堕落に怒りを感じ、政権奪取を行うのだが、その真実はある一人の男の策略だった。

断罪者ネモ

彼は生前人間界である軍人のエリートだったが、敵味方が彼を陥れられ、世界だけでなく、魔界天界を大きく揺るがした張本人である。しかし、ヴァルバトーゼ達の活躍により、その策略は崩され、ネモは罪を許され、現在どこかで罪を償い続けているだろう。

そして、地獄の主たるヴァルバトーゼと、その親友・ネプテューヌは地獄へ戻ってきた。

ネプテューヌ「なつかし～。前に来た頃が懐かしいな～」
ヴァルバトーゼ「そうだろう？そしてようこそ地獄へ」

ヴァルバトーゼが言うと、銀色の髪と尻尾の生えた青年が現れた。

ヴァルバトーゼ「フェンリッヒ」
ネプテューヌ「やっほ～。久しぶりだねフェンリっち♪」
フェンリッヒ「お帰りなさいませ、我が主。それとネプテューヌ、今すぐ地獄以上の苦しみを味わいたいか？」

フェンリッヒはネプテューヌに毒な言葉で言う。

彼の名はフェンリッヒ。ヴァルバトーゼに使える人狼族の一人だ。

？？？「あ、ひっさしぶりじゃんネプテューヌ」

？？？「久しぶりデスネプテューヌさん！」

？？？「お？ネプテューヌ」

目のついた青い帽子をかぶった少女と背中に変な生物？がある少女と緑のフードにドクロが付いた少年がいた。

ネプテューヌ「フーカちゃん、デスコちゃん、エミちゃんも久しぶり～」

エミーゼル「いや僕はエミーゼルだから」

少年エミーゼルは名前に突っ込む。

フーカ「それにしても何年ぶりかしら、ネプテューヌがここに訪れたの」

デスコ「え～と、約４０年だった気がするデス」

ヴァルバトーゼ「正確には４３年だ」

ネプテューヌ「そうだね。この場所ホントに懐かしいよ」

ネプテューヌは周りを見て懐かしがる。

銀時「…あいつ来たことがあったのか？」

ノワール「ネプテューヌだけじゃなくて私達もよ」

神楽「マジでか！」

銀時達はネプテューヌ含めノワール達も来たことがあることに感心するが、新八は何か引っかかった。

新八「あれ？そう言えばあの人ネプテューヌちゃんと４３年とか言ってましたけど」

新八はヴァルバトーゼが言った４３年と言うのが気になった。
ネプテューヌは明らかに子供であり、４３年なら既に大人である。

ノワール「ああ、言ってなかったっけ？私達女神は年を取らないのよ」
ベール「言わば不老の存在ですわ」
ブラン「でも体は成長できないのは球に傷」
銀時「ええ！？マジかよ」

銀時達はノワール達の説明に驚いた。

フーカ「ところでネプテューヌあなた一人？ノワール達はどうしたのよ」

いきなりフーカがノワール達にことを聞きだした。
ネプテューヌはどうしようかと迷った後、そのことを言おうとした。

ネプテューヌ「じつは・・・・・・・・・ゴフッ！」

ネプテューヌの口から血が出た。

ヴァルバトーゼ「！？どうした！」

ネプテューヌ「懐かしすぎて忘れてたけど私毒もらってた…」
ヴァルバトーゼ「毒だと!?フェンリッヒ!衛生兵を呼べ!」
フェンリッヒ「ご安心を、手配済みです」
ヒーラー「応急処置ですか?」

救急箱を持った金髪ロングで僧侶のような服に両腕に手枷を付けて目は閉じているような人が来た。

ヒーラー「では、エスポワール」

ヒーラーは治癒魔法でネプテューヌの毒を直した。

ネプテューヌ「あ~体が軽くなった。ありがとう」
ヒーラー「どういたしまして。あとお代ですが…」
ヴァルバトーゼ「それなら俺が代りに…」

ネプテューヌがお礼を言い、ヴァルバトーゼが代わりにお代を払おうとしたら、

フェンリッヒ「ヴァル様!!私が代わりになります!!」

フェンリッヒが慌てて払った。

ヴァルバトーゼ「なんだフェンリッヒ、金なら俺が払ってもよかったのに」
フェンリッヒ「なにを言いますかヴァル様、ネプテューヌの代わりに払えばイワシが少し減りますよ?」
ヴァルバトーゼ「なにっ!?それは想像してなかった!!」

ヴァルバトーゼはイワシと聞くとショックを受けた。

彼は吸血鬼なのにイワシが大好物なのである。
そして人間の血が嫌いなのだ。

？？？「ウフフ・・・相変わらずイワシがお好きなようですね、吸血鬼さん」
ネプテューヌ「あ、アルティナさん」
アルティナ「久しぶりですわね、ネプテューヌさん」

不思議なピンクの髪に背中に天使の羽が付いた女性・アルティナが現れた。

彼女は生前人間界の看護師をやっていたが、当時戦争が起きており、苦しい生活をしていたものの、彼女は決して屈しなかった。しかし、敵国の傭兵を助けた事にスパイ容疑をかけられ、味方であるはずの人間に殺されてしまい、天使となって蘇ったのだ。その時の傭兵は後に世界を滅ぼそうとした断罪者ネモである。

さらに追加だが、ヴァルバトーゼが人間に血を吸わないのは彼女の約束のせいでもある。
その約束は、アルティナを怖がらせればアルティナだけの血を飲むと。
しかし結果アルティナは死んでしまい、永遠に血を吸うことは出来なかった。（天使として生きているけどな）
とはいっても彼はイワシで満足しているようだが。

アルティナ「ところでネプテューヌさんはおひとりですか？」
フーカ「そうそう！ノワール達はどうしたの？」

アルティナはノワール達のことを言い、フーカ達は思い出したかのように言う。

ネプテューヌ「あ～、じｔ「プ～リプリプリ！」？」

どっからか笑い声が遮り、謎の集団が現れた。

緑のペンギン？「ＨＥＹ！そこの紫野郎！」

緑色のペンギンみたいなのがネプテューヌを名指しした。

緑のペンギン？「我らが主のために、お前を抹殺してやるぞ！」

その仲間達「してやるぞ！！」

緑のペンギン達は復唱するように言う。

ヴァルバトーゼ達は唖然とする。

フーカ「・・・なにあれ？」

デスコ「デスコ知らないデス」

エミーゼル「頭いかれてんのかあのプリニーは…」

３人はジト眼で見るが、ヴァルバトーゼは違った。

ヴァルバトーゼ「おい貴様ら！！全員揃ってなんだその言動は！！

忘れたのか規則を！」

ヴァルバトーゼが緑のペンギン…と言うよりプリニー達を指差して

怒る。

ヴァルバトーゼ「『プリニーの心得その一！語尾に必ず『ッス』を

付けること！！』お前らはそれが欠けているぞ！！」

プリニーの規則が違うことに怒るヴァルバトーゼ。
だがプリニー達は反省の様子がない。

プリニー？「規則～？そんなのどうしたってんだよ！あんたらといるより、俺達の主・ゲラビッツ様ならそんな規則破るかもだぜ～？」
ネプテューヌ「ゲラビッツ！？」

ネプテューヌがゲラビッツと言う単語に驚く。

アルティナ「しっているのですか？」
ネプテューヌ「しってるもなにも、そいつは私に毒入りの特殊なキノコ食わせてノワール達を私の体の中に入れた張本人だよ！」

ヴァルバトーゼ・フーカ・フェンリッヒ・デスコ・エミーゼル・アルティナ
「なんだと（って）（ですって）！！？」

ヴァルバトーゼ達は驚いた。

？？？「フッフッフ～♪そしてそいつをこの魔界に捨てたのも我なのさ」

ネプテューヌにとって聞き覚えのある声が聞こえた。ゲラビッツである。

ネプテューヌ「ゲラビッツ！！」
ゲラビッツ「覚えててくれたみたいだな。我の計画を完全にするために少し戦闘員がいるんでな」

それを聞いたネプテューヌは怒る。

ネプテューヌ「そんなことのためにこのプリニー達を洗脳したの！？」

ヴァルバトーゼ「なに！？洗脳だと！？」

ゲラビッツ「その通りだ。でも魔界全土は時間がかかるからな。手っ取り早く弱いプリニー族をはじめどんどん戦闘員を集め、そして我が計画のスピードをあげるのだ！」

ゲラビッツは笑う。

ゲラビッツ「さぁ行け！我が一員ゲラビッツプリニー、略してゲラニー！」

ゲラニー「おーーーーーーーーーーー！！！」

洗脳されたプリニー・ゲラニーはナイフを構えてネプテューヌ達に襲いかかった。

・・・が、

ネプテューヌ「死ね」

ドガーーーーーーーーーーーン！！！

ゲラニー「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

ネプテューヌが爆弾を投げてゲラニー達も爆発してしまった。

プリニーは手荒に扱うと爆発する習性があるらしいのだ。

ゲラビッツ「いきなりかよ！・・・まぁいいや。プリニーだからすぐにやられると思ったよ」

ヴァルバトーゼ「なに？まだ隠し玉が残っているのか？」

ゲラビッツ「いや違うよ。オイメタブス！」

ゲラビッツがメタブスを呼ぶ。
そして檻を担いだメタブスが現れた。
そしてその中には…

ミーニャ「狭いニャ～～！」
リリス「苦しいよ～」
アルラ「息し辛い…」
ヴィヴィオ「パパ～！ママ～！」
サチコ「おさないで…潰れる…」
遼「狭い…」
雪「ココドコ～！」
時子「誰かいる～？」

ヴィヴィオとリリス達とサチコ達だった。

ネプテューヌ「ヴィヴィオ！？リリス！？サチコちゃん！？」
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！？」
サチコ「お姉ちゃん！ヘルプ～！」
リリス「母さん！」

ネプテューヌが叫び、ヴィヴィオ達も叫ぶ。
が、ヴァルバトーゼ達は別のとこに引っ掛かった。

ヴァルバトーゼ「お前…いつの間にか親になったのか？」
デスコ「五児の子供デスか！やるデスね～」
フェンリッヒ「3体見覚えのあるやつらなんだが…」
フーカ「ネプテューヌ…あんた何時の間に…」
エミーゼル「なんか凄いのがいないか？」

アルティナ「ネプテューヌさん…」

ネプテューヌにそれぞれのことを言うヴァルバトーゼ達。

ネプテューヌ「いや～、それほどでも～」

全員「褒めてねぇよっ！！」

全員が突っ込んだ。

ゲラビッツ「ふはははは、我の計画のためにそいつが全員吸い込んだと思ったらしぶとく残ってたやつらがいたからそこに置いておくぞ。とは言っても我の計画は確実に進んでいる。さらばだ」

ゲラビッツとメタブスはどっかへ去った。

エミーゼル「な、なにしに来たんだあいつは…」

ネプテューヌ「それはともかく！みんな大丈夫！？」

リリス「私達は大丈夫だから」

ミーニャ「この檻壊してニャ！狭くて苦しいニャ！！！」

ネプテューヌ「わかった」

ネプテューヌはエックスセイバーで檻を壊した。

リリス達は自由になる。

リリス「イタタタ、体中いたい」

サチコ「足痺れた」

ヴィヴィオ「ありがとうネプ姉ちゃん」

解放されたリリスとサチコ達は体中を痛めている。

ヴィヴィオはお礼を言った。

ヴァルバトーゼ「あいつ…魔界のプリニーを手始めに部下を作り出し、なにを企むつもりだ」
フェンリッヒ「目的が分からない以上、先に手を出すのは得策ではありません。情報を集める必要がありますね」

フェンリッヒはそう言って洗脳されていない青いプリニーを呼びだして何か作戦を行った後、プリニー達はどっかへ行った。

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌ、お前は・・・いや、聞くまでもないか」
ネプテューヌ「当然！あのグルグル眼鏡を探してふざけた顔を殴り飛ばさないと！」
リリス「あ！ちなみに私達も！」

ネプテューヌはゲラビッツを倒すことに決心したようだ。
ついでにリリス達も。

ヴァルバトーゼ「そうか。なら俺達も同行しよう」
ネプテューヌ「それって何のため？」

ネプテューヌが聞くと、ヴァルバトーゼはフッ、っと笑う。

ヴァルバトーゼ「無論、プリニー教育係として、あのふざけ眼鏡の根性を一から教育するためだ！」
ネプテューヌ「ヴァルっち君…。よし！みんな行くよ～」

こうして、暴君ヴァルバトーゼと、女神ネプテューヌは革命者ゲラビッツを計画を阻止すべく立ち上がった。
しかし、後に彼らに待ち受けるのは想像を絶する困難が待ち受けて

いるなど彼らはしるよしもなかった。

銀時「お～い、俺達がいることも忘れんなよ～」

ネプテューヌは一時的に中にいる銀時達のことを忘れてたことも言うまでもない。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ヴァルバトーゼ「今回のアシスタントは暴君と呼ばれたイワシ大好き吸血鬼・ヴァルバトーゼがお答えしよう」

銀八「イワシだと？んなもんイチゴ牛乳でいいだろ？」

ヴァルバトーゼ「バカモン！！牛乳の中のカルシウムでイライラがおさまるとでも思ったか！！イワシを食べて血流を良くしてからだ！！」

銀八「喰うかあんな生臭ェもん！！まぁいいや。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから始めっぞ。『上条
「『万事屋奇譚幕』の上条当麻です。　作者と銀さんがご迷惑をおかけしました。」

リクオ
「改めて質問です。　1．メンバーを仮面ライダーにするなら、どれが良い？　2．メンバーを『ロックマンシリーズ』のキャラで例えるならだれですか？　以上です。」

エール
「これからも連載頑張って！」』んじゃ1と2を順番に答えると」

銀時、ディゲイド、思いつかない

新八、思いつかない、スラッシュマン

神楽、電王（キンタロス）、ガッツマン

桂、ディエンド、ストーム・イーグリード

エリザベス、カブト、アイシー・ペンギーゴ

月詠、キバ、シェードマン

銀八「とりあえず銀時組までです。『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい」

ヴァルバトーゼ「次はペンネーム『月光閃火』からの質問だ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…謎の商人、一体アイツは何者なんだ?

輝刃「全くだな…というか、まさかの魔界とは…ディス○イアが入ってきたか。」

あ～…ディス○イアね。そこそこ好きなゲームだな…あ、質問行くぜ?

1.作者に質問だ。何か色んな作品が入り交じりになっているけど、展開的に今後はどういう順番で放り込んでいくんだ?特に“ＩＳ”が気になる所だ。

輝刃「だな…あそこまで入り交じりになると、纏めるのも大変そうだ。次は俺からだ。」

2.作者に質問…この物語に交じる他作品の中に『クレヨンしんちゃん』があったが、どうやって放り込む気なんだ?やはり“劇場版テイスト”で放り込むのか?

あ～…それは確かに気になるな…。もしかすると、放り込む他作品の中では一番難しそうな作品だもんな…（汗）。』」

真王「それはネタばれなため教えません。後クレヨンしんちゃんはもう放り込んでます。ワグナリア編を見てください」

ヴァルバトーゼ「では『月光閃火』よ、廊下に立つのだ。続いてのペンネームは『鳴神ソラ』だ。『マリオ「懐かしいな…色々と苦労したよな」

クッパ「うむ…あの時は大変だったのだ…まあ、そのお陰で色々と良くなったのだ♪」

ルイージ「こっちは苦労したけどね；」

クッパ「あの時はマジでめんごなのだ；」

フォックス「それにしても…作者はやった事ないけどディスガイアって言うゲームのキャラが出るんだな…」

スネーク「それで次のアシスタントはあれか？ペンギン軍団を色々と弄るあの嬢ちゃんの主か？」

ネス「じゃない？分かんないけど…」

リュカ「ヒント的にそうなんじゃないかな；」

マリオ「銀時達に質問『体の中を見た感想はどうだった？』」

ルイージ「銀さん達に質問『その時のネプテューヌちゃんの吸い込みはどうだった；』」

クッパ「真王に質問なのだ！『元にした我輩達のゲームの様にネプテューヌが新しい力を得るのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ネス「どうなるのやら…」『では銀時達の感想をきこう」

銀時「あれはホントに凄いもんだなと思ったな。そして吸い込みの方は近くにブラックホールがあったと思ったぞ！」

真王「その通り！新たに力を手に入れますよ。『ボコスカ〇〇』とか」

銀八「では『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい。ラストォ、ペンネーム『支配者』さん。『質問ですが、ネプテューヌの体内の中はクッパと同じなんですか？』」

真王「似ているようで少し違った構造だと思ってください。『支配者』さん。初めての感想ありがとうございます」

ヴァルバトーゼ「よし、次のアシストはフェンリッヒにやらせよう」

第五十訓：懐かしい奴は碌でなしが多い（後書き）

ヴァルバトーゼ「魔界全土を揺るがすあの男の目的は、想像を絶する事実だった！」

ネプテューヌ「ミッドチルダを手にするって言うの！？」

ヴァルバトーゼ「そう！あいつの好物と言えばマグロの刺身！イワシによりも脂分の多い大トロだ！」

エミーゼル「やっぱりここでもイワシを語るのかよ！？」

ヴァルバトーゼ「大トロの刺身は、肉の柔らかさと醤油の味付けによって定番とされているが、それは大きな間違いだ！大トロは味が薄いから醤油をかけるのだ！」

ネプテューヌ「時にはワサビをのせるけどね」

ヴァルバトーゼ「こうしちゃおられん！いち早く対抗するためにイワシの刺身を提供してやる！さぁ！イワシのうまみを存分に味わえ！」

フーカ「新しい寿司ネタが発売なの！？」

ヴァルバトーゼ「次回『エリートイワシをねらえ！』第二話、『イワシ寿司の完成』イワシの道を見極めろ！！」

ネプテューヌ「イワシは健康魚として生活習慣病にならないですがダイエットに効果がある事は不明です」

アルティナ「短く言えば、イワシは健康の源と言うことですね」

真王「それでいいのか？次回は『議題は必ずしも通るとは限らない』です」

第五十一訓：議題は必ずしも通るとは限らない（前書き）

真王「ディスガイア勢が大集合する？」

フーカ「何で疑問形？『リリカル銀魂』始めるわよ」

第五十一訓：議題は必ずしも通るとは限らない

ネプテューヌとヴァルバトーゼらがゲラビッツの計画阻止を開始している頃、ネプテューヌの体の中にいる銀時達は、

銀時「お～い、こっちにパフェをくれ」

銀時だけ実家のようにくつろいでました。

新八「オイィィィィィィィィィィ！！！あんた何こんなところでサボってんだよ！！きっちり働けよ！！」

銀時「やだ、めんどくさい」

新八は青筋立てて怒鳴るも、銀時は動く気はしなかった。

銀時「この生活は楽だよな～、食べ物はわんさか出るしな」

神楽「ネプテューヌが食べたものがそのまま私達の胃袋に入るネ。私も賛成ヨ」

コンパ「そう言うわけにもいきませんですよ」

2人を否定したのはコンパだった。

コンパ「確かに食べ物は困りませんですが、いつまでもこのままでいると私達ねぷねぷに体の一部になっちゃうですよ」

銀時「一部に？んなわけねぇだろ」

銀時は否定するが、コンパが怒る。

コンパ「あなたは人の体と言うものを全然理解してません！！いい

ですか！人間の体には白血球と言うものがあります」
銀時「あ～、しってる。ばい菌をやっつける奴だろ」
コンパ「そうです。ですがその白血球が私達をばい菌と見なされて襲ってきたらどうするんですか！？」

医学に詳しいコンパなら知っている事、だが銀時はどうでもよさそうな顔をする。

銀時「んなわけねぇだろ。どうせドラクエみたいな奴らだろうに」

と、すでに寝てしまう銀時。
コンパは諦めてため息をついた。

別魔界・邪悪学園

血染めの禁忌（タブー）と、底なしの出鱈目、魔立邪悪学園、言わば魔界の学校である。

ヴァルバトーゼ「まずはここからの情報収集だ」
ネプテューヌ「そうだね。ベリルちゃんいるかな～？」

ネプテューヌはあたりを見回す。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん、ベリルちゃんって？」
ネプテューヌ「それはねぇ…」

ネプテューヌが説明しようとすると、

ラズベリル「ラズベリル、通称ベリル、『魔界戦記ディスガイア３』のヒロインで主人公マオのライバルであり幼馴染さ」

後ろから2本の角にドクロの首飾りとかわいらしい尻尾がある女の子の悪魔・ラズベリルが説明した。

狂子「さっすがはお姉様、読者に分かりやすいご説明をなさるだなんて」

明日香「しかもなんて説明的なんでしょう。そこに痺れますわ」

後ろのラズベリルの連れが感動している。

ネプテューヌ「あ、ベリルちゃんおっひさ～♪」

ラズベリル「久しぶりだなネプテューヌ。それにヴァルバトーゼも」

ヴァルバトーゼ「うむ」

ラズベリル「ところであんた達なにしにここへ来たんだい？」

ラズベリルが聞くと、ヴァルバトーゼが答える。

ヴァルバトーゼ「いや特におおごとではないが、ゲラビッツと言う男が内のプリニーどもに世話になったから探してたのだ」

ネプテューヌ「ゲラビッツはグルグル眼鏡の奴だけどね」

ラズベリル「何かあったのかい？」

ヴァルバトーゼ「あやつは、プリニー共を洗脳して挙句魔界全土の魔物たちを配下にしようとしているのだ」

？？？「なに！？それは興味深い！」

っと驚いたのはラズベリルではなく黒いシャツに赤い上着でメガネ

をかけた少年だった。

ラズベリル「…相変わらずそう言うのが好きだねマオは」
マオ「プリニーどもを洗脳とは…ハァ…ハァ…これが落ち付いていられるか」

興奮しているマオに顔を引き攣らせるネプテューヌ達。
マオは実験系が大好きな変態なのだ。

マオ「人を変態扱いするな！」
？？？「変態ですけどね…」

マオに突っ込んだのは赤マフラーで白い服の少年、その隣に白いロングの髪に来ている服はお姫様な感じの少女だった。

ネプテューヌ「あ、アル君にサファイアちゃんだ」
アルマース「いやアルマースなんですけど…」
サファイア「久しぶりじゃなネプテューヌ殿♪」

アルマースは苦笑いし、サファイアは元気に挨拶する。
一応先に言いますが、彼らは人間です。

ネプテューヌ「久しぶり～。あとはラハール君達か～」

ネプテューヌは考え込むしぐさをして、何かを思いついた。

ネプテューヌ「そうだ！暗黒議会へ行こう！」

そう言ってそそくさと暗黒議会へと向かった。
ヴァルバトーゼ達も付いていった。

銀時「暗黒議会？」
ノワール「魔界にある議会のことよ。議題を出して可決させるとその通りになるから」

暗黒議会のことを説明するノワール。

小毬「てことは、『お菓子の国を作りたい！』って議題を可決するとお菓子の国が出来るの？」
ノワール「例をあげればそうね」
小毬「そっか～♪」

小毬はそれを聞いて喜んだが、

ノワール「でもそれを判断するのは議員のみんなだから必ずしも可決するとは限らないわ。無理にでも可決したいなら力ずくでやることもあるけど」
小毬「・・・諦めます」

小毬は物騒なことに諦めた。

銀時「よし、『イチゴパフェ食べ放題が欲しい！』の議題で可決させてやるぜ！」
神楽「私は『酢昆布いっぱい食べたい！』ネ！」
桂「俺は『高級そばを出したい！』」
新八「欲望叶えようとすんな！！」

欲深い銀時達に怒鳴る新八。

それを聞いたなのは達も、

なのは「じゃあ私は『銀さんと結婚したい！』で」
フェイト「ずるいよなのは！私がその議題を！」
シグナム「いやこの私が！」
リインフォース「いや私が！」
スバル「私だよ！」
ティアナ「兄さんは渡さない！」
猿飛「銀さんは私のもの！」
銀時「テメェらいい加減にしろよ！！」

銀時が怒鳴り、桂、はやて、ベールはニヤニヤと笑う。
ちなみにはやては内心『桂さんとラブラブになりたい』という議題を叶えたいと思ったらしい。

魔界・暗黒議会

ＩＢＧＭ作戦会議ｂｙ魔界戦記ディスガイア４（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｔｅａｍ－Ｄ４）

そこは魔界全土にあり、キャラメイクや敵レベル変換などがある施設。キャラを作って弟子にしたり敵のレベルをあげさせるにはこの場所でするのだ。

そこで、ネプテューヌ達は議会に着いた。

ネプテューヌ「さてと、議題はなにがあるかな？」

ネプテューヌは議題の表を見る。

『伝説のスイーツを出したい！　１０００』
『チートブレイカーと戦いたい！　９９９９９』
『音速のハリネズミに会いたい！　７００００』
『伝説の魔王神を召喚したい！　９９９９９』
『黒夜叉を呼び出したい！　９００００』
『百合転生者を呼び出したい！　８００００』
『破壊神を召喚したい！　９９９９９』
『亜空軍レンジャーを呼び出したい！　６００００』
『フラワープリンセスを呼び出したい！　６００００』
『白い悪魔？を召喚したい！　５０００』

いろんな議題があった。
ちなみに右の数字はマナ使用数で、マナの数で敵の強さがあるらしい。そして可決率は極めて低い。

ネプテューヌ「仕方ない。受付さん、オリジナルをお願い」
受付「オリジナルですか？どんな議題で？」
ネプテューヌ「それは…『歴代のメンバーを呼び出したい！』」
受付「かしこまりました。では中へ」

ネプテューヌは受付に連れられ、中へ入っていった。

暗黒議会・会議室

ＩＢＧＭ希望の欠片ｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｆｒａｇｍｅｎｔｓ　ｏｆ　Ｈｏｐｅ）

そこで、沢山の議員達が集まっていた。

ドラゴンの邪龍族議員、右手に筒状のがある銃魔神族議員、骨状の龍の死龍族議員、石造のような魔獣族議員、ミーニャそっくりの猫耳がある猫娘族議員、リリスそっくりの水着のような服の女悪魔の夜魔族議員、腐った体にゾンビに等しい屍族議員、キノコのモンスターの珍茸族議員、そして魔界の雑用なのに議員であるプリニー族議員が出席していた。
数は計３０体いる。

ネプテューヌ「私の議題は『歴代のメンバーを呼び出したい！』、その議題に一票を！後お願いします」
議員長「分かりました。判定は！？」

議員長が議員達に言うと議員達は判定を始めた。

邪龍族議員×３「賛成！！反対！！賛成！！」
銃魔神族議員×３「賛成！！賛成！！反対！！」
死龍族議員×３「賛成！！反対！！反対！！」
魔獣族議員×５「賛成！賛成！賛成！反対！賛成！」

猫娘族議員×４「賛成！反対！賛成！反対！」
夜魔族議員×４「賛成！賛成！反対！賛成！」
屍族議員×３「賛成！反対！賛成！」
珍茸族議員×３「賛成！賛成！賛成！」
プリニー族議員×２「賛成ッス！反対ッス！」

全員が言い終わり、賛成は１０１、反対は６２となり、

議員長「出ました！よって『歴代のメンバーを呼びだしたい！』が可決されました！」

ネプテューヌはそれを聞いて安心の吐息を吐いた。

数十分後、

ネプテューヌは広い場所で待っていると、魔方陣が現れ、中から二本の触覚（？）があるマントだけで上半身裸の少年が現れた。

ラハール「ハーッハッハッハッハ！、このラハール様を呼びつけるとは、一体どこのどいつなのだ？」
ネプテューヌ「久しぶりだねラハール君」
ラハール「ん？お前はネプテューヌではないか、呼んだのはお前か？」
ネプテューヌ「そうだよ。あとエトナとフロンはまだかな？」
？？？「あたしを呼んだ？」

魔方陣から赤い髪に小悪魔な感じの露出度の高い服に逆さまのハート型の赤い尻尾がある少女が現れた。

ネプテューヌ「あ、エトナ」
エトナ「ネプテューヌじゃん、見ない間に変わって……ないわね」
ネプテューヌ「失敬な、後は…」
？？？「私ですよ～」

ラハールとエトナとは違う魔方陣が現れ、長い金髪に青い蝶リボンを付けた天使が現れた。

アルティナ「フロン様！」
フロン「ひっさしぶりです～ネプテューヌちゃん」
ネプテューヌ「久しぶり～、後はあの二人だけど…」

そう言うと、目の前にゲートが現れ、赤髪と赤い大きなネクタイを付けた青年とリボンが多い黒いドレスを着た金髪の女性が現れた。

ネプテューヌ「やっほ～♪アデルにロザリン♪」
アデル「久しぶりだなネプテューヌ」
ロザリンド「久しぶりじゃのネプテューヌ、余もうれしいぞ」

アデルとロザリンドは嬉しそうに言う。

ネプテューヌ「で？お二人は夫婦としてどんな感じかな？」
アデル「どんな感じって…そりゃまぁいい感じの方だ」
ロザリンド「余とアデルは絶対に切れぬ絆があるから大丈夫じゃ」
アデル「ロザリー…」
ロザリンド「アデル…」
アデル「ロザリー」

ロザリンド「アデル」
ネプテューヌ「ゴメン、止めてくれない？聞いた私が馬鹿だったよ」
いちゃつくアデルとロザリンドに片手で顔を押さえて待ったをかけるネプテューヌ。
周りの人たちは苦笑いを浮かべる者や興奮している者やウザそうに見る者や顔を赤くする者などいる。

リリス「なんかいろんな人がいるね」
ヴィヴィオ「みんなネプ姉ちゃんの知り合いみたいだけど」
サチコ「個性的だね～」

リリス達はラハール達を見てそれぞれ感想を言う。

ラハール「・・・おいネプテューヌ、こいつ等はなんだ？」

ラハールがリリス達を指差してネプテューヌに聞く。

ネプテューヌ「あ、この子たちは訳あって私が面倒を見てるんだよ」

ネプテューヌが答える。
すると、

全員「なにぃぃぃぃぃイイイイイイイイイイ！！！！？！！？」

全員驚愕した。

ラハール「お前そんな成りでなったのか！？」
エトナ「なんでそうなるのよ！しかもむかつく奴がいるし！」
フロン「ネプテューヌさん！ついに手に入れたのですか！おめでと

うございます！」
アデル「オマッ、マジなのか！？」
ロザリンド「ぐッ、敗北感が…」
マオ「ほほぅ？お前の子供か？」
ラズベリル「なんだって～！？羨ましいぜ畜生！！」

ヴァルバトーゼ一行を除く全員はそれぞれいろんなリアクションをした。

ネプテューヌ「・・・あたし結婚してないから。それとこの子たちは養子だから」
ラハール「なんだそうなのか」

ネプテューヌは誤解を解いて、ラハール達は納得した。

アデル「ところで俺達を集めた理由はなんだ？」
ネプテューヌ「それはね…」

ネプテューヌは理由を話した。

ロザリンド「なるほどな」
エトナ「あたしのプリニーどもがなんか減ってるな～と思ったらそいつが原因なのね」

全員はゲラビッツに対して少し怒りを感じた。

フロン「でしたらやることは一つですね」
ネプテューヌ「よし、みんなあいつをぶったおしに行くよ～」

ネプテューヌの掛け声に全員は答えた。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

プリニー「って質問コーナーが乗っ取られてるっス！」

エトナ「失礼ね、銀八は病気になって代わりにあたしが担任になったのよ」

フェンリッヒ「ホントなのか？ちなみにアシスタントは俺だ」

プリニー「俺もついでとしてアシストするッス」

エトナ「それじゃペンネーム『鳴神ソラ』から始めるわよ。『マリオ「ああ、そっちの方か！」

クッパ「まあ、名前と姿位しか分からないのだ」

ルイージ「しっかしゲラコビッツの奴…まさか原作でのダークスターの代わりにダークソウルでパワーアップしようとするのかな？」

ネス「けど…逆に吸われたんだよね？」

リュカ「それじゃあこれでも吸われるの？」

マリオ「だろうな…」

クッパ「それにしても…我輩の技が出るのだな…あのブロック犬の技には作者は気に入っていた物だ…真王にまた質問なのだ！『ネプテューヌの中の銀時達も新しいアクションを覚えるのか？』」

マリオ「俺も質問…『何でディスガイアとクロスさせたんだ？』」

スネーク「確かに気になるな…同じく質問『大体はディスガイアの敵とマリオ&ルイージRPG3の敵が出るのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ネス「どう言う奴が出るのやら…」

リュカ「…銀さん達の出番が極力少なくなるのは気のせいかな；」『んじゃ作者、答えなさい」

真王「態度でか！…はい、銀時達もそうなります。2つ目ですが、それはもちろん面白いからだ。3つ目ももちろん出しますよ」

フェンリッヒ「では『鳴神ソラ』、廊下に立て。次はペンネーム『支配者』からの質問だ。『今回もとっても面白かったです。質問ですが登場させるディスガイアキャラはアレで全部ですか？』いや、あとティンク、雪丸、チャンプルが出てないが、出す予定だとのことだ」

プリニー「『支配者』さん。廊下に立ってくださいッス。次はペンネーム『月光閃火』さんからの質問ッス。『よぉ…月光閃火だ。しかし…ドンドン登場キャラが増えていくな…（汗）。しんちゃんの登場は正直嬉しかったが…。

輝刃「だな…。意外とまた登場するかもな…ほのぼの編で。」

だよなぁ…あ、質問行くぜ？まずは俺からだ。

1．作者に質問だ。ディス○イアの方だけど…『3』以前のキャラは登場するのか？『4』はさすがに発売されて間もないから難いだろうし…。

輝刃「うむ…それは気になるな。特に俺は『2』のアデルとロザリンドが好きだな。声優ネタイケそうだし…。次は俺からだ。」

2．ヴァルバトーゼに質問…イワシ以外で食べ物の好き嫌いはあるか？あと気になる異性も情報プリーズだ。

ハハハ…輝刃、話の中であったように原作ラストから結構経ってるんだから既に家庭あるだろ…多分。』」

フェンリッヒ「馬鹿もの！！4の主人公であらせられるヴァル様が

出ているわ！！」

ヴァルバトーゼ「落ち着けフェンリッヒ。俺様に好き嫌いはない。ニンニク、ピーマン、青汁だって行けるぞ。あと気になる異性と言うのは…アルティナだな…／／／／」

若干てれるヴァルバトーゼ。

エトナ「これが恋する人っての？ムカつく、『月光閃火』、永遠に廊下に立ちなさい」

プリニー（八つ当たりッス…）

エトナ「次はペンネーム『黒龍』からよ。『黒龍「またなんか新しいキャラが出てきた！」

ソラ「そうだな」

銀時「それにしても今度敵は雑魚臭プンプンだな」

ソラ「まぁ何にしてもネプテューヌなら大丈夫だろ」

銀時「そう言えば黒龍は『魔界戦記ディスガイヤ』知らないんだよな」

黒龍「名前位しか知らないですね」

ソラ「とりあえず質問にいったらどうだ？」

黒龍「それもそうですね。1．ネプテューヌ質問。もし自分の家族がグレたらどうしますか？

2．全員に質問。修羅ネプテューヌとヘドロはどっちが怖いですか？
3．修羅ネプテューヌに勝てる人はいますか？」

ソラ「最後に俺からドーナツを贈っておく」

銀時「じゃあ俺も。確かバルトーゼって奴はイワシ好きみたいだからイワシ贈っとくわ」『ネプテューヌだったらこう答えるわ」

ネプテューヌ「更正させてやるよ。物理的に…#（若干修羅化）」

リリス・ミーニャ・アルラ
「ガクガクブルブル・・・」

エトナ「うわ怖…、えっと次は…」

全員「どっちも怖ぇよ（いです）！！そして勝てねぇよ（ません）！！」

フェンリッヒ「修羅化したネプテューヌは閣下でさえも半殺しにした存在だ。かく言う俺も二度とあんな目に会いたくないな…」

エトナ「分かるわかる、あたしも死にかけたわ」

真王「簡単にいえば『黒神』の狂王スバルよりも強いと認識してください」

エトナ「そんじゃ、『黒龍』、ネプテューヌを怒らせないように気を付けてね」

フェンリッヒ「次回のアシストはラハールとフロンと言うやつだ」

エトナ「そんじゃ、またね～♪」

その頃銀八は、

銀八「フガーーー！！フガーーーーーーーーーー！！！！（クソーーー！！ここから出しやがれーーーー！！！！）」

エトナによってグルグル巻きにされて閉じ込められてました。

第五十一訓：議題は必ずしも通るとは限らない（後書き）

真王「今回は普通に、次回はネプテューヌに新たな技を手に入れる！？」

ラハール「次回『助けたお礼は凄いものがある』テイクオフだ！！」

～悩み～

真王「他作品のキャラを出すにはその作者の許可を出す必要があるのでしょうか。例えば黒龍のソラを出したいなら黒龍さんの許可が必要かと思います。登場させようと思うキャラはプリムレンジャーとリリーとがはねです。この場合、リアルルイージさんとｍｙｕ－ｍｙｕさんの許可が必要かと思われますが、どう思いますでしょうか…」

第五十二訓：助けたお礼は凄いものがある（前書き）

真王「ネプテューヌに新たな技を習得か！？」

フロン「『リリカル銀魂』始まります？」

第五十二訓：助けたお礼は凄いものがある

ネプテューヌとヴァルバトーゼ達がゲラビッツの情報を集め、森の中に人影が見えたとの情報を入手し、ネプテューヌ達はその森へ入った。

エリリンフォレスト

ＩＢＧＭ森のきのこにご用心ｂｙスーパーマリオＲＰＧ（ｆｏｒｅｓｔ　ｍａｚｅ　ＥＸＴＥＮＤＥＤ　ｓｕｐｅｒ　ｍａｒｉｏ　ｒｐｇ．ｗｍｖ）

薄暗い森の中、ネプテューヌ達は探索していた。

ネプテューヌ「この先を抜けたらゲラビッツはいるかな？」
ヴァルバトーゼ「行くしかないだろう」
エトナ「あたしこの場所キラ～い」
フロン「駄目ですよエトナさん、かく言う私もこの場所は好きじゃありませんが」

エトナとフロンはこの場所を嫌がっていた。
ジメジメした森なので女性はどうも好きになれない場所である。
コケやキノコが生えている場所でもある。

ネプテューヌ「ホントだね、頭が少しムズムズするんだけど」
アルマース「ってネプテューヌさんへんなキノコ生えてますから！！」

ネプテューヌの頭に紫色のNの文字が書かれたキノコが生えてきたのでアルマースがそれを抜く。

ネプテューヌ「プリニー達何処にいるんだろうね。かんぱいだな」
ヴァルバトーゼ「ああ、ほんとにかんぱいだ」

なぜかネプテューヌとヴァルバトーゼがシルクハットと付け髭つけて手に少し入ったワイングラスを持って「ルネッサ～ンス！わ～っはははははは！」と言いながら乾杯する。

エミーゼル「心配だろ！！しかもそのネタ古いし！！」
アルティナ「髭男〇ですか…」

エミーゼルが突っ込みを入れ、アルティナは呆れる。

フェンリッヒ「さすが我が主、古いネタでもお構いなしにボケるそれもまさに素晴らしい能力（チカラ）」
アルマース「褒めるとこなのそれ！？」
ネプテューヌ「おっと、遊んでる場合じゃなかった、早く行かなきゃ」

ネプテューヌは探索を再開した。
すると・・・

？？？「お～い！そこの人～！」

ネプテューヌ「ん？」

声が聞こえたのでその場で止まるネプテューヌ。
声のした方向は大きな湖の上に浮島があり、その浮島で手を振っているキノコ？がいた

キノコ？「そこの人～！ちょっと待つエリ～！」
ネプテューヌ「大変だ！島に取り残されたキノコがいるよ！」
ラハール「何言ってるんだ、泳げばいいじゃないのか？」

ラハールは興味なさそうに言うが、

キノコ？「エリはカナヅチなんだエリ～！」

キノコは答えた。

エトナ「あんな奴ほっといｔ「ちょっとまって」グエッ！」

ネプテューヌに首を掴まれた。

ネプテューヌ「キノコさ～ん！今助けに行くからね～！」

ネプテューヌはそう言って飛び降りる準備をしたら、

キノコ？「駄目エリ！！その毒沼は入ったら二度と出られないエリよ！」

キノコが叫んで危うく入りかけたネプテューヌ。

キノコ？「でもエリを助けてくれるなら感謝するエリ！お礼にこの

キノコをあげるエリ！」

そうキノコが言って取り出したのは黄色くて紫の斑点があるキノコだった。
それはネプテューヌにとって見覚えのあるものだった。

ネプテューヌ「あ！それってバキューンキノコ！」
キノコ？「おしい！これはバキュームキノコエリ。ありとあらゆるものを吸い込めるとっても貴重なキノコエリ」
ネプテューヌ「貴重って…私それ食べて毒もらったんだけど！」
キノコ？「失礼エリ、このキノコに毒はないエリ。ただ2つあった貴重なバキュームキノコのうち一つがいつの間にかなくなったエリ」

ネプテューヌや中に銀時達はそれを聞いて驚いた。
ゲラビッツはキノコのバキュームキノコを盗んで改造したんだと。

キノコ？「ともかく、これは毒もなくて安全なキノコだから大丈夫エリ」
ネプテューヌ「それは分かったけど、一体どうやって助けようかな？」
キノコ？「大丈夫エリ、この島は浮島だから動くことがあるエリ。そこにあるロープを引っ張ればいいエリ」

足元を見ると確かに浮島につながれているロープがあった。

ネプテューヌ「これを引っ張ればいいわけだね。ならいくよ～」

ネプテューヌはロープを引っ張り始めた。
ちなみにヴァルバトーゼ達はピクニック気分でシートを敷いてお茶を飲んでいた。

銀時「何やってんだネプテューヌの奴」
イストワール「浮島に取り残された人を助けるのでしょうね。ちょうどいいです、私についてきてくれませんか？」
銀時「え？おい」

イストワールが銀時を引っ張ってある場所へ連れて行かれた。
なのは達も後をついていった。

ネプテューヌの体内・パワースペース（腕）

イストワールの案内されたところは、少し膨らんだ筋が動いている場所だった。

銀時「なんだあの動いてんのは？」
イストワール「あれはネプテューヌさんの腕の筋肉です」
真人「筋肉だと！？」

筋肉を聞くや否や、真人が顔を出した。

銀時「お前何やってんだ」
真人「へっ、筋肉と聞いてやって来たぜ。それにしてもまだ足んな

いみたいだな」
なのは「どういうこと？」
なのは達が疑問に思うと、真人が答えた。
真人「筋肉を活性化させるアミノ酸が足りないんだ。アミノ酸をあの筋肉に溜めれば力が出るんだが…」
新八「アミノ酸なんてどこにもありませんよ」
新八の言う通り、アミノ酸はどこにも見当たらない。
あると言えば大砲のようなものがある物ぐらいだが。
ブラン「・・・」
ブランはとりあえず大砲みたいなものを叩いてみた。
すると大砲から何かが飛び出してきた！
ＩＢＧＭミニゲームｂｙマリオ&ルイージＲＰＧ３（Ｅｘｔｅｎｄｅｄ Ｅｄｉｔｉｏｎ：Ｍｉｎｉｇａｍｅ Ｔｈｅｍｅ（Ｍａｒｉｏ &ａｍｐ；Ｌｕｉｇｉ：Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ Ｉｎｓｉｄｅ Ｓｔｏｒｙ））
イストワール「銀時さん危ない！」
銀時「うおお！！」
何かはネプテューヌの筋肉に当たった後跳ね返って銀時に向かってきた。
銀時は驚いて木刀ではじき返した。

イストワール「今度はブランさんです！」

なのははまたネプテューヌの筋肉に当たった後跳ね返って今度はブランに向かってきた。

ブランもハンマーでそれを弾き飛ばし、ネプテューヌの筋肉にすっぽり入るとネプテューヌの筋肉が膨らんだ。

ネプテューヌ「ん！？なんか力が出てきた気がする」

真人「さっき飛び出たあれはアミノ酸だ！どんどん筋肉にぶつけてやれ！」

ヴィータ「よし！暇つぶしにやってやる！」

ヴィータ達も参加して、アミノ酸をどんどんぶつけた。

ヴィータ「オラオラオラオラ～！」

どんどんアミノ酸をぶつけていくと、大きなアミノ酸が出る。

ヴィータ「こいつでいけ～！！」

ヴィータは大きなアミノ酸をぶつけ、筋肉が最大限にまで巨大化し

た。

ネプテューヌ「ぬぅぅぉおおお

ネプテューヌ「もぐもぐもぐ・・・ん！？」
ヴァルバトーゼ「どうした！？」

ネプテューヌが口を押さえたのでヴァルバトーゼ達が異変を感じたが、

ネプテューヌ「まずい」
全員「だ～～～～！！」

ヴァルバトーゼ達はずっこけた。
もちろん銀時達もずっこけた。

エリノコ「…ま、まぁそれはいいとして、キノコの効果を試してみるエリ」

ネプテューヌは深呼吸して、

ネプテューヌ「ふぉぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

ピンクの悪魔の如く吸い込み始めた。

ヴァルバトーゼ「うおっ！？何と言う吸い込み力だ！」
エトナ「凄いわね～。城の埃が取れそうだわ」
フロン「掃除機ですか！？」
エリノコ「バキュームキノコは大喰いな人によって吸い込む力が強いエリ」
リリス「あ～、母さんよく食べるからね～」

吸い込みから避難している人たちはそれぞれ感想を言う。

ガンッ！

ネプテューヌ「イダッ！」

突然硬いものがネプテューヌの顔にあたり、吸い込みが止まる。

アルティナ「大丈夫ですかネプテューヌさん！」

ネプテューヌ「いたた、まぁね」

ヴァルバトーゼ「今のはなんだ？」

？？？「そ、その声は閣下ッスか？」

ヴァルバトーゼは聞き覚えのある声が聞こえてそっちに振り向くと、硬い檻にギュウギュウ詰めにされたプリニー達がいた。

ヴァルバトーゼ「おまえたち！」

プリニー「やっぱり閣下ッスね！助けて欲しいッス！」

プリニー達は助けを求める。

ネプテューヌ「それにしてもどうしてあなた達が？」

プリニー「俺達は洗脳から逃れたプリニーッス。ゲラビッツは洗脳できなかった俺達をこんな檻に閉じ込めてほっとかれたッス！」

プリニー「許せないッス！ゲラビッツは俺達を邪魔もの扱いしやがったッス！」

プリニー「でもその前に開放されたいッス」

ネプテューヌ「分かった。手荒だけど我慢してね」

ネプテューヌはプリニーの檻を壊し始め、プリニー達を開放させた。

プリニー「助かったッス！」
プリニー「ありがたいッス」
プリニー「やった～ッス」

解放されたプリニー達は喜んでいるようだ。

ヴィヴィオ「よかったね」
ヴァルバトーゼ「しかし、なぜプリニーどもが…」
？？？『それは我が教えてやるよ♪』

突然聞き覚えのある声にあたりを見回すネプテューヌ達。
上を見上げると、ゲラビッツ……にそっくりのＵＦＯだった。

ゲラビッツ『そのプリニーどもは我の洗脳を受けていないから閉じ込めたのさ。それと、他にも洗脳を受けてない者たちの声も聞かせてやるよ』

モニターが現れて、囚われている魔物たちが映った。

寝子猫族『にゃ～、ここからだしてほしいにゃ～』
猪人族『ブヒ～、俺達プチオーク族を助けてほしいブヒ～』
魔獣族『誰でもいい！誰か俺達を助けてくれ！』
夜魔族『誰か～、私達を助けてくださ～い』
怪鳥族『コケコケコーー！！（誰か助けて～！！）』
死告族『こちらは死告族、敵に捕らわれてしまった』
銃魔神族『ＳＯＳ！誰か俺達を開放させてくれ！！』

ネプテューヌ達はこれを見て怒りを覚える。

ゲラビッツ『どうかね？怒ってるようだけどお前たちの冒険はここ

で終わりにしてもらうよ』

ズシーーーン！！

突然上からエリノコそっくりのキノコモンスターエリンギャーが現れる。

しかし倍くらいでかく、顔がゲラビッツのようにグルグル眼鏡のようになっている。

ＩＢＧＭクッパ戦闘ｂｙマリオ＆ルイージＲＰＧ３（Ｍａｒｉｏ　＆ａｍｐ；　Ｌｕｉｇｉ‥　Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ　Ｉｎｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｗｓｅｒ　Ｂａｔｔｌｅ）

ネプテューヌ「うわ！でっかいエリンギャーで洗脳されている。ゲランギャーって呼ぶかな？」

デカゲランギャー「エリリ！お前達はここでくたばるがいいエリ！行け！」

ゲランギャー×１０「エリーー！！」

デカゲランギャーの背中から１０体のゲランギャーが飛び出してきた。

ネプテューヌ「な、なに！？」

ネプテューヌは驚いて思わず吸い込みを始める。

ゲランギャー「ってこんな時に吸い込み始めたら・・・・・中に

吸い込まれちゃうエリ～！」
銀時「な、なんだ！？」

１０体のゲランギャーは吸い込まれてネプテューヌの中に入ってしまう。

ゲランギャー「まあいいや。こいつらから先に倒すエリ」
銀時「んだと！俺達をザコ扱いしたな！」

ザコ扱いされた銀時は怒る。

銀時「まあいいやでやられてたまるかこのやろ！」
ゲランギャー「ウギャッ！」
桂「天誅！」
ゲランギャー「ウギャ！」
なのは・ティアナ「シュート！」
ゲランギャー×３「ギャァァァッ！！」
新八「うおおおおおお！！」
ゲランギャー「邪魔エリ」
新八「なんで僕だけェェぇ！？」

銀時達はゲランギャーを攻撃する。

ゲランギャー「なかなかやるエリな。けど舐めてはいかんエリ！キノコ胞子攻撃！」

ゲランギャー達は綿のようなものを出してきた。

銀時「なんだそれは？」

しかし銀時達は平然としている。
すると、銀時の頭にキノコが生えた。

フェイト「ぎ、銀時！頭にキノコが！」
銀時「え？あ！ホントだ！てかお前らも生えてんぞ！」
なのは「え？ああ！ホントだ！」
ヴィータ「うわ！あたしもだ！」
ノワール「ちょっ私まで！？」

キノコが生えた事にパニックになる銀時達。

ゲランギャー「フハハハ、俺達の胞子にふれた者は頭にキノコが生えるエリ。そしてそれだけじゃないエリ。生えてから数時間たつと体が変化して最終的に俺たちみたいになるエリ」

それはつまりキノコが生えて数時間たつと、銀時達はみんなエリンギャーのようにキノコモンスターになるというのだ。

銀時「ちょっと待てェェェェェェェ！！それって俺達はキノコになっちまうってことかぁぁ！？」
ゲランギャー「ま、そうエリ」
銀時「いやだよ！絶対になりたくないエリよ！・・・ってあれ？」

銀時は今一瞬『エリ』っと言ったような気がした。

ゲランギャー「症状の一段階エリね。『口癖がエリと着くこと』エリ」
銀時「最悪じゃァァァァァァァ！！！最悪なもんもらっちまったエリ！！」
フェイト「銀時！エリって言っちゃってるエリよ！って私も！？」

なのは「フェイトちゃん！私もなっちゃうエリ！」
桂「このままでは本当にキノコになってしまうエリ！」
はやて「いやァァァァァ！桂さんがエリになってしまったエリィィィィィィ！！」
ベール「厄介なことをしてくれますエリね…」
銀時達はショックを受けた。

ゲランギャー「フハハハハハ、このまま俺らの仲間になるエリ！」
なのは「そうなる前に、ディバインバスター！」
ゲランギャー「ギャァァァァァァァ！！！」
砲撃でゲランギャー達は全員やられてしまった。
その時頭に生えたキノコは枯れて消えた。

ネプテューヌ「ん！？んん！！？」
ヴァルバトーゼ「どうしたネプテューヌ！！」
デカゲランギャー「俺の仲間が暴れてでｍ「ボワァッ！！」ギャアアア

サチコ（なのはさんの砲撃だ）

ヴィヴィオ達はそれを見てなのはのディバインバスターだと分かった。

デカゲランギャー「テメェ！口からビーム出すだなんて聞いてないエリ！！」

デカゲランギャーはしぶとく生きてた。
只砲撃をビームと勘違いしている。

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌ…お前何時の間に習得したのか？」
ネプテューヌ「習得したわけじゃないよ。でもトドメと行こうかな。プリニーさん」

ネプテューヌはプリニー達を呼ぶ。

プリニー「なんスか？」
ネプテューヌ「相手は弱ってるから最後はあなた達でお願いね」
プリニー「ヨッシャァァァァ！！覚悟しろこのでかキノコッス！！」

プリニーたとがやる気になった。
出番が欲しかったのかと一同は思った。
そしてプリニー達はいっせいにデカゲランギャーに突撃すると、

ネプテューヌ「行くよ！プリニーさん！」
プリニー「…ってちょっと？なんで赤い火の玉を出してるんスか？」

赤い火の玉を出して構えているネプテューヌを見て嫌な予感がした

プリニー達。

ネプテューヌ「それ！！」

ボッ！

プリニー達「ギャアチャァァァァァァァァァァァァァァァァス！！！」

お尻に火が引火して空高く飛び上がるプリニー達。
そして落下地点はデカゲランギャー。
プリニー達はデカゲランギャーに落下し、

ドガァァァァン！！

デカゲランギャー・プリニー達
「ダラバァッ！！！」

爆発してデカゲランギャーは倒れた。

ネプテューヌ「勝った～！」

ネプテューヌは嬉しそうに飛び跳ねる。

プリニー「うぅ…いつにもなくひどいッス…」

プリニーは丸焦げな姿で泣いている。

ネプテューヌ「はいこれ」

するとネプテューヌが回復役をプリニーに渡した。
それもプリニー全員分。

ネプテューヌ「頑張ってくれたお礼だよ」
プリニー「こ、これが温もりってやつッスか！こんなに感動したのは初めてッス！」
プリニー「俺達の女神様が見えるッス。あ、女神だったッス」
プリニー「ネプテューヌさま万歳ッス！」

心やさしいネプテューヌに感動するプリニー達。
が、そのせいである人の禁句を言ってしまう。

プリニー「何処ぞのぺちゃぱい魔神とは大違いッス！」
プリニー「そうッス。いつもこき使ってるやつとは違うッス」
エトナ「誰と違うって？」

エトナが殺気立って笑う。
ニコニコ笑っているが、目が全然笑ってない。

プリニー「えひっ！？すいませんでした～～～っス！！」

プリニー達は全力で土下座した。

エリノコ「それじゃあエリは旅をするエリ。またどこかで会うエリよ～」

エリノコは荷物を持ってどこかへ行った。

ネプテューヌ「よ～し、このまま森へ出るよ～」

ネプテューヌは固有技、『吸い込み』を習得した。
ネプテューヌはモンスターアクション、『ボコスカプリニー』を習得した。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

プリニー「あれ？銀八先生はどうしたんスか？」

エトナ「前回も言ったように病気よ」

ラハール「嘘つけ！出番増やすために縛ってどこかに置いただろう！」

エトナ「ちっ！さすが殿下、いち早く気づいたわね」

フロン「そんなことより、アシスタントは私天使長フロンと魔王ラハールさんがお送りします」

ラハール「うむ。ではペンネーム『鳴神ソラ』から始めるぞ。『ルイージ「思いっきり作者が読んだスマブラ小説に出る人達のあったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」』

ソニック「Ｈｅｙ，しかも俺のもあったし；」

一応聞いた方が良いとも思いますよ～かく言う自分も黒龍さんに許可を貰って自分の小説であちらの主人公の１人である天道ソラ氏を出しましたし…

マリオ「それにしても歴代ディスガイアのキャラが出てるな～」

ネス「機動六課に着そうだね～」

リュカ「確かにエトナさんの趣味に合いそうな人がいるしね；」

マリオ「そんな訳で真王に質問『銀時達が覚えるアクションって大体は原作での俺達のアクションを元にするのか？』」

ルイージ「そう言えば…気になった事を…『イリスさん達も吸い込まれたの？』」

スネーク「ディスガイアのメンバーに質問『内のマリオはどう思う？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

真王「はい、原作のとアレンジした技を繰り出します。あとイリスさん達は吸い込まれておりません」

ラハール「そしてマリオか？魔王級の実力を持っているようだな」

エトナ「ふ～ん、結構楽しめそうじゃない」

フロン「マリオさん、ピーチさんの愛をちゃんと受け取ってくださいね」

アデル「赤繋がりだな」

ロザリンド「アデルと戦闘スタイルが似ておる…」

マオ「あのチートブレイカーはどんな仕組みなのだ？（興奮気味）」

ラズベリル「結構強そうだね」

アルマース「なんだか苦労が増えそうな…」

サファイア「ほほう？面白そうな奴じゃの♪」

ヴァルバトーゼ「チートブレイカーか…」

フェンリッヒ「・・・（閣下の覇道を邪魔するものであれば…やるしかあるまい）」

フーカ「只のおっさんじゃない」

デスコ「この人が真のラスボスデスか！？と言うかお姉さま恐いも

の知らずデス…」

エミーゼル「強そうだな…」

アルティナ「ある意味すごい人ですね…」

プリニー「とまあ皆さんの感想はこんな感じっス。では『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってくださいッス」

エトナ「次よ。ペンネーム『支配者』からの質問よ。『今回も面白かったです。
ラハールに質問です。自分より強いディスガイアキャラは何人いると思っていますか？
エトナに質問です。アニメのとき見たいにラハールの首狙ってるんですか？
銀時に質問です。ラハールと自分どっちが強いと思っていますか？』
あたしは何時か殿下を殺って魔王になるわ！」

ラハール「おいっ！！・・・まぁいい。俺様より強いものと言えばロザリンド（覚醒時）、ヴァルバトーゼ、そしてディスガイアではないがゼダと言う宇宙最強の魔王だな」

銀時「無理です、勝てません」

真王「白夜叉になったら勝てる確率が上がるかもよ？では『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

フロン「次は、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問です。『よぉ…月光閃火だ。

ハハハ…修羅ネプテューヌ、確かにかなり怖そうだな…。ま、俺なら楽勝だけど♪

輝刃「…どうなっても知らんぞ（汗）？とりあえず、質問行くぞ。まずは俺からだ。」

1．エトナに質問…閃火謹製豊胸薬…要るか？要るならやるが…。

ハハハ…輝刃、いつの間に…（汗）。次は俺からだ。

2．ネプテューヌに質問だ。修羅化しても嫌いな食べ物とかって変わらなかったりする？

輝刃「…何をする気なんだ閃火…（汗）。」

へへっ…内緒さ♪（不敵微笑）』ではまずその豊胸薬は私が・・・」

エトナ「ダメ！それはあたしが貰うのよ！！」

フロン「渡しませんよエトナさん！！」

真王「没収」

エトナ・フロン「あああああああああああああああああああああああ！！！！！」

真王「うるさい黙れ。あといくらネプテューヌが修羅化しても嫌いな物は変わりません。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

エトナ「次よ。ペンネーム『黒龍』からの質問よ。『銀時「何か出

てんのに活躍してる場面がないって、ある意味辛いな」

新八「なんか、存外に扱われている気分です・・・」

神楽「まったくアル！もっと活躍させて欲しいネ！」

ソラ「まぁ元気出せ」

黒龍「それにしても、どんどんどんどんディスガイアのキャラが出てきて凄いですね」

ソラ「あれだな。出てくるキャラの多さが売りになっているな」

黒龍「それはそうと、ネプテューヌの体の中に入っている銀さん達ってやっぱり白血球に襲われる可能性大ですね」

ソラ「ネプテューヌの白血球だから性質が悪そうだな」

黒龍「それじゃあそろそろ時間なので、質問いきます。

1．銀さん達、ネプテューヌの腹の中にいる人達に質問。胃液とかで溶かされたりしないんですか？

2．紅桜があまり出てきてませんけど、出てくる予定はあるんですか？

3．これから出てくる銀魂メンバーはいますか？」

ソラ「じゃあ俺からネプテューヌに胃薬を贈っておく」

黒龍「それじゃあ次回も楽しみにしています」『」

真王「銀時達は胃袋以外の場所で暮らしていますので大丈夫だと思

います。紅桜はオイオイ出そうと思います。あと現れる銀魂メンバーはネタばれ明かしませんが、ヒントをあげます。銀魂界一の怖さを持つ人です。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

エトナ「次はペンネーム『黒神』よ。『質問です。

新八以外の皆さんへ

原作の最新話で、新八は完全にギャルゲーオタクに堕ちました。そんな哀れな童貞(どうてい)をどう思っているのか、皆さんの答えを聞かせてもらいます。』…まぁぶっちゃけ言うとね」

新八以外全員「キモイ」

プリニー「・・・『黒神』さん、廊下に立つッス。最後にペンネーム『亀鳥虎龍』さんからの質問ッス。『迷彩

「いやぁ、面白いもんだねぇ、この銀髪のボウヤは。　女の子をこんなに虜にするとは、罪な男だねぇ。　私も恋の一つもしてみたいね。」

阿良々木&五和

「（一体・・・・何歳なんだろう、この人・・・・・）」

リクオ

「え～と・・・・質問です。　最近近藤さんや神裂さんから“もう少し年上に頼れ”と言われるんですけど、頼ってもいいんでしょうか？」

神裂

「だから奴良リクオ、貴方はもう少し・・・・まあいいでしょう。

私から女性陣に質問です。　この外見のせいで、十代に見られないのですが、どううすれば・・・・その・・・お・・・女らしく見てもらえるのでしょうか・・・・近藤局長には、婚齢期を過ぎていると言われてしまって・・・・・・」』」

フロン「リクオさん、その二人を頼ってはいけませんよ？馬鹿になりますから」

エトナ「そうよ、止めておきなさい。それと神裂、あんたは女の子の恰好をすればいいのよ」

真王「では『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい」

エトナ「ちょっと真王！その薬返しなさい！」

真王「返したところで碌な事がないからダメ」

エトナ「こうなったら、真王を倒して薬を手に入れる！」

フロン「真王さん！愛（胸）のために死んでください！」

真王「死ね」

エトナ・フロン「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！」

ラハール「・・・・・次のアシストはアデルとロザリンドがやるぞ」

プリニー「それではみなさん。またお会いしましょうッス」

第五十二訓：助けたお礼は凄いものがある（後書き）

真王「次回は巨大な敵が現る！？」

エトナ「次回『怪獣の戦いはやっぱ巨大ロボで』テイクオフよ」

～予告～

ナレーション「あの銀魂らしい兵器が出るようだ」

第五十三訓：怪獣の戦いはやっぱ巨大ロボで（前書き）

真王「お久しぶりに更新です！」

銀時「んで？結局どうなったんだ？」

真王「アンケートを取ったところ『先へ進んでほしい』ということになりました。そしてこれだけは言わせてもらいます。リアルルイージさん、Ｍｙｕ－ｍｙｕさん、そしてプリムレンジャーとリリーとがばねを期待しているみなさん、誠に申し訳ありませんでした！！！（超土下座）」

ネプテューヌ「私からも申し訳ありませんでした」

真王「そして長らくこの小説を待っていたみなさん、お待たせしました。『リリカル銀魂』始まります」

第五十三訓：怪獣の戦いはやっぱ巨大ロボで

ネプテューヌ達は森を抜け、平原を進んでいる。

ネプテューヌ「この先を進めばいいんだね？」

プリニー「はい、この先ッス」

前回助けたプリニー達はネプテューヌ達と行動している。

すると、

プリニー「見えたッス」

一匹のプリニーがあるとこを指差した。

その先にあるのは大きな砦が見えた。

ラハール「あの砦が奴の根城か」

エトナ「どうせなら行く前に一発かましますか？」

ラハール「それもいいな」

マオ「ならば我に任せろ」

マオが携帯を取り出して誰かに電話する。

すると、ネプテューヌ達の近くに巨大大砲が現れた。

アルマース「そ、それであそこに？」

マオ「当然だ。我の研究で完成した『デスオメガバズーカ』、発射ーーー！！！」

叫ぶと同時にスイッチを押し、ドーーーーーーーーーン！！！！

と勢いよく大砲から弾が発射された。
そしてその弾は砦に向かって一直線に向かって・・・

ドガァァァァァァァン！！！

砦に着く前に巨大障壁によって防がれた。
そしてその障壁は見事に砕け散った。

マオ「バリアが張られていたのか・・・」
ネプテューヌ「でもまぁどちらにしろバリア壊したから入れるよね？」
アデル「へっ、面白くなってきたな」

マオはバリアがあったことに少し残念がったが、ネプテューヌがポジティブに言い、アデルは両手を合わせる。
そしてゲラビッツの砦へ向かおうとすると、

ゲラビッツ「ちょっと待ってよ～」

本人（ゲラビッツ）が登場した。

ネプテューヌ「ゲラビッツ！」
ゲラビッツ「いきなり大砲で攻撃するだなんて、おかげで障壁が二度と張れなくなったじゃないか！」

障壁を壊されたことの怒るゲラビッツ。

ネプテューヌ「フフンだ。ゲラビッツ、大人しくお縄に頂戴すれば許してやってもいいよ？」
ゲラビッツ「それはお断りだ。しかし、お前達がここまでやるとは

思いもよらなかったな。ならばあの兵器を使う時だ」

ゲラビッツはそう言って通信機を取り出す。

ゲラビッツ「メタブス！今すぐあの兵器の出番だよ！」

そう言って切ると、砦から何かが飛び出た。

そして、

ズズゥゥゥゥ～～～～～ン！！！！

ネプテューヌ「うわわわっっと！」

地響きにぐらつくネプテューヌ達、そして見上げると、ネプテューヌ達は絶句した。

一応、人の形をしている。だが、その輪郭はカクカクしていて、あまり美しいとは言えない。丸い眼と四角い鼻のみの顔は、そこはかとなく不気味な無表情で、胴体は骨組みだけの箱の中に妙なガラクタが入っているだけだ。手は平たく、指は無い。平たく言えば、

ネプテューヌ「先行者？」

ヴァルバトーゼ「先行者だな」

ラハール「先行者だ」

エトナ「先行者ね」

プリニー「先行者ッス」

中国人形『先行者』その者なのだ。

が、ゲラビッツは笑う。

ゲラビッツ「お前ら馬鹿か？こいつは先行者に見えて先行者ではな

い！全身超合金で出来てどんな魔王でも倒せる殺戮兵器ロボット。人呼んで『グレートセンコウシャＸ』だ！」
ネプテューヌ「ちょ、超合金！？」
ヴァルバトーゼ「ぐ、グレートセンコウシャＸだと！？」
ヴィヴィオ「えっと…これ突っ込むべきかな？」
リリス「いや分かんない」

突っ込むべきなのかスルーするべきなのか困惑するヴィヴィオとリリス達。

ゲラビッツ「フハハハ、さぁこのグレートセンコウシャＸにひれ伏すがいい！」

確かにネプテューヌ達では１００メートルくらいの全長のロボットにかなうことは出来ない。
もはや絶体絶命かと思った。
だがなぜかフロンが静かに笑っている。

フロン「フッフッフ…そんなロボットがあるだけでひれ伏すだなんておかしいですね～」
ゲラビッツ「なに？あんたにも秘策があるっていうのか？」

笑うフロンにゲラビッツは怪しむ。

フロン「もっちろん！巨大ロボで対抗するには巨大ロボでいいでしょ！」
ゲラビッツ「な、なに！？お前も巨大ロボを持っているのか！？」

ゲラビッツはフロンが巨大ロボを持っている事に驚く。
しかし、ヴァルバトーゼ達は苦い顔をしているが。

フロン「その通り！いでよ！私の右腕！『グレートフロンガーX！』」

そう叫ぶと、空から巨大な何かが降ってきた。
それはフロンそっくりな巨大ロボットだった。

フロン「闇夜をかけ、幾多の宇宙を日々続けて現れる超合金兵器、、その名も！『グレートフロンガーX』！天に変わってお仕置きです！」

背景にバーン！と爆発させてカッコよく言うフロン。
対してヴァルバトーゼ達はやっぱりか…とため息をつき、
ネプテューヌ達は苦笑いを浮かべて突っ込むべきか？スルーするべきか？と困惑する。

フロン「目には目を、歯には歯を、ロボにはロボを、さぁこれで対等です！」
ゲラビッツ「ぐぬぬ、しかたない、グレートセンコウシャX！あの鉄屑をたたきのめせ！」
フロン「鉄屑じゃないです！そっちが鉄屑じゃないですか！」
全員（確かにな…）

先行者は鉄屑みたいなものだと思うらしい。

ネプテューヌ「ところでフロンさん、フロンガーXは自動で動くの？」

ネプテューヌがフロンガーXのことを聞いてみると、

フロン「ハイ、このリモコンで操作するのですよ」
全員「手動かよっ！！？」

全員揃ってフロンがリモコン操作している事に突っ込む。

ゲラビッツ「キャッチ！」
フロン「あっ！」

が、リモコンがゲラビッツに取られた。

ゲラビッツ「潰し！」

グシャ！

フロン「あああああああああああああああああ！！！」
全員「このバカヤロォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

フロンがショックを受け、全員が怒鳴ってケリ飛ばす。

ゲラビッツ「ふはははは！もはやこれまでですねぇ」

ゲラビッツは高く笑う。

フロン「なんの！グレートフロンガーXにはまだ秘策が残ってますよ！」
リリス「戻ってくるの速いね」
フロン「何とフロンガーXにはコクピットに乗って操縦することだって出来るんです！」
ネプテューヌ「それなら希望はある！って入り口は何処？」

ネプテューヌが聞くと、フロンは笑顔で答えた。

フロン「あそこです」

そう言って指差したのは、フロンガーXの後頭部だった。

全員「そこかいィィィィィィ！！！」

全員が突っ込む。

ネプテューヌ「これを登るの？」

フロン「ですね」

ネプテューヌはため息をついた。

ネプテューヌ「それじゃあプリニーさん。私達が向かう間止めてくれない？」

プリニー「イヤッスよ！いくらなんでも勝てないッス！！」

ネプテューヌの頼みを全力で否定するプリニー達。

ネプテューヌ「イワシ１００匹」

プリニー「やってやるッス！！」

イワシ１００匹というとさっきと打って変わってやる気になった。

ネプテューヌ「頑張ってね～」

プリニー達「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッス！！」

エトナ「現金な奴らね・・・」

エトナはそんなことを愚痴りながらもコクピットに登っていった。

フロンガーX内部・コクピット

ヴィヴィオ「わ～！すごい！」
サチコ「本物だ～！」

ヴィヴィオとサチコは中を見て目を輝かせている。
中はまるで船の司令室のようだ。

アルティナ「フロン様、まさかこれも？」
フロン「もっちろん！もしもの時のために設置しましたよ！」

フロンは力強く答える。

フロン「操縦するときはあのパネルの上に立つんです」

指差す先には地面が盛り上がっている部分があった。

フロン「あの上に立ってなんやかんやで装備されたら自分が動いた形と同じように動きますよ」
フーカ「なんやかんやって何？」
ラハール「つまり右手をあげればフロンガーXも右手をあげると？」
フロン「その通り！ちなみにこれは私のロボですから操縦できるのは私だけ「わぁ～、これスゴイね」って操縦できてるゥゥゥゥ！！！」

エトナ「いい加減なロボットね」

いつの間にか操縦が出来てるネプテューヌに驚くフロン。
そこに突っ込むエトナ。

ネプテューヌ「さぁ！このフロンガーXの力を見せるよ！」
フロン「それ私が操縦して言うセリフです～」

そして今、巨大ロボ同士の戦いが始まった。

ＩＢＧＭ巨大クッパ戦ｂｙマリオ&ルイージＲＰＧ
（Ｍａｒｉｏ ＆amp; Ｌｕｉｇｉ：： Ｂｏｗｓｅｒ' ｓ Ｉｎｓｉｄｅ Ｓｔｏｒｙ Ｍｕｓｉｃ Ｅｘｔｅｎｄｅｄ － Ｇｉａｎｔ Ｂｏｗｓｅｒ Ｂａｔｔｌｅ）

ネプテューヌ「まずはパンチだよ！」

ネプテューヌが殴る姿勢になると、フロンガーXも殴る姿勢になる。

ネプテューヌ「くらえ！」

ドゴッ！

一撃を受けてセンコウシャXは後退した。

ゲラビッツ「なかなかのロボだね。けどセンコウシャXはこんな装備をしているんだよ！」

センコウシャXのあの部分から2つの球の付いた大砲が現れた。

アルマース「うわぁ！なんですかあれ！」
サファイア「なんじゃあの大砲は？」
アルマース「姫様見ちゃだめです！」

興味ありそうに見るサファイアをアルマースは顔を赤くして目を隠す。
が、ネプテューヌとヴァルバトーゼ達はあの大砲を見覚えがある様な顔になる。

ヴァルバトーゼ「むっ、もしやネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲ではないか？」
ネプテューヌ「完成度高けーなオイ」
アルマース「アームストロング二回言いましたよ！こんな卑猥な大砲があるんですか！？」

アルマースが反論して問い詰める。
ネプテューヌが答えた。

ネプテューヌ「銀さん曰く、江戸城の天守閣を吹き飛ばし、江戸を開国させちまった戌威族の決戦兵器だ。だって」
アルマース「あんな大砲で銀さんの国がやられたって言うんですか！！」

いくらなんでもあり得ないような内容でアルマースは突っ込む。
なぜ銀時のこと知っているかというと、ネプテューヌから聞いたのだ。

ヴァルバトーゼ「違うぞネプテューヌ。地獄の魔王ネオサイクロン

が作られたといわれる大量殺人兵器だ」
アルマース「さっきと話が違うんですけど」

ヴァルバトーゼの内容に突っ込む。

マオ「いやいや、親父の百年殺しと互角のパワーを秘めた暗黒兵器だ」
ラハール「ちがう。古代魔道士レンゴークが開発した爆発兵器だ」
ロザリンド「確か資料では魔界の創造者アルティマが作られた最終兵器じゃったが」
アルマース「どんだけいっぱいアームストロングの案があるんですか！！」
エトナ「全国の男共を尊重し、女共を卑猥性に陥れたという最終兵器よ」
アルマース「結局なんなんですかアームストロング砲って！！」

アームストロング砲、本当に謎多き存在なのであった。

ゲラビッツ「ではネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲、発射！」

ゲラビッツが発射スイッチを押し、大砲から発射される。

ポスッ

・・・っとおもったら出ない。

ゲラビッツ「やべっ、弾入れるの忘れた」
全員「ッオイ！！！＃」

怒りマーク付きで突っ込む。

ネプテューヌ「なにはともあれ、とどめ！」

隙をついてセンコウシャXにトドメをさす。

センコウシャXはばらばらと崩れ落ちた。

ネプテューヌ「うわあっけな」

ゲラビッツ「くっそ～、センコウシャXがやられるなんて。けどこれで終わりだと思ったら大間違いだよ！砦に来てみるんだな！」

ゲラビッツは砦へ飛んで行った。

センコウシャXの戦いが終わった後、フロンガーXは天界へ帰っていった。

フロン曰く、「役目を果たしたら帰るのが基本です！」とのこと。

ネプテューヌ「さぁ、早いとこゲラビッツの砦に突入するよ！」

ネプテューヌ達はゲラビッツの砦へ進んでいった。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

アデル「もう突っ込む気も起きないな。アシスタントは俺と」

ロザリンド「ロザリンドがアシストしよう」

エトナ「あ～、はいはい、いつもイチャイチャする駄目夫婦ね」

アデル・ロザリンド「誰が駄目だっ！！！」

エトナ「うわ息ピッタシ…まあいいわ。ペンネーム『鳴神ソラ』からの質問よ。『ルイージ「出るんだねあの人達」

スネーク「そして出る予定なんだな…外見のせいで怖がられてる花屋…」

フォックス「しかし…プリニーがクリボー代わりなんだな～」

クッパ「あ～～あの時は皆良くやってくれたのだ…ちゃんとキノコも後でやったし」

ネス「…まあ、それはともかくどうなるんだろうね～」

リュカ「だね」

マリオ「それじゃあ皆に質問『元にしている3以外の俺達のゲームのブラザーアクションを元にしたのも出るのか？』」

ルイージ「僕も質問『3の僕達の技のスペシャルアタックを元にした技を銀さん達は覚えますか？』」

クッパ「我輩も質問！『道中でネプテューヌが水を飲んだり、レントゲンを当てられる事があるのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ネス「どうなるのかな～」』」

真王「1つ目はたぶん無理でしょう。回転すると目が回るしボールになれば腰を痛めるって言ってました。2つ目は多分そんな感じですね。3つ目は可能性があると思います」

アデル「んじゃ『鳴神ソラ』、廊下に立ってくれ。次はペンネーム『三国同盟』からだ。『愛マニアなフロンさんに質問です。「この作品でたくさんの女性とフラグを作っている銀さんを、どう思いますか？」』」

フロン「んも～？銀さんたら羨ましいくらい愛に満ちていますね？私応援していますよ」

アデル「いやあれ本人はスッゴイ苦労してるみたいだが…、『三国同盟』、初めての質問ありがとな」

ロザリンド「次はペンネーム『支配者』からじゃ。『今回はプリニー達の技に笑えました。質問です。大魔王クッパ対ラハールはどっちが強いでしょうか？実際に戦ってみてください。』」

真王「普通にラハールが勝ちます」

ロザリンド「いつも負け続けている奴とは違うの。『支配者』よ、廊下に立つのじゃ。次はペンネーム『月光閃火』からじゃ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…新八が不憫でならないな…。とりあえず、新八宛に『アーマード・スーツ（略称：ＡＳ）　ヴィクトリー』を贈るとしよう。ちなみに普段の待機形態は腕時計だ。（そういって、新八宛に『アーマード・スーツ　ヴィクトリー』を待機形態（腕時計）を転送（テレポス）する）

輝刃「…展開した姿は、Ｖ２ガンダムだな…。では、まずは俺から質問だ。」

1．ネプテューヌに質問…後で修羅化して閃火と一戦交えてくれんか？

ハハハ…輝刃、サンキュ♪次は俺からだ。

2．アデルとロザリンドに質問…結構ラブラブなようだが、喧嘩はするのか？

輝刃「確かに…あれだけラブラブだと、喧嘩の一つや二つはしていそうだな…。」『新八よ、お主宛に届いたぞ」

新八「ありがとうございます！『月光閃火』さん！」

ネプテューヌ「使い道わかればいいけど…あと私はああなる気はないから」

アデル「俺とロザリーの？ねぇよなそれ」

ロザリンド「あると言えばアデルが力入れ過ぎて皿を割ったり時に余が皿を落としてしまったりがあったの」

アデル「あ～、あったなそう言うの。『月光閃火』、廊下に立て」

真王「次はペンネーム『黒龍』さんからです。『銀時「プリニーの奴らはなんでネプテューヌが女神に見えるんだ？」

黒龍「炎をケツに付けた本人なのにね」

ソラ「ああそうだな」

銀時「それにしてもキノコになるのは嫌だよなァ」

ソラ「語尾にエリは確かに嫌だな」

黒龍「そしてネプテューヌは新しい技を手に入れた！」

銀時「もうほとんどカービィみたいな能力だけどな」

ソラ「余計に食欲増したんじゃないか？」

黒龍「うわ～それはある意味恐ろしい」

ソラ「じゃあそろそろ質問いくぞ。銀時達に質問だ。ネプテューヌの体の中に入って何かイタズラしようとか考えたか？」

黒龍「ネプテューヌに質問。自分の体の中に人が入っていて一抹の不安はありますか？それと真王さんは最強ですけど、最終的には何を目指しているんですか？」

ソラ「最後に俺からネプテューヌに焼きそばとお好み焼きとたこ焼を贈る」

銀時「じゃあな」』普通に作者をするだけですよ私は」

銀時「そんな暇があるなら早くやりたいよ」

ネプテューヌ「やるの！？・・・2つ目の質問は不安だよ。トイレで用をたすときそこから出てこないかって」

アデル「・・・『黒龍』廊下に立ってくれ。次はペンネーム『黒神』からだ。『質問します。

銀時、神楽、フェイト、マヨラーへ

僕の小説で、『狂乱編』で桂とはやてが主役のように大活躍していますが、4人はどう思いますか？（黒笑）』」

銀時、神楽、フェイト、マヨラーもとい土方
「許せるかーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！
（怒）」

アデル「だな。『黒神』廊下に立ってくれ」

エトナ「最後にペンネーム『亀鳥虎龍』さんからの質問よ。『『万事屋奇譚幕』の感想書いて下さい。質問です。そっちの銀さんに質問です。こっちだと、銀さんのが徐々に薄くなっております。どう思う（黒笑）。』」

銀時「待て待て待て！銀魂がベースなのに主役がとあるの当麻だと？普通銀さんがメインだろうが！」

真王「『亀鳥虎龍』さん。もっと銀さんの出番を出せ」

プリニー「次回のアシストはマオとラズベリルッス」

真王「それからちょっとバトンを作りました。見てください」

『拠点セリフバトン』

『ディスガイアの拠点でエディット台詞を始める。
キャラのセルフはどんなんのか想像してかくべし。
１６は複数ＯＫ。

詳細は　ｈｔｔｐ：／／ａｌｐｈａｗｉｋｉ．ｎｅｔ／ｄｉｓｇａｅａ４／ｉｎｄｅｘ．ｐｈｐ?％Ａ５％ＢＢ％Ａ５％ＥＡ％Ａ５％Ｄ５％Ａ４％ＤＥ％Ａ４％Ｃ８％Ａ４％Ｅ１#ｊ５ｅ８５７６９

今回のキャラ：ネプテューヌ（上）、銀時（中）、なのは（下）

1～時空の渡し人～

「どこかに行くの？行き先を選んで」

「出かけるのか？帰りにパフェ持ってきてくれ」

「出かけるの？行き先を選んでね」

2～アイテム界屋～

「アイテム界へようこそ。ここで武器のパワーアップをするよ」

「ここはアイテム界だ。ちなみに宇治銀時丼界がいいな」

「アイテム界だよ。特訓エリアにはここがお勧めだよ」

3～武器屋・防具屋・よろず屋～

「いらっしゃいませ。ローゼンクイーン商会へようこそ。好きな武器やアイテムを選んでね」

「ここはローゼンクイーン商会だ。…かったるいから早く済ませちまおうぜ」

「いらっしゃいませ。ローゼンクイーン商会だよ。武器はちゃんと装備してね」

4～地獄保嫌所～

「地獄保嫌所へようこそ。けがの手当てなら任せて」

「ここは地獄保嫌所だ。お前らは気合で治しとけ」

「ここは地獄保嫌所だよ。怪我した人は私が面倒みるよ」

5～裏時空の渡し人～

「裏面に行くの？強敵がいっぱいあるから気を付けて」

「出かけるのか？お土産に極上パフェ持ってこい」
「裏面に出るの？難しいから気を付けてね」

6～技能屋～
「技能屋へようこそ。技のパワーアップはここだよ」
「ここは技能屋だ。別に武器をきれいにするコーティング屋じゃねぇぞ」
「いらっしゃいませ。ここは技能屋だよ。技のレベルをあげていこうよ」

7～戦挙事務所管理人～
「戦挙事務所へようこそ。入る？」
「戦挙事務所に何か用か？」
「ここは戦挙事務所だよ。どんなようかな？」

8～キャラ界屋～
「いらっしゃいませ。キャラ界へようこそ。自分の力をあげるにはここはお勧めだよ」
「ここはキャラ界だ。別に自分そっくりの奴はいないから安心しろ」
「ここはキャラ界だよ。訓練にぴったりの場所だよ」

9～界賊エディット屋～
「いらっしゃいませ。界賊エディットへようこそ。自分のオリジナルの船を造るところだよ」
「ここは界賊エディットだ。界賊名は糖分界賊団でいいだろ？」
「いらっしゃいませ。ここは界賊エディットだよ。どんな船を造るのかな？」

10～マップエディット屋～
「いらっしゃいませ。マップエディットへようこそ。自分のオリジ

ナルのマップを作るところだよ」
「ここはマップエディットだ。ドットマリオマップだって作れるかもな」
「いらっしゃいませ。ここはマップエディットだよ。訓練に最適なマップを作ろうよ」

11～記録屋～
「いらっしゃいませ。記録屋へようこそ。過去の冒険の記録はここにあるよ」
「記録屋だ。っていうか恥ずかしい事まで記録にあるのか？…あ、ないわ」
「いらっしゃいませ。ここは記録屋だよ。これまでの行動を振り返るならここを見てね」

12～教育的指導員～
「教育的指導へようこそ。…だからってSに目覚めないでね」
「教育的指導はここだ。言っとくが俺はそんな気はないからな。ホントだぞ！」
「ここは教育的指導をするよ。私がO☆HA☆NA☆SIするから」

13～特産品屋～
「いらっしゃいませ。特産品屋へようこそ。アイテムをしっかり保持してね」
「ここは特産品屋だ。悪いが宇治銀時丼とパフェは売ってないわ。スマン」
「いらっしゃいませ。ここは特産品屋だよ。地域でしか手に入らないアイテムを売りますよ」

14～ミュージシャン～
「いらっしゃいませ。音楽屋へようこそ。自分好みの音楽を聞こう

よ」
「ここは音楽屋だ。俺のお勧めはバクチダンサーだな」
「いらっしゃいませ。ここは音楽屋だよ。好きな曲を聞いていってね」

15～キャラ塗師～
「いらっしゃいませ。色替え屋へようこそ。自分好みの色に変えようか？」
「ここは色替え屋だ。…これで髪染めよっかな？」
「いらっしゃいませ。ここは色替え屋だよ。どんな色にしてあげよっか」

16～戦挙事務所～
ネ「女神は年を取らないっていうけど、まさかずっと体が成長しないままはないよね？」
ネ「ご飯は食べるときに第一の食材！あれ？違った？」
ネ「好きな食べ物？全部だよ。暗黒物質（ダークマター）？なにそれ？」
ネ「いっそのこと女神は止めて新しい恋の世界にでも行こうかな？」
ネ「私の胃袋が鉄でできてるって？失敬な！私の胃は正常だよ！」
銀「人生はなぁ、すべてイチゴ牛乳で決まるんだよ。分かるか？」
銀「俺は甘いもんは好きだぜ。辛いもん？まぁ何とかいけるぞ」
銀「世の中スタンドはいないんだよ。え？いるって？いやいやいやいやいないないから！！」
銀「暇なのも嫌だけど動く事も嫌だな～。誰でもいいから変わりやってくれ。あと主役は渡さんが」
な「どうしてみんなは私を白い悪魔なんて言うのかな？私悪魔じゃないのに…」
な「銀さんと結婚するために花婿修行でもしようかな？ユーノくん？只の友達だけど？」
な「最近後ろから視線が絶えないの。伊達にエースオブエースって

呼ばれていないからかな？」
な「自慢じゃないけど私胸も成長してるからね。美貌の磨きをしておこうかな？」

１８～回す人～
「黒龍さんのソラさん」
「鳴神ソラでもいいぜ」
「黒神さんなの」』

真王「いかがでしょうか」

プリニー「って言うか何でこんなとこに書いたんスか？」

真王「活動報告見てくれる人少ないから」

プリニー「・・・・・・・・・」

第五十三訓：怪獣の戦いはやっぱ巨大ロボで（後書き）

真王「大事なことなので言っておきますが、本当にスイマセンデシタ！！」

銀時「お、おいおい…そんなに謝らなくていいから」

真王「いや、言わないといけないって思って…」

銀時「・・・次回『たまには地味サイドも活躍したい』テイクオフ」

第五十四訓：たまには地味サイドも活躍したい　（前書き）

真王「今回短めで新八が活躍します」

第五十四訓：たまには地味サイドも活躍したい

ネプテューヌ達がゲラビッツの砦へ向かう頃、ネプテューヌの体の中にいる銀時達はなにしているかというと、
もうネプテューヌの一部になって・・・

銀時「なってねぇよ!!つーか一カ月ぐらい放置ってどういうことだコラっ!!これ俺らがメインの作品だろうが!!」

この章はネプテューヌがメインです。

銀時「なんでだァァァァァァ!!!俺にも活躍させろよォォォォォォォォォ!!」
神楽「そうだよォォォォォォ!!私も活躍させろよォォォォォォ!!」

銀時と神楽は出番が少ないことにご立腹のようだ。
そしてその他の人も同じである。

新八「まぁまぁ銀さん、せっかく出番が来たからちゃんと活躍しないと」
銀時「うるせぇよ!地味のくせに!」
神楽「お前が黙れよ地味にくせに!」
新八「お前らが黙れェェェェェェェェェ!!!つーか地味って言うなァァァァァァ!!!」

地味と言われたので怒鳴る新八。

ゆり「ちょっとあんたたち、そこで暇してるなら探索しなさい」

見かねたゆりが銀時達に声をかける。

銀時「メンドクセぇよ。行きたかねぇよ」

が、銀時のその一言で終わらせる。

ゆり「あらそう、やってくれたらバナナパフェおごるけど…」

銀時「よっしゃーーーー!!!行くぞオメェら!!」

パフェと聞くや否や、銀時はやる気になって探索の準備にかかった。

桂「全く、パフェごときで揺れるとは侍として情けない」

桂は呆れる。

ゆり「それじゃあ桂さんには極上そばを・・・」

桂「皆の者!俺達は探索に入るから安心しておれ!」

銀時に負けを取らず桂も揺れた。

ゆりは楽しそうな顔をする。

ゆり「あっけなく騙されてるわねあの2人は。クスクス・・・」

新八（え、Sだ・・・）

新八は笑うゆりを見て冷や汗を流した。

他の戦線メンバーも冷や汗を流す。（特に音無が）

ネプテューヌの体内・外れのスペース

現在の探索チームは銀時、神楽、新八、桂、エリザベスの5人…もとい、4人と1匹である。

銀時「んだここ？なんかジメジメすんぞ？」
神楽「変なにおいがするアル。女の敵ネ」

ジメジメする雰囲気に気持ち悪がる。

桂「なんだか頭が少しムズムズするのだが・・・」
新八「…って桂さん！変なキノコが生えてますよ！！」
銀時「ダッセェー！！お前キノコ生えるまで気付かないなんてアホの証拠だな！！」
新八「あんたもアホの仲間だよ！！！」

桂の頭にキノコが生えた子のに突っ込みを入れ、それを笑う頭にキノコが生えた銀時に怒鳴る新八。

エリザベス『あの檻に中にもあるけど…』

エリザベスの指差す先には、コケやキノコがたくさん生えていた。
すると、

？？？「あ・・・、う・・・」

コケやキノコが生えた物体が起き上がった。

銀時・新八「ぎゃあああああああああ！！！」

銀時と新八は驚いて下がる。

？？？「よろずや・・・久…ぶり…」

そいつは銀時の名前を言った。

新八「ぎ、銀さん知り合いですか？」

銀時「んなわけねぇだろ！！こんな檻にいると言えば怪物だろ！！」

銀時は全力で否定する。

？？？「怪物じゃないぞ！俺だ！」

そいつは周りにコケやキノコを採って、姿を現した。

新八「近藤さん！？」

銀時「なんだゴリラか」

神楽「おいゴリラ、何でここで寝てるアルか？」

近藤だったことに驚く銀時達。

近藤「いや～、実はいきなりネプテューヌ殿が現れては吸い込まれてしまってこんなとこで寝てしまったわけ」

新八「どんだけ寝たらそんなにキノコが生えるんだよ！！」

ありえないことに新八は突っ込む。

近藤「それで、トシや総悟やスカ殿たちはいずこへ？」

新八「土方さん達も吸い込まれたんですか！残念ながら見てません」

近藤「・・・そうか」

近藤は暗い顔になるが、気を取り直す。

近藤「ここに吸い込まれたのも何かの縁だ。俺も捜査に協力しよう」

桂「それは助かる。ではこの檻をどうするかだ」

新八「では僕がやってみます」

新八は手にハンマーを持つ。

新八「うおりゃ～～～～！！！」

ハンマーを思いっきり振って檻に攻撃……ではなく銀時にあたった。

銀時「イデッ！」

新八「うわ！銀さんごめんなさい！」

新八は謝るが、

シュルルルルルル・・・

銀時が小さくなっちゃった♪（マギー風）

ミニ銀時「えーーーーーーーーーー！！！」

新八「銀さんが小さくなった！！？」

エリザベス『打ちどころが悪いな…』

エリザベスはそんな感想を漏らす。

ミニ銀時「おーい！早く元に戻せ～～！」

神楽「私に任せるネ」
ミニ銀時「無理に伸ばすな～～～！！！」

銀時は元に戻すよう頼む。
神楽が手伝っているが、体を無理やり引っ張っても元に戻れない。

桂「こんなときに敵が出てきたら元の子もないな」
新八「縁起でもないこと言うな！！！」

縁起でもない桂の一言に新八は怒鳴るが、

？？？「敵いたりして」
桂「何者だ！！」

とげバットを持ったシンプルな顔を持つ敵が現れた。

タンパくん「ここの番人、タンパくんだ」
新八「お、お前が？女の子に声をかけて…」
タンパくん「ナンパくんじゃねーよ！！タンパくんだよ！！」

バッドで殴って突っ込む。

タンパくん「そこで寝てるゴリラは俺の餌だ。勝手に手を出すな」
近藤「ゴリラって…」

ゴリラという単語に変な感じになる近藤。

タンパくん「腐る直前が一番うまいから寝かせておいたんだ」
新八「何処がだよ！！完全に腐ってたじゃねぇか！！」
近藤「俺は腐ってませ～～ん！！！」

グルメ?なタンパくんに怒鳴る新八。近藤は自分は腐ってないとい い張る。

新八「まぁあなたのような敵には銀さんが倒してくれます」
タンパくん「はぁ?その銀時という奴は何処にいるって?」
神楽「あれ?いないアル」

銀時がいなくなったことに何処にいるか探す。
銀時はというと、

ミニ銀時「ぐあああああああああああ」

タンパくんに踏まれてました。

ミニ銀時「テメェ!良くも俺を踏みやがったな!!」

銀時はタンパくんを殴るも、あまり効果はない。
それどころか、

タンパくん「なんだ?藪蚊か?」

パシッ!

ミニ銀時「ぐわっ!」

蚊を叩くような感じに潰された。

新八「あ!銀さん!」

潰された銀時に気付く。
が、タンパくんは気付いていない。

タンパくん「だから何処にいるんだって！！」

バットを振り回しながら追いかける。

ミニ銀時「テメ待ちやがれこのやろ！！」

銀時は飛び跳ねながら追いかけると、

タンパくん「うるさいハエだな、邪魔すんな！」
ミニ銀時「あべしっ！」

ハエ扱いされて飛ばされた銀時。
そして銀時は膨らんだ部分に激突すると、近藤を閉じ込めた檻が消えた。

近藤「万事屋！助かったぞ！」

近藤は嬉しくそこから出るが、

タンパくん「勝手に逃げだすなよ！！」

タンパくんに殴られた。

タンパくん「もう許さん！弾吐きノック！」

口から弾を吐いて桂に打つ。

桂「甘い！」

だが桂はそれを切り落とした。

桂「どういうことであれ、この桂小太郎が天誅を下す！」

タンパくん「何を生意気な！」

桂とタンパくんは対峙する。

新八「援護します桂さん！うおおおおおおおお！！！」

新八も桂の援護に向かうが、

タンパくん「おりゃ！」

タンパくんのバットでハンマーが弾き飛ばされた。

弾きとんだハンマーは桂と神楽の頭にあたり、エリザベスがハンマーをキャッチ。

神楽「テンメェェェ！！なにするアルか「シュルルルルル・・・」ってえええええええええええ！！！」

ミニ桂「ば、馬鹿なァァァァァ！！」

銀時と同じようにちっちゃくなっちゃった♪（マギー風）

タンパくん「わはははは！スッゲェ役立たずだなお前は！」

大笑いするタンパくん。

すると、今まで気絶していた近藤が起き上がった。

近藤「侍の底力はそんなもんじゃないぞ！」

そう言ってタンパくんにくらいついた。

近藤「新八くん！俺がくらいついてる間にトドメをさしてくれ！」

タンパくん「離せこのゴリラめ！」

喰らいつかれたタンパくんは近藤を離そうとする。

ミニ銀時「俺もやるぜ！」

ミニ桂「俺もだ！」

ミニ神楽「私もやるネ！」

銀時達もくらいついた。

タンパくん「銀時…いたのか！？」

ミニ銀時「…って今頃気づいたんかい！！」

今頃気づいたタンパくんに突っ込む。

ミニ銀時「新八～！！コイツの動きを止めるからやれー！！」

新八「で、でもそいつはバット持ってるし…」

ハンマーの扱いに慣れてない新八とバットを持つタンパくんでは新八が不利である。

ミニ銀時「だったらバットを取り上げるしかねぇか」

タンパくん「バットを離すかバ～カ」

バットを上にあげて絶対に離そうとしないタンパくん。

ミニ銀時「だったらこれはどうだ！」
ミニ神楽「擽り攻撃じゃ～！」
タンパくん「うひゃひゃひゃひゃ～～～！！」
銀時達に擽られてバットを離してしまった。
ミニ銀時「新八ーー！！！行けーーーー！！」
新八「うおおお

ミニ銀時「俺らといっしょじゃん…」
エリザベス『打ちどころがいいのか悪いのか…』
銀時達は唖然とし、エリザベスは呆れの表情になる。
新八「えい」
プチッ
ミニタンパくん「ぎゃ～～～～～～～！！！」
最終的にタンパくんは新八に踏まれました。

ミニ銀時「新八～、早く元に戻してくんねぇかな～」
タンパくんを倒した後、銀時は元に戻せるよう頼む。
新八「もう一度叩いたら戻れるかも…」
新八はハンマーを構えて、
ドカッドカッドカッドカッドカッ
ミニ銀時「…って叩き過ぎだろ～～！！」
新八「じゃ、じゃあこれで…」

ミニ銀時「戻るかこの野郎！！！！」

今度は出来たたんこぶで大きくなったかのようにするがそれも無理。
とりあえず帰ってシャマルに直してもらうことにした。
しかしなのは達におもちゃのように扱われてしまい、銀時は元に戻ってもやつれていた。

近藤は仲間になった。
新八は『ミニミニハンマー』を習得した。

新八「こんな技いらねぇーーーーーーーー！！！！」

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

マオ「ハァ～ハッハッハ！邪悪学園理事長マオ様だ」

ラズベリル「そしてラズベリルがアシストするよ」

エトナ「それじゃあまず最初にペンネーム『鳴神　ソラ』からの質問よ。『う～～ん実に残念…

マリオ「わずか1票の差だな」

ルイージ「それにしても…色々とロボについてツッコミ所満載だ；」

クッパ「我輩的にネプテューヌが巨大化すると思ったぞ」

フォックス「カードを使ってか？」

スネーク「フォックス…それはとあるサイトで真の魔法少女と言われてる少女がやった事だぞ；」

ネス「次回はどうなるんだろう？」

リュカ「うん…銀さんを除いた皆さんに質問ですけど…『もし今回の章でのネプテューヌさんが吸い込む力を手に入れましたけど、もし銀さんが吸い込む力を手に入れたらどうなると思いますか？；』」

ルイージ「フロンちゃんに質問『あのロボどうやって作ったの？かなり費用がかかったんじゃない？』」

マリオ「ゲラコビッツに質問『ロボを作ってた様だが…何の為に作ったんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』ズバリ答えるとね…」

銀時以外全員「多分ネプテューヌより吸い込み力が小さいかと…」

フロン「2つ目ですけどそれは企業秘密です。アルティナちゃんのおかげで完成したのですから♪」

アルティナ「その苦労がそのためということなのですか…」

アルティナは暗くなった。

真王「後ゲラビッツ曰く、思いつきで、だそうだ。『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

マオ「次はペンネーム『支配者』からだ。『今回はネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲のネタが面白かったです。質問です。ラハールへ、エトナとフロンに忠誠の証として古代エジプトの儀式手う○こをさせてはいかがですか？（黒笑）後、銀魂のキャラで手下にするとしたら誰がいいですか？』」

ラハール「おい貴様ぁ！！俺様にウ○コとはどういうことだ！！いらんわそんなもん！！・・・っとあいつらで手下にすると言えば銀時、神楽、桂、月詠という奴だ」

ラズベリル「それじゃあ『支配者』さん、廊下に立ってなさい。次のペンネームは『黒龍』からだよ。『黒龍「今回はロボが出るとは色々混ぜ込んで凄い・・・」

銀時「もはや銀魂とリリカルなのはの枠に収まりきれてないな」

黒龍「ですね。一番目立っているのはネプテューヌだし」

銀時「それにしても、もうすぐこの長編も終わりじゃねぇか？」

黒龍「ああ、確かに。ゲラビッツがボコボコにされる予感大ですな」

銀時「お前も早く真王に追いつくように頑張らないとな」

黒龍「分かってますって」

銀時「そんじゃま、今回の質問。ネプテューヌに質問だ。お前、最近一番悩んでいる事はなんだ？」

黒龍「俺から真王さんに質問です。もし真王さんの小説が削除されたどうしますか？
そしてリリカルメンバーと女神四人に質問です。幼少期の銀時やソラや桂や高杉やアリスやアリアを見てどう思いますか？」

銀時「そんじゃな～」『」

真王「小説が消されたら？もう一回書き直します」

ネプテューヌ「悩み？そうだね…もっともっと食べたかったって思うことだね」

真王「まだ食う気かよ！！」

ネプテューヌ「3つ目だけどみんなかわいいね」

ノワール「た、確かにね（すごいかわいい…）」

ブラン「興味ない…」

ベール「あらあら♪かわいらしい子たちだこと…」

リリカルメンバー「凄い可愛いです！！！！」

ラズベリル「子供時は人気あるね。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

真王「次回のアシストはリリスでやるぞ。では」

第五十四訓：たまには地味サイドも活躍したい　（後書き）

真王「ゲラビッツの砦に潜入！そしてそこにエトナ達にとってムカつく敵が現れた！」

マオ「次回『胸がでかいのは生意気な証拠』テイクオフだ」

第五十五訓：胸がでかいのは生意気な証拠（前書き）

真王「特に書くことはない」

ネプテューヌ「それだけ？」

真王「ええ、これだけ。『リリカル銀魂』開始します」

第五十五訓：胸がでかいのは生意気な証拠

現在、ネプテューヌ達はゲラビッツの砦の前にいる。

ネプテューヌ「いよいよ来たね」

ヴァルバトーゼ「そうだな、プリニーどものお礼とたっぷり返さなくてはならんな」

ほとんどの人がやる気になる。

ネプテューヌ「よし、突入するよ」

ゲラビッツの砦・ロビー

ＩＢＧＭクッパ城ｂｙマリオ&ルイージＲＰＧ３（Ｍａｒｉｏ　＆ａｍｐ；　Ｌｕｉｇｉ：：　Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ　Ｉｎｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ－　Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ　Ｃａｓｔｌｅ）

中に入ると、外見と違い、もりゃもう豪華なロビーだった。

フロン「わ！なんですかここ！」

ラハール「ゼニスキーの成金城を思い出すな」

エトナ「あ～、確かに」

ほとんど金ぴかで出来ている風景にラハールとエトナは懐かしむ。

ネプテューヌ「そんなことより、早くゲラビッツを探そうよ」

ネプテューヌが早く行くよう後ろを向いて言うと、

???「そこの不審者！そこで止まれ！」

女性の声が聞こえた。

ＩＢＧＭ強敵登場？ｂｙ魔界戦記ディスガイア４（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｓｍａｓｈ　Ｂｅａｔ）

???「怪しい侵入者め！ここから先は通さないよ！」

そう言ったのは茶髪ボブカットの女性…ならまだしも、下半身が毛が生えて鳥の足みたいなのがあり、そして腕であるｍ物が鳥の翼になっている。

この魔物は空からの狩りを得意とする鳥女族・ハーピィである。

ハーピィ「みんな！この侵入者どもにお仕置きしてやんよ！」

ハーピィの掛け声に仲間が集まる。

現れたのは、緑髪と蛇が同化している感じに下半身が蛇みたいになっている魔蛇族・ラミア。

水色の髪に下半身が魚のような人魚族・マーメイド。

頭に触覚と背中に羽のある水着っぽい服を着ている妖精族・フェアリー。
６本の杖と黒い眼玉が浮いて、黒いドレスに青い肌の魔女族・ウィッチレディである。

ネプテューヌ「うわぁ、結構やる気だねあの人たち」
ヴァルバトーゼ「面白い、その挑戦を受けて立とう」

ネプテューヌ達は臨戦態勢に入った。
ちなみにエトナは、

エトナ「何あいつら？あたし等に喧嘩売ってる様にしか見えないんですけど？」
フロン「奇遇ですねエトナさん。私もそう思ってました」

エトナとフロンが意気投合で殺意交じりにハーピィ達を睨む。
なぜかって？エトナとフロンはスルーとしたまな板でハーピィ達はデデンとしたビッグメロンであるからである。
はっきり言って草原と山の差である。

エトナ「テメェら！！あたしに差し置いてよくもそんなもんをぶら下げてやがるわね！！」

槍を構えて怒気混ざりで叫ぶエトナ。

ハーピィ「は？あんたこの脂肪の塊がどうかしたの？」
ラミア「あらあら、あなた嫉妬してるのね」
ウィッチレディ「ウフフ、胸が大きいのは罪ね」
マーメイド「人魚族は好きで大きくなったんじゃありません！」
フェアリー「大きい胸ほど最強なのよ！」

ハーピィは脂肪の塊しか見ておらず、ラミアとウィッチレディは美を感じており、マーメイドはなぜか顔を赤くして怒鳴り、フェアリーは・・・・・・・・・馬鹿である。

フェアリー「誰が馬鹿よ！」
ラミア「誰に突っ込んでんの？」

空に（天井なんだけども）向かって叫ぶフェアリーに突っ込むラミア。

ネプテューヌ「それにしても確かにみんな胸大きいね。はやてさんが見たら喜びそうだね」

サチコ・遼・雪・時子・ヴィヴィオ・リリス・ミーニャ・アルラ「あ～、納得…」

巨乳ソムリエ？のはやてなら喜びそうに思う一同。
ヴァルバトーゼ達は何のことか分かってないが、ロザリンド、アルティナは少し寒気を感じたとか。

ハーピィ「とにかく！あんた達はここでくたばってもらうよ！！」

ハーピィが突っ込んできた。

ハーピィ「三打連空！」
ネプテューヌ「くっ！」

空中から滑りだすようにケリを出すハーピィ。

ハーピィ「今度はアイアンウイングよ！」

両手・・・もとい、両翼が光り出してその翼でネプテューヌに攻撃した。

ネプテューヌはとっさに防ぐ。

ネプテューヌ（ちょっと硬いな…）

ラミア「それそれ、踊りなさい」

ウィッチレディ「燃やしてあげるわ」

ラミアとウィッチレディはファイアを連射してヴァルバトーゼ達に攻撃する。

ヴァルバトーゼ「ちっ！舐めた事をしてくれる」

フーカ「だったら任せて！ブーメントマホーク！」

フーカは手に持っている斧をブーメランのように投げ飛ばした。

ウィッチレディ「きゃあ！！」

ウィッチレディに直撃し、倒れた。

ラミア「なっ！だったら、蛇睨み！」

フーカ「なｎ・・・」

ラミアに睨まれたフーカは石になった。

デスコ「お姉さま！？」
ラミア「無駄よ、石になった者は誰にもとけないわ」

誇らしげに言うラミア。

エトナ「じゃあ特にないわね」

いつの間にかエトナがラミアの後ろに回っていた。
ラミアは気付くもすでに遅し、後ろから蹴られて倒れてしまう。
エトナはその上に乗る。

ラミア「く・・・」
エトナ「さぁて♪たっぷり虐めてあげるわ♪」

笑っているようだが、目が全然笑っていないエトナがサドな顔で言う。
そして『溜まっていた』魔力でラミアを攻撃する。

エトナ「永遠にくたばりやがれこの蛇野郎がーーーーーーーーーー！！！！」
ラミア「きゃあああああああああああああああああああ！！！」

エトナのお仕置き（という名の虐殺）でラミアは悲鳴をあげる。
それを見ている者たちはガタガタ震えていた。
ちなみにフーカは元に戻った。

フェアリー「ホラホラ喰らえーー！！！」

フェアリーが魔法を滅茶苦茶に発射して来た。

ヴァルバトーゼ・フェンリッヒ「うお！」
フーカ・エミーゼル・アルマース・デスコ「うわあああああああ！！！」
フェアリー「どうだ！あたしの魔法の威力は！」

どや顔で言うフェアリー。

マーメイド「フェアリー！ちゃんと周りのことも考えて攻撃しなさいよ！」

マーメイドは怒るが、フェアリーはつまらなさそうな顔をする。

フェアリー「え～、やだ」
全員（子供かあいつは…）

全員揃ってそう思った。
ちなみにネプテューヌとハーピィは今だ格闘中。

フェアリー「あたしの魔法にかかればみんな怖いものなしだー！！」

そう言って魔法を連射する。

マーメイド「・・・仕方ありませんね。勇気の歌」

マーメイドが歌い始めると、フェアリーのステータスが上がった。

フェアリー「パワーアップ！」
ヴァルバトーゼ「こいつは！？」

フェンリッヒ「強化魔法か…」

ヴァルバトーゼが驚き、フェンリッヒが推測する。

フェアリー「さぁ、このあたしの魔法でぶっ飛ばしてやるわ！きゃははは「させるかーー！！」うげっ！」

大きな火の玉を出して高笑いすると、フーカが後ろから蹴りを喰らわす。

フェアリー「ちょっとあんたなにする・・・って」

フェアリーは冷や汗を流した。

上を見上げると、ゆっくりと降りてくる火の玉が…

ボッ！

フェアリー「あちゃあああああああああああああああ！！！！」

全身に引火して暴れまわるフェアリー。

フェンリッヒ「馬鹿はやはりそんなオチで終わるだろうな」

マーメイド「妖精族は魔法は使えますけど考えるというのが苦手らしくて…」

妖精族の特徴を説明するマーメイド。

ラハール「成程、というかなぜ親しく話し合ってるのだ俺様達は？」

ラハールの一言にマーメイドはハッ！っとなる。

マーメイド「思わず話し合ってしまいましたが、ハウリングボイス！」

マーメイドの口から超音波のような攻撃が来た。

エミーゼル「うわあああああ！！」

フロン「み、耳が…」

フーカ「何これ！？超音波！？」

攻撃を受けている者たちはマーメイドのハウリングボイスで耳鳴りがなっている。

フェンリッヒ「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

ヴァルバトーゼ「どうしたフェンリッヒ！！」

フェンリッヒはヴァルバトーゼ達よりも苦しんでいる。

フーカ「まさかフェンリっち狼だから耳がいいんじゃ…」

デスコ「それは致命的デス！」

狼は耳が良いためダメージがでかいらしい。

エトナ「えい」

ドカッ！

マーメイド「はうわ！」

が、なぜかエトナが後ろからマーメイドを蹴飛ばした。

マーメイド「な、なんで？」

エトナだけ動けることに驚きを隠せないマーメイド。

エトナ「え？なんて？耳栓してるからよく聞こえないのよ」

その答えはエトナが耳栓しているからだった。

ちなみにラミアはもうボロボロ状態である。

エトナ「さ～て、何処から攻めよっかな～♪」

サディスティックな顔でマーメイドに詰め寄るエトナ。

マーメイド（ああ…私貞操失っちゃうかも…）

心から崖っぷちに追いやられたマーメイドだった。

一方ネプテューヌは、まだハーピィと格闘中。

ハーピィ「しつこいぞお前！」

ネプテューヌ「絶対離さないもんね！」

格闘中ネプテューヌがハーピィの足にしがみついてきたようだ。

ネプテューヌ（このままじゃ拉致が明かない……そうだ！）

何かを思い出して、よじ登り始め、

ネプテューヌ「それー！」

モニュ！

ハーピィ「ひゃわっ！？／／／／」

ハーピィの胸を鷲掴みにした。

胸を触られたハーピィはバランスを崩して落ちた。

ネプテューヌ「ホレホレ、ココが弱いんか？それともこれかな？」

ハーピィ「あ！、そこは、あうっ！揉んじゃ、、ひぅ！だめぇぇ～～！」

アルマース「って何やってるんですか！！」

ハーピィの胸を揉みまくるネプテューヌを止めるアルマース。

ハーピィは危ない道を進みかけるところだったらしい。

なおエミーゼルはアルティナによって目隠しされた。

ハーピィ「な、なかなかやるなお前達…」

ヴァルバトーゼ「…なんだか腑に落ちん勝利だがな…。だが俺達の勝ちだ」

ネプテューヌ「ゲラビッツに言っといて、『ネプテューヌとその一行が貴様の野望を破壊しに来た！』って」

フェンリッヒ「貴様！『ヴァルバトーゼとその一行』に変えろ！！」
フーカ「あたし達はその他扱いかい！！」

ネプテューヌのセリフに訂正させるフェンリッヒだが、その内容に怒鳴るフーカ。周りも同意見である。
するとハーピィ達が驚きの顔になる。

ハーピィ「ネプテューヌ？あんたがそうなの？」
ネプテューヌ「そうだけど？」

ハーピィ達は顔を合わせ、話し合った後、ネプテューヌ達に言った。

ハーピィ「さっきはスマン。ゲラビッツ様があなた達をご案内しろと命令を受けていたんだ」
ネプテューヌ「ゲラビッツが？」

ネプテューヌは片眉をあげる。

ハーピィ「そうだ。今から案内するからついてこい」

ハーピィはそう言って奥へ行った。
ついでにラミア、ウィッチレディ、フェアリー、マーメイドも奥へ行った。

フーカ「本人が招待するの？意外とラッキーかも？」
デスコ「お姉さま…」

アホなフーカに呆れるデスコ。

ヴァルバトーゼ「どう思うフェンリッヒ」

フェンリッヒ「明らかに裏があります。大方ネプテューヌに罠を仕掛けようという魂胆でしょうが」

連れてこいということに明らかに罠だと推測するフェンリッヒ。

ネプテューヌ「みんな！何やってるの、早く来てよ！」

だがネプテューヌはそれを気付かずにいる。
ヴァルバトーゼ達はため息をついてついて行った。

ゲラビッツの砦・会場ドーム

ネプテューヌ「何でこうなるの？」
メタブス「サァカカッテコイ！」

なぜかネプテューヌをメタブスがデスマッチする羽目になった。

簡単にまとめると、

中に入る。
←
メタブスとエンカウント。
←
無理やり連れ出される。
←
檻に閉じ込められる。

←
現在

という感じである。

メタブス「コナイナラコッチカライクゾ！」

メタブスはパンチを繰り出す。が、

ドガッバキッベキッバコッベシッメキッバガッズドッ！

ネプテューヌ「ウィナーー！」

ネプテューヌの敵ではなかったりする。

アルマース「イヤ早いよ！！」

アルマースが突っ込む。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃんは強いからね」

リリス「母さんは負けないよ」

サチコ「お姉ちゃん最強！」

ロザリンド「それでよいのかお主ら…」

ロザリンドは呆れる。

ゲラビッツ「いや～、ホントすごいね君は」

ゲラビッツがネプテューヌの前に拍手しながら現れる。

ネプテューヌは警戒する。

ゲラビッツ「そんなに警戒しなくていいから、勝者にはとっておきの物をあげちゃうよ」

ゲラビッツのとっておきというのに引っ掛かるネプテューヌ。

ネプテューヌ「とっておきってなに？言っておくけどつまらない物はいらないよ。持ってくるなら豪華な食べ物にして！」

全員「なんでだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ネプテューヌに突っ込むヴァルバトーゼ達と今まで見ていたヤジ馬達。

ゲラビッツ「食べ物ならご用意できるよ」

ネプテューヌ「ならいい」

全員「ッオイ！」

ビシッ！と突っ込みを入れる一同。

ゲラビッツ「おい、勝者に褒美の場所を案内してやれ！」

？？？「ハイハーイ」

ゲラビッツの命令にメイド？の妖霊族・ゴーストがやってくる。

ゴースト「ささささ、ＶＩＰルームへご案内いたしますよ」

ネプテューヌ「御馳走食べ放題～♪」

ご機嫌なネプテューヌはついて行って、ヴァルバトーゼとヴィヴィオ達はため息を吐きながらついて行った。

ゲラビッツの砦・ＶＩＰルーム

そこでは、大量のごちそうが部屋いっぱいありました。

ネプテューヌ「うぉおおおおおおおおおおお！！！」

ネプテューヌは興奮している。

ゲラビッツ「ささ、たっぷりお食べ（ククク、体に悪い養分がいっぱい入ってるからそこで醜くなるがいい）」

ゲラビッツは誘うが、内心悪だくみをしている。

ネプテューヌ「いただきまーす♪」

ギュオオ～～～～！！

ラハール「ってこんなところで吸い込む奴があるかーー！！」

いきなり吸い込み始めたのでラハールは怒鳴る。

数秒後、

ネプテューヌ「御馳走様」

全員「早っ！！」

もうすでにすべて完食してしまったネプテューヌに超驚く。

あれだけ食べた（というより吸い込んだ）のにネプテューヌの体に変化はない。

ゲラビッツ（こ、こいつの胃袋はブラックホールか!?女神ってある意味恐ろしいな…）

ちょっと違う解釈をしてしまっているゲラビッツ。

ゲラビッツ（・・・仕方ない、プランZに変更だ）

ゲラビッツはどこかへ立ち去った。

フェンリッヒ（・・・やはりまたおおごとを起こすつもりだな、あの男は…）

そんなゲラビッツを見て考え込むフェンリッヒ。

すると、

ネプテューヌ「ん?んん!?」

ネプテューヌが口を抑え始める。

ヴィヴィオ「ど、どうしたのネプ姉ちゃん?」

ネプテューヌの異変に気づくヴィヴィオ達。

そしてネプテューヌは口を大きく膨らませ、

ネプテューヌ「ボエッッ!!」

???「ぬおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ヴァルバトーゼ達「は?」

ネプテューヌの口からたくさんの人が出てきたことに唖然とするヴァルバトーゼ達。
そのため対応が遅れ、

ドガシャーンッ！！

全員「どわああ！！」

ぶっ倒れる。

？？？「アイタタタ、何処だここは？」

起き上がったのは銀髪で白い着物の男、そうネプテューヌの体の中にいた坂田銀時である。

新八「こ、ここは外ですか？」
神楽「地面があるネ！」
フェイト「てことは私達出られたんだ！」
スバル「みんな！けがはない？」

どうやら全員ネプテューヌの中から脱出できたようだ。

ラハール「おい貴様ら、一体何者だ？」
銀時「あ？お前大人に対しての礼儀がなってないな。名前を聞くときは自分からって親に習わなかったか？」
ラハール「知らん」

ラハールは銀時の言葉を軽く流す。

ノワール「その俺様主義は相変わらずねラハール」
ラハール「む？誰かと思えばノワールではないか！」
ブラン「私もいる」
ベール「ついでに私もですわ」

ノワールがいた事に驚くラハール。

エトナ「って言うか、あんた達今まで何やってたの？３０字以内に簡潔に説明して」
ノワール・ブラン・ベール「無理だ（よ）（ですわ）」

軽く流す。

ノワール「まぁ自己紹介も兼ねて説明すると…」

少女詳細説明中…

ノワール「・・・というわけよ、分かった？」
ヴァルバトーゼ達「ああ、分かった（わ）」

ヴァルバトーゼ達は納得したようだ。

ネプテューヌ「よし！それじゃ銀さんは復活したことだし、探索を続行するよ！」
銀時「なに俺を死人扱いしやがんだこの野郎！！」
ネプテューヌ「きゃーーー！」

ネプテューヌは銀時から逃げだした。

なのは達は苦笑いを浮かべながら後をついて行った。
只ノワール達は不安そうな顔をしている。

ノワール「・・・・・・・・・」
ベール「まだ心に残りますか？」
ノワール「・・・まぁね」

静かに答えるノワール。

ノワール（ネプテューヌ、あんたは忘れたかどうかわからないけど・・・あの子のことを…）

ノワールはそこで思考を止めた。

ノワール「行きましょ」
ベール「ええ、ねぷねぷにはあの子のことを覚えてるか知りませんけど…」
ブラン「どうだろうな…」

どこかの魔界

???「クシュン！」

どこかで少女がくしゃみをした。

???「今誰かが私の噂をしたような…」

少女はピンク色のロングヘアーで胸はシグナム級のバストを持っていて身長はスバルくらいである。
そして背中に天使の羽がある。

???「けど、誰が何を言われようと私は止まる気はないわ。すべてを終わらせるために」

少女はポケットからロケットを出して開く。

???「そして、いつも私にやさしくしてくれたお姉ちゃんと会うために…」

ロケットの中には少女と、紫の髪の少女・ネプテューヌと仲良く映っている写真があった。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

リリス「は～い、アシスタントはリリスがやりま～す！」

エトナ「ちょっと何？あのスッゴイ態度した娘、胸的な理由？」

殺気交じりに睨むエトナ。

エトナ「…まあいいわ。ペンネーム『黒神』から行くわよ。『黒神「いやぁ、今回は無事に長編が終わったからベール中心の質問しますか？」

銀時「ふぅーん、どんな質問すんだ？」

黒神「まぁこんな質問です。

ベールへ

その１

桂の魔剣士としての姿を見てどう思いますか？

その２

僕の小説のシリアス『狂乱編』も無事に終わりましたが、彼女から見てどこら辺が印象良かったですか？

その３

逆にメッチャ腹が立つところはどこにありました？（黒笑）」

銀時
「おぃぃぃぃぃぃぃ！！！何か３つ目は明らかに喧嘩売ってるだろう！！大体なんだよ、（黒笑）って！？前から思ってたんだけどよぉ、お前メッチャドＳな質問時々するじゃねぇか！？」

黒神
「いやぁ、何かこう言うのがはまりだして……ついぃ（黒笑）」

銀時
（こいつ、にじファン一の最悪な読者だぁ！！！！）』・・・ってなにこいつ」

エトナは黒神のやり方に引く。

ベール「順番に答えれば桂さんはかっこよかったですし、印象と言えば変身シーンとい事ですわ。ムカつくと言えばあの糞狸が堂々とやりやがったことですがね＃（低声）」

目に見えるほど殺気を放つ。

エトナ「『黒神』あんた今日死ぬわよ？」

リリス「それ失礼だよ。ペンネーム『鳴神　ソラ』さんからの質問だよ。『ルイージ「僕達のギャグ漫画のネタでたぁぁぁぁぁぁ！！！」

マリオ「俺的にブラザーアクションが出たなと思ったぞ？」

スネーク「流れもほぼ同じだな；」

ルイージ「と言うか新八君…良かったじゃない…一応活躍出来たんだし」

フォックス「しかも中心だったな」

ネス「ネプテューヌに質問『もし小さくなったら何がしたい？』」

スネーク「銀時に質問『自分がハンマー握って相手を殴ったらどんな効果が出ると思う？』」

マリオ「近藤に質問『今回出た新八の技はどう思う？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「頑張れよ！」』」

ネプテューヌ「銀さんに甘える」

銀時「おいおい…、多分俺は普通だと思うぞ？」

近藤「どう表現すればいいか分からん！」

リリス「それじゃあ『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』さんだよ。『よぉ…月光閃火だ。しかし…何時になったら前にぱっつぁん宛に送った『ＡＳ（アーマード・スーツ）ヴィクトリー』が出るかな…主に本編で。

輝刃「…まず登場は難しいだろうな。んじゃ、質問行くぞ？まずは俺からだ。」

1．作者に質問…ぱっつぁんに技が出来（ミニミニハンマー）たが、他にもぱっつぁんに技を習得させるのか？

確かに…それは気になるな。次は俺からだ。

2．作者に質問…原作銀魂で描かれていたぱっつぁんがメインの『文通編』だが、この小説でもやったりする？

輝刃「ふむ…確かに『文通編』は俺も原作銀魂の話の中で結構好きな話の一つだからな…。」』って、どうなの作者？」

真王「新八はあれだけで十分。『文通編』はやりません、すいませ

ん。そしてアーマースーツは出さないよ」

エトナ「んじゃ『月光閃火』、廊下に立ちなさい。次はペンネーム『三国同盟』よ。『風祭さんに質問。「風祭さんが元生きてた世界は銀さんやなのは達はマンガやアニメの登場人物なんですか？」』」

フーカ「あたしはディスガイアの住人よ」

リリス「つまりどっちでもないってことだね。『三国同盟』さん。廊下に立ってなさい」

エトナ「最後にペンネーム『黒龍』からよ。『黒龍「おお、今回は新八が地味活躍しましたな」

銀時「ちっ、ぱっつぁんだけかよ」

黒龍「今舌打ちした」

銀時「俺の扱い酷すぎるぜ」

黒龍「まぁまぁ、そう言わない」

銀時「ああ、なんか納得いかねぇ」

黒龍「あははは（苦笑）」

銀時「とりあえず、今回の章が終わったらあっちの俺の活躍を見たいもんだぜ」

黒龍「まぁそうですね。期待しましょう」

銀時「そんじゃま、質問するか。ぱっつぁん（新八）に質問だ。お前、とりあえず眼鏡割れろ」

黒龍「いや、何その質問!?つうか質問じゃねくね!?」

銀時「だってよーダメガネのせいで俺がちっこくなったんだろうが」

黒龍「うわ、すんげぇ根に持っている。やられたのはあっちの銀さんなのに」

銀時「黒龍、お前も質問あるんだろ。早くしろ」

黒龍「はいはい、分かりました。ええバカ（新八）に質問です。お前『ミニミニハンマー』と言うとんでもなく凄い技を手に入れたのにいらないとは、どんだけ贅沢なんだ?バカなのか?クズなのか?ゴミなのか?メガネザルなのか?だからお前は新一じゃなくて新『八』なんだよ。なんだよ『八』って・・・・」

銀時「お前も変わんねぇじゃねぇか!!しかも俺より陰湿だし!?」

黒龍「だって原作の銀魂で新八が廃人墜ちしたからすんげぇがっかりなんだもん」

銀時「ああ、アレには俺もガッカリだ」

黒龍「じゃあ最後の質問。新八、お前とりあえず一回この小説離脱して精神修行してこい。お前にはホントガッカリだから」

銀時「ああ、お前にはホントにガッカリだ」

黒龍・銀時
『『それじゃあ次回も新八以外は頑張ってください』』」

新八「これ完全に質問じゃねぇだろォオオオオオオオオオ！！！！全部僕に対しての嫌みじゃねぇかァアアアアアアアア！！！！」

真王「はいはい、『黒龍』さん、もっと新八をいたわりなさい」

リリス「次はフーカとデスコがアシストするよ」

第五十五訓：胸がでかいのは生意気な証拠（後書き）

真王「謎の少女の正体は一体？…はどうでもいいとして」

？？？「良くないです！！」

真王「次回はゲラビッツがミッドチルダにやってきて、ネプテューヌ達も追いかけます！」

フーカ「次回『パズルゲームは頭が肝心』テイクオフよ！」

第五十六訓：パズルゲームは頭が肝心（前書き）

真王「ちょっとドラクエのあのモンスターが出るかもね」

ネプテューヌ「それで作品消されたりしないの？」

真王「・・・『リリカル銀魂』始まるぞ」

ネプテューヌ「うわ、誤魔化した」

第五十六訓：パズルゲームは頭が肝心

ミッドチルダ・ロストロギア格納庫

ここはロストロギアの保管所、言わばロストロギアの格納庫だ。
そこに一人に来訪客が現れる。

管理局員「貴様！なに者だ！」

管理局員が気付いてその人物に立ちふさがるが、

？？？「ビーーーーー！」
管理局員「ぐあーーーー！！」

機械のようなモンスターのビームによって倒された。

ゲラビッツ「ふっふっふ・・・ついに見つけたぞ！」
管理局員「なっ！それは！」

来訪客：ゲラビッツはある物を手にした。

ゲラビッツ「ここの管理局の上層部が手に入れた禁断のロストロギア、まだ稼働はしていないが、使い道はたくさんある」

そう言ってそれをポケットにしまう。

ゲラビッツ「さぁ！我の計画が実行するとき！今すぐとは言わんが活目するがいい！」

ゲラビッツはどこかへ飛んでしまった。
管理局員「な、なんてことだ。支給本部に連絡を！！」

魔界・地獄

現在ヴァルバトーゼ達は銀時となのは達と話し合いをしている。
ちなみに出番はなかったが、今まで中にいた真選組とナンバースは協力することになり、捕まった魔物たちは解放された。

ヴァルバトーゼ「ふむ、大体の事情は分かった」
アルティナ「ゲラビッツがネプテューヌさんにあれこれをしたことは分かりましたが、肝心のあの人に狙いが分かりませんね」
ティアナ「確かに、ゲラビッツの動機が分からないままね」
ヴァルバトーゼ「フェンリッヒ」
フェンリッヒ「御安心ください、そろそろ戻ってくるかと」

フェンリッヒがそう言うと、プリニーがやってきた。

スパイプリニー「お待たせしましたッス、フェンリッヒ様。ゲラビッツの行方が判明しましたッス」
フェンリッヒ「…ギリギリのご到着だな。プリニーの心得その6、『御主人様を待たせるべからず』ま、ギリギリだから許してやるとして、情報は？」
スパイプリニー「ハイッス、ゲラビッツは今人間界へ移動したとの

事ッス」
ラハール「人間界にだと？」
ラハールやその他に人も片眉をあげる。
スパイプリニー「ハイッス。けどその人間界はちょっと違うッス。場所はミッドなんとかって場所で…」
なのは達「ミッドチルダ！」
なのは達は驚いた顔でミッドチルダの名を出した。
スパイプリニー「ハイ、そのミッドチルダという世界にゲラビッツが行ったとの事ッス」
ヴァルバトーゼ「ミッドチルダ…聞いたことがある。世界を管理するという巨大組織がある場所ってやつか？」
六課組（そう言う認識なんだ…）
六課組は管理局をそんな認識されてる事にそう思った。
ヴァルバトーゼ「なにはともあれ、場所はわれたのだ。行くしかあるまい」
フェンリッヒ「お待ちください閣下」
フェンリッヒが止める。
フェンリッヒ「無闇にあいつのとこに行くのはあまりいい気がしません」
フーカ「でもフェンリっちなら何とかなるんじゃない？」
フェンリッヒ「フッ、分かっているではないか小娘」

フェンリッヒはフッ、と笑う。

ヴァルバトーゼ「フン、罠だろうが強敵がいようが、俺達は止まる気はさらさらない。行くぞ！皆の者！」

フェンリッヒ「やれやれ、仕方ありませんね……すべては、我が主のために…」

ヴァルバトーゼの号令と共に、なのは達、銀時達、ネプテューヌ達は人間界…もとい、ミッドチルダへ行った。

ミッドチルダ・外れの小島

ヴァルバトーゼ達はなぜかこんな辺鄙な島に着いてしまった。

ヴァルバトーゼ「ん？なんだここは？」

銀時「なんだここは？無人島じゃねぇかこれ！？」

無人島に着いたことに腹を立てる銀時。

ネプテューヌ「いや、これ無人島じゃないよ。ホラあれ」

ネプテューヌがある場所を指差す。

それは何かの研究所だった。

銀時「あ、ホントだ」

ネプテューヌ「私あれをゲラビッツのだと思うけどな～」

あの建物をゲラビッツの研究所じゃないかと推測するネプテューヌ。

フェンリッヒ「その推測は正しいらしい。その証拠にホラ」

フェンリッヒはある物を見て言う。
それは、吸盤のような四つの足と、右腕にサーベル型の剣、左腕にボウガンを装備している機械だった。

フェンリッヒ「成程、意外な歓迎をされているようだな」
銀時「ってちょっと待てよ！なんでキラーマシン？『ドラクエ』？あいつドラクエやってんの？」
フェイト「何言ってるの銀時？」

目の前にいる機械はどう見てもドラクエシリーズのキラーマシンそのものだった。
だがフェイトは何の事だか分からないらしい。
するとキラーマシンが戦闘態勢に入った。

ヴァルバトーゼ「おしゃべりする暇はないぞ！皆の者！戦闘配置に着け！」

号令により全員戦闘に入った。

ＩＢＧＭアイテム界ボスｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ａｃｒｏｓｓ　Ｔｈｅ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ）

ネプテューヌ「相手が仕掛ける前に倒す！」

ネプテューヌが先制してキラーマシンに切りかかると、

ヴァルバトーゼ「待てネプテューヌ！！」

ネプテューヌ「なn「ドガッ！」ぶへっ！」

いきなりヴァルバトーゼが叫び、ネプテューヌはふりかえると、何かにぶつかった。

否、正確には見えない何かにぶつかったのだ。

キラーマシン「ピピガ、コウゲキ」

一体のキラーマシンがネプテューヌにボウガンを構えた。

ベール「させません！」

ベールがキラーマシンに銃を撃ち、阻止した。

ネプテューヌ「イタタ、…これって」

キラーマシンから離れたネプテューヌは地面に赤いパネルがあることに気付いた。

ネプテューヌ「ということは・・・あった」

上を見上げると、赤いブロックのようなものがあった。

ノワール「ジオパネルにジオブロック…ゲラビッツもやるわね」

銀時「ジオ・・・なんだって？」

銀時達は頭を傾げる。

ベール「地面が赤く光っているのが霊素の床・ジオパネル、そしてあのブロック型は霊素の結晶体・ジオブロックですわ」

ノワール「ジオパネル自身はあまり意味はないけどジオブロックはジオパネルに乗るとジオパネルに影響が出るの」

ベールとノワールがジオパネルとジオブロックのことを説明する。

ノワール「…にしても『進入禁止』とはね…」

フェイト「え？『進入禁止』？」

ノワール「あのジオブロックの効果よ。その効果のブロックがパネルに乗ったらそのパネルの中に入れないし奥へ行くことも出来ない」

ノワールの説明に全員納得する。

ブラン「でももっと厄介なのがあるわ…」

ブランがあるとこを見て言う。

それはキラーマシンの足元にある青いジオパネルだった。

そしてその効果は、『超敵強化3倍』である。

ノワール「あいつなんてもんだしやがったのかしら！」

新八「あの、一体どうしたんですか？」

怒り気味のノワールに新八が聞いてきた。

ノワール「あそこに青色のパネルがあるでしょ？その効果は『超敵強化3倍』で敵の強さが3倍になるのよ！」

銀時「ゲッ！どうすりゃいいんだよ！」

銀時達は慌てふためく。

ネプテューヌ「こうなったら…」

ネプテューヌは赤いジオブロックに向けて銃を撃つ。
赤ジオブロックが壊れた。

ネプテューヌ「よし！これで進める！」
キラーマシン「ピピ、ターゲットヲコウゲキ」

ジオブロックを壊されたのか、キラーマシン達が移動を開始した。
そのため『超敵強化3倍』の青パネルから離れた。

ネプテューヌ「おお！これはチャンス！デヤァッ！」

ネプテューヌはキラーマシン3体を切り捨てた。

銀時「ったく、手間かけさせんじゃねぇよ！」

そう言いながらも銀時は2体のキラーマシンを切り捨てる。

新八「僕だって、うおおおおおおおおおお！！！」

新八は負けじとキラーマシンに攻撃する。

キラーマシン「ピガ、ピガガ、ガピーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

ダメージを受けたキラーマシンは壊れたかの様に変な音を出す。
なのは「なに？」
キラーマシン「カウンターパワー・・・ハンゲキカイシ」
キラーマシンがものすごい勢いで突っ込んできた。
そして右手の剣を思いっきり振る。
銀時「うお！」
銀時はかろうじて避ける。
が、近くにあった木がスパンと切られた。
キラーマシンは体を回転させて銀時に攻撃。
銀時はそれを防ぐ。
銀時「舐めんじゃねぇこのやろ！！」
銀時はキラーマシンを弾き飛ばす。
銀時「うおおおおお！！！」
銀時は木刀を構えて突撃し、キラーマシンは剣を構える。
そして両者は剣を振った。
バチバチバチバチ！
キラーマシンの体に火花が飛ぶ。
そして倒れた。
銀時「ったく手間かけさせやがって」

ネプテューヌ「でもこれで先へ進めるようになったね」
ラハール「…いや、まだだ」

安心するのも束の間、ネプテューヌ達の前に新たな敵が現れる。
それはキラーマシンと同種のようだが、色が違う。
キラーマシンの色は青色だったが、このタイプは濃い緑である。

ヴァルバトーゼ「さっきの奴らの隊長格のようだな」
ネプテューヌ「おお！これは強そう！」

ヴァルバトーゼは見定め、ネプテューヌは興奮している。

キラーマシン改「マヒャドギリ」

緑色のキラーマシン・キラーマシン改が切りかかってきた。
ネプテューヌはかわし、近くの木が切れた。
すると切れた木が凍りついてしまった。

なのは「木が凍った！？」
銀時「ちょまて、今マヒャド切りって言ったよね？やっぱドラクエじゃ「ヒュン！」どわ！」

なのはは驚き、銀時は納得しているようだが、キラーマシン改のボウガンをギリギリかわす。

キラーマシン改「ビーーーーー！！」

今度はビームで攻撃してきた。

銀時「どわぁあああああああ！！」

銀時はビームを必死で逃げる。

ネプテューヌ「させない！ハァアア！」
キラーマシン改「ピピ！」

ネプテューヌが攻撃してきたのでキラーマシン改は気付いて防ぐ。

ネプテューヌ「行くよ！クリティカルエッジ！」
キラーマシン改「マヒャドギリ」

ネプテューヌとキラーマシン改の技が炸裂した。
そしてしばらくすると、

ズバンッ！バチバチバチ！

キラーマシン改「ビ…ギ…」

キラーマシン改は切られて倒れた。

ネプテューヌ「よし！敵部隊の隊長討取ったり～！」
ヴァルバトーゼ「よくやったぞ！ネプテューヌ！」
銀時「んじゃ殴りこみに行きますか」

銀時、ネプテューヌ、ヴァルバトーゼ達はゲラビッツの研究所へ足を踏み入れる。

離れたところでキラーマシン改が動く。

キラーマシン改「ギ…ガ…ホウコク…ゲラビッツ…サマニ…ホウコ

ク」

そう言いながら左腕のボウガンで銀時達を狙う。

キラーマシン改「キンキュウ…ヨウセイ…シキュウ…エン「ドシュ！」ゴォッ！？」

何処からか矢がキラーマシン改に頭にあたり、キラーマシン改は機能停止した。

？？？「ついに、ついに見つけたよ、お姉ちゃん」

そしてキラーマシン改にトドメをさした少女はにっこり笑って後をついて行った。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生!!」

フーカ「今日のアシスタントは『夢見る乙女』フーカと」

デスコ「『ラスボス希望者』デスコがアシストするデス!」

エトナ「そんじゃあ始めますか。ペンネーム『鳴神　ソラ』からよ。『マリオ「今回のメタボス戦は一言で言うなら…また俺達のギャグ漫画の様にあっさりやられたな」

クッパ「羨ましいぞネプテューヌ…我輩なんて食べて太ったぞ…（遠い目）」

ルイージ「あはは…それで銀さん達が出て来られたね…」

ネス「最後に出た人物って…あれだよね?」

リュカ「確かネプテューヌさん達の次のゲームでの主人公な人だよね?」

マリオ「しかも忘れてる様だな…ラハール達に質問『銀時達を最初に見た印象はどんな感じだ?』」

ルイージ「銀さん達に質問『ネプテューヌの中から出る時はどんな感じだった?』」

スネーク「同じく質問だが…『ネプテューヌの中から出た後、はやてはあれをやっちゃったか?;』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「どうなるのやら…」』ズバリお答えするわ」

ヴァルバトーゼ「銀髪の男は強者とみた！」

アルマース「新八君は苦労してるな～…」

フロン「神楽ちゃんと九兵衛さんは私達と同類ですね！（胸的な意味で）」

サファイア「桂はワシと気が合うの♪」

プリニー「エリザベスさんってもしかして・・・いや、何でもないッス」

アデル「あの月詠って女はかなりの達人だな」

ロザリンド「そう言えばなのはというものは余と似た声じゃったな」

ラハール「フェイト・・・ぐはっ！ムチムチ女か！！」

アルティナ「はやてさんはなんだかいやな予感がしますが…」

アデル「シグナムは俺にとって最高の好敵手（ライバル）だな」

ラハール「ヴィータは俺様と気が合いそうだ」

フロン「シャマルさんは回復士ですね。応援します」

フェンリッヒ「ザフィーラは俺と同類か…（種族的な意味で）」

フーカ「スバルってフツーの女の子よね？」

デスコ「ティアナさんはツンデレデスね！」

エトナ「エリオってなーんか似てるのよね～。あ、アデルの髪か」

ラズベリル「キャロは真面目だな。あたしのも見習ってくれ」

真王「え～と、銀時達は出た後アレのように出したと想像してアレを出しました。そしてはやてもあれを出しました」

エトナ「えげつな！…まぁそんなわけで『鳴神　ソラ』廊下に立ちなさい」

フーカ「えっと次はペンネーム『支配者』って人からの質問よ。『今回も面白かったですね。銀時に質問です。今まで出会ったこの小説の全キャラの中で一番のドSは誰だと思っていますか？』」

銀時「いやそれを俺に聞くなよ。どっちかというとサド王子かサド魔神ぐらいだろうよ」

フーカ「サド魔神って…ああ、エトナね。『支配者』、廊下に立て」

デスコ「お姉さまそれは命令形デス…」

エトナ「それじゃあこれで終わりだけどこんなのもあるわよ～」

『ダンジョンバトン

私のオリジナルバトン…かもしれない？

このバトンはダンジョン探索の時に言うセリフを表したものです。
ダンジョンによる仕掛け、トラップ、戦闘などをイメージしてかきます。
今回のキャラ：（上から順に）ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール

■0．ダンジョン突入
「よし行くよ～」
「さて、さっさと始めるわ」
「…しかたないな」
「さてさて、どんなダンジョンなのかしら？」

■1．エンカウント・通常
「よしっ、勝負だよ！」
「さぁーて、どのくらい楽しませてくれる？」
「腕慣らしには丁度いい…」
「さ、お手並み拝見ですわ」

■2．エンカウント・格上
「なんか、強そうだよー…」
「こいつ…強い…！」
「あぁぁぁん？やんのかゴラァ！」
「みなさん、気を引き締めていきましょう！」

■3．エンカウント・格下
「任せてー！こんな奴、私ひとりで十分！」
「なんでそんなレベルで挑んでくるの？馬鹿なの？死ぬの？」

「ザコ相手に…私が必要なの…？」
「ふふっ…余裕ですわ」

■4．勝利
「まだまだ余裕だね！」
「私にかかればこんなものよ」
「勝って当たり前…」
「あら、もう終わりですの？」

■5．楽勝
「ボッコボコにしてやったもんね！」
「弱すぎてお話にもならないわ」
「こんな戦力で勝てると思ってたの…？」
「うふふっ、楽勝ですわ♪」

■6．辛勝
「ちょっと油断したかなぁ…」
「まさか、ここまで追い詰められるとは…」
「侮った…？いや…違う…」
「さすがに、今の戦いは応えましたわ…」

■7．戦闘不能
「やられちゃった…」
「ありえない…何であたしが…」
「負けた…」
「そんな…私が…」

■8．戦闘復帰
「コンティニューだよー！」
「助かったわ！あ、ありがとう…」
「礼を言う…」
「ふふっ、ありがとうございます♪」

■9．エンカウント・奇襲
「正々堂々勝負しろー！」
「奇襲っ！？どこからっ！？」

「クッ！この卑怯者！正々堂々正面から勝負しやがれっ！」
「後ろを取られるなんて…不覚…！」
■１０．アイテム使用・自分
「アイテムアイテムっと」
「しょうがないわね…」
「念のため…」
「これが役立つ時が来ましたわ」
■１１．アイテム使用・相手
「これ使って！」
「べ、別にあんたのために使うんじゃないのよ！勘違いしないでよね！」
「これ使って…」
「このアイテムで役立ってください」
■１２．宝箱・普通
「ラッキー♪」
「それなりに役には立ちそうね」
「やった…」
「いい物を見つけましたわ」
■１３．宝箱・レア
「これっ、珍しいものじゃない？」
「面白いものが見つかったわね♪」
「珍しいものね…」
「まぁ！素敵なものですわ」
■１４．宝箱・レジェンド
「うおおおお！！！これはっ！！！」
「ま、まじで！？」
「ウオッすげーーー！！！・・・おっと本心が…」
「まぁ！！なんて素敵なものかしら！」
■１５．仕掛け（扉）
「よいっしょっと」

「よいしょ」
「どっっせい！」
「よいしょ！」
■１６．仕掛け（オブジェ移動）
「よいしょ、うんしょ」
「どっこいせ」
「ふん！」
「よいしょ！」
■１７．仕掛け（スイッチ）
「なんだろ？これ？」
「なにがおきるかしら？」
「・・・」
「なにが起こるのでしょうか？」
■１８．コンボリンク
「もう一回行くよーっ！」
「追い討ちよっ！」
「今のうちに削らせてもらう…」
「まだまだ終わっていませんわ！」
■１９．バトンタッチ
「選手交代！後は任せた！」
「今はあなたに任せるわ」
「任せたわ…」
「後はお願いね？」
■２０．トラップ（トゲ）
「いたっ！」
「あいたっ！」
「いっ！？」
「きゃっ！」
■２１．トラップ（ヤケド）
「あちちち！」

「あちゃちゃちゃちゃちゃ！」
「あっつ！」
「あつい！」
■２２．トラップ（毒ガス）
「うっ！ゲホゲホ・・・」
「ゴホッ、ゴホッ」
「グホッ・・・」
「毒ガ・・・ケホケホ…」
■２３．トラップ（グルグル）
「グルグル～・・・」
「め、目が…」
「気、気持ち悪い…」
「ふぇ～～～・・・・・・」
■２４．トラップ（ビリビリ）
「ビビビビビビビビビビビビ！！」
「アバババババババババババ！！」
「ウェベベベベベベベベベ！！」
「アワワワワワワワワワワワ！！」
■２５．トラップ（トランポリン）
「わ～～っ！」
「きゃ～～！！」
「うをっ！？」
「ひゃわっ！」
■２６．トラップ（爆弾）
「ぶぎゃっ！」
「きゃあっ！！」
「ぐあっ！！」
「きゃああっ！！」
■２７．トラップ（タライ）
「イタっ」

「ッツ！」
「てっ！」
「あうっ」
■２８．トラップ（虫）
「あわわわわわ！！」
「きゃあっ！なによこれ！！」
「うわっ！こっちくんな！」
「きゃっ！なんですか！？」
■２９．トラップ（落下）
「わあああああああああああああ！！！」
「きゃあああああああああああああ！！！」
「うわあああああああああああああ！！！」
「ひゃあああああああああああああ！！！」
■３０．トラップ（モンスター）
「うえっ！？何でッ！？」
「なっ！？これって！？」
「モンスター…」
「そんなっ！？」
■３１．回復
「ありがとう！助かったよ！」
「べ、別に嬉しくなんか…嬉しいです…」
「ありがと…」
「ありがとうございますわ」
■３２．自己回復
「回復回復っと」
「癒しよ！」
「自己回復…」
「バイタリティ上昇…なんちゃって♪」
■３３．味方回復
「回復してあげるよ」

「別にあなたのために回復させるんじゃないわよ！」
「回復してあげる…」
「回復させてあげますわ」
■３４．ガード
「おっと」
「なんの！」
「効かない」
「防御ですわ」
■３５．ジャンプ
「えい！」
「とう！」
「は！」
「えい！」
■３６．持ち上げ
「よいしょ！」
「よっ！」
「・・・」
「よいしょ」
■３７．投げる
「えい！」
「それ！」
「デヤッ！」
「セイ！」
■３８．コンティニュー
「え？まさか諦めるの？」
「コンテニューする？」
「終わるつもり？」
「コンテニューしますか？」
■３９．死亡、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ
「ゲームオーバーだよ～…」

「もう諦めるのね…」
「フザケンナッ！！このやろ！！」
「ゲームオーバーですわ…」
■４０．レベルアップ
「レベルアップ！」
「よし！レベルアップ！」
「レベルアップ…」
「レベルが上がりましたわ♪」
■４１．待機
「う～んっと」↑背伸び
「髪がほつれてるわ…」↑髪をいじる
「・・・」↑黙って読書する
「え～っと、ここはこうしてアレすれば…」↑ゲームを想像している
■４２．待機２
「結構疲れたかな～」↑肩を回す
「ポーズはビシッ！と決めた方がいいわね…」↑考えているしぐさをする
「Ｚｚｚ・・・Ｚｚｚ・・・ハッ！」↑眠りに入る
「ちょっときつくなった気がしますわ…」↑胸を抑える
■４３．必殺技
「受けてみて！私の必殺技！」
「これで終わりにしてあげるわ！」
「まとめてぶっ飛ばしてやる…」
「我が戦術をお見せして差し上げますわ」
■４４．クエストクリア・ランクＥ
「うぇぇ～、最悪の結果じゃーん！」
「まるで悪夢を見てるみたいだわ…」
「おい！何なんだこの結果は！舐めてんじゃねぇぞ！このカス！」
「残念ですわ…」
■４５．クエストクリア・ランクＤ

「だめだめ！こんなの低すぎー！次はもっと頑張るよ！」
「ち、調子が悪かっただけよ！」
「異議あり！」
「もう一度、挑戦ですわ！」
■４６．クエストクリア・ランクＣ
「ふつーだね、ふつー。まだまだ良くなるよ！」
「悪くは無いんだけど、個人的には納得いかないわね」
「良くない…けど、悪くも無い…」
「まぁ、こんなところでしょうか」
■４７．クエストクリア・ランクＢ
「おぉ～！これはいい感じの評価だよぉー！」
「私が居たんだから、このくらい当然よ？」
「こんなものね…」
「ふふっ、意外に好成績でしたわ！」
■４８．クエストクリア・ランクＡ
「ふっふっふーん♪これも私の活躍あっての結果だね！きっと！」
「ハードとして、当然の結果ね！」
「やるじゃない…凄いわ…」
「素晴らしいですわ！この調子で、次も頑張りましょう！」
■４９．クエストクリア・ランクＳ
「ねぷっ！？えっ？ま、まさかのＳゲット！？す、すごいよこれぇ！」
「し、仕方ないわねー！ほ、褒めてあげるわ！」
「ランクＳ…ゲットだぜ！」
「凄いですわ！この調子で次も頑張りましょう！」
■５０．回す人
「鳴神ソラさん！」
「黒神さんね」
「ｓｉｂｕｇａｋｉ・・・」
「黒龍さんですわ」』

エトナ「は～い、そんなわけで次のアシストはあの幽霊のガキにやらせるわ」

サチコ「サチコだよ～」

第五十六訓：パズルゲームは頭が肝心（後書き）

真王「次はネプテューヌ達のかなしいエピソードが出ます」

サチコ「次回『愛が大きければ悲しみも怒りも大きい』テイクオフだよ」

第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい（前書き）

真王「今回はシリアスを作りました。ネプテューヌ達のかなしい過去に…」

ネプテューヌ「・・・『リリカル銀魂』始まります」

第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい

ネプテューヌ達はゲラビッツの研究所に潜入し、今も現在進行形で進んでいる。
途中警備していたキラーマシン達と、蜥蜴のような顔で全身緑色で尻尾の生えた斧を持つ人型の龍族、龍人族のリザードマンとエンカウントしたが、ネプテューヌ達の脅威はすさまじく、止まることはなかった。
そんな時だった。

ＩＢＧＭ悲しみの雨ｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｓｏｒｒｏｗ　Ｒａｉｎ）

ノワール「ネプテューヌ」
ネプテューヌ「何？」

ノワールがネプテューヌを引きとめる。

ノワール「言おうか言うまいか悩んでたけど、あなたｈ「いいよそれ」え？」
ネプテューヌ「その話はしなくていいんだよ。…今にもあの時の記憶が湧きあがってきちゃう…」

ネプテューヌの言葉にノワール達は驚く。

ノワール「ネプテューヌ…あなたまさか」

ネプテューヌ「覚えているよ…。あの時のことも…あの子のことも…」

ネプテューヌの小さな背がさらに小さくなった気がする。

ネプテューヌ「今思うと胸が痛いよ…。昔の自分達が馬鹿らしく思えるのに…」

ベール「ええ…今思えばあの時の私達はどうかしてましたわ」

ブラン「・・・人間どもを殺●●●●●したくなった感情が…」

あの事件の彼女達は、気が動転してそんな感情を抱いてしまったようだ。

ノワール「そう…違法研究の実験台にされた彼女が、ほとんど体力を失って…駆けつけた時にはもう…」

ノワールは悲しそうな目をする。

ネプテューヌ（今思えば優しかったな…たとえどんなことでも決してくじくことのないあの子と友達になれた事が…）

～回想～

それはネプテューヌ達が銀時達と会う前、５年前のことだった。

ネプテューヌ「あれ？君はどうしたの？迷子？」

当時のネプテューヌは、ベンチで座っている一人の少女を見かけた。
しかし周りには誰もおらず、ただ寂しそうに座っていた。

少女「お姉ちゃん、誰？」

少女はネプテューヌを見て言った。

ネプテューヌ「私？私はネプテューヌ。見た目はこれだけど女神様なんだ」

少女「女神？女神って大陸を守護するあの？」

ネプテューヌ「そうそれ！」

ネプテューヌは嬉しそうに答える。少女はほほ笑む。

ネプテューヌ「ところで、あなたはここに住んでるの？」

ネプテューヌが聞くと、少女はフルフルと首を振る。

ネプテューヌ「じゃあ別のとこ…っというよりあなたの名前は？」

少女「私？わたしは白服の大人からＧ－０４５号と呼ばれているの」

ネプテューヌ「っ！！？」

少女の答えにネプテューヌが驚愕した。

ネプテューヌは確信する。

この子は違法研究によって生まれた人造人間なのだと。

実はネプテューヌの大陸・プラネテューヌに違法研究をしていると噂がある。

当の本人は半信半疑だったが、イストワールのクエストをやってい

たところそれが本当にあったのだと確信した。
違法研究をやっていたものは、『人造女神計画（通称：プロジェクトM）』であった。
その違法研究をやっていた者たちは、ネプテューヌ達の活躍によって全員逮捕された。
しかし、研究の被害にあった子供たちは計り知れなかった。
被害にあった子供たちは動かない肉へと変わり果ててしまったのだから。
そして、今ネプテューヌの目の前にいる少女は、あの研究の生き残りであると。
だからネプテューヌは決断する。

ネプテューヌ「ねぇ、私と一緒に来ない？」
少女「え？」

少女は耳を疑った。

ネプテューヌ「帰る場所がないなら私が…ううん、私達が作ってあげるよ。それにその名前はあなたにはすっごく似合わないしね」
少女「いいの？私なんかを匿って迷惑じゃ…」
ネプテューヌ「迷惑とかそういう問題じゃない！！」

ネプテューヌが怒り交じりに怒鳴る。
少女はビクッと驚く。

ネプテューヌ「あなたがどんな人だろうとそんなの関係ない！どう生まれようとあなたは私達と同じ…人間なんだから！」

ネプテューヌの力強い言葉に、少女は涙を流す。

少女「うれしい、私を…そんな風に言ってくれる人がいるなんて…」
ネプテューヌ「そうだね。それに涙を流すのも、自分が人である証でもあるんだから」

ネプテューヌは少女を抱きながら言う。

少女「ありがとうお姉ちゃん、なんだか少し元気が出たよ」
ネプテューヌ「どういたしまして」

ネプテューヌは笑う。

ネプテューヌ「あ、そうだ。どうせなら君に新しい名前がいるね」
少女「名前？」

ネプテューヌは少女の名前を決める。

ネプテューヌ「そう名前、私なりに考えた名前だけど、君の名前は――――――」

～回想終了～

ネプテューヌ（本当に昔が懐かしい。そして…憎たらしい…）

あの子を殺した人間達に対して怒りを表す。

ネプテューヌ（クッ…どうしてこんなに腹の中がどす黒く渦巻いて

いるの？思い出すだけでどうしてこんなに憎悪が湧きあがるの？）

今のネプテューヌは表情と感情を隠すだけで精いっぱい。
手に力が湧きあがる。

ネプテューヌ（ねぇ教えてよ。どうしたら私の中の苦しみが無くなるの？）

あの子を思うあまり俯くネプテューヌ。
それを見て心配そうに見るノワール達。

ノワール（・・・やっぱりネプテューヌはあの子から離れられないのね…）
ベール（無理もありませんわ…。あの子をよく慕っていたのはねぷねぷなのですから…）
ブラン（愛が深ければ深いほど、心の傷がそれほどひどくなる…）

そう言うノワール達も心に深い傷を負っていた。

だが、そこですっごく空気の読まない奴が来た。

？？？「見つけたぞ！！」

全長４メートル級の赤い体にとげの棍棒と頭に角が生えている。
一目で鬼と連想するような邪鬼族・タイラント。

？？？「・・・・・・・・・」

もう一方は全身レンガ状で出来た全長４メートルの石の巨人。
頭は角ばって赤いレンズがひとつ。

この者の正体は魔道巨人族のゴーレムと呼ばれるものである。

タイラント「くそ生意気なガキどもめ！今すぐその変面をつぶしてやｙ「ドゴッ！！」ガバァッ！！」

タイラントが言い切る前にネプテューヌが殴り飛ばす。

しかもネプテューヌは苛立っているようだ。

ネプテューヌ「…人が感傷してるって時に、よくもまぁ抜け抜けと前に出てくるもんだね？」

銀時「ね、ネプテューヌ？」

銀時達は様子のおかしいネプテューヌに引く。

ネプテューヌ「人の思い出に……邪魔をするなぁーーーーーーー！！！！！」

タイラント「グアアアアアアアアアアアア！！！！」

ネプテューヌの猛攻撃にタイラントは倒れた。

ゴーレム「・・・・・・」

ゴーレムはそんなネプテューヌに後ろから攻撃を仕掛ける。

銀時「あぶねぇネプテューヌ！」

銀時と桂とラハールとヴァルバトーゼがゴーレムの攻撃を防ぐ。

ネプテューヌはふりかえってゴーレムに飛びかかる。

ネプテューヌ「あああああああああああああああああああ

あ！！！」

ネプテューヌはエックスセイバーを思いっきり振る。

ガキィン！！

が、ゴーレムが堅いためあまりダメージを与えられない。
するとゴーレムは手と手を合わせて、ハンマーのようにして地面に打ち付けた。

銀時「うおわっ！」
なのは「きゃっ！」
ヴァルバトーゼ「クッ、地震か？」

ゴーレム以外全員がバランスを崩した。
ゴーレムは大地震を引き起こすクエイクインパクトを放ったのだ。
だがネプテューヌはとっさに飛んだため影響は受けなかった。

ネプテューヌ「やあああああ！！」

ネプテューヌはゴーレムの首筋をとらえ、突き刺した。
首筋から火花がたち、ゴーレムはネプテューヌを引きずり下ろそうとする。

ネプテューヌ「あああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ネプテューヌはエックスセイバーを思いっきり、奥へ突き刺す。
そして徐々にゴーレムの目に光が消え、完全に沈黙した。

ネプテューヌ「ハァ…ハァ…ハァ…」

エックスセイバーを抜き差し、息を荒くするネプテューヌ。

ネプテューヌ（…まだ残ってる…まだ頭にこびり付いてる）

ゴーレムからとび降りて、頭を抱えてうつむくネプテューヌ。

銀時「おいちょっと、ネプテューヌの様子おかしくね？」

見かねた銀時がノワールにとう。

ノワール「・・・・・・・・・」

しかしノワールは黙っている。すると、

ベール「…昔、人とは違う生まれ方をした一人の少女がいた…」

フェイト・エリオ「っ！？」

ノワール「ベール…」

ベールが語り始めると、フェイトとエリオが驚愕する。

ベール「しかしその少女は孤独であっても苦の生活であっても決して心を曲げなかった…。そんな時ねぷねぷがその少女を見つけた。少女はねぷねぷの誘いを受け入れ、まるで私達の妹の様に親しんでいった。けどある時事件は起きた…」

ベールは一息ついて言った。

ベール「あの子は、違法研究の実験台にされて殺された…」
女神組以外全員「ッッッッ!!!!!!!??」

そこから語られる話は衝撃が強すぎた。

ブラン「私達が駆け付けた時にはあいつはもう虫の生き状態だった。
実験による疲労と出血多量で体力を徐々に奪われていった」
ノワール「そんな時、私達の中にある感情が芽生え始めたのよ。…
人間に対する憎悪を…」

ノワール達は顔に怒りの感情が見える。

ブラン「私達はその感情を抱くとともにあいつらを半殺しでは済まない事をしようとした」
ベール「ですがあの子は…」

～回想～

ゴウゴウと燃え続ける建物の前に、４女神と、もはや虫の息状態でほぼ血が出ている少女がいた。
その時彼女達は少女にひどいことをした奴らを半殺し以上のことをやろうとしたら、

少女「ま・・・待って…復讐をしたところで…また…悲しみが増えてしまう…」

少女はネプテューヌ達に復讐などやめるよう言う。

パープルハート「勘違いをしないで！これは、あなたを救えなかった悲しみに対する…腹いせよ！」

ホワイトハート「あいつらを…お前をこんな目にあわした奴らを一人残らずぶち殺すだけだ！！」

怒りをあらわにするホワイトハート。

少女「駄目…女神様が人殺しをするのは・・・絶対に・・・駄目なの…。怒りで…人を殺しては…また悲しみが…生まれるだけ…」

少女のハイライトが徐々に消え、生命がどんどん薄くなっていく。

少女「ああ…何だか…お姉ちゃん…達…が…ぼやけ・・・て…見え・・・る…」

ブラックハート「しゃべっちゃダメ！傷が！」

少女「ううん…私…のいの…ち…はもう…そんなに…長く…ない…よ…」

力なく語る少女が、ある頼みごとをする。

少女「さい…ご…に…おねえ…ちゃ…ん・・・もっと…見せて…」

ほぼ見えない少女に視界に、パープルハート達が映る。

少女「ああ…お姉ちゃん…やっぱり…私…には…お姉ちゃん…達…に…もっと…楽しく…できな…かった…のが…心・・・のこ…り・・・・・・・・」

少女は目を閉じ、握っていた手は剥がれおちた。

パープルハート「なっ！ちょっと！しっかりして！こんなところで死なないで！！」

パープルハートは叫ぶも、少女は二度と覚めることはなかった。

～回想終了～

ベール「あの子は最後まで、私達に人を傷つけることを止めさせましたわ」

ブラン「私達があいつを思う様に、あいつも私達にことを思っての行動かもしれんな…」

ブランは少し意気が墜ちている。

話を聞いた銀時やなのはやヴァルバトーゼ達はそれぞれ反応する。

新八「そんなことが・・・」

神楽「ネプっちはそんな過去があったあるか…」

桂「何と…」

銀時「あいつもそんな過去があったのか・・・」

なのは「辛かったんだね…ネプちゃん・・・」

フェイト（なんだかプロジェクトFが可愛く見える気がする…）

エリオ「悲しすぎます…！」

スバル「うぅ…ネプテューヌちゃん…」

アデル「その痛み、俺にも伝わったぜ」

アルマース「ネプテューヌさん…」
フーカ「ネプテューヌにもそんな事情があったなんて…」
デスコ「ネブデューヌざん、がなじずぎデズ～～！」

それぞれ思う中、フロンは、

フロン（私は、これまでいろんな愛を学んできましたが、これは応えますね。愛する相手を失った悲しみ。まるで昔のラハールさんみたいですね…）

フロンとラハールが出会った頃のラハールは、母を失ったことで愛をすべて否定してきたことを思い出すフロン。

アルティナ「ネプテューヌさん…」
ヴァルバトーゼ「ネプテューヌ…」

アルティナとヴァルバトーゼは悲しみに暮れているネプテューヌを心配する。
するとヴァルバトーゼがあることを思い出してネプテューヌに言う。

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌよ。一つ聞くがその少女の名は？」
ネプテューヌ「・・・ネリア」

元気のない声でその少女の名前を言う。

ヴァルバトーゼ「ではネプテューヌよ。そのネリアのために何をなすのだ？」
ネプテューヌ「ネリアのために…なすこと？」
ヴァルバトーゼ「そうだ。ネリアはお前達のこと思ってこの世を去った。なら、お前達はそいつのためにやるべきものを守る義務があ

るはずだろう？」

ネプテューヌは考え込む。

ネプテューヌ（そうかもしれない。ネリアは最後まで私達が人を傷つけることを避けた。もっとも私達を愛していたネリアはそれをさせたくなかったのかもしれない…）

ヴァルバトーゼ「それに、ここは魔界だ。もしかしたらそいつと会えるかも知れんぞ？」

ネプテューヌ「え？」

ネプテューヌは驚いたかのような顔になる。

アルティナ「ネリアさんがどんな人かは分かりませんが、きっと心清らかな方でしょうね」

フーカ「あ、そっか。心清らかな人の魂ってまれに天使になるってことだっけ？」

アルティナの言葉にフーカが納得する。

ヴァルバトーゼ「その通り、そのネリアなら天使になってお前達に前に現れるやもしれぬぞ？アルティナもその一例だ」

アルティナ「吸血鬼さん…」

ネプテューヌは再び考え込む。

ネプテューヌ（ネリアが天使になって…か。確かに、それならネリアに会えることが出来るかも。そして、ネリアに謝らないといけないかな。ネリア、こんな私を、許してくれるよね…）

ネプテューヌは自然と笑みが出る。

ネプテューヌ「ありがとう、おかげで元気が出たよ」

ヴァルバトーゼ「礼には及ばん。早く行くぞ」

ヴァルバトーゼが先導してネプテューヌ達はついていった。

ネプテューヌ（ネリア・・・何時か…会えるよね…？）

ネプテューヌは仲良しのあの子を思いながらついて行った。

？？？「覚えててくれたんだ、お姉ちゃん」

遠くからネプテューヌ達を見ていた天使がいた。

？？？「今から会いに行くよ、お姉ちゃん」

その天使はネプテューヌ達の後をついて行った。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

サチコ「こんにちは～。今日はサチコがアシストするよ～」

エトナ「意外と元気ねこの子。ま、いいわ。ペンネーム『鳴神　ソラ』から行くわよ。『マリオ「一言がバトンで埋まったから此処で感想を書くぞ」

ルイージ「ゲラコビッツの奴…何かを盗ったね…」

クッパ「一体何を盗んだのだ…」

ネス「それにしても…前回と今回の最後に出たのオリキャラらしいけど…」

リュカ「どうなるんだろう…」

ソニック「Ｈｅｙ，質問だぜ！『銀時を四文字熟語で表すならどんな感じになる？』」

ネス「真王さんに質問だけど…『ネプテューヌの妹さんは出て来るの？』」

リュカ「新八さんに質問『原作の現代の自分を見てどう思いますか

？；』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

真王「それなら銀時は馬耳東風が似合うと思いますよ。なんせ人の話聞かないことがあるし。あとネプテューヌの妹ですか？それはオイオイ出す予定ですが…妹さんのプロフィールが分からんので難しいです。さぁそして新八の答えは」

新八「別に変わっていませんね」

サチコ「それって自覚していないってこと？『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんの質問。』

上条

「いや～、また凄い戦いが始まったな。」

銀時

「全くだぜ、てかあっちの新八はまだ彼女出来てねぇのか？」

阿良々木

「そうみたいだな。」

上条

「そっちの新八さんに質問。　俺たちのところの新八さんに彼女が出来ました。　どう思う？　あと万事屋トリオと六課メンバーに質問。　『万時屋奇譚幕』の万事屋をどう思う？　以上！」』」

新八「ちくしょーーーーーーーーーーーーーー！！！羨まし過ぎるぞこんちくしょーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

新八は地面に突っ伏してどんどんと叩く。

相当悔しがっているようだ。

真王「それから彼らの意見では『銀魂関係なのに出番すくねぇじゃん!!』とのことです。『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい」

エトナ「えっと次はペンネーム『黒神』からよ。『黒神
「いやぁ、ベールもあんなにはやてに対する対抗心が見られて良かったぁ」

銀時
「最悪なんですけど!?こいつほんと最悪すぎじゃねぇか!!」

黒神の黒い表面に銀時は呆れている。

黒神
「ちなみに、はやてはベールに勝った気分で嬉しいようですよ」

銀時
「しらねぇよ!!」

黒神
「では質問します」

ベールへ

真王さんに桂と自分を中心としたシリアスを作ってもらえば？

椎名へ

僕の小説のシリアス『狂乱編』で桂は主役として活躍しましたが、
同じ動物好きとして桂に対する対抗心を燃やしていますか？

ゆりとマヨラーへ

僕の小説では銀時と桂は魔剣士となって活躍しました。
自分達も魔導士になって見たいすか？
特にマヨラーへ、無理してならなくて良いんじゃない？（黒笑）

銀時
「また喧嘩売るような質問かよォォォォ！！！」

黒神
「だってそうしたほうが面白いじゃん」

銀時
「面白いのはテメェだけだろうがァァァァァ！！！！」『…んじゃまず１つ目から」

ベール「そうしたいのは山々ですが、やはり私はそれはない方にしようと思います」

サチコ「意外だね。遠慮するなんて。次」

椎名「・・・浅はかなり」

サチコ「・・・えっと、なんて言ってるの？」

真王「『興味はない』…だ」

エトナ「通訳ありがとう。じゃ３つ目…」

ゆり「魔剣士？そりゃやってみたいわね」

土方「俺は・・・・・・・・・止めておくか」

エトナ「あっそう。『黒神』、廊下に立ちなさい」

サチコ「次はペンネーム『黒龍』さんだよ～。『黒龍』「次回はついに新キャラ登場ですね」

銀時「一体どんな奴なんだろうな」

ソラ「つうか、お前ら言う事そこだけか？」

黒龍「あ、それとパズルが凄かった」

銀時「そうだな。まぁ俺はパズル全然やらないけどな」

ソラ「他には？」

黒龍「ああそれと、ゲラビッツが何か企んでいましたね」

銀時「なんか、すんげぇロストロギア見つけたとか言ってたよな」

ソラ「とりあえず、もうこれ以上語る事はないな」

黒龍「そうですね」

銀時「そうだな」

ソラ「じゃあ最後に質問いくぞ。ヴァルトーゼに質問だ。お前、イワシ以外に好きな食べ物あるか？」

銀時「俺は真王に質問。あんたの一番好きなアニメとゲームはなんだ？」

黒龍「じゃあ俺は最近ネプテューヌ以外出番が減っている女神三人に質問。最近の自分達の出番のなさについてどう思いますか？〈黒笑〉」

ソラ・銀時
（（こいつ、たまに黒くなるよな））」

ヴァルバトーゼ「俺の好きな物はイワシ以外など有り得んと！」

真王「アニメでは『なのは』『銀魂』『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』『フェアリーテイル』・・・ゲームでは『魔界戦記ディスガイア』『東方』『マリオシリーズ』『超次元ゲイムネプテューヌ』・・・。ただガンダムのようなロボアニメや格闘ゲームは嫌いです。そして３つ目は」

ノワール「まぁこれはネプテューヌがメインみたいなものだし」

ブラン「別に興味はない」

ベール「ねぷねぷにやらせてあげましょう」

サチコ「あれ？意外だね」

サチコは予想と違う反応したことに驚く。

エトナ「んじゃ『黒龍』、廊下に立ちなさい」

真王「そして『鳴神　ソラ』さんのバトンを公開します」

『上から順にマリオ、ルイージ、ソニック、クッパ

■0．ダンジョン突入

「行こうぜ！」

「行こう！」

「レッツゴー！」

「ガハハ！行くぞ者共！」

■1．エンカウント・通常

「バトル開始だな」

「バトルだね」

「速攻で行くか」

「行くのだ！」

■2．エンカウント・格上

「なかなか強そうだな」

「うわぁ…強そうだな；」

「おっと、他の奴等より強そうだな」

「皆の者！引き締めるのだ！」

■3．エンカウント・格下
「小さいの出たな」
「これなら簡単に行けるね」
「速めに済ませるか」
「我輩だけで十分なのだ！」
■4．勝利
「次に行くか」
「やったね」
「また遊んでやるぜ」
「ガハハ、もう終わりなのか？」
■5．楽勝
「簡単に終わったな」
「楽勝だね」
「楽勝だぜ～」
「不甲斐無い奴等だ」
■6．辛勝
「なんとか勝てたな」
「なっ、なんとか勝てた；」
「ふう～こう言う時もあるさ」
「ぬぅ…今のはやばかったのだ…」
■7．戦闘不能
「マンマミーアー」
「マンマミーアー；」
「ノォ～～」
「ぐのぉぉぉ…」
■8．戦闘復帰
「復活！」
「ありがとう！また頑張るよ！」
「サンキュー♪」
「助かったのだ」

■９．エンカウント・奇襲
「奇襲か！」
「うわぁ！どこから着たの！」
「おっといきなりだな」
「後ろから来るとは…」
■１０．アイテム使用・自分
「アイテムを使うぜ！」
「使わして貰うよ」
「使用するぜ」
「使用するぞ」
■１１．アイテム使用・相手
「これを使え！」
「大丈夫？」
「Ｈｅｙ，アイテムだぜ」
「このアイテムを使うのだ」
■１２．宝箱・普通
「おっ、アイテムだな」
「あっ、アイテムだ」
「どんなのが出て来るのやら」
「おっ、アイテムなのだな」
■１３．宝箱・レア
「レアアイテムだな」
「レアアイテムゲットだよ」
「ゲット♪」
「ガハハ、良い物を手に入れたのだ」
■１４．宝箱・レジェンド
「これは伝説の…」
「うわぁ！凄いの手に入れちゃった！」
「ひゅ～～まさかこう言うの手に入るとはな」
「これは伝説のアイテムなのだ」

■１５．仕掛け（扉）
「よいっしょ！」
「う～んしょ」
「はっ！」
「どっせい！」
■１６．仕掛け（オブジェ移動）
「よいしょ！」
「よいしょ、よいしょ！」
「せえの！」
「こんなの楽勝なのだ」
■１７．仕掛け（スイッチ）
「スイッチか？」
「何が起こるんだろう」
「スイッチか…押さなきゃ進めないのか？」
「スイッチなど押して見るに限るのだ！」
■１８．コンボリンク
「連続で行くぞ！」
「もう１回！」
「決めてやるぜ！」
「手を緩めずにもう１回なのだ！」
■１９．バトンタッチ
「此処は任せるぞ」
「ごめん、任せた」
「頼んだぜ！」
「此処は頼むのだ」
■２０．トラップ（トゲ）
「いたっ！」
「あいた！？」
「おうち！」
「ぬぉっ！？」

■２１．トラップ（ヤケド）
「あち！炎系か」
「あつっ！？」
「熱すぎるぜ！」
「尻尾が焼けるのだ！」
■２２．トラップ（毒ガス）
「毒ガスか！？」
「気分が…」
「やばいで…」
「なんと毒だと！？」
■２３．トラップ（グルグル）
「やべえ…目が…」
「目が回るよ～」
「こんなの屁でもないぜ」
「ぬぉぉ…複数に見えるのだ～」
■２４．トラップ（ビリビリ）
「体が痺れる…」
「あびゃびゃびゃびゃ！！」
「痺れるぜ！」
「し～び～れ～る～の～だ～」
■２５．トラップ（トランポリン）
「うわぁ！」
「ひゃあぁ！」
「おっと！」
「のわぁ！？」
■２６．トラップ（爆弾）
「どわぁ！」
「ひえぇぇぇ！」
「うわぁ！」
「ぶぼっ！」

■２７．トラップ（タライ）
「あいた！」
「何でタライ？」
「いて！」
「どう言う風に仕掛けられてるのだ？」
■２８．トラップ（虫）
「虫の大群か！？」
「虫が来たぁぁ！」
「おっと！」
「虫に埋もれるぅぅ！！」
■２９．トラップ（落下）
「うぉおおお！！」
「うわぁぁぁぁ！！」
「のぉ～～～～～！！」
「ぐおぉぉぉぉ！！」
■３０．トラップ（モンスター）
「モンスターか！」
「モンスターが来た！」
「モンスターが着たな」
「なんとモンスターが降って着たのだ」
■３１．回復
「良し！回復したぜ、サンキュー」
「ありがとう！おかげで助かったよ」
「センキュー！」
「おかげで大暴れ出来るのだ」
■３２．自己回復
「回復だ」
「回復しないと」
「自分で回復するぜ」
「我輩自身出来るのだ」

■３３．味方回復
「大丈夫か？今回復するぞ」
「今回復するね」
「回復させるぞ」
「今回復させるのだ」
■３４．ガード
「ガード」
「防御しなきゃ！」
「防御するぜ」
「防御なのだ！」
■３５．ジャンプ
「ジャンプ！」
「やあ！」
「とう！」
「なのだ！」
■３６．持ち上げ
「よいしょ！」
「うんしょ！」
「よっと」
「軽いのだ」
■３７．投げる
「喰らえ！」
「いっけえ！」
「プレゼントだ！」
「喰らえなのだ！」
■３８．コンティニュー
「コンテニューか…」
「コンテニューする？」
「コンテニューだぜ」
「コンテニューするのだ！」

■３９．死亡、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ
「ゲームオーバーか…」
「此処までなの…」
「まだまだ行ける筈だぜ！」
「ゲームオーバーなど納得行かんぞ！」
■４０．レベルアップ
「レベルアップ」
「レベルアップだよ」
「レベルアップ♪」
「レベルが上がったのだ！」
■４１．待機
「一眠り、一眠り」↑寝転がる
「よいしょ」↑屈伸
「足を暖めないとな」↑準備運動する
「暇なのだ…」↑座っている
■４２．待機２
「ｚｚｚｚ」↑寝ている
「うんしょ！」↑体操している
「まだか？」↑足をトントンしている
「うむ、大丈夫だな」↑甲羅の汚れを確認している。
■４３．必殺技
「行くぜ必殺技だ！」
「これで決めるよ！」
「決めてやるぜ！！」
「我輩の力を見せてやるのだ！」
■４４．クエストクリア・ランクＥ
「う～ん、もうちょい修行がいるな」
「あそこでドジを踏んだからかな？」
「ノウ…悪すぎだぜ」
「残念無念なのだ」

■４５．クエストクリア・ランクＤ
「もっと行ける筈だ」
「この次は頑張ろう！」
「行ける筈だろ？」
「これは後でまたやるのだ！」
■４６．クエストクリア・ランクＣ
「普通だな」
「これはこれでよかったかな？」
「普通だな」
「真ん中なのだ」
■４７．クエストクリア・ランクＢ
「後少しだな」
「良かった～」
「もう少しで高ランクだな」
「我輩がいるからもう少しあげるのだ」
■４８．クエストクリア・ランクＡ
「良し！ランクＡだな」
「やった！ランクＡだよ！」
「これ位朝飯前さ♪」
「ランクＡクリアなのだ！」
■４９．クエストクリア・ランクＳ
「良し！ランクＳゲット！」
「凄いよ！ランクＳだ！」
「楽勝だぜ♪」
「ガッハハハ！我輩がいるのだ！ランクＳなど当たり前なのだ！」
■５０．回す人
「ハルルに回すぞ！」
「Ｇ－３Ｘさんに回すよ」
「月光閃火にバトンを回すぜ♪」
「龍牙に回すのだ！」

…バトンはこんな感じで』

真王「いかがでしょうか。それでは次回を待て」

エトナ「あ、それから次回はネプテューヌがアシストするから」

第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい（後書き）

真王「次回はゲラビッツとの対決！そしてあの子も登場！」

ネプテューヌ「次回『ほったらかしにされたら誰だって怒る』テイクオフ」

第五十八訓：ほったらかしにされたら誰だって怒る（前書き）

真王「ゲラビッツが盗んだロストロギアの正体が！」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ！」

第五十八訓：ほったらかしにされたら誰だって怒る

ネプテューヌ達は次々と敵を倒し、研究所の屋上へとたどり着いた。

ゲラビッツ「よく来たな！お前達！」

ゲラビッツは堂々という。

ゲラビッツ「まさか我の部下達でも止められぬとは予想外だな。だが、奥の手というものは最後に取っておくべきと思わんか？」

マオ「うむ、同意見だ」

デスコ「ラスボスの勉強になるデス」

アルマース「参考にしちゃダメです」

同意するマオとデスコにアルマースは突っ込む。

ゲラビッツ「本来ならまだ使う気はなかったんだが、いた仕方あるまい」

そう言って取り出したのは３つの黒い宝石だった。

銀時「！？そいつは！」

全員「ダークソウル！？」

ゲラビッツ「その通り！こいつはダークソウル！闇の心を持つ者に力を与える優れモノなのさ！」

ダークソウルのことを説明するゲラビッツ。

なのは「あなた…それを何処で！」

ゲラビッツ「よくぞ聞いてくれました！何と個のダークソウルはロストロギア保管所にあったものから盗んだのだ！」

なのはたちはそれを聞いて驚愕する。

ゲラビッツ「管理局上層部が手に入れたこのダークソウル…今こそ力を試すとき！」

フェイト「や、やめてぇ！！」

ゲラビッツ「止めない♪ダークソウルよ！我に力を与えよ！！」

ゲラビッツは狂った笑いを浮かべてダークソウルに命令する。

ダークソウル「・・・・・・・・・」

が、なぜかダークソウルは反応しない。

ゲラビッツ「お、おいどうした？ダークソウルよ、お前は闇の大きいものにしか聞かないはず……ん？待てよ…」

ゲラビッツは何かを思い出してなんか装置みたいなものを出す。

そしていろいろといじっているとゲラビッツは驚いた顔になる。

ゲラビッツ「何つうこった…まさか我よりも大きな闇を抱える奴がいるなんて…」

なのは「えっ？」

ティアナ「ど、どういうこと？」

ゲラビッツ「分からんのか？お前らの中にとびっきり強い闇を抱えている奴がいるんだよ！」

ゲラビッツの言葉に全員が驚いた。

ゲラビッツ「ダークソウルを従うことが出来るのは大きな闇を抱える者なのに、我の闇よりも大きな奴がいる」
銀時「おいおい、そりゃ誰だ？」

銀時が聞く。
ノワール、ブラン、ベールはもしやと思い始める。

ゲラビッツ「それはな・・・・・・そこの紫髪の子だよ！」
全員「なに！？」
ネプテューヌ「え？」

ゲラビッツの衝撃的なことに全員が驚く。
特にネプテューヌが一番驚いたようだ。

ゲラビッツ「その小娘から強力な闇を感知されているぞ～。しかもその闇は“人間に対しての憎悪”と“失ったものの深い愛情”のようだ！」

衝撃的な事実に驚きを隠せない銀時達。

ノワール（クッ…、なんてこと・・・私達があの事を話したせいでネプテューヌにまた闇が生まれてしまった…）

ノワールもブランもベールも、あの事を話したせいでひどく後悔した。

ゲラビッツ「クッソ～、我の命令も聞けないんじゃどうすればいいんだよ！」

ゲラビッツが悔しがっていると、ダークソウルが光る。

ダークソウル「簡単ダ、貴様ガ死ネバイイ」

そしてゲラビッツの真上に黒い光の球が現れる。
何やら黒い電気がバチバチと音を鳴らしている。

ゲラビッツ「うわ…死ぬ場面がやってくると思ってたけどまさかこんな形で死ぬなんて…」
ダークソウル「当タリ前ダ。死ネ」

黒い光の球から、黒い稲妻がゲラビッツに向かって落ちてきた。

ドンッ！バーーーンッ！！

ネプテューヌ「グウゥッ！！」
銀時「なっ！？」
スバル「ネプちゃん！？」
こんぱ「ねぷねぷ！？」
ヴィヴィオ「おねえちゃん！？」

何とネプテューヌがゲラビッツを突き飛ばして代わりにダークソウルの攻撃を受けたのだ。

ダークソウル「自ラ犠牲ニシテ前ヘデルカ。ダガ好都合ダ」

ダークソウルは手のような黒い何かを出し、ネプテューヌに近づく。

ダークソウル「サテ、貴様ノ闇ヲイタダク」

ダークソウルはネプテューヌに手をかざすと、ネプテューヌから黒い靄のようなものが手に吸い込まれていく。

ネプテューヌ「グ、ウウゥ・・・」
フェイト「な、なにあれ？」
ゲラビッツ「あれは彼女の闇の元素だ！全部吸い取られたら一生あいつの下僕となっちゃうよ！」

ゲラビッツの説明に全員が驚愕する。

銀時「ちっ！待ってろ！今助けｎ「バチィッ！！」グオッ！」

銀時がネプテューヌを助け出そうとすると、黒い障壁が銀時を拒んだ。

ダークソウル「フン、我ノ邪魔ヲスルナ。小娘ヨ、我ガシモベトナレ」
？？？「そうはさせないわ！」
ダークソウル「ム？」

何処からか少女の叫びと共に白い閃光が飛んできた。
閃光は障壁をつらぬいたが、ダークソウルは紙一重でかわす。
ピンク色のロングヘアーで胸はシグナム級のバストを持っていて身長はスバルくらい、そして極めつけは背中に天使の羽がある少女だった。

ダークソウル「キサマカ！」
？？？「これ以上あなたの好き勝手させるわけにはいかない！」

少女は弓を構えてダークソウルに言う。

ダークソウル「シツコイヤツメ！ソコマデシテ死ニタイヨウダナ！」
？？？「なんとでも言いなさい！神兵長様に活せられた使命、ここで果たす！」
ダークソウル「ホザケ小娘！中途半端トハイエコヤツノ闇ノ力ヲミセテヤルカ」

ダークソウルに闇がまとわりつく。
そしてはれるとそこにはパープルハート・・・のようだが目は赤く、体も髪も黒い。

ダークソウル？「・・・なんだこの妙な体の奴は？・・・ああ、我か」

声もほぼパープルハートそっくりである。

ダークハート「そうだな。この体の名前をとってダークハートと名乗って置くか」
？？？「下種め！人に化けるなど！」
ダークハート「黙れ小娘が！…ちょうど良い、この体の性能を試してみるか」

ダークハートが剣を持ち、少女に切りかかる。
少女は懐から剣を取り出してそれを防ぐ。
反撃に少女は体を回転させて薙ぎ払うが、ダークハートはそれをかわす。
次の瞬間目にも止まらぬ速さで少女がダークハートに切りかかった。
ダークハートはそれに気づいて防ぐ。

銀時「なんだこいつは・・・」

桂「あの動き、あのしなやかさ…形は違えど、あの少女は我々と同じ侍の匂いがするな…」
月詠「イヤ、絶対に侍になれるもんではないぞ?」

銀時と桂が驚くが、月詠は桂のセリフに突っ込む。

ノワール（あの動き…あの剣さばき…あれは私の戦闘ポジションみたいだわ）

ノワールは少女の動きを見て推測する。

ノワール（私のだけじゃない。ブランの動きかたやベールの攻撃作法、そしてネプテューヌの身軽さもよく似ている。もしかしてあの子は・・・）

ノワールは少女の正体を予測した。

ダークハート「フンッ」
??「きゃあっ!」

だが少女はダークハートの足払いを受けて転んでしまう。

ダークハート「油断したな!死ね!」
??（しまった!やられる!）

少女は目をつぶる。

ガキィンッ!!

ダークハートの剣が止められた。少女は目を開けると、ネプテュー

ヌが防いでいた。

銀時「ネプテューヌ！」

ネプテューヌ「ハァアアアアアアアアア！！！」

ネプテューヌはダークハートを弾き飛ばした。

ダークハート「おい貴様、なぜ赤の他人を救うのだ？」

ネプテューヌ「・・・この人が赤の他人だって頭で理解しているよ。だけど、このまま黙って見過ごすのはどうしても出来ないって心が叫んだんだよ！」

ネプテューヌが少女を助けた理由を言う。

ネプテューヌ「でも、なぜだか知らないけどこの人が他人って思えないんだ。なんか、とても懐かしく、そして、この人がもしかしてって思うの」

ネプテューヌが少女に向く。

ネプテューヌ「ねぇ、あなたはもしかして・・・」

そして、少女の名を口にする。

ネプテューヌ「・・・ネリア、なの？」

ネリア？「・・・・・・・・・」

ネリアと呼ばれた少女は黙っている。

なのは「ね、ネリアって…」

ティアナ「確か、ネプテューヌさん達と一緒にいたあの…」
エリオ「でも５０年前の子供で…」
スバル「違法研究で生まれ…」
桂「そして死んでしまったあの少女…まさか」

なのは達はネリアという名の少女のことを思い出す。

ネリア？「私がネリアってことはどうして分かるの？」
ネプテューヌ「それはね…日本の首都は？」
ネリア？「滋賀！千葉！佐賀！」
ネプテューヌ「隣の客は？」
ネリア？「よく客食う客だ！」
ネプテューヌ「三歩進んで？」
ネリア？「二歩下がる！」
ネプテューヌ「ノワールの趣味は？」
ネリア？「声優兼バンド願望者！」
ノワール「こらーーーー！！」

ノワールが怒る。
って言うかスッゴイノリがいいネプテューヌと少女。

ネプテューヌ「最後に、ハーケン…」

ネプテューヌ・ネリア？「ダーーーーツ！！」

ネリア？「…ってはっ！？」

少女は今頃乗せられたことに気づく。

ネプテューヌ「やっぱり…『人が聞いたことを素早く答える』、こ

れは私がネリアに教えた教訓だもん」
銀時「凄い教訓作法だなおい…」

銀時は呆れる。

ネプテューヌ「そっか、あなたはやっぱりネリアなんだね」
ネリア「・・・ばれたら仕方ない。そうだよ、お姉ちゃん」

少女・ネリアは本人だと認める。

ノワール「やっぱりね」
ブラン「微妙に見覚えがあった」
ベール「雰囲気が少し似ていましたしね」

ノワール達も納得したようだ。

ネプテューヌ「やっぱり…ネリアーーーーー！」
ネリア「お姉ちゃーーーーん！」

2人はお互い駆け出し、感動の再会を果たす…

ネプテューヌ「このバカたれーーーーーー！！！」

バキッ！

ネリア「ゴハッ！！」
女神組以外全員「エエ～～～

周りは皆驚いている。
ネプテューヌは倒れたネリアに、コブラツイストで絞める。

ネプテューヌ「この馬鹿！人が悲しいほど心配させて！！」
ネリア「イダダダダダダダダ！！ごめんごめん！ごめんなさいですから離してお姉ちゃん！」
ネプテューヌ「ゴメンで済んだら神も仏もいらないよ！大体天使にでもなったら何か手紙でもくれたらよかったんじゃないの？」
ネリア「そうしたかったんだけど仕事が忙しくって出すに出せなかったの！」
ネプテューヌ「言い訳すんな～～～！！」
ネリア「グエエエエ！ギブギブギブ！」

絞める強さをあげるネプテューヌ。

ネプテューヌ「今思いだしたんだけどネリア昔トマトジュースとタバスコを間違えて私に火を吹かせたよね？」
ネリア「ゲッ！そ、そこまで覚えてたの？」

ネリアは冷や汗を流す。

ノワール「私なんかジュースこぼしてギターを台無しにされた記憶があるわ」
ブラン「私は読みたかった本を燃えるごみと一緒に捨てたことが…」
ベール「私はお気に入りのゲーム『ドキドキメモリアル』のカセットごと踏ん付けられて壊しやがったことがありますわ」
ネリア「・・・」

ネリアは滝のように汗を流す。
ネプテューヌ達は今までネリアにしてやられたことを思い出して黒

い気を出している。

ネリア「で、でも「ネリア！そこに座れ！」はいっ！！」

ネリアはビシッ！と正座する。

ネプテューヌ「あれからどんな感じに変わったかと思えばやっぱり変わってないというか…」

ノワール「って言うかあなたこの前のことちゃんと反省してるでしょうね？」

ブラン「テメェには後でパシリをさせてもらう」

ベール「これから二度とあのころのようなことはしないと言えますね？」

ネリア「は、はい…（来るんじゃなかったかな…）」

ネプテューヌ達の説教が始まった。

アイエフとコンパは力なく笑う。

ネリア「あの…私今任務「誰が口出ししろといった？」ゴメンナサイ」

ダークソウルのことを言おうとしたら、無理であった。

数十分後…

ネプテューヌ「・・・っというわけで、ネリア、ちゃんと決まりは守ってね」
ネリア「は、はい…（足がしびれた…）」

やっと説教が終わった。
ネリアは立ち上がろうとするが、長く正座してたため足ががくがくである。

ダークハート「もう話し合いは終わりか？」

ダークソウルは仁王立ちして待っていた。

ネプテューヌ「あ、待っててくれたんだ」
ダークハート「このまま手を出すのはあまりいい気がしないんでな。用が済んだなら始めるか」

ダークハートは剣を構える。

銀時「おい偽ネプテューヌヤロー。テメェがどうしようが俺の世界に入った奴は誰であろうと許さん」

銀時は木刀を構える。

ダークハート「貴様は・・・・・・・・・・・・・・ふむ、成程な」
銀時「あん？なにがだ？」
ダークハート「白き侍よ。貴様は誰であろうと許さんと言ったが、この者は切れるのか？」

ダークハートが魔方陣を出して一人の真っ黒な人間を召喚する。
その人物を見て、銀時と桂が驚愕した。

銀時「なっ!?」
桂「馬鹿なっ!!な、なぜっ!?」
ダークハート「驚くのも無理もないな。なんせ死んだお前達の『恩師』が目の前にいるからな」

ダークソウルがあざ笑うかのように言う。
召喚されたものは、ほとんど黒いが、その姿はまぎれもなく銀時と桂、そして高杉の恩師である吉田松陽(よしだしょうよう)なのだ。

ネプテューヌ「…あの人は一体」
桂「あの方は、俺達や銀時の師匠であり、先生でもあった吉田松陽(よしだしょうよう)というお方だ」
全員「えっ!?」

桂の説明に驚く。

コンパ「た、確かその人は桂さん達が攘夷戦争を始める前に処刑されてて…」
アイエフ「ってことはあの人は偽物だわ!」
桂「見た目で分かるようにそうだ!銀t「バシィ!」うわぁ!」

桂は見えない何かに阻まれた。

ネリア「これは結界!?それもかなり強力だわ!」
なのは「どうしよう!壊せそうにない!」
ネプテューヌ「あれ?銀さんだけ外だ」

どうやら銀時以外は結界に閉じ込められたようだ。
銀時は偽松陽を見て固まっている。

桂「銀時！動くんだ！その先生は偽物だ！切らなければやられるぞ！」
ダークハート「こいつがその人に切る覚悟があればだけどな」

ダークハートは嘲笑う。

銀時「・・・お、おれは・・・切れねぇ…」
新八「何言ってるんですか銀さん！！」
神楽「そうネ！銀ちゃんさっさと倒すネ！」
フェイト「銀時！先生がどんな人か知らないけどその人はダークソウルが作った幻影、偽物だよ！」

新八たちが言うが、銀時はわなわな震えていう。

銀時「俺は切れねぇ！頭で分かっていても…偽物だとしても…俺はこいつを…先生を切れねぇ！！」

つらそうな顔をして拒否する銀時。

桂「銀時…お前…（やはり銀時…先生のことを…）」
ダークハート「どうあっても切れないようだな？だったら」

偽松陽は銀時に近づく。
そして刀を振り上げる。

ダークハート「その先生に殺されてろ！」

ネプテューヌ「銀さん！！」

叫び虚しく銀時の上から刀が下りてくるのだった。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

ネプテューヌ「こんにちは、ネプテューヌがアシストするよ」

エトナ「そんじゃ行くわよ。ペンネーム『鳴神　ソラ』から行くわよ。『マリオ「ネリアの言う通りだな…もしあのままネプテューヌ達が力を振れば自分達と同じ事を起こそうとする奴が増えるかもしれないからな…」

ルイージ「それで分かったね…」

クッパ「うむ…次回でちゃんと出そうだな…」

ネス「ゲラコビッツが盗んだのは…」

リュカ「どうなるんだろう…」

フォックス「そんな訳で質問『４人のバトンでのセリフはどうだった？』」

ネス「スバルさん達に質問『ここんとこの自分達の出番についてどう思いますか？』」

リュカ「同じく質問ですけど…『なのはさんを４文字熟語で表すならどんな感じ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

真王「それでは１つ目と３つ目は私が。いろいろと凝りました。なのはの四字熟語は多分、全力全壊ではないでしょうか。そしてスバルたちはというと」

スバルたち「出番がな～～～～い！！！」

真王「ハイあんな感じです。では『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次、ペンネーム『支配者』さんからの質問。『今回は感動的でしたね。質問です。真王さんは次は何とコラボさせるつもりなんですか？もう少し激しいバトルが多い作品とコラボさせると面白いともいますよ。後ベールに質問。自分の事をドSだと思い

ますか？』」

真王「ネタばれしちゃ面白さが減ります。少し明かすと銀河の世界ですね」

ベール「さぁ？どうでしょうね？」

エトナ「・・・あれ分かってて言ってるの？まあいいわ。『支配者』、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』からよ。『ネプテューヌにも哀しい過去があったとはな…何か切なくなってきたぜ…。

輝刃「だな…。さて、質問…行くぞ？」

1．ネプテューヌに質問…もし身体が大人になったら何がしたい？

ハハハ…よくある質問だよな…。次は俺からだ。

2．キャロに質問…もし身体が大人になったとして、戦国ＢＡＳＡＲＡシリーズの女性キャラの衣装が着れたら何を着たい？

輝刃「なるほど…なかなかに面白い質問だな…。さて…バトンが来たな…どうする？」

やるっきゃないっしょ♪ただ、ちょっとばかし端折りな所があるが…そこは堪忍な？』」

ネプテューヌ「私なら銀さんに告白…かな？」

エトナ「さり気無くムカつく。んで2つ目は」

キャロ「どれも着ません」

エトナ「あっそ。『月光閃火』、廊下に立ちなさい」

ネプテューヌ「次だよ、ペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍「なるほど、ネプテューヌにも辛い過去があったんですね」

ソラ「ネプテューヌもネプテューヌなりに抱えている事があるって事だな」

銀時「普段は食う事しか考えていないけどな」

高杉「くくく、それにしても、ネプテューヌの野郎も勿体ない事しやがる。自分の黒い獣の声の従って憎しみを開放すればいいのによぉ」

黒龍「うわっ、かなり歪んでる！」

ソラ「高杉は先生が死んでからこうなったからな」

銀時「つうか、お前まで感想出てくんじゃねぇよ」

高杉「良いじゃねぇか。俺は俺のしたいようにするからな」

黒龍「相変わらず何を考えている読めない・・・」

ソラ「しゃあない。質問いくか？」

黒龍「そうですね。じゃあリリカルメンバーと女神メンバーに質問

です。今こっちの小説では攘夷戦争編が始まっていますが、攘夷戦争を見てどう思いますか？」

ソラ「俺からも質問だ。あんぱんばっかり食べている山崎の事をリリカルメンバーはどう思う？」

高杉「最後に俺から質問だ。くくく、ネプテューヌ。無理せずに自分の憎しみに従う方が良いと思うぜ。自分の黒い獣の声に従ってな」

銀時「おい、なんか最後に余計な質問が入ってきたぞ！」

黒龍「ま、まぁたまにはいいんじゃないですか・・・」

ソラ「はぁ～まったく・・・」『・・・・・・・・・・・・』

ノワール「悪いけど語れることはないわ」

ブラン「・・・ノーコメント」

ベール「しゃべる気も起きません」

どうやら４女神もリリカルメンバーも攘夷戦争に対しての言葉はないらしい。

ネプテューヌ「って言うか山崎さんあんぱんって…」

全員「そりゃないでしょ？」

ディエチ「私は山崎さんと…」

エトナ「あ～はいはい、あんたはほっといて、３つめ」

ネプテューヌ「・・・悪いけど私は人を殺めるのは絶対にしない主義なの！」

ダークソウル「本当ニソウカ？我ガ貴様ノ闇ヲミテヤロウ」

ネプテューヌ（闇の心）「許さない！ネリアを！私達の家族を奪った人間どもに！そしてなにもしなかった奴らに！すべてホロボシテヤル！」

真王「うわこりゃ危険だ！『黒龍』さん！絶対に闇に飲まれないでね！」

エトナ「んじゃ最後に『黒神』でしめるわよ。『質問します。

スバルへ

僕の小説では貴女はメインヒロインとして活躍して、しかも貴女が主人公の外伝小説もあります。
そんな自分を見てどう思いますか？

シグナムへ

もし、レヴァンティンをパワーアップさせるのであれば、どんな感じにパワーアップして欲しいですか？

ぱっつぁんへ

僕の小説では銀時はもちろん、神楽もエリオと良い感じになっていますので、遅れをとった貴方は焦っていますか？

以上です。』順番に答えるならこうね」

スバル「う～ん、嬉しいような複雑な気分です」

シグナム「出来れば火力上昇と鋭さをあげようと思う」

新八「あ、焦ってねぇっしゅ！！」

真王「あ、噛んだ。『黒神』さん。廊下に立ってなさい。そして『月光閃火』さんのバトンがあります」

『バトン行くぜ～♪

1．ダンジョン突入
「よし！いっちょ行くとするか！」
2．エンカウント
「ハハハ…来いよ来いよ！」
「う～ん…こりゃ長引きそうだな…（汗）。」
「チョロい相手か…まぁいい…行くぜ！」
3．勝利
「よし！次行くぜ！」

「何とか勝てたか…ふぃ～…。」
「ハハッ…楽勝～♪」
4．戦闘不能
「クソッ…やられちまったぜ…。」
「俺とした事が…ドジっちまったぜ…。」
5．戦闘復帰
「よっしゃ！ふっか～つ！」
「完全復帰！バリバリ行けるぜ！」
6．奇襲
「チィッ…！？不意を突かれたか！？」
「オイオイ…そりゃ卑怯だぜ！？」
7．アイテム使用
「アイテムを使うか…。」
「ほら…使えよ。」
8．宝箱
「何が入ってるかな～？」
「ハハッ…こりゃ何が来てもラッキーだな♪」
「伝説クラスか…楽しみＭＡＸだぜ！」
9．仕掛け
「これは…押さなきゃならんな…。」
「よっこ～らせ…っと！」
10．コンボリンク
「もっかい…行っとくか。」
「逃しゃしねぇよ…もっかい行くぜ！」
11．バトンタッチ
「わりぃ…後任せた！」
「こっから先は…アンタにやらせてやるぜ。」
12．トラップ
「あだっ…！」
「アチチチチ…熱い熱い！」

「クソッ…毒ガスかよ！？」
「はぅ～…目ぇ回るぅ～…。」
「アバババ…！！」
「飛～んでいくううううううぅぅぅぅぅ……。」
「アイタ…！」
「何で虫ィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！？！？！？」
「落ちるううううぅぅぅぅ……。」
「オイオイいきなりモンスターかよ…（鬱）。」
１３．回復
「おっ、回復したぜ…サンキュ♪」
１４．自己回復
「よし！回復したな…。」
１５．味方回復
「待ってろ…今回復させたるからな…。」
１６．ガード
「その攻撃…防いだ！」
１７．持ち上げる／投げる
「よいしょ…と。」
「そぉらよっ！」
１８．コンティニュー
「ハッ…！！まだまだやれんだよ！！」
１９．死亡、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ
「クッ…！俺は…まだまだ…！！」
２０．レベルアップ
「よっしゃ！レベルアップだ！！」
「これでまた一つ、強くなれたぜ。」
２１．待機
「さぁて…待ちますか。」↑クールに佇む
「んしょ…んしょ…。」↑準備運動中
２２．必殺技

「見せてやるぜ！俺の超絶秘技を！！」
「森羅万象の理(ことわり)を以て…穿て、暗冥の悪しき闇を！！」
２３．クエストクリア
「う～ん…こりゃダメだな…。」
「フゥ…最下位よりはマシか…。」
「まだまだ未熟か…。」
「まぁまぁ…って所かな？」
「ま…こんなもんかな。」
「あと一息って所だな…頑張らないと！」
「ここまで来れたか…フフッ…（微笑）♪」
２４．回す人
「出来ればでいいから、これを見てくれてる人が回してくれたら幸いかな…へへっ…（照笑）。」』
真王「はいそんなわけで、次回はネリアがアシストします。では」

第五十八訓：ほったらかしにされたら誰だって怒る（後書き）

真王「銀時ピンチ！しかしそこに援軍が現れる！！」

ネリア「次回『味方は遅れた時にやってくる』テイクオフです」

第五十九訓：味方は遅れた時にやってくる（前書き）

真王「今回強い味方が登場だ」

ネリア「『リリカル銀魂』始まります」

第五十九訓：味方は遅れた時にやってくる

前回のあらすじ

ダークソウルがゲラビッツを裏切って、ネプテューヌがダークソウルの攻撃を受ける。
そしてダークソウルはネプテューヌの闇を奪い、ダークハートへ変身した。
そこに現れたのはネプテューヌ達の養子で実験の生き残りだった天使、ネリアと再会する。
しかしダークハートは卑怯なことに銀時と桂の恩師、松陽の偽物を召喚させた。
銀時以外は全員ダークハートの結界に閉じ込められ、銀時は松陽の姿に動けない状況になっていた。

そして偽松陽の刀が銀時に振りかざす。

ダークハート「その先生に殺されてろ！」
ネプテューヌ「銀さん！！」

叫び虚しく銀時の上から刀が下りてくる。

ガキィンッ！！

突然誰かが偽松陽の刀を弾いた。

？？？「いや～、危なかったぜよ」

その人物はボサボサした髪に洋服にサングラス、下駄を身に付けて

いる気軽そうな男であった。
銀時と桂はその人物を見て驚いた顔をする。

銀時「お・・・お前は！」
桂「辰馬!?辰馬じゃないか！」

銀時と桂は辰馬を見て驚きだす。
2人を見た辰馬は懐かしそうに銀時と桂を見る。

辰馬「おおー、金時にヅラァ！こんな所で会うとは思いもよらなかった！」

辰馬は両手を2回叩いて愉快そうに言い出す。

辰馬「酒じゃあ！酒をたっぷりと持ってこ・・・・」

言いかけた途中で銀時と桂に思いっきりぶん殴られて倒れる。

銀時「だからぁ、いつも言っているだろうがー！金時じゃなく銀時だ！」
桂「それにヅラじゃない桂だぁ！」

辰馬をボコボコにしている銀時と桂を見てフェイト達は唖然とし、神楽とエリザベスは辰馬のボケっぷりに呆れだす。
そしてスバルは恐る恐ると聞き出す。

スバル「あのう・・・銀さん、この人の知り合いですか？」
銀時「ただの腐れ縁だ！・・・・この馬鹿は坂本辰馬（さかもとたつま）！大富豪の息子で、現在は星間貿易業『快援隊』を営みながら、気ままに大宇宙を渡り歩いている馬鹿で・・・俺達と同じ攘夷志士の1人だ」

銀時がそう言うと、フェイト達は「えぇぇぇ～～～～～～！！」っと驚きだす。

辰馬「いやー、それにしてもこんなにも大勢の別嬪さんが大勢おるとわなぁ・・・ん？」

辰馬はベールと眼があった。

辰馬「お譲さ～～～ん！ワシとデート「おとといいきやがれですわ♪」ボブッ！」

辰馬はベールの回し蹴りで蹴飛ばされる。
その時ベールの絶対領域が目に入った新八は、「グハッ！」と鼻血を出したとか。

桂「何やってるんだお前はァァァァァァァ！！！！」

桂はバカ行動した辰馬にシャウトする。

ネリア「辰馬さん！そんなことやってないで皆さんを助けてやってください！」

辰馬「いや～、すまんすまん。凄い別嬪さんがいたもんじゃからつい」

手を前に出してごめんごめんと謝る辰馬。

銀時「って言うか辰馬、何でこいつと知り合いなんだ？」

銀時がなぜ辰馬がネリアの知り合いなのかと聞く。

ネリアはこいつと呼ばれてむっとなる。

辰馬「それを言うならまずはネリアの出会いからじゃ。ワシはいつも通り営業やっとったらネリアの譲ちゃんが出てきてな？『世界のために戦ってくれ』って言うもんじゃ。本当ならワシは誘いを断るんじゃが譲ちゃんに瞳に絶対に譲れない信念が見えとったからのぅ。そんで仕方なく引き受けたってわけじゃ」

ネリア「ハイ、聞けば辰馬さんは銀さんのお友達との事でともに進むことになりました」

銀時達はそれを聞いて納得する。

ネプテューヌ「で、辰馬さんはネリア見てどう思ったの？」

突然ネプテューヌがそんなことを聞くと、

辰馬「そりゃあ奇麗な別嬪さんじゃからすぐに抱きつゴボッ！」

ネリア「それは言わないでください！！／／／／」

辰馬が答えようとしてネリアに殴られた。

銀時、桂、神楽、新八はやっぱりか…な顔をする。

ネリア「只でさえ恥ずかしいんですよ！見ず知らずの男にいきなり抱きつきにかかられるのはもってのほか！他の女性に対してもいきなり抱きつきにかかる人なんてあなたくらいですよ！！」

辰馬「いやいや悪いの。お詫びとしてワシgするなーーーーー！！！」ゴフッ！」

飛びかかってきそうだからかネリアが辰馬にジャーマンスープレックスをかました。

ネプテューヌ「ネリアの教訓その2、『触ろうとする男は即効ぶっ飛ばせ』、役に立つよね♪」
ベール「気色悪い男には格闘技で絞めろって心に叩きこませましたから♪」
銀時・新八「九兵衛2号!?」

とんでもないものをネリアに叩きこませたネプテューヌとベールは笑い、銀時と新八は九兵衛の様なポジションになっているネリアに驚く。

ヴァルバトーゼ「なんだ?あれは・・・」
フェンリッヒ「さぁ?私も理解しかねます」
フーカ「って言うかジャーマンスープレックスって…」
デスコ「これって…」

フーカとデスコはアルティナを見る。

アルティナ「なぜこっちを見ているのですか?私はやりませんわよ!」
フーカ「あ、いや、ごめん」
デスコ「ごめんなさいデス、アルティナさん」

断固否定するアルティナ。
フーカとデスコは謝る。

ダークハート「…貴様らの茶番を閉じさせてやるか」

ダークハートは手に魔力を溜めて銀時達に放とうとする。

？？？「させないよ～」

が、何処からか飛んできた黄色い魔力刃に相殺させられる。

ダークハート「新手か」

？？？「呼ばれて飛び出てじゃじゃ～～ん！ってね。呼ばれてないけど」

お笑い言っているようなこの女性は、長い金髪に緑色の瞳に黒い服を着ている。

そしてててにはバルディシュそっくりのデバイスが握られていた。

ダークハート「…よく見れば死にぞこない共の奴ではないか」

？？？「私は死にぞこないじゃない！ちゃんとアリシアって名前があるの！」

女性・アリシアはダークハートに怒鳴る。

フェイト「ア、アリシア？」

銀時「え？嘘？アリシアって…？」

アリシア「そうだよ、久しぶりフェイト♪…って言えばいいのかなぁ？」

曖昧な答え方をするアリシア。

しかし銀時はありえないような顔をしている。

なんせアリシアは事故で死んだのだ。

銀時は１０年前（本人の場合はごく最近）にプレシアとアルハザードへ落ちて来たのだ。

その時あるハザードはプレシアの不治の病を治したが、アリシアの蘇生は無理だったようだ。

…って言うかアリシアの体は一体何処にあったかって？…さぁ？私でも分かりません。

銀時「あの～、もしもし？あんた本当にアリシアなの？」

銀時は恐る恐る聞いてみる。

アリシア「もちろん、正真正銘アリシアだよ」

普通に答えるアリシア。

ヴァルバトーゼ「おい、こいつがお前の姉なのか？」

フェイト「だと思うんですけど…」

フェイトは不安になる。

ヴァルバトーゼ「ま、どうにしろ味方が増えたのだ。戦力が多い方がいい」

ラハール「うむ、そう言うことだ」

ラハールはヴァルバトーゼの言い分に同意する。

するとネプテューヌがそう言えばと思い出す。

ネプテューヌ「そう言えば銀さん、確かアリシアって事故で死んだんだったよね？」

銀時「あ、ああ、そうだ」

ネプテューヌ「じゃあもしかしてアリシアは死んで幽ｒ「霊って言うな！スタンドだ！！」…」

幽霊と言い切る前にスタンドだと言い張る銀時。

アリシア「そうだね、私は幽ｒ「スタンドだ！！」…スタンドになってここにいるの」
なのは「ゆ…スタンドに？」

なのは達は顔を青くしながら聞く。
なのははお化け系が苦手らしい、銀時が特に。

アリシア「そう、実は私は死んだ後いろいろと世界をさまよってね、その時『亡霊の溜まり街（スタンドロード）』って場所に着いてね、そこでなんやかんややって体を手に入れて強くなって現在に至るっと」
フェイト「なんやかんやって…」

フェイトは苦笑いをする。

ネプテューヌ「えっと…てことはアリシアは魂の存在ってこと？」
アリシア「体はあるけどそんな感じだね」
ネプテューヌ「じゃあアリシアって不死身なわけ？」
アリシア「そうだね」

ネプテューヌは何か考えた後、何かピコーンと思い浮かぶ。

ネプテューヌ「それじゃあアリシア」
アリシア「なに？」
ネプテューヌ「てい♪」

ザクッ♪

アリシア「グハ」

アリシアはネプテューヌに胸をざっくりやられた。

フェイト「ア、アリシアーーー

ネプテューヌ「ああ、なんてこと…アリシアが死んでしまった」
新八「イヤお前が殺し「静かに」ゴフッ！」

一人語るネプテューヌに突っ込もうとする新八にノワールが殴る。

ネプテューヌ「たった一人でダークハートに挑み、そして勇敢にも散ってしまった」
ヴァルバトーゼ「俺達のために、勇敢に戦ってくれたことを誇りに思う」
新八「何記憶を美化しようと「だまれ」ガフッ！」

なぜかヴァルバトーゼも参加して詩の様に語る。
今度はブランにハンマーで殴られる。

ネプテューヌ「ありがとう、アリシア」
ヴァルバトーゼ「アリシア、お前の想いは永遠に語り継がれるだろう」
ネリア「アリシアさん、今までありがとうございました」
フェイト「姉さん…」

夜空の星（イメージです）を見上げて優しく微笑むアリシアを思う一同。
見ているなのは達は涙を流す。
ある一人のＫＹＢ（空気の読まない馬鹿）を除いては・・・。

新八「感動するとこ違うだろォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！なんでだよォォ！！なんで感動場面がやってくるんだよォォ！！今までのボスのやり取りって一体なんだったんだよ！！つーか何で夜空が出てくるんだよ！！なんで感動シリアスが完成するんだ

よ！！」

ミーニャ「黙れこのＫＹ！！」

額に青筋立てて怒鳴る新八にミーニャがぶっ飛ばす。

その後新八を再起不能にさせる。

ネプテューヌ「最後に私からアリシアに贈り物をあげるよ」

そう言って取り出したのは、・・・松明。

そしてそれをアリシアに、

ＩＢＧＭチュートリアルｂｙ魔界戦記ディスガイア４

（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｐｕｐｐｅｔ　Ｓｍｉｌｅ）

ジュッ！

アリシア「あちゃあああああああああああああああああ！！！」

アリシアが熱さで起き上がった。

フェイト「姉さん！？」

ヴァルバトーゼ「うおっ！？復活した！！」

ネプテューヌ「ねぷッ！？アリシアが黄泉の国から帰ってきた！」

突然アリシアが復活したとこに驚く。

アリシア「勝手に殺さないで！って言うか私死んでるからこのセリフはないかな？」

アリシアは怒る。

ＩＢＧＭ飛べない翼ｂｙ魔界戦記ディスガイア４（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｕｎｆｌｙａｂｌｅ　Ｗｉｎｇｓ）

ダークハート「いつまで下らない茶番をしているのだ？」

ダークハートは仁王立ちしている。

ネプテューヌ「くだらなくない！こっちは少し緊張を取っただけ！」

ネプテューヌは反抗する。

ダークハート「なんだそうか？緊張していると下から液体でも出るのか？」

銀時「コンパあたりならｓ「なんてこと言うんですかーー！！！」ブベッ！」

コンパは顔を真っ赤にして銀時をはたく。

ダークハート「フンッずいぶんと賑やかな連中がいるもんだな」

ネプテューヌ「当たり前だよ」

ネプテューヌは自慢する。

ダークハート「ハッ！とても人を殺めようとした奴の言うセリフではないな！サッサと闇を開放してればいいものを！」
ネプテューヌ「私は闇に堕ちたりはしない！」

ネプテューヌは力強く答える。

ネプテューヌ「確かに私はネリアが死んだことにあなたという大きな闇を抱えてしまった！そしていつか闇自身が私を食いつぶして暴走してしまう」

かつてネリアという家族を失ったことにネプテューヌ（ダークハート）の闇を作り出してしまった。

ネプテューヌ「でもね、闇なんてのは一人で抱え込むんじゃない！みんなで背負うんだよ！私にはノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイちゃん、ネリア、なのはさん達にヴァルっち達、そして銀さんがいる！」
辰馬「あの～、ワシ等はおまけ扱いかの？」

辰馬が言っているが、そんなの無視。
ダークハートが言う。

ダークハート「フフフ、仲間だと？家族だと？…それが我をたおすものだと考えているのか？」
ネプテューヌ「そう！闇を打ち倒すのは力じゃない！みんなという絆の力なんだ！」
ダークハート「ぬかしおったなっ！！貴様の言う絆というものがどれほどのものか見定めてくれるわ！！」

ダークハートは懐から剣を出す。
それと同時に地面からキラーマシン１０体、リザードマン６体、ゴーレム３体が現れる。

ネプテューヌ「ネリア、いけるよね？」
ネリア「うん、お姉ちゃん、私の力を見せてあげる！」
アリシア「さてさて、お姉ちゃんの活躍をこの目で見といてフェイト」
辰馬「やれやれ、戦いはすきじゃないんじゃが、やるしかないのぅ」

ネリア、アリシア、辰馬も戦闘態勢に入った。

ネプテューヌ「行くよ！ダークハート！！私達の絆の力を見せてあげる！！」
ダークハート「ぬかせ！！貴様は闇に堕ちるのだ！！」

今ここに己の闇（ダークハート）との戦いが始まった。

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

エトナ「今回は事情があって休むわ。そんじゃお休み～」

プリニー「投げやりッス！！…っとまぁこの通り今回質問コーナーはお休みッス。申し訳ありませんでしたッス。あ、それからアンケートを取るッス」

『『ネプ銀編』後のストーリーはどのようにするかアンケートを募集します。

1：未開惑星編

福引で宇宙旅行のチケットを貰ったネプテューヌは、銀時達と一緒に宇宙旅行へ向かう。しかしテロリストのおかげで未開惑星へ墜落してしまった。銀時達は助かったものの、惑星の原生生物に苦労する。これは未開惑星に脱出兼お宝回収冒険の物語。

（クロス元：ピクミン2）

2：銀河編

ミッドチルダに巨大宇宙生物が襲撃した。襲撃後、ネプテューヌ達は星の子・チコと出会う。そしてネプテューヌ達はチコとともに宇宙の平和を取り戻しに行くのだ。

（クロス元：スーパーマリオギャラクシー（2も有り））』

プリニー「以上ッス。活動報告にも載せるッス。ではまた会いましょうッス」

第五十九訓：味方は遅れた時にやってくる（後書き）

真王「次回は壮絶なバトルが繰り広げられるぜ！」

ネリア「次回『変身は人間に使えないのが玉にキズ』テイクオフです」

第六十訓：変身は人間に使えないのが玉にキズ（前書き）

真王「今回で『ネプ銀編』は終わります。それではスタート」

第六十訓：変身は人間に使えないのが玉にキズ

辰馬とネリアとアリシアが仲間に加わり、ネプテューヌ達はダークハートを倒しに行く。

ＩＢＧＭ修羅の国ｂｙ魔界戦記ディスガイア４（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｃｒｏｓｓ）

ネプテューヌ「私がダークハートを倒す！みんなは他の奴らを！」
ネリア「分かったお姉ちゃん！」
アリシア「こういう展開待ってました～！」
辰馬「なんだか攘夷戦争を思い出すの～」
なのは「任せて！」
ヴァルバトーゼ「任せるがいい！」
銀時「無茶すんなよ！」

ネプテューヌの言葉に全員了解する。

ダークハート「さしで勝負か？いいだろう、かかってこい！」

ネプテューヌはパープルハートへと変身し、ダークハートと勝負した。

銀時「オラどけェェェェェェェェェ！！！」

神楽「ホワチャァァァァァァァァ！！！」
桂「天誅！！」
エリザベス『舐めんなこらッ！！』
なのは・フェイト・はやて「バスターーーーーー！！！」
スバル「リボルバーシュート！」
ティアナ「クロスファイアーシュート！」
エリオ「テヤァッ！」
キャロ「ケリュケイオン！」

銀時達はみんなしてキラーマシン、リザードマンを倒している。

神楽「オラこのデカブツ！覚悟するネェェェェェェ！！」

神楽はゴーレムの足を掴んでジャイアントスイングをかます。が、

銀時「敵味方関係なく振り回すんじゃねぇ～～～！！！」

銀時達まで巻き込まれかけたので怒鳴る。

リザードマン「グガ、グガガ」

すると一体のリザードマンがもう一体のリザードマンを呼ぶ。

リザードマン「グオーーー！」

2体のリザードマンが空中に飛んで渦らしきものに吸い込まれると、

リザードマン「グオオオオォォォォォォォォォ！！！」

全長が二倍ほど大きくなったリザードマンが出た。

新八「なんじゃありゃァァァァァァァァァァァァ！！！！！」
なのは「お、大きくなった！？」
銀時「なんだよあれはよう！」

でっかくなったリザードマンを見て驚きを隠せない銀時達。

ノワール「怒ッキング…敵さんも思いつくことするわね」
銀時「え？ノワール知ってんの？てかドのニュアンスおかしくね？」
ベール「怒ッキングというのは2体の魔物が合体して巨大化することですわ」

怒ッキングをベールが説明する。

銀時「怒ッキングってフュージョンのこと？やべ、オレ燃えてきた」
ヴァルバトーゼ「言っておくが怒ッキングは魔物系しかできんからな」
銀時「ってなんだよ…」

合体したら自分も大きくなれると思い込んだのか、銀時は落ち込む。

リザードマンG「ドラゴンファイア！」

巨大リザードマンは口から炎を吐いた。
ちなみに怒ッキングによって巨大化したモンスターは名前の後ろにGとつく。

全員「うおおおお！！（きゃあああああ！！）」

リザードマンGのブレスに吹っ飛ぶ銀時達。
でっかくなっているため攻撃範囲も広い。

リザードマンG「ウガァ！」
エリオ「キャロ危ない！」

リザードマンGは弱そうなキャロに目をむけ、踏みつぶそうとしている。

ネリア「アローレイ！」

ネリアが弓を構え、光で出来た矢を放つ。

リザードマンG「グゥッ！」

リザードマンGの足に矢があたり、痛がる。

ネリア「大丈夫？」
キャロ「あ、ハイ、ありがとうございます」
ネリア「よかった。なら、アローレイ！」
リザードマンG「ギャアアアアアア！！！」

ネリアはリザードマンGの目に矢を放ち、リザードマンGは目を押さえる。

ネリア「今です！無双連撃陣（むそうれんげきじん）！！」
リザードマンG「グアアアアアアアアア！！！！」

目にもとまらぬ斬撃にリザードマンGは耐え切れず倒れた。

ノワール「やるじゃないネリア！」
ネリア「これでも別の神界で修行して来ましたからお姉ちゃん達よりも強「チュンッ！」…」

ネリアの顔に何かが通り過ぎた。
後ろを振り返ると銃弾の跡が。

ノワール「誰より強いって？」

ノワールが笑顔で銃を向けている。
はっきり言って目が笑っていない。

ネリア「ハハハ、ナンデモナイデス（調子に乗るのは止めよう…）」

ネリアは冷や汗流して片言で答える。

ネリア「ってノワールお姉ちゃん後ろ！」
キラーマシンG「コウゲキ！」
ノワール「はっ！」

ノワールの後ろから怒ッキングしたキラーマシンが剣を振りかぶる。
なんで機械が大きくなるんだよ！のツッコミは無しの方向で。

アリシア「スパークスラッシュ！」

近くでアリシアが電撃刃を飛ばしてキラーマシンGの腕を切り落とした。

アリシア「まだまだ行くよ！！ライトニングランサー！」

フェイトのプラズマランサーのような攻撃をキラーマシンGに放つ。
キラーマシンGは爆発し、他二体のキラーマシンも爆発した。

辰馬「お譲さん等は強いの～。ワシも負けてられんじゃき」

辰馬も剣でキラーマシンやリザードマンを切り捨てる。
ダークハートが出した敵はもうゴーレム三体だけとなった。

ゴーレム「・・・・・・」

二体のゴーレムがお互い近づき、怒ッキングを行った。

ゴーレムG「・・・・・・」

ゴーレムは倍にまで巨大化した。

銀時「でっかい奴がでっかくなると怪獣だなこりゃ」
桂「うむ、その説は間違いはない」
新八「呑気なこと言ってる場合ですか！！」

怪獣クラスに大きくなったゴーレムGを見て呟く銀時と桂。
それを聞いて突っ込む新八。

ゴーレムG「・・・・・・」

ブンッ！

銀時「ウオッ！」

ゴーレムGは銀時に殴りかかる。

辰馬「でかい分たちが悪いぜよ」
ネリア「厄介な相手ですね」
なのは「でもダメージが無いはずがない！」
ノワール「荒削りってもんだけどやるしかないわね」
ヴァルバトーゼ「ふむ、ではお手並み拝見と行こうか」

なのは、銀時、ノワール、ヴァルバトーゼ達はゴーレムGと対戦する。

パープルハート「ヴァイアブルエッヂ！」
ダークハート「ならこちらもだ！」

パープルハートとダークハートはお互い剣をぶつけ合う。
隙を与えてくれない剣技はお互いさま。
乱闘中にパープルハートには右頬、左腕、右足に、ダークハートには左頬、腹部、右ももに切り傷が出来る。

ダークハート「さすがだな」
パープルハート「あなたこそね」

笑い合う二人。

ダークハート「だがそろそろケリをつけるか」

後ろに待機していたゴーレムを呼ぶ。

ダークハート「行くぞ。魔チェンジ」

ダークハートがそう言うとゴーレムが光り出した。
ゴーレムは光の球になり、ダークハートがそれを握ると、石で出来た大きな太刀が現れた。

パープルハート「・・・これは少し骨が折れそうだわ」
ダークハート「なら諦めるか？」
パープルハート「まさか！諦めたらゲームオーバーなのよ！」

パープルハートが切りかかり、ダークハートは防ぐ。

ダークハート「さて、こいつの力を試してみるか。グランドブレイク！」

ダークハートは太刀を大振りに振る。
パープルハートは防ごうとすると、吹き飛ばされた。

パープルハート「きゃあああ！！」

吹き飛ばされるも、何とか持ち直す。
が、いつの間にか刀が飛ばされていた。

パープルハート（まずいわ…このままじゃジリ貧ね。刀がさっきので飛んでっちゃったし、何とかこっちも武器を持ちたいけど…）
ダークハート「そこで止まる必要があるか？」

ダークハートが太刀を振り上げた。

？？？「亡霊の呪玉！」

人の顔をした黒い弾がダークハートに向かって飛んできた。
飛んできた先は何とサチコだった。

サチコ「まだ行くよ！ソウルチョッパー！」
ダークハート「ち！」

何も無いところから大鎌を出してダークハートを攻撃する。

サチコ「お姉ちゃんを殺させないよ～」

地面から骸骨とゾンビを召喚するサチコ。
銀時はそれを見て顔を青くする。
するとパープルハートはサチコを見てなにかを思い出す。

パープルハート（もしかしてサチコって…）
ダークハート「こざかしい！」
サチコ「うわったぁ！」

ダークハートが一振りでガイコツやゾンビをなぎ倒す。
サチコはその時その場から逃げる。

サチコ「危ない危ない、危うく死ぬとこだった。・・・死んでるけど」
パープルハート「ちょうど良かったサチコ、力を貸して」
サチコ「へ？」

サチコは素っ頓狂な顔になる。

サチコ「ど、どうやって？」
パープルハート「こうやってよ。魔チェンジ！」
サチコ「！」

サチコの体が光り出す。
そして治まると赤い血の様な刀身の剣が現れる。

パープルハート「思った通りだわ」
サチコ（剣）『うわ～、私剣になってる～』

自分が剣になったことに驚いているサチコ。

ダークハート「まさか貴様も魔チェンジを使うとは…仕留めてやる！」

ダークハートはゴーレム（剣）でパープルハートに切りかかるが、パープルハートはそれを避ける。

パープルハート「さて、凄いものを見せてあげるわ。血鋏切り！」

パープルハートはサチコ（剣）を鋏の様に開き、ダークハートを切りつける。

ダークハート「ちっ！舐めおって！」
パープルハート「まだ行くわ！喰らいなさい！」

パープルハートはサチコ（剣）を地面に突き刺す。

パープルハート「呪霊滅殺祭」
サチコ「キャハハハハハハハハハハハハ！」

剣からサチコへ変わり、狂った笑いを出す。
そしてサチコは両手に剣型サチコをだし、何と5体の黒い分身が現れた。
そして6体同時に駆け出し、ダークハートを切りつける。

ダークハート「が、ぐ！、くそ…」

身体中切り傷が出来るダークハート。

バシッ！

ダークハート「な！」

ゴーレム（剣）が弾かれてしまった。

パープルハート「（いまだ！）そぉぉれっ！！」

パープルハートはゴーレム（剣）を野球のボールのように打ち飛ばす。
その先にはゴーレムGが。

ドズッ！

ゴーレムG「ゴオオォォォォォォォォォォォォォォ！！！！？？」

胴体を突かれたゴーレムGは悲鳴をあげる。

銀時「こいつは！」
神楽「これはチャンスね！ヴィータ！ブラン！手を貸すアル！」

ヴィータ「よっしゃ任せとけ！」
ブラン「…コクッ」

神楽は駆け出し、ヴィータはギガントフォーム、ブランは最強武器・ハードブレイカーを構え、ゴーレム（剣）を打ち付ける

神楽・ヴィータ・ブラン「ドリャァァァァァァァァァァ！！！！！」

バギャッ！

ゴーレムG「ゴゴオオオオオオオオオ！！！！？」

ゴーレムGの胴体が完全に貫かれてしまった。
だがまだ動いている。

銀時「こいつでしめーだ！！」

トドメに銀時がゴーレムGの赤いレンズをたたき割った。
そしてゴーレムGの体力が尽きて動かなくなった。

なのは「やったぁ！」
コンパ「た、倒したですぅ…」
ノワール「あとは…」
ネリア「あいつのみです」

パープルハート「貴方が最後よ！」
ダークハート「おのれ！」

パープルハートとダークハートは一騎打ちを再開する。
途中で剣を拾い、今でも刀の打ち合いをしている。
ちなむにサチコは元に戻ってヘタレている。
魔チェンジの後は魔力をほとんど失って疲労がたまるのだ。

ネリア「援護するよ！お姉ちゃん！」

ネリアが光の矢を構える。
前のアローレイと比べて光の量が凄い。

ネリア「ホーリーアロー！」

光りの矢がダークハートに向かって放たれた。
ダークハートはとっさに避けたが隙が出来た。

パープルハート「ソコォッ！」
ダークハート「！？しまっ…」

しまった、と言い切る前にダークハートはパープルハートの剣が顔の左目あたりにブッ刺された。

ダークハート「ギャアアア

パープルハートはダークハートにトドメをさそうとした。

ガキィンッ!!

が、黒い怪物・ダークデビルによって防がれた。

パープルハート「な!?ダークデビル!?どうして!」

ダークハート「おお!ダークデビルよ!もしやお主…」

ダークハート尾が現れた事に全員が驚く。

ダークハートは左手を開くと、４つのダークソウルだった。

ダークハート「おお!!ついに…ついに7つの欠片がそろったか!」

ネリア「そ、そんな…」

ネリアは絶望したような顔になる。

ダークハート「ついに7つの欠片が集まった。残る欠片は高杉晋助の所のみ!」

銀時「なんだと?」

高杉という単語に耳を疑う銀時。

ダークハート「我がすべてを支配する日が近い!虫けらども!すぐにこの世から消えさ・・・グゥゥ!」

ダークハートが顔を押さえて崩れる。

ダークハート「く…ダメージがでかい…しばらく…動けんか…」

ダークハートはダークデビルに担がれ、魔方陣が現れて逃げた。

パープルハート「えっと…これって…かったのね」
アリシア「うん！私達勝ったんだよ」

全員勝利したことに安心をもった。
ただネリアだけは不安な顔をしているが。

パープルハート「とても厄介な相手だったわね…。次回来る時は結構強くなってるかもね」
ノワール「あるわね」

ノワールは同意する。

銀時「んじゃとりあえずこんなとこもうオサラバしようぜ」
ゲラビッツ「そうですか。じゃあお帰りなさい」
フェイト「…ってなんであなたがそこに！？」

いつの間にかゲラビッツが飛行船に乗っていた。

ゲラビッツ「ふはははは！我はしばらく魔界で身を隠す、そして覚えてやがれちくしょーーー

ヴァルバトーゼが呼ぶ。

ヴァルバトーゼ「この先大変な道のりが待っていると思うので俺達も協力してやろう」

ネプテューヌ「え？いいの？ありがとう！」

ネプテューヌは嬉しそうになる。

こうしてダークハートとの一戦が終わった。

【ネプ銀編：ＥＮＤ】

～おまけ～

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

ネリア「皆さんこんにちは、ネリアがアシストいたします」

エトナ「うわこの子礼儀正しい、まあいいわ、ペンネーム『鳴神ソラ』からよ。『マリオ「その通り、例え偽善だろうが命を潰せば自分の何かが減って行くからな…まっ、俺はそれをしてるんだけど偽神や常識のない転生者に…そいつ等を倒したと言う罪を背負ってな…」

クッパ「しっかし…律儀だなゲラコビッツ」

ルイージ「確かに説明してるしね…」

フォックス「と言うか当たってたな」

ヨッシー「と言うか本格的に出てからコメディになりましたね～」

ネス「ダークソウルもといダークハートも律儀に待ってくれたね」

リュカ「けれどその後に銀さんがピンチ！」

マリオ「俺だったらすぐにそれを殴った後に出した野郎に何俺の仲間の幻影出し取るんじゃぁぁぁ！！って言う」

ルイージ「と言う訳でネプテューヌに質問『ネリアちゃんと再会してどうだった？』」

ネス「同じく質問『ダークハートを見てどうだった？』」

リュカ「なのはさんに質問『自分の４文字熟語で表された奴を見てどう思いますか？；』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

ネプテューヌ「うん！ネリアにあえてとってもうれしかった！あとダークハートは私にそっくりだったね。黒いけど」

なのは「え？私この『全力全壊』はしっくりくるんだけど」

エトナ「そんなんだから世間に魔王だって言われるのよ」

なのは「魔王じゃないもん！」

エトナ「あ～はいはい。『鳴神　ソラ』、もっと魔王（なのは）を拝みなさい」

魔王（なのは）「だから魔王じゃないもん！！って名前変わってるぅ！！？」

ネリア「エトナさん、あまり彼女をいじめないで…。次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんからです。『アンケートは２で！

質問。

シグナムに質問。　僕の小説では、銀さんと良い関係になりかけています。どう思いますか？

新八へ、僕の小説では彼女がいます。　どう思いますか？

スバルに質問。　僕の小説では、左之助の弟子になってます。　どう思いますか？』順番に答えるならこんな感じですね」

シグナム「・・・よし！」

シグナムは勝ち誇ったかのような顔をする。

新八「羨ましいぞちくしょーーー

ソラ「もう何でもありだな」

銀時「つうか、悪ふざけでネプテューヌに殺されてるけどな」

黒龍「なんか不憫です」

ソラ「じゃあ質問いくか」

黒龍「そうですね。質問です。真王さんは劇場版銀魂新訳紅桜編を見ましたか?それで見た感想はどうでしたか?」

銀時「じゃあ九兵衛二号コト、ネリアに質問だ。お前、とりあえずそっちの俺の事どう思った?」

黒龍「最後に俺から質問します。ネプテューヌに質問。妹であるネリアに会ってネリアにこれから話したい事とかありますか?」

銀時「そんじゃな〜」』」

真王「すみません。実は劇場版銀魂見てないんです。超サーセンWW。それからネリアはネプテューヌ達の義妹なんです。本当の妹は現在ゲイム業界で留守番しています」

ネリア「銀さんですか?お姉ちゃんの言うとおりチャランポランでパーマで駄目なおっさんでした」

銀時「何教えてやがんだあのガキ!!」

ネプテューヌ「話したいこと?あるよ。ゲーム機壊したとかアイス落としたとか物壊したとか…」

真王「思いっきり殺意がこもってるぞ。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

エトナ「最後は『白騎士君』で終わるわよ。って久しぶりの感想ねこれ。『白騎士君「2番の銀河編でお願いします」

レナード「それからスバルに質問。もし使ってみたい必殺技を3つの内に選んで下さい」

1．ゴットフィンガー

2．ヘル・アンド・ヘブン

3．ギガ・ドリル・ブレイク

白騎士君「答え待っています」』」

スバル「え、えっとぉ…3番かな？」

真王「成程。『白騎士君』小説頑張って書いてくれ。そしてアンケートですがこうなりました」

未開惑星編：1

銀河編：4

真王「それでは次回は辰馬がアシストだ。アンケートはまだ続けるぜ」

真王「あ、今更ながらのキャラプロフィールです」

～ネリア～

髪：腰まであるピンク（アホ毛付き）
目：青
服：アルティナと同じ
３サイズ：９２／５５／８４
体重：滅せられた。
性別：♀
種族：天使
魔力光：純白
好き：平和、花、ネプテューヌ達４女神
嫌い：闇、悪事を働く者、ダークソウル、卑怯な人
性格：真面目で傷ついた人は敵味方関係なく優しくする。
レベル：４０００
得意武器：弓（神兵の弓）、　剣（ライトブレード）
スキル：聖女のご加護（接近キャラの状態異常を和らげる）
詳細：清らかな心を持つ天使。生前の彼女はある実験に使われた被検体だったが、ネプテューヌ達によって保護される。しかし再び実験によってさらわれ、間もなく死亡。しかし、今は天使として復活した。実は前にネプテューヌ達に迷惑なことをした恥ずかしい過去があるようだが…。

真王「それではまた次回で」

第六十訓：変身は人間に使えないのが玉にキズ（後書き）

真王「次回はネリアが語るあれの過去に！」

辰馬「アハハ、次回『過去の歴史に意外な事実が隠されている』テイクオフじゃき」

第五回、モンスター解説図鑑

真王「第五回、モンスター解説図鑑！！」

イエーーーーーーーーイ！！

ヴァルバトーゼ「ではまず最初のモンスターからだ」

～スラサイボー～

第四十九訓に登場。
ネプテューヌの体の中に生息する細胞のようなスライム。基本体当たりのみの攻撃だけで簡単に倒せるが、ネプテューヌに悪影響はない。

真王「次はこのモンスターです」

～トゲスラサイボー～

第四十九訓に登場。
頭部にとげが付いただけのスラサイボー。基本的にスラサイボーと同じ攻撃法だが、とげが付いただけあって、攻撃力が高くなった。

ヴァルバトーゼ「次はこいつらだ」

～ゲラニー～

第五十訓に登場。
ゲラビッツに洗脳されたプリニー族。しかしはっきり言ってザコであるが、集団攻撃は苦戦するだろう。あとプリニーは手荒に扱ったり投げられると爆発する習性があるらしい。

真王「次も洗脳モンスターです」

～ゲランギャー～

第五十二訓に登場。
ゲラビッツに洗脳されたエリンギャー。ジメジメしたところを好むキノコ。キノコから発するホルモンから女性のパワーを下げるらしい。

真王「次は二次作品でよく登場するあいつの登場だ」

～グレートセンコウシャX～

第五十三訓に登場。
ゲラビッツが開発した巨大ロボット。姿はどっから見ても先行者そのものである。さらにネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を所持しているが、弾を入れ忘れたせいであっけなく倒された。

ネプテューヌ「なにしに出てきたんだって感じだね」

真王「だな」

～タンパくん～

第五十四訓に登場。
ネプテューヌの体の中に住むモンスター。ネーミングが若干たんぱく質らしい。
捕まえた近藤を餌にして腐る直前がうまいとグルメな一面があるらしい。

真王「…はい次」

～鳥女族～

第五十五訓に登場。
鳥が義女化したようなモンスターで空から獲物を求めるハンター。
漢字では鳥女（ちょうじょ）と呼ぶ。
地上の敵に対しては絶対に逃がさない特殊能力を持っている。

主なモンスター名
ハーピィ（茶）・オキュペテー（緑）・アエロー（黄）・メルキューレ（紫）・ブラッククロウ（黒）・ハーピィクイーン（赤）

魔ビリティー
スカイハント：地上移動キャラに対して絶対に命中する。

特殊技
三打連空：空から三回ど突きだす・・・シュールだ。
アイアンウイング：漢字で読むと鋼の翼とも言う。
マッハストライク：タクシーに使うのは良くないです。
メテオスロー：隕石の如く飛ばされたら原型が無くなります。

真王「ちょっとディスガイア風にしました。次です」

～魔蛇族～

第五十五訓に登場。
魔性の魔物と恐れられている蛇女。下半身が蛇で、髪の毛に5つの蛇の頭がある。
異性の者の状態異常が悪くなりやすくなる香りが放っている。

主なモンスター名
ラミア（赤）・ゴルゴン（茶）・ナーガ（紅）・オロチ（白）・メデューサ（紫）・ラミアクイーン（黒）

魔ビリティー
魔性の魅惑：男性キャラ接近時、状態異常がかかりやすくなる。

特殊技
毒蛇のキス：普通のキスなのに痺れる～～・・・
蛇睨み：睨まれたらカッチカチやぞ！

八又突き：髪の毛をそんな扱いしてはいけません。
炎蛇霊動：火傷と恐怖から逃れられないかもね。

真王「まだまだ行くよ」

～妖精族～

第五十五訓に登場。
悪戯好きなかわいいらしい女の子モンスター。魔法は得意だが、考えることは苦手の様である。
どんな魔法に対して中和させる力を持っている。

主なモンスター名
フェアリー（紫）・ピクシー（ピンク）・セルラ（青）・シルフ（緑）・フーリー（赤）・ティターニア（黒）

魔ビリティー
妖精の鱗粉膜：魔法攻撃に対してダメージを半減する。

特殊技
ぶん殴り：只杖で殴るだけ。ええ、それだけ。
パーフェクトアタック：妖精らしからぬ突進攻撃。けど痛い！
ボンバードッカン：失敗すると大爆発が起こるのは当たり前です。
スターダスト：降り注ぐ星礫は危険です。

～魔女族～

第五十五訓に登場。
魔界に住み着いた魔女がモンスター化した姿。
鍛錬のたわものか魔法攻撃が高い。

主なモンスター名
ウィッチレディ（青）・デビルウーマン（黒茶）・デスセイレス（黄）・デビルマジシャン（黒緑）・ヴァンパイアロード（暗紫）・ウィッチクイーン（暗赤）

魔ビリティー
魔力強化：魔法攻撃が通常の2倍になる。

特殊技
メラ：お化け屋敷にぴったりではないのが玉にきず。
パフパフ：女の武器でみんな快楽に落ちます。きもちいい～。
メラゾーマ：当たったら火傷じゃ済みません。
イオナズン：爆発要注意！

～人魚族～

第五十五訓に登場。
海の世界に住む美しき女性モンスター。そして歌が好きらしい。
補助魔法に関して長けている。

主なモンスター名
マーメイド（水色）・セイレーン（黄）・サーペント（緑）・ローレライ（紫）・ウンディーネ（青）・リヴァイアサン（紅）

魔ビリティー

人魚の聖歌：補助魔法が通常の二倍になる。

特殊技
往復ビンタ：ぷっくり晴れたら地味に痛い。
ハウリングボイス：うるさいってレベルじゃねーぞ！
サーフィンウェーブ：流されるだけでは済みません。
ハウリングリサイタル：もはや災害以上の音声です。

～殺人機族～

第五十六訓に登場。
別世界の科学者が作り出したといわれる機械モンスター。
ダメージ量によって攻撃力が増す。

主なモンスター名
キラーマシン（青）・キラーマシン改（濃い緑）・キラーマシンZ（紫）・キラーマシンX（黒）・キラーマシンカイザー（赤）・キラーマシンΩ（金）

魔ビリティー
カウンターパワー：体力が少なくなるにつれ、攻撃力が増す。

特殊技
キラービーム：ロボにはビームが一番！
マヒャド切り：痛いのか冷たいのかどっちかしろ！
キラーバスター：これを撃ったら悪魔に…なれるのか？
キラーサイクロン：細かく千切りです。スッゲェあぶねぇし！

～龍人族～

第五十七訓に登場。
人型の龍族で、戦いを好む戦闘民族。
攻撃回数によって力をあげる。

主なモンスター名
リザードマン（緑）・サラマンダー（赤）・バジリスク（茶）・ドラゴンナイト（青）・リザードロード（紫）・ドラゴンロード（黒）

魔ビリティー
龍人の闘士：攻撃した回数に応じて攻撃力が増す。

特殊技
ドラゴンナックル：竜の腕力舐めんな！
ドラゴンファイア：ドラゴンお馴染みの技…地味だけど…
ドラゴンブレイク：地面をかち割れ！…って危ないだろ！
ドラゴンバースト：龍の怒りはすぐに止まらない！

～邪鬼族～

第五十七訓に登場。
邪龍族と並ぶ巨人族。実は酒が大好き。
耐え抜くときに大きな攻撃が出せる。

主なモンスター名
タイラント（赤）・トロル（茶）・オーガ（緑）・サイクロプス（青）・ギガース（黒）・トロルキング（紫）

魔ビリティー
鬼神の逆鱗：ダメージ回数に応じて攻撃力が増す。（一度攻撃すると元に戻る）

特殊技
鬼殴り：野球の球扱いです。
鬼殺し：この一撃は危険だ！！
鬼神破壊：魂と体が分離されてしまいます！
大鬼神撲殺：一振りで星が壊れるぅぅ！！

～魔道巨人族～

第五十七訓に登場。
古代より生まれし魔道兵器。破壊を好む危険な敵。
技の回数で威力が上昇する。

主なモンスター名
ゴーレム（茶）・アイアンゴーレム（濃い青）・メタルゴーレム（銀）・グランドゴーレム（紫）・マスターゴーレム（赤）・ジェノサイドゴーレム（黒）

魔ビリティー
破壊衝動：特殊技使用回数に着き、能力が上昇する。

特殊技
ゴーレムナックル：一殴りでも十分すぎる破壊力。
クエイクインパクト：これで大地震を起こしかねない！
破壊光線：『バーストストリーム』と呼んじゃ駄目です。
絶対滅殺砲：星ごと破壊する危険あり。

真王「そして最後がラスボスだ」

～ダークハート～

第五十九訓と六十訓に登場。
ダークソウルがネプテューヌの闇を吸い取って変化した姿。見た目はパープルハートと同じだが、体が黒くて目が赤いことだけだった。
ネプテューヌとの戦いで重傷を負い、現在治療中。

真王「では第六回まで会いましょう」

第六十一訓：過去の歴史に意外な事実が隠されている（前書き）

真王「今回はダークソウルの誕生のシーンです。その原因は一体？」

第六十一訓：過去の歴史に意外な事実が隠されている

ダークハートとの一戦後、ネプテューヌ達は何しているのかというと、

ネプテューヌ「ウノ！」
銀時「またかよ！また俺の負けかよ！！」
ユイ「銀さんよわいですね☆」
サチコ「もしかしてくじ運ないの？」
桂「日ごろのグータラ生活が天罰を下したんだろう。む、ウノだ」
銀時「ヅラに負けた～～～！！」
桂「ヅラじゃない桂だ！」

ウノで遊んでいた。

ネリア「…ってみなさん何呑気にカードゲームやっているんですか！」

見かねたネリアがネプテューヌ達に怒る。

銀時「うっせーな。こっちは真剣なんだよ。ゲームに勝つことこそ人生の価値が決まるんだよ」
ネリア「遠回しに廃人になるにしか聞こえません」

ネリアは冷静に突っ込む。

ネリア「皆さんそんな呑気に遊んでいる場合ですか！今ダークソウルが動けない状況とは言えいつ動き出すか分からないんですよ！」
はやて「まぁまぁそんな仕事熱心にならんでも。麦茶とロールケー

キどうや？」
ネリア「あ、頂きます」

とりあえず麦茶とロールケーキを貰うネリア。

ネリア「…話を戻しますがダークソウルは危険な物だと理解出来てますか？モグモグ…」
新八「食べながらしゃべるな」

繰りのロールケーキ含みながらダークソウルのことを話すネリア。
そのため新八から突っ込まれる。

銀時「あ～はいはい、とりあえず危険な物だろ？」
ネリア「…全然聞く耳持とうとしませんねぇ…」
アルラ「それならちょっと…」

ヤル気ない銀時にジト眼で見るネリア。
するとアルラがネリアの耳元で囁いて頭にピコーンと光った。

ネリア「銀さん、話を聞いてくれたらパフェをおごってもらっても「で、どんな危険性があるんだ？」」

パフェと聞くと打って変わって真面目に聞いてきた。
ネリアは少し苦笑いを浮かべる。

ネリア「ではまずダークソウルの誕生から説明しましょうか」

ネリアはダークソウルについて話を始めた。

ネリア「私が神界にいたころある書物を見つけまして、その資料は

ダークソウルに関係するものでした」

ネリアはその書物を取り出し、内容を読み始める。

ネリア『今は昔、生き物は善あれば悪もあり、光あれば闇もある。光りなる者は喜び、歓喜、楽しさという善の感情が存在する。だが逆に、憎悪、怒り、憎しみ、悲しみ、殺意、欲望という悪の感情も存在する。その中には七大罪の傲慢（プライド）、暴食（グリード）、色欲（ラスト）、憤怒（ラース）、怠惰（スロウス）、嫉妬（ヴィー）、強欲（グリード）も悪の感情に属する。個人は等しくはないものの、己の欲を満たすために奪い、殺し、挙句戦争を起こすのだ』

悪の起源を強調させるような内容だ。

ネリア『そんなある日、私は耳を疑う情報を得た。人々が作り出した闇が形を成して光りを喰らう化け物へと変貌していくことを。半信半疑だった私はそれを確かめるとその話は事実であった。闇の量も尋常ではなく、いつしか神界どころか全次元世界にまで影響を及ぼすかもしれなかった。しかし我々だけでは闇を消し去ることは出来ない、あまりにも多すぎるのだ』

強大すぎる闇があると主張しているようだ。

ネリア『そんな時、ある男が一つの宝石をもちだしてきた。その男の持つ宝石は白く輝いていた。男曰く、『この宝石の力で闇を全て封印させるのだ』と我々に言い聞かせた。我々はその男の案に乗り、宝石を使って闇を全て封じる計画を実行した』

宝石が黒い闇を吸い込む絵が書かれている。

ネリア『するとすごいことに闇は宝石に吸い込まれ、どんどん闇の

力が消えていった。闇にとらわれた者たちは解放され、光ある世界へと戻ってきた』

ページをめくると、黒くなった宝石と戦争をする人間が描かれていた。

ネリア『しかし、幾多の世界に戦争を起こし、また闇を作り出すきっかけが出来てしまった。宝石が闇を吸い続けていると、輝かしく美しい純白の色をしていた宝石が、見る見るうちに黒く醜い闇を象徴とする者へと変貌していった』

黒い宝石が黒い雷を出して災害を起している絵が書かれている。

『完全に黒くなったこの宝石はこれ以上闇を吸い込むことが出来なくなった。それどころか意志を持ち始め、大災害を起したのだ。集まった闇が一つの宝石に固められ、闇という意思が生み出された。私はこの“意思を持つ闇”もしくは“闇の魂が具現化した存在”『ダークソウル』と名付けることにした』

全員「っ！！！？？」

全員はこれを聞いて驚愕する。

ネリア『我々はダークソウルの破壊、もしくは封印の計画を練った。そして我々は幾多の犠牲を払い、ダークソウルを１０個のパーツに分解した。その分解したパーツを別次元世界へと封印し、絶対に人も生き物も入れることのない場所へと封印することが出来た』

ダークソウルが１０個の欠片に分かれた絵が描かれている。

ネリア『しかし私は不安がよぎる。誰かが封印を解くかダークソウ

ル自身が封印を壊すかが不安になる。だがもし、この世にダークソウルを止める、あるいは破壊できるものが存在するなら、私達に、すべての世界の平和を守ってくれ。…実は書くのを忘れていたが私はダークソウルの封印の参加者である。その影響で力をほとんど失った。だが私は後悔はしない。すべての力をこの書に書き記す。頼む、世界に平和を与えてくれ。それが私からの願いだ。

著者　レオナルド・ヴィンチ』

そこで書物は閉じられた。
それを聞いた全員は……時が止まったかのように固まっていた。

ネリア「これが、ダークソウルの誕生記です」
イストワール「・・・そうですか」

イストワールは顔がすぐれない。

銀時「んで、上の神さんがダークソウル壊してバラバラにしたってか？」
ネリア「ハイ、しかし、十分の一に減っても闇は活動できます。そしてダークソウルは自らの欠片、つまり１０個全ての欠片を集めて完全復活を目論んでいます。私はそれを阻止するためにここに派遣されました」

いつもとは違うネリア。

桂「よし、ならば戦力が多い方がいいだろう」
はやて「そやな、ネリアさん、うちらとともに協力してくれへんか？」

ネリア「一緒に戦ってくれるなら私は参加しましょう」

ネリアは仲間になった。

はやて「よっしゃ！こんなん言うのも久しぶりやけど、機動六課へようこそ！」

桂「うむ」

みんなネリアが仲間になったことに喜ぶ。

しかし、ネプテューヌだけはなぜかすぐれない顔になっている。

ネプテューヌ（違う…ダークソウルはそんなので出来たんじゃない。ダークソウルは…彼女は…）

？？？

何も無さそうな白い空間。あるのは白く眼に映らないほど高い柱。下界へ見渡せる窓。そして、白い玉座に座る男が一人いるだけだ。そんな時、一人の少女がやってきた。

水色よりの白い髪、胸はそれなりにあり、背中には天使の羽が付いている。

少女「ネオ様！ネオ様！」

少女が玉座に座る男、ネオに呼び掛ける。

ネオ「ん?おお、エルナじゃないか。どうした?」
エルナ「大臣さまがお呼びなんです。至急会議室に来なさいと」
ネオ「・・・分かった。すぐ行く」

一瞬苦虫をかみつぶしたような顔になったがすぐ気を取り直して歩き出す。

会議室

そこで、幾多の次元の神々が何やら話しあっていた。

神「地上世界の人間どものせいで闇の基準値がどんどん超えていってる!このままでは時間の問題だ!」

どうやら人間世界にある闇が増え続けているとこを話し合っているようだ。
闇とは憎悪、怒り、憎しみを代表に、傲慢、悲しみ、邪心も闇の分類に入る。

ネオ(フン、こんなもの俺の知ったことじゃないが、確かに厄介だな)

ネオはこれを聞いて考え事をしていると、

ネオ(!・・・そうだ、あいつならい生贄になるだろうな?)

神とは思えない悪な顔をしていた。

エルナ「お帰りなさいませネオ様、今日はあの会議でしたか？」
ネオ「ああ、あまり解決策が見つからんらしい」

それを聞いたエルナは少し暗くなる。
が、ネオはエルナを見てニィッと笑みを浮かぶ。

ネオ「だが、この俺様が闇を消し去る唯一の手がかりが見つけた」
エルナ「え？それってなんですか？」

エルナが希望が見えたかのような顔になったが、それはすぐに終わった。

ネオ「それはなぁ、“お前が犠牲になれ”！」
エルナ「え？きゃあああああああああああ！！！」

エルナは白い光に包まれると、大きな白いひし形の宝石へと変わった。

ネオ（クックック・・・喜べ、お前は神の世界の贄となる存在だ。
そして俺の野望の踏み台としてな…）

神「ネオとやら、その宝石で本当に闇を消せるのか？」

髭を生やした老人の神がネオに聞く。

この方は書物に書き残したレオナルドである。

ネオ「当然だ。ただし、消えるではなく吸収するんだよ」

レオナルド「・・・・・・・・・・」

ネオは余裕な顔で言う。

だがレオナルドは怪しそうな目でネオを見る。

レオナルド（こやつ…どうも嫌な予感しかしないのう…悪いことが起こらなければ良いが…）

その後、レオナルドの予想は的中した。

ネオの持つ宝石が闇を吸収していった。

しかしその宝石は元はエルナだった者、故に、

エルナ『ガ・・く、苦しい…誰…か…タス、け…て…』

闇に喰われていくエルナ。

しかし誰もその声は聞こえなかった。

ネオ「見ろ！俺の考えは間違いではなかった！！これで世界は平和になるぞ！！」

ネオはこれを見て高笑いを出す。

レオナルド（…ネオの奴、あの笑いには少し違和感を感じる…。まさかと思うがあの宝石は…）

レオナルドは違和感を覚えた。

エルナ『酷い…どうして…』

大好きだった者に裏切られた。

エルナ『なんで私がこんなことに…？』

憧れだった人に捨てられた。

エルナ『…許せない…』

心と魂から闇を産み、

エルナ『…私を…すべてを裏切った者たちを許さない』

入ってきた闇が作用して、

エルナ『許サナイ、許サレナイ、世界ヲ、全テヲ、ミンナ、コワシテヤル！！』

白かった宝石が黒く変色していった。

レオナルド「な！？こ、これは！」

ネオ「（なんだもう飲まれたのか？情けない）ちっ！どうやら闇を吸いすぎてしまったようだ」

部下「現在闇の予想値が予想より大幅に超えました！現在の闇は7割減少！」

闇を吸いすぎたせいでこれ以上吸われなくなったというネオ。
だが本心は愚痴をこぼしていた。

？？？「…グォアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

宝石から黒い稲妻が周りを破壊し始めた。
これがダークソウルの誕生である。

ダークソウル「ユルサナイ！ユルサナイ！ユルサナイゾ！！ドウシテワタシヲステタンダ！！ドウシテワタシヲコンナメニ！！」
ネオ「怪物めが！貴様はここで消えるんだよ！ゆけ！」

ネオは部下達に撃墜を命じた。
ダークソウルは神の兵士達にダメージを受ける。

レオナルド（“私を捨てた”？だと？・・・一体何のことなのだ？・・・・・・・！ま、まさかあれは！？）

レオナルドは黒くなった宝石・ダークソウルの正体を確信した。

ダークソウル「ニクイニクイニクイ！ミンナニクイ！スベテニクイ！コワシテヤル！スベテコワシテヤル〜〜〜！！！」
兵士達「ぐあああああああああああああああああ！！！」

もはや暴走に近い攻撃の仕方で兵士たちが撃ち落とされる。

ネオ「ちっ！しかたない。俺がやろう」

ネオは呪文を唱える。

ネオ「・・・・・・・・・エンド・レイ！」

ババ～～～ン！！

ダークソウル「アアアアアアアアアアアァァァァァァァァ・・・・・・・」

バリーーーン！

光りの閃光が直撃し、ダークソウルは１０個の欠片に分れた。

ネオ「いまだ！１つずつ封印しろ！」

ネオの命令にダークソウルの欠片を一つずつ封印する兵士達。

ネオ「…なんとか被害は最小限にとどまったな」

安心の顔をするネオ。

レオナルド（こやつ…絶対何かを隠しておるな…）

レオナルドだけは腑に落ちなかった。

その後…

レオナルド（・・・やはりな）

レオナルドは“過去を読む”アイテム・ロストサーチを使ってネオとエルナのやり取りを見た。

レオナルド（あやつは昔から野心家じゃったが、ここまでする奴だとは…。じゃが、今のワシではあやつを止めるのは不可能。となると・・・）

レオナルドは一つの本に手を出す。
中身は白紙であった。

レオナルド（ワシが見てきたことを全てこの書に書き残そう。そのまま書くと怪しまれるがわが“魔法”で文字を変え、書き残そう）

レオナルドは本に文字を書く。

レオナルド（この際誰でもいい、あの馬鹿ものを止めてくれ。そしてあの子を、救ってくれ）

？？？

ダークソウル「ユルセナイ・・・」

暗イ闇ノナカデウゴキダス。

ダークソウル「ドウシテ、私ヲ・・・我ヲ捨テタンダ？」

ソノ憎シミハ呑ミコモウトスル。

ダークソウル「許セナイ！我ヲ捨テタヤツラヲ！ソシテ誰モ救ワナカッタヤツラモ！ミンナミンナ壊シテヤルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！！！！！！」

闇を膨張させて爆発を引き起こす。

ネプテューヌ「！？夢？」

汗を流して起き上がるネプテューヌ。

ネプテューヌ「今のは…間違いない、やっぱりダークソウルって」

そしてネプテューヌは確信を持つ。

ネプテューヌ「私が…なんとかしなきゃ…」

～おまけ～

銀八「おしえて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「は～い、あのサド悪魔もいなくなったことだし、今回のアシスタントを紹介しようか」

辰馬「アハハハハハ、ワシが担当するじゃきん」

銀八「そんじゃあ行くか。ペンネーム『鳴神　ソラ』さんからの質問だ。『マリオ「えっ？なのは（冥王）は魔王じゃなくて冥王だろ？」

おい！

ルイージ「無事…とは言えないけど終わったね」

フォックス「確かにそうだな…ダークソウルはまだ欠片だったのか…」

スネーク「全て集まれば完全復活か…」

マリオ「まあ、あの様子じゃあしばらくは回復に専念するだろうな」

ルイージ「ネリアちゃんに質問『…内の兄さんどう思う…』」

スネーク「ネリアに質問だが…『銀時以外でツッコミ所あるなと思った人物はいるか？』」

ネス「コンパさんとアイエフさんに質問『ネリアさんを見ての第一印象はどんな感じですか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

マリオ「……皆はなぜなのは（冥王）の名を出すと離れるんだ？」『ってマリオーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！お前なんてこと言ってんだーーーーーーーーーー！！！！」

真王「最近多いな、なのはが魔王だの悪魔だの冥王だの…」

辰馬「アハハハ、それって喧嘩売ってないんか？」

真王「全然、質問回答スタート」

ネリア「ええ、こんなに規格外な人は初めてです。銀さん以外で突っ込みどころと言えば桂さんですね」

コンパ「ネリアさんは本当に可愛い天使です！」

アイエフ「私は天使なんて初めて見たから言うけど、可愛かったわね」

ネリア「あ、ありがとうございます…」

ネリアは照れる。

辰馬「そんじゃあ『鳴神　ソラ』、廊下に立つじゃき。次はペンネーム『白騎士君』からじゃき。『白騎士君「スバルは3番を選んだか」

レナード「シモンのように口上を言うのか？スバルは」

白騎士君「どうかな？スバルがもし螺旋の戦士に覚醒して天元突破グレンラガンみたいにあなるかな？」

レナード「それは絶対に無い後、またスバルに質問。『2番目に使ってみたい必殺技は？』今回は今回はこれだけ」

白騎士君「質問の答えを待っています」』」

スバル「これ絶対に言わなきゃいけないですか？」

真王「はよ言え」

スバル「ううん、1番です…」

銀八「はいはい、『白騎士君』廊下に立ってなさい」

辰馬「そんじゃあ次はアリシアちゃんがアシストするじゃき。そんじゃな～」

第六十一訓：過去の歴史に意外な事実が隠されている（後書き）

ネプテューヌ「私達の前に語られし驚愕な真実、それは…」

ノワール「まさかダークソウルが作られたのは神の仕業だって言うの？」

ネプテューヌ「なんと！人類の中でカステラとチーズケーキの区別が付かないなどという人が存在するのだ！」

銀時「なんで食べ物なんだよ！ショックのあまり現実逃避してんのか？」

ネプテューヌ「この二つの区別の仕方はただ一つ！食べてふわふわしていればカステラ、もっちりな食感ならチーズケーキと認識せよ！」

ベール「チーズケーキには水分が含まれいるのですわ」

ヴァルバトーゼ「それだけではない！この二つの食感に、イワシを食してさらに健康を会得するのだ！」

フェイト「味はよろしくないけど健康にはなるよね…」

ネプテューヌ「次回『グロリアスイーターネプテューヌ』最終話！『カステラとチーズケーキ』目指せ甘もの！」

銀時「あ、ちなみに俺チーズケーキがいいな」

真王「おれも。ちなみに『分れてたって中身は同じ』が次回です」

第六十二訓：分れてたって中身は同じ（前書き）

真王「今回はちょっとした事件…なイベント」

アリシア「『リリカル銀魂』始まるよ～」

第六十二訓：分れてたって中身は同じ

ある朝の機動六課、なにもなく一時の平和な一日が来る。
そう思っていたが、

ネプテューヌ「えええええええええええええええええええ！？なにこれえええええええええええええええええええええええええええええ！！！！？？」

その平和は一瞬にして崩れたりする事態があったりする。

銀時「で、これは一体どういうことだ？」
ネプテューヌ「それはこっちのセリフだよ！」
パープルハート「こっちがそう嘆きたいわ！」

疑問を投げる銀時に突っ込むネプテューヌとパープルハート。
…って言うかネプテューヌとパープルハートがその場にいる。
それどころか、

ノワール「ほんっとうに改めてみるとなんだか複雑な気分ね」
ブラックハート「奇遇ね、私もそう思ったのよ」

ノワールとブラックハートはお互い検索しあい、

ブラン「・・・・・・」

ホワイトハート「・・・・・・」

ブランとホワイトハートはただ黙って小説を読み、

ベール「あらあらあらあら・・・」

グリーンハート「まぁまぁまぁまぁ・・・」

ベールとグリーンハートはただお互いそんな言葉を口にしているだけだった。

はやて「みんな、ネプちゃんたちがこうなった原因が分かったで」

桂「何と、八神殿、それは一体？」

はやてが原因を突き止めたようだ。

はやて「この前なのはちゃんが回収したロストロギア・ディバイダルが原因やと思うんや」

フェイト「ディバイダル…別名『分裂者』だね」

パープルハート「そのせいで“私”と“普通の私”が別れちゃったってことね」

パープルハート含め他の女神たちも納得したようだ。

ネプテューヌ「私が普通ってどういうこと！？」

ネプテューヌが突っかかるがスルー。

リイン「検査の結果ですが明日になれば元に戻るそうです」

グリーンハート「そうですか、それなら安心しました」

ノワール「じゃあとりあえず自由やっても何なく元に戻るのね」

はやて「そうや」

はやては答える。

はやて「あ、どうせや」

パープルハート「？」

はやてがパープルハートに向く。

はやて「その美しい美乳をうちに揉ませ「バキッ！」ブヘッ！」

パープルハートに殴られた。

てか自業自得だ。

パープルハート「ま、とりあえず自由やっても問題ないなら私達で好きにするわ」

フェイト「あれ？何処行くの？」

パープルハートがネプテューヌと手をつないでどこかへ行こうとしたのでフェイトが聞いてみる。

パープルハート「フッ、決まってるじゃない」

ネプテューヌ「私達が行くところはそう…」

ネプテューヌ・パープルハート「おいしい食べ物があるところだよ（よ）」

全員（分れても中身はそっくりだな…）

笑って言うからどんなんかと思えば本人そのものな答えだった。

はやて「それはいいとしてもちゃんと服着いや。その恰好はおかしいやろ」

はやてが指摘する。
水着に近いパープルハート達の服は一般に出れないのだ。

パープルハート「大丈夫よ。これくらい」

パープルハートに光が包まれる。
そして、なぜか胸部に紫のNのトレードマーク付きの白いTシャツに青いジーパン姿になった。

パープルハート「どう？似合うかしら？」
はやて「ほ～ぅ、なかなかクールなもんやなぁ」
なのは「うわ、かっこいい…」
銀時「凄い恰好だな」
桂「おお、似合うではないか」
スバル「かっこいいです」

周りはパープルハートの姿を見て高評価した。

ブラックハート「何やってるのよネプテューヌ。早く行くわよ」

っと、いつの間にか白のTシャツに黒のスカートをはいたブラックハートが出かける準備をしていた。
ちなみにホワイトハートは頭に白いリボンに白のゴスロリ。
グリーンハートは某桜の大食い幽霊の服を緑色にした感じの服を着ている。

新八「いつの間にもう着替えたんですか？」

ホワイトハート「このくらい朝飯前」

ホワイトハートは即答する。

ベール「それでは」

そう言ってネプテューヌ達はどこかへ行った。

ミッドチルダ

ネプテューヌ「む？あのクレープ屋さん…新メニューイタリアンバジル味！？早速食べよう！」

パープルハート「興味あるわね」

ネプテューヌとパープルハートは早速新メニューを注文する。

ノワール「エレキギター・・・」

ブラックハート「ディープ・ロック・ブルータイプ・・・」

ノワールとブラックハートは飾られているエレキギターに目を輝かせている。

ブラン「・・・・・」

ホワイトハート「・・・・・」

ブランとホワイトハートは本屋でただ黙って本を読んでいる。

ベール「あら？このティーカップは…」
グリーンハート「このグラスもなかなかのものですわ」

ベールとグリーンハートは高級店でいろいろ見て回っている。
特に何のイベントもない。

ネプテューヌ「いや～、最初分れた時は焦ったよね～」
パープルハート「たしかにね」

っとファミレスで食べながら言う2人。
ちなみにここはミッドチルダのファミレスです。

ノワール「そりゃ慣れないうちはみんな焦るものね」
ベール「効果は一日と言っても、なんだか名残惜しいですわ」
グリーンハート「私もそう思いますわ」
ブラン「…私は別にいい」
ホワイトハート「…私も別にいい」
ブラックハート「あんた達よくそんなことが言えるわね…」

意見にずれがあるが、とりあえず寂しそうだ。

ネプテューヌ「あ、ジュースなくなった」

いつもの調子で入れに行こうと動くと、

ネプテューヌ「あれ？」

なぜか男の人に掴まれる。
そして首元にナイフを突き付けられる。

バーーーーンッ！！！

突然の銃声に客含め店員が悲鳴をあげた。

男「テメーら動くなーー！！！」

どうやら強盗団のようだ。

リーダー「良く聞け貴様ら！この俺、ジェード率いる『萌える闘魂』が乗っ取ったー！！大人しくしていればよし！さもなくば死ぬことを忘れるな！」

ノワール（萌える闘魂って何っ！？もしかして変態なわけこいつら！？）

ノワールは心の奥底で突っ込む。

強盗団員「オラ！お前らもこい！」

何とノワール達も人質に取られる。

ジェード「さて、準備を始めるぜ」

ファミレスの外

ジェード「良く聞け貴様ら！俺は強盗団『萌える闘魂』のジェード

だ！今からこの場を占拠した！俺達を逮捕など出来んぞ！こっちには人質がいるんだ！時空管理局から１００万円提供しろ！そうすれば人質は解放してやる！」

シャッターで中が見えないが、ジェードの声が聞こえる。
外には数１０人の局員と、なのは達と銀時達がいる。
そして真選組とナンバーズもいる。

銀時「何で俺がこんなことしにゃいけなんだ？」
桂「何を言うか。困っている人々を助けて何の損もないだろう」
近藤「平和な日常を守る！それが俺達真選組の使命なのだよ」

近くにいる近藤が断言する。

山崎「局長！」
セイン「情報集めたよ～！」

山崎とセインが戻ってきた。

近藤「山崎、中の状況は？」
山崎「はい、ジェード含め強盗団が２０名、中にいる人質は店員と客含め３５名です」

中の状況を把握して作戦を考える真選組。

局員「臨戦態勢！」

局員たちがいきなり構えをとった。
強盗３人と人質が出てきたからだ。
銀時達はすっごく見覚えのある人質がいた。

ネプテューヌである。

銀時「ってオイィィィィィィィィ！！！！！なんでテメェがいるんだーーーー！！！！」

ネプテューヌ「わー！助けてー！悪いおじさん達に捕まっちゃったよ～！（棒読み）」

銀時「ムカつく！その棒読みがムカつく！！」

棒読みに答えるネプテューヌに怒鳴る銀時。

強盗団員「へへッ！残念だったな局員ども。すでに人質は俺達の手の中にある。大人しく諦めろ」

勝ち誇ったかのように笑う。

が、それが命取りになる。

強盗団員「グアッ！」

ネプテューヌを捕えていた男が吹き飛ばされた。

正確には、ネプテューヌが瞬時に抜け出して両肘で男を突き飛ばしたのだ。

強盗団員「てm「チェスト！」ゴホッ！」

もう一人の男が事態気付くが蹴り飛ばされる。

そしてネプテューヌは3人目の男に振り返り、頭を掴んで宙返りしてはその男を地面にたたきつけた。

ネプテューヌ「フゥッ」

そう口を漏らすと、周りから歓声と拍手が送られた。
ネプテューヌは一時唖然とし、照れくさく頬を掻く。

ドカーーーン！！

強盗団員「ドワァァァァァ！！！」

ファミレスに爆発が起こり、中から強盗団達が吹き飛ばされた。

パープルハート「あら？もうそっちはケリが付いたの？」
ネプテューヌ「意外と楽勝だったよ？」

中から武器をもったパープルハート達が出てきた。
どうやら彼女達は中で戦闘して強盗団を再起不能にしたらしい。
パープルハートの左手にすでに気絶したジェードが引き摺られている。

局員「確保ーーーーー！！！」

こうしてジェード率いる強盗団は御用となった。

機動六課

ネプテューヌ「いや～、面白かったね～」
パープルハート「楽しめただけよしとしましょう」
新八「なんでそうなるんだよ！！」

新八が怒鳴る。
時刻はもう夕暮。

ネプテューヌ「あ、でも明日になったら元に戻るのか…」
パープルハート「確かに、元に戻ったら“私”の記憶は“あなた”の中に残るんじゃないかしら？」
グリーンハート「記憶継承…ですね」

パープルハートは肯く。

銀時「ま、分れていても自分は自分ってことでいいんじゃねぇの？」

何気なく一言言う銀時。

ネプテューヌ「じゃあ銀さんがオカマになっても自分はオカマですってどうどうといえるんだね？」
銀時「なんでそうなるんじゃァァァァァァァ！！！」
ネプテューヌ「キャアアア！！♪」

楽しそうな顔をして銀時から逃げるネプテューヌ。
周りも楽しそうに笑う。
そして明日からも平和になっていく。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

アリシア「やっほ～！フェイトの姉のアリシアちゃんが担当するよ～」

銀八「うし、そんじゃペンネーム『鳴神　ソラ』さんから行くぞ。『ゼロＵＦ「全ての原因は偽神かよぉぉぉぉ！！！！！」

ぎゃあぁぁぁぁぁ！！痛い痛い！！飛んで来る地面の破片が痛い！！

ルイージ「凄い程兄さん怒ってる；」

スネーク「そりゃあ今回のでダークソウルもといダークハートの誕生の原因が分かったしな；」

フォックス「しかも生み出したのが傲慢な神だからマリオの怒りが凄いぞ；」

ネス「ちなみにマリオさんはそう言う神とか人の命を自らの意思で消して転生者にする神を偽神と呼んでます」

ゼロＵＦ「自らの欲望に自分を慕っていた者をモノにし挙句の果てにああ言う風にするなんて許せん！！」

ネス「確かにそうだね…ネリアさんに質問『ネプテューヌさんの養子であるリリス達を最初に見た印象はどうでした？』」

リュカ「同じく質問『内のルイージさんはどう思いますか？』」

スネーク「リリスに質問『ネリアに動物になる魔法をかけたら何になると思う？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ゼロＵＦ「頑張れよネプテューヌ！！」『・・・マリオスッゲー怒ってる」

アリシア「確かに…。あ、ネリアさん質問ですよ？」

ネリア「え？ええ、最初見たときは目を疑いましたよ。でもお姉ちゃんから事情を聞いて仲良くしています。（本当は認めんけどな）あとルイージさんですか？苦労なさってるんですねって思いました」

リリス「ネリアを動物に？多分リスじゃないかな？」

銀八「んじゃ『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

アリシア「次はペンネーム『黒神』さんからだよ。『音無へ

自分も魔法が仕えるのなら、どんな魔法が使いたいですか？

マヨラーへ

今だ出番が無い貴方は、『狂乱編』で大活躍した桂の存在が憎いですか？（黒笑）

神楽へ

原作でギャルゲーオタクと堕ちた新八を見てどう思いますか？

以上です。』えっと順番に答えるとね」

音無「とりあえず医学系の魔法だな」

土方「切るぞ桂ーーーー！！！」

神楽「マジオタクネ。キモイアル。くたばるヨロシ」

アリシア「それじゃあ『黒神』さん、廊下に立ってね♪」

真王「さて、次回のアシストはまたネリアにやらせます」

第六十二訓：分れてたって中身は同じ（後書き）

真王「次回はディスガイアでお馴染みのランダムダンジョンへ突入！」

ネリア「次回『ダンジョンは男のロマン』テイクオフです」

第六十三訓：ダンジョンは男のロマン（前書き）

真王「今日はディスガイアでお馴染みランダムダンジョン・アイテム界へ行くぜ」

ネリア「『リリカル銀魂』、始まります」

第六十三訓：ダンジョンは男のロマン

きっかけはネプテューヌの一言から始まった。

ネプテューヌ「ねぇ、みんなでアイテム界行こうよ」

魔界・地獄

銀時「で、何で俺達がこんな所こにゃいかんのだ？」

銀時はだるそうに愚痴る。

ノワール「何言ってるの。行かなきゃあなたは『あ～だるい～もうメンドクセぇよ～。もう生きることも面倒クセェよ～』とか言うじゃない」

銀時「イヤそりゃそうだけど最後のまでは言わないから俺」

さすがにそれはないだろうと突っ込みを入れる銀時。

ちなみに今いるメンバーは銀時達よろず屋組となのは達六課組、そして女神組とヴァルバトーゼ達悪魔組である。

ネプテューヌ「アイテム界屋さん、今日はこのエックスセイバーをよろしくお願いします」

アイテム界屋「エックスセイバー界ですね。お待ちください」

アイテム界屋の人は何やら準備をし始めた。
すると何か引っかかった銀時が尋ねる。

銀時「なぁ、アイテム界って何だ?」

それを聞いたヴァルバトーゼが説明する。

ヴァルバトーゼ「所持するアイテムのレベルをあげる世界だ。だがアイテム界には様々な種類があってな?普通のガムならガム界、プリンならプリン界、イワシならイワシ界、カタクチイワシならカタクチイワシ界、スルメイワシならスルメイw「イワシはもういいっての!!」・・・ま、アイテムによって世界が違う、それがアイテム界だ」

ヴァルバトーゼの説明におお~と漏らす方々。
ちなみにさっき突っ込んだのはエミーゼルである。

ヴァルバトーゼ「例えば…その木刀に名前はあるか?」
銀時「これは『洞爺湖』だよ」
ヴァルバトーゼ「つまりその木刀・洞爺湖の世界もあるということだ」

ほぼ全員納得したようだ。

アイテム界屋「準備が出来ました。何時でも出発できます」
ネプテューヌ「来た来た。みんな行くよ~」
銀時「あ~い、分かったよ」

そしてネプテューヌ達はアイテム界…エックスセイバー界へ向かった。

エックスセイバー界・1F

ＩＢＧＭアイテム界ｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｈｏｕｓｅ　ｏｆ　Ｐｅｅｒｓ）

ネプテューヌ達が降り立った世界。
周りの風景は宇宙空間のようだ。

桂「ココがアイテム界か…」
エリザベス『意外と殺風景かもしれませんね』
エリオ「そう言えばノワールさんから聞きましたけど『修行に持ってこいの相手がいる』ってどういった人たちなんでしょう？」

エリオが聞くとラハールが答える。

ラハール「それはなぁ、今すぐに分かることだ」
モンスター「グルルルルルゥゥゥゥゥ・・・・・・」

周りからモンスターのうねり声が聞こえた。
出てきた相手はいろんな種類の敵だった。

いくつもの目と触手をもつ触手魔族・モルボル。

全身骨だけの死骨族・スケルトン。
猫の様な猫娘族・ネコマタ。
右腕に筒型の腕をもつ銃魔神族・バキエル。
動く自立機械の殺人機族・キラーマシン。
巨大なレンガ状のモンスターの魔道巨人族・ゴーレム。
上半身に女性、下半身に蛇の体をもつ魔邪族・ラミア。
巨大な芋虫状の魔虫族・ビッグワーム。

そしてその他いろいろな敵がいる。

なお死骨族を見た銀時は青ざめて言う。

銀時「ちょ、ちょっと待て、あ、あんなのと戦えってのか？」
アデル「なんだ？恐いのか？」

アデルの一言に銀時はカチンときた。

銀時「恐いわけねーだろ！俺の力見せてやるぜ！！」

銀時は気合入れてスケルトンに突っ込むが、スケルトンの真後ろに妖霊族・ゴーストが出てきた。

銀時「ぎゃあああああああああ！！！」

銀時はグルっとUターンして逃げた。

新八「おイィィィィィィィ！！！何逃げてやがんだこのマダオがっ！！」

逃げた銀時に怒鳴る新八。

なのは「キャ！離して！」
フェイト「なのは！」

なのはがモルボルに捕まった。
その触手が入れてはならないところに入れてきた。

新八「フバァッ！！！！！！（超鼻血）」

直視した新八は滝のように鼻血を噴出してしまった。

ヴィヴィオ「ママ危ない！」

ヴィヴィオはモルボルをグーで殴り、モルボルを倒す。

なのは「ありがとうヴィヴィオ、今度は私の番だよ！」
ヴァルバトーゼ「よし！貴様の修行の成果俺達に見せてみろ！」

ヴァルバトーゼの言葉になのはは頷き、空中に上がって修行によって進化した技を披露する。

なのは「いくよ！スターライトシューター！！」

１０個のスフェアを展開し、モンスター軍を撃破した。
その威力はまるで得意技のディバインバスター並である。

ヴァルバトーゼ「中々の威力だな」
なのは「ヴァルバトーゼさんのおかげです」

なのははヴァルバトーゼにお礼を言う。

銀時「え?なのは、お前何時の間に強くなったの?」

なのはの強さに尋ねる銀時。

すると銀時以外は何言ってんだこいつ?みたいな顔で見る。

ノワール「知らなかったの銀時。なのは達はヴァルバトーゼ達に頼んで修行してたのよ」

ベール「魔界でたくさんの修行で今やどんどん強くなっていってますのよ」

ブラン「…知らないのはあなただけ」

銀時「・・・マジで?」

銀時は驚きを隠せない。

桂「日ごろから人の話を聞かんからだぞ」

エリザベス『まったくです』

桂とエリザベスに呆れられる。

フーカ「ま、敵みんな倒したから次行くわよ」

エックスセイバー界・４Ｆ

銀時達がモンスターたちを倒している最中、不思議な物を見つけた。

緑色で?のマークが浮かび上がっているゲートがある。

銀時「なんだこれ？」
ネプテューヌ「これは『不思議ゲート』入ってみてのお楽しみ」
そう言ってネプテューヌが入る。
ネプテューヌ達は不思議ゲートへ入った。

エックスセイバー界・４Ｆ・闇商人の間

闇商人「へイラッシャイ！ワイロ売りますぜ～！」
怪鳥族・コカリトスに似た商人が酒、クロロフォルム、爆弾、金の延べ棒を販売していた。
ネプテューヌ「じゃあそのクロロフォルムと金の延べ棒買うよ」
闇商人「へイ！値段は１０６００ＨＬいただきますぜ！」
ネプテューヌは金を払って買った。
フェイト「ワイロって…何に使うつもりなの？」
正義感強いフェイトにとってワイロはいけないもの。
マオ「どうした？賄賂など魔界では日常茶飯事の領域だぞ？」
フェイト「・・・・・・・・・」

フェイトは頭を抱えた。
なのは達人間界の常識と悪魔達魔界の常識は全然違うのだ。
ラハール「もう用はない。行くぞ」

エックスセイバー界・７Ｆ・ラーメン屋

ラーメン店長「ララ～ララ～～、んお？お客さんかい？」
重騎士姿のラーメン店を構えている男がいた。

ネプテューヌ「おじさんラーメン一つ」
銀時「お～、ラーメン懐かしいな～。一回食っとくか」
神楽「『３分以内に特大ラーメン完食』がなつかしいネ」
なのは「じゃあ私味噌で」
スバル「あたし醤油」
ラハール「とんこつを選ぶか」
ラーメン店長「毎度～」

ネプテューヌ達はラーメンを食した。
体力が５００回復した。

エックスセイバー界・１０Ｆ

アイテム将軍「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

アイテム界のボス的存在・アイテム将軍を倒した銀時達。
なお、アイテム界の３０Ｆ・６０Ｆ・９０Ｆにはアイテム大王というボスがいて、
１００Ｆにはアイテム神というボスがいる。
（修羅の世界のアイテム界ではアイテム神２である。）

ネプテューヌ「次はイノセントタウンだね」
ヴィヴィオ「一時休憩だね」
銀時「イノセント？」

銀時が気になったので聞いてみる。

ネプテューヌ「アイテム界にいる住人だよ。その人たちはいい人たちだから襲ってこないよ」

銀時はそうかと返す。

そしてイノセントタウンでネプテューヌ達は一時休憩した。

エックスセイバー界・１３Ｆ・ぼったくりバー

ぼったくりバーのママ（以下、ママ）「いらっしゃ～い、ぼったくりバーへようこそ♪」

バーの構えを立てている店主の夜魔族が挨拶をした。
その他に従業員の猫娘族、妖花族、夜魔族（この人物は色違い）もいる。

銀時「え？ぼったくりバーって何？なにぼったくられるの？」

銀時は顔を青くしていく。

ママ「あら、ぼったくりって書いてあるけど別に深い意味はないわ。それはともかく今日はお金で払う？それともか・ら・だ・で払う？」

銀時「なんか二択目スッゴイやばそうなんですけど！！」

銀時はさらに冷や汗を流す。

アルラウネ「さぁさぁそんなに硬くしないで気持ち良くなりましょ♪」

ネコマタ「そうニャ。肩の力を抜いて気持ちよ～くなるニャ～」

銀時「止めてくんない！？つーか俺積極的な女嫌いなんですけど！？」

銀時は暴れ出すがネコマタの人間顔負けのパワーのせいで振りほどけない。（てか人じゃねぇけど）

ネプテューヌ「銀さ～ん、先にお金払った方がいいよ。１０万ＨＬ」

銀時「高ぇよ！！んな金払う気はねぇよ！！」

ネプテューヌ「でも払わないと男の尊重が根こそぎ取られちゃうよ

？」
銀時「…分かった、払う」
ママ「あらあら、毎度ありがとうね♪」
銀時は男としての尊重を１０万ＨＬで守ったのだった。

エックスセイバー界・１６Ｆ
なんとかぼったくりバーから逃れた銀時。
しかしなのは、フェイト、シグナム、リインフォース、スバル、ティアナは機嫌が悪そうな…というか銀時に殺気を向けている。
その原因は自分で考えてください。

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

突然警報みたいな音が鳴った。

銀時「え？これ何？」
ヴァルバトーゼ「これは界賊が来る警報だ！来るぞ！」

ＩＢＧＭ界賊団登場ｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｍａｋｅ　Ｔｈｅ　Ｈｅｌｌ）

ガラガラガラガラガラ！

馬車の走る音が聞こえる。

黄巾界賊団船長「武器をもって立ち上がれ！我らは天下を手にするのだ！！」

黄巾界賊団員達「オオ～～～～～～！！！」

黄巾界賊団が現れた！

ネプテューヌ「なんだ、この人たちか」

ノワール「いつにもなくうざい奴らね」

なのは「彼らを知ってるの？」

ベール「黄巾界賊団はアイテム界でよく現れる界賊ですわ」

黄巾界賊団のことを説明するベール。

ネプテューヌ「でも対して強くないから安心して」

黄巾界賊団船長「なんだと！？そのセリフは俺達の実力を見てから言いやがれ！！」

で・・・

黄巾界賊団をやっつけた。

ネプテューヌ「フッ、またつまらん物を切ってしまった」
銀時「何カッコつけてんだコラ」
ネプテューヌ「イタッ」

カッコつけたネプテューヌにど突く銀時。
なにはともあれ、次のステージへ進んだ。

エックスセイバー界・２４Ｆ

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

またしても警報が鳴る。

銀時「今度はなんだ？」

遠くから船が見えた。
胴体はガレオン船であるが、両サイドが天使の羽でトップには十字架がある。

聖女界賊団船長「全ての根源である悪を排除し、すべてを平和にせよ！」
聖女界賊団員達「おお～～～～～！！！」

聖女界賊団が現れた！

現れたのはロードオブヴァーミリオンに出てくるアテナとほぼ同じ姿の界賊団だった。
数は7体である。

銀時「ちょっと待てェェェェェェェェェ！！！」
新八「本当にちょっと待てェェェ！！なんで聖女が界賊やってるわけ！？」

彼女達は界賊やっているがどう見ても神族や天使に属する者達。
とても界賊をやるとは思えない。

全員「さぁ？」

ネプテューヌ達も魔界関係者も全く知らないようだ。

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

するとまた警報が鳴り出す。
船影はどこかの宝船のようだ。そして赤い服にはにわの様な仮面をかぶっている敵がいる。

ヘイホー界賊団船長「今日はがっぽり盗んだな。ん？あっちの島に行ってもうひと稼ぎだ！」

ヘイホー界賊団が現れた！

銀時「新手かよ！！」
ネプテューヌ「これはちょっと面倒だけどやるしかないね」

スバル「だったら私が！」

スバルがウイングロードで駆け出す。
リボルバーナックルが回転を始める。

スバル「リボルバーーーー！インパクト！！」
ヘイホー界賊団「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！」

リボルバーナックルを地面にたたきつけた衝撃波でヘイホー界賊団が全滅した。

ヘイホー界賊団をやっつけた。

新八「ヨワッ！あんたらなにしに出てきたんだ！！」
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃ～～ん。こっち終わったよ～」

ヴィヴィオが手を振っている。
その周りにボロ雑巾になった聖女界賊団がいた。

聖女界賊団をやっつけた。

銀時「もうそっちは終わらせたのか？」
ネプテューヌ「さぁ、長居は無用だよ」

こうして次のステージを進み、３０Ｆのアイテム大王を倒し、エックスセイバーはレベル３０へとパワーアップした。
その後逆界賊団でレベルを５０へとあげた事も追加しておく。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネリア「ハイ今回もやらせていただきますネリアです」

銀八「よし行くぞ。ペンネーム『支配者』さんからの質問。『はやてに質問です。どんなアニメキャラの乳をもみたいですか？』ってセクハラじゃねぇかこれ！！」

はやて「うちは胸が大きくておしとやかな人がええな」

銀八「答えやがったし！！『支配者』！セクハラ発言は減点だぞ！！」

ネリア「・・・次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんからです。『マリオ「今回はちょっとした凄い事になってるな」

ルイージ「分裂；」

スネーク「けれど性格はあんまり変わってないな…」

フォックス「んでまあ…倒したな」

ネス「あっさりだね～」

リュカ「ご愁傷様だよね；」

マリオ「そうだな…銀時達に質問『自分がもしネプテューヌ達と同じ様に分裂したらもう1人の自分はどんな感じだと思う？』」

ルイージ「ネプテューヌ達に質問『怒った兄さんどうだった？；』」

ネス「リリスに質問『普通の状態のネプテューヌさん達と女神状態のネプテューヌさん達で動物になる魔法をかけると同じ動物になる？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

銀時達「イヤ多分同じだろ（アル）（じゃろ）」

ネプテューヌ「分かるよその気持ち、一緒に倒そう！」

ノワール「凄まじい怒りね…」

ブラン「・・・（ベールに隠れる）」

ベール「あらまぁ・・・」

コンパ「恐いです…」

アイエフ「こりゃかなわないわ…」

リリス「さっき試してみたら同じ動物だったよ?」

ネリア「やったんですか!?・・・『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒神』さんからです。『銀時へ

ブレイブルーのキャラクターを見てどう思いますか?以下の人物から一人ずつ答えて見てください。

ラグナ・ザ・ブラットエッジ　『ブレイブルー』版の銀時

ジン・キサラギ　ヤンデレ的なブラコン。

ノエル・ヴァーミリオン　貧乳ヒロイン

レイチェル・アルカード　ラグナの天敵（?）

ニュー　ヤンデレ二号。

ツバキ・ヤヨイ　美女だけどブラコン好き。

マコト・ナナヤ　露出獣人。

ハザマ　（ユウキ・テルミ）　多重人格なサディスト蛇男。

以上です。』」

銀時「なんでだよ！なんでブレイブルーが出るんだよ！・・・まぁ順番に言うとだな、こいつだよ、何でこいつと俺の声が似てるんだよ。マジムカつく。イヤブラコンっておい…。まぁ貧乳は当たり前だな。なんだ？このロリ野郎は？ヤンデレって…。こいつもブラコンかい！！リリスといい勝負だな…いやミーニャか。サドは止めろって…」

真王「『黒神』さん。あっしはブレイブルーあんま知らんのであまりそう言う質問はしないでください。次のペンネームは『月光閃火』さんだ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…やっぱり分裂しても中身はそのまんまのようだな…。まぁ…元々が同じだから当然か。

輝刃「ま…各々が個性的で魅力的だから別に構わんか…。」

そうだな…あ、質問…行くぞ？まずは俺からだ。

1．ネリアに質問…やっぱり、ネプテューヌ達みたいに『〇〇〇ハート』みたいな形態になれるのか？なれるのだったら、どんな戦い方をするんだ？

輝刃「確かに、まがりなりにもネプテューヌの妹分な訳だからな…。次は俺からだ。」

2．作者に質問…使用作品の欄に『ＩＳ―インフィニット・ストラトス―』が入ってたハズだが…どっかの回の話で出てきたのか？それとも、今後の話の中で登場するのか？

あ～…それは確かに気になるな…。というか…他の作品のも、まだ出てきてないのがあると思うが…どうなんだろ？』・・・は？その作品は『第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている』を見てから言え」

ネリア「作者さん！少し自重してください！ちなみに私はお姉ちゃんの様に変身は出来ません。女神と天使じゃ身分が違いますし、変身できるのはお姉ちゃんったちだけです」

真王「ヘイ、『月光閃火』さん。もっと小説を確認しろ」

銀八「んじゃ次、ペンネーム『白騎士君』だ。『白騎士君「分裂しても中身は変わらないね。早速質問です。『僕の質問したスバルの必殺技は本編で使いますか？もう一つ質問スバルはグレンラガンのシモンの様に口上を言いますか？』今回はこれだけです答えを待っています」

レナード「俺の出番は？」』」

真王「『白騎士君』、それは使わんしさせはしないよ?そんなわけで次!『黒龍』からの質問だ。『黒龍「テスト終わって久しぶりの感想で～す♪」

銀時「これでやっと小説投稿できるな」

黒龍「いやホント、マジで大変でした」

ソラ「結果は微妙だけどな」

黒龍「そう言う事言わないで!!」

銀時「今回は分裂するかありえない事が起きたな」

黒龍「そんでもって事件をあっさり解決する所は彼女達らしいですね」

ソラ「そうだな」

黒龍「じゃあ質問いきます。

1．ネプテューヌに質問。分裂したパープルハートとなんか合体必殺技と思いつきましたか?

2．真王さんに質問。最近どこかの小説とのコラボとかを考えていますか?

3．リリカルメンバーと女神四人に質問。さっちゃんビームが出るとんでもメガネをどう思いますか?」

ソラ「じゃあ次も楽しみにしているぞ」

銀時「じゃあな～」

黒龍「最後に最高級ワインを贈っておきます。アルコール濃度高いんで気をつけてくださいね～」『あ～、ネプテューヌは思いつかなかったと言ってました。あとコラボ小説のは考えてますよ?無敵の神と女になった兄と極オタクの妹のとこのだがな。そして最後のだが…みんなありえないってちょっと否定的な答えを出しました。』黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「そんじゃ最後だ。ペンネーム『亀鳥虎龍』『～質問～
1．はやてに質問です。　僕の小説では、温泉で神裂の胸を揉んでいました。　自分で見てどう思いますか?

2．シグナムに質問です。　僕の小説の主人公のうち、戦いたいキャラは?

上条当麻

一方通行（アクセアレータ）

奴良リクオ

鑢七花

3．沖田に質問。　土方抹殺のアイテムを使うならどれが良い?
答えたら、そのアイテムをプレゼントします。

ロケットランチャー

追尾装置付きミサイル

毒入りマヨネーズ』碌なもんねぇな…」

はやて「そっちのうち、どんな胸の揉み応えやったんや？」

真王「何つう質問してんだテメェ！！」

はやて「ギャブっ！！」

真王に殴られた。

シグナム「そうだな…七花が良いな」

沖田「それら全部くだせぇ。それで土方さんを亡きものにしまさぁ」

土方「んじゃテメェが死ねェェェェェェェェェェ！！！！！」

沖田と土方は乱闘を始めた。

真王「はぁ、『亀鳥虎龍』さん、とりあえず廊下に立て。あ、それからこんな企画作ったよ」

『自分の界賊団

これは自分オリジナルの界賊船とそのキャラクターを使って界賊団を作るバトンです。

界賊船のパーツと乗せるキャラはどんなんでもよい。

資料

界賊団名

界賊船ボディ
界賊船ヘッド
界賊船リア
界賊船右サイド
界賊船左サイド
界賊船トップ

界賊団員（1～10人）（船長は一人）

例

ねぷねぷ界賊団

ボディ：ガレオン船（黄色）
ヘッド：プラズマ砲台（赤）
リア：ロケットリア（黒）
右サイド：ハルバードの右翼
左サイド：ハルバードの左翼
トップ：大和の主砲

ネプテューヌ（船長）
ノワール
ブラン
ベール

こんな感じです。私の場合は、

真王界賊団

ボディ：ガレオン船（赤）
ヘッド：ジャイアントドリル（赤）
リア：バーストエンジン（赤）
右サイド：ハルバードの右翼
左サイド：ハルバードの左翼
トップ：大和の主砲

銀時（船長）
ネプテューヌ
ノワール
ブラン
ベール
桂
神楽
なのは
フェイト
サチコ

希望相手

黒神
黒龍

鳴神ソラ
亀鳥虎龍
白騎士君
月光閃火
支配者』

真王「そんなわけで次のアシストはヴィヴィオが出ます。では」

第六十三訓：ダンジョンは男のロマン（後書き）

真王「次回は何と銀魂史上最強最悪の緑の大魔王の降臨だ！！」

ヴィヴィオ「次回『最凶恐怖キャラって偶にいたりする』ていくおふだよ」

第六十四訓：最凶恐怖キャラって偶にいたりする（前書き）

真王「さて今回はあの緑の花屋の登場だ」

銀時「みんな！その人から逃げてぇエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！！」

真王「うるさい黙れ」

第六十四訓：最凶恐怖キャラって偶にいたりする

それはとある日の事。

銀時、神楽、新八、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの7人はスカリエッティに何か重要な事を頼まれてアジトに来た。
そしてスカリエッティの部屋で7人はスカリエッティの以上に青ざめている表情に不思議に思っていた。

銀時「んで、どうしたんだスカリエッティ？また厄介な事を頼み込んできたってのか？」
スカリエッティ「……あ……ああ」

珍しくも弱気なスカリエッティに銀時も流石に不思議がる。
一体何があったかのかと気になる。

スカリエッティ「今日は、君達にある人物と会わせたくてね。それも銀時君と神楽君と新八君の知り合いで、会いたがっていたようで」
銀時「え、マジで！？そいつって……」
神楽「姉御アルか！？」

銀時と神楽はスカリエッティのある人物とは誰なのかを気づく。
神楽の言う姉御とは新八の姉のお妙であり、神楽は彼女のことを慕っている。
2人はそう期待込めてだと思うが……

スカリエッティ「いや、そんな名の人物ではなく……何か花屋であるようで」
ネプテューヌ達「花屋？」

ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの４人は花屋である事に意外そうな表情をする。
銀時と神楽と新八もそうであるが、花屋であり自分達の知り合いであると聞くと、急激に青ざめる。
その人物は嫌と知っている。

かぶき町に住む天人であり、その中でも最凶であるあの緑の魔人が。

銀時・神楽・新八「……」

３人は青ざめて、体をブルブルと震えている。
花屋であるならあの男に違いないと嫌と思う。

ネプテューヌ「あれ？銀さんどうしたの？」
ノワール「神楽も新八もなに震え得てるの？」
ブラン「…トイレ行きたいの？」
ベール「どうしたのでしょうか」

ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの４人は一体３人は何に怯えているのか分かんなかった。
しかしその恐れる理由がすぐに分かる、
何故なら、その３人でさえも恐れる最凶の人物が今部屋に入ってきた。

？？？「おやぁ、坂田さんに神楽ちゃん、そして志村君じゃないですかぁ！！」

愉快そうに現れて笑いながら現れたその男は、文字通り人間ではなく天人であった。

頭に花が生えていて可愛らしいが、それを除けば他全体は鬼の様な顔つきと体制であった。
緑色の体色にとてつもない威圧感を放つ魔眼とも言える瞳。
そして何でも砕きそうな歯。
それはまさしく鬼である。

その男を見たノワール、ブラン、ベールは青ざめて時が止まったかのように固まってしまった。
ネプテューヌの場合は唖然としていた。

銀時「あ……あはははは、へ…屁怒絽さん、いや屁怒絽様…まさか貴方もいらしてたなんて思いもよりませんでしたァ……あはははは」
屁怒絽「はぁい。何か志村君から事情を聞かされて、私も店を閉めて貴方達を探していたんですよ。そしたら変な光に包まれてしまい、気がついたらみっどちるだって言う異世界に飛ばされてしまったんですよ。まさかここが、以前金髪のお嬢ちゃん達が言っていた異世界ですかねぇ」
銀時「そ……そうなんですよぉ！さすがの屁怒絽様も突如の瞬間移動に驚いたでしょ！」
神楽「いやぁ……ま……まさかお前もこの世界に飛ばされたんてなぁ、私すっかり姉御だと思ったヨォ……あ…あはははは！」
新八「いやぁ…ホントあなたが来るなんて思いもよらなかったですよ…あ…あはははは！」

屁怒絽が銀時と神楽と新八の再会のあまりに嬉しそうに喋りだす。
一方の銀時と神楽と新八は屁怒絽の圧倒的怖さに固まってしまい、とにかく怒らせないように喋っていた。
そして屁怒絽は、見慣れていないネプテューヌ達女神組の４人に気

づいて、自己紹介をする。

屁怒絽「あ、どうもすみません。挨拶を遅れました……私、坂田さんと同じ世界で花屋をやっています……屁怒絽（ヘドロ）です」

自己紹介の名を聞くと、３人は急激に汗を流す。

屁怒絽「放屁の『屁』に怒りの『怒』、絽便マスクの『絽』と書いて……屁怒絽（ヘドロ）です」

彼がそう言うと、３人は青ざめていた。

ノワールは顔中に汗を流して、苦笑しながらも恐怖を感じていた。
ブランは体中が震えていて、今でも泣き出しそうな表情をしている。
ベールにいたっては体中が震えて作り笑いを浮かべるも怖くてひきつらせている。
屁怒絽が相当なまでに怖いのである。

何せ、屁怒絽の姿だけじゃなくその威圧感は並大抵な者ではない。
そのあまりの怖さに生命型ロストロギアしか見えず、ゾーマよりも強そうである。

屁怒絽はあの宇宙三大傭兵部族の一角、茶吉尼族である。
その戦闘力は半端じゃないほど高く、屁怒絽はその上位に入りそうな雰囲気である。
只一人を除いては…。

ネプテューヌ「へぇ～、屁怒絽さんって言うんだ。私ネプテューヌ、よろしく」

そう言って手を差し出す。

銀時（オイィィィィィィィ！！！何やってんだこの子ォォォォォォォォォ！！！！）

神楽（屁怒絽に握手求めてるアルゥゥゥゥゥゥゥ！！！）

新八（って言うかネプテューヌさん全然怖がってねぇエエエエエエエエ！！！奇跡だよ！！スッゴイ怖いもの知らずだよ！！！）

銀時達はネプテューヌの行動に心の中でシャウトする。

多分ノワール達も同じことを考えていただろう。

屁怒絽「え？あ、はい、こちらこそ」

屁怒絽は少しあっけにとられたがとりあえず握手した。

屁怒絽「あ、そうだ、是非ともお礼がしたいのでもし良かったらこの当たりで僕が立てた家をご招待したいので…是非皆さんも遊びに来てください」

何か無駄に威圧感を放っているのか、ノワール達は青ざめて汗だらけである。

屁怒絽「では、お待ちしております」

屁怒絽は丁寧に挨拶してこの場を去る。

屁怒絽が去ってから数分後、彼女達の止まっていた時がようやく動き出す。

ノワール「怖ァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」
ブラン「恐ぇよ！！！なんだよあれはよう！！あんな怖い奴見たことねぇよ！！！」

ノワールとブランがようやく恐怖の感情を表して言い出す。
自分達も散々モンスターなどで銀時の世界の異常な存在には見慣れても、屁怒絽の存在はそれが生易しいように見えた。

ベール「神楽さん、銀さん、一体何なんですかあの人ォ！？」

ベールも屁怒絽の存在には恐怖しか見えていない。

銀時「……あ……あはは、あの人は屁怒絽って言って、俺達と同じ世界に住むかぶき町の花屋さんをやっている人物で、ほら……『へドロの森』っと言う花屋の店を立てている天人なんですよ」
ノワール「全然花屋の顔じゃないでしょあんなのォォォォォ！！間違いなく花を利用して花粉を撒き散らして世界を征服しようと企む存在しか見えないわよォォォ！！」

ノワールは屁怒絽がそんな存在である事に見える。
実際の銀時達も最初は屁怒絽のあまりの怖さにそう思ってしまった。

ネプテューヌ「みんな何で屁怒絽さんを怖がってるの？」
ノワール「恐いに決まってるわよ！！！っていうかなんでネプテューヌは平気なわけっ！！？」

屁怒絽を全く怖がらず平気でいるネプテューヌにノワールは突っかかる。

ネプテューヌ「そんなに恐がらなくていいよ。ホラ、屁怒絽さんの頭にある花を見続けていればきっと怖くなくなるから…」

ネプテューヌはそう言うが、よく見ると目のハイライトが消えている。

ノワール（もしかして恐怖通りこしてしまったわけ？）

恐怖通りこして逆にやさしく接するようになったようだ。

ネプテューヌ「さぁみんな、早く屁怒絽さんのところにいこ？」

銀時「それはいや…じゃなくてそれはいいけど引きずらないでくれる！？嫌な予感しかしないんですけど！？」

ノワール「ああ、ネプテューヌ！お願いだから離して！！」

ずるずると銀時達を引きずるネプテューヌ。

スカリエッティがハンカチをもって振った光景が見えた。

ミッドチルダ・屁怒絽の森

ここは、屁怒絽が立てた樹で作られた花屋『ヘドロの森』である。

場所はほぼスカリエッティのアジトの隣で、屁怒絽がここで店を経てる許可をスカリエッティにお願いした。

スカリエッティは断れば何されるか知らない為、一発で許可した。

ナンバーズ達もスカリエッティの判断に賛成する。

何せ屁怒絽の怖さは最凶とも言うべき存在であり、間違いなく自分達より強い。

逆らえば殺されるからだ。

屁怒絽から放たれる威圧感は、間違いなくＳＳＳランクは達成する。
下手すれば生命型ロストロギアをも瞬殺出来そうなほどの強さを秘めている。

そんな屁怒絽の店の中に、銀時、神楽、新八、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの７人はいた。
６人は今だに、屁怒絽の圧倒的な恐怖に怯えて震えていた。
ネプテューヌはニコニコ笑っている。

屁怒絽「それにしても不思議ですね。あの金髪のお嬢ちゃん、フェイトちゃんでしたっけ。まさか私も、坂田さん達と同じくあの子の世界に飛ばされるなんて思いもよりませんでした」
銀時「そ……そうですねぇ、フェイトが屁怒絽様が来たって知りゃ驚きますよ」

屁怒絽の存在に今だ慣れていない銀時はビビりまくっている。
何せ屁怒絽はゾーマをも倒せそうな強さを持っていそうであり、如何に英雄である銀時でも屁怒絽だけには敵に回したくない。
ノワール達も同じである。
ＳＳＳランクの戦闘力がありそうな屁怒絽に敵に回しただけでも恐怖しだす。

屁怒絽「それに、ネプテューヌちゃん、ノワールちゃん、ブランちゃん、ベールさんだったっけ？」
ノワール・ブラン・ベール「は…はい！！」

ネプテューヌ「なに？」

思わずビクッとして返事するノワール達。
屁怒絽は頭を下げてお礼を言い出す。

屁怒絽「坂田さん達が色々と世話になって、ご近所としてお礼を言います。本当にありがとうございます」
ノワール・ブラン・ベール「いえいえ、とんでもございません！！」
ネプテューヌ「別にお礼言うことじゃないよ～」

礼儀正しい屁怒絽の礼儀正しい返事に、ノワール達は苦笑しながらも言い出す。

屁怒絽「そう言えば皆さんは、僕が花屋やっている事が変だと思っていますか？」
ノワール「いえいえ、そんな事は！！」
屁怒絽「ははは、良いんですよ。こんな見てくれじゃねぇ」

屁怒絽の質問にノワールが汗だらけに答える。
しかし、屁怒絽は愉快に笑い出す。

屁怒絽「僕はねぇ、花になりたいんです」
ノワール・ブラン・ベール「？」
屁怒絽「昔からこんな外見の為に他人に怖がられた者でね、せめて心だけでも花のように綺麗になりたいと…だから少しでも花と一緒にいられる仕事がしたくて…最初はやっぱり向いていないみたいだっと思いましたよ。お客様も1人も来なかったから」

前の屁怒絽は孤独であった。
孤独のあまりに悲しい思いもたくさんした。

しかし銀時と出会ってからは少し心が晴れた感じでいる。

屁怒絽「でも坂田さん達は違いますよ。私を怖がらずに接してくれたのは坂田さん達が初めてですから」

銀時・神楽・新八（すみません、あの時もメッチャ怖がっていましたけど！！）

屁怒絽にとってはそう思うが、銀時と神楽と新八は単に勢い任せになって接触してしまっただけである。

そして今だに屁怒絽の事を怖がっている。

ベール「あのう、銀時さん…屁怒絽さんって外見よりも内心は良い人ですね」

銀時「ああ、屁怒絽様は心が綺麗だけど単に外見が怖いだけの人なんだぜぇ……あはははは」

彼女達は屁怒絽の本心を理解できた。

屁怒絽「あ…そう言えば坂田さん達は今、機動六課と言う場所でお世話になっているんですね。でしたら、後で私が渾身込めて育て上げた花を機動六課の皆さんに渡してください」

銀時達「は…はい、喜んでぇ！！」

屁怒絽からの差し入れを、青ざめながらも受け取ろうとする銀時達。

ネプテューヌ「あ、そうだ。屁怒絽さん、偶には機動六課（こっち）に来ない？」

全員（何言ってんだぁぁアアアアアアアアアアアア！！！）

ネプテューヌの突然過ぎる発言に全員心の中でシャウトする。

屁怒絽「奇遇ですね。私も行こうと思っていたんですよ」
全員（来るのかよォォォォォォォォォォォォ！！！！）

で・・・

屁怒絽「と言う訳で、しばらくはスカリエッティさん所の隣に住むことになりました…屁怒絽です」

その後、屁怒絽は銀時達に機動六課のみんなに挨拶したいと案内されて、機動六課部隊長オフィスではやて達に挨拶する。
そして屁怒絽の間近でみるはやては青ざめて大量の汗を流していた。
なのは、フェイト、辰馬、理樹、葉留佳、ゆり、音無、日向、直井は苦笑して青ざめながら震えていて、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、シグナム、ザフィーラ、真人、謙吾、来ヶ谷はただ震えていてヴィータ、リィンフォース、リィン、コンパ、アイエフ、サチコ、小毬、クド、鈴、ユイにいたっては涙を流していた。
美魚と椎名はいつの間にかにげ出していた。
唯一平気なのは、ネプテューヌとリリスとミーニャとアルラ、そしてヴィヴィオである。

ヴィヴィオ「うわぁ…あの人の頭に咲いてある花って綺麗だよ、パ

パァ♪」
銀時「あ…ああ、そうだね」

と屁怒絽に全然恐怖しないヴィヴィオは、屁怒絽の頭に咲いてある花にウキウキと笑っていた。
どうして屁怒絽が怖くないかは、あえて聞かないでおく。

屁怒絽「あのう、お近付きにとこれどうぞ。僕が渾身込めて育てた花ですので」
はやて「ありがたく受け取りましたァァァァァ！！！！」

と頭を下げながら受け取るはやて。
もしちゃんとしなければ殺されるからっと思った。

こうしてかぶき町からまた1人、原因不明の現象によってミッドチルダに舞い降りた。
世界最凶の花屋、屁怒絽。
外見が恐怖の存在でも花のように優しき純粋な心を持つ天人は、ミッドチルダでも敵に回してはいけない人物と認定されるであろう。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ヴィヴィオ「こんにちは～。ヴィヴィオだよ～」

銀八「んじゃ始めますか。ペンネーム『月光閃火』さんからだ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…界賊団の面々は、これからもぶっ飛んだ感じの奴らがボンボンと出てきそうだな…（汗）。

輝刃「…反論出来んな…（汗）。とりあえず、質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．銀時達に質問…屁怒絽の仲間でこんなキャラが居たらどうする？
仲間その1…『テイルズオブデスティニーシリーズ』の『バルバトス＝ゲーティア』
仲間その2…『第3次スーパーロボット大戦α』の『ケイサル＝エフェス』
仲間その3…『ブレイブルーシリーズ』の『黒き獣』

うっ…そのパーティーは怖ェな…（汗）。次は俺からだ。

2．高杉に質問…ぶっちゃけ自分と同じ声の『ＳＯＵＬ　ＥＡＴＥＲ』の『エクスカリバー』をどう思う？

輝刃「中の人ネタを引っ張り出すか…（汗）。」『」

全員「い、いやだっ！！」

真王「だろうな。あと高杉、応えてくれ」

モニタが出て高杉が映る。

高杉「こんな奴が俺かと思うと吐き気がするな」

真王「だな。『月光閃火』さん、廊下に立ってくれ」

ヴィヴィオ「えっと次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんだよ。『マリオ「今回は良い点での感想」

ルイージ「銀さんは魔界は無理だよね；」

スネーク「だな…」

フォックス「しかしアイテムの強さを上げるダンジョンか…」

ネス「凄いね～」

リュカ「次回は何が来るんだろう？；」

マリオ「質問、『銀時達も何か武器をパワーアップさせたか？』」

ルイージ「ネプテューヌ達に質問『ネリアちゃんと再会出来た時どうだった？』」

スネーク「なのは達に質問だが…『何時の間に修行してたんだ？』」

次回を楽しみにしてます♪

マリオ「どうなるのやら…」』」

真王「ああ、今回パワーアップさせたのはネプテューヌのエックスセイバーだけなんです。残念ながら銀時達のはないです。でも後にパワーアップするかも？それとネプテューヌ達はネリアにあってとっても嬉しそうにしていましたよ。それからなのは達ですがゲラビッツとの対戦後ヴァルバトーゼ達に頼んで修行してもらったとです」

ヴィヴィオ「それじゃあ『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい？」

真王「何で疑問形？まいっか。次は『支配者』からだ。『支配者「いや～今回も笑えましたね」

銀時「そうだな」

支配者「では質問です。1銀時に質問、女神メンバーの中でＳＭプレイをするなら誰がいいですか？（黒笑）2、シグナムに質問私の小説の登場人物の中で戦うなら誰がいいですか？

1、ブレイド

2、剣心

3、セト

4、シャナ

5、綾子

6、イヴ

7、ヤミ

8、セイバー

この中から選んでください。3、マヨラーに質問、最近全く出番がありませんがそんな自分をどう思いますか？」

支配者「これで終わります」』で、どうなんだ銀時」

銀時「しねぇよ！！何つう質問だよこれ！！」

真王「確かに。次シグナム」

シグナム「どちらかというとセイバーだな」

真王「最後にマヨ方」

マヨ方「おい誰がマヨ方だ・・・って名前変わってるじゃねぇかーーーー！！！」

真王「良いから答えろ土方」

土方「うっせぇよ！！って元に戻ってる（ホッ）。そんなもん悔し

いに決まってるだろうがーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

真王「忙しい奴だな。『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

ヴィヴィオ「次はペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍』「なるほど、今回は武器をパワーアップする話ですか」

ソラ「つうか、なのは達がいつのまにか成長してるな」

銀時「六課最強伝説でも生まれんじゃね？」

黒龍「ありえる」

ソラ「そう言えば黒龍、バトンはどうするんだ？」

黒龍「ちょっと今回はできませんね。今の所時間がありませんし。俺的にはこのバトンは合わないので」

銀時「おいおい、贅沢言うなよ。駄作者のくせして」

黒龍「駄作者言わないで！！」

ソラ「お前はバトンとか作らないのか？」

黒龍「あ、それなりに幾つか考えています」

銀時「あんま俺に被害がないやつ作れよ」

黒龍「まぁ小説の方が落ち着いてからですけど」

ソラ「それは仕方ないな」

銀時「そんじゃ最後に質問だ。ネプテューヌに質問だ。お前は人生を掛けて食いたい料理とかあるか？」

ソラ「俺からネプテューヌに質問だ。お前に食えない物とかあるか？」

黒龍「最後に俺からネプテューヌに質問です。東大級の問題がでたらできますか？」

銀時「そんじゃな～」

ソラ「じゃあな」

黒龍「次回も楽しみにしています」『ぜんぶネプ姉ちゃんあての質問だね」

ネプテューヌ「う～ん、全部！」

真王「ッオイ！」

銀八「薄っすら予想してたけどそれかよ！」

ネプテューヌ「それに私がたべられないものなんてないよ！（ピーマン以外は）」

真王「（絶対ピーマン残してる奴がそれを言うか？）んで最後」

ネプテューヌ「東大？どんな？」

真王「これだ」

東大の本を見せる。

ネプテューヌ「……ブシュッ！！」

頭から煙が出た。

真王「あらら、無理か。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。そして小説頑張ってください。最後に『月光閃火』さん。『鳴神　ソラ』さんの界賊団を公開します」

『月光閃火』
『名前：万達界賊団

ボディ：キャラヴェル船（白）
ヘッド：超電磁荷粒子砲（レールブラスター／黒鉄）
リア：ブーストスラスター（金色）
右サイド：グラップル右アーム（朱）
左サイド：グラップル左アーム（朱）
トップ：ジャミングミスト発生装置（白銀）

月光閃火（船長）

希望相手
伽藍
鋼　知恭
ｒｉｎｇ
龍の骨』

『鳴神　ソラ』
『界賊団名：スマッシュパイレーツ

界賊船ボディ：ガレオン船（虹色）
界賊船ヘッド：ハルバードの砲台
界賊船リア：バーストエンジン（白）
界賊船右サイド：ハルバードの右翼（虹色）
界賊船左サイド：ハルバードの左翼（虹色）
界賊船トップ：グレートフォックスの主砲

界賊団員
マリオ（船長）
ルイージ
ソニック
スネーク
フォックス
ファルコ
ピット
リンク
ヨッシー
クッパ』

真王「んじゃ次回のアシストは屁怒絽にやらせようか」

銀八「え？・・・・・・・・・・んじゃ俺旅に出るわ」

真王「二度と帰ってくんな」

第六十四訓：最凶恐怖キャラって偶にいたりする（後書き）

真王「次回は何とコラボ作品！女の子大好きなあのキャラが登場だ！！」

屁怒絽「えっと、次回『百合っこ娘に気をつけろ』テイクオフ」

～予告～

ナレーション「白百合の少女が六課に流れ着くようです」

第六十五訓：百合っこ娘に気をつけろ（前書き）

真王「『リィーン』さんから許可をいただき、あのゲストキャラが出演します！」

銀時「あ～、あの百合ゆりうるさい…」

真王「ストップ、それではスタートだ！」

銀時「どっちだよ！！」

第六十五訓：百合っこ娘に気をつけろ

とある次元世界のとある妹が、女神たちや銀色の魂を持つ侍と出会うおはなし。

ミッドチルダのはずれのはずれ、そこに一人の少女が倒れていた。

見た目は、太股位まで伸びた銀髪をストレートにし、金色と蒼色の虹彩異色の瞳をし、顔立ちは美しく整っていた。身長は変わらないが、痩せすぎでは無く、逆に無駄な部分も無く、スタイル抜群と言ってもいい。言うなら、美少女と呼ばれるだろう。簡単なところ“Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！”の“ユイ”を長髪ストレートに変え、右目が蒼、左目が銀色のオッドアイにした感じの少女だ。

???「あれ？ここはどこだろう（。＿。）？」

少女は目を覚ましてあたりをうかがう。

ボロ着いた建物。青い空。そして遠くに見える近未来都市の様な街。

???「こ、ここって…ミッドチルダ！？うわやばっ！ニハニハが止まらん（＾∀＾）！」

ミッドチルダと知ると嬉しそうな顔をする少女。

???（時期からするとここってＳｔｒｉｋｅｒＳぐらいかしら？ってことは大人になったなのはちゃん、そしてツンデレティアナちゃんとスバルちゃんとキャロちゃんに会える！！…あ、確かエリオもいるんだっけ。そこはほっとこう）

なんか百合っこいことを考える少女。（エリオは除外されている）
少女の名はビビ・スティン、なのは達の百合ハーレムを築くオタク馬鹿である。
しかし元いた世界ではすでに（別世界の）なのは達を百合ハーレムに取り入れた・・・否、洗脳したと言えば正しいか。
彼女にはある潜在能力・禁忌（バイオ・ラブハーツ）をもっている。
その禁忌はビビに好意を抱かせ絶対服従させる力。
そしてその行為を抱いた者にてを出す物には死を与える。
それが彼女を力であり、禁忌でもある。
その一つが『魅了の笑み』という。

すると、少女・ビビを狙う輩が現れる。
それはカプセル型ガジェット・ガジェットアタッカーである。

ビビ「ガジェット！やっぱりＳｔｒｉｋｅｒＳに入ったんだね私は！（＊＞∀＜＊）。ってそれはともかく、ベアト、ワルギリア、かたずけるわよ」
ベアト・ワルギリア≪承知した≫

ビビは嬉しそうな顔をして武器を構える。
だが彼女は知らない。
このガジェットが高杉ら『鬼兵隊』が作ったものであると知らずに。

まずガジェット達が攻撃を仕掛けた。
ビビはなんなく避ける。

ビビ「何処狙ってるの？そんな君達にこれをあげるよ」

ビビの手から黒っぽいスフェアが出された。

ビビ「てい♪」

放たれたスフェアはガジェットすべてを破壊した。

ビビ「ハッハッハ～、やっぱりこの強い私がガジェットなんてザコ当然よね～」

完全に余裕で愉快そうに笑うビビ。

だがそれがすぐに終わる。

ズズ～～～～ン！！

ビビ「わわっ！！」

突然の地震にバランスを崩されそうになるも何とか耐える。

そして顔をあげると、巨大な金属で出来たゴリラがいました。

ビビ（え？何このゴリラ？こんな奴いたっけ？って言うかどっかで見たような…）

ベアト≪ビビ！考えている暇はないぞ！≫

ビビ「へ？キャアッ！！」

ベアトから叫びが聞こえたがゴリラガジェット（ビビの仮命名）が殴りかかって来たのでギリギリかわす。

ビビ「っ！あんたぁ！良くもやってくれたわね！お返しよ！！」

いきなり殴りかかってきたから起こって大量の魔力弾を展開してゴリラガジェットに放つ。

ゴリラガジェット「マジックプロテクト」

ゴリラガジェットがそう言ったあとビビの魔力弾がすべて直撃した。
煙がはれると少しボロ着いているが顕在している。

ビビ「へ？うそ！手加減レベルにしてあると言え、なんで立っていられるの！？」

ビビはわけが分からないような表情をする。
そこにワルギリアが答える。

ワルギリア≪今一瞬“マジックプロテクト”という言葉が聞こえた。多分そのせいだろう≫
ビビ（マジで！？だから耐えられたのね～（。〇。））

納得するビビ。

ゴリラガジェット「グガァァァァァ！」
ビビ「！」

納得する束の間、ゴリラガジェットがビビを踏みつぶそうとしている。

ビビ（仕方ない、まだわけわからないのに死んでたまるか！＜、＞）

ワルギリアを構えてゴリラガジェットを粉さ…

？？？「スターダストストーム！！」

スドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！

ゴリラガジェット「ゴオォォォォォォォォォォォォォォォ！！！？？」

…いしようとしたら大きな岩が高速でゴリラガジェットに降り注がれた。

そのゴリラガジェットは直撃を受けたため動かなくなった。

ビビ（…な、なんだかよく分かんなかったけど助かったわね…。ん？って言うか今の声って…）

ビビは安心すると、聞き覚えのある声を思い出して、後ろに振りかえる。

なのは「良かった、無事見たいだね」

ビビ（うぱーーー！！魔王様(なのは)着たーーーーーーーー（＊＞∀＜＊）ーーーーーー！！！）

なのはが来たことに何処ぞのしゃべる猫の様な驚きかたをするビビ。

ガシッ！

なのは「今誰が魔王だって？（殺気全開）」

ビビ「あ、いえ、何でもないです…（やっぱ超恐ぇ～～…（（（（。Д。；））））」

ビビの頭を鷲掴みにして睨むなのは。

睨まれたビビは心の中でガクガク震えていた。

なのはは気を取り直して四散したガジェットとゴリラガジェットを見る。

なのは「こんなところにまでガジェットが来るなんて、しかもガレオムまで…。ところであなた大丈夫だった？」
ビビ「はい！いやほんとありがとうございました！」

元気よく答えるビビ。
が、一瞬なにか引っ掛かった。

ビビ（あれ？今確かガジェットと…あとなんて言ったんだっけ？・・・まぁいいや）

すぐに諦めた。
彼女にとって恋の相手が目の前にいるのだから。

ビビ「…ところで、ここってどこですか？」
なのは「ここはミッドチルダです」
ビビ「ミッドチルダ？（知ってるけどね）」

知っていながらも分からないかのように質問する。

なのは「あの、あなたは何処から来たんですか？」
ビビ「え？ああ、私地球から」
なのは「え！？地球から！？」

ビビの地球から来たと言う一言に驚くなのは。

なのは「…驚きました。でもどうやってここに？」
ビビ「いや～、私でも何が何だか分かんなくってさ～、ただ覚えてる事と言えば穴みたいなのに入っちゃって気が付いたらここに、見たいな？」

若干嘘交じりな答え方だが、地球に住んでいることは確かである。
なのは「えっと、とりあえず事情聴取のため、これから私と同行を願いできますか？」
ビビ「分かりました」
なのは「それと気になっていたけどそれってデバイス？」
なのははベアトとワルギリアを見る。
ビビ「うん、この宝石みたいなのをベアト、そしてこっちはワルギリアって言うんだ」
ベアト≪ベアトだ≫
ワルギリア≪ワルギリアと言います≫
なのは「やっぱり、それじゃあ機動六課へご案内します」
ビビ「は～い（やったぜい！これでスバルちゃん達に会えるぅ！（＞∀＜＊）ノ）」
ビビは内心嬉しそうな感じになってなのはのあとをついて行った。

機動六課

ビビはなのはに案内され、現在六課の食堂にいる。
周りにはなのはを初め、はやて、フェイト、シグナム達ヴォルケンリッターとスバルたちフォワードがいる。

ビビ（やっぱっ！！すっげ興奮する！！別世界とは言え私のハーレムが完成するには凄いことだよ！！）

自分の嫁（勝手ながらの予定）が囲まれていることに興奮するビビ。

はやて「えっと、まずお名前は？」
ビビ「私？私はビビ・スティンだよ。よろしくね（ニコッ）」
六課組（エリオ以外）「っ！？／／／／／／（か、可愛い…）」

同性を虜にする魅了の笑みを発動する。
エリオ以外の六課組は顔を赤くした。

ビビ（いえ～～～い！これで六課組をコンプリートしたぜ！！あとは数の子組をこの手に…グッフッフッフ・・・）

心の中でゆがんだ思念を抱いていると、

ガシャーーーン！！！

ビビ「（ビクッ！）ふえっ！？」

何かが割れる音が聞こえた。
はやては頭を抱えるしぐさをする。

はやて「・・・ま～た“あいつら”かいな」
スバル「じゃあ私達が止めに行きます」

スバルたちフォワードは音が鳴ったところへ向かった。

はやて「ごめんな～、あいつらがここよく暴れとるから驚いてしま

ったやろ？」
ビビ「え？あ、はぁ・・・」

ビビは少しあっけのとられるも平常心を保つ。

ビビ（ちょっと待って…今はやてちゃん“あいつら”って言った！？・・・まさか私のはやてちゃん達にテヲダシタヤツガイルノカ・・・？）

心の奥底、魂の奥まで黒い気を発するビビ。
微妙に間違っていて合っているが。
すると、

奏「はやて、マーボーが無くなった…」
はやて「奏ちゃん？」
ビビ「え？」

聞き覚えのない声が聞こえたので見てみると、腰くらいある銀髪で金色の瞳の少女・立華奏と目があった。
その途端、

カラカラカラカラチャリーン！
カラカラカラカラチャリーン！
ババーーーーーーン！！

ビビの両目がスロットの様に回転し、両目にハートが出ては口から大量のコインが滝のように流れた。

ビビ「きゅわぁあなでちゅわは～～～～～～ん！！！」

体がハリケーンのように回転して障害物（テーブルとイス）を飛ばして奏に抱きつこうとする。

ゴスッ！

ビビ「オブワッ！ドウッ！ブヘッ！」

虫唾が走ったのか奏がビビをぶん殴った。

殴られたビビはバウンドして壁に激突した。

なのは「ビビちゃん！？大丈夫！？」

なのはとフェイトが駆け寄る。

ビビ「・・・・・・・・・」

・・・返事がない。ただの屍のようｄ「勝手に殺すな！！」…チッ。

ビビ「だ、大丈夫大丈夫。これくらい平気…」

ビビは起き上がってなのはとフェイトを安心させる。

ビビ（ななな、なのはちゃんたちだけじゃなくＡｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！の奏ちゃんも私の百合ハーレムの一員になる時が来たぁァァァァァァァァ！！！（＃、∀，＃））

しかし心の中では次なる願望が出来ることに喜びを感じていた。

が、同時に違和感を覚えた。

ビビ（ってあれ？確か奏ちゃんってａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！のキャ

ラのはず…。なんでリリなのの世界にいるの！？）

奏がなのは達の世界にいることに疑問を抱くビビ。
しかしさらに疑問をうかばせてしまう。

小毬「誰か迷子の人がいるの？」
クド「わふぅ？誰なのですか？」

（ビビにとって）可愛い子ボイスの声にキュピーンと電波を感じ取ったビビ。
後ろに振り替えると小毬とクドがいた。

ビビ（うっそ～～Σ（゜Д゜；）～～！！！？あの二人は恋愛ゲームでお馴染み“リトルバスターズ！”の神北小毬と能美クドリャフカ！やっばっ！マジ可愛い！！）

天然さわやか系キャラが出た事に興奮するビビ。
更にこれだけでは終わらない。

プリニー「トイレの掃除終わったッス～」
レミリア「そう、なら今度は廊下の掃除を…」
咲夜「お譲さま、それは私が済ましました」
フロン「ラハールさん、もうちょっと愛を自覚しなくては」
ラハール「いい加減しつこいぞ貴様！って俺様に近寄るなといっただろうムチムチ！」
リリス「酷いよ～」
ビビ（あ、あの二本触覚はディスガイアのラハール！あのペンギンはプリニー！そしてちょっと雰囲気が違うけどフロンちゃんだ！って奥にいるあの二人って東方のレミリア・スカーレットと十六夜咲夜！キャ～～本物だ～～！！！）

自分の好きなキャラ?がいて大興奮しているビビ。
すると銀時と桂とネプテューヌがやってきた。

銀時「何騒ぎたててんだこのヤロー。中学生の修学旅行か?」
ネプテューヌ「銀さん例え的におかしい」
桂「何、だったらラップをおどってみよう。やるなら今しかねーZURA♪やるなら今しかねーZURA♪攘夷がJOY♪JOYが攘夷♪ふざけた国に俺が天誅♪やるなら今しかねーZURA♪やるなら今しかねーZURA♪攘夷がJOY♪JOYが」
銀時・ネプテューヌ「ジョォォォォォォォォォォォォォォイ!」

銀時とネプテューヌはとび蹴りをぶちかました。

桂「ぐはっ!何をする銀時!」
銀時「うるせーよ!!テメェの下らんラップに付き合う気はねぇよ!!!」
ネプテューヌ「私はノリで」

桂のラップに怒りを出す銀時とただノリでケリをかましたネプテューヌ。
ビビはそんな3人の銀時を見て驚いた顔をする。

ビビ「(あれは・・・普段はグータラでただのバカをやっているけどかつて攘夷戦争に参加し、白夜叉と恐れられし銀色の魂を持つ白い侍…)・・・坂田…銀時…」

銀魂の主人公で白夜叉と恐れられし侍・坂田銀時を見てそう呟いた。

？？？

ここは何もない荒野。
そこで一人の男が世界を見ていた。

？？？「・・・こいつは参ったな…、あの兄妹の妹が別次元の世界へ飛んで行っちまった」

男は別世界にいる六課にいるビビを見て呟いた。

？？？「しかし、あの世界どうも変だな～。普通はいないはずの奴らが移住してやがるし…」

六課にいるリトルバスターズ、Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ、ディスガイア、東方、ネプテューヌ達に銀時達のメンバー達を見て愚痴こぼす。

？？？「・・・しかたない。あいつを呼ぶか」

男はパチンっと指を鳴らすと魔方陣が展開される。
そして中から見た目が“天元突破グレンラガン”の“ヨーコ・リットナー”を黒髪ストレートにし、右目が赤、左目が金色のオッドアイになっている感じの女性だった。
その女性は男を見て不機嫌なオーラを発する。

？？？「・・・なんだクソ神、俺を呼び出すなんてどういう風の吹きまわしだ？」

女性は男口調でウザそうに男に言う。

???「いや何、お前の妹さんがどっか飛んで行っちゃってさ」

???「あいつが？どうもあの糞妹の気配が消えたと思ったらそう言うことか…」

自分の妹が消えた事に多少の心配はしているようだ。

???「う～ん、美しき兄妹愛。・・・いや、姉妹がいいか？」

???「いっぺん死ぬかテメェ…」

殺気全開で男を睨む。

???「そう切れなさんなって。さて、一応迎えに行くぞ」

???「・・・ったく世話のかかる奴だ」

男と女性はビビのいる六課へ向かった。

???「・・・・・・カミ・・・ダークソウルサマノテキ」

陰に黒い何かが2人のいたとこを見ていた。

???（あれは…早く報告をしなくちゃ！）

その影を見た女神が仲間を呼びに行った。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

屁怒絽「どうもはじめまして、今回アシストすることになりました…屁怒絽です」

真王「ハイそんじゃあ銀八先生…って逃げやがったし…」

銀八先生がいつの間にかいなくなった。

真王「まぁいいや。んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』さんからいくぞ『ルイージ「こちらでも屁怒絽さんが出た！」

マリオ「おお～賑やかになりそうだな～」

スネーク「お前はホント…」

マリオ「ってか何で皆怖がるんだ？こう言うのは外見だけで判断するのは失礼だぞ」

フォックス「そりゃあそうだが…」

マリオ「皆に質問『屁怒絽と会った時はどうだった?まとめてでもOK』」

ネス「銀さんに質問『初めてアイテムダンジョンに言った感想はどうだった?』」

次回を楽しみにしてます♪

ルイージ「どんな人が来るんだろう…」『…ぶっちゃけみんなは」

全員「イヤダァァァァァァァァァァァ!!!超怖ェェェェェェェェェェ!!!」

真王「だと。次」

銀時「物にもダンジョンがあるんだな~って思った。ってかスタンド系は絶対んくんなよ!!」

真王「はいはい、『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

屁怒絽「えっと次はペンネーム『支配者』さんからの質問。『屁怒絽様登場ですね…。恐いです。
では質問です。
1、沖田に質問、もし自分が魔剣士になれたら始めに何をしたいですか?やっぱりマヨ方を殺したいですか?魔法の力で(黒笑)
2、銀時に質問、ゾーマ10体と屁怒絽様、どうしてもどちらかと戦わなくてはいけなくなった時どちらと戦いますか?

これで終わります』」

真王「んじゃ沖田」

沖田「俺はあらゆる手段でくそ方を殺りまさぁ」

屁怒絽「殺生はいけませんよォォ！！」

沖田「アオグバァッ！！」

沖田は屁怒絽に殴られた。

銀時「ゾーマ１０体」

銀時は即答。

屁怒絽がやっぱり苦手らしい。

屁怒絽「それでは『支配者』さん…廊下に立ってください」

真王「いい加減そのオーラを止めろ。次、ペンネーム『黒神』さんからだ。『質問します。

ノワールへ

ネプテューヌ以外で貴方が今最も注目している人は誰ですか？

神楽へ

僕の小説の貴女はエリオと仲良くなっていますが、そっちの貴方はエリオとはどうですか？

フェイトへ

僕の小説の●ェイソンと化したキャロをみてどう思います？

以上です。』ズバリ答えよう」

ノワール「気になる相手？桂かしらね」

神楽「まぁ分からんアル」

フェイト「キャロォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！（魂の悲鳴）」

屁怒絽「あらら、凄いことになってますね。『黒神』さん、廊下に立ってください」

真王「さて次回は…」

ビビ「らっほ～～い！！次回は私がアシストするよ～♪」

真王「勝手に出てくるな！！」

ビビ「グハッ！」

屁怒絽「えっと…みなさんまた会いましょう」

第六十五訓：百合っこ娘に気をつけろ（後書き）

真王「次回は銀時とのバトル。そして勝負の行方は…？」

ビビ「次回『白百合の花ことばって純粋って言うより変態じゃね？』テイクオ～フ♪」

第六十六訓：白百合の花ことばって純粋って言うより変態じゃね？（前書き）

真王「今回はビビと銀時のバトルシーンがあります。では始め！！」

第六十六訓：白百合の花ことばって純粋って言うより変態じゃね？

前回のあらすじ

別世界から謎の少女・ビビ・スティンを保護したなのは。
ビビはそこで原作にはいないキャラ達がいて大混乱。
そして伝説の白夜叉・坂田銀時と出会った。

ビビ「坂田…銀時…」

ビビは銀時を見て思わずつぶやいた。

銀時「あん？なんでオメェが俺の名前知ってんだ？」
ビビ「え？あ、いやその…」

銀時が聞こえたのでビビは慌てる。

ビビ（しまった～～～！！思わず声に出ちゃったよ～～（T○T）
～～！！どうしようどうしよう！どうやって誤魔化そう！！？）
銀時「あ、そう言うことか」

ビビはビクッとなる。
もはやこれまでかと悟っていると、

銀時「もしかして俺のファンなのか？ヤベッちょっと緊張するな～。
サインペン持ってねぇし」
ビビ（あ、やっぱり馬鹿でよかった）

普段どおりな銀時を見て安心の息を吐くビビ。

ネプテューヌ「銀さん有名人だからサインペンぐらい持っててよ」
銀時「んな余裕ねぇよ。こっちとらシグマのこととかゲラビッツのこととかで疲れてるんだから」
ネプテューヌ「でもそれを一緒に解決してこそだもんね」

嬉しそうに笑うネプテューヌと、やれやれな表情をする銀時。
ビビは2人の話の中に“シグマ”とか“ゲラビッツ”とかで気になり始める。

ビビ「あの…よく話が聞こえづらかったんですけどなんて？」
ネプテューヌ「ああ、それはね、」

ネプテューヌは話す。
六課のこと、銀時達とネプテューヌ達が転送装置を使ってここに来たこと、リインフォースのこと、モンスターのこと、リトルバスターズ達次元漂流者のこと、シグマのこと、『R・S事件』のこと、スカリエッティとナンバーズのこと、魔界のこと、ゲラビッツのこと、アリシアのこと、そして最悪な存在・ダークソウルのことを話した。

ネプテューヌ「…というわけなんだよ」

ネプテューヌは話すが、ビビはとてもついていけそうにない内容だった。

ビビ（これ…スッゴイ混沌（カオス）すぎる出来事なんですけどォォォォォォォォォォ！！！転送装置で来たって有り得んし！スカリエッティと数の子姉妹が仲間になってる事も魔界もなのはちゃん達のこともスッゴイことになってるしィィィィィィィ！！！！しかもリイン

フォースとアリシアちゃんの復活ってありィィィィィィィィィ！！？）

ネプテューヌ「まぁそれじゃあ……えっと名前なんて言うんだっけ？」

ビビ「あ、私ビビって言うんだよ。よろしくね（ニコッ）」

ビビはネプテューヌににっこりとほほ笑む。

無論魅惑の笑み発動して。

ネプテューヌ「へ～、私ネプテューヌだよ。よろしくねビビちゃん」

銀時「俺は万事屋の銀時だ。銀ちゃんって呼んでもいいぜ」

ネプテューヌと銀時は“普通”に挨拶する。

このことにビビはおどろいた表情をする。

ビビ（あれ？どうして？そこの男はともかく、なんで私の魅惑の笑みが効かないの？）

ネプテューヌに魅惑の笑みが聞かないことに戸惑うビビ。

魅惑の笑みとはビビと同性の相手に惚れさせるビビの能力。

どんな女性でも惚れるという概念をもたせる力。

だがネプテューヌにはこれが効かなかった。

ネプテューヌ「銀さん、暇があったらどっか食べにいかない？例えば甘飯洋食店とか」

銀時「お？それ俺行ったことあるんだよ。そこのパフェおいしかったな」

ネプテューヌ「ほんと？じゃあそこにいこっか」

ビビはネプテューヌと銀時のやり取りを見ていると、意外なことが

分かった。
ネプテューヌは銀時に惚れているのだと。
誰かに好意を抱いている女性に魅惑の笑みを出しても効果がないのだ。
故にネプテューヌにきかなかったのはこれのせいである。

ビビ「あ、あ、あの…」
ネプテューヌ「ん？」
ビビ「銀時さんは一体誰と一緒に？」

ビビは外れて欲しいと願う。
が、それは叶うことななかった。

ネプテューヌ「銀さんはね、私含めてなのはさん、フェイトさん、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォース、猿飛さん、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、チンクちゃんにも惚れられてるんだよ。モテモテだねこの色男（ロメオ）が。あ、はやてさんは桂さんね」
銀時「言うんじゃねぇよ。俺はどれだけ出苦労してんだと思ってんだよ」
ブラン「それがモテ男の運命」

銀時はＯＴＬな状態になる。
そしてそれを聞いたビビは、銀時に対する嫉妬、そして殺意を抱く。

ビビ（こんな男が…こんなダメ男がなのはちゃん達を…だと？許せない。ならば早くシマツシテオカナキャ）

目のハイライトをなくし、ビビは殺気を出して銀時に言う。

ビビ「坂田銀時」
銀時「ん？」
ビビ「貴方には…キエテモラウ」

ビビはベアトリーチェとワルギリアを展開した。

銀時「え？ちょ、おいおいおい！何殺気立ってんの？銀さんなんか悪いことした？」
ビビ「うるさい！黙って死ね！」

黄金の鞭の様な武器・ベアトリーチェのベルレフォーンを銀時に向かって放つ。

スパパパパパパパパパパパパパパパパパ！

ビビ「なっ！」

ベルレフォーンがスライスされた。
切ったのはネプテューヌであった。

ネプテューヌ「あのさ、何に対して銀さんを襲うか知らないけど、銀さんを殺させはしないよ？」

鋭い眼光がビビを見つめる。
ビビは殺意を引っ込ませ、謝罪する。

ビビ「ごめんなさい。ちょっと気が動転しちゃったみたい」
ネプテューヌ「分かればいいんだよ～。それに銀さん女運悪いの日常茶飯事みたいだし」
銀時「俺は不幸少年か！！」

銀時が怒鳴るがスルー。

ビビ（今よく見えなかったけどベルレフォーンがスライスされた。一体どんなチート使ったのこの子?）

ビビはネプテューヌの力に心底驚かされた。

はやて「なんか騒がしかったけど何かあったん?」

騒ぎを聞きつけたはやて達がやってきた。

ネプテューヌ「それはね、ビビちゃん銀さんに嫉妬してガゼルパンチを入れかけてたんだよ」

ビビ「嫌ガゼル入れてないから」

訳を説明するネプテューヌに突っ込むビビ。

ビビ「でもこのダメオに嫉妬してる事はホントよ。こんな天然な奴に“愛しの”なのはちゃん達を渡してたまるもんですか!!」

ありったけ銀時に対する怒りをぶつける。

ネプテューヌ「・・・今愛しのって言った?」

ビビ「そうよ!私は将来なのはちゃんあっちとあ～んなことやこ～んなことまでしたいの!（てか元の場所でもうしちゃったけどね）」

もといた世界で愛を築いた彼女に取ってなのは達は天使らしい。

なのは達はそれを聞いた顔を真っ赤に染めた。

ネプテューヌ「ビビちゃん…それって…これなの？」

右手で左頬を当てるしぐさをする。
これは同性愛の意味がある。

リリス「でぇきぃとぇるぅ～？」

リリスが巻き舌風に言う。

ビビ「まぁね」
銀時「言っちゃったよ！自分が百合っ子だって認めちゃったよこの子！！」

銀時が大声で叫ぶ。
ビビは元から百合な子です。

ビビ「そんなわけだから、なのはちゃん達をかけて、あんたを倒す！」
銀時「あれ～？いま倒すと書いて殺すって聞こえたんですけど！？」

堂々と銀時に指差すビビ。
銀時は冷や汗を流す。
するとはやてが思いついたかのような顔をする。

はやて「そや、訓練所があるさかい、そこで銀ちゃんとやってもええよ」
銀時「何考えてんだ～～～～！！！」
ビビ「ありがとうはやてちゃん！これで心おきなくこの人をやれるよ」

銀時はシャウトし、ビビはお礼を言う。
その他の人たちは苦笑いを浮かべた。

機動六課・訓練場

ビビと銀時は配置に着いている。
そこ以外のとこでなのは達は観客のように見ている。

コンパ「銀さん大丈夫でしょうか…」
アイエフ「あの子は結構戦闘に慣れてるわね」
ノワール「それに凄い力を隠し持っているみたいね」
なのは「まぁ見てればわかるかな」
紫「確かに実力は見てから分かるものよ」
ヴァルバトーゼ「俺達も興味あるな」
ネプテューヌ「そろそろ始まるかな？っていっけない。これ渡すの忘れてた」

それぞれ見守る中、ネプテューヌはある物をとり出して銀時とビビのところへ向かった。

銀時「な～んでこんなことになっちまったんだ？」

銀時は頭を掻きながら愚痴る。

ビビ（なのはちゃんたちがこっちを見ている！ここで活躍すればなのはちゃんたちは私に！グ、グへへ・・・）

ビビは口元を押さえて笑いをこらえる。
銀時はそれを見て大丈夫かこいつ…と思ったようだ。

ネプテューヌ「銀さ～ん、忘れものだよ～」

ネプテューヌがやってきてある物を銀時に投げ渡した。
何の変哲もない木刀だった。

銀時「なんだこれ？」
ネプテューヌ「銀さんの新しい武器だよ。それを届けに来た」

銀時はそうかと返した。
するとモニターが現れてなのはが映る。

なのは「銀さん、ビビちゃん、準備はいい？」
銀時「しゃあねぇなもう…」
ビビ「いつでもいいよ（やっぱなのはちゃん素敵だ…）」
ヴィヴィオ「パパ～、頑張って～」
なのは「こらヴィヴィオ」

いきなりヴィヴィオがしゃしゃり出る。これを見たビビは、

ビビ（うぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？なんでヴィヴィオちゃんがここにいぃいいいいいいい！！？？ってかパパって銀時のことなのかこのやろォオオオオオオオオオ！！！！！！／（。皿。／＃）
）

ヴィヴィオか来たことにより、ビビはヴィヴィオに対して驚き、銀時に対して殺気を全開する。

ヴィヴィオ「そこのビビお姉ちゃんも頑張って～」

頑張って～（エコー）
カラカラカラカラチャリーーン！
カラカラカラカラチャリーーン！
バババーーーーーーーーン！！

ビビ「ドストラーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイクゥッ！！！！！！！！！！
∩＜　口　＞∩↑（上を向いているつもり）」

ビビの中の激萌少女メーターが基準値を超えてメーターが壊れて上半身の服が弾け飛んだ。
言うなればロリコン神父が壊れたかのように。
弾け飛んだ服は真っ白な下着だけが残り、肌が凄く露出している。
女性陣は真っ赤に染める者や何やってんだと冷めた目で見る者、男性陣では鼻血を出したものと目隠しされた者がいた。

ビビ「フハハハハハハハハハハハハハハ！！！もはや激萌少女の応援で力を得た私は無敵じゃあああああああああああ！！！！」

完全に壊れたビビ。

銀時「オイィィィィィィィィィ！！！壊れちゃったんですけどこの子！！大丈夫かよ！！」
ビビ「いいか！この世で一番好きなものと言えば！例えば彼女とか、

お姉さまとか、後特に妹とか！！！」

末期症状でも犯かされた感じである。

周りのほとんどは「コイツ病気だ」などと言っている。

ベアトリーチェ≪それはともかく、服は着ないのか？≫

ビビ「え？っていや～～～ん！（＊＞д＜＊）」

ベアトリーチェの指摘で自分がどうなっているか把握する。

マッチング☆みたいなポーズで。

銀時「腹立つ！こいつメッチャ腹立つ！！」

ビビのポーズを見てイラッと来た銀時。

ビビ「ってそれはともかくとして、覚悟しなさいよ坂田銀時！！」

ワルギリア≪それ以前に服きろ≫

なんやかんやあったが、百合転生者・ビビと白夜叉・銀時の戦いが始まった。

ＩＢＧＭ華麗なる闇族ｂｙ魔界戦記ディスガイア２（Ｄｉｓｇａｅａ　２　－　Ｍａｇｎｉｆｉｃｅｎｔ　Ｄａｒｋ　Ｆａｍｉｌｙ　'０５）

ビビ「（こんな男からなのはちゃん達を引きはがしてやる！）喰らいなさい！デビルズシューター！」

ビビの周りからビビの魔力光、明るめの虹色の魔力弾がほぼ埋め尽くすほど展開される。

銀時「ちょ、待て待て待て!!いきなり本気で来るわけ!?」

ビビ「私はいつでも本気よ!シュート!!」

銀時は慌てるが、ビビはお構いなし。

無数の魔力弾が銀時に襲いかかる。

銀時「・・・」

銀時は木刀を構え、

ババ!!!

魔力弾を全て叩き落とした。

ビビ「なっ!?」

さすがのビビも驚きを隠せない。

そりゃデビルズシューターを全て叩き落としたのだから。

ビビ（舐めてかかったつもりはないと言え、やっぱり白夜叉と戦うのって初めてだな。あのスピードと機動、それに先まわっている。・・・もう少し本気を出そうかしら）

ビビはいったん離れて、あの能力（チカラ）を出した。

ビビ「さぁさぁおいでなさい!!ババハムート!」

バハムート「グォアアア

銀時（・・・あ、これ死んだわ…）

銀時は簡単に諦めかけたその時、

？？？≪何ここで諦めてんだ？≫

銀時「っ！！？」

ズバーーーンッ！！！

何と銀時はバハムートのメガフレアを一刀両断した。

ビビ「ニャ、ニャニィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！？？Σ（@Д@；）」

あまりにもありえなさすぎる出来事にビビは目を丸くした。

無論観客達も目を丸くした。

銀時も例外じゃない。

？？？≪間一髪みたいだな≫

何処からか銀時そっくりな声が聞こえる。

銀時「まさかオメェが？」

？？？≪そうだ、俺はおいぼれじーさんと馬鹿科学者とイースンのよって生まれたんだぜ≫

発している声は銀時の持つ木刀だった。

？？？≪さきにいっておくが、俺にはまだ名前がない。だが今思いついた。オメェのような輝き続ける銀色の魂、『シルバーソウル』

と名乗って置くぜ≫
銀時「『シルバーソウル』…ねぇ。分かったぜ」
銀時の新たな相棒、シルバーソウルを手に笑った。
銀時「んじゃ反撃と行きますか」
銀時はシルバーソウルを構え、
シュン！ズバンッ！！
一撃でバハムートの首を切り落とした。
ビビはバハムートが切られたことと、銀時の強さに驚く。
ビビ（…アニメ見てたから思ってたけど…これが、白夜叉の力…）
首を切られて動かなくなったバハムートと、白夜叉銀時の光景を見る。
が、ビビは己に喝を入れる。
ビビ（何考えてるの私！なのはちゃんたちはこの男に毒されているのよ！！だから、私が、コノオトコヲコロシテアゲルワ）
ビビの魔力が上昇した。
ビビ「ベアトリーチェ、モード０２、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”“アルトリア・ペンドラゴン”！！」
ビビはベアトリーチェをモード０２に変え、あるキャラの力を持つ神魔憑依（アバター・オブ・リンク）を発動する。

そしてビビの姿は銀髪のところは変わらないが、ある騎士王の衣装と髪型をしていた。
そして手には目に見えない不可視の剣をもって。

ビビ「本当にあなたを舐めすぎたみたいだけど、なのはちゃん達を手に入れるまであなたを倒す！！」

ビビは銀時に向かって瞬間移動の如く駆け出す。

ビビ「喰らいなさい！はぁあああああああああ！！！」

たとえ白夜叉でも絶対に見抜かれないほどのスピードで銀時に切りかかる。

ガギィンッ！！

ビビ「キャッ！」

何と銀時はたった一振りでビビを後退させた。
その一撃は凄く重かった。

ビビ「くっ！だったら…」

ビビは騎士王の力、その真名を開放する。

ビビ「約束された勝利の剣（エクスカリバー）ッ！！」

その輝かしい閃光はすべてを飲み込みかねないほどの攻撃を放った。

…で、観客サイド。

音無「おいおいおい、なんかやばいぞ？」
ゆり「あの子凄い力ね、今度ＳＳＳ団に勧誘しようかしら」
日向「イヤ冷静に見てる場合か！」
デスコ「そうデス！あんな攻撃はラスボスが使うものデス！」
フーカ「いやちょっと違う」
ヴァルバトーゼ「あの攻撃は銀時でも…いやまだ早いか」
なのは「何言ってるの？アレ銀さんでもひとたまりもないよ！！」
フェイト「急いで止めないと」

なのはとフェイトは駆け出そうとしたら、ヴァルバトーゼ達に止められた。

ヴァルバトーゼ「勝負はまだ終わっていないぞ。最後まで見届けろ」
フェイト「だけど…」
ネプテューヌ「大丈夫。銀さんなら負けないよ。決して曲がることのない不屈の魂を持つ銀さんなら」

ネプテューヌは銀時を信じて見守っていた。

変わって銀時サイド。

銀時（凄い攻撃だな…）

銀時は目の前に迫る約束された勝利の剣（エクスカリバー）を見て思う。

銀時（確かにこいつは魔王でもどんな奴でもひとたまりなさそうだ。けどな…）

銀時はシルバーソウルを握りしめ、構える。

銀時「こんなもん、お前のよりネプテューヌのエックスカリバーの方が熱かったぜ」

ビビ「なに？」

シグマの要塞をぶった切ったあの技を思い出す。

銀時「あいつの熱い攻撃と比べたらこんなもん……へなちょこもんだぁぁぁぁぁ！！！！」

銀時はビビのエクスカリバーを、銀色の魔力刃でぶった切った。

このことにビビはありえないほど驚いた。

ビビ「うそっ！？私の約束された勝利の剣（エクスカリバー）がっ！！」

銀時「ウオリャァァァァァ！！」

ビビ「ッ！？ワルギリア！」

二辺が長い六角形の形状のプレートが七枚展開され、銀時の持つシルバーソウルを防ぐ。

銀時「ウオォォォォォォォォォォ！！！」

が、銀時の猛攻はここで止まるわけがない。

嵐のような攻撃にビビは焦る。

ビビ「何よこの攻撃…！」

ワルギリア≪グぅ…！≫
ビビ「ワルギリアッ！？」

ワルギリアが苦しむ声をあげた。

ワルギリア≪奴の攻撃に特殊な魔力が纏っている…≫
ビビ「え？銀時に魔力が？」

普通銀時は木刀を持つ侍で会って魔力など一切皆無だと想像するが、

銀時「実は俺にもあったんだよね～～！！」
ビビ「くっ！」

銀時は肯定しながらラッシュを放つ。
すると銀時はこんな言葉を口にした。

銀時「…ところで何でお前はなのはとかに固執すんだ？」

ドクンッ！！

ズガッ！！

銀時「オボッ！」

銀時が殴り飛ばされた。

ビビ「固執違うわ。私はなのはちゃん達を愛したいだけよ」

ビビの目から怒り、そして銀時に向けて殺気をはなっている。

ビビ「なのはちゃんたちは私の物、私のすべてはなのはちゃんたちだけ、だからあなたはすぐに消えてもらう（ソシテメザワリナアナタノソンザイヲケシテアゲルヨ）」

花にまとわりつく、虫のように……せっかく花開いた白百合に付く、一点の濁りのように……。

ビビ（ヤッパリ、コノバデイカシテオクワケニハ、イカナイワヨネ……）

ビビの心が、真っ白になるほどの純粋な殺意に、完全に染められた。
が、

ズドガッ！！

ビビ「ギャァッ！！？」

ベアトリーチェ・ワルギリア≪ビビ！？≫

突然ビビがぶっ飛ばされた。
言わずもがな、銀時の攻撃にやられたのである。

ガッ！バギッッ！ドガッ！！

ビビ「ガッ！？ゴッ！？ギャァッ！！？」

銀時から受ける一撃はまるでゴーレムのパンチを直撃したかのようだ。

ワルギリア≪させんッ！！≫

ワルギリアがプレートを動かして次の攻撃を防ごうとするが、もはや切れた銀時に、

バギャァッ！！！！

ワルギリア≪グアアッ！！！≫

ビビ「ギャアアアア！！！！」

防御など皆無に等しい。

吹き飛ばされたビビは痛みをこらえながら起き上ると、目に映ったのはとてつもない殺気を放つ銀時と、無残な姿になったワルギリアのプレートの破片だった。

今ワルギリアのあるプレートは2枚である。

ビビ「ワ、ワルギリア！」

ワルギリア≪ガ…もうしわわけ・・・ありませんで・・・した…ビビ≫

プレートが破壊されたせいかダメージを受けてるワルギリア。

銀時「おい」

銀時が声をかけたのでビビは体勢を立て直して銀時を見ると、いつも死んだ魚の目ではなく、敵を狙う夜叉の目になった。

銀時「テメェはあいつらを…なのは達をもの扱いしやがったな」

銀時の発する声はなのは達を己の欲のためにある買うビビに対しての怒りの声だった。

銀時「人の意思を踏みにじって、自分の欲のためにものにしやがったのか？」
ビビ「・・・フフッ、フッフッフッフッ・・・」
怒る銀時に笑いだすビビ。
ビビ「ええ、その通りよ。私の夢の実現のためになのはちゃんたちは私の色に染め上げるの。私の本能がそう教えてくれる」
銀時「本能だと？」
ビビの本能というものがどんなものなのか少し気になる銀時。
ビビ「私の本能は禁忌、愛があればすべてが私の物。私に愛する人はみんな私と愛し合う。それもみんな私の物に…」
ビビの甘く狂った言葉に、銀時はさらに怒りを覚えた。
銀時「テメェの本能とか禁忌とかしらねぇが、そんなもん愛し合うとかそんなもんじゃねぇ、ただの洗脳だ」
ビビ「結構。あなたに何言われようと私の夢を実現するために…消えてもらうわ！！」
ビビは銀時に向かって駆け出した。
そして両者は剣を交差させようとした。
ガキィンッ！！×２
？？？「ハイハイハ～イ、バトル中に横槍入れちゃったけどストップね～」

？？？「…クソ神、そのいい加減なしゃべり方やめろ。気味悪い」
？？？「痛い言い方だなもう」

銀時のビビの間から“魔法先生ネギま！”の“ナギ・スプリングフィールド”に、“キングダムハーツ2”のラスボス、“ゼムナス”の白と黒のコートを着せた感じ。そして、瞳が七色に光るオーロラのような不思議な眼をしている男と、クソ妹と口走った女性が2人の攻撃を防いでいた。
男の方は銀時の、女性の方はビビの攻撃を防いでいた。
ビビは目の前にいる女性に驚いた顔をして言う。

ビビ「え？…嘘…お姉さま？」
銀時「え？お姉さん？」
？？？「感動の再会って言うだろ、グレイ・スティンくん？」
グレイ「・・・余計なことは言わないでくれます？クソ神」

ビビは元男であり唯一の家族、グレイ・スティンと再会した。

ビビ「あと…誰だっけ？」
？？？「おい！！俺を忘れたのかよっ！！」

もう一方は思い出せなかったみたいだが…。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ビビ「ラッホ～～イ！！今日のアシストはビビ・スティンだよ～～」

銀八「ああ、いっつもなのは達を弄んでいるドS変態百合ストーカー」

ビビ「違う！！私のことは女の子好きの白百合娘と呼んで！！」

銀八「百合の部分は否定しないのかよ！！」

ビビ「しないよ？」

真王「諦めろ、これが彼女の成分だ」

銀八「・・・しゃあねぇ。ペンネーム『鳴神　ソラ』さんから質問行くぞ。『ルイージ「リィーンさんの所のビビちゃんが着たぁぁぁぁぁ！！」

スネーク「まあ、前回の感想返信でもう分かってたけどな…」

マリオ「ビビの奴が銀時の力をマンガと同じと考えてたら駄目だろ

う…後、なのは（冥王）は魔王じゃなくて冥王だ」

ネス「久々に言ったね；」

リュカ「どうなるんだろう…」

ルイージ「皆に質問『ビビちゃんを見た感想は？』」

スネーク「同じく質問『ビビの能力はどう思う？』」

フォックス「真王に質問なんだが…『ビビをリィーン氏の所と同じ様に色々とさせるのか？』」

次回を楽しみにしてます♪』」

なのは「そうだね。とってもかわいい子だったよ」

フェイト「うん、私も」

はやて「ちっちゃい癖して胸でかいな～。今度揉んでみよか（オイッ！）」

シグナム「ビビか…（今度私と勝負しようではないか）」

ヴィータ「何かこっちは敗北感があるんだが…」

シャマル「あらあらかわいい子ですね」

スバル「ビビって可愛いね！」

ティアナ「私は普通に…（でもやっぱ可愛い…ボソッ）」

キャロ「凄く…かわいいです」

ネプテューヌ「可愛くて強そうだね♪」

ノワール「まぁ・・・強そうね」

ブラン「…（殺気が漏れている）」

ベール「あらあら、可愛い子だこと…」

ビビ「イヤ～ン♪私なのはちゃん達から褒められてる～♪（＊＾∀＾＊）」

真王「一部嫉妬してるようだがまぁいいか。銀魂組の場合は…」

銀魂組「死ねよこの変態野郎」

ビビ「何だとこの野郎っ！！（、皿、＃）」

真王「落ち着け。能力の方はみんなありえないとの事。そして畑氏はリィーンさんの様なダーク一直線なことはしないのです。そんなわけで『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ビビ「えっと、次はペンネーム『月光閃火』だよ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…やれやれ…（呆）。（そう言いながら、ビビに対して呆れポーズを取る）

輝刃「…性根を叩き直し甲斐があるな…。」（そう言いながら、不敵な笑みを浮かべる）

…とりあえず、質問…行くか。まずは俺からだ。

1．ビビに質問…ってか一つ言っておく。君…お仕置き確定。Ｙｏｕ　Ｓｅｅ？（そう言いながら、スタンバイオッケーとばかりに『地獄の鋼鉄掴掌』の発動体勢に入った（汗）

輝刃「…少しは手加減しろよ？次は俺からだ。」

2．作者に質問…使用作品の一覧の中にある『ＩＳ－インフィニット・ストラトス－』で、どうせなら一夏達を出してみてはどうだろうか？んでもって銀時のＩＳ姿（みたいなバリアジャケット）を見て唖然となる…みたいなシーンもあったりして…。

確かに、引用だけじゃなくてそのキャラ達が銀時達と絡むってのも…何かドタバタの予感がして面白そう♪』ハン！かかってこいよ！返り討ちにしてあげるわぁぁぁぁ！！！」

ビビは月光閃火に喧嘩売った。

そしてバトルが始まった。

真王「何やってんだあいつは。一夏達の登場は考えておきます。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

月光閃火「オラァァァァァ！！」

ビビ「シネェェェェェェェ！！！」

まだ乱闘している。

真王「止めんか！！」

真王はスターライトブレイカー改を放った。

で…

真王「全く。ちゃんとやれよ」

ビビ「ハイ…」

銀八「・・・さて次は、ペンネーム『黒龍』さんから。『黒龍「何あのビビッて娘？百合な上にかなりウザいんですけど？」

ソラ「お前百合あんまり好きじゃないからな」

黒龍「まぁね」

銀時「いや、俺もあいつの頭の中の声聞こえたらかなりウザいと思うぜ」

ソラ「それは俺も同感だな」

黒龍「とは言え、初めての他作品とのコラボですね」

銀時「ああ、お前も削除される前は何度かやってからな」

黒龍「ついに真王さんもコラボに手を出したと言う事ですね」

銀時「つうか、元からアニメとかマンガの二次創作描いている時点でコラボも何もないけどな」

黒龍「それ言っちゃダメでしょ！！」

ソラ「じゃあそろそろ質問したらどうだ？」

黒龍「そうですね。じゃあ質問します。

1．新八に質問。こっちの小説は無印編に入りましたけど、なのはに恋路を抱いて粉砕する未来があると言う事についてどう思いますか（黒笑）

2．ネプテューヌに質問。黒神さんの所で今コラボで出演していますけど、今のご感想は？

3．銀さんに質問。百合のビビに攻撃にさらないために、シルバーハートになって逆にビビを落とすと言うはどうですか？もし落とせなくても攻撃はされないと思いますよ？」

銀時「いや、ちょっ！何だよ三番の質問！」

黒龍「いや～百合っ子対策にはこれがいい案だと思ったんですけど」

銀時「どこが！？」

ソラ「俺は言いと思うけどな」

銀時「何自分は恥じかかないからって賛成してんだよ！！」

黒龍「じゃあ次回も楽しみにしています」

ソラ「じゃあな」

銀時「無視すんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！！」『まぁ新八の答えは…」

新八「させるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！なのはちゃんとぼくの未来は守るゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」

真王「お通ちゃんはどうした？」

新八「ウグッ！！」

真王「ハイ次ネプテューヌ」

ネプテューヌ「そりゃコラボ出来て私はあっちに出てきて嬉しいよ。でもノワール達とリリス達は出たがってたみたいだったけど…」

銀八「メインキャラなのにな。んで銀時の番だが…」

銀時「誰があんな恰好するか！！」

ビビ「私は元から男の人なんて興味ないです。つーかうざい」

真王「んじゃ『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんだ。『質問。
真王さん質問というより、願望です。僕の小説『万事屋奇譚幕』のキャラとコラボして欲しいんですけど、よろしいでしょうか?もし良かったら、下記のメンバーを出して欲しいです。

上条当麻

一方通行（アクセアレータ）

奴良リクオ

鑢七花

とがめ

神裂火織

打ち止め（ラストオーダー）

以上です。

銀さんに質問。　僕の小説で、シグナムと恋人同士になった自分をどう思いますか?

ヅラに質問。

七花の『虚刀流』をどう思います。』ああ、そこのコラボの方は考えておきます。んで銀さんとヅラ」

銀時「・・・・・・・・・・・・・」

銀時は青ざめて汗を流している。

理由は簡単。シグナム以外の銀時ラバーズは殺気を向けているからだ。

ビビも血涙流して銀時を睨んでいる。

桂「ヅラじゃない桂だ。まぁ素晴らしい我流だと俺は思う」

真王「んじゃ『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい」

ビビ「・・・それじゃあ次のアシストは何とグレイお姉さまがアシストしちゃいま～す！」

真王「次回で短編終わらせようかな…」

第六十六訓：白百合の花ことばって純粋って言うより変態じゃね？（後書き）

真王「現れたのはビビの姉…というより兄のグレイと、２人をチートにした神が現れた！そして銀時達の前にさらなる敵が襲いかかる！」

グレイ「・・・次回『神様は偉そうなくせして我儘』テイクオフだ…帰らせろ」

真王「駄目」

第六十七訓：神様は偉そうなくせして我儘（前書き）

真王「今回はあの2人とオリキャラが助っ人に登場！」

ネプテューヌ「個性的だからちょっと癖があるけどね」

真王「それではスタート」

第六十七訓：神様は偉そうなくせして我儘

一応やります。前回のあらすじ。

銀時とビビの対戦をおっぱじめ、そろそろクライマックスに差し掛かったところ、乱入者が現れた。

ビビ「お姉さま!?それと…えっと……?」
神「おい忘れたのかよ!!俺からチートもらったの忘れたのか?」
ビビ「チー・・・まさか神様!?」
神「その通り!!やっと思い出してくれたのか…」
グレイ「お前の場合はクソ神で充分だろ?」
神「いやん、酷い、グレイ君」
グレイ「シヌカコラ・・・」

ビビは実の姉…もとい、実の兄と、もう一人の名前を忘れてしまったが、何とか思い出す。
グレイの毒舌に神様ふざけの言葉を出すとグレイがキレ声で詰め寄る。

ビビ「って言うか、何でおにぃ…お姉さま達がここに?」
グレイ「・・・俺は大事な妹をほうって置くつもりはないからな」

グレイはそう言うとビビは感動して抱きつく。

神「いや〜、感動の再か「クォラァ〜〜!!」オブッ!!」

神様がにやけた目で見ていると、誰かに蹴られた。

ネプテューヌ「ちょっとあんた！人のバトルを見てるところで何やってるの！！いいところで勝負が付くと思ってみてたのに…も～、連行する！」
神「そりゃそうだけどなんで俺が引きずられるの～？」

神様はネプテューヌに引きずられていく。
グレイは只いい気味だと思いながら、ビビは苦笑いを浮かべながら後をついて行った。

銀時「あれ？俺は！？って置いてくな～！！」

銀時は４人を追いかけた。

で…

グレイ「はじめまして、姉のグレイ・スティンです。妹がお世話になったみたいですね」
神「そして俺様はなく子も黙る「自称」神様である・・・って誰だ自称言った奴は？」

グレイが礼儀正しく女口調で挨拶し、神様も自己紹介するが、グレイの途中の言葉でジト眼で見る。

なのは「あ、どうも、私達は…」

少女達自己紹介中…

ビビ「え?東方風?」
グレイ「（そこは気にするとこじゃない）」

ビビは何か引っかかったらしいが、グレイが念話でストップさせる。

フェイト「えっとつまりあなた方はビビを迎えに来たということですね?」
神「そんなとこだ。いやビビが無事で何より」
ビビ「あはは、心配かけたみたいだね…」

ビビは頭を書いてバツが悪そうな顔になる。

ヴィヴィオ「ビビお姉ちゃん帰っちゃうの?」

ヴィヴィオが上目遣い＋涙目でビビを見る。

ビビ「ぐっ!!（止めて!!そんな目で見ないで!!何か重～い罪悪感が!!私の体力がもうゼロなのよ!!）」
神様「・・・（何か・・重い罪悪感が俺を圧し掛かってくんですけど…もしかして俺のせい?）」

2人は罪悪感でいっぱいになる。

ビビ「だ、大丈夫だよヴィヴィオちゃん、たとえ離れてたとしても私はあなたのこと忘れないから」
神「そのセリフ死亡フラグｗｗｗ」

神様が必死にヴィヴィオを説得するセリフに笑い、ビビは殺意を抱く。

ヴィヴィオ「そっか、ありがとうお姉ちゃん」

ヴィヴィオはにっこりとビビに笑う。

プツンッ

ビビ「やっぱかわい～～～！！（＃＾∀＾＃）」

ビビはあまりの可愛さにヴィヴィオに抱きついた。

ネプテューヌ「うちの娘はやらないぞ！！（棒読み）」
ビビ「お母様！ヴィヴィオを私の娘にさせてください！（棒読み）」
ネプテューヌ「甘い！我が娘を貴様なぞに渡す気はない！！（棒読み）」
新八「ってあんたら何漫才してんだよッ！！！」

どこかの恋のドラマの様な漫才をしているネプテューヌとビビに新八が怒鳴る。

神「娘が結婚だと？父さんは認めんぞ！！（超棒読み）」
新八「お前もするなっ！！」

なぜか神様まで乗ってきたので怒鳴る。

グレイ「ハァ…妹、遊んでないでもう帰るわよ」

神「…本当のところもう少し遊びたかったんだがな…」

いきなり変える宣言をしだして、神様は少し名残惜しそうな感じになる。

ネプテューヌ「そんなに謙虚にならなくていいよグレイ“ちゃん”」

グレイ「私は謙虚じゃ……って、ちょっと待て!!今なんて言ったっ!!」

グレイはネプテューヌの言葉の中で凄く引っ掛かるセリフを聞いた。

ネプテューヌ「ああ、この人がグレイに女の子みたいな呼び方をしてみろって言ってたし…」

グレイ「テメェカコノクソガミガァァァァァァァァァ!!!!!!(激怒)」

ビビ「お、お、お、落ち着いてェェェェェェェェ!!!!／(＊口＊／；)」

銀時「落ち着けェェェェェ!!この人は頭が少しあれな奴だと思うからぁぁぁ!!」

神「頭があれって失敬だなおいっ!!」

ネプテューヌが答えるとグレイが切れて、ビビと銀時が押さえるも、銀時の一言が癪に障ったのか神様も切れる。

神「…ま、そんな俺達に迎えが来たみたいだぜ?」

ビビ「へ?何が?」

神「地獄行きの迎えだよ！」

神が何か察したのかある場所を見る。
するとその場所に真っ黒な魔方陣が展開された。

なのは「！臨戦態勢！！」

なのはの号令に六課組は臨戦態勢に入った。
そして魔方陣から何かが飛び出た。

？？？「グゥゥゥゥ・・・」

それは真っ黒で四足歩行の顔が両手両足同じの生物・・・っというより、簡単に言うと真っ黒な大きな“手”だった。
親指と小指は足、人差指と薬指は手、そして中指は顔という位置らしい。

手？「オオォォォォォ・・・」

その手は両手をあげて何か言い出すと、複数の魔方陣が展開される。
そして中から死骨族、死龍族、妖霊族、屍族が現れる。
無論銀時が苦手な奴らなため、銀時は顔を真っ青に染める。

ネプテューヌ「わ～、アンデット系勢揃いだよ～」
神「アンデットはあんまいい気はしないんだが…乗りかかった船だ、かたずけるか」
グレイ「ハァ…やれやれだな」
ビビ「ゾンビだろうがゴーストだろうがかかってきなさい！！」

神とグレイとビビは戦闘態勢に入る。

だが、魔方陣はあと一つ残っていた。
そこから巨大な大きな影が現れた。
黒い皮膚に紫の血肉と全長１０メートルの巨大な虫…ぶっちゃけ巨大な芋虫ゾンビである。

全員（ゾンビと虫がチークダンス踊ってるぅウウウウウウウウウ！！！！？）

さすがに目の前のモンスターを見てありえなさそうなことに驚く。
さらに女性陣は虫とアンデットのダブルパンチで凄く青ざめている。
特にビビは虫が大の苦手でガタガタ震えているのだ。

ゾンビワーム「ウボワァァァァ・・・！」

巨大ゾンビ虫・ゾンビワームは口から猛毒の息を吐いた。

ネプテューヌ「うわ、浴びたら無事じゃすまなさそう…」
ビビ「なら私の出番ね！ベアトリーチェ、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”！“アルトリア”！」

ビビが騎士王モードに変身し、

ビビ「“全（アヴァロン）ては遠き理想郷”！！」

その人の宝具技を使って毒息を防いだ。

ネプテューヌ「うわスッゴイじゃん！」
ビビ「当然よ。エッヘン！」
グレイ「威張るなクソ妹…」

威張るビビにジト眼で言うグレイ。

ゾンビワーム「グボロロロロロロロロ～～・・・」

っと今度はゾンビワームが紫色の液体を●ロのように口から出した。

銀時「うわ汚っ！！そして腐っ！！」

はいた液体から腐った卵の様な悪臭が漂っている。

ノワール「な、なによこの匂い！」

桂「汚いにもほどがあるどころではないな…」

月詠「うむ、この悪臭の中に毒素が含まれておる。長く吸い続けていると危険じゃ」

月詠の言う通り、紫の液体から毒素が含まれている。

嗅ぐと臭いし、触れば毒に犯される。

アンデット「オオォォォォォ～～～・・・」

アンデット軍団はいっせいに銀時達に向かってきた。

グレイ「ハァ・・・仕方ない、すべて消してやる」

グレイはため息をついて手に持つ大きな太刀・龍刀で敵をなぎ払う。

グレイ「面倒だ。一気に消す。“茨木の百鬼夜行（イバラギノヒャッキヤコウ）”」

ボボボボボボボボボボボボボボボボボボ！！

アンデット「オ～～～～～～～～～～！！？」

1秒にも満たない砲撃がアンデット軍を全て巻き込んだ。
クロイテ（仮名）は危険を察したのか離れた。

神「いや～、相変わらず性が出る技だね～」

神は嬉しそうに言うが、それ以外はみんな唖然としている。

ネプテューヌ「いやでもこれでアンデット軍は全滅……してないみたいだね」

ネプテューヌは煙がはれているところを見ると、皮膚がところどころ焼けただれたゾンビワームがいた。

ビビ「うわ～…ゾンビなもんだから余計気持ち悪さが上がってるよ～…（￣￣；）」

ビビは冷や汗流して後ずさる。

ヤミノテ「・・・・・・・・・」

するとヤミノテがゾンビワームの上に立つ。

ヤミノテ「ソノチカラガアルカラトイッテワレワレヤダークソウルサマニカテルトオモウナヨ。コノワタシガミズカラコイツヲユウゴウシテキサマラヲホオムッテクレルワ」

ヤミノテは魔法を唱えると、渦の様なものが現れ、ヤミノテとゾンビワームを吸い込む。

？？？「アラタメテシレ！コレガ“ヤミニヨリノロワレシオニ”ヲ！！」

そして空間から大きな人型の影が飛び出してきた。

４つの大きな腕に裂けた大きな口、赤い鋭い目と悪魔の象徴たる黒い角。

そして体にはたくさんの鎖が巻かれている。

ネリア「何という禍々しき存在・・・人の負の感情で作られた鬼のようですね」

グレイ「鬼…」

人の負の感情に生まれしおに、呪いの鬼・呪鬼。

すると呪鬼は右手を振り上げて地面にたたきつけると衝撃波が発生した。

ネプテューヌ「ジャ～～ンプ！！」

全員ジャンプして避ける。

呪鬼はそれを逃さず、グレイに殴りかかろうとする。

グレイ「こんなもんッッ！！」

グレイは鎖付きの双剣・“ブレイズ・オブ・エグザイル”で呪鬼の腕を捕えた。

呪鬼は痛がるような動きをしたが、グレイは止まるつもりはなく、呪鬼の懐に近づいて、腕を一本切り落とした。

グレイ「オリャァァァァ！！！！」

スバンッ！！

呪鬼「！！？！！！？？！？？」

呪鬼は悲鳴をあげた。

ガ、バギベギバリボコ！

すると何と切られた腕が再生し、元に戻ったかのようになった。

銀時「なっ！再生しやがった！」

ネプテューヌ「そりゃゾンビと手が合体したんだから再生ぐらい出来るよね～？」

なのは「いや、多分それはないかと…」

銀時は驚き、ネプテューヌは冗談を言ってなのはが突っ込む。

グレイ「なら！一刺し穿つ破滅の三ツ薔薇（ゲイ・トライデント）」

ドズッ！！！

呪鬼「！！！！！！！！？？」

トライデント状の槍を空間から取り出し、呪鬼に向かって心臓部をつらぬいた。

貫かれた呪鬼は悲鳴をあげる。

呪鬼「・・・ヤミビダマ！」

呪鬼は負けじと上の腕で黒い魔力光を出し、そこから出てきた黒いスフェアが出て銀時達に高速で向かってきた。

ネプテューヌ「銀さん！」
銀時「ったくしゃーねぇな！」

ネプテューヌと銀時が前へ出て、黒いスフェアを全て叩き落とした。

グレイ（あの女も強いが、アレが白夜叉か…）

グレイは銀時の強さを見て思う。
生前ある本屋で銀時が乗っている漫画があって、銀時の強さを把握したようである。

ネプテューヌ「次は、レミィちゃん！」
レミリア「レミィちゃんいうなって言わなかった！？」

ネプテューヌがレミリアを呼ぶ。
レミィちゃんと呼ばれたことに怒鳴ったが。

ネプテューヌ「早速あれをやるよ！」
レミリア「全く、しょうがないわね」

ネプテューヌ・レミリア「魔チェンジ！！」

叫ぶと同時にレミリアが武器へと変化した。
刀身は赤い血の様な色をして、ガードの部分に吸血鬼の目、そして蝙蝠の羽が付いた剣である。

ビビ「レレレレレミリアちゃんが剣になったぁぁぁぁ～～～～Σ（@Д@；）～～～～！！！？？」

ビビは剣になったレミリアを見て驚いている。
グレイも例外ではない。

ネプテューヌ「・・・赤い月の鎮魂歌（ブラッドムーンレクイエム）」

何とネプテューヌはレミリア（剣）を真上に放り投げた。
すると剣からレミリアへ戻る時、レミリアは羽を広げ、背景（バック）に赤い月が照らされる。

ビビ「あれ？昼なのに？」

ビビのツッコミはこの際スルー。
レミリアは両手を広げ、

レミリア「吹き飛びなさい！！」

そう叫ぶと赤い月が呪鬼に向かって落ちてきた。

銀時「いや…よせよせよせおい逃げろォォォォォォォォォォ！！！！」

銀時達は着弾地点から逃げだした。

呪鬼「！！！！！！！！！！！！！？？？？？！！！！！！！？？」

呪鬼は直撃を受けて消滅したかのように大爆発した。

銀時「おいこらテメェ!!俺達まで巻き込ませるなよ!!」
レミリア「あんた達がちゃんと逃げないからよ」
銀時「んだと!」
ネプテューヌ「ぎ、銀さん落ち着いて…」

銀時が怒り、レミリアは毒舌を吐き、ネプテューヌが落ち着かせる。

バキバキバキバキバキバキッ

不気味な音が聞こえる。
前を見ると赤い球を中心にいろいろと生えているのがあった。

新八「あ、あれは…」
グレイ「どうやらあの赤いのはあいつの核の様だな…」

グレイは冷静な判断で赤い球を見る。
そして体が完全に形成された姿は、全身金属の拘束具に覆われていて、蛙のように出ている目（てか頭）と、両手には腕と同じくらいの大きさの鉄球があった。

ブゥゥゥンッ!!

銀時「ウオッ!!」
ネプテューヌ「うわ!」
ビビ「きゃっ!」

拘束具の敵・タルタルシアンが腕の鉄球で攻撃を仕掛けた。

グレイ「こいつ・・・!」

グレイが身構えると、魔方陣の中から人型の檻の中に骸骨、ミイラなどの死体が入った敵が出てきた。
それぞれ両手に手斧、剣、丸のこぎりをもっている。

銀時「あれ～～？なんでだろ～～？変な骸骨がたってるよ～～？・・・」

銀時はあるく骨を見て顔を青くする。
骸骨達は隔離の悪魔・フィニスという存在である。
フィニスたちは大ぜいと銀時達に向かっ…

？？？「くらいな！！」

…って行こうとしたらビームが発射されて三体のフィニスが撃ち倒された。

？？？「お前達！援護に来た！！」

六課の屋根からプリニーとほぼ同じだが、緑の色と鋭い眼光だけが違っていた。

ＩＢＧＭ戦友よｂｙ魔界戦記ディスガイア（Ｄｉｓｇａｅａ　－　Ｂａｔｔｌｅ　Ｃｏｍｒａｄｅ　（Ｈｙｐｅｒ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ））

ネプテューヌ「あ、カーチスさん！」
コンパ「わ～、カーチスさん助かったです～！」
ノワール「久しぶりじゃないカーチス！」

ネプテューヌ達は緑色のプリニー…カーチスと呼ばれるプリニーを見て嬉しそうに言う。
カーチスは飛び降りてネプテューヌ達に言う。

カーチス「久しぶりだなお前達！だが感動の再会よりもやるべきことがあるだろ？」

カーチスはそう言ってフィニスとタルタルシアンを見る。
っとグレイ、ビビ、そして神と眼が合う。

カーチス「ん？見慣れない奴がいるが・・・」
ネプテューヌ「大丈夫！この人たちは味方だよ！」

ネプテューヌが力強く言う。
カーチスはそうかという。

フロン「それより！カーチスさんが援軍に来ましたのでこっちは大助かりです！」

フロンは嬉しそうに飛び跳ねる。
カーチスはふっと笑う。

カーチス「実は…援軍は俺だけではない」

カーチスはそう言うと、遠くから車の音が聞こえる。
そして黒い車がこちらに近づいてきた。
そして何と車が走ってる途中何か分解して変形して人型へと変形した。
そしてそれは完全に変形し終わった後タルタルシアンに回し蹴りを

喰らわせた。
タルタルシアンは蹴り飛ばされて気絶する。

銀時「オイィィィィィィィィィィィィ！！！！！何これ！！？車がロボットに変形したんですけどォォォォォォォォォ！！！！！？」

銀時はありえないかのようなリアクションをする。
カーチス以外は銀時と同じことを思ったか、唖然としている者もいる。

カーチス「紹介しよう。こいつはブラックサンダーって言う金属生命体だ」
ベール「金属…」
ブラン「生命体…？」
リリス「って言うか宇宙人なの？」

ベールとブランは首を傾げるが、リリスは目を輝かせている。
ヴィヴィオも目を輝いている。
ブラックサンダーは手を振る。

カーチス「あともう４人追加だぜ？」
？？？「ボルケーノフレア！！」
？？？「ストームブリザード！！」

遠くから女性の声が、火山の様な火の玉と吹雪の竜巻がフィニスの軍団に直撃した。

桂「なんと！これほど強力な力！これはさぞ強い魔道士と言えようか！」

桂はこの威力を見てなのは達くらいの実力を持っていると推測する。
なのは達とビビは聞き覚えのある声に疑問を抱く。

なのは・フェイト・はやて・ビビ（今の声…まさか・・）

なのは達は上を見上げると、無二の親友（ビビの場合は恋人）がいた。

アリサ「久しぶりねなのは。あのファミレスで会って以来かしら」
すずか「みんな！助けに来たよ！」
なのは「アリサちゃん！、すずかちゃん！」
フェイト「な、何で2人がここに？」

なのは達はアリサとすずかがいることに驚いたいる。

アリサ達は訳を言えば実家に帰ってすずかと話し合ってたところ、影の様な敵が現れたが、たまたまカーチスが通りかかっていたので2人を連れ出した。その後カーチスは敵を全滅させてこの場を去ろうとしたら2人がカーチスにお願い（半ば強制的に）をしだした。カーチスは魔界へ連れて行き、2人を修行させたらしい。

アリサ「今まで私達は見てただけだけど、今度は私達が戦う番よ！」
すずか「私達だって頑張れるよ！なのはちゃん！」
なのは「アリサちゃん、すずかちゃん」

なのは達は嬉しそうな顔をする。

ネプテューヌ「あれ？そう言えばあともう2人…「バガシャァァン！！」！？」

？？？「全く、何で私がこんなことしなきゃいけないんだろうね？」
？？？「知らないよ、お姉ちゃん」

大きな音がしたところから、膝までのピンクのロングにシグナムよりもでかいバストをもつダイナマイトスタイルの女性と、銀髪でビビと同じくらいの身長で胸もそれなりにあり、なんだか金属の拘束具を身につけている少女がいた。

銀時「あの…どちらさん？」
？？？「あ、私はレーティア・デビリアス、あなた達の味方よ」
？？？「私は妹のジャンヌ・デビリアスだよ。よろしくね」

女性と少女は挨拶した。

銀時「あ、はい、こちらこそ・・って今は戦闘中だろうがぁぁ！！！」

銀時はつられて挨拶しようとして突っ込んだ。

レーティア「あっそう、じゃあジャンヌ、片っ端からかたずけなさい！」
ジャンヌ「は～い。シャマッシュ、フォームチェンジ」

ジャンヌは銀色の首飾りの様なデバイス、シャマッシュに声をかける。

シャマッシュ≪オーライマスター、合言葉は？≫
ジャンヌ「金色の暗殺者」
シャマッシュ≪ＯＫ、フォームチェンジ！≫

シャマッシュが言うとジャンヌの体が光る。
治まると黒いドレス（Ｔｏｌｏｖｅるのヤミちゃんのドレス）のジャンヌがいた。

全員「んなっ！？」

全員服が変わったことに驚いた。

ジャンヌ「変身（トランス）、茨の大波！！」

ジャンヌの髪の毛が茨の様な感じになり、フィニスの軍団を全て蹴散らす。

銀時「ちょっとちょっとあの子髪の毛で戦ってるよ～？」
レーティア「あの子のデバイスでバリアジャケットを変えると能力も変えるの」

レーティアが説明する。

ジャンヌ「うん、これが私の能力（チカラ）、そして何より…」

ジャンヌは一息ついたあと言い放つ。

ジャンヌ「コスプレはおしゃれだ！！」
全員「違うわっ！！」

全員全力で否定した。

ジャンヌ「何言ってるの！？コスプレは立派なおシャレなんだよ！
ほら、ここにショートパ「人前で見せないくていいから！！」」

ジャンヌがスカートをめくり上げようとして、新八が全力で止める。
レーティアは呆れたように顔を支える。
なんやかんやあったが戦闘は終了した。

ネプテューヌ「で、帰っちゃうの？」
ネプテューヌ達はさびしそうな目でビビ達を見る。
ビビ「うん、私にも帰る場所があるし、本当はもうちょっと居かったんだけどな～」
グレイ「行ってないでさっさと帰るわよ」
ビビ自身も名残惜しく言うが、グレイはそれをバッサリ切る。
奥でレーティアがヴィヴィオに耳打ちしているように見えるが。
ビビ「えっと、皆さんさようなら…」
ビビは別れの挨拶を言って去ろうとすると、
ヴィヴィオ「お姉ちゃん…」
ヴィヴィオが涙目でこちらを見ている。
ヴィヴィオ「お姉ちゃん…私と一緒にいて…？」

私と一緒にいて（エコー）
ヴィヴィオの言葉がビビの脳内にまで響き渡り、
ビビ「ドストラーーー

全員時が止まったかのように固まった。
そして、

全員「ギャハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

全員大爆笑した。

ビビ「グ、グレたんミ☆って・・・ブッ！アハハハハハハ！！」
神「グレた・・・ギャハハハハハハハハ！！！！！ど、ドツボハマった。
はははははは！！」
ジャンヌ「お、おかしい…ククク・・・」
レーティア「・・・・・・・・・（失笑）」

ビビは転げ回り、神とレーティアは地面にバンバン打ち付け、ジャンヌは笑いをこらえている。
グレイは恥ずかしさで怒りメーターがふれた。

グレイ「テメェラゼンインブッコロシテヤルゾコノヤロガァァァァァァァァァァ！！！！！！」
全員「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

四六時中鬼ごっこが続けられた。

『スティン姉妹』『自称、神』『ブラックサンダー』『アリサ・バンニグス』『月村すずか』『レーティア・デビリアス』『ジャンヌ・デビリアス』が仲間になった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

グレイ「・・・グレイだ」

銀八「テンション低！！もうちょっと元気にやれよ～」

グレイ「めんどい、さっさと始めろ」

銀八「・・・しゃあねぇな。んじゃコラボの元であるペンネーム『リィーン』さんからだ。『どうも！！　執筆、お疲れ様です！！！

旅人「とうとう、あいつが来たか……」

レヴェッカ「あん人、大丈夫やろか？」

（え？　何、この妙な組み合わせ……グレイとビビと、神様があっちに居るので、仕方なくこの方々を呼んだのですが……）

レヴェッカ「ま、大丈夫やろな。あん人は、イレギュラー大好きやし。おもろい事があると、すぐに首突っ込みたがるんやから」

旅人「歯止めがきかんのも、考えものだがな」

ですよねぇ～……

作者&旅人&レヴェッカ「はぁ～……」

さってと、では、ここでちょっと質問を一つ

・もしかしてですが……グレイ、ビビ、神様は、今後永続的に使用していくのですか？

レヴェッカ「？　どういう事なん？」

旅人「今後、この物語が終結するまで、使い続けるのか？　という事だろう」

はい。そこが少し気に成りまして……ずっと使っていくとしても、私は全然構いません。って言いますか、ジャンジャン使ってやって下さいｍ（＿＿）ｍ

旅人「……まぁ、お前の頭の中では、あの兄妹の物語は、そろそろ佳境に入る。のだったな」

えぇ。あの二人に関しては、現段階でもう成長させる事はないですからね……ラスボスまでは

旅人「その間は、あいつらの物語、という訳か」

はい

レヴェッカ「何気にあんさん、ネタバレしとるで」

あ（@д@;）……い、いいんですよ！！　根幹さえ、ばらさなければッ！！！

旅人「はぁ（大丈夫か？　この作者は……）」

で、では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張って下さい！！　失礼します！！！

レヴェッカ「ほなな～♪」

旅人「また会おう」『』」

真王「無論です。３人はこのまま使っていきます。リィーンさんがシリアス行きならこっちはギャグ行きで」

銀八「・・・ま、とりあえず『リィーン』さん。コラボありがとうございました」

真王「んじゃ次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんから。『ゼロＵＦ「俺のこの手が真っ赤に燃える！物扱いする馬鹿者に鉄拳入れろと轟き叫ぶ！！ばぁくねつ！バーニング！フィンガァァァァ！！」

いきなり出しよった！！

ルイージ「そりゃあリィーンさんの所じゃあしちゃった後だったから黙ってたけど…ビビちゃんも兄さんの常識の無い転生者の認識に入るからね；」

スネーク「リィーンの所ならともかく、他の所じゃな…」

フォックス「防ぐより避けた方が良いぞ。マリオはチートとかバグとか後、神の能力を無効化するから貫った能力だと無効化するから」

ネス「いや～どうなるのやら～」

リュカ「銀魂メンバーとリリなのメンバーにネプテューヌさんを除いたメンバーに質問です『ビビさんを見た感想は？』」

スネーク「真王に質問『ビビやグレイをどう言う感じに扱うんだ？ボケやツッコミか？』」

フォックス「ビビに質問『もし女神になったらどんな感じだと思う？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪

ゼロUF「ウルティメイトスラッシュ！！」

ルイージ「何時まで撃つの！？」『マリオさん、怒り御尤もですが抑えてくださいよ。そりゃ彼らは可愛いかすごい子だとか思ってるでしょうね。ビビはボケ、グレイはツッコミという役位置になります。グレイにボケはありえないし」

グレイ「・・・苦労がふえそうだ…」

ビビ「私が女神になったら?そりゃセクシー&ダイナマイツなボディとかでなのはちゃんたちと・・・・・・・・・キャッ?」

銀八「何この子?気持ち悪っ」

ビビ「何か言った?」

銀八「い、いや別に…『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

グレイ「ハァ・・・仕方ない。ペンネーム『黒神』だ。『質問。

神楽へ

もし、魔導士になれるのならどんな魔導士になりたいですか?

桂へ

僕の小説で魔剣士となった自分自身の姿を見てどう思いますか?

アイエフ・コンパ・ノワール・ブラン・ベールへ

僕の小説でゲストとして呼ばれたネプティーヌですが、どんな活躍をするかを期待していますか?』んじゃ中華野郎、さっさと答えろ」

神楽「コルァ、何だその言い方は、私はこのままがいいから魔道士はいらないネ」

桂「魔剣士の俺の姿…」

桂は少々酔い痴れているように見える。

アイエフ「あたしは別に」

コンパ「頑張るですねぷねぷ」

ノワール「とりあえず守護女神でね」

ブラン「…がんばれ」

ベール「ファイトですわ」

銀八「応援かよ。『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

真王「次はペンネーム『あああ』さんから。『皆に質問。もし、白夜叉＋シルバーブレイド＋リインフォースユニゾン＋今回出てきたシルバーソウルの銀さんと戦ったら勝つ自身はありますか？』もう一つ『ビビへ
とりあえず一週間、屁怒絽と同じ部屋でダークマター食いながら、過ごしてください。』ぜんぶ合わせたら銀さんは史上最強の存在になりますね。でも体はついていけません。あしからず」

ビビ「屁怒絽ってたしかあの鬼の人で、あのダークマターを……
……すっごくいやっ！！」

真王「んじゃ『あああ』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒龍』さんから。『黒龍「ウゼェェェ

黒龍「でも何であなた登場してんですか？」

セフィロス「いや、何。あの勘違い娘を見たらつい、絶望を与えてたくなってしまってな」

黒龍「めちゃくちゃ危ない理由だった！！」

セフィロス「フッ、しかし、ここまで滑稽な者を見るのは久しぶりだ。いや、あまりにも愚かな愚者というべきか・・・」

黒龍「うわ～めちゃくちゃ罵倒していらっしゃる」

セフィロス「まぁ愚者とは言え、それなりにできるようだな」

黒龍「いや、そりゃあ転生者ですし・・・」

セフィロス「ああ、クラウドよりも遥かに・・・」

黒龍「えっ！？クラウドよりも強いんですか！？」

セフィロス「愚かだな」

黒龍「やっぱりそうですよね！！」

セフィロス「フっ、私はこれで失礼させてもらおう」

セフィロスは黒い羽でできた肩翼を出して空に飛んでかえる。

黒龍「言いたい事だけ言って帰っちゃった・・・仕方ない。最後に質問です。

1．ビビに質問。とりあえず、その腐った思考は捨てろ。

2．ビビに質問。銀時の強さをみどうだった？

3、ビビ（くそ）に質問。正直のそのウザイ考え方どうにかしないと、読者から批判バンバン来ますよ？（黒笑）」

1番と3番はかなりドSな質問だった。

黒龍「じゃあ次回も楽しみにしています」』ビビ、お前宛だ」

ビビ「なによ！私の頭は新鮮そのものよ！銀時の強さはまぁ認めるけど、って私にくそッて言うなこらぁッ！！私のファンの皆様が反乱をおこすわよ！！」

真王「いそうだな…。んじゃ『黒龍』さん。ビビファンの皆様に殺されないようにしてください」

銀八「次はペンネーム『月光閃火』さんからだ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…銀時の強さは筋金入りだな…。信念の籠った攻撃ほど、強いモノは無いな…。

輝刃「全くだ…。んで、質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．作者に質問…新八の出番はもう少し先になるか？

あ～…確かに、そろそろ出てもいいんじゃねぇかな？次は俺からだ。

2．ビビに質問…っつーか、“あの”続きだ。真王のスターライト・ブレイカーは効いたな…。身体中煤だらけだぜ…。んでもって、とりあえず…ナデナデ…。（そういって、ビビの頭を優しく撫でる）

輝刃「フッ…何だかんだ言って、案外気に入っているようだな…（微笑）。」『」

ビビ「・・・男に触られるの虫唾が走る！」

真王「どんだけ男が嫌いなんだあんたはっ！！」

ビビ「うるさい！！私が撫でられるのを許すのはなのはちゃんたちだけだよ！！」

真王「お前は…ヴィヴィオ達のナデナデは禁止するからな」

ビビ「そ、それだけはご勘弁を～～！（´Д｀；）」

真王「全く…って新八はまだ存在するよ。『月光閃火』さん、新八を見てませんね？」

銀八「んじゃ次回はあのへらへら笑っている神さんだな」

真王「またな～」

第六十七訓：神様は偉そうなくせして我儘（後書き）

ビビ「六課の仲間になった私達にまち構えられたのは信じがたい事実、それは…」

グレイ「おい、お前半ばあのガキの涙目で折れたんじゃないのか？」

神「そこは気にするなよ」

ビビ「なんと！男でありながら女の子の心をもつ男！つまりオカマ！その物たちの存在が世間に知らしめられてしまうとは！！」

グレイ「おい、こいつ壊れたか？」

レーティア「いやこの子正常よ」

ビビ「こうなったら、オカマ撲滅のためにある者たちの派遣をするしかない！いでよ！プリティ美少女部隊、キラーガールズ！！」

ジャンヌ「んいっ！みんなを骨抜きにしちゃうぞ！」

グレイ「勝手にやってろ…」

ビビ「次回！『ビビの白百合大作戦』最終話！『決戦！オカマ大王の死闘！』最後に笑うのは美女たちさ！」

神「さすがにオカマは嫌だな」

グレイ「おれもだ」

真王「次回はネプテューヌでお馴染みあのコーナーでも開くかな…」

途中紹介（前書き）

第六十五訓から六十七訓まで現れたキャラ達を紹介します。

途中紹介

～ビビ・スティン～

髪：白っぽい銀色の長髪のセミロング
目：右目が蒼、左目が銀色のオッドアイ
服：リィーンさんの絵で見てください。
年齢：１２歳あたり
３サイズ：ヒ・ミ・ツ？
体重：これもヒ・ミ・ツ？
性別：♀
種族：禁忌女
魔力光：明るい虹色
好き：なのはちゃん達（特にヴィヴィオ）、アニメ、ゲーム、マンガ、可愛い者、ムフフイベント
嫌い：男全般（実の兄は除く）、虫、気持ち悪い者、なのはちゃん達を汚すもの
性格：百合好きの変態、キレると悪魔も泣かす冷酷な感じになるとかレベル：６５００
得意武器：ベアトリーチェ、ワルギリア
スキル：禁忌の魅惑（ビビと同性のキャラ接近時、能力が上昇する）
詳細：別次元の世界に転生した少女。極が付くほど百合好きでアニゲーオタクである。神から能力もらって我が物顔で（別次元の）なのは達を虜（という名の洗脳）にしてきた。ムフフなことを好み、何時かなのはちゃん達を手に入れようと考えている。余談ではあるが、ある配工管の男にぼこぼこにされたというが、また別の話。

～ガレオムマーク２～

髪：ない
目：赤
服：全身金属
年齢：不明
３サイズ：なし
体重：１０００キロ以上かと…
性別：♂
種族：ガレオム量産類
魔力光：なし
好き：？？？
嫌い：？？？
性格：機械なので不明
レベル：８００
得意武器：なし
スキル：なし
詳細：鬼兵隊が作り出したガレオム。前回『第四十二訓：戦いにはＢＧＭが一番』から倒されたガレオムがパワーアップした姿、にもかかわらず、なのはのスターダストストームですぐに倒された

～グレイ・スティン～

髪：黒い長髪
目：紅と金色のオッドアイ
服：ビビ同様。
年齢：２１
３サイズ：８８／５６／８７

体重：７０？
性別：♀（生前♂）
種族：幻想鬼神
魔力光：暗い虹色
好き：静かな時間、散歩
嫌い：クソ神、邪魔もの、女であること、非現実なこと
性格：人前では女として行動、普段は口悪く言う
レベル：７０００
得意武器：龍刀【斬鬼】、ブレイズ・オブ・エグザイル、神機、刺し穿つ破滅の三ツ薔薇（ゲイ・トライデント）、ブレイズ・オブ・リグドゥオーグ、ディバイダー・Ｔｙｐｅ－Ｂ、タマモノマエ、シュテンドウジ、スウトクテンノウ
スキル：幻想のオーラ（敵魔物キャラのステータスを減少させる）
詳細：ビビと同じく別次元の世界に転生された人物。非常識なことは全く信じず、自分が女になったことに嫌みを感じている。現在己の起源に悩まされており、今でも己の起源を否定している。

～名前不明（神様）～

髪：赤いぼっさりヘッド
目：七色
服：キングダムハーツ2”のラスボス、“ゼムナス”の白と黒のコートを着せた感じ
年齢：見た目２６歳、実年齢不明
３サイズ：ない
体重：ディフォルト７０キロ
性別：♂
種族：破壊神

魔力光：不明
好き：グレイいじめ？、たこ焼き、妻たち
嫌い：邪魔する奴、修正力の存在
性格：ちょっと頭のねじが飛んでいる？
レベル：？？？？
得意武器：全部
スキル：神の威厳（神系のキャラのステータスが上昇する）
詳細：グレイとビビを転生させた張本人。実は神になる前までは普通の人間だったと言うが、今は破壊神とまで言ってしまった。元々モテル感じだったため９人の個性的（？）な妻がいる。たこ焼きが大好きらしく、究極のたこ焼きを食べたいと願っている。

～ヤミノテ～

髪：なし
目：なし
服：なし
年齢：不明
３サイズ：なし
体重：１５０キロ
性別：不明
種族：闇の手
魔力光：闇色
好き：？？？
嫌い：？？？
性格：機械的
レベル：３０００
得意武器：なし

スキル：闇の指令力（闇系モンスターの能力が上昇する）
詳細：真っ黒な手の形をしたモンスターでダークソウルの部下。司令塔ポジションらしい。

～ゾンビワーム～

髪：なし
目：１０個の赤い目（１６個あったのだが、６つは潰れている）
服：なし
年齢：死んでから３０００年だろう
３サイズ：なし
体重：１０ｔ
性別：不明
種族：魔虫族（ゾンビ化）
魔力光：なし
好き：？？？
嫌い：？？？
性格：ただ敵を食べようとするらしい
レベル：４０００
得意武器：なし
スキル：なし
詳細：魔虫族の一匹がゾンビと化してしまった存在。耐久値が凄く高いため苦戦を持ちいられがち。

～呪鬼～

髪：なし（三本の角がある）
目：不気味な赤い目
服：なし
年齢：不明
３サイズ：なし
体重：１００トン
性別：不明
種族：？？？
魔力光：不明
好き：？？？
嫌い：？？？
性格：？？？
レベル：５０００
得意武器：なし
スキル：なし
詳細：ゾンビワームとヤミノテが融合した姿。ひときわ凶暴なため迂闊に攻撃は出来ない

～タルタルシアン～

髪：なし
目：しろ
服：金属の拘束具
年齢：？？？
３サイズ：なし
体重：２０ｔ
性別：♂？
種族：別次元の悪魔

魔力光：なし
好き：？？？
嫌い：？？？
性格：ただ敵を狙う、それだけ
レベル：４０００
得意武器：鉄球
スキル：死者の鉄骨（フィニスの数で防御力上昇）
詳細：全身鉄で出来た拘束具を身に纏う別次元の悪魔。両手の鉄球で力任せに振り回す。

～フィニス～

髪：なし
目：しろ
服：人型の檻
年齢：？？？
３サイズ：なし
体重：３０００キロ
性別：？？？
種族：別次元の悪魔
魔力光：なし
好き：？？？
嫌い：？？？
性格：？？？
レベル：１０００
得意武器：手斧、剣、のこぎり
スキル：なし
詳細：人一人分はいる檻の中に骨や死体が、怨霊に取りついて悪魔

と化したもの。なお、アゴノフィニス、テレオフィニス、モルトフィニスの三種おり、それぞれ武器も違うが、それぞれ苦痛、恐怖、死で動いている。フィニスはラテン語で隔離と呼ぶ。

～ブラックサンダー～

髪：なし
目：蒼
服：っというかボディは黒い車
年齢：???
３サイズ：なし
体重：２トン
性別：♂
種族：オートボット
魔力光：なし
好き：????
嫌い：???
性格：基本無口
レベル：６０００
得意武器：なし
スキル：トランスフォーム（機械から人型へと変形）
詳細：宇宙のどこかにある惑星から来た金属生命体。ミッドチルダに不時着し、迷っていたところをカーチス達に助けられ、以後六課の一員となる。イメージはトランスフォーマー（映画版）のバンブルビーを黒くした感じ。

～アリサ・バンニグス～

髪：赤みがかった金髪（シャマル並みの長さが腰までのロングへと変わった）
目：緑
服：二次作であるバーニングアリサ
年齢：１９歳
３サイズ：燃やされた…
体重：燃やされた…
性別：♀
種族：炎帝姫
魔力光：赤とオレンジの間
好き：なのは達、紅茶、子犬
嫌い：気持ち悪い物、むさい男、ヤル気のない男
性格：素直になれないツンデレ
レベル：７０００
得意武器：レーヴァティン（剣）
スキル：バーニングハート（倒した敵の数によって攻撃力上昇）
詳細：なのは達の親友でバンニグス財閥のお譲さま。成績優秀で頭の回転が良い方である。ただツンデレなとこがあるため素直になれないのが玉にキズ。

～月村すずか～

髪：腰までの紫
目：青色
服：上部になのはのエクシード、下部にヴィヴィオのバリアジャケットを青紫色にした感じ

年齢：１９歳
３サイズ：破かれている（でもアリサより上は確か）
体重：氷の欠片が墜ちてる
性別：♀
種族：夜の一族（吸血鬼）
魔力光：蒼紫
好き：なのは達、猫全般、優しい人
嫌い：悪い権力者、気持ち悪い者、吸血衝動
性格：普段はおしとやかな性格
レベル：７０００
得意武器：ブリューヌ（剣）
スキル：ヴァンパイアハート（通常攻撃でとどめを刺した後、完全回復する）
詳細：なのは達の親友の一人。普段はおしとやかな少女だが、『夜の一族』という吸血鬼族の末裔なのだ。今でも己の血のことを悩んでいる。

途中紹介（後書き）

これは質問の領域に入りません。あしからず。

５ｐｂのふぁいらじっ♪　その１（前書き）

真王「超次元ゲイムネプテューヌに登場するコーナー。その名も『５ｐｂのふぁいらじっ♪』見ててくだせぇ。チェケラッ！」

５ｐｂのふぁいらじっ♪　その１

５ｐｂ．の「ふぁいらじ♪」
久しぶり！５ｐｂ．だよ！みんな今日もよろしくね。
この番組は、リスナーから電波を通して誰かに伝えたいことを募集し、ボクが代わりに読んで伝える番組だよ。
伝える内容は、日常報告でも大切な人へのありがとうや告白でも何でもＯＫ。伝えたい相手はラジオを聞いているリスナーでもいいし、パーソナリティーのボクでもＯＫだよ。
じゃあ、さっそく番組に送られてきたハガキを読んでいくね。

まずは、『好奇心な探検家』さんからのハガキです。

『よう！５ｐｂ．ちゃん！実は君に凄いことを教えるぜ！って言うかありのままのことを話すぜ！実はゲイム業界の女神たちが行方不明だっていうんだ。俺も最初耳を疑ったよ！せっかく女神様の抱き枕カバー買おうと思ったのに…おっと余計なこと書いてしまった（だが後悔しない！）。それとプラネテューヌのある場所で私は何か装置みたいなものを見つけたんだ。しかしどれもこれも暴走したのか煙がもくもく立っててね。そこで私は思いついたんだ、女神達はこの機械を使って行ったんだ！って。けど誰もしんじてくれなかった…。けど私の考えは正しいんだ！５ｐｂ．ちゃんも何か言ってくれ！』

ってええ！？女神たちは行方不明なんですか！？でも君の必死さは伝わったよ。だいじょうぶ、君のこと信じるよ。

さて次は、『エースのファン』さんからのハガキです。

『５ｐｂ．ちゃんこんばんは…でいいのかなぁ？俺初めてなんだよ。でもまぁいいか。いや～ホントなのはさん達はかっこいいな～。・・・あ、５ｐｂ．ちゃんに教えるけど俺はあのエース３人のファンなんだ！まず八神はやてさんはレアスキル持ちのエース、次にフェイト・Ｔ・ハラオウンはスピード界では負けない素早さをもつ電撃使いのエース、そして極めつけは管理局では誰もが知ってるエースオブエース・高町なのはさん！俺は特になのはさんのファンなんだ！影ながら彼女を応援しているんだぜ！・・・そう言えばなのはさんが恋をしている奴がいるって噂なんだが絶対嘘だよな？嘘だと言ってほしいよォォォォォォォ！！！』

・・・えっと、とりあえずそのなのはさんに支援している事は分かったよ。それにしてもエースって凄い人たちだね。でもエースと言ってもこいの一つくらいするよね。『エースのファン』さん、これからもがんばってね。

さてさて、次は、『悩める恋の旅人』さんからのハガキだよ。

『ホテル・アグスタのことなんだが、俺はある金髪で緑のドレスを着た女性を見てしまった。俺はまた恋をしてしまった』

恋の進展だね。『悩める恋の旅人』さん。しっかり頑張って。

まだ行くよ。『可愛いもの大好き女子局員』さんからのハガキです。

『５ｐｂ．ちゃんこんちゃ～ッス♪』

あっ、こんにちは～。

『聞いて聞いてよ！機動六課に次元漂流者が来たってことだけど実

はすんごくかわいい子たちだったのよ！特に白っぽい髪に蝙蝠の髪飾りをつけたかわいいわんこみたいな子がいたのよ～～、メッチャかわい～～～（＊＞∀＜＊）～～～！！あの子をナデナデしたいわ～～～！！』

へぇ～、子犬みたいな女の子か～～、きっと可愛いんだろうね。』可愛いもの大好き女子局員』さん、ありがとうね。

次は、本名ＯＫ『リック』さんからのハガキだよ。

『これを見てるかどうかわからんが、お礼を言いたい。あのあと私達はとっても元気に暮らしている。これも君達のおかげだ。哲志達も私達のためにバイトをしてくれている。最初は大丈夫かと不安だったがな。ところでサチコ達は元気にしてるか？あとでジェニファーの料理を送るから元気にしてくれよ』

素晴らしい家族愛だね。

次も本名ＯＫ『勝男』さんからのハガキだよ。

『覚えてるかい？寿司屋の関口勝男だ。あんたらのおかげでこの寿司屋は人気を取り戻したぜ！今度来るときは俺特製の神めえニューを作ってやるよ。その名も『ビッグカッパー（見た目は河童巻きをでかくした感じ）』だ！絶対に人気は間違いなしだ！そんじゃあな』

・・・いや、その新メニューはどうかと…、まあいいや。

さてさて、次は、『世界征服をたくらむ男』さんからのハガキ・・・ってなにこれ？まあいいや。

『フハハハハハ！このはがきを見ている者の中で紫髪の少女と銀髪の侍よ！我を覚えているだろうか？この文章とハンドルネームを見てピンと来ても我は何処にいるか分からんぞ。貴様らのせいで我の計画はついえても絶対に諦められん。なので今は魔界のどこかでこつこつとお金を溜めている。次に現れるのなら貴様らの敗北となるだろう！・・・さて、もうひと稼ぎするか…』

・・・これ突っ込むべき？・・・止めとこう…。

えっと、次は、『機動四課の隊長』さんからのハガキだよ。

『ある森の中に大きすぎる大木があったんだ。私はそこへ行ってみたら何と花屋だったようだ。どれも見た事ない花がいっぱいでしばらく見とれていたらその花屋の店主…言葉に表されないほど恐怖を感じた。絶対世界征服しに来たやつに違いないが、言い出したら確実に殺される！！これだけは言って置く！『屈怒絽の森』から逃げてぇエエエエエエエエエエエエエエ！！！』

って『機動四課の隊長』さぁぁぁぁぁぁん！！何があったのォォォォォォォォォォォォ！！！？って言うか屈怒絽の森って何！？何かすっごく怖いんだけどっ！？・・・いかんいかん、少し落ち着こう。

気を取り直して、『ロリコン好き局員』さんからのハガキです。

『俺すっごくかわいい子を見つけたぜ♪顔立ちがあのガルデモの悪魔っ子にそっくりな顔立ちの女子なんだ。その子に告白しようとしたら「あんたキモイから近寄んな」っていわれた。・・・俺泣いていいか？』

は、ははは…人の好みはそれぞれだから気にしないでね。

えっと次は、『元聖祥大付属小学校生徒』さんからのハガキです。

『なんてこった。俺達のアイドルのアリサ・バンニグスと月村すずかさんが突然いなくなってしまった！一体何処に言ったんだ！？教えてくれ！マイハーーーーーーーーーーツ！！！！』

・・・突っ込む気も起きない。

ちょうどここで時間みたい。それじゃあみんな、また今度！バイバーイ！

この番組は、時空管理局の提供でお送りしました。

それじゃあ、銀八先生の質問コーナーをお送りします。

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

神「いよう（。ω。）ノ『リィーン』とこの神様だぜ？」

銀八「お前何さまだ？」

神「神様だ」

銀八「・・・じゃあさっそく行くか」

神「スルーかよ」

銀八「ペンネーム『鳴神　ソラ』さんから始めっぞ。『ルイージ「あれ…兄さんは？」

スネーク「これ…」

『ちょっとした修行に出ます…決してボケな女の子を張り倒しに行くのではないのでｂｙマリオ』

ルイージ「…勘違いされない為かね…今、コラボを書いてますので！後、ちょっとキングベヒモスを倒すのをＦＡＲしたゼロ（兄さん）でビビちゃんが倒す感じにしようと作者は考えてます」

スネーク「それで加わったな…」

フォックス「だな…」

ネス「皆に質問『仮面ライダーネオスと仮面ライダーネクサスについてどう思いますか？』」

フォックス「ビビに質問『コラボでのマリオのはどうだった？』」

ネス「真王さんに質問『もし運動会するならそちらはどう言うメンバーで行きますか?』」

次回を楽しみにしてます♪』」

真王「これだけはぶっちゃけ言いますが私仮面ライダーなんて興味ないんです。質問してくれてもごめんなさい（土下座）。あと運動会で出るならネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールといったところですね」

ビビ「えっと次は私の…もうぼこぼこにされてめっちゃ悔しいよ！」

銀八「まだ根に持ってんのか…」

神「・・・『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってな?次の質問はペンネーム『黒神』さんだぜ?『質問します。

黒神

「いやぁ、完全に凄い展開になりましたね。じゃあ……月詠へ、ジェイソンと化したキャロを見てどう思いますか?」

銀時

「何おっかねぇ質問してんだお前は!?」

銀時がさっそくありえない質問に青ざめて叫びだす。

黒神

「まぁいいじゃないっすかコレぐらい……後ベールへ、もしゲストとして呼ばれたら、桂と共存活躍でもしてみたいっすか?」

ネプティーヌ
「それだったら、今度ノワールやブランも呼んであげてよ？」

黒神
「へぇーい。で……最後にビビへ。何か、君ってオタク以上に醜い変態に見えてきたのですが気のせいですか（黒笑）」

銀時・ネプティーヌ
『『だからなんでそんなに腹黒いんじゃァァァァァァァ！！！！！？？』』・・・何だこいつは…」

真王「ニジファンの中で一番腹黒い作者だよ。んで答えは…」

月詠「・・・・・・・・・・あいてにしたくない」

ベール「出来ればそうしてください。そしてはやてさんを亡き者にしても…」

銀八「何言ってんのこの娘ォォ！！？」

銀八はベールの一言に青ざめる。

ビビ「私は変態じゃない！！なのはちゃんたちを愛でる乙女よ！！」

真王「それでよくジャンヌからなのは達の盗撮持ってんじゃん」

ビビ「いいもん、なのはちゃんたち好きだし」

銀八「って言うか自分が変態だって認めてるんですけどォォォォォォォ！！！」

神「いやぁここまでいくとは…『黒神』、変態に気をつけな。次は俺がお世話になってる『リィーン』だぜ。『どうも！！　更新、お疲れ様です！！！

レヴェッカ「どうも～。あん男の第一夫人、レヴェッカいいますぅ。ってか、あん人何気に、高みの見物しとるし」

そうですよね……何もしてませんし……

レヴェッカ「自分の力で一掃できるモンを、あえて……よほど余裕かましとるなぁ」

で、ですね……さすが、神様

レヴェッカ「ほんで、ウチの愛する男や♪」

は、ははは……

さて、今回も質問を少し、させていただきます

・前回、感想でほかのウチの五人の転生者（バカヤに竜虎、ハジメに天音、夢乃）は使いたいとおっしゃられていましたが……使うのですか？

・他の感想を見て思ったのですが、まさかビビの性格を丸くするおつもりですか……？（ハイライトが消えた瞳で、若干ドスの効い

た声で）

レヴェッカ「アンタにとって、ビビはヤンデレで確定なんかいな！！！」

もうそういう認識じゃないですか、読者からは……ですから、ここでもその片鱗が垣間見える事を、楽シミニシテオリマス♪

レヴェッカ「あんさん、目がイッとるで」

では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張って下さい！！　失礼します！！！

レヴェッカ「ほなな～♪」『…俺の居ぬ間に何があった？」

真王「だな。あの五人は出す予定だ。なんせ面白そうだし」

銀八「それだけかよ！！」

真王「リィーンさんのはヤンデレに入るならこっちはエロかわでいきますよ？」

銀八「エロかわって何！？エロっぽくて可愛い子の略か！？」

真王「では『リィーン』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「聞けよ！！」

真王「最後にペンネーム『あああ』さんから。『最近、銀さん、フ

ラグメイクしてないですけど大丈夫なんですか？』銀さんのフラグは作者の都合です。『あああ』さん、ちょびっと期待してもいいが」

神「次回はレーティアって言うやつだぜ。ばいば～い！」

5pbのふぁいらじっ♪　その1（後書き）

真王「次回は何と宇宙の世界に突入！宇宙生物の襲撃に巻き込まれ宇宙へ飛ばされた銀時達はミッドへ帰る冒険（そしてお宝探し）が始まる！」

レーティア「次回『宇宙は広いよねっと思った時期もある』テイクオフよ」

～報告～

真王「なんか予告と違ってしまいましたが、別に気にしないでください。面白ければよいと思うので」

第六十八訓：宇宙は広いよねっと思った時期もある（前書き）

真王「ついに始まった銀河編！銀さん達はどんな冒険を繰り広げられるか！」

レーティア「『リリカル銀魂』銀河編、始まります」

真王「あ、マリギャラみたくタイトル考えてみました。どうぞ」

～サバンナランドギャラクシー～

『小さな星のあばれんぼう』

第六十八訓：宇宙は広いよねっと思った時期もある

ミッドチルダのある日から2週間開催されたあの祭り。
『星屑祭り』が今日も夜空へ飛んでいく。

そして始まりは一つの手紙。

『ネプテューヌお姉ちゃんへ

今日も星屑祭りが始まっているよ。
みんなで一緒に楽しもうよ。

ヴィヴィオより』

ネプテューヌ「ハイそんなわけで来ました。第３６回、チキチキ、星屑祭り大会ぃぃぃ！！」

ビビ、なのは、はやて、レーティア、ジャンヌ、神楽、スバル
「いえ～～～～～～い！！」

新八「ちょっと待てェェェェェェェェェェ！！！！いつの間にそんな企画作ったんだよ！！」

ネプテューヌがマイク持って実況して、みんなノリノリに言うところを新八は突っ込む。
ちなみにアリサとすずかは自宅に戻ったそうだ。

銀時「決まってんだろ？祭りと言えば騒ぐんだよ」
新八「祭りは楽しみだけのもので会って騒ぐものではありませんよ

！！」

新八は正当なことを言うが、

銀時「あ〜、ゆっくり星座でも眺めとくか」

ジャンヌ「何が見えるの？」

銀時「…一つ星だな」

仰向けで星を見つめる銀時…って言うかジャンヌのスカートの中を見ている。

新八「お星さまァァァァァァァ！！！もうこいつら滅ぼしてくださぁァァァァァァァい！！！」

新八は天に向かって叫ぶ。

スドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！

上空から流れ星が銀時達を襲った。

新八「嘘ォォォォォォ！！？ホントに僕滅ぼしちゃったのォォォォォぉ！！？？」

ありえないことに驚く新八。

ネプテューヌ「違うよ新八君！！これは襲撃だよ！！」

ヒューーーーー！！ドガァァン！！

空から隕石の大群がミッドを破壊していっている。

新八「こ、これは一体!?」
レーティア「あの怪物の仕業よ!」
レーティアが指差す方向を見ると、巨大な怪獣がミッドチルダを襲っている。
ジャンヌ「えっと・・・あれってガメラ?」
レーティア「違うと思うけど…」
姿が微妙にガメラに似ていて思わずつぶやくが、レーティアがやんわり否定する。
ガメラ?「ウグオアァァァァァァァァァァ!!!!!」
ガメラにの怪物は暴れた後空高く飛んでいった。
銀時「ホントに飛んでいったよ!!マジでガメラでいいんだな!?」
ネプテューヌ「言ってる場合!?早くしないと!」
ネプテューヌは町の方へ行こうとした。
するとなぜかタイミング良く星屑が来る。
ネプテューヌの足が星屑にあたり、偶々通りかかったロストロギアにヒット。
全員「あっ」
挙句ロストロギアが暴走し、銀時達を吸い込み始める。

そしてやっぱりこう言う役割なのか、新八がいの一番に光の球体に吸い込まれ始めた。

新八「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

新八は慌てて銀時の手を掴み、銀時はネプテューヌ、ネプテューヌはノワール、ノワールはベール、ベールはブラン、ブランはレーティア、レーティアはジャンヌ、ジャンヌはビビ、ビビはグレイ、グレイはコンパ、コンパはアイエフ、アイエフは神楽の手を掴むと言う、繋ぎっこ状態になった。

銀時「し、新八！！テッメ、どう言うつもりだ！」

銀時は踏ん張りながら新八に文句を言う。

新八「嫌だー！！一人で吸い込まれるのは嫌だー！！」

グレイ「そこは普通“僕に構わず行ってください”くらいの事は言う場面だろ」

ビビ「だから逝って」

新八「逝けるかァァァァァ！！！」

神楽「全員私に構わず逝ってー・・・・！」

銀時「いや、お前も道連れだ！！」

先頭の神楽を始めてとしてなんとか吸い込まれないように踏ん張っているが、いつまで持つか分からない。

心なしか、吸引力が強くなっているようにも感じられた。

桂「ふはははははははは！銀時！急に風が強くなったと思ったら一体何やっているのだぁァァァァァァァァァ！！！！？？」

ヴィヴィオ「きゃあああああああああああ！！！」

巻き込まれたのか桂、ヴィヴィオが吸い込まれていく。

ジャンヌ「いけない！トランス！」

髪の毛を触手のように2人を捕まえた。

桂「かたじけぬぅぅジャンヌ殿！！」

桂はお礼を言った。

神楽「も、もうダメアル！」

どんどん強くなる吸引力に対して踏ん張りが効かなくなった神楽は少しづつ後ろに後退してしまう。
神楽の手を掴んでいたネプテューヌ達も後ろに後退していまう。

銀時「か、神楽！根性見せろ！！」

神楽「ご、ゴメン銀ちゃん！さすがに、もうダメネ・・・」

そして神楽の体を宙を浮き、後ろにいたネプテューヌ達も宙に浮いてしまう。
もうダメだ・・・そう思った時、奇跡が起きた。

ガシ！

神楽の手を誰かが掴んだ。

神楽「エリー！」

神楽の手を掴んだのは白い体に黄色い嘴(くちばし)が付いた、ペンギンお化けのような生き物であり桂のペットである『エリザベス』だった。
これで助かった、そう思った時、不運はやってきた。

プリニー「うわぁぁぁぁ！！」
神「待ちやがれ俺のたこ焼きィィィィィィィ！！！！」

ドガッ！

全員「あ・・・」

エリザベスの後頭部にペ吸い込まれていくプリニーが勢い良く当たった。
ぶつかったせいで踏ん張りが効かなくなったエリザベスが浮き上がり、

全員「あああああああ

ＩＢＧＭ星船ｂｙスーパーマリオギャラクシー２
（Ｓｕｐｅｒ Ｍａｒｉｏ Ｇａｌａｘｙ ２ Ｍｕｓｉｃ Ｅｘｔｅｎｄｅｄ － Ｓｔａｒｓｈｉｐ Ｍａｒｉｏ Ｃ）

ネプテューヌ「う…うぅん…？」
？？？「おや、気が付いたかい？」

ネプテューヌが目を覚ますと・・・緑の風船がしゃべっていました。

ネプテューヌ「貴方は…？」
イーバ「あたしはイーバ、宇宙の旅人さね」
ネプテューヌ「宇宙の……宇宙！！！？？」

ネプテューヌははっとなって見渡すと見渡す限りの星星星…完全に宇宙だった。

ネプテューヌ「マジで宇宙…」

ネプテューヌはｏｒｚな状態になる。

イーバ「ははは、最初のリアクションはそれかね。そらあんた達、さっさと起きな！」

イーバがネプテューヌのそばにいる男をばしばし叩く。
その男は何と銀時である。
他にも新八、銀時、ノワール、ベール、ブラン、レーティア、ジャンヌ、ビビ、グレイ、コンパ、アイエフ、神楽、桂、ヴィヴィオ、エリザベス、プリニー、そして神がいた。

銀時「いつつ、なんだよ一体…」
イーバ「おや、目覚めたかい？」
銀時「うお！風船がしゃべった！」
イーバ「誰が風船だって？」
銀時「ブフォッ！！」

銀時が目を覚まし、イーバが声をかけると銀時が余計なことといって圧し掛かりでぶっ飛ばされた。
その後全員目を覚まして、最初は驚きの連発だが何とか落ち着いた。

桂「何と！ならば俺達は天竺へ旅立ったと言うのか！」
ネプテューヌ「んなわけないでしょ！」
神「ここは孫悟空の世界じゃないぞ」

相変わらずの桂のボケにネプテューヌとビビとジャンヌは殴る。

イーバ「で、あんた達のミッドチルダって場所なんだけどこっからじゃ遠いね。でもあたしが送り届けてやるよ」

イーバの言葉にみんな嬉しそうにする。

イーバ「でもタダで返すのはこっちとしてあまりいいことじゃないんだがね」
ジャンヌ「えっと、何か手伝えってこと？」

ゲームでよくある『何かしてほしいなら何かしてこい』な感じのイベントが。

イーバ「そうさね、あたし達は宇宙のトレジャーハンターをやって

るんでね。でもあたしゃ足腰悪いし子供達にやらせるのは良くないって思ったね」
アイエフ「つまりお宝探しのために手伝ってくれと？」

イーバは「そうさね」と答える。

イーバ「お宝と言ってもいろいろあるから『お宝みたいなものでもいい』から見つけておくれ」

みんなはは～いと答えた。

イーバ「それじゃあさっそくあの星をしらべてくれないかい？」

イーバが指差す先には白いでっぱりがある茶色い星だった。

銀時「あの星か」
新八「って言うか、何であの星に近づかないんですか？」
イーバ「バカ言ってんじゃないよ、あそこは危険な予感がするんだよ。あたしは非戦闘員なんだ」

新八は疑問を投げるが、イーバが説明する。

イーバ「それにあそこにはお宝があるってこいつが教えてくれるのさ」

そう言って取り出したのは何かを探知するレーダーみたいなものだった。
さっきからあの星をさして右に振っている。

新八「それは分かりましたが、一体どうやってあそこまでいくんで

す？」
？？？「それは僕らが運ぶよ」

そう声が聞こえた先はなんだか星っぽいかわいらしい生物だった。

イーバ「その子たちは星の子さね。あんた達、しっかりサポートしておやり」
星の子「はい」

そう言って星の子は星のリング（スターリングと呼ぶ）へと変身した。

星の子「それじゃあ皆さん行きますよ～」

星の子達はスターリングまで銀時達を連れ出す。

銀時「ちょ、ちょっと待て、まだ俺…」
星の子達「はっしゃ～～～！！！」

ドシュウウウウウウウウン！！！

銀時「心の準備が出来てないんですけどォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！？？」

ネプテューヌ・コンパ・アイエフ・ヴィヴィオ・ビビ・ジャンヌ「きゃ～～～～～～～～！！！」

ロケットの如く白いでっぱりがある星に向かって飛んで行き、

ドゴッ！パリっ！

全員「ぶへっ！！」

白いものに直撃した。

銀時「あいててて…ん？なんかいやな予感が…」

銀時は冷や汗流して白い物体を見る。

白い物体からどんどん亀裂が走り、そして、

バリーーーン！！

？？？「ンギャァァァァァァァ！！！」

植物と恐竜が合わさったようなモンスターが生まれました。

ＩＢＧＭディノパックンｂｙスーパーマリオギャラクシー（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｓｓ　Ｔｈｅｍｅ　１）

？？？「ウガァァァァァ！！！！」

銀時「ぎゃァァァァァァ！！！」

モンスターが銀時を追いかけ始める。

口に涎垂らして。

銀時「ちょっとぉぉ！！！俺食おうとしてんの！？絶対食うなよ！！絶対不味いぞ！！食ったら糖尿病になんぞこのやろっ！！」

逃げながらモンスターに言うが、お構いなしのようだ。

ネプテューヌ「銀さん必死だね」
神「いやいや、こりゃ見ものだな」
ジャンヌ「銀さん頑張って～」
神楽「銀ちゃん、男は度胸アル！」
銀時「なんでお前らはそんなところでエスケープしてんだぁァァァァァァァァ！！！」

いつの間にか観客席（つーかどこから！？）ですわって観望しているネプテューヌ達。
銀時はそんなネプテューヌ達に額に青筋立てて怒鳴る。

ネプテューヌ「…仕方ない、銀さん、今助けるよ！」
ジャンヌ「面白そうだから私も！ちなみにあんたも」
プリニー「えええええええ！！？何で俺ッスか！？」

ネプテューヌとジャンヌと（強制的に）プリニーが参戦した。

銀時「元はと言えばテメェが飛んできたからじゃねぇかァァァァァァァァ！！！！！」
プリニー「ギャアアア

ンを攻撃する。

ティラノパックン「・・・グガァァァァァァ！！！！」

モンスターは怒り出して銀時達を喰い殺そうとしたが、

ティラノパックン「ガッ！？」

淡いピンク色のバインドに捕まった。

レーティア「ほら、さっさとトドメさしなさい」

レーティアがとどめをさすよう言う。

淡いピンクのバインドはこの人の魔力である。

ジャンヌ「よしそれじゃあいくよ」

ネプテューヌ「うん」

ジャンヌとネプテューヌはティラノパックンの尻尾の方へ向かう。

そのティラノパックンの尻尾には…茶色い玉が一つあった。

全員（メッチャ怪し過ぎるもんがあるんですけどォォォォォォォォォォォォ！！！！！？？）

全員（グレイ、神、ビビ、レーティア、ジャンヌ、ネプテューヌは除く）心の中で驚いた。

ネプテューヌ「これがそうなの？」

ジャンヌ「そう、それじゃあシャマッシュ、フォームチェンジよ」

ネプテューヌが玉をさして聞くとジャンヌが答え、シャマッシュに声をかける

シャマッシュ≪オーライマスター、合言葉は？≫
ジャンヌ「華人小娘」
シャマッシュ≪ＯＫ、フォームチェンジ！≫

シャマッシュが言うとジャンヌの体が光る。
治まるとそこには緑色の中華服（東方の紅　美鈴の服）を着たジャンヌがいた。

ジャンヌ「いっくよォォォォォォォ！！！」

ジャンヌは球に向けて正拳付きの構えをとる。

ジャンヌ「セイヤッ！！」

ドガッ！！！！

思いっきり殴った。

ビヨォォォォ～～～～ン！！

全員「へ？」

球付き尻尾がゴムのように伸びて、

ドゴーーーン！！！

ティラノパックン「ンギャアアアアアアアアア！！！！」

ティラノパックンの頭に直撃した。
銀時「どんな弱点持ってんだよこいつ！！」
ネプテューヌ「宇宙て広いね～…」
変わった弱点を持つティラノパックンに突っ込む銀時。
ネプテューヌは改めて宇宙の神秘を感じたらしい。
するとティラノパックンの口から何かが出た。
銀時「んだこれ？」
ネプテューヌ「これ…電池？」
出てきたのは何と赤い単三電池だ。
しかしなぜか銀時達と同じサイズである。
ジャンヌ「これがイーバさんの言ってたお宝かな？」
レーティア「ともかく目標は達成したし、戻るわよ」
銀時達はお宝（電池）を持ってイーバ達の星船に戻った。
どうやって戻ったかは黙秘する。

イーバの星船

イーバ「良くやったねあんた達。あたしの目に偽りはなかったよ」

お宝を眺めながら言うイーバ。

ネプテューヌ「…ところでこのラッパの機械は何？」
ドルフィン「こんにちは、私お宝鑑定士のドルフィンと申します！以後よろしく」
銀時「あ、こちらこそ…」

ネプテューヌがボロっちぃ機械を指差してイーバに聞くと、その機械・ドルフィンが挨拶して銀時は驚きながらも返す。

イーバ「疲れたろ？あそこの土管の中で休めばいいさ。なに、見た目と違って結構広いよ」
ネプテューヌ「ありがとうございます」

ネプテューヌ達は言われたとおり土管に入るとまるでホテルのような場所に着いた。

新八「結構広いっつーかホテルまっしぐらなんですけど…」
神楽「おお！ここに浴場とかゲームセンターとかがあるネ！」
銀時「完全にホテルだな…」

新八は驚きながらそんな感想を漏らし、神楽が案内板を見て興奮し、銀時がこう漏らす。

レーティア「ここのシャワーはどんな感じかしら？」
アイエフ「ちょっとゲーセンチャレンジしてみようかしら」
ベール「私も…」
神「俺もゲーセン負けないぜ？」
ジャンヌ「一緒に体洗おうかビビちゃん」

ビビ「うん」
ヴィヴィオ「私もいく～」
プリニー「ちょっと待つッス！」
ノワール「私はさきに寝とくわ」
ブラン「私も」
銀時「こっちは疲れたから寝るわ」
ネプテューヌ「じゃあお休み～」

こうしてそれぞれいろんなとこ行って一日が過ぎた。

『永久燃料ダイナモＪｒ』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

レーティア「ハイ、恋を求める乙女レーティアがアシストしちゃい

ま～す？」

銀八「？つけんな、普通にやれよ。・・・んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』から始めるぞ『ルイージ「色々とツッコミ所満載なメッセージだったね」

フォックス「そうだな…思いっきり１つはゲラコビッツだろうな…」

スネーク「次回は宇宙か…」

ネス「んで質問じゃないけど疑問…ほとんどキングダムハーツは書かれてるけど…ディズニーのキャラが１人（ＫＨでのソラ達やＸＩＩ機関を除く）でも出たら駄目なのかな？コラボを頼まれた側として気になるし」

リュカ「そこらへんはどうなんだろうね？」

マリオ「改めて質問『宇宙に行った時、最初に何する？』」

フォックス「こちらのコラボ３でいなかったメンバーに質問『マリオのトレーニングについて？どう思う？』」

スネーク「グレイに質問『起動六課来て苦労する事はあるか？ビビ以外で』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』今出たのがそうだ。んで次」

全員「それトレーニングじゃなくて拷問だよねっ！！！？？」

グレイ「苦労か？・・・ガキの子守とかだな」

真王「ヴィヴィオ達か。んじゃ『鳴神　ソラ』さん。忠告ありがとうございます」

銀八「次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。『黒龍「久しぶりの感想です！」

銀時「お前、最近友達から借りたとある魔術の禁書目録（インデクッス）見てたもんな」

黒龍「六巻での一方通行がマジ最高でした！！」

ソラ「あいつの生き方は共感できるからな」

銀時「小説とアニメには全然手を付けてないけどな」

黒龍「アニメはまだいけますけど、小説は長いですから・・・」

銀時「ジャンプマンガ並の連載だよな」

黒龍「とにかく面白かった！！」

銀時「一つ聞くけどよ、まさかとある魔術の禁書目録（インデクッス）加えようとか思ってないよな？」

黒龍「・・・・・・・」↑あからさまに目を逸らす

ソラ「マンガだけしか読んだ事ない分際で良く思いつくな」

黒龍「だって、すんげー一方通行に共感できるんだもん！！」

銀時「もんって気色悪いんだよ」

黒龍「酷い！？」

ソラ「そう言えば、打ち止めは良いキャラしてたな」

黒龍「当麻はアレですね、ちょっと無謀な所が良くないですね」

銀時「まぁ、アイツは守りたいもん守っただけだもんな」

黒龍「彼は彼でいい所があると言うんですが、俺は一方通行と打ち止めに共感してしまいました」

銀時「今気づいたけどよ、何かとある魔術の禁書目録（インデクッス）談義になってるよな」

ソラ「別にこの作品にないのにな」

黒龍「あれ～？なんでこうなったんだろ？」

銀時「お前がインデクッスに嵌ったからだろ」

黒龍「面目ありません・・・」

ソラ「じゃあ質問いくか。ビビに質問だ。お前はとりあえず、百合が法律上認められなかったらどうする？」

銀時「じゃあ俺はグレイに質問。お前さァ、神に男に戻してもらうように頼んだらどうだ？」

黒龍「最後にネプテューヌに質問。銀さんに対して何かアプローチしてますか？」

銀時「じゃあな～」

ソラ「じゃ」

黒龍「次回も楽しみにしています」『ズバリ順番にお答えしましょう」

ビビ「だったら認めるように改変させてやるゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

グレイ「そうしたいがもう諦めた…ハァ…」

ネプテューヌ「アプローチ？……考えてるよもちろん！」

真王「考えてねぇな。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『ＨＡＲＵ』さんからの質問。『アホの婦女子（ビビ）に質問です。体験してコレだけイヤだ～と思うの選んでください。

１　ボーボボが自分のコスプレをしている。

２　サービスマンが自分の誕生日に祝いに来る。

３　魚雷ガールにおフザケしている自分にタップリ扱かれる。

Ｐ．Ｓ．女性である私から一言…。

ハッキリ言えばマジで気持ち悪いです。

後、見た目よりも内面を磨かないとボーボボ達と魚雷ガールに心身共に精魂叩き込まれますのでご注意よ…。

ヴィヴィオへ

アホの腐女子（ビビ）に何される解らないからあんまり近づいちゃダメだよ。

』…ビビ」

ビビ「なによこれ！？全部イヤに決まってるでしょ！？」

真王「ならば全部破棄だ。次ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「なんで？お姉ちゃんは優しいからそんなことないよ？」

ビビ「ありがとうヴィヴィオちゃ～～ん！！（ＴｏＴ）」

レーティア「あらあら、それじゃあ『ＨＡＲＵ』さん？廊下に立ってね」

真王「次はジャンヌをアシストにつけよう。では」

～今日のお宝鑑定～

～永久燃料ダイナモＪｒ～

価値：５０００円

見た目：単三電池（赤）

イーバメモ：最初に見つけたお宝さ。見た目は頼りなさそうな奴らだったけど実際は結構強い相手だったね。その調子で頑張ってほしいね。

ドルフィンメモ：永遠に動き続ける永久燃料ダイナモの子孫！まだまだ未熟なところもあるが電力が尽きないこと間違いナシ！私に埋め込めないのが悲しいです。

第六十八訓：宇宙は広いよねっと思った時期もある（後書き）

真王「なんだかピクミン要素がありますが気にせず。次回はハチの国に行きます」

ジャンヌ「次回『ミツバチの蜜は甘い』テイクオ～フ♪」

～予告～

ナレーション「あの変身アイテムが出てきそうです」

第六十九訓：ミツバチの蜜は甘い（前書き）

真王「今回はハチの国。一体どんなものが待ち構えているか？」

ジャンヌ「『リリカル銀魂』始まるよ～」

～ハニーロップギャラクシー～

『飛べ！ハチネプテューヌ！』

第六十九訓：ミツバチの蜜は甘い

ミッドチルダの帰還兼イーバのお宝探しを行って翌朝になった。

ネプテューヌ「ん～、ハァ～、気持いい朝だな～、って宇宙だからいつ朝なのか分かんないや」

背伸びして一人漫才するネプテューヌ。

銀時「フゥワッハァ～～・・・あ～、なんかねみぃ～…」
ネプテューヌ「あ、おはよう銀さん」
新八「おはようございます」
アイエフ「おはよう」
コンパ「おはようですねぷねぷ」
ヴィヴィオ「おはよう～♪」
プリニー「おはようございますッス」

ほとんど全員起き上がったようだ。

ビビ「う～ン…みんなおはよ～…」
ジャンヌ「でも眠い～…」

ビビとジャンヌは眠たそうな顔で起きてきたが、銀時達は固まった。
なぜかって？それは彼女達の着ているパジャマが原因である。
何と2人とも肌が透けて見えるパジャマを着ているのだ。
2人のボディラインが良く見える。

新八「ブハァッ！！（鼻血）」

新八は当然にも鼻血を出す。
周りのほとんどは赤くなり、グレイとレーティアは呆れた顔になる。

銀時「ちょ！お前ら何つうもん着てんの！？なに成人エリアの着てんだよ！！」
ビビ「ふえ？・・・・・・・・ああ、この服？」
ジャンヌ「ちょっと2人で遊んでたから」

なにがだよ！っと言いたかったが深く追求しないようにした銀時であった。

レーティア「ほら、早く着替えなさい」
ジャンヌ・ビビ「は～い」
ネプテューヌ「じゃあ私達はさきに…」

イーバの星船

とりあえず外に出た銀時達。
ビビとジャンヌはすでに着替えた。

イーバ「おや起きたかい。ちょうどいい星に着いたよ」

イーバが指差す先には花が多い星だった。

ネプテューヌ「おお、この星は平和そうだね」
銀時「んじゃおりますか」

ハニーロップギャラクシー

ＩＢＧＭハニービーキングダムギャラクシーｂｙスーパーマリオギャラクシー
（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｈｏｎｅｙｈｉｖｅ　Ｇａｌａｘｙ）

きれいな花がいっぱいある星に着いた銀時達。

ベール「…ここはなんて素敵なとこなのでしょうか」
レーティア「確かにいい香りがするわね」
ジャンヌ「ここでひと眠りできそうだね～」

ベール、レーティア、ジャンヌは環境の良い場所にいい気分になる。

銀時「でもそう言うことに限ってへんなことが起こったｒ「そこの人、ちょっといいでありますか？」…ほらな」

銀時が言いかけた時に銀時達より小さめのハチが声をかけてきた。

ハチ「見かけない人であるますがこの際仕方ないであります。ちょっとお願いしてもよろしいでありますか？」
ネプテューヌ「お願いってどんな？」

銀時「止めとけネプテューヌ。そいつに関わったところでいいもんなんてないっての」

ネプテューヌ達はハチの話を聞くが、銀時がその場を去ろうとすると、

ハチ「聞いてくれたら“凄いお宝”をあげるであります」
銀時「よしネプテューヌ、とりあえず話を聞こうじゃないか」
新八「変わり身早いな」

凄い宝と聞いて銀時は心変わりし、新八が突っ込む。

ハチ「それでは早速ある場所へ案内しますが…そのままは飛べそうにありませんね」

ハチの言う通り、飛べない人がいるためどうするべきか悩む。

ネプテューヌ「じゃあ飛べる人が担いで…」
ハチ「いやそっちじゃないであります。どうせだからこれをあげるであります」

そう言ってハチが取り出したのは黄色と黒の縞模様があるキノコだった。

ハチ「食べてみるであります」
ネプテューヌ「う、うん」

ネプテューヌは一口食う。
すると彼女の体に変化が出た。
ネプテューヌは何とハチになった。

ちなみにハチその物になったわけではなく、ハチのコスプレしたかのような感じである。

ネプテューヌ「わぁ～、」
ハチ「これはハチキノコと言ってハチになれるキノコであります。ためしに飛んでみるであります」
ネプテューヌ「わかった」

ネプテューヌは変わった姿を見て驚いて、ハチがハチキノコのことを説明する。
そしてネプテューヌは飛行に挑戦する。

ブ～～～ン！

ネプテューヌ「おお～～！！」
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃんが飛んだぁ！」

ネプテューヌもヴィヴィオも飛んでいる事に驚いてる。
が、途中で飛ぶのを止めてしまった。

プスッ

銀時「ぎゃあああああああああああああああああ！！！」

針の部分が銀時の頭に刺さった。

ネプテューヌ「あ、ごめん」
ハチ「毒はないから安心するであります」
銀時「先に言えェェェェェェェェェ！！！！」

ネプテューヌは謝り、ハチが補足するも、銀時は頭から血を流して怒鳴る。

桂「ハチになれるのか。なら俺も、変身！」

バクッ！

ブラン「なぜ変身入れる？」

桂もハチキノコを食べるがブランが桂の一言に突っ込む。
やがて桂が変化してハチに…なっておらずなぜかバッタになっている。

新八「なんでだよォォォォォ！！なんでハチじゃなくてバッタになってんだよォォォォォォォ！！！」

いくらなんでもありえなさすぎることに新八は青筋立てて怒鳴る。

桂「なにはともあれバッタは飛ぶことが出来るのだ！トウッ！」

桂は気にせずその場から飛んだ。

ジャンヌ「っていうかバッタは飛ぶと言うより跳ねるだけかと思うけど」

桂「あああああああ

・・・ブラックホールに。

新八「か、桂さぁぁぁ

ネプテューヌ達はハチ化してハチたちの女王へ向かった。
ちなみに銀時達は来ていない。なぜかと言うと、

銀時：コスプレを嫌がる
新八：恥ずかしいから無理
桂：気絶中
神：興味なし
グレイ：完全拒否

という感じである。

ベール「男の子はやはり恥ずかしかったのでしょうか…」
ノワール「それを言うなら私だって恥ずかしいわよ…」

ハチ姿のベールは銀時達を心配し、ノワールはハチ姿に恥ずかしむ。

ハチ「次はここを登っていくであります」

そう言って指差したのは断崖絶壁。何やら黄色い壁があるようだが…。

ノワール「こんな崖飛んでいけっての？」

頂上まで飛ぶのかと思うノワール。
しかしハチ化したとしても飛び続けは疲れてくる。

ハチ「イヤ飛び続けなんて疲れるでありますからあの壁を使うであります。こうやって」

ハチは黄色い壁にくっついた。

壁を伝ってよじよじ登っていく。

ネプテューヌ「成程、それなら羽使わずに登れるね」

ネプテューヌはそう言って壁に飛び付く。

ビビ「止めときなさいって。べったりつきそうだし」

ネプテューヌ「つかないよ？ホラ」

黄色い壁にくっつくとねばねばしたものが付くと思っていやがるビビだがネプテューヌが手を見せて証明する。

レーティア「まぁ粘つかないにしろ登れることは確かね」

アイエフ「あんたはなんでその登り方！？」

鞭のファスシニムを引っ掛け代わりに上るレーティアにアイエフが突っ込む。

なんだかんだでみんな登っていくと、

ネプテューヌ「うわぁ・・・」

ビビ・ジャンヌ「でっか！」

女王「あら新人さん達かしら？」

目の前にいる大きな女王蜂に驚くネプテューヌ達。

はっきり言って女王から見ればネプテューヌ達は豆くらいである。

女王「ぅぅ…なんだかまだムズムズするわ」

何やら女王の体に何かが疼いているようだ。

ネプテューヌ「ってもしかして頼みたいこととってあれ？」
ハチ「あれとは失礼であります。頼みたいこととは女王様のムズムズを治すのであります」
ネプテューヌはため息吐いてやれやれになる。
ネプテューヌ「女王様の頼みだもんね。私がやるよ」
そう言って女王の体のムズムズの原因を探り出した。
ネプテューヌ「まるで茂みみたいな体…ってなんでこんなにものが詰まってるの？」
女王の体からどうでもいいものがいっぱいあった。
沢山あってイラついて行くと、光る物が見えた。
ネプテューヌ「ん？どっこいしょ！！」
女王から抜き取ってみるとそれはオレンジ色の結晶だった。
女王「あ、なんかすっきりした」
ネプテューヌ「じゃあこれが原因だね？」
ネプテューヌがオレンジの結晶を持って女王に聞く。
女王「あ～、それ『蜂蜜結晶』。昔私の中に入れてたの忘れてたわ～」
全員「忘れとったんかい！！」
全員思わず突っ込む。

女王「ずいぶん昔のだけど中の甘さはしっかりキープしてるから大丈夫よ」
ヴィヴィオ「・・・あ、ホントだ甘い」

ヴィヴィオは舐めてみて甘いと感想を漏らす。

女王「ムズムズを治したお礼としてそれ持っていってもいいわ」
アイエフ「え？マジでくれるの？」
女王「いいのよ」

アイエフは半ばいいのかと思ったが女王は言う。

ネプテューヌ「それじゃあさっそく運びだそ「頂き♪」ってえ？」

運び出そうとしたらテントウ虫とクワガタの口が合わさったような紫の虫が蜂蜜結晶を盗んだ。

クワカブト「フハハハ、このクワカブト様がたか「返せこの虫やろう！！」うぎゃあああああああ！！！」

喜んでるところネプテューヌに踏みつぶされた。
蜂蜜結晶はその時のはずみで飛んでいき別のクワカブトがキャッチ。

クワカブト「受け取ったぞきょうだ「お宝返しなさい！」ぎゃあああああああ！！！」

今度はビビがドロップ。
別のとこでクワカブトがキャッチ。

クワカブト「きょうだ「死ねコラァァァァァ！！！」最後まで言わせてェェェェェェ！！！」

レーティアとジャンヌにドロップされた。

クワカブト「撤収」

クワカブトの一匹が蜂蜜結晶を持ってどっかへ行った。

全員「待てェェェェェ！！」

全員そのクワカブトを追いかけた。

ハニーロップギャラクシー・クワカブトの住処

クワカブト「グフゥ・・・」

持ち去ったクワカブトはネプテューヌ達によって倒された。

ネプテューヌ「さて、早く銀さん達のところに「行かせると思ってるのか！？」！？」

木の上から緑色の巨大な虫が降ってきた。

ＩＢＧＭオタキングｂｙスーパーマリオギャラクシー

（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｓｓ　Ｔｈｅｍｅ　２）

クワカブトキング「貴様ら！！俺の可愛い子供達にイタぶったお礼を受け取りな！！」

クワカブトキングが牙を出してこっちに向かってきた。

ネプテューヌ「そう言う中二臭いセリフは…」

ネプテューヌ、ビビ、ジャンヌ、レーティア、ヴィヴィオが飛びあがって、

ネプテューヌ「お断りなんだよ！！」

クワカブトキングに向かってドロップを与える。が、

ドゴッ！

ジャンヌ「あ、いない」

クワカブトキングがいなくなった。

クワカブトキング「何処狙ってんだよバ～カ」

何とクワカブトキングが飛んでいるのだ。

ビビ「バカはあなたよ！」

ニヤリと笑ったビビはクワカブトキングに向かって魔力弾を放つ。

クワカブトキング「仰向け飛行！」

クワカブトキングが仰向けのまま飛行した。

その時魔力弾が背中に当たるも弾かれてしまう。

アイエフ「てか仰向けで飛ぶなんて聞いてないわよ！！」

アイエフが突っ込む。

ジャンヌ「・・・あれ？」

するとジャンヌは木の傍で不思議なボールを見つけた。

ジャンヌ「（これを使えば…）みんな！ちょっとどいて！」

ジャンヌはネプテューヌ達を離れさせ、美鈴の姿になって構えをとる。

クワカブトキング「なにするか知らんが死ねやァァァァァァァァ！！！！！」

さっきまで飛んでいたクワカブトキングが牙を出してジャンヌに襲いかかる。

ジャンヌ「・・・破っ！！」

正拳付きでボールを勢いよくクワカブトキングへ飛ばした。

ドガァァンッ！！！

クワカブトキング「バギャァァァァァァァァァァ！！！！」

そのボールはクワカブトキングの顔面に直撃し、どこかへ飛んでいった。
クワカブトキングは落下して動かなくなった。

コンパ「す、凄いとんだですあのボール…」
アイエフ「物凄い弾力ね…」

コンパとアイエフは飛んでいったボールにおどろいていた。

ネプテューヌ「さて、早く銀さん達のところへ戻ろう」

ネプテューヌ達は蜂蜜結晶を回収して戻っていった。

で・・・

ノワール「…何やってるの？」
銀時「見りゃわかるだろ！潰されてんだよ！」
新八「これ、すっごく重たい…」

さっき飛んでいったボールが銀時達の上に乗っていた。
神とグレイはすでに無事のようだ。

『蜂蜜結晶』を手に入れた。
『バンディングボール』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ジャンヌ「は～い、コスプレを愛する女の子、ジャンヌ・デビリアスだよ～。みんなよろしくね～」

銀八「よ～し行くぞ～。ペンネーム『黒神』さんからだ。『質問します。

ノワールへ

『リリカル銀魂ゲスト杯』に参加したネプティーヌは優勝できると思いますか？

土方へ

最近こっちでも出番少ないですけど大丈夫ですか？』」

ノワール「そうね。出来れば優勝させてほしいって思うわ」

土方「大丈夫なわけねぇだろォォォォォ！！！！おい作者！！俺の出番はいつになるんだ！！」

真王「人前でネタばらしする気はないですよ。あえて言うなら、ボソボソ・・・」

土方「本当か？だったらまぁいいが…」

真王「ハイそんなわけで『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

ジャンヌ「さ～て次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんからだよ。『マリオ「……拷問に見えるのか？」

ルイージ「（駄目だ、兄さんは長年やってたから普通に思っている；）」

マリオ「しかし、ピクミン要素の入ったギャラクシー編だな」

フォックス「けれど…ミッドチルダを襲った奴は一体…」

スネーク「だな」

マリオ「質問『お宝を見つけた時、どう思った？』」

ルイージ「真王さんに質問『出て来るお宝はピクミン2で出たお宝を少しアレンジしたのが多いんですか？』」

オリマー「私からも質問『主にマリオの所とピクミンので出た原生生物が出て来るのかね？』」

次回を楽しみにしてます♪』ネプテューヌちゃんたちの感想では「この電池がお宝か？」だって。かく言う私もそうだけど」

真王「ハイその通り。ちょっとばかしピクミン2のお宝を少々アレンジしました。そして今回クワカブトが出たのでそれが証拠です」

ジャンヌ「それじゃあ『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってください。次はペンネーム『月光閃火』さんの質問だよ～。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…まだ居たんだなビビ達…。元の世界に帰ったとばかり思ったぜ…。ま…俺ァ気に入ってっからいいんだけど♪

輝刃「…本音を言ったな…。閃火…またビビが行きすぎた行動を起こしたら、あの『地獄の鋼鉄掴掌』をかますのか？」

まぁな…ビビはどうやら痛い目に遭わないとその場は解ってもらえなさそうだしな…。あ…質問…行くぜ？まずは俺からだ。

1．ビビに質問…『閉塞空間で筋肉モリモリの漢達によるおしくらまんじゅう』『一年間地獄の鋼鉄掴掌を喰らう』『地獄で若本ＶＯＩＣＥの鬼から発せられる【ぶるぅあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！】の叫びを一生聴かされる』この中で受けたくない罰はどれだ？

輝刃「…どれも精神的・肉体的にツラいな…（汗）。次は俺からだ。」

2．銀時に質問…とある番組で縮毛矯正界の達人が出ていたが、その人の縮毛矯正でストレートになりたいか？

あ～…やってたやってた。あの縮毛矯正術は凄かったよな～…。『絶対ストレートにならない』と豪語していた人の髪をストレートにした程凄かったもんな…。』」

ビビ「どっちも全部イヤじゃァァァァァァァァァァ！！！！！！」

ジャンヌ「ちょっと！！乙女にあんなことするなんてサイテーよ！！」

レーティア「私からも言わせてもらう。ホントに貴方最低だわ」

真王「何も言えない。銀時の答えは？」

銀時「それでさらさらヘアーになりたい」

真王「・・・『月光閃火』さん。乙女達に喧嘩売るような真似止めてください」

銀八「んじゃ次はペンネーム『白騎士君』からだ。『白騎士君「銀河編が遂に始まった」

レナード「早速質問だ。真王さん、バイオハザードの敵キャラは出

ますか?後、スバルにこれを」

スバルにコアドリルをあげた。

白騎士君「実は銀河編にラガン、グレン、アークグレン、超銀河ダイグレンが何処かの星にあります」

レナード「なお超銀河ダイグレンは星に擬態しているでかさは星並みだ」

白騎士君「今回はこれにて」『…おいスバル、何かお前宛だぞ」

スバル「うえぇぇ・・・そんな急に渡されても…」

真王「バイオキャラは出ません。あしからず。『白騎士君』ごめんなさいね。それからバトン公開だ」

『また出すよ。私のオリジナルバトン。

このバトンはダンジョン探索の時に言うセリフを表したものです。ダンジョンによる仕掛け、トラップ、戦闘などをイメージしてかきます。

今回のキャラ：（上から順に）レーティア・ジャンヌ

■0．ダンジョン突入

「行きますわよ」

「出発しんこ～」

■1．エンカウント・通常

「相手してあげるわ」

「いいね君、相手になるよ」

■２．エンカウント・格上
「これは強敵ね」
「う～ん、頑張る！」
■３．エンカウント・格下
「私に勝てると思ってるの？」
「私一人で十分だよ」
■４．勝利
「この程度で負けるわけがないわ」
「結構肩慣らしに放ったかな？」
■５．楽勝
「楽過ぎてつまらないわ」
「このジャンヌ様に負けはなし！」
■６．辛勝
「こいつはちょっとてこずったわね…」
「ぎり勝利だった～」
■７．戦闘不能
「が…馬鹿な…」
「バッタンキュ～…」
■８．戦闘復帰
「フフッありがと」
「ふっか～つ！」
■９．エンカウント・奇襲
「油断した…！」
「な！？いきなり！？」
■１０．アイテム使用・自分
「これの出番ね」
「アイテムっと」
■１１．アイテム使用・相手
「これを使いなさい」
「これあげるよ」

■１２．宝箱・普通
「宝箱ね」
「お宝ゲット♪」
■１３．宝箱・レア
「レアアイテムね」
「珍しいねこれ」
■１４．宝箱・レジェンド
「これは伝説の…」
「レジェンドアイテムだ～～！！！」
■１５．仕掛け（扉）
「っと」
「おいっしょ！」
■１６．仕掛け（オブジェ移動）
「うんしょ」
「よいしょ、よいしょ」
■１７．仕掛け（スイッチ）
「何かしらこれ？」
「おして見よう」
■１８．コンボリンク
「その間合いも私のものよ」
「まだまだ行くよ～」
■１９．バトンタッチ
「ここはあなたに任せるわ」
「あとよろしく」
■２０．トラップ（トゲ）
「ッツ！」
「あいたっ！」
■２１．トラップ（ヤケド）
「あっつ！」
「あちゃちゃちゃちゃ！！」

■２２．トラップ（毒ガス）
「くっ！毒ガス！」
「ケホケホ・・・」
■２３．トラップ（グルグル）
「目が回る～」
「ほにゃ～」
■２４．トラップ（ビリビリ）
「痺れる！！」
「きゃあ～～～～！！」
■２５．トラップ（トランポリン）
「うわっ！？」
「ふあっ！？」
■２６．トラップ（爆弾）
「がぁぁっ！！」
「ぬあっ！！」
■２７．トラップ（タライ）
「いたっ」
「あいたっ」
■２８．トラップ（虫）
「キャアッ！虫が！！」
「虫が体の中にィィィィ！！」
■２９．トラップ（落下）
「きゃあああああああ！！！」
「落ちるゥゥゥゥゥゥゥ！！！」
■３０．トラップ（モンスター）
「モンスター！？」
「出たわね！」
■３１．回復
「ありがとう」
「ありがとう♪」

■３２．自己回復
「癒しよ」
「回復！」
■３３．味方回復
「回復させるわ」
「みんな元気になって！」
■３４．ガード
「はっ！」
「ガード！」
■３５．ジャンプ
「はっ！」
「やっ！」
■３６．持ち上げ
「行くわよ」
「よいしょ！」
■３７．投げる
「喰らいなさい！」
「それ～！」
■３８．コンティニュー
「ここで終わる気？」
「コンテニュー？諦める？」
■３９．死亡、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ
「残念ね…」
「オウマイゴット…」
■４０．レベルアップ
「強くなったわね」
「レベルアップ♪」
■４１．待機
「・・・フゥ」↑腕組をする（胸が強調される）
「～♪～～♪♪」↑頭に腕を組んで鼻歌歌う

■４２．待機２
「やだ、こぼれちゃいそう…」↑服を直す
「次はどんなコスプレしようかな…」↑衣装を取り出して眺める
■４３．必殺技
「私の力、思い知れ！」
「これが私の本気だよ！」
■４４．クエストクリア・ランクＥ
「最悪な結果ね…」
「うぇぇ～最悪じゃ～ん」
■４５．クエストクリア・ランクＤ
「腑に落ちないわ…」
「この評価に一言申す！」
■４６．クエストクリア・ランクＣ
「普通ね。でもまだ上へ行くわよ」
「個人的にはもっとだよね…」
■４７．クエストクリア・ランクＢ
「いい評価ね。偉いわ」
「ランクＢゲットだよ！」
■４８．クエストクリア・ランクＡ
「なかなかの評価ね。凄いわ」
「おお！ランクＡゲットだよ！！」
■４９．クエストクリア・ランクＳ
「凄いわね！お礼に私が褒めてあげるわ？」
「究極のランクＳゲット～～～！！」
■５０．回す人
「リィーンさん、黒龍さん、白騎士君で」
「あとは真王にお気に入りしているみなさんで」『
真王「次回はアリサをアシストにする。では」

～今日のお宝鑑定～

～蜂蜜結晶～

価値：４０００円

見た目：蜂蜜味の飴玉

イーバメモ：豊かなハチの国で手に入れたしろものさね。蜂蜜を凝縮させて結晶として保存しているこの結晶は何年たっても中身はまだまだ味が残りそうだね。

ドルフィンメモ：蜂蜜がたまったものが結晶化したおいしいもの！蜂蜜を味わいたい子供達にお勧め！ただし虫歯になっても責任は取りません。あしからず。

～バンディングボール～

価値：１０００円

見た目：スーパーボール（大）

イーバメモ：飛び跳ねるもんはいっぱいあるけどこいつの場合はちょっとばかし危険だね。あたしとしては軽く弾む程度の方がいいん

だがね。

ドルフィンメモ：地面でも壁にあたっても跳ねる跳ねる！過激サーカスに持って来いと思うならこれを持っていけ！しかし高く投げると反動がでかいため約１０メートルでお願いします。

第六十九訓：ミツバチの蜜は甘い（後書き）

真王「次回はおかしなお菓子の世界」

アリサ「次回『お菓子を食べ過ぎると虫歯になる』テイクオフよ」

第七十訓：お菓子を食べ過ぎると虫歯になる（前書き）

真王「今度のステージはお菓子の世界！果たして銀時はどうする？」

アリサ「リリカル銀魂を始めるわよ」

～スイートスイーツギャラクシー～

『甘いお菓子のお宝探し』

第七十訓：お菓子を食べ過ぎると虫歯になる

星船移動中、ヴィヴィオがなにか反応する。

ヴィヴィオ「なんだかいいにおいがする」
銀時「ん？…言われてみれば確かに甘いにおいがするな」
ネプテューヌ「スイーツの匂いがするよ～」

何処からか甘い香りがする。

イーバ「それはあの惑星群（ギャラクシー）に着いたからだよ」

イーバある場所を指差す。
そこにあるのはケーキやらビスケットやらアイスやらクッキーなど甘いお菓子がいっぱいあった。

新八「エ゛っ！？あのお菓子って本物ですか？」

宇宙にお菓子が浮いている事に驚きを隠せない新八。
他の人たちも同じである。
イーバは黙ってうなずく。

イーバ「さぁあんたたち、お宝探してきな！」

銀時達はとりあえずこのギャラクシーに降りた。

スイートスイーツギャラクシー

ＩＢＧＭスイーツファクトリーギャラクシーｂｙスーパーマリオギャラクシー
（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｂｒｏｓ．　３　－　Ｏｖｅｒｗｏｒｌｄ　２）

ネプテューヌ「いぃい～～～～～やっほおおおおおおおおおおう！！！！」

ヴィヴィオ・ビビ・ジャンヌ
「いえ～～～～い！！」

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・ビビ・ジャンヌは勢いよくヨーグルトのプールに飛び込んだ。

銀時「おいこら何やってんだ！この場所は俺の特等場だぞ」

浮き輪で浮きながらメガホンでネプテューヌ達に言う銀時。

神楽「ぬおおおおおおお！！！ゼリーのトランポリンあるぅぅぅ！！！！」

レーティア「弾力いいとしても埋まらないようにねーー！」

神楽「大丈夫あブジュリュッ！！」

レーティア「言ったそばから…」

神楽がゼリーの上で跳ね続けレフィアが注意するが、ズボッと埋まってしまう。

桂「ふはははははははははは！エリザベスよ！俺の豪快な滑りを見るがいい！」

アイスバーの上でスケートのように滑る桂とスキーで滑っているエリザベス。

神「…でかいなこのイチゴ」
グレイ「ああ、見事にでかいな」
プリニー（エトナ様をここに連れてきたら喜びそうッスね～）

神様とグレイは自分の数倍はあるイチゴを眺め、プリニーはスイーツ好きのエトナの性格を思い起こしている。

新八「って待てコラァァァァァァぁ！！！なにあんたたちこんなところで遊んでんだぁぁぁ！！！」

新八は遊んでいる銀時達にシャウトする。

銀時「何言ってんだ新八、こんな贅沢三昧の星着（ギャラクシー）たらもちろん遊ぶに決まってるよな？」

銀時の言い分のほとんどが同意する。

新八「だからってのんびりし過ぎだろ！！アイエフさん銀さん達にビシッと言ってあげてくださいよ」

新八はアイエフの向くが、

アイエフ「う～ん、不味くもない、これは天然のケーキかしら？」
ベール「ここで紅茶は良いですわね」

アイエフ、コンパ、ノワール、ベールはケーキを食べていました。
ちなみにブランはイチゴの上で本を読んでいる。

新八「何！？僕が間違ってるの！？僕の１６年の人生が間違ってましたか！？」

孤立してショックを受けた。

銀時「大体こんなところで危険なものなんてあるｍ「ザバーーーーン！！」・・・え？」

ヨーグルトプールから真っ白なクラゲモンスターが現れた。

ヨーグルゼリー「俺の縄張りで何やってんだコラ」

バリバリバリバリバリバリバリ！

銀時「アビャァ～～～～～～！！！！」

ヨーグルゼリーの電撃で銀時は感電しました。
ちなみにネプテューヌ達はすでに脱出していた。
そして陸にほっぽり出された銀時。

ネプテューヌ「大丈夫？銀さん」
銀時「…俺…死んだ？」

アフロヘアーになった銀時は意識もうろうとしている。

コンパ「た、大変ですぅ！！人工呼吸！」
レーティア「なら私が！・・・チューー！！」
銀時「ん゛～～～～～！！！？？」

コンパが人工呼吸の指示をするとレーティアが深く人工呼吸させる。
傍から見ればレーティアが銀時にディープキスしているしか見えない。
新八は「羨ましくなんかない。羨ましくなんかないぞ…」っと血の涙を流していた。

銀時「分かった分かったからもういいっての！！」

銀時は起き上がる。

銀時「あ～、全く、酷い目に会った」
ネプテューヌ「良かったね銀さん？」

ネプテューヌの声にビクッとなる銀時、振り返ると魔王が見えるようなオーラを出しているネプテューヌがみていた。

銀時「いやいやいや、違うよ違う、これあれだよ、人為的な事故「死ねやボケェェェェェェェェ！！！！」ぎゃあああああああああああああ！！！！」

哀れ銀時、乙女を怒らせた罪は重い。
ちなみにレーティアとグレイと神以外の人たちはみんなガタガタ震えていた。

銀時「ったく、何で俺がこんな目に、俺が何かしたか？」

アフロ黒焦げな銀時が言うが、ネプテューヌはつーんとしている。

周りに至っては、「自分の胸できけ」と言われるしまつ。

レーティア「ごめんなさいね。もしかしてあなたもしたかった？」

ネプテューヌ「へ？・・・い、いや別に私もしたかったわけじゃなくて！／／／／／」

レーティアの冗談交じりな言葉にネプテューヌは一瞬唖然とし、顔を赤くして否定する。

アイエフは「やっぱこの子出来てるわね…」とネプテューヌを見てそう思った。

レーティア「ふふ、女は行動力なのよ。恋の発展頑張ってね」

ネプテューヌ「は…ハァ…」

とりあえずレーティアからアドバイスを貰ったネプテューヌ。

ビビ（女は行動力…なら私はなのはちゃんたちとイチャイチャ…グヘヘ…）

ビビは内心欲望なことを考えている。

しかしそれではただの変態おやじである。

ジャンヌ（なら私は全国にコスプレを…）

ジャンヌは相変わらずだった。

ちなみに途中で『苺王』を手に入れた。

チョコレート渓谷

下がよく見えない渓谷（チョコケーキ）に一本の橋（板チョコ）がある場所で、

コンパ「高いですゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」

コンパが取り残されていました。

ネプテューヌ「コンパ！早くこっちに来て！」

コンパ「無理ですゥゥゥ！私こう言うの苦手なんですよォォォ！！」

へたり込んで根をあげるコンパ。

銀時「大丈夫だ。お前が墜ちてもこっちは何の支障もないから」

コンパ「他人事みたいに言うなですぅぅ！！」

銀時「うぎゃあああああああ！！！！」

銀時の他愛もない一言にコンパが注射器を投げて銀時の頭に命中。

コンパ「し、し、仕方ないです…行くしかないです！」

コンパは勇気を振り絞って立ち上がり、橋を渡る。が、

コンパ「やっぱ怖いですゥゥぅ！！！」

途中で挫折した。
ネプテューヌはため息吐いてコンパを無理やり連れ出しました。

シャーベットレイク（アイスシャーベットの泉）

ネプテューヌ「スイーーー」

ネプテューヌ達は凍った泉でスケートを楽しんでいた。
銀時はその泉で釣りをしていると大物がかかった。
銀時「一本釣りじゃァァァァァ！！！」
そう言って釣り上げるとチョウチンアンコウのような大物と出会った。
その腹の中から『甘玉』を手に入れた。

ゼリーマウンテン

ジャンヌ「む？あれは…」

ジャンヌが何かを見つけた。

ジャンヌ「シャマッシュ、フォームチェンジ、合言葉は深き潜水者」
シャマッシュ≪オーライマスター≫

ジャンヌがフォームチェンジすると、蒼いぴちぴちのボディスーツを身につけたジャンヌがいた。首の部分に？の数字がほられている。

ビビ（ちょ！それセインの戦闘服じゃん！！）
ジャンヌ「能力発動、ディープダイバー」

セインの使う能力で潜水するジャンヌ。
って言うかゼリーって無機物だったっけ？

ジャンヌ「取ったど～～！！」

ジャンヌは2つ実が付いた食べ物を持って出てきた。
後に『アイノミ』と呼ばれるお宝を。

ケーキキングタワー

最後にケーキのタワーの場所に着いた銀時達。

ネプテューヌ「いかにもダンジョンがありそうな雰囲気だね」
銀時「んなこと言ってないで入るぞ」

銀時達はとりあえず入った。

ケーキキングタワー・ダンジョン

ダンジョンの中に入った銀時達ですが、そこでトラップがいっぱい
襲いかかってきました。
円盤岩（バームクーヘン）の襲撃、フルーチェの水攻め、飴玉の岩なだれ、コーラの滝
つぼなどおいしい罠が襲いかかりましたが、何とか切り抜け、頂上
までたどり着いた。

銀時「あ～、ひでぇ目に会った…と」
ネプテューヌ「もう体中ボロボロだよ～」

罠に苦戦したせいで体力がボロボロになっている銀時達。

ヴィヴィオ「わぁ～、見てみて！いい景色だよ～」
プリニー「遠くでゼリーマウンテンが見えるッス」

タワーの頂上で景色を眺めるヴィヴィオとプリニー。
するとアイエフは真ん中にある一本の白い棒を見つけた。

アイエフ「何かしらこれ…お宝のようだけど…」

アイエフが眺めていると、

銀時「こいつもお宝でいいんだろ？だったら持って帰ろうぜ」

銀時がそれを持って後を去る。
アイエフは息をこぼして後を追いかけた。

『生命の炎』を手に入れた。

グミグミ平原

ここでは地面も植物もみんなグミ。
そこでレーティアとジャンヌがいる。
銀時達に先に戻っといでと言ってここにいるようだ。

レーティア「…こんなに楽しいのは初めてかしら」
ジャンヌ「うん、彼らと一緒にいるだけで楽しく思うな」
レーティア「転生前はなかったわねこういうの…」
ジャンヌ「うん…」

思い起こすのは自分達が転生前までのこと。
つまらない学校生活。孤独なる日常。そして少女時に起きたあの出来事。

レーティア「っ！！」

ドムッ！

苛立ちを覚えてレーティアは隣にあるグミの木を殴った。

グミの木は殴られて反った後元に戻って木の実が墜ちた。

レーティア「…今でも虫唾が走る思い出ね…」

怒りの感情を表すレーティア。

脳裏にある記憶には、虐待する父親、必死で虐待を止めようとする母親、泣き続ける妹、そして血だらけで虐待を受ける姉。

バチバチバチバチ！

レーティア「・・・ァァァアアアアア！！！」

怒り爆発して大きな魔力玉を作り出して怒り任せで投げ飛ばす。

遠くで爆発した。

レーティア「ハァ…ハァ…」

息を荒くするレーティア。

今にもまた放つ雰囲気を出していると、ジャンヌが抱きついてきた。

レーティア「!?…水華?」

ジャンヌ「大丈夫だよ。お姉ちゃんには私がいるもん、だから、一人で抱え込むより私といてもいいんだよ?照奈お姉ちゃん」

2人は前世の名前を呼び合い、抱き合った。

レーティア「ごめんね、水華」

ジャンヌ「うん…」

星船

ネプテューヌ「ねぇ！さっき爆発が聞こえたけどなんなの？」

帰ってきてネプテューヌが一言聞いてきた。
おそらくレーティアのアレだろう。

レーティア「ゴメン、ちょっと魔法の訓練してたから」
ジャンヌ「私は付き添い」
ネプテューヌ「そうなんだ。次出発するらしいから行こうよ」
レーティア「分かったわ」

訳を言ったあと、ネプテューヌは今後のことを言い、レーティアは承諾する。

レーティア「行きましょ」
ジャンヌ「うん」

レーティアとジャンヌは手をつないで星船へ乗り込んだ。

余談ではあるが2人を待っていた頃銀時達は甘いもの食べすぎたせいで虫歯に悩まされたことは言うまでもない。

『苺王』を手に入れた。
『甘玉』を手に入れた。
『アイノミ』を手に入れた。
『生命の炎』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

アリサ「今日のアシストはこの私アリサ・バンニグスよ、感謝しなさい」

銀八「態度でか！何この生意気な子！」

真王「それがアリサだからだ」

アリサ「誤解を招く発言は止めてくれる！？」

真王「この際無視しろ」

銀八「だな。んじゃペンネーム『黒神』さんから行くぜ。『質問し

ます。

黒神
「今回ははやてに3つの質問を♪」

その1　最近桂がベールと同じぐらい出番が多いので、大ピンチと思っていますか？（黒笑）

その2　僕の小説、『狂乱編』での桂と貴方の活躍はどうでしたか？

その3　出番増えるにはどうすれば良いか考えていますか？

黒神
「まぁ、こんな感じか……」

ティアナ
「てか1と3は腹黒さ満々じゃーーーーー！！」

ドカァァァァァァァァァァァン！！！

黒神
「ぎょえええええええええええええええええ！！！」

ティアナのお仕置きの『スターライト・ブレイカー』を受けた黒神は黒こげとなった。
ちなみに真王さんからもらった『レインボー・スター』はフェイトに『リリカル銀魂ゲスト杯』で壊されたので、今は修正中。』相変わらず腹黒い作者だな」

はやて「だ、大ピンチや！このままじゃ本当に出番が盗られてしもうわ！あ、でも狂乱編はかっこええからいいとして？」

アリサ「・・・『黒神』あんた永久に廊下に立ってなさい！」

真王「八つ当たりだな。自分恋が実ってないから。次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『マリオ「と言う訳で良い点でやるけど…流石に溶岩は無理だな…毒沼を１００メートル泳げなら今なら簡単に出来るが…」

ルイージ「何で！？」

マリオ「幼き頃にヘキサさんにやって見ろと言われて実際にやった。その後に毒状態になって師匠によって回復、今では並大抵の毒も平気だ」

フォックス「それにしても出たなハチキノコ」

マリオ「他にも出るかね～色んなアイテム」

オリマー「もしくは私の方の強化アイテムだね」

ルイージ「それにしても桂さん；」

ネス「何でバッタ；」

マリオ「質問『マリオギャラクシーに出たアイテムは全て出るのか？』」

オリマー「私も質問『ピクミン2で出た強化アイテムは出るのかな？』」

フォックス「俺も『ギャラクシー編で他にもイーバとドルフィン号以外に新しいキャラを出す予定はあるのか？』」

次回を楽しみにしてます♪』1つ目と2つ目はすべてとは限りませんが出ることは期待してください。そして3つ目ですが、次回で新キャラの登場予定」

銀八「んじゃ『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

アリサ「えっと次はペンネーム『リィーン』さんからね。『どうも！！　更新、お疲れさまです！！！

リュマ「初めまして。この駄作者、リィーンの書く作品に登場します、理のマテリアル、星光の殲滅者、“リュマ・シュティール”と申します」

お、おい……お前がなんでここに？

リュマ「レヴェッカという方から、代役を任されまして……不肖このリュマ、はせ参じた次第です」

さ、さいですか……

リュマ「さて……ご主人様（グレイの事）、ご無事のようでなによりです。無事、こちらに帰還してくる日を、心からお待ちしております」

さて……他に何か言う事はありますか？

リュマ「そう、ですね……では、こんな質問を」

・ご主人様（グレイ）のご活躍が少ない気がいたしますが、気のせいでしょうか？

・ご主人様があの変態（ビビの事）の事をあれだけ気にしているのかが不可解で仕方ありません

リュマ「これは要望ですが、ご主人様の活躍の増やして下さい」

こらこらこらこらァァァァァァァァッ！！！！！！！　出させていただいているのだから、そういった要望とか言うなッ！！！！！っていうか、グレイの事ばっかりかよ！！！！！

リュマ「当然です。ご主人様以外の事などどうでもいいです。まぁ、ご主人様が命じるのであれば、気にしますが」

ウチにはまともな精神をした奴がいないのか？

リュマ「いないのでは？　他のマテリアル達も、ご主人様一筋でありますから」

……もう、いいや

では！！　次回も楽しみにしていますので、執筆、がんばって下さい！！！　失礼します！！！

リュマ「失礼いたします」『…どんだけあの人に忠実なのよ…」

真王「彼の出番が少ないって？それは気のせいだ！！（心からの叫び）あとビビを気にするのは肉親の一人だからだ。心配してこそ兄なんだ」

グレイ「止めろ、少し変な気分になるだろ」

アリサ「（ツンデレ？って私じゃないわよ！！）とりあえず『リィーン』さん。廊下に立ってなさい」

真王「そして『鳴神ソラ』さんからバトンだ！」

『バトンので上から順にサトシとオリマー

■0．ダンジョン突入
「行くぜ」
「慎重に行こう」
■1．エンカウント・通常
「来たぞ！」
「相手になるよ」

■２．エンカウント・格上
「強敵だなこいつ」
「強敵か、だが弱点を突けば」
■３．エンカウント・格下
「普通のより下だな」
「早めに済ませよう」
■４．勝利
「よっしゃあ！」
「倒せたな」
■５．楽勝
「楽勝だぜ！」
「今回は素早く終えたな」
■６．辛勝
「なんとか勝てたな…」
「ふう～」
■７．戦闘不能
「ごめん…」
「すまない私の体力が…」
■８．戦闘復帰
「サンキュー！」
「ありがとう、これで頑張れるよ」
■９．エンカウント・奇襲
「うわぁ！いきなりか！？」
「奇襲か！気を付けるんだ」
■１０．アイテム使用・自分
「これだな」
「使用させて貰うよ」
■１１．アイテム使用・相手
「これを！」
「これを使うんだ」

■１２．宝箱・普通
「アイテムだ」
「アイテムをゲットだ」
■１３．宝箱・レア
「珍しいのゲット」
「これは…珍しいのだ」
■１４．宝箱・レジェンド
「伝説のアイテムゲットだぜ！」
「まさか伝説級のが手に入るとは」
■１５．仕掛け（扉）
「おわっ！」
「よいっしょ」
■１６．仕掛け（オブジェ移動）
「よいっしょ！」
「よっほ！」
■１７．仕掛け（スイッチ）
「何かのスイッチか？」
「押さないと進めなさそうだな」
■１８．コンボリンク
「連続で行くぜ！」
「攻撃を続けさせて貰うよ」
■１９．バトンタッチ
「任せたぜ！」
「頼んだ」
■２０．トラップ（トゲ）
「いてっ！」
「！！」↑足を押さえてる
■２１．トラップ（ヤケド）
「あっちゃぁぁ！！」
「これは火傷のか？」

■２２．トラップ（毒ガス）
「うっ、気分が…」
「毒ガスか…」
■２３．トラップ（グルグル）
「目が回る～」
「おぉ～どっちに進めば良いのだろうか？」
■２４．トラップ（ビリビリ）
「どわわわわ！？」
「ビリビリのか…」
■２５．トラップ（トランポリン）
「どわっ！？」
「わたたたた！？」
■２６．トラップ（爆弾）
「うわぁぁぁ！！」
「爆弾！？」
■２７．トラップ（タライ）
「いてっ」
「何でタライが？」
■２８．トラップ（虫）
「虫か？」
「虫が出て来たね」
■２９．トラップ（落下）
「うわぁぁぁぁぁぁ」
「どこに行くんだ！？」
■３０．トラップ（モンスター）
「モンスターか！？」
「モンスターがいきなり出て来た！」
■３１．回復
「はあ～スッキリするぜ」
「体力回復だな」

■３２．自己回復
「回復しないと」
「やばいやばい」
■３３．味方回復
「大丈夫か？」
「今回復してあげるよ」
■３４．ガード
「防御だ！」
「ガードするよ！」
■３５．ジャンプ
「とう！」
「たっ！」
■３６．持ち上げ
「よいしょ！」
「持ち上げるよ！」
■３７．投げる
「いっけぇ！」
「それ！！」
■３８．コンティニュー
「此処で諦めるのか！？」
「どうするんだい？」
■３９．死亡、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ
「くそ…」
「むぅ…」
■４０．レベルアップ
「よっしゃ！レベルアップだ！」
「レベルアップしたよ」
■４１．待機
「運動しないとな」↑準備体操している
「ふう～」↑寝転がっている

■４２．待機２
「ふわぁ…」↑あくびしている
「させ、どうしようかな…」↑腕を組んでいる
■４３．必殺技
「一気に決めるぜ！」
「行かせて貰うよ！」
■４４．クエストクリア・ランクＥ
「最低ランクかよ…」
「う～む」
■４５．クエストクリア・ランクＤ
「Ｄランクだな」
「まだまだだな」
■４６．クエストクリア・ランクＣ
「普通だな、まだまだ行こうぜ！」
「上を目指したいね」
■４７．クエストクリア・ランクＢ
「よっし！Ｂランクだ」
「Ｂに来たか」
■４８．クエストクリア・ランクＡ
「Ａランクだ！」
「Ａか…」
■４９．クエストクリア・ランクＳ
「よっしゃ！！Ｓゲットだぜ！」
「良し！この調子で行こう」
■５０．回す人
「ボッスンさんや葉月さんに回すぜ！」
「仮面３とハルルさんにバトンを回すよ」

こんな感じで』

真王「次回はすずかにします」

～今日のお宝鑑定～

～苺王～

価値：１２００円

見た目：大きなイチゴ

イーバメモ：ケーキの飾り付けにはイチゴがいいってもんだろ？しかもこのイチゴはイチゴ界の王様に値するからこの名前が付いたんさ。味も保証できそうだがね。

ドルフィンメモ：イチゴ界の王様！総じて苺王！これだけ大きければ巨大ケーキ作りは間違いなし！そのケーキを作れればの話ですが…。

～甘玉～

価値：５００円

見た目：ドロップ飴

イーバメモ：最近の若者は飴が大好きだったね。私としてはこんなもんより酸っぱい飴がいいんだがね。

ドルフィンメモ：舐めて嬉しい素敵な飴玉。舐めて舐めて幸せゲット。虫歯になったら逆戻りですが。

～アイノミ～

価値：８００円

見た目：チェリー

イーバメモ：一つの枝に二つの木の実、まるで何か繋がりがあると言う意味がこもっていると私は思うね。若い子にはこれがあれば恋でも実るかね。

ドルフィンメモ：恋愛を語るにはこれが一番！好みで愛の力を試すとき！って言うか機械である私が恋なんて実らないけどね。

～生命の炎～

価値：６００円

見た目：ろうそく

イーバメモ：ケーキタワーの頂上で発見されたお宝さね。こいつに

炎をともしたらなんだか生命のありがたみを感じたね。私の様な老体にはもってこいじゃないかい？

ドルフィンメモ：生命のありがたみを教える幻の一本！ご老人の方々に長生きさせるにはもってこいの代物！災害時に明かり代わりにしてもオーケイです。

第七十訓：お菓子を食べ過ぎると虫歯になる（後書き）

真王「次回は廃墟の宇宙ステーションである女性と出会うお話」

すずか「次回『改造されても人は化け物じゃない』テイクオフ！」

～予告～

ナレーション「あるゲームの生き残りがいるようだが…」

第七十一訓：改造されても人は化け物じゃない（前書き）

真王「ここで新キャラ登場。そしてネプテューヌが切れる！？」

すずか「リリカル銀魂スタートです」

～破壊された宇宙ステーション～

『暗闇の奥の化け物』

第七十一訓：改造されても人は化け物じゃない

銀時達が星船で移動中、コンパが奇妙な物を見つけた。

コンパ「み、みなさん！あれを見るです！！」
銀時「あ？いったいなにがイデッ！？」

寝ていた銀時が起き上がると硬い金属が額にあたった。

新八「な、なんですかあれ！？」
ヴィヴィオ「パパ～、大きな独楽が浮いてるよ～」
アイエフ「ヴィヴィオ、あれは宇宙ステーションって名前よ」

巨大な宇宙ステーションに新八たちは驚き、ヴィヴィオは大きな独楽と勘違いしているが、アイエフが訂正させる。

神「しかし…なんか変じゃね？」
ノワール「確かに変だわ」
グレイ「ああ、なんだか“襲撃を受けた”みたいだな…」

しかしところどころボロボロになっている宇宙ステーションを見て怪しむ神とノワールとグレイ。

イーバ「…いやな雰囲気しかしないねぇ」

イーバはそう言いながらも接近した。

廃墟された宇宙ステーション

イーバ「気をつけていくんだよ、なにがあるか分からないからね」
ネプテューヌ「行ってきま～す」

ネプテューヌ達は中へ潜入した。

中は少し不気味で、しかも、

アイエフ「なんだか血の匂いがするわ。それに変なのも…」

血と変なにおいが漂っていた。宇宙なのに。
すると目の前に瓦礫の山が道をふさいでいた。

ネプテューヌ「これちょっとやそっとじゃ無理そうだね」
銀時「それに吹き飛ばしたらなんかこう、大爆発的な展開が待ってる気がする・・・」
レーティア「だったら私の出番ね」

目の前の瓦礫に悩んでいると、レーティアが一つのカギを持って前へ出る。

ビビ「…カギ？」
ジャンヌ「ってお姉ちゃん出すの？」
レーティア「仕方ないわよ。この子しか力持ちいないし」

ビビは唖然とし、ジャンヌは心配そうな顔して聞くが、レーティアが困った顔して答える。

レーティア「まぁそれはいいとして、開け！金牛宮の扉！タウロス！」
タウロス「ンモォォ～～～～！！！」

レーティアがカギを小さな魔方陣に刺すと大きな魔方陣から二本脚に海ぱん履いて大きな斧を装備している牛・タウロスが現れた。

全員「牛が出たぁぁ～～～！！？」
グレイ「なんだあの牛は？」
ビビ（フェアリーテイルのタウロスぅぅ～～！？って待てよ？この後のパターンって）

全員タウロスが出てきたことに驚き、グレイは不思議そうに見て、ビビはフェアリーテイルの登場するタウロスだと判明。

タウロス「ンモゥ！レーティアさん今日も立派なナイスバディですなぁ」
全員「セクハラ発言っ！！！？」
ビビ・ジャンヌ「やっぱし…」

出てきていきなりレーティアにセクハラ発言するタウロスに驚く全員。
ビビとジャンヌに至ってはやっぱりかとため息を吐く。

レーティア「はいはいそんなことはいいからあの瓦礫吹っ飛ばしてくれない？」
タウロス「あれですか？いいでしょう！レーティアさんのナイスバディのために一肌脱ぎますよォォ～～！！！」
レーティア「ナイスバディはいいわよ…」

タウロスが興奮気味で瓦礫を撤去するがナイスバディの一言でレーティアは突っ込む。

その後瓦礫は撤去されネプテューヌ達は進んでいく。
しかしタウロスはなぜか残っている。
理由は簡単、ベールとグレイにくぎ付けになっているからだ。
レーティアは強制閉門させようかしらと思ったがこの先役に立つかなと思ったので止めた。
するとビビが近寄ってきた。

ビビ「あの…タウロスがいるってことは他のも…」
レーティア「ええ、星霊系ほとんど持ってるわ」

ビビはなるほどと納得する。

???「シギャァァァァ!!!」

すると緑色の触手モンスターが現れた。
そしてすぐにレーティアに襲いかかろうとしていた。

タウロス「レーティアさん危ない!」

タウロスが事態に気付いて触手モンスターの口を止めた。

レーティア「ありがとうタウロス!後でたっぷりと私の体使ってもいいわよ」
タウロス「ハイお任せください!!ンモオォォォォォォ～～～～～～!!!!!」

レーティアがタウロスに応援すると、タウロスは目の色を変えて超パワーを発揮して触手モンスターを引き裂いた。

全員（やっぱこいつ変態だ…）

全員揃ってタウロスをそう言う認識にした。

触手モンスターは逃げるかのように奥へ消えた。

ネプテューヌ「追いかけたら何かあるかな？」

ネプテューヌ達は触手モンスターの逃げた後を追った。

後を追うネプテューヌ達は奇怪な物を見てしまった。

それはところどころに赤い血と、人間だった物が転がっているのだ。

グレイ「あの化け物の仕業に違いないな」

新八「酷い…」

神楽「おいぱっつあん、おもしろいもん見つけたぜ」

神楽が手に取ったものを見ると、それはモザイク物体Hだった。

新八「放せぇエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！！！」

新八はモザイク物体Hを叩き落とした。

銀時「おい作者！！なに神楽にきたねぇもんだしやがったんだよ！」

仕様だ。

銀時「仕様ですむかぁぁぁ！！」

そんなことよりもお前の足元になんか落ちてるぞ。

銀時「え？あ、ホントだ」

銀時は足元にあるレポート番みたいなものを拾う。

『今日の報告書　　×▼月■日（現在の６か月前のようだ）

ついに我々の研究が成功した。これで新たな時代に第一歩を踏み出せる。早速被検体Ｓ・Ｎに新しい薬物を・・・・・・・・・』

その先は血で汚れて読めなくなっている。

ネプテューヌ（被検体…）

内容を見てある実験の被検体として生まれたネリアのことを思い出すネプテューヌ。

気を取り直して触手モンスターが逃げたとこを追った。

サイエンスドーム

大きなドーム状の部屋に着いたら、中央に触手モンスターの核的なのがいました。

銀時「こいつか…」

？？？「何の用？」

頭に響くような女性の声が聞こえた。

グレイ「！？こいつは！」

ビビ「声だけでこんな威圧感！」

レーティア「これがここにいた人たちが作り出した」

ジャンヌ「被検体Ｓ・Ｎと呼ばれた存在…」

声による威圧で身構える転生者組。銀時達も同じだ。

？？？「あんた達はここにいる奴らじゃないみたいだけど。しかしなんでここに来たの？」

銀時「あ～あれだ。一応気になってここに来ました～なんて」

？？？「・・・・・・・・・」

奴の質問に銀時が適当に答えると、モンスターの体が徐々に変化していき、人の形になった。

踵あたりまでいきそうな紅色のロングヘアー、言うなればアルカナハートのシャルラッハロートそっくりの人物だった。

ビビ（あれってアルカナハートのシャルラッハロート！？・・・いや、原作のじゃないね）

ビビは目の前にいるシャルラッハロートそっくりの人物を見て本人じゃないと推測する。

？？？「…そんなにチャランポランな大人は初めて見たけど。あなたの名は？」

銀時「人に聞くときは自分からって親から言われなかったか？」

？？？「全く教わってない。…まぁ教えるけど」

銀時の言い分に女性は普通に答える。

シャル「あえて言うなら私はシャル・ノイシュバンシュタイン。長いからシャル・ノイシュバンシュタイン様でいい」

新八「一文字増えてんじゃねぇかッ！！！」

とりあえず女性・あるかが自己紹介するが一文字分増えてるので新八が突っ込む。

シャル「ところであなたたち私の手を引き裂いたでしょ？」

シャルの言葉にみんな首を傾げた。

シャル「ほら、大きな触手が牛に引き裂かれるシーン」

全員がああ、と思い出す。

シャル「・・・そんなわけであなた達の強さ見せてくれない！？」

あるかが右腕を槍状の触手に変化させて銀時に襲いかかる。

銀時は驚いて叩きつけようとしたら、

ブゥンッ！！スカッ！

銀時「あれ？」

当たる寸前に触手が銀時の木刀の軌道から避けたのだ。

もう一度来ると思ったらシャルは元の手に戻した。

シャル「へぇ〜、動きをしているじゃない。気に入ったから殺さないで置くわ」
銀時「物騒すぎるんですけど…」

シャルは納得した顔をするが銀時は冷や汗を流している。

新八「と、ところで何であなたはここにいるんですか？」

新八がなぜここにいるのか尋ねると、シャルは暗い顔になる。

シャル「私がなぜこの場所にいるか言おう。私はある町の出身で平和に暮らしてたんだけど白服の奴らに捕まって何度も何度もひどい実験の被検体にされたわ。それはすっごくひどい者よ、組み込まれた物は無敵になるための神の遺伝子、無限に増幅させる力、肉体変質、骨格金属化、その他もろもろやられてこんな姿になったのよ」

右手から触手、異形の手、悪魔の翼などを出して言うシャル。

グレイ（異形なる姿…か）

グレイはシャルの姿を見てこう思った。
全員が全員ありえない顔をしていた。

ネプテューヌ「…人間に…そんなひどいことを…しただと？……ふ…ふっ……ふざけるなァァァァァッッッ！！！！！！！！！！」
全員「！！？？」

普段は明るい性格のネプテューヌが切れた事に驚く全員。

ネプテューヌ「人間を…同じ人間でありながら殺し合わし、挙句その人物を実験して道具のように扱うなど、言語道断だ!!!。なぜ人間は過ちを繰り返す!!?なぜ人間は命を大切にしない!!?世界も世界だ!!なぜそんな人間達をそんなにほうっておけるんだっ!!!!」

世界に対しての憎しみの声が全部に響かせた。

神（あいつ昔何かあったか?…いや違うな。あいつの中にいる何かが作用しているかもしれんな）

神はネプテューヌを見て怪しく思っている。

ノワール「ネプテューヌ!!」
ネプテューヌ「っ!?…私一体?」

ノワールが叫ぶとネプテューヌはなにが起こったか理解できない顔をしている。

ネプテューヌ（今のって…もしかしてあの時の!?）

ネプテューヌが思い起こすのは『第五十八訓：ほったらかしにされたら誰だって怒る』でダークソウルに闇を吸い取られる部分からじゃないかと推測する。

シャル「…今のはなんだかしらないけど、私の怒りを分かってくれたみたいでよかった」

ネプテューヌが怒りを理解してくれたことに安心するシャル。

シャル「…ところでなにをしにここへ来たの？」
新八「えっと実は…」

少年説明中…

シャル「成程、宝探しねぇ～。…なら私も参加していい？」

シャルが納得した後いきなりこんなことという。

ネプテューヌ「なんで？」
シャル「私はこうなる前は結構強いからね。って言うか戦いがあると思うとワクワクするんだ♪いいよね？」
ネプテューヌ「へぇ～、私はいいけどみんなは？」
銀時「まぁいいんじゃね？」
レーティア「異論はないわ」
タウロス「ナイスバディのあなたのためならば！」
ジャンヌ「私もオッケイ」
グレイ「なんでもいい」
ビビ「私もいいよ」
神「面白そうだから採用」

ほとんどが賛成した。

シャル「そうか、嬉しい♪。あ、出来ればもう一人入るよ」
？？？「それは俺のことかシャル」

シャルが言うと、男の声が聞こえた。
そしてニードレスのアダム・ブレイドそっくりの人物が現れた。

ギルシア「俺はギルシア・アダマイド、ただのしがない神父だ」
新八「いやいや、普通神父はこんな宇宙にいませんよ…」

ギルシアは自己紹介すると新八が彼が宇宙にいることに突っ込む。

ギルシア「うっせぇな、気付いたらこんなところに落とされたんだよ」

新八の言い方に癪に障ったのかギルシアが文句を返す。

ジャンヌ「落とされたって…」
ビビ「あなたまさか…」

ジャンヌとビビはギルシアの正体を推測する。
するとギルシアが2人を見た途端、

カラカラカラカラチャリーン！
カラカラカラカラチャリーン！
ババーーーーーーン！！

ギルシアの両目がスロットの様に回転し、両目にハートが出ては口から大量のコインが滝のように流れた。

女性陣（シャル除く）「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」
男性陣（グレイと神除く）「こわれたァァァァァァァ！！？？」

ギルシアの変わりように全員驚いた。

ギルシア「激萌少女発け～～～～ん！！」

ギルシアは瞬間移動の如く抱きかかえようとするが逃げだされた。

ネプテューヌ「な、なにこの人…」
ギルシア「むっ！そちら側にも激萌美人の少女達が！特に金髪のロリっこが！！」
ネプテューヌ「び、美人って…／／／／」

ネプテューヌは怪しむもギルシアの美人という言葉に反応して赤くなる。
無論ノワール、ブラン、ベール、ヴィヴィオも照れ笑いする。

神楽「なら私も美人の仲間入りね」
ギルシア「イヤお前は論外だ」
神楽「コルァ、どういうことだこのやろう」

神楽も便乗するがギルシアが否定する。

ビビ（お兄ちゃんこの人…）
グレイ（ああ、俺らと同じ転生者だな）

ビビとグレイはギルシアが転生者だと見破る。

ギルシア「んで次は……ん？」

レーティア「何かし……ら？」

レーティアとギルシアの目があった。
ギルシアはグラサンをとってポケットにしまい、

ギルシア「付き合ってください！！」

と手品の如く花束を出した。

全員「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？？」

全員揃って驚いた。
レーティアはというと、

レーティア「いいわよ？」
全員「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？」

更に驚かされる答えが出た。

ガシッ！

ギルシア「いいなお前、気に入ったぜ」
レーティア「貴方こそ、フフッ」

握手してなぜか何かが芽生えた。

銀時「…なんだかよく分からんが一応帰るか」
アイエフ「そうね。もうこの場所はウンザリだわ」
ネプテューヌ「あ、みんな待ってよ～」

銀時達は星船へ帰った。
途中変な物を拾って。

そしてドームにはグレイ、ビビ、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、そして神が残っている。

グレイ「で、単刀直入に言うがお前らは…」
ギルシア「転生者ってんだろ？」

グレイがギルシアに聞くとギルシアは自白する。

グレイ「…俺らが転生者だと気付いたのか」
ギルシア「俺は獣ってわけじゃないが一応転生者の匂いが分かるぜ」
鼻をトントンと指差すギルシア。

シャル「ついでに言うと私も転生者なの」
ジャンヌ「え？じゃあの話…」
シャル「イヤあの話は本当よ。転生して1カ月たった時白衣の奴らが見てたのか私をさらってここにいるってわけ」

シャル自ら転生者と答え、ジャンヌが疑問を口にするとシャルが真実を言う。

シャル「そのおかげで死ねないし自殺も出来ない。寿命で死ねるけどね」
レーティア「・・・ところであなた達に能力とかあるの？」

レーティアが聞く。

シャル「変身以外だとニードレス能力オールスターだね」
ギルシア「俺は他人の力を覚えることだ」
神「ギルシアはまんまだな」
ギルシア「うるせぇ、そんなことよりビビたん！ジャンヌたん！俺がこれでもかというくらい抱きしめて…」

グレイ・レーティア・シャル・神
「断固阻止」

ギルシア「チッ」

ギルシアが手をわきわきさせてビビとジャンヌの抱きしめようとしたら、背後に黒い気を放つグレイとレーティアとシャルと神がいてギルシアが舌打ちする。

…まぁそんなこんなで『シャル・ノイシュバンシュタイン』『ギルシア・アダマント』が仲間になった。

ちなみに『人面機』と『レッドマン』を手に入れた。
が、なぜかこの2つはお宝判定に入らなかった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

すずか「はじめまして、今回アシスタントをする月村すずかです」

銀八「礼儀正しい！そんじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神　ソラ』さんからだ。『マリオ「レーティアとジャンヌにそんな過去が…」

ルイージ「それにしてもおかしのギャラクシーだったね」

スネーク「そうだな…それで虫歯になってるな…」

ピット「転生者の皆さんに質問『銀さんのバリアジャケットはどうでしたか？；』」

スネーク「シルバーブレイドの製作者三人に質問『自分達の作ったシルバーブレイドがこちらのコラボでｄバージョンアップしたがその感想は？』」

ネス「レーティアさんに質問『好きなタイプは？』」

リュカ「何でそれ；」

次回を楽しみにしてます♪』んじゃお答えしましょう」

グレイ「あれはないだろう？」

ビビ「あれはちょっと…」

ジャンヌ「改造コスプレ！すっごくいい！！」

レーティア「あれは確かに驚いたわ。あ、好きなタイプはかっこよくてしっかりした体の男よ」

製作者3人「素晴らしい出来栄えだな（ですね）」

銀八「ハイ『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

すずか「次っはペンネーム『白騎士君』の質問です。『白騎士君「質問。スバルは銀河編に出ますか？」

レナード「今度は俺からの質問だ。シャマルに質問。新しい料理は出来たか？出来たなら試食したい」

白騎士君「今回はこれにて」『えっと・・・」

真王「俺が答える。残念ながらスバルは出ません。それどころかなのは達は宇宙世界に来られません」

シャマル「実はまだ出来てないんですよ。黒神さんとこのパイ」

銀八「オィィィィィィィィィ！！！！！なに作ろうとしてんだよお前はァァァァァァァァ！！！！」

真王「・・・『白騎士君』シャマパイ食って帰れ」

すずか「作者さん言い方が駄目です！次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんから。『シグナムに質問。
こっちでは、銀さんと結婚しました。ご感想は？

万事屋メンバーに質問。
コッチでは、主人公交代及び第二部連載中です。
ご感想は？

ユーリ
「おい作者、これ絶対に挑発だろ？」

炎華
「絶対そうですよね？」

ラピード
「ワン！」

新八に質問。
いい加減にアニメオタクを卒業しろ！
今のお前を見るとスゲェ吐き気がする！

新八
「って最後はそれ、そっちの僕に対する嫌がらせ！？」』し、シグナムさんが、結婚…」

シグナム「私流の春が来たぁァァァァァァァァァ！！！」

スッゴイ喜んでいるようだ。

銀時「主役交代だと!?銀魂の主人公は俺で十分だァァァァァァ!!!!」

新八「オイィィィィィィ!!なんだよこの僕に対する嫌がらせ!!」

真王「『亀鳥虎龍』さん、廊下に立て。次はペンネーム『ボッスン』さんから。『質問です。他にも他作品は出ますか?』一応どんどん出すつもり。『ボッスン』さん、始めての質問ありがとうございます」

銀八「次はペンネーム『月光閃火』さんからだ。『ども…月光閃火だ。

輝刃「しかし…ビビ達にずいぶんな言われ様をされたな…。」

ああ…ま、そこの所は心配ご無用♪どの罰も、やり終えたら俺謹製のスイーツ盛り合わせをご馳走するからな…。

輝刃「…お前の神経は相当図太いな…(汗)。とりあえず、質問…行くぞ?まずは俺からだ。」

1.グレイに質問…元・オトコであるグレイだが、正直言って…女性の容姿になって大変な事はあるか?

あ~…確かに、性別によって得手不得手がはっきり違うからな…。俺がもし女性の容姿になってしまったら…多分、下のスースー感が少々気になるかもな…(汗)。次は俺からだ。

2.ジャンヌに質問…コスプレ好きだと聞いたけど、もしかして男

装とかもした事あったりする？もしそうだとしたら、そん中でもっともしっくりきたモノをベスト3形式で教えてくれ。

輝刃「ふむ…なるほど…。というか…閃火も一時的コスプレをしたいなぁ…って時期があったが、今はどうなんだ？」

あ～…今は昔ほど熱は入ってねぇが、『機会があったら一度はやってみたいな…。』ってぐらいは思ってるぜ…。っつーか、サイズ合わねぇのが大半だろうなぁ…（汗）。』ズバリお答えしよう」

グレイ「やたらとキモイ奴らがナンパしてきたり着替えの時だな…」

ジャンヌ「男装もＯＫだよ♪。特に気に入ったのは1位から順にアーチャー（ＦＡＴＥ）、ギルガメッシュ（ＦＡＴＥ）、クラウド（ＦＦ）かな」

すずか「そんなに…。『月光閃火』さん廊下に立ってください」

銀八「ラストぉ、ペンネーム『支配者』さんからの質問だ。『支配者「ピクミンみたいにお宝集めですか…いいですね」

銀時「なんか任天堂のゲームネタが多いよな」

支配者「そうですね。では質問です。

1つ目の質問

よく考えたら、アイエフの声とはやての声って一緒ですよね。声優ネタやらないんですか？

2つ目の質問

アイエフの声ははやてと一緒ですけど桂の事が気になったりしないんですか？

３つ目の質問
アイエフはＳかＭどっちが好きですか？必ずどっちか答えてください（黒笑）

ではこの辺で」』」

真王「私は今感想を見てそうだったと思いました。一応そのネタは考えておきます。アイエフは桂の事を気にしませんが。しかし３つ目はどっちでもありません。てか失礼。『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「ハイんじゃ次はシャルにでもアシストするか」

第七十一訓：改造されても人は化け物じゃない（後書き）

真王「シャルとギルシアを仲間に入れたネプテューヌ達。そして次回はミッドチルダを襲ったあの怪獣が現れる！」

シャル「次回『いきなりデカイボスはちょっと危険』テイクオフよ」

2016

第七十二訓：いきなりデカイボスはちょっと危険（前書き）

真王「銀河編の始めから私のオープニングを作りました。ディスガイア曲『ラストエンゲージ』をイメージしてください。ではスタートだ！」

～ガメーバの溶岩帝国～
『対決！宇宙魔王ガメーバ』

第七十二訓：いきなりデカイボスはちょっと危険

シャルとギルシアを仲間に入れて星船で移動中、

ジャンヌ「でさ、その男がしつこいもんだから思いっきり足で大事なアレを潰してやったのよ」
ビビ「うわえげつないわね…。で、その男どうなったの？死んだの？」
ジャンヌ「一日中悶絶してたって」
ビビ「うわ～、痛いはずだよね～」
ジャンヌ「ね～」

ビビとジャンヌが楽しい話し合いをしている。

ギルシア「ハァハァ、いい絵が出来てるぜ…」
レーティア「それはいいけど鼻血しまいなさい」
シャル「てか何処からカメラ持ってるの？」

鼻血出してカメラで2人を撮ってるギルシアにレーティアが注意しシャルが突っ込む。

ガクンッ

すると突然星船が止まった。

ネプテューヌ「ど、どうしたのイーバさん？」
イーバ「…ここから先にとてつもない雰囲気を感じるね」

表情が強張っているイーバ。

その視線の先にはお城のような場所である。

ネプテューヌ「アレなんだか大ボスでも出てきそうだね…」

銀時「いやいやいや、まだ銀河編始まって４訓分しか進んでないんですけど？」

ネプテューヌは緊張の言葉を漏らし、銀時がメタ発言を出す。

イーバ「…まぁあんた達はどんな困難でも立ち向かう勇気くらいはあると私は信じているからね。死なないでおくれよ」

銀時「物騒なこと言うなぁァァァァァァァァ！！！！」

銀時はイーバの碌でもない言い分に突っ込む。

ガメーバの溶岩帝国

ＩＢＧＭクッパの溶岩帝国ｂｙスーパーマリオギャラクシー２（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　２　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｗｓｅｒ'ｓ　Ｌａｖａ　Ｌａｉｒ）

お城へ侵入した銀時達は様々なトラップに少し苦戦気味である。

銀時「あちち！こんなところで飛んでんじゃねぇよ！」

プリニー「お尻に引火したッス～～！！！」

ネプテューヌ「このパネル動くよ！」
ビビ「お、落ちる～～！！」
レーティア「これって進まないといけないのかしら？」
シャル「スネークブロックはついて行かないと落ちちゃうよ」

こうして進むうちに終盤あたりまで来た。

ネプテューヌ「そろそろ着いたかな？」
新八「早く進んだ方がいいですね」
？？？「そう言うわけにもいかないな」

銀時達が進む先に長方形で不気味な顔をした石の怪物が現れた。

ドッサン「貴様らはこのドッサン様が潰してくれる！オリャっ！！」

ドッサンがうつぶせに倒れてきた。
銀時達は慌ててかわす。
それを見たシャルが駆け出した。

銀時「おいどうするんだ？」
シャル「私この手の敵のパターンが読めるからね。こう言う倒れた敵には、こうするのよ！！」

高く飛び上がってドッサンの背中にあるしるしに向かってドロップを繰り出した。
それを受けたドッサンはばらばらに砕けた。
全員揃ってあっけな、と思った。

シャル「さてと、次はアレね」

そう言ってシャルが見たのは大きな扉と宙に浮く金色の隕石。
扉には鎖が巻かれている。

シャル「あの隕石を使って鎖を壊せば・・・」
ギルシア「なら俺の出番だな。フラグメント！パワー！」

隕石を指差して鎖を壊すよう指示するシャルにギルシアが能力を使って鎖をぶち壊した。
そして扉が開かれる。

銀時「ここの大将とのご対面だな」
ネプテューヌ「気を引き締めてね」

巨大玉座の間

銀時達はとある場所に着いた。

全員「なっ！！？」

そしてある存在を見て驚愕した。
それはミッドチルダを襲ったあのガメラそっくりの怪獣だった。

ＩＢＧＭクッパの対面ｂｙスーパーマリオギャラクシー
（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｃｏｎｆｒｏｎｔｉｎｇ　Ｂｏｗｓｅｒ）

???「ガ～ッハッハッハッハ！よく来たな勇者よ！」

怪獣は高笑いしながら銀時達に言うが、銀時達を勇者と勘違いしている。

銀時「おい一つ言っておくが…」

ガメーバ「この宇宙魔王ガメーバ様の城に侵入するとはいい度胸！我が拳で潰してくれるわ！」

銀時が言おうとしたら怪獣ガメーバに遮られる。

銀時「だかｒ…」

ガメーバ「だから一つ言っておこう！貴様らはここで終わるのだァアアアア！！」

銀時「人の話を聞けェェェェェェェェェ！！！！！」

銀時は切れてガメーバにとび蹴りをかます。

ガメーバ「・・・勇者は不意打ちするような軟弱だったのか？」

しかしガメーバは平然としている。

はっきり言って体格差が違いすぎる。

ガメーバ「もうよい！我が輩の力を見せてくれるわ！ガアァァァァァァ！！！」

ネプテューヌ「うわわわわっ！！」

しびれを切らしたガメーバが雄叫びをあげるとネプテューヌ達が宙

に浮き上がる。
そして上にある星に着地する。

ＩＢＧＭ強大なるクッパ大王ｂｙスーパーマリオギャラクシー２（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　２　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｓｓ　－　Ｂｏｗｓｅｒ）

ガメーバ「喰らうがいい！」

右手に不気味なオーラを纏ったガメーバがパンチを繰り出した。
パンチが当たったと同時に衝撃波が来たがジャンプでかわした。

ギルシア「今度はこっちから行くぜ！パワーのフラグメント！オリャァァ！！」

ギルシアは反撃に能力を使ってガメーバに攻撃した。

ガメーバ「ぬぅぅ・・・何か頭に衝撃が走ったぞ？」

頭をポリポリ掻くガメーバ。

新八「効いてない！？」
シャル「あいつの皮膚硬すぎよ。もっとこう何かぶつけるものでもあればいいけど…」

新八が驚き、シャルが分析している。

ガメーバ「ハァアアアア！！」

ガメーバが雄叫びをあげると隕石が降ってきた。

シャル「！あの隕石を使えば…、パワーのフラグメント！」

シャルは能力を使って振ってきた隕石を殴り飛ばした。

ガメーバ「ぐぼっ！？」

隕石はガメーバの顔面に直撃した。

シャル「みんな！飛んでくる隕石を撃ち返すのよ！」

全員（グレイ、神、ネプテューヌ、ギルシア除く）「隕石相手に出来るかァァァァァァ！！！」

シャルが命令するが、上記４人を除く全員が突っ込む。

シャル「だったら落ちてきたところをぶっ飛ばせばいいじゃない！」

全員それを聞いてあ！といった。

グレイ「はぁ・・・返してやるぞタマモ」

タマモノマエ≪御意、ヤシャノタテ≫

グレイはシールドを展開して隕石をはじき返す。

ビビ「パワーと言えば…そうだ！ベアトリーチェ、モード０２、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”“未央”」

ビビは神魔憑依（アバター・オブ・リンク）を発動する。

銀髪なところは変わらないが、なぜかショートで黄色いリボンにどこかの学生の服と思わせる服装だ。

ジャンヌ「あ！その手があった！シャマッシュ！フォームチェンジ！合言葉は力の不要者」

ジャンヌはビビの姿に自分も同じ格好になる。

ビビ「行くわよ！ビビちゃ～～～ん・・・」
ジャンヌ「こっちも！ジャンヌちゃ～～～ん・・・」

ビビ・ジャンヌ「パ～～ンチ！」

ビビとジャンヌはただ殴っただけで隕石を飛ばした。

レーティア「しょうがないわね。バトンモード！」
ファスシニム≪オーケイ≫
レーティア「いくわよ！ハァッ！！」

レーティアがファスシニムをバトン型に変えて人間とは思えない脚力で隕石を蹴り飛ばした。

ガメーバ「ウグボワァァァァァァ！！！」

隕石をぶつけられて悲鳴をあげるガメーバ。
すると口から何かキノコが出た。

ガメーバ「なっ！？まずい！」

ガメーバは取りに行こうとしたら、途中で縮んでしまった（それで

も銀時達より大きい）。

ガメーバ「ヌォアァァァァ！！ガッ！グォッ！」

そしてそのまま落下して地面に落ちた。

ガメーバ「ぬぅぅ…しくじったか。さすがは勇者、侮れん奴らだ」

ガメーバは起き上がってそう言うが、まだ銀時達を勇者だと思い込んでいる。

ネプテューヌ「先に言っておくけど、私達は勇者じゃないよ」

ネプテューヌが代表に行った。

ガメーバ「・・・・・・・・・・はぁ？」

ガメーバはあっけにとられたかのような顔をする。

ガメーバ「・・・勇者じゃなかったらあんたらはなんだってんだ？」

銀時「ただのしがない万事屋とその一行です」

ギルシア「おい、今俺達を入れただろ」

ガメーバが聞くと銀時が答えるが、一部余計な物にギルシアがジト眼で見る。無論神と転生者組もである。

ネプテューヌ「そんなんことよりも、よくもミッドチルダを滅茶苦茶にしてくれたね！このつけを倍返しにしてやる！」

ネプテューヌがエックスセイバーを突き付けて言う。

ガメーバ「ミッドチルダ？・・・ああ、あの町のことか。成程、貴様らはあそこの住人だな？」
銀時「いや、俺達はかぶき町だ」
ノワール「私達はゲイム業界」
プリニー「魔界出身ッス」
グレイ「俺らは…何処だろうな？」
ガメーバ「・・・まぁどちらにしろ貴様らは吾輩を倒しに来たのだ。ならば貴様らは吾輩を止められるかな？ガ～ッハッハッハッハッハ！！」

ガメーバはそう言って消えた。

新八「消えちゃいましたね」
ジャンヌ「ゲームではあんな感じの奴がラスボスだったりするよね」

新八が言うとジャンヌがこんなことを言う。

イーバ「とんでもない奴を相手にしてよく生きてたねあんた達」
ネプテューヌ「あ、イーバさん」

すると後からイーバがネプテューヌ達に驚きながら迎えに来た。

アイエフ「あいつを知ってるの？」
イーバ「名前ぐらいさ。ガメーバは宇宙のほとんどがよく知っている暴れん坊さね。現物見るのは初めてなもんだから…」

アイエフが聞くとイーバが答える。

ネプテューヌ「どんな相手だろうと、平和を乱す人は私が許さない

！」

ネプテューヌがエックスセイバーを握りしめて言う。

グレイ「フン、そんな気合があるなら十分にやっていけそうだな」

グレイは他愛なく言葉を出す。

ネプテューヌ「・・・へぇ～」

するとネプテューヌがグレイに関心を漏らす。

グレイ「？なんだ？」

ネプテューヌ「いや、ただグレイさんにはそんな一面があったんだなって」

グレイ「んなっ！？」

ネプテューヌに一言にグレイが驚く。

ネプテューヌ「確かなんて言うのかな～…つ・・・ツン…ツンデレ？」

ビビ「お兄ちゃんがツンデレ…」

ジャンヌ「へぇ～、男にもツンデレ属性ってあるのね～」

ネプテューヌ、ビビ、ジャンヌはグレイがツンデレになったと驚いている。

グレイ「な、なにいってんだお前ら！！俺がツンデレであるもんか！！」

神「ま、まさか毒を吐く人物にツンデレ属性がみられるとは…」

グレイ「テメェは黙れクソ神！！」

グレイは全力で否定するが神まで便乗して切れる。

グレイ「いいか！俺は決してツンデレなどではないからな！！」

釘を打つようにグレイは言う。
しかしなぜか顔が赤く見える。

ネプテューヌ「顔が赤いよ？ツンデレじゃないと言っても説得力無いし」
グレイ「だ、だ、だ、だまれぇぇぇぇぇぇ！！！」
全員「うぎゃあああああああああ！！！」
銀時「何で俺達までェェェェェぇ！！！？？」

ネプテューヌが最後のとどめを刺したのでグレイが暴走した。
全員揃ってボロボロになったがイーバだけ無事だった（逃げたから）。

そしてグレイのツンデレ伝説はここから始まったかもしれない。

グレイ「始まるかァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！（怒）」

『デカデカノコ』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

シャル「冒険と食を求めるシャル様がアシストするよ～」

銀八「なんか突っ込みどころ満載だがまあいいか。んじゃペンネーム『月光閃火』さんからだ。『ども…月光閃火だ。

しかし…ＮＥＥＤＬＥＳＳ系の新キャラにＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの星座宮キャラ登場…更なるカオスの予感が…（汗）。

輝刃「というか…レーティアとギルシアのやり取りが何とも…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ギルシアに質問…レーティアとのやり取りで何かピンクい絆を得たみたいだが、実際の所…その後のやり取りが気になるのだが…どうなのだ？

あ～…確かに、本編で何かそれらしい雰囲気だったからな…。その後が気になる所だぜ…。次は俺からだ。

2．作者に質問…何かこの小説を読んでてものすごくオリキャラの設定案が湧き上がるんだが…投稿オッケー？

輝刃「…そう都合よくはいかないだろう…。」

ハハハ…ですよね～（汗）。『」

レーティア「もちろん夫婦の絆を高めようとして…」

真王「いやまだ結婚してないだろ！！」

レーティア「そうね、とりあえず抱き合ったくらいね」

真王「ホントか？まあいいが、２つ目はその投稿承りました。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

シャル「次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんからだよ。『マリオ「新しいキャラが出たな…」

ルイージ「男の人はビビちゃんと行動が似てる気がする；」

スネーク「確かにそうだな…」

冥王「次がボス戦みたいなの」

フォックス「どうなるんだろうな…転生者組に質問『内のマリオはどう思う？』」

ピット「ギルシアさんに質問『どうやって宇宙に来たの？；』」

フォックス「真王に質問『今更な感じだけど星船って普通に丸い形か？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

グレイ「うちの妹が世話になったな」

ビビ「まだ怖さが残るなぁ…」

レーティア「相手にしたら勝ち目がなさそうね」

ジャンヌ「コスプレさせようかな？」

シャル「ねぇねぇ！一緒にゴーストの佃煮食べようよ！」

ギルシア「仲間のためなら神でも喧嘩売ると思うぜこいつ。後俺が宇宙に来た理由は俺を落とした神の奴に聞けよ」

真王「星船の形はイーバと似てる様です。『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい。それからバトン公開だ」

『ディスガイアの拠点でエディット台詞を始める。
キャラのセルフはどんなんのか想像してかくべし。
１６は複数ＯＫ。
詳細は　ｈｔｔｐ：／／ａｌｐｈａｗｉｋｉ．ｎｅｔ／ｄｉｓｇａｅａ４／ｉｎｄｅｘ．ｐｈｐ?ＦｒｏｎｔＰａｇｅのセリフまとめ
今回のキャラ：上から順に、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア

1～時空の渡し人～
「あら？何処行くの？行き先を選んで」
「どこか行きたいの？案内してあげるよ」
「修行でもいくの？だったら私も連れて行ってよ」
「どっか行くのか？なら強そうなとこでいいぜ？」

2～アイテム界屋～
「アイテム界屋へようこそ。どんな世界へ行きたい？」
「スリルと興奮を求めるアイテム界へようこそ！え？コスプレはいらない？」
「ここはアイテム界だよ～。ねぇ私と狩り合いしようよ」
「ここはアイテム界だ。さてどいつからやるんだ？」

3～武器屋・防具屋・よろず屋～
「いらっしゃい。ローゼンクイーン商会へようこそ。なにをお買いになりますか？」
「いらっしゃいませ～！可愛い看板娘のローゼンクイーン商会へようこそ～！」
「アイテム売るよ。なに買ってく？」
「おう、アイテム売ってるぜ。何買うんだ？」

4～地獄保嫌所（じごくほけんじょ）～
「あら？怪我でもしたの？私が癒してあげる」
「怪我したの？だったら治療するよ」
「医療なら任せて。痛くしないように麻酔なしでやるから」
「ああ？何で俺様が直さないけないんだ？女の子は全力で治します！！」

5～裏時空の渡し人～
「裏面へ行くの？気をつけてね」

「ここからさきはむずかしいよ?それでもいくなら止めないけど…」
「ここから先は強いのがいっぱいいるよ。途中で投げ出したくなっても責任取らないから♪」
「裏面か?ならもっと準備して出直してくるんだな」

6～技能屋(ぎのうや)～
「技能屋へようこそ。どの技を磨きたいの?」
「ここは技能屋だよ。どんな技が欲しいの?」
「この技能屋で一体どんな力が欲しいの?」
「ここは技能屋だ。技欲しかったらマナをよこしな」

7～戦挙事務所管理人(せんきょじむしょかんりにん)～
「戦挙事務所だけど入る?」
「ここは戦挙事務所だよ。何か用かな?」
「何か用かな?」
「作戦でも立てるのか?」

8～キャラ界屋～
「キャラ界屋へようこそ。どんな場所を歩きたい?」
「スリルと感覚を求めるキャラ界へようこそ!え?コスプレダメ?」
「ここはキャラ界だよ～。私といけないことしない?」
「ここはキャラ界だ。潜在能力ならここでいいんじゃないのか?」

9～界賊エディット屋～
「界賊エディットへようこそ。あなたはどんな船を造るの?」
「界賊エディットへようこそ～。みんなで海賊団つくろ」
「界賊名乗りたいならこの界賊エディットの私に頼んでね」
「ここは界賊エディットだ。一緒に可愛い子を探そうぜ!」

10～マップエディット屋～

「マップエディットへようこそ。あなたはどんなマップを作るの？」
「マップエディットへようこそ～。みんなでオリマップ作ろう！」
「自分のマップ作りたいならこのマップエディットの私を呼んでね」
「ここはマップエディットだ。一緒にかわい子ちゃんをマップに誘おうぜ！」

１１～記録屋～
「記録屋よ。今日の成績はどうかしら？」
「ここは記録屋だよ。今日の記録はどんなかな～？」
「今までの冒険や食べ物を記録する記録屋だよ」
「俺は可愛い女の子しか記録せん！！まじめにやれ？チッ、分かったよ」

１２～教育的指導員（きょういくてきしどういん）～
「あら？教育指導に何か用かしら？」
「あれ？どんな子たちを調教するの？」
「教育指導するの？どんな奴にするか選んで」
「俺の教育は全裸にしてケツを舐めまわさせるんだ。いいだろ？」

１３～特産品屋～
「いらっしゃい。特産品屋へようこそ。なにをお買いになりますか？」
「いらっしゃいませ～！可愛い看板娘の特産品屋へようこそ～！」
「アイテム売るよ。どれ買ってく？」
「おう、アイテム売ってるぜ。どんな特産品買うんだ？」

１４～ミュージシャン～
「ここは音楽屋よ。好きな音色を聞いてみてね」
「音楽屋へようこそ。クラシックもあるよ？」
「音楽でどれを聞きたいの？」

「ここは音楽屋だ。俺はメタル系が好きだがな」

15～キャラ塗師～

「ここは色替え屋よ。どんな色塗りたい？」

「色替え屋へようこそ。なに色になりたいか言ってみて？」

「色替え屋だけど何になりたいの？」

「ここは色替え屋だ。全国の女の子達！全て俺様色に染まれェェェェェ！！！」

16～戦挙事務所（せんきょじむしょ）～

レ「なんだか肩がこったわ。少し揉んでくれないかしら？」

レ「私とギルシアは愛し合う運命になる予定よ。ウフフ」

レ「なんだか溜まってくるわ。…性欲が」

レ「こう見えて昔はバトン部のトップエースだったのよ」

ジャ「私以外にコスプレしない人はいない！…そう信じてる！」

ジャ「毎日服変えて飽きないかって？全然♪」

ジャ「ハァ…誰か私を縛り上げてくれな…ん？何か用？」

ジャ「コスプレでも男装も出来るよ。だってコスプレはおしゃれだもん」

シャ「お腹空いた～。ねぇ君食べていい？」

シャ「道端で拾ったゴキブリ食べる？いらない？あっそう・・・」

シャ「こんな恰好して寒くないかって？うんあんまり」

シャ「どこかで神の力を消す奴がいるってことだけどいつか挑戦してみたいな～」

ギ「いいか！世の中はすべて女の子が一番だ！そう思うだろ！」

ギ「俺に覚えられない力はないぜ？それが俺様だからだ！」

ギ「頭のは飾りだって？これは体の一部だ」

ギ「俺は女の子が好きだが、レーティアの様なお姉さまでもいいぜ？」

17～回す人～
「鳴神ソラさんね」
「私リィーン」
「じゃあ黒神で」
「俺は誰でもいいぞ。月光閃火でもいいが」』

真王「それから『月光閃火』さんからキャラ投稿です」

『名前：レジィ・アルクタート
年齢：18
性別：♂
容姿：朱髪のショートシャギーに金色のクールな瞳、175cmのほどよく引き締まった体格で顔立ちはややクール系、ラフな服装が主で首には六芒星のネックレスを着けている
性格：寡黙でちょっと近寄り難い雰囲気を持つが、根っこは優しくて義に篤い
意外とボケ体質で主にアニメやゲーム等の名ゼリフ系のボケが多い
魔力ランク：EX
魔導士ランク：SS＋（推定）
能力：鍛えれば鍛える程無限に上がる身体能力、テイルズシリーズの術技・召喚晶霊全て
詳細：転生前の名は『赤城（あかぎ）　月華（げっか）』
元々はサブカル大好きなごく普通のフリーターだったが、建設工事のアルバイトの際に落ちてきた鉄骨から仕事仲間を助けてそのまま鉄骨の下敷きになって死亡…そのまま神様（見た目『銀魂』の『洞爺湖の精霊のオッサン』（汗））から転生ボーナスを貰い転生し、ミッドチルダのスラム街を拠点に何でも屋をやっている
時空管理局からの依頼も度々受けている為かほとんどの局員とは面識がある（とは言いつつ、上層部や最高評議会からの依頼はちょろまかしの達成報告が多い（汗）

一人暮らしが長い為、一通りの家事は出来…特に料理の腕前は最近シャマルから料理の手ほどきの依頼を受けている程上手い

デバイス名：ネスティルティア（愛称・ルティア）
種類：インテリジェントデバイス
思考性別：♀
待機時：六芒星のネックレス
セットアップ時：『テイルズシリーズ』の『エターナルソード』
バリアジャケット：『テイルズオブファンタジア』の『クレス＝アルベイン』のコスチューム
詳細：転生の際に神様から転生ボーナスの一つとして貰ったデバイス
性格的に『お姉さん＋オタク＋乙女』といった感じで、レジィに対してパートナー以上の想いを寄せている
オタクな為か、度々データの中にアニメやゲーム等の画像や動画データが入っていてレジィにとって少々悩みの種だったりする（苦笑）
』

シャル「次はギルシアがアシストするよ。それじゃあ待ったね～」

第七十二訓：いきなりデカイボスはちょっと危険（後書き）

真王「次回は銀時が最も恐れるあの場所です」

ギルシア「次回『幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから』テイクオフだ」

第七十三訓：幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから（前書き）

真王「銀さんにとって最も嫌なステージだ」

ギルシア「そんじゃあ始めるぜ」

～ホラホラマンションギャラクシー～

『石の怪物と神秘の木』

第七十三訓：幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから

イーバ「にぎやかにやってるかい？」

イーバが星船の中でくつろいでいる銀時達に言う。

銀時「ああ、暇すぎて体が鈍っちまうくらい」

銀時はジャンプ読みながら言う。
それが銀時にとって最悪な道になった。

イーバ「そうかい、なら次のギャラクシー・ホラホラマンションギャラクシーでもいけるね」
銀時「・・・うぐっ！いかん！腹痛が…調子悪くなってきた！」

次のギャラクシーを聞くや否や銀時が調子悪そうなしぐさをする。
真実を言えば銀時は物騒なギャラクシーの名前が出て絶対に行きたくないと本能が告げてあえて嘘の苦痛を出したのだ。

ネプテューヌ「ホラ銀さん、そんなところで突っ立ってないで早く逝こ♪」
銀時「物凄くシャレになんないんですけどォォォォォォォォ！！！！？？？」

銀時の叫び虚しく引きずり込まれました。
イーバはハンカチ持って振っていました。

ホラホラマンションギャラクシー

ＩＢＧＭファントムギャラクシーｂｙスーパーマリオギャラクシー（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｇｈｏｓｔｌｙ　Ｇａｌａｘｙ）

銀時「あ～、いやだよ～何で俺がこんなとこ行かなきゃなんないんだよ～…」
新八「文句言っても仕方ないですよ銀さん」

銀時がいやいやそうに廊下を歩く。
そんな銀時を眺める新八。

ガタガタガタガタ！

銀時「ウォォォォォォォォォォォォ！！！」
シャル「ただのポルターガイストだよ」
銀時「普通ポルターガイスト会ったら驚くワァァァァァァ！！！」

突然絵がガタガタ動いたので銀時が後ずさる。
シャルが言うももっともな意見を言う銀時。

ガタガタガタガタ！

レーティア「キャァ～怖いっ！」

レーティアが怖がっている（ふりをしている）ためギルシアが彼女を支える。

ギルシア「安心しろ、俺様が守ってやるからな」
レーティア「ギルシア／／／／」

ギルシアが行った後レーティアが顔を赤くする。
その時二人の空間にスッゴイピンクのオーラが纏われる。

銀時「うご～～～！！！？なんだこれは！！」
シャル「あれは『ラブハーツ空間』と言って邪悪なる者を寄せ付けない愛の結界なんだよ。私も始めていた」
ビビ「なんですって！？私もなのはちゃん達と～～～！！」
ジャンヌ「落ち着いて…」

オーラに押された銀時が言うと、シャルがそのオーラの正体を暴き、ビビが魂の叫びを出すもジャンヌが落ち着かせる。
が、向こう以外でもネプテューヌ達はその逆のオーラを纏っているが。

ネプテューヌ「うらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやましい・・・（ブツブツ）」
ノワール「ムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつく・・・（ブツブツ）」
ブラン「私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって・・・（ブツブツ）」

ベール「桂さんと桂さんと桂さんと

ネプテューヌ「え？ちょっと待ってよ～」

何事もなかったかのようにシャルが先導し、ネプテューヌ達はあっけにとられるもすぐに移動した。

レーティア「ふさがっているわね」

進む先に鉄格子が行く手を阻んでいる。

ギルシア「仕方ねぇな。俺様がぶっ壊「ちょっと待って」ウゴッ！」

ギルシアが前へ出るとネプテューヌに裾を掴まれて倒れる。

ネプテューヌ「このキノコを使えばいけると思うけど…」

そう言って取り出したのは白いキノコだった。

そのキノコを食べるネプテューヌ。

そして何とネプテューヌはお化けへと変身した（下半身がお化けになっているだけ）。

コンパ「ああ～～！！ねぷねぷがしん「死んでないからね！！これは変身してるだけだからね！！」そ、そうですか」

コンパが死んだと思い込んでしまったのでネプテューヌが補足して安心したようだ。

ネプテューヌ「え～とこれは～、それ！」

ネプテューヌがスピンすると消えた。

新八「き、消えた！？」

ヴィヴィオ「お、お姉ちゃん何処に？」

グレイ「俺の後ろだ」

ネプテューヌ「チェ、驚かそうと思ったのに…」

新八とヴィヴィオが驚くも、グレイが気付いたのでネプテューヌは惜しそうな顔をして現れた。

ネプテューヌ「まぁお遊びはいいとして、…銀さん何やってるの？」

ネプテューヌは偶然会ったゴミ箱に顔を突っ込んでいる銀時を見て言う。

銀時「いや、あの、ムー大陸の入り口を探して…」

ビビ「いやそこにないわよ」

言い訳を言う銀時に突っ込むビビ。

ネプテューヌ「ばぁ～！」

銀時「ウオォォォォォォォォォォォォォォ！！！！？？」

ネプテューヌが銀時の目の前で（透明になって）驚かしたので銀時は後退りする。

ネプテューヌ「アハハハハハ！銀さんやっぱり面白いや！けどこのままだったら通れないけど？」

腹を抱えて笑うネプテューヌ。
その後鉄格子を見ながら言う。
お化け化しているネプテューヌなら通れるがそれ以外は出来そうにない。

ギルシア「チッ、だったら力づくでいくか？」
レーティア「待って、こんな時こそ彼女の出番よ」

ギルシアが腕をまわして殴り壊そうとするとレーティアが止めて一つのカギを出す。

レーティア「開け！処女宮の扉！バルゴ！」

レーティアが政令を召喚すると、ピンクのショートに手枷をつけたメイドが現れた。

バルゴ「およびでしょうか？ご主人様」

バルゴはレーティアの前で跪く。

レーティア「早速あなたにやってもらいたいことがあるんだけど…」
バルゴ「お仕置きですか？」

バルゴが真顔でボケる。

レーティア「違うわよ。ここから鉄格子先まで掘ってくれる？」
バルゴ「承知しました」

バルゴが承諾した後地面を掘って鉄格子先まで道を作った。

レーティア「それじゃあ行きましょうか」
ギルシア「やるじゃねぇかレーティア」
レーティア「ウフフ、ありがと？」

レーティアはギルシアに抱きついてピンクオーラを出す。

バルゴ「紙吹雪はいりますか？」
レーティア「結構よ」

マンションの外

外へ出た銀時達は宙に浮く瓦礫を渡っている。

銀時「お宝はこっちにあるのか？」
ネプテューヌ「そうだよ。っとあった」

ネプテューヌはお宝がある場所に指差す。

銀時「おし！こいつをとってとっととこんなとこオサラバ…」
？？？「なに僕のお宝横取りしようとしてんのォォォォォォ！！？」

銀時が取ろうとすると地面から石の怪物が現れた。

ＩＢＧＭポルタ&キングボーネｂｙスーパーマリオギャラクシー（Ｓｕｐｅｒ Ｍａｒｉｏ Ｇａｌａｘｙ Ｍｕｓｉｃ Ｅｘｔｅｎｄｅｄ － Ｂｏｓｓ － Ｋｉｎｇ Ｆｉｎ，Ｂｏｕｌｄｅｒｇｅｉｓｔ）

銀時「誰だオメェは？」

ボルタ「僕はボルタ、僕の宝物に手を出すな！」

石の怪物、ボルタが石をうかばせて銀時に向かって放つ。

銀時「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

銀時は猛ダッシュで飛んでくる石をかわす。

銀時「くそ！ネプテューヌ！手伝ってくれ！」

銀時はネプテューヌ達に助けを求めるが、

ネプテューヌ「銀さん頑張って～！！」

ヴィヴィオ「パパ頑張れ～！」

シャル「見ものだね」

ギルシア「だな」

銀時「またお前らは観客かぁァァァァァァァァァ！！！！！！！！！（激怒）」

銀時は奥で観客みたいに見ている奴らに青筋立てて怒鳴る。

ボルタ「あ、いたんだ」

ボルタは今気付いたかのような顔をする。
その時黒い石の流れ弾がネプテューヌ達に向かってくる。

ネプテューヌ「白刃取り！…ふっふんまだまだ甘いね♪」

黒い石はネプテューヌがキャッチ。
不敵に鼻で笑う。

ジャンヌ「いや、その、その石もったら…」

ジャンヌが冷や汗流している。
するとその石が砕けて真っ黒な何かになる。

ネプテューヌ「・・・何これ？」
？？？「ケケケケケケケ」

ピピピピピピ！ドガーーーーン！！！

ネプテューヌ「ウギャァァァァァァ！！！！」

ネプテューヌは爆発に巻き込まれた。
周りは避難していた。

ボルタ「ああ、いい忘れてたけど黒い石は爆発するから気をつけてね」
銀時「先に教えろよバッキャロォォォォォォォ！！！」
ボルタ「普通敵が教えるか？」
銀時「あ、そうか」

ボルタの一言に銀時は怒鳴るが、突っ込みを入れられて納得する。

すると観客席だったところからズシンという音が聞こえた。
それは魔王でも殺せそうなオーラを纏っているパープルハートがいた。

ボルタ「え?ちょっ、ちょっと待て…」
パープルハート「我魂魄数万回生まれ変わっても、恨み晴らすからなぁァァァァァァァァァァ!!!!!!!!!!」
銀時「ネタァァァァァァァァァ!!!それ明らかに昔っぽいネタだよォォォォォォォォォォォ!!!!!!」

ボルタはたじろいで、パープルハートが恨み晴らすと言わんばかり（って言ってるなこれ…;）に怒り出し、銀時は微妙に聞き覚えのあるネタに突っ込む。

パープルハート「問答無用で死ねぇエエエエエエエエエエエぇぇ!!!!!!!」
ボルタ「え?ちょまギャァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!!!!!」

怒りのパープルハートにボルタはざくざくやられていった。
銀時含み全員は手をあわせていた。

で…

ボルタ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、いやホントすいません!マジで勘弁して、これあげますから許してください!」

ガタガタと土下座して謝るボルタ。
余ほど怖いのかが目で分かる。
とりあえず『フューチャースフェア』を手に入れた。

ネプテューヌ「最初っからそうすればいいのに・・・ねぇ？」

にっこりと笑うネプテューヌ、だが目が笑ってない。だが目が笑っていない。
…大切なことなので2回言ったッス。

ボルタ「エヒィィィィ！！！ホントマジでごめんなさイィィィ！！！僕本音言うとタダ友達いなくて調子に乗ってしまっただけなんですゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」
ネプテューヌ「…そのために私はとばっちり受けたわけ？」

黒オーラは治まるどころかどんどん濃くなっていく。

ボルタ「ギャァァァァ！！！落ち着いて！！お詫びと言っちゃなんだけどいいところ連れて行くから！！」
ネプテューヌ「何？ゴミダメ？」

ジト眼でボルタを睨むネプテューヌ。

ボルタ「いや話は最後まで聞いてって！ほらこっちですよ！」

ボルタは怖がりながらもネプテューヌを連れ出す。
銀時達も後をついて行く。

外れ小島

ボルタ「着いたよ」
ネプテューヌ「・・・・・・・・・・・・・・・（唖然）」
銀時「こいつぁ・・・」
レーティア「きれい・・・」

ある小島に着いたネプテューヌ達はあるものに目を奪われた。
それは、神々しいほど青く輝いている大きな木だった。

ボルタ「彷徨う神の木（セールト・ギャラクシア）、その名の通りただ宇宙空間を彷徨う島でいつどこに現れるか分からないとされているんだ。けど僕がそれを見つけてロープで縛って固定させたんだ」
銀時「おいおい、こんな神秘っぽい木を捕まえてたら罰あたんねぇか？」

ボルタが自慢げに神の木を説明して、銀時が冷や汗流して言う。

ボルタ「いや～、僕はよくわかんないんだけどこの木は神と神との通信とされているとかって言われてるんだ」

ボルタは曖昧気味に答える。

ネプテューヌ「…神の木…」

ネプテューヌがふいに近づく。
そして神の木に触れる。

？？？

ネプテューヌ「！？ここは？」

突然世界が白と黒の世界へと変わった。
しかも周りに白い魂みたいなのがいっぱい浮いている。

？？？「ここは魂の世界だよ」
ネプテューヌ「！？誰！？」

ついに何処からか声が聞こえてネプテューヌは見渡す。

？？？「あたしはここだよ」
ネプテューヌ「何処…うっ！！？」

ネプテューヌの体の中から黒い魂が出てきた。
そして全身黒くて目が赤く、赤い刺青みたいなのがあるネプテューヌそっくりの存在がいた。

ネプテューヌ？「よう、表の私」
ネプテューヌ「…もしかしてあなたなんだね。あの時からの」
ネプテューヌ？「そうさ。あたしはあいつから闇を吸われる際に誕生したのさ。そうだな、ダークネプテューヌとでも名乗って置くか」

黒いネプテューヌ、ダークネプテューヌは自己紹介する。

ダークネプテューヌ「なに、少なくともあたしはお前を殺す気はないからな。半身を殺したところで表の世界にまで影響しちまうわ。だからあたしは助言ぐらいはする」
ネプテューヌ「助言？」
ダークネプテューヌ「ああ、ダークソウルとあのタカスギが同盟結んだらしいぜ」

ネプテューヌはそれを聞いて驚愕した。

ダークネプテューヌ「世界を壊すという理由で協力し合ってるみたいだがな」
ネプテューヌ「そんな・・・」
ダークネプテューヌ「…いきなり話しても整理が付かんなら時間はやるよ。そんじゃあな」

そして世界が光りに満ちた。

彷徨う神の木の付近

ネプテューヌ「・・・ダーク・・・ソ・・・ウル・・・」

元の世界へ戻ったネプテューヌ、だが呟いたあと倒れてしまう。

銀時「！おいどうした！」
ネプテューヌ「・・・ぁ、ぎ…さ…」

気付いた銀時が駆け寄ってくるが、ネプテューヌの状態は顔が赤くて汗を流して息が荒い。

新八「大変だ！ひどい熱です！」
神楽「星船まで運ぶネ！」
ノワール「ネプテューヌ！しっかりしなさい！」
ヴィヴィオ「お姉ちゃん！」
プリニー「応急処置ッス！」

ネプテューヌは星船まで連れて行かれた。

ボルタ「・・・僕はどうすれば…」

一人ポツンと残されたボルタであった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ギルシア「よう、ギルシアだ。しっかりアシストしてやるからな」

銀八「頼むからちゃんとやってくれよ？んじゃペンネーム『鳴神ソラ』さんから始めるぞ。『マリオ「現れたな…」

ルイージ「ホントだね」

スネーク「しかもキノコで大きくなってたな…」

フォックス「それで早速ギルシアとシャルが大活躍だな」

冥王「ボスは撃破したけど…また別のキノコか何かで巨大化して出て着そうかも…」

マリオ「質問『俺の弟子の明久を見てどう思う？』」

ルイージ「同じく『冥王のもう1つのバリアジャケットについてどう思う？；』」

ネス「なのはさんに質問『冥王の技はどう思う？』」

それでは次回を楽しみにしてます』」

真王「そうですね。仮面ライダーでも馬鹿ですよね？もう一つ冥王のバリアジャケットって黒神のスバルと同等だな」

なのは「凄いと思いますけどあのコスプレはないよ…」

ジャンヌ「安心してなのはちゃん。私が奇麗なコスプレを」

なのは「しなくていいよ！！」

真王「は～い『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次はネプテューヌだ。じゃあな」

～今日のお宝鑑定～

～フゥーチャースフェア～

価値：２３００円

見た目：水晶玉

イーバメモ：不思議な球だけどなんだか私の未来が見れそうな気がするね。

ドルフィンメモ：不思議な球からあなたの未来が見れる！人生を占いたい人にオススめ！なにが出るかは知りませんが。

第七十三訓：幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから（後書き）

真王「次回は転生者メンバーが大活躍します！」

ネプテューヌ「次回『転生者は隠し技を持っている』テイクオフ！」

～予告～

ジャンヌ「私達の本気が見れるかも？」

第七十四訓：転生者は隠し技を持っている（前書き）

真王「今回は転生者組が大活躍！別にグレイやビビや神は出ませんが」

神「俺の活躍はいつになるんだよ～。早くあっちにださせろよ～」

真王「あんた出したら一瞬で終わるだろ？」

神「あ、それもそうか」

真王「それではスタート」

～彷徨う神の木～

『狙われた神の木を救い出せ！』

第七十四訓：転生者は隠し技を持っている

星船

イーバ「容体はもう安定したよ」
コンパ「ねぷねぷ元気になりました。今安静して寝ていますです」

風邪で倒れたネプテューヌを看病していたイーバとコンパ。

新八「良かった」
神楽「当たり前ネ。ネプっちが簡単にくたばらんアル」

新八は安心し、神楽は当たり前なことを言う。

銀時「しっかし、なんでいきなり？」
イーバ「そりゃこっちが聞きたいよ」

銀時は疑問を投げるがイーバはそう言う。

銀時「あれ？そう言えばレーティア達は何処行った？」
グレイ「神の木をもっと見てみたいだとよ」

銀時は周りを見渡しながらそう言って、グレイが答えた。

彷徨う神の木の付近

ジャンヌ「昨日から見てたけどやっぱり不思議だね～」
レーティア達は神の木の付近で眺めていた。
ジャンヌは座って眺めて呟く。
レーティア「ほんとね」
ギルシア「これが神の神秘ね～」
レーティアは賛同するが、ギルシアは興味なさそうな感じである。
するとレーティアがギルシアによってだきつく。
レーティア「…こうしていると夫婦に見えるかしら？」
ギルシア「ドキドキ緊張する彼女の間違いだろ？」
レーティア「やだひど～い！」
レーティアの冗談にギルシアはそう返してレーティアは元気な少女のように言う。
ギルシア（…あいつの予想はあってんのか？）
～回想～
レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシアは夢を見ていた。
レーティア「ここは何処なのかしら？」

ギルシア「少なくとも誰かさんの仕業っぽいな」
？？？「鋭いな～、さすが転生者というわけか？」

レーティアが不思議そうに周りを見渡して言い、ギルシアが仮説立てると誰かが肯定の声を出す。
声のした方へ向くと、ネプテューヌそっくりの黒い奴、ダークネプテューヌが岩の上で座っている。

ジャンヌ「うわっ！ネプテューヌちゃんそっくりだ！！」
ダークネプテューヌ「お前らに聞きたいんだが表の私はどうしてるんだ？」

驚いているジャンヌをスルーしてダークネプテューヌが聞いてくる。
とりあえず話すと、

ダークネプテューヌ「ふ～ん、干渉した反動かね～」
ジャンヌ「偉く軽ッ！！？」

別に驚きもせず普通な返事なためジャンヌが驚く。

ダークネプテューヌ「でもまぁ大丈夫そうだな。それからお前達に言っておくことがある。神の木で待っていろ。そうすれば何かイベントが起こるぜ？じゃあな」

ダークネプテューヌはそう言い残して消えた。

～回想終了～

ギルシア（あいつはああ言ってたが、一体どんなイベントんなんだろうな？）

ギルシアが想像すると、

シャル「・・・見慣れない奴らがいるよ」

シャルが木の近くにいる謎の集団に指をさす。
しかもそいつ等は何やら危なっかしいものを持っている。

ギルシア「成程な。この木に罰当たりなことする奴らをぼこってこいってことだな？」
レーティア「若干解釈が違ってる様な気がするんだけどまぁそうね」

ギルシアが言った後レーティアが言う。

レーティア達は集団に近づくと、そいつ等は人型の４つの赤い目のような顔に身体中おおわれた黒いアーマーがある。
が、なぜかこの者たちに“人間の気配がない”。

シャル「人の姿をした死人兵士・イヴィルソルジャーってとこかな？」
ギルシア「もう一方はなんか見覚えねぇか？」
？？？「ガァ～・・・」

もう一方は同じく人型で裂けた口と鋭い牙、長し舌を出している人外生物だった。

レーティア「あ～、バイオの長舌やろうね。私あれちょっと苦手よ」
ギルシア「んじゃさっさと片付けるか？」
シャル「賛成、あいつらいると居心地悪そうだ」
ジャンヌ「久しぶりに本気が出せそうかしら！」

レーティア達はイヴィルソルジャーの部隊に突撃した。

ＩＢＧＭファタライズｂｙソウルキャリバーレジェンズ（Ｍｅｇａ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　Ｅｄｉｔｉｏｎ：　Ｌｌｏｙｄ　Ｉｒｖｉｎｇ［Ｆａｔａｌｉｚｅ］（ＳｏｕｌＣａｌｉｂｕｒ　Ｌｅｇｅｎｄｓ））

レーティア「私の動きが捕えられるかしら！？」

レーティアはファスシニムを取り出して鞭でイヴィルソルジャーをなぎ倒す。

イヴィルソルジャー「オオォォォォォ！！！」

イヴィルソルジャー達も武器で応戦する。
レーティアは難なくかわす。

レーティア「喰らいなさい！死の舞い踊り！」
イヴィルソルジャー「グアァァァァァ！！！」

暴れまわる大蛇の様に鞭の攻撃が襲いかかり、イヴィルソルジャー達は１割倒された。

？？？「シャァァ！！」
レーティア「！？」

先ほどの長い舌の人外生物・リッカーがレーティアのファスシニムを舌で捕えた。
後ろのイヴィルソルジャーが剣を振り上げてレーティアを切り捨てようとした時、

レーティア「ハァッ！！」
イヴィルソルジャー「グォッ！？」

レーティアの後ろ蹴りに蹴られた。

レーティア「舐めないでよね！どこかの中国妖怪みたいに体術を有しているからね！」
リッカー「アァァァァァ！！？」

レーティアがファスシニムを思いっきり引っ張ってリッカーを投げ飛ばす。

レーティア「ファスシニム！バトンモード！」
ファスシニム≪オーライマイマスター≫

レーティアの指示にファスシニムは鞭からバトン（ラ・ピュセルのプリエ愛用バトン）へと変わった。

イヴィルソルジャー「ウオォォォォォォォォォォォ！！！」
レーティア「かかってきなさい！！やぁッ！！」

レーティアは無双の如く襲いかかってくるイヴィルソルジャー達を

体術や足技やバトンで次々と倒していく。
とても普通の人間とは思えないスピードで次々と倒していく。

レーティア「フンッ！」
リッカー「グェッ！？」

するとレーティアが瞬時に近くのリッカーに飛びかかって馬乗り状態になった。
他にイヴィルソルジャー5体とリッカー3体がレーティア（と乗せられているリッカー）を囲む。

レーティア「…ちょっとばかし張り切り過ぎちゃったみたいだからもうこんなに減ったわね…」

レーティアは周りの敵達を見る。
周りはイヴィルソルジャーとリッカーと彼女を合わせて１０人しかいない。
すると乗せられているリッカーの舌がレーティアの体にまきつく。
絞めつけられて胸が強調されている。

レーティア「フフッ、たっぷり遊んであげるわよ♪・・・夢魔変化（リリス・フォーム）」

レーティアは悪魔のような魔性の笑みを浮かべ、背中から悪魔の羽が出現した。

ギルシア「オラかかってこいザコ共ォォ！！！」

レーティアとは別のところではギルシアが手に炎を纏って敵を殴りまくっている。

ギルシア「リトルボーイ！！」

炎の打撃パンチ・リトルボーイを放つギルシア。

ギルシア「まだ行くぜ！カンダタストリング！！」

紫に光る糸を出してイヴィルソルジャー達を切り刻んだ。
イヴィルソルジャーは糸を切ろうとするが一向に切れない。

ギルシア「その糸を切れるものは、神だけだ。そしてとどめだ！テンペストスレッド！！」

カンダタストリングよりも糸の束が濃い攻撃がイヴィルソルジャー達を襲った。

ギルシア「判決！！死刑！！！」

ギルシアは十字に切ると背後でイヴィルソルジャー達が落下した。

ギルシア「ん？うわっと！」

ギルシアが後ろに振り向くと矢が襲って来たのでかわす。
弓を構えたイヴィルソルジャーだった。

ギルシア「・・・へッ！」

ギルシアは鼻で笑うと瞬時にイヴィルソルジャーに目の前に立った。

ギルシア「ディーン・ドライブ・フォックスハンド！」

音速の如くの攻撃でイヴィルソルジャーが袋叩きにされ、吹き飛ばされた。

ギルシア「オラどんどんかかってこいやザコ共っ！！！」

悪魔のような顔でイヴィルソルジャー達を挑発した。

ジャンヌ「セイヤァァァッ！！」

レーティアとギルシアとは別のところでジャンヌがＦａｔｅのライダーの恰好してリッカーを投げ飛ばす。

リッカー「シャァァ！！」

ジャンヌ「チッ！」

もう一匹のリッカーが舌でジャンヌの服を掠らせる。

ジャンヌ「ッ！／／／／」

ジャンヌの体にリッカーの舌が巻きつかれた。

他二体のリッカーも舌で巻きつく。

ギリギリと締め付けられているため痛がりながら表情を赤くしてい

る。

ジャンヌ「ぅ…く…っ！」
体のあちこちがくいこまれていくジャンヌ。

リッカー「・・・ゲェァ！」

バリッ！！

ジャンヌ「ッァ！／／／／」

服を引き裂かれた。
ジャンヌは飛び上がって木の根の上に立つ。
7割ほど露出するあわれもない姿がよく見える。

ジャンヌ「ちょっと調子に乗り過ぎたかな～、せっかくのコスプレ衣装がもうボロボロ。仕方ないわね」

自分の衣装を見てぼやくジャンヌ。
すると彼女は自分の服をビリビリに破き捨てたのだ。
無防備な全裸になったジャンヌ（だがパンツはある）。

ジャンヌ「こっからは本気でいくよ！シャマッシュ！ウォーロードフォーム！」
シャマッシュ≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！≫

手に持つデバイス・シャマッシュで光を放ってバリアジャケットを展開する。
上半身になのはのエクシード（ジャケットはない）、下半身に黒いブーツとの黒のストッキングとガーターベルトと前が開いたロング

スカートだ。
そして手には銀色の双剣を握っている。

ジャンヌ「さぁ！遊んであげるわよ！」

双剣を振り回してリッカー達を挑発する。
リッカー達はそれに反応して舌で攻撃する。

スパンッ！

リッカー「ギャァァァァ！！？」

ジャンヌにあたる直前舌が切れた。
理由は簡単、目には見えないほどのジャンヌの攻撃で切れたのだ。

ジャンヌ「虎刃斬！！」

虎の牙のように斬撃技を繰り出してリッカーを一体倒す。

ジャンヌ「剣から拳に変えて、魔拳ビッグバン！！」

ジャンヌは双剣から銀のナックルグローブに変え、超強力な魔力でビッグバンの如くの爆発を引き起こし、リッカー達はほぼ全滅した。
…一体だけは生き残っていた。

リッカー「シャァァァァ！！！」

仲間がやられたことに怒り出したリッカーが長い舌でジャンヌを捕えた。

ジャンヌ「んっ／／／／／」

リッカーの舌がジャンヌのアレな部分と胸にあたっている事に気持ちよさげな顔をしているが、

ジャンヌ「ダメ、これじゃ足りない。これじゃ私の夢魔（サキュバスハート）の性欲が満たされない」

リッカーの舌に捕まったまま近寄る。

ジャンヌ「ねぇ、私とイイコトシマショ？」

シャル「・・・・・・・・・ちょっと数多くない？」

レーティア、ギルシア、ジャンヌとはまた別のとこではシャルがいて、周りにはイヴィルソルジャーとリッカーがたくさんいる。

シャル「まぁいいや、まとめて燃やしてあげる。ドッペルゲンガー！バハムート！」

シャルの体がバハムート（ＬＯＶ仕様）へと変身した。

バハムート（シャル）「カオスフレア！！！」

口から炎が凝縮された塊を発射させてイヴィルソルジャーとリッカー達をほぼ全滅させた。

そしてシャルは元に戻って、

リッカー「シャァア！！」

ドスッ！

シャル「アッ！」

背後にいたリッカーに心臓を貫かれた。

シャル「・・・・・びっくりしたね～」

だがシャルは平然としていた。
ある研究の実験台にされて死ぬことのできない体になっているのだから。
左腕を刃に変えてリッカーの首を切り落とす。

イヴィルソルジャー「ウオォォォォ！！」

生き残っていたイヴィルソルジャーがシャルの前で心臓を突き刺した。
また遠くで弓のイヴィルソルジャーが矢を放って頭をつく。
しかし、

シャル「ごめ～ん、私簡単に死ねないんだ～」

心臓刺されようが頭を撃たれようが死なないシャル。

シャル「だから、くたばりな～♪」

両腕をしなる蛇のように攻撃するシャル。
ある時は鎌状にして敵を切り、ある時はオリハルコンの腕でぶっ飛ばしたり、またあるときは体中からとげ（と血）を出して一掃したりしていた。

シャル「見てなさい！ディーンドライブフォックスハンド×リトルボーイのコンビネーション技！その名も…」

シャル「ディーンドライブリトルボーイ！！」

炎の拳の高速攻撃がイヴィルソルジャー達を襲った。
そしてイヴィルソルジャー達は全滅した。

ギルシア「ハンッ！準備運動しただけましか」
シャル「結構楽しかったね」

ギルシアは肩を回し、シャルは木の根の上で座って足を振っている。

レーティア「あらギルシア」
ジャンヌ「そっちも終わったんだね」

後から遅れてレーティアとジャンヌがやってきた。
心なしか少し艶めいているように見えるが…。

ギルシア「…何か前よりきれいになってねぇか？」
シャル「なんか能力使った？」

レーティア「ええ、妹と同じ相手の力を奪う夢魔吸引（リリス・アブソーバー）のおかげでね」

艶めいた理由は彼女達の能力のせいなのだ。
それにやられたイヴィルソルジャーとリッカー達は干からびたミイラの様になっていた。

シャル「でも、こいつら普通じゃないね」

そう言って一体のイヴィルソルジャーの顔の仮面を取る。
人ならざる死人の顔だ。

シャル「人間の死体を媒介に化け物にしてる」
ギルシア「誰だかねぇ、こんな技術を作った奴は」

シャルが分析し、ギルシアが言う。

レーティア「さ、もうここにようはないから行きましょ」

レーティア達は星船へ戻った。

???

イヴィルソルジャー「ご報告します。神の木へ向かった部隊が何者かに全滅されたとの事です」

神殿のような空間でイヴィルソルジャーがある男に言う。

???「部隊が全滅だと?どんな奴だ?」
イヴィルソルジャー「女が3人と男が一人、いずれも異世界の能力を所持しているようです。そしてあの場にいないでしょうが複数の仲間がいらっしゃるようです」
???「異世界の能力……なるほど、転生者ということか」

男はその人物達（レーティア達のことを言っている）を転生者と見破る。

???「神の木のことは諦めるとして、次の作業にかかれ。場所はそうだな、・・・・・でどうだ?」
イヴィルソルジャー「了解しました、森羅神ネオ様」

男・ネオはある場所を言い、イヴィルソルジャーは消えた。

???「・・・クックックックッ・・・すでに世界のほとんどは我がものに堕ちた。あそこはあいつがやってくれるだろう。精々壊れるところを見ていくんだな。この俺、森羅万象の神・ネオ様がな！！ファ～ッハッハッハッハッハ！！！！」

その男は部下だった少女をダークソウルに変えた張本人・ネオが狂気の高笑いをあげていた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「こんにちわ～！また私だよ～」

銀八「ハイそんじゃあペンネーム『鳴神　ソラ』さんから行くぞ。『マリオ「おお～早速スピンを使ったな」

ルイージ「ホントだね…と言うか銀さん；」

明久「と言うかちょっと失礼じゃない；」

康太「少し事実だから仕方ない」

スネーク「それにしても高杉と組んだか…」

フォックス「厄介な同盟だな…」

マリオ「質問『俺の弟子の康太はどう思う？』」

ルイージ「リリなのメンバーに質問『冥王はどう思う？』」

フォックス「スバルに質問『最近、自分の出番がない事どう思う？』」『」

真王「…変態に仮面ライダー…いやなんでもない」

フェイト「本当になのはそっくりだったね」

はやて「唯一違うのはアレやね…（一部分を見ながら手をわきわきしている）」

シグナム「冥王か・・・フフッ」

ヴィータ「これはあたしへの当てつけか！？」

シャマル「ほ、ほんとになのはちゃんそっくりよ」

ザフィーラ「世界は広いな…」

スバル「写真見ましたけど凄い人だったんですね。黒神のあたしはメインになってましたけど気にしてないです」

ティアナ「冥王…ちょっと怖いわね」

エリオ「コスプレって…」

キャロ「う、羨ましい…」

銀八「それから鳴神　ソラさんのばとんがあるぜ」

『と言う訳で前回の話にあったバトンを…上から明久、康太（ムッツリーニ）、フォ

ックス、スネーク

1～時空の渡し人～
「あっ、どこかに行くんだね？」
「……どこに行く？」
「行き先はどこだ？」
「目的はどこだ？」

2～アイテム界屋～
「アイテム界へ行く店だよ、どこに行く？」
「……どのアイテムを強化する？」
「アイテム界屋だ、鍛えたいアイテムはあるか？」
「アイテム界屋だ。どうする？」

3～武器屋・防具屋・よろず屋～
「此処で武器やアイテムを揃えよう！」
「……準備を怠るな」
「冒険行く前に揃えるんだな」
「何を買うんだ？」

4～地獄保嫌所（じごくほけんじょ）～
「地獄保嫌所だって…名前が凄いよね；」
「……体力を回復するか？」
「体力は回復した方が良いぞ」
「体調管理はちゃんとするんだぞ」

5～裏時空の渡し人～
「此処さっきより強いから気を付けて！」
「……油断するな」

「気を付けろ、この先は表より強敵がいる」
「此処を通るなら注意しろよ」

6～技能屋(ぎのうや)～
「どの技を鍛える？」
「……技能屋で何を鍛えるんだ？」
「技を強化するのか？」
「技能屋だな。どんな技を鍛えるんだ？」

7～戦挙事務所管理人(せんきょじむしょかんりにん)～
「戦挙事務所管理人だね…入る？」
「……入るのか？」
「作戦は立てといた方が有利だな」
「何事も作戦は大事だからな」

8～キャラ界屋～
「キャラ界屋だって、どこへ行く？」
「……キャラ界のどこへ行く」
「キャラ界屋か…此処と思った場所を選んでくれ」
「どんなキャラの潜在能力を鍛える？」

9～界賊エディット屋～
「界賊エディット屋でどんな海賊団を作る？」
「……どんな船を作るんだ？」
「どう言う船や海賊団を作るんだ？」
「界賊エディット屋か…どんな海賊を作るんだ？」

10～マップエディット屋～
「マップエディットだよ！自分の好きなマップを作成しよう！」
「……どんなマップを作る？」

「マップエディット屋か…あんまり複雑なのを作るなよ」
「マップエディット屋か…自分で思ったマップを作って見るんだ」

11～記録屋～
「記録屋だね。今までのを記録する？」
「……記録するか？」
「記録はちゃんと取るんだよ」
「記録を取っておかないと後で泣くぞ」

12～教育的指導員（きょういくてきしどういん）～
「教育的指導員か…行く？」
「……どう言う教育をする？」
「教育的指導員だ。好きな様に教育しような」
「此処はバランス良く育てるのもよし、低いのを鍛えるのもありだ」

13～特産品屋～
「いらっしゃい、特産品屋だよ。珍しいのがあるよ」
「……どんな特産品を買う」
「特産品屋だ、何を買って行くんだ？」
「特産品屋へようこそ。気に入る物はあるか？」

14～ミュージシャン～
「音楽は何を聴く？」
「……音楽で疲れた心を癒すか？」
「音楽屋だ。好きな音楽を聴いてくれ」
「どう言う音楽を聴くんだ？」

15～キャラ塗師～
「キャラの色を変えるよ！好きな色に出来るよ」
「……どんな色にする？」

「キャラ塗師だな。どんな色にする？」
「キャラの色を変える所だな。目立たない色が狙われ難いと思うぞ」

16～戦挙事務所～
明「よお～し何をしようかな～」
明「あっ、一緒にゲームする？」
康「……今写真を整理している」
康「……お前も取って欲しいのか？」
フォ「武器は整備しとかないとな」
フォ「のんびりしてくれ」
ス「やれやれ、一息付けるな」
ス「気を付けてくれ、そこにダンボールを置いてあるからな」

17～回す人～
「んじゃあ黒龍さんに」
「……ボッスンへ」
「俺は龍の骨だな」
「フロストへ回してくれ」

…こんな感じです』

真王「そして、『ああああ』さんからの質問。『質問ですビビも転生者でチートキャラなんですよね？そのビビに勝って、シルバーブレイドやユニゾンという奥の手を残している銀さんはどんだけ強いんですか？
シルバーブレイドがあるのにユニゾンは必要なんですか？ぶっちゃけ、出した意味無い気がするんですけど』銀さんの強さは夜王でも勝てるくらいと思えばいいです。あとユニゾンはサポートだ。『ああああ』さん、廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次は私の闇が相手になるよ。じゃあね」

第七十四訓：転生者は隠し技を持っている（後書き）

真王「次のステージへ進んだ銀時達は怪しさ満点の奴らが現れた！」

ダークネプテューヌ「次回『ハジケ過ぎると身が持たない』テイクオフだぜ？」

第七十五訓：ハジケ過ぎると身が持たない（前書き）

真王「今回は伝説のハジケリストが登場する様だ」

銀時「様だっておい…」

～フラワーガーデンギャラクシー～

『お花の世界のハジケリスト』

第七十五訓：ハジケ過ぎると身が持たない

神の木から別れた銀時達は次なるギャラクシーへと向かった。

フラワーガーデンギャラクシー

ＩＢＧＭウインドガーデンギャラクシーｂｙスーパーマリオギャラクシー
（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｇｕｓｔｙ　Ｇａｒｄｅｎ　Ｇａｌａｘｙ）

ヴィヴィオ「わぁ～、前のと違ってここは花がいっぱいだよ～」
レーティア「おまけに風がきもちいいわね」

ヴィヴィオがたくさんの花を見てはしゃぎ、レーティアは髪をなぞって風を感じ取る。

シャル「それにいろんな植物があるよ～、ホラ」

シャルが指差す先になんだがとげとげした草がある。

新八「なんですかそれ？」
シャル「トゲトゲ草、触ると痛いけど食べれるよ？」

新八「食べれねぇだろ！！」

新八が訪ねてシャルが答えると新八は突っ込む。

シャル「そこにあるのはノビノビ草」

ジャンヌ「ちょっ、絡まった！」

ノビノビ草から生える蔦にジャンヌは困惑する。

シャル「そしてこれがフワフワ草」

今度はピンク色の植物、特に害はなさそうだ。

するとシャルが一本取り出して、風に乗って飛んでいった。

プリニー「飛んだッス！？」

シャル「そのフワフワ草持って飛んでみなよ。風に乗って気持ちいいよ」

銀時達はとりあえずフワフワ草に捕まる。

銀時「うおぉぉぉぉぉ！！」

ネプテューヌ「凄いとんでる～」

プリニー「お、落ちるッス…」

みんな風に乗って気持ち良く進んでいる。

桂「のんびりする必要はないぞ。もっと風に乗っていけば早く行く」

ビュオォォォォ～～～～！！！

桂「うおぉぉぉ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」
ビビ「風に乗り過ぎィィィィィィィィい！！！」
ジャンヌ「って言うか何処まで行くのぉぉぉ！！！」

突風が吹いて桂は風に連れ去られて、ビビとジャンヌが突っ込む。
まぁなんやかんやで次の場所に着いた。

そこは巨大なリンゴが浮いていた。

ネプテューヌ「私達リンゴの上にいるよ…」
神楽「キャッホォォウゥウ〜〜〜！！！リンゴが食べられるね！！」

神楽は興奮している。

神「オイオイ一人でこれ食う気か？」
グレイ「また虫歯になんぞ」
神楽「リンゴ食いじゃぁぁぁぁぁ！！！」
神「聞けよっ！！」

呆れる神とグレイをしり目に神楽はリンゴに中にもぐりこんだため
神が突っ込む。

銀時「これ完全にジャイアントピーチならぬジャイアントアップルだな」
ネプテューヌ「銀さんそれ明らかに昔すぎ」

メタ発言なので突っ込むネプテューヌ。

メキメキメキ、ドバーン！！

神楽「ぎぃやぁァァァァァァァァァァ！！！」
芋虫「うがァァァァァァァァァ！！！！」

地面（リンゴ）の中から神楽がお宝を抱えて巨大な芋虫から逃げている。

ジャンヌ「ホワタァ！！」
芋虫「ゴブェッ！！」

ジャンヌがとび蹴りで芋虫を蹴飛ばす。

ジャンヌ「大丈夫？神楽ちゃん」
神楽「助かったネ。おまけにお宝見つけたヨ」
銀時「お宝って…虫食いってんじゃねぇか」

神楽が『オールドバグズキングダム』をドーンと立てて言い、銀時はそれを見て突っ込む。

オボォッ

すると芋虫の口から何か出た。
オレンジ色のとげとげした奴と青いプルプルした奴だった。
すると青のプルプルした奴がこっち向いて、

？？？「見せもんじゃねぇぞコルァぁ！！」

と叫んだ。
ネプテューヌ達はとりあえずそいつをストンピングした。

？？？「待てやァァァァァ！！いつまで踏み続けるんじゃボケぇ！！」

プルプル男（仮名）が起き上がる。

ネプテューヌ「って言うかあんた誰？」

ネプテューヌが聞くと答える。

天の助「俺の名前はところ天の助だ！ちなみに倒れているこいつはドンパッチだ」

ドンパッチ「おい！こいつって言うな！」

天の助がドンパッチを指差して言い、ドンパッチは突っ込む。

ネプテューヌ（どこかの屋敷で会ったような？）

両手を組んで考え込むネプテューヌ。

実際ドンパッチが女装して登場したことがありました。

ドンパッチ「あれ？ボーボボどこいった？」

天の助「シラネぇよ」

ドンパッチが周りを見て言うと、天の助がきっぱり返す。

レーティア「ねぇ、あそこから何か飛んでくるんだけど・・・」

レーティアが空から来る何かを指差して言う。

？？？「よっとこだいべんほうっ！！」

ドンパッチ「ギエェェェェェェェェ！！！！」

全員「えええええええええええええええええええええ！！

！！！？？」

着地と同時にドンパッチをスノボの様に滑り込んだ。
全員は思わず驚く。

ネプテューヌ「・・・今のって」
ベール「もしかして…」
？？？「今日も大量だったぜ～」

金色アフロのグラサン男がきもち悪いアンコウを持ってやってきた。

全員「アンコウデケェェェェェェ！！！！！！！！」

全員は思わずシャウトする。

？？？「よし運じゃあ次の…ん？」

男がどこか行こうとすると、ネプテューヌとベールの目が合う。

？？？「お、お前らは…」
ネプテューヌ「やっぱりだ！お～い！」
ベール「ボーボボさ～ん！」
ボーボボ「紫花～～！、緑子～！！」
全員「いや誰だよっ！！！」

ネプテューヌとベールがその男の名を言って走ってきて、ボーボボも（完全に間違っている）名前を呼んで向かってくる。
そして３人は感動の再会…

ネプテューヌ・ベール・ボーボボ「このド腐れ野郎がぁッ！！！」

ズドゴォッ！！

ネプテューヌ・ベール・ボーボボ「ゴハァッ！！」

全員「エエエエ

ボーボボ「ハイそんなわけで俺は伝説のハジケリスト・ボボボーボ・ボーボボだ」

ボーボボは銀時達に自己紹介した。

ボーボボ「ボボボーボ・ボーボボ」

二度言った。

ボーボボ「ボボボーボ・ボーボボ」

三回言った。

ボーボボ「ボボボーボ・ボーボボ」

四度目…

新八「もうええわぁァァァァァァァァァァ！！！！！何度も同じ名前で言うなよ！！」

新八が痺れを切らして怒鳴る。

ボーボボ「ま、気軽にボーボボ参加ミスターボーボボと呼んでいいぜ」

ジャンヌ「それじゃあボーｂ「気易く呼ぶなぁ！！！」ぇぇ～～～・・・」

ジャンヌが言おうとしたらボーボボに遮られて唖然とする。

ベール「まぁ紛らわしいと思うので気軽にボーちゃんと呼んでもい

いですよ♪」
新八「なんでボーちゃん!?思いっきりキャラが違うじゃないですか!!」
ボーボボ「俺は嵐の幼稚園児の鼻たれ小僧か!!」

ベールがいい笑顔でいって新八とボーボボが怒鳴る。
ただボーボボは某嵐を呼ぶ幼稚園児の鼻たれ小僧の服（一応ボーボボサイズ）を着ている。

新八・アイエフ「はなったれはテメェだァァァァァァァァァァァ!!!!」

新八とアイエフはこれぞと言わんばかりに怒鳴り散らした。
グレイはこいつウゼェと冷めた目で見ていた。

ネプテューヌ「それにしても何でボーボボさんがここに?またハジケ修行でもしたの?」
ボーボボ「フンッ、俺はハジケを怠りはせん」

ネプテューヌの質問にボーボボは応える。
なぜか屋台があってボーボボは屋台の店主の服を着ていた。

新八「いつの間に屋台が出来たんじゃァァァァァァ!!!!!」

新八はありえないことに突っ込む。

銀時「えっと、あいつ誰?」
ベール「彼の名前はボーボボ、昔一度知り合って仲良くやりましたわ」
ノワール「あいつのハジケっぷりはどれだけ苦労したか…」

ブラン「見たら疲れる…」

ノワールとブランは疲れた目をしている。

ヴィヴィオ「ねぇ、ハジケって何？」

ノワール「用は頭がぶっ飛んでるってことよ。ヴィヴィオは将来あんな男と結婚しちゃだめよ～」

銀時「ホントだな（てか声が高杉に似てやがるな…）」

ヴィヴィオがハジケについて聞くとノワールが説明と忠告し、銀時はそう思った。

ボーボボ「そうだ、お土産にこれやろう、その場に落ちてたやつだけどな」

ボーボボは懐から『祭灯』と『宴旗』を出した。

あえてどうやって出したから黙秘する。

ネプテューヌ「ありがとう！、でどっか行くの？」

ボーボボ「そろそろあいつらも心配するだろうし、一応帰るつもりだ」

屋台ののれんが「へいてん」と書かれている方へ向けた。

ボーボボ「んじゃなぁ～、元気でやれよ～」

ネプテューヌ「じゃあね～」

サンタスーツを着てボーボボがそり（屋台）に乗って鹿（ドンパッチと天の助）を操ってどこかへ飛んでいく。

後全員揃って「思いっきり季節外れじゃァァァァァァァァァ！！！！」と心の中でピッタリシャウトしたとか。

『オールドバグズキングダム』を手に入れた。
『祭灯』を手に入れた。
『宴旗』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ダークネプテューヌ「いよう、あたしだぜ？」

銀八「あれ？お前リストに載ってたっけ？」

ダークネプテューヌ「そんなもん気にすんな。質問来るぞ」

銀八「そうだな。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『よぉ…月光閃火だ。

しかし…何かボスクラスなキャラが最後辺りに出たな…。っつっても、多分『ディスガイア』の『バイアス』みたく『中ボス』扱いされそうだな…（汗）。

輝刃「だな…。話の全体的な長さを考えると、そうなるかもしれんな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．闇ネプ（何となく略称命名）に質問…やはりネプテューヌの闇な訳だから、ネプテューヌと同じく大食漢なのか？

あ～…確かに、ネプテューヌって話の中でかなり食べるシーンが何回かあったからな…。次は俺からだ。

2．ジャンヌに質問…今回の話で死人達に服を破かれて色っぽいシーンになった訳だが…替えの服作っておいてやろうか？

輝刃「そういえば…お前はこの世界（小説になろう）では『万達者（オール・マスター）』って設定だったな…。」

…設定って…（汗）。そんな真っ直線に言わなくても…（汗）。』

ズバリお答えしましょう」

ダークネプテューヌ「まぁな。軽くラーメン１０人前はいけるぞ」

ジャンヌ「大丈夫。スペアがいくらでもあるから」

真王「現在２万の服が出来ているようだ」

銀八「多過ぎ！！どんだけ作ってたんだよ！！『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい！」

ダークネプテューヌ「次はペンネーム『鳴神　ソラ』だぜ？『ゼロUF「出やがったな偽神！！」

ルイージ「イタイイタイ！衝撃で飛んで来る石が痛い！！」

スネーク「ホントこの時のマリオの周りは危険だな！」

ぶほっ！（大きな石に当たる）

フォックス「作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ネス「いや～ホント凄いね～レーティアさん達」

リュカ「あのメンバーには効かないと思うけど；」

クッパ「まったくなのだ…ああ言われてもあ奴らは攻撃するだろうな…」

ルイージ「まあ転生者の皆に質問『兄さんの偽神嫌いはどう思う？』」

スネーク「ヴィヴィオに質問『最近こっちの冥王に鍛えられてるけど…冥王についてどう思う？』」

フォックス「銀魂メンバーに質問『冥王についてどう思う？』」

じっ、次回を待ってます…（ガクッ）

スネーク「作者！しっかりしろ作者、作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ゼロUF「銀時にネプテューヌ！頑張れよ！！」『あっちの作者とばっちりじゃねぇか。クックックッ・・・」

銀八「えっと、まぁ順番に答えましょうか」

レーティア「私達はどんな人物か見た事ないけどきっと許せない行為をした人だろうね」

ジャンヌ「そんな人神の風上にも置けないって言うしね」

シャル「でもどっちかっていうとマリオは怒り沈めて」

ギルシア「女の子に手ぇ出したらぶったおす！！」

ヴィヴィオ「修業させてくれる優しいおねぇちゃんだよ？」

銀魂組「怖いと思う」

ダークネプテューヌ「人それぞれだな。『鳴神　ソラ』マリオを抑えとけ。次はペンネーム『黒神』からだぜ？『質問します。

ノワール・プラン・ベール・アイエフ・コンパへ

ネプティーヌ率いる『チーム・マイティアテム』がトップから一気

に最下位に転落しました。
それを見て、不味いと思いますか？
では。』あいつらはまずいと思ってたぜ？『黒神』廊下に立ってな？」

真王「さて、またまたバトンを開始しよう」

『またまたオリジナルバトン公開します！

このバトンはトラップと遭遇したときにどんなセリフを出すかというバトンです。
キャラは上から順にレーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア

1：トゲ
「いたっ」
「きゃっ！」
「痛ッ、刺さった」
「イッテェ！」
2：毒ガス
「クッ、毒ガス！」
「ケホケホ・・・」
「視界が緑色になってる」
「チッ！舐めた真似を！」
3：火炎放射
「あっつ！」
「キャアッ！熱い！」
「皮膚がやけちゃうよ～」
「これくらいで！」
4：グルグル

「目が回る～」
「ほにゃ～」
「グルグル～・・・」
「チッ！小癪な！」
5：トラバサミ
「ッア！足が！」
「イッタァッ！」
「足引っ掛かった」
「うっぜぇ！壊れろ！」
6：落石
「ッ！！避けて！」
「うわぁっ！！」
「じゃま！」↑壊した
「オラァッ！！」↑壊した
7：矢
「クッ」
「うっ！」
「ん？刺さった？」
「チッ」
8：ハンマー
「ブフォォッ！！」
「ガアッ！！」
「ブォッ！」
「グォォッ！！」
9：プレス
「きゃ――――――！」
「ニャ――――――！」
「――――――」
「グォ！」
10：間欠泉

「うわぁぁを！」
「うわぁぁ！」
「温泉かな？」
「おおっと！」
11：間欠炎
「あっつっ！」
「ギャアチアチアチィィ！！」
「あつつ・・・」
「チッ！」
12：電撃
「うわっ！？」
「ふあっ！？」
「しびれる～！」
「チッ！」
13：バンパー
「ひゃあっ！」
「うわぁっ！」
「わぁっ！」
「うをっ！」
14：バナナの皮
「ひゃわっ！！」
「わわわ、いたっ！」
「うわをっ」
「うをっ！ごはっ！」
15：爆弾
「がぁぁっ！！」
「ぬあっ！！」
「がっ！」
「ぬあああっ！！」
16：トランポリン

「うわっ！？」
「ふあっ！？」
「わぁ～♪」
「無視だ無視」
17：パンチマシーン（ストレート）
「ぐぅっ！」
「ひでぶっ！」
「ぶっ！」
「ぐあっ！」
18：パンチマシーン（アッパー）
「うごっ！」
「がほぅっ！」
「あぐっ！」
「ごはっ！」
19：パンチマシーン（げんこつ）
「にゃっ！」
「あぅっ！」
「いたっ」
「ぐぉっ！」
20：沼
「う、く、この！」
「うまく進めない…」
「足がつっかえた」
「メンドクセぇ！」
21：雷
「うわっと！」
「ひゃあっ！」
「おっとっと！」
「うおっ！」
22：まきびし

「あいたたたっ！」
「いたたたたた！」
「ん？足になんか刺さった」
「ちっ！」
２３：ゴロゴロ岩
「くっ！この！」
「くぅっ！」
「こわす！」
「おらぁっ！」
２４：火の玉
「あっつ！！」
「お尻に火が付いたぁぁぁぁぁ！！！」
「なんか熱い…」
「ちっ！」
２５：間欠冷気
「うっ！さむい」
「・・・」↑凍った
「か、体が寒くなってきた」
「さ、さみぃぃぃ！！」
２６：蜘蛛の巣
「しつこいなぁ～」
「体いっぱいついた…」
「・・・」↑気にせず進む
「うっとおしいな…」
２７：ネバネバ
「やだ～、気持ち悪～い」
「うわ～、ネバネバ～」
「粘ってる…」
「あ～、もうウゼェ！」
２８：毒液

「ッ！！／／／／服が／／／／／」
「いやぁぁん！！／／／／／／」
「ぺっぺ！口に入った！」
「ブッ！」↑鼻血
２９：突風
「うっ！風？」
「いやぁん！」↑スカートを抑える
「風気持ちいい～」
「ありがとうございました！」↑ジャンヌのスカートの中を見た
３０：竜巻
「うわぁぁ！」
「ほわぁぁ！」
「お～」
「なんだこれは？」
３１：砂なだれ
「クゥッ」
「な～が～さ～れ～る～！！」
「あ～れ～！」
「がっ！ペッペ！口に入った！！」
３２：虫
「キャアッ！虫が！！」
「虫が体の中にィィィィ！！」
「…食べよ」↑食うな！
「ウッゼェ！！」
３３：大虫
「んんん～～～～～！！！」↑頭から食われた
「いやぁぁ！！」
「・・・ジュルリ」↑まて！
「ウッゼェ！」
３４：触手

「やぁ…／／／／そこに入れちゃ、だめぇ！／／／／」
「あぁん／／／／、縛り気持ちいい～／／／／／」
「あ～ぅ～／／／／／」
「ハァハァハァ・・・」↑遠くでカメラを回している
３５：イカスミ
「ま、前が…」
「見えないよ～」
「う～ん、どっちだっけ？」
「うおぉぉぉ！！世界が真っ暗だぁぁ！！」
３６：水攻め
「やだ濡れちゃったわ」↑透けている
「びしょびしょだよ～」↑こちらも
「え？なに？」
「いい絵だぜ…」↑鼻血を出している
３７：マグマ
「ギャアッチャアアアアアアア！！！！」
「ウワッチャアアアアアアア！！！！」
「アチャチャチャチャ！！」
「あちぃぃぃぃぃぃ！！！！」
３８：隕石
「っ！よけて！」
「うひゃぁ！！」
「撃ちおとそうかな？」
「うおおおおおおおお！！！！」↑逃げている
３９：タライ
「いたっ」
「あいたっ」
「ん？」
「ぐおっ！」
４０：バケツ

「って！」
「あぅっ！」
「いたっ」
「いっ」
４１：ナベ
「うごっ！」
「いだぁっ！」
「く、首が…」
「ぐぅぅ・・・」
４２：フォーク（人間サイズ）
「うっ！」
「油断した…」
「傷が出来た」
「ちっ！」
４３：ギロチン
「危ない危ない…」
「／／／／／／／／／／」↑服が破かれた
「あ、手が墜ちた」
「ダッシュで進め！」
４４：レーザー
「し、慎重に…」
「そ～っと・・・」
「めんどくさいなも～」
「全く、一張羅がボロボロだぜ」
４５：落とし穴
「きゃあああああああああ！！！」
「落ちるゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」
「お～～～～？？」
「うおっと！！」↑端に捕まる
４６：スタート連れ戻し

「え？入口？」
「あ～ん！まだ通ってない所があるのに～」
「あれ？入口？」
「外か？」
４７：レベルダウン
「な、何か力が抜ける…」
「うぇぇ！？レベルが下がってる！！」
「あれ？なんか変わってる？」
「ん？力が衰えてきているような…」
４８：アイテム損失
「あ、アイテムが無い！」
「あ～～～！！」
「あれ？無くなってる」
「俺の美少女コミックスが～～！！」
４９：隠れモンスター
「なんなのよこいつ！？」
「いきなり強敵出現？」
「食うか食われるか…」
「チッ！厄介な奴だぜ」
５０：回す人
「鳴神ソラと黒神と黒龍ね」
「私リィーンさん」
「ケンとヒョウガだね」
「俺は月光閃火と天城と風花だな」』

真王「それでは次はイーバがアシストさせます。では」

～今日のお宝鑑定～

～オールドバグズキンギダム～

価値：５０円

見た目：虫食いのリンゴ

イーバメモ：これはどうやら虫達の住処みたいだけどすでに使い古された後だね。価値は低いにしてもお宝として持って行ってもらうよ。

ドルフィンメモ：ムシタチノクニガモウハイキョニナッタモノ！ワタクシナンテイナクナッテセイセイシマスガネ！トットトコンナモンステテコイ！

～祭灯～

価値：６００円

見た目：提灯（ちょうちん）

イーバメモ：お祭りの際によく見かける奴だね。なんでも昔は明かり代わりに使ってたってことだけど。

ドルフィンメモ：お祭り騒ぎにこれが一番！みんなで踊ればおどりゃんせ！あ、どっこいしょ～、どっこいしょ～！

～宴旗～

価値：６００円

見た目：祭の旗（宴と書かれている）

イーバメモ：この旗はみんなで宴を開いているときにいるものだね。だからって調子に乗って人に当てないようにしてほしいもんだね。

ドルフィンメモ：旗にはいろんな意味があるその一品！騒げば騒ぐほど振り回したくなる！（人にあたっても責任は取りません）

第七十五訓：ハジケ過ぎると身が持たない（後書き）

真王「なぜハジケリストがここにいるかはあえて聞かないでほしい。んで次回はみんな楽しい遊園地の世界！しかしそこである依頼主が銀時達と何かしようとしているが…」

ボーボボ「次回『人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ』テイクオフだ」

第七十六訓：人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ（前書き）

真王「今回は遊園地のステージ。そこである男が依頼を…」

銀時「ある男って誰だ？」

真王「見てればわかる」

～アミューズメントギャラクシー～

『娘と男を追いかけて』

第七十六訓：人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ

星船のある部屋で男達が話し合いをしていた。

？？？「偶然とはいえ、俺の話を聞いてくれるか？奴が動き出した」

その中の一人である白髪に若本ボイスのグラサンのおじさん・勝平である。

銀時「…おい、それって本当か？」

勝平「本当だとも、俺も目を疑ったが確かだ。だから手段をとわねぇ、奴も奴の企みも全て…潰す」

いつにもなく真剣な2人。

銀時「…そうか…お前がそう言うならば…俺のこの命をお前に預けよう」

勝平「…けっ、せいぜい頼りにしてるぞ」

勝平は立ち上がってその場を去った。

銀時「・・・なぁ新八」

新八「なんですか？」

銀時「・・・奴って誰だ？」

新八「知らんのかぃぃ！！！」

ただ頷いただけかよ…。

ＩＢＧＭウーロン街ｂｙペーパーマリオＲＰＧ
（Ｐａｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ‥　Ｔｈｅ　Ｔｈｏｕｓａｎｄ　Ｙｅａｒ　Ｄｏｏｒ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｇｌｉｔｚｖｉｌｌｅ）

アミューズメントギャラクシー・パークの入り口

入口付近で腕時計を見ながら待っている少女がいる。
その名は栗子、勝平の娘である。

？？？「ごめんごめん、待たせちゃったか？」

やってきたのは焦げ肌のグラサン男だ。
服装は少しラフである。

栗子「いえ、私も今来たばかりでございまする」
男「え？そうなんだ。それじゃあ行こうか」
栗子「はいでございまする」

栗子と男がパークの中に入る頃、近くの茂みで、

勝平「・・・あのクソガキめェェ…栗子はもう1時間も待ってたんだぞ？それが分からん奴には出す資格はねぇ。テメェの残りの人生を償ってもらう。おいメガネ、こっち来て土台になれ」
新八・アイエフ「待てやこらァァァァァァァァァ！！！！

！！」

ライフル構えながら言う勝平に新八とアイエフが突っ込む。

アイエフ「奴って何かと思ったら娘さんの彼氏じゃない！！」

勝平「うるせぇよ！あんな奴彼氏だなんて認めねぇよ！！っていうかデートなど認めません！おじさんは認めませぇぇん！！！！」

アイエフの言い分に勝平は頑固否定する。

アイエフ「あたし的にあんたが世界の責任者なのが認めないわよ！！」

ギルシア「テメェがあんなかわいい子のお父さんだなんて認めねぇよ！！」

レーティア「貴様のようなブ男がお父さんだなんて認めないわよ！！」

ネプテューヌ「ここのポップコーンが５００円だなんて認めないよ！！！」

新八「オメェらは黙ってろ！！」

アイエフが言うと便乗してギルシア、レーティア、ネプテューヌがいって新八が怒鳴る。

銀時「ってどんな依頼かと思えば娘のデートを邪魔するだぁ？」

グレイ「付き合ってられん」

銀時は呆れた感じでいい、グレイも呆れて帰ろうとする。

勝平「おい待てぇ、俺がいつそんなこと頼んだぁ？」

勝平が引き留める。

松平「俺はただ、あのチャラ男を抹殺したいだけだよ」
銀時・新八・アイエフ「もっと出来るか！」

更に物騒なので突っ込む３人。

勝平「娘が好きになった奴は幸せにしたいが、悩んで悩んで、そして抹殺と導きだしたんだぁ」
アイエフ「いろいろ考えすぎよ！！」

アイエフは怒鳴る。

新八「ビビさん、こう言う親ばかの人に何か言ってあげてください」

新八は隣でごそごそしているビビに言う。

ビビ「誰がビビって？あたしは殺し屋リリー１３（サーティーン）と呼びなさい」

なぜかグラサンかけてライフルを構えるビビ。

アイエフ「ちょっと、殺し屋って何？１３って何？」
ビビ「不吉の象徴、あんなチャラ男野郎に女の子が好きにさせてたまるかァァァァァァァ！！！！！」

アイエフが聞くとビビは答えて直行した。

勝平「ちょっとぉ！俺を置いてかないでくれませんかぁ！？」

勝平も追いかけた。

銀時「やべぇな、ありゃ絶対に殺りかねないぞ」
新八「ネプテューヌさん、あの人たちを止めなきゃ…」

銀時が呟いて、新八が止めるようネプテューヌ達に言うと、

ネプテューヌ「誰がネプテューヌ？私は殺し屋パープル１３だよ？」
ノワール「そして私はブラック１３」
ブラン「・・・ホワイト１３」
ベール「そして私はグリーン１３ですわ」

なぜかグラサンとライフルを装備した４女神。
そして入口へ走っていった。

ネプテューヌ「面白そうだから行ってくる～」
銀時「お～い！！ってだめだ。もう行っちまいやがった」
神「面白そうだな。なら俺は殺し屋ゴッド１３いくぜ！」
新八「お前もかイィィィィィィィ！！！！」

神まで向かって行って新八が突っ込む。

レーティア「まぁあなた達は彼女達を追って、私達はここで満喫するから」
新八「あ、はい」

とりあえずレーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、ヴィヴィオ、プリニー、コンパ、アイエフ、桂、エリザベスは遊園地を満喫し、
それ以外は勝平達を追いかけた。

メリーゴーランド開演中、栗子と男が楽しそうにしている。
その後ろでライフルを構える１３ズ。

勝平「野郎やりやがるな、まさかこれを選ぶとはな…」
ベール「狙いが定まりませんわ…」
神「それよりいつになったら縮まるわけなんだ？」
グレイ「縮まるか、これメリーゴーランドだぞ？永遠に回り続けろ」

グレイはジト眼でそう言う。

神楽「メリーとバント？何アルかソレ？遊園地行った事ないからわかんないアル」
新八「やっぱ殺人沙汰は行き過ぎにも限度がありますよ！あの二人の仲引き裂くにしても他に方法があるでしょう」

神楽はいいとして、新八は助言をすると、

勝平「イヤ、あの男が娘といるだけで抹殺予定なんだよ」
新八「きっぱり言いやがったよこの人ぉ！！」

勝平の親ばか行為は限度を超えていた。

レーティアサイド

レーティア「う～ん、このカルボナーラおいしいわ」
ギルシア「だろうな。ってかあいつ凄い量を食べてんな」

カルボナーラを食べて感想を言うレーティア。
ギルシアが隣の席でドドンと立っている巨大ケーキをバクバク食っているシャルを見て言う。
看板には『巨大ケーキ、5分以内に食べ切れたら無料！』と書かれている。

レーティア「底なしの胃袋ね。改造されたときにかしら？はい、あ～ん」
ギルシア「イヤ多分元からだと思うぜ。あ～ん」

レーティアがカルボナーラをさし出してギルシアが食べる。

レーティア「おいしい？」
ギルシア「ああ、うめぇぜ。まぁレーティアが作った方がおいしいと思うがな」
レーティア「ウフフ、ありがと／／／／／」

レーティアは顔を赤くしてお礼を言う。
2人に周りに桃色空間が出来て、その周りにカップル達の嫉妬と殺意の膜が出来ている。

アイエフ・コンパ・プリニー・桂・エリザベス
（端っこでよかった（です）…（ッス））

端っこのテーブルで座っている5人（っていうか3人と2匹）は冷

や汗を流し、ヴィヴィオに至っては震えており、シャルは殺意の中にいるが平然とケーキを完食した。

変わって銀時サイド

栗子と男はジェットコースターを見ている。

栗子「私あれに乗りたいでございまする」

男「オイオイマジかよ。俺ああいうの苦手なんだよなぁ」

頭を掻く男。

男「ワリぃ、ちょっと一人で乗っててくれねぇか？」

栗子「イヤでございまするよ。一緒に乗るでございまする」

するとジェットコースターが通り過ぎて栗子が眺める。

すると男の後ろに、

ビビ「ガタガタうるさいわよクソ野郎」

ナイフを突き付けるビビがいた。

ビビ「騒いだら穴がもう一つ増えるわよ？」

男「ヒィッ！」

男は脅迫されて固まる。

栗子「？どうしましたでございまするか？」
男「あ、いや、その、やっぱ一緒に乗るか」
栗子が振り返って聞くと男は汗を流しながら言い、栗子は嬉しそうな顔をする。
そしてジェットコースターにて、
男と栗子は前から二番目の席、ビビはその後ろの席、銀時達は一番後ろの席だ。
ビビ「・・・・・・・・・・せ」
男「え？」
ビビ「ジェットコースターが戻る前にクソでも汚い液体でもいいからだしなさい。さもないと地獄よりひどいことが起きるから」
ナイフを首筋に突き付けて脅すビビ。
栗子「？あの、怖いのなら降りるでございまするか？」
様子がおかしいと感じた栗子は男に聞く。
ちなみに「降りたら殺す」とビビに釘打たれている。
男「いやいやいや、大丈夫だって！どんとこいじゃ！」
栗子「・・・あの（ガクンッ！）」
何か言おうとしたら突然ジェットコースターが動き出した。
ネプテューヌ「わぁ～～～～～！！！♪」

ノワール「ちょ、これきついわね！！」
銀時「うおおおおおおおおおおおおお！！！」
高速で動くジェットコースターに騒ぐ銀時達。
神「どうだ様子…「あああああああああ！！！」ウゴォッ！！」
前から何かにぶつかった。
グレイ「・・・何してんだお前…」
ビビ「ベルト閉めるの忘れてた！！ベルト閉めるの忘れてたぁぁ！！！」
何とベルトを締め忘れたビビが飛んで着て神にぶつかって今は銀時と新八の席を掴んでいる。
そして急降下や回転がでる。
ビビ「あわわわわ！！！こんな状態でジェットコースター乗るなんて初めてだよォォォォォ！！！！＼（◎Д◎；）／」
銀時「だからって俺の髪を掴…ギィヤアあああああああああああああ！！！！」
もはや暴走状態のビビは苦し紛れに銀時の頭を掴む。
そしてジェットコースターは終わった。
栗子「は～、怖かったでございまする～♪」
そう言っている栗子だがたのしそうだ。
男「・・・・・・・・・・・・・・・」

栗子「あれ?どうしたでございまするか?座高が高くなってるでございまするが…」

座高が高くなっている男を見て心配する栗子。

男「…すまん、引くこと間違いなしかと思うが、俺漏らしちまった」
栗子「!!!!?」

男の衝撃告白に栗子は驚いた。
その様子を見る銀時達。
あとビビは少々ぐったり状態だ。

銀時「すまんな、これも親ばかの娘さんのためだ「よかった~」え?」

銀時がそう思っていると栗子の声がする。

栗子「実は私もでございまする。私だけ漏らしたらと思ったらどうしようかと思ってたでございまする」
全員「え〝え〝え〝え〝え〝え〝!?」

栗子は顔を赤くして衝撃の告白をした。
これの思わず銀時達は驚愕した。

男「うえぇぇ!!?マジかよ!!ある意味奇跡じゃん!!」

男の方もおどろいた。
これでさっきより近づいたようだ。

勝平「おいどういうことだこの野郎!!ますます仲良くなってんじ

ゃねぇかぁ！！」
銀時「オメェの娘もどうなってんだ！！普通漏らすか！一体どんな教育をしてきたんだ！！」

怒鳴り合う二人。

ベール「まずいですわ！彼らはどこかへ移動してますわ！」
新八「えええ！？あのままで！？」

ベールの言う通りお尻を押さえながらどこかへ移動しようとする栗子と男。

ネプテューヌ「いけない！ブラン！早く行く・・・ってあれ？」

ネプテューヌはブランに向くと、ブランは顔が真っ赤で涙を流して両手で股間をもじもじさせている。

ブラン「・・・おめぇら、誰か言ったらぶっ殺すからな」
全員「え〝え〝え〝え〝え〝え〝！？」
ネプテューヌ「やっちゃったんだね・・・（泣）」

休憩所

勝平「なんてこった、まさかあれでひかねぇなんて我が娘ながら恐ろしい」
ビビ「ええ、ある意味恐ろしいけど、きっとあの子嘘をついてるわ。

あれみて」

ベンチで座っている勝平がうなだれていて、ビビはある方向をさす。
そこには着替えた男となぜかそのままの栗子だった。

ビビ「あのクソ男は着替えたのに栗子ちゃんはそのままよ」
神楽「決にくそ挟めたアルか？」
ビビ「んなわけないでしょ、そしてイメージをぶち壊すな」

神楽が下品なこと言ってビビが突っ込む。

ビビ「きっとあの子はあのクソ男を傷つけないために嘘ついたのよ」
勝平「ナニィ・・・」
ブラン「それでどうするの？むこう言ってるけど…」

説明するビビに着替えたブランがある物を見て言う。
それは栗子と男が観覧車へ向かうところだ。

ベール「！？まずいですわ！この先のパターンはいろいろ口説いたあとキスする気ですわ！！」
ビビ「なんだと！？だった強制中止じゃァァァァァァァ！！！」

ビビがダッシュで向かい、勝平、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、神も追いかける。

新八「ああ、どうするんですかこの後」
銀時「知るかよ」
グレイ「・・・・・・・・・」

新八が聞くと銀時はそう返す。

グレイ「・・・ったく仕方ないな…」

とグレイはどこかへ行った。

新八「あれ?グレイさん何処に?」

新八と銀時と神楽が周りを見る。

するとジャンヌ達が現れる。

ジャンヌ「ねぇ、お姉ちゃん見なかった?」

銀時「見てねぇよ。こっちはグレイがどっか行っちまった」

ジャンヌ達はレーティアを探しているようだ。

2人は何処へ?

観覧車・ゴンドラ内

栗子と男が見つめ合って話している。

男「しかし、凄いな。普通引くぞ?一緒に遊んでる相手が脱糞したら」

栗子「ふふふ、私はそれぐらいでは引きませんでございまする」

男「く、栗子…」

栗子「それに…私はあなたのことが…」

桃色空間が結成されるその時だった。

バラララララララ！

ヘリの音が聞こえた。

男「な、なんじゃありゃぁぁぁぁ！！！」

ビビ「殺し屋、マジシャン１３・・・」

１３組「お命頂戴する！」

男が驚き、ビビを筆頭に１３組がライフルを構える。

絶体絶命のその時、

ドドドーーン！

１３組「うおわぁ！」

ヘリに３発の何かが当たった。

当てた犯人はグラサンにスーパーグレネードを構える女性だ。

ネプテューヌ「ってあれグレイさん！？」

グレイ「グレイ？違うな。私の名はイマジン１３。人の恋を邪魔する奴は、消え去れ！」

グレイはスーパーグレネードを構え、ヘリに向かって発射。

ドゴォォォォォォン！！

１３ズ「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！！！」

巻き込まれた13ズはヘリごと落ちて墜落した。

男「な、なんなんだあの女は…」

栗子「・・・・・・・（ぽ～）」

唖然と見る男と顔を赤くして見る栗子。

グレイ「…もうここにようはないわ。幸せにしなさい」

グレイはそう言って立ち去ろうとすると、

栗子「あの！こんな脱糞野郎と別れるでございまするから付き合ってくれないでございまするかぁ！！？」

グレイ「・・・はぁ？あっ」

いきなり栗子が告白する。

それにグレイはあっけをとられて足を滑らせた。

が、途中でレーティアが飛んできた。

レーティア「あとをついてきてみれば、何やってるのかしら？」

グレイ「…気に入らん奴を排除しただけだ。しかしその羽は…」

レーティア「まだ話さないわ」

人一人覆えるような大きな羽で飛んでいるのでグレイが聞くが、レーティアの言葉にそうかと返す。

レーティア「それにしてもあのカップル助けるなんてどういう吹き回し？」

グレイ「さっきも言った様に邪魔もの排除だ」

レーティアが聞くとグレイはそう返す。

レーティア「素直じゃないわね。ツンデ「言わせないぞ？」はいはい」

そんなこんなで銀時達はアミューズメントギャラクシーを後にした。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

イーバ「宇宙の旅人、イーバだよ」

銀八「はい、んじゃ始めるぞ。ペンネーム『月光閃火』さんからだ。『ども…月光閃火だ。

しかし…まさかのボーボボ勢の一部がゴロッと登場か…。あしらう

のも一苦労だな…（汗）。

輝刃「ああ…さすがの俺も、彼らをあしらうのは至難の所業だぜ…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．イーバに質問…銀時達と初めて会った時の感想を頼む。

ハハハ…シンプルにいったね…。次は俺からだ。

2．高杉に質問…正直言って、ボーボボの事どう思う？あとまた子ちゃんにも質問…高杉とおんなじ声の持ち主であるボーボボをどう思う？

輝刃「…また子“ちゃん”って…。そんな『少女』な歳ではないだろう…。ところで、またバトンが来たぞ？」

ああ…またやるぜ。もちろん、載せはオッケーの運びでな。『」

イーバ「天然で馬鹿だね」

銀八「お～い、それって天然パーマで頭馬鹿って言ってんのか？まいっか、次」

高杉「こいつが俺と同じ声だと…？」

また子「ちょぉぉ！！晋介様と同じ声は許せないッス！！つーかちゃんづけ止めて！恥ずかしいから！」

銀八「ハイこんな反応でした。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

イーバ「次はペンネーム『鳴神　ソラ』からだね。『マリオ「ボーボボと天の助、首領パッチが出たな…」

ルイージ「ホント凄いね；」

スネーク「次はどんなギャラクシーなのやら…」

フォックス「桂の奴、ボケキャラだなホント…」

明久「質問『先生の殺気はどうでした？』」

ネス「ネプテューヌさん達に質問『冥王についてどう思う？』」

ルイージ「同じく質問『どうやってボーボボ達と知り合ったの？具体的に教えてね；』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

真王「皆さんたじろいでましたよ～。マリオは敵に回したくないの意味で」

ネプテューヌ「なのはさんそっくりでも強いね」

ノワール「アレが違うけどね」

ブラン「・・・・・・・・・（一部分を見て殺気を放っている）」

ベール「ほぼ私と同じくらいでしょうか？（一部分を見て）」

真王「ボーボボと出会った理由ですか?なんでも季節外れにサンタクロース（ボーボボ）がやってきて彼女達みんな驚いてボーボボ達がハジケまくってネプテューヌ達がストンピングしてその後なんやかんやでボーボボとネプテューヌとベールが仲良くなった敵な感じです」

イーバ「それ適当に答えた気がするよ…。『鳴神　ソラ』廊下に立ってなさいよ」

真王「それじゃあ『月光閃火』さんのバトンを公開しよう」

『1．トゲ
「あ…チクッときた…！」
2．毒ガス
「うっ…これはちとキツいな…（汗）。」
3．火炎放射
「アヅヅヅ…！！」
4．グルグル
「はぅ～…目が回るぅ～…。」
5．トラバサミ
「イテッ…咬みやがったよ…。」
6．落石
「へぶっ…！？」↑頭に落石が当たった
7．矢
「うぉっ…危ねぇなぁ…。」
8．ハンマー
「うへぇ…。」↑何とか振り下ろしの隙を突いて回避
9．プレス
「ヌグググ…！！」↑ペチャンコになりたくない一心で何とか持ち上げて擦り移動（汗）

10．間欠泉
「おぉ…！？」↑間欠泉に乗ってちょっと驚き
11．間欠炎
「……（汗）。」↑服黒焦げの身体煤まみれ
12．電撃
「アバババババ…！？」↑あまりの刺激に髪型スー〇ーサ〇ヤ人化（汗）
13．バンパー
「のわっ…！」
14．バナナの皮
「あ～らよっと♪」↑バナナの皮に乗って軽快に滑っている（汗）
15．爆弾
「グフッ…！」
16．トランポリン
「あぼ～ん…。」↑跳ねに身を任せ飛んでいく（汗）
17．パンチマシーン
「ブフッ…！」↑ストレート
「ガフッ…！」↑アッパー
「グベッ…！」↑げんこつ
18．沼
「チッ…上手く進めないな…。」
19．雷
「あっぶねぇ…（汗）。」
20．まきびし
「アタタタ…痛ぇな…。」
21．ゴロゴロ岩
「何か気分はイン〇ィージ〇ーンズ～！？」
22．火の玉
「とりあえず打つ！」↑何処からともなくバットを出して火の玉ノック（汗）

23．間欠冷気
「はふぅ…今の時期涼しい～♪」↑何故か満喫（汗）
24．蜘蛛の糸
「ホッ…ヨッ…ハッ…！」↑ネバつかない部分を選んで器用に進む（汗）
25．ネバネバ
「クッ…足が捕られて進めねぇ…！」
26．毒液
「あ～あ～…せっかくの数少ねぇ私服が…（汗）。」
27．突風
「あ～れ～ま～…。」↑ゆったりと吹き飛ばされる（汗）
28．竜巻
「おっほ～♪」↑おもいっきり竜巻の風波に乗っている（汗）
29．砂なだれ
「どっしぇ～…！？」↑砂なだれの波に押される（汗）
30．虫
「萌えキャラ化の魔法でも掛けるか…。」↑オイッ（ツッコミ）
31．大虫
「萌えキャラk（殴」
32．触手
「よしよし…。」↑触手の頭（？）を撫でてやり懐かせる（汗）
33．イカスミ
「うぅ…コレって落ちにくいんだよなぁ…。」
34．水攻め
「チクセウ…水浸しだぜ…。」
35．マグマ
「それはさすがにヤバ過ぎるぅうううううううううううう！？！？！？」↑迫るマグマから逃げる
36．隕石
「チェストォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

↑隕石を全力の飛び蹴りで壊す（汗）
３７．タライ
「アタッ…。」
３８．バケツ
「ぬぉっ…前が見えんッ！？」↑上手い具合に被ってしまう（汗）
３９．ナベ
「ゲフッ…！」
４０．フォーク（人間サイズ）
「あっぶなぁ…（汗）。」
４１．ギロチン
「ヒェ～…あと一歩でお陀仏だったぜ…（汗）。」
４２．レーザー
「ほっ…！」↑レーザーの当たる所に肉を当てて焼く（汗）
４３．落とし穴
「落ちるゥウウウウ…！！」
４４．スタート連れ戻し
「あれ？入口に戻った？」
４５．レベルダウン
「オイオイ…レベルが落ちるってアリかよ…（汗）。」
４６．アイテム損失
「あ…せっかくのレアアイテムが…（汗）。」
４７．隠れモンスター
「えぇ…（汗）。何でよりによって…（汗）。」
４８．回す人
「このバトンを見てくれてる人全員…じゃダメかな？」』

真王「それから『鳴神　ソラ』さんのバトンもだ」

『今回長いな…マリオとルイージで…

1：トゲ
「あいた！」
「あいたたた！」
2：毒ガス
「うぉ！？」
「毒ガスだ…」
3：火炎放射
「あつっ！」
「うわぁ！」
4：グルグル
「目が回る！」
「うひゃぁ～」
5：トラバサミ
「ばりいた！？」
「おおう！？」
6：落石
「ふん！」↑壊した」
「ルイージロケット！」↑同じく
7：矢
「スーパーマント！」
「シールド」↑防いだ
8：ハンマー
「ハンマー返し！」↑自分のハンマーで殴り飛ばす。
「おっと！」
9：プレス
「ふんりゃあぁぁ！！」↑押し返した
「ひぃぃぃ！！」
10：間欠泉
「こりゃあ良い湯だ」

「兄さん；」
１１：間欠炎
「あっちゃあ！」
「やっぱり…」
１２：電撃
「びびびびび！」
「防ぐよ！」
１３：バンパー
「バンパー！」
「うわぁ！」
１４：バナナの皮
「あうち！」
「こけた…」
１５：爆弾
「どわっ！」
「こっち投げないで！」
１６：トランポリン
「ぴょんぴょん」
「凄いね」
１７：パンチマシーン（ストレート）
「良いパンチだ」
「何ボクシングのトレーニングの様にしてるの！？」
１８：パンチマシーン（アッパー）
「おっと！」
「まだやるんだ…」
１９：パンチマシーン（げんこつ）
「おっと！」
「げんこつも放つの！？」
２０：沼
「沈まない様に注意しないとな」

「慎重に…」
２１：雷
「うおっ！」
「あぶなっ！？」
２２：まきびし
「地味に痛いな」
「確かに」
２３：ゴロゴロ岩
「走れ！」
「走るよ！」
２４：火の玉
「スーパーマント！」
「うひゃあ！？」
２５：間欠冷気
「冷たいな…」
「そうだね…」
２６：蜘蛛の巣
「燃やせば良いか？」
「やばいから；」
２７：ネバネバ
「粘々するな…」
「進み難いね」
２８：毒液
「スーパーマント！」
「あっぶな…」
２９：突風
「踏ん張らないと吹き飛ばされそうだな」
「ひぃぃぃぃ！」
３０：竜巻
「回る回る」

「慣れてるからね」
３１：砂なだれ
「逃げろぉぉぉ！」
「同感！」
３２：虫
「よっと！」
「うわぁ！」
３３：大虫
「てい！」
「やあ！」↑ルイージロケットで吹っ飛ばす。
３４：触手
「切り刻む！」
「殴ります！」
３５：イカスミ
「カートであったな」
「そうだね…」
３６：水攻め
「丁度良いな」
「顔洗うのにね」
３７：マグマ
「マメマリオでダッシュ！」
「うひぃ～～！」
３８：隕石
「走れ走れ！」
「多い多い！」
３９：タライ
「あいた！」
「痛い！」
４０：バケツ
「前が…」

「あったね…」
４１：ナベ
「今度はナベが…」
「まただね」
４２：フォーク（人間サイズ）
「真剣白刃取り！！」
「よぉ～やるよ」
４３：ギロチン
「うおっと！！」
「流石にね…」
４４：レーザー
「スーパーマント！」
「危ないな」
４５：落とし穴
「落ちるか」
「どこに行くの！？」
４６：スタート連れ戻し
「スタートに戻ったか…」
「そうらしいね」
４７：レベルダウン
「いかん！早く修行して取り戻さないと！」
「早いな兄さん」
４８：アイテム損失
「ああ！？キノコが！？」
「こっちもキノコが！？」
４９：隠れモンスター
「隠れモンスターか」
「どんなアイテムを持ってるんだろう…」
５０：回す人
「榊に回すぞ」

「黒一文字さんに回します」

…こんな感じで』

真王「次回はレーティアがやるよ?ではまた」

第七十六訓：人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ（後書き）

真王「次回は暑い夏にふさわしい海のステージだ！」

レーティア「次回『夏と言えば海が一番』テイクオフよ？」

第七十七訓：夏と言えば海が一番（前書き）

真王「今回は海のステージ！みんなで泳ぎましょう！」

～アトランティスオーシャンギャラクシー～

『海の世界で大満喫』

第七十七訓：夏と言えば海が一番

銀時達が星船で移動中、なのは達機動六課にて、

はやて「ホンマ何処におるんが銀ちゃんたちは…」

はやては部隊長室で頭を抱えている。

なんせ銀時達はあの怪獣騒動のあと行方が分からなくなっているのだ。

なのは「いろいろ探したけど何処にも見当たらない」

フェイト「こっちも検討が付かないよ」

はやて「どうしたもんかなぁ…」

3人は悩んでいると、

イストワール「私でしたら探せますよ？」

イストワールが出てきて言って、3人は喰いかかる。

はやて「ホンマか！！」

イストワール「はい、ですが見つけ出すのに3日かかってしまいますが…」

はやて「なんや3日か～。そんな時間…待てるかァァァァァァァァ！！！！！」

はやては思いっきり頭を抱えて叫んだ。

はやて「3日立って待つより自分で探した方が早いやないかい」

なのは「そ、そうだね…」
はやて「・・・まぁこれはどうでもいいことやけど、熱いわ…」
フェイト「そりゃ私達も熱いよ…」
はやてとなのはとフェイトは汗を長いて言う。
ミッドチルダは今夏真っ盛り。
はやて「あ～、いつか桂さん達と海でパシャパシャしたい～」
はやてはむなしく突っ伏した。
で、今銀時達は何処でなにしてるかというと、海の星にいます。
アトランティスオーシャンギャラクシー
ＩＢＧＭスカイビーチギャラクシーｂｙスーパーマリオギャラクシー２
（Ｓｕｐｅｒ Ｍａｒｉｏ Ｇａｌａｘｙ ２ Ｍｕｓｉｃ Ｅｘｔｅｎｄｅｄ － Ｓｔａｒｓｈｉｎｅ Ｂｅａｃｈ Ｇａｌａｘｙ）
神楽「うぅぅぅみぃぃぃじゃァァァァァァァァああああ！！！！」

傘をさして海に向かって叫ぶ神楽。

ネプテューヌ「海じゃァァァァァ！！！」

同じく海に向かって叫ぶネプテューヌ。
ちなみに今着ている水着は黄色とオレンジのフリル付き水着（頭のアクセサリーに赤い花）。

ヴィヴィオ「海だぁぁぁぁ！！」

更に同じく叫ぶヴィヴィオ。
水着は黒だ。

アイエフ「元気ね」
コンパ「ねぷねぷ～、先に準備体操するですよ～？」

そんな二人を見るアイエフと呼ぶコンパ。
アイエフは黒と青の混ざったビキニ。
コンパは白に茶色の斑点とリボンの付いたビキニだ。

銀時「しっかし宇宙にも海がいっぱいのもあるんだな」
新八「たしかに・・・」
桂「良い風景ではないか」
エリザベス『ですね』

銀時と新八と桂はシートの上で眺めて言う。
ちなみに3人は水色のトランクス水着だ。
あとエリザベスはそのまま。

ノワール「まさかここで貸し切りみたいに出来るのって憧れるわ」

ブラン「・・・・・・」
ベール「フフ、久々にひと泳ぎですわ」

ピンクに白斑点のビギニのノワール、白と水色の網状の水着のブラン、白と紫のビギニ（スカート付き）のベールが現れる。

ギルシア「おい見ろよ、素晴らしい物が拝められるぜ？」
桂「うむ、確かに」
銀時「俺もだ」
新八「神秘の光景ですね」

ギルシアの筆頭に男達は鼻血を出して見る。

プリニー「カメラスタンバイオッケイッス」

何処から取り出したのかビデオカメラを担ぐプリニー。

銀時「よしプリニー、早速あいつとかの「なにをやろうとしてるのかな？」イテッ！」

銀時はスイカ型のビーチボールをぶつけられた。

レーティア「思春期ねあなた達」
ジャンヌ「それが男だもんね」
シャル「海じゃぁぁ！」
ビビ「ヴィヴィオたん水着萌～…」

レーティアが呆れ、ジャンヌはそう言って、シャルは叫んで、ビビはオヤジっぽい言動をしている。
ちなみにレーティアは黒で紫の斑点のビギニ、ジャンヌとビビは両

者とも白のビギニ、シャルは紫のビギニだ。
４人は歩くにつれて立派なメロンがたゆたゆ揺れている。

銀時「あれ？グレイはどうした？」
レーティア「『お前らだけでやってろ』だってさ。それよりギルシア」
ギルシア「？」

銀時が周りを見て言うと、レーティアが答える。
その後レーティアはギルシアを呼ぶ。

レーティア「サンオイル、塗ってくれる？」
ギルシア「おう、わかったぜ」

そう言って２人は別の場所へ移動した。

銀時「つーかあいつらすっごく仲良くやってね？」
新八「そうですね。一体何があったんでしょう？」

中がいいと言うより夫婦っぽい様な関係のように見えると思う銀時と新八。
今ギルシアがうつ伏せのレーティアの背中にオイルを塗っている。

ジャンヌ「まぁお姉ちゃんもギルシアもこれやり合った仲だしね」

ジャンヌが指でわっかを作って中指で輪の中を出し入れするジャスチャーをする。

全員（ジャンヌとヴィヴィオ以外）「・・・なにいいい

唖然としたあとジャンヌとヴィヴィオ以外みんな血涙、鼻字、充血を同時に出して大きく叫んだ。

ギルシア「背中出来たぜ」
レーティア「ありがとう、今度はこっちをしてくれる？」

背中を塗り終えると、レーティアが起き上がってギルシアに向かって胸を強調させてくる。
つまり胸も塗ってくれと言っている。

レーティア「それが終わったらここととかここととか、後此処もやってね」
ギルシア「…ほぼ全身じゃねぇか。まぁいいけどな」
お尻とか足とかアソコとか指示してギルシアは突っ込むが承諾する。

ギルシア「ほらよ」

グニュゥッ？

レーティア「あんッ？」

オイルのかかった手がレーティアの胸を塗り…

銀時「ハイカットォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！」

銀時は凄い顔してギルシアを蹴飛ばそうとドロップキックを繰り出す。
が、レーティアが何処から取り出したのかファスシニムで銀時を投

げ飛ばした。

レーティア「何やろうとしてんのよ」
銀時「お前らこそ何やろうとしてんだよ!!この小説を18禁にさせるきかよ!!!」

邪魔されたことに睨むレーティアに銀時は怒鳴り返す。

レーティア「15禁ギリギリならOKでしょ?」
銀時「いやそういう問題じゃねぇよ!!!」
ジャンヌ「はいはい貴方はさっさとあっちを観望しましょうね~」

ジャンヌは銀時の耳を引っ張って連れて行く。

レーティア「・・・さて、続きをして?♪」
ギルシア「おぅ!」

レーティアの体がギルシアのよってきれいに塗られたり揉まれていく。
本人は満更ではないらしいが。

で…

ネプテューヌ「いやっほおおおおおおおおう!!!!!!」

ドボーーーーン!!

崖の上からネプテューヌがとびこみ、水しぶきが上がる。

ネプテューヌ「ぷはっ！・・・お～い！こっちだよ～」

ネプテューヌは海から顔を出して崖の上にいるヴィヴィオ達に手を振る。

ヴィヴィオ「いくよ～！それ～～！！」

プリニー「俺を下にしないでくれッス～～～～！！！！」

ヴィヴィオもプリニーと一緒に飛び込む。

シャル「よ～～～♪」

ジャンヌ「キャ～～～落ちそう～！！」

ビビ「キャぁぁ気持ちい！！」

シャルは飛行しながらジャンヌとビビの乗っているバナナボートにロープで引っ張っている。

コンパ「ここをこうし…ってああ！また壊れたです！！」

コンパが砂の城作ろうとして壊れた。

アイエフ「幼稚ね」

コンパ「ほっとくです！成功してこそ嬉しさがあるんです！！」

アイエフは冷めた目で見てコンパは反論する。
ちなみにノワールとベールは2人して椅子の上でパラソルの下で寝ている。
そしてブランは、

ブラン「・・・・・できた」

立派なお城が出来ました。
大きさはブランの身長の二倍。
コンパとアイエフは唖然とするのだった。

で…

ネプテューヌ「それ！」
ジャンヌ「ぽ～ん！」
ヴィヴィオ「それ～！」
レーティア「やるじゃない」

今ネプテューヌ達はビーチバレーをやっていた。

レーティア「シューートッ！！」

レーティアがスマッシュ放つ。
枠の中なため勝ち。
得点は１５－１３。レーティアチームがリード。

銀時「ったくみんな海となると元気になるんだな～」

新八「当たり前です。みんな人間海から生まれたって言うじゃないですか」

銀時と新八は双眼鏡を持ってレーティア達（の一部）を見ている。
2人とも鼻血を出して。

銀時「そうかもしれないな。まぁあいつらの発情はみんな一部に集まるもんな」
桂「なにを言う美しき女子は美のために一部に塊が出来たんだ」
銀時「じゃあお前の場合は脳細胞に血管でも詰まったのか？」

動くにつれて揺れる胸とかプリッ♪とするお尻を見ながらこんな会話をしている。

銀時「ん？そういやあいつは何処行ったんだ？」
新八「え？見てませんけど…」

銀時が周りを見ながらそう言う。
あいつとは神様のことだ。

今度はスイカ割りをしようとしている。
割るのはベールで目隠ししてスイカの方へ行こうとしている。

ネプテューヌ「ベールゥ、もうちょい右だよ！」
プリニー「次は真っ直ぐッス！」
レーティア「もう少し…っとそこよ！」

周りの指示でスイカの前まで来たベール。

ベール「ええい！！」

棒を思いっきり振ってスイカを割った。
そしてみんなでおいしく頂きました。

神「大量に取ったどーーーーーーー！！！！！」

すると海からすごい大物を持って飛び上がった神が出てきた。
そして着地と同時に何種もの魚やお宝の様な『貝獣マイマイ』、『トゲガイ』も持ってきた。
ちなみに神は虹色のトランクスだ。

ネプテューヌ「今まで海の中で取ってきたの？」
神「おう、取れたて新鮮だぞ？」

神は自慢げに言う。

レーティア「その中にでかすぎるタコがいるんだけど…」

レーティアが言うと、『海の壷』中から大きなたこがはい出てくる。

シュルルル！

ネプテューヌ「えちょ、きゃあああああああ！！！」

ネプテューヌ含む女性人達がタコの足に捕まった。

レーティア「クッ、こんな…／／／」
ビビ「イヤ～～～！！気持ち悪い～～～！！」

ノワール「こらッ！パンツだけは止めろ～～～～！！！」
ベール「ちょ！そこを握っては、ああっ！！／／／／／」

タコ足で女性達があわれもなくなっていく。

銀時「・・・いい景色だ」
新八「…はい」
桂「…うむ」
ギルシア「入るのか？、まさか入るのか？」
エリザベス『宝庫ですね』
プリニー「シャッターチャンスッス」
女性陣「なにやっとんじゃ男共ォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

鼻血流して眺める男達に怒鳴る女性陣。
ちなみに神は「またとってくる」と言って海へ飛び込んでいった。

レーティア「みんな落ち着きなさいよ。この子はただ遊びたいみたいよ？・・・あ、もう少し奥へ入れて？」
ジャンヌ「あぅ～／／／／この感覚、癖になりそぅ～／／／／」
全員「何やってんだこの変態姉妹ども～～～！！！」

縛られていることに快感を求めているデビリアス姉妹に全員怒鳴る。

銀時「まってろ！うおおおおおおおおおお！！！！」

銀時は木刀を持って巨大たこの足を切り落とす。
ネプテューヌ達は助かったが、レーティアだけが捕まっていた。

ギルシア「レーティア！今助けるぞ！ディーン・ドライブ・ブラックバード！」

ギルシアが高速攻撃で巨大たこを攻撃するが、あまり効果がない。

ギルシア「チッ！ならこれでどうだ！ヴァルカンショック・イグニション！」

今度は炎の塊を投げ飛ばした。

だが巨大たこは一本の足で弾き飛ばした。

新八「ぎゃあああああああああああ！！！！」

そして運悪く新八に命中。

ギルシア「テンメェ…よくもメガネを…」

新八「イヤ死んでねぇから！！」

ギルシアが握り拳をギリギリならせるが、新八がボロボロ状態で突っ込む。

レーティア「あぅ…あっ？も、もう・・限界…？」

ギルシア「！？ま、まさか…」

銀時「あ？どうした？」

レーティアの様子にギルシアが異変を感じ取った。

レーティア「あ・・・はぁぁぁぁあああああああああああ！！！！！」

バッサーーーーーー！！！

レーティアが絶頂の声を出すと背中から悪魔の羽が姿を現した（ちなみに尻尾もある）。

レーティア「あらやだ、気持ち良すぎて出しちゃったみたい？」

自分の羽を出してしまったことにちょびっと驚いただけのレーティア。

銀時「ちょっとォォォォォォォォ！！！背中から羽生えてるんですけどォォォォォォォォォォ！！！？」

銀時はレーティアの姿を見て思いっ切り叫ぶ。

ジャンヌ「あれ夢魔変化（リリス・フォーム）っていってその名の通り夢魔（サキュバス）の様な姿になるの」

ジャンヌがレーティアの姿を見て言う。

銀時「そ、そうなんだ・・・って何で知ってんの？」

ジャンヌ「だってあの能力は私も持ってるもの。こんな感じにね」

銀時は納得しかけたところでジャンヌに疑問を言うとジャンヌはレーティアと同じ羽と尻尾を出して証明する。

全員（ギルシア、ジャンヌ、レーティア以外）「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？」

ギルシアとジャンヌとレーティア以外の全員が驚愕する。

レーティア「さてと、あなた美味しそうね。フフ、いただきま～す

？」

レーティアは巨大たこを見つめて笑みをこぼし、犬歯を立てて喰らいつくと、

ズォォオオオオオオオオオオ！！！

何と巨大たこの“生命力”を吸収し始めた。
吸い取られた巨大たこはミイラの様に干からびた。

レーティア「う～ん、味はまぁまぁね」

レーティアは肌を艶めかせながらそう言う。
銀時達は「こいつに逆らうのやめようかな…」と冷や汗流していた。
その後みんなでたこ焼き焼いたりといろいろ満喫した。

『貝獣マイマイ』を手に入れた。
『トゲガイ』を手に入れた。
『海の壷』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「おしえて！」

全員「銀八先生！！」

レーティア「は～い？みんなのアイドルレーティアで～す？」

銀八「みんなのアイドルって…自分で言ってて恥ずかしくな「先生、少し黙っててください」ウゴォッ！！」

レーティアは銀八の首を絞めて気絶させた。

レーティア「さて、ペンネーム『鳴神　ソラ』さんから行くわよ。『マリオ「銀魂のあのネタだな」

ルイージ「あははは；」

フォックス「ある意味ご愁傷様；」

スネーク「そうだな…と言うか何時の間にか来てたんだな；」

クッパ「メンバーに質問なのだ『マリオの殺気を向けられたら耐えれるか？』」

マリオ「おいおい、無差別に放つみたいでやめてくれないか？グレイに質問『今の世界に来て居心地はどうだ？』」

ルイージ「神様に質問『兄さんはどう思いますか？』」

次回を楽しみにしてます♪』普通の人ならまず気絶するわね。次はグレイと神様よ」

グレイ「前の方がましだと思うな…（遠い目）」

レーティア「沢山のボケどもに苦労してるってことね…」

神「あいつか？俺様的には物語の邪魔になるなら容赦はしないぜ？」

レーティア「それじゃあ『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『リィーン』さんよ。『どうも、お久しぶりです。最近、テストやらレポート提出やらで暇がなかったリィーンです

神「――――――オイ、コイツハドウイウコトダ？」

［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッッッ……！！！！！！！！］

か……かみ、さま……？

神「ナンダカヨォ、俺ノ偽物ガイルミタインナンダヨナァ、オイ……」

え？　神様の、偽物？

神「アァ……ゴッド１３？　あんな、人の恋路を邪魔するなど……俺ジャネェ、俺であってはならない……」

ッ……た、確かに、貴方の真名は、“契りの仲立ち人”、で

すからね……

神「如何なる恋であろうと、如何に他者がそれを妬もうと、俺はそれを肯定する。常にだ。そうでなければ、ビビの恋路など助けんわ。なのに、ここにいる俺は、どうやら偽物のようだな」

あ、あの、悪ふざけ、というものでは？

神「悪ふざけだろうと魔が差しただろうと！！！　この“契りの仲立ち人”、どんな恋路だろうと見守るのが、我が本能ッ！！！　“起源”だ！！！！」

（何気にとんでもないネタバレ発言をこの人は～～～ッッ！！！！！）

神「故にだ……アノ偽物ヲ処刑スル」

へ？

神「形成―Ｙｅｔｚｉｒａｈ―」

［ジャギンッ！！！］

神「“罪姫・正義の柱―マルグリット・ボワ・ジュスティス―”」

【神様の右腕の肘から、身の丈並の大きさの、ギロチンが生えた】

えええええええええええええ！！！？

神「血、血、血、血が欲しい……ギロチンに注ごう、飲み物を。ギロチンの渇きを、癒すため……欲しいのは、血、血、血……

……」

（か、かかかか、神様、マジギレだぁぁぁぁぁッ！！！！）

神「Ｊｅ ｖｅｕｘ ｌｅ ｓａｎｇ, ｓａｎｇ, ｓａｎｇ, ｅｔ ｓａｎｇ. Ｄｏｎｎｏｓ ｌｅ ｓａｎｇ ｄｅ ｇｕｉｌｌｏｔｉｎｅ. Ｐｏｕｒ ｇｕｅｒｉｒ ｌａ ｓｅｃｈｅｒｅｓｓｅ ｄｅ ｌａ ｇｕｉｌｌｏｔｉｎｅ. Ｊａ ｖｅｕｘ ｌｅ ｓａｎｇ, ｓａｎｇ, ｓａｎｇ, ｓａｎｇ, ｅｔ ｓａｎｇ!!!!」

［ダシュンッッ！！！！！！］

あぁ……行っちゃった……こりゃぁ、もう全員断頭ですな、うん……

あ、そうだ。あのバトンですが、多分、明日ぐらいに掲載すると思いますので。ながらく放置していて、大変申し訳ありませんでしたｍ（＿＿）ｍ

あと、一つ私から質問を

・この作品の中に、重度の中二病の方って、何人くらいいますか？

では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばって下さい！！！　失礼します！！！！

神「見ツケタゾコノ偽物ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッツッ！！！！！！！」

（そちらの）神「うお！！！？　も、もう一人の俺！！？」

神「死ネッ！！！！」
「ザンッ！！！！」

（そちらの）神「ガーーーーーー」
「ゴロン…………」

神「フ、フフフフ……ソウダァ、残りの、あの１３って名乗った連中も、処刑シナキャナァ、クッハッハッハッハッ……血、血、血、血が欲しい……欲しいのは、血ィィィィイッツ！！！！！！！」

…………これは、もう駄目だ。というわけで、残りの１３と名乗った人、首飛ばされますので、辞世の句でも考えておくか、遺書でも書いておいて下さい。では、失礼します』・・・ごめんなさい、作者は中二病なんて考えてなかったみたいよ」

真王「サーセン」

レーティア「それじゃあ『リィーン』さん、勝手に人を殺しちゃだ

め。次はペンネーム『黒神』さんからよ。『黒神
「いやぁ、あのロリ鬼の漏らしが主に受けましたなぁ」（黒笑）

銀時
「さっそくかよおい！！後でブランに殺されても知らねぇからな！！」

黒神
「そんな感じで質問（黒笑）」

銀時
「聞けやぁ！！」

近藤へ

僕の小説では、マヨラーとドSを差し置いて本編に出ている貴方ですが、2人に申し訳ない気分ですか？

ゆりと音無へ

ゲストとして呼ばれた事をどう思いますか？

ブランへ

漏らしネタはそう続かないかも知れないのでご安心を（黒笑い）

銀時
「こいつ、ほんと最低のドS読者だなおい！！」『…あなたいじめて楽しいの？まぁいいけど」
近藤「うむ・・・トシ、総悟、すまない」
ゆり「私の扱いってあれなの！？」
音無「お、落ち着けゆり！」
レーティア「ブランなら赤コウラ１００個とスター持ってあなたのところへ行ったわ。『黒神』さん、いい加減に虐めるのやめなさい。最後にペンネーム『月光閃火』さんからよ。『ども…月光閃火だ。
しかし…１３（サーティーン）系の話か…。グレイ…制裁ご苦労さん。（合掌）
輝刃「しかし…間のレーティアとギルシアの甘々シーンは砂糖大フィーバーだな…（汗）。」
うん…あの桃色空間はさすがにツラい…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。
1．また子ちゃんに質問…っつーか、感想だ。前の質問の時の恥ずかしがってるまた子ちゃん、結構可愛いぜ♪
輝刃「…最後の所でキメるなキメるな…（汗）。次は俺からだ。」

2．真王に質問…新八に何らかの恋愛フラグは建つのか？このまま何の実りも無しは、あまりにも可哀想な気が…。

確かに、新八って他の二次創作では大概フラグとか無縁だったりしてるし…何かもったいない気がするな…。

輝刃「ああ…新八はオタクである事を除けば、結構純粋で優しい青年だからな…。」『」

また子「かわいいとか言うなァァァァァァァァァッス！！！」

真王「銀河編終わったら新八の恋の物語を作る予定。『月光閃火』さん、期待してもいいです」

レーティア「次は私の妹がやるわ。またね？」

～今日のお宝鑑定～

～貝獣マイマイ～

価値：１２００円

見た目：サザエ

イーバメモ：貝類族の暴れ者の殻みたいだけどこれって家の様に出来るのかねぇ？

ドルフィンメモ：貝類の怪獣が遺したと言われるこの一品！こいつ

の防御力は抜群です！

～トゲガイ～

価値：５００円

見た目：ホネガイ

イーバメモ：この界はなんだかトゲトゲしているね。それ以外は特にないね。

ドルフィンメモ：とげとげした大きな貝！それ以外は特にないのが玉にきずですが。

～海の壷～

価値：２０００円

見た目：タコつぼ

イーバメモ：あの巨大たこが出てきた壷だね。きっとあのタコにとっていい場所なんだろうねこれ。

ドルフィンメモ：海の世界にはこんな壷という神秘がある！そうは思いませんか！？

第七十七訓：夏と言えば海が一番（後書き）

真王「次回は何と寒い世界です」

ジャンヌ「次回『普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い』テイクオフ」

第七十八訓：普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い（前書き）

真王「今回は寒い世界であの人が切れる！？」

銀時「あの人って何？なんかスッゲェ気になるんだけど！？」

真王「見てれば分かる」

銀時「イヤ教えてくれよォォォォォォォォォ！！！！！」

～ブリザードマウンテンギャラクシー～

『吹雪の世界のカチコチコング』

第七十八訓：普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い

銀時達は星船で次の星へ到着した。

イーバ「さぁみんな！暑い日にぴったりの銀河群（ギャラクシー）に着いたよ。頑張っていきな」

そして銀時達はギャラクシーへ降りた。

ブリザードマウンテンギャラクシー

ＩＢＧＭアイスボルケーノギャラクシーｂｙスーパーマリオギャラクシー（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｆｒｅｅｚｅｆｌａｍｅ　Ｇａｌａｘｙ　－　Ｉｃｅ）

銀時「ここに降りたのはいいけどさ…」

銀時は深呼吸して大声で叫んだ。

銀時「ここ寒過ぎるじゃねぇかぁぁぁ～～～～～～～！！！！！」

超極寒のギャラクシーの世界でほぼ真っ白に近いブリザードマウンテンギャラクシー。
そして何と言っても気温は5℃程度だ。

ネプテューヌ「ブルル・・・さ、寒いぃぃ～、ルウィーよりも寒いぃぃ～」
ノワール「こここんなに寒いだなんて聞いてないわよォォォ～」
神楽「ささささ寒過ぎてみみみ身が凍えるねぇぇ～」

上記3人は体をぶるぶる震わせている。

アイエフ「いいい一体こんなに寒いのはどういうことなのよォォ～」
ビビ「ささささ寒さに身がこたたたえるるるぅぅぅ～」
ジャンヌ「ぅぅ・・・何か眠くなってきたような…」

アイエフとビビも寒がっていると、ジャンヌが目をうとうとさせている。

レーティア「はっ!?ジャンヌ駄目よ!こんなところで寝たら死んでしまうわ!!」

スパパ

ジャンヌ「お姉ちゃ～～ん、ここまですることないでしょ～～！」
レーティア「ご、ごめんね」

膨れて怒るジャンヌにレーティアは申し訳ない様に謝る。

新八「それにしてもこの以上の寒さは一体…」
？？？「サイが誤ってごめんな“さい”！」

新八が原因がなんなのか考えていると何処からか声が聞こえた。
すると一段と寒くなった気がする。

ネプテューヌ「あれ？なんか寒くなってない？」
？？？「イクラのお値段さぁ“いくら”？」

またもや声が聞こえる。
そしてさらに寒くなった気がする。

？？？「髷が“まげ”げられた！夜食が消えてい“やーショック”！縁側の“カレー”！」
銀時「さ、さびぃぃぃぃィィィィィィィィィィ！！！！」

銀時達はギャグまがいな言葉を聞いて通常よりもすごい寒さを感じた。
そして現れたのは氷の塊のモンスターだった。

カチコチキング「フハハハハハ！みんな寒いのが大好きさ！だからみんな寒くなれ～。とどの“とど”つまり！」
全員「エヒィィィィィィィィィ！！！！」

またギャグを言うカチコチキングのよって銀時達はまた体を震わせる。

カチコチキング「まだ行くぞ！はっぴを着て超“ハッピ”ー！！リスが借“りっす”か？青菜に“塩”ん！ラクダに乗ってあ～“楽だ”！和食が無くて“わーショック”！」

カチコチキングによる寒ギャグトークのよって周りがほとんど凍りついた。

さすがの新八も「氷河期かよ！！」という突っ込みは出ない様だ。

カチコチキング「ワ～ハッハッハ！これでトドメだ！カチコチキング入っツも“かっちこち”！」

トドメというばかりに言ってほとんど体力の限界が来た…

ブチィッ！！

と何か切れる音が聞こえた。

コンパ「ウッゼェんだよこのクソ氷がァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！」

カチコチキング「ギャアアア

これにより全員驚愕した。
するとコンパはカチコチキングを踏みつけて言う。
コンパ「オイコラ、つまんねぇギャグやっててそんなに楽しいんか？あん？」
まるでちっちゃい小物を見下す番長だ。
ネプテューヌ「こ、こんｐ「あぁぁん？」スイマセンデシタ～～～～～～～～！！！！！」
ネプテューヌが呼ぼうとしたらコンパがドスのきいた声で睨んでネプテューヌは全力で土下座した。
全員（な、なにがあったんだこの子（コンパ）～～～～～～！！！？？）
全員コンパの豹変に心の奥から驚愕した。
コンパ「テメェの下らねぇギャグのおかげでこっちはイライラがたまってんだよぉ？そんなわけで、死ねやァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！」
カチコチキング「イヤそれはとばっちりギャアアア

今のコンパの背景にブルゥワアアアアアアアアア！！！と叫びそうな若本声の斧使いが見えそうだ。

ネプテューヌ「ｃｎ「あ゛？」ヒィィ！！」

ネプテューヌが呼ぼうとしたら睨まれる。

コンパ「・・・あ～～～！！！イライラする！！こんな寒い世界がイライラするわぁぁァァァァ！！！！！」

コンパはそう言って近くにあった１０倍ほどの大きさの岩を持ちあげて山に向かって投げた。

全員「でえええええええええええええ！！！！？？」

ネプテューヌ達はコンパの行動におどろいた（特に岩を持ちあげた部分とかが）。

コンパ「あ～！もうしゃあねぇ！そこらへんの奴らと全殺していくか！」

全員（あれ？死亡フラグ？）

コンパはネプテューヌ達を見て目を光らせた。

桂「待つのだコンパ殿！この蕎麦を食べて落ちつ「ソバ食って落ち着けるのはお前だけだァァァァァァァァァァァ！！！！！」あああああああああああああ！！！！」

桂がそばを持って止めようとするとコンパが桂とエリザベス（巻き

添え）を山奥まで投げ飛ばした。
銀時達はそうだよなと肯いた。

コンパ「さぁ～て、こちとらあのくだらんギャグでイライラしてんだ。だから・・・」

コンパがにやりと笑う。
銀時達はゴクッ、と唾を呑む。

コンパ「全員揃ってあたしと付き合いな！！！キャハハハハハハハハハハハ！！！！」
全員「ギィヤアあああああああ

イーバ「・・・一体何があったらこうなったんだい？」
コンパ「わ、私でも分からないです…」

星船にて、イーバが頭を抱えるしぐさをしてコンパがオドオドしている。
彼女達の目の前には、

銀時達「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

コンパ「…なんだか将来私不吉なあだ名で呼ばれそうです…」

実際そうなったりするんだよ…。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ジャンヌ「は～い！今日は私がするよ～」

銀八「おし、んじゃペンネーム『支配者』から始めるぞ。『海の話とサキュバス…ですか…

質問行きます。

マヨ方へ

刀に刺されて死ぬならどの部分がいいですか？（黒笑）

1、腹

2、胸

3、腹の下の急所

沖田に質問

どうやってマヨ方を殺すのが一番の理想ですか？
詳しく教えてください

ブランに質問
お漏らしキャラになってしまいましたがそんな自分を如何思いますか？
自殺しますか？それとも漏らしっ子女神としてゲーム業界に名を残したいですか？（黒笑）」ではこの辺で最後にマヨ方とブランに一言…怒っちゃや～よ……ククククッ」『・・・・・・・・・・」

土方・ブラン「ぶち殺すぞこのやろォォォォォォォォォォォ！！！！」

沖田「俺はじわじわと追い詰めてやる方がいいんでさぁ」

真王「…そんじゃあ『支配者』さん、とっとと他人を怒らすようなことやめろ」

ジャンヌ「同意。次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんからだよ。』
マリオ「良かったな作者、こっちのコラボでのタイトル名を考える

手間が省けて」

確かに…

ルイージ「と言うか…アウトに近いな…」

フォックス「いやもうアウトだろ…表現的にも…」

ネス「いや～凄いね～」↑アイマスク中

リュカ「そうだね」↑同じく

マリオ「させと神に質問…『今回出て来た蛸でたこ焼きが作れたんじゃないのか？好きなんだろたこ焼き』」

ルイージ「兄さん…なのはちゃん達に質問『こっちで絶賛冥王に鍛えられてるヴィヴィオちゃんについてどう思う？』」

スネーク「グレイに質問『皆が楽しんでいる間は何してるんだ？』」

次回を楽しみにしてます♪』それじゃあ答えようか」

神「おうよ。しかも俺様特製のたこ焼き作ったんだぜ？」

真王「なのは達は銀河編にあんま登場してないが、とりあえず映像を見せよう」

真王はなのは達に冥王とヴィヴィオの修行光景を見せた。

フェイト「ヴィヴィオォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！」

なのは「な、なんか負けたの…」

はやて「あかん、うちら抜かれそうや…」

真王「ハイこんな反応です。最後にグレイ」

グレイ「星船で本を呼んでた…」

真王「ちなみに彼がこなかったのはココロは男なので水着を着るのは激しく抵抗がありましたと。『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「んじゃ次はペンネーム『黒神』から。『ブラン
「死ねやクソ読者ァァァァァァ！！！」

とブランが赤いコウラを１００個投げだす。
だが黒神は笑い出してそれらを……

黒神
「うらららららららららら！！！」

愛刀の『エンアニサ』で全てまっ二つに斬り、コウラは斬れて黒い炎に包まれたのであった。

ブラン
「己ェェェェ！！」

黒神
「ほうら、倍返し！！」

と黒神は『シャマパイ』を思いっきり投げて、プランに投げたのであった。

ベチャ！！

ブラン
「おぎゃあああああああ

得意なゲームと苦手なゲームはありますか？

エリザベスへ

小説も原作も定春以上に大活躍している貴方のご感想を。

黒神

「まぁ、今回はこんな感じですね」『ってブランがやられたァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

銀八はシャウトした。

真王「大丈夫。俺が治療した」

銀八「けどトラウマ残らねぇか？」

真王「その辺も大丈夫だ」

銀八「そうか。んじゃ答えるぞ」

ネプテューヌ「ゴメン、それ見てないから分かんない」

ベール「どちらとも普通にやりますわ」

エリザベス『・・・フッ』

鼻で笑っているつもりらしい。

ジャンヌ「…じゃあ『黒神』さんは廊下で立っててもらうとして、ペンネーム『月光閃火』からよ。『ども…月光閃火だ。

しかし…真王の所に居る神様、南無三だな…（汗）。とりあえず…繋げますか。（そういって、遠隔技法＋結合術式で真王の所に居る神様の頭と身体を繋げて命を繋ぐ）フゥ…術式完了♪次はあまりハメを外し過ぎない事だな…。

輝刃「…何と言うか…閃火凄すぎだな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．レーティアとジャンヌに質問…サキュバスみたいな姿になれると話の中であったが、正直言って吸ってみたい男性キャラの生気はあるか？ただし、死なない程度に頼むぞ？

ハハハ…何も言えないや…（汗）。次は俺からだ。

2．また子ちゃんに質問…っつーか、また感想だ。そう怒鳴っても顔を赤くしてりゃあまり説得力無いぞ？まぁ…可愛いからいいが…。（そう言いつつ、また子の頭を遠隔技法で優しく撫でる）

輝刃「…ぶっ飛ばされんなよ…（汗）。」『吸ってみたい男？ショタ系と美男子系かな？お姉ちゃんもそうだし」

銀八「おいおい・・・」

また子「うがぁぁぁぁぁぁぁ！！！触るなちくしょォォォォォ！！！」

真王「暴走したぞあの女…まあいいか。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

ジャンヌ「最後にペンネーム『黒龍』さんだよ。『黒龍「期末テストが終わっての久方ぶりの感想で～す」

銀時「久しぶりだな」

ソラ「テスト忙しかったからな」

黒龍「俺も無事にテストが終わって嬉しいです」

ソラ「推薦取れたからな」

黒龍「ホント一時はどうなるかと思いました」

銀時「まぁ、話は変わるけどよ、良いもんだな」

黒龍「銀魂は純粋な下ネタで、真王さんはエロい下ネタですね」

銀時「ああ、トラブルみたいな感じだな」

ソラ「そうだな」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1．前の回でプランは小便漏らしましたけど、やっぱあなた見た目通り子供ですね（黒笑）

2．ネプテューヌに質問。海にいきましたけど、パープルハートになって銀さんに何かアピールしようと思わなかったんですか？

3．ヴィヴィオ以外のリリカルメンバーに質問。最近全然活躍がない自分達の状態をどう思いますか（黒笑）

黒龍「今回はここまでです」

銀時「ドSな質問だなおい！！」

ソラ「黒神と同じか」『・・・』

ブラン「テメェもブッコロォォォォォォォスッッッ！！！！！！」

ブランは巨大ハンマーを担いで『黒龍』を殺しに行った。

真王「あ～あ、あ、ネプテューヌはその時忘れてた様で、皆さんは凄くやばいと認識しています。『黒龍』さん、腹黒さもほどほどに」

ジャンヌ「次はコンパちゃんがやるよ～。じゃあね～」

第七十八訓：普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い（後書き）

真王「邪心コンパ怖ぇ…。さて、次回は悪の船団に殴りこみ！そこでレーティアとジャンヌの仲間らしき人たちがいる！？」

コンパ「次回『戦友と書いてともと呼ぶ』テイクオフです」

～予告～

ナレーション「新たな転生者が加わりそうです」

第七十九訓：戦友と書いてともと呼ぶ（前書き）

真王「今回は何と銀時達に新たな転生者が仲間になります！」

銀時「っておい、一体いくらキャラ作る気なんだよ」

真王「良いじゃん、好きだから」

銀時「よくねぇよ！俺達の出番が無くなっちまうよ！！」

真王「大丈夫。ラスボス対戦では主人公出番があるから」

銀時「そうなのか？それならいいが…」

真王「ハイそれではスタート」

～イヴィル大船団～

『大突破！イヴィル大船団！』

第七十九訓：戦友と書いてともと呼ぶ

星船

ジャンヌ「・・・銀さんよく飽きずに作れるね…」
銀時「だって糖分とらねぇとイライラするんだもん。そう言うお前はそれやって飽きねぇのか？」
ジャンヌ「イヤだって毎回着替えないとイライラするし…」

ジャンヌの目の前にはケーキを作る銀時がいて、その銀時の前にはコスプレ衣装を作っているジャンヌが話し合っている。
この光景を見ているネプテューヌ達は「似てるなぁ」と思っている。

ドーン！

どこかで大砲が発射される音が聞こえた。

ジャンヌ「な、何？」
ヴィヴィオ「あ、あそこ！」

ジャンヌが突然のことに慌てていると、ヴィヴィオがある場所を指差す。

それは、沢山の宇宙船がある船団だった。
しかもところどころに争っているような煙が上がっている。

ネプテューヌ「あの船団…もしかして・・・」

ネプテューヌは見覚えのある船団を見て思う。

レーティア達が話したあの異形集団の…。

イーバ「行くつもりかい？別に止めはしないが、無茶はするんじゃないよ」

レーティア「大丈夫、任せて」

イーバが忠告してレーティアが言う。

そして銀時達は船団へ突入した。

イヴィル大船団

ＩＢＧＭクッパＪｒの大船団ｂｙスーパーマリオギャラクシー（Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｒｉｏ　Ｇａｌａｘｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　－　Ｂｏｗｓｅｒ　Ｊｒ's　Ａｉｒｓｈｉｐ　Ａｒｍａｄａ）

船団に到着したネプテューヌ達、だが直後にイヴィルソルジャー達に囲まれている。

銀時「いきなりこれはねぇだろ…」

ネプテューヌ「うん、私もそう思う」

銀時は苦虫をかみつぶした顔をしていい、ネプテューヌは同意する。

レーティア「このくらい所の口程度よ。油断でもしたら…死ぬわ」
イヴィルソルジャー「ウオォォォォォォォォ！！！」

イヴィルソルジャー軍が一斉に銀時達に襲いかかった。
銀時達はかわし、それぞれの武器でイヴィル軍をなぎ倒す。

銀時「ハイ次ィィィィィ！！！」

銀時がシルバーソウルでなぎ倒し、

ネプテューヌ「でやァァァァァ！！！」

ネプテューヌがエックスセイバーで切り捨て、

レーティア「くたばりなさい！」
ジャンヌ「邪魔よ！」

レーティアとジャンヌ（ラ・ピュセルのプリエの服）がバトンを持って格闘技でぶっ飛ばし、

ギルシア「ヴァルカンショック！」
シャル「リトルボーイ！」

ギルシアとシャルが炎の拳でぶっ飛ばしている。

グレイ「ハァ・・・ちゃんと合わせとけよ妹！大嶽の鎖（オオタケノクサリ）！」
ビビ「分かった！喰らえ！マスタースパーク！」

グレイがため息の後地面の魔方陣から鎖がイヴィル達を巻きつけ、

ビビが東方の魔理沙の恰好をして本人の得意技であるマスタースパークをぶっ放す。
捕まっていたイヴィル達はあとかたもなく消滅した。

レーティア「さて次は…あなたよ！」
マドロイド「ウバァァァ！！」

レーティアはバトンで後ろにいた全身緑色でたくさんの触手が映えた人型のマドロイドをぶっ飛ばす。

ギルシア「めんどくせぇ！一気につぶしてやる！パワーのフラグメント！」

ギルシアは右腕を振り上げる。

ギルシア「惑星砕き！！」

そして船にたたきつけ、船が大爆発した。

で・・・

銀時「お前俺たちまで巻き込ますきか！！」
ギルシア「うるせぇよ！文句言うならあいつらに言え！！」
レーティア「はいはい、２人とも落ち着きなさい」

すばやく別の船に移りこんだ銀時たち。
その後銀時とギルシアが口げんかし始めてレーティアが抑える。
すると、

???「吹き飛べぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
イヴィル軍「グアァァァァァァ！！！」

遠くから男の声が聞こえ、イヴィル軍が吹っ飛ばされるのが見えた。
その男は、前髪が少々目を隠せるくらいで、手には一振りの剣を持っている。

???「チッ、意外と数が多い・・・新手か？」

男は銀時たちを見て剣を構える。
レーティアとジャンヌを除く全員は男の放つ殺気に驚きながらも構える。

レーティア「カイム、この人たちは敵じゃないわ」
カイム「ん？ってレーティア！？なぜここに！？」

レーティアが前へ出て、男・カイムがレーティアがいることに驚く。
どうやらレーティアとカイムは知り合いらしい。

銀時「あれ？あいつら知り合い？」
ジャンヌ「まぁね」

銀時がレーティアとカイムのやり取りを見てジャンヌに聞くとジャンヌは答える。

レーティア「あれよ、依頼者といろいろやってるから」
カイム「いろいろ・・・って」

レーティアの適当な答えにカイムは苦笑いを浮かべる。

レーティア「まぁそれは置いとくとして、あの人の指令？」
銀時達の聞こえない声で真剣な顔をして聞くレーティア。
カイム「ああ、俺のほかにもイッセー、レオン、ユウカ、ナリア、そして親友であるリアスもいるぞ」
レーティア「彼女も・・・わかった。私たちも援護するわ」
カイム「助かる」
レーティアは振りかえって言う。
レーティア「みんな、この船団を破壊するわよ」
ネプテューヌ「う～ん、理由がわかんないんだけど確かにこのままにするのはよくないって思うね！」
銀時「おれめんどくさ「銀さんも来る！」っておいイデデデ引っ張るな！」
ネプテューヌ含めほとんどの人も賛成するが、銀時は否定しようとしてネプテューヌに耳を引っ張られる。
レーティア「で、リアスはどこに？」
カイム「あそこだ」
カイムは船団の中で大きい船を指差す。
プリニー「あれ、なんだかボスがいそうッスね～」
カイム「あそこの親玉・リュウゲイと戦闘に入っていると思う」
レーティア「ならいくしかないわけね」
カイム「ああ、アンヘル！」

？？？「ほぅ、久々に我の出番か！」

プリニーが見てそういい、カイムとレーティアが話し合った後、カイムが懐から赤い小さな竜が出てくる。
その赤い竜・アンヘルが光りだすと、全長６０メートルくらいの大きさになった。

ビビ・コンパ・アイエフ「でえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？
Σ（〇Д〇；）」
銀時・新八・神楽「何じゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？？」
アンヘル「うるさいぞ、口を慎め」

レーティアとカイムとジャンヌとグレイ以外の全員はアンヘルを見て驚いていると、アンヘルがドスの聞いた声で銀時たちを威圧する。
銀時たちは静かになる。

アンヘル「ふむ、ではカイムよ、ゆくぞ！」
カイム「おう」
レーティア「みんな、何か捕まってなさい」

アンヘルが今乗っている船の先端を足でつかみ、カイムとレーティアが近くのつかめるものに捕まっている。
銀時たちも指示に従うと、

銀時・新八・ギルシア「うおおおおおおおおおおお！！！」

ネプテューヌ・ノワール・コンパ・アイエフ・ヴィヴィオ・ビビ・シャル
「きゃあああああああああああああああああ！！！」

勢いよく船が引っ張られていく。
そして、

銀時「ってちょっと待て！ぶつかるぶつかるぶつか・・・ギィヤァァァァァァァァ！！！」

どんどんと大船に接近して激突した。
アンヘルはぶつかる寸前で離れた。

銀時「いたた、お前こういうことがあるなら先に言えよ！！ちょっぴり涙目になっちまったじゃねぇか！！」
カイム「すまん、いつものことだから」
新八「いつもやられてるんですか！？」

銀時がカイムに訴え、カイムは謝るが新八は驚愕する。

アンヘル「おしゃべりする暇はないぞ。やつらが強敵と接触した」
カイム「そうか、なら早く行くほうがいいな」

隙間からアンヘルが言ってカイムは立ち上がる。

銀時「おいこの野郎！人を船ごと投げ飛ばしやがって！！焼きトカゲにすんぞこの野郎！！」

銀時は青筋立ててアンヘルにシルバーブレイドを向けて言うが、

アンヘル「ほう？ならおぬしをブラックホールまで飛ばしてもかまわんな？」
銀時「ごめんなさい、そういうのは勘弁して・・・」

新八「屈するのはやっ！！」

アンヘルのマジに近い言葉を聞いて銀時は速攻屈した。
新八はそんな銀時に突っ込みを入れた。

そんなことでも甲板へついた銀時たち。

？？？「グルアァァァァァァ！！！」
？？？「クソッ！」

見た目が四神の一体・青龍とよく似た生物・リュウゲイが、一人の青年と一人の女性と戦っている。

カイム「イッセー！レオン！」
イッセー「カイムか！」
レオン「遅いぞカイム！それと久しぶりだなレーティアとジャンヌ」
レーティア「ええ、久しぶりね」

カイムは二人を呼び、イッセーとレオンが気づき、レーティアが言う。

銀時「え？何？あいつら知り合いなわけ？」

銀時はジャンヌに聞く。

ジャンヌ「う～ん、知り合いというより、ギルド仲間かな？ちなみに後3人いるよ？」
ギルシア「おい・・・それってあれか？」
シャル「転生者たちが集うギルド・・・」

ジャンヌが言うギルドという言葉にギルシアとシャルがある組織を思い出す。

ジャンヌ「うん、転生者たちの集い場のギルド・メテンズギルド（アルティエラロード）なんだよ」

ジャンヌ言葉にギルシア、シャル、グレイ、ビビは唖然としている。それ以外はみんな首をかしげている。

リュウゲイ「グオオオオオオオオオ！！！」
イッセー「うわっと！」

リュウゲイが口から銀時達に向かって火炎弾を放つと、イッセーが盾になった。

ジャンヌ「はっ！？イッセー！？」
イッセー「あいたた・・・大丈夫？」

ジャンヌが事態に気付いてイッセーを呼ぶと、赤い鎧を身にまとったイッセーがいた。

銀時「うわ何あの鎧、スッゲーかっこいいんですけど」
イッセー「神器を使うことになるとはな。オラァッ！！」

ドゴッ！！

リュウゲイ「ゴバァッ！！？」

銀時は鎧を身につけたイッセーを見て言い、イッセーはリュウゲイを殴り飛ばす。

レオン「こいつもおまけだ！ライジングドラゴン！」

レオンが拳を振り上げてリュウゲイをはるか上空にまでぶっ飛ばす。
そして落ちてきたリュウゲイは地面に激突した。

リュウゲイ「グガァァァァァァ！！！！」

リュウゲイは怒り出して火炎弾を連発で発射。

イッセー「オラオラオラオラオラァ！」
レオン「フン！ハッ！セイヤァ！」

イッセーとレオンが格闘技で火炎弾を撃ち落としていく。
が、一発落とし漏らしがあった。

ギルシア・シャル「リトルボーイ！！」

ギルシアとシャルがイッセーとレオンのうち漏らした火炎弾を撃ち落とした。

レオン「（ほぅ？なかなかの凄腕の奴だな？何時か戦ってみたいものだ）やるではないか」
ギルシア「へ、俺達の実力を舐めんなよ？」

レオンがギルシアとシャルを見てそう思い、ギルシアが鼻をこすって言う。
すると近くで爆発が起きた。
その爆煙の中で3人の女性がいる。

？？？「フゥ、結構張り切り過ぎたかしら？」
？？？「私としてはまだまだ物足りない気がするけど…」
？？？「なんで私がこんなこと…」

腰までのアホ毛が付いた真紅の髪の女性と腰までの黒ポニーテールの女性がもの足りないと言う顔をし、銀髪のロングの少女がいやいやそうに言う。

イッセー「リアスお姉ちゃん！」
レオン「もう方が付いたのか？ユウカ、ナリア」
リアス「まぁね」

イッセーが呼び、レオンが言い、リアスが応える。

ユウカ「フフ、あれは私がやってもよろしいかしら？」
リアス「いいけどやり過ぎないようにね」

ニコニコ笑うユウカにリアスが許可を出す。
イッセーとカイムは苦笑いを浮かべる。

リュウゲイ「ウガァァァァァ！！！」

痺れを切らしたリュウゲイがユウカに襲い掛かる。

ユウカ「・・・ライトニングボルト・獄」

ドバ～～～～ン！！！！

リュウゲイ「ッッッッ！！！！！？？？！！？？」

するとユウカが呪文を唱えて黒い巨大な雷を放った。
直撃を受けたリュウゲイは悲鳴にならない声と出す。
そして黒こげとなって倒れた。

ユウカ「ごめんなさいね～、手加減忘れてとどめさしちゃったかも？（黒ニコ）」
全員（リアス、レーティア、グレイ除く）「怖えぇぇぇぇぇぇぇ～～～・・・」

ニコニコ笑うユウカを見て銀時たちやイッセーとカイムは思わずつぶやく。

リュウゲイ「・・・ァァァアアア

リュウゲイ「ゴォォ！！！！？？？？――――――――」

最強技の同時出しでリュウゲイを撃破かつ消滅した。

銀時たちはこれを見て唖然とした。

銀時「なぁ？俺達いらないんじゃね？」

ネプテューヌ「いやそうだったら私たちが出てる意味なくなるじゃん」

2人ともメタ発言はダメッスよ。

リアス「ふぅ、ミッションコンプリートってね」

リアスはそういって銀時たちのほうに向く。

リアス「自己紹介するわ。私はリアス・グリオン、よろしく」

イッセー「俺は弟のイッセー・グリオンだ」

銀時「あ、どうも、俺はキャプテン銀時です」

ネプテューヌ「本当は坂田銀時だよ。私はネプテューヌだよ」

グリオン姉弟と銀時たちが挨拶する。

レオン「私はレオン・バステットだ。誰でもいいから私と戦わせろ」

新八「いきなり何ナノこの人！？」

レオン「すまん、こいつは戦闘狂なんだ。おれはカイム・ドラグニールだ。そしてこいつは相棒のアンヘル」

アンヘル「うむ」

ギルシア「なるほどな。ギルシア・アダマントだ」

シャル「私シャル・ノイシュバンシュタイン」

レオンも挨拶するがいきなり宣戦布告な事言ったので新八が突っ込む。
レオンも謝って挨拶する。

ユウカ「私はユウカ・カザキリですわ。よろしくお願いしますわ・・・・・（ボソッ）ブタドモ」
新八「あれ？気のせいでしょうか？一瞬豚って言われたような・・・」
桂「始めまして桂小太郎です。好物はそばだ」
ユウカ「あら？ならタバスコそばでも食いなさい」
アイエフ「いや何言ってるの！？」

ユウカも挨拶すると新八は何か引っかかったが何も出なかった。
桂も挨拶。しかもここでクールボケ。だがユウカが危ないことを言ったのでアイエフが突っ込む。
ユウカはドSだと認識した。

ナリア「私はナリア・レイドだよ。よろしくね」
ビビ「私ビビ・スティンよろしくねナリアちゃん」

ナリアとビビは握手した。
が、

ナリア（見た目でわかる・・・この子絶対に犯ル気ね！）
ビビ（本能でわかる・・・この小娘は危険だ！）

ナリア・ビビ（私と同じ百合の道を進む存在を！）

内心では半分友達半分ライバルな気持ちとなった。

リアス「レーティアから話をきいてると思うけど私たちはメテンズギルドの一員よ」
銀時「で？そのメッテルビートのお前らは何のためにあるんだ？」
ネプテューヌ「それを言うならメテンズギルド」
銀時がぼけてネプテューヌが修正する。
リアスは咳払いして言う。
リアス「私たちメテンズギルドは、『反イヴィル勢力』として成り立ってるの」
桂「イヴィル？あの人型と龍のことか？」
桂がイヴィルソルジャーのことを思い出して言うと、リアスはうなずく。
リアス「そ、私たちを転生させてくれたアテナスの使命でイヴィル軍首相の阻止をしているの」
ノワール「首相？誰だかわかる？」
カイム「いや、残念だが・・・」
ノワールが疑問を投げるとカイムが言う。つまり知らない。
リアス「ま、ここであったのも縁だけど、私たちそろそろ戻るから」
ナリア「あ～、コホン、言い出しづらいんですけどその～・・・」
リアスはレーティアたちに別れの挨拶をした後ナリアが口ごもって言った。
ナリア「帰るための『デール』忘れてきちゃったみたい・・・」
全員「・・・・・・・・・・・・」

しばらく唖然、そして、

全員「ナニィィィィィィィィィ!!!!!??」

絶叫した。

リアス「ちょっとぉぉぉ!!忘れてきちゃうってどういうことよ!!」

ナリア「い、急いでたものだから頭に入ってなかったんです～!」

リアスがナリアをぶんぶん揺らしてナリアは目を回して応える。

リアス「まったく・・・アテナスに聞きますか」

仮にも神様に呼び捨てするリアスに苦笑いを出す一同。

リアスは携帯を取り出して電話する。

リアス「もしもし?あ、実はね・・・はい・・・え?そうなんですか?・・・はぁ・・・あ、はい、分かりました」

携帯をきったリアスはいった。

リアス「『特にこれと言った事はないからその人達といってもいいってさ」

レーティア「つまり私たちと一緒に行くって事ね」

リアスはそういうことよという。

リアス「ま、そんなわけで・・・一応よろしくね」

『リアス・グリオン』『イッセー・グリオン』『レオン・バステット』『カイム・ドラグニール』『アンヘル』『ユウカ・カザキリ』『ナリア・レイド』が銀時たちとともに行動するようになった。

銀時「・・・頼むから俺がひどい目にあわないことにしてくれよ」

銀時はそれだけをつぶやいた。

『青龍の奉玉』を手に入れた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

コンパ「今日は私が担当するです」

銀八「うし、んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』から始めるぞ『マリオ「凄いなコンパの奴」

ツッコミトリオ「こわっ！！」

ネス「ある意味カチコチキングが被害者だと思いました」

リュカ「だよね～と言うかスーパーマリオくん；」

クッパ「転生者ズに質問なのだ『コラボで出たキングスカッシャーを見てどう思う？』」

ネス「ヴィヴィオに質問『冥王さんに技を教えられたけど、なのはさんの技と教えられた技で比べてどっちが凄いと思う？』」

フォックス「真王に質問『もしＶｉＶｉｄまで進んだらどうなると思う？』」

次回を楽しみにしてます♪

マリオ「また新しい転生者が出るか…」』んじゃ答えようか」

レーティア「ネズミね」

ジャンヌ「カモ君…って」

ギルシア「たしかネギまのネズミじゃなかったか？」

シャル「たいそうな名前だね～」

ヴィヴィオ「凄さなら冥王さんだね」

真王「ＶＩＶＩＤッスか？この作品が終わったら考えよう。『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

コンパ「次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんです。『銀時「こえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

インデックス「そう言えばとうま、私たちのところにネプテューヌがゲストに来るんだよね？」

上条「ああ、次回からだけど。」

ユーリ「つーワケだ『真王』。　アンタのところのネプテューヌが活躍するから期待してくれよ。」

虎龍「皆さんに質問です。僕の小説『万時屋奇譚幕』第三十四話の新八と第八十七話の土方さんをどう思いますか？」

『・・・・・・・・・皆さん2人を軽蔑します。後レーティアさん達は軽蔑の眼で見てギルシアさんは鼻で笑ってましたです」

銀八「ハイ、んじゃ『亀鳥虎龍』さん。ネプテューヌの出演よろしく」

真王「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからだ。『ｓｉｂｕｇａｋｉ

「どうも、今回同じサブタイトルが被ったので嬉しい気分な作者です。それじゃ早速質問します」

新八に質問
「こちらの新八はノーヴェのファーストキスを奪いました。それを見てどう思いますか？」

ユーノに質問
「こちらのユーノは命掛けでなのはを守った代償で魔法が使えませんが変わりになのはにベタ惚れされています。どう思いますか？」

最後に質問
「ギンガとフォルカの仲をどう思いますか？」

以上です
ではでは『』では順番に答えよう」

新八「ノノノ、ノーヴェさんとぉぉ！！？／／／／／／／」

ユーノ「なんだろう、凄く羨ましい…」

全員「いや分からん」

真王「んじゃ『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、廊下に立ってなさい。つぎ、ペンネーム『支配者』さん。『コンパがあんなふうにブチキレルとは…キャラ崩壊ですね…

ネプテューヌに質問
貴方もブラン同様子供ですよね？貴方もお漏らしして、漏らしっ子女神になっちゃうんじゃないですか？そしたら二人でコンビ組んだ

らいいのに子供過ぎる女神として（黒笑）

銀八先生に質問
銀時と違ってまるでもてない男略してマダオな貴方ですがそんな自分をどう思いますか？（黒笑）

沖田に質問
お星様が落ちてきて土方がつぶれて死んだらどれくらい嬉しいですか？』ハイ、一つ目は没」

銀八「ってオォォォォォォいい！！なに考えてんだよ！！ちゃんと答えようよ！！」

真王「後ろ見てそれが言えるか？」

銀八は後ろをみると、魔王でも殺せるような黒いオーラを纏うネプテューヌがいた。

銀八「あ、ああ、なるほどな、うん・・・そして2つ目はうるせぇよこんちくしょぉぉぉぉぉぉ！！」

真王「おいおい・・・ん？良く見るとまるでもてない男、略してマモオだな。最後沖田さん」

沖田「そりゃぁ土方のアンチキショウが消えて清々しまさぁ」

土方「じゃあテメェがつぶれろォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！（怒）」

沖田と土方が喧嘩した。

真王「ハァ…『支配者』さん、？と廊下に立ってなさい」

コンパ「誰ですかそれ？ペンネーム『ケン』さんです。『統夜「あれはカチコチキングの自業自得だ。コンパは悪くない」

遊輔「炎を持つ人がいれば何とかなったのにね」

統夜「質問しようかな。『レーティア達はスーパーストリートファイター？ＡＥに出てくる狂オシキ鬼と殺意の波動に目覚めたリュウに余裕で勝てますか？』」

遊輔「真王さんが知っていればいいけどね」

統夜「新たな転生者か・・・どんなのが来るのか楽しみだ」

自分の作品にシャルを参加させてああいう戦い方になりましたが・・・どうでしたか？』」

レーティア「オシキ鬼ってのは知らないけどリュウなら勝てると言えるわ」

ジャンヌ・ギルシア・シャル「同じく」

シャル「あ、あっちの私頑張ってるね～」

真王「なら『ケン』さん、主人公とシャルの活躍を期待しています。次にペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。しかし…ブランもご愁傷様だったな…（汗）。こっちもブチギレバージョンになりそうだな…。

輝刃「…いや、既になっているぞ…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．フェミニストな変平太に質問…ネプテューヌ達女神陣を見て、フェミニンな気分になるか？

う～ん…微妙じゃないかな？…背丈的に（汗）。次は俺からだ。

2．また子ちゃんに質問…というか…何なら俺に向かって何発でも撃ってきな？全て捌き切ってやるぜ？

輝刃「…閃火の場合、ホントにやりかねないからタチが悪いな…（汗）。」』も、もしかしてあのロリコンの人ですかぁ！？」

真王「本人は否定するだろうが、そうだな。たぶんあるんじゃね？」

また子「よし！そのふざけた頭「シット！」ブッ！」

また子は真王のチョップを受けて気絶した。

真王「このままじゃ無限ループするわ…『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。そしてらすと。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『ブラン「死ねクソ読者ァァァァァァァァ！！！！！」

巨大なハンマーを担いだブランが黒龍に襲い掛かる。

黒龍「なんの！お妙の暗黒物質（ダークマター）！！」

黒龍はダークマターをハンマーにぶつける。
すると、ハンマーはみるみる溶けていった。

ブラン「な、何ィィィィィィ！？」

黒龍「喰らえぇぇぇぇ！！シャマパイアッパー！！！」

黒龍は黒神さんの所のシャマパイをブランの顔面にアッパーを打ち込むようにぶつける。

ブラン「あんぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！」

ブランはあまりのマズさにこの世のものとは思えないような悲鳴を上げる。

黒龍「フィニッシュ！！闇鍋ボンバー！！」

黒龍はブランの全身に黒神さんの所の闇鍋を全身浴びせる。

ブラン「あぼろぐぼろげどどもがじゃばあああああああああああああああああああああああ

真っ白に燃え尽きたように気絶する。

黒龍「じゃあブランはそっちに帰しておきます。じゃあ質問です」

黒龍はブランを真王さんの所に帰して質問する。

1．最近出番がまったくこないリリカルメンバーに質問。このまま出番ないと、存在自体忘れ去られてしまうかもしれませんが、大丈夫ですか？（黒笑）

2．ネプテューヌと銀さんに質問。もし、理不尽としか言いようが無い力を持った転生者が敵として現れたらどうしますか？

黒龍「今回は二つです。それではまた」『って何してくれてんじゃあのアホォォォォォォォォォ！！！！！」

コンパ「ほ、ホワイトハート様がぁ！！」

真王「ああもう！オメガヒール＆エスポワール！」

ブラン「はっ！？生き返った！」

真王「良かったな。んじゃ質問タイムだ。リリカル組は銀河編終わったら出番だすよ！マジで！」

なのは「ほんとかなぁ？（殺気）」

フェイト「早く出番だしたいんだけど…（殺意）」

はやて「サッサとしてくれるかな作者（殺気）」

真王「・・・さて、なのは達の称号を町人Ａに…」

３人娘「ゴメンナサイ、ソウイウノハカンベンシテ・・・」

真王「分かればいい、んで次」

ネプテューヌ・銀時「逃げる！」

真王「他力本願かい…。『黒龍』さん、廊下に立ってろ」

コンパ「・・・えっと次は確か…」

リアス「そう、この私、リアス・グリオンがアシストするわ」

真王「それじゃあまた次回で」

～今日のお宝鑑定～

～青龍の奉玉～

価値：６０００円

見た目：青い勾玉

イーバメモ：青龍のような勾玉だね。もしかしたら他にあるのかもね。

ドルフィンメモ：四神の1体、青龍の奉玉ですね。アクセサリーのするのはもったいない気もしますが…。

第七十九訓：戦友と書いてともと呼ぶ（後書き）

真王「キャラが増えてきたな…。次回は銀河編のラスボスとの戦い（？）が始まります」

銀時「おい、あの“？”はなんだ？」

真王「教えないよ」

リアス「次回『ラスボスの対戦は準備すべし』テイクオフよ。ちなみにバトルはないわ」

真王「お～い・・・」

オリジナルキャラ設定（前書き）

真王「ここは『リリカル銀魂　銀の侍と４人の女神』に登場するオリキャラ…というよりメテンズギルド員の方々の紹介をいたします。なお物語が進むにつれて少し設定を変更します。それでは」

オリジナルキャラ設定

～レーティア・デビリアス～

髪：膝までのピンクのロング
目：藍色
服：ｔｏｌｏｖｅるのララの服を黒くした感じ、グレネーダーの天道琉朱菜の赤い部分を黒くしたイメージ（帽子はない）（ハートローズセットアップ時）
年齢：２１歳
３サイズ：１０５／５５／８３
体重：血に塗り潰された
性別：♀
種族：夢魔姫（転生者）
魔力光：淡いピンク
好き：素敵な男、甘い物、静かな時間、ムフフなこと
嫌い：面倒なこと、気持ち悪い奴、悪い権力者
性格：普段はのんびりな感じ。いざというときはやる気になる
レベル：８０００
得意武器：ファスシニム（鞭ｏｒバトン）、ハートローズ（銃）
スキル：魅了のオーラ（男女問わず惚れこむオーラ。そのおかげで変態から襲われるのはしばしば）
夢魔変化（リリス・フォーム）（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）
夢魔の性欲（サキュバスハート）（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）
夢魔吸引（リリス・アブソーバー）（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変える）
詳細：この世界に転生した女性。生前は大人気アイドルのようにみ

んなから親しまれていたが、妹と交通事故にあい死亡。その後神（リィーンさんのとこじゃない）と対面して「俺のせいでミスって殺しちまった、ごめんね」などと腹立つ顔で言ったので逆上して半殺しにした。その後チート能力を貰い、世間の男達を手に入れようとしている。・・・ちなみに彼女曰く「能力使うなど外道がする事」らしい。生前の名前は『魔星照奈（ませいてるな）』らしい。

所持能力
魔導の心得（ランクＥＸクラス）
アンリミデットエネルギー
武術の心得

特殊技

死の舞い踊り（しのまいおどり）：舞い踊る鞭が敵をも踊らされます。

咲き散る花びら（さきちるはなびら）：一輪の花（花の種類によって効果が違うらしい）が鞭となって相手を倒しまくる。

乱刃連装舞（らんばれんそうまい）：台風の如く襲われる鞭は相手を逃さない。

魔砲突き（まほうづき）：一突きでは嘔吐では済まないようです。

刃屯大旋風（バトンだいせんぷう）：いくつもあるバトン（魔法で作られたもの）が敵に向かって飛んでいく。

妖魔粉砕・竜王撃（ようまふんさい・りゅうおうげき）：竜王を一撃で沈めたと言われる技。

薔薇の玉砕弾（ローズ・ブレイカー）：撃たれたらバラが咲き散るように…

愛の薔薇咲き（あいのばらさき）：薔薇の種が力を吸い上げて咲き乱れる

相愛の十字砲（そうあいのじゅうじほう）：着弾地点から愛の十字架を拝められるでしょう

～ジャンヌ・デビリアス～

髪：長い銀髪

目：赤

服：初登場ではシャーマンキングのジャンヌの鎧。時折いろんなコスプレをするらしい

年齢：１５歳

３サイズ：８７／５１／８０

体重：血で濡れている

性別：♀

種族：コスプレマスター（転生者）

魔力光：白金

好き：コスプレ、レーティアお姉ちゃん、可愛い子

嫌い：？？？

性格：コスプレ大好き、甘えん坊な感じ

レベル：７０００

得意武器：シャマッシュ（形状は決まってないが来ているコスプレで違うらしい）

スキル：コスプレイヤー（来ている服によって能力を変える）

夢魔変化（リリス・フォーム）（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）

夢魔の性欲（サキュバスハート）（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）

夢魔吸引（リリス・アブソーバー）（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を

変える）

詳細：姉のレーティアと同じく転生した一人。生前は姉と同じく人気者だったが、神のミスによって死んでしまった。だが彼女はコスプレが大好きだとの事。彼女は生前母親と姉から着せ替え人形のようにされていたが、そのせいか自分から着せ替えにはまり、更にはアニメや漫画のコスプレを楽しむ始末という末期な感じになっている（その時姉のレーティアは後悔したらしい）。転生後なのは達とラブラブランデブーな生活（というよりコスプレさせようと思っている）をしようと考えている。ビビと手を組んでともに愛の架け橋（ラブラブ・ロード）を立てようとしているらしい。余談ではあるがドMな性格をしているとかそうでないのか。生前の名前は『魔星水華（ませいすいか）』らしい。

所持能力

魔導の心得（ランクEXクラス）

アンリミデットエネルギー

武術の心得

ジャンヌのオリジナル特殊技

魔獣召喚（まじゅうしょうかん）：ジャンヌの脳裏にある魔物を召喚できる。

マスターアルテマブレイカー：幻想のマスタースパークをアレンジした技。

フォーサイドイリュージョン：フランの使う四人分裂と同じ。

ディバインカリバー：星光の剣を放つ魔法。エクスカリバーと威力が同じ。

固有結界・聖女の夢の世界（ジャンヌズドリーム）：ジャンヌが作り出した固有結界。ここ

ではジャンヌの思考通りにさせる世界。相手にコスプレさせたいと願ってこの技を覚えた。余談だがこれで彼女自身が≪絶対自重≫されるために作ったとさせるがまた別の話。

～シャル・ノイシュバンシュタイン～

髪：紅色のロング。踵まで届きそう。
目：赤
服：アルカナハートのシャルラッハロートの服
年齢：２２歳
３サイズ：９２／５４／８３
体重：かじりとられた。
性別：♀
種族：改造生命体（転生者）
魔力光：赤黒
好き：戦い、じゃれあい、花、強い奴、面白いこと、食い物（特に肉）
嫌い：つまんないこと、卑怯者
性格：若干戦闘狂な感じ。
レベル：９９９９
得意武器：なし
スキル：ドッペルゲンガー（体を何でも変化できる）
詳細：前世では退屈過ぎて身勝手に転生した女性。しかしある研究者に捕まり研究の実験隊となって不死身の体を手に入れてしまった（本人いわく、痛かったとのこと）。体を変形させたりそれで攻撃したりも出来るようになった。元から得た能力はニードレスのフラグメント、ワンピースの悪魔の実、とあるの超能力全部だけである。なお彼女は食に関して通であるらしい（トリコ的に）（更にシャマ

パイを平気で食べれると言う胃袋を所持）。容体はアルカナハートの髪をおろしたシャルラッハロートをイメージ。

所持能力
魔導の心得（ランクＥＸクラス）
アンリミデットエネルギー
武術の心得
モンスターソウル（フェアリーテイルでいるサタンソウルみたいなもの）

～ギルシア・アダマント～

髪：蒼よりの銀髪
目：赤
服：ニードレスのアダム・ブレイドの服
年齢：２５歳
体重：７０キロ
性別：♂
種族：最強神父（転生者）
魔力光：銀
好き：女の子（特に妹系）、戦い、金
嫌い：おせっかいな女、面倒事
性格：ロリコンな性格（本人は否定）、そしてバトルマニアック
レベル：９０００
得意武器：なし
スキル：ゼロ（相手の能力を覚える。フラグメントだけでなく魔法

も可能）
詳細：神様のミスで死んでしまった転生者。転生前から小さな女の子を愛でる癖があるため周囲からロリコンと呼ばれている。容体はニードレスのアダム・ブレイドそのもの。

～リアス・グリオン～

髪：腰までの真紅（アホ毛付き）
目：青
服：ハイスクールD×Dの女子制服
年齢：２３歳
３サイズ：９３／５４／８２
体重：引き裂かれています
性別：♀
種族：魔族譲（転生者）
魔力光：紅
好き：一緒に抱いてくれる人形（男）、甘いもの（けど辛いのもいける）、イッセー
嫌い：下僕（特にイッセー）を傷つけるもの、権力者
性格：リーダーシップ的な性格。楽しみを求めようとする？
レベル：９０００
得意武器：なし
スキル：魔族姫の威厳（隣接する男性キャラのステータスが上昇する）
夢魔変化（リリス・フォーム）（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）

夢魔の性欲（サキュバスハート）（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）
夢魔吸引（リリス・アブソーバー）（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変える）
詳細：現世で楽しみを見いだせないことから自殺した転生者。転生後、メテンズギルドに勧誘され、イヴィル軍を戦う指揮官兼戦闘員となった。さまざまな魔法を繰り出すことが出来る。寝るときはいつも全裸になるのが玉にキズ。弟であるイッセーが大好き（おっぱいハーレムを目指すイッセーを影ながら応援しているらしい）。容体はハイスクールD×Dのリアス・グレモリーである。

～イッセー・グリオン～

髪：ハイスクールD×Dの一誠の髪
目：蒼
服：ハイスクールD×Dの男性制服
年齢：２１歳
体重：５７キロ
性別：♂
種族：魔族騎士（転生者）
魔力光：ブラッドカラー
好き：リアスお姉ちゃん、おっぱいハーレム
嫌い：リアスお姉ちゃんを傷つける奴、権力者、女の子を傷つける奴
性格：正義感の強い男の子
レベル：８６００
得意武器：神器（拳かつ鎧）
スキル：デビルズハート（敵を倒すとステータスが上昇する）

ブースデッド・ギア（ステータスや物理物などを倍加させる（１０の攻撃力を１００にあげる・リンゴを１つから２つにする等））
詳細：姉と同じく夢が実現できないことに自殺した転生者。その後能力を手に入れてイヴィル軍を撃退する戦闘員となる。姉をはじめとしておっぱいハーレムを実現させようと燃えている（ただし、女性が好んでいる人がいるなら手を出す気はない）。良く姉のリアスの絡まれることが多いが、本人は満更ではない様子。容体はハイスクールＤ×Ｄの主人公一誠である。

～レオン・バステット～

髪：腰までの銀髪
目：金色
服：ＤＯＧＤＡＹＳのレオンの戦闘服
年齢：２１歳
３サイズ：９１／５３／８３
体重：切られた跡がある
性別：♀
種族：闘士姫（転生者）
魔力光：銀
好き：戦い、武器の手入れ、好敵手（ライバル）シグナム
嫌い：つまらないこと、卑怯者、デスワーク
性格：シグナムほどの戦闘狂
レベル：７９００
得意武器：いろいろ
スキル：戦闘魂（攻撃回数のよって攻撃力が上昇）
武器形成（さまざまな武器を作ることが出来る）

詳細：幼き頃過激な武闘派に育てられた転生者。そのせいか男勝りなしゃべり方が多く、強そうな奴を見かけたら構わず戦いを挑んで来ようとする（一応自重はしている様だ）。転生後は１０ｔの重りを持ちあげるパワーと武器を形成する力を手にした。なお死んだ原因は山道で足を滑らせたらしい

～カイム・ドラグニール～

髪：茶髪
目：赤
服：ＤＯＤのカイムの服
年齢：２７歳
体重：７０キロ
性別：♂
種族：狂戦士
魔力光：茶
好き：平穏、空、アンヘル
嫌い：イヴィル軍、卑怯者、命を簡単に奪うもの
性格：普段は温厚的だがいざというときはやる
レベル：９０００
得意武器：剣（バスタードソード、鉄塊）
スキル：ドラゴンズハート（ダメージを受けることによって攻撃力が増す）
詳細：幼き頃ある国の王子だったが、イヴィル軍のよって国が壊れ、両親を殺されたかなしい過去を持つ青年。イヴィル軍に対しての憎悪を抱いている。そして彷徨っているところをドラゴン・アンヘルと出会い、ともに戦うことを決意し、契約した。そのご、アテナス

率いるメテンズギルドに出会ってイヴィル軍を滅させることを誓う。
容体はＤＯＤのカイムそのもの。

～アンヘル～

髪：人間時では血よりも太陽よりも赤いロング
目：赤
服：人間時では赤いワンピース
年齢：１００００歳以上（人型では見た目２０歳）
３サイズ：１００／５５／８４
体重：約２０００００キロ（人型では６０キロ）
性別：♀
種族：ドラゴン
魔力光：真紅
好き：カイム、戦い、相手をいじること
嫌い：うっとおしいこと、うるさい奴
性格：カイムに対しては普通だが、それ以外では見下した言い方をする
レベル：９９９９
得意武器：なし
スキル：ドラゴンズハート（ダメージを受けることによって攻撃力が増す）
詳細：カイムの相棒であるドラゴン。当てもなく飛び回っているところをカイムと出会い、契約した。契約主であるカイムとは普通に接するが、それ以外では毒の混ざった言い方をするらしい。なお人型へと変身も出来、レーティア達よりもスタイル抜群である。容体はＤＯＤのアンヘルそのもの（３段階バージョン。カオスではなく）

。

～ユウカ・カザキリ～

髪：腰までの黒ポニーテール
目：赤
服：ハイスクールＤ×Ｄの女子制服
年齢：２１歳
３サイズ：９１／５４／８３
体重：潰れた…
性別：♀
種族：魔族女王（転生者）
魔力光：黒
好き：紅茶、相手をいじること、攻め
嫌い：不細工な男（オタク的な）、料理が下手な人
性格：優しい人の様に見えるが、極が付くほどのサディスト。
レベル：９９９９
得意武器：鞭、剣
スキル：女王様（隣接する敵男性キャラのステータスが下がる）
夢魔変化（リリス・フォーム）（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）
夢魔の性欲（サキュバスハート）（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）
夢魔吸引（リリス・アブソーバー）（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変える）
詳細：生前男達によって犯されて殺された転生者。手加減というも

のを知らず、問答無用でたたきのめすと言うドSっぷりがある（生前でやられたせいかもしれないが…）。情報性が強いのか持ち前のノート（彼女曰くデスノート）で秘密をしゃべって屈辱を陥れようとすることも。メンバーの中では最も危険な奴である。

～ナリア・レイド～

髪：髪をおろした銀髪のなのはをイメージ
目：青と緑のオッドアイ
服：なのはのエクシード（上半身）とアグレッサ（下半身）
年齢：１５歳
３サイズ：８８／５０／８０
体重：焦げ跡が…
性別：♀
種族：百合っ子娘（転生者）
魔力光：白
好き：百合、女の子、可愛い物、ビビ？
嫌い：男全般（心に決めた人では別らしい）、ビビ？、権力者
性格：百合っ小娘。ビビとはライバル（？）関係らしい
レベル：８０００
得意武器：双剣（フランティア）、ムチ
スキル：百合百合パワー（女性キャラ接近時、能力上昇）
詳細：アニメ、ゲーム、マンガをこよなく愛するオタク。「転生して百合世界を築きたい！」と心の中で望んでいるとなぜか家の上空に隕石落下（そして死亡）。そして転生できると知って百合ハーレムを築こうと燃えている。だが同じ百合好きのビビと出会って、お

互いライバル（？）兼百合友達として行動する。容体は髪をおろした銀髪のなのはをイメージ。

オリジナルキャラ設定（後書き）

真王「個性の多いキャラ達である」

銀時「多過ぎだろ！！」

〜予告〜

ナレーション「世界の危機が迫る様だが…」

第八十訓：ラスボスの対戦は準備すべし（前書き）

真王「今回はガメーバとの接触。そしてすべての原因であるあの男が現る！」

リアス「『リリカル銀魂』始めるわ」

～ガメーバの新銀河帝国～

『宇宙と女神と人間と』

第八十訓：ラスボスの対戦は準備すべし

リアス達を仲間に入れた銀時達、現在星船で移動中。

リアス「しかしあんたのとこって個性の多い奴らばっかね。ポーン移動」

レーティア「それを言うならメテンズギルドもそうだったじゃないの。ルーク」

リアスとレーティアはチェスで遊びながら話し合っている。

ギルシア「ビビた～ん！ナリアた～ん！俺の胸にダイブしてくれ～！！」

ビビ「一生男の胸に抱きつくかァァァァァァァ！！！！」

ナリア「貴様は永遠にくたばれェェェェェェェ！！」

ビビとナリアはギルシアから逃げている。

カイム「平和だな…」

アンヘル「本当にそう思うか？」

今見ている光景を眺めているカイムが呟き、ポケットサイズのアンヘルが突っ込む。

すると、目の前に巨大な顔の星があった。

新八「デカッ！！」

ネプテューヌ「この感じ…ガメーバの本拠地だね」

新八は驚き、ネプテューヌは見覚えのある顔の星を見て言う。

イーバ「こいつは参ったね…」

イーバはネプテューヌ達言う。

イーバ「この宇宙はあんたらの命運にかかってんだ。生きて帰ってくれよ」

銀時「ああ」

ネプテューヌ「わかったよ！」

ヴィヴィオ「いってきま～す！」

プリニー「ヴィヴィオ待つッス！」

イーバが言った後、ネプテューヌ達は飛んでいった。

イーバ（・・・気のせいかもしれないが宇宙だけじゃすまない気がするね…だけど頼んだよ）

イーバは不安を持ちながら祈る。

彼らが帰ってくるのを信じて。

ガメーバの新銀河帝国

ＩＢＧＭクッパの新銀河帝国ｂｙスーパーマリオギャラクシー２

（Ｓｕｐｅｒ Ｍａｒｉｏ Ｇａｌａｘｙ ２ Ｍｕｓｉｃ Ｅｘ

tended － Bowser's Galaxy Generator）

ガメーバの本拠地である帝国に足を踏み入れた銀時達。

銀時「オラァァァァァ！！！！」
ギルシア「どきやがれぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
ネプテューヌ「邪魔だよ！」
エリザベス『ナメンナゴルアァァァァァ！！！』
神楽「ホタァァァァァ！！！」
ユウカ「ア、ハハハハハハハハハ！！♪」
神「はっはっは～♪俺様達を止められるかな～♪」

上記の人たちは出てくる敵達をゴミまたはボロ雑巾のように蹴散らす。
一応他にもいるが。

新八「やる気いっぱいですね…」
リアス「あたしとしては楽でいいけど…」
カイム「おいおい・・・」
ヴィヴィオ「お姉ちゃんたちもパパもすご～い」
プリニー「規格外が多いッス…」

その後ろで新八たちがこんな会話をする。

そして敵を倒して数分後、ついに最後の門まで来た。
（決して手抜きではない！）

銀時「今地の文に余計なひと言があった様な…、で、やっときたわ

けだな？」
リアス「ええ、親玉がね」

銀時達は大きな扉を見る。

リアス「さて、みんな準備はいい？」
全員「おう（ああ）（はい！）（やるッス！）」
神楽「ウッス！準備は出来ましたぜ！」

リアスの言葉に全員が答える。
神楽はなぜか大きなリュックを持っている。

銀時「っておいなんだよそのリュックは」
神楽「準備アルよ。ホラ」

神楽がそう言ってリュックを開ける。
中はお菓子ばっか。

新八「なんでだァァァァ！！！何処の世界にラスボス前にお菓子持って行く奴がいるんだよ！！」

新八はありえないことに突っ込む。
グレイはこれを見て呆れ果てた。

銀時「おい神楽、お菓子は３００円までって言っただろ」
新八「銀さん注意するとこ間違ってます！」

今度は銀時に突っ込む新八。

ギルシア「ま、」

リアス「とりあえず」
レーティア「ラスボスの」
ビビ「とこまで」
転生者組「1、2、3、4・・・・・・遠足ダァ！」
新八「遠足ぅ！？」

ギルシア、リアス、レーティア、ビビの順番に言って、それぞれ準備体操をした後いろいろ装備して遠足といった。
新八は思わずシャウトした。
グレイはあきれてため息を吐いた。
・・・まぁとりあえず進もう。

王座の間

ガメーバ「ついに来たか」

王座の間でガメーバが座っていた。
ちなみに巨大化してない。

ガメーバ「なんだか見慣れん奴らもいるがいいだろう。さあ勇者よ！お前達の力を見せるのだ！」

まだガメーバは銀時達を勇者と勘違いしている。

銀時「だ～から俺達は勇者じゃねぇって言ってるだろ」
ネプテューヌ「何言ってるの銀さん、この奉玉を持ったあいつを倒

したんだから勇者じゃん」
銀時「イヤそりゃあいつらがやったんだよ」

銀時は否定するが、ネプテューヌが懐から『青龍の奉玉』をだしていうが、銀時はレーティア達をさして言う。

ガメーバ「ん？・・・おい、その勾玉は一体？」
銀時「あ？こいつはイヴィルってやつらが持ってたやつだよ」
ガメーバ「イヴィル…だと？」

ガメーバが奉玉を見てなぜか表情を険しくした。
銀時が説明するとさらに険しくする。
そして、ガメーバは納得した表情になる。

ガメーバ「そうか・・・ついに時が来てしまったということか…」
銀時「？どういうことだ？」

銀時達はガメーバの言ってる事が分からなかった。

ガメーバ「我が輩は探していたのだ。世界を救う勇者をな」
銀時「あ～はいそうで「銀さん話は最後まで聞く」いでででで引っ張るなっての！！」

ガメーバが語り始めると銀時がめんどくさそうに立ち去ろうとしてネプテューヌに耳を掴まれる。

ガメーバ「時にお主ら、イヴィルのついては聞いているのか？」

ガメーバが聞くとリアス達以外は首を振った。

ガメーバ「イヴィル、『悪魔』と名があるが、奴にとっては破壊者と呼んでいるらしい」
リアス「破壊者…？」
銀時「つーか奴って誰だ？」

リアスは考えるしぐさをし、銀時が尋ねる。

ガメーバ「奴は、イヴィルを従い、幾多の世界を破壊して行っている。今覚えている世界ではもう２０以上も消えてしまったのだ」
リアス「世界が…消えた！？」
カイム「・・・・・・・・・ッ！！」
銀時「え？何の話？全く付いていけないんですけど…」

リアスは驚き、カイムは険しい表情をしている。
しかし銀時達はちんぷんかんぷんな顔をしている。

ガメーバ「魔法の世界、科学の世界、魔物の世界、時代劇の世界、侍の世界、幾多なる世界がやつら、そしてあの男によって消滅させられているのだ」

長く語るガメーバの表情が少し切なさを感じる。

ガメーバ「時にそこの小娘、お主はなにが好きだ？」
ナリア「え！？あ、私はアニメ、ゲーム、マンガが大好きなの！特に『戦国乙女』とか！」
銀時「だから何の話してんだっつーの！！」

ガメーバがナリアに質問し、ナリアは応える。
銀時は分からない故に怒鳴る。

ガメーバ「世界にはもしものが存在することがある。たと言えるならその『戦国乙女』という世界。それは時代劇の登場人物が女性になったらの世界だ。その他に『科学と魔法が合わさった世界』『電子世界と融合した世界』『未来の違う世界』などＩＦの世界が数多く存在する。侍の世界に宇宙人がやってきた世界もそうだ」

銀時、神楽、新八「あっ！！」

銀時達よろず屋組は納得した顔になる。

ガメーバ「そしてこの世界もしかり、本来合わさることのない幾多の世界の住人が出会う世界もある」

ビビ（・・・もしかしてリリなのの世界にリトルバスターズとかディスガイアとかのキャラ達が出てるってことかな？）

ビビはガメーバの言葉に推測する。

ガメーバ「だが、奴は別次元世界を破壊し、何もかもを無にするつもりのようだ。そして奴はこの世界を標的にした。そう、奴は世界すべてを己の手一つで手に入れようとするのだ」

桂「自らの手で世界すべてをだと！？バカな！？そんなことが…」

ガメーバ「出来るはずがないと？だが、奴はそれをしようとしているのだ」

驚く桂をしり目にガメーバは続ける。

ガメーバ「そう、奴はもう、すべての世界そのものを支配しているということなのだ」

ガメーバの衝撃的事実にほとんど驚愕した。

銀時「つまりあれか？世界の危機だから勇者を探して、結局見つからないから自分から悪役になって探してたってのか？」

銀時がジト眼でガメーバを見る。
何やら怒り出しそうな雰囲気だ。

ガメーバ「情けないが、そういうことなのだ」

ガメーバは申し訳なさそうに言う。

？？？「本当に情けないデカブツだな。衝撃的告白して自ら負けにするなんてそれはいただけないな～？」
ネプテューヌ「な、何！？頭に声が！？」

銀時達の頭に男の声が聞こえた。

？？？「暇つぶしで色々回って見ていればどれもこっれも屑ばっかな匂いがするな。あ～、臭くて臭くて俺早くぶっ壊したいな～」
新八「な、なんですかこの重々しい声は？」
ノワール「…なんだか大きな憎しみごもった声を感じるわ…」
神楽「何言ってるアルか？私にはケダモノの声にしか聞こえないネ」

新八は汗を流し、ノワールも流すが、神楽は毒な事いう。

？？？「ハハハハハ！ケダモノっていうか！俺ちょっと悲しいかな～」
銀時「のぞき見する奴はケダモノで十分だ。とっとと姿を出したらどうだ？」

明らかに馬鹿にした言い方。

銀時は正体不明の男に向かって言う。
すると、黒い髪にキングダムハーツのアンセムのコートを着た男が現れる。

???「失礼なやつだな。ゴミくずの人間にどうこう言われる筋合いはないんだよ」

男はそういいながらも少しケラケラしている。

銀時「おめぇ、誰だ?」
???「こういうときは自分から名乗るもんだろ?坂田銀時」
銀時（……こいつ、何で俺の名前を・・・?）

銀時が聞くと男はそう返す。
だが男は銀時の名前を知っていることに銀時は疑問を抱く。

???「まぁあえて答えようか。俺のことはこう呼んでくれ、『森羅万象の神』ネオってね」
レーティア「森羅万象の神?」
ベール「ネオ…?」
カイム「・・・・・・」

男・ネオは自己紹介をして、カイムはなんだか殺意を放っている。

ガメーバ「この者こそが世界を破壊し、イヴィルを従え、すべての世界の支配者なのだ」

ガメーバがネオを見て言う。

カイム（こいつが、こいつこそが俺の、俺の家族や故郷の敵(かたき)!）

カイムはネオに剣を向けた。

ネオ「？何だお前は？」

カイム「俺はカイム、俺のことを知らないだろうが、貴様のイヴィル達によって俺の家族や故郷を壊されたんだ！」

ネオが会務を見て聞き、カイムは怒りの混ざったことを言う。

上記二人とリアスたち以外は驚いている。

ネオ「・・・あ～、そうかそうか、お前あの世界の住人だったのか～」

ネオは思い出したかのように言う。

ネオ「ご苦労なこったな～、わざわざ俺のために自分から殺されに来るなんてな」

カイム「！！！キサマァッ！！！」

ネオのチャラけた言動にカイムは怒りだして切り捨てようとすると、

リアス「待ちなさい！」

リアスがカイムの襟をつかんで止めた。

カイム「離せ！俺はこいつを！」

リアス「待ちなさいって言ってるでしょう！不意打ちを出したところで勝てると思ってるの！？」

カイム「何！？？」

カイムはジタバタと暴れていくが、リアスのお言葉に驚く。

ネオ「ほぅ？そちらのお嬢さんは状況判断がいいねぇ？俺の実力が見抜いたのかい？」

リアス「見抜けるにしろ見抜けないにしろ、私達が束でかかった所で勝ち目が薄いと感じたからね」

ネオは感心したかのように聞く。

リアスの一言に全員が驚愕している。

チート能力もってしても勝てないということに。

ネオ「はい大正解！そうとも！俺の能力『ポジティブ・フィードバック』なら貴様らの能力なぞ意味を成さないんだからな！」

自慢げに語るネオ。

銀時「ポジ・・・なんだって？」

リアス「ポジティブ・フィードバック、一度受けた技を倍にして返す能力。簡単なところ口で争っていると大喧嘩、挙句殺し合いをしてしまうという感じね」

銀時が『ポジティブ・フィードバック』のことを聞くと、リアスの説明に納得する。

ネオ「そのとおりだ。最終的にビッグバンへと向かう力。この力があるからこそ世界を壊せるんだよ」

ネプテューヌ「そんなことのために・・・どれだけの犠牲を出せば気が済むの！？」

ネプテューヌは悲痛な言葉を出す。

ネオ「さぁ？何せゴミくずの人間に犠牲なんて軽いもんだろ？」

だがネオは興味ない感じで返された。

ネオ「それにな、悪魔も天使も魔物も、人間と同じゴミくずなんだよ。存在するものこそ罪なんだよ」

神「ほう？その意見に大賛成だが、お前もゴミくずの一員に入ってないか？」

ネオの言葉に神が指摘する。

ネオ「言ったはずだ。俺は森羅万象の神、つまりあんな2流の神共よりも最上級の存在なんだよ」

ネオは神の言葉にばっさりと切り捨てる。

ネオ「さて坂田銀時、お前確か自分の武士道（ルール）を貫くって言ってなかったか？」

銀時「あたりめぇだろ。自分の守るものは自分で守る。それが自分（テメェ）の武士道（ルール）だ」

ネオの問いに銀時は答えた。

ネオ「ブラボー！お前“らしくもない”事言ってくれるじゃないの！」

ネオは笑いながらしゃべる。

だが“らしくもない”という言葉に引っかかった。

ネオ「こんなチャラけた男が“仲間を守れず救えなかった可哀想な侍”だとはね」
銀時「ッ！！！？？テメェ！なんでそれを！！？」

銀時は驚愕してネオに問い詰める。

ネオ「守るものは守るといいながら戦争のおかげで守るものを失っているのにかかわらず、おまえ自身はのうのうと生きている。何が武士道だ。何がルールだ。何が侍だ。結局貴様はただ口だけの臆病者ではないか。それだからお前達の師匠である吉田松陽（よしだしょうよう）もころさ・・・」

ガキィンッ！！！

皮肉に語るネオに銀時が切りかかったが、ネオが見えない何かでとめた。
しかもいつもの銀時とは違い、いつも表情に出さない“怒り”が現れていた。

銀時「・・・・・・・・・・せねぇ」
ネオ「？」

銀時の言葉にネオは耳を傾ける。

銀時「テメェに、師匠（せんせい）の名を言わせねぇ！！！！」

怒り状態の銀時。

ネプテューヌ（怒ってる・・・銀さん怒ってる！）
ヴィヴィオ（いつものパパじゃない・・・）

グレイ（なんだあいつ？妹が戦ったときよりも違う気を感じる・・・）

リアス（あれが白夜叉・・・）

神（ほう？こいつは面白そうだな？）

その銀時に上記の人たちは驚いているらしい。

ネオ「名を言わせねぇっていってもお前はそういう資格はないだろう？」

ネオは鼻で笑う。

銀時「・・・確かに俺は、かけがえのない仲間を守る事ができなかった」

思い起こすはかつて攘夷戦争で戦った仲間達。

そして仲間達はすでに屍になってしまった事も。

銀時「けどな、今も俺の大切なものを失わせるわけにはいかねぇ！」

そして思い出すは万事屋、真選組、たくさんのかぶき町の住人、ネプテューヌたち、なのは達機動六課、そしてフェイト。

銀時「だからテメェのような外道に、俺の、俺達の大切なものを奪わせねぇ！！」

桂「同感だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

銀時が宣言すると同時に桂が爆弾を投げて爆発させた。

桂「人は皆大切なものを守るために生きてきている。それを無駄に

破壊し、奪わせる外道はこの桂小太郎が天誅を下す！！」

桂は爆煙の中にいるネオに向かって刀を向けて言う。
桂も相当お怒りのようだ。

リアス「あの馬鹿！考えのなしに！」

リアスはこの光景を見て頭を抱えた。

レーティア「それが白夜叉というものよ」
リアス「わかってはいるけど・・・」

レーティアが言うが、まだ納得しかねるようだ。

リアス「・・・あ～もう！何だっていいけどあの馬鹿二人を援護しなさい！」

ジャンヌ・イッセー・レオン・カイム・ユウカ・ナリア
「おう（了解）！」

レーティア「フフッ、わかったわ」

リアスは半場やけになって指令を出した。
レーティアは笑って命令を聞いた。

ネオ「まったく、貴様らに大切なものなどあるのか？」

煙が晴れると、無傷のネオが宙に浮いていた。

銀時「あるさ、俺達の仲間と、自分（テメェ）の魂だ」

シルバーソウルを構える銀時。
ネプテューヌたちも臨戦態勢に入る。

ネオ「おろかなゴミくずめ、絶望に染まるがいい！！」

ネオは高々と言い放ち、銀時たちは戦いを始めた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リアス「今日のアシストはこの私、リアス・グリオンよ」

銀八「何で上から目線なんだよ・・・まいっか。ペンネーム『支配者』さんからの質問行くぞ。『質問です
ブランに質問

ゲーム業界で一番の偉そうな意見を言う事しかないお漏らしはする文字通り“ガキ”であるそんな自分を如何思いますか？（黒笑）』ってさっきからブランに対するいじめが多いなおい！！」

リアス「それじゃあこの質問は没ね。彼女そろそろ精神的にもあれだし。さて次はペンネーム『鳴神　ソラ』からよ。『マリオ「またな…」

ルイージ「沢山出たね；」

スネーク「今度は青龍か…朱雀はこっちで出たが…」

フォックス「あっさり倒したよな、マリオと神が；」

ネス「次回はどうなるのやら…新たに出た人達に質問『冥王についてどう思う？』」

クッパ「同じく質問なのだ『マリオに勝負を挑む勇気はあるか？』」

マリオ「おいおい、何だその挑発的な質問は…ビビ達転生者組みに聞くが…『冥王に称号を付けるならどんな感じだ？』」

次回を待ってます！』1と2を答えるならそうね。マリオとほぼ互角の力を持ってるわね。だからといってマリオに無闇に手を出すほど私はおろかじゃないわ」

イッセー「とってもきれいな人ですね。２つ目は僕もおねえちゃんと同じで」

レオン「ほう？面白い！勝負しろ！（何の戸惑いもなく）」

カイム「冥王が本名なのか?後めんどくさい」

アンヘル「カイムと同じだな」

ユウカ「へぇ～、面白そうな方々ですわね～♪（黒い笑みが見える）」

ナリア「この人も百合の仲間に・・・・・しようとしたらなんか赤い人に殺されそうなのでやめます」

銀八「んで、あいつの称号はこうなった」

紙に、『なのはモドキ?』『なのなのちゃん』『チートブレイカー2号』『ヴィヴィオの師匠?』と書かれている。

リアス「それじゃあ『鳴神　ソラ』廊下にたってなさい。次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんよ。『上条
「何か、凄い新キャラ多いな・・・・」

一方通行
「それは俺等も言えねェだろ?」

沖田に質問。
僕の小説『万時屋奇譚幕』第八十七話の土方さんを見てヤッパリ内心嬉しいですか?

真王さんに質問。
ネプテューヌの詳細を出来ればメールで送ってくれませんかね?
少しでも彼女の出番を増やしたいので。

土方に質問。
こちらの自分に何か言いたい事はありますか？』」

真王「ネプテューヌのことはメールで出しましたよ。そしてしっかり活躍させてください」

沖田「これは面白そうですねぇ～エロ方さん♪」

土方「テメェ切るぞ総吾ォォォォォ！！」

沖田と土方はけんかした。

リアス「私も見たけど一体どうやったら破けるのよあの服？まぁいいわ。『亀鳥虎龍』廊下に立って服を破きなさい」

真王「おいまて、まあいいか。ペンネーム『黒龍』さんいくぞ『銀時「なんかどんどんどんどん新キャラ登場してんじゃねぇか」

ソラ「真王も裁くの大変だな」

黒龍「転生者要素を俺も加える事決めましたけど、ここまで個性的なキャラを考えられる真王さんも凄いですね」

銀時「つうか、性格に難がありすぎてマトモな奴がほとんどいなけどな」

黒龍「ああ、戦闘狂だったり、巨乳ハーレムだったり、百合だったり、ドSだったり・・・・・・」

ソラ「普通な奴が思いつかないな」

銀時「めちゃくちゃだな」

黒龍「そこが、ギャクって所ですね」

銀時「いや、そう言う解釈でいいのかよ？」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1．ビビに質問。あなたと完全にキャラ被りした転生者が出た事についてどう思いますか？

2．真王さんに質問。キャラが多すぎて、居る事を忘れてしまったキャラはいますか？

3．最近リリカルキャラがかなり存外になっているのは気のせいですか？特にナンバーズあたりとか

黒龍「今回はここまでです」

銀時「じゃあな」

ソラ「またな」『いやそんな事ないです・・・・・・・・・って言ったら嘘になりますね。定春忘れてました」

銀八「ぅおい！！」

真王「後リリカルキャラは存外じゃないッス！」

リアス「まぁその変はどうでも言いとして、ビビ？」

ビビ「ナリアの事？あの子は私に百合友達よ！（もちろんライバルだけどね）」

真王「はいでは『黒龍』さん、廊下にたってなさい」

リアス「次回は私の弟、イッセーがやるわ。じゃあね」

第八十訓：ラスボスの対戦は準備すべし（後書き）

真王「次回はネオとの対決が始まる！そして銀時達は苦戦を持ちいられる！」

イッセー「次回『神様に喧嘩売ると罰当たりになる』テイクオフだ」

第八十一訓：神様に喧嘩売ると罰当たりになる（前書き）

真王「銀河編最終回！果たして銀時達はネオに勝てるか！」

ネプテューヌ「そしてあの二人が帯入り参加するよ」

イッセー「よし！タイトル変わったが、『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　～銀女神鎮魂歌～』始まるぞ」

第八十一訓：神様に喧嘩売ると罰当たりになる

前回のあらすじ

ガメーバの衝撃的な事実に驚いた銀時達の前に張本人であるネオが現れた。
そしてネオの言葉に怒り出した銀時はネオに勝負を挑んだ。

ＩＢＧＭ　ＶＳアンセムｂｙキングダムハーツ（Ｔｈｅ　ｄｅｅｐ　Ｅｎｄ　ＥＸＴＥＮＤＥＤ　ｋｉｎｇｄｏｍ　ｈｅａｒｔｓ．ｗｍｖ）

銀時「ウオラァァァァァァァ！！！」

銀時がシルバーソウルでネオを切り捨てようとする。
が、ネオは軽々と避けた。

銀時「オラララララララーーー！！」

今度は連続攻撃。
だが見切っているかのようにすべて避けている。

新八「ぎ、銀さんの攻撃が当たってない！！？」
リアス「ちっ、神を名乗っているだけじゃないみたいね」

新八が驚き、リアスは舌打ちする。

ネオ「今度は俺の番だ」

とネオがなにもないところで裏拳を出す。

銀時「ブファッ!!」

すると何もないのに銀時が殴り飛ばされた。

ネプテューヌ「!!銀さん!!」

ネオ「潰れろ!」

ネプテューヌが悲痛の声を出すが、ネオがトドメと言わんばかりに拳を撃つ姿勢で、放った。

ガガガッ!!

が、ギルシア、カイム、レオンが見えない何かを止めた。

ギルシア「おい神さんよぉ。な~んも見えないもんで攻撃なんてずるくねぇか?」

ネオ「知らん。俺がそんなことを答える義理はない」

ギルシアが言うと、興味なさそうな感じで返すネオ。

レオン「イヤ、私には分かる。“目に見えぬ守護霊(インビジブル・ガーディアン)”といったところか?」

ネオ「ククク、さすが戦闘経験の豊富な奴には気付くか」

レオンが見抜いたかのように言い、ネオが笑って指を鳴らすと、ギルシアが止めた何かが姿を現した。

それはキングダムハーツのアンセムを守っている守護霊みたいな黒い奴だった。
その黒い奴は言ったんギルシア達から離れてネオの近くに戻る。

ネオ「フフフ、どうかね俺の最高傑作たる『ジェノサイダー』は」
カイム「最高傑作だと？」
レオン「大方死体を改造して兵器にしたんだろう」

笑って語るネオにカイムは眉を潜め、レオンが黒い奴の正体を暴く。

銀時「テメェ…どんだけ人の命を奪えば気が済むんだよ！！！」

銀時はこれでもかというほどネオに怒りをぶつける。

ネオ「知らんな。人間はどうしようもないゴミクズだからそんなもの考えた事もないな」

だがネオは軽く流した。

ネプテューヌ「人はゴミなんかじゃないよ！信じあい、助け合い、ともに笑顔で笑うこともあるんだよ！」

そんなネオ言葉にネプテューヌが否定を出す。

ネオ「信じあう？助けあう？ともに笑う？・・・・・・・・・よくもそんなことが抜け抜けと言えるなぁぁ！！！！？？」

ネオがネプテューヌの言った言葉を復唱した後、ネオが珍しく怒りの顔になった。

ネオ「ならお前達人間は“あの時”なにをしていたぁぁ！！救うべきものを、殺すべき物を、信じるべきものに何かしたのか！？イヤ何もしていない！！人間はただ欲望を満たすだけで人を無視し、人間を道具の様にして捨ててきた奴らを信じろと言うのか！！？」
銀時「？？何言ってんだテメェ？」

ネオの言ってる事に何の事だかさっぱり分からない銀時達。

ネオ「・・・人間はただ欲を満たすために疑い合い、殺し合い、ねたみ、見捨てていく存在だ。そんな奴らまで信じろだなんてお前達人間の頭も屑以下、イヤ人間ですらないな。やはり人間というものは存在するに値しないな！！」
ネプテューヌ「ガァッ！！？」

ネオがよく分からないことをかかっていると黒い奴がネプテューヌの首を掴んだ。

銀時「ネプテューヌ！？…放しやがれこの…」
ネオ「吹きとべ！！カオスストーム！」

ボオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

銀時「グォォォォ！！」
新八「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
ジャンヌ・ビビ・ナリア「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
ギルシア「く、こいつは…！？」
リアス「なんて強力な…！」

銀時がネオに近づこうとして、ネオが右手から禍々しい魔力弾を放って銀時達を襲った。

ネオ「・・・フン」
ネプテューヌ「グァッ！！」

ネオが鼻を鳴らすとネプテューヌが投げ飛ばされる。
するとネプテューヌに黒いバインドがつけられた。

ネオ「良く見るがいい、守るべきものが突然奪われる光景をな！！」
全員「ネプテューヌ（ねぷねぷ）（ネプ子）（お姉ちゃん）！！」
銀時「ネプテューーーーーーーーーーーーーーーーヌ！！！！！！！！！」

ネオがネプテューヌに向けて黒い奴の拳がネプテューヌの顔を捕えた。
全員と銀時が彼女の名前を呼ぶ。

ネプテューヌ（そんな…ここまでなの？・・・コンパ…アイちゃん…ノワール…ブラン…ベール…ネリア…銀さん！！）

ネプテューヌは死を覚悟して目を瞑った。

？？？「アホ、ここで死なせネぇよ表の私」
ネプテューヌ「え？」

聞き覚えのある声にネプテューヌは目を開けた。
するとネプテューヌの体から黒い手が表れて黒い奴の攻撃を止めた。
そしてそこからネプテューヌそっくりの黒い奴、ダークネプテューヌが現れた。

新八「誰ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？」

銀時「うおっ!?何だこいつ!?黒いネプテューヌ!?黒いネプテューヌだ!」
桂「なんと!?」
神楽「ネプっちそっくりネ。刺青以外は」
エリザベス『たしかに』

新八、銀時、桂はダークネプテューヌに驚き、神楽とエリザベスは見ている。
対面済みのレーティア、ジャンヌ、ギルシア、シャル以外は驚いた表情をしていた。

ネオ「きさま・・・俺を邪魔するとはな」
ダークネプテューヌ「アホめ、あたしの半身を殺されてはよくないからな」

そういってエックスセイバーそっくりの黒い剣、ダークセイバーを出してネオに向ける。

ダークネプテューヌ「だからオメェというイレギュラーは消えてもらわなきゃな」
ネオ「フン、貴様ごとき力で俺にかなうと?」
ダークネプテューヌ「思っちゃいねぇよ。けど代わりにお前に凄い奴が来るぞ?」
???「カメンライド!!ゼ・ゼ・ゼ・ゼ・ゼ・ゼロ!!」
???「ウオリャアアアアアア!!!!」

ネオは鼻で笑い、ダークネプテューヌはにやりと笑うと、何処からか機械音と男の声が聞こえた。
ネオはとっさにその場を離れ、回避した。

ネオ「これはこれは、『赤き異常殺し（チートブレイカー）』と『破壊神』が私に御用があるとは」

ゼロUF「当たり前だ！俺はテメェの様な偽神をこの場で存在させる気はねぇ！！」

冥王「っていうか私は破壊神じゃなくて冥王なの～」

ネオが珍しそうにいい、ウルトラフォームの仮面ライダーゼロ（正体はマリオ）が今までよりもすごい殺気を放って言う。

あと冥王は修正を行った。

リアス「異常殺し（チートブレイカー）！？自分勝手な転生者を容赦なく地獄送りにさせたあの！？」

レオン「ほう？」

ナリア「更にはその転生者を問答無用で拷問ともいえる地獄の修行をさせて再起不能にするまで永久に地獄を味あわせるあの伝説の転生者ハンター！？」

ゼロUF「おい、それそこまでやらないからな！」

リアス、レオン、ナリアはゼロの存在に驚いたがナリアの言ったことにゼロは否定する。

ネオ「やれやれ、俺も随分と歓迎されているな」

銀時「だったらここで諦めるか？」

ネオはやれやれなしぐさをして銀時が言う。

ネオ「それは断る。だが俺はここで計画を途絶える気はない。悪いがお前達はこの場で消えてもらう」

ネオはそう言って黒い空間から何かを出した。

そるは丸い球体の機械だった。

カイム（ッ！！？あ、あれは…！！）

カイムはそれを見て目を見開いた。

銀時「んだその丸いのは？」

銀時達はその丸いのを見て首をかしげる。

カイム「気をつけろ！！そいつは・・・俺の故郷の世界を破壊した奴だ！！」

全員「え！？／何！？／嘘！？／マジかよ！？／なんだって！？」

カイムが叫んで全員が驚愕した。

ネオ「そうだ！！これこそ世界を破壊するための兵器『亜次元爆弾』だ！！そして貴様らはこの爆弾の前で消えてなくなるがいい！！」

ネオが行ったあと亜次元爆弾が作動した。

制限時間は何と１０秒！

それと同時にネオはどこかへ消えていった。

銀時「オイオイオイオイマジかよ！！何とかしろよ！！」

－９－

神楽「終わりネ！もうこの世の終わりネ！！」

－８－

リアス「クッ！レオン！」

―７―

レオン「ダメだ！完全に固定されている！」

―６―

ギルシア「しかもパワーがでねぇ！」

―５―

新八「うわぁぁぁ！！もう時間がないぃ！！」

―４―

ユウカ「・・・万事休すね…」

―３―

マリオ「クソ！今からでも間にあわねぇ！」

―２―

ヴィヴィオ「ママ・・・パパ・・・」

―１―

プリニー「ば、爆発するッスーーーーーーーーー！！！！！！」

―爆破(ゼロ)―

ピカッ!!ドガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!

一つの星が亜次元爆弾により、この世から消滅した。
そして銀時達の命運は・・・・・・・・・生きていた。

ガメーバ「・・・九死に一生だったな…」
イーバ「あたしド肝が冷えたよ…、絶対に二度とやらないね」

何とガメーバとイーバがギリギリのところで銀時達を救い出し、脱出したのだ。
銀河帝国があった場所には、禍々しき黒い物体が宙に浮いていた。

星船

ネプテューヌ「もう行くの?」
マリオ「ああ、今回のことは対応できなかったが、次こそはあの偽神をぶっ飛ばす」
冥王「戻って仲間たちと会議するの」

マリオと冥王が元の世界へ帰ろうとしている。

銀時「そうか、じゃあな、頑張ってけよ」

マリオ「おう」
冥王「また会うの～」

マリオと冥王と別れた。
そして銀時はその場に座り込んで考えた。

銀時（・・・“あの時”って、一体なんだろうな…）

ネオが言ったあの言葉を思い出す。

ダークネプテューヌ「人は大切な物を失われた時、奪われた人物は復讐鬼と化す。人間達の中でよくあるケースだ」

すると隣にダークネプテューヌがこんなことを言い出した。
銀時は首を向かず、ある仲間だったあの男を思い出す。

ダークネプテューヌ「ホラ、早く立てよ。あんたの恋人達が待つ居場所が見えたぞ」

ダークネプテューヌが銀時の肩を叩く。
目の前には大きな青いきれいな星が見えた。

プリニー「ミッドチルダッス」
ヴィヴィオ「帰って来たんだ！」
リアス「あれが・・・」

プリニーとヴィヴィオがはしゃぎ、リアス達は感心している。

桂「別に口を出す気はないが、銀時、たとえ過去の仲間を救えなかったとしても、今生きている仲間達を守らなければならない。そう

だろ？」
銀時「・・・だな。俺には守りべきもんがあるんだな」
横から桂が銀時を励まし、銀時は言う。
銀時「俺は絶対に守り通してやる。あいつらも、そしてフェイト達やネプテューヌもな」
桂「フッ、それで良い」
桂はそれを聞いて安心したかのように笑う。
チリチリチリチリチリ・・・
すると星船に赤い何かが出る。
しかもなんだか熱い。
銀時「…なにこれ？ちょっとぉ！？熱いんですけど！？」
ネプテューヌ「それが、止まり方忘れちゃった＜（＾＾；）」
ネプテューヌがバツの悪そうなことを行った。
簡単なところ、現在ネプテューヌ達は落下中だ。
全員「アホオオォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」
全員はネプテューヌに突っ込みながら落ちていった。

ミッドチルダ・機動六課

シャーリー「八神部隊長！！」
はやて「な、なんやどうした一体！？」

はやてがのんびりしていたところでシャーリーがすごくあわてた様子で部隊長室に入ってきたためはやても慌てる。

シャーリー「ミッドチルダ上空から…隕石が落下してきます！！」
はやて「な、なんやてぇぇぇぇぇぇ！！！！？？」

外

六課全員が外へ出て、なのは達は空を見上げている。

スバル「あ！あそこです！」

スバルがある場所へ指差す。
その先には落ちてくる隕石が。
なのは達は撃墜態勢に入る。
すると、隕石の軌道がずれた。
六課にあたらず、近くの海に落ちた。
なのは達は驚きつつも、落ちた隕石に近づく。

銀時「てめ！一体何考えてこんなことになっちまったんだよ！！俺ちょっぴり涙目になっちまったじゃねぇか！！」
ネプテューヌ「イダダダ！ごめんよ銀さん！」

コンパ「びしょ濡れです…」
ノワール「ケホ、海の上みたいね…」
プリニー「・・・・・・・・・・」
ヴィヴィオ「ああ！プリニーさんの口から出してはいけないものが！」
リアス「・・・ここまでむちゃくちゃな人は初めてだわ！」
レーティア「人のこと言えるかしら？」
ナリア「あぅ～・・・」

落ちてきた隕石…いや、星船から銀時達が出てきた。

なのは「え？銀さん？」

フェイト・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛「銀さん（銀時）（兄さん）！？」

イストワール「帰ってきましたか」

なのは達銀時ラバーズは驚き、イストワールは安心したかのように呟く。

銀時「あ、お、おまえら「銀さん（銀時）（兄さん）ーーーー！！」ってやっぱりかいぃぃ！！」

ラバーズは銀時を見るや否やいきなり抱きついてきた。
猿飛は投げ飛ばされたが。

ダークネプテューヌ＜感動の再会ってやつだな＞
ネプテューヌ「もう一人の私？」

ダークネプテューヌ＜あたしはいつでもお前の中にいる。今寝とくからな＞

いつの間にかネプテューヌの体の中にいるダークネプテューヌは眠りに入った。

ネプテューヌ「・・・なんだかんだいって、私、これが一番好きなんだ」

ネプテューヌはそう言って騒がしく楽しい空間へ走っていく。
余談だが新しく来たリアス達を見てラバーズがヤンデレ化したり物凄い勢いでファンクラブが出来たりと凄いことになるのはまた別の話。

【銀河編：ＥＮＤ】

？？？

？？？「また一つ世界が消えてしまいましたか…」

一人の女性が悲しくつらそうな目をしていた。

？？？「このままでは、あの人の身が危ない。どうか彼を、光ある想いに届いて…！」

女性はある人物を思い、祈っていた。
だが復讐神と化したあの人物には届くことはなかった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

イッセー「よう、リアスお姉ちゃんの弟・イッセー・グリオンだ」

銀八「んじゃ行くぞ変態野郎」

イッセー「誰が変態だ！」

銀八「おっぱいハーレム狙ってる時点で変態だろうが」

イッセー「俺は変態じゃない！おっぱいハーレムが好きな男だ！！」

銀八「そこは否定しないのかよ！！・・・まあいいや。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ。『四女神に質問
自分達で一番強いのは誰だと思ってますか？
一番美人なのは誰だと思ってますか？
一番マヌケなのはやっぱりネプテューヌだと思いますか？（黒笑）』」

真王「それは私が応えよう。一番強いのはネプテューヌ。美しさならベールですね。で、間抜けというよりアホはネプテューヌで」

イッセー「おいおい；」

銀八「『支配者』さん、廊下で立ってなさい」

イッセー「じゃあ次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『ゼロＵＦ「出て来やがったか…（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

ルイージ「殺気全開！！」

クッパ「ホントこの時のマリオはやばいのだ…」

ゼロＵＦ「皆！頑張れよ！」

フォックス「転生者組みに質問『マリオの殺気を受け続けられるか？』」

ルイージ「同じく質問『兄さんのトレーニングと言う名の拷問はどう思いますか？』」

ネス「真王さんに質問『ギャラクシー編が終わったら何編にするの？』」

次回を待ってます！

ゼロＵＦ「偽神ぶちのめせよ！」『１と２を順番に答えるならおれはわからない。そしてあれはちょっと勘弁してくれ…」

リアス「う～ん、まぁ耐えられそうね。後それ参考にしようかしら？」

レオン「私は断然耐えられる。そしてそんな感じのトレーニングは時々やってるぞ」

カイム「やってるのか！？俺は転生者じゃないから答えないぞ」

アンヘル「われもだ」

ユウカ「私は平気よ。それにしてもそのトレーニングって・・・ウフフ♪」

ナリア「さりげなく不安なんですけども！？私はぎりぎりぐらいで

あれはいやだよ！」

レーティア「私は耐えられるけどあれはやらないわ」

ジャンヌ「お姉ちゃんと同じく」

ギルシア「俺は大丈夫だが、あのトレーニングは能力だめか？」

シャル「私もだけどあれやりたくない」

グレイ「どうでもいいしめんどくさい・・・」

ビビ「・・・・・・・・・（嫌がっている）」

真王「そうですね。短編の後『ゲイム祭編』を予定しています。その後『かぶき町異変編』、『リリ銀パーティー編』、『戦艦脱出編』のどれかを予定しています」

イッセー「っておい！ネタ晴らししてるじゃん！！」

真王「いいんだよ。面白くなるなら。『鳴神　ソラ』さん。次を期待してください」

銀八「次はペンネーム『ケン』さんからの質問だ。『統夜「神が出て来たな・・・」

そうだなぁ～・・・お前と遊輔、はやてはレーティア達並にチートへ成長する・・・

統夜「えっ・・・マジかよ・・・」

遊輔「だが精進あるのみ・・・」

はやて「せやな・・・転生者達に質問や『マーブルＶＳカプコン３に出てくるギャラクタスと戦い勝てる自信ある？』」

統夜「て事は・・・俺や遊輔、はやてはとあるの聖人やＤＭＣのデビルトリガーのようなものに匹敵する強さになるの！？」

そうなる・・・成長してのチートは悪くない・・・先輩であるシャルが最強だけどな・・・』あ、すまん。作者はそのゲームもってないし知らないんだよ。だから『ケン』さん、申し訳ございません」

イッセー「えっと次はペンネーム『黒龍』さんから。『銀時「ついに出たな、嫌な感じの神・・・・」

黒龍「あんな神様は便所紙様で十分でしょ」

銀時「上手いｗｗｗｗｗ！」

ソラ「まァなんとかなるだろ」

黒龍「しかし、あんな凄い能力の敵が出てきてもまだ採集決戦じゃないから驚きです」

銀時「最後は一体どうなんだろうな？」

ソラ「俺が知るか」

黒龍「まァトークはこのくらいにして質問いきますか」

1．ネプテューヌに質問。あなたが一番嫌いなモノはなんですか？

2．ブランに質問。黒神さんの所でもこっちもで極悪料理を味わった事について一言お願いします（黒笑）

黒龍「今回はここまでです」

銀時「二番目はめっちゃSだなおい」『」

ネプテューヌ「食べ物ならピーマンだけど、仲間が傷つく事だよ！」

ブラン「テm「シット！」ウッ！・・・（気絶）」

ユウカ「暴走したら手がつけられないと思ったので黙らせました♪」

真王「・・・何も語るまい。『黒龍』さん、廊下に座ってなさい。最後だ。ペンネーム『リィーン』さんだ。『どうも、お久しぶりです、リィーンです

神「いよう（。ω。）ノ　前回は取り乱しちまったぜ」

取り乱し過ぎです

神「フヒヒｗｗｗサーセンｗｗｗ」

（反省の色なしですか、そうですか……ハァ）

神「さて……俺と同じ神様が登場だが……まさか、俺様大活躍の予感？」

無いかと……メタな発言をすると、大抵の作者の場合、自分のキャラを可愛いがるので、おそらく、あのネオというキャラは、真王様にとって、最強を誇るモノ……貴方、もしかしたらやられるかも、ですよ?

神「メタな事なら、仕方ねぇじゃん。それに、俺がガチになるのは、俺が認めた奴だけだ」

あの旅人と、蒼き青年、の二人ですよね

神「あぁ。あいつら相手だったら、俺は超本気になる。ってか、そいつら以外に本気なんて出したら、あいつに失礼だ」

旅人、ですか

神「あぁ。アイツ以外とは、真剣に戦いたくねぇ。それが、ライバルってもんだろ?」

……貴方にそういった相手を作った甲斐、在りましたね

神「あぁ……でだ。まぁ、そうだな。ところで、ネオって奴の恰好、俺のパクリか?」

あぁ、そうですよね。確か、貴方の服装って……

神「ゼムナスのコート。あれ、俺もそうじゃねぇ?」

ですねー。神様イコール、あのコート。という認識でも出たのでしょうか?

神「なぁにを言うか。俺が神々のファッションセンスの最先端を行ってただけだ。時代がようやく、俺に追いついたってことだ！！！」

はいはい、自慢乙

神「オイテメェ、なんか今日は豪気だなぁ、えぇ？」

さ、さぁ、なんの事でしょうか？　あ、あはは……

神「ムゥ～……っと、まぁそんなことよりも、ちょっとネオに質問」

？

神「お前にとって、神とは種だと思うか？　それとも、類だと思うか？」

……なるほど、そう言う事ですか

神「作者なら、分かるな。その意味」

えぇ、まぁ……つまり、神というのは、人類や鳥類、魚類と同じ扱いだと思うか、という事ですね。さっきのと合わせて言うと、“神類”というべきだろうか、という事ですね

神「そう。ただ人類と同じ姿、まぁ中には竜や獣類みたいな姿の奴もいるが……ただちょっと変な力が使える種類と考えるかどうか。という質問だ。ちなみに、俺はそうも考えるがな……あぁ、それともう一つ」

まだあるのですか？

神「お前、求道者のままでいいのか？」

……はい？？

神「う～ん、分からんか？……ネオ。お前は世界を支配し、壊してきたといったな。そして、お前は全てを屑と言った。それは即ち、自身しか愛していない、自身が全てという事。それはつまり、独りよがりと同意だ」

それが、求道者でいいのかとどういう関係が？

神「つまり、世界を支配した“だけでいいのか”？　せっかく支配した世界を壊して、何になる？　屑の排除？　それもいいが、せっかく支配したなら、世界中の美人美女美少女、そんで美幼女に囲まれてウハウハ位してからやれよ♪　つまり、そう言う事だ」

訳わかんねぇよ!!!　全く意味不明ですよ神様!!!

神「おいおい、今のでわかんねぇの？　ようは、“世界を支配しただけで満足するな”ってことだ」

……な、なるほど

神「さて……ネオ。違うのならば、お前は何者だ？　森羅万象の神ならば、これぐらいは答えられるはずだろう？」

チョー上から目線ですね、神様

神「実際そうだろう？　お前が設定だと、俺って神よりも上位の存在なんだろう？」

まぁ、ある意味……

神「だろ？　だから上から目線なのよ♪」

は、ははは……こんな人でごめんなさい
m（＿）m

神「崇めろ♪」

やかましいです！！！　では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばって下さい！！　失礼します！！！

神「ばいば～い！！」

神「さてさてぇ、次回予告を見る限り～、俺様大活躍を期待してもいいよねぇ？」

あるいは、ネオの方かもですよ。もしから、貴方とネオがぶつかって世界がヤヴァイ、ってな事になるかも……

神「かもな♪」』それじゃあネオさんに聞いてみようか」

モニターにネオが移る。

ネオ『そんなもの興味はない。俺は世界の何もかもを破壊するのだ！』

真王「要約すればネオはただ壊すだけである。それにウハウハなんて一ミリもない様で。それに世界をすべて破壊するのは人間共がネオの…」

???「これ以上は語ってはいけません!!」

真王「おっといかん。『リィーン』さん、更新がんばってくれ」

銀八「って言うか今の声は誰だ？」

真王「空耳だ。忘れろ。次回はレオンがアシストするぞ」

第八十一訓：神様に喧嘩売ると罰当たりになる（後書き）

ナリア「ついに現れた真の黒幕！しかし驚くべき真実があった！」

カイム「こいつが俺の故郷を！」

ナリア「おどろくべき物、それは完全なるキャラかぶりだった！」

レオン「そこは驚くとこなのか？」

ナリア「アホゥ！彼の容体をよく見てみなさいよ！！あれはどう見てもキングダムハーツのアンセムその者よ！！髪の色以外は」

リアス「何でそこを気にするわけ？」

ナリア「あのアンセムは二次元キャラの存在。つまり！きっとあのネオってやつは二次キャラ大好きキャラなのよ！！」

ユウカ「本編とは何の関係もないので信じないでくださいね」

ナリア「次回！『転生女王ナリア』最終話！『咲き散る花のために』今こそ私が主人公に！！」

ビビ「抜け駆けは許さないわよ！！」

イッセー「っていうか狙ってたのか？」

ナリア「イヤ気分で叫んだの」

ユウカ「でしたら、私が主人公になっても」

転生者組「それだけはやめろ」

真王「はぁ『見た目は違っても中身は似ている奴が多い』テイクオフだ」

～予告～

ナレーション「別次元の剣聖たちが現る？」

第六回、モンスター解説図鑑

真王「第五回、モンスター解説図鑑！！」

イエーーーーーーーーイ！！

真王「では始めにこのモンスターからだ」

～ティラノパックン～

第六十八訓に登場。
サバンナランドギャラクシーに住むモンスター。普段は卵の中で寝ているが、起きれば獲物を求める。見た目はマリギャラのディのパックンと同じ。

シャルメモ：球と花弁は食えないから取り除いて焼く。植物成分が入った肉だから生活習慣病は防げる。

真王「次はこのモンスターです」

～クワカブト～

第六十九訓に登場。
クワガタの口を持つ虫。体は固いため魔法攻撃は効かないが、ドロップ攻撃は潰されるので倒せる。

シャルメモ：殻はむしり取って中は焼きを入れればおいしい。

レーティア「次は奴らの王様よ」

～クワカブトキング～

第六十九訓に登場。
クワカブトのボス。グルグルの目をしているが決して目を回しているわけではない。飛行能力ももっており、苦戦を強いられることもある。

シャルメモ：クワカブトと同じ調理法。中身は大きい分味もしっかりだ。

真王「さて次はこいつだ」

～ヨーグルゼリー～

第七十訓に登場。
スイートスイーツギャラクシーのヨーグル湖に住むクラゲモンスター。縄張りに入ってきた奴は容赦なく電撃を喰らわせて追い払う。
余談だが女の子が好きという噂も。

シャルメモ：引き上げたら焼くより刺身がおいしい

真王「まだ行くぜ」

～ドッサン～

第七十二訓に登場。
板型の石の怪物。倒れるときにドサンとなることからこの名が付いたとの事。もしくはバッタンと言う敵の亜種という説がある。

シャルメモ：石を食う馬鹿はいねぇよ

シャル「次はボスな奴だよ～」

～ガメーバ～

第七十二訓に登場。
ミッドチルダを襲撃した犯人。見た目はクッパっぽいガメラ。巨大化した姿は２０メートルを超えていたがデカデカノコを吐きだした後２，３メートルまで縮んだ。銀時達を勇者と思い込んでいる。

シャルメモ：調理したことはないがきっと絶品だと思う。

真王「次は普通の奴…なのか？」

～ボルタ～

第七十三訓に登場。
霊体が岩を覆って怪物となった姿。実際は友達がいなくてさびしがりな性格の男の子。見た目はマリオのポルタそのもの。

シャルメモ：岩なんですけど・・・

真王「次はちょっと厄介な奴だ」

～イヴィルソルジャー～

第七十四訓に登場。
全身黒いアーマーに赤い四つの目を持つ人型の敵。さまざまな武器を使いこなしている。正体は人間の死体から作られているが、詳細は判明されていない。

シャルメモ：食う気にはなれない・・・

レーティア「次のはちょっとあれな奴よ」

～リッカー～

第七十四訓に登場。
赤っぽい肌色に裂けた口と長い舌を持つ怪物。イヴィルソルジャー同様人間の死体から作られたようだ。見た目は肌色っぽいナムカプのベノムに舌が長いイメージ。

シャルメモ：食べる気になれない

真王「まだまだ行くぜ」

～カチコチキング～

第七十八訓に登場。
カチコチと呼ばれる氷モンスターの王さま。寒いギャグが大好き。
だが邪心コンパの怒りを買ってしまったためぶち砕かれました。

シャルメモ：カキ氷でイチゴシロップでもかけようかな？

真王「触らぬ神にたたりなし。つぎだ」

～マドロイド～

第七十九訓に登場。
全身緑色で触手を持つ人型モンスター。人間の死体を改造している。
特に女性をよく襲うことに奴らは女性が好きではないかと思われる
が今は不明。

シャルメモ：触手はすべて切り落としてグツグツ煮込んで食べる

リアス「次は奴らのボスね」

～リュウゲイ～

第七十九訓に登場。

長い胴体で蒼い鱗を持つ竜型モンスター。実はある存在がつくり出されたと言われる改造モンスターらしい。なお同種にスザーグ、ゲンブード、ビャッコルという四神をモチーフにしてる同種がいる。

ちなみにリュウゲイは青龍をモチーフにしている。

シャルメモ：揚げフライにして食べたかった・・・

真王「さいごだ」

～ネオ～

第八十訓に登場。

髪：無印キンハのアンセムの髪を黒くしたイメージ

目：赤

服：無印キンハのアンセムの服をイメージ

年齢：１億歳以上（見た目２５歳）

体重：？？？キロ

性別：♂

種族：森羅万象の神

魔力光：？？？

好き：？？？

嫌い：世界、人間、生物

性格：世界そのものに対して憎しみを抱いているようだ。
レベル：？？？？
得意武器：なし
スキル：ポジティブ・フィードバック（相手の技を倍返しで返す）
詳細：森羅万象を名乗る神。人間達をゴミくずといい、世界をすべて破壊しようとしている。そんな彼に人間達を憎む秘密があるようだが・・・。

真王「現時点でネオの秘密は暴けません！それではまた」

第八十二訓：見た目は違っても中身は似ている奴が多い（前書き）

真王「今回は風花さんの許可の元あのキャラ達がやってきます！」

神「オイオイまだ増えるのか？」

真王「はい、ではスタートです！」

第八十二訓：見た目は違っても中身は似ている奴が多い

始まりはひとつの小さな事件？

新八「何で疑問系ですか？」

そこで新八は外の新鮮な空気を吸っていたときだった。

ドガーーーン！！

新八「な、何事ですかぁ！！？」

突然の爆発に驚きあわてる新八。

爆発した場所は六課の訓練場で、そこに、

？？？「・・・何だここは？」

？？？「いてて、頭打った…」

？？？「あれ～？ここどこ～？」

？？？「って言うかなぜ僕が一番下なんだい？」

？？？「どこなんだここは？」

？？？「な、何が起こったの？」

６人の男女がいました。

新八「だれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

６人「いやお前が誰だ？」

新八は６人にシャウトするが６人は突っ込み返した。

銀時「で、新八はこのちっこい奴らを拾ってきたのか？」
？？？「誰がちっこいだこらぁ！！」

銀時は６人を見て言うと、６人の一人のピンクのリボンをつけた栗色の髪に背が小さい少女がとび蹴りをかました。

？？？「しっかし、妙な光に連れ去られたと思ったら景色もなのは達も変わってないな」
？？？「でも見慣れない人たちがいるじゃないの～」

茶髪でめがねをかけた青年が周りを見ながらいい、その少年とそっくりな顔立ちの女性がのんびりした口調で言う。いうなれば２人は双子のようだ。

イストワール「それはですね。あなた方が知る世界とは別の世界。いわば平行世界（パラレルワールド）です」
？？？「マジで！？」
？？？「あら～」

イストワールが説明すると双子は驚いた表情をする。

ネプテューヌ「えっと・・・とりあえず自己紹介しようかな？」

ネプテューヌが言うと、代表に黒目黒髪の青年が言う。

レイン「そうだな。レイン・アスハだ。一応普通の人だ」

続いて双子のめがねの青年。

森羅「俺は久遠寺　森羅だ。よろしくな」

次は双子ののんびりした女性。

咲夜「久遠寺咲夜、だよ～。森羅とは～、双子なんだ～。よろしくね～♪」

次は何だが辰馬のような雰囲気の青年。

蒼馬「僕は不出世の天才演奏家、遠野宮蒼馬さ。これからよろしく頼むよ。特に女の「「お前はこいつらに半径２万ｋｍ以内に近づくな」」地球外退去を命じられた！？」

レインと森羅の変な進言に突っ込む蒼馬と苦笑いする人々。

次は６人の中でまじめそうな青年。

紅也「二宮紅也だ。よろしく」

最後に銀時を蹴飛ばしたピンクの髪の少女。

さくら「私は、東條さくら。好きな人はレン君。私以外レン君に近づくな！」

いきなり自分の彼氏宣言するさくら。

ネプテューヌ「あはは・・・じゃあ次は私達だね。わたしは・・・」

少女達自己紹介中…

レイン「今妙な文字が見えた気がするがまぁいい。とりあえずここが別世界だってのは理解した」
銀時「そうか、あ、それとオメェ…」

納得したレインに銀時が聞く。

銀時「・・・甘い物って好きか？」
レイン「パフェが特に」

レインが即答した。

銀時「そうか、なら今度一緒にパフェ作ろうぜ。実は俺リンゴをトッピングする計画をしてたんだ」
レイン「アップルパフェか。良いだろう」
新八「おいいいいいいいいい！！！あんたらどこ行こうとしてんのぉぉ！！？」

銀時とレインが食堂へ向かい、新八が突っ込む。

森羅「出たよレインの癖というかなんというか…」
咲夜「でもそこがレン君だもんね～」
蒼馬「そうだね」
紅也「はぁ・・・」
さくら「む～・・・」

神らは頭を抱え、咲夜は普段通りそう言って、蒼馬は同意し、紅也はため息を吐き、桜はレインと銀時の行ったとこを見て頬を膨らませている。

すると、

定春「ワン♪」

ガブッ！

蒼馬「フゴォォォォォォォォ！！！？？」

後ろから定春が蒼馬の頭からがっぽり入ってかみついた。

森羅「うおっ！？なんだこのでっかい犬！？」
咲夜「あら～、大きなワンちゃんね～」
紅也「こ、これが犬なのか？」
さくら「でか・・・」

初めて見た森羅たちは驚いていた。

食堂

銀時「いやだからよう、絶対こっちの方が合うっての」
レイン「イヤこっちが一番だ。いい加減分かれよ」

銀時とレインが違うパフェを持って言い争っている。

森羅「おい一体何争ってるんだ？」
咲夜「あら～、何かしら～？」

2人に行動が気になった頭に包帯を巻いた森羅と咲夜が聞く。
同じく頭に包帯を巻いた蒼馬、紅也、さくらもネプテューヌ達も見る。
なぜ頭を巻いてるかというと、5人とも定春にやられたからだ。

銀時「お前ら、俺の最高傑作『宇治銀時パフェ』が一番だよな？」
レイン「イヤ、俺の『ドックパフェ』が一番だよな？」

銀時が小豆たっぷり乗せたパフェを、レインがドックフードをたっぷり乗せたパフェを向けてネプテューヌ達に聞く。
上記2人以外は思わずずっこけた。

新八「なんでだァァァァァ！！！！なんでパフェごときで争ってんだよ！！しかも両方とも絶対味覚がおかしくなる以前に目に困るわ！！！！」

新八が2人にパフェを指摘する。

銀時「バカヤロウ、真のパフェは見た目・おいしさ・輝かさで決まるんだよ」
レイン「そうだ。それが分からん奴は子供ということだ」
新八「あんたらの頭こそが子供だよ!!しかもその3元素まる崩しじゃねぇか!!」

真顔かつ真剣に言う銀時とレイン。
だが新八に怒鳴られる。

銀時「何言ってんだ新八」
レイン「向こうを見てみろ。愛用者がいるぞ」

銀時とレインの視線の先には、『宇治銀時パフェ』と『ドックパフェ』を食べるなのは、フェイト、スバル、アルフ、ネプテューヌがいた。

新八「うそぉぉぉ!!!?」

新八はこればかりは驚いた。
無論食べているなのは達以外もこればかりは驚いた。

銀時「いや待てよ?俺の小豆とオメェのを合わせて作ったらもっと旨いんじゃ?」
レイン「おお!そうか!そんな発想もあったか!これを名付けて『宇治銀時ドッグパフェ』としよう!」
新八「またパフェ伝説が一つ増えちゃったよ!!」

銀時とレインがまた新たなメニューを導き出して、新八は突っ込まざるをえなかった。

ミッドチルダ・商店街

銀時「何で俺がこんなことしなきゃいけねぇんだよ…」
レイン「それはこっちのセリフだ…」

銀時とレインはだるそうに買い物袋を持ってつぶやく。
二人以外に森羅、咲夜、紅也、神楽、新八、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、レーティア、ジャンヌ、ギルシア、シャル、リアス、イッセー、レオン、カイム、ユウカ、ナリアもいる。

なぜ彼らがここにいるかというと、はやてからのパシリである。
蒼馬とさくらは留守にすることになった。
まぁ買い物する前はさくらがギルシアに追いかけられたり、レインがジャンヌに目をつけられたり、はやてが咲夜の胸をもんだり（このときはやては「んなっ!?何やこの隠れおっぱいは!?」とリアクションをした。咲夜は着やせするタイプらしい）、蒼馬は相変わらず女性にナンパしようとしたり、森羅が蒼馬に踵落としをしたり、紅也はため息吐いたりとしていたとか。

ノワール「ところでその大量の胃薬は何なの?」

ノワールは紅也と森羅が持っている胃薬を指差して聞くと、

紅也「今後の腹痛対策のためだ」
ノワール「ああ、なるほど・・・」

紅也が説明してノワールは納得した。

グニュッ！

咲夜「ひゃんっ！？」

神楽「テメ～、普通そうに見えて実際でっかい乳持ちやがって～、こっちによこせよ～」

すると神楽が咲夜の胸を鷲掴みにして羨ましそうに言う。

咲夜「それはだめよ～、それに～、神楽ちゃんは～、将来私ほどじゃないけど大きくなるわよ～」

神楽「マジでか！？」

咲夜「そうよ～」

咲夜がのんびり口調で神楽に言うと神楽は驚いて咲夜はうなずく。

紅也「それ以前に胸をもみながら歩くな」

ネプテューヌ「いいじゃん、あれもスキンシップのひとつなんだよこうやっち」

こうやっち「俺はこうやっちじゃない！・・・って名前変わってるぅ！？」

神楽と咲夜を見てため息を吐き、ネプテューヌに突っ込むこうやっち・・・もとい、紅也。

銀時「なぁレイン、ブルーベリーとパフェをあわせてもうまいか？」

レイン「試した事はないが、旨くなる事は言えるだろう」

レーティア「また始まったわ…」

ジャンヌ「甘党コンビだね～♪」

銀時とレインがまた甘いもの談を言い始めてレーティアはあきれてジャンヌは面白そうに言う。
すると、

？？？「グォォオオオオオオオ！！！！」
レオン「！伏せろ！！」

上空からドラゴンの鳴き声が聞こえてレオンは銀時たちを伏せさせる。

そして赤い皮膚の凶暴なドラゴンが現れた。

銀時「てて、ったく今日はついてねぇぜ」
レイン「買い物中に邪魔するとはな」

銀時とレインはほこりを払う。
そして木刀と逆刃刀を構える。

レイン「こっちはいらいらしてんだ。即効で片付けてやる」
森羅「レイン、それはこっちの台詞だぜ？」
咲夜「ウフフフ～♪」
紅也「やれやれ、こんな事になるとはな！」

刀を構えるレインと、余裕そうな顔で刀型デバイス・『コテツゼットウセイ』を持つ森羅と、笑いながら無知を取り出す咲夜と、肩をすくんで大太刀型のデバイス・『セレスティア・フルーレ』を取り出す紅也は戦闘体勢にはいる。

リアス「必要があったら援護しとく？」

銀時「いや、俺とあいつらだけで十分だ」

若干笑っているリアスが銀時に聞くと銀時は笑って返す。

銀時「おいレイン、俺がこいつを倒したらパフェおごってもらおうか？」

レイン「いいだろう、だが俺が倒したらあんたがおごれよ」

銀時「乗ったぜ。いくぞ！」

銀時とレインがなぜか賭け勝負をして、イヴィルドラゴンへ突撃した。

ＩＢＧＭファタライズｂｙソウルキャリバーレジェンズ（Ｍｅｇａ　Ｅｘｔｅｎｄｅｄ　Ｅｄｉｔｉｏｎ：　Ｌｌｏｙｄ　Ｉｒｖｉｎｇ［Ｆａｔａｌｉｚｅ］（ＳｏｕｌＣａｌｉｂｕｒ　Ｌｅｇｅｎｄｓ））

イヴィルドラゴン「ガァァウ！！」

向かってくる銀時とレインに爪で攻撃しようとする。

だが銀時とレインは攻撃をかわした。

レイン「最初はこれをくれてやる」

トレインはイヴィルドラゴンに近づく。

レイン「見様見真似、虎刃斬！」

まるで虎の爪で引っかくような攻撃を放つ。
イヴィルドラゴンにダメージを与えた。

イヴィルドラゴン「グオオオオオ!!!」
レイン「うわっ!」
銀時「ちっ!」

イヴィルドラゴンは反撃にドラゴンオーラでレインと銀時を吹き飛ばした。

イヴィルドラゴン「グアァァァ!!」

そしてイヴィルドラゴンは2人に向けてファイアーブレスを放つ。

ギルシア「熱エネルギー吸収!!」

するとギルシアが前に立ってイヴィルドラゴンの炎を吸収した。

銀時「おいなにすんだよ!別に手を出さなくてもかてたぞ!」
ギルシア「あ?そうなのか?」

銀時が文句を言ってるところイヴィルドラゴンがまた炎で攻撃しようとする。

ガシッ!!

イヴィルドラゴン「グ・・・!?」
咲夜「手は出させないわよ〜」

だが咲夜の鞭がイヴィルドラゴンの口を強制的に閉ざした。

イヴィルドラゴン「グググ・・・」

イヴィルドラゴンはうっとおしそうにして爪で鞭を切ろうとする。

レーティア「させると思ったの？」

だがレーティアがその爪を鞭で捕らえた。

咲夜「あら～、あなたも鞭使いなのね～」

レーティア「まぁね。レオン」

レオン「疾風雷打脚！！」

咲夜が感心し、レーティアがレオンに言って、レオンが仮面ライダーみたく必殺キックをかました。

森羅「紅也！あの羽をたたっ切ろうぜ！」

紅也「ああ、いくぞ！」

森羅と紅也はデバイスを起動させた。

森羅の姿は右手には長物の大太が握られ、柄と鍔は中国風だが刀身は日本刀その物の異国風の刀を持っている。

唾には宝玉が埋め尽くされていて、刀身には虎の姿が真紅に彫り描かれている。

バリアジャケットは上半身は筋肉が判るほどピッタリのタンクトップ、下半身は中国風の着物を穿いている。

そして顔には普通の眼鏡の代わりに黒眼鏡をつけていた。

つまる所、これはどう見ても『るろうに剣心』に出てくる『雪代縁（えにし）』の姿、倭刀と言う事だ。

紅也の姿は某炎髪灼眼の討ち手よろしく髪と瞳が真っ赤になっていた。

ジャンヌ「るろ剣とシャナじゃん！けどそれがいい！！」
森羅「・・・後ろで何か聞こえたがスルーしろ」
紅也「ああ、」

ジャンヌの驚きをスルーして森羅と紅也は駆け出す。

森羅「さて、見様見真似、ソニックレイヴ！」
紅也「一閃！」

ズバン！！

イヴィルドラゴン「ゴォォォ！！？」

森羅と紅也の一閃攻撃でイヴィルドラゴンの羽が落とされた。
これで飛ぶことも出来ない。

銀時「だ～か～ら～！」
レイン「そいつの獲物は」

銀時・レイン「俺だって言ってるだろ！！」

しびれを切らした銀時とレインがイヴィルドラゴンに向かっていく。

イヴィルドラゴン「グオオオオオオ！！！」

だがイヴィルドラゴンは負けじとドラゴンオーラで吹き飛ばした。

銀時「遊びは終わりだこの蜥蜴野郎」
レイン「テメェに教えてやるよ」

銀時とレインが二人同時に、

銀時・レイン「俺は人生を生きる侍（人間）だぁぁ！！！！」

そう叫んでイヴィルドラゴンと叩き伏せた。

かくして『銀の魂を持つ侍』と『黒き剣聖』が共に戦った瞬間だった。

で…

ネプテューヌ「銀さんとレインさん、飽きないね～」
銀時「イヤだって糖分取らねぇとイライラするんだもん…」
レイン「別に糖分関係ないが俺は好きで食ってるだけだ」

六課に戻ったネプテューヌ達は食事を始め、銀時とレインは相変わらずパフェを食べている。

銀時「っていうかもっとイライラするもんがあるんだけどな」

銀時がある場所をジト眼で見てレインはため息吐いてネプテューヌは苦笑いする。

その視線の先には咲夜とユーノだ。

咲夜「やっぱり～、世界が違っても～、ユー君だね～」

ユーノ「え、えっと～・・・（まずい！僕すっごくドキドキしている！？）」

必要以上にラブる咲夜と戸惑うユーノ。

レイン達のとこのユーノは咲夜といい関係になっているらしい。

こちらのユーノは咲夜と目があって心の奥底から開かれた。

簡単なところ一目ぼれである。

森羅「はぁ・・・兄としてどうかと思うぞ咲夜」

咲夜「私が姉よ～」

新八「どっちだよ！！」

なのは「森羅君と咲夜ちゃんは双子だからね～」

ため息吐く森羅が言うと咲夜が姉と主張し、新八が突っ込んでなのはが言う。

蒼馬「フッ、どうだい子猫ちゃん、僕といいことでも」

ザクッ

ネプテューヌ「ゴメン、私銀さん以外と付き合う気はないんだ」

蒼馬「それが・・・返事・・・ガクッ」

ナンパしてきた蒼馬にネプテューヌがエックスセイバーで蒼馬の頭をザックリと行った。

レイン「ネプテューヌ、確かに蒼馬は復活しやすい奴だけどそれはやり過ぎじゃないのか？（汗）」

ネプテューヌ「え？じゃあギガスラッシュ放てばよかった？」

レイン「なお悪い！？」

レインは冷や汗流して突っ込むと、更に物騒なことに突っ込む。

『レイン』『森羅』『咲夜』『蒼馬』『紅也』『さくら』が六課に居候することになった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

レオン「レオン・バステットだ。私がアシストする」

銀八「んじゃペンネーム『支配者』さんからいくぞ。『支配者「真の黒幕登場ですか……」

銀時「おい…なんかおかしくねぇか？」

支配者「何が？」

銀時「前の番外編の話し見た限りじゃ、あいつがダークソウルの誕生の原因を作った奴だろ？だったら恨まれる原因はあいつであってアイツが人間を恨むなんて間違ってないか？」

支配者「ですよね…それに黒幕は”ダークソウル”のはずですし、自分をあんな目に合わせた張本人であるネオが人間に対して復讐してるなんて知ったら『ワタシヲウラギッタチョウホンニンハオマエナノニジブンガフクシュウキニナルナンテユルセナイ！！』とか言ってブチキレてすぐにでも襲い掛かりに行くと思うんですけど」

銀時「そう思うよなぁ…」

支配者「それにネオが高杉と組むとも思えませんし……」

銀時「だよなぁ…あんな事言ってんだしな……人間は最低だって…
…最低は如何考えてもあいつだと思うけどな」

支配者「まあ、別にいいですけど…では質問です。ネプテューヌに質問、貴方は多くの人にマヌケと罵られていますがそんな自分を如何思いますか？（黒笑）

土方に質問
多くの小説でマヨ方やエロ方と罵られていますがそんな自分を如何思いますか？（黒笑）

機動六課に質問
まるでと言って良いほど出番がなくなっていますがそんな自分達を如何思いますか？（黒笑）

では今回はこの辺で」』」

ネプテューヌ「私はまぬけじゃない！！」

土方「エロ方じゃネェェェェェ！！！マヨ方は許す！」

銀八「許すんかいィィィィィィィィいぃ！！！！！」

はやて「うちら『黒神』のとこの『狂乱編』みたいに扱われてへんか？」

真王「気のせいだ」

レオン「では『支配者』はバケツを持って立たせるとして、ペンネーム『鳴神　ソラ』の質問は『マリオ「亜次元爆弾…ちっ！むなくそ悪いぜ！」

ルイージ「それで特訓中？」

マリオ「そうだよ！」

冥王「ホント嫌な奴なの」

ルイージ「それにしても…ネプテューヌ;」

フォックス「おいおい;」

マリオ「ちなみに俺の師匠のトレーニングでは能力を使わないで自力でやるの、ってかやったら身に付かんが師匠の教えだ」

フォックス「転生者組みに質問『行きたい世界はあるか?』」

スネーク「転生者組みに質問『嫌いなモンスターはいるか?具体的に頼む』」

クッパ「質問なのだ『マリオってどれ位有名なのだ?』」

次回を待ってます!』マリオはメテンズギルドや神界のほとんどで有名だぞ。そして私は魔物ばかりの世界だな。苦手な奴は亜臭を放つ奴、言わばゾンビだ」

リアス「私は奇麗な男だらけの世界ね。モルボル種がいやよ」

イッセー「おっぱいのでかい女性達の世界!ゾンビ系は好きになれないけど…」

ユウカ「全ての人間どもを私の配下にする世界ですわ。苦手と言えば特にないですけど」

ナリア「女の子と百合りんの世界!虫とかゾンビとか幽霊とかは勘弁して…」

レーティア「なんでもいいわ。虫とかはちょっと無理ね。あと不細工なオタクとか」

ジャンヌ「何処でもいいよ。けど虫は駄目」

ギルシア「ブラックスポットってとこだ。俺に苦手な物などない！」

シャル「トリコの世界。気持ち悪い変態はお断り」

レオン「では『鳴神　ソラ』は鉄アレイ持って廊下に立って、ペンネーム『月光閃火』だ。『ども…月光閃火だ。

しかし…ネオの容姿はホントにネタっぽい感じだな…。というか…あれでキャラ崩壊したら、一体どうなるんだろ？

輝刃「さぁな…皆目検討が着かんよ…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ネプテューヌ達女神陣に質問…もし他のアニメやゲームのキャラになれるとしたら、誰になりたい？ただし、質問の通り自分が出ている作品内で…というのは無しだぞ？

あはは…それは楽しみな所だな…。次は俺からだ。

2．ネオに質問…実は此処に、『シャマル』っつー料理がちょっと（破壊神的に（汗）苦手な女の娘が作った料理があるんだが…食べてみる？

輝刃「…さっそくキャラ崩壊させる気か…（汗）。さすがのネオも、

本能でその料理が『危険だ』と判ると思うぞ…（汗）。」』それじゃあ答えてみろ」

ネプテューヌ「シャナちゃんかな?だってかっこいいし」

ノワール「アイドルマスターか・・・初音ミクか…」

ブラン「興味ない」

ベール「ロザリンドさんですわね」

真王「では悪役であるネオさんの答え」

モニターにネオが映る。

その手にはシャマルの料理が。

ネオ『・・・・・・・・・』

グシャ!

シャマル料理が潰されました。

銀八「やっぱシャマルのは駄目か?」

真王「ちげーよ。あれは『人間のゴミを食べない』んだよ」

銀八「作った料理さえもゴミ扱い!?」

真王「はいはい無視だ無視。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさ

い」

レオン「次だ。ペンネーム『黒龍』からの質問。『黒龍「ネオは何かありそうですね」

銀時「でもよ、確かあいつがダークソウルの原因だった奴だろ？」

ソラ「ダークソウルが出来た後かその前に何かあったって事だろ」

銀時「なるほどな」

黒龍「これから色々と秘密が明らかになっていくって事でしょう」

銀時「まぁ色々ネタバレ感ある気がするけどな」

ソラ「そうか？」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1．ネオに質問。あなたにとって、転生者とは何ですか？

2．ネプテューヌに質問。ネオとネプテューヌにはかなりの力の差があると見ますが、これからどうしますか？

3．ネプテューヌ以外の女神に質問。何か最近活躍シーンがあまり見られませんが、大丈夫ですか？

黒龍「今回はこれで終わりです」』」

モニターが出てきてネオが映る。

ネオ『そ奴らも人間と同じゴミクズだ』

そう言って消えた。

レオン「・・・つぎだ」

真王「彼女にはパワーアップさせようと思いますね。あとネプテューヌ以外は大きく譲ってます。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

レオン「よし、次のアシストはカイムとアンヘルだ。じゃあな」

第八十二訓：見た目は違っても中身は似ている奴が多い（後書き）

レイン「平行世界（パラレルワールド）へやってきた俺達に待っていたのは衝撃の出来ごと、それは・・・」

森羅「なんだかいろいろありそうな世界だな…」

レイン「そう！この世にパフェの神秘であるトッピングの種類が豊富であることだ！！」

森羅「衝撃の出来ごとってそれかい！！」

レイン「パフェには冷たいアイスから始まって沢山のクリームと味付けや見た目のためのトッピング。そのトッピングに新たな境地が誕生した。そう！栄養満点のドッグパフェだ！！」

森羅「そりゃお前の好物じゃねぇか！！」

咲夜「世の中はひろいわね～」

レイン「だが！ドッグパフェの同等にならぶ宇治銀時パフェと合体することによって新たなる極地、『宇治銀時ドッグパフェ』が頂点に達するのだ！！」

蒼馬「甘いものになると積極的だね。レン君は」

さくら「私普通のパフェがいい」

レイン「次回『甘党冒険記』最終話！『パフェの神秘を求めて』パ

フェこそが最強の極致なり！」

フリーダム「あれ？僕の扱いってどうなるの？」

森羅「俺突っ込むの疲れるわ」

真王「そんなんじゃ『ツッコミマスターの継承者』になれんぞ」

森羅「いらねぇよそんな称号！！」

真王「次回『恋はいつでもハリケーン』テイクオフだ」

さくら「え？誰かが恋の発展でもするの？」

咲夜「私とユー君じゃない～？」

真王「違うよ。あの童貞が卒業するんだよ。じゃあな～」

森羅「童貞って誰だよ！教えてくれよ～！！」

第八十三訓：恋はいつでもハリケーン（前書き）

真王「ついにあの童貞が卒業を果たすときが来ました！」

新八「な、なんだって！？い、一体だれが？」

真王「それは呼んだら分かる。スタート！」

第八十三訓：恋はいつでもハリケーン

何気ない一日。

そんなとき、ジャンヌが、

ジャンヌ「ねぇ新八君、一緒にデートしない？」

と新八に言ってきたのが始まりだった。

ドドドドドドドドドドドドドド！

全員「ちょっと待てぇエエエエエエエエエエエエ！！！！！」

新八が茫然としている頃、いつ聞いたのか銀時達がやってきた。

銀時「オイィィィィ！！聞き違いであってほしいんだけどぉ！？今デートするって行ったかぁ！？」

ジャンヌ「そうだけど？」

全員「またまたオイィィィィィィィィィィィ！！！！！」

銀時がありえないと思って聞くとジャンヌが平然と答えて全員がまた突っ込む。

新八「・・・えええええええええええ！！？デデデ、デートォ！！！！

？？」

新八が復活した。

ジャンヌ「そ、デートだよ」

新八「ぼぼぼ僕がじゃじゃじゃジャンヌちゃんとでででででで・・・・・・・・・（イカンイカンイカン！落ち着け！ＣＯＯＬに慣れ志村新八！僕はお通ちゃん親衛隊隊長だ！！あ、でもデートって…イカンイカンイカン！心をしっかり持て志村新八！ここで女の子を泣かせるのは駄目なんだ！」

ジャンヌ「心でかたってるつもりでも口が出てるよ？」

新八はパニック状態になって落ち着こうとするが口に出てたためジャンヌが指摘する。

ジャンヌ「それじゃあ出かける準備するから待っててね♪」

ジャンヌは新八にそう言って部屋へ戻っていく。

銀時「ついに・・・ついに新八に春が来やがったァァァァァァァァァァ！！！」

銀時は大声で叫んだ。

神楽「んだよ、また駄目ガネに彼女が出来たのかよ」

なのは「えっと・・・おめでとう？」

エリザベス『奇想天外ですね』

ギルシア「てめー！リア充の仲間入りか！！」

レーティア「あらあら♪」

神楽は毒を吐き、なのはは困惑し、エリザベスはこう言って、ギルシアは怒って、レーティアは面白そうに笑う。
新八は照れ臭そうにする。

銀時「新八テメー、よくも俺の前で彼女作りやがったな？（やるじゃねぇか新八）」
レーティア「思考と口が逆よ」

銀時の言ってる事と想像が逆なのでレーティアが突っ込む。

新八「ま、まずい！本気のデートなんて…くっ、心臓の鼓動が止まらない！」
神楽「あれ？新八一度やったんじゃねぇのか？」
銀時「イヤ、この前のアレは金泥棒だからノーカウントだ」
なのは「え？何の話？」

まだ興奮が抑えられない新八をよそに銀時たなのは達に以前新八がデートしたことあること、エロメスのこと、そして嘘デートであったことを話した。
なのは達は少し納得した。

咲夜「新く～ん？男は度胸よ～、頑張ってね～」

ユーノとイチャイチャしながら新八を応援する咲夜。

銀時「なに人前でいちゃついてんだテメェらぁぁぁ！！！」
ユーノ「ウボォ！！」
咲夜「ユーくゥゥゥん！！」

銀時が青筋立ててユーノを蹴飛ばした。

咲夜はユーノを追いかけた。
なのは達は羨ましいな～と指をくわえていた。
全員がそうこうしていると、

ジャンヌ「お待たせ～」

フリルスカート、ピンクTシャツ、黒ブーツ、白リボンでポニーテールにドレスアップしたジャンヌが来た。

ジャンヌ「新八君、似合うかな？」

ルンルンとおどったり一回転したりして可愛さをアピールしながら新八に聞く。
新八はジャンヌの可愛さにほけてしまう。

ジャンヌ「？新八君？」
新八「はっ！？に、似合います似合います！とってもかわいいくらいに！／／／／／」
ジャンヌ「えへへ～／／／／／」

惚けた新八に声をかけると新八は我に返ってジャンヌにいい、ジャンヌは顔を赤くしてくれる。

ジャンヌ「あ、そうだ。新八君もデートしやすい服があるよ。それ！」
新八「うわ！」

ジャンヌがゴソゴソと何か取りだした瞬間新八に着せる。
そして新八の姿はグレーパーカーに青ズボンという服だ。

ジャンヌ「うんサイズピッタシ！似合ってるよ新八君」
新八「え？あ、はい、あ、あ、あ、ありがとうございます！／／／／」

まさか女の子に着せられることの動揺を隠せない新八。

ジャンヌ「それじゃあ新八君、レッツゴ～♪」
新八「え？ちょ、ちょっとぉ！！？」

ジャンヌが新八に腕に抱きついて2人は六課を出て行った。

銀時「・・・おい」
全員「？」

銀時がこの場にいる全員に声をかける。

銀時「・・・あいつらを追いかけるぞ」

ミッドチルダ

そこで若いカップルが歩いている。
いわずもがな、新八とジャンヌだ。

ジャンヌ「～♪～～～♪♪」

ジャンヌは鼻歌を歌いながら新八の腕に抱きついている。

新八「・・・・・・・・・／／／／／」

逆に新八は心と精神が興奮状態だ。

新八（まさか2度もデートすることになるとは…あ、あれノーカウントにしとこう。そ、それにしてもまさかジャンヌちゃんが自分からデートを誘うだなんて！ついに僕は『リリカル銀魂シリーズ』で一番の幸せ者になるかもしれない！）

デートをすることがとてもうれしい新八。

新八（・・・ってかそれ以前にジャンヌちゃん心なしか必要以上に引っ付いてきてない？というか僕の手がジャンヌちゃんの胸に…／／／／／）

確かにジャンヌの胸が新八の手にあたっている。

１５歳でありながらかなりのプロポーションを持っているので美少女行っても過言ではない。

新八は顔を赤くし、同時に青くなる。

新八（な、なんだか周りの視線がひしひしと感じるんですけど・・・・・・・もしかして銀さんもこんな環境を？・・・少しだけ同情します）

周りから嫉妬と殺意の視線（特に男子から）を感じて青くなる一方、恋心を持たれている銀時に納得して同情する。

そんな二人を追う輩が数名、銀時を代表に神楽、桂、エリザベス、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフ

ィーラ、スバル、ティアナ、ユーノ、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、レーティア、シャル、ギルシア、リアス、イッセー、レオン、ユウカ、ナリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらである。
ちなみに全員グラサンつけて。

なのは「で、追いかけてみたけど結局どうなっちゃうのかな？」
銀時「ばっかなのは声がデケぇよ！」
フェイト「イヤ銀時がうるさいよ！」
シグナム「テスタロッサがうるさいぞ！！」
ヴィータ「シグナムが一番うるせぇよ！！」
スバル「ヴィータ副隊長が一番うるさいです！！」
ネプテューヌ「そう言うスバルもうるさいよ！！！」
ギルシア「ネプテューヌたんが一番うるさいです！！！」
森羅「オメーが一番だよ！！！」
さくら「あんただよ！！！」
リアス「あんたたち全員がうるさいのよ！！！かく言う私もだけどね！！！」

なんか漫才をやってる様だがそこは無視だ。

レイン「で、何で俺達まで追わなきゃらならいんだ？」
森羅「俺の場合は新八が羨ましいんだちくせう！」
蒼馬「フフフ、そして二人は永年の愛をきｚ「テメェは地面ときずいてろ！」ブフェッ！！」

レインがため息を吐き、森羅が苦やしそうにいい、蒼馬が語りかけようとしてレインと森羅に踵落としで地面にキスした。

咲夜「ユー君も～、一緒にあんな感じになりましょうね～」

ユーノ「は、はい…／／／／／」

ニコニコしながらさりげなくユーノに抱きつく咲夜と顔を赤くするユーノ。

銀時「なに人前でいちゃついてんだ眼鏡こらあん？」

ドガドガドガドガドガドガドガドガ！

ユーノ「イタタタタタタタタ！」

ラブラブ状態の二人に嫉妬して銀時はユーノにストンピングをかます。

咲夜「ユー君になにしてるの！」

バシィ！！

銀時「おぷぅ！！」

見かねた咲夜が銀時に鞭でひっぱたく。

そしてユーノに駆け寄る。

咲夜「大丈夫ユー君…？」

ユーノ「ハイ、ありがとうございます。咲夜さん」

咲夜「ユー君…」

ユーノ「咲夜さん…」

森羅「はいはいはい、桃色はここまでにしとけ」

咲夜「チッ…」

森羅「今舌打ちしなかったか？」

ユーノと咲夜の桃色空間が出来上がるところで森羅に邪魔されて舌打ちする咲夜。

ネプテューヌ「銀さん、次レストランへ行ったよ！」

銀時「おし！」

銀時達は後を追った。

ファミレス・アーチャン

ジャンヌ「あ～ん！ハムハム♪おいし～♪？」

ファミレスでおいしそうなイチゴケーキを頬張るジャンヌ。

対して新八はまだまだがちがち状態だ。

新八（ケーキを食べるジャンヌちゃんが可愛い…、ってイカンイカン！僕はなに欲深いことを考えているんだ！紅茶を飲んで落ち着こう）

新八は心の中でこう思ったあと紅茶を飲もうとする。

ジャンヌ「・・・新八君、なに目に紅茶を当ててるの？」

新八「ん？アチャパァァ！！！」

新八の右目に紅茶が当たっているのでジャンヌが指摘すると、気付

いた新八はやけどした。

ジャンヌ「も～なになってるの新八君。初めてのデートだからって固まり過ぎだよ」

新八「は、はぁ・・・」

手にハンカチを持って目とか服を拭くジャンヌに謝る新八。

ジャンヌ「ところで新八君」

ジャンヌが突然こんなことを言い出す。

ジャンヌ「正直言って…私のことどう思ってる？」

新八「え？」

新八は困惑する。

いきなりどう思うと言われても今の新八には対応できない。

故にどうこたえるのか迷うのだ。

新八（ジャンヌちゃんは僕のためにあえてそうさせてくれているのか？でも僕は…どうすれば…）

迷っていると、ガラの悪い男達が現れる。

男「よぉ、姉ちゃん。俺たちに付き合えよ。そんな眼鏡より楽しいぜ？」

げらげらと下品な笑みを浮かべる男二人。

ジャンヌ（うわ、どうも嫌～な奴らね）

いやいやそうに男達を見るジャンヌ。

新八「……誰が眼鏡だよ」

新八は眼鏡と呼ばれてイラ立つ。

男「オメェだよオメェ。オメェなんかがこんな可愛い子ちゃんと一緒にいることが場違いなんだッてぇの。俺たちにこそ、そこの嬢ちゃんたちはふさわしいって先生言ってたぜ」

男2「なんでやねん！！」

アッハッハッと、変なコントなのか微妙なことやって笑っているアホ二名。

ジャンヌ（せっかくのデートだったのに…この際仕方ないわね…）

ジャンヌは心の中でため息を吐いてぶっ飛ばそうと考えていると、

新八「ツッコミが甘いんじゃァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」

ボグシャァッと、なんかすさまじい轟音が響いて、ツッコミいれたゴミの片割れが「ぐえっ！？」と奇妙な悲鳴を上げて吹っ飛んだ。ぶっ飛ばした人の名は志村新八。一体どこにそんな力が隠されていたというのか、２ｍ近く跳躍して思いっきり跳び蹴りを側頭部に叩き込んでいた。

綺麗過ぎる跳躍。まるで絵のような美しすぎる軌道。その姿はまさしくライダーキック。

物理法則にしたがって男の顔が捩れて、その衝撃で体が宙に浮き、

ギュルンギュルンとなんかありえない音を立てながら空中で回転して吹っ飛んでいく。

男「なっ！？」

新八「そんなんでこの二次ファンのツッコミが勤まると――――」

再び響く骨が砕けたような音。新八の拳は仲間が吹っ飛ばされて呆然としていた男の顎に突き刺さり、綺麗に頭部を跳ね上げる。

その隙に裏に回りこみ、ガシッと両腕で胴体を固定する。

新八「思っとんのかボケェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！」

それは等しく、魂の絶叫（ツッコミ）だったに違いない。

持ち上がる男の体。男の体は今この一瞬、確かに重力という戒めから開放された。

一瞬の光景。しかし映る光景はまるでスローモーションのように鮮明に、その姿を流していく。

大きく反れる新八の体。しかし、それは美しい技の体現であり、その光景は怖気がするほど完璧だった。

ジャーマンスープレックス。その究極を再現した新八の手により、男は後頭部からまともに地面に垂直落下して、グシャッとなんかつぶれる音と共に地面に叩きつけられた。

カァンカンカンカァァァァン！！と、どこかで甲高いゴングの音がなったような気がしないでもない。

新八が殲滅（ツッコミ）を開始してわずか1秒半。見事なスピード勝負で決着がついてしまったのだった。

ジャンヌ（新八君、もしかして私のために…？）

ジャンヌは男達を倒した新八を見てこう思った。

「かっこいいな新八君」と。

――うおぉぉおおお

銀時達は入口の陰で見ている。

ジャンヌ「で、さっきの続きだけど…」
新八「あ、もう答えは見つけました」

ジャンヌが言おうとしたら新八が答える。

新八「ジャンヌちゃんは可愛いですしきれいです。そしてコスプレが好きという難点がありますがちゃんと他人を思いやる気持ちがありますから」
ジャンヌ「新八君／／／／／」

ジャンヌは新八に嬉しいことを言われて顔を赤くする。

ネプテューヌ「へ～、いい雰囲気になってんじゃん。そう思うよね銀さん？」
銀時「ああ、ぶっ壊してやりたいぐらいにな」
ノワール「ってちょっと？何でライフル構えてるの？」

なぜか新八に向けてライフルを構える銀時に突っ込むノワール。

銀時「んなもん簡単だ。新八をぶっ殺すんだよ」
ナリア「直球！？止めなさいよそんなこと！」

あまりにも物騒なので銀時を抑える。

銀時「はなせ～！！俺はあの眼鏡をぶっ殺すんだ～～！！！」

じたばた暴れる銀時。
幸い新八とジャンヌに気付かれてない。

ジャンヌ「新八君にそんなこと言われるのは驚いたよ。嬉しいぐらいに」
新八「あはは、それじゃあジャンヌちゃん、そろそろ戻ろうか」

新八は六課に戻ろうと促す。
時刻は現在帰宅時間、つまり夕暮だ。

ジャンヌ「新八君」

するとジャンヌが新八を引き留める。

新八「はい？」

新八は振り合えると、

新八とジャンヌの唇が合わさる。
言わば接吻言わばキスだ。

新八「！！！！！！！？？？」
全員「！！！！！！！？？？？？？！！！！！！」

新八も見ていた銀時達も目の前の出来事にかたまってしまった。
やがてジャンヌが離れる。

ジャンヌ「エヘヘ、私にファーストを大切にしてね、新八君♪／／／／／」

頬が赤くなりながらもルンタッタとスキップでその場を立ち去るジャンヌ。

新八「・・・ファ・・・ファ・・・」
全員（ファーストキスだとォォォォォォォォォォォォォォお！！！？？）

新八は心の…いや、魂の奥までシャウトした。
見ていた銀時達も同じくシャウトした。

レーティア「あの子ったら大胆ね？」
ギルシア「チッ、まぁ百歩大目に見てやるぜ」
シャル「これか恋愛か～」
イッセー「く～、羨ましいぞ新八！」
ナリア「ついに恋を渡ってしまったか…」

転生者組はこんなリアクションをした。

咲夜「あら～、でも私とユー君も負けていられないわ～」
ユーノ「いい！？咲夜さん！？」

咲夜がユーノに抱きつく。

咲夜「ユー君も頑張りましょ～、出ないとあの子に先を越されちゃうわ～」
ユーノ「・・・はい（ごめんなさい新八さん。でも僕は負けません）」

新八とユーノは恋のライバル関係になるのであった。
まぁ森羅が止めて咲夜に鞭で叩かれるのは別の話。
この後なのは達が積極的に銀時に詰め込むことも別の話。

そして新八とジャンヌ、咲夜とユーノが大人の階段を上る関係まで行っちゃうのもまた別の話なのだ。

そんなときレオンが一言。

レオン「『恋はいつでもハリケーン』とは正にこのことだな」

某グル眉毛料理人の名台詞（？）を呟いたのだった。

新八は『ツッコミマスター』から『恋するツッコミ使い』へと変わった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

カイム「今回のアシストは俺、カイム・ドラグニール」

アンヘル「アンヘルだ」

銀八「凄い二人だな…まぁいいや、ペンネーム『鳴神　ソラ』から行くぜ？『マリオ「うう～む…」

タレ銀「何唸ってんのマー君？」

マリオ「銀次先輩、俺、行った方が良いですかね？」

タレ銀「う～ん、許可貰わないと」

マリオ「ですよね」

ルイージ「そんなに有名だったんだね兄さん」

フォックス「だな」

スネーク「別の小説のキャラが加わったな」

ネス「どう言う風になるのやら…」

クッパ「質問なのだ『マリオの大先輩である銀次についてどう思う？』」

スネーク「リリなの組みに質問『成長したヴィヴィオと模擬戦をした事あるか？』」

フォックス「はやてに質問『ツッコミ所あるなと思う人を自分風にベスト１０を作るならどう言う風になる？理由も付けて答えてくれ』

」

次回を楽しみにしてます♪』」

真王「みんなはマリオ以上の規格外だと思ってますよ。ちなみにヴィヴィオは誰とも模擬戦はしてません。そしてはやてが考えたベスト１０を発表しよう」

『一位：ユウカ（真選組のあの人より黒いんやけど！？）

二位：ナリア（なんやビビちゃんと同じ匂いがすんな～）

三位：レオン（シグナムと同じやな～）

四位：レイン（銀ちゃんに負けずを取らない甘党や）

五位：咲夜（シグナムよりおっきいやと！？）

六位：アンヘル（めっさでっかいんやけど…）

七位：ギルシア（ようヴィータ達が狙われてたわ）

八位：ヴィヴィオ（ヴィヴィオ、いつの間にこんな…）

九位：レーティア（う、羨ましい…）

十位：ジャンヌ（うちもコスプレ着せるけどあれは病気やな）』

真王「ハイでは『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

カイム「次はペンネーム『月光閃火』だ。『ども…月光閃火だ。しかし…次回はとうとう“あの人”に春が来るか…。頑張れよ～♪」

輝刃「というか…誰なのかは敢えて言わないでおこう。あ…それと質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ネオに質問…人間に絶望する前のお前って、何で癒されてたんだ？

そういえば…確かに、誰だって何か『癒されるモノ』の一つや二つは持っているもんな…。ネオだって何か一つは持っていてもおかしくはないよ…。次は俺からだ。

2．シャマルに質問…前の質問の時にネオに自分の料理を『クズ』と思って握り潰されたけど、正直言ってへこんだ？

輝刃「確かに…ボスキャラにさえも自分の料理を否定された訳だからな…。俺達なら全然平気だが…（苦笑）。」

輝刃…俺達の舌と内臓が神憑り的に強靭だって事、忘れない方がいいよ…（汗）。』」

真王「ネオはなにをしても癒されるものはありません。唯一ある物だけが癒しになるのです。でもそれはネタばらしなので教えません。次シャマル」

シャマル「・・・・・・・・・（周りにキノコが生えている）」

カイム「（見なかったことにした）・・・『月光閃火』、廊下に立

て」

アンヘル「次のペンネームは『なめ猫』というものだ。『はじめまして、なめ猫といいます。
フォレストページで小説（またはリレー小説など）を書いていて、
最近このサイトで久しぶりに別の小説を書き始めました。
漫画やアニメの守備範囲は一応広い方です。

早速に入りますが、まずキャラの人数がとてつもないですねw自分も多く出す方ですが、流石に真王さんのようにうまくできませぬ；
よほど愛情を込めてるんですね。
ストーリーもギャグがとにかく面白くて、今じゃ大好きになったばかりのネプテューヌの活躍に夢中です。
今後の活躍も期待してます。

あと、質問も受けつけているみたいなので1つ。

ネプテューヌへ質問
「もはや雑魚1000体相手でも無双できるんじゃね？」

以上。
もしうちの小説（はじめたばかり）を見てくださったら幸いです。
ではまた！』ふむ、あの紫なら無双も可能だろう。『なめ猫』よ、廊下に立つがいい」

真王「次はペンネーム『黒龍』さんからだ。『黒龍「おお、また新しいキャラが出てきた！」

ソラ「つまり、これで二作品とコラボしてるって事だな」

銀時「だよな。つうか、多すぎで俺誰が誰が分かんなくなってきたんだけど・・・」

黒龍「いや、さすがにそれはマズイでしょ」

ソラ「お前はどうなんだ？」

黒龍「・・・・・・（汗）」↑あからさまに目を逸らす

銀時「オメーも分かってねぇじゃねぇか！！」

黒龍「そ、そう言うソラはどうなんですか！？」

ソラ「まぁそうだな。何となく覚えてる感じだな」

銀時「お前は正直だな」

黒龍「とにかく、この作品の良さの一つはキャラの多さと言う事ですね」

銀時「けどよ、あっちの俺の出番が減るのはおまり良い気分しねぇけどな」

黒龍「そう言う事言わないでください！！」

ソラ「質問行くか？」

黒龍「そうですね。じゃあ質問します」

1．レイン達風花さんのキャラ達に質問。あなた達の元の世界にも

確かリリカルなのはキャラ達がいましたよね？って、そっちのなのは勢のなのは、フェイト、スバル、ティアナ、リィーンフォース、チンク、セッテ、ティード、セイン、ウェンディ、が銀さんＬＯＶＥな事についてどう思いますか？

２．レインに質問。うちのソラと気が合うと思いますか？

３．森羅に質問。あなたと新八は同じ穴のムジナだと思いますか？

（黒笑）

黒龍「今回はここまでです。次回を楽しみにしています」『それじゃあ答えましょうか」

レイン「あれは凄いな。あと気が合うと思うな」

森羅「なんだか複雑な気分だぜ。って一緒にするな！！」

咲夜「私は～、どっちでもいいわ～」

蒼馬「フッ、それがもてる男か…」

紅也「近寄るとロクな事がない…」

さくら「む～、なら私もレン君と同じように！」

カイム「なにする気だ６番目。『黒龍』廊下に立て」

アンヘル「こやつで最後じゃ。『黒神』がな。『質問します。

新八へ

何か最近原作で酷い扱いされてると思いますか？
ゲームオタク堕ちや、中途半端なツッコミサボり、そして連邦編でのブリーフ姿。

不安があったら怒りのコメントを言ってみてください。

音無へ

僕の小説で、地獄の罰ゲーム付きの大会に呼ばれた事を強く後悔していますか？

以上です。』ではメガネと音無」

新八「クッ！これが僕なのか！？」

音無「ああ、もうそれしかないと思う」

真王「絶望に染まるな！『黒神』さん廊下に立ってなさい！」

アンヘル「次のアシストはユウカになる。ではの」

真王「あ、それからストーリーアンケートを募集します。詳細は活動報告より。では」

第八十三訓：恋はいつでもハリケーン（後書き）

新八「うわぁぁ！！僕ファーストキスもらっちゃったよォォおお！！！」

ジャンヌ「新八君、これからもよろしくね？」

新八「はい！」

山崎「ついに新八君も彼女が出来たんだね…」

ディエチ「私達もだけどね…」

咲夜「ユー君？」

ユーノ「さ、咲夜さん…」

銀時「腹立つ！！こいつ等腹立つ！！」

ユウカ「あら？もてないからって八つ当たりは駄目よ？」

銀時「ヘブ！」

ユウカ「次回『癖者揃いは個性的』テイクオフよ」

第八十四訓：癖者揃いは個性的（前書き）

真王「今回長いしキャラが増えます」

銀時「お前どんだけ作ってんだよオリキャラを！！」

真王「とっさに思いついたんだよ。それでは始まります！」

第八十四訓：癖者揃いは個性的

機動六課の訓練場でフォワードは何時も通りに訓練中。

スバル「ディバインブレイカー！」
ティアナ「クロスバーニングシュート！！」
エリオ「雷王一閃！！」
キャロ「ドラグニールチェーン！！」

ただ原作物よりも技が増えてパワーが付いてなお且つランクがＡＡＡ級まで行っているくらい強くなっている。

銀時「性が出るね～」
レオン「うむ、奴らもいい腕を持ってるな」

銀時とレオンがフォワード達を眺めている。

ネプテューヌ（・・・なんだろうこれ？）

銀時達とは別のとこでネプテューヌは奇怪な物を見る目で見ている物がある。
それは『抜いてね？←』と書かれた看板と、その下にメカっぽいうさ耳があった。

リアス「あら？ネプテューヌ、何やってるの？」

見ているとリアスが声をかけてきた。

ネプテューヌ「あ、リアスさん。これ」

ネプテューヌはリアスにうさ耳を指差す。
それを見たリアスはいやいやそうな奇怪な目でうさ耳を見ている。

リアス「…ハァ、ネプテューヌ、それは引っこ抜かない方が「お～い何やってんだ？」」

ため息を吐いてネプテューヌに言おうとしたら銀時とレオンがやってきた。

銀時「ん？ってなんじゃこりゃ？」

銀時は奇怪な目でうさ耳を見た。

レオン「おお、タバネか」
銀時「え？これを知ってるの？」
レオン「うむ、しかしそれは飾りだ」

レオンがうさ耳を見ていい、銀時が指差して言うとレオンが答える。

レオン「私達の居場所を突き止めるとは、凄いと言うべきかなあのマッドサイエンティストっは！！」

ズボッ！！

レオンがうさ耳を持って引っこ抜いた。
うさ耳だけが取れた。

ネプテューヌ「耳だけとれちゃってるぅウゥウゥウゥ！！？銀さんどうしよう！？」

銀時「ば、馬鹿野郎落ち着け！！とととにかくタイムマシンを探すんだ！！」
ネプテューヌ「イヤ銀さんが落ち着いてよ！！！」

耳だけとれたことにネプテューヌはパニクったが、銀時がゴミ箱に顔を突っ込んでパニックになっていたので思わず突っ込む。

？？？「やっほ～～～～～～～～～～！！！！！」

すると上空から女性の声が聞こえて上を見上げると大きなニンジン（少々メカっぽい）が落ちてきた。

銀時「なんじゃこりゃぁ！！？？」
ネプテューヌ「で、でかいニンジン…」
レオン「ずいぶんと派手な登場の仕方してるな、タバネ」

銀時とネプテューヌは驚き、レオンが愉快そうにニンジン（？）に言うとニンジンが開いて機械っぽいうさ耳をつけたピンクっぽいロングの女性が出てきた。

タバネ「ひっさしぶりだねレオちゃん！リアちゃん」
レオン「だからレオちゃんではないと言ってるだろ」
リアス「私はリアス！それで呼ばないでっていってるでしょ！」

なんだか彼女の愛称で呼ばれるのが嫌なレオンとリアス。

ネプテューヌ「あ～、えっと、知り合い？」
レオン「イヤ、ギルド仲間だ」
銀時「ギルド？メテンズギルドのか？」
タバネ「ど～うも！メテンズギルドS級転生者・タバネ・シノンだ

よ～」

自己紹介をするタバネ。

銀時「あ、どうも、ご丁寧に。俺は」

タバネ「あ、言わなくても分かるよ。白夜叉・坂田銀時でしょ？」

銀時は驚いた。

特に本名より二つ名の部分に。

タバネ「んで、そっちは銀時の嫁候補のネプテューヌちゃんだね？」

ネプテューヌ「候補じゃない！今でもばりばり嫁だよ！」

銀時「それは大人になってから言え」

タバネはネプテューヌを見て言うとネプテューヌが嫁宣言する。

銀時は突っ込むが返事はネプテューヌのグーパンチだった。

レオン「ところで、一体なにようでこっちに来たんだ？」

タバネ「おっと忘れるところだった～。あのお方が、銀ちゃん達に会いたいって」

リアス「アテナスが？・・・分かったわ」

レオンがタバネが来た理由を聞くとタバネは応えてリアスが承諾する。

リアス「レオン、イッセー達を呼んで。あ、それからちょっと新人がいるから入隊できるかしら？」

タバネ「新人君ですか～？アテナっちなら多分受け入れると思いますよ～」

リアス「頼むから誰彼構わず愛称チックな呼び方は止めてってば。

特にアテナスには」

リアスは頭を抱えるはめになった。

レオン（あいつはタバネのネジずれな頭が苦手らしいからな…）

レオンはリアスを見ながらそう思った。

で、

タバネ「さ～て♪皆さん準備はいいですか～？」

タバネがちっちゃなドアっぽいアイテム・デールを持って銀時達に聞く。

今レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イッセー、カイム、アンヘル、レオン、ユウカ、ナリアだけならず、銀時、新八、神楽、定春、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、源外、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ユーノ、スカリエッティ、グレイ、ビビ、神、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、イストワール、ネリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらまでいる。

銀時以外は興味本位で付いてくるようだ。

レーティア「久しぶりにギルド帰りね」

ギルシア「さて、どんなとこやら」

リアス「本部に帰って報告しますか」
レオン「さて、あいつはもう帰ってるかな？」
ナリア「また私の部屋にコレクションが…フフ」
タバネ「それじゃあいっきますよ～」

レーティア達は懐かしそうにしているとタバネがデールを使用する。
すると地面に穴が開いた。

タバネ「落下中気をつけようね♪～」
全員「なんでだァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！？？」
リアス「だから私はあんたが大っきらいだってのよォォォォォォォォ！！！！！！！」

全員の叫びは奈落の底へ落とされた。
ちなみにタバネも落ちた。

？？？

バチバチバチバチ！

時空の渡し人「お戻りになられましたか」

金髪ロングで目をつぶっているように見えて手枷をつけた女性（見た目ディスガイアの僧侶）が時空ゲートを見て言った。

全員「どわあああああああああああ！！！」
タバネ「はいとうちゃ～～く！！」

するとゲートから滝のように銀時達がなだれ込んできた。
タバネは奇麗に着地。
女性は雪崩の中に入らなかったため無事である。

タバネ「みんな～？そんなところで寝ちゃだめですｙ」

ドガ！バキ！ベキ！バキ！

リアス「誰のせいでこうなったと思ってるのよ！このすっとこどっこいが！！！」
タバネ「いった～～～～い！！」

タバネは相変わらずボケた言い方をして切れたリアスが鉄拳を与え、
タバネは涙目で頭を押さえる。

レイン「っていうか」
森羅「ココがそうなのか？」
タバネ「そうだよ。そしてようこそ！転生者（アルティエラロード）たちの集い場・メテンズギルドへ！」

銀時達は皆ギルドの中を探索している。

転生者（アルティエラロード）たちの集い場・メテンズギルド・ひろば

ほとんど漫画やゲームやアニメなどのキャラそっくりな奴らが多い。

銀時「ホントにほとんど見覚えのある奴らばっかなんですけど」

銀時は周りを見ながら言う。

ネプテューヌ「ホントだね。あ、長い舌の恐竜がいる！」

コンパ「こっちにはピンク色の丸いのがいるです！」

レーティア「でも一番はこの子なのよ」

黄色いネズミ「ピカチュ」

女性陣「かわい～？」

ネプテューヌはヨッ●ー、コンパはカー●ィーを指差して言い、レーティアがピ●●ュウを持って女性陣は見惚れる。

ナリア「おじさん！あのフィギュアは出ましたか！？」

店主（アイアンナイト）「おうナリアちゃんかい？悪いが売りきれちまった」

ナリア「なん…だと…？」

店主「うそだ。こいつだろ？」

ナリアがディスガイアのアイアンナイト似の店主に声をかける。

店主はないと答えてショックを受ける。

だが店主の冗談のようで一つのフィギュアを出した。

それはＳＴＲＩＫＥＲＳなのはのメイド服姿のフィギュアだった。

ナリア「ついにきたぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ナリアはもらえて大はしゃぎする。

銀時「ってちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!何だよそのフィギュアはよ!!」
なのは「にゃぁぁ!!何で私のがぁ!!??」
店主「あれ?ご本人登場!?」

銀時となのはたち原作キャラーズは驚いて突っ込むと店主は本人の登場に驚いていた。

モブ転生者「何!?なのは様だって!!?」
モブ転生者2「それに銀魂の銀時たちもいるわ!!」
モブ転生者3「うおおお!!かあい子ちゃんがいっぱいだ!!!」

周りにいた住人達（モブ転生者たち）も驚いて人だかりができた。

ユウカ「控えなさい、屑共!」
モブ転生者「ってギャァァァァ!!『ドS女王』ユウカだぁぁ!!」

ユウカがドスの聞いた声で言うとモブたちはすぐに離れた。

銀時「あの、もしかして何気に有名人なの?」
リアス「まぁね。私たちはこう見えてS級転生者なんだけどね」

銀時が疑問を言うとリアスが答える。

ネプテューヌ「そのS級ってのがよく分かんないけどとりあえずすごいという事だね?」
ノワール（なんだかランクがあるみたいね）
レイン（S級ってドンだけ強いんだ?）
グレイ（ここのやつらはどれぐらいなんだ?）

ビビ（っていうかあのフィギュアほしい…）

それぞれこんな事を考えていると、

ウォーリアー「みんな～～！！『戦鬼姫』が帰ってきたぞ～～！！」

なのは「な、なに？」

レオン「帰ってきたか・・・」

ディスガイアのウォーリアーそっくりの転生者がギルド内を叫んでいる。

聞いたほかの転生者達は驚いた顔をしていた。

そして奥から漆黒のポニーテールで水着のような鎧を身につけ顔に赤い刺青をつけた女性がやってきた。

手にはひもがあってその後ろに真っ黒焦げなドラゴンがある。

？？？「今日は大量に取ってきたの♪」

上機嫌な女性。

しかし銀時達は戦慄している。

女性から漂う強者のオーラが分かるのだ。

すると女性は銀時達を見た。

？？？「見慣れん奴らじゃの。それとレオンではないか！」

レオン「久しぶりだな？ガレーナ・ギラス。会いたかったぞ」

ガレーナ「そうかそうか。余も会いたかったぞ！！」

レオン「！！」

女性・ガレーナはレオンを見て懐かしそうに言い、レオンも懐かしそうに言う。

するとガレーナがいきなり駆けだしてきてレオンも駆け出して、
ドゴォォォォォォン！！！
衝撃波が起こるほど2人の拳同士がぶつかり合った。
銀時達は衝撃波に吹き飛ばされそうになった。

ガレーナ「腕は衰えてなかったようだなレオン」
レオン「そちらも衰えてはないみたいだなガレーナ」

拳を交えた二人はにやりと笑みを浮かべる。

銀時「あいつ誰？」
ナリア「ガレーナ・ギラス。レオンの戦友（ライバル）でS級転生者。そして極めつけは負けずを取らない戦闘狂だよ」

銀時はガレーナを指差してナリアに聞くと、ナリアはガレーナのことを説明する。
それを聞いた銀時達は苦笑いを浮かべた。

ガレーナ「そうそう、戻る際にアテナスから呼ばれててな」
レオン「そうか。なら行くか」

ガレーナが戻ってくるときのことを話すとレオンは同意する。

モブ（サイヤ王子）「だ～か～ら～！ギャリック砲の構えはこうだって言ってるだろ！？」
モブ（サイヤ戦士）「えっとこれか！！」
モブ（鮮血のヤンデレ）「ユウセイく～ん、待ってよ～」
モブ（その彼氏）「のこぎり振り回しながら来るな～～～～！！！

！」
モブ（月の姫）「くたばれ～～～～～！！！！！」
モブ（もこたん？）「死ねやァァァァァァァ！！！！」
モブ（？）「私ってば最強ね！！」
モブ（若本（ｒｙ）「ベリィィィィィィムェエエロォォォンンン！！！！！」
モブ（爆発キャラ）「ぬわぁァァァァァ！！！！」
モブ（ハゲ）「な、ナムチャァァァァァァァァァ！！！！」
モブ（スナイパー）「俺の後ろに立つな…」
モブ（ドジ軍師）「ハワ～～！！」

・・・行く途中いろんな住人がいたがそこは無視することにした。

転生者（アルティエラロード）たちの集い場・神々の宮殿

ここは先ほどよりも神秘的な宮殿。
銀時達は目を奪われる。

リアス「ほら、そんなところで惚けってないで早く入りなさい」

とリアスが観賞を邪魔されたがとりあえず中に入る。

中に入った銀時達は大きなドーム状の部屋に入る。
その中心に一人の女性がいた。

？？？「きましたか」

その女性は“来るのが分かった”かのように言う。

リアス「連れてきました。アテナス様」

リアスが礼儀正しくお辞儀をした。
レーティア、ジャンヌ、イッセー、レオン、ガレーナ、ユウカ、ナリアもお辞儀をした。
青い髪の神々しい女性、アテナスが振り返る。

アテナス「遠くからのおこしをありがとうございます。私はメテンズギルド首相兼転生神のアテナスと申します」
新八「あ、こちらこそ」
なのは達「ご丁寧に…」

アテナスがお辞儀してはなして来たので新八やなのは達はつられてお辞儀をする。
すると銀時が股間を押さえて、

銀時「なぁ？俺ションベンがしｔ「この無礼者めがァァァァァァァ！！！！」ガボォ！！」

何か言おうとした瞬間ディスガイアの魔法剣士の様な女性が銀時を蹴飛ばした。

？？？「キサマァ！アテナス様に向かってよくもそんな汚い言葉を口に出来るものだな！？」

胸倉を掴んでガクガク揺らす女性。
すると銀時の顔がどんどん青くなる。

銀時「ゆ、揺らすんじゃね…ふ、二日酔いが…」
ネプテューヌ「わわわ！このままじゃ銀さんの口から異物がUターンしちゃうよ！！」
アテナス「レシア、そろそろお放しになって」
レシア「む…分かりました」

ネプテューヌが慌てて止めようとして、アテナスが言うとレシアは動きを止めて下す。

銀時「あ、やべ…俺そろそろはきs「フンッ！」ガボォ！」

揺らされたせいで限界に来たところでレシアがボディブローをかまして銀時を吐き出させる。
その瞬間メイド服を着た人が現れて異物を袋の中へジャストインした。
袋に入ったあとメイドの人はどこかへ消えた。

レシア「どうだすっきりしたか？」
銀時「スッキリするどころか腹痛が出たんですけど！！」

真顔で言うレシアに青筋立てて言う銀時。

新八「そりゃ銀さんの自業自得ですよ」
ネプテューヌ「あはは、私ネプテューヌっていいます。貴方のお名前は？」

新八は冷ややかな目で見て、ネプテューヌは苦笑いをしながらレシアに聞く。

レシア「私はアテナス親衛隊総隊長・レシア・エルダー。嫌いな物は身分と状況をわきまえない輩です。特にあなたとかあなたとかあなたなら尚更ですが」
蒼馬「フッ、僕がご指名されるとはね」
辰馬「アハハハハハ、ワシも仲間入りか～」
神「俺様が同類にみなされてるな」

レシアの冷たいセリフに蒼馬、辰馬、神は一本とられた感じになる。

レシア「それよりも得に許しがたきことはそこの犬です！！」
定春「ワフ？」
神楽「定春がどうしたネ？」

レシアがイラついた感じで定春に指差す。
定春と神楽は分からない顔をする。

レシア「とぼけないでください！さっきから体中泥くさいにおいがその犬から充満してるじゃないですか！っていうかあなた方はその犬に洗ったことがあるんですか！？」
銀時・神楽・新八「イヤ全然」

レシアの言い分によろず屋は真顔で返した。

レシア「ヌグググ・・・この際仕方ないです、アテナス様！この犬を清潔にさせてあげますーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」
神楽「ア、テメェ！定春を返すネェェェェェぇ！！！」

痺れを切らしたレシアが定春を担いで扉から出て行った。
神楽は追いかけていった。

アテナス「あの子ったら相変わらず汚いものには厳しいわね…」

アテナスは苦笑いを浮かべる。

数秒後…

レシア「御清潔をさせてあげました」
新八「イヤ早っ！？」
定春「ワン」
神楽「ホワ～、定春かいい香りがするね～」

身体中ピッカピカにいい香りを漂わせる定春が戻ってきました。
神楽は定春の上でぽけ～っとしている。

なのは「ほんとだ、いい香りがする」
咲夜「いいにおいの枕みたい～」
ビビ「和む～」

ほとんどの女性陣は定春にモフモフしている。

アテナス「さて、余談はここまでにして本題に戻りましょう」

アテナスは真剣な顔になる。

アテナス「この最近、世界規模でイヴィルの活動が活発になっています。理由はお分かりかと思いますが、ある男の仕業なのです」
ネプテューヌ「ネオだね」

ネプテューヌの言葉にアテナスはうなずく。

アテナス「ネオは危険な存在ですが、もうひとつ危険なものがひとつあります」
桂「む？・・・まさかダークソウルか！？」

桂が思い出して聞くとアテナスはさらに驚愕する事を言った。

アテナス「そうです。ダークソウルは彼が作り出したもの・・・・・・・・いえ、改造されてしまったものなんです」
レイン「改造・・・だと？」

レインが頭を傾げて聞く。

アテナス「ダークソウルは人々の負の感情が集まった集合体。そのためには贄物を持って出さなければならないのです」
ネリア「ま、まさかあのダークソウルは・・・！？」

ネリアが驚愕した表情と出す。

アテナス「そうです。あのダークソウルにはネオが森羅万象の神と名乗る前に慕っていた使いの少女・エルナなんです」
全員「なッッッ！！！！！？？」

全員が驚愕する。
ネオは酷い奴だと思っていたがそれ以上だった。

アテナス「あの子は彼を憧れていました。世界や全てのためにしていく彼を尽くすために彼女は彼の傍に着きました。ですがネオはそんな彼女を道具としか見ていなかった。裏切られ、心を闇に染めた彼女はダークソウルの奥深くに閉じ込められました」

衝撃の言葉に全員言葉を失った。
いや、そうじゃないのがいた。

レイン「ッざけるなぁっっ！！！！」

レインだった。

レイン「奴に憧れを抱いていたそいつを、ただの使い捨てにする奴が、存在してたまるか！！」
森羅「俺もレインに賛成だ。捨て駒にする奴は許せネぇ！」
咲夜「私も怒っちゃうわよ～」
ナリア（そうは見えないわよ…）
ビビ「女の子を捨てるだと！？許せん！！（#、Д,）」
ティアナ「ふざけてるわ！！そんなこと、神でも許されると思ってるの！？」
なのは「…ここまで怒りを感じたのは初めてだよ」

その他もネオに対して怒りをあらわにしている。

アテナス「・・・・・・・・・」

アテナスは少しつらそうな顔をしている。

神「で、様はそのダークソウルの中にるそいつの救出とネオの計画の阻止を依頼したいのか？」
アテナス「…はい」

神の言葉にアテナスは肯く。

銀時「・・・しゃーねぇな」

銀時はポリポリと頭を掻いて言う。

銀時「要は手伝ってくれってんだろ。この『万事屋銀ちゃん』の坂田銀時がその依頼を受けてやるぜ。ただし、報酬はがっぽりもらうがな」

レシア「貴様…！」

アテナス「およしなさい！」

レシア「はい」

銀時の欲っぽい物を見たレシアが突っかかろうとしてアテナスに止められる。

アテナス「私の願いを聞きうけてくれるのでしたら、それなりのお礼をさせてあげます」

銀時「そう来なくっちゃな」

ネプテューヌ「大丈夫！私達がその願いを叶えてあげるよ！」

みんなの決意が固い。

アテナス「ありがとうございます」

アテナスはお礼を言った。

神「ところでだ、仮に神と名乗ってるんだ。何か能力はあるかい？」

レシア「貴様その態度…」

アテナス「私の能力と言えば『異能の力に干渉されない程度の能力』ってとこですね」

レシア「アテナス様！？」

いきなり神が言いだしたことにレシアは顔を強張らせるがアテナスがそれを話して驚いた。

神楽「なんねそれ？」
神「まぁこう言うことだ」

分かってない神楽が首をかしげると神がバインドを投げる。

スッ

するとバインドがアテナスに捕まる前に消えてしまった。

アテナス「と、この様に異能の能力を消せます。それから、このリンゴを潰して見てください」

アテナスが神楽にリンゴをさし出す。

神楽「リンゴ潰す？舐めてるアルか？こんなもん楽に…」

神楽はリンゴを一気につぶ・・・す事が出来ない。
汁が少しずつ出ているだけだ。

神楽「あれ？おかしいアル！！いつものパワーが出ないネ！！」
アテナス「このように能力持ちでも私が触れればただの人の様になります」

いつもと違うことに戸惑う神楽。
アテナスがその原因を言う。

銀時「マジか！？」
レオン「マジだ。どんなものでもアテナスには効かん。・・・物理攻撃は除くが」
銀時達はおどろいて、レオンが肯定する。
アテナス「では、我々メテンズギルド協力の元、あなた方の協力者を紹介します」
アテナスが言うと複数の人物が現れる。
その二人は面識あり。
タバネ「最初に会ったけどタバネ・シノンだよ～、ブイブイ！」
両手にVサインするタバネ。
ガレーナ「ガレーナ・ギラス、レオンこれからも一緒になれるぞ」
腕を組んで言うガレーナ。
ヤルオ「僕は恵絽ヤルオだおｗｗｗｗｗ。よろしく」
全員（なんだ今の口癖は…？）
ビビ「・・・・・・・・・」
黒髪の少年の口癖に戸惑う銀時達。
ビビは少年を見て嫌な顔をしている。
ルシアス「私はルシアス・ルーセン。あまり私に話しかけなしで」
赤い目にツインテールの少女がそっぽ向いて言う。

周りは苦笑いかため息をした。

ルーシア「私はルーシアだよ。好きなことはおねえちゃんをぶっ殺すこと」

ルシアス「よし、言いたいことがあるならこの際はっきり言いなさい」

ルーシア「キャハハハ！良いよ！殺ってあげる！」

ルシアスの双子と思われる少女が碌でもないことをいった後ルシアスとルーシアが武器展開…

???「止めんか！」

ルシアス「いたっ！？」

ルーシア「にゃあっ！？」

…したら黒い髪の女性が本（！？）で二人の頭をはたいた（というか殴ったと言うべきか？）。

???「小娘どもは、また喧嘩しているのか？」

ルシアス「イヤ～、ワタシタチナカヨクヤッテマス～（ひきつった笑顔と汗）」

ルーシア「ホラコノトオリ～（こちらも）」

ビビ・ナリア（フェアリーテイルのハッピーみたいになってる！？）

女性から威圧のオーラが見えてルシアスとルーシアが不自然に笑って肩を組んでいる。

ビビとナリアはこれを見て驚いた。

チフユ「フン、チフユ・オオムラだ。教導は厳しくしておくから覚

悟しておけ」

女性は銀時達にそう言った。

神はチフユを見て若干ながら冷や汗をながしている。

アルテス「私はアルテス・ラーエムです！好きな人はユウカ様とかユウカ様とかユウカさm」

ユウカ「あらそんなに罵られたいわけ？」

アルテス「ああ？ユウカ様！！もっとあそこを蹴って！！？」

白よりの紫の髪の女性がユウカにどかどか踏まれて喜んでいる。

ほとんどの人はドン引きした。

アテナス「そして最後に、レシア、貴方もお行きなさい」

レシア「な！？アテナス様！私はあんな馬鹿共といるのはごめんです！」

アテナスの言葉にレシアが驚いて反論する。

レシア「特に乱れた頭と腐った目に下品な言葉を使っていつも女性に振り回される男がいるなら尚更です！」

銀時「おい！それ俺のこと言ってんのか！？」

ナリア「特定の人を言ってるみたい…」

レシアの言い分に銀時が突っ込み、ナリアが呟く。

アテナス「私からのお願いと思ってください」

レシア「むぅ・・・・・・・・・分かりました」

レシアはしぶしぶ従った。

アテナス「それでは、現時点を持って我々メテンズギルドはあなた方に協力いたします」

『タバネ・シノン』『ガレーナ・ギラス』『レシア・エルダー』『恵紹ヤルオ』『ルシアス・ルーセン』『ルーシア・ルーセン』『アルテス・ラーエム』『チフユ・オオムラ』が仲間になった。

銀時「…どんどんオリキャラ達が集まってるんですけど…、つーか俺どんどん影薄になってねぇ!?」

ネプテューヌ「銀さん落ち着いて」

頭を抱える銀時になだめるネプテューヌ。

レオン「そう言えば銀時、ランクのこと気にしてたな?」

レオンが思い出したかのように言う。

レオン「いい機会だから教えてやってもいいだろう。タバネ」

タバネ「オ～ケイ～!天才タバネちゃんがランクについて教えちゃうよ!」

レイン「自分で天才っていってるぞ」

レインのツッコミを無視してタバネはモニターを出す。

タバネ「タバネちゃんの～、ランク解説コーナー～♪」

新八「なんか新展開始まったんですけど!?」

新八は思わず突っ込み、周りは唖然とするか頭を抱えるか苦笑いを浮かべるかである。

タバネ「まず、転生者にはそれぞれ強さのランクがあるの。C、B、A、S、EXの5種類あるんだよ。ちなみに詳細はこっち」

タバネはランクの詳細を出す。

『C級転生者：普通の人と変わらないあまり能力を持たない者に着くランク。だが頑張り次第によってB級にランクアップする』

『B級転生者：常人からは達人というレベルのランク。能力は一つだけ。C級と同じく頑張り次第によってAかSに行く可能性がある』

『A級転生者：悪魔の中で魔神ランクの強さを持つランク。能力は一つから複数ある』

『S級転生者：魔王や神とほぼ同じ実力を持つと言われるランク。転生者の中では覇道を極めし者という意味になる』

『EX級転生者：その実力は全知全能、全宇宙の力を持つと言われるランク。詳細は不明だがこのランクを持つ者は一人だけのようだが…』

ネプテューヌ「うわ、スッゴイレベルの違い…」

なのは「それじゃあタバネさん達はS級ランクということなんですか？」

ネプテューヌはランクの違いに呆然とし、なのはが疑問を言う。

タバネ「そうだよ～♪でもルルッちとルッちゃんとヤルオ君はAランクなんだ～」

ルシアス「だからそのあだ名は止めろと何度言ったらわかるの？」
ルーシア「私は別にいいけどね～」
ヤルオ「僕はあだ名ですらないおｗｗｗｗ」

相変わらず他人を愛称で呼ぶタバネ。
上記三人はそれぞれの反応をする。

神「で、ＥＸランクの奴はなんで詳細不明なんだ？」
タバネ「そりゃ誰だか分からないからなんだ～」

神がＥＸランク者のことを聞くとさっぱりなポーズをするタバネ。

タバネ「でも数少ない情報があったんだ。一つはその人物が転生者でないこと。二つ目はほぼ黒っぽいこと。三つ目はその人物の付いた二つ名が『黒き判決者（ブラックジャッジメント）』って名前だったね」

その人物の特徴を言うタバネ。

神（黒き判決者（ブラックジャッジメント）…だと？・・・・・・・・・まさかあいつなのか？）

神はその人物を思いつく。
漆黒の衣を身にまといし魔界神界の超伝説となっているあの男を…。

銀時「そいつって強いのか？」
タバネ「強いもなにも、その人はＳクラスの悪転生者５０万人をたった一人で壊滅させたってことだよ」
全員「もはや超人越えしてるんですけどォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！？？」

何気なく聞いた銀時だが、タバネの答えが予想を超えて超驚愕した。

タバネ「ま、それはともかく、超スンごい人だってことだよ」
ノワール「そ、そうですか…」
アテナス「・・・話はまとまったかと思いますが、よろしくお願いします」

タバネの言い分にノワール達は苦笑いを浮かべる。
アテナスが言った後なのは達やレシア達は宮殿から出て行った。
そしてアテナスが…いや、なぜかネプテューヌだけがここにいる。

アテナス「？あなたは行かなくてよろしいのですか？」
ネプテューヌ「アテナスさんに聞きたい人がいるの」
ダークネプテューヌ「そう言うこった」

ここにいるネプテューヌに疑問を持ったアテナスが聞くと、ネプテューヌの体からダークネプテューヌが出てきた。
アテナスはダークネプテューヌを見て驚いた。

ダークネプテューヌ「単刀直入に言う。『なぜあの神のことになるとつらそうな顔をするんだ？』」
ネプテューヌ「そうだね。同じ神様でも『知ってる程度であんな悲しそうな顔はしない』よね？」

2人の言葉にアテナスは言葉を詰まらせる。

ネプテューヌ「・・・何かわけありみたいだけど聞かないでおくよ」
アテナス「・・・そうしてくれますと助かります」

ネプテューヌはしぶしぶと諦める感じになって、アテナスは少し安心を浮かべる。

アテナス「そんなあなたに特別に名前を教えます」
ダークネプテューヌ「アテナスは偽名ってか？」
アテナス「それは神としての名前です。私の本当の名前は、リアーヌと申します」

アテナスは…いや、リアーヌはネプテューヌに真実の名を言った。

リアーヌ「気をつけてください。あなた方に平和のご加護があらんことを…」

リアーヌはそう言って祈る。
ネプテューヌもとりあえず祈る。

？？？「・・・・・・・・・」
？？？「邪魔しなくていいの？」

遠くで祈っている二人を見ている奴らがいる。
リアスとレシアだ。

レシア「私はアテナス様にちかづく汚らわしいものを嫌いますが、アテナス様のお心を理解してくれる方なら話は別です」
リアス「あの子は仮にも女神の類だからね」

2人は祈る2人を見ながらその場を去った。

余談ではあるが、帰る途中モブどもに絡まれたりお土産大量に持って帰ったりしたことは別の話。
帰って早々銀時はまた男局員（なのは達のファン）たちに追われるのも別の話。

そして、

オカマ転生者「あ～らやだ？あたしの好みのタイプじゃない！結婚して～？」

雷帝の男「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

たまたま遊び半分でやってきた転生者殺しがオカマに追われる羽目になるのもまた別の話なのだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ユウカ「うふふ、ユウカ・カザキリよ？」

銀八「俺こう言うドS女は苦手だ…」

ユウカ「あら？ひどいこと言うわね」

銀八「・・・ではペンネーム『白騎士君』から行くぞ」

ユウカ「無視したわね」

銀八「いや・・・なんでもねぇ。んじゃ、『白騎士君「新八君についに彼女が！」

レナード「おめでとう！新八君」

銀八「カーッペッ！」

作者は新八に恋が芽生えた事に驚き、レナードは新八に祝福した、銀八は不満そうに床に唾を吐いた。

白騎士君「では質問します。『

1，スバルとネプテューヌに質問。気合でギガ・ドリル・ブレイク出来ますか？

2，みんなに質問。僕の小説のレナードの味覚をどう思いますか？

』以上です」

レナード「シャルさん。スペースゴキブリは生と焼くはどっちが美味いんだ？」

銀八「レナード！そんな質問すんな！」』ズバリ答えていきます」

スバル「無理です」

ネプテューヌ「そもそもドリルないよ？」

真王「当たり前だ。皆さんはマリオ（鳴神ソラ）と同じＸＸ料理食者だと思ってるんじゃないか？」

シャル「私は焼きを入れる方が…」

銀八「はい『白騎士君』廊下に立ってなさい」

ユウカ「・・・次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんからね。『ルイージ「……（ダバァァァァァァァ）」

マリオ「ルイージぃぃぃぃぃ！！！どうしたいきなり！？涙を滝の様に流して！？」

ルイージ「良かった！新八君が幸せを掴んで！（Π－Π）」

フォックス「ルイージはな…」

スネーク「扱い悪い人の味方だからな…」

ネス＆リュカ「うんうん」

タレ銀「なのはちゃん達に質問『成長したヴィヴィオちゃんと１対１戦って勝てる？』」

冥王「皆に質問なの♪『ヴィヴィオちゃんに称号を付けるならどう言う感じのにするの？』」

フォックス「ユーノに質問『恋のライバルって言うけどどこら辺でライバルなんだ？』」

次回を楽しみにしてます♪』そうね、今のとこなのはとほぼ互角だろうけどシグナムとはまだまだって感じね。あと称号はこんなとこよ」

紙に、『魔王の娘？』『聖王のクローン』『将来の主人公』『なのはの娘』と書かれている。

ユーノ「最後は僕ですね。そりゃ僕は咲夜さんと、新八君はジャンヌさんといるから（咲夜さんが半ば）ライバルということになりました」

ユウカ「それじゃあ『鳴神　ソラ』、そこのダメ鈍感に恋でも教えなさい。次はペンネーム『月光閃火』からの質問よ。『ども…月光閃火だ。

しかし…銀さん、アンタはリリなのの大半の女性陣に愛されてるんだからそんな僻まない僻まない♪

輝刃「…何も言えんな…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．新八に質問…ジャンヌからファーストキスを貰った訳だが、正直言ってどんな味だった？

確かに、『ファーストキスはレモン味』なんてフレーズが昔からあったからな…何か気になる…。次は俺からだ。

2．マジェコンヌに質問…そういえば、この所出番がサッパリ無いけど…正直言ってヒマ？っつーか、あまりスポットが当たらなくて寂しい？

輝刃「そういえば、序盤はそこそこ出番はあったが…最近はめっきり出番が無いよな？正直言って、ヒマを持て余していただろうな…（汗）。」『」

新八「えっと…ほんのり柔らかなイチゴの味がしました／／／／／」

ジャンヌ「新八君…／／／／／」

銀八「カーッペッ！！」

2人の桃色空間に銀八は不機嫌に唾を吐く。

ユウカ「あら？レディの前でなに唾を吐いてるのか・し・ら！！？」

銀八「ギャアアアアアアアアアアアアア！！！」

唾を吐いた銀八を気にいらないユウカは電撃で銀八を黒焦げで気絶させる。

マジェコンヌ「別にそんなもの気にせんが？」

真王「ハイじゃあ『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『ボッスン』さんだ。『新八君。おめでとう。

バナージ「よかったな。新八さん。恋人が出来て。」

ニンフ「これでさみしい思いをしなくってよかったね。」

ケンジ「後、ユーノに恋人が出来たな。」

ユーノ君もおめでとう。

質問です。

新八君とユーノ君。恋人が出来た感想は？

新八君とユーノ君とジャンヌさんと咲夜さん以外の皆さん。恋人が出来た新八君とユーノ君をどう思いますか？

バナージ「銀さん。何で新八さんとユーノさんに嫉妬するんだ？」

ニンフ「銀さん。銀さんＬＯＶＥの人達がいっぱいいるのに。」

次回も楽しみにします。』」

新八「そりゃうれしいですよ！！魂から！！」

ユーノ「僕もだね」

ジャンヌ「ニャハハ、嬉しいよ新八君」

咲夜「私もよ～、ユー君」

上記四人以外「先越されたァァァァァァァァァ！！！！！」

銀時「そりゃ彼女作った新八が許せないからだ」

ユウカ「理由になってないわ。『ボッスン』廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒龍』ね。『新八「先越されたァァァァァァァァ！！！！」』」

新八はまだこっちの自分は彼女が出来なくて、あっちの自分は彼女が出来た事に涙を流して頭を抱える。

銀時「おいおい、マジかよ……」

黒龍「真王さんも気を利かせたって事ですかね？」

神楽「あっちのぱっつぁんは幸せになったアルか……メガネのくせに生意気ネ」

黒龍「まぁ今は純粋に祝ってあげましょう。オタクである彼に彼女が出来た事に…」

ソラ「オタクって言ったな…」

黒龍「じゃあ質問いきましょう」

1．銀さんに質問。なんで新八が彼女出来た事について舌打ちしたんですか？あなたもハーレム作ってますよね？

2．ジャンヌに質問。新八のどこに惚れましたか？

黒龍「今回はここまでです。では」『で？どうなのかしら？」

銀時「そりゃハーレムっぽいのは出来てるがこっちの身がもたねぇ

よ。あと地味(しんはち)に彼女が出切るのは許せんからだ」

ユウカ「サラッと彼を地味って言ったわね。次よ」

ジャンヌ「エヘヘ～♪どうだろうね～」

ユウカ「というわけで秘密だそうよ。『黒龍』貴方もそこの新八に恋でも作りなさい。なのは以外に」

真王「これがラストだ。ペンネーム『支配者』さんからの質問。『質問です。

真王さんに質問
タイトルを鎮魂歌系に変えられましたけど、理由は他のリリカル銀魂の最終章が鎮魂歌だからですか？

土方に質問

1、沖田ではなく近藤に刺し殺されるなら殺されても本望ですか？
（黒笑）

2、マヨネーズの海に溺れて死ぬのとロリ少女の波に飲まれて死ぬのとどっちが良いですか？因みにロリ少女の件は貴方がトッシーだから（黒笑）』そっちでもありカッコ良さで行きました」

土方「どっちもさせるか！！！そしてマヨネーズのためならば！！！」

トッシー変化。

トッシー「拙者はロリ少女達の波に飲み込まれたいでござる！！」

ユウカ「油断した隙に憑依されちゃったみたいね」

真王「それがトッシーの頑固さだ。『支配者』さん、貴方もトッシーになれ」

ユウカ「サラッと言うわね。それからアンケートなんだけど『リリ銀パーティー編』が決まったわ。みんなは楽しみに待ってなさい。あ、アシストはナリアにさせるわ。じゃあね」

真王「参加したいと言う方は是非名乗りあげてください！私から出向いて行くことがありますけども」

第八十四訓：癖者揃いは個性的（後書き）

真王「次回は何と私が出てきます。その理由は銀時達の学力調べ」

ナリア「次回『学力なんて人それぞれ』テイクオフだよ」

メテンズギルド設定（前書き）

メテンズギルドの方達のプロフィールをまとめました。

レーティア達はオリキャラ設定で見てください。

メテンズギルド設定

～タバネ・シノン～

髪：ピンクっぽい紫
目：茶色
服：原作ＩＳの篠之乃束の服
年齢：２３歳
３サイズ：９８／５２／８２
体重：タバネ「教えてあげないよ♪」
性別：♀
種族：狂研究者（転生者）
魔力光：なし
好き：チーちゃん、アテナっち、ギルドのみんな、機械いじり
嫌い：悪い奴
性格：本人（篠之乃束）顔負けの緩さと天才能力
レベル：８２００
得意武器：銃
スキル：機械形成（メカニック・クリエイト）（幻想世界風に言うなら『ありとあらゆる機械兵器を作れる程度の能力』）
詳細：天然ユルルな性格を持つウサギ女。生前は機械系に強かったらしい。だが緩い性格をしているがやることが危なっかしい一面も。
容態はＩＳの篠之乃束そのもの。

～ガレーナ・ギラス～

髪：真紅のポニーテール
目：金色
服：戦国乙女の織田信長の服
年齢：２６歳
３サイズ：１００／５５／８４
体重：７２キロ
性別：♀
種族：戦鬼姫（転生者）
魔力光：なし
好き：戦い、狩、レオン
嫌い：つまらぬ事
性格：レオンと並ぶ戦闘凶
レベル：９２００
得意武器：剣、槍、斧
スキル：戦火の魂（攻撃回数で破壊力を増す）
詳細：レオンの親友で強度の戦闘狂。実力はレオンとほぼ並ぶ程度だが互角に渡り合う実力。容体は戦国乙女の織田信長そのもの。

～レシア・エルダー～

髪：オレンジショート
目：青色
服：ディスガイアの魔法剣士（２Ｖｅｒ）
年齢：２２歳
３サイズ：９５／５３／８２

体重：破れています
性別：♀
種族：魔法騎士
魔力光：虹
好き：アテナス様、綺麗なこと、料理
嫌い：汚い輩、無礼者
性格：規則や礼儀にうるさい。
レベル：９９９９
得意武器：剣、杖、槍
スキル：魔道術（通常攻撃に属性が付く）
詳細：幼きころ両親が殺され独りぼっちなった少女。アテナスが保護して世話をされ、彼女はアテナスに恩返しのために親衛隊隊長として頑張っている。今ではアテナスが母でレシアが娘の様な関係。ベタ惚れなためかアテナスに手を出す輩は問答無用で魔法を浴びさせるようだ。

～恵絽ヤルオ～

髪：黒
目：黒
服：白Ｔシャツとズボン
年齢：１７歳
３サイズ：なし
体重：５７キロ
性別：♂
種族：自称普通の人間？（転生者）

魔力光：なし
好き：エッチなこと、女性全域
嫌い：男共、ビビ？
性格：エロ思考なことを考えている
レベル：５０００
得意武器：なし
スキル：エロスパワー（エロメーター（ヤルオ命名）が上がればパワーも上がる）
詳細：何の理由で転生したか分からない謎の転生者。常にいやらしい思考を持つ。ナイフに頭が刺されようがハンマーで潰れてようがマグマに落ちようが岩に潰れてようがすぐに復活できる（ホントに人間かと疑われるほど）。なお口癖に「だおｗｗｗｗｗ」ろ語尾に「ｗｗｗｗ」をつけるという。

～ルシアス・ルーセン～

髪：青よりの銀にツインテール
目：真紅
服：インフィニティ・ブレードのルシアス・ルーセント
年齢：２０歳
３サイズ：８８／５２／８２
体重：ルル「ぶっ殺すわよ？」
性別：♀
種族：魔道生命体
魔力光：なし
好き：アテナス、一人の時間

嫌い：ルーシア、騒がしいこと
性格：あまり人によらない質
レベル：７０００
得意武器：剣
スキル：無限の剣（一つに武器に様々な技が使える）
詳細：ある研究所から作られた人工生命体。妹のルーシアと仲が悪い（様に見える）。不老不死なため老いることも死ぬこともできない（だが痛みはある）。アテナスに救助されて彼女にだけ心を開いている。チフユには頭が上がらない。

～ルーシア・ルーセン～

髪：ルシアスよりちょっと明るめ
目：赤
服：インフィニティ・ブレードのルーシア・ルーセント（エイリアス）
年齢：１９歳
３サイズ：９０／５３／８３
体重：ルーシア「教えないよ♪」
性別：♀
種族：魔道生命体
魔力光：なし
好き：いじり、女の悲鳴
嫌い：ルシアス
性格：姉のルシアスと対称に明るい。けどドSである。
レベル：７０００

得意武器：拳
スキル：無限の剣（一つに武器に様々な技が使える）
詳細：ルシアスと同じく研究所からの人工生命体。あねのルシアスと仲が悪い（様に見える）。不老不死なため老いることも死ぬこともできない（だが痛みはある）。実験を受けたせいなのか元からなのか危ないやり方をすくことが多い。こちらも同じくチフユに頭が上がらない。

～アルテス・ラーエム～

髪：白っぽい紫
目：紫
服：魔王プリエの服
年齢：２３歳
３サイズ：９４／５４／８５
体重：アルテス「教えるのはユウカ様だけだよ！」
性別：♀
種族：自称雌女（転生者）
魔力光：なし
好き：ユウカ様
嫌い：ユウカ様の覇道を邪魔する者
性格：ユウカと対称的にドM。本人がいなければS化する
レベル：９９９９
得意武器：鞭
スキル：ドエム（ダメージを受けると能力が上昇）
詳細：生前男達に犯され続け死んでしまった転生者。転生後男に対

して容赦などない。ユウカと出会った時自分の中の何か（後にドM本能）が刺激された。ユウカに虐げられることで快感を覚えるらしい。

～チフユ・オオムラ～

髪：黒
目：黒
服：黒スーツ
年齢：チフユ「誰が明かすかバカモン」
3サイズ：チフユ「死にたいのか？」
体重：チフユ「覚える必要はない」
性別：♀
種族：鬼教官（転生者？）
魔力光：なし
好き：特になし
嫌い：やる気なしな奴
性格：織斑千冬とエルザ・スカーレットをそれぞれ5割にした感じ
レベル：９０００
得意武器：剣
スキル：特になし
詳細：生前１８０万の兵士を教導させた女軍教官。剣などを使った戦術で相手軍を撃沈させたことから『黒き死神』と呼ばれている。転生後はその教官時代を生かして餓鬼ども（他の転生者）を教育中。本を持って殴ったり目で脅すところが周りから見た怖い一面だそうだ。

～アテナス（リアーヌ）～

髪：ディスガイア４の人間アルティナの髪を青色にした感じ
目：茶色
服：白いローブ
年齢：１万歳以上（見た目２０歳）
３サイズ：８４／５６／８３
体重：消えてます
性別：♀
種族：転生神（元人間）
魔力光：なし
好き：平和、花、心やさしき人
嫌い：権力者、イヴィル、心の腐った人間
性格：いたって温厚
レベル：????
得意武器：???
スキル：能力無干渉（物理攻撃を除くすべての能力を無効化する。相手の元からの能力でさえも無力化。ただの人間になる）
詳細：死んだ人間を転生させるか輪廻の話に返す転生の女神。メテンズギルドの首相で住人（転生者）達の面倒を見ている。神になる前の彼女はもともと普通の人間だったらしい。ネオのことになると悲しくなる顔に何か秘密があるようだが…。

番外訓：学力なんて人それぞれ（前書き）

真王「今回私が出てきます。ではスタート！」

番外訓：学力なんて人それぞれ

機動六課はよい天気、というかミッドチルダはよい天気。

そんな時銀時達はのんびりくつろいでいると、

???「ジャンピーーーーーーング！！！」

外の上空から声と共に何か落ちてきた。

銀時「な、なんだ一体！？」

銀時達は外へ出て土煙を見た。

その中から少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を青くしたイメージの人物がいた。

???「ふぅ、やっと着いた」

なのは「あ、あなたは何者ですか？」

なのはが恐る恐る聞くと、男は応えた。

真王「おれか？『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～』の作者の真王と言ったらわかるか？」

新八「いいいい！！？作者ぁ！？」

新八はこれを聞いて驚いた。

真王「おいおい心外だぞそんな驚きかたは」

ネプテューヌ「そりゃ普通いるはずのない作者がいるから驚くよ」

心外そうに言う真王にネプテューヌは呆れて言う。

レオン「で、なにしに来たんだ？」

真王「いやなに、ちょっとバカテスみたく学力検査をしに来た」

全員「学力検査？」

レオンが理由を聞くと真王が応えて全員首をかしげる。

真王「その通り。全員参加だから遅れるなよ？ではスタート！」

理樹「何処に向かって言ってるの？」

真王「仕様だ。気にするな」

真王がカメラ目線でビシッと指差して言い、理樹が突っ込むが仕様だと返す。

かくして真王による学力検査が始まった。

問題１

『林檎という漢字は何と読む？』

ほとんどの答え

『リンゴ』

真王のコメント

正解だ。

真人・ガレーナ・ヴィヴィオの答え

『リン何とか』

真王のコメント

檎という漢字は難しいよね

神楽・シャルの答え

『食いもん（なんか液体が付いてる）』

真王のコメント

食うなよ？そして涎垂らすな

問題２

『（Ｘ－３）＾２を展開して答えよ』

ほとんどの答え

『ｘ＾２－６ｘ＋９』

真王のコメント

正解だ。ｘ＾２は「Ｘの二乗」と読むんだ

銀時、神楽、ネプテューヌの答え

『２ｘ－６』

真王のコメント

残念。これは×ではなく二乗です。（Ｘ－３）×（Ｘ－３）と考えればいいかと

近藤の答え

『３Ｘです』

真王のコメント

こっちに座れ、その頭をかち割ってやる

問題３

『普通の葉っぱは広葉樹、ではとがった葉っぱは何と読む?』

ほとんどの答え

『針葉樹』

真王のコメント

正解だ。モミの木もそのひとつなのだ

桂・はやて・蒼馬の答え

『トゲトゲ草』

真王のコメント

マリオゲームのやり過ぎだ

シャル・ヴィヴィオの答え

『クリスマスツリー』

真王のコメント

・・・出来れば何葉樹か答えて欲しい

神楽・真人の答え

『サボテン』

真王のコメント

誰も砂漠の植物なんて言ってねぇよ

問題４

『傘を英語でカタカナ式で答えよ』

ほとんどの答え

『アンブレラ』

真王のコメント

正解だ。

銀時・新八・レオン・ネプテューヌ・フェイトの答え

『アンブリラ』

真王のコメント

残念。たま～に間違えるケースだね

はやて・桂の答え

『アンブレラ社』

真王のコメント

バイオかよ…

沖田の答え

『なんか砲撃をぶっ放す奴』

真王のコメント

マススパークをお見舞いしようか？

問題５

『ｇａｌａｘｙを日本語に直せ』

ほとんどの答え

『銀河』

真王のコメント

正解だ。

銀時の答え

『ギャラクシー』

真王のコメント

出来れば漢字にしてくれ

神楽の答え

『全宇宙の星の集合体』

真王のコメント

中二臭い答えだな…

問題6

『得意な奴が失敗すると言う意味のことわざを出せ』

ほとんどの答え

『猿も木から落ちる』『カッパの川流れ』

真王のコメント

正解だ。もう一つあったような気もするが、ゴメン忘れた

近藤の答え

『お妙さんとの愛』

真王のコメント

しつこ過ぎたら失敗しますよ

沖田の答え

『土方の抹殺計画』

真王のコメント

…お前が死ね

問題7

『クナイが相手の影に刺さったら動かなくなる技を何と言う?』

月詠・猿飛の答え

『影払い』

真王のコメント

正解だ。さすが元お庭番州や忍者術を学んでいるひとは凄いな

銀時・神楽・ネプテューヌ・ビビ・ナリアの答え

『ザ・ワールド!』

真王のコメント

ジョジョネタは忍術に入りません

問題８

『海の中で最大級の魚類はなんでしょう?』

ほとんどの答え

『ジンベイザメ』

真王のコメント

正解だ。そう言えば海遊館でその子供がいたような…

神楽・ネプテューヌ・フェイト・なのは・ブランの答え

『ザトウクジラ』

真王のコメント

残念。鯨系は哺乳類だ。

ヤルオの答え

『海龍』

真王のコメント

魔物の話をしてるんじゃありません

レオン・ガレーナの答え

『リヴァイアサン』

真王のコメント

空想生物だ

神の答え

『ラオシャンロン』

真王のコメント

もはや海の生物ですらない。つーかわざとやってるな？

問題９

『炎の対となる属性を答えよ』

ほとんどの答え

『氷』

真王のコメント

正解だ。熱い物には冷たい物をだ

ネプテューヌ、ヴィヴィオの答え

『水』

真王のコメント

これはよくある間違いだ。水は電撃系の対となる属性なんだ

近藤の答え

『鬼火』

真王のコメント

色でか？

問題１０

『勝って（）勝利しても油断するなという意味のことわざを完成させよ』

ほとんどの答え

『勝って兜の緒を締めよ』

真王のコメント

正解だ。

銀時、レイン、ネプテューヌの答え

『勝ってパフェを手に入れろ』

真王のコメント

パフェ争奪戦じゃねぇよ

神楽、シャルの答え

『勝って食いもんを奪い取れ』

真王のコメント

弱肉強食と言いたいらしいな…

ギルシアの答え

『勝って幼女を愛でよ』

ビビ、ナリア、ヤルオの答え

『勝って女の子達を愛でよ』

真王のコメント

帰れよ

近藤の答え

『勝ってお妙さんを告白せよ』

真王のコメント

永久に無理だと思うな

問題１１

『マリオシリーズで体が大きくなるアイテムを答えろ』

ほとんどの答え

『スーパーキノコ』

真王のコメント

正解だ。

ネプテューヌ、ヴィヴィオの答え

『パワーアップキノコ』

真王のコメント

それはパワー回復のアイテムです。残念でした

シャルの答え

『ニンニクだったっけ？』

真王のコメント

それはワリオです

はやて、桂の答え

『巨大キノコ』

真王のコメント

それも大きくなりますが巨大化なので

問題１２

『吾輩は（　）である。（　）の中の言葉を入れよ』

ほとんどの答え

『吾輩は猫である』

真王のコメント

正解だ。夏目漱石の作品だ

桂、はやての答え

『我が輩はクッパ大魔王である』

真王のコメント

マリオさん、こいつ等を溶岩へ捨てていいですか？

神楽の答え

『我が輩は女王様である』

真王のコメント

女王の欠片一つのないがな（笑）

銀時の答え

『我が輩は糖分王である』

真王のコメント

要するにアホの中の糖尿病だな？

フェイトの答え

『我が輩はライオンである』

真王のコメント

猫類でも違うわボケ

問題１３

『任天堂で大人気のスターは？』

ほとんどの答え

『マリオ』

真王のコメント

正解だ。ちなみに俺も好きだ

桂の答え

『カツオ』

真王のコメント

死ね

問題１４

『緑の配工管の名前を答えよ』

ほとんどの答え

『ルイージ』

真王のコメント

正解。マリオの弟だ。身長は彼より上ですが…

神楽の答え

『地味』

真王のコメント

彼に謝れ

沖田の答え

『永遠の二番手』

真王のコメント

お前も謝れ

問題１５

『スマブラでマリオの最後の切り札を答えよ』

ほとんどの答え

『マリオファイナル』

真王のコメント

正解だ。

桂、はやての答え

『カツオファイナル』

真王のコメント

いつまで引きずってんだ？

神楽の答え

『ギガデストロイアルティメットスペシャルブレイカー』

真王のコメント

ねぇよ！！そんな必殺技！！

ナリアの答え

『双炎龍業火拳』

真王のコメント

カッコよくするな

真王「ハイ試験しゅーりょう～」

真王が手をパンっと鳴らす。

真王「どうだ?勉強になったか?」

新八「何処らへんがだよ!!ほとんどゲームの問題があるじゃねぇか!!」

ニコニコ笑う真王に青筋立てて怒鳴る新八。

ま、実際マリオとか出てました。

真王「まぁまぁそう怒るな。とりあえず俺はここに出てこれて満足したことだし、もう帰るわ。じゃあな」

真王はそう言ったあと嵐のように去っていった。

銀時「・・・ハタ迷惑っぽい奴だな…?」

ネプテューヌ「・・・また現れそうかもね」

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ナリア「は～い！今回のアシスタントはナリアで～す」

銀八「出たか変態百合女」

ナリア「誰が変態だこらぁ！！」

銀八「ゴハッ！？」

銀八はナリアに殴られて気絶させられた。

真王「おいおい・・・まいっか。ペンネーム『鳴神　ソラ』からスタートだ。『常識のあるメンバー「無理、教えたら好意寄せてる人に殺される；」

タレ銀「マー君！怖かったよぉぉぉぉ！！」

マリオ「あんたな…しっかし銀次先輩と同じ能力持ちがいるとはな…」

ルイージ「ホントだね」

フォックス「ってか多過ぎだろ；」

ヨッシー「と言うか私と同じ人いたよね」

ファルコ「後、カービィとかピカチュウもな」

マリオ「…（何かアテナスはあの偽神…ネオについて知ってるな…）」

フォックス「新たに出て来た転生者メンバーとアテナスに質問『マリオについてどう思う？』」

スネーク「同じく似た質問『銀次についてどう思う？』」

クッパ「メテンズギルドのメンバーに質問なのだ『こっちのリュウケンドーに変身してるソラについてどう思う？』」

次回を楽しみにしてます♪』それじゃあ一人ずつ全部答えようか」

タバネ「スッゴイ能力持ちだね～。この人が先輩か～。そのリュウケンドー貸してくれない？（実験する気だ）」

ガレーナ「ほう？両者とも強いな…。勝負しろ！」

真王「躊躇いなく言いやがったな？まぁ能力消えたって俺が元に戻してやる」

レシア「転生者殺したちですか。ですがアテナス様を邪魔をするならば……切る！」

ヤルオ「3人とも興味ないおｗｗｗｗ」

ルシアス「興味ないわ」

ルーシア「面白そう！！」

アルテス「私はユウカ様以外興味ないどありませんわ」

チフユ「ふむ・・・あの銀次という奴にはあの言葉づかいをどうにかしなければならんな…」

真王「おいおい・・・『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

ナリア「次はペンネーム『ケン』さんだよ。『統夜「新たな仲間が増えたな」

遊輔「しかも個性的な人達ばかり」

統夜「タバネとチフユって・・・あの・・・言わないでおくのが吉かね」

遊輔「ネオの事・・・何か知っているようだね」

統夜「銀さんに質問だ。『本妻にしたいのは誰ですか？』」

俺からはジャンヌに質問だ。『新八にお通ファンを絶対に止めさせますか？』

次回も楽しみにしています。』」

銀時「・・・・・・・・・」

銀時は冷や汗を流している。

原因は後ろにいる黒い気を放っているラバーズ達だ。

ナリア「どっち選んでも殺されるね。次の質問」

ジャンヌ「お通ちゃんって誰？」

真王「これだ」

新八「ちょっ！！？」

真王は新八を無視してお通ちゃんの写真をわたした。

ジャンヌ「・・・・・・・・・新八君」

新八「はい・・・（びくびく）」

ジャンヌ「・・・私を親衛隊入団させなさい！！」

と寺門通親衛隊服（女の子なのでさらしを巻いている）を着たジャンヌだった。

全員「え〜え〜え〜えぇぇぇぇぇ！！！！？？」

全員は予想外の答えに驚くしかなかった。

真王「心広いな〜。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ナリア「えっと次、ペンネーム『黒龍』さんからです。『銀時「ま

た新しい神の登場だな」

黒龍「それにしても転生者の数が多いですね」

銀時「つうか、大抵の奴が他の漫画やアニメのキャラと同じ姿ってどうなんだよ…」

黒龍「やっぱアニメのキャラになってみたいって思う人は結構いますからね」

ソラ「なら、男が女になってる奴もいんじゃないか？」

銀時「ああ、いそうだな」

黒龍「まァそれよりも、何か一人問題起こしそうな奴がいますね」

銀時「恵紹ヤルオって奴か？」

黒龍「なんかかなりしそうな事ができるキャラですよね」

銀時「まぁそういう奴は大抵酷い目に遭うのが定番だけどな」

黒龍「そうですね。じゃあ質問しますか」

1．ビビに質問。女の子が好きならいっその事男になったらどうですか？そうすれば何の問題もありませんよ（黒笑）

2．真王さんに質問。次にやる長編は、黒神さん今やっている長編みたく、たくさんの小説のキャラを呼んでする物なんですか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『ってビビは男が嫌いなのよ!!分かる!?」

真王「だな。それとその通りです。ゲストたくさん呼びます。『ゲイム祭編』の後でね。『黒龍』さん。参加したいなら名乗り出してもいいですよ?」

ナリア「次はペンネーム『リィーン』さんだよ。『どうも!!　リィーンです

神「いよう（。ω。）ノ　お久だなぁ～♪　こっちでは、ほのぼのやってるなぁ」

こちらは今頂上決戦やってますからねぇ……

しかし、転生者達が一気に増えましたね

神「しかも、転生神とは……これまた、神様らしい神様が表れたなぁ」

神様らしい?

神「あぁ……さて、アテナスさんよぉ。ちょいと質問がいくつか在る」

・なぜ、メテンズギルドなんてモノを作ったのか

・転生者を増やし、その軍勢を作って、お前は何をするのが目的なのか

神「かな」

な、なんとも、猜疑心満々ですね……

神「あぁ。なにせ、何かをしているという事は、つまりそれは何か目的があるという事。娯楽にしても、使命にしても、任務にしても……」

つまり、この女神さまは、何か企んでいる？

神「もしかしたら～、このカオスな物語のラスボスだったりして～♪」

そんな馬鹿な……いや、でも、そうとも取れそう。なんだか、胡散臭いですし

神「そう感じるお前は、おそらく何かに毒されてるな」

……最近、どんな作品見ても、鬱展開しか連想できなくなってますからね。アレ見てから

神「終わってるな」

重症ですかねぇ……

では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばって下さい！！　失礼します！！！

神様「ばいば～い！！」『・・・アテナス様」

アテナス「私は、“彼”を止めるためにメテンズギルドを作りました。世界すべてを壊そうとする彼を…」

真王「はいでは『リィーン』さん、二度と彼女を悪役にすんなよ？（ドスの聞いた怒りの声で言う）」

ナリア「最後だよ。ペンネーム『支配者』さん。『支配者「転生者ギルドとは…思い切った事をしましたな……。ひょっとしてあのキャラが出てくるんでしょうか？」

銀時「さあな」

支配者「まあ、いいや。質問です

土方に質問

1、マヨネーズの他に好きな食べ物はないんですか？
犬の餌ばっかり食ってると死にますよ（黒笑）

2、銀時がモテてますけどそんな銀時を見て如何思いますか？（黒笑）

沖田に質問

土方暗殺計画は３６５日毎日考えてるんですか？」』」

土方「あるぞ。土方スペシャル焼きそば（もちろんマヨたっぷり）とか土方スペシャルお好み焼き（こちらも）とか…。あの万事屋がもてるのは以外だがな」

沖田「ええ、俺は土方さんを何時でも殺せるようスタンバイしてまさぁ」

土方「上等だ総悟ォォォォォォォ！！！！」

また喧嘩をおっぱじめた。

真王「はぁ・・・『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

ナリア「次は～、何とタバネさんがアシストだよ。じゃあね～」

番外訓：学力なんて人それぞれ（後書き）

真王「次回は何と次元世界最強の魔王が現る？」

タバネ「次回『規格外の上は規格外』テイクオフ～」

第八十五訓：規格外の上は規格外（前書き）

真王「今回は規格外中の超規格外なキャラが登場だ！！」

ネプテューヌ「とはいっても作者がもう一つ作った作品のキャラじゃないの？」

真王「クォラぁ！！」

？？？「フフッ、『リリカル銀魂』始めるわ」

第八十五訓：規格外の上は規格外

？？？「グ…ハァ…！」

暗闇の世界で男が倒れた。
その男の他にもたくさんの人が倒れていた。
その死屍累々の中心に一人の人物がいる。

？？？「・・・これでほとんどの悪転生者は地獄行きで決定ね」

声からして女性のようだ。

？？？「さて、他にお尋ね者は……厄介なところへ逃げるものね」

女性は呆れ半分な顔でため息をつく。
手に持つ通信機には『ミッドチルダ』と書かれていた。

ミッドチルダ・機動六課

ナリア「だから違うってば！！いい？かめはめ波の動きはここからこうやって！」
銀時「ばっかオメェ、そりゃ波動拳を作ってんだよ！」

なんか銀時とナリアがいろいろポーズを作っていた。

新八「何やってんだよあんたら！！」

そこで新八が怒鳴る。

銀時「イヤ、暇だから」

ナリア「私も」

銀時とナリアは真顔でそう返した。

新八「真顔で言うなよ！！なのはさん、銀さん達に何か言って…」

新八は突っ込んだ後なのは達に向き直ってみると、絶句した。

レオン「ガレェェェェェナァァァァァアアアアアア！！！」

ガレーナ「レェオォォォォォォォォォォォォォォン！！！」

レオンとガレーナは全力でバトってる。

ヤルオ「僕がこの機動六課を征服して六課組をコンプするのだおｗｗｗｗ」

ビビ「バカね。それは私の望みなのよ。百合壊しはさせない！」

ヤルオとビビは危ない内容で争っている。

辰馬「お譲さ～～～ん！！ワシとデー「トなんてさせるかぁぁぁぁ！！！」オブッ！！」

リリス「あ、飛んでいった」

辰馬がリリスにナンパしようとしてネプテューヌに蹴り飛ばされた。

レーティア「ギルシア？」
ギルシア「・・・」

レーティアは必要以上に引っ付いている。
ギルシアは満更じゃない様な感じである。

なのは「ゴメン新八君、無理」

なのはは両手を合わせて謝った。

ジャンヌ「要は諦めた方がいいよ新八君」
新八「ええ、僕もそう思いました」

ジャンヌの言葉に新八は諦めの顔になった。

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

するとメテンズギルドメンバー達の端末が鳴り始めた。

リアス「この反応は…」
ユウカ「はぐれ者がいらっしゃいます…」

メテンズギルドメンバーは険しい顔になる。
すると訓練場に魔方陣が現れて、１０人の人物が現れた。

銀時「あいつらは？」
リアス「はぐれ転生者、輪廻の輪に戻らずに現代をこびり続ける哀れな奴らよ」

リアスはそう教えて前へ出る。

はぐれ転生者「なんだお前らは!?さてはギルドの奴らか!?」

はぐれ者の男が代表に言ってきた。

リアス「その通り。私はリアス・グリオン、メテンズギルドの一員よ」

誇らしげに言うリアス。

リアス「大人しく輪廻の輪に帰るのもよし、さもないと痛い目にあうわよ?」

すでに戦闘態勢のリアス。

はぐれ転生者「フン!誰があんなとこに戻るか!!俺達は、今いるこの世界が好きなんだ!だから、あんなとこに戻ってまた別の場所で転生なんてまっぴら御免だ!!」

どうやらはぐれたちは聞く耳を持たないらしい。

リアス「どうあっても動く気はないみたいね」

リアスはやれやれなしぐさをする。

リアス「だったら、私達に出会ったことを、後悔することね!!」

リアス達ははぐれ転生者達と戦闘に入った。

ＩＢＧＭ中立者ｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｎｏｂｌｅ　Ｍａｒｂｌｅ）

レオン「リアス、ここは私とガレーナがやってもいいか？」
リアス「十分よ」
ガレーナ「さて、余を満足させてくれるか？」
レオンとガレーナは手をポキポキ鳴らす。
はぐれ転生者「ちっ！舐めるなぁぁ！！」
一人のはぐれが大きな斧を持って駆け出す。
レオン「舐めているのは貴様だ。獅子王拳！！」
レオンが拳に魔力を溜めて獅子の顔をした閃光がはぐれたちを襲った。
ガレーナ「ヌゥゥン！！」
ガレーナが大振りの剣ではぐれたちをのけぞらせる。
はぐれ転生者「おのれ！」
ケルベロス「グォォォォン！！」
一人のはぐれが三つ首の犬モンスター・ケルベロスを召喚した。

レオン「たいそうな物を召喚したな。だが・・・」

レオンの体に青いオーラが纏う。

レオン「・・・あまかける白銀の獣王・銀白虎！」

するとレオンが銀色の白虎を半人半獣にさせたような姿へと変身した。

レオン「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

ガレーナ「おお、見ものだ。レオンの『ヴァルガード』は」

銀白虎・ヴァルガード、それが半獣化したレオンの姿。

シュンッ！！ズドンッ！！

はぐれ転生者「なっ！？」

何とレオンが一瞬消えたと思ったらはぐれ転生者2人を叩き伏せたのだ。

叩き伏せられた2人はそのまま気絶した。

レオン「降り注ぐ氷山雹（レイニング・アイスストーム）！！」

レオンが空中に飛び上がって１０メートル級の氷の塊をはぐれたちに投げた。

はぐれ転生者「ウギャァァァァァァ！！！」

はぐれたち４人は直撃を受け、氷の中に閉じ込められた。

ついでにケルベロスも。

レオン「まだやる気か？」

余裕そうに鼻を鳴らすレオン。

はぐれ転生者「まだよ！メテオストーム！」

はぐれの一人が降り注ぐ岩をレオン達に向ける。

ガレーナ「翼竜斬！」

だがガレーナが飛ぶ斬撃ですべて撃ち落とした。

これにはぐれたちも驚く。

ガレーナ「こいつはおまけに見せてやろう。真紅龍・ドラギラード！」

ガレーナに赤いオーラが纏い、そして彼女の奥義の一つ、真紅の体の龍・ドラギラードへと半獣化した。

ガレーナ「紅蓮炎龍爪！」

そして紅蓮の如く、爪に纏いし炎ではぐれ3体を撃破した。

はぐれ転生者「うぅ・・・このままじゃ…」

はぐれの1人の女がじりじりと後ずさりして…

トン

はぐれ転生者「え？」

後ろに何か当たった。

いや、ユウカにあたった。

ユウカ「あら？何処へ行こうとしてるのかな？」

はぐれ転生者「ヒィ！」

ユウカの笑みに女性は恐れる。

ユウカ「！ああ、ダメ！そんな涙目になったら…苛めたくなっちゃうじゃない？！！」

サンダーインパクト

ダァァ～～ン！！！

はぐれ転生者「ギャァァァァァ！！！？？」

涙目になったはぐれの女性を見てユウカはドSスイッチが入ってしまい、雷の魔法で相手をいじめた。

はぐれ転生者「ァァァァ！！ヤメテェェェ！！」

ユウカ「止めない？アハハハハハハハハハハ！！！！！！♪♪♪」

女性が止めると言うも聞く耳持たない。

ユウカ以外はため息を吐くかほとんどはドン引きするか苦笑いを浮かべるか顔を真っ青にするかである。

ネプテューヌ「・・・怒らせたら命がいくつあっても足りないね…」
銀時「おれもだ」

ネプテューヌ達は心の中でユウカを怒らせないことを決意した。

アルテス「放して！私はユウカ様のとこにィィィィィィ！！！」
カイム「お前の場合は全部あの技を受けに行く気だろうが！！」
ギルシア「大人しくしてろドMが！！」

なんだか遠くでじたばたと暴れているアルテスと抑えるカイムとギルシア。

そしてはぐれ転生者達は捕まっていた（一人は黒焦げだが…）。

銀時「にしても変身とかありなのか？」

銀時がレオンとガレーナに聞く。
理由はレオンが変身したヴァルガードのこと。

レオン「アテナスが与えてくれた能力だ。ちゃんと制御しなければ意味がない。今なら完全に獣化出来るぞ？」

笑いながら言うレオン。

ガレーナ「話してるとこ悪いが、別の奴が来るぞ。敵意はないがな」

ガレーナがある場所を見て言った。
その視線の先には一人の女性がいた。
腰まであるさらさらした黒髪に金色の瞳、黒いスカートとストッキングとガーターベルトにファントムキングダムのゼダの服（胸のと

こは黒いシャツで）を身につけて、ボロ着いているマントを羽織っている。
そして極めつけはこれでもかと思うくらい超ダイナマイトボディを持っている。
出るとこはドーン！と出ているくらい巨大バストの持ち主だ。
？？？「奴らを追ってきてみれば、もうすでに終わってたみたいね」
女性は捕まっているはぐれたちを見てそう言う。
銀時「こいつらしってんのか？つーか誰？」
？？？「普通こう言うときは自分から名乗るもんだけどまあいいわ。私は神道勇華よ、以後お見知りおきを」
なのは「あ、どうも・・・」
銀時が聞くと女性・勇華が自己紹介しなのはがつられて言う。
ユウカ「あら？貴方もゆうかですか？」
勇華「も？成程、あなたもゆうかなんですね」
ユウカの言葉に勇華は首をかしげたが、すぐに理解した。
勇華「それから、さっきから覗き見するのは紳士的によくないわよ」
神「そうかい？そりゃ悪かったな」
勇華が後ろから出てきた神に対して言う。
神「いよう、あいつは元気か？」
勇華「それはとっても元気よ。今来るけども」

神と勇華が仲良く（？）話し合っていると、漆黒の魔法陣が現れる。
その中から一人の青年が現れた。
勇華とほぼそっくりで、髪はぼっさりした黒、上半身はいい筋肉質で服は同じだが、茶色いズボンを身に着けている。

？？？「ずいぶん懐かしい奴に会えたな？」
神「俺様もそうおもうぜ？神道勇斗」

勇斗と神はにやりと笑う。

グレイ「こいつを知ってるのか？」
神「まぁな。一度一戦交えた事がある」

グレイが聞くと神は答える。

神「あの戦いは、今思い出しても血沸き肉踊る・・・幾度も互いの暴をぶつけ明かした・・・とうとう決着つかずに終わってしまったがな」
勇斗「クックック・・・まったく本気を出さないお前が言うか？」
神「そりゃお前も同じだろ？・・・クックック・・・」

神と勇斗が笑いあう。
しかし不気味なのでみんな少し引いている。

神「にしてもお前の挑戦者も無謀だな？」
勇斗「無茶無謀などどうでもいいが、あいつらは自分が強いと思い込んでいるからな。だが、あの男は違ったがな」
神「あいつ？」

勇斗や神の言う挑戦者というのははぐれ転生者や勇者や魔王などの

事。
勇斗はある人物のことを思い出していう。
勇斗「ジルバ・フォード、あいつの能力で俺が本気の５０％を出さねばならぬ相手という事にすごく面白かったがな。まさか弟子のために他界するとは・・・」
今思えばよきライバルであった事を思う勇斗。
神「そいつの弟子さんはがんばってるようだが？」
勇斗「フッ、気が向いたら会ってみるか・・・」
勇斗は笑いながら言う。
すると、
はぐれ転生者「ついに見つけたぞ！！魔王神！！」
はぐれ転生者の男が現れた。
はぐれ転生者「お前を倒せば、俺たちは世界をこびり続けられる！！行くぞみんな！！！」
そしてたくさんのはぐれ達が現れた。
その数なんと１０００以上。
新八「多すぎなんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！？？」
新八は思わず転生者達の数にシャウトする。

リアス「こんなにはぐれたちがいるだなんてね・・・」
ユウカ「骨が折れそうですわ」

リアスとユウカはやれやれとする。

勇斗「クックック・・・こんなにたくさん出てくるとは・・・探す手間が省けるという事だ」

勇とはひとつ前へ出る。

勇斗「見せてあげよう。本当の魔王神の力を！！」

そして右手を地面につけて、漆黒の魔方陣を展開させた。
勇斗の後ろに巨大な魔法陣が展開され、魔方陣から巨大な物体が鎖で何十も縛られて出てきた。

勇斗「煉獄にとらわれし魔神よ、わが命に従い悪辣なる異形を現せ！」

何十もの鎖がすべて弾けとび、巨大なる翼が開かれた。

巨大ドラゴン「グルゥゥォォォォオオオオオオアアアアアアアアアアア！！！！」

漆黒の鎧を身にまとい、赤き目は相手を射抜き、森羅万象を破壊する絶対無敵の魔帝龍・グラヴァルドバールが咆哮をあげた。

銀時（な、なんだこいつは・・・！！？）
新八（ドラゴンこえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！）
桂（何だこのドラゴンは・・・？今までの奴とは桁違いだ！！）

神楽（なんねこいつ・・・！！私ら夜兎族がかわいく見えるね・・・！！）
なのは（なに・・・あれ・・・？）
シグナム（これは・・・ただのドラゴンではない！！）
グレイ（なんだ？ドラゴンを見て・・・俺が…恐れているだと！？）
ビビ（なによあれ！？バハムートがかわいく思える・・・！！！）
レイン（こんなドラゴンが存在するのか！？）
さくら（こわい・・・）
リアス（あのドラゴンはいったい？）
ユウカ（もしかしてあの男・・・）
レオン（推測だが・・・もしやあの男は）
ガレーナ（『黒き判決者（ブラックジャッジメント）』なのか？）

現れたグラヴァルドバールに銀時たちは戦慄を覚える。
目の前にいる転生者達は唖然とするか腰を抜かすかしていた。

勇斗「・・・無に帰れ」

無に還る波動・ゼロオブザビッグバン！！！

ドオオオ

へ戻された。

そして勇斗は死屍累々の転生者達に近づいて呪文を唱える。

勇斗「われは願う。救われなく哀れの子羊たちを輪廻の輪に戻らせよ・・・」

呪文を唱えるとはぐれ達は光に包まれて消えた。

銀時「・・・いまのは何だ？」

勇斗「グラヴァルドバールは俺が契約した魔帝龍だ。そして今やったのは輪廻の輪に戻す呪文だ。だが罪が深いやつはプリニーになるがな」

ネプテューヌ「プリニーに？」

銀時が聞くと勇斗が答え、ネプテューヌは首をかしげる。

勇斗「ああ、深い罪を持つやつはペンギンのようなプリニーになる。普通のとは違って一日２０時間超重労働で褒美は鰯一匹だからな」

勇斗が言うと、レインは死にたくない理由がまたひとつ増えたなとつぶやいたとか。

神「てめ勇斗！あんなもん出すなら何で出さない！！」

勇斗「グラヴァルドバールのゼロオブザビッグバンは森羅万象を無に返す力があるんだ。受けたら能力もパワーもすべてねこぞぎ無くなるからな」

神「そ、そうか・・・（俺様のあれみたいな感じだな・・・）」

神は少しそう思った。

勇斗「さてと、俺はもう戻る。はぐれ達を一掃できたらな」

勇斗は振り返って立ち去ろうとする。

ネプテューヌ「え～？どうせだからもっとここにいない？」

勇斗「お誘い御尤もだが、俺はこう見えて忙しいんでな」

ネプテューヌが子供のように言うが、勇斗は動じることなく返した。

勇斗「おっとそうだ。そこの銀髪の男。名前は？」

銀時「坂田銀時だ。何なら銀ちゃんって呼んでも・・・」

勇斗「銀時、そのペンダントと剣をこっちに貸してくれ」

勇斗が足を止めて銀時を呼ぶ。

銀時は少しふざけて言うが、軽くスルーして勇斗は銀時の持つシルバーブレイドとシルバーソウルを指差して言う。

銀時「・・・なんに使うんだ？」

銀時は怪しみながらそれらを渡す。

勇斗「・・・デバイス完全融合！」

受け取った勇斗はなんと2つを融合させた。

そして白銀に輝く刀が現れた。

勇斗「これがお前の新たなる力だ。名前はそうだな、『銀狼夜叉』でどうだ？」

銀時「銀狼夜叉・・・」

白銀に輝く刀・銀狼夜叉を見てつぶやく銀時。

勇斗「ためしに起動してこの石を切ってみろ」

勇斗はそういって緑色の光る石を出す。

銀時「（こいつはすっげぇ力を感じる・・・）いくぜ！銀狼夜叉！」

銀時は銀狼夜叉を起動した。
そして銀時の姿はＩＳである百式と紅椿が合わさったところは変わらないが、ＩＳ全体が銀色に輝いている。

銀時「すっげぇ・・・体中がすごいパワーが・・・・・・・・・・ってやっぱコスプレになってんじゃねぇかァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

銀狼夜叉の力に感心するも、コスプレであることにシャウトする。
なのは達はこれはないだろうといったような顔になる。

勇斗「だアホ、姿見て叫ぶ暇があるならこいつを切ってからにしろ」

勇斗は特に反応せずに言った。
銀時は若干お前のせいだろと苛立ちながら銀狼夜叉を構えて、

勇斗「フンッ！！」
銀時「！！！！」

いきなり勇斗が石を投げてきたので銀時は思わずその石を真っ二つに切った。

なのは「ホントにきった！」
シグナム「ああ、だが切ったところがよく見えなかったぞ！」
ネプテューヌ「早い・・・！」

見ていたなのはたちは驚いていた。
もちろん本人も。

銀時（何だ今のは？投げてきた石が遅く見えたぞ？それに切ったあの感覚・・・すげぇぜこりゃ・・・！！）

銀時は驚きながらうれしそうになる。

勇斗「その銀狼夜叉は銀時の相棒となった。大事に使えよ」
銀時「ああ」

勇斗はそういって時空ゲートを開く。

勇斗「じゃあな、そしてまた会おう」

勇斗はそういって時空ゲートを通ってどこかへ消えた。

銀時「・・・よくわからんが、ありがとよ、勇斗」

銀時は今はいない勇斗にお礼を言った。

グレイ「でだクソ神、あいつはいったいなんなんだ？」
神「神道勇斗、あいつは確か別次元の魔界の魔王神だとよ」
ビビ「魔王神！？つまり魔王の中の神様！？」
神「・・・まぁそんな解釈でもいいが・・・」

グレイが聞くと神が説明し、ビビは驚いた。

リアス「何はともあれ、一難は去ったわ」
レシア「そうですね。どうせですから私の料理でも食べますか？」
シャル「おお～、レシアの料理は天下一品だからね～」
勇華「あら？それはご馳走になりますね」

リアスは安心し、レシアが言うとシャルと勇華がうれしそうにする。
そのほかも同意権だ。

グレイ「っておい、ちょっと待て。何でお前まで参加してんだ？」

そういえば『神道勇華』が六課に住み着くようになっていた。

勇華「私ははぐれ達を輪廻の輪に戻す目的があったけどもう終わったからね」
グレイ「それとこれとは話が違うぞ」
勇華「ま、簡単に言ったら私ここに住んじゃおうかな・・・ってね」

にっこり笑う勇華にあきれるグレイ。

勇華「ちなみに私は勇斗と同じ能力持ってるからね」

釘をさすように言う勇華。

はやて「そうかそうか、ってそれがどうしたーーー！！」
勇華「きゃっ！？」

疾風は頭を上下にした後いきなり勇華の胸をわしづかみにした。

はやて「んなぁぁっ！！！？？なんやこのでかすぎるキングパイは！！？そしてなんという張りのある柔らかさや！！あ、あかん、これは癖になる・・・」

必死な顔で勇華の胸をもみ続けるはやて。

銀時と桂は目潰しを食らってのた打ち回り、新八は鼻血を出して気絶し、神楽、ブラン、さくらはすごい嫉妬のオーラをまとい、六課組みは顔を赤くし、ほとんども顔を赤くしている。

勇華「もう、そんなに私の胸がいいならこうしちゃうわよ」

はやて「え？」

すると勇華が自分の胸ではやての顔に挟んだ。

勇華「そ～れ♪パフパフパフパフ♪」

プニュ♪フニュ♪プニュ♪フニュ♪

はやて「むー！むー！（柔らかいものがうちの顔に…！！とても気持ちええわぁ・・・）」

マシュマロの柔らかさを持つ勇華の胸に気持ちよくなるはやて。

新八「ストォォォォォォォォォップ！！！これ以上やったらはやてさんが危ない道をたどりますよ！！！！」

新八がとめた。

勇華「そうね。ごめんなさいね」

勇華も反省したようだ。

勇華「ま、それはそれとして、よろしくね♪」

『神道勇華』が勝手に仲間になってしまった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

タバネ「は～い！みんなのアイドルタバネちゃんだよ～♪」

銀八「いつからアイドルなんだよ！！」

タバネ「ついさっき」

銀八「・・・無視しよ。ペンネーム『鳴神　ソラ』さんからいくぞ。『マリオ「さすがに溶岩は駄目だからピーチ姫の料理を食べさせてやってくれ、美味いから」

ツッコミトリオ&クッパ「（溶岩より残酷だ；）」

マリオ「それにしても双炎龍業火拳…ゼロの状態でこう言う技を考えてみるか」

ルイージ「と言うか…1個で回答2つがひどっ！」

マリオ「弟は地味じゃねえよ！後、永遠の二番手とかも！」

クッパ「マリオ関連の問題が多いのだ後半；」

銀次「何か凄い人に付けられた気がする…質問『アテナスさんの能力って放せばその人の能力は戻るの？』ちなみに俺のは触れた後はそのまんま」

マリオ「メンバーに質問『作者が最近書いた龍騎の小説はどう思う？』」

ルイージ「（それ感想じゃない；）真王さんに質問『僕達の世界のアイテムで好きなアイテムは何？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』」

アテナス「私の意思でその人の能力に鍵をかける（＝制限をつける）事ができます」

真王「特にスターが好きですね。２つ目はみんな面白いじゃない？だと」

タバネ「それじゃあ『鳴神　ソラ』さん？廊下に立ってなさ～い。次はペンネーム『ケン』さんだよ。『統夜「個性的な答えばっかだな・・・」

まぁな・・・

統夜「銀さん・・・答えられないのは恥ではない・・・」

レオンに質問だ。現在種族が吸血鬼と堕天使の混血しか判明されていなく潜在能力の塊である統夜をビシバシ鍛えたいと思いますか？

統夜「何か・・・イグニスやデュークを軽々と倒せそうだ・・・」

俺はイメージＯＰ３にシャルとレオン、ユウカを入れようと画策している・・・

統夜「セイントクルセイダーズ崩壊後から厳しくなりそうだからな・・・曲は？」

そこら辺は考え中だ・・・レオン先生とユウカが正式参加するのを楽しみにしていなさい。

統夜「は～い」』それじゃあレオっち、答えようね」

レオン「だからレオッチではないと何度言ったら・・・・・・無論あいつを鍛えるつもりだ」

真王「それじゃあ『ケン』さん、統夜が強くなるのを楽しみにしています」

タバネ「次～、ペンネーム『なめ猫』さんからだよ。『どうも、なめ猫です。
今も小説を楽しませてもらっています。
短編やコープス編、銀河編とかをよく見てるんですが、あのあたりからがきっかけになったのか銀魂にはまってしまいました。
で、将軍様とねぷねぷ達の絡みはまだでしたっけ？夏ですし、プール騎馬戦の話も読んでみたいですｗ
では質問残して撤退いたす！さらば！

ラムザ「…今から僕達を呼ぶようにするとは…；……はい、えーと…銀さんに質問、桂さんに作者からのメッセージです」

銀さんへ
『仲間がとてつもなく多くなってますが、全員の名前はしっかり覚えていますか？』
桂さんへ
『お前は魔王か？』

ラムザ「以上。あと、まだわかりませんが、もしかしたらアイドルマスターの二人とかと一緒にそちらへ乱入するかもしれません。そうなったらよろしく頼みます。ではまた」』」

銀時「確かにあんなに多くちゃ覚えづらいな・・・、ならあだ名で覚えやすくしよう」

桂「魔王じゃない桂だ」

真王「はい、『なめ猫』さん、廊下にたってなさい。次だ、ペンネーム『黒龍』さんから。『黒龍「なんかバカテスって感じの話でしたね今回は…」

銀時「まぁ大体バカな発言する奴は予想できたけどな」

ソラ「マリオが半分を締めていたけどな」

黒龍「にしても、こうやって色々な文面を書ける真王さんは凄いですね」

銀時「やっぱそりゃお前の能力が低いだけじゃね？」

黒龍「その言い方酷くないですか！？」

ソラ「まぁそんなことより質問にしたらどうだ？」

黒龍「……そうですね。じゃあ質問します」

1．真王さんに質問。次の『リリ銀パーティー編』ではどれくらいの作品のキャラが出演するんですか？

2．ネプテューヌに質問。とりあえず、一般的な高校生レベルの問題を贈ってみますので、解いてみてください。

黒龍「今回はここまでです。また次回も楽しみにしています」』まず黒龍さんの『リリカル仮面ライダー』が入って烈火龍の『ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ』、天城の『無限学園』、ケンの『ヒーロースエピソード』、鳴神ソラの『スマッシュハーツブラザーズ』、風花の

『Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　ｏｆ　ｃｒｉｍｅ』、リイーンの『とある兄妹の転生物語』のキャラ達がゲスト参戦します」

ネプテューヌ「・・・・・・・・・プシュ～～・・・（解けずに知恵熱発生）」

真王「ダメだこりゃ、『黒龍』さん、廊下に立って楽しみにしてください」

タバネ「それじゃあ次回のアシストはなんと勇華さんだよ～。じゃあね～」

第八十五訓：規格外の上は規格外（後書き）

真王「次回は……なんだかムフフエッチなイベントの予感が…」

勇華「フフ、次回『Ｒ－１５ってエログロ用語が無ければいい』テイクオフよ」

裏第二訓：Ｒ－１５ってエログロ用語が無ければいい（前書き）

真王「ムフフエッチなイベントが起こります。それでも見るなら見てもいいです」

裏第二訓：Ｒ－１５ってエログロ用語が無ければいい

機動六課の真夜中。
そこでこそこそとうごめく人物が一人。
その人物は、ヤルオである。

ヤルオ「グッフッフ・・・ついに僕のターンが来たおｗｗｗｗｗ」

中二臭い笑い方をしながらある部屋へ向かうヤルオ。
そしてその部屋・なのはの部屋に着いた。

ヤルオ（いつもあの女が僕の邪魔をしていたが、今度こそずっと僕のターンだおｗｗｗｗ）

ヤルオの言うあの女とはビビのことを言っている。

ヤルオ（なのたんこうりゃくだおｗｗｗｗｗ）

ヤルオは扉に手をかけ「ちょっと待ちなさい！」…ようとして聞き覚えのある声に止められた。

ビビ「私の目が黒いうちはあんたの行動が読めるわよ」
ヤルオ「チッ、またしても邪魔をするかｗｗｗｗ」

目の前の天敵（ビビ）に舌打ちするヤルオ。

ヤルオ「だが、僕にはやらねばならぬことがあるおｗｗｗｗｗ」
ビビ「奇遇ね。私もやることが一つ」

ヤルオ・ビビ「コイツが先に手を出す前に女の子を手に入れる！」

・・・変態面では意気投合している2人。
そして扉に手をかけたその後、2人は信じられないものを見た。

勇華「あら？なにしに来たの？」

なぜかなのはの部屋に勇華がいた。

ビビ「え？え？何でなのはちゃんに部屋に？ってかなのはちゃん何処？（◎ω◎）？」
勇華「それってこれのこと？」

ビビがきょろきょろしていると、勇華がペラッと毛布をめくる。
全裸で顔を赤くしてぴくぴく痙攣しているなのはがいた。

ビビ「！？なにこれ・・・」
勇華「ちょっと遊んでみたらこうなっちゃって」

バツが悪そうに言う勇華。
「う～ん、銀さんもっとして～」となのはが寝言を言っているが。

ヤルオ「ｏｒｚ・・・なんてこったい、まさか先にやられてしまうとは…」

ヤルオは別のところでショックを受けているが…。

勇華「だったらどうするの？私を犯すの？」

勇華がニコニコ笑って2人を挑発する。

ヤルオ「犯すだと?・・・グッフッフ・・・」

ヤルオが笑い始める。

ヤルオ「ハーレム目指していく度も女を手に入れた僕に不可能はない！」

ビビ「ってどんだけ犯ってきたのよあんた!!」

自信満々のヤルオに突っ込みを入れるビビ。

ちなみに本人いわく今のとこ8人程度。

勇華「あらあら♪ここじゃあれだから別の部屋で犯しましょ?貴方もね」

ビビ「え　?私まで!?」

ヤルオ「ビビ、なのたんの仇を取るまで一時休戦だおｗｗｗｗ」

ビビ「・・・そうね」

巻き添え食らったビビだが、ヤルオと共になのはの仇を取ることを誓う。

つーか死んでませんよ～。

勇華の部屋

六課ってどんだけ部屋があるんだのツッコミはなしの方向で。

勇華「ウフフ、それじゃあ」

ベッドで仰向けで倒れ、左手で胸を触り、右手でスカートの中をのぞかせる。
思いっきり誘っているようだ。

ヤルオ・ビビ「・・・・・・・・・・（ゴクッ）」

見た上記の2人は色欲が疼いた。
勇華のプロポーションは出るとこは出て引っ込むとこは引っ込んでいる。
そして相手を誘惑させるような姿勢。
まるで男の生気を食べに求める夢魔（サキュバス）の様な感じだ。
ビビは思わず近づいて勇華の胸を触ってみる。

ムニュッ♪

ビビ（あ、柔らかい…）

勇華の柔らかなマシュマロに思わず揉み続けるビビ。

ビビ「（すごい・・・思わずくせになる…）・・・ん」
勇華「・・・・・・」

ビビは勇華とキスした。
ヤルオはというと、「目が見えないお～ｗｗｗｗ！そして動けないおＷＷＷＷ」と目隠しとバインドをされていた。
目隠しはビビで、バインドは勇華がやったのだ。

ビビ「クチュ…れろ…」

勇華「レロ・・・ふむ・・・」

今度はディープで攻め、舌同士がからめ合っている。

勇華「ぷは・・・これじゃあ足りないわ…」

長い、深いキスを交わし合った二人の唇からは、夜の光に照らされ、輝く糸を引いていた

勇華「それに、あなたはある物を持ってるみたいだし」

勇華はいいおもちゃを見つけたかのように笑う。

ビビはよく分かってないみたいだが。

勇華「あなたには、おまじないの合言葉がいるわね」

ビビ「おまじない？」

勇華はビビの耳元で言った。

勇華「合言葉は…『白百合の禁忌（タブー・ザ・リリー）』」

ビビ「！！？？」

合言葉を言った瞬間ビビの中にある何かが弾け飛んだ。

それはここに流れ着く前に自分で体験した潜在能力・禁忌を。

ビビ「・・・・・ウフフフフフ・・・」

ビビは魔女のような笑みを浮かべる。

ビビ「ハムゥ・・・」

勇華「ン…レロ…チュブ…ペロ…」

そして勇華に口付けして舌と舌をからめ合わせる。

ビリッ

勇華の黒シャツがビビによって破かれる。

そして豊満な胸がバインと露出し揺れた。

ビビ（・・・やっぱでかいなぁ…こっちも大きくなってるけど敗北感あるな～…）

勇華の胸を揉みながら少々敗北感を感じるビビ。

だが柔らかい感触がくせになる。

勇華「・・・・・・（ニィ）」

ビビ「!?」

勇華の口が弓を引いた。

その瞬間瞬間移動でもしたのかビビを背後から抱き締める形になった。

勇華「私を弄ぶのもかまわないけど、責められる気分はどうかしら？」

ビリッ

ビビ「っ!?／／／／／」

上半身が露出してあわれもない姿になるビビ。

ビビはこう見えてプロポーションは高い方だ。

勇華「あらあら、かわいらしいからだね」

ビビ「ひぁっ！？」

右手でビビの胸を、左手でビビの秘部を弄ぶ勇華。

ビビ（ああ…私弄ばれてる……でも気持ちい…モットシテェ？）

表情はまるで快感を求めて甘える少女である。

勇華（可愛らしい声を出しちゃって？）

クチュッ、ヌチュ、ヌチャ

勇華（でも、それも悪くないかな？）

ビビ「アアッ、ハァァ・・・？？」

嬌声をあげるビビに笑う勇華。

ビビ「キモチイイヨ～？・・・モットホシイヨ～？」

子供のようにねだるビビ。

ペロッ、ヌチャ、ペチャ

ビビ「くれなかったら・・・・・・コウシチャウゾ？」

勇華「ハッ・・・ウン！」

振り返ってしゃがんでは勇華の秘部を舐めてくる。

勇華「ハァ、ハウッ！・・・気持いいわ…」

勇華は反撃にビビの首筋を舐める。
ビビはゾクッと体を震わせた。

勇華「もっと激しくやってみましょう？」

ビビ「ム、アム、ヂュゥゥ！」
勇華「ハァ、ハァ、赤ちゃんみたいにすっちゃって？」

秘部同士をあわせながらビビがまるで赤ちゃんのように勇華の胸を吸っている。
しかも動く度につれて秘部からの刺激がくる。

ビビ「アム、ン、ン、プハ、ハフゥ？／／／／／」
勇華「あ、アン？フフフ？」

この後もビビが勇華の胸を吸ったり、勇華がビビの胸を揉み解したり、ビビが勇華の体を嘗め回したり、勇華がビビの秘部をもてあそんだり、そして、

ビビ「ハァ、ハァ、アハ、アハハハハ？？」
勇華「ハァァ、エヘヘ？アアァ？ハゥ？？？」

勇華がビビにピストンされている。
一応言えば勇華が受けでビビが攻めの状態だ。

ビビ（キモチイイ・・・ココマデキモイイノハジメテ?!?・・・・
モット・・・モットホシイ・・・モットワタシニ・・・）

狂った獣のように勇華をもてあそぶビビ。

勇華「フフッ、今度は私よ?」

体勢が逆になった。
勇華が攻めでビビが受けの形に。

勇華「それに、あなたにはこれがはじめて?」

勇華は自分の秘部をいじった後、そこからアレが生えてきた。
（言っておくがこれは魔法で作られています）

ビビ「・・・すごく・・・おっきいです／／／／／」

アレを見た瞬間心の…魂の奥からドクンッ！と跳ね上がった。

勇華「いくわ、よ！」

ブチブチブチ！

ビビ「イ、アッ！」

勇華のアレがビビの秘部には言った瞬間何かが破れる音が聞こえた。

勇華「あら？初めてなの？」
ビビ「ここに来る前に…ハァハァ・・・なのはちゃんと…犯ってたから」
勇華「そう、なら問題ないわね」
ビビ「ッ！！！ハァァアアア！！！？？？」

勇華が動けばビビがびくりと反応する。

勇華「フフ、フッ！ハッ！フッ！」
ビビ「ああ？！アァァン！！ヒギィ！ラメェェ！！」

受けられながらも足で巻きつくビビ。
・・・つーか大丈夫だよな？ぎりぎりセーフな気がすると思うが・・・。

勇華「どうする？このまま出す？」
ビビ「出して、一思いに出して！？？」

ズンズンと腰を動かす勇華が問い、ビビが言った。

勇華「フフッ、喰らいなさい！」
ビビ「ッァ！？アァァァァァァ！！！」

勇華が中に出して、ビビの体がびくりと跳ね上がる。
ビビの意識が朦朧としている。

勇華「ウフフ、このまま終わりだとは思わない事ね」
ビビ「エ？？？」

にっこり笑う勇華を見てビビはまたするのかと驚き半分うれしさ半

分の顔になる。

勇華「まだいくわよ？フッ、フッ！」

ビビ「ハイ・・・ウンッ！ハウッ！ハムゥッ！！？？」

勇華は腰を動かしながら、ビビは勇華の胸を吸いながら続いていった。

しかし縛られていたはずのヤルオはそこにいなかった。

ヤルオ（今回ばかりは多めに見てやるおｗｗｗｗｗ。けど女の子を征服するのはこのヤルオだおｗｗｗｗｗ）

バインドから逃れたヤルオは自室に戻ってこんな事を思っている。

ヤルオ（けど今発情しようとした僕のジョイスティックがすでにびんびん状態だおｗｗｗｗｗ。自分でもびっくりするほどびんびんだおｗｗｗｗ。このびんびんを誰か受け止めるやつは・・・）

？？？「お呼びですかヤルオ様？」

？？？「ヤルオちゃ～～ん？？」

ヤルオ「・・・計ったかのようなタイミングで登場だおｗｗｗｗｗ」

考え込んでいると、赤と緑と青の少女達と、ピンク色の髪のナイスバディな女性が現れた。

ヤルオ「親衛隊は分かるけどママンまでくるなんて予想外だおｗｗｗ」

ママン？「だって～、ヤルオちゃんそれ系のことで困ったらママが処理するんだもん」
赤い親衛隊「ヤルオ様、このヤルオ様親衛隊一番・タマネがやりますから」
緑の親衛隊「いやいや、リリンが一番ですよね？」
青の親衛隊「レムナが一番だよ～」
ママン？「3人ともだめよ～、マナちゃんがヤルオちゃんの相手するから～」

ヤルオの母兼ママンこと恵絽マナと、赤い髪の少女タマネ、緑の髪の少女リリン、青い髪の少女レムナがヤルオに対して口げんかした。

ヤルオ「・・・しかたないおｗｗｗｗｗ。分身の術！」

ぼーーん！

ヤルオはため息をついて分身の術で4人になった。

ヤルオ×4「これで文句ないおｗｗｗｗｗ？」
親衛隊＋マナ「あ、できてたんだった・・・」

いまさら思い出したかのように言う4人。
泣いていいかｗｗｗｗ？

ヤルオ「ま、それはともかく、はじめるおｗｗｗｗｗ。・・・ジュル」
親衛隊＋マナ「・・・（ドキドキ）」

獣の目で見るヤルオと、それをスタンバイオーケイでいる変態共。

ヤルオ「とお～～～！！」
変態共「キャァァ～～～！！♪」

ルパンダイブで襲われる変態共。

タマネは胸を、リリンは秘部を、レムラはキスを、マナはピストンでヤルオからの快感を覚える。

・・・ここから先は省かさせていただく。

変態共「オイィィィ！！＃＃＃」

別のとこでは、

レーティア「ハァハァハァ？？ギルシア、もっと突いてぇぇ！？？」

レーティアとギルシアが甘～い夜をすごしていた。

リアスとイッセーサイド

（自主規制）（ま、レーティアたちと同じと思えばいい）

ジャンヌ、ナリア、タバネサイド

ジャンヌ、ナリア、タバネ「ハァ・・・ハァ・・・今度の新作が楽しみだ・・・」

とジャンヌはコスプレの裁縫を、ナリアはエロ本を、タバネは新兵器を作っていた（読んでいた）。

翌日

いつも通りの朝を迎えた起動六課。

・・・なんだが、

グレイ「おい・・・何がどうなったらそんな姿になるんだ？」

グレイが呆れた顔でビビを見た。

なんとビビの姿がなのは達とほぼ同じ位に成長していたのだ。

出るとこは出て引っ込むとこは引っ込んでいるまさに美女と呼ぶに相応しい。

見た目の年齢は２０歳程度あたりだろう。

ビビ「いや～、実は勇華さんとやり合ってたらからだがどんどん成長しちゃってさ～（＾ω＾）＞」

銀時「つーかゲストキャラ変わっちゃっていいのか！？リィーンと読者から苦情が来てこの小説消されるぞ！？」

頭をかくビビと頭を抱える銀時。
そこはリィーンさんに聞いてみるしかないな・・・でも大丈夫だと思う、ケンさんとこにマイティ真拳使いがいるし・・・、あそこにシャルもいるし・・・。
まぁだめならだめで編集するけども・・・。

ビビ「そんなわけで、グレートビビちゃんさんじょ～～う！（＾∀＾）」
グレイ「調子に乗るな」

ゴツンッ！！

ビビ「イッタ～～～イ！！（＞＿＜）」

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

勇華「は～い、今日のアシスタントは神道勇華です」

銀八「うし、んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』さんからはじめるぞ。『ルイージ「新しい人が出たね」

マリオ「ってか師匠の知り合い出た！？」

フォックス「驚いたな」

スネーク「と言うかはぐれな…」

銀次「凄いね能力も」

冥王「なの」

マリオ「メインメンバーと転生者達に質問『俺の師匠であるジルバについてどう思う？』」

ソロ「俺から真王に質問『転生者の名前は自力で考えたり、漫画のを参考にしてるのか？』」

ネス「百合な人達に質問『作者の書いてる龍騎の小説に出る女の子達についてどう思う？』」

次回を楽しみにしてます♪』最初のはみんなチートすぎるとか規格外だな・・・とか言ってたぞ」

真王「２つ目ですが、そのとおりです。漫画と自分の想像力で作ってます」

ビビ「ほほう？かわいい子達だね～」

ナリア「ハァハァ・・・」

ジャンヌ「どんな服なら似合うかな～」

真王「一人危ない事言ってる気がしますが無視しろ。『鳴神　ソラ』さん、廊下にたってなさい」

勇華「えっと、次はペンネーム『月光閃火』さんからの質問よ。『ども…月光閃火だ。（鼻血未だに噴き出し中）

輝刃「とりあえず…鼻血を止めておけ閃火…（汗）。」

そうしたいけど…止まんないんだよね…（汗）。（鼻血未だに噴き出し中）あ…質問…いいかな？まずは俺から…。

1．勇華に質問…正直言って、そのグラマラスボディで困った事はあるんか？（鼻血未だに噴き出し中）

輝刃「直球ストレートでそれを言うか…（汗）。というか…閃火が前にメッセージで投稿したオリキャラは、勇華のあのグラマラスボディに耐えられるのか？」

ハハハ…多分、ギリギリで耐えきるんじゃないかな？…あ、鼻血噴射が止まった…。（そういって、顔面蒼白で鼻に付いた血をティッシュで拭く）

輝刃「……（汗）。次は俺からだ。」

2．銀時に質問…というかアドバイスだ。自分のバリアジャケットに不満を持っているようだが、そういうならお前は『これはゾンビですか？』の主人公の変身した姿を見てもそう思えるか？

ハハハ…確かに、その作品の主人公ってヒロインの女の娘から素質を丸々吸収しちゃったから変身せざるを得なくなって、その変身した姿が…完全に女物の服装だったもんな…（汗）。（顔面蒼白でフラフラになりつつも、そう解説する（汗）

輝刃「…大丈夫なのか閃火（汗）？」

アハハ…大丈夫大丈…夫…。（そういって、そのまま仰向けでぶっ倒れる）

輝刃「オイオイ…無理しやがって…。」（そう言いながら、閃火を介抱し始める（汗）『う～んそうね～、しいて言えば目を血走った人間達が襲いにくる事かしらね」

銀八「やっぱ狙われるんかい！！って人間達って！？」

真王「男女問わずの事だ」

銀八「マジかよ！！・・・っと次！」

銀時「ブハハハハハ！！オメェのほうがすっげぇ恥ずかしいコスプレだなブハハハハハ！！」

真王「では『月光閃火』さん、病院行ってください。次はペンネーム『リィーン』さんだ。『どうも！！　更新、お疲れ様です！！！

神「……なぁ、なんで俺様、動いてないわけ？」

そういえば、一度も攻撃という行動をしてませんよね

神「なんか、悲しいかな……」

っていうか、動いたら次元震が発生しかねないかと

神「それくらいの加減はするさ。ただ……未だに活躍という活躍が……」

きっと来ますよ……多分

神「多分かよ！！！」

では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばってください！！！　失礼します！！！

神「はぐらかすな！！！」

っといいますか、質問は無いんですか？

神「いや、特にない。お前は？」

そうですね……なら、一つ

・真王様に質問。もし、神以上の存在がいるとしたら、それはなんだと思いますか？　そんなモノは無い。という答えは無しでお願いします

神「……つまり、神を超越した存在。ってことか」

私は、〇〇か××だと思いますね。因みに、どちらも漢字二文字です

神「さて、なんて答えがくるんだろな？」『神以上の存在ですか？・・超魔王神ですかね」

銀八「何だよ超魔王神って！？」

勇華「超魔王の神様の事よ。『リィーン』さん、廊下にたってなさい。次はペンネーム『黒龍』さんよ。『銀時「なんだありゃ！？完全無欠のチートじゃねぇか！！」

黒龍「相変わらず新キャラ引っ切り無しに登場しますね」

ソラ「良く捌けるな」

銀時「つうか、あっちの俺のデバイスがパワーアップしたのは良いんだけどよ、結局コスプレなんだな…」

黒龍「それがデュフォでしょ」

銀時「納得いかねぇ…」

ソラ「それで、今回の質問は？」

黒龍「今回はこれです」

1．勇斗に質問。あなたは負けた事がありますか？とりあえずジャンルは問いません。

2．勇斗に質問。あなたは何のために戦いますか？

3．勇斗に質問。戦ってみたい奴とかいますか？

黒龍「今回はここまでです」

銀時「なんでもよ。最近黒龍の奴、質問するネタがなくなってきてるらしいぜ」

ソラ「随分したからな…」』勇斗の質問ね」

勇斗「そうだな。まず俺に敗北というものはなかったな。戦う理由は真の幸せのために。相手なら何でもいいが」

勇華「だそうよ。『黒龍』さん、更新がんばってね」

真王「最後だ。ペンネーム『ウィンド』さん。『真王さんに質問とお願い。
私もフォレストページと言うサイトでなのは小説を書いていますが嫌でなければコラボを考えてくれませんか？

質問は私のかいている小説の主人公達と銀さん達を戦わせたら勝てると思いますか?主人公の中で強い方を選びました。

リリス・ハートネット（オリヴィエの恋人でクラウスの親友。ベルカ時代最強の剣士）

メア（ファントムブレイカーと呼ばれる集団中最強。次元世界を消滅させる程の力をもつ。主人公中最強?）

エール、コヨリ（ヒロイン）（転生者。しかし実態はエールは最高神と悪魔の間に生まれた半神半魔でコヨリは冥王から生まれた。主人公中ずば抜けて強い）

セリス（デビルメイクライとのクロス。ダンテの相棒でダンテと同等、それ以上の剣技と銃技をもつ）

こんな感じです。ちなみにデビルメイクライの方はまだかいておらず予定です。返答お願いいたします。』メアは難しいですがそれ以外は勝てると思いますよ?あ、エールとコヨリはどうかな・・・?

『ウィンド』さん、なのは更新ガンバです」

勇華「えっと、次回はガレーナがアシストよ。じゃあね」

裏第二訓：Ｒ－１５ってエログロ用語が無ければいい（後書き）

真王「次回は次章『ゲイム祭編』のスタートです！」

ガレーナ「次回『祭りの準備は初めにやっとけ』テイクオフだ」

第八十六訓：祭りの準備は初めにやっとけ（前書き）

真王「やってきました！『ゲイム祭編』！銀時達がゲイム業界へ観光します！」

ガレーナ「『銀女神鎮魂歌』始めるぞ」

第八十六訓：祭りの準備は初めにやっとけ

機動六課

今日も平和な一日。

そこに、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールが何やらそわそわしている。

ネプテューヌ「イースンまだ～？」

イストワール「もうちょっと待ってください（┐　┐；）」

イストワールがトンテンカンと何やら装置を作っている。

ネプテューヌ達はその装置が完成するのを待っているようだ。

そして、

イストワール「ふぅ、やっとできました（┐　┐；）」

装置が完成した。

ネプテューヌ「ホント！？これなら間に合うね！」

ノワール「ホントね。出来なかったらどうなるかと冷や冷やしたわ」

ブラン「帰ったら準備…」

ベール「帰ったら忙しくなりそうですわ…」

ネプテューヌ達も出来た事に安心したようだ。

コンパ「良かったです」

アイエフ「そうね」

銀時「なにがだ？つうかなに作ってたんだ？」

同じく安心するコンパとアイエフにたまたま通りかかった銀時が聞く。

コンパ「イースンさんが転送装置を作ったのです！私達はそれでゲイム業界へ帰るのです！」

銀時「へぇ～、そうか」

コンパの説明に銀時は特に気にせｚ…

銀時「って・・・エエェェェェェェェェェェェェェェ！！！？？」

・・・銀時は思わず驚愕した。

銀時「オイィィィィィ！！！もしかしてそれあれか！？もしかしなくても転送装置ってマジか！？」

イストワール「はい、正真正銘転送装置です。とはいってもゲイム業界一通便だけですけれども」

驚く銀時をしり目にイストワールが言った。

あと銀時の叫び声を聞いたなのは達も説明してまた叫び声が出たとか。

グレイ「要はあれだろ？イストワールがネプテューヌ共のためにそのゲイム業界へ帰るためにその転送装置を作ったと？」

イストワール「一応そんなとこです」

新八「あれ？源外さんとスカリエッティさんは？」

イストワール「手伝いもせずサボりやがったので…（#、　'）」

イストワールのイラついたことでほとんどがああ、そうかと呟いた。
なのは「で、ネプちゃんたちはその転送装置で何処行こうとしてたの？」
ネプテューヌ「さっき言ったようにゲイム業界だよ。そして開催されるゲイム祭の代表として出席するんだよ」
全員「ゲイム祭？」

なのはが聞くとネプテューヌが言う。
そしてこの場にいる全員が首をかしげる。

ノワール「数年に一度行われるお祭りよ」
ベール「さまざまな大陸の人たちが集まってワイワイですわ」
ブラン「イベントたくさんあるわ」
ネプテューヌ「あ、銀さん達も参加する？楽しいよ？」

銀時達はしばらく考え、そして行くことに決めた。

行くメンバーは銀時、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、源外、猿飛、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ヴィヴィオ、プリニー（ヴィヴィオ護衛のため）、ユーノ、スカリエッティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セッテ、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディ、オットー、ディード、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、イストワール、リリス、ミーニャ、アルラ、グレイ、ビ

ビ、神、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イッセー、カイム、アンヘル、レオン、ユウカ、ナリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、タバネ、ガレーナ、レシア、ヤルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、チフユ、勇華である。

イストワール「それではみなさん、行きますよ?」
ほとんど「お～～!!」
レオン「いつでもいいぞ」
チフユ「監視しておくか…」
ユウカ「ウフフフ・・・」
ガレーナ「早くしろ」

イストワールが聞くと全員が答える。
そして装置が正常に作動し、ネプテューヌ達は転移した。

ゲイム業界・プラネテューヌ

ＩＢＧＭプラネテューヌｂｙ超次元ゲイムネプテューヌ（Ｈｙｐｅｒｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｎｅｐｔｕｎｉａ－　Ｐｌａｎｅｐｔｕｎｅ'ｓ　Ｔｈｅｍｅ）

シュンッ!!

イストワール「着きました。ゲイム業界です」

誰もいない広場でイストワールが言った。

銀時「ココが…」
神楽「うお～～～！！！凄いアル！！」
桂「なんと・・・」
なのは「すごい・・・」
スバル「ミッドチルダと負けてないね…」
エリオ「た、たしかに・・・」
スカリエッティ「これはたまげたよ」
リリス「ココが母さん達の？」
ビビ「な、なんて未来都市！？」
神「眩しいな…」
ジャンヌ「凄いとこだね…」
レオン「ほう？」
レイン「ミッドよりも進んでねぇか？」
咲夜「わぁ～～～♪」
さくら「ミッドよりすごいかも？」
タバネ「こ、ここの科学力は一体？」
勇華「へぇ～？」

元々ゲイム業界出身であるネプテューヌ達以外は驚きの声をあげていた。
特にミッドチルダよりも未来が進んだみたいな未来世界の都市・プラネテューヌを見て。

ネプテューヌ「こここそが、私の管轄であるプラネテューヌだよ！」

自慢げに鼻を伸ばすネプテューヌ。

銀時「え？」

スバル「ネプちゃんがここを？」
神楽「ムリムリネ、こんなガキンチョが出来るわけねーだろ」
銀時とスバルとほとんどの人は疑問に思い、神楽はありえないと言い張る。
（転生者のほとんどは知っています）
ネプテューヌ「ガキンチョって、人のこと言えないでしょ！・・・ところで銀さん、私達がどんな人だったか分かる？」
ネプテューヌは神楽に突っ込んだ後、銀時に問う。
銀時「え？そりゃ年増を超えたバｂ…」
しばらく待て。
ネプテューヌ「で、私達がどんなのだったか覚えてる？（血が付いてる）」
銀時（だった物）をしり目にネプテューヌ達は血だらけなまま黒い笑顔で問う。
なのは達は今見た出来事に青ざめる。

唯一平気なのはレオン、ガレーナ、勇華だけ。

レオン「確か守護女神だったか？」
ネプテューヌ「そ！その代表として出席するんだよ」

レオンが言うとネプテューヌが答える。

？？？「譲ちゃん譲ちゃん、俺達と一緒に遊ぼうよ～」
？？？「イヤ、離してください！」

すると何処からか声が聞こえる。
聞こえた方へ向くと、数人の男達と一人の少女がいた。
ネプテューヌを少し成長させてロングな髪の少女がナンパされていた。
それを見たネプテューヌはダッシュで駆け出して、

ネプテューヌ「うちの妹になにしてくれとんじゃぁァァァァァァァァ！！！！！」

と男達にライダーキックを浴びせて気絶させた。

ナリア「ラ、ライダーキック！」
ジャンヌ「斬新だ…」
新八「何の！？」

ナリアとジャンヌは驚き、新八は突っ込んだ。

フェイト「っていうか、今妹って？」
ネプテューヌ「ネプギア、大丈夫？」
ネプギア「うん、もう大丈夫だよお姉ちゃん」

フェイトが今ネプテューヌが言ったことに疑問に思うと、ネプテューヌが少女・ネプギアに聞くとネプギアは大丈夫と答えた。

銀時「え？なにそれ？妹さん？」

といつの間にか復活した銀時が尋ねた。

ネプテューヌ「うんそうだよ。私の妹の…」

ネプギア「ネプギアって言います。初めまして」

ネプギアが礼儀正しくお辞儀をした。

スバル「あ、ど、どうもこちらこそ…」

スバルは釣られてお辞儀をする。

桂「はじめまして、桂です。好物はそばだ」

神楽、ヴィータ「だからいちいち好物を言うんじゃねぇ（アル）！！！」

桂も挨拶する際好物も言ったので神楽とヴィータがど突きだす。

ネプギア「だ、大丈夫ですか！？」

銀時「ヅラはこんなんじゃくたばらねぇよ」

ネプギア「ヅ、ヅラ？」

桂「ヅラじゃない桂だ！」

蹴り飛ばされた桂に心配するネプギア。

そして銀時がヅラと言ったことに思わず復唱するが桂が訂正させる。

なのは「それにしても健気な性格しているね～」
ネプギア「そうでしょうか？」
はやて「そやで。何処ぞのちっちゃくて食欲旺盛なのとは大違いや」
ネプギア「…あの、そう言うのはお姉ちゃんの前では言わない方が…」

なのはがネプギアの性格に感心し、はやてが言ってはならないことを口走った。

ポンポン

後ろから叩かれたはやては振り返ると、「ちょっと面貸せや」という感じに親指を後ろに向けて肩を持つネプテューヌが笑いながらはやてを見ていた。
はやては見た瞬間「あ、これうち死んだわ」という感じになった。
その後首根っこ捕まれてどこかへ連れて行かれました（ドナドナが空耳に聞こえる）。

ネプギア「アハハ・・・あ、ところでこのゲイム業界は初めてですよね？観光を兼ねて案内しましょうか？」
ノワール「そうね。銀時達にはもっとゲイム業界を知る必要があるかも」
ネプテューヌ「それじゃあさっそく行ってみようか」
新八「戻るの早！？」
イストワール「でしたらこれの出番ですね」

ネプギアは苦笑いをした後案内のことを聞くとノワール達は賛成する。
いつの間にか戻ってきたネプテューヌに新八が思わず突っ込んだ。

はやては半殺しな目にあって戻ってきた。
イストワールがなにかアイテムを出してきた。
イストワール「女神専用の『移動ワープ装置』です。それではラステイションへ」
イストワールがスイッチを押し、ネプギアを含めて銀時達はワープした。

ゲイム業界・ラステイション

ＩＢＧＭラステイションｂｙ超次元ゲイムネプテューヌ（Ｈｙｐｅｒｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｎｅｐｔｕｎｉａ－　Ｌａｓｔ　Ｔｈｅｍｅ）

銀時達は、機械や工場が多いところへワープした。
ノワール「ココが私の管轄・ラステイションよ」
源外「こう言うオイルの匂いや機械の音が好きだな俺は」
プリニー「ザ・メタリックって感じッスからね～」
源外は光景を見て髭を触り、プリニーが同意する。
すると、ノワールそっくりの少女がやってきた。

？？？「お姉ちゃん帰ってくるなら連絡くらいくれればいいんじゃないの？」
ノワール「あ～、ごめんユニ、ゲイム祭のことでそこに頭回ってなかったわ…」

少女はユニというノワールの妹らしい。

ユニ「…まぁ確かに一週間後にゲイム祭が始まるからね」
ノワール「…ところでユニは挨拶しなくていいの？」
ユニ「え？ああ、この人たち？あたしはユニよ。とりあえずよろしくね」

ユニはしぶしぶ納得したあと、髪を翻してあいさつした。
ただその態度がネプギアと対称的にどうも強気気味のようだ。

？？？「挨拶はいいですけどちゃんと仕事ぐらいは出来ればいいですね」

後ろから少年の声が聞こえた。
ユニはそれを聞いた時嫌そうな顔をした。

ユニ「・・・相変わらずビジネス系には厳しいわねケイ」
ケイ「情報収集はビジネスの基本です。僕は神宮寺ケイ、ここの教祖です」

呆れ半分に嫌み半分に言うユニに、ケイは軽く返す。

ティアナ「頭のお固いサポーターさんがいた者ね…」
スバル「アハハ、もし私の上司がこんな性格の人だったらまずあたしダウンするよ…」

ノーヴェ「右に同じくだ…」

ティアナは呆れた顔をして、スバルとノーヴェは冷や汗を流す。

ケイ「硬くて結構、それに頭の悪い人はビジネスに適しないですからね。特にそこの白い男は尚更ですが…」

聞こえてたらしく、人に対しても厳しいケイ。
ちなみに彼の言った白い男と言えば…。

銀時「おい、白いって俺のことか？」
ケイ「あなた以外おりません。それとも白い崩れパーマと呼べばいいですか？」
銀時「おい崩れってなんだこの野郎。俺の頭がむしゃくしゃしてるからか？」

表情を変えずしれっとした態度で銀時は頭に青筋を立てる。

ユニ「いや、逆に白く濁ったもじゃヘッドの方が面白くない？」
ケイ「それもそうですね」
銀時「腹立つんだけどこいつら殴っていい！！？」
フェイト「ぎ、銀時押さえて…」

ユニが思いついたことを言うとケイが同意、銀時は完全に切れてフェイト達が抑え込む。

ユニ「まっそれはともかく、なにしに来たの？」
ノワール「ええ、グータラ天パに案内してるの」
銀時「オメーも何言ってんだよ！！」

ノワールの言い分に銀時が突っ込む。

ケイ「確かにゲイム業界では見かけない人たちですね。・・・特にこの後の予定はありませんので行ってもいいですよ」

ユニ「そうなの？それならよかったわ。次に行く所は…」

ネプギア「ルウィーにいこうと…」

ユニ「よし、ならば行きましょ」

ユニが強制的にどうこうすることになってルウィーへワープした。

ゲイム業界・ルウィー

ＩＢＧＭルウィーｂｙ超次元ゲイムネプテューヌ（Ｈｙｐｅｒｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｎｅｐｔｕｎｉａ－　Ｌｏｗｅ'ｓ　Ｔｈｅｍｅ）

銀時達は、ファンタジックな雰囲気のある雪景色のところへワープした。

ブラン「ココがルウィー、私の場所…」

レーティア「へ～、っていうかさむっ！？」

ギルシア「いっきし！！」

レオン「む？ここは他のと違って寒いな…」

着いた瞬間身を凍えさせる気候に答える一同。

ブラン「このルウィーでは寒いのが普通…」

ヤルオ「そりゃ一面雪ばっかだおｗｗｗｗｗ」

ヤルオが突っ込む。

？？？「あ！ホワイトハート様～～！！」

するとメガネをかけて赤い教師っぽい服を着た水色の髪の女性がやってきた。

ドテッ！

？？？「きゃっ！？」

あ、こけた。

ブラン「・・・相変わらずドジね、ミナ」

ミナ「ぅぅ・・・、すみません。・・・あ、私はここの教祖をやっております西沢ミナです！」

ブランは呆れた顔をしていい、ミナは謝ったあと挨拶した。

ブラン「ところでミナ、あの子たちは？」

ミナ「あ、それなら「あ～～！！やっぱりお姉ちゃんだ～！！」ってえ？」

遠くから少女の声が聞こえた。

ピンクの服に青いリボンをつけた少女がやってきて、その後ろを追

いかける青い服にピンクのリボンでピンクの少女より髪が短めの少女がやってきた。

???「帰ってくるんじゃないかと思ってたよ～」
???「・・・おかえり」
ブラン「ただいま、ロム、ラム」

少女達とブランは言葉を交わした。
青い少女はロムでピンクの少女はラムである。

銀時「今度は双子かよ」
なのは「でもどっちも可愛いね」
ネプギア「あ、なのはさんもそう思いますか？」

ロムとラムを見ているなのはにネプギアが同意する。

ロム「・・・・・・・・・」
銀時「？何見てんだ？」

さっきからロムが銀時をじーとみている。

ロム「・・・幼女絡みになると不運な人？」
ラム「あ～、それロリコン疑惑～？オジサンそんな年してもう…」
銀時「ちっげぇよ！！！俺はロリコンでもねぇしおじさんでもねぇ！！せめてお兄さんって言えよ！！もう一度言うが俺はロリコンじゃねぇ！！」

ロムの不名誉な言葉にラムがニヤニヤ笑いながら言うと、銀時は全力で否定する。
後ろをちらっと見ると・・・黒い殺意を抱くラバーズたちが。

ラム「お兄さんって、白髪みたいな頭してたら説得力無いよ？」
ロム「というより最近閃光に飲まれるか鎌で切られるかの件でそうなってるの？」

ニヤニヤ笑うラムに同情の目で見るロム。
銀時はラムに対して怒りをあらわにする。
皆は銀時にごめんなさいと頭を下げて連呼する。
なのはとフェイトは少し複雑な顔になる。

ベール「え～と、最後が私の管轄であるリーンボックスですね」

ベールが言う。
心なしか少し困ったかのような顔をしている。
それに気付かず、リーンボックスへワープした。
ロムとラムも一緒に着いてきた。

ゲイム業界・リーンボックス

ＩＢＧＭリーンボックスｂｙ超次元ゲイムネプテューヌ（Ｈｙｐｅｒｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｎｅｐｔｕｎｉａ－　Ｌｅａｎｂｏｘ-ｓ　Ｔｈｅｍｅ）

緑いっぱいで洋風的な町並みを持つリーンボックスへ着いた一同。

ヴィヴィオ「わぁ～、緑がいっぱ～～い！」
プリニー「ホントッス。ここは豊かさが伊達じゃないかかんじッス」
ヴィヴィオはリーンボックスの風景に感動し、プリニーは比較していた。
銀時達も自然豊かな場所に感動をしている。

ベール「これが、リーンボックスたる象徴の一つですわ」
？？？「そしてそのリーンボックスを納めるのはベールお姉様だけですの！」

ベールの後に誰かが言ってきた。

ベール「・・・チカは相変わらずですわね」
チカ「当たり前です。全てにおいて素晴らしいのはお姉様！それだけですのよ！」

ベールは苦笑いを浮かべてリーンボックス教祖・箱崎チカは胸を張る。

チカ「ところで、見かけない人たちですけど祭りに参加するのですの？」
銀時「まぁな」
なのは「私達ねぷちゃんに誘われたの」

ちらっと銀時達を見たチカが聞くと銀時達は応える。

チカ「そうですか。ゲイム祭はこのリーンボックスで一週間後に行われますの。その間は観光でもしないさいな」

銀時「そうするぜ」

銀時達はその間ゲイム業界を観光していった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

ガレーナ「あしすとは余がやることになった。全力で相手になろう」

銀八「いいけどやり過ぎるなよな?んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』さんからだ。『ルイージ「ちょぉぉぉぉぉぉぉぉっぉ!?」

スネーク「ある意味…凄いです;」

フォックス「よ～やるよだな;」

ネス「マリオに見せられないね；」↑アイマスク付けてます。

リュカ「／／／」↑同じく。

冥王「ヤルオにディバインバズーカをしたくなって来たの」

クッパ「落ち着くのだ；」

ルイージ「此処にいないけど兄さんから転生者組みに質問『普段は何してるんだ？』…だって」

スネーク「百合組に質問『女の子同士で赤ちゃんが出来ると言う薬を内のドクターが内の所の百合達におど…お願いされて作ってあるんだが…欲しいか？』」

クッパ「（それやばくないか？）我輩は真王に質問『何でヤルオを作ったのだ？』」

次回を楽しみにしてます♪』最初は長いから2つ目と3つ目を言おうか」

百合組「全力でほしい！！」

真王「それでちゃっかりもらっちゃってるな…。ヤルオの作った理由はキーワードで『エロ主』と検索したらわかると思いますよ」

グレイ「一人で本を読んでたぞ？」

ビビ「ナリアちゃんとジャンヌちゃんと遊んでた」

レーティア「ギルシアといちゃついてたわ？」

ジャンヌ「３人でカードゲームだよ」

シャル「お腹空いてたから食べまくってたわ」

ギルシア「俺は分かるだろ？」

リアス「ミッドでうろうろしてたわね」

イッセー「俺は姉さんと一緒に」

レオン「私はガレーナと対決をしていたな」

ユウカ「人を屈服させる案を考えてたわ」

ナリア「私もジャンヌちゃんと同じ」

タバネ「新作づくりだよ～♪」

ガレーナ「レオンとの戦いだ」

レシア「暇なので六課を掃除していました。隅々まで」

ヤルオ「女の子とのランデブーな案を・・・」

アルテス「ユウカ様にどう攻められるかシュチュエーションしてましわ／／／／／」

チフユ「馬鹿共（ルシアスとルーシア）の指導だ」

真王「では『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

ガレーナ「次は確かレオンがお世話になる『ケン』だな？『統夜「凄いな・・・」

マイティ真拳の使い手の零斗は龍の骨さんから許可を貰っていますから・・・大丈夫ですよ。

統夜「ヤルオって完全なる変態だよな・・・」

アドヴァンスフォンでインターネットを始めた。

自分的に大丈夫ですよ。

遊輔「後ろからシャルさんが抱きついたら面白そうだな。どんなリアクションを見せてくれるか・・・」

達哉「同感だ・・・タバネさんに質問です。『俺達のデバイスの中で興味のあるデバイスは何ですか？』」『だそうだ」

タバネ「それはもちろん、トウちゃんの新たに持ってるデバイスだよ～」

真王「相変わらず愛称で呼ぶな。それに統夜でトウちゃんか？」

ガレーナ「では『ケン』よ。廊下に立て。次はペンネーム『月光閃火』だ。『ども…月光閃火だ。（そう言いながら、血色の良すぎる顔でカラカラと笑う）

輝刃「…もう大丈夫なのか？」

ああ…もうすっかり回復したよ。ついでに耐性も付いたから、ユウカのグラマラスボディにもカラカラと対応出来るぜ…。

輝刃「そ…そうか…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ユウカ殿に質問…前の感想書きでの出来事からすっかり貴公に対して耐性が付いたのだが、それでも骨抜きにする自信はあるのか？

ハハハ…もうガッツリ来い！って感じかな。次は俺からだ。

2．転生者メンバーに質問…リリなの勢・銀魂勢・ネプテューヌ達のそれぞれのキャラの中で『この人とは戦いたくない』って思えるのは誰だ？リリなの勢・銀魂勢・ネプテューヌ達それぞれのくくりの中で一人ずつ選んでね？あ…それと、『愛しているから』とかの理由で選ぶのは無しだよ？

輝刃「なるほど…確かに、そういうのを理由にして逃げるかもしれないからな…。」『だそうだが」

勇華「あら？だったらあなたに胸挟みでもする？」

真王「そこまですると死ぬよ？次だ」

グレイ「シグナムだ。めんどくさい」

ビビ「出来ればなのはちゃん達とか傷つけたくないけど…」

レーティア「私は特に？」

ジャンヌ「ないな～」

シャル「いないよ？」

ギルシア「ヴィヴィオちゃんだな」

リアス「ネプテューヌかしら？」

イッセー「俺は…ないな」

レオン「私はいない」

ユウカ「どんな奴でも相手になりますわ」

ナリア「なのはちゃんかな？だって魔王だし」

タバネ「沖田って人かな？」

ガレーナ「なぜ怖がることがある？」

レシア「銀時とは戦う気はありません」

ヤルオ「ヴィヴィオちゃんだなｗｗｗｗｗ」

アルテス「男共全般ですわ」

チフユ「いないが？」

ガレーナ「では『月光閃火』よ。廊下に立て」

真王「続いて、ペンネーム『支配者』さんから。『勇華とビビのエロシーンがなんかな……って思っちゃいましたね。

質問です。

皆さんに質問です。

お漏らし女神ブランとエロオタク副長土方を如何思いますか？（黒笑）

沖田に質問

自分と気の合いそうな転生者は誰だと思ってますか？

転生者達に質問

自分達の中で一番変態な転生者は誰のつもりですか？（黒笑）』では」

全員「だからそれ喧嘩売るようなことは止めろ！」

沖田「ユウカでサァ、一緒に土方さんをぶっ殺しましょうぜ？」

ユウカ「殺すよりも絞めあげた方が効果的ですけど？」

真王「何の話だ？つぎ」

転生者組「ヤルオ」

ヤルオ「ぼくだおｗｗｗｗ」

真王「自分が変態って自覚あるんだ。『支配者』さん、変態絡みでもやってなさい。次だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『銀時「おいいいいいいいいい！！！これ大丈夫なのか！？」

黒龍「ある意味やっちゃった感がいなめませんね…」

ソラ「大丈夫だろ」

銀時「いやいや、さすがにこりゃマズイだろ。運営側が何か言うんじゃねぇか？」

ソラ「まぁ…確かにそうだな」

黒龍「しかし、上手く表現できてる所がまた凄い…！」

銀時「しかしよ、ヤルオある意味凄くね？一応アイツ好きになる女がいるんだからよ」

黒龍「結構奇跡に近いですよね」

銀時「やっぱアレじゃね？無理やりヤルオが襲って、それで無理やり惚れさせたんじゃね？」

黒龍「ああ、そう言う鬼畜な同人誌とかありますからね」

ソラ「それじゃヤルオはほとんど外道だな…」

黒龍「まぁ真実は知りませんが…」

銀時「それで、今回は質問のネタとかあるのか？」

黒龍「ありますよ。今回の話で思いついたホットな質問です」

1．真王さんに質問です。今度は銀さんと銀さんラバーズのエロシーンを書いたらどうですか？読者受けが良いと思いますよ？

2．それでもし書くのなら、銀さんが襲われる形になると俺的には面白いです（笑）

3．ヤルオに惚れている人たちに聞きます。なんでヤルオが好きなんですか？

銀時「おいいいいいいいいいいいい！！！何とんでもねぇ質問してんだよ！！」

黒龍「いや、主人公とヒロイン達のエロシーンは定番でしょ」

銀時「いや、それ違くね？」『気が向いたらやります。そしてヤルオラバーズ、答えなさい」

タマネ「私は昔変態に絡まれたところを助けられて惚れました」

リリン「一緒にクエストやった時からよ」

レムナ「一目ぼれかな～」

マナ「まだ幼かったヤルオちゃんがよく私のミルクを吸ってたから私くせになっちゃったの～？」

真王「だそうです。『黒龍』さん、そっちでソラとラバーズの微エロシーンでも作ったら？」

ガレーナ「最後はペンネーム『きっと木の精だ』。『木の精だ「き……き……き（鼻を押さえて顔真っ赤）」

恭平「通訳すると”きっと木の精だです、ご無沙汰してます”といってるぞ（素面」

木の精だ「ゆ……ゆ……ユ（鼻を押さえて（ｒｙ」

こなた「通訳すると”勇華お姉さんエロ過ぎます”だってさ（素面」

木の精だ「……あ……あ……（鼻を（ｒｙ

恭平「”後質問があります、忘れそうになりましたが最初のほうでなのはちゃんが、お姉さんに頂かれた様に見えるんですが実際どこまで行ったんですか？
銀さんはそれについてどう思いますか？”と言っているな、うちの大将（素面）」

こなた「ンじゃ今回はこれぐらいで、ついでに私達が素面だったのは単なる慣れだよ！じゃね！」

恭平「俺達のオタク暦の長さを侮るなよ先生、これからも頑張ってくれ！（鼻を押さえてぐったりしているきっと木の精だを抱えて退出）』」

勇華「ちょっとやった程度だけど？」

真王「ちょっとでか?銀時はそんなこと知りません。『きっと木の精だ』さん、廊下に立ってティッシュ詰めて」

ガレーナ「ではここまでだ。次はレシアがやるらしい。またの」

真王「よし、バトン公開でもするか」

『部位破壊バトン

銀凪さんから頂きました。クイーンズゲイトのネタのようです。まぁ見て行ってください!!

1：キャラは何でもいい（特に女性が一番ありがたいことが…）

2：破壊キャラを考えて…

破壊者：罪男族（白いふんどしと罪と書かれた布のかぶり物（見るための穴がある）しか身につけていない怪人の一種。持つ武器は斧でレベルはＭＡＸ）

セリフ：壊れたとこ

パープルハート（ネプテューヌ）

頭：っあ!!（プロセッサユニットヘッドが壊れる）

腕：イタッ!やったわね!（両手が破れて睨む）

胸：キャァァァァア!!!／／／／／／（胸が露出して思わず隠す）

腰：くっ！この…！！（腰あたりの布が破れる。見えそうで見えないようで…）

脚：うっ！（プロセッサユニットフットが壊れる。足部の布が破れる）

全破壊：……覚えてなさいよ…！（衣装がほぼ破れてへたり込んで涙目で睨む。あの部分が見えそうで見えないようで…）

レーティア

頭：きゃっ！！（頭がかすれた）

腕：うっ！（手にキズを追う）

胸：キャァ！！！／／／／／（胸が露出して思わず隠す）

腰：はわっ！？見ないでぇ…！！（腰あたりの布が破れる。見えそうで見えないようで…）

脚：いったぁ…（足が破れて転げる）

全破壊：ぅぅ…みっともなくなっちゃった…（衣装がほぼ破れてへたり込んで涙目。あの部分が見えそうで見えないようで…）

神道勇華

頭：いつ！（頭がかすれる）

腕：痛いわね…（両手の布が破れる。ついでにけが）

胸：きゃふん！（胸が露出して胸がバルンと揺れる）

腰：ああん！（腰あたりの布が破れる。パンツが見えそうで見えないようで…）

脚：いった～～い！（足が破れてすっ転ぶ）

全破壊：あ～ん、やられちゃった～・・・（衣装がほぼ破れてへたり込む。あの部分が見えそうで見えないようで…）

ケン　銀凪　エターナル　風花　天城　鳴神　ソラ　白騎士君　支配者　烈火竜　リィーン　あんぎゃーす　黒龍　黒神　さんでいいです。

あとはフリー。』

真王「それではまた」

第八十六訓：祭りの準備は初めにやっとけ（後書き）

真王「先に言っておきますがＭＫ２出てないです。なので私が脳内で想像して出しました。でも発売してプレイ後に編集しようと思います」

レシア「次回『人間とアンドロイドは似てて違う』テイクオフです」

第八十七訓：人間とアンドロイドは似てて違う（前書き）

真王「祭りの準備だ」

第八十七訓：人間とアンドロイドは似てて違う

プラネテューヌのとある工場。

そこは『アンドロイド』と呼ばれる人型の機械（からくり）、が山の用に多い。
しかも完全な人間と思えるほどの人間その者の外見であった。

そんな場所に銀時、新八、神楽、なのは、フェイト、スバル、ティアナ、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、月詠、源外、スカリエッティはある依頼人のお手伝いをしている。

？？？「銀さん、そこはあの机に追いといてください」
銀時「ん？……ああ、ここか？」

と銀時は人間の腕らしきアンドロイドの機械腕を机に置く。
そして銀時は、アンドロイドを調整しているボサボサの黒髪でゴーグルがついててタオルを巻いている発明家である若き青年に近づく。
実はこの青年こそが今回の依頼人である、キリア・ファンテである。

キリア「皆さん、今日は依頼とは言えこうも多くの手が借りられて助かりました」
源外「なぁに！お前さんのアンドロイドと言う人型（からくり）機械技術に興味をもってなぁ。せっかくだから手伝っている訳よ」

源外は若き発明家が作り上げたとは思えない完成度の高い機械（からくり）技術を持つキリアに強い興味を持っていた。
江戸一番の発明家としての意地があっても、優秀な若き発明家がいる事は嬉しくてたまらないようである。

スカリエッティ「ここまで完成度の高いアンドロイドを作れるとは……君はただの発明家ではなさそうだね」

スカリエッティも源外と同じく『プロジェクトF』と『タイプSK』とは違うが人間と思わせるほどのキリアのアンドロイド技術は唖然としていた。

それも戦闘機人の様な戦闘用にではなく、明日の祭り用の為に作り出している。

神楽「うほほーい！本物の人間ぽいヨ！」

ネプギア「私もこれまで性能なアンドロイドは初めてですよ。って神楽さん手伝ってください」

ラム「私達はここで見てるからいい～の。でもホント本物そっくりだ～」

ロム「（こくこく）」

銀時達がキリアの手伝いしているのに対して神楽とロムとラムは、手伝うと言うよりも見学して遊んでいるだけであった。

まだ小さな子供であるのか少年と少女のわくわく感を出しまくりであった。

銀時「たくぅ……あいつ等は気楽で良いなぁ、おい」

月詠「別に良かろう、コレほどまでの機械技術で作られた機械、わっち等の世界でも滅多に見られぬ」

呆れる銀時に3人の無邪気さに微笑む月詠。

全く手伝わない3人の代わりに謝りだすフェイト。

フェイト「すみません、3人が全く……」

キリア「別に良いですし……いくらあの女神候補の人とは言えまだ

幼き子ですから、たまに無邪気に心が晴れさせた方があの3人のためですし」

迷惑がっていない所が、3人の喜ぶ姿を見て嬉しそうに笑うキリア。
そこまで自分が作ったアンドロイドを気にってくれた事が凄く嬉しいようである。

スバル「でも神楽さんとエリオがはしゃぐのも分かるよ……だって機械技術だけでこんなにも完成度高く作れるなんて」
ティアナ「確かに……もう中には人間のように動いたり喋ったりする事ができるのがあると聞いてたけど……このアンドロイドを見てたらあり得るわ」
なのは「魔界にもアンドロイドがいたけどこっちも凄いね」

キリアの機械技術の高さを、ここにあるアンドロイドを見て感心するスバルとティアナとなのは。
源外やスカリエッティに認められるなら尚更である。

銀時「にしてもよぉ……こんなにも人間その者を機械技術で作れるとは……どっかのポンコツとはおおち……」

ドカァ！

銀時「が痛ぁ！」

新八、なのは、フェイト、スバル、ティアナ、ネプギア、月詠
『『（銀時）（銀さん）（兄さん）！？』』

突如、背後から源外作の三郎が銀時の後頭部を殴る。
源外と同様に、キリアの手伝いをしている様であったが……銀時の

暴言にムカついた様であった。

源外「馬鹿野朗め、確かにこの小僧の機械技術は評価できるが、わしの三郎だってこの人造機械には負けておらぬわい。なぁポンコツ」

ゴ！

源外「ぶはぁ！」

三郎に殴られて倒れる源外。

スカリエッティ「てか君も言っているから源外君。いくらポンコツとは言え自分の作品にそれは――」

ゴキィン！

スカリエッティ「なぶらぁ！」

スカリエッティも三郎に殴られて吹飛ばされる。

ティアナ「アンタも言っているじゃないの！」

呆れてスカリエッティにツッコむティアナ。

フェイトはスカリエッティを見て……プロジェクトFのベースとなる基礎論理を構築し、自分を生み出した人物とは思えないと、苦笑して疑いだす。

ネプギア「そうですよ。その子にポンコツなんて・・・あ」

ラム「言っちゃってるし」

ネプギアは思わず口に出してしまう。
殴られると思いきや、

ペシッ

ネプギア「あいたっ！」

叩いただけだった。

銀時「何この差！？」

銀時は突っ込むがスルーである。

キリア「あはははは！本当に愉快な人達ですね」
月詠「いや……唯の馬鹿な連中なだけじゃ……」

楽しそうにと見えて笑うキリアに呆れだす月詠。

スバル「所でキリアさん、このアンドロイドってひょっとして武器の扱い方も出来るんですか？」

スバルの質問にキリアは、わずかだが少し真剣な表情になる。
しかしすぐに笑顔に切り替えて質問に答える。

キリア「勿論です！内部には『電杯（でんはい）』と呼ばれる特殊な機械技術で作られた超高速データ回収装置が付けられていて……それを眼と脳の部分につけさせて瞬間的にデータを図って登録し、人間並に扱えられます」
スバル「凄いですね！」

そんな凄い技術で作られた事に、感動して喜ぶスバル。

フェイト「ですが……このアンドロイドには武器を扱うようには設定されていません」

キリア「そりゃそうですね」

ティアナ「このアンドロイドは戦う為じゃなく明日の祭りイベント用に作られたなら尚更よね」

明日始まる祭り。

それはゲイム業界で数年一回は行われる『ゲイム祭』。

女神たちに祝福を祝う祭りなので、プラネテューヌ、ラステイション、ルウィーの住人達（偶に異世界の住人）がやってくるのだ。

銀時「とりあえず、後は大丈夫か？」

キリア「はい、皆さんのお陰でほとんど完成しました……後は1人で最終メンテナンスをするだけですし」

どうやら余裕で間に合ったようである。

神楽とロムとラムははしゃいでわくわくと明日の祭りを楽しみになってきた。

スバル「頑張ってください、キリアさん」

月詠「もし上手く行けば、主がミッドチルダ一の発明家と呼ばれる日も遠くなかろう」

応援するスバルと、キリアがプラネテューヌ一の発明家として呼ばれるのも遠くはないと確信する月詠。

2人に褒められて照れるキリア。

銀時「じゃあまたな」
フェイト「お祭り頑張ってください」

銀時とフェイトはそう言い、銀時達は全員この場を去る。
そしてそれぞれ別々の宿に向かって別れると、スカリエッティが源外に話し出す。

スカリエッティ「源外君、彼は大丈夫だろうか？」
源外「なぁに、確かにまだ若者じゃが腕は確かな物じゃろ」
スカリエッティ「いやそうじゃない……確か彼はプラネテューヌ随一の天才発明家であるオルテラ・ファンテの一人息子で……オルテラは管理局に……」

スカリエッティがキリアの父の名を言い出すと、源外が深刻な表情を表す。

源外「スカリエッティよ……若者を成長させるコツはぁ、嫌な事に縛られずに前に進ませるだけよ」

かつて、復讐心に取り付かれた自分を思い出して言い出す源外。
それを聞いたスカリエッティが「違いない」とフッと笑って同感する。

ネプギア「いやなことに縛られず…ですか」

建物の陰できいたネプギア。

ネプギア「ですが、あの人はまだ捕らわれているままですよ？」

キリアを思い出して顔を俯かせた。

次の日

ついに迎えたゲイム祭の日。
夜の賑やかな風景に誰もが満足そうに楽しんでいる。
その中には守護女神たるネプテューヌ達が出席していた。
中でもメインは天才発明家のキリアのアンドロイドによるカーニバルであった。

そんな中でリーンボックスの治安維持組織『リーンボックス特命課』と、機動六課がゲイム祭で事件を起こさないように要注意に警備しなければならない。
そんな中、フェイトとなのはは……

銀時「……で、2人だけなんで着物？」

と銀時は2人に対して言い出すが、同時に少し見惚れていた。
フェイトのは紫色の無数の金色の蝶が描かれている着物で、なのはのはピンク色で少し紅めの桜の花びらが書かれている着物である。

フェイト「だって……こうしたほうが警備しやすいし……／／／」
なのは「それに、銀さんと一緒にいたほうがやりやすいから……／／／」
新八「完全にそっちが本命ですね…」

警備と言うのは表向きだけで、実は2人は今日銀時と一緒にゲイム祭を楽しむだけに張り切って着物を買ったのであった。
2人の姿を見た銀時は、いつもとは違う2人の雰囲気と色気ある和風美女とも思える存在に思わず見惚れていた。
なのははフェイトの様に髪を下ろしていた。

銀時「……ま……まぁ、似合ってんじゃねぇか／／／」

顔を真っ赤にして銀時は正直な感想を言い出す。
それを聞いた2人は凄く喜びだす。

フェイト「うふふ、ありがとう／／／」
なのは「にゃはは、凄く嬉しいの♪／／／」

フェイトとなのはは、左右に銀時の腕を掴んで抱き、体を寄せる。
いかに積極的な女が嫌いな銀時でも、思わぬ美女に抱きつかれる事に同様を隠せ切れなかった。
そして2人の豊満な胸が銀時の腕を挟んでいるのが分かり、彼は今でも理性を失いそうである。

一方のスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディート、猿飛は2人の積極的を見て強く羨ましがっている。

ラバーズ（（チクョウ！すんごく羨ましいいい

たが、機動六課は管理局の仕事が入って警備しなければならない。
それは機動六課の同盟を結んだナンバーズも例外ではなかった。
そこで2人だけが銀時と一緒に行動する権利を持ち、クジで決める事にした。
見事当たりを選んだのがフェイトとなのはであった。
選ばれなかった者は歯を食いしばって悔やむだけであり、特に猿飛にいたっては血の涙を流している。

ギルシア「あんな奴にもてられる女っていつもああなのか？」
レーティア「さぁね、そんなことよりあそこ行きましょ♪」

たばこを吸いながら銀時達を見ているギルシア。
そんな時レーティアがギルシアにくっついてどこかへ行く。
ちなみにレーティアの姿は紫に桜の絵が描かれている浴衣だ。

そんな中新八とジャンヌ、咲夜とユーノ、リアスとイッセーが警備（という名のデート）をしていたとか。
それ以外は普通に祭りの中をうろついている。

桂「ふ、相変わらず銀時の罪深さが見えてくるな」
はやて「そうやな、コレで更に増えたら面白いと言うのに♪」
リィン「そう言う問題ですか？」

桂とはやてはその様子を面白そうに言い出し、リィンは不自然そうに苦笑する。
ちなみにはやての姿も、水色で緑色の燕の絵文字が書かれている着物を着ている。
フェイトとなのはと並べられる程の和風美女となっていた。

桂「では、我々も行こう」

はやて「了解や♪さっき見つけた美味しいそば屋を見つけたから」
はやては桂の腕を抱いて、共に祭りを楽し……じゃなく周りの警備を開始する。

リィン「行ってらっしゃい」
エリザベス『2人とも楽しんでね』

リィンとエリザベスは2人の背中を見守って手を振るう。
一方のヴィータはそんな2人を複雑そうに見る。

ヴィータ「たく、あいつ等機動六課の仕事を忘れてるんじゃねぇか？」

と怠けている2人に呆れている。
しかし本音はどうして桂とはやてがあんなに仲が良いのか納得できなかった。
はやては家族の様な関係の為、大切な仲間。
桂は共に戦った仲間の1人であり、同時に好意を抱いている。
そんな2人の仲が最近徐々に良くなっていくのに、胸がもやもやしそうである。

タツマ「……ヴィータ、おんしはヅラと一緒行かんで良ぇんか？」

そんなヴィータに辰馬が話しだす。
実は以外にも、ヴィータが桂に好意を抱いている事を一番最初に知ったのも辰馬であった。

ヴィータ「な……なななな何言っていやがる！？／／／べっ別に私が……」

辰馬「今日は祭りじゃき～。楽しまな損ぜよ」
ヴィータ「いや、私達は警備の！」
辰馬「ほうか。じゃが、そん為におまんは自分の想い伝えずにそのまま燻らし続けるんかの？それは辛いだけじゃぞ？」

辰馬の一言でヴィータはだんまりになる。
いくら2人の関係を知ってでも何もしないで終わるのは嫌である。
しかし一体どうすれば良いのかヴィータには分からなかった。

辰馬「……とりあえず、もう少し積極的に行動してみるだけでもやってみたらどうじゃ」
ヴィータ「え？」
辰馬「恋を成就させるには少しでも好きな人の側におった方が良えんじゃ。その方が効率が上がるからの。じゃから…ヴィータ、おまんも少しでも良ぇからヅラの側におれ。おまん自身の為にものぅ」

辰馬が笑いながらヴィータにそう言うと、ヴィータも辰馬の言う通りに柱となるべく一緒にいる事を決意する。

辰馬「言いたい事も言うたし…そこの綺麗なお姉さぁ～～ん！わしと一緒にこの祭りを楽しもうぜよ～」

と辰馬が目の前に通ってきた美人な女性に飛びつこうとすると……

ドカァ！

ヴィータ「つーか、てめぇの場合ただ女を見境なくナンパしてるだけじゃねぇかァァァァァァァァァァ！！」
辰馬「あららぁ～～～～～～～～～～～～！」

額に青筋を浮かべて『グラーフアイゼン』で辰馬の頭を叩くヴィータ。
せっかくの彼の良い事言った雰囲気が台無しになってしまった。

シャマル「ちょ！……やりすぎだよヴィータちゃん！」
ザフィーラ「ヴィータ……気持ちは分かるが落ち着け……」

シャマルとザフィーラも、暴れだすヴィータを止める。

なんやかんやで機動六課の警備は全然薄かった。
しかし彼等はまだ気づいていなかった。
このゲイム祭でとんでもない事件が起こる事を。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

レシア「今回のアシスタントはレシア・エルダーがやります。正直この天パみたいな人と組むのは嫌ですが…」

銀八「殴るぞ!・・・ペンネーム『鳴神　ソラ』からだ。『バトン無理です!!ｍ（＿＿）ｍ

マリオ「そりゃあ流石に女性のはな…」

ルイージ「（違うよ兄さん;）」

スネーク「（作者は血の雨を降るのを恐れて無理なんだ）」

フォックス「ネプギア出たな」

クッパ「他のメンバーもなのだ」

明久「祭りってどんなのだろうね!」

ムッツリーニ「……あっちの料理も興味深いから行きたい」↑料理が趣味なので

ギル「ぷっ!」

ソロ「面白そうだな!なあ!パーティに俺を追加させてくれないか？」

マリオ「後から参加は出来るのか?…転生者組みに質問『ギルについてどう思う?』」

フォックス「ネプギア達妹組みに質問『マリオについてどう思う?』」

ルイージ「銀さん達に質問『ソロについてどう思う?』」

次回を楽しみにしてます♪』」

レシア「ギル?あのあの尖り鼻の雪だるまモドキのしゃべり方をする奴ですか?」

銀八「言い方ひど!?次!」

ネプギア「お姉ちゃんが言ってた赤い配工管の人ってこの人なんだ…」

ユニ「あれで1キロメートル先に崖を渡れるって噂だけどホントなの?」

ラム「キノコが大好きなおじさんかな?」

ロム「…オオボケのおじさん?」↑ラムからスーパーマリオくんを見て

銀時「あいつか?ソラの双子的な奴かと思ったな?」

銀八「そんなわけで『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

真王「それから参加は6人までなので参加できません。観客か応援としてなら出演できるかも?」

レシア「次だ。ペンネーム『ウィンド』さんからの質問です。『ウィンド「まさかネプギア達が出てくるとは……」
セレス「ネプギアってネプテューヌの妹だよね」
ウィンド「ああ。ゲームはまだ出てないけどかうつもりだ」
セレス「ふ～ん」
ウィンド「さて、勇華に質問うちの小説の男の娘であるセレスをどう思う？」
セレス「俺からも。銀さんに質問。もし高杉がデバイスをてにいれて魔導師になったらどう思う？」」』」

勇華「そっちの私がやってるなら私もやっちゃうわ？」

銀時「高杉が魔道士にだと？いやいやいや、ありえないって絶対・・・」

真王「可能性もあるんだぞ？『ウィンド』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。

しかし…いやぁ、食らった食らった…。（そういって、ちょっぴり苦笑いをする）

輝刃「…どうやら、裏で食らったようだな…ユウカの『胸挟み』を…（汗）。大丈夫だったのか？」

ああ…結構ユウカちゃんの胸の感触は上々だったけど、後はのほ～んと堪能させてもらいました♪（合掌）

輝刃「そ…そうか…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ネプテューヌ達女神陣を除く銀さん達に質問…ネプテューヌ達の世界に来た感想を言ってくれ。出来れば、何か裏話があると尚嬉しい…。

確かに、ネプテューヌ達の世界って結構近未来的な感じだもんな…。次は俺からだ。

2．新八に質問…ネプテューヌ達の世界の住人の中で『この人はついついツッコミを入れたくなってしまうな…』なんて人、居る？

輝刃「確かに、ネプテューヌ達の世界の住人ってネプテューヌ達を含めて個性的なキャラがいっぱい居るからな…。これは新八もツッコミの連続で疲れそうだな…（汗）。」『な、長い…、とりあえず答えようか」

全員「なんでもありだなと思った」

新八「突っ込みどころが多いと言う人と言えばラムちゃんぐらいです」

ロム「ラムが大好きなの？」

新八「いやいやいやそんなんじゃないですって！！」

真王「またロリ疑惑フラグが…、『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

レシア「次はペンネーム『黒龍』だ。『黒龍「ついにネプテューヌ達の故郷、ゲイム業界が登場ですね」

銀時「元々この小説はネプテューヌと銀魂とリリカルなのはが基礎だからな。出てもおかしくないだろ」

ソラ「近未来か…」

黒龍「ブランの場所以外は住みやすそうですね」

銀時「ベールの所も住みにくそうだろ。頭固いクソガキいるし」

黒龍「あっちの銀さんかなりけなされてましたもんね」

銀時「たく、胸糞悪ィ」

黒龍「ハハハ……じゃあ質問しますか」

1．マヨ方達を最近まったく見てないですけど、蒸発しましたか（黒笑）

2．女神四人に質問。あなた達の故郷ゲイム業界で最強の人は誰ですか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『あの黒集団は消えていないぞ？」

真王「彼女達の中で今のとこ強いのはネプテューヌです。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

レシア「次だな。ペンネーム『亀鳥虎龍』だ。『銀さん、神楽、そして駄眼鏡に質問。

僕の小説『銀魂ライダーディケイド』では、仮面ライダーに変身できます。
嬉しいですか？

沖田に質問。
土方抹殺計画を建てたいなら、良い企画書があるんですが、見てください。

1．土方の食事だけこっそり毒を盛る。

2．土方に言われもない無実の罪を着せて、死刑にする。

3．土方の恥ずかしい写真をバラまく

ユウカと一緒に実行してみて下さい。』駄眼鏡とはなんだ？・・・ああ、あの新八という男か」

銀時「何がだよ！！何でコスプレなんだよ！！」

神楽「お～！かっこいいアルな！！」

新八「駄目ガネ言うなこらぁァァァァァァァァ！！！！」

真王「次だ」

ユウカ「3番ね。羞恥心を噴出させる方が苦しみがいがあるわ」

沖田「そりゃ盲点でしたぁ」

土方「させるかこのやろォォォォォォォォ！！！」

真王「あ～あ、『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい。最後、ペンネーム『黒神』さん。『質問します。

ネプティーヌへ

リリカル銀魂ゲスト杯に参加して、他のリリカル銀魂メンバーとゲスト達の力量を見てどう思いましたか？
その感想をお願いします。』」

ネプテューヌ「イヤホント個性的だけどみんな強いね。私も負けてられないよ」

真王「では『黒神』さん。廊下に立ってなさい。そしてネプテューヌを優勝させなさい」

レシア「次はあの変態馬鹿がやるな…」

ヤルオ「ヤルオっていってほしいおｗｗｗｗ」

真王「あとバトンです」

『ボッスンさんから貰いました夏・シチュエーションバトンです。

このバトンのルールは

1、必ず二人でやること
2、夏に関係のあるものですること（例、プール、海、夏祭りなど）
3、二つ以上すること
4、必ず一人にまわす（送り返しも可）

こんな感じです。では始めます。

ジャンヌ×新八（肝試し）

ジャンヌ「なんだか怖いね新八君…（と言いながら密着している）」
新八「そ、そうですね…（メッチャくっついてるんですけど!?アレが当たってるんですけど!?）」

ガサガサ

銀時「悪い子はいねーかぁぁぁ!!!」↑落ち武者スーツ
新八「って違うだろォォォォォ!!!そのセリフナマハゲじゃねぇか!!怖さが吹っ飛んだわ!!」
銀時「うるせぇ!!メガネのくせしていい彼女作りやがって!!」
ジャンヌ「銀さんだっていい彼女達が出来てるじゃん。ハーレムだよ」
銀時「そんなことよりお前が地味のままでいて欲しいんだよ!!」
新八「完全に悪意があるじゃないですか!!」
銀時「うっせぇぇぇ!!地味地味らしｋ「銀時～～♪」来るなぁァァァァァァァァ!!!」

銀時はサチコから逃げだした。

新八「と、とりあえず行こうか」
ジャンヌ「うん？」

ギルシア×レーティア（同じく）

ギルシア「これで肝試しか？」
レーティア「こんな感じだから肝試しなのよ」

移動中、全裸でトゲつき鞭で逆さに縛られているアルテスがいた。

ギルシア「・・・なにやってんだ？」
アルテス「ユウカ様が考え出した脅かし法です？」
レーティア「ブラッディ１００％じゃあ誰か逃げちゃうわよ…」
ギルシア「それに男共が写真撮ることもあるぞ」
アルテス「ハッ！？盲点だった！！」
ギルシア「んじゃ勝手にやってろ」

このバトンは鳴神ソラさん、ケンさん、風花さん、支配者さん、天城さん、黒神さん、黒龍さんで。』

真王「では」

第八十七訓：人間とアンドロイドは似てて違う（後書き）

真王「次回はお祭り騒ぎ！でも事件発生！」

ヤルオ「次回『仇をとるなぞ復讐者がやること』テイクオフだおｗｗｗｗ」

第八十八訓：仇を取るなぞ復讐者がやること（前書き）

真王「今回またゲストキャラが出る」

銀時「どんだけでるんだよ！！」

第八十八訓：仇を取るなぞ復讐者がやること

ゲイム祭のとある屋台

ネプテューヌ「あのバカ女め～、いつかぶったおす！」
ネプギア「そ、それは駄目だよ…」

フェイトとなのはの警備命令の利用による銀さんダブルデート行動に、２人を羨ましがる＋嫉妬するネプテューヌと制するネプギア。
なぜネプテューヌがここにいるかというと実はこっそり抜け出して少し祭り気分を味わっているのだ。
ちなみにノワールとブランとベールは分ってながら見逃している。
そこにキリアが苦笑して話しかける。

キリア「あはは……随分と好きなんですね。銀時さんの事」
ネプテューヌ「！？／／／」
ネプギア「？」

突然、銀時に好意を持っていることを言われてキュンと驚くネプテューヌと首をかしげるネプギア。
実際ネプテューヌはすでに銀時と接吻（キス）している。
しかしそれは銀時との２人だけの秘密。憧れから愛する人へと変わっていったのだ。

ネプテューヌ「い、いや～・・・そ、そんなつもりじゃあ・・・／／／」
キリア「あはは、顔を真っ赤にしてまで必死で隠そうとするその動揺がその証さ♪」
ネプテューヌ「うう～／／／」

更に顔を真っ赤になるネプテューヌ。
キリアはネプテューヌの隣に座って酒を飲み始める。

キリア「それにしても、まさかネプテューヌさんがあのプラネテューヌの女神様だったなんて……」
ネプギア「お姉ちゃんの事知っているの？」
キリア「はい……僕のアンドロイド技術を最も感動してくれた人で、あの人のお陰で今の僕がいるんです」

ネプテューヌを知っている事に驚くネプギア。
ネプテューヌは少し照れている。
そこに店の店員らしき人物があるものをスバルに差し出す。

店員「へいお待ち！」

それが出た時、ネプテューヌは凄く喜び出す。

ネプテューヌ「きたー♪」

メッチャ喜んでいる彼女に、キリアはできる限り顔に出さないようにしていたがそれでも嫌悪感は出てしまう。
何故ならその物体は……丼に入っているご飯の上に、カラフルに大量のなんかトッピングが山盛りに乗っている。
恐る恐るにキリアはネプテューヌに訊く。

キリア「……ネプテューヌさん、何ですかコレ？」
ネプテューヌ「ご飯にトッピングタップリ乗った特別メニュー、『スーパーネプ丼』だよ……食べてみる？」
キリア「い……良いです……」

苦笑しながら断るキクナエ。
それをお構いなしにネプテューヌは『スーパーネプ丼』を美味しく頂く。
キリアはネプテューヌの味覚がどうなっているかを疑いだす。
ちなみにネプギアもネプテューヌと同じものを食べていたの更に驚くのも別の話。
そしてノワール達女神組（教祖組は除く）もスーパーネプ丼を食べた経験があったのもまた別の話。

そしてネプテューヌが『スーパーネプ丼』を完食した後、ネプテューヌはキリアと話しをする。

ネプテューヌ「そう言えば、ファンテで思い出したんだけどオルテラって知ってる？」
ネプギア「オルテラ・ファンテ？確かプラネテューヌの天才発明家でクソマシンオブサイヤーを3回優勝したあの人？」
キリア「親父は……僕が尊敬するほど優秀な発明家でした……しかし親父も15年前に事故死で……」

キリアの父親も事故によって亡くなっている。
ネプギアは思い出させてはいけないのを思い出させたことに慌てだす。
だがキリアは暗い雰囲気を打ち消すかのようにネプテューヌにある事を訊く。

キリア「そう言えば、僕昔親父から貴女の事を聞かされました……何でも違法なる研究をしていた『P（プロジェクト）・H事件』を解決なさったんで

すよね。貴方のサーラ・ゲイス率いる『プラネテューヌ特化部隊・ネプテューナーズ』と共に…」
ネプテューヌ「……」

P・H事件とサーラの名を聞いて表情を曇らせるネプテューヌ。
ネプテューヌが以前（ネプ銀編の『第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい』より）銀時達に話したあの事件を思い出しているのだ。
そして、かつてあそこでたくさんの友達が出来て、そして失ったあの事件。

ネプギア（お姉ちゃん……）

ネプギアは聞かされたため悲しそうな表情をする。

ネプテューヌ「解決したとしても、結局犠牲になった人たちは戻ってはこない。世界ってのはそう言うもんだよ…」

握る手がギリギリと音がする。

ネプギア「お姉ちゃんはあれ以来部屋にふさぎこんでいました。救えなかった人がいたことで、凄く泣いていました。……でも気付いたんです。どれだけ後悔して嘆いても誰一人護れやしない。どれだけ無力さを噛みしめても誰一人救えやしないんだって。だから…お姉ちゃんは死んだ人たちの分まで生きて多くの命を護ろうって誓ってるんです。それが死んだ人たちに対して出来る事だからだって」
ネプテューヌ「ネプギア、ちょっとくすぐったいよ…」

ネプギアに嬉しそうな顔で突っ込むネプテューヌ。

キリア「仇をとろうとは思いませんか？」
ネプギア「！？」

突如、仇を討つ事を進めるキリアに驚くネプギア。

キリア「死んでいった中にもかけがえのない者もいたはずでしょ…
…その人達の為にも敵を討とうと思った事はありませんか？」
ネプテューヌ「キリアさん」

ネプテューヌがキリアを睨む。

ネプテューヌ「たとえ大切な人がいたとしても、『ただの復讐鬼に
なって人の被害を考えない人』になるつもりはないよ」

その瞳と言葉はどういう意味なのかキリアはしることはなかった。

キリア「あ、申し訳ございませんが最後の調整があるので……僕は
コレで……」

キリアはお金を置いて急いでこの店を出る。
しばらくしてネプテューヌもお勘定して店を出てノワール達のとこ
ろへ戻ろうとする。
だがネプテューヌは彼女を見ていた人物に気付くことはなかった。

赤みがかった黒色で左右にツインヘアーしていて背後にロングヘア
ーのような背中に届くぐらいのサラサラとしたロングヘアー並みの
長さをした紅色の如くの瞳。
漆黒ともいえるミニスカートで細長い足を太ももの部分まで隠せる
ほどの黒くて長い靴下。
そしてスバルとティアナ並の豊満な胸の大きさ。

彼女はネプテューヌを見てこの場を去ろうとすると、ネプギアは気になって彼女を追いかける。

???「やっと見つけたよ…ネプテューヌさん…」

その少女はこうつぶやいて人ごみの中へ消えた。

ネプギア「今の人・・・もしかして…？」

ネプギアは思い起こした。
かつて『P（プロジェクトド）・H事件』のネプテューヌの生き残りを…。

射的屋台

レオン「んお？射的か…」

レオンが言って同行していたガレーナ、タバネ、イッセー、リアス、ナリアも見る。
だがよく見ると、

九兵衛「おや、こんなところで奇遇だなぁチ●コ？」

ピク！

チンク「チン……おやぁ？そう言う貴様こそ人の名前を間違えるほ

ど頭が老けてきたのか貧兵衛？」

ピク！

九兵衛「ひん……き……貴様の間違いはわざとらしく感じるが？」

チンク「間違えてやっているのさ貧乳眼帯」

九兵衛「まだそう言うか？……ロリ眼帯」

互いに鋭い睨め合いをして火花を散らす九兵衛とチンク。

チンクと同行していたセイン、セッテ、ウェンディ、ディードはチンクの対抗心には怯えていた。

ここまで相手を睨むチンクの姿が見た事がないからである。

九兵衛もチンクに対する対抗意識が異常なまでに怖かった。

まぁここであの左目眼帯のＩＳ使いでも出たらさらに混沌になるけども。

ガレーナ「何をやっておるのじゃ？」

ガレーナはそんな二人の負のオーラにまったく臆せず近寄る。

ウェンディ「あ、ガレーナの姉貴、じつはかくかくしかじか・・・」

ガレーナ「チンクが射的やってたところを九兵衛が対抗してきたと？」

ウェンディの説明に納得するガレーナ。

つーかアレで分かったのは凄いものだな。

ガレーナ「まぁいい。で、結局二人はなにが取りたかったのじゃ？」

チンク・九兵衛「おじさんの身ぐるみ」

店主「ちょっとォォォォォ！！！」

チンクと九兵衛が物騒なこと言ったので店主が突っ込む。
しかもこの店主やられた後なのかボロ着いている。

チフユ「バカ者！」

ベシッ！！

たまたま通りかかったチフユが2人に教簿板で叩いた。

チフユ「射的の球を人に向けて撃つな！失明でもしたらどうするつもりだ？」
チンク「その時は貧兵衛が責任を持つ」
九兵衛「いやチ●コが・・・」
チフユ「仲良くやれ…（鬼の殺意）」
チンク・九兵衛「アイサァァァ！！」

チンクと九兵絵が喧嘩しかけたところ、チフユのにらみと殺意によって2人は肩を組んで楽しく（している感じにして）走っていった。

イッセー「あ、相変わらずだね。チフユさんの鬼魂…」
リアス「特にチフユバスターは受けたら昇天される代物だからね」

セイン、セッテ、ウェンディ、ディード
（一体どんな技なのォォォォォォォォ！！！！？？）

イッセーとリアスは冷や汗を流し、セイン、セッテ、ウェンディ、ディードはなのはのディバインバスターみたいな砲撃を放つと想像して顔を青くする。
実際のチフユバスターは分厚い辞書を片手で頭に一撃を与える技で

ある。
これがとても痛い攻撃だ。

ガレーナ「店主よ。余も射的を頼みたい」
店主「おう、やってみな」

ガレーナはクレジット（ゲイム業界のお金らしい）を払って射的に挑戦する。

リアス「ガレーナはどんなのを選ぶのかしら？」
イッセー「面倒なことにならなければいいが…」
チフユ「まぁあの戦闘馬鹿には（チラッ）何を言っても無駄みたいだからな（チラッ）」

リアスは興味を示し、イッセーは不安になる。
チフユはさっきから後ろをちらちら見ている。
視線の先には仲良く肩を組んでいるチンクと九兵衛。
視線を外せばにらみ合うが、チフユが見ればワイワイと仲良く肩を組む。

ナリア（まるでフェアリーテイルのグレイとナツとエルザの関係だね…）

ナリアはこの光景を見てそう思った。
そしてガレーナが銃を構えて、

ドンッ！！バーン！！

大きなくま人形を破裂させた。

この場にいた全員「・・・・・・・・・は？」

もちろんこの場にいた全員が唖然とする（レオンは除く）。

レオン「おいガレーナ、狙って撃ち落とすものだが破壊しろという意味じゃないんだぞ？」

ガレーナ「そうなのか？余はてっきり…おもわず覇気を使ってしまったぞ？」

ガレーナは射的を知らなかったらしい（銃撃戦の知識ぐらいはある）。

メテンズギルド組はやっぱりかと頭を抱えることになった。

ちなみに店主は気絶した。

一方、

ヴィヴィオ「ねぇねぇ！これ似合うかな～！」

プリニー「…不気味感があるッス」

ヴィヴィオがお面をかぶってプリニーがコメントを漏らす。

勇華「お面なんてほとんどそういうものよ」

グレイ「俺はこんなとこは好きじゃない」

ビビ「まぁまぁ・・・」

一緒についてきた勇華はそういい、グレイは帰りたがり、ビビ（ち

なみにスリムボディのまま）が押さえる。

ヴィヴィオ「あ、金魚すくいがあるよ」

ヴィヴィオが金魚すくいの屋台を指差す。

プリニー「挑戦するッスか？」

ヴィヴィオ「うん！！」

ヴィヴィオは金魚すくいに挑戦した。

で・・・

ヴィヴィオ「・・・（´・ω・`）」

プリニー「つ、次こそは頑張るッス…」

ビビ「そ、そうよ、そんなにしょげないでヴィヴィオちゃん…」

結局取れずにものほしそうな顔をするヴィヴィオにプリニーとビビが励ます。

？？？「はい」

すると目の前に5匹の金魚が入った水袋が、持ってきた人はまるでおとボクの瑞穂をライトブルーの髪に碧目にした感じの人物だ。

ビビ（何だかおとボクの人物に似ている奴がいるんですけどォォォ

オオオ！！？）

ビビはその人物を見て内心驚いていた。

ヴィヴィオ「あ、ありがとうお姉ちゃん」

？？？「お、お姉ちゃんって…俺男なのに…」

？？？「綺麗だからね、エールは…」

ヴィヴィオがお礼を言うが、お姉ちゃんと呼ばれて若干ショックを受ける少年。

それを補足するように言う髪型は黒髪の超ロングにハイライトがない青い瞳の少女。

グレイ「それで？“そんななりして祭に参加している”お前らは何だ？」

グレイは“お前らの正体を知っている”様な目で2人を見る。

2人はやれやれなしぐさをしていった。

エール「そうだね。僕はエール」

コヨリ「私コヨリ」

ヴィヴィオ「エールおね…お兄ちゃんとコヨリお姉ちゃんだね？」

ヴィヴィオが一瞬エールをお姉ちゃんと言いかけたが訂正した。

エール「ここに来たのは単なる面白そうだからかな？」

勇華「ふ～ん、じゃああの二人は…」

勇華が別の方へ向く。

ヴィヴィオ達もそっちへ向くと、

???「んだよ、たったの４５６ポイント？ならもっと力入れて…」
???「って待ってよ、そんなことしたらマシーンが壊れるからメア；」
メア「目指せＭａｘポイントだ！！みとけよセレス」
セレス「聞いてねぇし！！」

膝まであるピンク寄りの髪に赤目。異常なまでに美少女でどこからみても男に見えない少年・メアがグローブをつけてパンチマシーンに挑戦している。
それを膝まである灰色にサファイア色の瞳、服の上は青と黒を混ぜた色で肩は露出し、下は黒い長ズボンをはいている青年・セレナが制するも聞いてないようだ。

グレイ「…何だあいつらは…？（あの灰色の奴…ただものじゃねぇな…）」
勇華「へぇ～（あの人、わりと好みのタイプね…）」
ビビ「なぜパンチングマシーンが！？・・・あ、プラネテューヌがあるから？」

上記三人はそんなことを思いながら見ていた。

一方、スカリエッティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェ、土方、近藤、沖田、山崎はイストワールの頼みでネプテューヌ達の護衛を任された。
ちなみに近藤たちは祭りがあるとウェンディから誘われた。

しかしクアットロと山崎はネプテューヌがお好み焼きが食べたいと言う理由でお好み焼きを買いに行った。

ノーヴェ「たくぅ……なんでアタシ等ナンバーズが護衛をしなきゃ行けねぇんだよ？」
ドゥーエ「しょうがないでしょ、私達は機動六課と同盟を結んだ関係だから機動六課の仕事を一緒にやらなきゃいけないから」

ノーヴェの納得のいかなさにドゥーエが落ち着かせる。

ドゥーエ「それにねぇ、ここはあのメインイベントのキリア作アンデロイドの美しき舞『百花』が良く見られる特上席みたいな場所だし」
トーレ「怠けないでくださいドゥーエ姉様！」
ウーノ「そうよ……こんな時に鬼兵隊が攻めて来たらとんでもない事が起こるわよ？」

ドゥーエの気楽さに呆れるトーレとウーノ。

土方「しっかし、あの馬鹿が有名人ってのもどうかと思うな」
近藤「そういうなトシ。万事屋は有名に成りたい訳じゃなくともなってしまったんだよ」

土方がタバコを吸いながらそういい、近藤が補足する。
確かに彼によって数多くの事件は解決されたから、彼ならやりかねないだろう。

土方「・・・にしても山崎遅ぇな。たこ焼き買うのに何時間掛かってんだ？」

土方が時計を見ながら山崎を待っている。
そこに……

クアットロ「お待たせ～♪」
山崎「副長、お待たせしました！」

急いでこっちに走ってくるクアットロと山崎。
両手にはお好み焼きとたこ焼きが入っている箱を持っていた。

トーレ「遅いぞクアットロ！ちゃんと買ってきたのか！？」
土方「オメーもだ山崎！何やってたんだ？」

トーレがクアットロの持っているお好み焼き、土方が山崎の持ってるたこ焼きが入った箱を取り上げ、その箱の蓋を開けると……やく半分食べられた状況のお好み焼きとたこ焼きがあった。

クアットロ「御免ねぇ、何かそこの野良犬が飛び込んできてお好み焼きを食い込んできたのよ……この？４のクアットロ、一生の不覚ね♪」
山崎「すみません、僕も同じく野良犬にやられまして、この山崎退、一生の不覚です」

とクアットロは笑って、山崎も謝罪するが……二人の口元には大量の青のりが付いている。

トーレ「そうか……私はその口元についている青のりの方がが一生の不覚だと思うが？」
クアットロ・山崎「（ギク！？）」

トーレの鋭い眼線で見られ、図星を突かれるクアットロと山崎。

ウーノ「クアットロォォォォォォォォ！」
トーレ「この馬鹿者ォォォォォォォォ！」
土方「山崎ィィィィィィィィ！！」
ノーヴェ「何頼まれている物を勝手に食ってんだァァァァ！？」

ウーノ、トーレ、土方、ノーヴェの４人は激怒してクアットロと山崎を容赦なく蹴りだす。

クアットロ「痛たた！これは違うって！途中で食べた、たこ焼きの青のりよ！」
ウーノ、トーレ、土方、ノーヴェ『『どっちでもいいわぁ！（怒）』』

ドカァ！

クアットロ・山崎「ヘブゥ！」

クアットロの言い訳でウーノ、トーレ、土方、ノーヴェの４人は怒り出して渾身の蹴りを炸裂させ、クアットロと山崎を気絶させる。
ディエチが「山崎さ～～ん！！」と涙を流す。

トーレ「どうするドクタ……てか食っているし！」
土方「近藤さんも！？ってかなんでオメェらもいるんだよ！」

ウーノ、トーレ、土方、ノーヴェの４人がクアットロにお仕置きしている中で、近藤、スカリエッティ、ドゥーエ、いつのまにかいた神の４人は残りのお好み焼きとたこ焼きを食べている。

スカリエッティ「別にいいではないか、今日は祭りだから無礼講で

行こう」
神「そうそう……にしてもこのたこ焼きもいいなぁ」
スカリエッティと神は気楽そうに言い出す。
神「それに今日はキリアって奴の機械技術が披露されるイベントもあるそうだな？黙ってみとけばいいかもな？（・・・レヴェッカもつれ行ったほうがよかったか？）」
トーレ「だからって、我々は――」
ワァアアアアアアアア！
観客達が突如、歓喜に叫びだす。
何故なら部隊には数多くの着物を来た女性型アンドロイドが現れて、その中心部にはキリアが着物姿で立っている。
神「おお、ついに始まるか！」
近藤「あれが天才発明家、キリア作のアンドロイド……なんとも美しい、まるで人間そのものだ！」
観客達もかなりの高い評価でキリアのアンドロイドを褒めまくる。
そしてアンドロイドの踊りが始まる。
人間そのものの動きに連係しあうその華麗な動きは誰もが見惚れてしまう程であった。
そこには、フェイトとなのはも見惚れている。
しかし彼女等は先ほどまで銀時と一緒にいたはずだが、銀時がフェイトとなのはの分を含め、綿菓子を買いに行ったのであった。
なのは「うぁあああ、綺麗な舞だね、フェイトちゃん！」

フェイト「うん！アンドロイド技術をここまで上昇させたキクナエさんって凄いよ」

キリアの予想以上の技術の高さは2人も認めるほどである。
誰もがアンドロイドの舞を見惚れる中、この時まだ知らなかった。
この『ゲイム祭』が地獄の祭りに変わる事を。

一方の銀時は、綿菓子を買い終えて急いでフェイトとなのはの所に向かう。

銀時「やっと見つけたよ綿菓子売ってるところ……そろそろキリアの機械（からくり）ショーが始まる頃だなぁ」

今通っている所は人気のない場所である。
誰もがキリアのアンドロイドの踊りを注目して向かっているため、1人もいないといっても良い。
あと少しでフェイトとなのはの所に到着する中……

？？？「おいおい、せっかくの祭りだってのに随分と寂しい所にいるじゃねぇか？」
銀時「！？」

突如の背後からの一声に銀時は驚きながら後ろを振り向く。
その瞬間に、黒い獣の刃が銀時を襲うが銀時はその斬撃を交わす。
しかしせっかくの綿菓子3つがまっ二つに切れた。

高杉「くくく……良くかわしたなァ？やっぱ『白夜叉』となると反応が違う訳かァ？」

男は不気味な笑いをして銀時を見る。
黒い獣のような鋭い眼線に右手に持っている鍔無き刀。
そして派手な着物に左目の部分に包帯を巻いている。
その男、『鬼兵隊』のリーダーである高杉晋介が銀時の前に再び姿を現した。

銀時「なんでてめェがここにいやがる？」

怒りに篭った眼で高杉を見る銀時。
その覇気は『白夜叉』としての存在に近いほどである。

高杉「せっかくの祭りだから、どんな面白い祭りをしてんのか見に来たら……まさかここでてめぇと再会するとはな」

祭り好きな高杉は、『ゲイム祭』に強く興味を持っている。
そこでどんな祭りをするのか見に来たら、まさか銀時がいるとは高杉も驚いていた。
だとすれば、桂もいるのではないかと確信する。

高杉「実はな、先日今回の祭りの目玉の機械（からくり）ショーをやるキリアって奴に会ってよォ…コレがまた粋の良い獣を飼っててな。【牙】を突き立て様と今か今かとのたうち廻ってるじゃねぇか……」
銀時「高杉……まさかテメェ」
高杉「まぁ…黙って観とけ。コレからすこぶる愉しいショーが始まるぜ。父親を奪われた息子の派手な血の祭りがな」

アンドロイドのカーニバルが終わると、観客から盛大な拍手が送られる。
キリアはアンドロイドと一緒に頭を下げる。
そして大きな特上席で拍手を送っているノワールたち。

ネプテューヌ「・・・・・・・・・」

ただネプテューヌは怪しそうな目で拍手している。
ノワールたちも同じだ。
そしてキリアが特上席に団扇を向けると……

キリア「紅桜……機動！」

キリアの命令にアンドロイドは突如、右腕から巨大な紅色に輝く巨大な刀が現れる。
それを見たフェイト、なのは、源外、スカリエッティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェ、土方、近藤、沖田、山崎が驚きの表情を表す。

キリア「狙うは守護女神（ハード）の首なり！」

そして紅桜振られ、ネプテューヌたちのいる特上席へ魔力刃が放たれた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ヤルオ「今回はヤルオがアシストするおｗｗｗｗ」

銀八「こんな変態と組むのはどうかと思うが・・・まぁいいか。ペンネーム『フリーダム』さんからの質問だ。『初めましてです。Sフリーダム「しかし、銀時ってモテてるな」∞ジャスティス「１３人にフラグたてたんだからな」デスティニー「でも、ネプティーヌも確か、銀時に好意を寄せてたよな？」レジェンド「そうだったはずだが…」デュエル「しかし、ヴィータも素直じゃないな」

バスター「性格上仕方がないでしょ」

アカツキ「まぁ、とりあえず質問に行こうか」

はやてに

もし自分以外に、桂に好意を寄せる女が現れたらどうする？

銀時ラバーズに

いつ誰が銀時の初めてを奪うの？

デスティニー「おい…これお前個人が聞きたいだけだろ！？」

アカツキ「良いじゃないか、面白そうだし」

Sフリーダム「アカツキ…お前は、銀時の修羅場を見て楽しむ桂とはやてか…」

更新楽しみにしてます』おお、初めての奴だな」

はやて「そのときは抹殺するで？」

グリーンハート「はやてさん？それはどういう意味ですか？」

はやて「それｈ・・・ってギャアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！（連れて行かれた）」

真王「無視しろ。次」

ラバーズ「もちろん私（だよ）（だ！）（です）！！」

真王「収拾つかん。『フリーダム』さん、初めての質問ありがとうございます」

ヤルオ「次はペンネーム『リィーン』だおｗｗｗｗｗ『ど、どうも。更新、お疲れ様です……………

は、はい………前回は生意気な事を言ってしまって、大変申し訳ございませんでしたッ！！！！！

神「おい。まずは言う事あるだろうが」

旅人「阿呆が………まったく、たかが趣向の違い云々で、何を叫んでいたのやらか」

前回は、その………つい、頭に血が上ってしまい………ホント、ご迷惑をおかけしてしまい、本当に済みませんでした

m(__)m

神「ったく………まぁ、アァなる気持ちも、分からんでもないがな」

……………

旅人「しかし………ここはなんだ？　戦いの匂いがまったくないな」

神「ここは結構平凡だぜ。まぁ、お前にとっちゃぁ、暇な場所かと思うけどな……つか来るなよ。お前が来たら、ここの六課隊舎、つかミッドチルダ自体が壊滅の危機に陥るからな。戦闘の余波で」

旅人「安心しろ。星すらも消し飛ばせば、証拠隠滅になってちょうどいいだろう」

神「良くねぇよッ！！！！」

ま、まぁ……本当に、色々と申し訳ございませんでした

では、次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張って下さい！！　失礼します！！！

神「ばいば～い！！」

旅人「またな」

で、あの～、一つ質問を

神「あるのかよ」

えぇ。ちょっと気になる事が

・今回のゲイム祭編、具体的に何をする予定なのですか？　ネタバ

レに繋がるのならば、答えなくても構いません

神「あぁ。あんまり先が見えないもんな」

えぇ。なので……』黒神の銀園祭をアレンジったものだよｗｗｗｗ」

真王「『リィーン』私は別にきにしてないッス。次はペンネーム『鳴神ソラ』だ。『マリオ「うう～む…」

ルイージ「どうなるんだろうね…

ギル「ぷっ？」

フォックス「どうなるんだ祭り！！」

スネーク「新たなライバル登場か！」

ネス「転生者組みに質問『ソロが怪獣を出した時はどうだった？』」

リュカ「同じく質問です『マリオさん、冥王さん、銀次さんの３人で戦いたくない人は誰ですか？』」

ソロ「応援で行くぜ！それで銀時に質問『リアス達の中でツッコミ所満載と思う奴はいるか？』」

リュウケンドー「俺も応援で」

フォックス「応援と言う名のツッコミで行こう」

スネーク「俺も」

ギル「ぷっ♪」

リュウケンドー「ギルも応援だって」

次回を待ってます！』転生者組みは驚いたけどそんな能力を持つ転生者もいるようだと。そして銀次です。なんせ能力が無になっちゃうからな」

銀時「どれも突っ込み所満載だよ！とくにヤルオがな！」

ヤルオ「ほめ言葉として受け取るおｗｗｗｗｗ。『鳴神ソラ』さん、廊下に立つおｗｗｗｗ。次はペンネーム『月光閃火』だおｗｗｗ『ども…月光閃火だ。

しかし…バトンのヤツのでのアルテスの姿…とりあえず眼福モノでした。（合掌拝）

輝刃「…男の群れに揉みくちゃにされるな…きっと（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ネプテューヌ達の世界の住人に質問…銀時の『宇治銀時丼（ご飯の上に小豆がこんもり）』と土方の旦那の『土方スペシャル（ご飯の上にマヨネーズどっちゃり）』…正直言って、“どちらか一つは必ず食べなきゃダメ”と言われたらどちらを選ぶ？

ハハハ…どっちもさすがに胃が本能でキツいと感じるからな…（汗）。次は俺からだ。

2．ユウカに質問…此処に俺謹製の『豊胸薬』と『貧乳薬』がある。もしこれを使うとして、それぞれ誰に使いたい？

輝刃「…閃火…まだそういう薬を作っていたか…（汗）。お前の薬は時にハプニングの火種になりかねんからな…（汗）。」『」

ネプテューヌ組「小豆のほうで！」

ユニ「あたしはマヨでもいけるわ」

ユウカ「『豊胸薬』と『貧乳薬』はなんに使うかは秘密よ♪」

真王「教えろよ。『月光閃火』さん、廊下にたってなさい」

銀八「へい次、ペンネーム『ウィンド』さん。『ウィンド「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！ついにセレスと勇華がニャンニャンしました！！」」

セレス「逆に疲れたけどね……」

ウィンド「だけどかいた自分が言うのも何だけど勇華があそこまでヤられるとは……」

セレス「別にいいんじゃない？本人は気持ち良さそうだったし」

ウィンド「あれを気持ち良さそうで済ますか？勇華の奴中毒になるぞ……（汗）」

セレス「勇華だから大丈夫じゃない？」

ウィンド「さいですか……さて、俺は質問じゃなく警告だ。そっちの勇華。気を付けろ。こいつとヤるなら覚悟しとけ。マジでヤバイぞヤったら最後こいつしか考えられなくなるから」

セレス「何いってるんだか……二つ質問。１、俺の召喚獣にかてる？『アカムトルム、ウカムトルム、エンシェントドラゴン』２、ネプギア達へ。銀さんのことどう思う？こんなかんじかな？あと新八。

遅いけどおめでとう。幸せになりなよ。これでオタクから卒業できるな。あとネプテューヌ。変身して銀さんとデートでもしてきたら？ちょっとでも好感度上げられるかもしれないよ。その時は銀さん。ちゃんとエスコートしてあげなよ？じゃ」』いや、作者まだ分からんので答えれられません」

ネプギア「この人がお姉ちゃんの思い人かな？」

ユニ「ただのおっさんじゃない？」

ロム「ロリコンさん？（まだ疑惑を持っている）」

ラム「ロリコンだね絶対！」

真王「『ウィンド』さん、とりあえずエスコートありがとう。・・・あれ？もう一つあるわ。『セレス「あれ？作者は？「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！」！？」

ウィンド「エール、コヨリ！神速で斬撃とばすな！！お前ら加減知らないのか！？え？早く続きかけ？今無理ってギャアアアア！！！さっきよりもヤバいぃぃぃぃ！！は！メア？どうしたってそんな数万の砲撃と衝撃波避ける訳ないだろってアアアアアアアアアアア！！！」

チーン

セレス「……死んだ。ん？」

ウィンドだったナニカ［紙を渡す］

セレス「ん？かわりに質問頼む？はぁ……じゃあ質問。ネプテューヌに質問じゃなくて追加。リリスのボディアップを使えばいいよ。あと銀さんに質問。魔導師になった気分は？もうひとつ。リリカル勢に質問。召喚獣でこいつにかてる？［黒竜、白竜、竜王、竜神］こいつらは俺の召喚獣中最強だから。後真王さん。早めに俺達出し

てエール達の機嫌直して。じゃないと作者が死ぬ。それと勇華に質問。気になる異性はいる？「クイクイッ」ん？」

ウィンドだったナニカ「嫉妬？」

セレス「……」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！（リベリオンで斬り飛ばされた）

ウィンドだったナニカ「アアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

セレス「嫉妬じゃない……と思う……／／／／」『お～い、大丈夫か～？」

銀八「ウィンドさーーーーーーん！！！何があったんだーーーー！！！」

真王「何があったか知らんが（理由は分かるが…）銀時は魔道士になっても侍道を通したいそうで。そしてそのドラゴンズはリリカル組勝てそうにないと言ってました。最後勇華」

勇華「今のとこいないわ」

真王「だと。次だ！ペンネーム『ケン』さん。『始まりましたね。祭りの日が・・・

統夜「Ａｎｄｒｏｉｄって凄いよな」

優子「いや・・・それはスマートフォン等の端末を主に開発されたプラットフォームだから・・・アンドロイドだから」

統夜「分かっているが・・・やってみたかったんだよ。守護女神達に質問だ。全てを絶望へ誘う俺の蒼炎はどう思う？」

転生者達に質問です。屁怒絽様に勝てる自信はありますか？

統夜「随分とチャレンジャーな質問だな・・・」

シャルに質問です。自分の作品では統夜とフラグを立ててしまいましたがどう思いますか？』では答えようか」

女神組「怖い攻撃だね…」

転生者組「それ以前にこえーよ！！」

グレイ「何をだ？」

レオン「さぁな」

ガレーナ「何処に恐れるものがある？」

真王「ああいうリアクションでした。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ヤルオ「次はペンネーム『黒龍』だおｗｗｗｗｗ。『黒龍「キリアが何か起こしそうですね」

銀時「それにしてもよ、ヴィータの奴がヅラを好きとはね～（ニヤニヤ）」

ソラ「ヅラも罪深いと言えば、罪深いな」

黒龍「まぁこれからどうなるのか楽しみではありますね」

銀時「ゲイム祭は何かありそうだな」

ソラ「まぁただでは済まないだろうな」

黒龍「じゃあ質問いきますか」

1．ヴィータに質問。桂のどこが好きなんですか？

2．銀さんに質問。自分に好意を持っている女性を全員自分の嫁にしたらどうですか？惚れさせた責任取れますよ？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『ヴィータは確か桂の…」

ヴィータ「言うなァァァァァァァァ！！！」

ヤルオ「あばしっ！！？」

真王「黙秘されたな。次」

銀時「イヤ無理だって！！そんなことしたら俺体力もたねぇよ！！」

真王「何言ってんだ。一夫多妻はミッドで許されてますよ？」

銀時「え？そうなの？う～ん・・・」

ヤルオ「というわけで銀時はまだなやみ中だおｗｗｗｗｗ。『黒龍』さん、廊下に立つおｗｗｗｗ」

ヤルオ「次のアシストはルーセン姉妹だおｗｗｗｗｗ。そして『鳴神ソラ』バトンだおｗｗｗｗ」

『んじゃあバトンを…

空&ソロ（夏祭り）

空「しゃあ！色々回るぞ！」
ソロ「どっちが多くの屋台回れるか勝負するか？」
空「おっ！良いな！」

その後、彼等は１０店舗以上も回ったのであった。

明久×明久ＬＯＶＥズ（海）

明久「はあ～のんびり出来るな～」
玲「アキ君、私の背中に塗ってくれませんか」
エリア「私も頼むよ」
赤セイバー「奏者、頼めるか？」
姫路「明久君！遊びませんか！」
美波「そうそう！一緒に遊びましょう！」
玉野「楽しいよ～」
キャス狐「ご主人様～一緒にカキ氷食べませんか」
優子「どうかしら？」
葉月「バカなお兄ちゃん行こう～」
明久「皆！一斉に言われても困るんだけど！！」

その後、ジャンケンで決まった順番を明久はやったのであった。

そんな訳でこのバトンをハルルさんに送ります。』

真王「では次回へ」

第八十八訓：仇を取るなぞ復讐者がやること（後書き）

真王「復讐のために憎悪を抱くキリア。そしてネプテューヌに憎しみを抱く者も…」

ルシアス「次回『憎しみは所詮己を見失う』テイクオフよ」

第八十九訓：憎しみは所詮己を見失う（前書き）

真王「シリアスです。それではスタート」

第八十九訓：憎しみは所詮己を見失う

突如、アンドロイドの手から現れた紅色の大刀。
観客達はコレで剣舞をするのかと思った。
リリカル組はあんな物をアンドロイドに装着させてた事に驚くが、
源外、スカリエッティ、そして真選組だけは違った。
アンドロイドについている刀、紅桜を。

源外「紅桜!?なぜあれが!?」
スカリエッティ「まさか!」

どうして紅桜がここにあるのか理解できない源外に、まさか鬼兵隊と手を組んだのではないかと思い浮かべるスカリエッティ。

キリア「殺れ」

キリアの一言でアンドロイドが大きく飛び込み、それが一気にネプテューヌのところまで一気に飛び込んできて、紅桜を振る…

スパーーーーン!!!

…おうとしてアンドロイドが紅桜ごと真っ二つに切られた。
切ったのは紛れもなく、ネプテューヌ本人だ。

ネプテューヌ「…どうせ、こんな事だろうと思ったよ」

ネプテューヌはパープルハートへ変身し、特上席から落ちた。

ノワール「ネプテューヌ!!」

ノワールが呼ぶも、ネプテューヌは激突直前で着地し、そして瞬間移動の如く人ごみの中を駆け抜け、

チャキン！

キリア「！！？」

キリアに首を突き付けた。

パープルハート「…何のつもりで私達を狙ったかは知らないけど…、言ったはずよ。『ただの復讐鬼になって人の被害を考えない人』になる気はないって」

パープルハートはキリアに対して怒りを、そして悲しみの目で見る。

キリア「結構です。私には成さねばならぬことがあるのですから」

キリアがそう言うとぞろぞろとアンドロイドの軍団が現れる。

パープルハート「…教会の粛正に巻き込まれたあなたのお父さんの仇を？」

キリア「…イストワールさんから聞きましたか。そうです。親父はリーンボックスで教会の粛正という戦争に巻き込まれたのです」

キリアの言葉に驚く面々。

グリーンハート「でしたら私にようがあるのでしょう？」

とグリーンハートが前へ出る。

キリア「ええ、あなたの元教院長・イヴォワールのせいで親父が不名誉な死を遂げてしまったんです」
グリーンハート「・・・彼のしてきたことは許されざる行為、そしてその責任を負うのが守護女神（ハード）・・・」

グリーンハートは右手に槍を装着した。

グリーンハート「全力でお相手いたします。皆さんは手を出さないでください」
キリア「いいです。彼の変わりにおあなたが、私の無念を受けろぉ！！」

キリアの号令にアンドロイド達が一斉に突撃した。
グリーンハートは槍を構えると、

？？？「アンドロイド…」

後ろから聞き覚えのある声が２つ。

ブラックハート・ホワイトハート「狩りじゃァァァァァァァァ！！！！」

グリーンハートは頭を下げるとブラックハートとホワイトハートがアンドロイド軍を吹き飛ばした。

グリーンハート「あなた達、なぜ？」
ブラックハート「ネプテューヌだったら迷わずに助けに来るかと思ったからよ」
ホワイトハート「私はたんにあいつがムカつくだけ…」

若干適当な答え方だがグリーンハートの笑みがこぼれる。
ブラックハート「というわけでネプテューヌ、こいつ等は…」
パープルハート「分かったわ。私はこっちを優先するから…」
パープルハートが別の方に顔を向けて言う。
その視線の先には6人のフードの人物がいた。

事件が発生した直後、銀時と高杉は刀を持って睨みあっている。
銀時の眼からは怒りが、そして高杉の眼からは狂気が満ちている。
思えば銀時が歌舞伎町で高杉と再会したのもこの様な感じであった。

高杉「知ってるか銀時？キリアの父親、オルテラ・ファンテの事をよォ」

高杉がキリアの父親『オルテラ』の名を出すが、銀時はその名を知らない為今一ピンとこない。

高杉「そいつは全然戦いの力はないが、奴の機械（からくり）の扱いと技術は一級品だった。なんせあの紫の譲ちゃんのとこで機械（からくり）大会で3度も優勝したほどにな。けどな、昔この地である戦争に巻き込まれたってな。全く酷い話だぜ。自分達の都合で事故に見せかけて始末した上に、そいつに全ての罪を擦り付ける最悪なデマを流したんだからな？」
銀時「最悪なデマ？」

高杉はオルテラの死に対する真実を言い出した後、更に深刻な情報を銀時に言い出す。

高杉「オルテラ・ファンテを調べたら、『教院組織を暗殺する計画を立て強力な機械(からくり)を造っていた』ってな。……死んだ奴を犯罪者みたいにして死後も奴の名が犯罪者として残るように汚名を着せ全て罪を奴に擦り付けた。……それを知った息子がどう思ったか想像にかたくねぇよ」

今でも思い出すキリアのあの時の憎しみの憎悪。
高杉は愉快そうに不気味に笑い出す。
獣の牙が生えてきた事が、何よりも面白くてたまらない。

ガキィン！

高杉の言葉の途中で銀時が凄まじい速さで木刀を振るうが、それを脅威の反応で刀で防ぐ高杉。
銀時の眼はいつもの眼ではなく、白夜叉としての眼線であった。

銀時「どけ、高杉……てめェと話し合ってる暇ねぇんだよ……」

凄まじい殺意と威圧感を放っている。
通常なら誰もがそれに答えて気絶するが、高杉は愉快そうに笑う。

高杉「そう慌てんなよ銀時ィ…奴を止めようとしても無駄だぜ。キリアはすでに手遅れだ。なんせ憎悪と憎しみに取り付かれてた復讐者だからな…今の奴を動かしてるのはその2つ。牙を折らなきゃ止まらねぇよ…そう言やぁてめぇに一つ訊きたい事があったなァ」

ある事を思い出した高杉は、銀時にある事を訊き出す。

高杉「あの紫の譲ちゃん…ネプテューヌだったか？あんななりして女神さまってのはすげぇもんだなぁ？」

銀時「ネプテューヌの事はてめェには関係ねぇだろ」

高杉「クク…確かにな…だが似蔵と万斉もネプテューヌって嬢ちゃんを高く買って認めてたぜ。一流の剣各顔負けの神速抜刀術だってな」

2人の部下から聞かされたネプテューヌの強さ。

確かに魔法に頼る魔導士にしては身体能力が他の戦士どころが、そこいらの侍より高い事は確かである。

高杉「俺ァ、その嬢ちゃんがどうやってその強さを手に入れたか興味を持った。だから色々調べさせてみた…そしたら面白い事が解ってな。あのガキとんでもねぇ過去を隠してやがったのさ」

銀時「てめぇネプテューヌの過去を調べたのか！！」

高杉「譲ちゃんが『P（プロジェクト）・H事件』関わった事は知ってるかぁ？」

銀時「何！？」

『P（プロジェクト）・H事件』

それはネプテューヌ達のような守護女神たちを作る計画の事を思う。

高杉は銀時の様子を見てニヤリと笑う。

高杉「そう、今てめぇが考えてる通りだ。プラネテューヌで悪質な研究をやってるやつらがいてな？それは守護女神（ハード）っていう存在を作り出そうってんだ。無論譲ちゃんやその教会の面々どもは無視できるわけもなく止めに行った。だが全然なくなる気配はなかった。その後サーラ・ゲイスと言う男が現れて『プラネテューヌ特化部隊』と言う義勇軍に入った。そしてある特殊部隊が結成されたのさ」

銀時「ある特殊部隊？」

このプラネテューヌには、その様な部隊はノワール達から聞かされてはいない。
その特殊部隊の名を高杉は言い出す。

高杉「特殊魔導士部隊『ネプテュナーズ』。魔法だけじゃねぇ、純粋な武術にも優れた６人の戦士達がオーバーＳランクを遂行する為に作られた特殊部隊。歴代最強部隊として恐れられた……だがそれが仇になった。それが気に入らない連中はＳＳランクの任務を遂行していた『ネプテュナーズ』にミサイルを仕掛けたんだ。……ネプテューヌはその『ネプテュナーズ』の生き残りとなったんだよ」
銀時「なぁ！？」

機動六課に入る前のネプテューヌが、その様な部隊に入ってた事には予想もしなかった。
だとすれば、その様な強力な部隊に所属してたんならネプテューヌのあの急激なる速い成長とフェイト達をも凌駕する実力に納得はいく。
そんな銀時に、更なる衝撃的な事を言い出す高杉。

高杉「ククク…驚いたろ？しかもなァ俺達『鬼兵隊』にも『ネプテュナーズ』の生き残りが江戸に流れ着いて、俺達がこの世界の存在を知る前に潰す為に入ったのさ。しかも譲ちゃんに強い憎しみを抱いてやがった…ククク…面白いだろ」
銀時「ネプテューヌと同じ……『ネプテュナーズ』の生き残り？」
高杉「今頃、かつての旧友同士が再会を果たしているだろうよォ……ククク……」

高杉はおかしそうに笑っていた。

パープルハート「・・・まさか再会できるとは思わなかったけど…」
？？？「けど会えたのよ。ネプテューヌ」
パープルハート「……アリエス・ヴァーミリオン…」

フードを取り、その顔を見たパープルハートはかつて、自分と同じ部隊に入って共に戦った盟友の1人、『ネプテューナーズ』の生き残りで、パープルハートにとってもかけがえのない仲間である。
剣の腕も魔法も優れた一流の魔剣士で、さらには仲間思いの心優しき人物。

アリエス「お久しぶりです。守護女神（ハード）パープルハート様」

黒い髪の少女・アリエスは固く敬礼する。
だが何処となく雰囲気が違っている。

パープルハート「・・・それで、ただ再会を喜ぶ状況じゃなさそうね」
アリエス「その通りです」

すると、左手の掌から翡翠の光が現れて、その光の中から真紅に輝くサーベル型の長剣が現れる。
その長剣の先の刃を、パープルハートに向ける。

アリエス「この場で……貴女を殺す為にここに来たの！！私達……ネプテューナーズを・・・私達の思いを裏切った貴女を！！！！」

アリエスの憎しみの声がこだまする。
パープルハートは顔を俯かせる。
パープルハート「裏切った…そうね。あの時が起こったから……」

～回想～

プラネテューヌ・違反研究施設
パープルハート「次よ、もうここにようはないわ」
アリエス「そうね。跡形片付いたし」

どこかの研究所で、『P（プロジェクト）・H事件』が起こる前の当時のパープルハートとアリア。
足元には研究員と思われる死体が3つ。
???「こっちも終わったぞ」
???「……同じく」

別の扉から茶色い短髪にFFのクラウドのようなマントを着た男、天井から忍者みたいな恰好をした男が逆さでてきた。
パープルハート「ザック、ムツリ・・・」
アリエス「そっちも片付けたのね」

パープルハートが二人の名前を呼び、アリエスが言う。

ザック「ああ、そろそろヒメラとレグナ、ラートも来るころだが…」
？？？「みなさ～～ん！！」

別のとこから声が聞こえた。

コンパより長めのピンクの髪に黒いブレザーと赤いスカートをはいている少女。
灰色の髪に赤い目の少年。
青い髪のおしとやかそうに見えるの少女。

パープルハート「ヒメラ、レグナ、ラートも」
ヒメラ「ハイです」
レグナ「きたぜ」
ラート「こっちもです」

ピンクの髪の少女・ヒメラは返事し、灰色髪の少年・レグナと、青髪の少女・ラートもいう。

ザック「この階の部屋は全部調べたな」
ムツリ「…あとは地下の道が一つ」
アリエス「地下ね。そこに犯人の首謀者が…」

アリアがまじめな顔で言う。
そして地下へと続く道の扉。

パープルハート「ここね」

パープルハートが扉を開く。

すると空気がむわっと出たのでアリアとヒメラのスカートが翻って…

ズサァァァァァァ！！！ドガァッ！！

なんかスライディングする音と蹴り飛ばされる音が聞こえた。

アリエス「・・・このムッツリ！！今私のスカート撮ろうとしてたでしょう！？」

ムツリ「・・・（ブンブンブン！！）」

アリアがムツリの胸倉を掴んで鬼の形相でにらみ、ムツリは首を振って否定している。

パープルハート「またいつものね…」

パープルハートや他の人も呆れた顔をする。ヒメラはオドオドしている。

実はムツリは変態心があるのでスカートの中にパンツが見えれば即カメラで。

水着の美女なら鼻血ブーという感じである。

そしてその行為をしてついたあだ名が『ムッツリーニ』という。

ザック「ハハハハ！ところでアリアはどんな色してた？」

ムツリ「・・・布地の薄い黒」

アリエス「何いっとんじゃテメェらぁぁぁぁぁ！！！！！／／／／／」

バキゴス！！

ザック・ムツリ「ゴフゥッ！」

ザックが聞くとムツリは静かにアリエスのパンツのことを言った。
そのせいでアリエスは顔を真っ赤にして二人を殴り飛ばす。
パープルハート達は呆れ、ヒメラはどうするべきか戸惑う。

違反研究施設・地下・最終プラント

???「フッフッフ・・・もう少しで完成する…」

一人の偉そうな研究員がプラントにはいっているパープルハートそっくりの女性を見て言うと、

ドガーーーン!!

???「なんだ?」

男は何事かと思い、振り返ると数人の倒れた兵士と、パープルハート達『ネプテューヌナーズ』だった。

アリエス「貴方が『プロジェクト・ハード』の責任者ね?殺人、違反研究、違反人工生命製造、その他の罪で逮捕する!」

アリエスが刀を男に向けて言う。

男「『ネプテューヌナーズ』!まさか君達の様な英雄気取りの奴らが現れるとはな」

ザック「俺らは英雄とかじゃないぜ？ただの特殊部隊の一員さ」
パープルハート「貴方はここで野望を破壊する！ザイド・ゲーズ！」

パープルハートは男・ザイドに刀を向ける。

ザイド「俺の野望がついえた？確かにこのままでは俺の夢が終わる。
だが、俺は俺なりの最後のあがきを出してやる！完成とはいささか
程遠いが、私の研究の成果を見せてやる！」

ザイドが言うとプラントから光が出てガラスが割れる。
パープルハート達は眩しくて目をつむる。
そして目を開けるとパープルハートそっくりの人物・クローンパー
プルが。

ザック「へッ、悪あがきってやつか」
レグナ「だが俺達も、負けるわけにはいかんのでな」
ヒメラ「たとえそっくりでも、手加減はしないです！」
ラート「い、行くよ！」

ザックは剣を、レグナはブロウを、ヒメラは杖を、ラートはバット
を構える。

ザイド「よかろう、ここが貴様らの墓場に『ビビビビ！ビビビビ！
ビビビビ！』なんだ？」

突然の警報にザイドとパープルハート達は驚く。

ナレーション『警告、入り口に爆撃を確認。プラネテューヌ教会と
確認』
レグナ「おいおい！教会ってお前のとこじゃねぇのか？」

パープルハート「知らないわよ！教会がそんなこと…」

ドガーン！！ドガーン！！ドガーン！！

何とミサイルが地下を貫通してネプテューヌ達のいるとこまで襲って来たのだ。

無論ネプテューヌ達は巻き込まれて炎の壁で阻まれる。

パープルハートとザイドがいて、アリエス達は別のところだ。

ザイド「まさか教会に命令でもしたのか？」

パープルハート「違う！これは私達が処理すること！教会のみんなも承知して…」

ザイド「協会が犯人じゃないとすればおそらく第三者じゃないのか？」

ザイドの問いにパープルハートは強く否定する。

ザイドは第三者の仕業じゃないかと聞くとパープルハートは顔をしかめる。

パープルハート「どういうこと？」

ザイド「簡単なことだ。教会が動かないならば『教会を偽造したものがお前達を排除しようとしている』だろう。つまりお前とあやつらを絶縁させるために…」

パープルハート「ッッッ！！！！！？？？みんなァァ！！」

ザイドが敵の狙いを推測して言うとパープルハートは血相を変えて叫ぶ。

だが虚しくもミサイルが…

パープルハート達を巻き込ませた。

プラネテューヌ・違反研究施設跡地

ネプテューヌは燃え盛る研究施設の前で倒れていた。

ネプテューヌ「ここは…！？みんな！？アリエス！！？」

ネプテューヌは仲間達を呼ぶ。
だが返事はない。
つまりは…

ネプテューヌ「…しん…だ…？そんな……あ、あ、ウアアア

思い出す己の無力さ。
あの時自分にもっと早く気づいていれば、もっと力があればみんなを救いだせたかもしれなかった。

パープルハート「・・・フ・・・フフ・・・フッフッフ・・・」

パープルハートは不意に笑いだす。

パープルハート「無様ね…、守ると言っておきながら、こんな結果になるなんてね…」
アリエス「そうね。だからこそあなたに私達の仲間である資格などない」

頭を支えて悲しみの表情をするパープルハートにどうでも好さそうな顔で一蹴りするアリエス。

アリエス「……出来れば刃を向けたくなかったけど……裏切り者である貴様だけは、絶対に許さない！」

かつての仲間とは言え、仲間だったパープルハートに剣を向けるアリエス。
パープルハートも出来ればアリエスには敵に回したくなかったが、かつての仲間という理由な訳ではない。

アリア「剣を抜いて、ネプテューヌ！」

裏切られた憎しみで憎悪を込めて叫ぶアアリエス。

パープルハートはエックスセイバーを構える。

パープルハート「…みんなは私を許せないの？」

パープルハートは不意に残り六人のフードの人物達、つまりネプテューナーズメンバー・ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート、に話しかける。
だが返事はない。

アリエス「余所見する暇があるかぁ！！」
パープルハート「ッ！！」

ガキィン！！

アリアの剣とパープルハートのエックスセイバーが交差する。

パープルハートはアリエスの憎しみを断ち切れるか！？

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ルシアス「・・・ルシアスよ」

ルーシア「私ルーシアだよ～。今回は私たち姉妹がアシスタントだよ～」

ルシアス「貴方と姉妹になった覚えはないわ（武器を構える）」

ルーシア「姉妹だよね～？（ヤンデレ化）」

真王「あ、チフユさん」

ルシアス・ルーシア「さぁ！仲良くやっていこ～」

銀八「すげぇなおい…。んじゃペンネーム『ウィンド』さんからだ。『ウィンド「遂に出た！ありがとう真王さん！今回も殺られるんじゃないかと思った！」

リリス「まったく……しかし祭りか。おっと自己紹介か。リリス・ハートネットだ」

ウィンド「一応真王さんに注意。エールは一応一人称は俺ですから。メアは丁寧語に近いです。セレスもおなじだと思います。後お願いです。彼らをこのままそちらの方へ出演させてくれませんか？」

リリス「わがままだな」

ウィンド「分かっているさ。だが俺は見たいんだ！銀さん達の力になるあいつらの姿を！！」

リリス「真王。わがままで申し訳ないがあいつらをこのまま銀時ら

の仲間に入れされてやってくれ。頼む。後エールとコヨリには気を付けろ。キレたら怖い。メアは……ウィンドの小説を見たから分かるな？」
ウィンド「しかし高杉だ遂に出たな……」
リリス「ああ。果たしてどうなるか……」
ウィンド「さて、質問と参りますか。銀魂メンバーに質問。家のリリスにかてますか？」
リリス「とうとつだな……リリカルメンバーに質問だ。こいつらにかてるか？［ダンテ、バージル、ネロ］返答頼む」』ズバリお答え「ちょい待ち」なんだ？」

真王「実はまだあったよ。『リリス「……」
ウィンド「ど、どしたのリリス？」
リリス「ごめんなさい」
ウィンド「へ？」
リリス「誰だって最初は間違いはある。真王の言う通りだ。なのに……」
ウィンド「い……いやいや！お前らをさんざん放っておいた俺も悪かったよ。だから気にするな」
リリス「うん……ありがとう（ニコッ）」
ウィンド「ぐは！！（しまった……リリスは俺の小説で男の娘中トップクラスの容姿とスタイルの持ち主……そんな奴から上目遣いで見られたら……グフッ）」
リリス「え……ええ？」

数分後……
ウィンド「ＯＫ大丈夫だ（鼻血垂らしてる）」
リリス「大丈夫なのか……」

ウィンド「い、一応質問だ。銀さん、リリカルメンバー、転生者メンバーへ。俺の主人公達を見た時のそれぞれの感想を。そしてヴィヴィオに質問俺の主人公達で家族になってほしいのは？」

リリス「こちらからも。真王に質問。真王にとってリリカル銀魂とは何だ？」

ウィンド「おお！真面目な質問！」

リリス「たまにはいいだろ？返答頼む」』

『ウィンド「真王さんに質問。家の主人公らをどう思いますか？」』

です。では質問の答えだ」

銀時「いや聖王に喧嘩売ったら罰当たりな気がするんですけど…」

新八「はっきり言って勝てません！！」

神楽「いつでも来るネゴルゥラァァ！！」

リリカルメンバー「無理です！」

真王「次、メアは優しそうな奴で実はそんな裏があったとの事。そしてあの吸血鬼に惚れられてるとの事。エールとコヨリは将来ラブ夫婦になれるんじゃないかとの事。そしてセレスは規格外すぎるだろとの事」

ヴィヴィオ「エールお兄ちゃんとおコヨリお姉ちゃんだよ」

真王「私にとってリリカル銀魂は面白・ギャグ・笑い・遊び・そしてアドベンチックであること！最後ですが私に負けないレベルキャラですね。では『ウィンド』さん。今度は質問三つまででお願いします」

ルーシア「次！ペンネーム『鳴神　ソラ』さん！この人よく来るよ～。『マリオ「復讐なんて…それぞれ違うが死んだ者が望むのは何時もの姿でいて欲しい…ただそれだけだ」

ルイージ「やばいね…」

フォックス「マジでどうなるネプテューヌ！」

スネーク「だな」

ネス「質問『リュカについてどう思う？』」

リュカ「僕も…『ネスについてどう思いますか？』」

銀次「質問！『最初俺を見た時どう思った？』」

次回を待ってます！』」

真王「ツッコミ使い（リュカ）とハーレム視望者（ネス）な感じ。能力以外（電撃のことじゃない）はまんま銀次ですね」

ルーシア「では『鳴神　ソラ』さ～ん♪廊下に立ってなさい」

ルシアス「次、ペンネーム『フリーダム』よ。『Sフリーダム「復讐をしても何も残らないに失った物も戻ってこない」

∞ジャスティス「ネプテューヌもそれは、わかっているはずだ」

デスティニー「そうであってほしいな…」

レジェンド「そうだな…」

Xアストレイ「それでは、質問です」

銀時とリリカルメンバーに

青眼の究極竜と真っ向勝負で勝てますか？

沖田に

次の内使いたい武器は？《アトミックバズーカ、ツインバスターライフル、ローエングリンランチャー》

ハイペリオン「1つ、かなり危ない気がするぞ…」

更新頑張って下さい』」

銀時・リリカルメンバー「イヤ無理！！」

ルシアス「賢明な判断ね」

沖田「この中で一つならそのローエングを試しまさぁ」

ルシアス「相変わらずSね。『フリーダム』狙われないでね」

真王「次はペンネーム『ケン』さん。『統夜「復讐は何も生まない・・・分かってるつもりだが・・・」

カナと咲夜と戦った事を思い出していた。

統夜「ギルシアに質問。もしレーティアが幼女になったらどんな反応しますか？」

ブランに質問。もし貴方がお漏らしした事がゲイム業界に広がったらどんな絶望しますか？（黒笑）

統夜「おいいいいい！！！！それ本当に不味いって！！！」

はやて「掘り起こしたらあかんって！！」『ではギルシア」

ギルシア「レーティアが幼女だと！？どんな奴だ！！」

レーティア（幼女化）「ギルシア～～」

ギルシア「激萌超美少女だった～～～～～～！！！！！！！！！！！！（超鼻血）」

真王「…次」

ブラン「・・・ヨシ、マズハキサマヲヌッコロシテヤル」

ブランはハンマーを抱えて抹殺しに行った。

真王「『ケン』さん。生きて帰ってくれ」

銀八「縁起でもねぇ！」

真王「あと『シャルとレオン、ユウカのイメージ声優は考えていますか』ですがシャルはシャルラッハロートの声優さんの声とレオン

はレオンミシェリの声優さんの声、そしてユウカは…モリガンボイスの人ですね」

銀八「次だ。ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。しかし…やはり裏で糸を引いていたか…『煎餅隊』。

輝刃「いや…『煎餅隊』ではなく『鬼兵隊』だぞ（汗）？あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．高杉に質問…もし自分が女体化したら、どういう反応をするんだ？

ハハハ…確かに、それはちょっと気になるな…。というか…高杉の場合、女体化したら何か属性が『ボーイッシュな風貌のヤンデレっ娘』になりそう…（汗）。次は俺からだ。

2．キリアに質問…作ったアンドロイドの中に、もしかして好きなヤツの姿をしたのもあったりする？

輝刃「…あり得ない話ではないな…。何はともあれ、キリアだって好きなヤツの1人や2人は居るだろうな…。」『…高杉かよ」

高杉『…どうでもいいが？』

真王「へい次キリア」

キリア「私にそんなことはありませんよ。ただなぜか姿がリーンボックスの女神様に近づいてきた気がするんですが…」

銀八「なら『月光閃火』、廊下に立ってなさい」

真王「次だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『黒龍「ついにキリアが復讐に動き出したましたね」

銀時「ネプテューヌの昔の知り合いの出てきたしな」

ソラ「高杉、アイツも相変わらずだな」

黒龍「それとチフユ強し！」

銀時「まぁエルザと千冬が合体したみたな奴だしな」

黒龍「それとソラ、『スーパーネプ丼』をどう思いますか？」

ソラ「まぁ美味いなら良いんだが、色んな物をトッピングして味をごちゃ混ぜにするのはあまり良くないな。不味くなる可能性があるからな」

銀時「さすがに料理上手いだけはあるな」

ソラ「とは言え、美味いなら特に文句はない」

黒龍「そこはただ見た目に拘る様な口だけ料理人とは違いますね」

銀時「美味いなら特に問題視しないのもコイツの良い所だしな」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1．ネプテューヌに質問。スーパーネプ丼って具体的にどんな味が

しますか？

2．ネプテューヌに質問。おしっこ漏らしたブランをどう思いますか（黒笑）

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」

銀時「つうか嫌味な質問だなおい！」『ではネプテューヌ」

ネプテューヌ「トッピングによって味が違うんだよ。ちなみに前回食べたのはバジル味。…ブランはいないけど、それは駄目だよ…（死にたくないし…）」

真王「では『黒龍』さん、死ぬな」

ルシアス「縁起でもないわね。ペンネーム『ああ』さんよ。『銀時ラバーズに質問です。

1．銀さんをどうやって誘惑するとか考えてますか？

2．仮に誘惑が成功した場合銀さんにいじめられたいですか？それともいじめたいですか？（まあ、さっちゃんは誰だって分かるから別に良いや）』」

真王「皆さんは様々な案を考えています。そして受け派ですね彼女等は」

ルーシア「『ああ』さん、廊下に立ってなさい～」

ルシアス「ムカつくからそれやめなさい。最後よ。ペンネーム『なめ猫』よ。『俺「どうも、なめ猫です」

ラムザ「こんにちは、ＦＦＴのラムザです」

カイト「ごきげんよう、オリキャラのカイトっす」
ラムザ「ていうか、しょっぱなから何だいこの形式は…；」
俺「すまん、もう我慢できなくなったんでつい」
カイト「おい…；」
ラムザ「…まあいいや、前回から僕も出されたし。さて…まずは感想を」
カイト「ネプテューヌ達の世界で祭をする話に入ったみたいだが、またもやネプテューヌの重い話が出そうだな…どうなるやら」
ラムザ「あと、ネプギア達にも注目したい所だね。新作としていよいよ出るみたいだし、僕としても気になってるよ」
俺「今後もしっかり見なければ。あと銀さん争奪戦も…」
ラムザ・カイト「こら」
俺「そろそろいっぺん全員ぶつかるんじゃないかのぅw」
カイト「何を期待してんだ…；」
ラムザ「あ、そういえばコラボ申し込むつもりらしいけど、今はどうなってるんだい？」
俺「んー…ラムザ達か、春香達か、それとも破壊者…」
カイト「破壊者やめとけ、こっちのなのはさんに迷惑かけちゃだめだろ；」
俺「うむ、そうか…」
ラムザ「本気でやるつもりだったのか…？；」
俺「さて、今回も質問やメッセージをしますか」

1．銀さんへ
いつか一夫多婦でヤったりしないんかい？w覗きとかもやってるんでしょ？w

2．ビビへ
銀さんとの決着はまだだけど、いつつけるの？

3．新八へメッセージ
カニはサラダで食ってもうまいよ

俺「以上」
カイト「おい1つ目何のつもりだこら」
俺「ではまた！（逃）」
ラムザ「…後でフレアぶっぱなすか…」『・・・・・・・・・・」

ジト眼で銀時を見る。

銀時「やるかァァァァァ！！！俺は変態じゃネェェェェェ！！！」

ビビ「変態だよ。めんどくさいからやらないよ」

新八「イヤ意味が分かんないんですけど…」

真王「へい、『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい。次回はアルテスがアシスト。では」

第八十九訓：憎しみは所詮己を見失う（後書き）

真王「次回は何とあの男が現る！？」

アルテス「次回『事件には第三者が絡む場合がある』テイクオフよ。ユウカ様～～？」

第九十訓：事件には第三者が絡む場合がある（前書き）

真王「ネプテューヌとアリエスの対決。そして真犯人が現れる！？」

アルテス「リリカル銀魂、始まります。ユウカ様～～！！」

第九十訓：事件には第三者が絡む場合がある

前回のあらすじ

憎しみを抱くアリエスに勝負を挑まれるパープルハート。
パープルハートは彼女をどうするか？

ＩＢＧＭ獣王の爪跡ｂｙ魔界戦記ディスガイア４
（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｂｅａｓｔ
Ｋｉｎｇ’ｓ　Ｃｌａｗ　Ｍａｒｋ）

アリエス・パープルハート「ハアアアアアアアアア！！！」

パープルハートのエクスセイバーとアリエスの持つ剣・エックスブレイドが交差する。
それも目で追えぬ斬激が相手を狙い、または受け止めるようになっている。

パープルハート「ファイナルカッター！！」
アリエス「魔神剣！爪牙！！」

パープルハートは高く上がったあと地面に剣を叩きつけて斬撃の波動を出す。
アリエスは剣をふるって二つの斬撃を放つ。
そして二つの技はぶつかり、相殺した。

アリエス「犀突き（サイ）！」

パープルハート「クゥ！」

アリエスは大きく地面を踏んで、突進するサイの如くパープルハートをそのまま襲い掛かる。

アリエス「鷹爪！！」

今度は瞬時にタカが獲物を捕らえるような斬撃が襲い掛かり、パープルハートはそれをギリギリでかわす。

パープルハート「さっきから動きが瞬時的だけど、その剣のせい？」

アリエス「そう！このエックスブレイドは閃光の如くの瞬間移動でレポートが可能になり、さらには光の輝きが大きければ大きいほど切れ味と威力は倍増、さらにはそれで幻影を見せる事が可能な剣。それだけではない！貴様に復讐するために異世界での力を手にしたのだ！」

パープルハート（…やっぱりみんな異世界で生きていたのね）

パープルハートは心から安心する。

もし異世界でモンスターがいたとしても簡単にはやられないと確信しての安心だ。

逆にアリアはパープルハートの強さに感心していた。

自分の『エックスブレイド』に引けをとらないパープルハートの刹那の瞬間移動術は、『エックスセイバー』の能力でもなく魔力による強化でもない。

純粋なスバル自身の移動速度の速さであった。

アリエスの知っている限りでは、パープルハートの速さ以前より大幅アップしている

アリエス「（相変わらず速い……それに以前より動きのキレが増し

ている！……なら！）『エックスブレイド』、カートリッジロード！」

エックスブレイド≪Ｓｐｅｃｉａｌ　ａｔｔａｃｋ　ａｎｄ　ｍｏｂｉｌｉｔｙ≫

ガジャン

『エックスブレイド』がカートリッジをすると、アリエスの足場から黒紫色の魔法陣があふれ出る。

パープルハートはどんな攻撃か来るか警戒する。

アリエス「鷹波一閃！！」

パープルハート「（早い！？間に合わな…）きゃああ！！」

飛んできた斬撃が音速を超える速さで来たのでパープルハートは反応できずに切られ飛ばされる。

アリエス「これでとどめだ！ネプテューヌ！！」

アリエスが飛びあがってパープルハートにトドメをさすようにエックスブレイドを地面に挿す体制になる。

このままではやられるところなのに、パープルハートは一つの賭けを思い出して、笑う。

パープルハート「あ～、ここから見るとアリエスのアレが見えそう…」

ズザァァァァァァァァ！！！！！

パープルハートが言うとフードの一人がアリエスの真下にスライデ

ィングしてカメラを構える。

アリエス「って何やってじゃァァァァァ！！！／／／／／」

ドゴッ！！

？？？「グフッ！」

アリエスはスライディングしたフードの人物に態勢を変えて蹴り潰す。

パープルハートは「相変わらずね」な顔をする。

アリエス「このムッツリ！どうしてあんたというやつはいつもいつもこんな大事な時に邪魔するわけ！？狙ってるの！？」

ムツリ「・・・・・・・・！！（ブンブンブンブン！！）」

アリエスがスライディングした人物・ムツリの胸倉を掴んで詰め寄り、本人は否定の首を振る。

アリエス「い～や！絶対狙ってたわよ！思いっきりカメラを構えているのが証拠よ！！」

ムツリ「・・・見てない見てない」

ムツリは頑固なに否定する。

するとザックがフードを取ってムツリに聞く。

ザック「・・・ちなみにどんなのだった？」

ムツリ「水色のしましま、くまさんイラスト付き」

アリエス「フンッ！！／／／／／／／／」

ドガッ！！ズドッ！！

聞いたアリエスが真っ赤になってムツリとザックを蹴り潰した。
て言うか2人が悪い。

ヒメラ「アワワ、大丈夫でしょうか…」
レグナ「気にするな」
ラート「それないよ…」

ヒメラは戸惑い、レグナは特に興味なく、ラートは突っ込みを入れてる。

レオン「さすがネプテューヌの仲間だな」
ガレーナ「うむ、個性溢れる者たちだ」
チフユ「あり過ぎるのもどうかと思うがな」
グレイ「あいつの周りってこんなんバッカか？」
ビビ「どっちにしろアリエスちゃんって可愛いね～」
ザック「そうッスね～。・・・・・・・・・ん？」

なぜか隣にレオン、ガレーナ、チフユ、グレイ、ビビがいてびっくりするネプテューヌ。

ザック「うおお！！？いつのまに！？つーか誰！？」
レオン「なに、騒がしいもんだから来て見ただけだ」

とレオンがギリッと拳を握る。
そして強者のオーラが出る。

ネプテューヌ「っ！？」

ネプテュナーズ一同はレオンの覇気に警戒する。
イヤ、レオンだけでなく、グレイ達にも警戒する。
この人らは強いと。

パープルハート「・・・みんなは？」
ガレーナ「あれじゃ」

パープルハートが他のみんなのことをきくと、ガレーナがある場所に指をさす。

一方その頃、銀時と高杉の戦いも始まっていた。
木刀と刀のぶつかり合いは激しく、超一流の剣士同士の戦いの領域をはるかに超えていた。
銀時は睨み、高杉は笑い出しながら剣を振るう。
そして2人の剣がぶつかり合ってにらみ合う。

銀時「要するにアレか…テメェはそのアリエスって女の憎しみを利用する為に『鬼兵隊』の一員に入れたって事ったろ？」
高杉「ククク…利用ねぇ…確かに俺ァ、アリエスに会った時に誘うつもりだったんだがなァ…意外な事にアイツは『鬼兵隊』の噂を聞きつけ自ら入ってきやがったのさ……おかげで『鬼兵隊』の戦力は増える一方さ…このまま行きゃあ、『春雨』相手に戦争ふっかける事も出来る戦力になるだろうぜ」

不気味に愉快そうに笑い出す高杉。
確かに強力な武装集団の『鬼兵隊』にアリエスのような強力な魔導

師が加われば、『鬼兵隊』はあの『春雨』と双璧になりかもしれない。

高杉「アリエスの中にいる獣はネプテューヌや教会に対する憎しみによって成長してる……俺はアイツの中の牙を研ぎ澄まし暴れたがっている獣に惚れちまってね…いっそ俺達と一緒に世界相手に暴れてみねぇかと誘っちまった」

初めて会った時から溢れていたアリエスの世界に対する強い憎しみ。
高杉は彼女の中の憎しみに共感し、鬼兵隊に勧誘したのである。
その彼女も高杉の世界に対する憎しみに強く共感し、鬼兵隊の一員となった。

高杉「なァ銀時……お前もネプテューヌを見て薄々と気付いてたんじゃねぇのか？」
銀時「……」
高杉「甘ったれた空間にいる時は隠れているが…アイツの中にもアリエスの様に強い憎しみや憎悪を持った獣が住みついてやがる事によォ？」

高杉の意見も一理ある。
いかに憎しみを捨てようと決意しても、多少思い出せば一気に増幅されて不の感情が湧き上がる。
ネプテューヌとは言え、それは例外ではない。

彼女の中にも闇は眠っている。
大切な仲間を奪われ、護れなかった悔やみ。
それが全て解放されればアリエスのように復讐鬼となる。

高杉「あのガキもよォ、俺やアリエスの様に全てを捨て、感情のま

まに生きてみたら立派な牙が生えてくると俺ァ思うがな」
銀時「……確かにてめぇの言う通りだ。どんな奴でも自分(テメェ)の中に闇位ぇ持ってる」

高杉の言葉を黙って聞いていた銀時が喋りだす。

銀時「けどよォ……憎しみを持たずに生きてく事を選んだのはネプテューヌ自身だ……なら例えてめぇやアリエスが復讐の道に引きずり込もうとしても…アイツは自分の武士道(テメェルール)を貫くハズだぜ？」

いくらスバルを復讐の道に走らせようとしても無駄だと銀時は忠告する。

銀時「仮にネプテューヌ自身が復讐に選んだとしても無駄になる……そん時は、俺達がアイツを必ず止めてやっからなァ」

仲間として、そして同じ侍魂を持つ者として銀時はその時のネプテューヌを止めようと決意する。
そんな銀時を見て、高杉は剣を鞘に納めて銀時からゆっくりと離れる。
そして懐から煙管を出して口にくわえる。

高杉「ククク…止めてやるねェ……このまま殺り合うのも良いんだが、あいにく俺の役目はここまででね…てめぇとの会話は単なる暇潰しだ……今頃『機動六課』の連中はキリアのアンドロイドとかいう人造機械(からくり)に苦戦中だろうしな？」

高杉の言う通り、フェイト達は今頃苦戦しているかもしれない。
速いところ助太刀しなければならないようだ。
そして高杉は口から煙管を外して煙を吐く。

高杉「俺ァここいらで失礼するぜ……生き残れたらまた殺ろうや……」

そう言って高杉は振り向いてこの場をゆっくりと立ち去ろうとする。

？？？「スベテハ森羅神様ノタメニ・・・」

高杉・銀時「っ！！？」

何処からか声が聞こえ、それと同時に殺気を感じた二人はそこから避ける。

銀時達のいた地点に誰かが剣をふるった。

そこにいたのは、銀河の世界で戦ったイヴィルソルジャーだった。

銀時（あいつはイヴィル！？何でこんなところにいやがるんだ！？それに森羅神って・・・まさかあいつが！？）

イヴィルソルジャーがいることにもしかしてあの男もいるんじゃないかと驚く銀時。

更に屋台の裏から次々とイヴィル軍が現れる。

ちらっと隣にいる高杉は笑っているように見えるが驚いてもいた。

するとイヴィルソルジャーのリーダーらしき雰囲気を放つイヴィルストライカーが命令する。

イヴィルストライカー「敵確認。排除せよ」

そしてイヴィル軍は銀時達に襲いかかった。

時は遡ってアンドロイドとフェイトサイド。

バキィ！

突如、刀が折れた鈍い音が聞こえた。
それは近藤の持っている刀がアンドロイドの紅桜に折られたからだ。

近藤「ウソォォォォ！！？名刀虎徹ちゃんがぁぁぁぁぁ！」

信じられないほどに絶叫する近藤。
実はコレが虎鉄の模造品である事を本人はまだ知らない。

近藤「ウソォォォォォォォォ！ルー殿、アギト殿、トシ、これ虎鉄ちゃんが…ウソォォォォォォ！」
アギト「うるせーな！言っている場合かぁ！（怒）」
ルーテシア「近藤、落ち着いて！」
近藤「だってコレまだローンが…ウソォォォォ！！」

愛刀が折られて叫ぶ近藤に対して怒鳴ってツッコむアギトと、近藤を落ちつかせようと抑えるルーテシア。

アギト「チィ、何でこんなにも多くアンドロイドが来るんだよ……アタシ等ナンバーズや機動六課の連中も大苦戦じゃねぇか！」
土方「全くだ。しかもキリがねぇ」

そう、『紅桜』の脅威は闘えば戦うほど強くなれる生きた刀。
しかも数がやたらと多い。
しかし一方的に減らないアンドロイドに苦戦しているのも確かであ

る。
そこに……

ドカァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

『『！？』』

突如の大爆発に誰もが驚きだす。
数多くのアンドロイドが一気に破壊されたのである。
そしてガラクタと貸したアンドロイドを踏み、現れたのは……神楽、桂、エリザベス、九兵衛、沖田、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ヴィヴィオ、プリニー、ユーノ、コンパ、アイエフ、リリス、ミーニャ、アルラ、神、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イッセー、カイム、アンヘル、ユウカ、ナリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、タバネ、レシア、ヤルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、エール、コヨリ、メア、セレスである。
しかし様子はいつもと違う。
とてつもない殺気と闘志が溢れていた。

女性陣「祭を邪魔する悪い子は…」
男性陣「だ～れだ～…？」
神「ぶち殺す…」

せっかくの祭りやデートを台無しにされた事で、怒りのボルテージが最大限を超えていた。

近藤「あっあれは妖怪『祭り囃子』！！祭りを妨害する暴走族をこらしめる古の妖怪だ！！！！」
ルーテシア「おおー！！」
アギト・土方「……いや、違うと思う」

近藤の『祭り囃子』の説明に感心するルーテシアに、何か違うと思うアギトと土方。

女性陣「オオォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！」
男性陣「ラァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！」
神「死ねやぁァァァァァァァァァァ！！！！屑どもォォォォォォォォォォ！！！！！」

それぞれの楽しみを邪魔された事で、怒り満点で潜在能力は最大限。
未完成版の紅桜では話にならないほどの強さが発揮される。
大活躍によってアンドロイドは一気に減少されてしまう。
ちなみに普段は怒らない神だが、せっかくのたこ焼き屋をぶっ壊されて怒らない訳がない。
大好物のたこ焼きを黙って見逃す性格なわけがない。

近藤「祭りの神が降臨なされたぞォォォォォ！勝利は我等の手にありィィィィィィィィッ！！」

近藤は彼らの大活躍を気に、一気に勝利宣言をした。

戻ってネプテューヌサイド

パープルハート「・・・凄い光景ね…」
レオン「そう思うだろ？」

パープルハートは唖然とし、レオンが同意する。
ネプテューナーズ一同は、「化け物揃いか？」などと思ったらしい。
つーかあんたらも化け物の領域だ。

一方のキリアは、８体のアンドロイドと共に戦いの状況を眺めている。
いかにキリアでも状況の悪さは理解していた。
だが彼はそれでも抗うかの様に奇襲の開始しようとする。
そんなとき、源外、スカリエッティ、新八の３人がキリアの前に立ちはだかる。

キリア「……源外さんにスカリエッティさん……来てたんですね」
源外「小僧……自分が今してる事を分かっているのか？」

ゴーグルに隠された悲しめな眼で源外はキクナエを見る。
かつて自分と同じ道を進もうとしているからだ。

源外「この勝負は小僧の負けだ……以下に最新型機械技術（カラクリ）に『紅桜』を加えても、野朗共の強さはそれを上回っている」
スカリエッティ「それに、ほとんどはもう逃げたしね」

源外とスカリエッティはキリアの敗北宣言をする。
これ以上やっても、罪が重くなるだけである事を知らせるために。

キリア「そうですか……でしたら今度は機動六課とナンバーズを壊滅させる為に……」
新八「キリアさん！！」
キクナエは更に奇襲を開始しようとする中、新八が必死に叫び止めようとする。
？？？「アラアラ、随分と面白い見せもんじゃない？」
聞き覚えのある声に7人は振り向く。
そこには、余裕の笑顔を浮かべているパープルハートがいた。
アリエス「あ！？いつの間に！？」
アリエス達も今気付いた。
パープルハート「ヒーローショーか何か？私にヒロイン役がいいわね……」
キリア「貴方じゃ役不足です。どいてください」
パープルハートを睨みつけて言い出すキリア。
復讐心に取り付かれた暴走はそう簡単には終わらない。
パープルハート「…言う義理はないけど、復讐したところで虚しさしか残らないわ」
それでも彼に取り付いた復讐心は取り除かなきゃいけない。
パープルハートはそのつもりでこの場にやってきた。

パープルハート「お父さんが泣くわ…こんなことは誰も望んじゃいない。アナタが一番分かっているはず」

その言葉にキリアはだんまりとなる。
それと同時に、脳内で父親と過ごした楽しい思いでが浮かび上がる。

キリア「……分かっています……だけど苦しくて仕方ないんですよ。……都合で罪を擦り付けられ事故に見せかけ殺された父の屈辱感や絶望。それを許せない自分…そんなものばかり背負って生きていたいとは思いません……それに戻らないものばかり眺めて生きていくのは、もう疲れました」

分かっていても認められない結果に悔やみ、もがき、悲しむキリア。
勝手に父親を罪人扱いされた屈辱にもう耐えられなくなったのだ。

キリア「もうどうでも良い。そして今まで犠牲となって死んでいった者達にしてやれる事はない事も百の承知……最後は自分の道を進んで死にたいんです……だから、どかないなら貴方とは言え容赦はしません」

死を覚悟したキリアはもう誰も止められない。
そう思わせるほどにキリアの覚悟は大きかった。
しかし、それでもパープルハートは動かない。

パープルハート「どかない……私にも通さなきゃならない筋ってモノがあるの」

パープルハートはエックスセイバーを抜く構えをして、キリアを睨みつける。
そしてアンドロイドは紅桜を構えてパープルハートに対抗しようと

する。

キリア「行けぇぇぇぇぇ！！」
パープルハート「らァァァァァ！！」

キリアが攻撃命令をだすと、パープルハートが人の常識を超えた素早いダッシュでアンドロイドを襲い掛かる。
アンドロイドはそのまま『紅桜』で返り討ちにしようと誰もが思った。
しかしそこで予想外な事が起こった。

ザクッ！

何とパープルハートとアンドロイドが同時に隣にあった銅像を突き刺したのだ。

パープルハート「出てきなさい。貴方の濁りきった気配が分かるのよ」

パープルハートは銅像（？）に向かって言う。
すると銅像はひびわれて崩れ、中にいたのは何と全身真っ黒な幽霊みたいな敵だった。
ネプテュナーズは驚いた感じになり、頭に声が響く。

？？？「凄いな。ネプテューヌ。まさか私の気配に気づくとは守護女神としての力かい？」
パープルハート「貴様の濁りきった空気か充満してたら気付き辛いかもね」
？？？「酷い言いぐさをする小娘だな？」

パープルハートは皮肉な言い方をする。
そして現れたのは銀河で出会ったネオだった。

ネオ「久しぶりだな？宇宙の世界で出会って以来か？身の程知らずさん？」
パープルハート「身の程知らずなのは、私達を舐めているあなたでしょうに」
ネオ「まさか、」

ネオはおかしそうに頭を抱えて笑う。

ブラックハート「あなた…ネオ！！」
ホワイトハート「テンメェ…よくも性懲りもなく現れやがったな！？」
グリーンハート「しかも、私のリーンボックスに足をふみいるなど…」

他の女神たちは殺意を放ち、ネオを警戒する。

ネオ「ククククク、そう警戒しないでくれ。特別に面白いものを見せてやろう」

そう言って指を鳴らすと、黒い魔方陣の中から人型のイヴィルが現れる。

パープルハート「そいつは…？」
ネオ「こいつは変身能力を得意とする奴でね。例えばこんな感じだ」

ネオが説明した後、人型イヴィル・イヴィルゲンガーは形を変えて、パープルハートとなった。

だが目は赤かった。

パープルハート「変身能力……！！まさかっ！？」

パープルハートはイヴィルゲンガーの能力を見てある事を思い出した。

ネオ「気が付いたか？その通りさ！！この世界の数年前の事件、偽教院の正体はこいつなんだよ！」

パープルハート「なぜそんなことを！！」

ネオ「当り前さ！！『信用していたものが突然裏切った』というシナリオを作ればころっと騙されてくれるんだもの！」

アリエス「え？」

アリエスは耳を疑った。

ネオ「突然の裏切りによって友情はもろく崩れ去るもんなんだよ。所詮貴様らの友情とか絆とか結局形だけのまんまなのさ」

パープルハート「き～さ～ま～～～～～～～～～！！！！！！！！！！」

ネオの言葉にブチ切れたパープルハートが神速の如くネオに向かう。だがパープルハート姿のイヴィルゲンガーが立ち塞がる。

パープルハート「邪魔だ！！」

だがパープルハートはイヴィルゲンガーなどゴミみたいに切り捨てて、

パープルハート「死ねぇ！！ネオォォォ！！！」

修羅の目をしたパープルハートがネオをタタっ切ろうとする。

ズドォッ！！

パープルハート「ギャァッッ！！！！？？」

ネオ「獣は体細胞だな？」

だが黒い奴（以下、イヴィルガードマン）がパープルハートを殴り飛ばし、ネオは頭を抱えて言う。

ネオ「だがもうここまでだ。全て絶望に染まれ！」

パープルハート「させると…思っているのかァァァァァァァァァァ！！！！！」

パープルハートは暴走状態でネオに切りかかる。

～おまけ～

銀八「教えて！！」

全員「銀八先生！！」

アルテス「ユウカ様の信者、アルテスでございますわ」

銀八「ま～た変態か。しゃあねぇペンネーム『リィーン』からだ。『どうも！！　更新、お疲れ様です！！！

神「いよう（。ω。）ノ　ってか！！　また俺様活躍していないし！！！？」

いやいや、どこに活躍の場が在ります？

神「いいじゃねぇかよ！！！　あの人形共をぶっ壊すとかそれぐらいはしてもサァッ！！！！」

貴方の場合、今頃多分、あそこ上空で、浮かびながら盃片手にこんな事を言ってるかもしれませんよ？

←

神「クックックッ……面白し、あな愉快なり。復讐に取りつかれた愚かな暴徒の声、まこと心地よい。やはり祭りには、このような騒動が付き物と言える。クックック、せいぜい俺を楽しませる神楽を舞うがいい、人間共……クックックックックッ、クハハハハッ、アッハッハッハッハッハッハッ！！！！」

→

っていう感じに

神「あぁ～、ありえそう♪　めっちゃ傍観してると思うわ♪」

ってか、今までの戦闘も、全部こんな感じで傍観してますね、きっと

神「だろうなぁ♪　空に浮かんでで、攻撃の余波が来たらハエを払うようにはじいたり♪　まじで俺そう言う事してるわ、うん」

で、仲間がピンチになった時だけ、ほんの気まぐれ感覚で助力すると思うんですよね

神「うわぁなにその上から目線ｗ　俺じゃんｗｗｗ」

ですから、貴方が活躍するのは、そう言った時だけですよ……多分

神「まぁ好待遇を期待しようｗ」

そうして下さい（これでしばらくは、駄々こねる事はないかな）

神「なんか言った？」

イエナニモ。では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張って下さい！！！　失礼します！！！

神「ばいば～い！！」

あ、質問があるんでした

神「あるのかよ」

・新八君に質問。もし、銀さんを超えられる力を上げるよ。それも対価無しで。と、この神様が言ってきましたら、どうします？　もらいますか？

神「おぉ、俺太っ腹だなぁ♪……って俺がやるのかよ！！？」

貴方以外に誰がいます？』」

新八「めちゃくちゃほしいぞォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

真王「だそうです。『リィーン』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『フリーダム』さんだ。『Sフリーダム「復讐の連鎖は、簡単に止める事は、出来ない」

∞ジャスティス「だが、決して諦めない事だ」

デスティニー「頑張れネプテューヌ！！」

レジェンド「応援しているぞ」

アカツキ「では、質問の方に行こうか」

銀時に
デスティニーと1対1で、勝てるか

ネプテューヌに
銀時と二人っきりに、さぁどうする？

デスティニー「おいいいい！！勝手に俺を出すな！！そして二つ目は、お前が聞きたいだけだろ！！」

Sフリーダム「やれやれ…」

更新楽しみにしてます』銀時ならたぶん銀狼夜叉持ってるから勝てると思うよ？」

ネプテューヌ「銀さんと二人っきり！？えへへ～、どうしよう～♪」

真王「恋だな。『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

アルテス「続いてはペンネーム『鳴神　ソラ』ですね。『マリオ「バカだろ」

ルイージ「（あっさり言った！）」

マリオ「何でネプテューヌを裏切り者とするのかわかんねえな…そう言うのはもうちょい調べろ」

明久「ってか…名前が…」

ムッツリーニ「……俺じゃない」

スネーク「言ってないからな…」

リュカ「ツッコミ使い；」

ネス「ハーレムは暖かく楽しく見守るだよ♪ただし強制的なのはダメだ！！」

フォックス「叫ぶなよ…ネプテューヌ達に質問『ソロについてどう思う？』」

スネーク「一同に質問『ソロに称号を付けるならどう言うのを付ける？』」

ネス「質問『内のチルノについてどう思う？』」

ルイージ「それにしても…あの男…」

（一同の目がマリオに…）

マリオ「何で俺？」

次回を待ってます！』…まず最初の質問」

ネプテューヌ「ソラとゼロの融合名だね」

ノワール「普通ゼロって名乗りなさいよ。・・・あ、マリオの仮面ライダーゼロとぱくるわね…」

ブラン「・・・ソラもどき」

ベール「ウルトラマンゼロですか…」

アルテス「続いてはソロの称号よ」

紙に、『独奏（ソロ）』『ウルトラマンゼロ』『ソラもどき』『獣使い』と書かれている。

アルテス「最後にチルノだけど…」

全員「やっぱ馬鹿だな」

真王「だな。『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『ウィンド』さんからの質問だ。『ウィンド「遂に始まったか……」

リリス「果たしてどうなるか……見ものだな」

ウィンド「実は家の小説から1人来てるんだよね」

リリス「誰？「やほ～」シエル？」

ウィンド「そう。家のかいてるネプテューヌとなのはのコラボの主人公でネプテューヌ達の恋人のシエルだ」

シエル「暇だから遊びに来た」

リリス「そうか」

シエル「にしてもネプテューヌ達…大丈夫かな？」

ウィンド「やっぱり気になるか？」

シエル「まぁね」

ウィンド「ところでさ。二人がそろうと絵になるな」

シエル「そう？」

リリス「そりゃ全員男の娘だからな」

ウィンド「そう言えば二人は誰かと戦ったことはあるか？主人公の中で？」

シエル、リリス「「セレス」」

ウィンド「マジか！？」

シエル「ふふふ……あの時はぼこぼこにされたよ……」

リリス「改めて思い知らされた……上には上がいると言うことを……」
ウィンド「……聞くけどどうなったの？」
シエル「こっちは最初から変身までしてやりあってたのに……セレスは3、4割程度の力でしかやりあわなかった…」
ウィンド「リリスは？」
リリス「ダークトリガーを使ってやっと4割……」
ウィンド「……俺はとんでもない主人公を作っちまった（しかもやりあってたセレスの状態は普段の4割程度。つまりリミッターを体と魔力にかけてる状態で二人にかった。本気で殺れば間違いなく瞬殺だな）しかたないだろ。相手がセレスだったんだから」
シエル、リリス「うっ……」
ウィンド「さて、質問にはいるか？真王さんに頼みだ。次回、セレス達を出してくれませんか？お願いします！」
リリス「転生者メンバーに質問。セレス達とやりあって勝てるか？」
シエル「じゃあ俺も。なのはメンバーに質問。狂気に呑まれたメアとやりあって何分、いや何秒生き残れる？（黒笑）」
リリス「黒いな…」
ウィンド「と、とりあえず返答お願いします！」

リリス「ところで今回の話明らかに黒神さんの（ウィンド）「それ言っちゃだめ！」」『リリスとシエル以外は出てますよ？」
転生者組「難しいかな…」
レオン「いつでもいいぞ」

ガレーナ「フフ、余も楽しみじゃ」

真王「それからなのはさん達は『無理、勝てない』と言ってました。『ウィンド』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『黒龍』さんからだ。『黒龍「ネプテューヌとかつての仲間のアリエス達の対決が始まりましたね」

銀時「まぁあいつらの勘違いだけどな」

ソラ「ネプテューヌなら分かり合えるだろ」

黒龍「でも、昔はネプテューヌと共に戦った人たちですから強いでしょうね」

銀時「取り戻すのは容易じゃねぇな」

黒龍「なんにせよ、ネプテューヌがまた一つ成長しそうですね」

銀時「まぁ取り戻したら取り戻したでキャラが増えてどんどんカオスになりそうだけどな」

黒龍「とくにあのムツリなんかバカテスのあの人そのものですよね」

銀時「まぁ分かりやすいしな」

黒龍「じゃあ質問します。ネプテューヌに質問。『ネプテュナーズ』のメンバーの中で一番仲の良い人は誰ですか？」

銀時「今回は一つだけなんだな」

黒龍「まぁ最近は忙しいんで」『んじゃネプテューヌ」

ネプテューヌ「もちろんアリアとヒメラだよ」

真王「では『黒龍』さん、廊下に立ってなさい。続いてはペンネーム『ケン』さんからの質問です。『ブラン「死ねェェェェェクソ読者ァァァァ！！！」

ハンマーを抱えたブランがケンに襲い掛かるが・・・

ケン「甘いわ！！爆砕点穴！！」

人差し指だけでハンマーだけを粉々に破壊した。

ブラン「な、何ィィィィィ！？」

ケン「シャマパイの進化形態・・・スーパーパイを喰らえぇぇぇ！！」

シャマパイをベースにし瑞希の化学兵器並の料理とネリネの失敗料理がトッピングされたパイをブランの顔面にぶつけた。

ブラン「あんぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！」

ブランはあまりのマズさにこの世のものとは思えないような悲鳴を上げる。

尚スーパーパイの不味さはシャマパイを上回る。

ケン「熱中症対策として水分補給!!シャマルドリンク!!」

ブランの全身にシャマルドリンクを浴びせた。

ブラン「ごぼぎべごばぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

口に含んでしまいこの世のものとは思えない悲鳴を上げて気絶した。

ケン「ブランをあっちに帰します。質問です」

ブランを真王さんの所へ帰し、質問をする。

ジャンヌと新八へ

貴方達は新八の姉であるお妙にご報告へ行きますか?あの人は未来の義姉になる人ですから・・・

リリカルメンバーへ

自分の作品でははやては天使の力に覚醒しました。貴方達は勝てる自信はありますか?

銀さんへ

もし自分のラバーズが重度のヤンデレになったらどんな対応をしますか?

ケン「以上ですね。イメージ声優の件ありがとうございます。モリ

ガンボイスって田中理恵さんですか？マーブルＶＳカプコン３で変わっていましたし・・・」』では順番に応えますと…」

ジャンヌ「未来のお義姉様に！！」

新八「僕なんだかいやな予感しかしないんですけど！！」

リリカルメンバー「何…だと…？」

はやて「うちが天使か～」

銀時「Ｎｉｃｅｂｏａｔイ〝ヤ〝ァァァァァァァ！！！」

アルテス「・・・『ケン』人様のキャラを殺さないように。次はペンネーム『なめ猫』よ。『俺「どうも、なめ猫です」

ラムザ「こんにちは、ラムザです」

カイト「ごきげんよう、カイトっす」

俺「さて、次の話も読ませてもらいましたが、シリアスはまだ続きますな」

ラムザ「ネプテューヌが友と戦うことになったのか……だが…」

カイト「あぁ…俺達から見ても、いろいろ言う言葉はあるが…控えめにしないと。んじゃ感想から言おうか」

俺「ねぷねぷの重たい過去が、もし原作本編にもあったらどんなストーリーになるか……そんな好奇心をくすぐるほど、いい話を書いてるなぁというのがまず１つ」

カイト「次に、アリアだったか？あいつとは友達であるらしいが、ちょっと薄く感じてしまったのは俺だけか…？」

ラムザ「いや、わからなくもないよ？あれは、まだ本当の絆っていうのができてない状態にあるだけだと、僕は思ったよ」

カイト「なるほど、『友』の何たるかをどっちもまだ知らない様子

って考えてもおかしくはないか。けど、憎しみによる狂いっぷりが強いんだよなぁ…」
ラムザ「この手の話は、僕達の方では1、2つぐらいしかしない予定だから言ってもいいかもね。前に他の読者達が憎しみについて意見をしてる所も見させてもらったけど、これについても正解はないんだよね…」
俺「復讐を賛美する人もいましたからねぇ…何とも言えないっちゃ言えないんですが…それもだけど、どちらかというと『その先』のことが心配かなと」
ラムザ「そう…復讐にもいろんな形があるが、時として復讐がただの八つ当たりになる時、またはやりすぎになる時、そして…実はただの逆恨みになったりする時など、復讐心に捕らわれたままやる行動によって、その先が惨劇続きになるようじゃ…あまりにも悲しいものだよ…」
カイト「そうだな……賛否両方を考えて答えると、復讐の先にあるものを見据え覚悟できないのなら、復讐はするべきじゃない。そして、復讐は時として惨劇を呼びやすい……ま、俺達は復讐には否定的な方だけどな」
ラムザ「願わくば、アリアもそれに気付くといいのだが……よく見ておこう」
俺「さて、今回はまじめに質問ですが…」

1．ビビへ
百合ハーレムの先に何を見る?

2．ネプギアへ
今のネプテューヌの話を見ていて、どう思う?

俺「以上。ではまた」』」

ビビ「その先?分かってないなめ猫。その先は永遠の愛を完成させるのよ!!」

ネプギア「復讐はいけないことです!!復讐をしたって得られるのは虚しさしか残りません!!」

真王「その通りだ。故に『なめ猫』よ。廊下に立つのだ」

銀八「(何雰囲気変えてんだ?)次はペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。

しかし…アリア以外の『ネプテューヌ』の面々が、何だかバ○テスの主要キャラっぽい気が…とくにムッツは(汗)。

輝刃「…そこはそっとしておいてやれ…。と…質問…行くぞ?まずは俺からだ。」

1.真王に質問…前に閃火がメッセージか感想書きで投稿したオリキャラの事なんだが…現在の状況を教えてくれないか?

あ…そういえば、書いたね俺…。確かにあれから約1ヶ月って所だけど…ちょっと気になるかな。次は俺からだ。

2.アリエスに質問…正直言って、好きな男性のタイプって…何?

輝刃「…完全に中学生並の質問だな…(汗)。」

うぅ…だって気になるじゃんかよ~…撫で撫で♪(そう言いながら、遠隔技法でアリアの頭を優しく撫でる)』スマン、作者は最初諦めようと思ってたらしい」

ネプテューヌ「酷くない！？」

アルテス「ストーリーがあわないだけよ。まぁこの祭編が終わったやるつもりよ。次はアリエスね」

アリエス「う～ん、かっこよくて私に着いてくれる人ですね。それから撫でないでください」

そう言うがいつは満更じゃなかったり…。

真王「では『月光閃火』さん、何か待っちゃってスイマセン。次はペンネーム『ＨＡＲＵ』さんだ。『ポカブ「何か、ヤバい展開になってるブーッ」

ミジュマル「アリエスの気持ちも解らない…でも！！」

ツタージャ「やっぱり、どんな理由が有ろうとも復讐は間違っている！」

エムリット「キリアもアリエスも勝手過ぎだよ！」

ポカブ「そうだブーッそれではただの自己満足だブーッ！！」

ツタージャ「二人に質問するけど、守護女神達の妹達はどう思っているの？立場じゃなくて、個人としての思いで答えて！！」（グラスミキサーでアンドロイド達を一掃する。）

ミジュマル「でなきゃ『シェルブレード』で駒切りにするよ！！」

（そう言うとホタチでアリエスの剣とアンドロイド達のに付いてい

る紅桜を使い物に成らない位に切り刻んだ。）

ポカブ「オイラも！『ニトロチャージ！』」（ニトロチャージでアンドロイド達を火だるまにする。）

エムリット「私だって！！『サイコショック！！』」（サイコショックで『電杯』に誤差道を起こさせ、同士討ちにさせている。）

ＨＡＲＵ「言っている事は間違ってないけど、暴れ過ぎ！」『」

キリア「私としてはかわいらしい人だと思います」

アリエス「ネプテューヌよりもしっかりしてそう……あ！失言でした！」

アルテス「もう遅いわよ。『ＨＡＲＵ』もう廊下に立ちなさい。ペンネーム『きっと木の精だ』からの質問。『木の精だ「ご無沙汰しております、きっと木の精だです！」

恭平「復讐ねぇ……俺はやろうと思った事ないから気持ち全然わかんねーわ」

こなた「ん～……でも、否定は出来ない、かな？あんな事やられたら例え八つ当たりとか自己満足とか言われてもやりたくなると思うよ」

木の精だ「でも何もわざわざ祭りの日にやらんでもいいんじゃないかとお思いながら質問一つ行きます！」

真王先生に質問

ぶっちゃけキャラ増やしすぎて、登場の台詞を捌ききれず、何かもう長い事放置が続いてる奴出てきたりして”やっちまったな～”と思った事はありますか？

木の精だ「これからも頑張ってください！応援してます！！」『」

真王「そんなことはない」

アルテス「断言しちゃったね。『きっと木の精だ』、廊下に立ちなさい。これが最後よ。ペンネーム『黒神』さんから。『質問します。

ネプティーヌへ

新八はリリカル銀魂シリーズで親衛隊の隊員から無理矢理、法律違反と言うなで無理矢理『リリカルなのは』のＤＶＤを奪ったようですが、そんな新八にどう思いますか？』」

ネプテューヌ「えいっ♪」

ザクッ！

新八「ギャアアア

ジャンヌ「新八く～～～～～～～ん！！！」

真王「は～い、では『黒神』さん、久しぶりに感想をありがとう」

アルテス「次のアシストはチフユさんよ…じゃあね」

第九十訓：事件には第三者が絡む場合がある（後書き）

真王「真実を知ったネプテューヌは暴走知る修羅と化した。果たして銀時達は間に合うか？そしてゲイム業界を救えるか？」

チフユ「次回『戦友は絆が深い』テイクオフだ」

第九十一訓：戦友は絆が深い（前書き）

真王「『ゲイム祭編』の最後です。それでは」

第九十一訓：戦友は絆が深い

前回のあらすじ

ネオが『プロジェクトハード事件』の真犯人だと知ったネプテューヌは怒り任せでネオと対峙した。

ＩＢＧＭ悪意ｂｙ魔界戦記ディスガイア４（Ｄｉｓｇａｅａ　４　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｐｉａｎｏ　Ｓｏｎａｔａ　Ｄ　Ｎｏ）

パープルハート「ァァアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

パープルハートは乱暴に剣を振り回す。

ネオ「何と凶暴だな。復讐心を開放させるとこれほど凶暴になるとは」

ネオは暴走状態のパープルハートを見てそう言う。

パープルハート「コロスッ！！」

ただ獲物を狙う獣のようにネオだけしか見ていないパープルハート。

レオン「あのバカ者め、復讐に飲まれて周りが見ていない！」

ガレーナ「援護でもするか？」

ネオ「君達はこいつらとやると言い」

レオンがパープルハートを見て鋭い目で見る。
ガレーナがなぎたなを構えていこうとすると、ネオが指を鳴らして新たなイヴィルを召喚した。
それは漆黒な色をしている西洋風の鎧騎士・イヴィルナイトが現れた。

レオン「ほう?骨のありそうな奴らだな」
ガレーナ「全くだ」

イヴィルナイトを見た二人は戦闘態勢に入った。

イヴィルナイト「ウォオオオオオオオオオ!!!」

一体のイヴィルナイトが剣を振り上げた後レオンに振り下ろす。
レオンは避けた後懐に入り込んで一撃を与える。
イヴィルナイトはひるんだが負けじと剣をふるう。

レオン「スキアリッ!!」

レオンは自慢の脚力で剣を弾き飛ばした。
イヴィルナイトの剣が宙を舞う。

レオン「こいつをプレゼントだ。疾風脚!」

空中に飛び上がり、風を纏いしキックでイヴィルナイトを撃破した。

ガレーナ「軽く一体目か、まだ余裕じゃな」

3体のイヴィルナイトに囲まれながらもガレーナはレオンを見ている。

ガレーナ「さて…」

懐から薙刀を取り出し、囲んでいた3体のイヴィルナイトを切り捨てた。

ガレーナ「余も負けていられんわ！」

グレイとビビは5体のイヴィルナイトに囲まれている。

ビビ「スッゴイ気迫してるね～（￣￣；）」

グレイ「騎士（ナイト）ねぇ、俺にはどうでもいいことだがな」

イヴィルナイトから発する威圧に感心するビビにどうでも好さそうにするグレイ。

ザック「どうでもよくねぇぇ！！！」

グレイ「？」

ビビ「え？」

イヴィルナイト×5「？」

ところがザックが否定を出す。

ザック「わかってないないおい！騎士（ナイト）、それすなわち主君を守ると

いう重要な役割を持つ兵士さ！」

つかつかと歩いて語るザック。

ザック「騎士という気品を分からん奴はそれを語る資格はな…」

ガツンッ！

ザック「イデェ！！」

ビシッ！とカッコよくグレイ達を指差して言うザックだが、後ろから剣で叩かれる。

ビビ「何がしたいのあの男…」

ビビは呆れるしかなかった。

ザック「イッテェなこのやろ！そっちがその気ならこっちもやってやるぜ！！」

ザックは起き上がってバスターソードを取り出した。

それに反応したイヴィルナイトの一体が剣を振り上げる。

ザック「ウオオオオオオオ！！！」

ガギィン！！

ザックとイヴィルナイトがぶつかり合った。

ザック「見せてやるよ！ブラックウイング！」

とザックのマントの上から黒い片翼が現れる。

ザック「喰らえェェぇ！！！」

水平に飛行してイヴィルナイトを切り捨て、イヴィルナイトを一体撃破した。

ザック「どうよ俺の実力は！」

ビビ達に無かってサムズアップするザック。
そんなザックの後ろにイヴィルナイトが剣を振りかぶって……動いていない。
いや、正確には動けない。

ムツリ「ニン…影払い…」

イヴィルナイトの影にくないが刺さっており、影払いを出したのはムツリだった。
そして一瞬消えたと思ったらイヴィルナイトの目の前に現れる。
ムツリが刀をチャキンと納めると、

イヴィルナイトは倒れた。

グレイ（アレがネプテュナーズか…、特殊部隊は伊達じゃないと言うことか…）

グレイは少し評価する。
そして残り三体を見てみる。

ヒメラ「レイジングボルト！！」

ヒメラがマジックロッドで魔法を発動させ、落ちてきた雷でイヴィルナイトの一体を撃破する。

レグナ「ウオラァァァァァア！！！」

レグナは右手に黒い炎を纏い、イヴィルナイトを殴り倒す。

ラート「行きます」

ラートはんなんだが真っ黒でとげとげが多いバットを構える。
すると目が黄色から真っ赤の染まって…

ラート「とっとと潰れやがれこの木偶の坊どもがぁぁぁぁぁ！！！！」

まるで人が変わったかのようにボコスカとイヴィルナイトを潰しまくる。

ビビ「ちょっとォォォォォォォォォ！！！！？？あの子メッチャ人が変わってるんですけどォォォォォォォォォ！！？」

ラートの豹変にビビは驚かずにはいられない。

ブラックハート「ああ、ラートは二重人格なのよ」
ホワイトハート「戦闘欲が出ると人格が変わるの」
グリーンハート「そして容赦ないのが玉にきずですが…」
ビビ「ああ、そう…」

女神たちの説明にビビは顔を引き攣るしかなかった。

グレイ「それはどうでもいいが、後ろも気を配っとけよ」
ビビ「へ？・・・うきゃぁ！！」

グレイが今にも振り下ろそうとするイヴィルナイトを見ていい、ビビはギリギリ避けた。

ビビ「ッ～～～！！やってくれたわね！！あんた達に苦しい物をくれてやる！！」

ビビはイヴィルナイトにそう言うと、

ビビ「謳よ、世界に響け……」
全員「？」

突如、鉄琴を奏でるような音が、聞こえた……

ビビ「詩（ヒュムノス）『ｒｅｊｅｃｔｅｄ　ｔｈｅ　ｄａｒｋｎｅｓｓ（拒絶される闇）』」

それは、悪意なる物を追い払う詩（うた）。

ビビ「真紅の闇よ、うち払え♪混沌の闇を消滅せよ♪星の光よ、混沌をうち払え♪」

グレイ「……妹…」
神「詩か（ヒュムノス）、・・・」
アリエス「これは…？」
なのは「なに？この歌？」

神楽「何ねこれ？」
桂「聖歌か？イヤ、それとはちょっと違うな…」
グリーンハート「見事な歌ですわね…」
パープルハート「？」

この場にいる全員は今彼女が歌っている歌に、聴き惚れていた……
…神聖な、聖歌に似た歌は、彼女達の心を……否、彼女達を含む、
その場全員の心を、美しく、洗い流すように、洗練させていった。

ネオ「む？なんだこの忌々しい歌は！？あの小娘を殺せ！」

ネオにとってはうっとしそうな歌らしく、命令を下す。

イヴィル軍「ア”～～ア”ア”ア”ア”～～～～！！！！」

だがイヴィル軍がもだえ苦しんでいた。
イヴィルナイト達もそうだ。

ビビ「（お～、効いてる効いてる）みんな！今だよ！」

ビビは、“謳いながら、口頭で”全員に指揮をしだした。

ドガシャーーーン！！！

ブラックハート「よし、討伐完了！」
ビビ「イヤ、早っ！！？？Σ（@Д@；）」

もうすでにイヴィル軍が全滅したことに突っ込むビビであった。

パープルハート「さて、残りはあなた一人ね」

とパープルハートがエックスセイバーを向けて言う。
先ほど体の中に渦巻いていた殺意と怒りがきれいさっぱり洗い流された気分だ。

ネオ「フフフフ、この手の場合は奥の手を隠すもんだろ？」

ネオがパチンと指を鳴らす。
すると新たなイヴィル・イヴィルキマイラが現れた。
牛、鷹、虎の頭と蛇の頭の尻尾を持つモンスターだ。

イヴィルキマイラ「グモォォォォォ！！」
パープルハート「クッ！」

いきなりイヴィルキマイラが突進してきたが、パープルハートが素早くかわす。
だが急カーブUターンでもう一度接近してきた。
パープルハートは接近するイヴィルキマイラを見て、にやりと笑った。

パープルハート「アリエス！！」
アリエス「ここに！」

パープルハートがアリエスを呼ぶとアリエスが隣に現れる。
そしてお互い剣を構えて、

パープルハート・アリエス「歌歌竜牙（ソンソンリュウガ）！！！」

居合切りの如く、イヴィルキマイラを倒した。

ザック「へっ、久しぶりに見たな、ネプテューヌとアリエスの合体技」

ザックは鼻をさすって言う。

ネオ「貴様、そいつに復讐するんじゃなかったのか？」

ネオがアリエスに聞く。

アリエス「ええ、かつての私はネプテューヌを恨んでいた。私達を捨てたと思い込んで憎しみを抱いていた。けどそれが大きな間違いだった！！！」

アリエスがエックスブレイドをネオに向ける。

ネオ「…貴様は確か鬼兵隊に入ったんだろう？彼らを裏切るのかい？」

アリエス「その辺はムッツリが手配してくれたわ」

鬼兵隊

机の上にアリエスたちネプテューナーズの辞表紙がある。

鬼兵隊員「なんじゃそりゃァァァァァァァァ！！！！！！！？？」

鬼兵隊はパニックになっていった。

ネオ「これまたずいぶんと準備の早い…」

ネオはそれを聞いてあきれる。

アリエス「真実を知った以上、私はお前を許さない。私は、ネプテューヌさんを守る騎士となる！！」

高々と思いを言うアリエス。
だがネプテュナーズの男性陣はあ～あという感じになり、ネプテュナーズ含む女性陣のほとんどは少し顔を赤らめる。
ついでに隣にいるパープルハートも顔を赤くする。

パープルハート「アリエス、それ遠回しに告白を言ってるわよ…」

アリエス「え？……ああああああああっ！！」

パープルハートに突っ込みにアリエスは惚けるが思い出してシャウトした。

アリエス「ぅぅ・・・勢いはずみでいってしまった…。しかし悔いなどいりません！！今ここに正式な告白をします！！」

アリエスはパープルハートの手を取ってこう言った。
周りのほとんどは彼女達を応援する声が。
パープルハートはにっこり笑って、

パープルハート「ごめんねアリエス、私は銀さんっていう心に決めた人がいるから」

ビキィッ！

彼女の心が壊れたかのような音が聞こえた。

銀時「お～い、ネプテューヌ～！」

すると銀時がやってきた。
イヴィル軍からやっとのことでここまでやってきたようだ。
ちなみに高杉はあのあと逃げだしたようだ。

パープルハート「あら銀さん」
アリエス「何？あの男だと？」

アリエスが銀時を睨む。

銀時「なぁ、そいつ誰？」
パープルハート「銀時、また一つ悩める種が増えるわ」
銀時「え？」

銀時がパープルハートにくっついているアリエスについて聞くと、
パープルハートは真顔で銀時にいい、銀時は面食らう。
そしてアリエスから殺意を感じ取った。

アリエス「貴様か私のネプテューヌさんを誑かしたのはァァァァァァァァ！！！！！」
銀時「オイィィィィィィィ！！！初対面早々何言ってんのォォォォォォ！！！」

いきなり刀を振り回してきたので驚く銀時。

アリエス「うるさい！私のネプテューヌさんを誑かし、あまつさえ獣のように襲おうと考えているだろ！？」

銀時「んなわけあるかあァァァァ！！！大体あんなちっこい体に何の興味もねぇよ！！」

パープルハート「なら今の私ならいいわけ？」

銀時「そう言う問題でもねぇよ！！」

アリエスと銀時の言い合いは少し醜い。

アリエス「こうなればあなたの首を切り落と「止めなさい！」あいた！」

剣を構えて殺す気でいるとパープルハートに叩かれた。

パープルハート「かってに人を殺そうとしないの！」

と言ってアリエスを抱き寄せる。

アリエスはパープルハートの温かさに頬を赤らめる。

アリエス（温かい…このままでいいかも…）

アリエスは安心そうな顔をする。

パープルハート「言っておくけど私は銀さん一筋だしファーストいただいちゃってるから？」

ギロォッ！！

だがパープルハートの一言にアリエスは銀時を睨む。
それを見た銀時は怖気づいた。
ネプギアはひきつった笑いを浮かべ、ユニは軽蔑する目で見て、ロムとラムは顔を赤らめる。

ネオ「貴様ら！ふざけるのも大概にしろ！！なんなんだこの茶番は！！」
レオン「悪党を前にして茶番は駄目だったか？下種の本性が漏れてるぞ？」

ネオがこの光景に切れて、レオンがそう言う。

パープルハート「あなたの目的は今ついえた。覚悟しなさい！」
ネオ「潰えたって？ところが私の計画はまだ終わってないんだよ」

パープルハートの言葉をしり目にネオは余裕でいう。

ネオ「残念だったな！私は世界を滅ぼすまで終わる気はないからな！」
？？？「んじゃここで死ぬか？」

ふと後ろから声が聞こえ、その者の攻撃を止めるネオ。

ネオ「別次元の神か」
神「俺様は滅ぼす方は止めねぇが、俺様の物を壊すのはいただけねぇな！！」

と虹色に輝く大鎌を振る。

ガシィッ！

ネオ「！？」

ネオがなにかに捕まった。

バインドだ。

神「くらいな、デストロイフォーーーーーーーール（劣化１／１０００）！！！！！」

と黒い光がネオに向かって降り注がれる。

煙がはれるとイヴィルガードマンを盾にするネオがいた。

イヴィルガードマンの体中がひびが入っている。

神「ちょぴっと本気を入れてみたんだが、なかなかの硬さだなおい」

神はイヴィルガードマンの硬さを評価する。

ネオ「（いかんな、まともに相手をすれば勝ち目はない。世界を地獄に落とすにもやられるわけには…）今日は部が悪いな。引くとしよう」

パープルハート「待て！」

ネオはどこかへ転移してしまった。

変身を解いてネプテューヌになる。

ネプテューヌ「逃げられたね…」

ネプテューヌは拳を握る。

アリエス「ネプテューヌさん…」

アリエスはそんなネプテューヌを見る。

ネプテューヌ「でも…」

ネプテューヌはアリエスに向き直る。

ネプテューヌ「また会えてうれしかったよ、アリエス」

それを聞いたアリアは驚き、目に涙を浮かべる。

アリエス「う、うえぇぇ～～～～ん！！私も会いたかったです～～～～～！！！」

挙句泣いてはネプテューヌに抱きつく。

ネプテューヌはそんな彼女をよしよしと慰める。

ザック「ころころとキャラ変わりやすいな」

アリエス「なんか言った？」

ザック「言ってません」

ザックの呟きにアリエスが睨む。

アリエス「…ん…ごほん、我ら『ネプテュナーズ』ただいま戦線に復帰いたしました」

ネプテューヌ「ん、それじゃあ、また私達を一緒に戦ってくれる？」

アリエス「喜んで！」

こうして、アリア達『ネプテュナーズ』は仲間に加わった。

グレイ「ついでにいっておくが、もう少し味方が出来るぞ？」
とグレイが後ろを指差す先には、エール、コヨリ、メア、セレスだった。
ヴィヴィオ「あ、さっきの」
エール「また会ったね」
グレイ「さっきの戦いを見て、一緒に戦いたいってさ」
はやて「それは願ってもないことや。協力するで」
『エール』『コヨリ』『メア』『セレス』が協力することになった。
勇華「それにしてもセレスねぇ、初めて会った気がしないわね」
セレス「奇遇ですね。私もあなたみたいない人とは初対面とは思えないんです」
勇華「なんて言うか、私達いつか恋人になれるかしら？」
セレス「…あなたが積極的にかと思うけど…」
くねらせる勇華に冷や汗を流すセレス。
こうしてゲイム祭は無残な姿になったが、ベールによるなんやかんやで復活し、みんな祭を楽しんで行きました。
そしてキリアは自分の罪を償うためにプラネテューヌでひっそりとくらしているのは余談である。
【ゲイム祭編：ＥＮＤ】

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

チフユ「今回の質問のコーナーのアシスタントは私がやろう」

銀八「おう、じゃあ行くぜ？ペンネーム『鳴神　ソラ』さんからの質問だ。『ソロ「おい、最初の称号は関係なくないか；」

チルノ「と言うかバカの一言で終わった！？」

ゼロ「行くぞ！あいつを止めに！」

リュウケンドー「良し！」

ソロ「パーティの前の出会いって事で行くか…」

ネオス「はい！」

ネクサス「……了承」

クッパ「行くのだ！」

冥王「なの！」

銀次「うん！」

ルイージ「僕も！」

フォックス「今度はヴィヴィオとプリニーに質問『ソロについてどう思う？』」

スネーク「質問『内のピットについてどう思う？』」

ワリオ「同じく『内のピットに称号を付けるならどんな感じだ？』」

次回を待ってます！』ズバリお答えしよう」

ヴィヴィオ「空お兄ちゃんとそっくりだったね」

プリニー「ウルトラマンッス！」

真王「彼は天使、それなのに破壊者（ディゲイト）はちょっと違和感がある。ちなみに称号は…」

紙に、『飛べない天使』『天使なのに破壊者』『ショタ』『ヤラレ

チャッタ♪』と書かれている。

チフユ「では『鳴神　ソラ』よ。背筋を伸ばして廊下に立て！次はペンネーム『ケン』だ。『統夜「皆・・・祭りを邪魔されたら怒るのは無理も無い」

はやて「そっちの私とリリカルメンバー達・・・驚いてるな～」

統夜「まぁな・・・身体能力も規格外になる可能性もあるからな」

はやて「ネオっちゅう奴は酷いな・・・ああいうやり方は許せへんな・・・」

統夜「いくら神でもいつか報復がやって来るぞ・・・ギルシアへ質問・・・アンタはレーティアと可愛い幼女・・・一つの選択肢しか無い場合はどちらを助ける？」

はやて「あっちのリリカルメンバーに質問や・・・私が天使と聞いて似合わないと思った？」

最後は近藤へ

新八やジャンヌに対し義兄さんと呼べと言いましたか？
止めた方がいいっすよ。お妙と結ばれる可能性は０に近いのに・・・

以上です。

はやて「天使になった私って統夜の剣術とか扱えるんか？」

統夜「そうだな・・・瞬歩は勿論刹那と月牙天衝のような技が扱え

る・・・レオン教官から基礎的な事を学んでからだな・・・瞬歩と刹那は俺しか出来んし・・・教えるぞ」

はやて「ありがとう・・・統夜・・・」

統夜「雪蓮やシャルさん、メアリも一緒だが・・・」

はやて「そ、そうやな・・・私だけやと・・・不公平やしな・・・あははは・・・」

統夜「人族の場合・・・魔法で補うしか出来ないかな・・・ソニックムーブとかあるんだし・・・人間にも可能性があるよ」『一つ目ならあいつは絶対両方取る気だぞ…」

真王「それとリリカルメンバーははやてが天使なんて似合わん。どちらかというと堕天使(たぬき)だな」

はやて「ちょいまちぃ。今堕天使と書いて何と呼んだんや?」

真王「木の精だ!」

チフユ「字が違うぞ。最後は近藤、答えろ」

近藤「いやまだ呼んでない。だがお妙さんと結婚するのは確実だ」

真王「諦めの悪い…。『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「続いて、ペンネーム『フリーダム』さんからの質問。『Sフリーダム「黒幕登場!!」

∞ジャスティス「ネプテューヌ達の絆を砕いた張本人！！」

デスティニー「許せねぇ！！」

レジェンド「ネプテューヌ落ち着け！！やみくもに攻撃しても通用しないぞ！！」

アカツキ「どうなっちまうんだろうな…」

ノワール「とりあえず、質問に移る…」

銀時に
この世から、パフェというものがなくなったら、どうする？

銀魂組・リリカル組に
カービィ１００人から、吸い込まれず（食われず）に生き残れるか？

スターゲイザー「何か、吸い込むの裏に別の意味の言葉があるような…」

更新楽しみにしてます』っておいィィィィィィ！！！パフェが無い世界なんていらねぇよ！！」

銀時「そうだ！！パフェが無いなら作ればいいんだ！！」

チフユ「作るのか？次の質問だが、ほぼ全滅が目に見えるな」

真王「直球だな。『フリーダム』さん。カービィに食われないでね。次、ペンネーム『月光閃火』さんから。『ども…月光閃火だ。

さて…とりあえず、イ～ヴィ～ル～…狩りじゃァアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！（そういって、パープルハートに変身したイヴィル・ゲンガーの背後を取り腰にしがみつくとそのままバックドロップをかましたあとガリガリ…と引きずる）

輝刃「…（汗）。さすがのイヴィルも、これはキツいだろう…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．キリアに質問…もし、他の世界のロボットが作れるって言われたら…どの世界のロボットを作りたい？

1…『機動戦士ガンダムシリーズ』の『MS（モビルスーツ）』

2…『マクロスシリーズ』の『バルキリー』

3…『マジンガーZ』や『ゲッターロボ』等の『スーパーロボット』

ハハハ…どれも凄まじい事になりそうだ…（汗）。次は俺からだ。

2．アリエスに質問…じゃあ、もしアリエス好みの異性から『俺を…君の騎士（ナイト）にしてくれないか？』と言われたら…やっぱり心にドキュン！と来ちゃう？あと…撫で撫で♪（そういって、遠隔技法でアリエスの頭を優しく撫で続ける）

輝刃「…余程気に入ってるのか、かなりストレートに聞いたな…（汗）。というか…今時そんな告白言う男が居るか…？」』ではお二方」

キリア「う～ん、1番のほうですね」

アリエス「私はネプテューヌさん一筋ですので（キッパリ）」

真王「うわ言い切った。では『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

チフユ「次はペンネーム『亀鳥虎龍』だな。『上条「汚ねぇことしやがる、あのネオって野郎」

剣心「他者の信頼をあの様な形で砕くとは、許せん！」

一方通行「どの世界でも、汚ねェ考えの野郎がいるみてェだな！」

沖田に2つ質問です。

1．僕の小説『万事屋奇譚幕』では、土方の影が薄くなってます。嬉しいですか？

2．『銀魂ライダーディケイド』では、一番活躍しています。嬉しいですか？』では沖田、答えろ」

沖田「どっちかって言うと土方さんがくたばる方が嬉しいんでさぁ」

チフユ「人を殺すな！」

バコッ！

沖田「オゴォッ！」

沖田はチフユのチフユバスターを受けた。

真王「本の角っ子は痛いぞ～。『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『黒龍』さん。『黒龍「おお、ここで黒幕登場ですね」

銀時「アリエス達もこれでネプテューヌと和解するだろうな」

ソラ「ま、真実知ったしな」

黒龍「このままあっちのアリエスがネプテューヌのライバルになると思ったんですけど」

銀時「やっぱアレじゃねぇか？新キャラなんだから敵キャラよりも味方キャラにしたいって奴じゃねぇか？」

黒龍「まぁ気に入ったキャラはだいたい主人公の味方にしたいって思うのは当たり前ですからね」

ソラ「それにしてもだ、キリアもアリエスも利用されたってところだな」

銀時「まぁネオならやりかねないだろ」

黒龍「まぁそろそろお開きにして質問いきます。今回は新八と神楽と土方から質問があるそうです」

新八「神さん、真王さん、女神四人に質問です。なんか知らないんだけど最近読者から何故か罵詈雑言が耐えません！なんでいつも僕だけこんな目に遭わなきゃいけないでしょう！？なにか良い対処法があったら教えてください！！ホントマジで！！」

神楽「私はそっちの女性陣に質問アル。あ、答えられる人数だけで良いネ。最近ぱっつぁんがロリコンオタクに堕ち気味と言うかもう堕ちてしまったアル。さすがにキモいからなんとかして欲しいネ」

土方「そっちのメガネに質問だ。お前、彼女が出来たらしいけどよ、こっちのお前は読者から罵倒の嵐、そしてロリコン疑惑のある可哀想な奴になっちまった。それで、そんなお前を見てどう思う？」

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『順番に答えるなら、新八がカッコよくパワーアップする方がいいかと」

神「俺様なら神の力を授けようか？」

女神組「う～ん、まぁ頑張って？」

真王「なぜ疑問形？次」

女性陣「・・・・・・・・・」

新八を軽蔑する目で見ている

ジャンヌ「新八君が…？でも許す！なぜなら、私もオタクだから！」

真王「だろうな。次」

新八「そっちの僕ですか？……フッ（勝ち誇った笑み）」

真王「おい、『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

チフユ「次の質問はペンネーム『カーバンクル』からだ。『カーバンクル「どーもー。カーバンクルでございます。質問は3つです。」

1・銀さんへ
もしも一ヶ月間のご飯が土方スペシャルになったらどうしますか？
ちなみに逃げ出そうとすると屁怒絽さんが捕獲しに来ます。

2・ネプテューヌへ
もしも銀さんが二度と戻れないほどの憎悪に染まり、全てを破壊する存在になってしまった時、あなたはどうしますか？（真面目に質問しています。）

3・新八へ
ブロリー「お前だけは簡単には死なさんぞ・・・」
→に勝てますか？（大爆笑）』」

銀時「マヨラーのなんて食いたくネぇが屁怒絽がくんのはもっといやじゃぁァァァァ！！！」

ネプテューヌ「その時は全力で銀さんを止める！！」

新八「勝てるかァァァァァ！！！（激汗）」

チフユ「ふむ、では『カーバンクル』よ。バケツを持って廊下に立て」

真王「最後だな。ペンネーム『ウィンド』さん。『バキバキドカガシャーン！！！！

ウィンド「はぁはぁ……シエルとリリスの奴……いくらネオが許さないからって真王さんの所に行こうとするなよ。あっちにはセレス達がいるから大丈夫だろ（特にセレスが）「作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」何だ！？」

レイド「作者！大変だ！」ウィンド「誰かと思えばメアの仲間のレイドじゃん」

レイド「あ、どうも。って違うわ！ヤバいんだよ！」

ウィンド「落ち着け。質問するから落ち着け。真王さん。そろそろセレス達の正体を明かしてください。お願いします」

レイド「一応俺もだ。ネオ。セレスとメアを舐めるなよ。奴らとやりあうなら覚悟するんだな」

ウィンド「で、何があった？」

レイド「そうだ！吸血鬼姉妹が真王さんのに向かってる！」

ウィンド「何ぃ！？マジか！」

レイド「ああ。美琴を含めたメンバーは任務でいないからむりだ」

ウィンド「……逝くか」

レイド「……ああ」

ウィンド、レイド「こいやぁぁぁぁぁ！！！」

ドカバキグシャドゴガシャーンバキバキドォーン！！！

レイド「と、止めた……ぜ（ガクッ）」

ウィンド「真王さん……吸血鬼姉妹には注意して……くだ……さ……い……（ガクッ）」

チーン

作者、レイド終了のお知らせ。』この話が終わったらもう知りましたみたいになりますよ。それにネオは神様とほぼ同じ実力かちょっと下程度なので知りませんね。『ウィンド』さん、これからは生きろ」

チフユ「他人事みたいに言うな。次のアシストはあいつの妹、ネプギアだ、ではな」

真王「おっと、バトンを公開するか」

『このバトンは敵の攻撃で状態異常を起したときにどんなセリフを出すかというバトンです。
キャラは上から順にアリエス、ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート

1：毒
「く！毒攻撃ですか…」
「やっべ、気分が悪いぜ…」
「・・・・・・（ふらふらしている）」
「か、回復させます！」
「こんなもん浄化してやるぜ！」
「気持ち悪い…」
2：猛毒
「ぐぅ…これは…」
「コツはヤベェぜ…」
「・・・・・・（頭を押さえている）」
「ゴフッ！（吐血）」
「浄化してやる！」
「ヴ～～・・・」
3：マヒ
「痺れますね…」
「体がマヒしてやがる！」
「…動けん」
「体がピリピリします…」
「マヒか…」

「ピリピリ～」

4：ヤケド

「アチチチチチ！」

「俺のケツがぁ！！」

「・・・・・・！！！！（のた打ち回っている）」

「あ、熱いです！！」

「うわっちち！」

「あ、熱い…！」

5：氷結

「くっ！体が！」

「さっびぃ！！」

「・・・寒い」

「か、体が…」

「クソ！動けねぇ！」

「さ、寒いです…」

6：石化

「・・・・・・・」↑固まっています

「・・・・・・・」↑固まっています

「・・・・・・・」↑固まっています

「・・・・・・・」↑固まっています

「・・・・・・・」↑固まっています

「・・・・・・・」↑固まっています

7：眠り

「スゥ～、スゥ～Ｚｚｚ」

「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…」

「・・・・・・・」↑立ったまま寝ている

「スヤスヤ、スヤスヤ…」

「グカ～～！」

「・・・・・・・」↑本格的に寝ている

8：沈黙

「・・・・・・・!!」↑「くそっ!私がこんなことに!!」と言いたいらしい。
「・・・・・・?」↑「ジャスチャーすれば分かるか?」と言いたいらしい。
「・・・・・・」↑しゃべってない
「・・・!?・・・・・・!!?」↑「ふえ~!?どうなってるんですか~!!?」と言いたいらしい。
「・・・・・・」↑「これじゃあ声出すこともできねぇ…」と言いたいらしい。
「・・・・・・」↑「しゃべれませんね」と言いたいらしい。
9:ド忘れ
「へ?ここは何処?私は誰?」
「えと?何やってたんだっけ?」
「?????????」
「確かバトルをやってたような…?」
「何だっけ?」
「忘れました」
10:混乱
「え?え?え?え?」
「うおおおおおおおお!!!」
「……!」↑自身を抑え込んでる
「ホッヘラポッポッポ~!」↑混乱中
「あれ?どっちだ?」
「わたし?おれさま?うち?オレッチ?」
11:堕落
「あ~、面倒癖…」
「ヤル気でねぇな~」
「・・・・・・」↑カメラの興味も失せた
「・・・・・・」机に突っ伏している
「ヤル気が出ねぇ…」

「めんどくさい…」
12：鬱
「ハァ…うつだ…」
「ハァ…どうでもいい…」
「……」↑落ち込んでるように見える
「どうせ私なんて…」
「鬱だ…」
「死にたい…」
13：暴走、バーサーク
「キサマァァァァァァァ！！！」
「俺の魂が泣き叫ぶゥゥゥゥゥゥ！！！」
「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」↑スカートの中を激写
「私に料理は世界一イィィィィィィィィィィィィ！！！！！！！」
「全部くたばれぇェェェェェェェェェェ！！！！！」
「ぶっ殺すぞこのやろオオオオオオオオオオ！！！！！」↑裏ラート化
14：即死
「な…に・・・？」
「が…！バカな…」
「…無念…」
「そん…な…」
「俺は…終わるのか…？」
「やられた…」
15：スロウ
「の～～ろ～～い～～」
「ゆ～～っく～～り～～だ～～」
「・・・・・」↑動きが遅い
「あ～～～れ～～～～？」
「な～～ん～～だ～～？こ～～れ～～は～～？」

「う〜〜ご〜〜き〜〜づ〜〜ら〜〜い〜〜」
16：ミニマム
「ネプテューヌさんの胸の中に入れる…／／／／／／」
「ちっちゃくなっちゃった！」
「・・・・・・！！ブハァ！」↑女性のスカートを直視
「私達人形サイズになったみたいです〜」
「でかい…」
「ちっちゃくなってもそれがどうした〜〜！！？」
17：トード
「ゲロ〜〜！！？？」↑「蛙〜〜〜！？」と言いたいらしい。
「ゲロロ！！」↑「なんじゃこりゃ！？」と言いたいらしい。
「・・・ゲコ」
「ケロケロケロ」↑「蛙は嫌です！」と言いたいらしい。
「ゲロロ〜〜！！？」↑「何でカエル〜！？」と言いたいらしい。
「ゲコ〜・・・」↑「カエルですか・・・」と言いたいらしい。
18：魅了
「・・・・・・／／／／／／（ポ〜）」
「俺はあなたに心を奪われた」
「・・・・・・」↑黙って見る
「わぁ〜〜／／／／／／」
「こいつは…」
「・・・・・・」
19：恐怖
「いやあああああああああああ！！！！！」
「うギャァァァァァァァァ！！！！！」
「・・・・・・・・！！！（ガタガタガタ）」
「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

「止めてぇ！！こないでぇ！！」
２０：目回し
「目、目がぁ…」
「やべ、くらくらするぜ…」
「・・・・・」↑我慢している
「ほにゃ～～・・・」
「くそぅ・・・」
「・・・・・」↑目を回している
２１：陽気
「ルンルンルンタッタ～♪」
「お？なんだか楽しいな♪」
「・・・・・♪」↑なんやかんやで楽しく思う
「フンフンフ～～ン♪」↑料理を作り中
「お？なんだか気が楽しいな♪」
「～～～♪」
２２：激怒
「ンダトゴルァァァァアアアアア！！！！！」
「んだとコラァァァァァァぁぁ！！！！」
「・・・・・」↑静かなる怒り
「ふざけとんのかこらァァァァァァァァ！！！！」
「死ねやコラァァァァァァぁ！！！」
「くたばりやがれザコがァァァァァァァ！！！」
２３：哀愁
「う…うぅ……」
「なんだ？なんかスッゲェ泣きたい…」
「・・・・・（ダバァァァァァァァァァァァ！）」
「な、涙が止まりません…」
「止まんねぇよぉ…」
「・・・・・（泣）」
２４：出血

「くそっ！！」
「やっべ血が足りねぇ…」
「・・・・・」↑顔が蒼い
「ひ、貧血になっちゃうです…」
「クソ、血が足りねぇ…」
「血がダクダクです…」
２５：ネガティブ
「私貝になりたい…」
「俺に騎士なんて向かねぇよ…」
「・・・ｏｒｚ」
「落ち込みます…」
「俺なんて…」
「死にたい…」
２６：大笑い
「アハハハハハハハ！」
「ハ～ハッハッハッハッハ！！」
「・・・・・・・・！！！」↑失笑
「アハ、アハハハハハハハハハハハ！」
「フハハハハハハハハハハハハ！！」
「アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！」
２７：ピヨリ
「ポエ～・・・」
「ウェェ・・・」
「・・・・・」
「ホニャ～～・・・」
「ゥァ・・・」
「ブェ～・・」
２８：うなだれ
「ヴゥ～・・・」
「ア゛～・・・」

「・・・・・・」
「ア～・・・」
「・・・・・・」
「ヴ～・・・」
２９：死の警告
「し、死ぬの？私…？」
「せめて、騎士になりたかった…」
「…無念」
「そんなイヤぁ！！」
「こんなところで…終われるか！」
「私の冒険はここで終わってしまった？」
３０：不幸
「ひ、酷い目にあった～…」
「不幸だぁァァァァァ！！！」
「ギャアアアアアアアア！！！！」
「キャアアアアアアアアア！！！！」↑女性に踏みつぶされる
毛に引火
「うぎゃあああああ！！！」
「あひゃあああああああああああ！！！」↑料理中に炎が出て髪の
３１：暗黒
「くっ！目が…！」
「前が見えねぇぜ！」
「視界が暗い…」
「前が見えません！」
「チッ！」
「見えなくてもどうしたぁぁぁ！！」
３２：ショック、驚き
「ええっ！！？」
「なにっ！！？」
「・・・！！？」

「えええええっっ！！！？？」
「まじかっ！！？」
「うえっ！？」
３３：衰退
「いつもより力が出ません…」
「パワーダウンしてるな…」
「・・・・・・」
「（パワーアップしないと…）」
「体が衰弱してやがる…」
「パワー不足ですね…」
３４：怠惰
「なんだかめんどくさい…」
「な～んかヤル気でねぇ…」
「・・・・・・」
「暇ですね…」
「メンドクセ…」
「・・・・・・」
３５：ストップ
「・・・・・・」↑止まってます
「・・・・・・」↑止まってます
「・・・・・・」↑止まってます
「・・・・・・」↑止まってます
「・・・・・・」↑止まってます
「・・・・・・」↑止まってます
３６：洗脳
「テキ、ハイジョスル」
「コロス」
「・・・・・・」
「シンジャエ」
「ハカイスル」

「シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ・・・」
３７：捕縛
「う、動けない…」
「捕まった！」
「…不覚！」
「きゃあっ！」
「くっそ！」
「油断しました…」
３８：よろめき
「うぁ・・・」
「くっ・・・」
「・・・・・・」
「あう・・・」
「ぐ・・・」
「ッ・・・」
３９：アンデッド
「ア～・・・」↑「まさかゾンビ化なんて…」と言いたいらしい。
「グアァ・・・」↑「これって死ねないのか？」と言いたいらしい。
「グルル・・・」↑特にしゃべらない
「アア～・・・」↑「気持ち悪いですよみなさん…」と言いたいらしい。つーかお前もだ。
「グ～・・・」↑「これじゃあ回復アイテムも取れねぇな」と言いたいらしい。
「オ～～・・・」↑「ゾンビ・・・」と言いたいらしい。
４０：ベイビー
「バブ～」↑「これでネプテューヌさんの…」と言いたいらしい。
「バブブ～」↑「情けねぇ姿になっちまった」と言いたいらしい。
「・・・・・」↑しゃべる気なし
「パプ～」↑「赤ちゃんになったです～」と言いたいらしい。
「バブゥゥゥゥゥゥ！！！？」↑「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁ！

!!?」と言いたいらしい。
「バブゥ」↑「これはこれでいいですね」と言いたいらしい。
41：アニマル
「動物になってしまったニャン」↑ネコ
「それわざとらしいな」↑狼
「・・・・・」↑蝙蝠
「私も可愛いですよ?」↑ウサギ
「俺は爬虫類かよ」↑ワニ
「不愉快です…」↑ネズミ
42：気絶
「ほえ～・・・」
「うぐぅ・・・」
「・・・・・・」
「アゥ・・・」
「グ・・・」
「あ～・・・」
43：発情
「か、体が疼く…」
「なんだこれは…?」
「・・・・・・」↑無料にカメラを構えたくなった
「熱いです…」
「なんだ?」
「・・・・・・／／／／／」
44：羞恥
「は、恥ずかしい…／／／／／」
「うわ!それは止めてくれって!!／／／／／」
「・・・・・／／／／／」↑恥ずかしがってる
「アゥ～・・・／／／／／」
「え?ちょ、それは…／／／／／」
「／／／／／／／／／」

４５：すっ転び
「ウヒャァ！」
「うわっ！」
「っ！？」
「ひゃわっ！？」
「うおっ！？」
「きゃっ！」
４６：エロス
「ああ…ネプテューヌさん…／／／／／」
「なんか犯したくなってきたァァァァァ！！！」
「・・・・・ブシャァァァァァ！！！」↑鼻血噴出
「あん？あん？やられたいです～／／／／／」
「女を犯したくなってきた気がする…」
「ウフフフ・・・」
４７：病み付き
「ネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさんネプテューヌさん…」
「俺は騎士だ…」
「・・・・・・・」↑問答無用で女の子を撮る
「・・・・・・・」↑ひたすらに料理を作る
「病みつくもんがねぇな」
「・・・・・・・」↑ただ黙って本を呼んでいる
４８：パニック
「きゃあああああ！！」

「うわわわわわ！！」
「・・・・・・！！！！！」
「きゃあああああああああああ！！！」
「うおおおおおおおおお！！！」
「いやあああああああああああ！！！」
４９：上の空
「ボ～・・・・」
「ボ～・・・・」
「ボ～・・・・」
「ボ～・・・・」
「ボ～・・・・」
「ボ～・・・・」
５０：酔っ払い
「ネプテューヌさ～ん…うぃ～／／／／／／」
「もっともってこ～い…／／／／／／」
「・・・・・・」↑あまり酔わない
「もっと酒もっとこいや～！！」↑酒癖がめっちゃ悪い
「ヒック！よっちまった…」
「酒はうまいぜ～！」↑まだ飲む

真王「このバトンを　きっと木の精だ　桜　宇宙ひらめ　シーザス　理想を追い求めし者　Ｍｉｎｏｓａｗａ　ケン　銀凪　風花　ボッスン　ヒョウガ　亀鳥虎龍　シャドー・ナイトメア　天城　リィーン　ｓｉｂｕｇａｋｉ　鳴神　ソラ　白騎士君　黒龍　黒神　に渡します」』

真王「では次回を」

第九十一訓：戦友は絆が深い（後書き）

アリエス「ネプテューヌさんの仲間になった我々ネプテュナーズはまず最初に坂田銀時の抹殺を会議する」

ザック「え〝!?いきなり何言ってんの!?」

アリエス「そののち彼女をミッドチルダの王へと君臨させ、世界の統一を発展させる!」

ヒメラ「それ遠回しに世界征服になってます!」

ムツリ「…忠実になってる」

アリエス「真の女神はここで終わらない!!立ち上がれ!そしてわれらネプテュナーズがお守りするのだ!ネプテューヌさんを!!」

レグナ「キャラ崩壊してねぇか?」

ラート「元から彼女はネプテューヌさんが好きだったから…」

アリエス「次回!『女神少女ネプテューヌ』最終話!『守護(ハード)女神ネプテューヌ!』真の輝きはネプテューヌさんにあり!!・・・・・・・・・・一度やってみましたこれ」

ネプテューヌ「アリエスちゃ〜ん?何やってるのかな〜?」

アリア「あ!ネプテューヌさ…」

ドガ！バキ！ベキ！バキ！

ネプギア「・・・次回『インタビューするなら気をしっかり持て』テイクオフです」

ネプテュナーズ設定

～アリエス・ヴァーミリオン～

髪：赤みがかった黒色で左右にツインヘアーしていて背後にロングヘアーのような背中に届くぐらいのサラサラとしたロングヘアー

目：紅

服：黒い服に漆黒ともいえるミニスカートで細長い足を太ももの部分まで隠せるほどの黒くて長い靴下

年齢：２０歳

３サイズ：８９／５５／８３

体重：切れてる…

性別：♀

種族：ネプテュナーズ指導隊長

魔力光：黒紫いろ

好き：ネプテューヌ、女神様、仲間達、辛い物

嫌い：変態（ムツリも含まれる）、ニンジン

性格：まじめで正義感の強い。可愛いものには目が無いと言う噂も…？

レベル：７８００

得意武器：エックスブレイド

スキル：瞬刀術（素早さに特化した剣術で先制攻撃が可能）

詳細：ネプテュナーズの一員でその中のリーダー格。リーダーシップを持って仲間との信頼を持っている。数年前にネプテューヌと共にクローン技術の責任者・ザイドを対峙中にプラネテューヌ教会の者たちからの攻撃で異世界（銀時の世界）へ飛ばされてしまう。その時ネプテューヌは私達を見殺しにしたと思い込み、激しい憎しみを抱いた。だがネオによる卑怯な手口で会ったことを知り、彼女と和解し、ともに進むことを再び誓う。余談であるが、影で隠れて女

の子１００％なことをやっているとか（ネプテューヌとムツリは知っているが言わないことにしている）。

～ザック・ストライク～

髪：茶色い短髪
目：緑
服：某１ＳＴソルジャーのマント付き服
年齢：２１歳
３サイズ：なし
体重：６７キロ
性別：♂
種族：ネプテュナーズ斬り込み隊長
魔力光：蒼
好き：正義の味方、ネプテューヌ、仲間
嫌い：悪人、卑怯者
性格：正義感溢れる熱血漢
レベル：７６００
得意武器：バスターソード
スキル：正義の心（屈しない心が精神系状態異常を受けにくくなる）
詳細：ネプテュナーズの一人で特攻隊みたいなやつ。騎士に憧れ、騎士のようなかっこいい存在になりたいと言う理由でネプテュナーズに志願した。人一倍正義感があるため悪な奴には成敗を下す。事件後にネプテューヌを疑いを持ったが嘘をつかない彼女を信じていたらしい。

～ムツリ・カゲスケ～

髪：青
目：蒼
服：青色忍者服
年齢：１９歳
３サイズ：なし
体重：４７キロ
性別：♂
種族：ネプテュナーズ隠密員、ムッツリーニ
魔力光：漆黒
好き：カメラ、ネプテューヌ、仲間、女の子
嫌い：卑怯者
性格：口数は少なく、ムッツリな心がある
レベル：７０００
得意武器：手刀、村正
スキル：忍道（正面からの攻撃をかわしやすくなる）
詳細：ネプテュナーズの一人で隠密員。口数が少なく、あまり人ごみの中にいるのが好きではないが、その実力は確かなもの。唯一の欠点は変態な心があってシャッターチャンスを逃さない。そのせいで毎度アリエスにどやされたり刺激が強ければ鼻血を噴出する。容体はムッツリーニに忍者服を着せたイメージ。

～ヒメラ・レーシー～

髪：コンパより長めのピンク
目：紫
服：バカテスの女子制服

年齢：２０歳
３サイズ：８８／５５／８２
体重：ヒメラ「だめです！！！／／／／／／／／／／／／／／」
性別：♀
種族：ネプテューナーズ補助戦闘員
魔力光：ピンク
好き：料理、ネプテューヌさん、仲良しのみなさん
嫌い：変態男、悪の人物
性格：極めて温厚、滅多にキレることはない
レベル：７０００
得意武器：マジックロッド、マジックアロー
スキル：魔法力の増加（自分の意思で魔力の量を変えることが可能）
詳細：ネプテューナーズの一人でサポーター担当。メンバーの中でムードメーカーな存在。そして危険な存在でもある。料理は得意だと言うが、食べた人物が病院送りにさせると言う『死骸物質（デスマター）』の使い手（メンバー命名）。事件後、憎しみを持つアリアに対し、彼女だけはネプテューヌのことを信じていた。容体はまんまバカテスの姫路。

～レグナ・タイト～

髪：灰色
目：黄色
服：いつか天魔の黒ウサギの男性制服
年齢：２３歳
３サイズ：なし
体重：５２キロ
性別：♂

種族：ネプテュナーズ戦闘員
魔力光：灰色
好き：ネプテューヌ、ネプテュナーズのみんな、日常
嫌い：正義、仲間を傷つける奴
性格：諦めない心強さがある
レベル：７２００
得意武器：ブレイヴブロウ
スキル：ブレイヴバーンソウル（邪悪なるものを滅させる能力）
詳細：ネプテュナーズの一人でザックと仲がいい戦闘員。いつもネプテューヌ達を信頼している。事件後、あのあとこっそりアリエス達に内緒でネプテューヌのところへ訪問し、絶望で泣いていたところを目撃した。容体はまんまいつ天の大兎そのもの。

～ラート・ドライ～

髪：青のショート
目：黄色（裏人格では赤）
服：青い学生制服
年齢：１９歳
３サイズ：８３／５５／８３
体重：潰れてます（物理的に）
性別：♀
種族：ネプテュナーズ戦闘員
魔力光：明るい青
好き：ネプテューヌさん、メンバーのみんな、甘い物
嫌い：残虐者、正義
性格：若干謙虚気味（活発でベクトル使いな感じ）
レベル：７１００

得意武器：撲殺バット
スキル：二重人格（人格を変えることで能力が変化）
詳細：ネプテュナーズの一人でヒメラと続く危険な奴。普段は温厚でオドオドしい雰囲気だが、二重人格のようだ。もう一つの人格は某ベクトル使いよろしくあらあらしい口調と斬新な（暴力的な）攻撃法を繰り出す。リトルバスターズの西園美魚と似ているが、唯一違うのはヘアバンドが無いことだろう。

第九十二訓：インタビューするなら気をしっかり持て（前書き）

真王「こんかいは『月光閃火』さんが考え出したキャラが出ます。ではチェケラ！」

第九十二訓：インタビューするなら気をしっかり持て

ここはミッドチルダ…のはずれにあるスラム街。

そこには不良者含めはずれ者とかいろいろいるエリア。

そのエリアにある店があった。

？？？「また来いよ」

と店の前でいう青年は、朱髪のショートシャギーに金色のクールな瞳、１７５ｃｍのほどよく引き締まった体格で顔立ちはややクール系、ラフな服装が主で首には六芒星のネックレスを着けている。

客「おう、また頼むぜ？レジィ」

と中年の親父がそう返す。

青年の名は『レジィ・アルクタート』このスラム街でなんでも屋を営む男だ。

レジィ「さて、次はなにしよっか」

？？？『何が暇なのかね～？』

レジィ「普通終わったら暇だろ？ルティア」

と、六芒星のネックレスから女の子の声を聞き、レジィが突っ込む。

これはデバイスで、名前はレジィの相棒『ネスティルティア（愛称・ルティア）』である。

レジィ「ん？」

すると、テーブルの上にある端末機がなる。
そして電話に出る。

???『ようレジィ、早速だが…ってなんだその嫌そうな顔は?』
レジィ「いや誰だって嫌がりますよ。毎度同じ仕事してたら」

端末から映った中年ぐらいの男が睨み、レジィは言う。
その男は普通の局員たちの服ではない。はっきり言って管理局上層部らしい制服だ。

上層部員「まぁいい、レジィよ。機動六課は知っているか?」
レジィ「六課?あのエース達のか?」

上層部員の男が六課の名を言うと、レジィが思い出したかのように言う。
なぜレジィが六課を知っているからというと、よく管理局から依頼が来ているからだ。
ただ大半は上層部や最高評議会が多かったりする。

レジィ「あそこの抹殺なら俺はお断りするぞ?」

真剣な顔でいうレジィ。
上層部などのことはレジィにとってあまり許されない存在であるからだ。
理由はもちろんレジィが転生者であるからだ。
彼は生前サブカル大好きなごく普通のフリーターだったが、建設工事のアルバイトの際に落ちてきた鉄骨から仕事仲間を助けてそのまま鉄骨の下敷きになって死亡…そのまま神様(見た目『銀魂』の『洞爺湖の精霊のオッサン』(汗))から転生ボーナスを貰い転生し、今現在ミッドチルダのスラム街を拠点に何でも屋をやっているのだ。

当時の名前は『赤城（あかぎ）　月華』である。

上層部員「イヤ、今回の依頼はその六課の調査だ」
レジィ「調査？」

上層部員の言葉に眉を顰めるレジィ。

上層部員「そうだ。なんでも六課にいる“坂田銀時”という男も事を調査するんだ」
レジィ「・・・はい？」

レジィは耳を疑った。今言った言葉に坂田銀時という男の名を。

レジィ「（あいつって確か銀魂の主人公だよな？）その坂田銀時のことを知りたいと言うことだな？」
上層部員「そうだ。調査と言ってもマスコミでいうインタビューみたいにすればいい。それで坂田銀時の情報を手に入れるのだ。なお六課に次元漂流者らしい人物が多数いるらしいからそいつ等も頼む」

と言って通信を切る上層部員。

レジィ「・・・坂田銀時ねぇ…」
ルティア『坂田銀時ってこの人でしょ？』

ルティアが銀時の写真を出す。

レジィ「おお、そいつだ。しかし何で彼がこんなところにいるんだか…」

彼は銀魂を見ているからそのセリフを言う。

レジィ「まいっか♪行くぞジェットロン！」
ルティア『ガッテンダーボス！』

なぜかいきよくボケる二人。
そんなわけでレジィは六課の調査へ向かった。

ルティア『ねぇねぇねぇ！次のなのはの写真だけど…』
レジィ「だからそれはいいって…」

途中でこんな会話があったがそこは別の話。

時はたって機動六課。

レジィ「そんなわけで、レジィ・アルクタート、上の方々からの依頼で調査することになりました」
はやて「さよか」

と部隊長室で敬礼するレジィと返事するはやて。
同室のなのはとフェイトもいる。

レジィ「まず最初にですが、坂田銀時について教えてくれませんか？」

とレジィがメモ帳を持って聞く。

はやて「うちか?そやな、銀ちゃんは今から十年前から活躍して英雄になったっちゅうことやな」
レジィ「十年前…闇の書事件ですね」
なのは「うん、それからして銀さんはこのミッドで英雄的存在になったんだよ」

レジィはふむふむと言ってメモを取る。
そしてフェイトがこんな発言を出した。

フェイト「ちなみに私は銀時の嫁だよ」
レジィ「え”?」

フェイトの発言にかたまるレジィ。
言った本人は顔を赤らめる。

なのは「ちょっとフェイトちゃん!?銀さんのお嫁さんは私だよ!!」
フェイト「違うよ!!私だもん!!」

なのはとフェイトは口げんかし始めた。

レジィ「・・・あれは?」
はやて「二人とも銀ちゃんに惚れててな、銀ちゃん絡みになるとあなるんや。ちなみに他にも銀ちゃんが好きな奴がおるで?」

レジィは呆れながらもメモを取る。

はやて「それからこの六課に居候している奴らがいるんやけどちょっと癖が強いからな」

はやての言葉にレジィはちょっと不安に思いながら調査を再開させた。

レジィ「あなたは坂田銀時についてどう思いますか？」

レジィは部隊長室を後にして近くにいる人に問いかける。
ちなみに相手はチンク。

チンク「それはもちろん、私の嫁だ」

チンクも嫁宣言した。
レジィはメモを取る。

レジィ「成程、ついでになのはさん達も嫁宣言してましたよ」
チンク「なに！？くっ！真の嫁はどっちか思い知らさなければ！」
？？？「その必要はない」

チンクが動こうとすると、九兵衛がやってくる。
なんだかやばそうな雰囲気に思うレジィ。

チンク「来たかまな板・・・」
九兵衛「着てやったぞペッタンコ・・・」

貧乳コンビ「オラアアアアアアアアアアア！！！」

チンクと九兵衛は大げんかした。

レジィは二人の行動をメモに書き留める。

ネプギア「あの、何やってるんですか？」

と後ろからネプギアがレジィに声をかける。

レジィ「ああ、ごめん、俺はレジィ、ここの上の依頼で坂田銀時について調査しているんだ」

ネプギア「銀さんですか？私はあまり親しくありませんが、お姉ちゃんは『銀さんは私にとってすごい人だよ』って言ってたくらいです」

レジィはメモを取る。

レジィ自身は銀時は白夜叉と呼ばれるくらい強いことは知っている。

ネプギア「あと調査するって言ってましたけど……頑張ってください」

なぜかネプギアはレジィを応援するようなことという。

レジィは「もしかして癖があるって…」と、六課にいる人たちを不安に思った。

それが的中するのだった。

猿飛「銀さん？さてはあなた銀さんを奪いに来たのね！？だけど私は銀さんを永遠に私の嫁だから！！」

レジィ「納豆捏ねてる時点で嫁じゃなくなる気がします」

猿飛「それだけじゃないのよ！銀さんは私に気が合うほどいじめてくれるの！！」
レジィ「要はあなたドMですね。分かります」

スバル「銀さん？・・・・・・優しい人…かな？」
ティアナ「私は兄さんって呼んでるの。義理だけど…」
レジィ「いつか本妻ならぬ本妹に？」
ティアナ「べ！別にそんなんつもりじゃないのよ！！勘違いしないで！！」

ブラン「あいつはうるさい男…」
ラム「それにロリコンな性格してんだよ～？」
ロム「それに不幸体質の持ち主」
レジィ「ああ…そう…」

理樹「銀さんですか？僕的には基本いい人だと思いますけど」
鈴「違うぞ理樹、あの天パは暴力的なんだぞ」
理樹「違うからね！！」

サチコ「銀時？エヘヘ～、銀時は将来私がお嫁さんになるんだ～♪」
レジィ「その体じゃ無理じゃね？」
サチコ「む～、ノリ悪いよおじさん」
レジィ「俺は１８歳だ！おじさんじゃねぇ！」

ヴィヴィオ「パパのこと？パパはヴィヴィオのパパだよ」
プリニー「答えになってないッス。ちなみに俺は銀さんのことをグータラさんというッスね」

リリス「宇治銀時丼っていう小豆をご飯に載せた食べ物を出すよあれ。食べてみて吐き気したよ…」
ミーニャ「私もあれは駄目ニャ」
アルラ「あの味覚はねぇ…」
レジィ「はは…そうですか…」

グレイ「銀時？興味ないな」
ビビ「私のなのはちゃんを誑かした許すまじき存在だ！！ギントキ・イズ・ゴートゥヘルゥゥゥゥゥゥゥ！！！」
レジィ「この人大丈夫ですか？」
神「ほっとけばいいぞ」

レーティア「そうね、強いて言えばフラグメーカーかしら？」
レジィ「分かります。嫁宣言する人と巡り合いましたから」
ギルシア「なんだそうか」

ジャンヌ「私今から新八君とデートするから他を当たってくれない？あ、質問の答えはあれはグータラさんよ。そして糖尿病」

リアス「めちゃくちゃの塊よあの男は！」
イッセー「そんでもって実は何考えてるか分かんない人だな」

レオン「白夜叉か？あいつは強いのは分かるが、いつまでもサボってはいかないな」
ガレーナ「ああ、余もそう思う」
レジィ「あの…それ持ってて腕痛くないんですか？」
レオン「鍛え方が違う。こんな岩など軽く持てるわ」
レジィ（明らかに1トン分あったよな…？）

レイン「あいつとはお互いパフェで語り合った仲だ」
レジィ「つまりあなたも糖尿病予備軍の仲間入りですね」
レイン「失敬な！！」

咲夜「レン君見たいに～、甘いものが大好きみたいだよ～。でもユー君の仲を裂くのはいただけないな～」
ユーノ「さ、咲夜さん／／／／／」

タバネ「私なりに結構面白い人だね～」
チフユ「私だったら只の大バカ者だがな…」

ヤルオ「いろんな意味でフラグメーカーだおｗｗｗｗｗ」
マナ「おまけに昔隠し子騒動にあったって」

エール「彼には腐った目をしてるけどいざって時にきらめくってさ」
コヨリ「私はそうは見えないけどね…」

アリエス「あの天パ？ネプテューヌさんに近づく不届き者です！いざって時には私が奴の首を…」
ザック「止めろって！」
ヒメラ「すいません！すいません！」

そんなわけでいろいろ聞きだしたレジィ。

レジィ「ホントに癖が多過ぎな奴らだったな…」

ただ少々やつれ気味な感じになっている。

ネプテューヌ「あれ？きみだれ？」

とネプテューヌがレジィに声をかけてきた。

レジィ「あ、ぼくは…」

ネプテューヌ「あ！確か調査の人だよね。それならちょうど良かった」

その少女は純粋なのかもしれない。

ネプテューヌ「銀さんああ見えてぶっきらぼうなとこがあるけど、私にとっての銀さんは誰かを守りたい、誰かを幸せにしたいって思いを秘めているって思うんだ」

だから憧れを抱くと言うものなのかもしれない。

ネプテューヌ「だから私は、銀さんが好きなのかもしれないしね」

僕自身にはよく分からないけど、銀時という男は普段はグータラしているというイメージが濃いみたいですが、いざというときは白夜叉の如く活躍を広めると言うことになるでしょう。まぁ俺自身の場合は銀時の強さなんて目に見えてますし、彼に愛されている人たち

もそんな彼に惹かれていると俺は思うんです。…最後の締めですが、彼はいい人だと思うよ。

ＢＹレジィ・アルクター『

上層局員「作文んん！！？？」

上層局員はレジィが提出した紙を叩きつけた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプギア「こんにちは、アシスタントのネプギアです」

銀八「礼儀正しいな。んじゃペンネーム『なめ猫』さんからの質問。

『俺「どうも、なめ猫な俺達です」

カイト「おい何だその省略は」
俺「何となく」
ラムザ「……；」
カイト「…まあいいや、いつも通り感想といくか」
ラムザ「次はネプテューヌが暴走したようだが…大丈夫だろうか？」
カイト「わからないな…少なくとも、今回は『憎しみ』がテーマみたいに見えるからじっくり見とこうや」
俺「ですね」
ラムザ「ところで、ふと思ったんだけど…」
俺・カイト「？」
ラムザ「なのはさん達がメインの戦いって、ここではまだあってないよね？ネプ祭の後にやるんだろうか？」
カイト「そういえばそうだな…小説の題名にリリカルがあるくらいだし、なのはさん達もメインになるはず」
俺「ふむ…なのは達が深く関わる設定もまだっぽいですが、そろそろメインになる話を書くというようなこと言ってた気がします」
ラムザ「あのままプライベートにおけるいじられキャラのまま、終わるはずもないからね。ここのなのはさんは、オリジナルの性格で変わった魅力があっていいと思ってるけど」
俺「ですね…まあ期待していましょう。ヒロインですし」
カイト「で、どうすんだ？ここのなのはさんを目立たせようと、コラボとして乱入すんのか？」
俺「うーん……話は妄想してるんですが、なのはさんを覚醒させる話だけですね……許可もらえたらの話だけど…」
ラムザ「僕達については？」
俺「一応、破壊者とカイトとミリアだけ対象にしています。ですが、出してもらうにしても仲間にはならないつもりです」
カイト「おいおい…破壊者まで呼んで大丈夫なのか？絶対にありえないとは思うが…仲間の大半、ただでは済まないぞ…？」
俺「もちろん、何とかするつもりです。とにかく、まずはＯＫをも

らえるかどうかです」
ラムザ「わかった…任せるよ」
俺「えー…突然ですみせんが、もしよろしければうちの設定やキャラを少しコラボしてもらっていいでしょうか?返事をお待ちします」
カイト「もう少し丁寧にお願いしなよ…;まあコラボしてくれるなら幸いだよ」
ラムザ「ではまた!」

質問

ビビへ
「冥土へいざなう者、好きかい?」

ネプテューヌ
「エックスセイバーとか見てると、空でドクターバイルと戦いそうな気がする（ロックマンゼロ４）。戦ってみたい?」『んじゃ答えよう」

ビビ「冥土へいざなうもの……もしかしクイーンズブレイドのアイリちゃん!?メッチャ大好きです!!」

ネプテューヌ「いや別に。っていうかそれだけで戦う意味って得る?」

ネプギア「私もそれはどうかと…」

銀八「んだよ。『なめ猫』さん、廊下に立ってなさい」

ネプギア「えっと…次はペンネーム『月光閃火』さんです。『ども…月光閃火だ。

輝刃「…という事だそうだが？」

ハハハ…それでも、俺はアリエスを愛でるもんね～♪ハァ～…撫で撫で♪（そういって、遠隔技法でアリエスの頭を優しく撫でる）

輝刃「よくもまぁめげないな…。とりあえず、質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．キリアに質問…話の余談で『プラネテューヌでひっそり暮らしている』とあったが、やはりアンドロイド作りは続けていくのか？それとも、自らの機巧技術を活かして新たな機械作りに励むのか？

確かに、元になった話でも源外の爺さんは機巧（からくり）技師の仕事は続けてたもんな…。次は俺からだ。

2．真王さんに質問…もう近藤さん意地が強いから、いっそオリキャラで近藤さんに一途な想いを寄せる女性作ってみたらどうかな？

輝刃「何か一層妙の嬢ちゃんへの想いが強くなりそうな気が…（汗）。」』えっとキリアさんは…」

キリア「どちらともです。それで私は人々の役に立てようと思うんです」

ネプギア「では作者さん」

真王「近藤に彼女ね～、機会があったら」

ネプギア「投げやり!?『月光閃火』さん、ごめんなさい!」

真王「なぜ謝る!?・・・ペンネーム『ウィンド』さんだ。『ウィンド「は～い。今回は私ウィンドと」

美琴「メアとレイドのリーダー、美琴が話を進めるわ」

ウィンド「……あいつらは?」

美琴「回復中」

ウィンド「さいですか……しかしアリエスが百合とは……」

美琴「人の好みなんて人それぞれよ」

ウィンド「そうだよな。お前ショタコンだもんな。メア限定で」

美琴「悪い?」

ウィンド「イイエベツニ」

美琴「さて質問に行きましょう。セレス達に持たせたい武器があるとすればなにがいい?」

ウィンド「真王さんに質問。セレスと勇華はカップル確定ですか?もう一つ。勇華。君には媚薬を与えよう（黒笑）」

美琴「なにさせるつもりよ……」

ウィンド「孫の顔が楽しみだ♪」

美琴「私もちょうだい」

ウィンド「目的は?」

美琴「もちろんメアの初めてを「言わせねぇよ!?」ちっ」

ウィンド「舌打ちすんな!?たくっ……後真王さん。セレスの本気モードとネオが闘えばどちらが勝つと思いますか?」

美琴「返答よろしく。さぁ早く媚薬を「やるか!」ちっ……（絶対手に入れる）」

ウィンド「聞こえてんぞこらショタコン娘」『では・・・ん?同じのがある『ウィンド「美琴は帰らせました。後々厄介ですんで……」

「だからといって俺を呼ぶんですか……」

ウィンド「そうだよ。メア達の仲間のクリア君」

クリア「とりあえず早く終わらせますか。真王さんに質問。メア達にテーマソングをつけるならどんな曲?直ぐに出さなくていいんでじっくりかんがえてください」

ウィンド「真王さんに注意。セレスのしゃべり方は基本一人称は俺です。まぁしゃべり方は私とセレスがいた感想を見ればわかります」

クリア「んじゃよろしく」『では順番にお答えしよう。まず武器ですが、エール、コヨリ、セレスには剣ですね。メアはどんな得意武器なのか分からないですが。次の質問ですがもう確定です」

ネプギア「ええっ!!??」

真王「次にネオはそんなセレスでも瀕死程度で済むくらいですね」

ネプギア「いやいやいや、ある意味すごいことなんですけど!?」

真王「最後ですが、思いつきません、ごめんなさい」

ネプギア「『ウィンド』さん、ごめんなさい。あとそれから質問は三つまでお願いします」

銀八「つぎだ。ペンネーム『ケン』さんからの質問。『統夜「あいつら速くも鬼兵隊止めちゃったね・・・真実知って直ぐに・・・凄いな」

はやて「私って堕天使なんか・・・」

統夜「あはは・・・天使は戦闘特化種族じゃないが堕天使に匹敵する強さは持ってる・・・人外には変わり無いけどね」

メアリ「凄いわね・・・ふと思ったけど私達・・・人族から見れば

チートね」

統夜「まぁな・・・ギルシアさんは男の中の男だ・・・新八に質問だ。ジャンヌとの結婚式は和風か洋風のどっちで挙げる？何故か気になっちゃってさ・・・」

メアリ「気になるわね・・・レーティアさんとギルシアさんの事を義姉さんと義兄さんって呼ばなきゃいけないわね」

余計な事ですが・・・メアリのバストのサイズはレーティアのバストサイズに１ｃｍプラスした感じです。

統夜「アリアに質問。銀さんとネプテューヌの仲をどうしたら認めるか？」『」

新八「えっと…僕は江戸出身なんで和服ですね…」

ジャンヌ「私はそれでもおっけー」

ネプギア「けけけ、結婚！！？／／／／／」

真王「ネプギアには精神的に早いか？」

ネプギア「そ、そんなことないもん！」

真王「ハイ次」

アリア「認めません、ネプテューヌさんは私の物です！」

ネプギア「あ、相変わらずですね…」

真王「それが彼女だ。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ネプギア「ではペンネーム『フリーダム』さんです。『Sフリーダム「和解出来て良かったな」

∞ジャスティス「全くだ」

デスティニー「キリアは、隠居生活？」

レジェンド「仕方がないだろうな…」

アカツキ「さて、質問に行くぜ」

銀時に
手元に遊園地のペアチケットが！！誰と行く？

沖田に
足下にアーマーシュナイダー、そして目の前に近藤が、この後どうする？

インパルス「明らかに二つ目は、近藤っていう人に死亡フラグが…」

更新楽しみにしています』」

銀時「イヤ選べネぇよ…」

後ろに絶対銀時と生きたいと言うオーラが見えるほどにラバーズがいる。

沖田「俺は土方さんにやるぜぇ」

ネプギア「駄目ですよ！『フリーダム』さん！廊下に立ってください！」

銀八「少しは仕切るようになったな。ペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『ディケイド激情態（ピット）「おいこら、後者2つの称号書いたの誰？」

リュカ「どうどう；」

マリオ「させさせ…アリエス達はネプテューヌの元へ戻ったか」

ルイージ「と言うか辞表って何時の間に出したの；」

フォックス「転移魔法じゃねえ？」

スネーク「だよな…ネプテュナーズに質問『内のマリオについてどう思う？』」

ソロ「メテンズギルドの長に質問『マリオとの特訓は見ていてどうだった？』」

ディケイド激情態「質問『後者2つの称号作ったの誰なのか教えてくれない？ディメンションキックか豪腕で殴るから＃』」

次回を待ってます！』ズバリお答えしよう」

アリエス「強敵ですね（ネプテューヌさんに手を出す気なら…）」

ザック「あいつ人間か？」

ムツリ「・・・・・・」

ヒメラ「料理を食べるのが大好きでしたね」

レグナ「あいつ凄すぎねぇか？」

ラート「最強ですね」

アテナス「そうですね。彼の特訓法で活用する人やトラウマ持った人や新たな道を進む人と買いましたね」

真王「ふむ、ちなみにピットに行ったあの二つの称号は…」

邪王「俺だよ！邪王だよ！」

バキッ！

ディケイド激情態「ヤラレチャッタ・・・」

ネプギア「えええ！？やっちゃっていいんですか！？」

真王「暴走止めだ。『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ネプギア「・・・次はペンネーム『黒龍』さんです。『黒龍「いや～ついにゲイム祭編も終わりましたね」

ソラ「次はコラボのアレだったな」

銀時「まぁ頑張ってこい」

リリス「とりあえず酷い目には遭いたくないですね」

ヤミ「そうですね」

アリス「私は面白ければ良いがな」

アリア「にゃ～」

セイバー「アリアのはどう言う意味ですか？」

黒龍「さぁ？」

ソラ「ま、コイツコレはあまり気にするな」

黒龍「それじゃあそろそろ質問しましょうか。今回はこの人達が質問するそうです」

沖田「そっちのアリエスに質問でさァ。なんでも土方この野郎もネプテューヌを狙っているみたいなんで、殺したどうですかィ？（黒笑）」

リリス「質問ですけど、そちらでの苦労人ベスト3を上げるなら誰ですか？」

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」』」

アリエス「なんだと!?よし成敗じゃァァァァァァ!!!!」

土方「何でだァァァァァァァ!!!!??」

真王「あらら、苦労人で一番は新八、二番はティアナ、三番はネプギアかと思われます」

ネプギア「今でも苦労しています…」

真王「では『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。最後にペンネーム『イシュタル』『デストロイア』『コアラマン』『黄竜』さんからの質問だ」

ネプギア「何で４人いっぺんなんですか?」

真王「『カーバンクル』の同一人物だと思ってな。『イシュタル」「カーバンクル・・・何だったんだ・・・。まあ真王さん小説の方頑張ってくださいね。応援しています。あと質問です。」

ジャンヌさんへ
新八が銀魂４０巻でラブチョリスにはまっていたことに関してあなたは動思いますか?』

『デストロイア「真王さん。あのカーバンクルとか言うヤツまた復活しそうだな。てゅーか銀時たちが戦う相手大丈夫なのか?スキマ妖怪とバルバトス以外マシな奴居ないのだが。て言うかマスターテリオンもう何処に行ったんだ?それと質問」

新八へ

この中で何が欲しい？
1・お通ちゃんの等身大ロボット
2・ラブチョリスのお通ちゃん追加Ｖｅｒ
3・お通ちゃんの脳』

『コアラマン「質問します」

作者へ
自分の書いている小説のキャラで結婚するとしたら誰ですか？

コアラマン「リリ銀パーティ編楽しみにしてます。頑張ってくださいね。」』

『黄竜「質問します」

銀魂・リリカル勢へ
もしも一週間のご飯がすべてあんパンとお妙の卵焼きになったらどうしますか？』では順番に答えましょう」

ジャンヌ「何ですって!?そんなゲームがあるとは予想外だわ!私にもやらせて!!」

ナリア・ビビ「わたしも!!」

新八「3番を除いて全部です!つーかお通チャンを殺してんどうすんだぁぁぁぁぁ!!!」

真王「勇華ですね」

銀魂・リリカル組「食べられるかァァァァァァァァァァ!!

！！」

真王「ハイ四人とも、廊下に立ってなさい。次回はユニで、では」

銀八「なんか珍しく鳴神ソラさんと月光さんの状態異常バトンが来てねぇなあ」

真王「うん」

第九十二訓：インタビューするなら気をしっかり持て（後書き）

真王「次回はなんと動物園の動物が変身する！？」

ユニ「次回『動物が変身するのは奇想天外』テイクオフよ」

～予告～

ネプギア「バイトを始めます」

第九十三訓：動物が変身するのは奇想天外（前書き）

真王「ハイ今回はネプギアがアルバイトします！だけどそのアルバイト先は…」

ユニ「・・・『リリカル銀魂』始めなさい」

真王「おいこら何その命令形。そんな口を出す子に育てた覚えはありませんよ？」

ユニ「親かあんたは！！」

第九十三訓：動物が変身するのは奇想天外

皆さんこんにちは、ネプテューヌお姉ちゃんの妹のネプギアと言います。
時たま周りからどっちが姉?って言われる始末ですが、私が妹です。
さて、今の私の現状ですが…

???「お前面白いから、ワシの…いや、ワシ等の飼育委員になれ」

ウサギの顔をした人から行きなり飼育委員になれって言われています。

ことの発端はまず遡ってみてから。

ネプギア「暇です」

まず私は何かをやることがありません。
女神候補生として何もできないのは良くないのです。
だから私は決断しました。

ネプギア「バイトを探しましょう」

ネプギア「とは言うものの」

色々回ったがあまり自分に合う仕事は見つけられなかった。
いろいろ彷徨っていると、あるポスターを見つけた。

ネプギア「王魔時動物園？」

動物園飼育委員募集ポスターだった。
特に制限はなく、ここから遠くない。

ネプギア「・・・いってみよう」

ネプギアは決心してそこへ向かった。

ミッドチルダの森の奥・王魔時動物園園内

ネプギアは電車に乗って地図にあった動物園を探し、そして見つけて中に入ったはいいが、

ネプギア（寂れてるな～）

そう、他の客があまりいないどころかところどころがさびれている。
なんだかほっとかれた感じだ。

ネプギア「人材不足以前に職務怠慢はいけないことですね。園長に

会いに行こう」

ネプギアは怒って園長を探す。
そして園長のいる道へ角を曲がって…

？？？「おお、入った入った」

ウサギの顔をした人物がゾウの口にキリンの首を突っ込ませていた。

？？？「いや～、面白……ん？」
ネプギア「あ・・・」

ウサギ男とネプギアの目があった。

？？？「客かお前？…それ以前に見たな？」
ネプギア「え・・・・・・えええええええええええええ！！！？？」

王魔時動物園・事務室

シナ「ワシは王魔時動物園園長シナじゃ」
ネプギア「は、はい、私はネプギアと言います（態度がでかい…）」

ウサギ男のシナが大きな態度でネプギアと面接している。

シナ「そうか、ならいい」

ネプギア「イタッ！」

なぜか蹴られた。

シナ「ワシは面白いことしかやらん主義、だからすべての飼育はお前に任せる。ワシのために働け」

ネプギア（メッチャ自己中なんですけどっ！！？）

シナの自己中にネプギアは思わず突っ込まずにはいられない。

ネプギア「それにしても、あなたの職務怠慢なせいで客どことか人すら着てませんね！？」

ネプギアはこればっかりは怒る。

ネプギア「こんな動物園見そこないました。帰らせていただきます」

とすでに準備万端でかえろうとする。

シナ「帰る？それは手遅れじゃ」

ネプギアが外へ出ると、檻の中にいたはずの動物達がいる。

扉は閉まり、檻はバックリと開き、シナが加えてるニンジンから煙が出ていく。

シナ「閉園は４：４４．ここはワシによるワシのための動物園。全てがワシの思うがまま」

煙を浴びた動物が姿を変え、看板の文字の間の部分が変化する。

シナ「ようこそ、王魔時動物園へ」

なんかさまざま変身した動物達と対面してしまったネプギア。

ネプギア「ぇぇぇぇぇえええええええええ！！！？？何これェェェェェェえええええええ！！！？」

シナ「うるさい奴じゃ」

ネプギアはこればっかりは大声出さずにはいられない。

カバ？「園長、腹ペコです！ヘコヘコ」

シマウマ？「ペコペコだ馬鹿」

オオカミ？「その女飼育員ですか園長？」

ライオン？「あん？にんげんか？」

なんだか動物達がいろいろとしゃべっている。

シナ「さて獣ども、今日からこのネプギアが飼育員じゃ」

ネプギア「わっ！」

いきなり前を押し出されたのでネプギアは転ぶ。

ダチョウ？「大丈夫？」

ネプギア「あ、はい、どうも」

ダチョウみたいなのが手を貸してネプギアは恐れることなく応じる。

ネプギア「それにしても動物が動物を人にさせるって…」

シナ「違う違う、ワシは人間、ワシには力がある、それだけじゃ」

ネプギアが変身した動物達を見てそんな感想を漏らすと、シナが否定、説明する。
ネプギアは若干信じられない顔をする。

シナ「ちょっとワシの武勇伝を聞け。あれは１５…１３…そんくらい前のこと」
ネプギア（うろ覚えっ！？）

それはその当時のシナは普通の子供。
野兎を追いかけまわしているシーン。

シナ「その日ワシは野兎を追いかけまわしてたんじゃ」
ネプギア（子供のころからろくでなし！？）
シナ「その時、化け物ウサギが現れて、それに呪いを受けてこんな姿になった…」

化け物ウサギ『その呪いは報い、解きたくば動物…生命への愛を示せ。示したくば、数多の動物を集め、そしてその力を以て、物言わぬ生命の声を聞き、世界に轟く園を造れ。その名を知らぬ者がいなくなる程に』

シナ「ワシは世界中を回り、こいつらを集めた。分かるか？わしが人間に戻るためには、この王魔時動物編を天下一にせねばいかんのじゃ」

シナの滅茶苦茶なことに言葉が出ないネプギア。

シナ「じゃがワシは面白いことしなやらん主義、だから…」
ネプギア（落ち着きないなぁ…）
シナ「自分のことは自分でさせて、動きしゃべれるようにしてやっ

た獣共（こいつ等）と飼育員（おまえ）で動物園（ウチ）を天下一にするんじゃ」

ごろごろ転がっていくシナにネプギアはそう思い、寝転がった状態でそう言うシナ。

ネプギア（めちゃくちゃだよこの人・・・）

ネプギアはシナに対して変な目で見る。

ネプギア（けど、逆にさびしそうな目をしている…）

それと同時に同情する。

ネプギア「何処までやれるか分かりませんが、やります！飼育員」

シナ「よっしゃ！」

そしてネプギアは王魔時動物園飼育員になった。

???「おお、何だここの動物どもは？しゃべってやがる。これは売ったらいい金だ。数日後に決行だ」

遠くから犯罪者的な男の集団が王魔時動物園を見ていた。

数日後、機動六課

ネプテューヌ「ネプギア、バイトを始めたんだって？」
ネプギア「うん、飼育員をやってるんだ」
ネプテューヌとネプギアが会話している。
ネプテューヌ「いいな～、私の場合まず見た目から判断されていくし…」
ネプテューヌが墜ち込んだ雰囲気になる。
ネプギアはどう声をかけていいか分からなくなる。
ネプギア「あ、こんな時間。行ってきまーす！」
ネプテューヌ「あ、行ってらしゃ～い」
ネプギアが時計を見てバイト先である王魔時動物園へ出かけていった。
銀時「おいネプテューヌ、ネプギアがどっか行ったみたいだが？」
ネプテューヌ「動物園の飼育員だって」
出かけるところを目撃した銀時が聞くと、ネプテューヌは応えた。
王魔時動物園
カバ？「オ～ウ腹減った！早く飯食われる！」

シマウマ？「食わせるだ。ちゃんと言葉づかい気をつけろ」
ネプギア「これはセルフサービスじゃないんですよポポさん」

擬人カバのポポは待ち遠しくえさを要求。だが作業服のネプギアが注意する。

ネプギア「それとシナさんはなにしようとしてるんですか？」
シナ「ニンジン食いにだ」
ネプギア「よこどりはなしですよ」

横から横取りしようとしているシナにネプギアは片手で止める。

ネプギア「はいゴリコン君バナナ」
ゴリコン「あ、そこにおいてください。自分これ不器用ですから」
ネプギア「思いっきり器用だけど…」

擬人ゴリラのゴリコンは石を使ってなんか立派な像を作っていた。

スライム？「ギアちゃん働き者だねぇ。あ、そこのお肉いただき」
ネプギア「スララさん？盗っちゃだめですって」

骨の頭（かんむり）を緑色のゼリーのような体の擬人スライム・スララが肉を食べる。

ネプギア「バイトに入って数日…結構楽しいかも…」

そんなネプギアが呟いた時だった…。

シナ「面白い遊びをするぞお前ら～！！」

一番の不安要素のシナが現れてネプギアは呆れの息を漏らす。

ネプギア「毎度ああいうことしますね園長は…」

？？？「それが園長でしょ？」

ネプギア「それはそうですけど、人前で食事のとこを見せつけないでくださいウワバミさん」

ウワバミ「あら失礼しちゃう」

頭の三匹の蛇の女性・ウワバミが食事（（上の蛇が）ネズミを丸呑み）しながら言う。

ウワバミ「それにしても、ギアちゃんあまり怖がってないわね」

ネプギア「慣れてますから」

ウワバミはネプギアに聞くとネプギアはにっこりと答える。

ネプギア「園長さんは本当に戻る気あるのでしょうか？」

ウワバミ「そうね。園長はああ見えて、ガキ大将のままだからね」

ネプギア「精神的に子供のまま…ですか（お姉ちゃんには言わないでおこうかな？）」

ウワバミ「ええ、でもそんな園長だからこそ私達は付いて行ってるの」

ウワバミとネプギアの会話である。

ネプギア「あ、餌のストックを増やしに行きます」

ウワバミは『頑張ってね～』と手を振った。

ネプギア（呪いか～、この動物園を大きく、そして天下一へ成長さ

せておけば園長さんの呪いが解ける。けど、それで良いんだろうか）

こんなことを思いながらえさ場へ向かうと、

ネプギア「ん？」

男「げ！？」

アザラシ？「んーー！！（レディ！！）」

男達の集団がアザラシを誘拐未遂を目撃した。

ネプギア「イガラシさん！？」

リーダー「騒がれると面倒だ。殺せ！」

男共「チョリス！」

リーダーの命令に男達は武器を取り出してネプギアを襲う。

ネプギア「っ！？」

ネプギアはとっさに所持していたソードで襲ってきた男達をなぎ倒した。

その動きはまるでネプテューヌとほぼ同じ。

ネプギア「イガラシさんを放しなさい！！」

ネプギアは剣を構えてリーダーに言う。

リーダー「放すんだったらお前から放せよ！こいつが目に見えねぇか？」

とリーダーは開いている手でナイフを持ってイガラシに着きつける。

ネプギアは苦渋の表情で武器を放す。

リーダー「よ～し、いい子だ。お前のような奴は売ったら結構高いお金になりそうだ。こいつも連れてけ！」

ネプギア「ああっ！？」

ネプギアは捕まってしまった。

人質をもたれては手が出せない。

ネプギア（このままじゃイガラシさんが…、お姉ちゃん、園長…）

ついにネプギアが泣き出すところあった。

シナ「脱兎のごとく、蹴り倒す！」

ネプギアを使えていた男達がシナに蹴り飛ばされた。

ネプギア「園長さん！？」

シナ「ネプギアよう、どうも遅いと思ったら何を道草食ってやがる」

園長が現れた事に驚くネプギア。

だがシナは少し苛立ち気味だ。

ネプギア「あの園長、これは…」

シナ「だが、お前が叫ばなければ、仲間が連れ去られるところだった」

シナはマントを脱ぎ棄てて言う。

シナ「ワシは面白いことしかやらん主義、仲間がいなけりゃ面白く

ない！」
ネプギア「園長さん…」

ネプギアは品を仲間思いな人と認識した。

リーダー「何言ってんだ？やっちまえ！！」
シナ「脱兎のごとく、蹴り潰す！！」

リーダーが命令するが、シナが早く男共を全滅させた。

リーダー「くっ！テメェ！こいつがどうなってもいいのか！？」

とリーダーがイガラシにナイフを突き付けるが、

ネプギア「アザラシの体毛は体の流線型にそって生えています。なので女の子にもこんな簡単に取れます」

後ろからネプギアが楽にイガラシを取り返した。

リーダー「なっ！？」
シナ「うちに手を出したこと、後悔せい！」

ラビットピース！！

シナがピースマークでリーダーの顔をへこませた。

シナ「満月に映る兎（クレーター）の如く凹め」

ピースマークのクレーターを作られたリーダーはそのまま落ちてシナに踏まれました。

シナ「うむ、凹みが足りんね」
ネプギア「イヤもう十分かと…」

いつまでもけり続けるシナを止めようとするネプギア。

シナ「まぁいい、仲間を取り戻したんだ。ありがとな」
ネプギア「え？」

お礼を言ったシナの顔が、銀時の様な天然パーマの男性に見えた。
目をこすってもう一度確認すると、いつものウサギ顔だ。

ネプギア（シナ園長・・・あなたは本当に…）
シナ「おっとそうだ！ネプギア！餌よこせ！特にニンジンがな！」
ネプギア「独り占めは駄目です。あと其処も！」
スララ「あうちっ！」
シナ「ジェットニンジン！」

こうして王魔時動物編は平和である。

更に数日後、

ネプテューヌ「こんなところに動物園があるんだ～」

何とネプギアがネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ユニ、ロム、ラムを連れて来たのだ。

ネプギア「うん、ここが私のバイト先」
ユニ「こんなさびった所が？」

ユニはジト眼で見る。

シナ「ようこそ～、王魔時動物園へ～」

すると園長のシナが接客してくれた。
だがなぜか顔を帽子で埋めている。

ネプギア「園長さん」
ネプテューヌ「え〝っ！？この人園長！？」

ネプテューヌ含めありえなさそうな目で見る女神たち。
すると風が吹いて園長の帽子が飛んだ。
そして顔が出た。

シナ「おっと帽子が…」

素早くキャッチするが当然ばれた。

女神たち「ウサギィィィィィィィィィ！！！？？」

驚くネプテューヌ達にネプギアはため息を吐いた。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ユニ「私がやるわ」

銀八「態度でか！！まあいい、ペンネーム『一酸化窒素』から始めるぞ。『一酸化窒素「どうも、一酸化炭素だ。リリ銀パーティ編楽しみにしているけれどちょっと質問。」

みんなに質問
カーバンクルＥＸさんのリクエストに書いてあった対戦相手の中で戦ってみたいのは誰ですか？

一酸化窒素「ちなみに僕はオニワルド以上鬼巫女零ぐらい大会の人とは違うので。」』対戦者ってこれか？」

『世果埜　春祈代（ムシウタ）
リーゼロッテ・ヴェルクマイスター―（１１ｅｙｅｓ）
ブロリー（ドラゴンボール）
ワルプルギスの夜（まどかマギカ）

アレクサンドル・アンデルセン（ヘルシング）
バルバトス・ゲーディア（テイルズオブデスティニー）
赤屍蔵人（ゲットバッカーズ）
球磨川禊（めだかボックス）
都城王土（めだかボックス）』

銀八「あ～、みんなはこんな感じかな」

ネプテューヌ「私はワルギリスの方かな？」

ネプギア「それを言うならワリュプルギスだよ」

ビビ「あのリーゼちゃんを私の物に…グッフッフ…」

神「全員でかかってこいや…。俺様が全て相手になってやるぜ？ま、ワルプルギスは俺の配下だしな（本編にて）」

ギルシア「ムシウタの奴だ」

レオン「バルバトスだな」

ガレーナ「同じくだ」

セレス「アレクサンドルだね」

それ以外「どちらとも戦いたくない」

銀八「んじゃ『一酸化窒素』さん、廊下に立ってなさい」

ユニ「次ね。ペンネーム『ケン』よ。『統夜「チンクって中の人ネ

タを使ったな・・・面白いからいいけど・・・」

ＩＳね・・・ＩＳはデバイスネタになるから好きですね。

統夜「白式や紅椿、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ、シュヴァルツェア・レーゲンか・・・これらの武装はいいよな。これらを元に強化改造とか出来るし・・・」

優子「恐ろしいものを作りそうね・・・私からは・・・レーティアさんに質問です。ギルシアさんのここだけは直してほしい所はありますか？」

統夜「俺からは銀さんに質問だ。貴方は巨乳大好き派？それとも貧乳大好き派？どっちだ？これぐらいかな」

優子「ムツリって土屋君の親戚か何かなのかしら？」

統夜「さあ？ブランってひだまりスケッチのゆのと同じ声だよな」『ゆのって誰よ？』

真王「それはいいとして、質問の答え」

レーティア「特にないわ。まぁ強いて言えば他人の幼女に見境なく襲わないでほしいかな？」

銀時「おれか？・・・どっちかっていうとボインの方が…」

真王「成程。『ケン』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『支配者』さんだ。『キャラ的に山崎っぽかったですね（笑）土方と神楽と新八と沖田の意見も聞きたかったです。

質問です。

神楽に質問
一番好きな食べ物はなんですか？酢昆布とご飯以外で

転生者チームに質問
自分達の中で一番強いのは誰だと思ってますか？

トッシーと新八の事を如何思いますか？』」

神楽「卵かけご飯アル！」

ユニ「それご飯の領域でしょ！！」

真王「抑えて。彼らの中ではチフユさんですね（なんせ鬼教師だからね）。トッシーはみんなあまりよく思ってないでしょうが、新八の場合ジャンヌだけメロってます」

ユニ「メロってるって何！？」

真王「では『支配者』さん、廊下に立ってなさい」

ユニ「聞きなさいよ！！」

ユニはライフル銃で撃つ。

真王「危ない当てんな！！」

銀八「えと、つ、次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『スネー

ク「いや、ほとんど変身するのはピットだけでマリオのは常識のない転生者とか偽神とかにだけだ」

ディケイド「色んな意味で痛い…」

ルイージ「けど良く書けたなだよね」

フォックス「と言うか…何したんだお前?」

マリオ「模擬戦しただけだぞ?後聞かれたからトレーニング方法を言ったら『拷問じゃん』って言われた」

フォックス「そりゃあな…」

ネス「転生者組みに質問『内のファルコについてどう思う?』」

フォックス「後俺も質問『ファルコン・ハートについてどう思う?』」

ルイージ「メテンズギルドの団員さん達に質問『兄さんの修行はどうだった?』」

次回を待ってます!』では最初と次の質問を同時に言うと、」

転生者組「哀れだな（だね）（じゃな）」

真王「慰めろよ。次」

勇気ある転生者「ああ!あの人の修行のおかげで俺は強く慣れた気がするんだ!よ〜し!もっと活躍するぜ!!」

気弱な転生者「わ、私ああいうのは苦手なんです！！私達のような女の子が出来るものじゃありません！！」

末期症状の転生者「コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ」

道を極めし転生者「あんな修行法もあるのか。少し試してみるか」

真王「ハイでは『鳴神　ソラ』さん、ちょっとありがとうございます？」

ユニ「何で疑問形？・・・ペンネーム『王天仁』からよ。『今回の話完全に紅桜編の後日談のパロディですね。わかります。ＨＩＧＥ「それいったらダメだろ。」そんなことより質問です。

リリカル組へ
この中で機動六課に入れるとしたら？
Ｄｒウェスト＆エルザ
クルル曹長
翡翠＆琥珀』・・・そう言えばあいつ（はやて）はメイド二人ほしいとかいってたけど…」

真王「あ、もう決定だ。『王天仁』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『フリーダム』さんからの質問だ。『デスティニー「何か、チンクがＩＳのラウ…」

Ｓフリーダム「それ以上言うな！！」

∞ジャスティス「確かに、見た目も似てるけど」

レジェンド「眼帯もな…」

Xアストレイ「まぁ…質問に移りましょう」

リリカル組に
プリンのうたうを２４時間眠らずに聞いていられるか？

銀時に
チョコ、イチゴ、バナナ、どのパフェが一番好き？

アカツキ「今回は、いたって普通だな」

ハイペリオン「二つ目は、いいとして一つ目は、普通なのか？」

更新楽しみにしてます』まず一つ目は無理です。みんな寝ます」

銀時「俺は全部頼むぜ」

ユニ「黙りなさい糖尿病。『フリーダム』あなたも糖尿病にならないでね」

銀八「なんかさり気にムカつく・・・。次はペンネーム『フォースアカインド』さんから。『フォースアカインド「リリ銀パーティ編、楽しみにしています。」
ハスター「よっしゃー！楽しみにしてるぜ。」
U蚊「でも新八はバトル始まってすぐにヤムチャ状態になりそうな

気が・・・。相手も相手だし。」
ハスター「誰か新八にＩＳくれてやれてくれないか・・・。」
と言う訳で質問します。

新八へ
この中でどの力が欲しい？
魔力
超能力
妖力
オタク力』んじゃ新八」

真王「僕は超能力を手に入れる！！」

真王「確かに超能力は凄いものだね。『フォースアカインド』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。

しかし…アリアはホント可愛いよなぁ…。（そう言いながら、遠隔技法でアリアの頭を優しく撫でつつ一緒に色んな所が活発になるツボを遠隔技法で押す）

輝刃「色んな所が活発って…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ビビに質問…今まで登場した男性キャラの中で『この人になら…抱かれてもいいかな♪』って思う人…居るか？ただし、『該当者無し』はダメだぞ？

アハハ…（汗）百合者であるビビにその質問はどうだろうか…（汗）。次は俺からだ。

2．レジィに質問…今回出会ったキャラ達（特に女性陣）の中で、『この人となら、仲良くなりたいな…。』って思う人って誰かな？

輝刃「ふむ…なるほど…それはストーリー展開でレジィが絡む時の参考になるかもしれんな…。」『ア・ホ・カ！ビビは大の男嫌いなんだよ！つーかそんなことしたら『リィーン』さんに怒られるわ！！」

レジィ「だな。俺に一番いいと思う人は・・・おしとやかに思うべールさんかな？」

真王「では『月光閃火』さん、アリアと戯れていいです」

銀八「押し付けちゃったよ！！・・・まあいい、ペンネーム『改竄者』さんから。『質問します。

銀時へ
銀さんって他の刀とか欲しくないの？

なのはとフェイトへ
この中の一つをすると銀さんと結婚出来ます。やりますか？
1・お妙の卵焼きを3？食べる。
2・一ヶ月間の食事が全てアンパンだけで済ます。
3・屁怒絽さんと一ヶ月過ごす。』」

銀時「俺は木刀で十分だ」

真王「そして次」

なのは「どっちも選べないよォォォォォォォ！！！」

フェイト「で、でも、銀時と結婚するからには挑戦するしかない！」

なのは「そ、そうだね。ならここは消去法で一つ」

なのは・フェイト「あんパンで！！」

真王「だと思った。『改竄者』さん。廊下に立ってなさい」

ユニ「最後ね。ペンネーム『コルトバイザー』よ。『コルトバイザー　「オイイイイイイイイイイイイ！ついにあの赤屍さんが正式に出ることになっちまった！しかも大嘘憑きの人もいるんか！これはマジでやべえええええええええええ！・・・だれかめだかさん呼んできて・・・」

すみません、取り乱してしまいました。質問です。

銀時、新八へ
もしも箱庭学園へ入学することになったらどうする？（もちろん、銀さんは教師として）』」

銀時「あれか？問題児を取り締まる」

新八「無茶言うなァァァァァ！！！」

真王「・・・『コルトバイザー』さん、あなたも入学を。次はペンネーム『なめ猫』さんだ。『俺「ばんは、なめ猫な俺らです」
カイト「えー、いつも通りの感想いくか」
ラムザ「インタビューかぁ…いろんなイメージを持つ人がたくさん

いるようだね」
カイト「やっぱ銀さんは器がでかいんだろうな。これなら次のチート軍団も楽勝…か？」
ラムザ「すでに対策も考えてるかもね。それらに比べて、僕達じゃ全キャラ中最弱扱いかなぁ」
カイト「さあな…俺らが判断する所じゃねえよ。ただ、破壊者はともかく俺達がどの位置にあるのかは知りたい気持ちはある」
俺「そうですねぇ。まあとにかく、じっくり傍観していましょう。破壊者もどっかで傍観してそうですし」
カイト「んじゃまた」

質問

アリア・ビビ・勇華へ
毎晩何やってんの？』では彼女等の答え」

アリア「いつネプテューヌさんを抱けれるか案を考えてました」

ビビ「あの天パに釘打ち…（呪いの藁人形で）」

勇華「セ・レ・スと・・・・・・ウフフ・・・」

真王「・・・・・・『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次、ペンネーム『亀鳥虎龍』だ。『上条
「情報収集って、結構大変なんだよな」

神裂

「今回の話しは、まさにそれを強く表していますね」

土方に質問。

僕の小説『万時屋奇譚幕』では、影が薄くなっています。

感想は？』ズバリ答えましょう」

土方「もっと出番増やせよォォォォォォォ！！！」

銀八「ざまぁ見ろ♪『亀鳥虎龍』さん、もっと土方をいじめろ」

真王「ア・ホ・カ！」

銀八「ゴホォッ！」

真王「次はペンネーム『黒龍』さんだ。『黒龍「うわ～今の機動六課のメンバーはキャラが濃いですね」

銀時「アレだな。カオス六課って方が合ってんじゃねぇか？」

黒龍「カオス六課ｗｗｗｗ」

ソラ「マトモな奴があいつ等にあったら戸惑う場面しかないな」

黒龍「最後に締めてくれたのはネプテューヌですね」

銀時「なんつうか、あいつがメインヒロインみたいな感じだな」

黒龍「リリカルなのはメンバーはエセヒロインみたいなっちゃってますね」

銀時「お～い、あいつらに殺されても知らねーぞ」

黒龍「たぶん大丈夫でしょう。じゃあ質問します。今回は俺とこの人達です」

アリス「ネプテューヌに質問。なんでもビビが銀時を抹殺しようとしているらしい。って、それを聞いてお前はどうする？」

黒龍「そっちのアリアに質問です。なんで今度はあの屁怒絞様がネプテューヌを狙っているみたいですが、どうしますか？（黒笑）」

新八「そっちの僕に質問と言うか文句がある！！なんで同じ僕にほくそ笑むじゃコノヤローーーーーー！！！！！」

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『では順番に答えましょう」

ネプテューヌ「全力で止める！」

アリア「屁怒絞が何者か知りませんが、殺すまでです！」

アリアが屁怒絞がどんな奴か知らない。

真王「これが屁怒絞だ」

アリア「なにな・・・きゃあああああああ

！」

真王「想像通りのリアクションをありがとう。最後に新八」

新八「僕はジャンヌちゃんと彼女出来てうれしいんですよ。でも実はこの前風花さんのゲスト出演で咲夜さんにぼこぼこにされてもう足洗ってます・・・（ガクガク）」

ジャンヌ「もう二度とあんなことしちゃダメだよ新八君」

新八「ジャンヌちゃん…」

ジャンヌ「新八君…」

新八「ジャンヌちゃん…」

ジャンヌ「新八君…」

新八「ジャンヌちゃん…」

ジャンヌ「新八君…」

新八「ジャンヌちゃん…」

ジャンヌ「新八君…」

銀八「カーーッペ！！」

いつのまにか復活した銀八がいやそうに唾を吐く。

ジャンヌ「汚いわよあんた！！」

ユニ「死にさらせぇ！！」

銀八「ギャアアアアアアアア！！！」

銀八はユニのショットガンで撃たれた。

ちなみに死んでません。

真王「では『黒龍』さん、新八以外廊下に立ってください。ラスト、ペンネーム『ウィンド』さんからだ。『ウィンド「これって明らかにあの話だ」

クリア「けど面白いじゃないですか」

ウィンド「確かにな……」

クリア「じゃ質問行きますか」

ウィンド「だな。ネプテューヌに質問。白夜叉モードの銀さんと戦って勝てる見込みはあるか？」

クリア「女神四人に質問。乗りたいガンダムは？」』ネプテューヌなら女神化して五分五分ぐらいかと…。そして彼女等の中でガンダムに乗る人はベールですね。しかも全ガンダムフィギュア持ってると…」

ユニ「駄目ねあの婦女子…。『ウィンド』廊下に立ちなさい。さて、次はあの双子よ。あとよろしく」

～シナ（本名：兎佐木（うさぎ）　志奈（しな））～

髪：白（クリーム色の天然パーマ）
目：赤（茶色）
服：逢魔ヶ刻動物園の椎名の服
年齢：３０代あたり
３サイズ：無し
体重：４０キロ
性別：♂
種族：王魔時動物園園長
魔力光：なし
好き：楽しみ、面白いこと
嫌い：楽しくないこと、つまらないこと
性格：常に面白い子としかしない主義らしい
レベル：６０００
得意武器：素手
スキル：アニマルの呪い（動物の魔力を手ぬすることで力を得る。戻すこともできる）
詳細：幼き頃化け物ウサギによって呪いを受けた男。天下一の動物園を作ることで元に戻ろうとしている。だが面白いことしかやらん主義なのでほったらかし。その反面孤独を嫌うらしい。ネプギアや他の仲間たちと主に天下一にしようと考えている。

第九十三訓：動物が変身するのは奇想天外（後書き）

シナ「ワシは王魔時動物園園長シナじゃ。早速じゃが機動六課をワシの天下に収める！」

ネプギア「って何やろうとしてるんですか園長！！」

シナ「だってワシ面白いことしかやらん主義！ほれあるじゃろ？近頃魔王なんて呼ばれとる奴」

ネプギア「それは本人の前で入っちゃだめですよ！！ただでさえを れを言った被害者は後を絶たないんですから！！」

シナ「そうか、なら金の死神は露出狂だと…」

ネプギア「もっとだめに決まってるでしょ！！」

シナ「次回！『王魔時動物園戦記』最終話！『シナの野望』ワシの活躍は天下を治めるのじゃ！」

ネプギア「ですからそう言った迷惑行為は止めてくださいーーーー！！！！」

ネプテューヌ「・・・ネプギア…一体何が？」

真王「次回『別れとなると悲しいことになりやすい』テイクオフ」

～予告～

プリニー「ついに転生のお金がたまったッス・・・」

第九十四訓：別れとなると悲しいことになりやすい（前書き）

真王「今日はプリニーが転生します！」

プリニー「かなしき別れッス！！」

第九十四訓：別れとなると悲しいことになりやすい

キピーーーーン！

プリニー「！」

部屋の掃除をしていたプリニーがなにかを察知した。

プリニー「とうとう来たんスね、この時が…」

彼自身も気付いているようで、報告のためにイストワールに言う。

プリニー「話があるッス」
イストワール「・・・その様子だともう時期が来たということですね」

イストワールも彼の事を悟ったらしい。

イストワール「皆さん、話したいことがあります」

イストワールとプリニーが一同に向き直り言う。
ネプテューヌ達女神組は悟ったらしい。

ネプテューヌ「プリニーさんが転生するの？」
全員『え！？』

驚愕する一同（女神組除く）。

ネプテューヌ「プリニーがどういう存在か覚えてる？」

なのは「確か、生前罪を犯した人間が、償いのために生まれ変わった姿だって……」

なのはの言葉にが頷き、プリニーが説明を引き継いだ。

プリニー「プリニーの本能で分かったんスよ、今日が転生の日だって。だから、皆さんとは今日でお別れッスね。短い間だったッスけど、お世話になりましたッス」

ぺこりと頭を下げるプリニー。

だが陰で聞いてしまったヴィヴィオがいた事は誰も知らない。

その日は、ささやかながら宴会が開かれた。

そして夜。

あちこちで雑務を手伝っていたこともあって、プリニーと親しい局員は多く、皆別れを惜しんでいた。

とは言え全員が出向くわけにもいかないので、見送りのメンバーは三隊長にヴォルケンリッター、ＦＷ陣、協力者組、リインの合計９７人に絞られた。

魔界・月渡しの雪原

見渡す限りの銀世界を、赤い満月が照らしている。

はやて「魔界の月は赤色なんやね」

桂「俺もあれは初めて見たな」

ネプテューヌ「違うよ。普段は金色なんだけど、不定期で赤く変わる日があるんだよ」
ネプギア「赤い月の光が、償いを終えたプリニーの魂を浄化して、新しく生まれ変われるようにしてくれるんです」
はやてと桂の言葉にネプテューヌが答え、ネプギアが補足を入れた。
ビビ「……何か聞こえない？」
ティアナ「これって、歌……？」
ティアナが気付いた通り、どこからか歌が聞こえてくる。
ＩＢＧＭ赤い月ｂｙ魔界戦記ディスガイア（Ｄｉｓｇａｅａ：　ＨＯＤ　Ｓｏｕｎｄｔｒａｃｋ　－　Ｒｅｄ　Ｍｏｏｎ）
『赤い月　赤い月
罪を犯した者共の
穢れを清める　赤い月
今宵は誰が生まれ変わる？
今宵は誰が生まれ変わる？』
高く、神秘的な歌声だ。
シグナム「一体誰が……、あれは……！？」
歌声の主を探して辺りを見渡していたシグナムが驚きの声を上げる。

銀時「んだこりゃぁ？」
スカリエッティ「これは…」
チンク「歌は彼らからか？」
グレイ「・・・・・・」
ギルシア「あの赤い月へ向かってるのか？」
レイン「というか数が半端ねぇな」

彼らの視線の先には無数のプリニー。数え切れないほどのプリニーが一列に並び、歌いながら遠くに見える祭壇を目指して歩いている。

プリニー「オレ達も行きましょうッス」

プリニーが言って、一同は祭壇に向けて歩き出した。

月渡しの雪原・祭壇。
通称『月下の雪鏡』。

赤い月の光が柱となって立っている。

ユーノ「この柱は？」
プリニー「転生するための柱ッス」

見ていたユーノが呟くとプリニーが説明する。

キャロ「誰かいるみたいですよ？」

キャロが言うとおり、三人の黒い人影が光の柱の側にいる。
大きな鎌を持った黒い手袋とマントが宙に浮いており、空っぽのフードの中に目と思しき赤い光が二つ灯っている。

ネプギア「あれは『死神』です」
ビビ「え〝!?あれがっ!?」

ネプギアが言ってビビがありえなさそうなことを言った。
多分銀時や土方も同じ意見だろう。
死神――償いを終えたプリニーの魂を赤い月に送り届ける使者。外見は邪霊族という悪魔に似ているが、その詳細は謎に包まれている。
プリニーが光の柱に触れると、その体から光る球体――魂が抜け出て赤い月へと昇っていき、残された皮を死神が回収していく。

グレイ「プリニーの特性は分かった。ところで、プリニーが罪を償い終えるには、どれほどの時間がかかるんだ?」
ネプギア「罪の内容によってそれぞれです。百年もかからないプリニーもいれば、千年以上かかるプリニーもいます」

罪を犯した瞬間、死後のプリニー化が決まるわけではない。
善行をプラス、悪行をマイナスとして、死んだ時に総和がマイナスになっていた者がプリニーとなるのだ。
また、法で裁けない罪（自殺など）はかなり大きなマイナスとなる。

森羅「じゃあおまえはどのくらいかかったんだ?」
プリニー「大体三百年くらいッスね。まだ早い方ッスよ」

森羅の問いに答えるプリニー。
彼の場合、六課に雇われて人間基準で給料がもらえるようになったのが大きい。

ちなみに、魔界でのプリニーの平均時給は約１５ヘル（アイスキャンディが一本６０ヘル）である。

プリニー「そろそろみたいッスね……」

見れば、あれだけいたプリニーがもう一桁にまで減っている。
プリニーは光の柱の前に立った。

ヴィヴィオ「プリニーさん！！」

ヴィヴィオがプリニーを呼びとめる。

ヴィヴィオ「やだぁ！！行っちゃやだぁ！！」

涙をためて訴えるヴィヴィオ。
じたばた暴れるヴィヴィオを右にネプテューヌ、左にビビ、後に後ろから銀時が持ち上げる。
長い時間ではないものの、ヴィヴィオはプリニーを大切にしていたようだ。

プリニー「ごめんッス」

プリニーは謝る。

プリニー「皮肉ッスね……。プリニーになって間もない頃は、さっさと転生したくてたまらなかったのに、今は名残惜しくて仕方ないッスよ……！」

肩を震わせ、プリニーは一同の方へ向き直る。

プリニー「皆さん……！　お元気で……！それにヴィヴィオ…」

プリニーはヴィヴィオの方へ向く。

プリニー「いつになるか分からないんすけど…何時か俺はヴィヴィオのとこへ行くッス！何年かかるか分かんないんすけど迎えに行くッス！」

ヴィヴィオ「プリニーさん・・・うん！約束だよ！」

光の柱に触れ、プリニーの魂は赤い月へ昇っていった。

銀時、桂、月詠、源外、スカリエッティ、グレイ、神、チフユは登っていくプリニーの魂を見つめ、新八、神楽、ジャンヌ、ビビ、ナリア、さくら、ヒメラは涙を流しながら見て、それ以外は反応それぞれである。

特にヴィヴィオはすわりこんで泣き崩れていた。

ヴィヴィオ「う、う、・・・・・」

リイン「グス……、あれ？　まだプリニーさんが残ってますよ？」

リインが気付いた。一同の後ろに数体のプリニーがいることに。

だが他のプリニーとは体色が違った。片方は若肌の色、もう片方は黒く眼鏡をかけている。

沖田・土方「あ？」

近藤「どうしたトシ、総吾」

若肌色のプリニーと黒く眼鏡をかけたプリニーを見た土方と沖田が声を出し、近藤が聞く。

土方「イヤ、よく分からねぇが…」
沖田「俺達は、あのプリニーを懐かしく思えるんでさぁ…」

マジマジと若肌色のプリニーを見る二人。
そのプリニーは一同を、沖田を見た。

沖田「！ま、まさか・・・・・・・・・・・・・・姉上！？」
全員「え！？」

沖田が驚いた形相でそのプリニーに聞く。

土方「ならお前は……伊東なのか？」

土方は眼鏡をかけた黒いプリニーに聞く。
そしてそれぞれのプリニーの背後にホログラムのように半透明で少し明るめの人影が出る。

沖田の姉「こんな形で会ってごめんなさい、総ちゃん」
伊東「久しぶりだな土方」
沖田「あ、姉上！」
土方「…やっぱりお前だったんだな」

死んだはずの二人が目の前に現れて驚く2人。

土方「・・・確かお前は攘夷で罪を犯したんだったな」
伊東「その通りだ。だから僕はその罪を償うためにこの姿になったんだ」

土方と伊藤は死闘を思い出して言い合う。

沖田「けど姉上は！罪なんて犯してなんか…」
ミツバ「ごめんなさい。私はあの人に惹かれているせいで大切な弟を構うことが少なかったから…。こんな不出来な姉でごめんね」
沖田「そ、そんなことねぇ…！」

沖田は姉と再会できたのか会話がぎくしゃくしている。

銀時「懐かしい奴にあったな…」
新八「伊藤さんにミツバさんまで…」
ネプテューヌ「銀さん、あの二人誰？」

銀時と新八が2人に驚いていると、ネプテューヌが聞く。

銀時「女の方はあのドSの姉であっちの眼鏡は攘夷の奴さ」
ネプテューヌ「・・・・・？また遅れたプリニーがいる」

ネプテューヌが後ろを見ると今度は茶色いプリニーだった。

茶色プリニー「そろそろ罪を償うって時に懐かしい奴に会えてうれしいぜ！」

そのプリニーは銀時と桂を見ながら言う。
対して二人はチンプンカンプンだ。

桂「？何のことを言っているんだ？」
銀時「俺はオメェの様な奴と知り合いはいねぇぞ？」
茶色プリニー「んだよ忘れたのか？いつも言ってたろ？」

茶色プリニーの背後に茶色い短髪に右目に眼帯、いかにも侍と雰囲

気のある男が出る。

武蔵「仲間というのは家族なんだ！ってな！」
銀時「なっ！？オメェは…！！」
桂「か・・・風上武蔵（かざうえむさし）！！」

銀時と桂は驚愕する。
かつて仲間と呼び合い、攘夷戦争ではかなく散ってしまった男・風上武蔵の存在に。

武蔵「久しぶりだな銀時、桂。あれから戦争は…、イヤ、いわんでも分かる」

武蔵は懐かしそうな顔をした後、同時に悲しそうな顔をする。
無理もない、攘夷戦争から月日が流れたんだから。

武蔵「もう何年たったかな？あの攘夷戦争・・・。結局、あの時は守る物を失っちまったな」

銀時と桂は沈黙する。

武蔵「だが、今お前達に守る物が出来たじゃねぇか！」

武蔵が愉快そうに言う。
銀時は意味分かんない顔をしたが、桂は理解して笑う。

桂「ふっ、いつの間にか我等も背負うものが出来たしな。銀時は荷が重すぎるほどで来たがな」
銀時「・・・そうだな」

ようやく理解した銀時。

武蔵「過去を悔やんでもしょうがねぇ。失った物は取り返すこともできねぇが、今守る物を守るべきだ！銀時！桂！今の侍に出来ることは……正面から堂々とぶつかっていけ！」

銀時「・・・あんたは死んでも変わらねぇな」

桂「同感だ」

武蔵「そういうな！」

武蔵のアドバイスに銀時と桂は吹っ切れた感じになる。

そしてミツバ、伊東、武蔵は光の柱に立つ。

武蔵「んじゃお前ら。負けんなよ！」

銀時「お前もな」

武蔵と銀時は背を向けて、

武蔵、銀時「あばよ。ダチ公！」

銀時は去り、武蔵達は転生した。

女神やなのは達は祈りをささげた。

機動六課

戻ったなのはたちは少々元気がない。

無理もない。いつもいる相手がいなくなったからだ。
特にヴィヴィオが一番痛手だ。

フェイト「どうしよう…」
なのは「ヴィヴィオ、あのプリニーちゃんをよく懐いてたからね…」
ジャンヌ「転生は不定期だから…いつ来るかもわからないし、どんな世界に転生するか…いつの時代か平行世界か…」

全員「ハァ・・・」

全員揃ってため息を吐いた。

???「そんなにさびしかったんですか…」

すると男のこの声が聞こえたのでそっちに向く。
青い髪に背中には茶色のバック、身長はヴィヴィオよりちょっと上くらいだ。

銀時「誰だおい?ここはテメェのようなガキンチョが来るところじゃねぇよ」
???「エリオさんとキャロさんもいるのにですか?」
銀時「まぁ確かにガキンチョだけどな…って何で知ってんだ?」

シッシッと手でジャスチャーする銀時に少年が突っ込む。
その少年の一言に銀時が疑問を持つ。
だがヴィヴィオは少年からの雰囲気を分かったのだ。

ヴィヴィオ「もしかして…プリニー…さん?」
全員「え?」
プリア「うん、昨日ぶりだねヴィヴィオ。今の僕はプリアだよ」

ヴィヴィオ「プリア・・・プリアお兄ちゃん…」
プリア「はい」

プリアが言うとヴィヴィオは泣いて抱きついた。
かくしてヴィヴィオが懐いたプリニーは、プリアとして転生しました。
ただ余談としてプリアは強く男の娘ですので女性局員（＋フェイト）に追いかけまわせれることになるのは言うまでもない。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・シ～ン

銀八「・・・あれ？確かあの双子がアシスタントすｒ「代わりにワシがやるんじゃ」ってだれ！？」

真王「前回登場したシナだよ」

シナ「ワシは王魔時動物園園長シナである」

銀八「うわ何つう態度でｋ「そこうるさいぞ」ギャアアア

アカツキ「そうだ気にするな。そんじゃ質問に行きましょうか！！」

ネプテューヌに
一番の恋のライバルは？

眼鏡（新八）に
眼鏡じゃなくて、コンタクトにしないのか？

バスター「それじゃあ、此れから彼奴を眼鏡以外に何て読めばいいんだ？」

更新楽しみにしてます』では回答を」

ネプテューヌ「銀さんを狙うケダモノどもだよ！」

シナ「言ってる本人もケダモノの仲間入りじゃないのか？」

ネプテューヌ「！！」

真王「それは言うな。次」

新八に眼鏡外してコンタクトをつけてみた。

銀時「あれ？新八がいね～な」

神楽「何処道草食ってるアルか？」

なのは「新八君が突然いなくなったよ」

ギルシア「みえねぇな」

近くに新八がいるのに見えてないだとぬかす一同。

真王「やっぱ馬鹿は頭駄目のようだ」

ネプギア「お姉ちゃん…」

ジャンヌ「落ち込まないで新八君…」

ちなみに上記三人は認識している。

真王「では『フリーダム』さん、あなたも地味になってみてください」

シナ「では次のペンネームは『鳴神　ソラ』じゃ。『マリオ「おお～凄いな」

ルイージ「と言うかネプギアちゃん、ガンバ！」

スネーク「解けたら銀時似なのかね？」

フォックス「さあ？」

ネス「質問『ファルコに懐いてるこっちのフランとお空についてどう思う？』」

タレ銀「質問！『俺が蛮ちゃんの能力使うと違和感ある？』」

ソニック「Ｈｅｙ，質問だぜ！『ビビはＦＦＲ（ファイナルフォームライドの略）を見た時どう思った？』」

次回を待ってます！』蝙蝠とカラスか！天下一のために飾るか！」

真王「飾るな！ちなみにフランは変異蝙蝠だ」

シナ「そうか。次の質問じゃが、似合わんな」

真王「そう思う。最後にビビ」

ビビ「これなんてちチート！？」

真王「ハイそれでは『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『ウィンド』さんだ。『ウィンド「ｗｗｗｗｗｗｗ」

クリア「え～只今作者が爆笑中なので俺が質問します。勇華に質問。今出ている男性陣で結婚したい相手はいますか？あとなのはとフェイトにも。銀さんと結婚するために試練を乗り越えなければならない。試練は以下の通り」

［メアと戦って数分間生き残る］、［セレスと戦って数秒間生き残る］この二つだ。よろしく』では回答…」

勇華「もちろんセレス。ウフフ？」

セレス「はは・・・」

なのは・フェイト「どっち選んでも死ぬゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」

シナ「リアクション面白!!『ウィンド』よ。廊下に立つのじゃ。ではペンネーム『なめ猫』も始めよう。『俺「ネプギア頑張れネプギア。なめ猫な俺らです」
カイト「やはり来たな、ネプギア主役」
ラムザ「ネプギアもヒロインだからね」
俺「さて、原作でもまじめな頑張りっ娘キャラのように見えるけど、ここでも違和感ないくらい頑張ってますねー」
ラムザ「またネプギア主役の話があるといいね。もちろん楽しませてもらうよ」
カイト「しっかし、ぶったまげた動物園長だな……うさぎか何からしかったが;」
ラムザ「次は何するんだろうね;」
カイト「さあな…;」
俺「そういえばカイト達のキャラ紹介も書いてなかったですね…そろそろ書いとかねば」
カイト「おう、頼んだぜ」
ラムザ「ではまた!」

いつもの質問?

ビビへ
「やっぱり銀さんと決着つけたら?あ、うちでアイリちゃんが出るんだけど、いつか会わせられたらいいな。大地ふっとばして岩山ぶった斬りまくる強さだけど」

質問なのかこれは、な質問

『時空管理局や機動六課のメンバー全員(いちおフルパワー)をたった1人で撃破、すな

わち無双できる者よ来たれ！　ＢＧＭはヤンマーニ（ｎｏｗｈｅｒｅ）』
（なお、そちらの時空管理局や機動六課でもおｋ）

ラムザ「何がしたいんだよ…；」
カイト「……いつか、俺にも突撃しろと？…；」『最初の奴は作者に聞け」

真王「もうやらねぇよ。あと無双出来る人は…」

グレイ、ビビ、神、レーティア、ギルシア、レオン、ユウカ、ガレーナ、チフユ、メア、セレス

真王「・・・ぐらいだろう」

シナ「出す前提じゃな。『なめ猫』よ。一緒に天下を取ろうぞ」

真王「勧誘するな。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。

しかし…アリアを宥めるのに、結構時間が掛かったぜ…（汗）。今後は気をつけよう…（汗）。

輝刃「そう言いつつも、閃火の肌はずいぶんツルツルになってるな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．真王に質問…ずいぶんと登場作品が増えていってるが…まだ増え続けるのか？

確かに、結構な数の作品が入り乱れてるよな…（汗）。次は俺から

だ。

2．レジィに質問…この中で『これならギリギリ大丈夫だな…。』と思えるモノはどれかな？

1…宇治銀時丼

2…土方スペシャル

3…スーパーネプ丼（名称合ってるかな…（汗）

輝刃「うぅむ…どれも完全に胃に本能的な苦手意識を生みそうなモノばかりだな…（汗）。」

うん…あ、ところでレジィってアリアの事どう思ってる？っていうか、ぶっちゃけ異性としてどう思ってる？

輝刃「閃火…いくら何でも自分の気に入ってるキャラであるアリアをレジィとくっつかせようとしてるのは…案外お似合いになるかもしれないな…。」『さぁまだ分かりません。増えるか増えないかは」

レジィ「3番…だな」

真王「では『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『一酸化窒素』さん。『対戦相手の皆さんに誰と戦いたいか聞いてみたら・・・。

バルバトス「あの銀髪の侍だ。あいつ確かゾーマとか言うやつ倒して英雄扱いされているんだろ。」

ブロリー「カカロットォォォォォォォ！」

アンデルセン「異教徒は全員皆殺しだ。」

球磨川楔「まあ・・・誰でも良いか・・・。」

赤屍蔵人「楽しめれば誰でも構いませんよ・・・・フフフ・・・・。」

まあこんな感じだ・・・。
そしてみんなに質問
カーバンクルEXさんのリクのお助けキャラの中でタッグを組みたいのは誰?

そして銀さん・・・まあ頑張れ・・・・。』数が多いな…、今は女神と銀魂組で」

ネプテューヌ「う～ん、霊夢さんかな?」

ノワール「魔理沙ね」

ブラン「夢食い…」

ベール「めだかという方ですわ」

ネプギア「私もお姉ちゃんと同じ人」

ユニ「同じ銃使い（違います）の御坂ってやつよ」

ラム「狼牙さんかな?」

ロム「（こくこく）」

銀時「おれはいらね」

新八「悟空さんで!」

神楽「私が悟空ネ！」

桂「駆どのだな」

月詠「両儀式、わっちはそれがいいの」

真王「ハイでは『一酸化窒素』さん、廊下に立ってなさい」

シナ「うむ、次はペンネーム『リィーン』じゃ。『どうも！！　更新、お疲れ様です！！！

神「あり？　前回の感想、消えてね？　俺様が活躍した回の」

上手く送信されなかったのでしょうか……？　まぁ、その分の感想を書けばいいだけの話ですし

神「まぁ、そうだな」

さて……ようやく活躍しましたね、神様

神「おうよ！！　ラスボスらしき奴を一撃で追い払う！！！　さすが俺様！！！　色々狂ってルゥ！！！」

あと……何気にビビも活躍してましたね

神「あぁ。あれには俺もびっくりだわ……まさか、あいつが活躍するとは。しかも、ヒュムノスをチョイスするとは」

しかし……はじめ見たとき、アレには、え？　って思いましたけ

どね……

神「あの、“拒絶される闇”って奴か？　よく見ると、オリジナルだし、あれ英語だしな」

ヒュムコンやヒュムミュにも無いタイトルで、んん？　と思ったら……いや、自分の把握していないヒュムノスがまだ在ったのかと勘違いしましたよ……それに

神「あぁ？」

ヒュムノスで二人称視点、又は三人称視点というのはあまり無いんですよねぇ。ヒュムノスというのは、自分の想いを謳うモノです。なので、普段は一人称視点の歌詞が多いのです

神「（あぁ～、スイッチ入ったか）」

ですから、“される”という文法は、ヒュムノスではあまり使用されません。あの場合、“拒絶される闇”ではなく、“闇を拒絶する”という意味合いの方がヒュムノスとして合っています……あと、ヒュムノスのすべてには、必ず頭に“ＥＸＥＣ”という単語が入ります。これは全てのヒュムノスに必要なモノで、“実行する”という意味を持っており、その詩の想いを具現化させるキーに成ります。それが無ければ、ヒュムノス語で謳っていたとしても、効果が表れず、ただ想いを独白しているようなものです。つまり、在れをヒュムノスとして成り立たせるには、“ＥＸＥＣ｜ＲＥＪＥＣＴ＝ＤＡＲＫ／・（エクゼク・リジェクトダーク）”。または、“ＥＸＥＣ｜ＨＹＭＭＥ｜ＲＥＪＥＣＴ＝ＤＡＲＫ／・（エクゼク・ヒュム・リジェクトダーク）”となります。或いは、これが“インフェル・ピラ”をサーバーとした“新約パスタリエ”のヒュムノスの場合、

“ＥＸＥＣ”ではなく“ＭＥＴＨＯＤ｜”という単語に成り、“ＭＥＴＨＯＤ｜ＨＹＭＭＥ｜ＲＥＪＥＣＴ＝ＤＡＲＫ／・（メソッド・ヒュム・リジェクトダーク）”のような形に成ります

神「おいおい……よくまぁ知ってるなぁ、おい」

使っているネタのことぐらいは、熟知しておかないといけないと思いまして……それに、ヒュムノス語はかなり奥が深いですので……面白いんですよねぇ。ネタとして、かなり使えそうなんですよ

神「まぁ、まだ勉強中なんだろ？」

はい……“新約パスタリエ”に至っては難しすぎますし、“アル・シエラ（星語）”なんて無理です。理解が追いつ来ません

神「ま、まぁ……気長にやれ」

目指せリアルレーヴァテイルです！！！　いづれは、自作ヒュムノスとか作りたいですし

神「……もうシラネ（；一ω一）」

あとは……なんか、降魔ヶ刻動物園のが出てきてますし……ホント、カオスが増していってますね

神「どんだけキャラ増えるんだがｗｗｗ　忘れられているキャラいるんじゃねぇの？」

間違いなくいますね、これは……

神「良い例がここに居るし……な」

ううう……で、では！！　次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張って下さい！！　失礼します！！！

神「ばいば～い！！」

では、いくつか質問を

神「おぉ、あるのか」

・真王様へ。ハッキリ言って、この銀女神鎮魂歌の全キャラを把握していますか？

・再び真王様へ。“ＭＥＴＨＯＤ｜ＲＥＰＬＥＫＩＡ／．”という曲を知っていますか？　ヒュムノスの一つですが……もし知らなければ、よかったら聞いてみて下さい。Ｙｏｕｔｕｂｅとニコ動に歌詞付きの動画が在りますので。お勧めです

神「おい！！　最後のは質問じゃねぇだろ！！！　しかも、処刑用ＢＧＭタグが必ず付いているッ！！！」

いやぁ、ヒュムノスの話してたら、無性に聞きたくなってきまして……ほんと、いいですよ、レプレキア。最高の“通常戦闘曲”です

神「あんなもの、通常のバトルで流れるとかなぁ……贅沢だろ、

オイ」

いつ聴いても、ラスボスの曲としか思えない感じが、また堪らないんですよ～

神「やっぱさ、ヒュムノスは神曲ぞろいだよな～♪」

ですね～♪』・・・なんだかワシと似た性格しとるな」

真王「無視だ無視。忘れないように登場したキャラ達をメモってますよ。後その曲は知りませんですしアルトネリコ持ってません」

シナ「ふ～ん『リィーン』よ。とりあえず廊下に立て」

真王「次です。ペンネーム『黒龍』さんからだ。『黒龍「まさかあの唯我独尊ウサギのあの人が登場するとは…」

銀時「なんつうか、真王もジャンプ買ってんだな」

ソラ「単行本買った可能性もあるだろ」

黒龍「なんにせよ、ネプギアの大変なバイトが始まりましたね」

ソラ「そうだな」

黒龍「なんて言うか、神とシナって似ていますよね」

銀時「あ～、なんか雰囲気似てるもんな」

ソラ「気が合いそうだな」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1．これからもシナ達、王魔時動物園の人たちは出るんですか？

2．ジャンヌに質問。新八が屁怒絽様に襲われたらどうしますか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『へい、もちろん再登場の予定はしています」

ジャンヌ「そそそそそのときはわたわた私がままままままままももってあげあげあげ・・・（ガクガクガクガク）」

真王「愛と恐怖がまじりあっている…。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。つぎだ。ペンネーム『支配者』さんだ。『ジャンヌに質問

新八がなのはに未だに好意を持っていますがいかがいたしますか？

銀八と銀時に質問

リア充を如何思いますか？

皆さんに質問

屁怒絽に勝てるのは誰ですか？』」

ジャンヌ「・・・・・・・・・」

真王「答える気なし…。次、銀八は気絶してるから銀時」

銀時「爆発しろ！！！」

真王「・・・最後」

レオン・ガレーナ「私だ（余じゃ）」

神「俺様だ」

セレス「少なくとも俺は魔神だ」

真王「では『支配者』さん、廊下に立ってなさい。最後だ。ペンネーム『改竄者』さんからです。『質問です
ギルシア・アダマントさんへ
ザ・チルドレンのなかで好きな子は？』」

ギルシア「全国の幼女すべて！！強いて言うならヴィヴィオたんだ！！」

真王「『改竄者』さん、幼女と廊下に立ってなさい」

シナ「もう終わりか、ワシはもう帰る、じゃあな」

～プリア～

髪：青

目：黒
服：プリニーの皮のような服に黒短パン。背中にいつもリュック型のプリニーバックを背負っている。
年齢：８歳
３サイズ：なし
体重：３５キロ
性別：♂
種族：プリニーボーイ
魔力光：？？？
好き：ヴィヴィオ、お金、働きごと
嫌い：面倒事、押し付けられること、襲われること
性格：少し適当気味。
レベル：５０００
得意武器：プリニーナイフ
スキル：プリニー指令（隣接するプリニーの数で能力が大幅に上昇する）
詳細：罪を償い終えたプリニーが転生した姿。女の子と間違えるくらい超可愛い顔立ちで、よく女性からいちゃつかれたり、童貞を取られかけたりしている。現在はヴィヴィオの世話係である。

第九十四訓：別れとなると悲しいことになりやすい（後書き）

真王「さて、次回はまたキャラが増えます。しかも意外すぎる登場の仕方で！！」

ラム「なんなのか気になるけど！次回！『人は知らない間にお母さんになっている』」

ロム「テイクオフ・・・」

～予告～

レーティア「私、一児のママになっちゃう？」

第九十五訓：人は知らない間にお母さんになっている（前書き）

レーティア「今回の私、赤ちゃんが出来ちゃう？」

真王「マジッスか！？」

第九十五訓：人は知らない間にお母さんになっている

ズキンッ

――――痛イ――――

ズキンッズキンッ

――――私ノ中デ暴レテイルヨウダ――――

ズキンッ！ズキンッ！

――――イタイ――――

ズキンッズキンッズキンッ

――――マルデセマイクウカンカラデテガッテイルヨウダ――――

ズキンッ、ズキンッ

――――アア、ワタシニ――――

ズキンッ

――――ワタシノナカニ――――

ズキンッ！

――――アラタナイノチガヤドッテイルンダ！――――

ズキンッズキンッズキンッズキンッズキンッ

六課の食堂

銀時「クソガキ！俺のパフェ横取りしたばかりか何に悪びもなしってどういうことだ！！」
ラム「何言ってるの、あそこにポツンと置いてあって『どうぞ食べてください』って言ってるもんじゃないの？」
ロム「（こくこく）」

銀時とラムが言い争っている。
実はラムが銀時のパフェを食べてしまい、結果として銀時は怒っている。

銀時「もうゆるさねぇ！お尻ペンペンじゃゆるさねぇからな！！」
ロム「ヒ・・・」

怒る銀時に思わず涙が出るロム。

ラム「ああ！！ロムちゃんを泣かすなんてあんたサイテーだよ！！」
銀時「んだよそりゃ！！それ俺が泣かしたみたいじゃねぇか！！」
ネプテューヌ「みたいじゃなくて、本当に泣かしてんじゃん」
ブラン「・・・何処からどう見てもあんたのせいにしか見えない」

ネプテューヌ達や六課や新八たちは銀時を冷ややかな目で見る。

銀時「止めてくんない!?その目止めてくんない!?!俺なんか悪いことした!?」
なのは「自覚ないんだね…」
フェイト「銀時…」

なのはもフェイトもこればっかりは銀時の味方しない。

ギルシア「だったら簡単だ。俺がこれでもかというくらい守って…」
ブラン「手を出すな!!」
ギルシア「ごほっ!」

ギルシアが手を出しかけた瞬間ブランに殴られた。

ジャンヌ「あいかわらずギルシアは幼女に弱いわね…」
レーティア「そうね・・・」

ジャンヌは呆れた顔をして、レーティアは下腹をさすりながら言う。

コンパ「・・・・・・?」

コンパはレーティアのしぐさを気にした。

ネプテューヌ「そうだネプギア、アレ持ってきた?」
ネプギア「これだよね」

ネプテューヌがネプギアにあれと言うとネプギアは理解してある物を取り出した。
それはケチャップやらマヨネーズやら納豆やら小豆やら鮭やらとなんかトッピングするものが多い。

そしてドンブリが2つ。

はやて「まちぃや。なんやそれは」
ネプギア「見てれば分かります」

そう言うネプギアの目は諦めてくださいと言う感じだった。
するとネプテューヌはトッピングをドボスカと入れまくった。
そして完成したのが、

ネプテューヌ「お披露目～、スーパーネプ丼！」

とどんぶりを持ってどや顔で言う。

銀時「ってなんだよそれ！！いろいろ混ざり過ぎだろ！！」
沖田「いや～、旦那の嫁さんも土方さんと同じ犬の餌にしちまうたぁ」
土方「総悟テメェ何時かぶっ殺す」

銀時が怒鳴り、沖田は皮肉なことを土方に言う。

ネプテューヌ「・・・こんなにおいしいのに何で理解できてないんだろう…」
ネプギア「見た目から駄目だと思うけど…アム」
全員「そう言うお前は何で平気！？」

ネプテューヌさがっかりした表情で食べ、ネプギアは突っ込みながらそれを食べる。
ただその光景に全員ネプギアに突っ込んだ。

レーティア「・・・・・・・・・」

レーティアはなぜか離れた場所で下腹をさすっている。

コンパ「レーティアさん…」
レーティア「！！・・・ってコンパ？」

不意にコンパが声をかけてきたのでレーティアは驚く。

コンパ「ちょっと失礼です」
レーティア「！！だめ！」

レーティアは言うがもう遅し、コンパはレーティアのお腹に耳を傾けた。
やがれコンパは驚いた表情をした後レーティアに向く。

コンパ「レーティアさん…」
レーティア「・・・」
コンパ「あなたは・・・」
アイエフ「どうしたのコンパ？」

アイエフが二人に聞いてきた。
レーティアは逃げだそうとするが、コンパにがっちり掴まれて逃げられない。

コンパ「皆さん、レーティアさんが…」
アイエフ「…どうかしたの？」

アイエフが目を細め、六課や一同がレーティアに向く。
ギルシアはまさかという顔をしているが。

コンパ「レーティアさん……妊娠してるです！」

・・・

・・・微かに心臓の音が聞こえる。

アイエフ「マ、マジ・・・？」
ネプテューヌ「こ、この中に…／／／／／」
ネプギア「赤ちゃんが…／／／／／」

アイエフは唖然とし、ネプテューヌとネプギア、他の女神達も顔を赤くする。
もちろんレーティアは恥ずかしさで顔を赤らめてうつむく。

レーティア「内緒にしたかったのに…、いつか驚かそうと思ったのに…」
コンパ「ダメです！もしもの時に対応できなかったら元の子もないです！」

レーティアの呟きにコンパが否定する。
普段よりも少しすごみが増しているのは気のせいだろうか…。

なのは「妊娠…」
フェイト「先を越された…」
はやて「なんか負けた…」

妊娠している＝母親になることに3人娘はショックを受けていた。

アリエス「つーか・・・なんでそんなことに？」
ユニ「っていうか何時からよ」
レーティア「ちょっと宇宙の世界でね…」
銀時「・・・あれか」

レーティアの言う宇宙に銀時は思い出す。

銀時「てことはオメェ…まさか…」

レーティア「・・・ギルシアと肌を重ねちゃいました?・・・きゃ!いっちゃった???」

女性陣（レーティア、子ども組除く）「ウガァァァァァァァァァァ!!!」

レーティアの腹立つ言動（今だ結婚できない女性にとって）に頭を抱える一同。

レーティア「あの日付き合って間もないころ、私は大きく彼に惚れちゃったの!こっそり抜け出して彼の部屋に来ちゃったらもう積極的にしてきちゃってさぁ～」

ギルシア「・・・その時の記憶は全くないんだが?」

レーティアの言葉にギルシアは曖昧に言う。

レーティア「ごめんごめん、ちょいと魔法をかけてみたら彼積極的になって・・・そして彼からの愛の…キャーー!キャーー!キャーー!!!!!／／／／／／」

レーティアは訂正した後なぜか頬を赤くして体をくねくねと動かしている。

女性陣の怒りボルテージが上昇していく。

ベール「う、羨ましいですわ!大好きな彼氏と中ｄ「止めんかぁぁぁ!!」むぐ!!」

ベールが言ってはいけない言葉を言いかけた瞬間ノワールが止める。

レーティア「とはいえ、私の中にあるこの新たな命、この子の未来も作らなきゃいけないわね」

お腹をさすっていうレーティア。
自分が母親になるという自覚もあるようだ。

レーティア「で、私はこれからどうするの？」
コンパ「もちろん、医務室で休むです」
シャマル「安静にするのが一番です（やっと私の出番）」
レーティア「・・・わかったっわ」

レーティアはちょっと不安になったが、返事した。

アイエフ「ところでコンパ、妊娠の時の対策って習ってる？」
コンパ「ぜんっぜんないです！」
ネプテューヌ「サラッと凄いこと言っちゃってるんですけど…」

アイエフは不安ながら聞くと、コンパは真顔でないと答え、ネプテューヌ達は苦笑いを浮かべるしかなかった。
とりあえずレーティアは医務室で安静することにした。

数日後・・・

レーティア「ぅぅ・・・うう～～ん・・・」

つらそうな表情をするレーティア。
すでに出産の兆しがやってきたのだ。

コンパ「どどどどどどうしようです～！！」
シャマル「落ち着いてコンパちゃん！水と洗面器とタオル的な物を持ってきて！」

経験のないコンパは慌てるが、シャマルが落ち着かせる。

ネプテューヌ「つ、ついに出産の瞬間が…」
ネプギア「だ、大丈夫でしょうか？」

みている人たちも固唾をのむ。

そして・・・

レーティア「あ、ああ・・・うぁぁあああああああああああああ！！」

――――オギャアアアア！！――――

新たな命がここに生まれた。

ネプテューヌ「おお！！でたぁぁぁ！！」
桂「なんとぉ！」
銀時「まじか！？」

なのは「わぁ！かわいい！」
ヴィヴィオ「わぁ～」
プリア「へぇ～」
レイン「初めて見たな」
咲夜「キャ～！キャ～！可愛い～～！！」
蒼馬「しかも女の子だね。将来が楽しみだ」
ビビ「きたーーーーーーーー（？∀？）ーーーーーーーーーー！！！！」
マナ「あらあらかわいい子ね～」
アリエス「本当だ…（いつかネプテューヌさんの子を…）」
ネプテューヌ「何考えてるか知らないけど無理だからね」
アリエス「・・・」

生まれた子供に驚く一同。
レーティアは抱き寄せる。

レーティア「ふふ、今日から私がママよ」
赤ちゃん「・・・ぶ～」

赤ちゃんは喜んでいる表情をする。

ズキューーーーン！！！

ほとんどの女性陣が心を撃たれた。

なのは（なにあれ！？すっごくかわいいんですけど！！）
シグナム（なんだ？心が別の意味で心躍る…）
ヴィータ（す、すっげぇ可愛い…）
ジャンヌ（メッチャ可愛いよこの子！！）
ビビ（キャーーー！！キャーーー！！キャーーーーーーーー！！！！）

リアス（か、可愛いじゃない…）
ユウカ（あらあら・・・）
咲夜（いつかユー君と…）
さくら（いつかレン君と…）
タバネ（かわいい女の子だ～）
アリエス（かわいい・・・はっ！いかんいかん！私はネプテューヌさん一筋…）

ほとんどの女性陣はこう心の中でいう。

赤ちゃん「う～」

数日後・・・

ネプテューヌ「ほらほら～、ばぁ～」
赤ちゃん「きゃっ！きゃっ！きゃっ！（＾∀＾）」

ネプテューヌや他の女神達が赤ちゃんを喜ばしている。
ちなみに赤ちゃんの名前はリルとレーティアが名付けた。

レーティア「ほら～、リルちゃんも元気ですね～」
リル「だぁ、だぁ、あう～」

銀時「けっ！何が可愛いんだか…」

あやして喜ぶレーティアとリルに銀時が毒を吐く。

ネプテューヌ「なにそれ？新八君から聞いたけど気にしてるの？」

銀時「あいつのせいで俺がどんだけ苦労していると思ってるんだ？ヴィヴィオの事も含めてな」

銀時の言うあれとは銀時とクリソツの赤ちゃん・勘七郎のこと。

アレのおかげで隠し子騒動にあわれた。

リル「あううあう！」

レーティア「？銀時、リルが呼んでるわよ」

銀時「イヤ、て言うか何で分かるの？」

レーティア「女の感よ」

なぜ赤ちゃんであるリルの言葉が分かるのか疑問に思ったが、銀時はとりあえずリルに近寄ると、

ギギギギギ！

銀時「いでででで！ちぎれるちぎれるちぎれるって！！」

レーティア「ちょっとリル！？」

リル「キャッ！キャッ！キャッ！キャッ！」

いきなりリルが銀時の髪の毛を引っ張っている。

当の本人にとっては銀時の天然パーマが珍しいらしい。

銀時「なにしやがんだこのクソガキ！！」

リル「（ビクッ！）ふぇ・・・」

銀時は切れたリルに怒鳴ってしまい、

リル「ふぇ・・・ふええ・・・・・・」

リルは今にも泣き出しそうな雰囲気だ。

ネプテューヌ「ぎ、銀さん…」
ネプギア「銀さん…」
ノワール「男の風上にも置けないわ…」
ユニ「外道ね…」
ブラン「全く…」
ラム「悪だ！絶対悪だ！！」
ロム「（コクコク）（後ろに隠れる）」
ベール「赤ちゃん相手に怒鳴るなんて…」
銀時「イヤどう考えてもこいつのせい…」

女神達は銀時に冷たい視線を向け、銀時が弁解しようとすると、

リル「ビエエエ

アアアア

神楽「まじ外道アル。しばらく話しかけないで」
なのは「今回ばかりは銀さんのせいだからね」
フェイト「大人げないよ…」
シグナム「全くだ」
アルフ「あたしも同意」
リインフォース「銀時、しばらく話しかけないでください」
ティアナ「今回ばかりは私兄さんから離れます」
はやて「腐ってんな銀ちゃん」
ヴィヴィオ「パパ嫌い…」
鈴「やっぱりな」
ビビ「ナカシタナ？」
ジャンヌ「未来の義妹になにを…」
レオン「身下がったな…」
ユウカ「・・・」
咲夜「屑な男…」
チフユ「バカ者が…」
エール「大人の風上にも置けないね」
コヨリ「駄目人間」
アリア「失格ね」
銀時「オイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!!なんでもみんな俺のせいにしてるの!?俺悪くないよな!?絶対悪くないだろ!!」

銀時は弁解するもみんなどんどん離れていっている。

リル「う～～～～!!」

リルが鋭い目で銀時を見ている。
それは怒るという表情。

銀時「何見てんだよ。怒りてぇのはこっち…ん？」

銀時が言うとき気配を感じたので振り向くと、

ガスッ！！

後ろから殴られた。

銀時「いって！なにしやが…」

銀時は頭を押さえて振りあえって…絶句した。

なんせ目の前にいるのは一つ目の布だけの存在がいるのだ。

銀時「え〝え〝え〝え〝！！！なんでスタンドがここに・・・ってこっちもかぁぁ！！？」

銀時は後ずさって言うが、後ろにもう一体いた事の驚く。

レーティア「あれ？いつの間に？」

レーティアはいつの間にかかぶっていた布が無くなったことに疑問を抱くが、

レーティア（！？まさか・・・）

すぐに答えが出た。

それはいとしい我が娘の能力…

リル「う〜〜〜〜！！」

ガタガタガタガタ！

リルがうねると周りの置物がガタガタとポルターガイストのように音を立てる。
木鉢は宙に浮き、テーブルとイス（牙つき）は４本足で歩き、本はパタパタと鳥のように飛び、刃物とかは銀時に向けて宙に浮いている。
そして、

ドガバキバカゴスガブガブガジガジベシバシベキドガベキ！

銀時「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

銀時は成敗を受けられた。
もうボコリ終わった者たちは元に場所に戻ってそのまま只の物に戻った。

アイエフ「・・・な、なんなのよ今のは？」
コンパ「植木鉢が宙に浮いてたです！ポルターガイストです！」
ネプテューヌ「いやいやいや！普通ポルターガイストは生きてる様に動かないから！！」

見ていた人たちは少しパニックになっている。

ノワール「もしかしてその子の仕業なの？」

ノワールはリルを見て言う。
そのリルはぐっすりと眠っている。

レーティア「ええ！この子凄い能力を持ってるんだわ！」

ギルシア「物を浮かすわ攻撃するは生き物のように動くわだな」
レシア「ふむ、『サイコキネシス』と『物質生物化』ですか」
ジャンヌ「イヤあの『ハウリングボイス』も入れてよ」

リルはとんでも能力を持ってると思い知らされた。
それと同時にリルを怒らせないようにしようと思った一同であった。

夜中

ギルシア「生まれたてのリルがいきなり能力しようとは驚いたな」
レーティア「ええ、将来いい大物になれるわこの子♪」
ギルシア「・・・いろんな意味が入るがな;」

生みの親たる彼等は（リルの）将来のことを考えている。

リル「あぅぅ」
レーティア「?どうしたの?」

リルが呼んでるみたいなので耳を傾けると、

リル「だだ、アぅうぃ」

ママ、大好きと言っている気がした。

レーティア「ウフフ、お休み」

レーティアは笑ってリルのおでこにキスをした。

この後レーティアが「大家族とまではいかなくてももっと子供を増やしたいわぁ？」といって2人はいい感じに甘～い夜で肌を重ね合いました。

何やってるかって？それはイメージしてください、ピストン運動だと。

～おまけ～

銀八「教えて！！」

全員「銀八先生！！」

ラム「今日のアシスタントは！ルウィーの女神候補生ラムちゃんと」

ロム「ロムちゃんがやるよ…」

銀八「前回はあの志村動物園園長が占拠しやがったからな」

ラム「先生、志村関係ありません」

ロム「関係ない…」

銀八「わーってるよ。んじゃペンネーム『月光閃火』から始めるぜ『ども…月光閃火だ。

しかし…プリニーの感触って、やっぱりプニプニしてるのかな?

輝刃「…見た目がペンギンみたいだからな…。感触もプニッとしているのだろう…。あ…質問…行くぞ?まずは俺からだ。」

1.プリニー改め、転生し終えたプリアに質問…というか助言だ。今は『男の娘』って触れ込みで女性陣に追っかけられてるだろうが…年頃になれば『凛々しめ美男子』という触れ込みで多少は追っかけも控え目になるだろうから気長に待っておけ。

確かに、『男の娘』と『凛々しめ美男子』とではイメージが多少ガラリと変わるからな…。次は俺からだ。

2.レジィに質問…この中で使ってみたいのはどれ?

1…『スクライド』の『シェルブリット』

2…『テイルズシリーズ』の『エターナル・ソード』

3…『デビルメイクライシリーズ』の『エボニー&アイヴォリー』と『リベリオン』

輝刃「…どれも下手したら、建物をぶっ壊しかねないモノばかりだな…(汗)。特に『スクライド』の『シェルブリット』辺りが…(

汗）。」』」

プリア「アドバイスありがとう…。でも作者が言うには将来の僕はいつも男の娘のままだって」

ラム「可愛いからね」

ロム「（こくこく）」

レジィ「う～む、３番目の銃かな？」

真王「では『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『マリオ「転生したな～」

ルイージ「それで追いかけられるのね」

フォックス「銀時達は懐かしい人達に会えたな」

ネス「それで最後は…」

ピット「あ～…」

クウガゴウラム（エルディ）「と言うか何で…」

アギトトルネイダー（マルス）「ＦＦＲをされてるのかな；」

リュウキドラグレッダー（ヨッシー）「いや～」

ファイズブラスター（詩久利）「初登場が；」

ブレイドブレード（リンク）「（０ｗ０）」

マリオ「質問『ＦＦＲってチートって思える部分は？』」

スネーク「質問だ『プリアは暇な時は何をしてるんだ？』」

ルイージ「質問です！『シナさんを見た時どう思った？』」

次回を待ってます！』相手に一撃死を与えることかな？」

ラム「私もそう思う！」

ロム「（コクコク）」

プリア「暇な時はお手伝いをしています。時折女性の人から視線を感じるんですが…」

ロム「ウサギ人間…」

ラム「ウサギのお化けだよ！！」

真王「まぁ人それぞれ、『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ラム「よし、ペンネーム『フリーダム』だよ！『Ｓフリーダム「新しく転生したか…」

∞ジャスティス「だけど、女性局員に追われるとか…」

デスティニー「しかも、その中にフェイトがいるんだもんな…」

レジェンド「母性本能か…？」

アカツキ「まぁそんな事は、置いといて質問に移りましょうか」

全員に
この中で、戦いたくないのは？
1．オベリスクの巨神兵
2．グレートモス×１０００
3．ワイト×１０００００００

銀時に
ジェットコースターとお化け屋敷どっちを選ぶ？

Sフリーダム「銀時が絶対嫌うものが入ってるな…」

更新楽しみにしてます』・・・ってゾンビ種は多過ぎだしさすがに無理でしょ！！」

ロム「ゾンビ、怖い…（ぷるぷる）」

真王「だろうな。では次」

銀時「ジェットコースター」

迷いなく答えた。

ラム「（やっぱ怖いんだ。かく言う私も一人じゃ怖いけど…）それじゃあ『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

ロム「つぎは、ペンネーム『ケン』さん。『いや～・・・いいものだな。プリニーの話は

統夜「ああ。銀さん達は友達や同僚、家族と出会えたんだから・・・」

この手の話って別れた後数日後に舞い戻るってケースがあるしね。

統夜「プリア・・・災難だな。男の娘で女性局員に追いかけられるとは・・・しかもフェイトも一緒に追いかけてるとは・・・男の娘・・・恐るべし」

それじゃ・・・質問しますか。

真王さんへ

ここ最近ですが・・・マトモなキャラを作った事ありますか?お恥ずかしい限りですが・・・俺自身・・・マトモというのはどこまでなのか分からなくて・・・

統夜「アテナスさんへ質問。俺の蒼炎をどう思いますか?」

さて・・・転生者達へ差し入れをして終わるか

統夜「何だろう?」

とある次元世界でとれたとても甘くおいしいスイートスイカをお一人ずつ差し上げます。次回も楽しみにしています。』ケンさん、ありがとう…」

真王「まともキャラと言えばプリアぐらいですね」

ラム「イヤあの荒れよう見てまとも!?」

アテナス「全てを絶望へいざなう炎…。その炎が悪用に使われないことを祈ります」

真王「この後差し入れはみんなでおいしく頂きました。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ロム「次は…、ペンネーム『なめ猫』さん。『俺「どうも、なめ猫な俺らです」

ミリア「初めまして、ＦＦＴ外伝のオリキャラとして出演してます、ミリア・レミュリースです。今度、ボクとカイト君がそっちで世話になるってことだから、挨拶として書きこみさせてもらいました」

俺「なお、ラムザはお休みです。あしからず」

カイト「さて、そっちはいよいよパーティーが始まりそうな中、オリキャラやコラボキャラの目立ちが多くなりつつあるようだな…」

俺「前回答えてくれた無双についても、銀さん達はいなかったですね…ネプテューヌも…」

カイト「どうなるんだ…？まさか、このまま神やレオン達よりも影が薄いまま終わるとは思えないが…」

ミリア「んー…今はまだ目立たないだけじゃないかな？ほら、物語のクライマックスあたりに覚醒したりとか」

俺「そうですねぇ。ただ…ブロリーやワルプルギスの夜といった、スケールぶっとびキャラが次で一気に来るから、どうなるのか…」

カイト「さあな。こればっかりは俺も予想しきれねえよ。ここじゃ、作者も神レベルみたいだし」

俺「うちもチートスケールであるとはいえ、真王さん達やキャラ達には全然かなわないですよね。俺だって神じゃなくて、ただのしが

ない男だし」
カイト「そもそも、ジャンルというか属性が違うからな。だが、銀さんやなのはさん達はどうするんだろうな…」
ミリア「そうだね……とりあえず、まずは傍観をしっかりしてからだよ。ボク達には、まだまだ知るべきことがたくさんあるから」
カイト「まあな。考え抜く間、目立つようなことはせずにいよう」
俺「いつも同じことを言ってあれですが、これに尽きますね」
カイト「んじゃ、質問といくか」

質問1
「この二人の『モノマネ』できる人いるかな？もちろん姿もそっくりに」
・「バカなぁぁぁぁぁぁ！！？（銀魂に出た杉山さんのキャラ」
・「将軍かよぉぉぉぉぉぉ！！！」（みんな大好きなあの人）

このメッセージにリアクションを

銀さんと桂とドSへ
「俺が…ガンダムだ！！！」
「あんたは一体何なんだぁぁぁぁ！！！」
圭一「それでも！！守りたい世界があるんだぁぁぁぁぁ！！！」

ミリア「あ、あの…なんかだんだんカオスになってきてるよ…？；」
カイト「暴走してきてんじゃないのか…？；」
俺「大丈夫だ、問題ない」
カイト・ミリア「……；」
俺「ではまた」『……これ何のこと？」

真王「俺が答えるわ。一つ目は俺チンプンカンプンなので分かりませんしできません。そして」

銀時「なんでだァァァァァァァ！！！！」

桂「カツナ・Ｓ・コタロウ、目標を駆逐する！」

銀時「そしてオメェは何やってんだヅラ！！」

桂「ヅラじゃない！カツナだ！」

真王「刹那な。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

ラム「次だよ。ペンネーム『斬真　豪』さん。『斬真　豪「はっはっはっ、大番長でのみんなのアイドル、豪ちゃんだ。今回は私からの質問だ。」

質問１
みんなへ
かなえたい夢は？

質問２
神楽へ
ＱＢ「僕と契約して、魔法少女になってくれるかい？」

質問３
現時点決定している対戦相手、お助けキャラへ
リリ銀パーティ編に関して一言

最後の質問（笑）

めがｎ・・新八へ
地獄少女「いっぺん、死んでみる？」

斬真　豪「以上だ、出来れば私も参加したかったのだが、やめておこう。今回は観客として来ても良いかな？」
斬真狼牙「この、バカ兄貴がぁ！ウルフファング！」
斬真　豪「ウボァー」『』「」

真王「では数が多いので銀魂メンバーとネプテューヌメンバーに絞ります」

銀時「さらさらヘアーになること」↑それは願望だ

新八「姉上と道場を復興させることです。て言うか最後のどういう意味じゃァァァァァァ！！！！」

神楽「毎日三食卵ご飯アル。あとテメェと組む気はないネケダモノが！」

桂「そばが食べたいな」

エリザベス『定春よりも目立つこと』

月詠「いつか高級のキセルを吸いたいもんじゃ」

九兵衛「僕に胸をォォォォォォォォォ！！！！！」

辰馬「ワシャお譲さんと抱きたい」

源外「ワシはからくりを作るだけで幸せじゃ」

猿飛「銀さんと結婚するのよ！！」

近藤「お妙さんと結婚するんだ！！」

土方「マヨネーズ王国」

沖田「全国の女共を調教でさァ。あと土方を亡き者に…」

山崎「出来れば目立っていいかな？」

ネプテューヌ「食べ放題♪」

ノワール「いつか声優に…（あとコスプレも…）」

ブラン「全国小説大賞を取るわ…」

ベール「世界一のゲーマーになりますわ！」

コンパ「立派な看護婦さんです」

アイエフ「トレジャーハンターね」

ネプギア「お姉ちゃんと世界の平和です」

ユニ「お姉ちゃんを超える！」

ロム「ラムちゃんと一緒…」

ラム「ロムちゃんと一緒がいいな」

真王「3つ目はまだ出番がないので言えません。『斬真　豪』さん。廊下に立ってなさい。次だ。ペンネーム『ミストファイナー』さん。『質問で御座んす。

真王さんへ
やっぱり新八はリリ銀パーティ編の開幕セレモニー公開処刑になるのかな?』…かってに殺すな。『ミストファイナー』さん、廊下に立て」

新八「（ホッ）」

ラム「えっと、次はペンネーム『どうしてこうなった』さん・・・ってこれ名前?まいっか。『質問です

銀さんへ
この中で思いっきりぶん殴りたい奴は誰?
1・QB
2・ムラタ（大番長の方）
3・木原数多』で、どうなのよおじさん」

銀時「おじさんじゃねぇ!!お兄さんと呼べ!!とりあえず1番で」

ラム「私もそう思う。『どうしてこうなった』さん、廊下に立ってなさい」

真王「んじゃ最後だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『黒龍「今回は確かに良い話ではあるんですが…」

銀時「なんだ?なんか納得できない事でもあんのか?」

黒龍「いや、罪を犯した者をプリニーして労働基準法を違反したような重労働をさせて罰を償わせているのはディスガイヤの人達なんですよね？」

ソラ「確かそうだったろ？まぁ自給もかなり低いみたいだしな」

銀時「つまり何が言いてんだよ？」

黒龍「いや、プリニー達をこき使っているディスガイアの人達が何て言うかウザイみたいな」

銀時「いや、なんでウザイんだ！？」

黒龍「なんて言うか、“なんであんたらに罪を犯した人間をこき使う権利なんかあんだ？そんな権利ねぇだろ。させるなら社会貢献や人々の役に立つもっと意義のある事させろ！この屑共！”…みたいな」

銀時「おぃぃぃぃぃ！！！何気に喧嘩売ってんじゃねぇよ！！」

黒龍「いや、これは俺のつい思っちゃった事を言葉にしてこうなっただけで、他意はありません」

銀時「めちゃくちゃ他意あるだろ！！しかもかなり命知らずな！！」

黒龍「いや～なんかミツバや伊東がプリニーになったらそんな黒い感情が芽生えてしまって」

銀時「なんつうか悪役みたいな奴だなお前は！！」

ソラ「ま、人間その一瞬でつい思ってしまう事ってあるからな」

黒龍「まぁ今回俺が言いたい事はこれだけなんで質問いけます。今回はこの人たちです」

ソラ「真王に質問だ。なんで俺まで新八虐めたと思っているんだ？俺は何もしてないんだがな」

黒龍「真王さんに質問です。真王さんも最初の頃は新八の扱いが悪かったと思うんですが、なんで最近は新八を気遣うようになったんですか？」

銀時「今回はここまでだ。またな～」』それはもちろんあなたは“新八に対して接し方がつめたそうだから”。次ですが、ほとんどの二次銀魂小説で新八が酷い目にあったり新八に怒りを買う内容だったりと多くあったので私は新八に対して優しいことやろうとしたんです。その一つがこの小説にあった新八がジャンヌという彼女が出来た事。なので新八を不幸にしているところを見るとなぜだか知らないけど新八に虐める奴らに成敗を下したくなるんですよ」

新八「真王さん！そこまで僕に気を使ってくれるなんて！！」

ラム「でも結局眼鏡だけの存在よね」

真王「今すぐ雪山の中で遭難させようか？」

ラム「スイマセンデシタァ！！」

ロム「デシタァ！！（ビシッ！）」

真王「というわけで『黒龍』さん、新八をいたわりなさい」

銀時「つーか作者。コープススプラッター編で新八のメガネネタやったろ？」

真王「あれはあれ、これはこれ。多少新八にそんなことやっても周りの作者のように新八をどうしようもない屑のような扱いする気はないです。ロリコンだろうが変態だろうが私はそんな新八が面白いからなんですよ」

新八「えっと・・・ここは喜ぶべきなんでしょうか？突っ込むべきでしょうか？」

真王「どっちでもいいぞ。では次、ペンネーム『大佐』さん。『新八くんに某大佐からありがたいお言葉が・・・。

シュバルリッツ・ロンゲーナ「死ぬがよい。そして質問だ。」（そう言いながら真緋蜂改を連れてくる大佐）

リリカル勢へ
この中で勝てると思うのは？
ガラ婦人
真緋蜂一改
光翼型近接支援残酷戦闘機　エヴァッカニア・ドゥーム
アキ　＆　アッカ
憎悪に満ちたセセリ
スピリチュア・ラーサ

おまけ

サタンクロウズ「プリアたーん。結婚してー。」『・・・無理なのが目に見える」

プリア「えええええ!?むりですよぉ!!」

ラム「真に受けるなぁ!!『大佐』さん!廊下に立ってなさい!」

ロム「次は・・・ペンネーム『カーバンクル・ロード』さん。『なぜだか知らないが僕のせいで新八に死亡フラグが立ちまくってますね。

まあ実際そうなるかもしれないレベルまで行ってしまうかも知れないですけどね。

オーガニクス「それよりストロベリーサンデーまだか?」

質問
ジャンヌさんへ
新八のこと守るって言ってますけど、だったらこいつ等から新八をまもれるのか?

こいつ等
ヨグ＝ソトース（ランドルフ・カーターシリーズ）
アルファ・ケンタウリ星人（Ｓｅｌｆ－Ｒｅｆｅｒｅｎｃｅ　ＥＮＧＩＮＥ）
ラ＝グース（虚無戦記）
エル・シャダイ（異界戦記カオスフレア）』」

ジャンヌ「・・・・・死んでも守る!」

新八「ジャンヌちゃん…！」

真王「甘いねぇ…」

ラム「（ムカつくわね…）」

ロム「は、恥ずかしいよ…」

真王「『カーバンクル・ロード』さん。廊下に立ってなさい」

ラム「これで最後ね。ペンネーム『菓子折マスター』からよ。『ちなみにお土産はすべて赤屍さんにみんなに届けるように依頼しています。

ちなみに新八にもお土産が・・・

世界樹の葉（死んじゃった時に使ってね。）

質問
神へ
どうやってワルプルギスの夜を配下にしたんですか？』」

神「ああん？そんなもの『魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～』の「６５話目」を見ろや」

真王「『菓子折マスター』さん。神に逆らうな」

ラム「今日はここまで」

ロム「次回は…プリアが担当…」

〜リル〜

髪：紫（癖っ毛がある）
目：赤
服：赤ちゃんの服（B）／紫のワンピース（G）／若かりし頃のニードレスの璃瑠の服（W）
年齢：いまだ0歳
3サイズ：19／20／23（B）―80／51／72（G）―112／58／84（W）
体重：7キロ（B）／37キロ（G）／42キロ（W）
性別：♀
種族：念力娘
好き：レーティアママ、ギルシアパパ
嫌い：銀時
性格：無邪気な子供のような振る舞い
レベル：???
得意武器：剣、杖、扇子
スキル：サイコキネシス（念動力でものを動かす。無論璃瑠なみ）
物質生物化（無機物を生き物のようにする。実際はサイコキネシスで動かしているだけ）
生体変化（ドッペルゲンガーよろしく体を変化させる。赤ちゃんから子供、グラマーと変えられる。ちなみに赤ちゃんではB、子供ではG、大人姿ではWとなる）

第九十五訓：人は知らない間にお母さんになっている（後書き）

真王「さて、次回はパーティーではなく鬼道丸的なものです」

プリア「次回『魂は心の輝き』テイクオフ」

第九十六訓：魂は心の輝き（前書き）

真王「銀魂の『刀じゃ斬れないものがある』を模した物語だ」

リル「あう～（リリカル銀魂はじまります）」

第九十六訓：魂は心の輝き

どこかの大会

そのリング上でネコマタの恰好をしたぴちぴちの女性とサキュバスのようなぴちぴちの女性が向き合っている。

司会者「赤コーナー！！猫大好き故に戯れたい！キャットちゃ～～ん！！」
観客共「ワァァァ～～～～～～！！！！！」
司会者「青コーナー！！悪魔になって魔に落ちよ！！サッキュンちゃ～～～ん！！！」
観客共「うおォォおお～～～～～！！！！」

司会者の紹介に観客（というかヤジ馬）たちが興奮する。

ナリア「キャットちゃんファイト～～～！！」
ジャンヌ「サッキュン負けるな～～！！」

そんな彼らの中に別々に応援する変態がいた。

ビビ「ってあほかぁぁぁ！！！」
ジャンヌ・ナリア「ひでぶっ！」

そんな彼女らにビビがとび蹴りをかます。
ちなみに上記3人以外に銀時、新八、神楽、ネプテューヌ、ネプギア、ノワール、ユニ、ブラン、ロム、ラム、ベール、アイエフ、コンパ、ヴィヴィオ、プリア、エール、コヨリ、メア、セレス、勇華もいる。

ビビ「面白いもののがるからってついてきてみればキャットファイト！？」
ジャンヌ「でもビビちゃん百合が好きだったよね？」
ビビ「そりゃそうだけど！！こういう乱暴なやり方じゃなくてもっと優しいやり方で攻めるのがいいの！！それからなのはちゃんは永遠の１９歳よ！！ここ重要！」

もはや根本的にずれているビビ。

ユウカ「あらあなた達」

そんな時ユウカが現れた。

ジャンヌ「ユウカさん、あなたもこれに？」
ユウカ「ええ、女どうしがゆがんだ顔でゆがんだ形で倒れ伏す。これって爆笑もんじゃない？」
新八「何つうサイディスティックな楽しみ方してんの！」

ユウカのサディスティックな答えに新八は突っ込む。

ユウカ「あ、それはそうとみんな、ちょっとおもしろい物を見つけたわ」

ユウカはそう言ってどこかへ行こうとする。
銀時達はとりあえずついてきた。

ミッドチルダ・地下道

銀時「おいおい、何処だよここ？」
ユウカ「裏世界、悪人達の社交場よ。ここは表の連中とは縁のないものがあるわ」

やさぐれ者みたいな者たちが集まる場所で銀時達が移動中。
神楽は商人の商品に興味を持っているが新八とジャンヌが止める。
そして人の大声が聞こえるところへ行くと、沢山の観客とその中央で闘技場のような場所がある。

銀時「こいつぁ、地下闘技場？」
ユウカ「煉獄闘技場、ここで行われているのは…」

戦場で一人は2メートルでムッキリした体格でいかにも強そうな男。
もう一人は鬼の仮面をかぶり、黒いロングな髪の巫女服を着た女性が向き合っている。

？？？「死ねェェェェェぇ！！！」

男は斧を振り、女はその一瞬に腰にある刀を振る。

ユウカ「正真正銘の、殺し合いよ」

男は地面に倒れ伏せた。
詰まり女に切られて死んだ。
同時に観客達が歓喜の声を出す。

司会者「勝者！鬼姫！」

ネプギア「こんなことが…」
ユウカ「殺し合いなんて日常じゃ拝められないわ。だから誰にも見られない場所で賭けを取ってるの」
銀時「趣味のいい見せもんだな、おい」
神楽「テメェ嫌なもん見せやがって！寝れなくなっちまったらどうするつもりだこのやろ！！」
ノワール「あんたは落ち着きなさい！」

ユウカに掴みかかる神楽にノワールがはたき落とす。

ネプギア「これは明らかに違法行為です！止めましょう！」
ユウカ「それはよろしくないわ」

ネプギアが止めるよう言うとユウカか止めた。

ユウカ「手を出したところで、ここを見ている権力者が見え隠れするものよ」
アイエフ「変な趣味を持つ奴もいるのね」
ユウカ「下手に動けば追われの身になりかねないわ。でも思わない？こういうものには虫唾が走るでしょう？」
ベール「・・・否定はしませんわ」
ユウカ「それからあれを見て」

ユウカは中央にいる鬼の仮面をつけた巫女・鬼姫を指差す。

ユウカ「煉獄闘技場最強闘士・鬼姫。やつを探ればいいことが起こるんじゃないかしら？」

他人事のように頼むユウカ。

銀時「おい」
ユウカ「大丈夫よ。六課が聞いたら迷うことなく突っ込んでいくわよ。だからこのことは内緒よ。六課ともリアス達も」
人差し指を口に当てて言うユウカだった。

とある道場の前

銀時「つーか、本当にここに奴がいるのかよ…」
新八「ええ、ここに入っていくところを…」
銀時がこうぼやく。
銀時達は鬼姫を追いかけてここにいるのだ。

ジャンヌ「ユウカは情報系に関しては強い方よ。いざというときには役に立つから」
銀時「いざというときって…ほとんどは弱みを握ることじゃねぇか」
ジャンヌ「…まぁそこもそうだけど…」
？？？「ぎゃぁぁぁ・・・」
全員「！？」

銀時が突っ込みを入れてジャンヌがひきつらせると道場から子供の声が聞こえた。

ビビ「あれ？何か悲鳴が…」
銀時「お前らはここで待ってろ！」

新八「銀さん！！」

銀時は草むらから出て行き、ゆっくりと戸をあける。
中を見ると楽しそうに遊んでいる子供たちが。

銀時「…どういうことだこれは？」

不思議に思う銀時に後ろから、

？？？「不審者ァァァァァ！！！！」

と女性が後ろから銀時のお尻にカンチョー。

銀時「ダアアア

銀時「ば、バカやろぅ…人間にある穴はすべて急所…、ヤベ！ケツ真っ二つに割れてんじゃん！」
新八「銀さん落ち着いてください。元からです」

お尻をさする銀時と突っ込む新八。
部屋の奥ではネプテューヌ達は子供たちと遊んでいる。

巫女「ですけどそちらにも落ち度があるでしょう？あんなところで人の家を覗き込むなんて…」
新八「あの、すいません、ちょっと人探しをしてて」
巫女「？」

新八は訳を言う。

新八「巫女さん、このあたりで、恐ろしい鬼の仮面をかぶった女性を見ませんでしたか？」
巫女「鬼？これはまた、ではあなた達は鬼退治の桃太郎か何かですか？」

巫女は不思議そうな顔でいう。

銀時「三下の鬼なんざ興味ねぇよ。狙いは大将首。立派な宝を持ってるなら別だがな」
アイエフ「とっちゃ駄目よ」

ある意味盗人の様な答えだ。

鬼姫「宝ですか、強いて言うならばあなた達はあの子供達を捕まえて売るつもりですか？」

するといつの間にか巫女さんから鬼姫に変わり現れた。

銀時「どわァァァァァァァ！！！てててて、テメェどういうつもりだ！！」

突然の登場に銀時と新八は驚く。
もちろんネプギア達も驚く。

鬼姫「あなた方もどういうつもりですか？あの闘技場から私を追いかけてきたのでしょう？」
新八「あ、じゃあ本当に巫女さんが？」

鬼姫は仮面を取り、銀時と話していた巫女さんとして言う。

カナ「いかにも、私が煉獄闘技場の鬼姫こと、カナと申します」

道場の外、神楽はお手玉でジャグリング、ジャンヌ、ネプテューヌ、ビビ、エール、コヨリとかはケンケンパで子供たちと遊んでいた。

銀時「オイオイいいのか？茶なんか出して、鬼退治に来た桃太郎かもしれねぇぜ」
カナ「あなた方もいいのですか？品物みたいにお茶を飲んで」

遊んでいる子供達を見て言う銀時とカナ。

ネプギア「沢山の子供たちと一緒にいる巫女さんは鬼だなんて思え

ません」
ノワール「でもこの子たち、もしかして孤児？」
ネプギアは力強くいい、ノワールが子供達を見て言う。
カナ「みんな、私の子供たちです。それも捨て子たち」
ベール「まさか、その子たちのためにあんな闘技場で？」
ベールが問うと、カナが答える。
カナ「私がそんな立派な人間に見えますか？こんな罪という血に濡れた私が…」
銀時「あんた一体…」
カナ「今も昔も変わらず、私は人切りです。剣の腕が取り柄で私はいつの間にか人切りなんて呼ばれることになったのよ」
数年前のカナが人を殺めると言う罪を犯している。
カナ「刑務所に入れられ、首が飛ぶのを待っていたんですが、私の剣に魅入られた方々が私を牢屋から出してくれました。それが彼らです。あなた方は煉獄闘技場を潰すつもりですか？関わらない方が身のためです」
ノワール「鬼の餌食になるつもり？」
カナ「宝に触らなければ鬼は出ませんよ？私はあの子たちのためなら何でもするつもりです」
カナの決意は本物だ。
そんな彼女にネプテューヌが赤ちゃんを抱いて笑う。

ネプテューヌ「クスクス、鬼がそんなこと言わないよ。どうにしろ立派な親じゃん」
カナ「汚いことをやった人を親と呼びますか？」

ネプテューヌが変顔になって赤ちゃんを喜ばせる。
カナはあまり表情は変わらない。

ネプギア「でも、今は悔しいはずです」
カナ「最初に子供を拾って、少しでも罪悪感をぬぐいたかった」
ネプギア「そんなものでやっていけるほど子供達の教育は厳しいと思います」

ネプギアはネプテューヌが抱いていた赤ちゃんを高い高いする。
カナは聞いて固まる。

子供「先生先生！これ似合いますか？」
新八「あ、こら返せ！」

新八のメガネを奪った子供がカナに近づく。

カナ「・・・・・・・・・」
子供「あれ？先生？おいこら！先生になにをした！苛めたら許さないぞ！」
ネプギア「苛めてませんよ…」
銀時「そいつは悪かったな。こいつはお詫びだ。一応持っとけ。神楽、行くぞ」

黙ってうつむくカナに不審を持った子供は銀時達を睨む。
ネプギアは弁解し、銀時はあやしていた赤ちゃんを返す。
そして子供の頭に名称と六課の住所をわたし、神楽達と共に帰る。

子供「変な奴だったね。ここにお客さんが来るなんて初めてだね」
カナ「ええ、最初で最後の客人です」

裏人「ゴホォッ！」
ユウカ「参ったわね。敵さんもなかなか尻尾がつかめないわね」

裏世界で人の山の上にユウカが座っている。

ユウカ「ザコ相手では情報が少ないわ…。でもちょっと暴れすぎたかしら？」

周りは五体満足の裏人たち。
そんなユウカの後ろに聞き覚えのある人が…。

？？？「あんたそんな仕事熱心なことしてるなんて珍しいわね…そんな働き者だとは知らなかったわ」
ユウカ「・・・リアス」

リアスに見つかってしまったユウカである。

とあるファミレス

リアス「ま、遠慮せずに食べなさいよ」
ネプテューヌ「え？これ何？」
ユウカ「ごめんなさいね。リアスに見つかっちゃったの」

どうやらユウカの隠密行動をリアスにみつかってしまったらしい。
彼女等の目の前に料理がたくさん。
ちなみにリアス、ユウカ、ネプテューヌ、ネプギアがいるだけ。

ネプギア「伊達にリーダーやってませんね…」
リアス「面倒をみるのもリーダーの務めってもんよ」

苦笑いするネプギアにリアスは応える。
ちなみにネプテューヌはバクバク食っている。

リアス「ユウカにいろいろ吹きこまれた気がするけど、あれは関わらない方がいいわ」

リアスが警告する。

ネプテューヌ「その感じ何か知ってるみたいだね」
リアス「ええ、下手をすれば潰しかねない連中がいるからね」
ユウカ「ねぇ、それって…」

ユウカが聞くとリアスは応えた。

リアス「・・・時空管理局最高評議会。ミッドチルダ愚か管理世界を我が物顔で作る。ミッドの人権を握っている連中よ。あの趣味の悪い闘技場は、あいつらにとっての遊び場に過ぎない」

闘技場の展望

そこにローブを着た男と支配人の男が見ている。

最高評議会『花型はどうした？鬼姫がいないぞ？』
支配人「それが、何か理由つけて顔を出さなくなっています」
最高評議会『そろそろ奴も潮時か、なに、新しい趣向も用意してある』

夜の道場

草むらで新八、神楽、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、ジャンヌ、ビビ、ナリアが立てこもっている。
そんな時ジャンヌがあんパンを持ってきた。

ジャンヌ「はいあんパン、これで体力つけて…」

みんなあんパンを食べる。

神楽「それよりやっこさんはどうだパスタネプ」
ネプギア「（パスタ？）全く動きはありません」

神楽が立て込み刑事の様なことを言うのでネプギアは思わず乗る。

ユニ「ねぇ、あなたのお姉さん確か2、3日で動くとかいってたけど今どうしてるの？」

ネプギア「お姉ちゃんは今リアスさん達と一緒なんです。取り調べと言えばかつ丼。どっちかって言うとパスタが食べたくなりました。あ、パスタになってる」

ユニ「あんたねぇ…」

もさもさとあんパンを食べるユニがネプテューヌのことを聞くと、ネプギアはちょっとボケてユニが呆れる。

神楽「成長したなパスタ。俺の背中は任せたぜ」

ネプギア「ハイ、山さん」

ジャンヌ「誰よ山さんって…」

ナリア「っていうか乗りいいわね…」

そんなコントをしながら見ていると、後ろからカナが。

カナ「すいません、背中ががらあきですけど…」

全員「ワァァァァァ！！！」

神楽「落ち着けパスタぁ！！確保かく・・・あ、あんパンがのどに…」

思わずびっくりする一同。

神楽はあんパンがのどに詰まる。

ロム「あ、お馬さん…」

ラム「え？あ、ホントだ」

新八「カナさん、あなた…」

ロムが二頭の馬と馬車に乗る子供達を見つけた。

カナ「このまま、管理外世界へ出るつもりです。どういうつもりで見張ってたか知りませんが、この場は見逃してもらいたいのです」

どうやらかなは管理局の目の届かない世界で子供たちと平和に暮らそうと考えているようだ。

神楽はもだえ苦しんで、ネプギア達は彼女を助ける。

カナ「勝手なことですが、これ以上殺しはしないのです。何年のなるか分かりませんが…あの子たちに胸を張って親と呼べるようになりたいんです」

新八「カナさん…」

新八は感心した。

ネプギア「新八さん」

ジャンヌ「お尋ね者よ…」

ネプギアとジャンヌが声をかけた。

その視線の先には闘技場の支配人とその部下達だった。

これが意味するのはカナを始末しに来たと。

神楽「早く行くヨロシ」

新八「うちのボスさんはただあなたを見張っとけって、目的も言わずに。全く何考えてんだか」

新八は呆れ半分だがカナにいった。

ジャンヌ「だから好きにやらしてもらいます。何が正しいか違うか分からないけど、あいつとネプテューヌちゃんなら、きっとこうすると思うわ」
カナ「・・・ありがとう」

カナはそう言って馬車に乗った。

支配人「あ！鬼姫！」

支配人がカナが馬車を走らせているのが見えた。

裏人「おえー！逃がすなー！」
裏人「始末するんだ！！」

裏人たちもカナを始末しに追いかける。

ドゴッ！

裏人「ウゴワッ！」

すると殴り飛ばされた。
殴った犯人は神楽達だ。

神楽「行くぞパスタ！」
ネプギア「ハイ山さん！」
ジャンヌ「そのネタはもういいっての！！」

神楽達は裏人たちと戦闘に入った。

戻ってカナと子供達。

いつもより馬車のスピードが速い。

子供「先生！なんか早んですけど！」

子供の一人が言う。

だがカナの返事がない。

子供「？どうしたんですか先生？もしかして泣いているの？」

様子のおかしいかなの子供たちは不思議がる。

実際カナは涙を流していた。

カナ（もっと早く、あの人たちと出会いたかったな…）

？？？「甘いな」

ネプテューヌ達のような優しい笑顔のある人たちのことを思い出して涙を流すカナに絶望がやってきた。

ドスッ！

カナ「！？」

？？？「ワシから逃げられると思うたか？」

まるでぬら孫の鬼妖怪の様な男（確か鵺だったっけ？）がカナを後ろから串刺しにして抜いたあと馬車から離れた。

その後支配人がやってくる。

支配人「終わったか。さすがの鬼姫も本物の鬼には敵わないか。今からお前が煉獄闘技場の帝王だ。鬼竜（おにたつ）」

戻ってカナのとこ。

子供「先生、これから何処行くの？」
子供「僕達先生と一緒なら何処へでもいくよ」

カナが刺されたことを知らない子供たちが言った。

カナ「そうね。私はあなた達と一緒なら何処でもいくわ。けど、そんなに遠くにはいけないみたい…」

刺された胸を抑えるカナ。

子供「あれ？先生どうしたの？」
子供「ひょっとしてまた泣いているの？」
子供「なんかまた嬉しいことでもあったの？」
子供「先生ってば泣き虫なんだから」
カナ「そうね。本当にそうね。幸せ者よね。私って」

月に照らす夜に、鬼姫はその命を散らす。

翌日

今日はなぜか湿った天気。

銀時「あ〜、いやな雨だ。なにもこんな日にそんな湿っぽい話し、持ってこなくていいだろう?」
ユウカ「それはごめんね。でもはなさなきゃって…」

窓を覗く銀時はいい、ユウカが謝る。
新八、神楽、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、ジャンヌ、ビビ、ナリアは体育座りでしょげている。

神楽「ごめん、銀ちゃん…」
ネプギア「カナさん…」
新八「僕らが最後まで見届けていれば…」
ロム「う…グす…」
ノワール「あなた達のせいじゃないわ」
ベール「あの人は人切り、自分でも碌な死に方はしませんわ」

ノワールが慰め、ベールが言う。

ユウカ「妙なことに巻き込ませてごめんね。これ以上かかわるとロクなことが無いわ。この話はこれっきり…ん?」

ドアが開いたので見ると、カナと一緒にいた子供たちだ。

ユウカ「あなた達、ここへ来るなと言ったでしょう?」
子供「に、兄ちゃん…兄ちゃんに頼めば何でもしてくれるんだよね?ここは万事屋だよね?」

ユウカの注意もスルーして子供達は銀時に頼んでいる。
そして同時に泣き出す。

子供「お願い!先生の仇を取ってよ!!」

一人の男の子が一つのシールを出す。

子供「これ、僕の宝物だけどあげるよ」
子供「お金はないけど、みんなの宝物あげるから、だからお願い！兄ちゃん！」

どさっと子供達のおもちゃが出てくる。
そんなお共達にユウカは呆れて言う。

ユウカ「いい加減にしなさい、もう帰りなさい」
子供「・・・僕、知ってるよ」

子供達の中で年長らしき子供が言う。

子供「先生、僕達の知らないところで悪いことをしてきたんでしょ？だから死んじゃったんだよね？でもね、僕達にとっては大事な母ちゃん、立派な母ちゃんだったんだよ！」

涙交じりに言う子供。
するとネプテューヌが、

ネプテューヌ「あれ？このシールびっくりマンじゃん」
子供「そうだよ。よく知ってるね」
ネプテューヌ「お菓子買ってたらちょっとね。それとね・・・」

と一言止めたあと、

ネプテューヌ「その願いを叶えてあげるよ」

それを聞いた子供達は喜んだ。

ネプテューヌ「さてと準備準備」

ネプギア「お姉ちゃん！」

そそくさとどこかへ出て行こうとするネプテューヌ。

リアス「バカだとは思ってたけど、ここまで馬鹿とはね」

入口にもたれているリアスが言う。

リアス「何先考えずに突っ込んで楽に住む連中じゃないわ。死ぬわよ」

ネプテューヌ「いくにしろ動かないにしろ、私は死ぬよ。どっちに転ぶとどんな運命になるかなんて分かんないし、鬼が出るか蛇が出るかなんてのも分かんない。でもね、今行動しないと私じゃないって気がするんだよ」

歩きだして、通り過ぎ様に言う。

ネプテューヌ「私という魂が、おれちゃうんだよ…」

そう言っていってしまった。

リアス「己の美学のために死ぬ、ネぇ。ロマンチストね」

アイエフ「そこがネプ子ってことよ」

ノワール「なんだかんだいってあの子なりの正義もあるもんよ」

ネプギア「どっちにしろ、動かなければ意味がないんです」

なんかおもちゃを装備したアイエフ達まで出ていった。

リアス「なんなのよ一体…」
ユウカ「全く、馬鹿な連中ですね…」
ジャンヌ「バカだから彼らだけどね」
ビビ「それもそうね」
リアス「で、あんた達はなにをしようとしているの？」

ユウカはインテリ眼鏡、ジャンヌは鼻眼鏡、ビビは音吹きを装備して、リアスが止める。

ユウカ「ごめんなさいね。あいつらが馬鹿な連中なら、私達もバカの一員ってことでしょ？」

振りあえっていうユウカにリアスは肩をすくめるのだった。

煉獄闘技場

？？？「ぐわぁぁぁぁぁ！！！」

男が鬼竜の怪力に潰された。

支配人「恐るべき力ですなぁ。邪鬼族の鬼竜は。あの鬼姫も簡単に始末できるわけだ」
最高評議会『ククク、あれにかかれば一流魔道士なぞ赤子も同然だ』

もうすでに鬼竜は周りの敵どもを粉砕したようだ。

支配人「しかし鬼姫もバカな奴だ。大人しく買われていればよかったもｎ「ワァァァァァァ！！！」」ん？」

支配人の会話を覆いかぶさるように観客達の声が上がる。
そして入場口を見ると鬼姫の仮面をつけた紫髪の女性……否、パープルハートだ。

支配人「お、鬼姫！？バカな！奴は確かに！」
最高評議会『ククク、面白いではないか。鬼姫よ、我らに恨みを晴らすべく、現世に蘇ったか』

鬼竜と鬼姫（パープルハート）が対峙する。

鬼竜「貴様、なぜここにいる？わしが殺したはずだ」
パープルハート「あなたなの？私を殺したのは。いろいろ恨み事があって眠れやしないわ」

若干驚いているように見える鬼竜はいい、パープルハートは腕を組んで言う。

鬼竜「ここはもう貴様の居場所じゃない。ワシの舞台じゃ、消え去れ」
パープルハート「消えないわ。まっすぐな心の魂は、たとえ体が滅んでも消えはしない！」
鬼竜「ほう？ならばその魂、今ここでかき消してくれるわぁ！！」

鬼竜の棍棒とパープルハートの剣が同時に振られた。
鬼姫の角が折れ、鬼竜の額に血が出る。

鬼竜「うおおおおおお！！！」

すると鬼竜は懐から担当を出してパープルハートの顔に突き刺そうとする。

が、あたったのは仮面だけで、パープルハートはかわしてニヤリと笑ったあと峰打ちで鬼竜の左腕を折る。

支配人「あ！」

最高評議会『終わったな』

鬼竜「でやぁぁぁ！！！」

ドゴッ！

パープルハート「ぎ！？がぁぁ・・・！」

鬼竜の棍棒が直撃し、口から少量の血が出る。

最高評議会『人間にしては良くやった』

あざ笑う最高評議会。

だが予期せぬことが起こった。

何とパープルハートは刀を間に入れて止めていた。

パープルハート「クスクス、デカブツさん？こんなもんじゃ、私の魂はおれないわ」

最高評議会『ん！？あの目は！本物の、本物の修羅の目だ！！』

パープルハートの敵を狙う目を見た最高評議会は驚くと同時にパープルハートは鬼竜を切り飛ばした。

倒れた鬼竜に観客達は熱狂。

パープルハートは血を取る。

支配人「おいてめぇ！俺体のショーを台無しにしやがって。ココが何処だか分ってんのか？」

支配人がたくさんの用心棒を連れたやってきた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！

何処からか銃撃が用心棒達の足元を襲う。

支配人「な、なんだ？」

支配人は銃を撃って来た方を見ると、パープルハートと似た雰囲気を放たせる服装をきて鬼の仮面をかぶった人物達。
ちなみに撃ったのは銀色のツインでドリルヘアーでノワールと似た雰囲気のある少女・ユニ・・・もといブラックシスターである。

グリーンハート「ひとーつ、人の世の血をすすり」

まずはグリーンハートが仮面を取っていい、

ブラックハート・ブラックシスター「ふたーつ、不埒な悪行三昧」

次にブラック姉妹が言い、

ホワイトハート・ホワイトシスターズ「みーつ、醜い鬼を」

次にホワイト姉妹が。
ちなみにピンクの髪で左が長いのがラムで、右の長い水色がロム。

女神組（パープルハートとネプギア除く）「よーつ！」
パープルハート「よ…よ…良い子のみんなは…」
パープルシスター「違います！よからぬ者どもには！」

女神達はパープルハートに指差して、パープルハートはうろ覚えで答えようとすると、ネプギアの変身姿・パープルシスターが修正する。

女神組「退治してくれよう！」
支配人「ふざけおって、やっちまえ！」

支配人の指示に用心棒共は動き出す。

パープルハート「全く、死んでも知らないわよ」
ブラックハート「あんたにだけカッコつけるのはよろしくないわよ」
パープルシスター「まだ今月の仕事が出来てないのに死ねません！」
ホワイトシスターR「今月どころか先月ももらってないんじゃないの？」
ホワイトシスターL「全然ない…」
グリーンハート「先月はアレ仕事がなかったんじゃありませんの？」
ブラックシスター「じゃあ今回はがっぽりよ！」
ホワイトハート「まとめて吹っ飛べェェぇ！！」

だが彼女達にとってはザコも同然。バッタバッタと倒していきます。

支配人「こ、これはァ…」
ジャンヌ「理解できない？」

後ろにジャンヌ、ビビ、ナリア、ユウカが武器を突きつける。

ユウカ「いまどき弔い合戦。しかも人切りのために動いているの」
ビビ「得られるもんなんてない。それぐらい分かる」
ジャンヌ「だけど動かなかったら、自分が自分じゃなくなるのよ」
突きつけながら言う。

支配人「テ、テメェら、こんな真似してタダですむと思っているのか？俺達のバックに誰がいると思ってやがる」
ナリア「あいにく見当が付かないや。でもバックにいるのってもしかして…」

ナリアが言うと何と周りに桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、猿飛、近藤、土方、沖田、山崎、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ヴィヴィオ、プリア、ユーノ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セッテ、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディ、オットー、ディード、グレイ、レーティア、シャル、ギルシア、リアス、イッセー、カイム、アンヘル、レオン、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、タバネ、ガレーナ、レシア、ヤルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、チフユ、エール、コヨリ、メア、セレス、アリア、ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラートが囲んでいた。

支配人「な！？」
アイエフ「バックに誰がいるって？」
なのは「私達機動六課だよ～」
勇華「あら～、おっかない人たちがいたもんね」
ヤジ馬ども「か、管理局だ！！逃げろぉ！！」

機動六課が現れた事にヤジ馬達は逃げだす。
そして、最高評議会も出ていく。

最高評議会『フン、調子づき追って。まぁいい、いいものを見せてもらったしな。フハハハハハ・・・』

で・・・

ユウカ「結局、大物は取り逃がしちゃったわね。悪い奴ほど眠りやすいっていうよね」
パープルハート「っていうか人を散々利用してあんたが眠ってほしいわ」
リアス「ま、どう転んでも次にするべきことを探すことね（奴らが動く前にね…）」

リアスとユウカが離れていった。

ブラックハート「さ、私達も戻りましょ」
パープルシスター「お姉ちゃんそれどうするの？」
パープルハート「そうね」

さっさと帰ろうとするブラックハートにパープルシスターが鬼姫の

仮面を眺めているパープルハートに言うと、パープルハートは放り投げた後刀で粉砕した。

パープルハート「もう鬼の仮面なんて似合わないわ。転生して新たな人生を歩みなさい」

夕暮の空を見上げて言うパープルハートだった。

～オマケ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

プリア「こんにちは、アシスタントは僕がやります」

銀八「へい、んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』から行くぞ。『マリオ「新しい子が出たな」

ルイージ「銀さん悲惨だ；」

フォックス「不憫過ぎる；」

スネーク「ホントにな…」

ヒビキアカネダカ（クレス）「あれ？」

電王モモタロス「俺、普通だよな？」

キバアロー（魔青）「あらー？」

ソロ「質問『ＦＦＲで自分的に使いやすいと思うのはどれだ？」

ピット「質問『リルちゃんの能力を見た時はどう思った？』」

ネス「質問『アイドルになれるなら誰がなる？』」

次回を待ってます！

テイルス「後、リリカル銀魂ライダー～異世界鎮魂歌～外伝　第３訓：転生者の集まりで質問でリリ銀パーティに参加したいって人を出してるので見といてください！」『ズバリお答えしよう」

真王「まぁほとんどは剣か銃か体術だしね。それにみんなリルの能力は言わゆるチートベイビーです。アイドル？歌力のありそうなフェイトで」

銀八「『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

プリア「次はペンネーム『フリーダム』さんだよ。『Sフリーダム「レーティアが新しい命を産んだか…」

∞ジャスティス「銀時ラバーズが何か、やらかさなければいいが…」

レジェンド「どうせなら、襲ってしまえばいいと思うぞ…」

デスティニー「ちょっ！！何いってんだよ！！」

アカツキ「そうそうあるいは、レーティアから魔法教えてもらって、それを銀時に使って逆に襲ってもらえばいいと思うぜ」

デスティニー「ラバーズに変なアドバイスすなーーー！！」

Sフリーダム「あぁ彼奴等は、置いといて質問に行きます」

全員（ネプテューヌ、ネプギア以外）に
初めてネプ丼みた時の感想

ネプテューヌ、ネプギアに
ネプ丼は、どういう味がする？

∞ジャスティス「見た目からコッテリのレベルは、越えるな…」

更新楽しみにしてます』えっと・・・あれには少し吐き気を覚えたよ。でも他の女神達は平気そうだったけど」

ネプテューヌ「いろんな味が楽しめるよ」

ネプギア「辛い味とか甘い味とかいろいろ混じってるんです」

真王「よく平気で食えるな？『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『なめ猫』さんだよ。『俺「眠たげながらのなめ猫な俺らです」

カイト・ラムザ「なら寝なよ」

俺「うむ…」

ミリア「あ、あはは…；」

カイト「えーと、レーティアに子供ができて、まだまだ産もうとしてるっぽいな」

ラムザ「まだできるだろうね…ここ、１００人越えようがお構いなしだし」

ミリア「インフレしてるからね。…それにしても、すごい能力持ちが生まれたね」

カイト「サイコキネシスか…Ｍ２（ミュウツー）とかを思い出すなぁ」

俺「そうですねぇ」

カイト「んじゃ、今回の質問もろもろを」

1．アリア・ビビ・ネプギアへ

「ネプテューヌのためならば、「公の場で全裸になってでも行動する覚悟」はおありかね？ｗ」

2．作者さんへ

「ここには、ヤンデレってどれくらいいるんですか？あと、まどかマギカを出しても面白そうな気がしますが予定はないですか？……ほむらかわいいよほむら」

3．アリサとすずかへ
「カムバァーーーーーック！！！（出番）」

4．誰でも
この物語では、一夫多婦ありでしたっけ？ならば現在それのトップにあるのは誰？『ただしヤル夫、テメーはだめだ』

ラムザ「また卑猥な質問を…；」
俺「ではまた」『では順番に…」

アリア「ネプテューヌさんのためならば！！」

ビビ「するかそんなこと！！」

ネプギア「は、裸なんて駄目です！！」

真王「ヤンデレ？ユウカとコヨリあたりだろう？あと出番はまたの機会に…。そして最後のはミッドは一夫多妻ＯＫなんだよ。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい。っていうか質問は３つまでだ」

プリア「次です。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんです。『神裂「坂田銀時……赤ん坊相手にムキになるとは」

インデックス
「人として最低なんだよ！」

上条
「今回は銀さんに幻滅した」

土方に質問。
僕の新連載小説『スマッシュディケイド奇譚幕』では、マリオからサインを貰ってます。
羨ましいですか？』」

土方「イヤ俺に言われてもな…」

真王「『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい。つぎ、ペンネーム『ケン』さんッス。『統夜「あ～あ・・・銀さんに幻滅しちゃった俺・・・そんな事よりギルシアとレーティア夫妻の子供であるリルへのプレゼントをあげなくては・・・キックボードならぬエナジーボードをプレゼントだ」

エナジーボードとはＩＥＳを動力源としたキックボードで自動で動き運転できる代物で燃料は無し。時速１００キロまで出せる。

統夜「さて・・・届けに行くか・・・ギルシアに質問だ。リルという子供を授かったんだからロリコンを卒業した方がいいんじゃないか？何か気配が・・・」

統夜は直ぐに刹那を使って逃げた後顔を赤らめたはやてが通り過ぎたのは言うまでも無かった。

遊輔「おいおい・・・俺としてはリルが熱血で逞しい女の子になってほしいかな。皆の笑顔を守れるような・・・レーティアさんに質問だ。どんな風にリルを育てますか？」

零斗「ひゅ～・・・おめでたいね。ロ・・・ギルシアとレーティア・・・おめでとう！！」

マイティ真拳使いがやって来た。

遊輔「今・・・ギルシアにロリコンって言わなかった？」

零斗「気のせいだ。新八とジャンヌ夫妻へ質問だ。統夜や遊輔にとっての故郷である冥界に行ってみたいか？侍を目指している新八にとってはプラスになるかもだ・・・色んな事を知る事によって・・・真の侍が生まれる・・・世界は広いんだ・・・頑張れよ」

遊輔「零斗・・・俺からは紅蓮の焔を纏った虎を模したヌイグルミ」

零斗「俺からは・・・俺のサインが書かれているマイティサイン色紙をプレゼントだ」

統夜からはエナジーボード、遊輔から蓮の焔を纏った虎を模したヌイグルミ、零斗から零斗のサインが書かれているマイティサイン色紙をギルシアとレーティア夫妻、リルに差し上げます。』おう、プレゼントは受け取ったぜ」

ギルシア「俺は幼女が好きだ！！」

レーティア「つまりする気なしよ。私としては心やさしい女の子にしたいわ」

新八「いやいやいや！僕らまだ結婚してませんよ！！」

ジャンヌ「そ、そうだよ！っていうかドンとこ～いっていうか…／／／／／」

真王「青春だね～。『ケン』さん。プレゼントありがとうございます」

銀八「次ィ、ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。しかし…新八も本編・後書き関係無しに大変だな…。とりあえず、これでも飲んでのほ～んと行きましょ♪（そういって、何処からともなく緑茶の入った湯呑みを新八の下へ転送（テレポス）する）

輝刃「ちょっと待て…閃火、さっきの緑茶に何を混ぜた？」

ああ…ちょいと『イケメンになる薬』をね…。

輝刃「やれやれ…あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．プリアに質問…好きなモノはプリニーの時から変わらずか？

確かに、プリニーの時と転生して人間になった時とで好みが変わるかもしれないからな…。次は俺からだ。

2．真王に質問…転生者組のイメージＣＶって、真王の脳内では誰になっているんだ？

輝刃「確かに、そういう感覚は人それぞれだからな…。気になると言えば気になるか…。」『」

プリア「ごく稀にプリニーのころの性格が移っちゃうこともあるんです。そのおかげなのです」

真王「え～っと、あいつらのイメージボイスは…」

『レーティア：Ｔｏ　ｌｏｖｅるのララ
ジャンヌ：シャーマンキングのメイデンジャンヌ
シャル：アルカナハートのシャルラッハロート
ギルシア：ニードレスのアダムブレイド
リアス：エンジェルビーツの中村ゆり
イッセー：禁書目録の当麻
カイム：ドラッグオンドラグーンのカイム
アンヘル：ドラッグオンドラグーンのドラゴン（アンヘル）
レオン：Ｄｏｇｄａｙｓのレオンミシェリ
ユウカ：ニードレスの楼閣寺璃瑠
ナリア：リリなののなのは
タバネ：ＩＳの篠之乃束
ガレーナ：戦国乙女の信長
レシア：ディスガイア４の魔法剣士
ヤルオ：ニードレスのクルス
ルシアス：インフィニティブレードのルシアス（植田佳奈）
ルーシア：インフィニティブレードのルーシア（川澄綾子）
アルテス：銀魂のあやめ
チフユ：ＩＳの千冬
マナ：ゆるる～っとしたお母さんボイス（どんな人だったか分からない）
タマネ：ｔｏｈｅａｒｔのタマ姉（と呼ばれている人）
リリン：グギュ
レムナ：カービィボイス
アリア：ニードレスのアルカ
ザック：ＦＦのザックス
ムツリ：ムッツリーニ
ヒメラ：バカテスの姫路
レグナ：いつ天の大兎

ラート：リトバスの美魚（裏モードではニードレスのディスク）』

真王「こんな感じだろう。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

プリア「次です。ペンネーム『黒龍』さんです。『銀時「あっちの俺ェェェェ！！？？」』

黒龍「なんか銀さんが不憫ですね…」

ソラ「さすがに同情したな」

黒龍「まぁ赤ちゃんは大切にしなければいけないと言うのも分かりますけどね」

銀時「だからってアレはないんじゃない！？」

黒龍「まぁこっちの新八も今回の銀さん並に不憫な目に遭うんですから怒らない怒らない」

銀時「いや、あっちの俺が不憫だからって新八不憫にする理由にはならないと思うけどな…」

黒龍「なんて言うか、銀さんを軽蔑の目で見ている新八がちょっとウザかった」

銀時「いや、元からお前は新八の事ウザイとか思ってるだろ！！」

黒龍「ナンノコトヤラ？」

銀時「なんでカタコト！？」

黒龍「まぁとりあえず質問しましょう」

1．銀さんラバーズに質問。今回の事で銀さんの事軽蔑したみたいですけど、銀さんの事が嫌いになって別の誰かにくら替えするような尻軽女になりましたか（黒笑）

2．ネプテューヌに質問。もし赤ちゃんが出来たらどんな名前付けますか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『」

ラバーズ「んなわけあるかぁ！！私はいつでも（銀時／銀さん）一筋だ！！」

ネプテューヌ「む～、あ、ネプラス！これがいい！」

真王「うむ、いい名前だね。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「つぎだ。ペンネーム『白騎士君』だ。『白騎士君「とりあえず．．．」

と、作者が指鳴らしをすると突如、真王の所の銀時が現れた。

銀時「えっ！？ここどこ！？」

白騎士君「この、クソ天パがーーーーー！！！」

ドゴッ！！

銀時「ぎゃあああああああああああ！！！」

と、作者は今回の銀時がリルを泣かせた事に怒り任せに銀時に、跳び蹴りを喰らわせた。銀時は壁の所まで吹っ飛んで床に倒れた。

白騎士君「銀さん・・・　・・・貴方はリルちゃんを泣かした。これより貴方に罰を与える！」

銀時が突如、起き上がり作者に文句を言おうとするが、作者が右手を上げた瞬間、ドアから『天元突破グレンラガン』に出て来るグレンラガンの量産型ガンメン『グラパール』（人間サイズ）が四機出て来た。四機が銀時の手足を押さえ付け、ケツを差し出すような体制になった。

銀時「お、おい！てめらぁ！何する気だ！」

白騎士君「グレンラガンに変身！！」

作者が叫んだ瞬間。作者がグレンラガンになった（人間サイズ）。

銀時「えっ！？変わった！？」

白騎士君「いくぞ！必殺！！ギガァ・・・ドリルゥ・・・」

と、体中からドリルが出て来てドリルは右手に集まり巨大なドリルになった。

銀時「え？・・・　・・・　・・・ちょ、ちょっとまt・・・」

白騎士君「ブレイクゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

頭上に構えて突撃した。

そして・・・

グサァッ！！！

銀時「ぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

銀時の尻に浣腸した。銀時はこの世の物とは思えないような痛みに断末魔を上げた。

グラパールは銀時の手足を離した。

銀時は尻を抑えながら床にゴロゴロと転がった。

白騎士君「ガオガイガーから、チェンジ！」

作者の姿がグレンラガンから、ガオガイガーになった。さらに右手がマーグハンドが装着されてゴルディオンハンマーを持っている。

そして、作者が高く跳び上がり、

白騎士君「坂田銀時！光になれぇぇぇぇぇぇ！！」

ゴルディオンハンマーを振り下ろした。

銀時「え？あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

そして銀時は金色の光になった。

そしてグラパール達が金色の光を集めて袋に入れダンボールに入れた。後、メモとヤカンも入れた。

メモの内容は『お湯を掛けて3分待てば戻る』と書いてあった。

ダンボール（銀時の元、メモ、ヤカン）はグラパールが真王の所に届けに行った。

白騎士君「では質問します。『

1．なのはに質問。この中で乗りたい機体どれですか？

1．真ゲッター1

2．マジンカイザー

3．ジェネシックガオガイガー

』以上です。今回はこれにて」』ぶはははははははは！！あいつやられてやんの～～！！」

銀時がぶったおされたことに大笑いをする銀八。

なのは「のりません（キッパリ）」

真王「即答かい。『白騎士君』。廊下に立ってないさい。そして勝手に殺すな」

銀八「次、ペンネーム『ボッスン』さんからだ。『バナージ「銀さ

ん…見損なったよ…」

ニンフ「私も…」

アラド「俺も…」

質問です。

銀さん。リルちゃんを泣かせましたが赤ちゃんの気持ちが解らないあなたは赤ちゃんになったらどうですか？

もし銀さんがリルちゃんを泣かせた事を真撰組と桂さんに知られたらどうしますか？

カップルの皆さん。レーティアさんとギルシアさんにリルちゃんが産まれて羨ましいですか？

バナージ「それにしてもリルちゃんにあんな能力があったとはな…」

ニンフ「凄いね。リルちゃん」

次回も楽しみにします。』・・・ククク」

銀八は笑いをこらえている。

銀時「なるかァァァァァ！！」

真王「桂も真選組も知ってるよ。沖田は…もう分かってるかもしれませんがね」

新八「いやいやいや！僕等はまだ早すぎますよ！」

ジャンヌ「む～」

咲夜「私とユー君はいつでもオーケイよ～」

ユーノ「・・・（近いうち童貞が咲夜さんの物に…）」

銀八「カーッペ！」

銀八は気に入らないのか唾を吐いた。

真王「いい加減やめろっての。『ボッスン』さん。廊下に立ってなさい」

プリア「次回のアシストは…あれ？リルちゃんやるの？」

リル「あう～」

レーティア「ごめんなさいね。リルがどうしてもやりたいって」

銀八「ガキンチョにこれはむかね「ビエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！！！！！」ギャアアア

がやるま～す」

真王「じゃあ俺こいつを病院へ行ってくる」

第九十六訓：魂は心の輝き（後書き）

真王「お待ちかね、『リリ銀パーティ編』の幕が開かれます！」

リル「あうう～（次回『パーティはみんなでやるのが楽しい』テイクオフ）」

第九十七訓：パーティはみんなでやるのが楽しい（前書き）

真王「お待ちかね！『リリ銀パーティ』の始まりだぜ！！」

全員「リリカル銀魂！始まります！」

第九十七訓：パーティはみんなでやるのが楽しい

ここは六課の休室。

銀時は唖然として自分の目の前に入る人物に呆れていた。
外見は少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を青くしたイメージ、黄色の眼で背中には長刀を背負っている。
そして首飾りとして十字架をつけている。

その人物こそ、この小説の作者こと真王である。

銀時はもちろん、フェイト、スバル、ティアナは呆れて、ヴィヴィオはスバルの膝を枕代わりとして寝ていた。

銀時「……あのう、何で作者がいるんですか？」

銀時が恐る恐ると真王に聞き出す。
真王はそうめんを食べ終えると、食器をテーブルに置いて銀時に話し出す。

真王「いやなに、この小説を始めて半年くらいになったからね。その記念としてある長編を考えていたんだ」
スバル「ある長編？」

スバルは首をかしげると、真王は言った。

真王「そう！名付けて！マリオパーティならぬリリカル銀魂のゲスト対決！リリ銀パーティだァァァァァ！！！」

真王のパーティ会場

銀時達がいるこの場所は人が3人通れるぐらいの幅がある抜き穴がある。

そして真王は、源外、スカリエッティ、アリシア、初めての登場のプレシア、イストワール達教祖組の8人と一緒に特別席で座っていた。

真王「……と言う訳で、第一回『リリ銀パーティ』を開始します！！」

銀時達『『ちょっと待ってェェェ！！！！』』

突然、大会を強制参加させられた銀時達は大いに叫びだす。

銀時「つうか何だよ一体！！小説の面白さ上げの会議の後にすぐ大会なんて聞いてねェぞ！！」

フェイト「作者、コレは一体どう言うことなの！？」

コレには銀時はもちろん、フェイトも納得できない様子でいる。

真王はまだ状況が分かっていない銀時達に呆れて言い出す。

真王「あれ？いってなかった？『リリ銀パーティ』だよ？」

ティアナ「何よ、リリ銀パーティって！？てかアンタまさか、ゲストの皆さんと大会で競えって言うわけェ！？」

真王「そうだよ。今回の長編はゲストを主役としたシリアス！！銀

時、新八、神楽、なのは、フェイト、スバル、ティアナの四人……いや、チーム『リリカル銀魂』にはそのゲスト達と一緒に大会に参加してもらう！！」

新八「はぁ！？いきなり何ですかそれ！！」

ティアナ「しかも勝手にチームが決められているし！！」

新八とティアナは、真王の勝手な行動に怒りを込めて怒鳴りツッコム。

さすが突っ込みチーム、どんどん磨きが出来ている。

プレシア「……真王、もう貴方がどうして本編に出てきているのか……そして何でまた私が大会の実況をしなきゃいけないかはツッコまないからフェイト達に納得いくように説明してあげて」

プレシアは、今更ギャーギャー騒いだってキリがないから早めに進める様にと真王に要求する。

真王「そうですね。まぁはっきりと言うとですね……今まで『銀魂』って何かの存在をネタとして長編を作っているじゃん。だから僕もそれを参考にして自分のオリジナル長編シリアスを考えてみたくなったんですよ」

真王は銀時達に、どうしてこんな事をさせるのかを説明する。

今回のシリアスは『銀魂風』でも『リリカル風』でもなく、『真王風』の爆笑長編である事ははっきりと分かった。

真王「作者が他の小説の作者と話し合って協力し合うような短編小説や特別話として自分の小説のキャラクターを相手に登場させる、またはゲストとして他の小説のキャラクターを自分の小説に登場させる事が多い……そこで僕は眼を付けた！！」」

真王は決意したような表情で叫びだし、右手を強く握りだす。

真王「もし、『銀魂風』にとゲストを呼ぶ事自体を長編ネタにすれば、立派な長編シリアスが出来ると！！」

銀時達「ゲストを長編ネタぁ！？」

ゲストの存在をネタとして考える真王に、フェイトは驚愕の表情をする。

真王「まぁこのやりとりは黒神のリリカル銀魂ゲスト杯と酷似していますけども。ゲストと盛り上げる方がいいんですがね」

ティアナ「げ……ゲストと一緒に長編シリアスを盛り上げるぅぅ！？」

まさか今回の長編がそう言う内容である事に驚くティアナ。

だとすれば、今回現れるゲストの数は黒神のとこよりも『リリカル銀魂シリーズ』でも最多である事は間違いないであろう。

真王「その為、今回の舞台として我が作り出した『パーティマップ』を皆さんで楽しく盛り上げようじゃないか！！」

完全にノリノリな真王。

真王「はい、と言う訳で銀さん、フェイト、スバル、なのは、神楽、新八……あとついでにティアナ」

ティアナ「ついでって何だゴルァ！！」

ティアナは怒り出して『クロスミラージュ』を取り出し真王に向ける。

それをスバルが「ティア～、落ち着いてぇ！！」と苦笑で止める。
真王「ゲストの皆さんと楽しんじゃってください！！」
もう後戻りは出来ないと、銀時達は諦めだす。
そして溜息を吐きながらも、真王の提案に乗る。
銀時「……しゃあねぇ、まぁせっかくゲストの皆さんも来ているからよぉ」
新八「もう後戻りはできませんよ…」
神楽「いくあるネ！」
なのは「にゃはは～、頑張るよ」
フェイト「このままほっとらかしにする訳には行かないしね」
スバル「私はむしろ楽しみかなぁ♪」
ティアナ「はぁ……もうやるしかないわね」
7人はこの大会に参加する事に決定した。
この瞬間、チーム『リリカル銀魂』は結成した。
真王「あ～、ごほん、それではお待たせしました！！ただいまより『リリ銀パーティ』を始めたいと思います！！」
すると、巨大な大砲が天井に向けられて弾丸を撃ち、天井にぶつからずに大爆発して周りを轟音がこの地下室全体に響き渡る。
そして観客席にはいつの間にか数多くのミッドチルダの一般人達が数多く現れ、大会開始に歓喜の叫びを上げる。
ヴィヴィオ「パパー、フェイトさぁん、スバルお姉ちゃん、ティアさぁん、がんばってェ♪」
リル「う～♪」

ヴィヴィオとリルは、プレシアの隣で銀時達を応援する。
ちなみにリルはヴィヴィオが抱いている。

真王「それでは、ただいまより参加チームを発表いたします！！まずはこのチーム、数多の事件を剣1本で解決した伝説の武人を中心とした機動六課代表、『リリカル銀魂チーム』！！」

観客達はワーワーと騒ぎ出して銀時達を見て興奮する。
銀時の存在はミッドチルダでも大有名である。
過去の事件を含め、ミッドチルダにやってきてからの事件解決での活躍はミッドチルダでも耳に広まっている。

銀時「ほぉー、何かすんげぇ大会になりそうで……すんげぇ嫌な予感しかしねぇけど？」
スバル「き……気のせいですよ銀さん！！」

銀時の嫌な予感は気のせいだとスバルは言い出す。

真王「では続いて、ゲイム業界の守護女神達！その可愛さで相手をメロメロ？『女神チーム』」
ノワール「何つう恥ずかしい紹介の仕方してんの！！」
真王「おっと」

ノワールは恥ずかしさで真王を蹴り飛ばそうとしたが、真王は軽くかわす。
伊達に作者をやっていないのだ（本当かどうかなんて知りませんが）。
白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き，その中からエレベータが動くかのようにノワールを取って7人の姿

が現れる。
その7人こそがネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギア、ユニ、ロム、ラムであった。

ネプテューヌ「悪いけど銀さん、優勝は私達の物だよ」
銀時「お前と対戦かよ…」

銀時は頭を抱えることになる。

なのは「あれ?確かルールブックに参加は6人までって書いてあった様な…」
真王「いい質問だ」

首を傾げるなのはが呟いた後真王が答えた。

真王「本当なら6人にしたんだけどガキンチョ2人がしつこく参加したいって言うから仕方なく入れてやっただけのこと。なので特別にということですよ。あなた方も含めて」
スバル「あ、確かに私達で7人ですね」

スバルが納得する。
ガキンチョ2人とはルウィーの女神候補ですが。

真王「でもまぁ参加した以上“すっごく怖いことが起こっても”責任はとりませんがね」
ロム「え…?」
ラム「え?なにそれ?すっごく気になるんだけどぉ!?」
真王「ハイ次ですがぁ」
ラム「無視すんなぁ!!」

ラムの言いつけを無視するとして、

真王「狂乱の貴公子の剣が宙を舞う！『狂乱チーム』！！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き，
その中からエレベータが動くかのように６人の姿が現れる。
桂、エリザベス、はやて、ヴィータ、リインフォース、リインの６人だ。

桂「フハハハハハハハハ！！銀時！やるからには全力で行くぞ！」
銀時「へ！お前が墜ちろよヅラ」
桂「ヅラじゃない！桂だ！」

いつも通りのやり取りをする２人。

真王「続いて、江戸や世界（とお妙さん）の平和は俺達が守る！『真選組チーム』！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き，
その中からエレベータが動くかのように６人の姿が現れる。
近藤、土方、沖田、山崎、ディエチ、ルーテシアだ。

土方「おい作者、あのかっこはなんだ？いらねぇだろこれ」
真王「ならそれをつけた本人に言えよ」

土方はカッコに突っ込むが、呆れるしかなかった。

沖田「っていうか何でバズーカ女とこいつがいるんでぃ？」
真王「ディエチは山崎の未来のお嫁さん。ルーテシアはついでだ」
土方「おおい！！そんな設定でいいのかぁ！？」

ディエチと山崎は顔を赤くし、ルーテシアはショックを受け、土方は突っ込む。

真王「では次、男の子はみんな骨抜きにしてやるぞ？『プリティレディズチーム』！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き，その中からエレベータが動くかのように６人の姿が現れる。
タバネ、レーティア、ジャンヌ、リアス、ユウカ、ナリアだ。

全員（プリティレディズチーム除く）（絶対に相手したくない奴が混ざってるぅぅウゥウゥウゥぅぅ！！！！）

銀時達はチームの中にいるユウカに心の中で絶叫する。

ユウカ「あら？何か失礼なことを言われた気がしますわ」
ジャンヌ「新八君、情けはいらないよ」
レーティア「見ててね、リル。ママ頑張っちゃうわよ」

ユウカはジト眼で銀時達を見て、ジャンヌは真剣に、レーティアはリルに手を振る。

真王「ヘイヘイ、その武道と力は神の如く、『メテンズナイトチーム』！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き，その中からエレベータが動くかのように６人の姿が現れる。
レオン、ガレーナ、ギルシア、レシア、カイム、チフユだ。

レオン「おい作者、本当に強い奴と戦えるのか？」
真王「そうだよ。もしかしたら戦いたかった相手と戦えるかもね」
ガレーナ「それは願ってもないことじゃの」

レオンとガレーナは殺る気満々だ。

レシア「人前で変な行為は止めなさいよね」
ギルシア「変なとはなんだ。俺は女の子が大好きなだけだ」
カイム「それがそうだっての」

カムはギルシアの根本ずれに突っ込む。

チフユ「おい、こんなたいそうな舞台を用意してもかまわんが、あまりやり過ぎないようにしておいた方がいいぞ。私的に」
真王「そんなことないですよ（さすがだね。伊達に軍人指令はしていないか…）」

真王はチフユが見抜いているように思えた。

真王「さて、次はゲストサイドの登場だ！！伝説の黒き聖剣と呼ばれし甘党とその仲間達！『剣聖チーム』！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き，その中からエレベータが動くかのように６人の姿が現れる。
風花さんの作品の『『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』　～Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　ｏｆ　ｃｒｉｍｅ～』からのゲストとして登場したレイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらが現れた。

レイン「パーティがあるって来てみれば何だこれは？」
森羅「なんか何処となく楽しそうに思えるな」

咲夜「ウフフ～♪みんな楽しそ～♪」
蒼馬「フフフッ、プリティレディズチーム、ぜ「勝手に動くな」ぐえっ！？」
紅也「いやな予感しかしないな…」
さくら「結構広いねここ…」

5人はそれぞれコメントを言う。
蒼馬に至ってはナンパしようとしてレインと森羅に襟を引っ張られた。

レイン「よう銀時、お互い戦い合う仲だ。俺が勝ったらパフェをおごらせろ」
銀時「上等だ。俺が勝ったらお前がおごれよな」
レイン「こっちもな」

銀時とレインは腕を合わせる。

真王「『剣聖チーム』は風花さんの小説『『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』～Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　ｏｆ　ｃｒｉｍｅ～』からのゲスト、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらがが組んだスペシャルチーム！！」
ケイ「あの白夜叉と似た感覚を持つドッグパフェが好きというレイン・アスハとその親友森羅、その双子の咲夜は母から習った一流以上の鞭使いと言われていますしね。蒼馬とさくらという人は一般人のように見えますが彼は銃を、彼女は手榴弾を使いこなせるようで、紅也に至ってはセレスフィア・フルーレというデバイスを使い、その実態はある魔道士の子孫であると」
レイン「・・・まるで見てきたかのような説明だな？」
ケイ「情報収集はビジネスの基本だからね」

まるで見てきたかのように説明するケイにレインは「銀時の言った通りちょっと苦手なやつだ」と。

真王「さて次行くぞ！自称悪の組織！竜の怒りは世界をとどろかす！『ドラゴンネイルチーム』！」

さらに白い煙が噴射し、白い煙が現れた場所から扉が開き，そこから烈火龍さんからの『ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ～竜の爪～』のゲスト、真王竜、黒鎌竜、白天竜、光翔竜、魔炎竜、氷刃竜が現れた。

真王竜「どんなところかと来てみれば、意外といいところだな」
黒鎌竜「…どうもこう言うのは苦手だ」
白天竜「ココが…」

ドラゴンネイルチームは初めて来たところに周りをきょろきょろしている。
ある一人を除いて。

光翔竜「フェイトしゃまァァァァァァ！！！」
フェイト「うぇぇぇえええええ！！！？」

そう、フェイトファンの一人、光翔竜が飛び込んできた。

ティアナ「早速やんなボケェェェェェェ！！！」

ズドッ！！

光翔竜「あげっ！！」

ティアナが踵落としで沈めた。

魔炎竜「いつもの病気か…」
氷刃竜「まぁそれが光翔竜だからね…」

魔炎竜と氷刃竜は呆れる。

真王「『ドラゴンネイルチーム』は烈火龍さんからの小説『ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ～竜の爪～』から真王竜、黒鎌竜、白天竜、光翔竜、魔炎竜、氷刃竜の面白部隊ズチームです」
真王竜「おい面白はつけるな」

真王の解説に真王竜は突っ込む。

ネプテューヌ「っていうか真王竜さんと作者って名前そっくりだね」
ネプギア「竜があるないですね」

ネプテューヌとネプギアは名前がそっくりであることを知る。

真王「あ、時に真王竜さん」
真王竜「ん？」
真王「シグナムのことはどう思いますか？」
真王竜「素晴らしいおっぱ……じゃなくて見事な騎士だ」
全員（観客含め）（今素晴らしいおっぱいっていいそうになっただろ！）

真王竜はすけべな性格があるらしい。
シグナムは胸を手で隠して顔を赤くする。

真王「さておき、つづいては異界の英雄（ヒーロー）が世界を救う！『スマブラハーツチーム』！」

またまた白い煙が出て、中から現れたのは、『鳴神ソラ』さんの作品の『大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』のマリオ、ソニック、明久、ルイージ、クッパ、冥王だ。

マリオ「よ！また会ったな」
ネプテューヌ「マリオさんだ」
ソニック「ＨＥＹ！優勝は俺達がいただくぜ！」
冥王「なの～」

マリオ達は挨拶する。

光翔竜「うお！豚町なのはが増殖…あ！！」

光翔竜は思わずなのはに行ってはならない文句を言ってしまった。

なのは「誰が豚じゃァァァァァァ！！！！！」
冥王「塵に帰るなのォォォォォォォォ！！！！」
真王「黙らっしゃい！！！！」

ゴズッ！！

なのは・冥王「ゴフッ！」

ブチ切れたなのはと冥王は両者とも砲撃を出そうとしたら真王に殴られた。

新八・ルイージ・明久・ティアナ「軽く殴り飛ばしちゃったんですけどォォォォォォォォ！！！！！？？」

ツッコミメンバーはシャウトした。
真王竜含むドラゴンネイルチームは『やるなあいつ』と心の中で思った。

真王「ったく、ゴホン、『スマブラハーツチーム』は『鳴神ソラ』さんの小説『大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』のマリオ、ソニック、明久、ルイージ、クッパ、冥王の超最強?と言われるチームです!」
ルイージ「なぜ疑問形?」

ルイージが何か言うが真王はスルー。

真王竜「おい、マリオとかいったか?」
マリオ「?だれだ?」

真王竜がマリオを呼んだ。

真王竜「真王竜だ。竜の爪のリーダーをしている」
マリオ「竜の爪…成程な」

マリオは真王竜含め竜の爪のことを知っているようだ。
伊達に世界を旅しているわけではないようだ。

真王「へい次行くぞ。黒き夜叉が空の月を輝かせる『リリカルライダーチーム』!」

更に白い煙が噴き出し、人影が現れて煙がはれると、黒龍さんの小説『リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜』のゲスト、ソラ、リリス、アリス、アリア、セイバー、ライホースが現れた。

ソラ「はぁ、何で俺がこんなところに…」
リリス「いいじゃないですか」
アリス「フッ、パーティならば楽しむ方がいいだろう?」
アリア「にゃ〜」
セイバー「みっともないのでマスターから離れなさい」
ため息吐くソラにリリス、アリス、アリアが寄り添うが、セイバーに止められた。

銀時「よぅ、あっちの新八はどうしてるんだ?」
ソラ「今は入院中だと」

それを聞いたこっちの新八少し同情した。

真王「『リリカルライダーチーム』は黒龍さんの小説『リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜』のゲスト、空、リリス、アリス、アリア、セイバーとついでのライホースの完璧なかつ腹立つチームです!」
ライホース「ちょっと待て!!なぜ私がついでなのだ!?」
新八「っていうか!今一瞬空耳かと思いますけど腹立つとかいいませんでした!?」

納得いかないライホースと新八か突っ込む。
だがスルー。

真王「つぎ!うちの学園は天下一品!?だけどむちゃくちゃ『学園チーム』!」

更に更に白い煙が出る。そして中には天城さんの小説『学園戦記無限学園!!』からのゲスト、恭介、由美、愛淫と、ヤルオ、ルシ

アス、ルーシアのチームが現れた。
恭介「つ、ついに来てしまった…」
主人公の恭介は緊張しているようだ。
由美「恭介、リラックスするんだよ」
愛淫「そうですわ。永遠に…」
恭介「できねぇよ!!その懐にある武器の気配があるんだけどな!!」
恭介の言う通り、以上ヒロインの由美と愛淫の懐に隠している武器がある。
ちなみに2つとも鞭。
ヤルオ「フフフ、こんな頼りない男と組むのかよｗｗｗｗｗ」
ルシアス「私はこんな奴と組むのが嫌なのよ」
ルーシア「へェ～・・・」
ルシアスとルーシアは一触即発の予感だ。
チフユ「何をやっている?」
ルシアス「なんでもないよ～!」
ルーシア「なかよくやってるから～!」
全員（やっぱ弱いんだな…）
いまだにチフユに逆らえない姉妹なのであった。
真王「『学園チーム』は、天城さんの小説『学園戦記　無限学園!!』のゲスト恭介、由美、愛飲とヤルオ、ルシアス、ルーシアの不

幸な主人公を主体のチームです！」
恭介「不幸止めてくんない？敏感なんだよそれ」

恭介のツッコミもスルー。

チカ「っていうか、なぜあの3人を入れたのかしら？」
真王「数が足らんから。そして変態とヤンデレだから」
チカ「思いっきりな発言をしましたわね！？」

真王の思いっきり発言にチカは思わず突っ込む。

真王「さて次、世界の闇は蒼炎の炎ですべてを焦がす！『ヒーローズチーム』！」

更に白い煙が立ち込め、なかからケンさんの『ＨＥＲＯ'ｓ　ＥＰＩＳＯＤＥ～ヒーローズエピソード～』のゲスト、統夜、達哉、遊輔、咲夜、メアリ、そしてこっちのシャルが現れた。
なお風花のとこに咲夜がいるので、こっちの咲夜は相川と記していただく。

統夜「面白そうなところじゃねぇか」
達哉「ああ、ワクワクするぜ」

２人はやる気満々だ。

真王「『ヒーローズチーム』はケンさんの小説『ＨＥＲＯ'ｓ　ＥＰＩＳＯＤＥ～ヒーローズエピソード～』からのゲスト、統夜、達哉、遊輔、咲夜、メアリ、そして我が作品のゲストとして登場しているシャルのちょっと変わったチームだ！」
遊輔「なんだその投げやりな紹介！？」

遊輔は突っ込む。

ネプギア「シャルさんは最初のゲストさんでしたもんね」

シャル「ええ、口調はこっち側でいくわ」

ケンさんサイドの口調でいくシャル。

真王「そっちも頑張れよ閣下モドキ」

メアリ「誰が閣下じゃぁァァァァ！！！しかもモドキって言うなやァァァァ！！！」

統夜「落ち着けェェェェェぇ！！！」

相川「だめだよ！挑発にのっちゃ！」

青筋立てて切れたメアリに統夜と相川が押さえる。

真王「まだ行くよ。転生した兄妹と神様が共同戦線！？『とある転生チーム』！」

またまた白い煙が出て、そこからリィーンさんの小説『魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～』からのゲストとして登場したグレイ、ビビ、神、レヴェッカが現れた。

グレイ「・・・目立つのは嫌いだ」

ビビ「まぁまぁ」

嫌がるグレイにビビが押さえる。

ネプテューヌ「あれ？見慣れない人がいるね」

レヴェッカ「あんたらとはお初やな。うちはレヴェッカ。この夫（バカ）の

第一夫人や」
神「おい、今馬鹿って言わなかったか？」
神は睨むが睨み返す。
レヴェッカ「うちらほっぽり出して遊んでた人がそれを言うか？」
神「グ…」
神は言葉を詰まらせた。
そりゃそうだ。
ネプギア「あの、第一ってどういうことですか？」
レヴェッカ「そんままのいみや。なんせ9人も妻もっとるんやからな」
全員「9人の妻ぁ！？」
参加者は全員驚いた。
神（レヴェッカ…帰ったら一発ぶちこんでやろうか？あん？）
レヴェッカ（そん時はこっちも搾り取ってやるかんな）
神（へ、やってみろよ）
神とレヴェッカは念話で危ない会話をしていた。
ネプギア「あれ？4人だけですか？」
真王「んにゃ、後二人はあいつと一緒に来るから」
？？？「もう付いたぜ」
ネプテューヌ「ウヒャァ！！」
数が足りないことに気付いたネプギアだが真王が言う。

そのあとネプテューヌの後ろに真王とそっくりだが髪の毛とコートが赤い色をしていた。

真王「きたね。紹介するよ。私の義兄弟の…」
邪王「邪王様だ。よろしくな」
全員（作者に兄弟だとっ！？）

真王の義兄弟と聞いた全員は驚愕した。

真王「で、あの二人は？」
邪王「上からだ」

邪王が上を指差すと、何かが降ってきた。

シュタッ！

そしてみごとに着地。

？？？「シ、シャロ様、僕ちょっと怖かったですよ…」
？？？「あら？そうだったの？ごめんなさいね」
全員「なんか来たんですけどォォォォォォォォォォォ！！？」
ベール「なんだかチカにそっくりですわ…」

銀髪の少年が少し涙目で訴え、エメラルドグリーンの長い髪に真紅の瞳を持つ女性が悪びもなく謝る。
見てた全員が驚き、ベールに至っては自分の教祖であるチカと似ている感じがしたらしい。

邪王「シャリアローゼ、リオンお前らはとある転生チームと協力するんだな」

シャリアローゼ「へぇ、神クラス二人と・・・ねぇ」
神「俺様はいつでも大歓迎だ、ぜ！！！」

ガギィィンッ！！

全員「うわあああああああ（どわあああああああ）（きゃあああああ）！！！！」

神の持つ虹色に輝く鎌とシャリアローゼの持つ血の色の剣がぶつかり合った直後部屋全体に衝撃波が襲った。

真王「おいおい、双方武器をしまえ。パーティが台無しだ」
邪王「チーム同士のけんかはよそでやりな」

真王と邪王が臨戦態勢に入る。
二人の殺気が尋常じゃないくらい、観客が震えている。

神「チッ、分かったよ（あぶねぇな…どうもあいつの目は本気で殺る目だったぜ）」
シャリアローゼ「分かったわ（虹色の鎌なんて珍しいわね。しかも武器同士が当たった直後に感じたこの感覚…）」

神・シャリアローゼ（結構楽しませてくれそうじゃねぇか（ないの））

神とシャリアローゼはお互いライバル魂を燃やしていく。

恭介「待て待て待てー！！なんだよあれ！！あんな規格外の奴も参加してんのか！？」
真王「規格外であろうが無かろうが参加は決定だ。それとも何か？

あの事に恐れたのか？」

恭介がとある転生チームに指摘する。

真王はいいっぱり、恭介は俯く。

真王「・・・一つ教えてやろう」

真王は恭介の耳元でいった。

真王「ヒソヒソ・・・（元の世界に帰ったら向こうのフェイトとデートする券をプレゼントしよう）」

恭介「ヒソヒソ・・・（フェ、フェイトさんとデートする券！？）」

真王「ヒソヒソ・・・（そうだ。あっちのフェイトと立派なラブを築いとけ）」

恭介「ありがとうございました！！」

恭介はお礼を言った。

ちなみにその券は本当にあるので恭介のポケットに入れた。

光翔竜「はっ！？私と同じフェイト様大好きの同類がっ！？」

魔炎竜「お前は黙ってろ」

光翔竜は何かを逃したかのような顔をし、魔炎竜は突っ込む。

真王「ア～、ア～、ゴホン、それでは最後のチームを紹介します」

プリア「やっとですか」

真王「最後のチーム。異界より現れし最強チーム！『異界戦士チーム』！」

白い煙が立ち込める。そして現れたのは『フォレストページ』の『

ウィンド』さんからのゲスト、エール、コヨリ、メア、セレスと『魔王と聖王と不屈の魔法少女』から勇華と奏だ。

全員「今度はにじファンにいないキャラが登場ッ！！？」

全員はエール達がにじファン出身じゃないところに驚く。

真王「ハイその通り。エール、コヨリ、メア、セレスはこのニジファンではなく、『フォレストページ』の『ウィンド』からのキャラ達です。・・・・・・・・・おいそこ、いつまでいちゃついてるつもりだ？」

真王がジト眼でセレスに必要以上に引っ付いている勇華と奏に言う。

奏「べっつに～」

勇華「セレス分の補給してるだけよ～」

セレス「意味が分からん・・・」

真王は駄目だこりゃと諦める。

真王「さてさて、ゲストそろってきたところで始めますよ！この章のメインイベント『リリ銀パーティ』を！」

ルイージ「マリオパーティみたいだけどね…」

ネプテューヌ「よ～し、張り切っちゃうぞ～」

光翔竜「フェイト様の美しさは世界一ィィィィィイイイイイイイ！！！」

恭介「最もだァァァァアア！！！」

フェイト「関係ないよそれ！！」

ソラ「頼むから楽なことしてくれよな…」

ビビ「わくわく・・・」

ジャンヌ「早く始めようよ」

参加者は今すぐやりたいかめんどくさいというしぐさをしている。

真王「まぁ慌てるなって。今からリリ銀パーティの醍醐味を見せてやるぜ」

そう言ってパチンと指を鳴らす。
すると会場がある島へと変わった。

ネプギア「うわぁ！！」
新八「えええ！？僕らいつの間に！？」
レイン「これが真王が言ってた醍醐味か？」

参加者のほとんどは突然の変わりように驚いている。

真王「イエス！この島はすべて私の作りだしたバーチャルリアリティ！マリオパーティを模したもんだから双六で活かしてもらいます！」
フェイト「す……双六ぅ！？」
銀時「ってちょっと待てエェェェェぇ！！！まるっきり黒神のとパクってるじゃねぇかぁアアアアア！！！」

フェイトは双六であることに驚くが、銀時は黒神のと似ているため突っ込む。

真王「失敬な。確かに似ているかもしれませんがあんな地獄ばかりのと一緒にしないでください。まぁこの醍醐味の解説をいたしますよ」

真王はリリ銀パーティの解説を始めた。

真王「ルールは分かると思いますが、普通の双六のように１００１マス先にあるゴールマスに止まった人が優勝します」
恭介「１０００マス長ぇ！！？」

さすがに長いマスに恭介は驚くが真王はスルー。

真王「なお双六というからにはマスの方も注意してください。それぞれ色鮮やかなマスは、青のノーマルマス、赤のペナルティマス、プレイヤーマークのミニゲームマス、色違いのパーティマス、シルクハットと？マークのクイズマス、！マークのイベントマス、？マークのハプニングマス、黄色のボーナスマス、クッパの顔をした邪王マス、黒とドクロのデンジャーマス、キノコマークのアイテムマス、交差する剣のテュエルマス、ＶＳマークのバトルマスと言うさまざまなマスが存在する！！止まる事で、何が起こるかわからないぞ！！」

普通に双六をするようだが、仕掛けはマスにあるようだ。
その止まったマスの色によって、何かが起こる事は間違いない

アリス「成程な」
ラム「双六経験あるんだよ～」
土方「いやな予感の塊だな…」
コヨリ「面白そう…」

上記４人はそれぞれのリアクションを取る。
中には４人のように勝つ気でいたり、臆したり、敗北するのを恐れている者もいる。
特に勝利を確信したような笑いをする人も。

真王「進む時はこのサイコロブロックでたたき、１～１０までの数字の中で出た目だけ進んでもらいます」
ブラン「それは分かったけど…なんだかますが色々通ってるように見えるわ」
真王「いいとこに気が付いたね」

ブランがマス目の先を見ながらこんなことを言う。
確かに今いるスタート地点の草原から荒地やら森やら火山やら挙句空の上までマス目がある。

真王「醍醐味その２！それはこの双六に２０のエリアがあること！草原を初めとして森、町、荒地、屋敷、浜辺、海、沈没船、砂漠、山道、洞窟、火山、雪、氷山、空、城、銀河、天、闇、全の合計２０のエリア！そしてエリアごとに何かあるかはやって見てのお楽しみ！」
はやて「中々癖のある双六やな…」

はやては呆れ半分驚き半分だ。

真王「そんなわけでチームリーダーさんは邪王の持っているくじを持って順番を決めます。話はそれからだ」

で、順番を決めたところ、

ヒーローズチーム
剣聖チーム
スマブラハーツチーム
学園チーム
プリティレディズチーム

女神チーム
とある転生チーム
狂乱チーム
メテンズナイトチーム
ドラゴンネイルチーム
リリカル仮面ライダーチーム
真選組チーム
異界戦士チーム
リリカル銀魂チーム

の順番である。

銀時「って黒神と同じ最後尾じゃねぇかァァァァァァァァァ！！！！」

銀時は最後尾の順になった事に青ざめて叫びだす。
コレはヤバイと新八、神楽、ティアナ、なのは、フェイト、スバルも青ざめ、他のチームからもお気の毒にと思う。
ちなみにリリカルメンバーは全てバリアジャケットに転装した。

真王「ではみなさん、健闘を祈ります！」
邪王「『リリ銀パーティ・超巨大双六対決』の開始じゃァァァァァァ！！」

カカーン！！

試合開始のコングがなった。
果たして優勝は誰の物にできるか！？

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

レーティア「みなさん、今回のアシスタントは私レーティアと、私の娘・リルちゃんがアシストしちゃいま～す？」

リル「う～♪」

真王「でも赤ちゃん語じゃ分らんよ。これを喰え、『翻訳こんにゃく』」

パクッ

リル「あ～、あ～、・・・ママ、早くハガキを読もうよ」

レーティア「え！？ええ、分かったわ」

レーティアがリルがしゃべったことに驚きながらも読もうとする。

レーティア「え～、ペンネーム『鳴神　ソラ』からの質問ですわ。『マリオ「（一人ー）」

ルイージ「銀魂にもあった奴のネプテューヌバージョンだね」

フォックス「しっかしこっちだと最高評議会か…」

明久「それで次はいよいよパーティですね！」

マリオ「ああ！思いっきり楽しもうぜ！」

ムッツリーニ「……××料理が出なければ良いんだが…」

ソロ「応援してるから頑張れよ！」

リュウケンドー「質問『ゼロイドを見た時どう思った？』」

アンク「リアスに質問だ『一番苦労してる事は何だ？』」

スネーク「転生者メンバーに質問だ『チートを無効化出来るメンバーを除いて興味あるのはいるか？』」

次回を楽しみにしてます♪』私は見た事ないけどジャンヌはアレあれもチート装備と一緒よとか言ってたわ」

リアス「苦労してること？・・・強いてあげるならバカ達が問題起こすことかしらね」

レーティア「フ～ン、私はあのムッツリーニがいつカメラ撮りに来るのか気になるわ」

真王「取られたいって言ってる様にしか聞こえんぞ？『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『フリーダム』さんからだ。『Sフリーダム「最高評議会は、あんな事までしてたのか」

∞ジャスティス「殺し合いをさせる何て外道だな…」

デスティニー「あんな奴等がいるから、世界はーーーー！！」

レジェンド「終わらせる…」

アカツキ「あぁ、あの二人が若干ネタを言っているが、置いといて質問に行きますか」

ネプテューヌ
今一番欲しい物（者）は？

リリカル組
激流下りとカースタントやるとしたらどっち？

Xアストレイ「ネプテューヌさんへの質問の物の裏に違う意味があるような…」

更新楽しみにしてます』ズバリお答えしましょう」

ネプテューヌ「エへへ～、銀さんだよ～」

リリカル組「川下りの方で」

銀八「ムカつくなぁ。『フリーダム』さん。廊下に立ってなさい」

リル「次、ペンネーム『武田軍兵士　清坂　剣麻』。『政宗「Ｌｅｔ'ｓ　Ｐａｒｔｙ！！　ＹａＨａ！！！」

幸村「うぬォオオオオオッ！！　みいなあぎぃるゥウウウウウウウウウッッ！！！！」

　二人の若き武将が雄叫びを上げながら激突していた。

美己「さすが超合金ニューＺαっとミサカは光子力の力に驚愕します」

美琴「？　ところで作者は？」

佐助「あ～作者なら・・・あそこ」

　佐助がそう言って指差した方向では、

剣麻「オーロラ発・動！！」

　作者が銀色のオーロラを発生させ、

銀時「あれ？　ここどｋ」

剣麻「不意打ち御免！　バサラ技、烈火乱れ斬りィッ！！！」↑（一応木刀で）

　ズバババババンッ！！！！

銀時「ギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！？？」

　最後まで言わせる事なく銀時をメッタ打ちにしていた。

美琴「・・・・・・・・・」
美己「・・・・・・・・」
美琴「っと、とりあえず質問をするわ。　信じられないけど、お館様は溶岩の中に平気で、江田島さんは宇宙空間にいても生きてたけど・・・・あなた達も平気ですか」
佐助「いや、流石に無理じゃね？」『」
全員「無理だ（ッス）（です）（だよ）（じゃ）」
レオン「私なら溶岩の上で走る程度だ」
ガレーナ「同じくな」
リル「超人だね。『武田軍兵士　清坂　剣麻』。廊下に立ってなさい」
レーティア「（リルがあんなのになりませんように）次はペンネーム『ケン』からです。『統夜「今回は地下で殺し合いの賭け事・・・虫唾が走るな・・・見世物じゃねぇっつうの・・・最高評議会・・・二年後・・・あいつらが出てくるんだったな・・・」
華琳「全くね・・・下衆は所詮下衆なのよ・・・あいつらは・・・話変わるけど・・・貴方・・・その後どうしたの？」
統夜「逃げ切れなかった・・・」
華琳「ご愁傷さま・・・私からは・・・銀時へ質問よ。貴方・・・あの時リルを泣かしたそうじゃない？反省しているの？」
統夜「リルを泣かした銀さんに怒ってるな・・・」

華琳「当たり前じゃ無い・・・私の鎌でアナログスティックを根っこから切断していたわ」

統夜「わぁ・・・新八とジャンヌ夫婦へ質問だ。結婚したら一軒家を建てて二人で住む予定はありますか?新婚生活って一番重要だし・・・」

華琳「彼らの幸せを統夜は願っているわ。新八に質問よ。貴方はどんな武器を使いたいのかしら?」

1．闇魔刀（ＤＭＣ３に出てくるバージルが使っている刀）

2．バスターソード（ＦＦ?に出てくるクラウドが使う大剣）

3．リベリオン（ＤＭＣにてダンテが使う大剣）

4．レッドクイーン（ＤＭＣ４に出てくるネロが使う推進剤噴射機構のある大剣）

統夜「新八がデビルハンターになりそうだな・・・侍から離れてるよね!?」

今回の贈り物は統夜（ヴァンパイアルシファー状態）がメサイアを纏い、六刀を六爪流に構え、遊輔（死神化状態）が二槍を手にし、レオンとユウカの二人と全力全開の模擬戦という訓練をしているイメージイラスト（余談だが結果は統夜と遊輔の負けだけど・・・）、はやてと文乃、優子、秀吉、メアリの五人が頬を赤らめて下着姿でベッドに円になるように横になっているイメージイラストの計二枚です。

華琳「戦いが好きな人達と百合の人達にはいいイメージイラストね」

次回も楽しみにしています。』じゃあ答えなさい」

銀時「何で俺のせいじゃ何のにこんなひどい目ばっか…ブツブツ」

ジャンヌ「その辺は計画中だよ♪」

新八「う～ん、使いやすさでレッドクイーンですかね」

レーティア「それじゃ『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

リル「次だよ。ペンネーム『なめ猫』さん。『俺「少し考えすぎてる、なめ猫な俺らです。質問についてはすみませんでした。以後気をつけます」

カイト「魂…か……」

ミリア「だ、大丈夫…？深く考えこんじゃってるけど…」

カイト「いやな、管理局のトップがあんなゲスばかりなのに、大きな反乱をすぐにしないカナや銀さん達は強い…そう思ってさ」

ラムザ「そっか…」

ミリア「そうだね…」

カイト「俺だったら、安全確保したらすぐに国や管理局をつぶしに暴れるけど、銀さん達はひたすら耐えてじわじわ進んでる…俺らとは逆みたいだ。特に、オリキャラ達の実力やキャラ性を比較しても、本当に俺はガキだなぁ…」

ラムザ「僕達は単独で無謀な反乱をずっとしてきてるけど……たまに考えたくなるよね」

カイト「あぁ……こういうのも、生きていくためにもしっかり考えなきゃだめだって思うからな…」

俺「考えるのはすばらしいことなんです。では質問を」

この場で軽い質問．作者へ

うちのカイトとミリアについてどう思いますか？

1．オリキャラ達へ
力と正義について考えて何を思う？

2．アリアへ
ネプテューヌの盗んでかいだりしてない？

俺「ではまた」『なにそれ？」

レーティア「正義は力にものを言わせるものじゃないわ。人を救うことが正義だと私は思うわ」

リル「さすがママだね」

アリア「フフフッ、ネプテューヌさんに脱ぎたてパンツを…」

パープルハート「なんか足りないと思ったらあんたが盗んだのかぁぁぁ！！」

アリア「キャァァァァァア！！！」

アリアは逃げだした。パープルハートは後を追った。

リル「（たわけが…）『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

レーティア（今リル怪しい笑みを浮かべた様な…？）

リル「次、ペンネーム『月光閃火』さん。『ども…月光閃火だ。

輝刃「…輝刃だ。さっそくだが、質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．レジィに質問…もし自分にイメージＣＶが付くとしたら誰がいい？

そういや…レジィのだけはイメージＣＶのが無かったな…。って、もしかすると俺が投稿した時の設定案の欄に書き込んでたからかな？次は俺からだ。

2．全員に質問…自分達のカラオケの十八番って何？

輝刃「閃火…さすがにその質問は今のご時世、答えるのがムズい質問だぞ…（汗）。」『ＦＦのレオンの声にすれば？」

銀八「投げやりだなおい！」

リル「それからカラオケなんてみんな無理だよ。中にはピンクの悪魔かガキ大将並みの音痴な人もいるしってママが言ってた」

真王「とりあえず、『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『カーバンクルＥＸ』さんです。『カーバンクルＥＸ「ついに来たあああ！！！！！！どれほどこの日を待ち望んでいたことか・・・・。」

オーガニクス「子どもかこいつは・・・・。」

質問
銀さんへ
僕のリクエストした対戦相手の中で一番戦いたくない奴は?』アレクサンドルあたりかと思います。『カーバンクルＥＸ』さん、廊下に立ってなさい。んで、次のペンネームは『ヴァーラガルザ』さんだ。『Ｄｒドーン「見つけたぁぁぁぁぁ!!坂田銀時ぃぃぃぃぃぃ!」
銀時「ぎゃあああああああああああ!!!」
Ｄｒドーン「さーて、改造手術開始!」

数時間後・・・・・

Ｄｒドーン「完成!」
銀時「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」
Ｄｒドーン「右手をサイコガンに改造しました。」

それは~♪　紛れもなく~♪　ヤツさ~♪

質問
銀魂組へ
とりあえずアークのせいで屁怒絽さん（しかも家族そろって）来てしまいましたけど、大丈夫なのか?』」

銀魂組「え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝!!!!!!!!??」

真王「いい感じに絶叫しているな。もう一つ『質問
みんなへ

僕のオリキャラで好きな人、嫌いな人はだれ？』まだ出てないのに応えられません。
『僕の作ったオリキャラ達にイメージＣＶをつけるとしたら誰になる？』それはあなたがつけてください。『ヴァーラガルザ』さん。廊下にたってなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『黒龍』さん。『黒龍「おお、今回は銀魂のあの名シーンですね」

銀時「確か今回の話の元になった原作の話の中に出て来るセリフが人気のセリフベスト１０に入っていたからな」

黒龍「でも、ここはやっぱり銀さんのセリフとして聞きたかったですね」

銀時「良いんじゃねぇの？真王なりのアレンジの仕方なんだからよ」

黒龍「それもそうですね」

ソラ「それにしても、最高評議会は原作よりも腐ってないか？」

銀時「だよな。原作に輪を掛けて腐り度が増してるよな」

黒龍「ですよね。原作だと、正義のためだとかふざけた言い訳で違法研究とかして自ら使った法律を破っていましたけど、さすがに人が死ぬのを娯楽にはするような連中ではなかったですもんね」

銀時「まぁ、腐れ脳みそだって事には変わりないけどな」

黒龍「まぁあっちのネプテューヌや銀さん達にはそんな連中に振り

回されないで自分の道を進んで行って欲しいですね」

銀時「言わなくてそうするだろ」

黒龍「それもそうですね。じゃあ質問します」

1．ネプテューヌに質問。もし、最高評議会の連中が目の前に居たらどうしますか？

2．ネプテューヌや他の女神と銀さんに質問。うちの小説で一番の苦労人は誰だと思いますか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『ズバリお答えしましょう」

ネプテューヌ「そいつも悪い奴だからぶっ飛ばすよ！！それからライホースさんかな？」

銀八「そうか。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

真王「次、ペンネーム『ウィンド』さんからの質問。『ウィンド「久しぶり。ウィンドです」

リア「新たな主人公にして転生者で一応神のリア・オルフェウスだ。ところでリリス達は？」

ウィンド「修行中。さて質問にはいるか。ネプギア達妹陣に質問。俺の出してる男の娘主人公達で気になる相手はいるか？また付き合いたいなんて奴はいるか？」

リア「こちらも。銀時にだ。家の奴らで勝てそうな奴はいるか？」

ウィンド「返答よろしく」』彼女達はセレスですかね。銀時は多分エールあたりかと。『ウィンド』さん。廊下に立ってなさい。最後

だ。ペンネーム『桜』さんです。『初感想です。
1話から全部読みました面白かったです。

此処からは質問です。

自分が書いている小説では銀さんが女になってしまいましたか、こっちの銀さんも女性化したらどうしますか？もしくはどう思いますか。

二つ目は棗鈴さんに質問です。

自分の小説では棗鈴に銀さんが転生しましたけど、
本来の棗鈴自身である貴方はどう思いますか。』こっちの銀さんは女性化しています。またやる機会はいつか…」

鈴「あたしがあいつになってるだとォォォォォォォォォォ！！！！？？」

リル「（みっともない驚きかただな…）『桜』さん、廊下に立ってなさい」

レーティア「（なんだかリル腹黒い気がする様な…）」

真王「パーティ編が来たもんだから次のアシストはゲストとやるッス。では」

リル「あう～♪じゃぁネ～（そのまま帰れ）」

『リリ銀パーティルール説明』

〜マス説明〜

ノーマルマス：青（特になにもないマス）
ペナルティマス：赤（チームにペナルティが下される）
ミニゲームマス：プレイヤー（チームかその一人が挑戦し、クリアすればマス移動）
パーティマス：色違いの４人（チーム対戦して勝ったチームがマス移動。４人対戦もあれば、２対２、１対３の対戦もある）
クイズマス：シルクハットと？（クイズに正解すれば５マス移動。外れると５マス下がる）
イベントマス：！マス（エリアに何かが起きそう？）
ハプニングマス：？マス（相手のチームに何か起きそう？）

ボーナスマス：黄色（自分のチームにいい事が起こりそう）
邪王マス：クッパマス（邪王が現れて最悪なルーレットをされます。一つだけいいものを選ぶと邪王は逃げだします）
デンジャーマス：黒でドクロ（チーム全員に悲劇が！！）
アイテムマス：キノコ（ミニゲーム、クイズなどをクリアするとアイテムを一つ貰えます）
デュエルマス：交差する剣（自分のチームのプレイヤーと相手のチームのプレーヤーとの対戦が始まります）
バトルマス：ＶＳマス（真王が考え出した対戦相手と戦います。中には助っ人が現れます）

～エリア情報～

草原：初めにスタートするエリア。特にこれといった者はない一般的なエリア
森：木々が生い茂るエリア。この森でしかないハプニングが潜んでいる。
町：住人が多いエリア。平和的だが実は裏で何かが起きている？
荒地：草原とは大差ないが、ちょっぴり危険性が隠れているエリア。
屋敷：何かが出そうなエリア。ここでのハプニングは何かが起きる！？
浜辺：海の接するエリア。津波に飲まれると浜辺エリアの最初に戻される。
海：魚達が泳ぐエリア。ここではさまざま海の生物たちが多い。
沈没船：いかにも怪しい雰囲気のエリア。屋敷エリアと似た雰囲気を放っている。
砂漠：ジリジリと猛射が襲うエリア。時たまに蜃気楼で迷うことも…。

山道：火山へと登るエリア。荒地と比べて危険度が高い。
洞窟：薄暗い火山の洞窟。ここではハプニングマスが多くみられる。
火山：灼熱の火山エリア。デンジャーマスを踏むと大変なことが…！
雪：雪の降り積もるエリア。氷の湖が割れたら…。
氷山：綺麗な氷の世界。滑りやすいので注意が必要。
空：雲の上のエリア。ゴールに近づくにつれて難易度が高くなっている。
城：誰かのお城らしきところ。トラップが数多くあるので要注意。
銀河：宇宙の世界。宇宙でも危険がいっぱい！
天：不思議な空間のエリア。だが危険度が高いので気をつけるべし。
闇：危険な闇の世界。危険度が最高に高いので要注意。
全：最後のエリア。真王が最後のマスで優勝者を待っている。
の２０のエリアに分かれていて、全部で１０００＋１マスある。
一つのエリアに５０マス（全は１マス分ある）。

～アイテム一覧～

ダブルダイズ：サイコロブロックが二つ現れ、さいだ２０マス進める。ゾロ目にすると嬉しいことが…
トリプルダイズ：サイコロブロックが三つ現れ、最大３０マス進める。ゾロ目にすると嬉しいことが…
ピッタリストップ：数字の変わるスピードが遅くなり、だしたい数字が出しやすくなります。
ノロノロイ：数字が１～３までしか出せなくなります。
ダッシュラン：数字が８～１０までしか出せなくなります。
アオナレー：１ターンだけ全てのマスを青マスにします。
デュエルベル：ベルを鳴らして指定相手と戦います。
クイズベル：ベルを鳴らしてクイズに挑戦します。

バトルベル：ベルを鳴らしてバトルを開始します。
無敵の星：一度だけ無敵になって3つのサイコロブロックで前にいるチームをぶっとばします。ぶっ飛ばされたチームはダメージと共に5マス戻されます。
運だめしカード：使用するまで何が起こるか分からない不思議なカード。

第九十七訓：パーティはみんなでやるのが楽しい（後書き）

真王「マスの内容のリクエストがあるなら感想に書いてみてください。ただし本当に載るとは限りませんが…」

邪王「ケケ、『双六でも一筋縄ではいかない』テイクオフだぜ？」

～予告～

邪王「別次元世界からやってくる奴らがいるらしいぜ。『ヴァーラガルザ』のキャラ共が現れるこった」

第九十八訓：双六でも一筋縄ではいかない（前書き）

真王「パーティの始まりです！でもちょっと乱入者が出ようが私達が軽く対処しますがね」

邪王「『ヴァーラガルザ』の投稿キャラが出るんだぜ？」

第九十八訓：双六でも一筋縄ではいかない

前回のあらすじ

真王「リリ銀パーティの始まりだァァァァァァァァァ！！！！！」

・・・スマン、ちょっと叫んでみただけ。

ツッコミ組「オイィィィィィィィィィ！！！！！」

気を取り直して、

ネプテューヌ「作者、パーティってもんだから優勝賞品とかある？」

真王「その辺は用意済みだ。無論最下位の人は罰ゲームがあるから覚悟しとけ」

レヴェッカ「そやな。そんぐらいなかったらうちあんたを蹴ってたわ」

真王「殴るぞ」

冗談はさておいて、試合開始だ！

統夜「よし、まずは俺らのチームだ」

ヒーローズチームリーダーの統夜が先頭に出る。

頭上にサイコロブロックが出現。

真王「サイコロブロックを叩いて進んでください」
統夜「こうか？」

真王のアドバイスに統夜は叩いてみると、ブロックが割れて7が出る。

達哉「7か」
相川「まずまずだけど行こうかしら？」

ヒーローズチームは7マス進んだ。
だがどんな危険があるかなぞ統夜たちは考えていなかった。
7マス進んで赤のマスに止まると……空に浮いてあるモニターが現れて何か内容が映し出された。

『ファは嫌い』

メアリ「・・・はい？」
統夜「なんだこりゃ？」

ヒーローズチームは意味が分からず首をかしげる。

真王「赤のマスはペナルティマス。止まったらチームにひどい罰が受けられます」
相川「だから何のよ。っていうかアレは何？」
真王「謎解きしてみろ」

ヒーローズチームは謎解きして見た。

統夜「（ファは嫌い？ファ嫌い…ファは嫌…ファ、イヤ・・・って）まさか！！」
真王「気付いてももう遅い。ファイヤー」

ボウッ！

ヒーローズチーム「あぢゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ヒーローズチームがファイヤーで丸やけにされた。

銀時「おいいいい！！！これ思いっきり黒神のとことパクってるじゃねぇかぁぁぁぁぁ！！！」
真王「確かにペナルティを出しましたけどもこっちの方がまだましの方だと私は思います」

丸焼けにされたヒーローズチームを指差しで怒鳴る銀時だが真王は軽く返す。

恭介「こ、こんな危険なパーティだったか！？は、早く逃げて…」

と恭介が逃げだす準備をすると目の前にモニターが現れる。

『途中でやめたら首切るぞ』

恭介「やりゃいいんだろォォォォォ！！」

首元にナイフを突きつけられたら誰だって言う。

ルイージ「思いっきり見覚えがある様な…」
マリオ「言うな、ルイージ」

クッパ「我が輩も何かトラウマがよみがえるのだ…」
似たような経験をしていた人たちが言う。
森羅「次は俺らの番だが…、赤マスは4、7、１０の3つだな」
レイン「ならそれら以外を狙えばいいだけだ」
次は剣聖チームでレインが叩く。
出た数字は8だ。
進んだ先には人一人のマスだ。
真王「おう、ミニゲームマスか。私が出題するミニゲームにクリアしたら数マス進むことが出来ますよ」
森羅「ミニゲームねぇ。どんなだ?」
真王「これだ」
『杭打ちヒップドロップ』
咲夜「何これ〜?」
咲夜含め内容が分かってないらしい。
いや、経験のある物が語る。
マリオ「名前からして推測だがヒップドロップで食いをぜんぶうち込むんだろ?」
真王「その通り。１２個ある杭のうち5つの杭を全て打ち込んでください」
さくら「なら楽勝じゃん。私がやるよ」
簡単だとみたさくらが名乗り出た。

真王「特に限定はないからな。それではミニゲームを始めようか」

真王はパチンと鳴らして12個の杭を出現させた。
なぜか杭の上に蝶がいる。

さくら「なんで蝶がいるの？」
真王「そうでもしないと杭を打つのとそうでないとの区別というもんがあるだろ」

さくらが言い、真王が答えるとマリオ達はうんうんと首を動かす。

真王「さて、準備はいいか？スタート！」

ＩＢＧＭ杭打ちヒップドロップｂｙマリオパーティ
（ｉｎ　ｔｈｅ　ｍｕｓｈｒｏｏｍ　ｆｏｒｅｓｔ　ＥＸＴＥＮＤ
ＥＤ　ｍａｒｉｏ　ｐａｒｔｙ．ｗｍｖ）

さくら「さて行くわよ～」

さくらはまず一つ目に杭、手前一番左にヒップドロップする。

ベコンッ！

杭が地面に埋まった。
蝶はすでに逃げだしていた。

さくら「よし次！」

さくらは調子づいて次の杭を打ち込もうとする。
中側左から2番目だ。

グサッ！

さくら「ぎゃあああああああああああああ！！！お尻刺さったァァァァァァァァァ！！！！」

打ちこもうとした杭が何ととがっていた。
思いっきりいったため悶絶するさくら。

恭介「待て待て待てー！！なんであんな尖ったもんまであるんだよ！！」
真王「いってなかったっけ？１２個ある杭のうち５つがうちこむ杭、残りの７つはとがったものだ」

ありえないといったばかりに恭介は突っ込むが、真王は軽く流す。

ルイージ「制限時間内にその５つの杭を打ち込めばいいんだよ」
ネプギア「それってルイージさん経験あるんですか？」
ルイージ「兄さんも経験してるよ」
マリオ「初めての時はケツがやばい感じになりかけたよ…」

経験のあるルイージとマリオが語る。

森羅「えっと・・・さくら！あと２５秒以内に頑張れるか！？」
さくら「とう…ぜん…よ」

お尻を押さえながら立ち上がるさくら。

さくら「ここで頑張らなくなったら、何がレン君のお嫁さんかァァァァァァァ！！！！」
レイン「何時から俺はお前の嫁になった？」

そして長き？激闘の末…

真王「タイムアップ、残念だったね」

後一個の杭が残ってたところで終わってしまった。
撃ち込んだ杭は４つ、尖った杭は最初のと合わせて５つだ

さくら「おしりがぁ・・・」

すでにさくらのお尻は五体満足だ。

紅也「ぶ、無事ではなさそうだ…」
咲夜「あら～、痛そうね～」
森羅「他人事だなおい…」

紅也は冷や汗を流し、他人事のように言う咲夜に森羅が突っ込む。

蒼馬「まさかミニゲームでもこんな危険があるとは…、リトルハニーよ！今から僕が「退場だ」ゴホゥッ！」

蒼馬が言いかけたところで咲夜と森羅がラリアットをかます。

レイン「お前の頑張りは伝わったぜ。あとは任せろ」
さくら「レン君・・・」

真王「ミニゲームは失敗しましたのでここにとどまります。では次のかた」

レインの励ましにさくらはその心を受け取った。
次はスマブラハーツチームの番だ。

マリオ「よし、これだ！」

マリオがブロックを叩くと６が出た。
・・・ただのノーマルマス。

真王「・・・ただのマスですね。期待してたんですが…」
クッパ「我が輩らの苦しみ姿と言いたいのか！？」
明久「ひどいよ真王さん！！」
真王「失敬な…」

理不尽な指摘に眉をひそめる真王。

マリオ「まぁ進めただけでも良しとしようぜ」
冥王「そうなの」

マリオと冥王が制止をかける。

真王「まぁいいです。次は学園チーム」
由美「私の出番ね。とう！」

由美がブロックを叩く。
出た目は１０。つまりは、

恭介「ペナルティだァァァァァ！！！」

恭介は絶叫した。
そしてモニターが登場。

『ナメクジキッス』

全員「ナメクジィィィィィィ!!?」

全員が絶叫。
そしてドラクエに登場するナメクジモンスターが現れた。
でかい唇がプルプル揺れている。

恭介「気持ち悪いことこの上ないな…」
由美「そうだね…」
愛淫「そうですね」
恭介「ってちょっと?何で俺の後ろにいるわけ?」

気持ち悪がっている恭介の後ろに由美の愛淫が避難していた。

由美「恭介!男ならしゃきっとしなさい!」
愛淫「私達に勇気を見せてください」
恭介「遠回しに俺に死ねって言ってるだろォォォォォォォォ!!!!」

恭介3度目の絶叫。
すでにナメクジが迫ってきた。

ヤルオ「あいつが担うなら何でもいいおwwwwww」
ルシアス「見学しときましょうかしら?」

残りの３人は何もしないことにしようとする。

トントン

学園チーム「？」

誰かに叩かれたので振り返ると…

真王「責任とってチーム全員で受けろよ」

ブチュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！

学園チーム「あ゛！！！！！！」

もろ顔面にキスを喰らった学園チーム。
他のチームは真っ青になった。

統夜「うえ…吐き気がした…」
メアリ「喰らったら絶対にお嫁にいけない気がする…ってか確実に」
咲夜「ユーくん怖いよ～！」
さくら「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ！」
真王「あら、トラウマ出来ちゃったか…」

真王はちょっと後悔した。

真王「後で回復させるとして…、次のかた」
レーティア「私達ね…」

ジャンヌ「む～、覚悟決めた！えい！」

レーティアとジャンヌは不安気味なったがブロックを叩く。
出た目は7。

ジャンヌ「しまったァァァァァ！！！」
リアス「なんてことしてくれたのよあんたァァァァァァ！！！」

ジャンヌは叫んでリアスは怒鳴る。
そしてモニターにこんな内容が…

『タコと遊んで』

プリティレディズチーム「は？」

プリティレディズチームは意味が分からない顔をしたが、目の前に巨大たこが現れる。

プリティレディズチーム「キャアアアアアア！！！」

当然ながら捕まるチーム。

レーティア「そんな！まきつかないで！」
ジャンヌ「や～ん縛られてるよ～」
リアス「ちょっと！パンツだけは止めろ～！」
タバネ「ぬめぬめしちゃう～！」
ユウカ「く、屈辱な…！」
ナリア「ちょっ！？これじゃ見えちゃう！」

巨大たこによってあわれもない姿になるチーム。

銀時、新八、統夜、達哉、遊輔、蒼馬、真王竜「ぶっ！？」

直視した上記の人は吹いた。

恭介「ギャアアアアア、目がァアアアアァぁぁぁ！！！」

恭介は由美と愛淫に眼つぶしを喰らった。

プレシア「ちょっと！！？なんてものを用意したのよ！！」

真王「イヤぁついｰ」

全員「ついですむ問題かぁ！！！」

真王「なら男性陣に聞いてみろよ。なぁ？」

男性陣（変態心ある方に限る）「最高にありがとうございました！！！」

男性陣はお礼を言った。

後で絞めると思った女性陣であった。

まぁとりあえずたこを放しました。

ネプテューヌ「次は私達の番だね。とう！」

次は女神チームの番。

ブロックを叩くと9と出た。

その先のマスはＶＳマークがある。

真王「ほう？バトルマスを踏んだね？私の考え出した相手と戦ってもらいますよ」

ネプテューヌ「余裕だよ。どんとこ～い！」

真王「いい返事だ。では対戦相手はこれだ！」

真王が言うとモニターが出た。

『インベーダーズ

イカベーダー×１０
カニベーダー×１０
クラベーダー×１０
ユフォベーダー』

そしてイカ、カニ、クラゲ、ＵＦＯの様なインベーダーが現れた。

銀時「思いっきりインベーダーじゃん！！」
真王「黙らっしゃい。では試合開始！」

真王の合図に戦いが始まった。

ネプテューヌ「速攻で終わらせるよ～」
ネプギア「いきます！」

まず最初にネプテューヌ姉妹が駆け出す。

ネプテューヌ「デュエルエッジ！」
ネプギア「ファンタジックスター！」

ネプテューヌは一振りで、ネプギアは連続剣でイカベーダー5体とカニベーダー3体を倒す。

ノワール「あんたたちだけカッコつけようったってそうわいかないわよ！」

ユニ「こっちだって！」

ノワールのショートソードとユニのショットガンがイカベーダー5体とカニベーダー3体倒す。

ブラン「まとめてたたきつぶす…」
ラム「小さいからって負けないもん！」
ロム「頑張る…」

ブランがハンマーでクラベーダー5体、ロムとラムがカニベーダーをそれぞれ2体ずつ倒す。

ベール「攻めますわ。よろしくて？」

そしてベールが槍でクラベーダー5体倒す。
残るはユフォベーダー1体。

ネプテューヌ「さぁ残るはあんただよ」
ユフォベーダー「・・・・・・」

残り1体となったユフォベーダーの戦術は、

ピュンッ！

逃げだした。

女神チーム「あ！逃げた！」
真王「ホントだ。これだとインベーダーズは全滅と見なし、女神チームは１０マス進めます。ちなみに行っても何も発動はないよ」

戦いに勝利し、ネプテューヌ達は１０マス移動した。
続いてはとある転生チーム。

ビビ「いくよ！」

ビビがブロックを叩き、出た目は５になる。
そこは？マークのマスだ。

真王「それはハプニングマス。相手チームに何かが起きます」
神「へ～、何が起こるんだろうな」

神がワクワクしていると、モニターが現れる。

『ゴリラのケツに…』

全員「なんだこりゃ？」

全員揃って首をかしげる。

銀時「おいおいハズレもんじゃねぇか？」
桂「何処もゴリラなぞいないぞ」
はやて「ほんまや。真王さんこれ壊れとるんか？」
真王「お前らの目は節穴か？近藤のお尻を見てみろ」
近藤「え？俺のケツが…」

何もないことに疑問を持っていると、近藤のお尻に食人植物のパックンがくらいついていた。

近藤「ギャアアア

アアアアアアアアアアアア！！！！！」
山崎「局長オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

近藤は暴れまわり、山崎が追いかける。

真王「とこのように相手チームに悪いことが起こったりいいことが起こったりします」
土方「他人事のように実況してんじゃねぇよ！！」
沖田「土方さん、どうせならあんたがくわれた方がいいのになぁ」
土方「ころすぞ総悟！！」

他人事のように言う真王に土方は怒鳴るが沖田の発言にも怒鳴る。
とある転生チームはみんな爆笑している。
呆れているグレイを除いて。

真王「あ～、面白い。これだからパーティは止められないんだわ」
邪王「んなことより早く進めよ」
真王「ああ、次は桂のチームだな」

真王が言う時に桂達のターン。
ブロックは3と出た。
その先のマスを見て、眉を潜めた。

はやて「なんやこのマークは？」
邪王「んお？あ～あ、ふんじゃったな～♪」

はやてが呟くと見に来た邪王が笑う。
そこにあるのはマリオパーティでよくあるクッパマスだ。

邪王「そいつは邪王マス。俺様が直々にいいもんをプレゼントしようと思ってな」

そう言ってルーレット盤を取り出す。
そのルーレットはずっと回っている。

邪王「このストップボタンを押しな。何が出るかな？」
はやて「そうか。ん～……これや！」

はやてはボタンを押す。
ルーレットはゆっくりになり、あるところに止まった。

『屁怒絽シンドローム』

狂乱チーム「い〝や〝あああああああああああああああ！！！！！」

狂乱チームはこの世とは思えない絶叫をした。

邪王「屁怒絽シンドローム、沢山の屁怒絽ファミリーと鬼ごっこですよ」
ヴィータ「まじで最悪だァァァァァァァァ！！！！」
はやて「よりによってあの屁怒絽さんかァァァァァァ！！！」
シグナム「しかもファミリーって、あいつの家族もかぁぁぁぁぁ！！？」

狂乱チームは絶望の色に染まっている。

邪王「んじゃ頑張って……ん？」
真王「…誰だ？」

邪王と真王は何か感じた。
すると何かが現れる。
追いかけている方はご存知屁怒絽さんとそのそっくりさんの家族。
そして追われているのは蒼いコートと黒ジーンズの男と見かけ１６歳ぐらいの『トリガーハート　エグゼリカ』のクルエルティアの服を赤くした少女とブレイブルーのノエルを蒼髪の蒼い目をした少女と・・・・・・石。

？？？「なんじゃこいつらぁぁぁぁぁぁぁ！怖えええええええええええええええ！！！」
屁怒絽「待ってくださいよぉぉぉぉぉぉ！二人ともぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
？？？「いやあああああああああああああああ！来ないでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
？？？「うおおお

？？？「ガフッ！」
狂乱チーム「ゴホォッ！」
屁怒絽ファミリー「グアッ！」

ライダーキックで少女と狂乱チームと屁怒絽ファミリーを蹴飛ばした。

全員（一部除く）（蹴っちゃったァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！）

見ていた人は死の宣告を受けたかのように絶望する。

邪王「おいお前ら、ひとさまのパーティに何してやがる？つーか誰だ？」
？？？「何って！怖い鬼に追いかけられたんですよぉ！！私食われるかと思いました…」
真王「屁怒絽は心やさしいから食わないよ。不本意でなければ」
銀時「何さらに怖がらせること言うの！？」

銀時は真王の発言が屁怒絽さんに怒りをあおっているようにしか聞こえない。

ユリナ「スイマセン。私ユリナ、ユリナ・ゼルニースですけど、アークさんは？」
邪王「この石か？」
アーク「さっさと離さんかバカモンめ！」
全員「石がしゃべった！？」

少女・ユリナは謝りほとんどが石であるアークに驚く。

邪王「んじゃそっちは？」
ローグ「俺はローグ・ヴァンズ」
レルシア「レルシア・ヴァルキュリアと言います」
真王「それはともかく、邪魔だ。大人しくしろ」

真王は速攻で三人と一個を縛った。

ユリナ「何でこんなことに…」
アーク「こりゃぁぁぁ！！ワシは割れ物かぁぁぁぁ！！！」
ローグ「何でこんなことに？」
レルシア「私が聞きたいです」

真王は一切スルーだ。

邪王「ちっ！変な邪魔もののおかげでいいお仕置きが出来なくなっちまった」

チームのみんなは心の奥で狂乱チームを合掌した。

真王「全く、邪王、『外にいるうるさい奴ら』も捕まえてこい」

真王が言うと邪王はあいよと応えて転移する。
ほとんどは首をかしげる。

真王「次、メテンズナイトチーム」
レオン「やれやれ、つぎか」

レオンは出番が来た後すかさずブロックを叩く。
出た目は６。

メテンズナイトチーム「チッ」
カイム「なんで舌打ち？」

舌打ちするメテンズナイトチームにカイムが突っ込む。

真王竜「次は俺達のチームだな」

ドラゴンネイルチームの真王竜がブロックを叩く。
出た目は９。

真王竜「確かバトルマスだったな」
光翔竜「はい（フェイト様にいいところ見せちゃる！）」

先ほどネプテューヌ達がいた場所を思い出す真王竜と何か企む光翔竜。
そしてモニターが現れた。

『改造された竜
メタルカイザー』

そして頭部、右腕、尻尾、左足、胴体に機械改造されたドラゴン・メタルカイザーが現れた。

メタルカイザー「グアアア

真王竜含めドラゴンネイルチームが構える。

真王竜「俺達の恐ろしさというものを教えてやる・・・」

真王竜が駆け出して瞬間移動の如くメタルカイザーに切りかかる。

ネプテューヌ「うわ早い！」
レイン・ソラ「・・・・・・」
統夜「強そうだ…」

見ている人たちは驚く。
だが、

パシッ！

真王竜「なに！？」

メタルカイザーが真王竜の攻撃を機械化されている右手で止めた。
そしてチームのいる方へ投げ飛ばした後右手のアームがのびた。
チームはとっさに躱す。

真王竜「どうやら一筋縄ではいかんらしいな…」
メタルカイザー「グルルルルルゥゥゥゥゥ・・・・・・」
魔炎竜「で？どうするんだ？」
真王竜「決まってる。討伐だ！」

ＩＢＧＭドラゴンｂｙケロロＲＰＧ
（Ｋｅｒｏｒｏ　ＲＰＧ　－　Ｂｏｓｓ　Ｂａｔｔｌｅ　Ｔｈｅｍ

ｅ　４）

真王竜「少々甘く見ていたらしい。少し本気を出すか」

真王竜は手をかざすと、地面に魔方陣が現れる。
魔方陣から出てきたのは、黒き剣型のデバイス『ダークレヴァンティン』だった。

真王竜「さぁ、覚悟しろ！」

真王竜がダークレヴァンティンを構えて言う。

メタルカイザー「グラァ！！」
真王竜「どわぁぁ！！」

いきなりメタルカイザーが不意打ちを出す。
真王竜はギリギリでかわす。

黒鎌龍「今度はこっちだ」

黒鎌龍は大蒲を出してメタルカイザーに切りかかる。

ガッ！

メタルカイザー「グゥ」
黒鎌龍「歯ぁ！？」

口で止められて驚く黒鎌龍。

白天竜「こちらも」
魔炎竜「忘れてもらっちゃ」
氷刃竜「困るよ！」

３方向から白天竜、黒炎竜、氷刃竜が同時に攻撃。
特に白天竜の持つフリーズレヴァンティンがメタルカイザーの左腕を切り落とした。

メタルカイザー「！？ガルァッ！！」

切り落とされたことに気付いたメタルカイザーは右腕を振り回して追い払う。
切られた左腕には傷口に氷が張って機械らしきものをのぞかせる。

光翔竜「完全にサイボーグですね…」
真王竜「こんな技術を作った人間は計り知れないな…」
真王「誰も作ってないよ。こいつは自然体だ」

真王が割って入って説明した。

真王「魔物は進化しているんだ。人間と同じく。遺伝子の違いで何かが克服し、ある時は自ら機械化する魔物だっている。例をあげるならこのダマグモキャノンあたりだろう」

ダマグモキャノンをモニターに出しながら言う真王。

真王竜「・・・進化ねぇ。世界はやっぱ広いって思い知らされる。・・・だが」

魔方陣が足元に展開され、ダークレヴァンティンを構える。

真王竜「そんなことで強くなれると思うなよ！！闇龍一閃！！」

真王竜は一閃を繰り出した。

メタルカイザーは悲鳴をあげることなく倒された。

真王「おめでとう、これで１０マス進んだね」

敵を退治したドラゴンネイルチームはネプテューヌ達と同じ位置に着いた。

ネプテューヌ「強いんだね」

真王竜「伊達に悪の組織は名乗ってない」

ネプギア「自分で悪って言ってますけど…」

仲良く話すネプテューヌと真王竜に2チームは呆れてネプギアは突っ込む。

真王「ほれ、同じチームの方が応援してらっしゃるぞ」

観客席の方を見ると、同胞の呪血竜・聖唱竜・夜帝竜・水蓮竜がいた。

呪血竜「とりあえず観客としてきました」

聖唱竜「応援に来ました」

夜帝竜「クッソー！楽しそうに暴れやがって～！」

水蓮竜「みんな頑張って～」

反応はそれぞれだ。

魔炎竜「お前らか」
氷刃竜「スイレン、きてたのか」
真王「あっちの作者の許可の元連れてきました」
真王竜「手際がいいな…」

真王の手際の良さに真王竜は感心する。

真王「それから、そこのでかい傘を持ってるやつ！参加したいのか？」
夜帝竜「当たり前だ！それからあたしは夜帝竜だ！」
真王「じゃあ特別の許可しよう！」
全員「えええええええええええええええええええええ！！！？？」

まさかの突然参戦に全員が驚愕する。
夜帝竜は「ッシャァァァァ！！」とガッツポーズ。

夜帝竜「あ、参加するならそれなりの「かつ丼１０個」よしそれでいい」

いつの間にかかつ丼１０個用意した真王に夜帝竜はすぐ食べた。
そして正式？に夜帝竜がドラゴンネイルチームに加わった。

銀時「オイィィィィィィィ！！！こんなんありかよ！！」
真王「特別として入れただけ。ハイ次行くよ」
恭介「おい無視すんなよ！！」

誰からのツッコミも無視で通す真王。

ソラ「次は俺らのようだな」

リリカルライダーチームがブロックを叩く。
出た目は8。

アリス「ミニゲームマスのようだな」
アリア「どんなんだろ…」

モニターが現れた。

『わたって進め！ぐらぐらタワー！（一人限定）』

そしてソラ達の目の前にいくつかのバランス悪そうな足場がある。

アリス「面白そうだ。ここは私が行こうか」
ソラ「ああ、頼むぞ」
真王「んじゃ始め！」

ＢＧＭてらせテレサの館ｂｙマリオパーティ（ｆｕｌｌ　ｏｆ　ｄａｎｇｅｒ　ＥＸＴＥＮＤＥＤ　ｍａｒｉｏ　ｐａｒｔｙ．ｗｍｖ）

まずアリスが足場に載ってみる。

グラグラグラグラ！

乗った瞬間ぐらぐらと揺れ始めた。

真王「向こう岸の浮島まで渡ったらクリアだぞ」

アリス「ふむ、では」

アリスはトントンと常人ではありえないジャンプで足場を渡る。
アリスが乗った足場はぐらついたあとすぐに崩れる。

アリス「意外と楽勝だな」

そしてもう着いた。

全員「早っ！？」
ソラ「こうなると思った…」

全員は驚き、ソラはやっぱりかと頭を抱える。

真王「クリアだね。では１０マス進みますよ」

リリカルライダーチームは１０マス先へ進んだ。
現在彼らがトップ。

近藤「よし！次は我々の番だ！」

次は近藤達真選組チームの番。
近藤はブロックを叩いて５を出した。

土方「ハプニングマスか…、一体何が起こるんだ？」
沖田「きっと土方さんを暗殺することでさァ」
真王「アホ沖田、それはペナルティだ」

真王は沖田に突っ込む。
モニターが現れた。

『最後尾の奴がずるして１０マス進んだ』

土方「はぁぁっ！？」

異世界戦士チーム・リリカル銀魂チーム「いよっしゃァァァァァ！！！！」

土方は有り得んばかりに大声を出し、最後尾にいる異世界戦士チームとリリカル銀魂チームは喜ぶ。

近藤「なんてこったァァァァァァァ！！！相手チームにいいもんを出してしまったぁァァァァァ！！！」

近藤は頭を抱えてシャウトする。

エール「すまんね」

エールはそういいながらブロックを叩く。

出た目は7だ。

エール「ノーマルか・・・」

コヨリ「でもペナルティよりまし」

次はリリカル銀魂のチーム。

銀時「よ～し、おれのターンだ」

銀時は拳を握ってブロックを叩く。

出た目は2。しかもペナルティ。

銀時「なんでだァァァァァァァァァァ！！！！」

銀時はシャウトする。
そしてモニターが現れた。

『オカマと鬼ごっこ』

それと同時に女性用水着姿のオカマ達が登場。

オカマ「あらやだあなたたち私に好みのタイプよ！結婚のための熱いキスを…」
リリカル銀魂チーム「い、いやだアアア

Ｄｒドーン「なんでこんな目にあうのであるか？」
ディケイト「俺店番やってんのに何で？」
フィリア「私が聞きたいです」
邪王「そりゃ怪しいからだ」
一同「直球っ！？」

全員揃ってびっくりする。

邪王「にしてもひどいけがをしているな。・・・テラエクスヒール」

邪王が魔法をかけると、永遠のアセリアそっくりの女性・セリアの傷がすべて消えた。

セリア「・・・ウ・・・マスター？」
カイン「セリア！良かった！」

意識を取り戻したセリアにカインは喜ぶ。

邪王「えっと…俺様が前に捕まえたのが２名、会場に入ってきたのが３名と一つ、観客にいるのが３人、今いるお前らで５、まだどこかにいるのが数名、そして目の前にいるあんたらで２だ」

邪王が別の方へ向く。
そこには２人の男女がいた。
金色の鎧を身につけた赤目赤髪の女性とＢＡＳＡＲＡの信長の鎧を黒くしたものを着て緑の髪の赤い目の青年がいた。

？？？「よく私達がいることが分かったな？」
邪王「『極神１０傑集』の気配なんていやでも分かる」
？？？「・・・私達の事も知っているのか？」

『極神１０傑集』という単語に眉をひそめる女性。
隣にいる青年もそうだ。
捕まっているカイン達はさっぱりとした顔だ。

イシュタル「まぁいい、私の名はイシュタル・ヴァジスゲイド。今日限りでお前は死んでもらう」

イシュタルは地面に手を当てると魔方陣が現れて、その後ろに巨大な悪魔が現れる。
それを見たカイン達は戦慄するか興味を持つ。

邪王「デーモン種、しかも魔王級だな」
イシュタル「フフフ、我が悪魔によって消滅し――――」

ビュッ！ズバッ！！ドグシャッ！

イシュタルが言いかけた時、邪王が右腕を音速で降ると悪魔の頭と胴体が離れた。
そして地面に落ちた頭と胴体はそのまま紫の血だまりになってしまった。
見ていたカイン達やイシュタルや青年も唖然としていた。

イシュタル「・・・ハッ！今のは一体？」
邪王「ソニックカッターで首を切り落とした」
イシュタル「ば、ばかな！？あの悪魔は強力な再生能力を有してるんだぞ！切られたところですぐに再生――――」
邪王「出来なくしてやったんだよ。なぜかって？俺様がいるとこは俺様のフィールドだからだ！！」

全然根本的ではない。

邪王「で？そこのお前は？」
隆次「・・・混獄（こんごく）　隆次（りゅうじ）」
イシュタル「しゃべるな隆次！」
邪王「黙らっしゃい」

青年・隆次を止めるイシュタルだが邪王に一蹴された。

邪王「まぁこっちにも極神１０傑集の一人いるしな。今パーティで観客としているがな」
イシュタル「あいつは・・・」

イシュタルは頭を抱えた。
どうやら知り合いがいることに頭を抱えているらしい。

邪王「ところで『極神１０傑集』、テメェらは何のためにここに来たんだ？３秒以内に答えろ。はい１」

ゴスッ！

隆次「２と３は！？」

隆次は邪王に殴られた。

邪王「いや、やってみただけ」
隆次「何気にひどくないか？」
邪王「うるせぇよシスコン」
隆次「誰がシスコンだ！！？」

邪王・イシュタル「おまえ」

隆次「ハモった!?」

シスコンと言われて言い返すがイシュタルにまで言われる隆次。

邪王「まぁいずれにしろ何でもいいが…」

邪王から膨大な禍々しい魔力が放出。
その時大地震が発生。

邪王「俺様とあいつの物語(ストーリー)を汚す奴は誰であろうと許さんぞ?」

邪王の発する殺気にイシュタル達は戦慄した。

邪王「ま、それはいいとして、早く戻らないとあいつ心配してるだろうな」

殺気を消して戻る準備をする邪王。
その手には7本の紐がある。

イシュタル「おい、なぜ我々まで?」

邪王「ついでだ。レッツラゴー」

イシュタル「おい!ふざけるな外道が!!私はいかないと…話を聞け馬鹿ものがぁぁぁぁ!!!」

隆次「(俺…ちょっと情けないです…)」

ミッドチルダ・???

ジーク「紙一重だった…、運良く捕まらずに済んだな」
レギス「ああ、束でかかろうが俺達が負けていた」
カオストール「フフフッ、ますます興味深いね、この世界は…」

別の場所で邪王から逃げだした3人が感想を漏らす。
そしてさらに別の場所で…。

レーヴェ「久しぶりに会おうかな…過去の俺…」

とかなしそうな雰囲気でいう男がいた。
更に別の場所では。

エルシャダイ「何者だあの男…、イシュタルの悪魔を一瞬で無に帰すとは…だが同時に邪魔な存在だ」

マスターテリオンみたいな黒髪金色の男が遠くから邪王たちを見て言う。

エルシャダイ「・・・っ!?」

しばらく覗いていると邪王がこちらを向いた気がした。

エルシャダイ（あの男…気付いている!?我ら『極神１０傑集』に匹敵するやもしれぬ…）

そう解釈していると後ろにいる複数の気配に気づく。
人型の黒い体で赤い目が特徴の邪王兵である。

邪王兵「神殺シ（カミゴロ）」

ズドガッ！！

エルシャダイ「な…ぁ…」

3方向の同時攻撃にエルシャダイは避けれず直撃を受けたためそのまま意識を失った。
そしてそのまま消えた。

邪王兵「ニセモノダ。ホンモノスデニニゲタ」

邪王兵は他の捜索にあたった。

エルシャダイ（危なかった…。何だあの我々に匹敵する力を持つ輩は！？このままでは我が計画に支障をきたす。ならば先手を打って奴らを始末…）
邪王兵「シネ」

ガッ！！

エルシャダイ「な…に…？」

邪王兵を始末しようと考えた矢先に後ろから邪王兵が来た事に気配を感じられないまま気絶させられた。

更に更に別の場所。

ユリス「この世界にも強い人が…。早くあの男を止めないと…。兄

さん」

一人の少女がある計画を阻止するために行動を開始した。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「よ～し！リリ銀パーティだからゲストがアシストするぞ！まずはこいつからだ！」

マリオ「よう！『スマッシュハーツブラザーズ』からのマリオだぜ！」

ルイージ「同じくルイージです」

銀八「よし、んじゃいくぜ。ペンネーム『フリーダム』さんからだ。

『Sフリーダム「パーティ面白そうだな」

∞ジャスティス「だけどマリオパーティがベースだから」

レジェンド「踏んだマスによっては、大変な事に…」

カオス・アビス・ガイア
「「「（ゴソゴソ）」」」

デスティニー「お前等、何やってんだって…ァァァァァ！！」

ガイア「あ…」

カオス「やべっ！！」

アビス「バレた！！」

アカツキ「どうした？」

デスティニー「ガイア達がゲルスゲー、ザムザザーを１０機ずつとデストロイを５機をあっちに送っちまった…」

一同『……』

アカツキ「まっまぁしょうがねぇな（苦笑）あっとりあえず、質問だ」

全員に
今回のパーティに裏があるとしたら何？

デスティニー「おいーーー！！あっちに送った奴等どうすんの！！」

Sフリーダム「え～と…とりあえず、そちらでどうにかしてください…」

デストロイ（オリジナル）「私の子供達（量産型）は、どこに…（泣」

更新楽しみにしてます』」

マリオ「いいことだったらいいが、悪い事ならぶっ壊す！」

真王「誰が悪いことなんてするか」

マリオ「あ、そうなの？」

真王「『フリーダム』変な誤解を招くなよ」

ルイージ「続いては僕達のとこの『鳴神　ソラ』さんだよ。『マリオ「色々と強い人もいるから楽しくなって来たぜ！」

ソニック「ＹＥＳ！ますます楽しみがいがあるな！」

クッパ「（変な事が起こりません様に…）」

冥王「頑張るの！！」

明久「どう思いますルイージさん；」

ルイージ「うん、僕達、ツッコミしまくりそうだよ；」

フォックス「頑張れよ！」

スネーク「応援してるぞ」

ムッツリーニ「……許可を貰えばグラビア並みに撮る。無断で撮らない」

ネス「質問『マスについてはこんなのがあったら良いなと言うのを含めて考えましたか？』」

リュカ「なのはさん達に質問です『集まった人達を見てどう思いました？』」

ソロ「メテンズギルドの長に質問だ『クローンなのは達はどうしてる？』」

次回を楽しみにしてます♪』２つは作者さんが答えるよ」

真王「そりゃもう考えましたよ。そしてなのはさん達はみんな強者揃いだと驚いてました。次」

アテナス「彼女達は施設で不自由なく暮らしています。しかも本物そっくりですから興奮している転生者もいますが…」

真王「では『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「次はペンネーム『ケン』だぜ。『統夜「始まったぜ・・・」

遊輔「そうだな」

零斗「羨ましいぜ!!チキショウ!!」

統夜「や・・・零斗・・・お前は黒神さんとこのパーティに出てるだろうが・・・お前とダイチ、たけしは龍の骨さんのところのキャラなんだから・・・」

零斗「そ、それもそうだな・・・」

統夜「そうだぞ・・・」

零斗「新八がレッドクイーンを選ぶとは・・・右腕を悪魔の右腕にした方が・・・」

統夜「んなもん・・・ジャンヌに聞こえたら怒るよ?早速質問だ・・・ヤルオに質問だ。スクデイに出てくる伊藤誠についてどう思うか?」

零斗「ヤルオは変態だがああはならんだろ・・・沖田に質問だ。もし統夜の蒼炎が使えたら誰を燃やすか?」

ダイチ「お～・・・盛り上がってるね」

気力使いのダイチがやって来た。

統夜「まぁな・・・そういうお前は?」

ダイチ「俺も参加したいと思って・・・真王さんに質問だ。女性陣

の中で一番エロい人って誰ですか？」

統夜「ダイチ・・・スケベな事するんじゃないぞ」

ダイチ「分かってるよ・・・」

今回の贈り物は犯罪組織を蒼炎で燃やし周りに精神崩壊した魂をいくつか浮遊させ右手に大剣を手にしている統夜のイメージイラスト（テーマは悪への絶望）、統夜（ヴァンパイアルシファー形態）と遊輔（死神形態）、はやて（天使化）、雪蓮（白虎化）、メアリ（白獅子化）の五人が草原で立っているイメージイラストの計二枚を差し上げます。』んじゃ順番に応えようぜ」

ヤルオ「ああいう奴に限って死亡フラグｗｗｗｗ」

沖田「そりゃ土方さんでさァ」

真王「アルテス。なんせマゾだから」

ルイージ「直球!?『ケン』さん!廊下に立ってなさい!」

真王「つぎだ。ペンネーム『ヴァーラガルザ』さん。『ついに始まったか・・・・。

エルシャダイ・ワイズデント「くだらん世界だ。今にでも潰してやりたいわい。だがまだ我らが動くまでではない。」

でもあのバカはどうするんですか？

エルシャダイ・ワイズデント「イシュタルに捜索させている。もし

も我らの存在がばれそうだったときにはその事を知った者達を始末するように言っている。あのバカは我々の中でも問題児だからな・・・・。」

苦労してるんですね・・・・・・。あ、それと質問

みんなへ（作者も含む）
もしもみんなが屁怒絽さん（しかも家族そろって）一ヶ月間暮らすことになったらどうしますか？（逃げ出そうとするとブロリーとバラガスにシャマルパイを無理矢理食わされられます。）』」

全員（一部除く）「逃げる！！」

真王「覚悟の上らしい。『ヴァーラガルザ』さん。廊下に立ってなさい。次だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。『黒龍「ソラ、リリス、アリス、アリア、セイバー、後ライホース、これから頑張ってください！！」

ソラ「とりあえず、黒神のゲスト達みたいな展開にならない事を期待したいな」

アリス「フッ…まかせろ」

リリス「優勝してみせます！」

アリア「にゃ～…」

ライホース「なんで私はついで扱いなのだ！？」

銀時「まぁ、頑張れや」

神楽「ん?ヤミだけ出れない事に怒ってないアルか?」

ヤミ「今回は、私は呼ばれてませんし仕方ありません」

ソラ「まぁ、元気出せ」

ヤミ「ありがとうございます」

黒龍「とりあえず、今回はここまでにして質問します」

1.真王さんに質問。なんでソラ達のチームを腹立つとか言ったんですか?

2.ネプテューヌに質問。今回のゲスト長編で一番の強敵はどのチームだと思いますか?

3.銀さんに質問。回ってくる番が最後尾になった事に焦ってましたけど、なんか罰ゲームとかあるんですか?

黒龍「それじゃあ次回も楽しみにしています」』・・・ノーマル版でアリスがことごとく超えた事を思い出して…」

ネプテューヌ「ハイ作者ストップ!私は多分とある転生チームかな?」

銀時「なんで焦ってるって?そりゃ黒神みたいな目にあうんじゃないかと不安になるんだよ!」

真王「だそうです。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ルイージ「えっと次はペンネーム『なめ猫』さんからです。『俺「引き続き考えまくる、なめ猫な俺らです」
ラムザ「もはやデフォだね…」
ミリア「リリ銀パーティーが始まり、たくさんのコラボ…そして銀さん達が楽しい長時間のゲームで競争する……明るい時間だね」
ラムザ「予想すると、勝つのは…やはり銀さん達かな？作者さんも、ヴァーラガルザさんのオリキャラ達に自信ありげな発言をしてるし」
俺「つまり？」
ラムザ「今のところ、真王さんはうちのキャラが勝つという自信をいろんな人達に見せている。真王さんは、そのはっきりとした理由を持っている…だとすれば、今回も勝つかもしれないな…」
ミリア「んー…まだわからないと言っておくけど、どうして誰も彼もが神レベルなんだろうね？」
俺「何があれほどの神や超人を生み出しているのか……知りたくてたまりませんね」
ラムザ「とにかく、またすごいもの見せてくれるだろうから、楽しみにしていよう」

質問

レーティアへ
「続き。正義の『暴走』について何か」

勇華へ
「最強とは？」

俺「ではまた」』」

レーティア「・・・そんな物、正義ではない…！」

マリオ「ある意味同感だな…」

勇華「さぁ？」

真王「とぼけた感じにするな」

ルイージ「・・・『なめ猫』さん、廊下に立ってなさい」

マリオ「次はペンネーム『月光閃火』だぞ。『ども…月光閃火だ。

しかし…レジィ、もっと活躍して欲しいな～…。

輝刃「…アイツの場合、シリアスで良いとこ見せないと難しそうだな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．ジャンヌに質問…もし新八にコスプレをさせるなら、どんな格好にさせる？ちなみに、男性モノ限定でな。

う～ん…やっぱり、中の人繋がりでＶガ○ダムの『ウ○ソ・エ○ィン』の格好が良いんじゃね？次は俺からだ。

2．山崎に質問…今後やってみたいコスプレってある？出来ればテ○プリ系以外で…。

輝刃「確かに、山崎のコスプレって大概テ○プリ系が主だっているからな…。」

うん、たまには別のも良いんじゃないかと思ってね。あ…ちなみに、レジィのイメージＣＶについての余談だけど…俺的には『谷山紀章』

さんか『小野坂昌也』さんかな。どっちもシリアス・ギャグ両方イケるし…。』じゃあ順番に答えるぞ」

ジャンヌ「ソウルキャリバーの侍の人のコスプレだよ♪」

山崎「あれ以外いらないです」

マリオ「即答だな…；『月光閃火』。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『マインドスイーパー』さんだ。『ヴァーラガルザさんのキャラ普通のキャラから全能クラスのキャラまでそろい踏みですね。

質問
銀さんへ
この中で万事屋に来て欲しくない人は？
・阿部高和
・カービィ
・最強さん』」

銀時「カービィ以外で！！」

真王「だな。『マインドスイーパー』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「最後だな。ペンネーム『ウィンド』さんだ。『ウィンド「ふ～やっと熱から解放された」
リア「熱にやられるとはな」
ウィンド「久々だったから油断してた。しかし遂に始まったなパーティーが」
リア「セレス達の活躍を期待するか」
ウィンド「質問いくか。銀時に。今の実力で高杉に勝てるか？」
リア「真王さんに。エール、コヨリの力とメアの狂気が出る場面は

考えてるのか？後リアの能力のリクエストをお願いします」
リア「リクエストする必要あるのか？」
ウィンド「考えてるが思い付かない」
リア「そう」
ウィンド「質問は終わりだが管理局の上層部は屑の中の屑だな」
リア「正義など所詮は人間が作り出した幻だ。それもわからない奴らが正義を語るな」
ウィンド「まぁセレス達を怒らせたらあいつらの運命は決まってる。気にするな」
リア「だな」
ウィンド「さて。そろそろ更新してくれ」
リア「そうしてくれ……ん？」
ウィンド「どした？」
リア「……吸血鬼姉妹がこっち来てる」
ウィンド「やべ。最近更新してなかったからぼこされる」
リア「……ちょっと待って」
スタスタ
ウィンド「え？」
ドゴォオオオン！！！バゴオオォォォォン！！！バキバキ！ザシュ！ベキッ！ドオオオォォォォン！！！
リア「終わった（返り血がついてる。しかも無傷）」
ウィンド「あああありがががととうございます！！！（怯）」『』
銀時「もし高杉が俺と同じことをしようとしてたら使うかもしれねぇな」
真王「その辺は考え中。『ウィンド』さん。廊下に立ってなさい」
マリオ「んじゃ次回もまた会おうぜ。ってかアシスタントは別になるがな」

第九十八訓：双六でも一筋縄ではいかない（後書き）

真王「パーティはまだまだ続くぜ！」

マリオ「次回！『エリアには危険なイベントもある』テイクオフだ！」

～つぶやき～

真王「ヴァーラガルザさん、投稿キャラを悪く使ってすいません」

第九十九訓：エリアには危険なイベントもある（前書き）

真王「リリ銀パーティ二回目！」

邪王「まだ初番だぞ？」

第九十九訓：エリアには危険なイベントもある

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム２７
剣聖チーム２７
スマブラハーツチーム３０
学園チーム４４
プリティレディズチーム３９
女神チーム４８
とある転生チーム３８
狂乱チーム２９
メテンズナイトチーム３６
ドラゴンネイルチーム４２
リリカル仮面ライダーチーム４７
真選組チーム３５
異界戦士チーム４５
リリカル銀魂チーム３６

女神チームトップ。
現在３ターン目
次のターン・ヒーローズチーム

シュンッ！

邪王が7人の人、前回捕まえたカインやイシュタル達だ。

真王「遅いぞ、時間かかったんじゃないか？」

邪王「やっぱそうか？他にもやってきた馬鹿共もいたが、俺様の部下が任せている。まぁ悪党3人は危険を察知してすでに逃げたがな。お、来たか」

邪王兵「ツレテキタ」

レーヴェ「何で俺だけ現行犯逮捕みたいなわけ？」

邪王兵はレーヴェを連行される様な感じで手錠をかけられている。

ローグ（討伐対象のレーヴェ！こんなところに会えるなんて…。っていうか俺動けねぇ…）

連れてきたレーヴェを見てローグは驚く。

邪王「それで、勝負はどうなってるんだ？」

真王「まだ始まったばかりだ。観とけよ」

ヒーローズターン

相川「私の番よ」

相川がブロックを叩き、3をだす。

その先はボーナスマス。

統夜「よっし！ボーナスゲットだぜ！」
シャル「ポケモン持ってんの？」
達哉「いや違うから…」

シャルのボケに達哉が突っ込む。
そしてモニターが現れた。

『近道土管を見つけたので２５マス進む』

相川「やったー！！」
統夜「リード取ったぜ！！」

喜ぶヒーローズチーム。
２５マス進むと周りが森の中になった。

真王「まずはヒーローズチームが森エリアに突入だね」
達哉「エリアには何かあるのか？」
真王「エリアによってここでしかないイベント、ハプニング、ペナルティがあります。エリアを進めば進むほど難易度が上がりますよ」
統夜「へへッ、ますます面白くなって来たぜ」

統夜は手を合わせて握る。

剣聖ターン

森羅「ならこっちもボーナス狙いだ！」

森羅はブロックを叩いて運よく3を出した。
森羅はガッツポーズを出す。
モニターが現れる。

『３０マス先に砲台に乗って飛ぶ』

森羅「砲台？」

森羅含め剣聖チームが頭を傾げると、いつの間にか剣聖チームが砲台の中に入ってた。

レイン「んおっ！？何時の間に！」
さくら「ちょっと抜けないよこれ！？」
蒼馬「じゃあ僕がだい「さわんなテメェ！！」ガフッ！」

ギッチリはいってるため動けないレイン達。
蒼馬はさくらに頭突きを喰らった。

真王「心の準備をしとけ。５、４、３、２、１、ドーン」

ドドーーーン！！！

剣聖チーム「わあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

剣聖チームは飛んでいった。
砲台は消えて、レイン達は３０マス先に落ちた。
爆発したにも関わらずなぜか無傷のレイン達。

森羅「あれ？痛くねぇ」
咲夜「作者が私達に気を使ってくれたのかしら～」
紅也「そうなのか？」
とりあえず気にしないことにした剣聖チームだった。

スマブラハーツターン
明久「よし、僕の番だ！」
明久はブロックを叩く。
出た目は１０。その先はバトルマス。
マリオ「さて、どんな相手が出るんだ？」

『ドクタージャッカル
赤屍蔵人（助っ人：銀次）』

銀次「え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛！！！！？？」

対戦相手を見るや否や、銀次が驚愕している。
なんせ原作では銀次はこの人を苦手意識を抱いていたから。
そしてご本人登場。

赤屍「おや？少し見覚えのある方がいらっしゃいますね…」

にっこり笑っているが、とても素直に喜べない。

赤屍「まぁいいです。私が戦闘（オペ）をいたしましょう」

銀次「イヤアアア

学園ターン

愛淫「フフ、わたくしこそが恭介さんにふさわし許嫁と確信させますわ！」

そういいながら愛淫はブロックを叩いて5を出す。
その先はハプニングマス。

恭介「確か相手チームにいいことか悪いことかになるんだったよな…」

恭介が確認する。
そしてモニターが現れた。

『先走った奴にロケットパンチ！』

モニターが出た瞬間ロケットパンチが飛んでいった。
狙われた先は剣聖チーム。

森羅「げっ！」
さくら「当たったら戻されちゃうよ！！」
レイン「くっ！仕方ねぇな」

剣聖チームのレイン、咲夜、森羅が前へ出て、ロケットパンチを壊そうとするが、

真王「おい、手ぇ出したら失格決定だからな」

ドガーーーン！！！

剣聖チーム「ぎゃあああああああああああ！！！！」

真王の一言にピタリと動きを止めてしまい、直撃を受けてしまった。
そして今いたマスから5マス後ろに下がった。

マリオ「まぁ壊そうとすれば酷い目に会うのは目に見えるからな…」

クッパ「我が輩はもう懲りたぞ…」

遠い目をするクッパ。
実は壊そうとして酷い目にあった経験があるらしい（漫画談）。

プリティレディズターン

タバネ「よ～し、私の番だよ～！」

タバネはブロックを叩き、8を出す。
進んだマスにはシルクハットと？マークのマスだ。

真王「それはクイズマス。私の出題する問題に答えられたら進めるぜ」

タバネ「よ～し、タバネちゃん頑張っちゃうぞ～！」

ヤル気あるのか緩いのかどっちか分からないテンションだ。
そしてモニターが現れた。

『妖魔夜行
この名前にイメージできる東方キャラは？』

タバネ「ルーミアちゃん！」
真王「正解だ」

タバネは即答して正解した。
そして５マス先へ進んだ。

女神ターン

ノワール「さて、次は私達ね」

ブロックを叩き、５を出す。
キノコマークのマスだ。

真王「アイテムマスだね？私の考えた物をクリアしたら３つのうち好きなアイテムを差し上げますよ」

真王が説明したあとモニターが現れた。

『ダブルダイズ：バトル
ダッシュラン：クイズ
アオナレー：バトル』

ノワール「う～ん、じゃあダブルダイズの方ね」
真王「なら、バトルの準備を、対戦相手はこれだ！」

『氷の精霊
チルノ（参加3人限定）』
チルノ「あたいってば最強ね！」
水色の服と髪に氷の羽を持つ少女・チルノが現れた。
ノワール「どうする？」
ブラン「私が出る…」
ラム「ルウィーメンバーが出ちゃうよ！」
ロム「（こくこく）」
対戦するのはブラン、ラム、ロムのルウィーメンバーだった。
真王「では…試合開始！！」
ブラン「叩き潰す」
ブンッ！
先手にブランがハンマーを振るが、チルノは簡単にかわす。
チルノ「今度はこっちだ！アイシクルフォール！（ＥＡＳＹ）」
チルノは氷のつぶてをブラン達に発射する。
ロム「ロムちゃんバリヤー」

ロムが障壁を張ってつぶてを弾く。

ラム「そして私のターン！バーニングシュート！！」

ラムが杖から炎の塊を発射した！

だがチルノは難なく避ける。

チルノ「バーカ！そんなんあたんないよ～だ」

舌を出してベロベロバーみたいなことをする。

だがラムは笑っていた。

ラム「言っておくけど追尾式なんだ」

チルノ「え？・・・えええええええええええええ！！！？？」

ピチューン！

チルノは振り返るとUターンしてきた炎がチルノに直撃。

チルノは戦闘不能になった。

真王「おお、いい連携プレイです。ではアイテム・ダブルダイズを差し上げます」

女神チームはダブルダイズを手に入れた。

とある転生ターン

神「俺様達の番だな？」

神はブロックを叩き7を出した。
ボーナスマスである。

神「どんなボーナスが貰えるのかな?」

ワクワクしているとモニターが現れた。

『道の途中でアイテム2つ手に入れた』

目の前に虹色の?ブロックと3個のサイコロブロックががった。

真王「お、イレカエールとトリプルダイズの2つか」
グレイ「ダイズの方は分かるがこいつはなんだ?」

グレイはイレカエールを指差す。

真王「イレカエール、マリパでいうワープブロックだ。相手チームと入れ替わることが出来るぞ。ただし、どのチームになるかなんてわからないがな」
レヴェッカ「おもろいとこやな」

狂乱ターン

はやて「うちらも負けんで!」

はやてはブロックを叩いて9を出す。

・・・また邪王マス。

はやて「なんでやァァァァァァあああああ！！！！」

はやては絶叫した。

邪王「そんなことしても始まったぜ？ホレ」

邪王の言う通り、すでにルーレットは回っている。

はやて「あああもうどうにでもなれー！！」

やけくそで押した。

そしてモニターが現れた。

『邪王から１００万円ゲット』

邪王「・・・・・・・・・」

狂乱チーム「よっしゃァァァァァァァ！！！！」

まさかのお題に邪王は黙りこみ狂乱チームは大喜び。

他のチームは羨ましそうだ。

ヴィータ「さぁ出してもらうぞ」

シグナム「欲深くはないが、出した方がいい」

邪王「・・・・・・・・・」

邪王はまだ黙りこくっている。

そして、

邪王「・・・・・・・じゃあな」

ピュンッ！

邪王は逃げだした。

狂乱チーム「あ！！逃げたぁ！！！」

いいものを選ぶと邪王はそれを渡さず逃げるらしい。（クッパマス同様）

メテンズナイトターン

ガレーナ「さて、どんなものが出るのやら」

ガレーナはブロックを叩いて3を出す。
バトルマスだ。

ガレーナ「これはちょうどいい！」

ガレーナは嬉しそうだ。
そしてモニターが現れる。

『史上最悪のサイヤ人

ブロリー（スーパーサイヤ人化）』

そしてすでにサイヤ人化したブロリーが現れた。

ブロリー「カカロットォ・・・」

何やらガレーナをカカロットと勘違いしているらしい。

ガレーナ「余はガレーナじゃ。しかしこれだけの気を放てるとは、とても戦いがいがある」

ガレーナはニィィとわらって覇気を放つ。

ブロリー「!?・・・貴様、これだけの気を放つとは…」

ガレーナ「戦記姫、ガレーナ、参るぞ!!」

ガレーナが一瞬消えた後ブロリーに一撃を与える。

ブロリー「ゴアハァ!!」

たった一撃で大きく吹っ飛んだブロリー。

ガレーナ「・・・なんだ?この程度か?・・・はぁ、いい相手だと思ったのだが、飛んだ見込み違いだったとはなぁ!」

ガレーナから超膨大な魔力が放出させている。

参加メンバーや観客達は後退りする。

レイン「な、なんだ!?」

統夜「おいおい何つう魔力だ…。いや魔力だけじゃねぇ。もっとこう何かを威圧する力が働いている様な…」

真王「覇気の力の一つ。『武装色の覇気』、身に纏う覇気の力が武器となってはじいたり破壊したりできる」

真王が覇気についての説明をした。

邪王「あいつ覇気と魔法のミックスしてるな…。こりゃ強い技が出るぜ？」

ガレーナ「その程度の強さしかないのなら、要はない。失せろ！」

ガレーナは腕に黒い魔力と覇気を溜める。

ガレーナ「『竜炎・闇咆哮』！！」

グオオオ

ただそれ以外は驚かずにはいられない。

銀時「待て待て待て待てー！！！なんだよ！闇炎纏いし竜（ヤミホムラマトイシガレーナ）って！めちゃくちゃかっこいいけどめちゃくちゃチートなんですけどぉ！！？」

レオン「私もガレーナも他の奴らとは違っていろいろ訓練してきたからな。マグマの上を走るとかトラップだらけの城を一人で攻略とか猛獣の島で一人修行をしてたな」

新八「それ修行という名の拷問じゃん！！」

ジャンヌ「イヤイヤ、新八君、普通の修行じゃ納得いかないのよあいつら」

新八が突っ込むがジャンヌが補足を入れる。

真王「（将来大物になれそうだな…。それに極神１０傑集驚いてらぁ）勝利したみたいなので１０マス進みますね」

真王はにやにや笑いながら不法侵入した奴らを見るのであった。

ドラゴンネイルターン

真王竜「竜か…。もしあいつが仲間になるなら闇帝竜としようか？」

光翔竜「あ～、確かにそんな雰囲気がありますね…」

黒鎌竜「我々の５本指に入りそうだしな」

白天竜「でも彼女がすんなり入ってくれると思う？」

氷刃竜「まず無理だろうね」

魔炎竜「いっそのことロストロギアでも使ってやったらどうだ？」

ガレーナ「余はそっちに入る気なんてないぞ？」
ドラゴンネイルチーム「オオウ！！」

陰でひそひそ話をしているとガレーナがわってきてびっくりする。

夜帝竜「テメェが強いのは良く分かったぜ。あたしと一戦交えねぇか？」
ガレーナ「余に挑戦するか？面白い」

一足触発の雰囲気になる。

真王「おいこら、その時はデュエルマスでやっとけ」

だが真王によって止められた。
2人は名残惜しそうな顔をした。

光翔竜「暴れられたらかないませんよねっと」

光翔竜はそう思いながらブロックを叩く。
出た目は7でハプニングマス。
そしてモニターが現れた。

『真選組に木の実が降ってきた』

ゴンッ！

近藤「イテッ！」

近藤は何か頭にあたって押さえる。
拾うと何かの木の実だった。

なぜか導火線が付いて…。

ドガーーーン！！！

真選組チーム「あああああああああああああああああああ！！！」

爆発した。

銀時「ちょっと待てェェェェェェェェ！！！」

フェイト「木の実が爆発したよ！！」

真王「爆弾の実、木の実そっくりだが爆弾である。それを受けた真選組チームは一回休み」

ティアナ「説明口調で最低だこの作者！」

真王「なんか言ったか？」

ティアナ「イッテマセン」

銀時達は爆発したことに驚き、真王が説明して、ティアナがツッコミ入れるが真王に睨まれた。

リリカルライダーターン

リリス「次は私達の番です！」

リリスはブロックを叩いて１０を出す。

ノーマルマスだ。

ソラ「ま、そうだろうな」

異界戦士ターン

コヨリ「出番が来たよ」

コヨリはブロックを叩いて１０を出す。

何とペナルティマス。

コヨリ「あ゛！」

『ダークマター』

ペチャ

コヨリ「ギャあああああああああああああ！！！！」

ダークマターを顔にぶつけられたコヨリはもだえ苦しんでいる。

エール「コヨリィィィィ！！！しっかりしろォォォォォォォ！！！」

メア（あれを食べたらいけない予感がする…）

勇華（まずそうねあれ…）

エールは必死で看護し、メアや勇華たちは少し汗を流す。

リリカル銀魂ターン

銀時「よ～し、今度は俺達の番だ」
なのは「じゃあ私が叩くよ」

なのははブロックを叩いて5を出す。
それは！マークのマスだ。

真王「ん？イベントマスだね。エリア特有のイベントが発生していいことになるか悪いことになるか…」
新八「不吉なこと言うのやめてくれませんか！？」

新八が冷や汗流して突っ込む。
そしてモニターが出る。

『頭上注意』

ドガッ！ゴンッ！ドガッ！ペタッ！ガンッ！ドガッ！ドガッ！

銀時「イデッ！」
新八「いて！」
神楽「ウゴッ！」
なのは「にゃ！？」
フェイト「きゃ！」
スバル「あいた！」
ティアナ「きゃあ！」

頭上からアイテムと木の実が降ってきた。
アイテムは新八となのはとフェイトだが、木の実は銀時、神楽、スバル、ティアナだ。

なのは「イベントってこんなのがあるの？」
フェイト「まぁとりあえずこれらはもらっとこうよ」
リリカル銀魂チームは『ダブルダイズ』『ピッタリストップ』『バトルベル』をてにいれた。
銀時「まぁパーティは始まったばっかだ。逆転狙ってやるぜ！」
銀時達は気合を入れた。

真王「気合十分だね～」
邪王「そうだな。で？中にいる奴らは？」
真王「探索中か戦闘始まっちゃってるよ」
邪王「あいつらと勝てると思うか？」
真王「さぁな。・・・外のもまだ奴らがいるが…」
邪王「まいいさ。『夢の創造者（ドリームクリエイター）』のお前と『混沌の破壊者（カオスブレイカー）』の俺なら良きシナリオが完成するだろ？」
真王「その通り。極神だか何だか知らん奴に三流のシナリオは向かん」
邪王「ストーリーは…もう後半へ向かっていくかもな…」
真王「さて、私が描いたシナリオ通りに進めばいいのだが…」

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

統夜「よう！ヒーローズチームの統夜だ！」

達哉「その親友達哉だぜ！」

相川「相川咲夜です」

銀八「へい、んじゃ行くぜ。ペンネーム『烈火竜』さんからの質問だ。『質問
真王さんの好きなアニメまたはゲームは何ですか？』」

真王「アニメでは銀魂となのはと他多数…ゲームではネプテューヌ、ディスガイア、マリオ、カービィ、その他いろいろだな。『烈火竜』さん。廊下に立ってなさい」

統夜「んじゃ次はペンネーム『フリーダム』さんだ。『Sフリーダム「初代マリオパーティのミニゲームが二つ出てきたな」

∞ジャスティス「基本あの二つは、クリア出来るよな」

Sフリーダム「マリオパーティ全種類持ってるから、大体どういうミニゲームかわかる」

デスティニー「ってか最初の「ファは嫌い」と「途中でやめたら首を切る」って、漫画のマリオにあったネタだった気がする…」

レジェンド「正式には、『スーパーマリオくん22』の特別編のネタだな…」

アカツキ「他にも結構エグイ物や危ない物もあったが、質問に行くぜ」

リリ魂チームに
追いかけられた後どうなった？（精神的な事もあるので、無理に答えなくてもいいですよ）

全員に
ペナルティでキツいのは、どっち？
A．肉体的
B．精神的

デスティニー「全員無事にパーティを終わらせる事出来んのかな…」

更新楽しみにしてます』で？作者どうなんだ？」

真王「彼らは死ぬかと思ったと言いましたよ。違う意味で…」

統夜、達哉、相川「・・・・・・」

真王「特にきついのは精神です。くさやは臭いですし…」

統夜「関係なくね!?『フリーダム』、廊下に立ってくれ」

相川「えっと、次はペンネーム『ケン』さんよ。『樹「ギャァーーハッハッハッハ!!統夜に遊輔、達哉・・・ざまあみろ!!」

妬みからかペナルティマスに止まり丸焼けになった統夜達を見て大笑いしていた。

零斗「テメェは退場してろ!」

零斗の蹴りで樹をお星様にしていた。

零斗「全く・・・」

その後統夜とダイチもやって来た。

統夜「あれは痛かった・・・」

零斗「ご愁傷さま・・・もし俺がネプテューヌ達と組んだらチーム・マイティアテムが出来たかもな」

統夜「タコに襲われた女性陣・・・ご愁傷様です」

ダイチ「あられもない姿を見せてありがとうございましたぁーーー!!!」

ダイチの言葉を聞いた統夜と零斗は青ざめた。

統夜「お前・・・あの中にユウカさんがいるという事は・・・どんな災いがやってくるか知らない訳じゃないよね？」

零斗「哀れなり・・・」

ダイチ「あっ・・・」

統夜「といあえずご愁傷さま。ユウカさんへ質問。とあるスケベ馬鹿がタコにあられもない姿をされて喜んでいました。どうしますか？」

ダイチ「お前・・・何とんでもない質問送ってるんだよ！！そこは助けろよ！」

統夜「や・・・どの道さ・・・制裁されるのが目に見えてるんだ・・・どう逃げる気だ？」

ちょっとしたお願いですが・・・僕の作品で出てくるキャラをバトルマスに入れたいのですがよろしいでしょうか？もし許可が取れればメッセージで送ります。

統夜「何か送るの？」

まぁね。まだ先になると思うけど・・・ちょっとね・・・

銀さんラバーズに右手に木刀を持ち微笑んでいるポーズをした銀時人形をあげます。頭にあるボタンを押せばそれぞれの名前を呼びこ

う言います。

銀時人形『〇〇〇〇・・・お前を愛している』

と言います。次回も楽しみにしています。』・・・えっとユウカさん…？」

ユウカ「まずはマグマに放りこむわ」

統夜「マグマは駄目だろォォぉぉ！！！？いや分かるけども！」

達哉「そうだぜ！分かるけども！」

相川「私もです！確かに分かりますけど。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

達哉「よし次はペンネーム『鳴神　ソラ』だ。『マリオ「いや～まさかな…」

クッパ「うむ…」

ルイージ「だね；」

ヨッシー「大変ですね；」

ムッツリーニ「……」

アンク「俺たちの時はどうなるのやら…」

カザリ「そうだね；」

ウヴァ「まあ、思いっきりやるだけだ」

ガメル「質問『ミニゲームは主にマリオパーティのを出すの？』」

ネス「ミニゲームをやった人達に質問『ミニゲームをした感想は』；」

フォックス「質問『罰ゲームはマリオくんのとかのをメインとしたのやちょっと変えたのにしてるのか？』」

次回を楽しみにしてます♪』真王は主にそれを出すらしいぞ」

さくら「お尻が割れそうだった…」

アリス「意外と楽勝だったな…」

真王「最後のは教えません。『鳴神　ソラ』さん。ろうかにたってなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。しかし…襲撃してきた奴らも災難だよな…。だって相手があの『邪王』だもん。

輝刃「だな…。元が真王だから、ギャグ物の『お約束』が混じる事が目に見える…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．山崎に質問…原作銀魂で張り込みの話があった時にずいぶんと“あんぱん”で病んだ思いしたが、他の食べ物でもあのホラーな呻

き声は出るのか？

あ～…例の“あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん……etc.・・・”のヤツか。確かにアレは完璧ホラー物に聞こえたぜ…（汗）。次は俺からだ。

2．真王と邪王に質問…自分達の共通点を教えてくれ。

輝刃「なるほど…で、主にどんな共通点が聞きたいんだ？」

う～ん…やっぱり、物事の考え方とか好みの女性のタイプとか…。

輝刃「…妙に人間臭い所行くな…（汗）。」『いやあんパン以外ないだろう』

真王「私との共通点ですか？いろと性格を除けばムチムチ女と楽しさ狙いとかですね」

邪王「俺女好きだぜ？『月光閃火』、お前の好みの女は誰だ？」

真王「質問返すな。ペンネーム『なめ猫』さんからの質問。『俺「はいどうも、なめ猫な俺らです」

ラムザ「カイトとミリアはお休みだよ。パーティーの舞台裏で管理局襲撃とかすることにしたから、準備してるよ」

ラルム「なので、私も出ることにしました。ラルム・ライトハートです」

俺「さて……何でしょうね、あれだけワルプルギス、ブロリー、ヴァーラガルザさんのチートオブチートキャラ達があたらこうたら言ってましたが…」

ラムザ「……すまない、はっきり言えば、ここに出た１０の神何とかのほとんどは、中身が薄い強さだったか…」
俺「言いすぎですよラムザ。あれは肝心ものが抜けてたんです。ラムザが思ったものが…ね」
ラルム「ネプちゃんいわく、フラグの理由…だね？」
俺「はい、多分ヴァーラガルザさんや真王さんもわかってるはず…そう信じてますが…」
ラムザ「では質問」

アイエフへ
銀さん達のメアド登録とかってしてるの？

アリアへ
ねぷねぷの部屋へスネーキングしてるね？その様子だとｗ

ドクターバイルから一言
「正義だと？戯れ言だ！」

ラムザ「バイルさんは帰ってくれ；」
俺「ではまた」

以下おまけ

カイト「なあミリア…俺、向こうでまたあの時と同じことしてしまう気がする…今のままじゃ…」
ミリア「…大丈夫だよ。そうなりそうになったら、今度は…ボクが止めてあげるから…」

カイト「……ありがとな、ミリア」『では彼女等の答え」

アイエフ「銀時ケータイ持ってないでしょ？」

アリア「いつでもオーケイです！」

邪王「いや何がだよ？『なめ猫』廊下に立て」

統夜「次だ。ペンネーム『武田軍兵士　清坂　剣麻』だぜ。『美己「ミサカから皆さんに質問があります。　美堂蛮の邪眼による一分間の幻覚を喰らった場合、次の内どのの幻覚がイヤですかっとミサカは問います」

1．腐留苦去主を無限ループで食わされる。

2．大量の害虫が群がってくる。

3．自分の体がだんだん崩れ落ちていく。

4．大量の悪霊や亡霊、死霊に襲われる（倒しても倒しても這い上がってくる）

美己「では実際どうなるかやってもらいましょうっとミサカは合図を送ります」

美堂蛮「おうよ！　ギャラは貰ってるからとびっきりのを見してやるぜ！」（邪眼発動）

一分後、

蛮「ジャスト一分だ！　悪夢（ゆめ）は見れたかよ？」』か、体が崩れるぅウゥウゥウ！！！！（悪夢中）」

達哉「ギャァァァァァァ！！！フルコースを俺の中に入れるなぁぁぁぁぁ！！！（悪夢中）」

相川「む、ムカデが体に中に！！？た、助けて！！（悪夢中）」

真王「かかってるな…（余所見したためかかってない）。『武田軍兵士　清坂　剣麻』、変な悪夢見せるな」

真王はとりあえず3人を元に戻した。

相川「ゼェゼェ、ゴホン、次はペンネーム『黒龍』さんよ。『黒龍「アリス中々やりますね」

アリス「フッ…」

リリス「出番は少ないですけど、他のチームみたく酷い目に遭っていないのが、何よりですね…（苦笑）」

ソラ「これからどうなるか分からないけどな」

銀時「ま順調に進んでるから良いじゃねぇか」

黒龍「それにしても、誰が罰ゲームを受けるんでしょうね？」

銀時「黒神の所みたいに負けた奴は全員受けるのよりはマシだ」

ソラ「同感だ」

黒龍「ははは……じゃあ質問します」

1．フェイトに質問。今回の長編で出番があり、しかも銀時と一緒になれた言について一言。

2．真王さんはマリオパーティシリーズは全部持っているんですか？

3．銀さんはゲストのマリオと原作のマリオの違いを見てどう思いますか？

黒龍「今回はここまでです。次回を楽しみにしています」』」

フェイト「銀時と一緒でよかったァァァァァァァァ！！！」

真王「4，5，7以外は持ってます…」

銀時「ゲキマズ料理食えるか食えないかだな…」

相川「『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

真王「次はペンネーム『白騎士君』『白騎士君「では質問します』』

1．銀さんが好きな人達に質問。光にされた銀さんをどう思いますか？

2．フェイトに質問。こっちでは、レナードがフェイトの料理が美味いと言っています。どう思いますか？

』以上です」

レナード「今度は俺からの質問だ。』

銀時に質問。かめはめ波ってどうやってやるんだ？

』以上だ」

白騎士君「今回はこれにて」『」

ラバーズ「ギンサーーーーーーーーーーーーン！！！！」

真王「次」

統夜「それだけ！？」

フェイト「えっと…凄いことなのかな？」

統夜（別世界なのに自覚してねぇ！）

銀時「シラネぇのか？かめはめ波はここからこうやって…」

真王「カット、『白騎士君』廊下に立ってなさい」

達哉「・・・次だ。ペンネーム『ウィンド』さんだぞ。『ウィンド「ふふふ……」

リア「何してる？」

ウィンド「いやな。パーティーにある仕掛けを送ってるのさ」

リア「？何の？」

ウィンド「ハプニングマスに男の娘限定コスプレを「明らかにあいつらにだな」ＨＡＨＡＨＡ！バレたか」

リア「阻止する」

ウィンド「無駄だ。もう送った。それにな……いつも負けるわけにはいかないんだよォォォォォォォォ！！！（スサノオ）」

リア「ほう？いいだろう（ダブルオーライザー）」

ウィンド「スサノオ！いざ尋常に」

リア「ダブルオーライザー。目標を」

ウィンド「勝負！」

リア「駆逐する！」
ガキン！ガキン！ギンッ！ガガガガガ！！
リア「やるな」
ウィンド「まだだ！」
リア、ウィンド「トランザム！」
リア「はあああああああああああ！！！」
ウィンド「ぬおおおおおおおおお！！！」
ガアアア

第九十九訓：エリアには危険なイベントもある（後書き）

真王「まだ始まったばかりだぞ」

統夜「次回『町はいつも安全とは限らない』テイクオフだ」

第百訓：町はいつも安全とは限らない（前書き）

真王「パーティ3回目」

邪王「行くぜ！」

第百訓：町はいつも安全とは限らない

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム１２５
剣聖チーム１１１
スマブラハーツチーム１０４
学園チーム１１９
プリティレディィズチーム９３
女神チーム９０
とある転生チーム８９
狂乱チーム８５
メテンズナイトチーム９３
ドラゴンネイルチーム９２
リリカル仮面ライダーチーム９６
真選組チーム８３
異界戦士チーム９８
リリカル銀魂チーム９４

ヒーローズチームトップ。
現在７ターン目
次のターン・プリティレディィズチーム

シュン！

邪王「ついたぞ」

邪王はユリス、レイヴィス、ベアトリス、ラギーシス（縛られている）、スネーカー、イヴ、レイシア、リルシオンを案内した。
ただ彼らはいつまでもにらみ合っている。
そりゃ敵同士だから。

真王「これで侵入者どもは集まったか？」
邪王「いや、レイヴィス曰くあの変態鬼畜の神がまだだと」
真王「ふ～ん、（試合に出るんじゃないか？）」

プリティレディズターン

リアス「さて、私の番ね」

リアスはブロックを叩いて9を出す。
ペナルティマスだ。

リアス「ガッデムシット！」

リアスはショックを受けた。
そしてモニターが現れる。

『おっぱい揉み魔登場』

その後ストパンの芳佳そっくりの少女が現れた。

リアス「げっ！？ヨシカ！」
銀時「え？知り合い？」
タバネ「ギルド仲間だよ。自分の胸が小さいことにコンプレックスでいつも他人のおっぱいを揉んでくるの」

リアスが少女を見て後ずさり、タバネが少女のことを説明。
確かに原作と同じくらいペッタンコだ。

ヨシカ「作者さんから許可をもらってリアスさんのを一日中揉み放題出来るんですよね？っていうかやらせてください」
リアス「誰がそんな…ていきなりやるんじゃない！ちょ…ダメ！そこは駄目だってば～～！！」
ヨシカ「リアスさん！リアスさ～～ん！！」

芳香はリアスの胸を揉む揉む揉む揉む、リアスは顔を赤くさせて悶える。

銀時「また変態が現れたよ！しかも揉み魔かよ！」
タバネ「芳香ちゃんは誰かれ構わず揉む癖があるからね。ついた二つ名が『おっぱいマッサージャー』だよ」
？？？「これはまた面白い者がいっぱいだね～」
タバネ「ふぇ？」

突然説明するタバネの背後から誰かがタバネの胸を鷲掴みにする。
その人物は真紅のロングで右目が赤、左目が蒼のオッドアイ、そして黒のドレスを着た女性・マダム・アンバリーだ。

タバネ「わぁ～、アンバリー久しぶり～。あのとき以来かな？」
アンバリー「久しぶりだよ。う～んタバネちゃん分補給～」

タバネは慌てるそぶりを見せず懐かしそうに会話する。
ちなみのあの時とは『大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』の『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～　－　第別訓パート４３：悪の科学者って以外と生き延びやすい』からのこと。

タバネ「それにしてもくすぐったいよ～」
アンバリー「フフフ、今度は絶対に負けないロボを連れてきたからね」
タバネ「む？私だって隠れて凄いロボット作ったんだもん！」
Ｄｒドーン「なにお！俺のロボの方が一番であ～る」
レーティア「そこ、何の話し合いをしてんの！」

タバネとアンバリーと便乗してきたドーンが争い合う。
そこにレーティアが突っ込む。

真王「はいはい、次行くよ」

女神ターン

ロム「私が。叩く…」

ロムはブロックを叩・・・こうとして何か思いついた。

ロム「…これ使おう」

ロムは前回手に入れたダブルダイズを使った。
するとサイコロブロックが赤色になった。

真王「ダブルダイズを使ったね？サイコロブロックを2回叩いてください」

ロムはいわれたとおりに叩く。
出た目は7と10、つまり17マス移動できる。
その先はアイテムマス。

真王「アイテムマスだね。好きなアイテムを選んでください」

『トリプルダイズ、ピッタリスイッチ、お助けベル：ミニゲーム
ピッタリスイッチ：バトル
デュエルベル：デュエル』

ロム「…ミニゲーム」

ロムが簡単そうに見えた方を選んだ。

『射ぬけ！アイテム風船割り！』

モニターがあらわれたあとタワーと雲の上のステージになった。
そして空中にアイテムの入った風船がふわふわと浮いている。

真王「では誰が風船に捕まっていくか決めてください」

と真王は一つの風船と弓矢を渡す。
女神チームは相談する。

そして決まったのは、

ユニ「あたしが行くわ」

ユニだ。

真王はユニの体に風船をくくり、弓矢を持たせて空中に浮かせる。

真王「さて、どの風船を割る？失敗したら手に入りませんがね」

ユニ「分かってるわよ……そこ！」

ユニは構えて弓を発射した。

パンッ！

トリプルダイズの入った風船が割れた。

真王「おめでとう、トリプルダイズのゲットです」

ノワール「ナイスよユニ！」

ノワールに褒められて少し嬉しそうなユニであった。

とある転生ターン

リオン「僕らの番だね」

シャリアローゼ「アイテムは使わないの？」

リオン「取っておいた方が役立つかと思って」

リオンはそういいながらブロックを叩いて１０を出す。

ハプニングマスだ。

神「何が出るのかね～」

神がワクワクしているとモニターが現れた。

『ルパン三世参上！』

転生者組「ルパン！？」

まさかのルパンという単語に驚く。
ルパンと言えば世界一の大泥棒の名前だ。

？？？「ヌハハハハ！確かにいただいたぜ！」

と笑い声が聞こえた。
赤い服に猿っぽい？顔の大泥棒ルパンだ。
更に手には誰かさんのトランクスが。

銀時「あ、それ俺のトランクス」
ルパン「でもいらないからやるわ」

と言って銀時のトランクスを放り投げる。

銀時ラバーズ「うがァァァァァァァァァ！！！」

するとなのは達銀時ラバーズが盗り合いを始めた。
そして、

フェイト「よし！銀時のパンツを守ったよ！」

フェイトはボロ着いた状態で勝ち取った。

真王「フェイトは『銀時ラブ変態』の称号を手に入れた」

ズデッ！

真王が不名誉な称号を言われてずっこけるフェイト。

銀時「フェイト…そしてお前ら…そんな趣味が…」

フェイト「ち、違うよ銀時！」

なのは「銀さん信じちゃだめだよ！！」

シグナム「我々は一切そんな趣味はない！」

アルフ「ただその場のノリというか…」

リインフォース「決して下心などは…」

猿飛「じゃあ銀さんのトランクスは私が…」

ラバーズ「テメェは持って行くんじゃねぇ！！」

ジト眼でにらむ銀時にラバーズは否定するが、猿飛だけは真症の変態だった。

狂乱ターン

ヴィータ「よし、あたしの番だぜ！」

ヴィータはブロックを叩いて5を出す。

ボーナスマスだ。

ヴィータ「よっしゃぁぁぁ！！」
はやて「ようやったでヴィータ！」

ヴィータとはやてと狂乱チームは喜んだ。
モニターが現れる。

『鳥さんからのプレゼント』

するとコウノトリが袋を持ってやってきた。
中身はトリプルダイズだった。

はやて「なんやこれ？これだけかいな…」
桂「何を言う。このアイテムがあれば逆転のチャンスなのだぞ八神殿」

はやてはぬか喜びするが桂が押さえる。

メテンズナイトターン

レオン「さて、どんなものを出してくれるのか？」

レオンはブロックを叩いて9を出す。
それはイベントマスだ。

レオン「どんなイベントだ？」

モニターが現れた。

『アイテム錬金術師・がすと』

???「そこの方々～、ちょっと寄ってみるですの～」

と声が聞こえた方へ向くとウサギ?の着グルミ?に分厚い手袋の少女がいた。

チフユ「お前は?」

がすと「がすとですの」

ネプギア「がすとさん!お久しぶりです!」

がすと「ん?わ～、皆さんお久しぶりですの～!」

どうやらネプテューヌ達は彼女と知り合いらしい。

なのは「誰なの?」

ネプテューヌ「がすとちゃん、ああい見えて錬金術師だって」

ジャンヌ「え?魔方陣出して何か生やす奴?」

真王「そっちじゃねぇよ。アイテムを合成して作る方だよ」

ネプテューヌがすとの紹介をし、ジャンヌが錬金術について何か勘違いをして真王が訂正させる。

がすと「え～と、調合A(ダブルダイズ)と調合B(トリプルダイズ)を組み合わせて…」

するとがすとは2つのアイテムをつぼに入れて調合を始めた。

ボンッ!

がすと「完成ですの～」

と5つの白銀色のサイコロブロックになった。

ギルシア「おお、スッゲェアイテムじゃねぇか」

ギルシアはそういいながら取ろうとするとがすとはサッとしまう。

がすと「先に料金支払うですの。はいこれ」

がすとは値段の書かれた電卓をわたす。

カイム「高ェェェェェェェェェ！！！」

ギルシア「んあだこりゃ！？０いくつあるんだよ！」

それはあまりにも高額だった。

がすと「これだけ凄いものですから当然ですの」

女神組とメーカー組「そこだけは相変わらずだね（ですね）（ね）…」

がすとの金がめつい性格を知っている彼女たちなのであった。

チフユ「これで足りるか？」

とチフユがトランクケースを一つ出した。

なかは1万の札束いっぱい。

がすと「え？」

がすと含め他の人（メテンズギルドは除く）も驚く。

銀時「ちょっと待て待て待て。その大金なに？」
チフユ「ちょっと社員（バカ）どもに頼んどいたらな」
銀時「イヤイヤイヤそうじゃなくて、お前一体どうしたの？」

大金を用意できたチフユに銀時が問うと答えた。

チフユ「じつは、社員勧誘という広告を見てな。暇つぶしで入ってみてなんやかんやっていたらいつの間にかその会社の社長になっていた」
なのは「なんやかんやって何!?しかも立った1日で社長ってすごくない!?」
チフユ「いや、正確には食品、企業等の会社の総社長になっていたということだな」
全員「尚更凄すぎるだろ!!?」

チフユはある意味超人であった。

まぁ取り合えず『スペシャルダイズ』を手に入れた。
がすとは「どうせならがすとダイズにするですの」と言ってきたが真王が否定した。

ドラゴンネイルターン

夜帝竜「さあ～て、そろそろ出番だな」
真王竜「もう出番だよ」

夜帝竜はブロックを叩いて１０を出す。

夜帝竜「さっきと同じか」

イベントマスを見て言う夜帝竜。
そしてモニターが現れた。

『車に轢かれた』

キキキーーーーー！！！ドガッ！

夜帝竜「オゴアッ！！」

夜帝竜が車にひかれた。

ドラゴンネイルチーム「夜帝竜ウウウウウウウウウウウウウウウ！！！」

ドラゴンネイルチームはまるでドラマのように（ふざけて）演じる。

銀時「作者、早く進めろ」

・・・しかたない。分かったよ

リリカルライダーターン

アリア「わたしのターン」

アリアはブロックを叩いて9を出す。
何とそれは4人のプレイヤーが書かれたマスだ。

真王「それはパーティマス。チーム同士の戦いが始まりますぜ？」
邪王「まずはこいつな」

邪王はモニターを出した。

『４人対戦：生き残れ！ぷかぷかアイランド

ネプテューヌＶＳジャンヌＶＳ咲夜ＶＳアリア』

ネプテューヌ「ご指名付きだね」
ジャンヌ「へ～、負けてられないね」
咲夜「ユーく～ん、私頑張るよ～」
アリア「にゃ～、頑張る…」

４人はやる気満々だ。

真王「そんじゃ頑張ってください」

真王はパチンと指を鳴らすとステージが変わった。
ぐらぐらと揺れる浮島がポツンとあり、４人はそこにいる。

ネプテューヌ「おっとっと・・・」
ジャンヌ「揺れるねここ…」
咲夜「落ちたらアウトね～」
アリア「・・・」

ぐらつく浮島にバランスを取る４人。

ドーン！

４人「わっ！？」

突然大砲の音と同時に水しぶきが上がり、浮島が傾く。
遠くで船が大砲を撃ったからだ。

真王「落ちないように気をつけろよ」

真王から助言をもらう。
船から発射される大砲からどんどん撃ってきて水しぶきが上がり、その水しぶきから出来る波で浮島が傾いてバランスが崩れやすくなる。
すっ転んだり落ちそうになったり浮島に大砲があたったり衝撃で体がすくんだり・・・。
やっとのことで時間内に全員耐えた。

真王「おめでとう。４チーム１０マス進めるよ」

剣聖チーム、女神チーム、プリティレディズチーム、リリカルライダーチームは１０マス進みました。

真選組ターン

土方「山崎、行ってこい」
山崎「ハイ」

山崎はブロックを叩いて４を出す。
ペナルティマスだ。

土方「山崎ぃぃィィィィィィィィ！！！！！！！！！！」
山崎「ギャアアア

セレスと女性・イシュタルは離れる。
セレスの近くに体中ボロボロの少女がいた。
しかも右腕がもげて機械が露出している。

セレス「君は？」
レルシア「わ、私はレルシアです…」
エール「これはひどい…」
勇華「こう言う機械に詳しい人がいれば話は早いけど…」

少女レルシアの状態は深刻だ。

イシュタル「ふん、そんな人物なぞいるわけがあるものか」
真王「こっちにいるぞ」

イシュタルは否定するが真王がそれを否定。
その人物とは…

タバネ「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃ～ん♪」
アンバリー「さて、改造されたい子は何処かな？」
ｄｒドーン「君がなのであるか…」

何とマッドトリオだった（笑）。

タバネ「さてさて準備準備」
アンバリー「ドリルでしょ？ハサミでしょ？メス、クリップ、トンカチ、チェーンソー、のこぎり…」
Ｄｒドーン「確か機械用はこちらに…」
レルシア・イシュタル・エール、コヨリ、メア、セレス、奏（あれ？地の文のツッコミは？）

地の文を突っ込まない3人に突っ込む上記7人。

タバネ「そ・れ・じゃ」

タバネ・アンバリー・ドーン「治療（オペ）を始めようか」
レルシア「え、ちょママママママ待ってきゃあアアア

レルシア「いらんわこんなおまけ！！」
？？？「そうだよ！誰も欲しがらないよこんなの！」
レルシア「ん？」

レルシアは隣を見た。
外見は男の子に近いがれっきとした少女でレルシアと似た雰囲気がある。
そしてレルシアはこの少女を見て信じられない顔をしていた。

レルシア「・・・エル？」
エル「あ・・・えっと」
イシュタル「む？貴様は妾が破壊したはずの小娘！」
エル「お久しぶりですね。しかし、ドーンさんのおかげで私は生きながらえたのです」

強い目でイシュタルを睨む。
イシュタルは腕を組む。

真王「さて、イシュタルとの対決になったな」
セレス「彼女と戦うのか？」
イシュタル「む？」

セレスが聞くとイシュタルが耳を傾ける。

真王「対決するのはセレス、レルシアとエル。そして助っ人として彼も連れてきた」
？？？「うむ、よろしく頼む」

真王の後ろにヴァルバトーゼがいた。

セレス「？・・・間違ってたらごめんだけどもしかしてヴァルバトーゼかい？」
ヴァルバトーゼ「そうだ」
イシュタル「なんと！？『鮮血の絶対悪』『血染めの恐怖王』あの暴君ヴァルバトーゼか！」

どうやらイシュタルはセレスはヴァルバトーゼを知っているらしい。

ヴァルバトーゼ「貴様はなに者だ？」
イシュタル「妾はイシュタル・ヴァジスゲイド。暴君ヴァルバトーゼ！まさか貴殿のような大物とあいまみえるとは思わなかったがの！」

イシュタルは少々興奮状態だ。

ヴァルバトーゼ「イシュタル？さて、聞き覚えがある様な…」
フェンリッヒ「別魔界で魔族の大将をやっていた奴です。その実力は一流魔王５人が出ようが返り討ちにされると言われています」

いつの間にか後ろから現れたフェンリッヒが説明する。

イシュタル「フフフ、まさか魔界の英雄たる存在と対峙することになるとは…」
セレス「いやいや、暴君と共闘とは世の中は広いな…」

セレスはやれやれな感じになる。

イシュタル「暴君ヴァルバトーゼ！貴様を倒せば妾は貴様を超える存在となる！」
ヴァルバトーゼ「いいだろう！俺達の絆と、イワシの力を見せてく

れるわ！」
フェンリッヒ「閣下、イワシは力に入れないでください」
やっぱり根本的にずれているヴァルバトーゼに突っ込むフェンリッヒであった。

・・・次回にバトルシーンを回すのでリリ銀チームのターン。
銀時「そうだよ。出番ないまま終わっちゃ意味ねーだろ」
なのは「メタはいいとして、いこうか」
銀時はブロックを叩いて8を出す。
イベントマスだ。
新八「どんなイベントが起こるんでしょうか…」
新八が不安がっているとモニターが現れた。
『バスに轢かれた』
キキーーーーーー！！ドゴシャ！
リリカル銀魂チーム「タラバッ！」
リリカル銀魂チームはバスに轢かれた。

ネプテューヌ「銀さ～～～～～～～～～～～～ん！！！！！！！」

ネプテューヌは叫んだ。
見ている人たちは大丈夫かと不安になった。

真王「さて、他の奴ら出してやるか」

パチン

？？？「どわぁぁ！！」

真王が指を鳴らすと沢山の人が出てきた。
ほとんどが邪王が捕まえて得来た人たち。

真王「お初にお目にかかります。私は真王、『夢の創造者（ドリームクリエイター）』でございます」
ラクージス「へぇ～」
アギス「創造者（クリエイター）？何か作れんのか？」
真王「もちろん、たとえばこのドラゴン」

真王はドラゴンを創造した。

真王「さらにホーリーナイトを出し、そしてこのオリハルコンを融合させると…」

白い騎士のホーリーナイトを出し、さらに超堅い鉱物のオリハルコンで融合させる。
そして完成したのは騎士の雰囲気を出すマスタードラゴンナイトに

なった。

真王「これが私の能力、森羅万象を創造するのです」
ベアトリス「創造…？」
真王「そう、でだ・・・あれは？」
龍？「ぐがァァァァァァァ！！！」

真王の見る先には巨大な竜がいる。

セリア「マスター！！心をお沈めください！マスター！！！」
真王「マスター？」
レギス「そう言えばこいつドラゴンになったんだったな…」
真王「そうか。なら彼にまかせよう」
邪王「よんだか？」

セリアが必至にドラゴンに向かってマスターと呼んでいる。
セリアの言うマスターとはカイン・アーベルジュのこと。
彼はドラゴンになって暴走しているらしい。
そんな時真王が邪王を呼んだ。

真王「彼を…分かるネ？」
邪王「龍化ね、すぐに済ませようか」
カイン（ドラゴンモード）「アアアア

何と邪王は素手でカインを殴った。

邪王「テメェのふざけた幻想をぶち殺す(コワ)！無に帰る異常(チート・ザ・ゼロ)」

ジュッ！

カイン「・・・・・ハッ！おれは一体？」

セリア「マスター！」

邪王がいった瞬間カインがドラゴンから（強制的に）人間に戻した。

真王「これが彼の能力、森羅万象を破壊する『混沌の破壊者(カオスブレイカー)』」

邪王「表の存在のこいつ（真王）は創造し、裏の俺が破壊する」

真王と邪王を見ている彼らは思った。

勝てる気がしないと…。

真王「ふ、物語は後半に入ったばかり…我が手に書くシナリオは我が創造力によって動く。テメェらのような三流が勝手なシナリオを変えてもらっちゃ困るな…。チート・ザ・ハード」

チート・ザ・ハード「ハイ、我が主」

真王は真紅のロングのネプテューヌ達の様な守護(ハード)女神のような雰囲気を出させる女性を呼ぶ。

女性が現れた瞬間カイン達や極神たちの力が大幅に下がった。

真王「暴れ出さないように見張っとけ。さて、みんなのうち誰が優勝するのかな？」

真王はパーティするチーム達を見て言うのだった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リオン「はじめまして、リオンです」

シャリアローゼ「シャリアローゼよ」

邪王「俺のお気に入りに奴らだ」

銀八「あっそ。ペンネーム『月光閃火』から行くぞ。『ども…月光閃火だ。

ふむ…俺はどちらかと言えば『ボーイッシュな娘』とか『ツンデレっ娘』が好みのタイプかな。

輝刃「…しっかり律儀に答えたな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．銀時ラバーズに質問…もし自分の中の人と同じ声の女性キャラが銀時の事を好きになったら、どうする？

うわぁ…何ともハプニングマスに組み込まれそうな質問だなぁ…（汗）。次は俺からだ。

2．フェイトに質問…ボーカロイドのコスプレに興味あったりする？

輝刃「…何となくだが、初音ミクとか廻音ルカのコスチュームが合いそうだな…（汗）。」

だな…。んでもって、ヴァイスとかグリフィス辺りがＫＡＩＴＯのコスチュームとか合いそうだよ…。』えっと・・・」

銀時ラバーズ「全力で殺す！！」

リオン「物騒なこと言っちゃったよ！！」

フェイト「言えないです（純粋にきっぱり）」

邪王「おいおい…『月光閃火』廊下に立て」

リオン「えっと、次はペンネーム『鳴神　ソラ』さんです。『マリオ「いや～色々と思い出すな」

タレ銀「何で…赤屍さんかな…（涙）」

明久「ドンマイです；」

カザリ「それにしてもチルノ、小さくなってたね」

リュウケンドー「というか元に戻ってたな」

チルノ「くやしいな…」

レヴィ「次はどうなるかな～」

ルイージ「質問『エリアのハプニングの元ネタはマリパですか？』」

銀次「なのはちゃん達に質問『赤屍さんを見た感想はどうだった；』」

クッパ「質問なのだ『スバル達は集まった人たちについてどう思うのだ？』」

次回を待ってます！』順番に答えるよ。作者はマリパを模しているって」

なのは達「なんか寒気がした…」

邪王「なんせドクタージャッカルだな。次」

スバル「凄い人たちだなぁ…」

ティアナ「少し見た目で判断してたみたい…」

エリオ「凄い人たちですね…」

キャロ「わ、私も…」

シャリアローゼ「ハイじゃあ『鳴神　ソラ』は廊下に立ってなさい。次はペンネーム『なめ猫』よ。『俺「ねぷねぷ達のいないゲイムネプテューヌなど…！そんななめ猫な俺らです」

ラムザ「早く余波から抜けなよ…；」

俺「勝負はまだまだこれからといった所ですが、同時に真王さんと邪王さんの話も進んでますねぇ」

ラルム「今回の結末は…というか、ＭＶＰは誰になるんだろうね？」

ラムザ「銀さん達かなと予想するが…またオリキャラになるんだろうか？」

俺「んー…まだまだわかりません」

質問（運動会ネタ）

ネプテューヌとネプギアへ

「二人一緒でどんな種目に出たい？」

アリアへ

「ネプテューヌに送る応援歌またはエールはどんなのにしたい？」

真邪王（真王さんと邪王さん）へ

「やらせてみたいプログラムってあります？」

俺「以上」

ラムザ「運動会かぁ…運動会といえば、やっぱりあのプログラムかな」

俺「うむ。ブルマはぁはぁブルマはぁはぁ……（´Д`）」

ラムザ「いや違うだろ…；」
ラルム「…あきれられても知らないよ?…；」』」

ネプテューヌ「パン喰い競争！」

ネプギア「二人三脚ですね」

アリア「ネプテューヌさんにエールを送るため…チアガールになって全力で応援します！」

真王「こう見えて彼女踊れる経験あるんだもんな。ちなみに私は球入れ」

邪王「障害物競走だぜ?」

シャリアローゼ「そんなわけで『なめ猫』廊下に立ってなさい」

真王「次、ペンネーム『フリーダム』さんの質問だ。『Sフリーダム「アイテムとかもちゃんとあるんだな」

∞ジャスティス「クッパが逃げる所まで、再現してるしな」

デスティニー「しかし、近藤達もついてねぇな…」

レジェンド「確かにな…とりあえず、質問といこう…」

全員に
直接戦いたくないチーム又は人物は?

真王様・邪王様に
今回の参加チームの中で一番弄りがいがありそうなチームは？

アカツキ「何だか色々と大変だな」

更新楽しみにしてます』」

全員（一部除く）「ユウカ／勇華さん」

真王「超人無敵とドSだからな。後特に」

真王・邪王「真選組がいいな…♪」

リオン（この人たち実はサド属性!?）

真王「なんか失礼なこと言われたが『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『支配者』さんだ。『ガレーナ強過ぎ…ブロリーに圧勝なんて本来ならありえませんよ？

まぁ…質問です

ゲストの皆さんに質問
自分達の中で一番強いのは誰だと思ってますか？

沖田に質問
誰と組んで土方の命を狙いたいですか？（黒笑）

ではこの辺で」』多分みんなはあの神か勇華だと思うな」

沖田「ユウカと土方さんを亡きものにしまさぁ」

真王「毎度のパターンだ。『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

シャリアローゼ「次、ペンネーム『ウィンド』よ。『リア「コヨリ大丈夫かな……？」

ウィンド「大丈夫じゃね？エールに看病されるなら本望だろ」

リア「そして俺はネロ・アンジェロを倒しました（「▽-）b」

ウィンド「書いてて思ったけどチートにも程があるだろ……」

リア「次はダンテと会うぞ」

ウィンド「ネタバレやめれ」

リア「ネタバレ？なにそれおいしいの？」

ウィンド（駄目だこの神。なんとかしないと）

リア「質問いくか。勇華に。セレスとの子供は何人ほしい？」

ウィンド「真王さんにリクエスト。バトルマスでフランとレミリアって出せますか？」

リア「返答よろしく」

ウィンド「もしかしたらリアのプロフィール出すかもしれません」』

勇華「何人でも？」

銀八「うわなんかむかつく…。『ウィンド』さん。廊下に立ってなさい」

リオン「えっと次はペンネーム『ケン』さんです。『先程バトルマスに入れるキャラをメッセージで送りました。僕の作品で出てくるのはまだ先ですが・・・

ダイチ「・・・・・・・」

ガクガクブルブルと震えている。ユウカの制裁が恐ろしいからだ。

タイガ「見つけたぞぉ！！リュウ！！」

ダイチ「げっ！！タイガ！！」

タイガ「そして裁きを受けろぉ！！！！」

突然現れたタイガがダイチの襟を掴みユウカの方へ投げ飛ばした後消えた。

統夜「ダイチ・・・死んだな・・・」

遊輔「自業自得だ・・・」

統夜「そうだな・・・さて・・・」

質問するかね。参加している貧乳党へ・・・貴方達はネプ銀パーティに参加している巨乳人を見てどんな感じですか？嬉しいですか？それとも嫉妬で一杯ですか？（黒笑）

統夜「おいおい・・・銀魂メンバーとリリカルメンバーへ質問だ。俺の蒼炎をどう思う？」

龍華「楽しそうなパーティですね。妹達も誘いたかったです・・・お父様とメアリお母様、シャルお母様、咲夜お母様・・・検討を祈

ります」

腰まである金髪に蒼い瞳をしはやてに似た顔立ちをした女性がぺこりと頭を下げた。

今回は実戦訓練にて大の字に倒れている遊輔とはやての二人、真祖形態の統夜がレオンとユウカに挑んでいるイラストをプレゼントです。』」

ペッタンコ組「ムカつくんだよこんちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

真王「チートものだと言ってたね。『ケン』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒龍』さんだ。『黒龍「ソラ達は何事もなく、順調に進んでますね」

リリス「まぁ、酷い目には遭っていませんし、文句はないですね」

ソラ「そうだな」

アリス「他のチームは波乱だがな（黒笑）」

アリア「にゃ～…」

銀時「でもよ、あの真王の事だ。なにかやる可能性は否定できないよな」

リリス「ふ、不吉な言い方しないでください…」

黒龍「これからどうなるか見物ですね。じゃあ質問します」

1．なのはに質問。銀さんと一緒のチームになれた言について一言お願いします。

2．邪王に質問。少しはその歪んだ性格治したらどうですか？

黒龍「今回はここまでです。次回を楽しみにしています」『」

なのは「とっても嬉しいよ！」

邪王「悪いがこれが俺の性格だ」

真王「そう言うこった。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

第百訓：町はいつも安全とは限らない（後書き）

真王「次回は決闘にふさわしいエリアでスタート」

邪王「次回『荒れ地では決闘が定番』テイクオフだ」

舞台裏の滅茶苦茶話（前書き）

真王「１００話突破記念として投稿だぜ！」

舞台裏の滅茶苦茶話

神「“神様の舞台裏”。略して“カミウラ”ッ！！　はっじめるよぉぉ「待て違うわボケっ！！」・・・ってなんだよ？」

真王「なんだよじゃないよ。最近出番がないからと言って勝手にしゃしゃり出るのは駄目だぞ」

神「黙らっしゃい！俺様はリィーンからのゲストなんだぞ！」

真王「はぁ・・・まぁいいや。そんなわけでこのコーナー１００話突破記念（おまけ物を入れて１２３はある）として『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～』の舞台裏話などやっていただくコーナーである。そんで本日のメイン達の登場！」

シュウウウウウウウ！！！！

銀時「どうも～、主人公の坂田銀時で～す」

ネプテューヌ「ヒロインのネプテューヌで～す」

真王「そして自己紹介が遅れたが私は『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～』の作者である真王です。そして後ろにいる方々はその他」

全員「おいっ！！」

真王「うそうそ、『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～』に登場した方々です。けど数が多すぎるので省かせていた

だきます」

なのは「それもどうかと思うけど…」

真王「でもまぁここまで登場したキャラクター達を出しましょうか」

銀魂：銀時、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、源外、猿飛、近藤、土方、沖田、山崎、屁怒絽、高杉、仁蔵

リリカルなのは：なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、アリシア、ヴィヴィオ、クロノ、ユーノ、スカリエッティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セッテ、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディ、オットー、ディード、アリサ、すずか

超次元ゲイムネプテューヌ：ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、イストワール、マジェコンヌ、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、ケイ、ミナ、チカ

リトルバスターズ：理樹、恭介、鈴、真人、謙吾、小毬、来ヶ谷、クド、葉留佳、美魚

Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！：ゆり、音無、奏、日向、直井、ユイ、松下、高松、野田、藤巻、大山、ＴＫ、椎名、岩沢

スプラッターハウス：リック、ジェニファー、デイビット

コープスパーティ：哲志、直美、世以子、良樹、あゆみ、繭、サチコ、遼、雪、時子

ＷＯＲＫＩＮＧ！：宗太、ぽぷら、まひる、八千代、相馬、相馬、杏子、葵

魔界戦記ディスガイア：ラハール、エトナ、フロン、プリニー、カーチス、アデル、ロザリンド、マオ、ラズベリル、アルマース、サファイア、ヴァルバトーゼ、フェンリッヒ、フーカ、デスコ、エミーゼル、アルティナ

東方：レミリア、咲夜、紫、勇儀、萃香

オリキャラーズ：リリス、ミーニャ、アルラ、アイシー、ファルコリア、ランドル、シャチール、メーティア、バーニン、ＶＩＶＩ、イリス、シグマ、ミサカ、エルダー、ネリア、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イッセー、カイム、アンヘル、レオン、ユウカ、ナリア、タバネ、ガレーナ、レシア、ヤルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、チフユ、マナ、タマネ、リリン、レムナ、アリエス、ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート、シナ、リル、プリア

ゲストキャラズ：グレイ、ビビ、神、レヴェッカ、リオン、シャリアローゼ、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、エール、コヨリ、メア、セレス、真王竜、黒鎌竜、白天竜、光翔竜、魔炎竜、氷刃竜、ソラ、リリス、アリス、アリア、セイバー、ライホース、統夜、達哉、遊輔、相川（咲夜）メアリ、勇華、奏

真王「以上が本編に出た方々です」

ビビ「こ、こんなに出てたんだ…」

真王「ハイ頭が混乱しそうなほど出てました」

ジャンヌ「それオーバーよ」

真王「あっそう、それじゃあまずこれから行ってみようか」

～真王の姿（プロフィール）～

真王「ハイ作者である私のイメージ姿、というがプロフィールですね」

ネプテューヌ「とりあえず早く見せてよ」

真王「待てって、それじゃあこいつだ！」

～真王～

髪：蒼のショート

目：黄色
服：ニードレスのアークライトの服を青くしたイメージ
年齢：？？？
体重：？？？
性別：♂
種族：作者、夢の創造者（ドリームクリエイター）
魔力光：？？？
好き：漫画、アニメ、ゲーム
嫌い：面倒事、非常識、不幸な主人公
性格：基本優しいが怒ると怖い
レベル：不明
得意武器：全部
スキル：作者の威厳（味方キャラの数によって能力上昇）
夢の創造者（ドリームクリエイター）（森羅万象を創造する）
詳細：『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～』の作者。容体は少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を青くしたイメージ。作品の中では最強と言われている。

真王「いかがかな？」

ジャンヌ「いかがかな？ってなんかこったプロフィールね…」

真王「キャラ作りに凝って何が悪い？」

レーティア「そ、それもそうね」

真王「あ、それからもう一つプロフィール」

～邪王～

髪：真紅のショート
目：紅色
服：ニードレスのアークライトの服を赤くしたイメージ
年齢：???
体重：???
性別：♂
種族：裏作者、混沌（カオスブレイカー）の破壊者
魔力光：???
好き：漫画、アニメ、ゲーム
嫌い：面倒事、非常識、不幸な主人公
性格：ちょっと頭のネジが外れている？
レベル：不明
得意武器：全部
スキル：作者の力（倒した数によって能力上昇）
混沌（カオスブレイカー）の破壊者（森羅万象を破壊する）
詳細：『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～』の作者の裏の存在。容体は少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を赤くしたイメージ。ノクターンの存在だと思うが…。

真王「はいこんな感じ」

ネプテューヌ「って邪王って誰！？」

邪王「呼んだか？」

ネプテューヌ「ってうわぁぁ！！作者そっくりの奴が出た！！」

真王「こいつがノクターンノベルズの…」

邪王「邪王様だ！！良く覚えとけ！」

真王「まぁいろいろあるが、裏話というわけでアンケートを…というか案を取りたい」

全員「案？」

真王「そう、いわばテコ入れのようなやつだ」

神楽「なら簡単アル！私に任せるヨロシ」

真王「期待できんがな」

神楽「聞けよ！これが私のストーリーね！」

寒い寒い冬の果て、一人の少女は孤独に生きてきた。

男（銀時）「何やってんだお前、風邪ひくぞ」

少女は男の誘いに乗り、少女は周りにいる人たちとともに少し優雅に生きてきた。

ガシャン！

大臣（近藤）「烏丸王国から宣戦布告だと！？」
女騎士（レオン）「総動員態勢だ」

だが現実は非道だ。
激しい戦いの中で何もかもが失ったのだ。

？？？（パープルハート）「失ったなら見つけるしかない。自分が生きるための道を」

私は旅立つ！そして自分に自由をつかむため！

『カグランジャスティス』今ここに幕を開ける！

真王「没だバカ野郎」

神楽「なんでネ！いい話だったろ！」

邪王「自分が主人公になりたいの願望が駄々漏れなんだよ。次」

桂「よし、俺が一肌脱いで案を…」

真王「『カツラップ』～最後の晩餐～だろ？」

桂「ぬ！言われた！」

真王「行動がよく読めるわ。次」

レーティア、ギルシア「はい！」

真王「夫婦か。Ｒ１８はあまりよろしくないぞ」

レーティア「失礼ですね。私たちだって考えてきたんですよ。こんな感じに」

深夜の家の部屋

男と女が全裸で――――

邪王「そのネタはノクターンでやるがな…」

レーティア「・・・いい案だと思ったんだけどな～」

ビビ「ハイハイハイ！次私！」

真王「さて、どんななのはネタを使うんだ？」

なのは「私のネタは決定なの！？」

ビビ「聞いて驚きなさい！これが私の案よ！」

ある一軒家、そこに一人の女性が１００分の食事を出していた。

女性（ビビ）「みんな～、御飯だよ～」

子供たち（なのは）「なの～！」

ドドドドドと１０１人なのはちゃんがぞろぞろと――――

銀時「ちょっとまてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ビビ「なによ。人がせっかく作った案に邪魔するわけ？」

銀時「邪魔するも何も１０１人なのはちゃんって何！？１０１匹ワンちゃんのパクリかい！！」

真王「そんなネタ作りたい」

銀時「作るなよ！銀女神鎮魂歌がダメになっちまうだろうが！！」

真王「うっさい。そういう銀時は案でもあるのか？」

銀時「おう、レインと考えてみたんだ」

レイン「そうだ。これを見とけ」

『第一回、キングパフェ早食い競そ――――

真王「そんな事だろうと思ったよ…」

銀時「んだよそりゃ！」

レイン「ちょっとあれだな」

邪王「ほかにないか？」

咲夜「は～い」

邪王「ユーノラブ咲夜ちゃん、どんな案だ？」

咲夜「それはね～」

父（ユーノ）「ただいまー」

母（咲夜）「御帰りなさいあなた」

男が会社から帰ってきた。

母（咲夜）「あなた？今日もやらせて？」

父（ユーノ）「はは、またかい？飽きないね咲夜って」

そして真夜中２人の肌が重なり合って――――

邪王「おっとすまんがカットだ。１８禁報告されたくないからな」

咲夜は少し名残惜しそうだ。

チカ「なってないですわ皆様、ここはわたくしが一枚肌を脱がねばなりませんわね」

真王「さりげなく名乗り出たがどんなだ？」

チカ「こちらですわ」

井懸面学園

イケメン男「お嬢様、マッサージいたします」

イケメン男「お嬢様、キスをしてもよろしいですか？」

イケメン男「お嬢様、あなたに抱きます」

お嬢様（ベール）「うふふ、これが私の世界ですわ」

銀時「なんでだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!なんで支配エンドなストーリーだよ!!逆ハーレムつくんなよ!!」

チカ、ベール「チッ」

真王「舌打ちスンナ。次」

サチコ「は～い、私がやるよ～」

テレビが一台、何気なく一つのビデオを入れる。
最初は雑音が出るも、森の中に井戸の映像が映る。
その井戸の中から長い黒髪と赤い服の少女が這い上がる。
そしてどんどん近付いて行き、…テレビから出てきて、

？？？（サチコ）「アソボウヨ？」

銀時「やめろよぉぉぉぉぉぉ!!!ザ・リングはいやだって言ってるだろぉぉぉ!!あれ絶対トラウマもんだろうが!!!怖くねぇけどな!!」

サチコ「え？じゃああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っていう四つん這いで移動する女性に…」

銀時「それもいろいろとアウトだろうが!!」

サチコ「男の子はプリアちゃんが…」

銀時「聞けよ!!」

サチコ「じゃあこれはどうかな？」

チャンチャンチャンチャンチャンチャンチャンチャン♪（死の着メロ）

アイエフ「何よこの音？」

コンパ「アイちゃん取っちゃだめです！！」

むなしくアイエフは開いた。

ズゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾ！

見てはいけないものを見た。

全員「あ゛！゛！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

真王「やれやれ、やりすぎはだめだよ」

全員を回復した。

真王「それじゃあ裏話はここまで」

全員「またね～（な）（じゃあな）（バイバ～イ）（さらばだ）（さよならです）」

舞台裏の滅茶苦茶話（後書き）

次は紹介をやろう。

投稿キャラズ（前書き）

真王「『カーバンクルＥＸ』さん、『ヴァーラガルザ』さん、『ケン』さん、が投稿してくださったキャラ達です」

投稿キャラズ

～エクセリオン・ツァラトゥストラ～

髪：銀のショートヘアー
目：基本は緑（邪眼使用時は赤）
服：黒いローブ
年齢：見た目２５歳、実年齢１億歳
体重：５４？
性別：♂
種族：神に近き人間
魔力光：白と黒
好き：人の希望を打ち砕くこと、人の血
嫌い：正義、希望、友情、可能性
性格：冷酷で残虐
レベル：５３０００００００
得意武器：終焉の剣『カタストロフィー』、絶望の杖『メフィストフェレス』
スキル：邪眼（邪眼で見た相手のパワーを全部吸収する。）
詳細：別次元の世界を破壊しまくる破壊者。かつて普通の一般人だったが、ある日、人類抑制政策のために政府の手によって家族が殺され、その憎悪から覚醒、自分の世界を破壊してしまった。その時から世界そのものを憎むようになってしまった。今は世界の破壊を快楽としている。

～アスモデウス・オーガニクス～

髪：黒色で短い
目：赤
服：アダム・アークライトの服を黒くした物
年齢：２７歳
体重：７０？
性別：♂
種族：神に近い人間
魔力光：金と紫
好き：強者と戦うこと、ストロベリーサンデー
嫌い：面倒事
性格：神威（銀魂の）＋ダンテ
レベル：測定不能（測ろうとしたら計測器がぶっ壊れた）
得意武器：魔剣『エベス・ローグ』
スキル：アークス（相手の全てを見ただけで知る。攻撃パターンも同じ）
詳細：次元を移動して商売する何でも屋。依頼人によっては殺人の行うことも。訪れた世界の強者と戦うことが趣味。

特殊技

ゼグ・ウェド：相手が強いほど束縛力が増す鎖

リガ・バウーガ：ガード不能の衝撃波

コントルア・ハルジェーズ：相手の能力をコピーする

人世界・終焉変生（ミズガルズ・ヴォルスング・サガ）：アスモデウスがとあるゲームのキャラの技そのまんま覚えた技、その拳に触れたものが誕生して一秒でも時間を経ていたものならば、物質・非物質を問わず、たとえ概念であろうともその歴史に強制的に幕を引く（破壊する）、防御が絶対不可能な

一撃必殺の力。

死世界・凶獣変生（ニブルヘイム・フェンリスヴォルフ）：これも同じくアスモデウスがとあるゲームのキャラの技そのまんま覚えた技、どんな速度や行動であろうと必ず誰よりも速く動くことができ、相手の後手からでも先手を追い抜く絶対の最速の力であり、それゆえ誰にも触れることができない捕捉不可能の絶対回避の力。

焦熱世界・激痛の剣（ムスペルヘイム・レーヴァテイン）：またまた同じくアスモデウスがとあるゲームのキャラの技そのまんま覚えた技、逃げ場の一切ない砲身状の結界に対象を封じ込め、内部を一分の隙間もなく焼き尽くす回避不能の絶対必中の攻撃を放つ力。

～レギス・アスタロス・トバルカイン～

髪：黒
目：紫
服：黒い学生服（元居た世界の学校の物）
年齢：１６歳
性別：♂
種族：魔を統べし王
魔力光：黒
好き：ユリナ（自分の居た世界に居た彼女。）
嫌い：？？？
性格：ルルーシュっぽい？
レベル：８６９０００
得意武器：魔剣『レーヴェ』
スキル：邪神の門（自分の命を削って自分の体に邪神を宿らせて力

を得る。ただし使いすぎると自分の体が邪神に取り込まれてしまう。）

詳細：異世界を渡り歩く存在。かつて住んでいた元の世界にユリナと言う恋人がいたが、ある日宇宙人から地球を守るために米軍に生け贄として彼女は殺されてしまう。（彼女の能力の危険性を知った政府の上層部のせい）彼はそれに絶望し、自分が住んでいた世界を自分の手で破壊した。その後彼はどこかへ消息を絶ったはずだったが・・・。

～ユリナ・ゼルニース～

髪：蒼の短髪
目：蒼
服：『ブレイブルー』のノエル
年齢：１６歳
スリーサイズ：何故か蜂の巣に・・・
体重：なぜか蜂の巣に・・・
性別：♀
種族：能力者
魔力光：蒼
好き：レギス、詩を書くこと（人には絶対に見せない。）
嫌い：虫（特に足が多いもの）
性格：事を冷静に把握する知性も持ち合わせている。が、端的に言ってしまえば天然ボケ。
冷静さを装っているが、実は人見知りで寂しがり屋な一面を持つ。
レベル：６９３００
得意武器：双銃『レピウス』、銀槍『フレイズ』
詳細：元政府の直属の能力者。レギスとは潜入任務の時に知り合っ

て恋人関係になった。ある日地球に宇宙人が襲来、ユリナはレギスやみんなを守るために日本軍の命で宇宙人を迎え撃つことに。しかし休憩中にある男を見つけ捕まえようとするが、逆にやられてしまい、その男のせいで別世界へ飛ばされてしまう。別世界に飛ばされ瀕死状態の彼女は、意志が有り言葉も喋る石『アーク』に助けられる。その後彼女はその石と一緒に暮らすことにした。戦闘以外の才能は壊滅状態で、こと料理に関しては殺人的な腕前。

～アーク～

髪：なし
目：なし
服：なし
年齢：一京歳
体重：一トン
性別：♂
種族：石
好き：女（特に巨乳）
嫌い：面倒事
性格：オヤジっぽい、真面目なときは真面目
レベル：１０００００００００００（でもすごいのは防御力のみ）
得意武器：なし
スキル：史実投影（全ての平行世界の歴史を動画にして見せる）、次元移動（移動制限なし）
詳細：宇宙が生まれる前から存在する石、全ての平行世界の歴史を知っている。最近、女子にナンパするために平行世界を渡り歩いている。ユリナを助けてからは少しは自重している。

～カオストール～

髪：黒
目：黒
服：スカリエッティの服を黒くしたもの
年齢：２６歳
体重：６１？
性別：♂
種族：科学者
魔力光：黒
好き：？？？
嫌い：自分の計画を邪魔する奴ら
性格：陽気でおちゃらけている
得意武器：？？？
レベル：？？？
スキル：アルシエル・ハーズ（相手の憎悪を増幅させる。）
詳細：レギスたちの住んでいた世界の政府の高官。政府を裏で操っていた存在。真の目的は絶対を超える存在を作り出すこと。手始めにレギスに嘘情報を流し彼を覚醒させ「実験した」目的のためならどんな手も惜しまない冷酷な性格もある。

補足：ここでの『実験』とは実験体に破壊活動をさせ強さを確認することである。

～カイン・アーベルジュ～

髪：銀
目：緑
服：『ｍｕｇｅｎ』のゲイルの服を蒼くしたもの
年齢：二十三歳
体重：七十？
性別：♂
種族：人間（剣士としても一流）
好き：動物
嫌い：見下してるヤツ
性格：基本的には無口で冷静。合理的な判断を心がけているクールな性格。ただ女にめっぽう弱い。暑くなると松岡修造みたいになる。
レベル：７８０００
得意武器：神剣「レーヴァテイン」
スキル：ディサグリー（不明。本人もよくわからないらしい。でも本人曰くこれを使った後に目の前が焼け野原になったという。その正体は龍化と呼ばれる代物。代々アーベルジュ家は龍の力を封印するためにある存在で、自身の体に龍の力を封印している。でも暴走してしまうと自身が龍化してしまう。（その力のパワーは封印してた龍の力の限度によって変わる）今まで龍の力を完全に制御出来る者はいなかったがカインの代になって完全に封印することが出来た。ちなみに今まで龍化して生き残っていた者は・・・・、誰一人としていない。）
詳細：別世界のとあるギルドに属する青年。しかしある日、遊びのつもりで召喚術を友人に勧められてやってみたところ何かの間違いで謎の少女『セリア・エメラルド』を召喚してしまう。その後から彼は彼女と一緒にギルド稼業をすることになった。

補足：ここでのギルドは別次元の人間の依頼を請け負う所。凄いギルドだ・・・・。

～セリア・エメラルド～

髪：紫色のロングヘアー
目：蒼
服：『永遠のアセリア』のアセリア・ブルースピリット
年齢：２３歳
スリーサイズ：切り刻まれた後が・・・
体重：切り刻まれた後が・・・
性別：♀
種族：能力者
魔力光：紫、蒼、白
好き：本を読むこと
嫌い：マスターを馬鹿にするもの
性格：物覚えはあまり良くないが、素直で出来るまで何度でも頑張る性格。
レベル：８４７００
得意武器：霊剣『レイギジェグスト』
スキル：ライフポゼッション（自分の能力を一時的にアップする。しかし代償として自分の命を削るので使いすぎると体が崩壊する）
詳細：カインに召喚された少女。正体は力が強すぎたため聖杯戦争からはぶられたとある世界の王女。カインの事を自分を拾ってくれた恩義から『マスター』と呼んでいる。クールなように見えるのだが、実は直感で動くタイプで物事をあまり深く考えていない。ただ料理の腕前は壊滅的で、一度キッチンに立った時は家事の達人の助けを持ってしても大惨事が巻き起こった。

～ジーク・ドラゲリオン～

髪：黒
目：黒
服：『月華の剣士』の刹那の服を黒くしたもの
年齢：二十歳前後
体重：７５？
性別：♂
種族：元勇者
好き：なし
嫌い：　現世、常世を問わず全ての存在
性格：根暗な性格だが、戦闘時のテンションはやけに高い。
レベル：９０００００００
得意武器：神刀「罪王」
スキル：ヘルズ・ドライブ（人の負の感情を自分の身に宿し、自分の力にする。）
詳細：別世界の勇者。だが魔王を倒した後、魔王が最後に残した呪いによって彼は、全ての人間の負を取り込んでしまい、その後魔王に変わり世界を支配した。人間の負の部分を自分の力として取り込んだ存在であるが故に、その性質は純然たる「悪」である。ある日、カオストールに実力を買われ、彼の部下になった。

～Ｄｒドーン～

髪：金
目：赤
服：白衣（なんか色々と武装している）
年齢：３２歳

体重：７８？
性別：♂
種族：科学者（どっちかというとマッドサイエンティスト）
好き：実験、わらび餅、人体改造、薬品製造、ライダーキック
嫌い：まずい食べ物
性格：Ｄｒウェスト＋クルル曹長
レベル：２０００００（だが強いのはこいつの作ったロボ）
得意武器：自分の服につけた防衛システム
スキル：なし
詳細：別世界を渡り歩き、さまざまな奇天烈な発明品で騒ぎを起こすマッドサイエンティスト。「～なのである」という口調で話す。お供にオックス・ゴーアとエル・ディアンを連れている。また、場の空気を読まないことがほとんどであり、時にはそれにより御都合主義（デウス・マキナならぬデウス・エクス・マキナ）や色々なフラグをブッチ切るトンデモっぷりを巻き起こす。

～シュワルツ・エンツ～

髪：銀
目：蒼
服：場所によって変えるらしい
年齢：二十七歳
体重：七十四？
性別：♂
種族：噺の語り手
好き：お話を人に話すこと、物語の作成
嫌い：なし
性格：優しそうに見えて実は残虐

レベル：９８７０００００００００
得意武器：なし
スキル：噺の現実化（彼の話した物語は現実となる）
詳細：世界を渡り歩き物語を人々に話す魔道士。その正体は自分の話した物語を現実化させ、世界を支配しようとする次元犯罪者。彼には自分の話した物語から生まれた部下がいる。最近ミッドチルダに目をつけたようだが・・・・。

～ディケイト・ヴァルスデント～
髪：茶
目：黒
服：普通の板前の服
年齢：２４歳
種族：板前（と言う名の次元旅行者）
好き：ステーキ、女
嫌い：面倒事、ナマコ
性格：自信家で誰に対しても尊大な態度で接するが、いざという時は世界や他者のために身を挺する。
レベル：４８０００００００
得意武器：魚切るときに使う包丁（だが例え相手が魔族だろうが能力者だろうが神だろうがなんでもぶった切る）
スキル：ストロイドフォルム（訪れた世界の人達の力を覚えて自分が使うことが出来る）
詳細：寿司屋『銀河』の店長。（て言うか一人で営業している）実は気が向いたら別の世界へ行ってしまう次元旅行者である。素性を問われた際の「通りすがりの板前だ。覚えておけ！」が決め台詞。難しい話は「大体分かった」という口癖で済ませ、あらゆる物事をそつなくこなす。ちなみに彼が訪れた世界は歴史が変わっているこ

とから彼は、『歴史の変更者』と呼ばれている。（ちなみに本人曰く、「適当にやったらああなった。」と言っている）

～フィリア・プリズム～
髪・虹
目：虹
服：『フェイトステイナイト』のセイバーの鎧を虹色にしたもの
年齢：２１歳
スリーサイズ：焼却されました
体重：塵になりました
性別：♀
種族：全属性使い
魔力光：虹
好き：兄、寿司（本人曰く日本に行ったとき食べておいしかったらしい）
嫌い：バカ
性格：穏やかで寡黙（だが一度話し出すと止まらない）
レベル：８５２６０００
得意武器：虹の剣『レイゼース』、虹の槍「スヴァルド」
スキル：虹翼（発動時は背中に六枚の羽が生える。発動中は攻撃力、防御力、スピードが上昇する。封印技の使用が可能に）
詳細：この世で絶滅したと言われている「全属性使い」であるプリズム一族の生き残りで、行方不明の兄を捜しており、別次元を移動している。ある日雪の世界で兄を探している最中、謎の男、カリオストロ・ディアボロスに襲われて瀕死の重傷を負ってしまう。しかしとどめを刺されそうになった時、「外が騒がしい」と言う客のクレームを聞いて解決しにやってきたディケイト・ヴァルスデントに助けられる。それから彼女はディケイトに「兄捜ししてんのか？だ

ったら手伝ってやるから俺の店の手伝いしてくれるか？」と言われ、一緒について行くことに。いつも勝手な行動するディケイトには世話を焼いている。

～コープス・デッドアンサー～

髪：黒
目：骸骨だからなし
服：なし
年齢：４５０００歳
性別：♂
種族：骸骨
魔力光：黒
好き：子どもの肉、人の心をもてあそぶこと
嫌い：邪魔者
性格：陽気で残虐
レベル：３３３３３３３０
得意武器：魔杖『コープス』
スキル：骸骨化蘇生（死んだ人を骸骨にして復活する。復活した者はコープスのしもべになる）
詳細：エンツの作った物語『骸骨ショー』から生まれた存在。子どもの肉を喰らう骸骨。エンツとは気が合うらしい。これでも生前は大魔道士として有名だった。

～レーヴェ・ネオセフィロス・シルバータイム～

髪：銀
目：黒
服：セフィロスの服を白くしたもの
年齢：銀さんと同い年
体重：銀さんと同じぐらい
性別：♂
種族：堕天使（元人間）
魔力光：黒
好き：イチゴ牛乳
嫌い：信念、不屈
性格：無口
レベル：５５５５０００００００
得意武器：木刀？
スキル：？？？
詳細：別の歴史からやってきた銀さん。守るべき者が全てミッドチルダの最高評議会の手によって殺され、憎悪により世界を破壊した。（ここまで憎悪が暴走したのもカオスストールのせい）でも一部銀さんとしての意識がある。

～ローグ・ヴァンス～

髪：濃い青
目：黄
服：青いコート、黒のジーンズ
年齢：１９歳
体重：６３？
性別：♂
魔力光：青

好き：弁当作り（て言うか趣味の一つ）
嫌い：お化け
性格：基本的には事なかれ主義、大切な者は命をかけても守る主義
レベル：６５０００
得意武器：レジェンドセイバー
スキル：不明
詳細：５年前に姉が自殺してから怠惰な生活を送っている。趣味が学校の屋上での読書であるなど、基本的に人と付き合うことが少ない。したがって自分から人を誘うと言う事が無い為、それをすると周囲に驚かれる。だがある日、未来からやって来たという謎の少女、レルシア・ヴァルキュリアと出会ってから彼の運命は大きく変わっていく。

～レルシア・ヴァルキュリア～

髪：赤
目：青
服：『トリガーハート　エグゼリカ』のクルエルティアの服を赤くしたもの
年齢：見かけ１６歳
スリーサイズ：蜂の巣になりました
体重：蜂の巣になりました
性別：♀
魔力光：水色
好き：ローグ（最近恋心を抱きました）
嫌い：変態
性格：気性はやや熱血
レベル：２０００００

得意武器：機神霊剣ヴァルドネシアカリバー
スキル：機神化（能力を一定時間強化するが体の負担が大きい。他に隠された能力があるようだが・・・）
詳細：別世界からやって来た少女型兵器。『自由』を得るために未来から逃げてきた。ローグと出会ってから一緒にギルド業をしている。過去に仲間が自分のために犠牲になったことがあるためローグだけは絶対に失いたくないと思っている。

ちなみにレルシアの妹について簡単な説明

名はエル・リアミール、簡単に言えば僕っ子（外見も男らしい）。イシュタルにやられ別世界に転送されたとき（て言うかユリスがイシュタルに秘密で命だけ助けてあげた）、死にかけているところをＤｒドーンに助けられる。さらにＤｒドーンに男と勘違いされ『エル・ディアン』と言う名前をつけられた。（今では誤解が解けた。しかもロボットだって事もわかってくれている）彼女は今、Ｄｒドーンの助手をしているが色々と問題を起こしているＤｒドーンには手を焼いている。（ちなみにこのことはユリス以外誰も知りません

～レイヴィス・グランスフィア～

髪：薄紫の腰までのロングヘアー（赤く長いリボンも結んでいる）
目：黒
服：黒いゴスロリドレス
年齢：見た目１６歳（実年齢５００歳）
スリーサイズ：串刺しになった

体重：串刺しになった
性別：♀
種族：魔族の姫
魔力光：赤、黒、紫
好き：他者との交流（相手を一方的に振り回す事を彼女の中ではこう定義する）
嫌い：触手、ダヌ・カースター
性格：勝ち気で執念深く、尊大でワガママ。そのうえ、自己中心的。さらに受けた恨みはきっちり百倍にして返す主義。
レベル：９０００００００
得意武器：三叉の魔鞭『ネオジドル』（槍とか大剣とかにもなります）
スキル：ダークネス・ドライブ（闇の力を纏い、一定時間パワーアップする）
詳細：とある世界の魔王ウィズガンドラの一人娘で三叉の魔鞭と猛々しい闇を自在に操る、高飛車なお嬢様。しかしある日、天上界からダヌ・カースターが襲来、父親や臣下もろとも魔界を滅ぼされてしまう。臣下の仇を取るためにダヌ・カースターを追って人間界へと赴くものの女性とムフフ中のダヌ・カースターにとっつかまって完膚無きまでにやられてしまう（身体的、精神的、性的な意味で。しかも９割性的な意味でグチャグチャのベトベトにされました）そんな（性的な意味で）地獄のような日々を過ごしていた彼女はダヌ・カースターを所行を止めるためにやって来たユリスの手によって助けられる。彼女は「ダヌ・カースターをこの手で倒す。」と言う条件付きでユリスの頼みを受ける。マゾッ気を突かれるとかなり弱いのが悩みの種。

～ベアトリス・アーミティッジ～

髪：金（暴走時は赤）
目：青（覚醒時は金、暴走時は赤）
服：『聖天使ユミエル』の光翼天使ユミエルの服（黒い部分は銀色になっている）
年齢：１７歳
スリーサイズ：キングクリムゾン！
体重：キングクリムゾン！
性別：♀
種族：天使と人間のハーフ
魔力光：黄（覚醒時は金と銀、暴走時は赤と黒）
好き：平和、正義（暴走時はこの世全ての存在と世界）
嫌い：悪（暴走時はこの世全ての存在と世界）
性格：内向的かつ純粋で、無垢な人柄。しかし、その純粋さゆえに悪を憎む気持ちは人一倍強い。それに寂しがりや（覚醒時は陽気で飾り気のない気さくな性格に、さらに銀さんの要素もある。暴走時はただ相手を殺すことだけしか考えなくなる）
レベル：８５０００００（覚醒時、暴走時は測定不能）
得意武器：迅雷聖剣『エターナル・ワルキューレ』
スキル：雷神化（要するに覚醒、色々とパワーアップする）
詳細：とある世界で宇宙の平和を守り続けている少女。その正体はかつて運命に抗った男の末裔。彼女は自分の祖先に誇りを持っている。ユリスからアザトース復活の報を聞き、全ての世界を救うためにユリスと一緒にアザトースを倒すことにした。
暴走に関して：彼女にはかつて家族がいたが魔族に襲われたときに殺されてしまった。（さすがに彼女もその時重傷だったわけで）しかもその魔族は彼女と彼女の祖先を鼻で笑って馬鹿にしたため・・・・その時に彼女の何かが吹っ切れた。そして気付いたときには彼女の目の前には、守ろうとしたものも魔族も何もかも消滅していた。
（ちなみに彼女は自分の暴走には気付いていなかったがこの事象が

自分の手で起こしたものだったと知り、そのことに関して今でも相当後悔している）
暴走時の能力：全てを否定する能力（彼女が否定したものはその存在が未来永劫存在しなかったことになる）

～レイシア・アルカナ・リディシア～

髪：エメラルドグリーンのロングヘアー
目：銀
服：『魔術師とアルカナの化身』の犀宮楓の服（黒い部分は銀色に）
年齢：１５歳
スリーサイズ：ピチューン！
体重：ピチューン！
性別：♀
種族：魔法剣士
魔力光：ピンク、白
好き：銀さん、ネプティーヌ、なのは（彼女にとって全員あこがれの存在）、ピーチタルト
嫌い：近藤勲（理由・変態だしストーカーだから）
性格：純真で優しい女の子。恥ずかしがりで若干弱気だが、ここぞというところでは引かない強さがある。責任感は強い。博愛主義者で、誰にでも優しく接する。争い事が嫌いで、人間誰とでも理解しあって仲良くなれると信じている。自分よりも誰かのために頑張るお節介な善人だが、調和を尊ぶため自分を殺している傾向にあり色々と背負い込んでしまう性分でもある。
得意武器：聖剣『ライトニングノヴァカリバー』
スキル：レウトゼクション（一定時間、移動速度増加）
詳細：別世界に住む悪魔狩りの魔法剣士。だがある日次元のゆらぎ

に飲み込まれミットチルダに飛ばされてしまう。その時に銀時、ネプティーヌ、なのはの三人の噂を聞き、弟子入りさせて貰うために機動六課に行ったが・・・。

～リルシオン・ブラド・ヴァルジウス～

髪：青
目：金
服：フェイトのデバイススーツの青版
年齢：１５歳
スリーサイズ：ピチューン！
体重：ピチューン！
性別・♀
種族：魔道士、吸血鬼と人間のハーフ
魔力光：青、黒
好き：妹
嫌い：偽善者
性格：クールで人を寄せ付けない雰囲気。不器用で感情を表に出すのが苦手な女の子。
得意武器：魔杖『ガルヴァジス』
スキル：吸血鬼化（一定時間吸血鬼になる。能力値が上昇するが日の光には弱くなる）
詳細：異世界に住む吸血鬼、かつて妹が吸血鬼だという理由で政府に捕らわれてしまう。そのため自分の大切な妹を奪った世界を憎んでいる。彼女は世界に喧嘩を売ろうしている高杉がミッドチルダに居ると聞き、世界を復讐するために彼の元に行く。ちなみに元の世界では同級生であるレイシアとは意見や考え方で対立している。

～リルマ・ロギストル～

髪：ピンク（ライトニングクリスタルゼロモードになると白色になる）

目：金

服：聖王ヴィヴィオのスーツの白版（ライトニングクリスタルゼロモードになると金色になる）

年齢：２２歳

スリーサイズ：貫通！

体重：貫通！

性別：♀

種族：聖剣士

魔力光：白、金

好き：子ども達、花

嫌い：魔物

性格：朗らかで優しい性格だが、芯が強く、怒ると怖い。

得意武器：聖剣『レイヴシェルバー』

スキル：ライトニングクリスタルゼロモード（この状態になると背中に六枚の水晶の翼が生える。全能力が超強化される。光速以上での移動が可能に。）

詳細：とある世界の街の孤児院を経営する女の子。ある日子ども達が魔物に襲われたときに力が覚醒、それから彼女は子ども達を守るため、孤児院の子ども達の世話をしながらそのかたわら魔物を倒す聖剣士としても働くようになった。孤児院の子ども達のためにギルドで仕事を受けることもある。ギルドで知り合ったカインとは仲がよい。

～ネクロギアス・バルクギドシス～

髪：黒
目：赤
服：普通にジーパン
年齢：１５歳
体重：６１？
性別：♂
種族：人智を超えた何か。
魔力光：全色
好き：馬刺し
嫌い：自分が気に入らないと思った奴
性格：超陽気
スキル：数え切れない（かつてやっていたことおよびその他を見れば何となくわかる）
詳細：かつてミルガと呼ばれる生命体とかつて平行世界を飛び回って追いかけっこをした自由人、リリ銀パーティを見に来た。ものすごい方向音痴（昔はそうではなかったが）

かつてやっていたことおよびその他：巨大化して町を押し潰す。彗星や銀河や惑星をつかんでそれで相手を殴ったり、相手に投げつけたりする。及びその余波としての宇宙（単一次元）破壊。念力による破壊。人やものや惑星の破壊。次元破壊。第五次元を破壊したのち、分数次元を含む序数次元を全てを消し去り、そこの住人も消し去った。ミルガとの追いかけっこに飽き、多元宇宙を破壊し、「改変宇宙群や分岐未来群や平行次元群の屑宇宙を移動してまわるのには飽きた。一つの現実で十分だ」という趣旨の独り言を言った。その一つも破壊して「もはや無限の地球群も…もはや改変宇宙群も諸過去も諸未来もＳＵＰＥＲＤＯＰＥＳも存在しない。もはや俺とお

前（もう一人のミルガ）を除いて何者も存在しな」くし、ミルガの移動できる次元が存在しないようにした。物質操作もやっている（だがその後何もない世界に飽きたから別存在軸の改変宇宙群にやって来た）。

ついで：突如襲ってきた邪王兵を全員消去した（本人曰く、『襲ってきた奴が悪い』だという。その後何故か迷子になった。）

～アギス・トルディース～

髪：銀
目：銀
服：『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ』のネロの服を青くしたもの
年齢：２８歳
体重：８１？
性別：♂
種族：デビルハンター（でも他の依頼を受けることも）
好き：オリーブ抜きのピザ、ストロベリーサンデー
嫌い：面倒事、自分よりおしゃべりなタイプの人間
性格：詳細参考
得意武器：魔剣『ディスガイア』、二丁拳銃『ヴェイザー＆サウザンド』
スキル：心臓や脳を破壊されたり全身を貫かれる程度では死ぬことのない肉体
詳細：表向きは便利屋だが、本業はこの世にはびこる悪魔を狩るデビルハンター。普段はやる気のない男で、気の向かない依頼は引き受けず、事務所も散らかりっぱなし。食事はオリーブ抜きのピザにストロベリーサンデーのみという偏りで、借金まみれでありながら

週休六日主義を公言して憚らないずぼらな性格。アルコールについてはビールやワインを飲んでいる。一応　車は持っているらしい。多額の借金をしており、仕事を終える度に取り立てられている。本人曰く、女・子供には優しいという。一見欠点だらけの男に見えるが、ひとたび悪魔を前にすれば愛用の魔剣ディスガイアと二丁拳銃ヴェイザー&サウザンドで敵を圧倒する。いかなる時でも相手を挑発するほどの余裕を持ち、高速のオートバイも軽々と乗りこなす。人間の可能性を信じており、己の正義を貫き悪を挫くタフな男。

名前：蒼咲（あおざき）　龍華（るか）

性別：女
種族：混血（クローン）
容姿：腰まである金髪に蒼い瞳をしはやてに似た顔立ち
身長：１６８ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ９１／Ｗ５６／Ｈ８９
年齢：１７歳（外見年齢）
魔力光：蒼
魔力：測定不能
気力：測定不能
霊力：測定不能
妖力：測定不能
覇気：測定不能
魔術式：古代ベルカ式とレイヴ式、ヴァンパイア式、ルシファー式
性格：普段は優しく大人しい性格をしているがそれは表面だけで、本来は強気で戦闘好きな性格をしているが統夜達の言う事だけは素直に受け入れる
趣味：お父様とお母様達を調べること、料理、スポーツ、読書など

多数持っている
好きなもの（事）：お父様とお母様、戦い
嫌いなもの（事）：お父様とお母様に嫌われる事
詳細：C計画と呼ばれる計画で造られた人造魔導師の第一号体。その正体は統夜とはやて達の遺伝子から造られたクローン。理由としては統夜の持つ異常な戦闘能力を自在にしたかったからである。
統夜の真祖と煌天使と魔人、雪蓮の白虎解放、はやての天使化、メアリの死神化と白獅子化、優子と秀吉の試験召喚獣の操作能力、はやてやカナ、咲夜の持つ魔法技術、シャルの持つトランス能力が備わっており強さはC計画で造られたクローンの中で最強の部類に当たる。
妹達の面倒をよく見ており、実の妹の様に可愛がっている。
戦闘好きであるのと統夜達の遺伝子で造られたのと調整されたことにより、姉妹の中でも一番強い存在であり、統夜と本気で勝負すれば相討ちになる可能性もある程。
魔力変換資質『炎』、特異魔力変換資質『蒼炎』と『斬撃』、『轟焔』、『轟雷』を所有する。

～アーキテクト・スピリットクォーツ～

髪：黒
目：青
服：蒼い鎧
年齢：２７歳
体重：７６？
性別：♂
種族：グラップラー（でいいのか？）
好き：強者と戦うこと

嫌い：弱者
性格：圧倒的なまでに暴力的かつ自己中心的。だが本気を出すとものすごい冷静
得意武器：基本何でも使う
スキル：周囲の人間の弱点を自動的に見つける、相手のの技をすぐに覚える（覚えた技は自分なりのアレンジを加えて自分の技にしている）
詳細：世界中を旅している存在、強者と戦うことを趣味としている。また、プロボクサーをボクシングの技術で、柔道家を柔道で子ども扱いにしたり、琉球王家の秘伝「御殿手」や、中国武術の達人が半生を懸けて習得した技術「消力」をいとも簡単に再現してみせるなど、
パワーだけではなく格闘技能のセンスも常人離れしている。が、それらの技術に頼るのは流儀ではないと語っており、パフォーマンス目的やよほど切羽詰まった状態でない限り、滅多に使用する事はない。使おうとすれば天才的に知恵も回り、格闘技術の知識に関しては毒手の歴史に詳しいなど、かなりの博学さを見せる。放たれるプレッシャーも凄まじく、彼と相対した兵士数名が　突如同士討ち（殴り合い）を始めた事もある。闘争本能はもはや快楽を通り越して呼吸と同じレベルにまで達しており、彼に「壊された」格闘家は数知れない。
地震が発生した途端に地面を殴りつけ、結果地震が止んだのを「パンチで地震を止めた」とまでしている。
職業は一応「傭兵」となっているが、彼曰く「戦場なんて遊園地みたいなもの」。「一人で戦争できる」ことを証明するために単身で首相官邸に殴り込み、執務室の机をたたき割るというピッコロ大魔王みたいなことまでやっている。戦いに対するスタンスも「ただ、美味い料理を食らうがごとく」というのが基本姿勢であり、純粋な闘争そのものに意味を見いだす（そのためか闘う事を　「喰う」と表現する場合が多い）。「愛」や「絆」などを軽視し、それらを

闘争に持ち込む事を「上等な料理にハチミツをブチまけるがごとき思想」と断言するほどに嫌っている。なお、闘争第一というだけあり「禁欲で得た力などたかが知れている。欲するなら喰らえ」が持論である。特に神出鬼没ぶりはあまりにも凄まじく、ジャイアニズムを彷彿とさせる行動もしばしば。時には決着が付いた事柄に対して更に横槍を入れ、事態を悪化させて勝手に帰ってしまうなんて事も多々ある。一応、自分を闘争で楽しませてくれる存在にはある程度の謝意を持っている。

特殊技紹介

斬刀『吉野桜』：吉野の桜の花びらが風によって舞い散るように圧倒的な速さと量の斬撃を繰り出す。

アース・ウェイブ：目の前の地面から気の柱を出現させる。しかも出す場所を自身が選択できる

エグゼキューション・ジーク：相手の首をつかみ上げ、膨大な量の気で相手の体力を奪った後、一気に気を解放させ吹き飛ばす（しかもその時に同時に相手の体内に毒をぶち込んでいる）

レジ・エイジ・オルクアント：ボディブローをヒットさせ、相手の魂を引き剥がし、魂をボコボコにした後、相手の肉体を再び魂の元に戻す（最初のボディブローが回避不能&ガード不能）

カーネイジ・タイムドロップ：一瞬で自分以外の行動を遅くさせる技。相手の好機を潰し、流れを引き寄せる。

トゥア：自分に攻撃を仕掛けた相手を捕らえ、返り討ちにする（あ

り得ないぐらいダメージがでかい。スキが全然無い）

エグゾディアシス・ユニバース・ゼロ：全範囲攻撃、自分を中心に巨大な衝撃波を発生する（石化効果有り）

ジン・クライス：本気になったときしか使わない。滅茶苦茶な速さの居合いを行う（その技を使ったら回りが衝撃波で消滅する）

ジェノサイドカッター・ウェーブ：飛び上がりながら片足を円形に振り上げて攻撃する。しかもそれは衝撃波になって飛んでくる。

ギガンテックプレッシャー　・ネオグレネス：突進しつつ片手で相手の首根っこを掴み、そのまま加速して壁に叩きつけ爆発させる。さらにに叩きつけたあと、つかんだ手に気を溜め、そのまま爆発させる。

よのかぜ・ËＨＯＫＡ３Ɔ・改：意の場所に画面縦一杯に広がる竜巻を発生させる。その竜巻は徐々に大きくなり勝手に動き始める

闇慟哭・五元解放：相手の頭を片手で掴み上げ、巨大な五属性のこもった竜巻で包み込んでダメージを与える。

大神・絶（おおみわ・ぜつ）：体を青く光らせて相手を自分側に引き込み、自分に触れると魂を抜きその魂に気を暴発寸前までため込み、爆発寸前に相手に戻し、相手の体内で魂を爆発させる。爆発してぶっ飛んだところに巨大な気弾を落とす。（ちなみにこの動作中の彼は無敵）

ミカエルブレード・トライデント：剣に変形させた自身の腕を振り抜き、その場で三回一閃する。

結界出剣・改：黒い長方形の空間の穴を出現させ、そこから大量の剣を飛ばす（なぜかエクスカリバーとかロトの剣とか秋子さんの謎ジャムとかキーボードクラッシャーとか関係ないものも登場する）

極死・絶天滅塊：投擲されたナイフが相手に当たると同時に自分も飛んできて相手の体を何百回も切り刻む。

こっから紹介する技は本気モードにならないと使用しない

六塵散魂無縫十七分割：単純で十回の突きを神速で放つとほぼ同時に相手を十七回ぶった切る。あまりのスピードに薙ぎ払っているようにしか見えないとされる。

ギガンティックミーティア・ネオ：一定時間が経つと大爆発する速度が高速１００？もある巨大な気弾を飛ばす。

デッドリーレイブ・プラズマボルトブレイカー：相手に突進した後に次々と追撃をくり出し、最後は掌底と一緒に発動する雷（と言う名のスターライトブレイカー）を超至近距離でぶち込む

ノヴァ：ただの突き（と思っていたら大間違い、よく分からんが絶対に当たる。相手がどんだけ離れてようが当たる。しかも喰らうと相手が能力を使えなくなる、ちなみに反射無効）

～ウィエナ・ノブリスオブリージュ～

髪：水色

目：蒼
服：『精霊騎士アクエアル』の水の精霊騎士アクエアルの装備を全部水色にしたもの
年齢：２１歳
スリーサイズ：記録消滅
体重：記録消滅
性別：♀
種族：氷の精霊騎士
好き：カイン
嫌い：セリア（恋のライバル、セリア本人は何が何だか分からないが）
性格：ツンデレ
得意武器：氷剣『エスペイム・ブリザード』
スキル：凍結（とりあえず何でも凍結できる）
詳細：精霊の泉から召喚された精霊騎士。カインとはギルドの仕事で知り合って一目惚れした。何故かセリアをライバル視している。

投稿キャラズ（後書き）

真王「まだ本編に出ていない人もいますがそこはまだ待ってくださ
い」

極神１０傑集設定（前書き）

真王「ヴァーラガルザさんのキャラ達です。１０人の神気取り野郎ですがね」

極神１０傑集設定

～イシュタル・ヴァジスゲイド～

髪：赤
目：赤
服：金の鎧
年齢：見た目３０歳（実年齢１兆歳）
スリーサイズ：アレ？俺何をしてたんだ？
体重：アレ？俺何をしてたんだ？
性別：♀
魔力光：金、青、黒、紺
好き：美容
嫌い：自分たちのシナリオに抗おうとするもの、老い
性格：普段は傲慢かつ優雅……かと思えば突然駄駄っ子のような我が儘な言動を取ることがある。
また、自身を敬わない者に対しては残虐な面を露わにする。　口調もまた普段は気品を感じさせるが、激情に駆られて品に欠ける発言を垂れ流すときもある。
レベル：測定不能
得意武器：斧（全然使っていない）
スキル：時間移動、次元を超えて魔力の干渉、瀕死の人間を完全に回復、記憶操作、多次元も認知可能。次元を繋ぐ穴を作って悪魔を送り込むことができる。この悪魔はバラバラになっても無限に復活する。神を欺くほどの分身を作成可能。分身はやられても復活し、本体へのダメージフィードバックは無い。完全に消滅されない限り腕が切り落ちても再生可能。
詳細：無数の宇宙を作りだし、その世界の生命を思うがままに操ってそのシナリオを楽しみ、気付かれそうになったらその存在を宇宙

ごと消去することを繰り返す者達『極神１０傑集』の一人。　数々の悪魔を従えており、身の回りの世話や自分の部屋の構築のために限りない魔力を使用している。て言うかこの集団に入る前は別の世界で魔族の大将をやっていたから魔族や悪魔の扱いには慣れている。

〜混獄（こんごく）　隆次（りゅうじ）〜

髪：緑
目：赤
服：ＢＡＳＡＲＡの信長の鎧を黒くしたもの
年齢：２６歳
体重：７２？
性別：♂
種族：神になった人間　あらゆる全ての並行宇宙に同時に在り君臨する存在
魔力光：金
好き：ユリス（隆次の妹）
嫌い：自分たちのシナリオに抗おうとするもの
性格：基本は冷静沈着なやつだが妹のことは大切に思っている
レベル：測定不能
得意武器：黒の魔道書『ジグドラシル』
スキル：奇跡（隆次が存在する全ての宇宙の波動を同期させ未来時間を束ねて使用し、いかなる並行宇宙にも絶対にありえない、あらゆる可能性を超えた「奇跡」を起こし新たな宇宙を創生する。この「奇跡」を起こすために未来時間を使われた宇宙〔隆次が存在する宇宙で、「奇跡」がもたらされるひとつ以外全ては〕消滅する。）
詳細：極神１０傑集の一人。かつて人間だったとき、妹を死の運命から救うため、宇宙を滅ぼした存在。その時に１０傑集のリーダー

にスカウトされる。（妹も実力があったので同じく１０傑集入りに）

黒の魔道書『ジグドラシル』に関する説明

因果を遮断して攻撃や行動を封じたりする事も可能な魔道書

～ホラーロード・ドロッセルマイヤー～

髪：青
目：黄
服：ギャグマンガ日和の聖徳太子の服の黒色
年齢：見た目２８歳（実年齢４１５億歳）
体重：亡霊なので無し
性別：♂
種族：転生者（もう誰が転生したかわかりますよね？）
魔力光：赤、黒
好き：ツナ、下界に旅行、犬、カレー
嫌い：ピーマン
性格：精神年齢は幼児並だが、やるときにはやるとされており、ごく稀に、至極まともなことを話す。
レベル：測定不能
得意武器：なし（基本肉弾戦、なぜか虚刀流を覚えている）
スキル：物語を作ってそれを現実にする。力の及ぶ範囲は最低でも町以上。一切見えなく出来る、またあらゆるレーダーに反応しない。ホラーロードを認識したあらゆる知的生命は狂うか消える。
詳細：極神１０傑集の一人で一言で言ってしまうとバカ。（転生前がギャグマンガ日和の聖徳太子だから仕方がない）頭の冠は側面に付いているひもを引っ張ると伸ばす事ができる。一度、髪の毛が伸

びすぎて冠のようになっていたことがあったが、その髪はイシュタルによって千切られた。また、下着を穿かない主義でもある。カレーが大好物で、カレーで頭を洗った経験もあり、体からはカレーなどいろいろと妙なにおいがする。犬好きだが、ソロモンなどろくな名前を付けていない。口癖は　おァまァ　，　もうイヤだ　等。耳で息ができたり、黒目だけで笑った目を作れるといった特技がある。全身から変なにおいがするということで、１０傑集内では毛嫌いされている。イシュタル曰く、「全身がまんべんなくくさい。」。下手にかぐと、バイタリティをかき消され最悪死に至るほどだという。得意技は空中で前転しながら暴れる「飛鳥文化アタック」や、ボートから勢いよく岸へ飛ぶ「フライング摂政ポセイドン」（失敗）、奇妙なポーズで相手に体当たりする「聖徳全体アタック」「ジャンピングゴリラステーション」「シャイニング横綱バケーション」「ライジング犬好きイリュージョン」などの４８あるボディアタック。ほかには普通のチョップ「摂政チョップ」などがある。最近新しい技「聖徳太子有情破顔拳」を覚えた。

～エルシャダイ・ワイズデント～

髪：黒
目：金
服：マスターテリオンの服の黒色
年齢：見た目３１歳（実年齢３５京４２兆歳）
体重：７４？
性別：♂
種族：この世全ての造物主
魔力光：黒、白、赤、青、黄
好き：世界を弄ぶこと、バッドエンドを作り出すこと

嫌い：自分たちのシナリオに抗おうとするもの
性格：冷酷無比で残虐、たとえ自分を信頼していた奴でさえゴミのように使い捨てる。その容赦の無い外道な性格から他の１０傑集からも相当恐れられている。
レベル：測定不能
得意武器：虚無の剣『ノア・イプクリス』
スキル：防御無効。三千世界において全能。無時間行動にも対応可能。時間を止められても動ける。因果を超越した存在であり、未来に行われる攻撃に対して反応して防御できる。移動は無限速。宇宙活動可能。
詳細：極神１０傑集の一人。ちなみにリーダーであるアザトースは１０兆年前に運命に抗おうとした男によって封じられたため実質彼がリーダーを勤めている。彼はアザトースを復活させるための計画『プロジェクト・ノヴァ』を企む。

特殊技

《立体魔方陣『超獣神』》：攻撃力を大幅に底上げできる。

《黒き業火よ》《白き絶望よ》：それぞれ火炎・冷気による攻撃呪文。射程無限大。

《ダークマター》：対象の攻撃の属性を変更する。

《対消滅力場》：あらゆる攻撃のエネルギーと対消滅する力場。常時。白兵戦の類による攻撃を十分の一に軽減する。

《虚空の霧》：肉体を霧へと変貌させることにより回避することが出来る。霧となっているがあらゆる攻撃をすり抜けさせられる。任意発動。

《過ぎ去りし未来》：時のループから対象を放逐し、その存在自体を抹消する。

《流星召喚》多元宇宙全体を効果範囲と出来る攻撃。無数の流星を落とす。

～アザトース・ヨグソードス～

髪：なし
目：赤
服：なし
年齢：不明
体重：不明
性別：なし
種族：万物の王、盲目にして零知の神、造物主、〈一にして全、全にして一〉、〈彼方なるもの〉、全ての物の原型
好き：なし
嫌い：なし
性格：理性というものがない
レベル：測定不明
ちょっとした説明：宇宙の外に宇宙が広がりその宇宙の外にも宇宙が広がりその宇宙の外にも…と宇宙が無限に連なり、また可能性の分岐が無限の平行宇宙を生み出すという世界観の全てはアザトースが見ている夢であり、覚醒すれば全て消滅する（というか最初から存在しなかったも同じらしい）。　世界を思うがままの容にできる。アザトースの存在を認識した物は魂を砕かれる。さらに全ての宇宙はアザトースにとって幻であって夢であり、またあっても存在しな

いのと全く同じであるらしいので、通常の手段での干渉は不可能と思われる。アザトースは、人間であり非人間であり、脊椎動物であり無脊椎動物であり、植物であり動物でありこの宇宙にもいるし、別の宇宙にもいる。宇宙から宇宙へ漂う存在でもある。また意識を持つとも持たないと言える。まさしく〈一にして全、全にして一〉である。四角が立方体の断面であるように、あらゆる形態は四次元の類似する形態の断面である。また、四次元の形態も、五次元の類似する形態の断面であり、また五次元の形態も～とこれを無限回繰り返して到達不可能な高みの次元、存在の全的な無限の領域、数学も空想も凌駕する最果ての絶対領域それそのものが、あらゆる世界と宇宙と物質を超越した至高存在たるアザトースの本質である。人間の世界（最初の世界）は四次元世界の無数の局面の一つに過ぎず、四次元も五次元世界の無数の…を繰り返す。アザトースからみて、時間を含め全てのものに変化などなく、全てが同一のものであり、外宇宙的な見方の角度が違うだけである。よってアザトースが見方の角度を変えただけで低次元の存在が変化と呼ぶ現象が起きる。ようするに物をまったく別の物にする。当然だがアザトースは無数の宇宙の角度を同時に見ている。

詳細：極神１０傑集のリーダーであり、存在の全的な無限の領域、数学も空想も凌駕する最果ての絶対領域それそのもの。だが今は封印されている。

簡易説明

アザトースにとって「現実」や「変化」という事は夢にすぎない。過去・現在・未来ということも同様に夢、時間という概念の外にいる存在である。それに過去、現在、未来ということも同様に幻であり時間の概念が存在しないので時間無視。アザトースは全能であり低次元の存在達が変化と呼ぶのは、アザトースの意識の働きにすぎない。（ぶっちゃけ言えば神も宇宙も何もかも彼の夢に過ぎない。）

～混獄ユリス～

髪：黄
目：青
服：黄色いヒラヒラした服にミニスカート
年齢：１６歳
スリーサイズ：燃やされた・・・
体重：燃やされた・・・
性別：♀
種族：吸血鬼と人間のハーフ
魔力光：黄、赤、紫
好き：兄さん、世界
嫌い：このよ全てが無に還ること
性格：優しくて元気
レベル：測定不能
得意武器：冥剣「エンアジス」
スキル：自分を宇宙レベルに拡大することによって時間停止、他人の時間停止の解除が出来る、溜め無し錬金術原子の組み換えによる物質の形成を行う、何も無い荒野に一瞬で大都会を作り出す。相手の足元からマグマを噴出させる。射程数ｍ、高さは天空まで、幅は数ｍ。周囲数千ｋｍをマイナス２７２．８度に下げる。原子核の電子の動きまで止める氷の檻に相手を閉じ込める。相手（人間大）を指差し、軽く指を振るだけで銀河と銀河の間に転移させることが可能。すべてを腐らせる風（金属でできた壁やドアを腐らせた）を発生させる。
詳細：１０傑集の一人で唯一『プロジェクト・ノヴァ』に反対する少女。アザトースの復活を阻止するため異世界の強者を集めている。吸血鬼だが別に日の光の当たっても消えることはなく、血を吸うこ

ともない。

～ダヌ・カースター～

髪：黒
目：黒
服：黒のロングコート
年齢：３２歳
体重：７８？
性別：♂
種族：神（だが鬼畜変態）
魔力光：黄、水色、オレンジ
好き：女性を調教すること、束縛
嫌い：ゲイ
性格：鬼畜変態
レベル：測定不能
得意武器：召喚の書『アギスタルデルツ』（何でも召喚できる万能魔道書。本人はあまり戦闘はしないのでほとんど性的な意味で自分の娯楽のために使うことが多い）
スキル：汎世界全てに対して全能。ダヌの流れに身を浸せば全知の存在ともなる。時間を渡り死者を生き返らせることも、～がなかった世界に変えることも可能。ダヌと読心能力などで同調した場合、圧倒的な情報に個は拡散して消えてしまう。
詳細：１０傑集に一人でホラーロードと同じぐらいの問題児。能力の強さもさることながら、相当の鬼畜変態なので１０傑集の女性達には（性的な意味で）恐れられている。しかも相当な天才（ＩＱ５０００）。

～ラグーシス・マルドゥーク～

髪：白
目：赤
服：白い学生服
年齢：不明
体重：亡霊みたいなもんだからなし
性別：♂
種族：意思を持った空間そのもの
魔力光：全色
好き：？？？
嫌い：運命に抗うもの
性格：とにかくミステリアスなやつ
レベル：測定不能
得意武器：なし
スキル：空間の振動で物体を崩壊消滅させる。（近ければ近いほど威力は上がる）、ラグーシスの細胞一つでも支配した空間内では、時間も物理法則も物質も何でも自由に出来る。またその支配した空間の範囲に踏み込んだ人間は戦闘意欲を完全に無くす。幼児退行する者や必死に許しを請うものもでる。更に体には龍が纏わり付いており、これによって人の意識や体を飲み込む事も可。
詳細：１０傑集の一人、だがその正体はエルシャダイでもわからない。とある目的のために動いているようだが・・・・？

～ベルフェクティオス・スネーカー～

髪：オレンジ
目：青黒
服：青いズボンだけ
年齢：３７歳
体重：８４？
性別：♂
種族：妖の王、半機人
魔力光：黒、緑、赤
好き：世界を壊すこと
嫌い：我々のシナリオに抗うもの
性格：基本無口で戦闘狂だが頭が回りが良い
レベル：測定不能
得意武器：妖刀『神牙・絶』
スキル：ペルフェクティオスが宇宙に存在すると同時にその宇宙とそこに存在するものは例外なく死に至る既にいくつもの宇宙に破滅を与えている負の怨念がペルフェクティオを形づくる為、その供給が起こる限り、無限に再生する。彼曰く、「無駄だ、我は死と滅びを糧として存在するがゆえに、我を滅ぼす事はできぬ」とのこと。さらにペルフェクティオス曰く全ての宇宙と共に存在するものであるらしいそれの一部がいるだけで絶大なプレッシャーを与え、歴戦の戦士達に恐怖を植え付け、戦意を喪失させた。死を覚悟しているものでも関係無く戦意を喪失させた（機械には効かない）。
詳細：１０傑集の一人。暇つぶしで破壊した世界は数知れず。あまり目立たないのが本人の悩み。

～ロソノアレ・イヴ～

髪：ピンク

目：赤
服：『フェイトステイナイト』の黒桜の服（あれは服といえるのか？）
年齢：１６歳
スリーサイズ：Ｂ８５／Ｗ５６／Ｈ８７
体重：４６ｋｇ
性別：♀
種族：物理的・概念的な闇そのもの、億千万の闇、アンリ・マンユ
魔力光：黒、ピンク
好き：殺し
嫌い：光
性格：穏やかな性格
レベル：測定不明
得意武器：なし（でもアンリ・マンユの力で武器を作って使ってるらしい）
スキル：人間や動物や吸血鬼や宇宙人や精神体の憑いた武器や鬼などの怪物を呑み込み同化できる。憎しみや恨みや後悔を持たない明るい心を持ったものはアンリ・マンユの力を使い絶望に染めてから取り込む。闇であるため実体が無く、攻撃をすり抜ける。周囲の人間や動物や吸血鬼や宇宙人や精神体の憑いた武器や鬼などの怪物の持つ魔力を奪い吸収する。魔力を持つものも持たないものも疲労し動けなくなる。射程は４００ｍ超以上。力の強いもの（魔力を持たないもの含む）ほど影響されやすく、数分で強いものも弱いものも疲労で立っていられなくなり、倒れるものも出始める。核爆弾などの現代兵器全て、火・水・土・風・雷・光・闇などの魔法、原子分解、空間破壊、エネルギー吸収、吸収同化、異空間送り、発狂、発狂の効かない相手に効く精神攻撃と精神操作、空間ごと圧縮して時空の彼方へ放逐する攻撃は無効。さらに周囲の人間の心のカタチをカタチにする（そのシステムは要するにワラキアと同じ仕組み）

詳細：十傑集の一人でかつては暗い雰囲気だったが、ラグーシスと知り合ってから明るくなっている。さらに能力も優秀で他のメンバーとも仲良くなっている。

～ヴァーグスナイト（これ兵士）～

髪：なし
目：なし
服：黒い鎧
年齢：なし
体重：２５０？
性別：不明
種族：死霊騎士
魔力光：黒
性格：機械的
レベル：４５０００
得意武器：なし
スキル：幻想殺し（本家より精度が上）
詳細：極神十傑集配下の兵士の一つ、倒しても何度でも復活する

極神１０傑集設定（後書き）

真王「まだまだ。ちなみにユリスは追われの身になってレイヴィスとベアトリスと一緒に行動しています。現在エンツが仮のメンバー」

ハードチーム（前書き）

真王「私が作った最強の守護女神たちだ」

ハードチーム

～チート・ザ・ハード～

髪：真紅のロング
目：真紅
服：チートプロセッサ（レインボーカラー）（マジック・ザ・ハードのようなプロセッサユニット）
年齢：１億歳？
３サイズ：１０２／５６／８３
体重：４０キロ
性別：♀
種族：異常の守護女神
好き：真王様
嫌い：命令に背く愚か者
性格：極めて冷静沈着。真王に忠義を持っている
レベル：超絶レベル
得意武器：全種類
スキル：アンチ・チート（チート、バグ、神、チート殺しの能力を持つ者に大幅にステータスを下げる）
詳細：真王が作り出した女性を主に守護女神の様な２０人の最強集団『守護女神（ザ・ハード）』のリーダー格。常に冷静沈着で真王のためならば何でもする完璧な存在。

～ゴッド・ザ・ハード～

髪：金色

目：水色
服：ゴッドプロセッサ（ゴールドカラー）（キングギドラのようなプロセッサユニット）
年齢：一億歳？（でもチートより下）
３サイズ：１０５／５６／８４
体重：ゴッド「我が教えるかバカ者」
性別：♀
種族：神の守護女神
好き：我をあがめる者
嫌い：我をあがめない者
性格：我儘、よく手を焼かされる
レベル：超人無敵
得意武器：ゴッド「いらぬわ」
スキル：神の力（ゴッド「我が神の力があれば貴様の技を倍にして返してやるわ！」）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。ドが付くほど傲慢な態度で我儘で偉そうにしている。その我至上主義な性格なため周りから手を焼かされる。そんな傍若無人にもかかわらずその実力は本物である。

～サタン・ザ・ハード～

髪：栗色
目：赤
服：サタンプロセッサ（ダークカラー）（魔王を思わせるプロセッサユニット）
年齢：サタン「ねぇ？お話しようか？」
３サイズ：サタン「なのはちゃんよりスタイルは上だよ」

体重：サタン「頭ひやそうか？」
性別：♀
種族：魔王の守護女神
好き：銀時、なのはちゃん、ヴィヴィオ、ビビちゃん
嫌い：みんなを傷つける人、
性格：なのはとほぼ同じ
レベル：本気出すと星が壊れるかも…？
得意武器：槍、杖
スキル：魔王の畏れ（威圧する声を聞いた瞬間どんな奴でも恐れてしまう）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。例えて『みんなの保護者さん』みたいな感じ。しかし怒らせると魔王でも神でも震え上がらせる殺気を放てる。周りから魔王なんて呼ばれるが彼女からすればほめ言葉らしい。容体はなのはが髪をおろして胸がボインとでかい感じ。

～バーサーク・ザ・ハード～

髪：逆立った赤
目：金色（ほぼ白目）
服：バーサークプロセッサ（レッドカラー）
年齢：バーサーク「オボエテネェヨ」
３サイズ：１０２／５５／８４
体重：４５キロ
性別：♀
種族：狂気の守護女神
好き：たたかい、殺し、破壊、強い奴
嫌い：暇、だれもいない、ガキンチョ、弱い奴
性格：狂戦士。

レベル：サタンとほぼ同じくらい
得意武器：斧
スキル：狂気の心（たたかう回数が多いほど力が上がる）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。たたかうことしか頭にない狂戦士。女性でありながらムッキリした筋肉と体中に傷だらけが目立つ。強者にしか興味がなく、弱者には切り捨てる振る舞いをする。好きな言葉は『弱肉強食』。

～ジャイアント・ザ・ハード～

髪：太ももまでの金髪
目：水色
服：ジャイアントプロセッサ（オレンジカラー）
年齢：本人曰く年長者らしい
３サイズ：１５７／９８／１４７（通常時）
体重：つぶれてます
性別：♀
種族：巨大の守護女神
好き：自分、みんな、生き物鑑賞
嫌い：お調子者
性格：戦いが好きな感じ
レベル：８４５３８７０００
得意武器：斧、ハンマー、モーニングスター
スキル：巨大化（体が大きくなる。最大は地球がバランスボールぐらい）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。メンバーの中で最高の身長を持つ。通常時は３メートル以上あり、よく目立つ。それゆえか大喰な一面も。

～エレメント・ザ・ハード～

髪：肩までが緑、腰までが水色
目：赤と青のオッドアイ
服：エレメントプロセッサ（６色カラー）（８つのエレメントマターが宙に浮いている）
年齢：１億年ある？
３サイズ：９１／５２／８２
体重：焼き焦げている
性別：♀
種族：属性の守護女神
好き：読書、実験、サイエンス
嫌い：めんどくさいこと
性格：普段は軽い性格だが、サイエンス系に関わると本気の感じになる
レベル：宇宙レベル
得意武器：エレメントマター
スキル：エレメントマスター（すべての属性の攻撃力が数倍、耐性が数倍になる）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。炎、水、氷、風、雷、土、光、闇の８色のエレメントマターを持つ。サイエンス系が大好きで、本気になればアインシュタインよりもすぐれているとされる（かもしれない）。

～ドラゴン・ザ・ハード～

髪：水色
目：金色
服：ドラゴンプロセッサ（パープルカラー）（竜のようなプロセッサユニット）
年齢：ドラゴン「しらん」
３サイズ：１１１／５６／８６
体重：６７キロ
性別：♀
種族：竜の守護女神
好き：たたかい、竜の誇り
嫌い：礼儀を知らないもの、相手を見下す存在
性格：多少王格をもっている
レベル：無敵レベル
得意武器：大型剣
スキル：ドラゴンブレイブ（ダメージ量が多いほど攻撃力が増す）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。竜を守護女神化した感じで竜としての品格があるらしい。それでメンバーの中でまとめ役としている。

～マッハ・ザ・ハード～

髪：オレンジ色
目：サファイアカラー
服：マッハプロセッサ（ブルーカラー）
年齢：打ち抜かれたあとが…
３サイズ：１０３／５６／８５
体重：撃ち抜かれた跡が…
性別：♀
種族：音速の守護女神

好き：速く進むこと、風を感じること、のんびりしたいこと
嫌い：面倒なこと
性格：ストパンのシャーリー的な。
レベル：マッハ「1秒で地球を余裕で一周出来るぜ！！」
得意武器：銃（スナイパー、ショット、ガトリング含む）
スキル：マッハダッシュ（音速を超えるスピードを出す。最大で1秒で地球を5周できるほど（ただし服は破けてしまうが））
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。素早さに特化した守護女神。常に速さには自信があり、メンバーの中では彼女が一番早い。容体はストパンのシャーリー。

～ファントム・ザ・ハード～

髪：白髪
目：黒
服：ファントムプロセッサ（グレーカラー）（死神を思わせるプロセッサユニット）
年齢：ファントム「忘れちゃった」
3サイズ：９６／５４／８２
体重：幽霊なのでない
性別：♀
種族：亡霊の守護女神
好き：脅かすこと、いじめること、サチコちゃん
嫌い：ノーリアクションな人、つまんないこと
性格：当方の幽々子のようなゆるゆるな性格
レベル：ファントム「さぁ～？わかんないや～」
得意武器：霊の魂
スキル：インビシブル（霊体なので誰も触れない。幽霊同士なら触

れる）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。下半身が幽霊のようにない。それ故霊体の体なので触ることが出来ない。（あることをすれば触れると思うが…）いつも消えては現れると言う相手を驚かせる困ったさん。口癖に『ホロロ』という。容体はファントムブレイカーの心愛。

～クイーン・ザ・ハード～

髪：黒
目：金色
服：クイーンプロセッサ（ブラックカラー）（女王様なプロセッサユニット）
年齢：クイーン「女性に年齢を聞くのは失礼じゃありまして？」
３サイズ：１０３／５６／８５
体重：クイーン「殺しますわよ？」
性別：♀
種族：女王の守護女神
好き：女の子、貧弱な男をいじめること、悲鳴、ホラー映画鑑賞、自分に忠実な存在
嫌い：ブ男、自分の意に反するもの（仲間には反論しない）
性格：偉そうな女王様（ドエス）
レベル：サタンとほぼ同じ
得意武器：鞭、拷問用具
スキル：サディスティック（レベルの低い者どもにダメージ量が１０倍）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。雰囲気そのものが女王様で一目置かれる存在（ほとんどの男性陣談）。同僚であるマゾチック・ザ・ハードとエッチ・ザ・ハードとは仲良しで、３人そろって『変態３人組』

と呼ばれている（本人は『クイーンと手下』と改名しろと言ってきたことも）。

～バグ・ザ・ハード～

髪：紫のツインテール（蜘蛛のような6本脚見たい）
目：紫
服：バグプロセッサ（タランチュラカラー）（蜘蛛のようなプロセッサユニット）
年齢：バグ「数えてない」
3サイズ：98／53／82
体重：バグ「測ってない」
性別：♀
種族：虫の守護女神
好き：虫、ボーっとすること
嫌い：小さな生き物（とくに虫）を傷つける
性格：なんだか機械っぽい…
レベル：サタンよりは下くらい
得意武器：鎌、槍
スキル：大量地獄（大量に全種の虫を召喚する。虫ですらないものも出るが）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。虫をこよなく愛する昆虫主義（虫全般でも愛する）。ただしゃべり方が一言一言なため多少理解しづらい。

～ナース・ザ・ハード～

髪：ピンクのロング
目：ピンク
服：ナースプロセッサ（ホワイトカラー）（ナースさんのようなプロセッサユニット）
年齢：ナース「教えません！！」
３サイズ：９８／５５／８６
体重：ナース「絶対だめです！！」
性別：♀
種族：看護師の守護女神
好き：笑顔を見ること
嫌い：笑顔が消えること
性格：やさしい天然ボケ
レベル：メンバーの中で最弱の存在…とされている
得意武器：注射器
スキル：ラブヒールパワー（本人いわく、愛の力で回復するというらしい）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。メンバーの中で回復士的なポジション。極度の天然ボケで尚且つ躓くと注射器を飛ばしてきたりひっくり返る際に靴が人の顔にあたったりなどちょっと危険なところもある。容体はコンパを守護女神化させたイメージ。

～シャドウ・ザ・ハード～

髪：青紫（ポニテ）
目：赤
服：シャドウプロセッサ（ブラックブルーカラー）（忍者のようなプロセッサユニット）
年齢：シャドウ「・・・」↑数千万年も生きたと言いたいようだ。

３サイズ：１０４／５５／８３
体重：３８キロ
性別：♀
種族：忍者の守護女神
好き：静か、クナイでジャグリング、甘いもの
嫌い：うるさい
性格：ほぼ無口
レベル：サタンとほぼ同じ
得意武器：クナイ、手刀、刀
スキル：影道（影の中に入り込んで移動する。さらに影を操れる）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。メンバーの隠密者的なポジションで無口な女忍者な感じである。忍者（シャドウ）というからには忍者らしい素早さと俊敏さを兼ね備えており、更には影を操れるから影（シャドウ）ということもある。

～サムライ・ザ・ハード～

髪：白銀ポニテ
目：黄緑
服：サムライプロセッサ（シルバーカラー）（侍の雰囲気を放つプロセッサユニット）
年齢：サムライ「サタンよりかは長いな…」
３サイズ：１０４／５８／８３
体重：４６キロ
性別：♀
種族：侍の守護女神
好き：パフェ、甘いもの、ジャンプ
嫌い：仲間が傷つくこと

性格：めんどくさい、甘党、ジャンプ愛読者
レベル：サタンより上
得意武器：刀（木刀が好き）
スキル：銀夜叉（リミッターを外すとチートでさえも凌駕する実力を出せる）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。基本は何もしないグータラな奴。更にはパフェが好きな甘党でジャンプ愛読者。性格上銀時とよく似ているので『銀時の女番的な奴』とされている。いざというときは白夜叉銀時でも引けを取らない実力を持っている。

～ロリータ・ザ・ハード～

髪：ピンクのショート
目：緑
服：ロリータプロセッサ（ピンクカラー）
年齢：ロリータ「みんなより若いよ」
３サイズ：ペッタンコスレンダー
体重：２９キロ
性別：♀
種族：幼女の守護女神
好き：強いお兄ちゃん、おいしい物、おもちゃ
嫌い：弱いお兄ちゃん
性格：無邪気な子供
レベル：ロリータ「ナースお姉ちゃんより上かな？」
得意武器：杖
スキル：ちゃいるどぱわー（よく分からないがとにかく凄い能力だ、と彼女の見解らしい）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。メンバーの中で最年少。子供らしくて

子供らしいしぐさなど本当に子供らしい。だがそれ故に迷惑なことがしばしば。

～ソニック・ザ・ハード～

髪：水色
目：蒼
服：ソニックプロセッサ（ウォーターカラー）
年齢：ソニック「教えません」
３サイズ：１０５／５６／８５
体重：ソニック「死になさい」
性別：♀
種族：音波の守護女神
好き：歌うこと、マッハ
嫌い：特にない
性格：物静かっぽいが歌のことになると熱が入る
レベル：ロリータよりも上と思われる
得意武器：マイク
スキル：ソニックソング（歌と音波の波長で敵味方のステータスを変化）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。歌を愛する演奏者。歌の中ではトップクラス（と彼女が自画自賛。だが実力はプロ顔負けの本物）。たとえるなら魔神探偵のとこの心を揺さぶる歌姫的な人。

～マゾチック・ザ・ハード～

髪：金髪
目：紫
服：マゾチックプロセッサ（イエローカラー）
年齢：汚れていて見えない
３サイズ：１０８／５５／８３
体重：汚れていて見えない
性別：♀
種族：ドエムの守護女神
好き：いじめられること、クイーン様、性関係
嫌い：いじめない愚か者
性格：極度のマゾヒスト。クェイサーのドM姉妹
レベル：クイーン以下らしい
得意武器：拷問道具
スキル：ドMパワー（ダメージが多いほど能力が上昇）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。超極度のマゾヒストでいつも誰かにいじめられるようにねだる。いじめてくれないとわかると残虐になって躊躇なく殺す。クイーンとは仲がいい（というかクイーンがSでマゾチックがMの関係であるが）。

～プラント・ザ・ハード～

髪：緑（なんか触覚が多い）
目：緑
服：プラントプロセッサ（グリーンカラー）（葉っぱやツタや花などがあるプロセッサユニット）
年齢：プラント「？？？（覚えてないらしい）」
３サイズ：９９／５６／８２
体重：４４キロ

性別：♀
種族：植物の守護女神
好き：植物、なりきり、小さな子ども
嫌い：汚い水、環境破壊
性格：いつもぽけ～っとしているが、植物を傷つけると怒るらしい
レベル：メンバーの中で中間あたり
得意武器：槍
スキル：光合成（植物特有の能力。光を浴びると体力が急上昇する（傷ついてもすぐ直る））
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。植物主義者で植物をこよなく愛する、バグとは仲がいいし、害虫が植物を食べてもとりあえず許すそうだ。

～エッチ・ザ・ハード～

髪：腰までのピーチ色
目：水色
服：エッチプロセッサ（ピーチカラー）（露出度の高いプロセッサユニット）
年齢：クイーンと同じくらいらしい
３サイズ：１０５／５７／８５
体重：エッチ「教える気はないわ」
性別：♀
種族：色欲の守護女神
好き：エッチなこと、性行為、クイーンとマゾチック
嫌い：とくにない
性格：とにかくエロい事が好き
レベル：クイーンと同じくらいかも
得意武器：いろいろ

スキル：色欲の護衛者（クイーン、もしくはマゾチックの近くにいるとパワーが上がる）
色欲のオーラ（エッチのオーラを受けた人物が発情する。その時笑みやキスを受けると発情率が上昇そして暴走する）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。四六時中エロい思考を持つ変人。同士であるクイーンとマゾチックとは肌を重ねあった仲。ときどき危ない行動がするのもある。

～ビースト・ザ・ハード～

髪：茶色の太ももあたり
目：金
服：ビーストプロセッサ（ブラウンカラー）（猛獣のプロセッサユニット）
年齢：ビースト「興味無いな」
３サイズ：１０２／５５／８２
体重：４６キロ
性別：♀
種族：猛獣の守護女神
好き：肉、動物、自然、生物界の王になること
嫌い：人間、機械
性格：血の気の多い
レベル：サタンあたり
得意武器：爪
スキル：ビーストブレイヴ（戦えば戦うほど戦術力があがる）
詳細：『守護女神（ザ・ハード）』の一人。猛獣…いや、生物界の王に君臨することをたくらんでいる。そのためによくサタンに挑み、勝ち負けの差が平均的の位置まで来ている。猛獣ゆえか頭の回転はあまり良くな

いが戦術に関してはぴか一強いらしい。

ハードチーム（後書き）

真王「結構多かった・・・。後質問は今受け付けません」

チート・ザ・ハード「次回へ御待ちを」

ゴッド・ザ・ハード「次からは我に宝具を授けろ」

サタン・ザ・ハード「待ってるよ♪」

バーサーク・ザ・ハード「ヒャッハ～～!!ハヤクシロヨ～!!」

ジャイアント・ザ・ハード「じゃあな」

エレメント・ザ・ハード「僕も待ってるよ」

ドラゴン・ザ・ハード「・・・フン」

マッハ・ザ・ハード「勝負しようぜ。スピードでな!」

ファントム・ザ・ハード「ホロロ、おどかしちゃうぞ～、ホロロロ」

クイーン・ザ・ハード「跪きなさい?」

バグ・ザ・ハード「私、みんな、待ってる」

ナース・ザ・ハード「怪我をしたらみてあげるですよ」

シャドウ・ザ・ハード「・・・・・・（よろしく）」

サムライ・ザ・ハード「よう、ゆっくりしとけ」

ロリータ・ザ・ハード「頑張るよお兄ちゃん」

ソニック・ザ・ハード「私の歌をきけぇぇぇぇえええ！！！！！」

マゾチック・ザ・ハード「いじめるんですか？いじめてくれるんですか？さぁ！早くいじめてください！さぁ！さぁ！！」

プラント・ザ・ハード「あなた、お花好き？」

エッチ・ザ・ハード「まだあそこがうずうずする…」

ビースト・ザ・ハード「オメーには興味ないな」

真王「お前らな…」

第百一訓：荒れ地で決闘は定番（前書き）

真王「バトルものが多いですね」

第百一訓：荒れ地で決闘は定番

前回のお話

セレスがハプニングマスでイシュタルからレルシアをかばい、完全に治療してエルと再会した。
そしてセレスは暴君ヴァルバトーゼと共闘でイシュタルと対峙する。

イシュタル「ふふ、まずは小手調べだ。ハッ！」

イシュタルは両手に黒い魔力弾を形成しそれを飛ばす。
セレスはヒラリと、ヴァルバトーゼは蝙蝠に変わってかわした。

イシュタル「まだ終わっていないぞ！」

今度は紺色の魔力刃を作り出し、クロスカッターの如く繰り出した。

セレス・ヴァルバトーゼ「デヤッ！」

セレスとヴァルバトーゼは2人同時に剣でぶつけカッターを消した。

イシュタル「やるな！そこの小僧と言い暴君の噂は本当だったんだな！」
ヴァルバトーゼ「その通り！俺達はイワシの力で強くなったのだ！」
セレス「おい、一員に入れるな。っていうかイワシで強くなってるわけないから」

イシュタルは楽しそうに、セレスはヴァルバトーゼに突っ込む。

イシュタル「だがじかんをくらうのもめんどうだ。まとめて吹き飛ばしてくれる！！」
ヴァルバトーゼ「良いだろう。受けてたつぞ！別魔界のの大将よ！」
セレス「やれやれ、本気を出すか…」

と上記3人の魔力が上昇した。
そして詠唱を始める（セレス除く）。
普通魔界にファイアなどの魔法は詠唱はないんだが、召喚の類なら話は別。
そして2人の魔方陣から巨大な二体が出現した。
一体は巨大な黒い体にデーモンと思わせる雰囲気の存在。
もう一体は巨大な体ををすっぽり覆えるほどの巨大な翼、長い楔型の尻尾と凶悪な顔を持った悪魔。かつては吸血鬼の王として君臨していた者。その名も――

ヴァルバトーゼ「暴帝・フルークフーデ！！！」
フルークフーデ「ルオォォォォォオオオッ！！」

ヴァルバトーゼに答えるように暴帝が降臨した。

イシュタル「滅びよ！シュワードブレイガ！」
ヴァルバトーゼ「やれ！」
セレス「こっちも忘れてもらっちゃ困る。魔神大次元斬！！」

デーモンは巨大な魔力玉を形成し、口で咆哮の如く発射する。
フルークフーデは両翼から黒いエネルギー波を放出した。
そしてセレスは黒い魔力刃を出した後剣に魔力を溜めて巨大な閃光を発射した。

ドガガーーー

やがてどんどん亀裂が大きくなり、

ガシャーン！

壊れた。

イシュタルの服は某妖精の尻尾の女鎧騎士の私服姿を黒くした感じである。

イシュタル「ムゥ、我が鎧を砕けるとは…、そこの小僧、名を何と言う」

セレス「セレス、セレスティア・スパーダだ」

イシュタルがセレスを見て言い、セレスは応える。

鎧か砕けたのはセレスのせいだとにらんだからだ（当たっているがな）。

イシュタル「覚えておこう、この私が自ら」

真王「はいはい、もう終わったのでさっさとこっちこい」

イシュタル「グアッ！首を引っ張るな！っていうか放せーーーー！！！」

言いかけたところで真王に捕まれた。

イシュタルはじたばたと駄々っ子のように暴れている。

ちなみに相手選手がリタイアということで異界戦士チームは１０マス進むことになった。

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム１５５
剣聖チーム１５１
スマブラハーツチーム１５４
学園チーム１４９
プリティレディズチーム１５９
女神チーム１５２
とある転生チーム１５４
狂乱チーム１４９
メテンズナイトチーム１４８
ドラゴンネイルチーム１４７
リリカル仮面ライダーチーム１５２
真選組チーム１４７
異界戦士チーム１５６
リリカル銀魂チーム１４８

プリティレディズチームトップ。
現在１２ターン目
次のターン・リリカル銀魂チーム

現在銀時達が進むエリアは荒れ地エリア。
ごつごつした岩がいっぱいあって平原と比べると危険度が少しある。
ちなみにこのエリアにはバトルやデュエルマスが多くみられる。

銀時「よし、神楽」

神楽「よし来たある！」

神楽はブロックを叩き8を出す。
剣が交差したデュエルマスだ。

真王「デュエルマス。参加しているチームのうち誰かと対戦します」
神楽「久々に暴れられるね！」

神楽がワクワクしているとモニターが現れた。

『夜兎の因縁（神楽ＶＳ夜帝竜）』

夜帝竜「！？」

これを見た夜帝竜は驚いたあと、にやりと弓を引いた。

夜帝竜「ククック、しばらく暴れてなかったからな。それにまたお前と対戦することになるとはな」
神楽「それは向こうの私の話ある。初対面にそういうことはないよ」

詳しくは烈火竜さんの『ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ～竜の爪～』の『姉って、兄貴より頼れる存在になっている。』より。

真王「では神楽対夜帝竜の対決。始め！」

コングがなった。

神楽「ホワタァ！！」
夜帝竜「オリャァ！」

開始と同時に神楽と夜帝竜の足同士がぶつかり合った。

神楽「歌舞伎町の女王の座は渡さないネ！！」

夜帝竜「興味ねぇよ！かつ丼食って喧嘩、あたしはそれが好きでね」

拳と拳、足と足、傘と傘のラッシュ。

神楽・夜帝竜「ウオオオオオオオオ！！！！」

そしてお互いの拳がぶつかり合う…

ズドォッ！

ことなくクロスカウンターで両者は顔面にクリティカルヒットして倒れ伏せた。

そして上を見ながら言う。

神楽「おいデカ傘」

夜帝竜「夜帝竜だ。イヤあえてお前だけ本名を言おう。鳳華だ」

神楽「じゃあ鳳華。今度会ったらかつ丼大食い勝負ね」

夜帝竜「乗ったぜ。その言葉」

神楽と夜帝竜は倒れながら笑った。

邪王「言っておくが引き分けになったので両チーム何も進まんぞ」

神楽・夜帝竜「・・・あ」

リリカル銀魂チーム・ドラゴンネイルチーム「あ、じゃねぇよ！！」

両チームは神楽と夜帝竜をストンピングする。

ヒーローズターン

メアリ「私ね、それ！」

メアリはブロックを叩いて5を出す。
ペナルティだ。

メアリ「何いぃぃ！！」

そう言う間にもモニター登場。

『なめなめしちゃうぞ！』

？？？「ベロ～～ン」

するとピンクの体に長い舌のベロリンガが現れた。

メアリ「ま、まさか…；」
真王「そのまさかだ、舐める」
ベロリンガ「ベロベロ～～ン」

ベロリンガの舐める攻撃。
ベロリンガの舌がメアリの体を舐めまわす。

メアリ「あぅぅぅ・・・！」

効果は（精神的に）抜群だ！

メアリは痺れて倒れた。

統夜「うわ～、女性陣にはきついな…」

統夜は引き、相川は私じゃなくて良かったと安心していた。

剣聖ターン

咲夜「私の番よ～」

咲夜はブロックを叩いて9を出す。

森羅「ってペナルティじゃん！！」

森羅の言うとおりペナルティマスに止まっていた。

モニターが現れる。

『淫獣ターン』

全員「・・・・・・は？」

全員揃って意味が分からないといった顔をしている。

いや淫獣の意味を知っている人は理解していた。

なんせこの中で淫獣になった男と言えば…、

ユーノ「え？ぼく？」

真王によって転移されたユーノだ。

ジャンヌ「やっぱユーノくんってそういうイメージあるよね」
新八「僕ら知ってますけどあれはねぇ…」
ユーノ「な!?」
真王「元はと言えばなのはがユーノが変身できることを知らなかったこと。それ故に女子風呂に連れて行き、ユーノは恥ずかしい目にあうも、周りから淫獣として一生を過ごされる羽目に…」
ユーノ「それは違うってば!!」

やはりユーノは淫獣とされているらしい。
周りは少し引いている。

咲夜「あら～、私ユー君にやられちゃうの～?それでもいっか～♪」
全員（受け入れるの!!?・・・お、大物だ…）

だが咲夜だけはユーノが淫獣なんてことはどうでもいいらしい。

真王「まぁそれはともかく、ナース・ザ・ハード」
ナース「はいで～す」

するとまるで天使と思わせるピンクの髪の女性が現れた。
手には医療道具と注射器一本。
しかしネプテューヌ達女神組は彼女の姿、彼女のプロセッサユニットが守護女神と似ていたのだ。

ナース「それじゃあ注入!」

ブスッ!

ユーノ「グハッ!」

ノワール「注入じゃなくてそのままブッ刺してるだけじゃないの！！」
真王「そこが彼女の悪い部分である」

ナースはコンパ並みの注射器をユーノにザックリいった。
言わば彼女は天然ドジっこらしい。
すると薬が効いたのかユーノの様子がおかしい。

ユーノ「ガルァァア！！」
銀時「ユーノが暴走しやがったぁぁぁぁぁ！！！」
咲夜「ユー君！？」

もはや獣状態になったユーノ。
対する咲夜も火が付いた。

咲夜「ユー君本気になってくれたんだぁ～」

犯る気満々の彼女。
するとワープホールが現れる。

真王「ほら、さっさと行ってこい」
咲夜「ありがと～」
ユーノ「ぐがう」

咲夜とユーノはワープホールの中に入った。

邪王「そんなわけで剣聖チームはパートナーを待つので一回休みだぜ」
剣聖チーム「んなあほなぁ！？」

スマブラハーツチーム

冥王「私の番なの～」

冥王はブロックを叩いて8を出す。

バトルマスだ。

冥王「頑張るの！」

モニターが現れた。

『魔王の守護女神

サタン・ザ・ハード』

モニターが現れた後ある女性が現れた。

栗色の髪にダークカラーのプロセッサ、赤い目をしているがその顔は誰がどう見ても、

なのは「わたし？」

高町なのはそっくりであるからだ。

サタン「違うよ。私はサタン、サタン・ザ・ハードだよ。確かに姿形あなたに似ているけどね」

銀時「いやいや、一部分だけ違うじゃねぇか」

ネプテューヌ「そうだよ。一部分だけ羨ましいぐらいに違うよ」

銀時とネプテューヌ、そして胸の小さい人たちがサタンのある部分を凝視する。
それはサタンのふくよかなバスト。
なのは本人よりもむっちりとした大きさで冥王と同じかそれ以上ある。

サタン「ひとまずおいといて、さぁ、始めようか」

サタンは赤く神々しい槍を構える。

冥王「それは？」
サタン「私の愛槍ロンギヌス、さぁ行くよ！」
冥王「面白くなってきたなの！レイジングシャベリン！」

冥王も構えて対峙する。

真王「試合開始！」

そしてコングがなった。

サタン「乱れ突き！！」

サタンはロンギヌスで乱れ突きを放つ。
普通の目では追いつけない。

冥王「（早いの、これは楽しめるの！）ディバインバズーカ！」

冥王はすべてかわしたあとディバインバズーカを放つ。

サタン「・・・ひれ伏せ」

ビタッ！

だが何とサタンが低い声で言うと、砲撃がその場で止まり、冥王が動かなくなった。

冥王「な、なんなの？」

サタン「見せてやるの。私の力！」

サタンはそういうとプロセッサユニットが離れる。

サタン「これが私の魔王兵器！『超魔王機・ジェノライマー』！！」

そう言って現れたのは推定２０メートルの巨大ロボット。

色が黒いのを除けばゼオライマーと酷似していた。

ジェノライマーは両手にエネルギーをためる。

サタン「いっけぇぇ！！ジェノサイドブレイカー！！」

たまったエネルギーは開いた胸部の砲撃と共に発射した。

冥王「え？ちょまきゃあああ！！！

なのは「銀さんそれどういう意味？」

あり得ないと言わんばかりに銀時は真王に怒鳴るが、なのはは笑ってない笑いをして言う。

新八「つーか真王さん！！これ明らかに冥王さん殺っちゃったんですけど！！？」

真王「死んでねぇよ。この空間は致命傷級の攻撃を浴びても死なないようにしてんだ。ほら」

真王が指差す先には気絶している冥王がいた。

そのあと彼女は起き上った。

冥王「う～、悔しいの～」

サタン「でも私は楽しかったよ冥王ちゃん」

悔しがる冥王と手を差し伸べるサタン。

光翔竜「いい雰囲気に思えんな、豚町なの…」

ブスッ、バーーーーーーーーーーーーーーーンン！！！！！！！

光翔竜「アビャブレバァァァアアアアアアアアアアア！！！！！」

真王竜「光翔竜ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！！」

他ドラゴンネイルチーム（自業自得…）

フェイト大好きな光翔竜が呟きかけたところに頭にサタンのロンギヌスが刺さって追撃に雷が落ちた。

真王竜は叫び、黒鎌竜たちは呆れている。

ビビ「うおおおおおおおおお！！！サタンちゃ～～～ん！！（〇▼〇）」

するとビビがなぜかサタンに走ってきた。

サタン「わっと、ビビちゃんだっけ？」

ビビ「はい！ビビです！よろしくね」

ビビはサタンにほほ笑みをかけ、

ピタッ

サタン「魅惑の笑みはを使うのはいいけど、どうせだから私を愛してもいいよ」

口止めを受けたビビだったがぱぁぁと明るくなる。

神「あいつの百合ハーレムがだんだん近づいてきてないか？」

レヴェッカ「ビビちゃんちょっとうらやましいわ」

グレイ「・・・・・・」

神とレヴェッカは興味深そうに言い、グレイはどうでも好さそうだった。

学園ターン

ヤルオ「僕の番だおｗｗｗｗｗ」

ヤルオはブロックをたたいて6を出す。
イベントマスだ。

恭介「イベントか。何が出るんだろう…」

恭介は興味半分緊張半分で見届ける。
モニターが現れた。

『土からお湯が…』

ゴゴゴ
ゴゴゴ
ゴゴゴ
ゴゴゴ

で・・・

ネプギア「きもちいねお姉ちゃん」
ネプテューヌ「温泉サイコー！」
マリオ「今までの疲れをリフレッシュできるなこりゃ」
クッパ「吾輩もだ」
光翔竜「フェイトしゃまの、太ももとたわわな胸が…（ちょっと鼻血）」
真王竜「…理想郷（パラダイス）だ」
ギルシア「ホ～レホレ！お兄さんが洗ってあげるよ～」
ラム「うっさい近寄るな変態！」
ビビ「もふもふ～（＝ω＝）」
サタン「やん、くすぐったいよ」
神「ガッハッハッハ！愉快だね～」
レオン「これもよしか…」
ガレーナ「サウナはあるか？」
真王「あるぞ？我慢大会はご勝手に」
神楽「てめ～、むかつく胸しやがって、こっちによこせよ～」
アリス「ふふ、将来お前にも吉が来るぞ」
咲夜「ユーく～ん、私の体洗って～」
ユーノ「はい咲夜さん」
森羅「お前らいつの間に！？」

統夜「思うんだが胸でかの女多いな…」
達也「ああ、プルンプルン揺れてるな…」
相川「2人ともどこ見てるの！？」
メアリ「好きで大きくなったんじゃないよ…」
エール「コヨリ・・・」
コヨリ「エール・・・」
セレス「お～い、そこでいちゃつくなよ」
勇華「なら私達もやりましょ？」
カイン「何で俺らも？」
イシュタル「なぜ妾まで？」
ディケイト「ついでだと」
レイシア「・・・」
リルシオン「・・・」
ユリス「疲労が取れるわね」↑とあるごたごたでけがをしていたが真王たちによって癒された。
隆次「だな」
レイヴィス「あいつは現れねぇな」
茨木童子、トミーロッド、沙夜、毒牛頭、毒馬頭「・・・・・・・・・・（真王やチート・ザ・ハードらによってぼこられた挙句捕まっている。そして気絶している）」

そんなわけで次回へ続く。

リル「ばぶ！（じゃあね～）」

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

真王竜「ドラゴンネイルの真王竜だ。よろしく頼む」

光翔竜「光翔竜です」

白天竜「白天竜よ」

銀八「おし、ペンネーム『なめ猫』さんからだ。『俺「…え？襲撃くらった？……はい、とりあえずやばくなったらラムザ達をそっちに…うん、それじゃ気をつけて……（ケータイ）……はい失礼しました、なめ猫です」

ラムザ「どうしたんだい？」

俺「後ですぐに話します。ひとまず感想を」
ラルム「ええと…まず、がすとちゃんが出て来てくれたことだね」
ラムザ「うん、あれは嬉しいことだよ。仲間にしてもいいんじゃないかな？」
俺「で、あとは……フェイトさん……例え貴方がよくありがちな変態だったとしても、１つのフェイトさんですよ…」
ラムザ「それ、フォローしてるつもりか…？；」
俺「では、質問です」

がすとへ
銀さんを値段で表すと、いくらぐらい？

ビビへ
最近すっかり顔文字をやらなくなったが、大丈夫か？

ネプ姉妹へ
ｍｋ２原作でＰＶ作ったけど、次に作るならどんな姿とＢＧＭで作りたい？

俺「以上、ではまた」』ズバリ答えましょう」

がすと「非売品ですの」

ビビ「え？そうかな？（。＿。？）」

ネプテューヌ「演歌デビューしちゃうぞ～！」

ネプギア「は、恥ずかしいよ…！」

真王竜「ＰＶか」

光翔竜「よし！フェイト様の素晴らしいＰＶを作らなければ！」

白天竜「やめなさい。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

真王竜「うむ、次はペンネーム『鳴神　ソラ』だ。『マリオ「なかなか良い展開だな」

ルイージ「山崎君；」

明久「次は荒地エリアですかね？」

クッパ「ふむ…どうなるのやら…」

冥王「なの」

ムッツリーニ「……質問『ウチのチルノについてどう思う？ちなみに馬鹿とか？以外ので頼む』」

ネス「銀さんに質問『自分のトランクスを取り合う人たち見てどうでした？』」

チルノ「アンバリーに質問！『ロボット以外に武器も作れるの？』」

次回を待ってます！』ふむ、わが竜の爪の人材にしようか」

銀時「俺のトランクスで何やってんだよ…」

アンバリー「もっちろんできるよ！」

光翔竜「発明が出きるんですか！いいですねぇ、『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

白天竜「次はペンネーム『黒神』さんよ。『質問します。

真王へ

何か『マリオパーティ』シリーズで新作が発売される予定があるようですので、僕はその時に買いますが真王さんも買いますか？』」

真王「面白ければ買いますぜ！『黒神』さん、どうも！」

銀八「次ぃ、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。

フゥ～…。（そう言いながら、一息つく）

輝刃「お帰り閃火…結構お疲れのようだな？」

まぁな…【アカシック・レコード】への【アクセス・ライド】は、少々精神を使うからな…。

輝刃「ハハハ…（苦笑）それで発狂しないのだから凄いよ…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．アリアに質問…正直言って、閃火に頭を優しく撫でられるの…満更でもないか？

ハハハ…直球行くね…（汗）。次は俺からだ。

2．真王と邪王に質問…というかアドバイスだ。今さっき究極憎悪ティアナの【余分憎悪】が浄化しているみたいだから、軽いチョップ一発で全ての憎悪がガシャポンみたいにスッコ～ンと塊で抜けてくぜ？一回試してみるといいよ…もちろん、ちゃんと『軽く』だからな？

輝刃「確かに…真王と邪王の場合、『面白そうだから』って理由でおもいっきりチョップしそうだからな…（汗）。」『ズバリ本人が答えよう」

アリア「確かにそうですが、ネプテューヌ様のやさしい柔らかな手の温かさのほうが一番ですね」

真王「そんなわけで『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『フリーダム』さんだ。『Sフリーダム「また色々と…」

∞ジャスティス「バスに轢かれるって、イベントじゃなくてハプニングだと思うんだが…」

デスティニー「ラバーズもヤバイ方向にいってるしな…」

レジェンド「こっそりローエングリンやジェネシスを仕込むか…」

アカツキ「お前…たまに黒くなるよな…」

バスター「とりあえず、質問に行くぜ」

全員に
次の四つのミニゲームの内やりたくないのは？
1．ジュラシックパックン
2．クッパの気持ち
3．ボム兵わたし
4．オットット！　つなわたり

デュエル「今回は、一つだけか…仕方がないか」

更新楽しみにしてます』まぁ皆さんは3番が一番嫌という意見が多かったですね。『フリーダム』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『ケン』さんだ。『統夜「あ～あ・・・可哀想な人達が続出・・・」

龍華「そうですね・・・誰が優勝するのか気になってしまいます」

統夜「そうだな・・・」

銀時ラバーズへ質問

貴方達は銀さんのトランクスを巡って争ってましたが・・・脱ぎたてのトランクスも狙っている変態に進化するのですか？（黒笑）

ビビへ

もしなのはがしましまパンツ収集という趣味に走ったらドン引きしますか？

リリ銀メンバーへ

もし龍華と戦う事になったらどうしますか？

統夜「一番目は腹黒いな！！」

龍華「黒神さんや黒龍さんみたいな腹黒さの素質があるのでしょうか？」『では・・・』

ラバーズ「銀さんのトラ……ゲフンゲフン！ならないよ！」

真王「どうだか。次」

ビビ「なのはちゃんは純粋のままなのよォォォォォォォォォォォォ！！！！」

真王「現実逃避か。次ですが、誰なのか知りません。『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「つぎだ。ペンネーム『支配者』さんからのしつもんだ。『１００話達成おめでとうございます。

真王さんに質問です

犯罪組織マジェコンヌは敵キャラと出てきたりしますか？』でるんじゃねぇか？ロリコンデブと正義馬鹿とバーサク野郎とか。『支配者』さん。ありがとうございます」

真王竜「つぎは『鉄』からのだ。『山崎に質問します。土方の暴行はどんな感じでしたか？』それは本人から聞こう」

山崎「いつにもましてひどいです・・・・」

白天竜「・・・『鉄』さん、廊下に立ってなさい」

光翔竜「続いてペンネーム『ウィンド』さんからの質問だ。『ウィンド「遂に対決か……」
リア「どんな戦いになるか楽しみだ」
ウィンド「質問いくZE！皆さんに質問。こいつらに勝てる？」
（バルバトス、ダンテ、ネロ、バージル、ムンドゥス、アーカード）
リア「俺からも真王にだ。ネプテューヌ達を強さをレベルで表すなら？」
ウィンド「新しい主人公考え中」
リア「そんなにだして大丈夫か？」
ウィンド「……」』」

真王「普通の人なら無理だろうね。レベルで言うなら例えるとサイヤ人よりも上と思え。『ウィンド』さん。廊下に立ってなさい」

第百一訓：荒れ地で決闘は定番（後書き）

真王「温泉羨ましいぞおい！まいっか」

真王竜「いいのか；次回『怖いものは実は身近にある』テイクオフだ」

第百二訓：怖いものは実は身近にある（前書き）

真王「屋敷エリアへようこそってか？」

第百二訓：怖いものは実は身近にある

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム２１４
剣聖チーム２１５
スマブラハーツチーム２０９
学園チーム２１３
プリティレディズチーム２２１
女神チーム２２０
とある転生チーム２１９
狂乱チーム２１０
メテンズナイトチーム２１７
ドラゴンネイルチーム２２３
リリカルライダーチーム２２１
真選組チーム２０５
異界戦士チーム２１３
リリカル銀魂チーム２１６

ドラゴンネイルチームトップ。
現在１８ターン目
次のターン・ヒーローズチーム

チームのほとんどは屋敷エリアについている。
ここ屋敷エリアはその名の通りぼろぼろとした屋敷でいかにも何か

が出そうな雰囲気を放ている。
俗にいえばお化け屋敷だ。

ヒーローズターン

相川「こういう類は苦手なのよ…」

と怖がりながらブロックをたたいて3を出す。
ノーマルマスだ。

相川はほっと安心した。

剣聖ターン

さくら「よ、よし！いくよ！」

さくらはブロックをたたいて6を出す。
ミニゲームマスだ。

森羅「さくらは一度やったからな。俺が出るよ」
レイン「まかせる」

モニターが現れた。

『5秒ミニゲーム・よけろ！』

森羅「あ？」

森羅は意味が分からず首をかしげていると、

ブーーーーン！！！！

森羅「おわぁ！！」

車輪のついたジャガイモが森羅を轢こうとしていた。
森羅はギリギリ避けた。

森羅「おいなんだ今のは！？」
真王「メイドインワリオの一つ、『暴走自動車』だ。クリアしたので１０マス進むよ」
森羅「…ま、何でもいいか」

スマブラハーツターン

マリオ「俺らの番だ」

マリオはブロックをたたいて４を出す。
ペナルティマスだ。

マリオ「ヤベッ」

モニターが現れる。

『絵にされた』

ボンッ

マリオ『あれ～～～～！？？』
スマブラハーツチーム「ええ～～～～～～～～～～～～～～！！？？」
また絵にされたマリオと驚くチーム。
真王「3ターンの間はそのまんまですね」
マリオ『ある意味ちょっとそれはないだろ…』
マリオはあきれ果てるのであった。

学園ターン

由美「どうやら私の出番のようだね？」
恭介「なんでもいいけどはやくしようよ…」
ヤルオ「僕の後ろに隠れないでよｗｗｗｗ」

恭介はヤルオの後ろでガタガタ震えている。
ヤルオはやれやれとした。
由美はブロックをたたいて5を出す。
ペナルティマスだ。

恭介「オイィィィィィィィイイイイイ！！！！！何やっちゃってんのぉぉぉぉ！！？？」
由美「・・・・・テヘッ☆」
ルシアス「殴っていいかしらあいつ」
ルーシア「いやむしろぶっ殺したい気分」

そう言ってる間にもモニターが荒れあわれる。

『キットクル、キットクル、キセツハヒトツ』

全員「?????????」

全員どういう意味かわかってない。

真王「これ『リング』である曲だぞ」

恭介「え?それって井戸の中から出てくるう幽霊のことか?」

真王「もちろん」

恭介「絶望したぁぁぁ!!!」

恭介は絶叫した。

そう言ってるうちに近くの扉が開く。

その先に井戸が一つ。

恭介（ま、まさか・・・）

恭介含めほとんどの人が汗を流す。

井戸から手がかけられた。

這い上がってきたのは髪の毛が顔にかかってて見えない女の子。

いよいよ魂が盗られると覚悟していたら、

貞子?「ばぁ～!」

ほとんどの人たち「・・・はい?」

怖さどころか可愛さ１００%の貞子だった。

由美「・・・なにこれ?これが貞子?」

恭介「い、いや～、別人だと思うよ…」
貞子たん（仮名）「なにお～！私だって怖がらせることぐらい出来るもん！！」

困惑する由美と恭介に貞子たんは抗議。
怒ったところで怖さよりかわいさしかない。

貞子たん「わ、私だって…私だって…ウワァァ～～～ン！！」

泣きだした。

由美「あ～！恭介泣かした！」
愛淫「泣かすだなんて罪な人ですね」
恭介「ちょっと待て！！なんで俺のせいなんだよ！！」
真王「お前らも同罪だろ」

恭介が抗議し真王が言う。

貞子「おい、うちの娘泣かしたのはお前らか！！！？」
恭介「ん？ギャアアア

プリティレディズターン

タバネ「さて、私の番だね」

タバネはブロックを叩いて5を出す。

何とボーナスマスだ！

タバネ「やった～！！」

レーティア「いいわよタバネ！」

ユウカ「チャンスを掴むわ」

喜んでいるところにモニターが現れた。

『扉を開いて』

タバネ「扉だね」

タバネは近くにあった扉に手をかけようとした。

ガチャバンッ！！

タバネ「ブギャァァ！！」

扉が勝手にひらいてタバネは潰れてしまった。

モニターが現れる。

『嘘だよ馬鹿め！ケケケケケ！ＢＹ幽霊』

モニターが消えると同時に足元のボーナスマスがペナルティマスに変わった。

タバネ「騙されたァァァァァ！！！」
リアス「どうも怪しいと思ってたのよね…」

女神ターン

ユニ「いくしかないわね」

ユニはブロックを叩いて5を出す。
クイズマスだ。

『百足

この漢字の名前の虫は？』

ユニ「え？…とこれってたしか…（落ち着け私！前に一度こんな感じの問題が…！）ム、ムカデ！」
真王「正解だ」

ユニは正解を引き当ててほっとした。
メンバーは喜び、５マス進んだ。

とある転生ターン

神「俺様らの番だな」

神はブロックをたたいて5を出す。
バトルマスだ。

神「ほう？いったいどんな奴なのやら？」

モニターが表れた。

『魔神王

魔神王』

するとランプの魔神的なやつが姿を現した。

魔神王「我が名は魔神王なり。主が我との戦いを欲するか？」
神「この状況ぐらい察しろよ」
魔神王「うむ、ならば貴様の力、お手並み拝見としよう」

ＩＢＧＭ神々の歌ｂｙ魔界戦記ディスガイア２
（Ｄｉｓｇａｅａ　２　－　Ｓｏｎｇ　Ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｇｏｄｓ）

神「オラぁァァァァァァァァ！！！！！」
魔神王「ぬあああああああああああああああああああ！！！！！」

ズドドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

神と魔神王がぶつかり合った時大きな衝撃が襲いかかった。
だが２人はお構いなしにぶつかり合う。

神「は！さすがに魔神王と呼ばれてないか！」
魔神王「我は魔神界の王、伊達にそう呼ばれてはいない！」
神「嬉しいねぇ！！あんま強い奴がいなくて運動不足になりそうだったがお前ならたしになるな！」
魔神王「甘く見ておると油断するぞ。残像拳」
神「グヘッ！（なんだ？避けたはずなのに…）」

神は避けたはずなのに殴られた。
そして理解した。

神「（成程。一瞬に残像を作らせて油断させてぶん殴る技ね）」
魔神王「我が技を見切ったか。ならば魔神拳」

魔神王はガノンドロフの技を使って攻撃する。
神はヒラリと避ける。

神「何度も喰らうかよ！」

そう言う神の周りに無数のスフェアが出現、それを放つ。
だが魔神王は転移してかわす。

魔神王「よい機会だ。我が奥義を主に見せてやろう」

魔神王は両腕を何か突き出すようなポーズをする（ワンピースの六王ガンをイメージ）。

魔神王「魔神奥義・魔神六王？！」

ズガギッ！！

神「ツッツヌゥウゥウゥ！！！！」

突き出された拳が大きな衝撃を産みだして神を吹き飛ばす。
神はとっさに防いだが攻撃の衝撃で吹き飛ばされた。
そしてすぐに態勢を立て直す。

神「いやいや、そんな奥義を持ってたなんてな」
魔神王「奥の手は最後まで隠して置くものだ」
神「そりゃ最もだ」

神はうんうんとうなずく。

神「こんな感じにな！」

神は闇の力が付与された収束型砲撃自在法、ダークスターライトブレイカーを放つ。

魔神王「ヌンッ！」

魔神王は拳ではじき返すが、神はすでに詠唱終了状態だ。

神「こいつをプレゼントだ。デストロイ・フォーーー

神の広範囲爆発魔法で魔神王は吹き飛ばされた。
そしてはれると立ってるのがやっとの魔神王。

魔神王「ヌハハハハ・・・、我をここまで退けさせるとはあっぱれ。
我は満足した。何時か主を超えようぞ」
神「はん！やれるもんならな」

魔神王は負けを認めた。
よってとある転生チームは１０マス進む。

狂乱ターン

リイン「リインの番ですぅ！」

リインはブロックを叩いて９を出す。
ハプニングマスだ。

『入口に戻された！』

桂「ば、ばかなぁぁぁぁぁ！！！」
はやて「なんやてぇぇぇぇぇ！！！？？」

狂乱チームが叫んでいると大きな手が狂乱チームを捕まえ、屋敷エリア入口まで戻された。

メテンズナイトターン

チフユ「私の番だな」

チフユはブロックを叩いて5を出す。
バトルマスだ。

ギルシア「あいつはバトル向くのか？」
レシア「彼女なら考えられますが…」
チフユ「聞こえているぞ！」

ひそひそ話する2人に怒鳴るチフユ。
モニターが現れた。

『デメマダラキング

ダイオウデメマダラ×5』

緑色の分厚い背中とただれた顔にカタツムリにように出ている目が特徴のダイオウデメマダラ5体出現した。

チフユ「やれやれ、私の相手がこんな奴らか」

チフユは頭をかく。

真王「おい、武器は？」
チフユ「私はこれでいい」

そう言って取り出したのは日本刀だった。

真王「ならいいが、では試合開始！」

と真王が言い切った瞬間チフユが速攻で2体のダイオウデメマダラを切り捨てた。

銀時「なっ！？」

ネプテューヌ「あの人早っ！？」

銀時達は初めて見て驚いた。

ギルドチームは目にしているためあまり驚かないが。

仲間がやられたのを見て怒ったダイオウデメマダラは突進してきたが、あっさりとかわされる。

チフユ「話にならん、下等生物」

そして突進してきた奴を一閃で切り倒す。

ダイオウデメマダラ「オオォォォ！！」

後ろからダイオウデメマダラが舌で攻撃しようとしたら、

シュッ！ズバン！

チフユが刀で舌を切り刻んだ。

当然ダイオウデメマダラはもがき苦しむ。

チフユ「一刀流、灯篭返し！！」

まるでカービィでいるファイナルカッターのような動きでダイオウデメマダラを倒す。

残り一体。

チフユ「残りは貴様か。ならばこれをくれてやる」

チフユは右手で柄を持ち、左手でさやを持つ。

ダイオウデメマダラ「グアアアアアアアアアアアア！！！！」

ダイオウデメマダラはまっすぐ突進してきた。

チフユ「一刀流居合、獅子歌歌」

ズバンッ！！

一瞬だけの一閃、ダイオウデメマダラの固い背中ごと真っ二つに切り倒した。

チフユは刀を直す。

真王「う～ん、何と素晴らしい」

真王も高評価。周りは唖然とするばかりだ。

とりあえずメテンズナイトチーム勝利。

ドラゴンネイルターン

白天竜「では私の番です」

白天竜はブロックを叩いて８を出す。

ミニゲームマスだ。

白天竜「ミニゲームですか。どんなのでしょう？」

モニターが現れる。

『暗闇迷宮を照らせ！（参加４人）』

真王「このミニゲームのルールを説明いたします。まず電球を持ってゴール先にあるソケットに差し込めば１０マス進めますが、ジャンボテレサに電球持った人が捕まると失敗となります」

夜帝竜「これか」

夜帝竜は電球を担ぐ。

真王「夜帝竜は参加する気？」

夜帝竜「ああ」

白天竜「私も参加するわ」

魔炎竜「俺らにも活躍を出すかな」

氷刃竜「メタ発言よ」

真王「４人参加決定、ではミニゲーム始め！！」

白天竜「まずは、このデカブツを…」

真王「おい、攻撃でもしたらその場で失格にするからな。ミニゲームを台無しにすんじゃねぇ」

白天竜達がジャンボテレサに攻撃しようとしてその場でぴたっと止まる。

夜帝竜「じゃあどうするんだよ！」

真王「逃げとけ」
ルイージ「そういうルールだし…；」

結局そんなことに、とりあえず白天竜達は襲ってくるテレサを追い払いながらソケットまでついた。

夜帝竜「ここか。ったくてこずらせやがって」

夜帝竜はソケットに電球を差し込む。

ピカーーーーーーーーーー！！！！

白天竜「きゃあああああああああああ」
魔炎竜「うおっ！？まぶしっ！？」
夜帝竜「目がぁぁぁ！！目がァァァァァァァァ！！！」
氷刃竜「まぶしィィィィィィィ！！！」

突然の光にもだえる４人。
もちろんテレサたちも。

真王「うむ。どうやらクリアしたようだね」

ドラゴンネイルチームクリア。
ちなみに目を直した。

リリカルライダーターン

セイバー「では我々のターンです」

セイバーはブロックを叩いて6を出す。
パーティマスだ。

『のっかれボールロワイアル（ネプテューヌＶＳヴィータＶＳアリアＶＳコヨリ）』

そこで4色色違いのボールと円状のステージが現れた。

真王「ボールの上に乗ってステージ外まで落とし合うゲームだよ」
ネプテューヌ「面白そう！・・・うわとと」

ネプテューヌは邪王兵に掲げられ、ボールの上に乗る。
少しバランスを崩しそうになる。

真王「そんじゃあ始め！」

ヴィータ「まずテメェだぁぁ！！」

ヴィータがネプテューヌに向かってつっ込んで来た。

ネプテューヌ「うわ！」

ネプテューヌは器用に横に避ける。
無論ヴィータはすぐに止まれない。

ヴィータ「いや待て待て待て待てアアア

真王「ハイヴィータ失格」
ネプテューヌ「ごめんね～」

なのはともあれ試合続行。
そして長い激闘の末、コヨリは飛ばされる際にバランスを崩して落ちた。よって失格。

ネプテューヌ「これで勝つる！」
アリア「にゃあ、私が勝つ」

ネプテューヌとアリアの一騎打ち。
だが、

『タイムアップ、ドロー』

真王「残念、誰も進めなかった」

まさかのタイムアップで2人は落ち込んだ。
落ちた2人は少しやばかった顔をしてた。

真選組ターン

近藤「俺達の出番だ」

近藤はブロックを叩いて2を出す。
それは黒くて骸骨マークのマスだった。

真王「あ、デンジャーマス踏んだね？」
近藤「で、デンジャー？」

近藤は冷や汗を流す。

真王「そのマスをふんだらチーム全員というか全てのチームに罰ゲームを受けることになる」
全員「なんだってぇぇぇーーーーーー！！！！！？？」

全員が驚愕。
モニターが現れた。

『リリカルお登勢降臨！』

全員「・・・・・・はい？」

全く意味が分からないようだ。
するとお登勢さんが現れる。

新八「お登勢さん！？なんでここに？」
お登勢？「お登勢？ちがうね。あたしはお登勢であってお登勢じゃない。そこの作者が作った幻想体にすぎないのさ。ちなみに本物は江戸で元気にしてるよ」

お登勢は否定する。

お登勢「そしてあたしは魔法で世界を救う魔法使い」

全員揃っていやな予感がした。

リリカルお登勢「魔法熟女リリカルお登勢なんだから！」

なのはバリアジャケット姿のお登勢に変わった。

全員「ギャアアア

真王「・・・やりすぎたか？」

真王は選んだ内容を間違えたかと後悔したらしい。

一方とある場所

マルクス「・・・ゴホゥッッッ！！！（吐血）」

マリアネス「マルクスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

カスタトロフィー、リエナ、ティエス「オボロロロロロロロロロロロロロロロロロロ」

アザゼル「ママァァァァァァン！！」

グローリア「なんなんだこの老婆はぁぁ！！！やってて恥ずかしくないのか！？というかめっちゃ吐き気が…、デニーそっちは？」

デニー「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

殺神貴まどか、虚無（ホロウゼロ）「・・・・・・（真青で寝込んでいる）」
監視していた彼らまで被害が出たらしい。

さらに別の場所

レギス「ゴフッ！！（吐血）」
ジーク「グハァッ！（吐血）」
エンツ「時報はもういやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
エルシャダイ「・・・・・・（石になっている）」
ダヌ「俺の乙女グブラバハぁぁぁぁ！！！（大吐血）」
ラグーシス・スネーカー・イヴ「オボロロロロロロロロロロ！」
カオストール「私が死んでも第二第三の私が……グハッ！（吐血）」

こっちも被害が出た。
リリカルお登勢、恐るべし。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ソニック「ＨＥＹ！アシストはおれがやるぜ！」

冥王「私の出番なの～」

銀八「じゃあ行くぞ。ペンネーム『ウィンド』さんからだ。『銀「かっこいいなセレス。惚れちまうぜ」
リリス「伊達に魔神はやってないってことか。質問いにく。ハードの皆さんに。只今そちらで修行しているリアとシエルはどのくらい強くなりましたか？」
銀「こちらも。銀時にだ。以前ラバーズがトランクス取り合ってたよな？そんな変態やめてネプテューヌと付き合え。俺はネプテューヌを応援する。何気にお前とお似合いだぜ？」
リリス「んじゃ。リアたちによろしく」
銀「兄貴がそろそろ更新始めるらしいぜ」』ズバリお答えしましょう」

サタン・ザ・ハード「今のところサイヤ人と互角レベルだね。でもまだまだ行くよ」

銀時「いや、そんなことしたら俺しにそうなんですけど…」

真王「サタンはスパルタだな。『ウィンド』さん、廊下に立ってな

さい。次はペンネーム『支配者』さんだ。『今回は百合物とバトルでしたね。

質問です。

1、チートキャラが多すぎて銀時達の強さが目立たなくなってきたんですがレベルでいえば銀時達はどれくらいの位置なんですか？

2、チートキャラの仲間が多すぎて鬼兵隊じゃもう全く相手にもならないようなの状況になってきたような気がするんですけど…大丈夫ですか？

3、マジェコンヌ四天王は鬼兵隊の所にいるマジェコンヌの手下ですか？

現実的な質問ですいません。今回はこれで」』銀さんらはランクでいるとAあたり。そして安心してください。『ヴァーラガルザ』さんが悪役作ってたみたいで。そして最後にその四天王は部下と認識してください。『支配者』さん、廊下に立ってなさい」

ソニック「次だぜ。ペンネーム『なめ猫』だ。『質問

チートすぎるハード達全員へ

「もうあんたらだけでネオ達を楽につぶせる…そんな気がするが？」

ノワールへ

「決めゼリフや登場セリフ考えまくってるけど、最近どう？」

ヤルオへ

「いつか前に、全ての女を支配するといったね？それはつまり…改

心前の誠かその父親同様、女独占することに変わらないってことだな？そう受けとるよ、ＯＫ？」

俺「ではまた」『作者どうなんだ？」

真王「確かにそうです。けど干渉は少しだけですので」

ノワール「それを私に聞くな！！」

ヤルオ「失敬な。僕はそこまで非道じゃないおｗｗｗｗｗ」

真王「『なめ猫』さん、廊下に立ってなさい」

冥王「次はペンネーム『鳴神ソラ』なの～、『マリオ「温泉良かったな」↑頭にタオルを乗せている。

クッパ「うむ」↑銭湯の定番牛乳を飲んでいる。

フォックス「ある意味羨ましいな」

スネーク「それにしても冥王は？」

マリオ「修行中」

明久「いや～堪能出来た～」

ネス「質問『冥王とサタンの砲撃を受け止める勇気がある人いますか？ちなみに真王さんと邪王さん以外で』」

リュカ「アンバリーさんに質問『武器で作るなら何にしますか？』」

フォックス「質問『使いたいポケモンは何だ？』」

次回を楽しみにしてます♪』ズバリ答えるの」

真王「ギルシア、レオン、ガレーナ、チフユあたりかと思います。ちなみにポケモンではゼクロムですかね」

アンバリー「サイコガンだよ」

真王「おい！・・・『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。

しかし…サタン・ザ・ハードの強さは半端ネェな…（汗）。まぁ…冥獄凶砲魔王（なのは）とは違って理不尽な事をしない分、純粋に可愛いと思える訳だけど…。

輝刃「…後で彼女（なのは）にブッ飛ばされなければいいのだがな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．転生者組（レジィも含む）に質問…『トリコ』に出てくる『グルメモンスター』の中で食べてみたいのは何なんだ？

あ～…確かに、結構魅力的に美味しそうなのばかりだもんな…。次は俺からだ。

2．守護女神達に質問…もし自分達の通り名が戦国ＢＡＳＡＲＡ風だったら、どんなのになりそうだと思う？

輝刃「確かに…あの作品における武将キャラの通り名って、結構理にかなっているからな…。まぁ…守護女神達の場合だと、一部とんでもないのが来そうだが…（汗）。」

ハハハ…確かに（汗）。特にドエムのとか色欲のとか…（滝汗）。』トリコ見てませんがワンピースコラボで見ましたので、」

男性陣転生者組「マルヤキブタで」

真王「それからＢＡＳＡＲＡ見てないのでわかりません。が、『黒神』さんのとこに同じ質問が見えたので参考にしてみると、」

『チート・ザ・ハード：絶対異常

バーサーク・ザ・ハード：狂気猛者

ゴッド・ザ・ハード：超神王者

ジャイアント・ザ・ハード：巨人戦女

サタン・ザ・ハード：冥獄魔王

エレメント・ザ・ハード：魔道属性

ドラゴン・ザ・ハード：魔竜豪神

マッハ・ザ・ハード：音速閃光

ファントム・ザ・ハード：呪怨幻霊

クイーン・ザ・ハード：暗黒女王
バグ・ザ・ハード：超虫大神
ナース・ザ・ハード：医療天使（殺堕天使）
シャドウ・ザ・ハード：漆黒月光
サムライ・ザ・ハード：白銀女神
ロリータ・ザ・ハード：小体猛者
ソニック・ザ・ハード：音波歌士
マゾチック・ザ・ハード：努恵無王
プラント・ザ・ハード：幻想乱華
エッチ・ザ・ハード：色欲女王
ビースト・ザ・ハード：幻獣王者』

真王「『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

冥王「次なの、ペンネーム『ケン』さんなの。『統夜「いや～気持ち良かったな」

達哉「ああ。それにしても・・・大きかったな」

後ろに黒いオーラを纏った達哉ラバーズがおり、統夜は顔を青ざめ

た。

統夜「あ、あの～・・・達哉・・・胸の話はいいけど・・・後ろを」

統夜に言われるがまま後ろを振り向いた瞬間、顔をサァーっと顔を青ざめた。

フィーナ「達哉・・・ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしましょう」

麻衣「統夜さん。お兄ちゃんを借りますね」

統夜「あ、ああ・・・」

菜月「行きましょう」

朝霧ラバーズの皆さんは達哉を何処かへ連れて行った。

統夜「さ、気を取り直して・・・凄まじい戦いだったな。メアリ・・・ご愁傷さまだったな」

メアリ「うぅ・・・あれはきつかったわ・・・」

ご愁傷さまとしか言えない・・・魔神や竜とか・・・規格外同士の戦いだからね。いずれお前もああいう戦いが待っているさね。質問に入りましょうか。

真王さんへ

新しく出るＰＳＶｉｔａについてどう思いますか？

貧乳党の皆さんへ

貴方達は温泉に入り、胸の大きい人達を見てどんな絶望を抱きましたか？詳しく教えてください（黒笑）

以上です。

統夜「しかし・・・咲夜とシャルさんは同じ９２だな」

偶然だね。巨乳って素晴らしい限りだ・・・

メアリ「統夜は大きいのが好みなのかしら？」

統夜「そ、そんな事は無いぞ。もし温泉に入って胸を見てた事がこっちのはやてにバレたら死んでるかもね」

メアリ「それは・・・本当になるから止めなさい・・・って本当に来たァァァァァ！！！！」

そう言うと黒いオーラを纏ったはやてが現れた。

はやて「ほう・・・胸の大きな人の胸を見ながら入ってたんか・・・私も・・・それなりには大きくなったのに・・・」

統夜「あ、あの～・・・本当に落ち着けって！！」

メアリ「お、落ち着いて！はやて！！」

安心しろ！はやてはＳｔＳ時代になればフェイトに匹敵するスタイルになっから！

統夜「おいいいいい！！！」

はやて「ほな・・・頭を冷やしてな～」

黒い笑みを浮かべながらラグナロクを二人に放った。

統夜、メアリ「どわあぁぁぁぁぁぁ！！！塵と化すゥゥゥゥゥゥ！！！」

黒焦げになり気絶した二人をはやては連れて帰ったそうな。

最後に銀時ラバーズとアリアに銀さんとネプテューヌ（ハープルハート）の絡みのあるエロ同人誌を差し上げます。

遊輔「なに、とんでもないものを贈ってるんだよ！！！」

次回も楽しみにしています』作者さん？」

真王「買える金ねぇよ…、すごい機械だけど…・・・ん？（ユニの妹的な奴でも？）」

冥王「作者はほっといて次いくの」

貧乳組「すっげぇうらやましいぞこんちくしょおおお

回はバトルが多かったですね」

黒龍「まぁ最後は皆で温泉って展開になりましたね」

アリス「中々気持ち良かったぞ」

アリア「にゃ～…良かった」

ソラ「そうだな」

リリス「それにしても、神楽ちゃんがアリスさんの胸に嫉妬してたのが見えたんですけど…（汗）」

黒龍「二年後の神楽も結構胸が大きいですけどね」

アリス「確かそうだったな」

黒龍「それで新八がかなり神楽の事意識していました」

銀時「そう言えばアイツまったく変わってなかったよな」

黒龍「寄生型エイリアンでも新八を成長させられなかったって事でしょうか？」

銀時「それある意味悲惨だな」

神楽「そうアルな」

黒龍「じゃあ質問します」

1．ネプテューヌに質問。今の所戦ったら絶対勝てないと思う相手はいますか？

2．ネプテューヌに質問。デスノートのLと頭脳勝負して勝てますか？

3．真王さんに質問。アニメやゲームやマンガで真王さんが一番嫌いだと思ったキャラとかいますか？

黒龍「今回はこれで終わりです。次回も楽しみにしています」『」

ネプテューヌ「う～ん、レオンさんあたりかな～。あと無理です」

真王「ネプテューヌは頭脳戦は苦手なんだよ。特に思いつかないです。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

第百二訓：怖いものは実は身近にある（後書き）

真王「次は浜辺のエリアだぜ！」

冥王「次回「海に来たらみんな遊びたい」テイクオフなの」

第百三訓：海に来たらみんな遊びたい（前書き）

真王「今度は海エリアだぜ！あ、違った。浜辺エリアだ」

第百三訓：海に来たらみんな遊びたい

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム２５０
剣聖チーム２５０
スマブラハーツチーム２５０
学園チーム２５０
プリティレディズチーム２５０
女神チーム２５０
とある転生チーム２６１
狂乱チーム２５４
メテンズナイトチーム２５６
ドラゴンネイルチーム２５７
リリカルライダーチーム２５３
真選組チーム２５６
異界戦士チーム２５４
リリカル銀魂チーム２６２

リリカル銀魂チームトップ。
現在２４ターン目
次のターン・異界戦士チーム

次のエリアは浜辺エリア。
白い砂浜と奇麗な青い海のステージだ。
・・・え？ほとんどのチームが２５０になってるって？
簡単だ。みんなハプニングマスを踏んで、

『津波注意』

メア「またかよ！！ってうわあああああああああああ！！！」

ザバーーーーーン！！！

津波に飲まれて２５０マスに戻されていっているからだ。

銀時「テメー！ハプニングなんて踏みやがって！！俺らがトップだったのに！！」
勇華「やだ～、体びしょびしょよ」

銀時はメアに怒鳴り、勇華は濡れた体を見て言う。

セレス「さすが浜辺エリア。津波で戻すだなんてな」
ジャンヌ「チームのほとんどびしょ濡れだよ～」
ビビ「ぅぅ、しょっぱい（＊Д＊）」
マリオ「本物の海その物だな」

チーム全員みんな被害にあっているようだ。

銀時「あ～、クソ。もう一回だ」

銀時はブロックを叩いて３を出す。
またハプニングマス。

銀時「ゲッ！？」
新八「お前もかイィィィいい！！！！」

新八のツッコミが炸裂。
モニターが現れる。

『水着装備』

シュン

モニターが現れると同時に全員の姿が水着姿になった。
男性陣はトランクス。
女性陣はビギニかスク水あたり。

なのは「にゃ！？」
ジャンヌ「おお！？いつの間に！？」
ギルシア「海だからか？」

海と言えば水着だろ？ＢＹ真王

全員「そう言う問題か！？」

全員揃って地の文に突っ込んだ。

レーティア「まぁ服のまま濡れるのはいやね」
ジャンヌ「じゃあこう言うステージではこのままなの？」
シャル「そんなとこじゃない？」
ベール「海といえばこういうものですわ」
タバネ「おお～、それもいいね」

ユウカ「フフッ、負けるのはあなた方ですよ」
レオン「聞き捨てならんな」
ガレーナ「うむ」
咲夜「私だって～」
白天竜「氷刃竜、ともに優勝しましょう」
氷刃竜「ええ」
冥王「負けないの！」
アリス「ふ、優勝は私だ」
アリア「にゃあ、私」
相川「みんなしていいわね」
メアリ「まったく」
シャリアローゼ・勇華「ウフフフ」

とやる気満々の女性陣。
動く度につれて彼女らの素晴らしいメロンがプルプルユサユサポヨポヨ揺れ動く。
男の子の生理現象が動かないわけがない。
男性陣（なんかムラムラする…）

そこはほっといてヒーローズターン

相川「行くわよ！」

相川はブロックをたたいて9を出す。
デュエルマスだ。

相川「さて、だれと対決かしら？」

モニターが現れた。

『ビーチバレー対決（相川ＶＳアリス）』

相川「ビーチバレー…か…」
アリス「よくわからんが面白そうだな」

２人はビーチバレーのステージに立つ。
そして試合開始。

アリス「フッ」
相川「えええええいい！！」

相川とアリスはボールを打つ打たれる打ち返すの繰り返し。
しかも動く度にメロンが揺れる。

神「イヤぁ絶景だね」
銀時「メロンが動いている…」
新八「駄目な大人が何見てるの！！」

神は興味本位で、銀時は下心で見ているだけだ。

そして試合終了。
結果はアリスの勝ち。
相川は少し悔しそうで、アリスは少し満足げだ。

剣聖ターン

ブロックで５を叩き、ミニゲームマスを踏む。

『ぐらぐら綱渡り』

咲夜が挑戦し、バランス保ってなんとかゴール。

スマブラハーツターン

明久「よし、僕の番だ！」

明久はブロックを叩いて４を出す。

ペナルティマスだ。

明久「ゲッ！？」

と言ってる間にモニターが。

『タコ殴り』

ベシッ！

明久「へブッ！」

大きさ１０メートルのタコが明久を殴った。

ルイージ「明久くゥゥゥゥゥぅぅん！！！」

クッパ「地味な…」

銀時「そっちのタコ殴りかよ！！」

タコが殴る方だった。

学園ターン

ルシアス「さて、私の番ね」

ルシアスはブロックを叩いて5を出す。

ルシアス「どんなミニゲームかしら？」

『くぐりぬけ！リンボーダンス！』

モニターが現れると人間の腰あたりの高さに棒がある。

ルシアス「クリアすればいいのね、任せなさい」

ルシアスは倒れないくらいにバランスをとって棒の下をくぐりぬける。

ただなれないことなのか足はプルプル震えている。

そしてくぐりぬけた。

ルシアス「こんなもんね（あ～しんどい）」

女神ターン

ベール「次は私の番ですわ」

ベールはブロックをたたいて4を出す。
ペナルティマスだ。

ベール「・・・いったいなんなのかしら？」

不安になっているベールにモニターが現れた。

『奪われた趣味』

ベール「はぁぁ！！？」

ベールは意味が分かんないというつっ込み。
するとモニターに商人（邪王兵）と客（美魚）がいて、

美魚『それら全部ください』
邪王兵『アイヨ』

袋から美男子写真とＢＬゲームが見えた。

ブツンッ

ベール「い〝や〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ベールはショックを受けて気絶した。

ネプギア「ベールさんの宝物が持ち出されましたね…」
ユニ「いつもああいうもの大量に持ってるしかも末期症状レベルまでやるぐらいよ。いい薬じゃない？」

ネプギアは汗を流し、ユニはやれやれと首を振る。

とある転生ターン

シャリアローゼ「私の番ね」

シャリアローゼはブロックをたたいて１０を出す。
ノーマルマスだ。

シャリアローゼ「チッ」
グレイ「なぜ舌打ちする」

グレイは突っ込みを入れた。

狂乱ターン

桂「よし！この俺の運を見せてくれよう！」

桂はブロックをたたいて４を出してしまった。

『落とし穴』

ボコッ！

狂乱チーム「あああああああああああああああああああああ！！！！！」

狂乱チームは落ちてしまった。

全員「あほだ…」

そう思わずにはいられない一同であった。

メテンズナイトターン

ギルシア「へ、今度は俺様たちだな」

ギルシアはブロックをたたいて１０を出す。
バトルマスだ。

ギルシア「さて、どんな奴が相手だ？」

ギルシアがわくわくしているとモニターが現れた。

『絶望なる闇の化身・ロソノアレ・イヴ』

すると髪はピンク、目は赤色、服は『フェイトステイナイト』の黒桜の服（あれは服といえるのか？）で年齢は１６歳ぐらいの少女が現れた。

イヴ「は～い？私の対戦相手は誰かな？」

ギルシア「・・・おい真王！俺様の対戦相手がこの激萌美少女か！？」

イヴ「／／／／／」

真王「んあ、そうだ」

ギルシアの美少女という単語に反応して少しほほを赤く染めるイヴ。
真王はそっけなく答える。

ギルシア「・・・タバネ！アンバリー！敵のスリーサイズを調べろ！」
タバネ、アンバリー「ラジャー！」

新八、ティアナ、ルイージ、ノワール、ユニ、山崎、レイン、森羅、恭介
「ラジャーっておい！！？」

ギルシアが予測を超えた命令に2人はスタンバイ済みでこたえ、突っ込み組は突っ込む。

タバネ「ロソノアレ・イヴ、Ｂ８５／Ｗ５６／Ｈ８７、体重は４６キロの１６歳！そして下着は上下ともにシルクの白！」
ギルシア「何だとぉぉぉぉ！！！？？」
ティアナ「どうでもいい情報を入れるなぁ！！！」

ティアナが驚くギルシアに怒鳴る。

アンバリー「ちなみに彼氏なし１６年、あだ名は『イヴちゃん』」
新八「なおさらどうでもいいわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

新八もあきれすぎて怒鳴る。

ギルシア「それだけわかれば十分だぁぁぁ！！！」
新八、ティアナ「何がどこにわかったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

！！！？？？」

シンクロ率の高い突っ込みが木霊した。

新八「レーティアさん！あんなのが父親でいいんですか！？っていうかリルちゃん出来ちゃったんですけどね！」

ティアナ「そうよ！あいつまだ女の子相手にああなってるのよ！」

らちが明かないと思ったのかレーティアに言う2人。

だがレーティアは顔を赤くして言う。

レーティア「相変わらずねギルシアったら？そこも私の好みにぴったりよ？」

新八、ティアナ「あんたの好みの基準がわからねぇぇぇぇえええええええ！！！！！！！」

・・・本当にシンクロ率の高い突っ込みだった。

レーティア「でも、浮気なんてしたら許さないけどね…」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

レーティアが黒いオーラを発する。

見ていた人らは触らぬ神に祟りなしと固く誓った。

イヴ「私を倒すの？でもね、痛い目に会うのはあなたよおバカさん？」

ギルシア「聖書ではこう書かれている。右に殴られたら、左にパイルドライバー！！」

ギルシアが本を開いて意味深なこと言って殴ってきた。

スカッ

だがイヴの体がすりぬけた。

ギルシア「ぬ！？」

スカスカスカスカスカ！

ギルシアは拳を振るも全然聞かない。

イヴ「あははは！それが攻撃？こうやるのよ！」

ギルシア「グア！」

イヴは手に黒い炎を纏って攻撃した。

ギルシア「攻撃が当たらねぇ…」

イヴ「あなたと私じゃポテンシャルが違うのよ」

あざ笑うかのようにいうイヴ。

ギルシア「それになんだ？力が思うように出ねぇ」

イヴ「エネルギーを吸収してるもん」

ギルシアが手をグッパしているとイヴがいう。

イヴ「そんなわけだから、くたばりなさい？」

イヴはギルシアに容赦なく攻撃を開始する。

まずは黒い魔力弾を売ったり武器を作って攻撃したり力を吸い取っ

たり核兵器や属性魔法で攻撃したりさまざまな攻撃でギルシアを苦しめる。
その上攻撃が効かないので一網打尽だ。

ギルシア「ぐあああああああ！！！」
イヴ「よわいよ～。全然張り合いがないよ」

イヴはつまんなさそうにい五体満足のギルシアに言う。

イヴ「ま、私達極神十傑集に手を出した時点であんたの死は確実だけどね」

イヴは手に闇のオーラを纏う。

ギルシア「・・・・・・ク、ククク、いいたいことはそれだけか？」
イヴ「！？」

するとギルシアが血だらけにもかかわらず起き上がった。

ギルシア「一つ予告を言ってやろう。お前はこの後俺に跪くんだよ！」
イヴ「・・・頭いかれた？」

イヴはギルシアの言葉をそんな解釈した。

ギルシア「ディーンドライブ、フォックスバウンド！」

ドガッ！

イヴ「！！？」

ギルシアの高速攻撃がイヴの顔を殴った。

ギルシア「にがさねぇよ。リトルボーイ！！」

イヴ「くあっ！」

今度は炎を纏って攻撃。

イヴ「な、なんで！？どうして！？私の体は」

ギルシア「誰も触れない？ところが俺は殴ることが出来る。それは」

ギルシアがいうとおでこに目が出た。

銀時、新八、恭介「ぎゃあああああああああああ！！！」

当然怖がる人もいるが。

ギルシア「俺の『第二の目（セカンドサイト）』に不可能はねぇ！！」

レーティア「この世に見えざる存在を支配する能力よ」

イヴ「で、でもあなたは私の力でによって吸収される」

ギルシア「確かにそれは厄介だ」

だがな、とギルシアは付け加えて、

ギルシア「テメェの能力（ちから）を奪えばいいだけだ！！」

とギルシアはイヴを捕まえて頭突き。

ギルシア「テメェの力、覚えた！」

イヴ「そんな…！」

形勢逆転となった。

ギルシア「てめぇのちから、残さず俺が喰らい尽くしてやるぜ！！
ウオオオ

十字切って戦闘終了の合図となった。

真王「ギルシア勝利。おめでとう」
ギルシア「へ！当然だ」
レーティア「かっこいいわギルシア？！」

ギルシアとレーティアはくっつきあう。
やっぱ夫婦馬鹿だ。

イヴ「ぅぅ・・・」

イヴは目を覚ます。

レーティア「あら？目が覚めたのね。ちょうどいいわ。ギルシアが宣言したようにあなたは忠誠を誓うことになるのよ」
イヴ「何言ってるの！誰がそんなこと！！」
レーティア「ふ～ん、そう？」

レーティアはニィィと小悪魔のように笑った。

レーティア「だったら…教育（しつけ）が必要ね」

レーティアの顔が超ドSになっている。

真王「他チームがちょっかい出すなよ。と言っても戦闘終了何で何でもいいがな」
全員「いいんかい！！」
レーティア「そう、だったらしつけにちょうどいいプロとかいるかしら？」

真王「いるぞ。名前からして女王にふさわしい…」

真王がいうとカツカツと足音を立ててある女性が現れる。
黒のロングヘアーに金色の瞳でレオタードのプロセッサユニットを身につけて女王にふさわしい。

真王「クイーン・ザ・ハードだ」
クイーン・ザ・ハード「あなたかしら？教育されたいと言うのは」

クイーンの笑みを見て真っ青に染めるイヴの顔。
そしてそのままずるずると引きずられていった。
ほとんどはイヴに合掌するのだった。

ドラゴンネイルターン

光翔竜「フェイト様ぁぁぁぁぁ！！！！僕に力をォォォォォォォ！！！」

といいながらブロックを叩く。
出た目は3マス。ハプニング。

『津波発生』

全員「またかぁァァァァァァァ！！！！！」

ドバーーーン！！！

またもや津波で戻される。

結局抜け出すのに長く時間がかかったそうだ。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

森羅「アシストは俺、森羅だ」

咲夜「その姉の咲夜よ～」

銀八「逆だろ。ペンネーム『なめ猫』さんからだ。『ラムザ「はいどうも、どんどん進んで行ってるね。半分は…行ったか？」ラルム「んー…今２５０前後あたりだから…まだ続くね」ラムザ「あと１５エリアといった所か…にしても、いまだ形勢が見えないね。誰が勝つかまだわからないよ」ラルム「一気に差をつけるのは、いつになるんだろうね？これ、１１月か１２月まで続くかもしれないし、まだまだ時間あるよ」

ラムザ「そうだね。案外、この物語の峠なんだろうし」
ラルム「ネプちゃん達、頑張ってー」

質問

パープルハート様とネプギアへ
「二人の剣技をアピールするとしたら、自分にどんな別称をつける？（例　紫の剣聖とか、ブレイブスレイヤーとか）」

ベールへ
「最近、やりたい・またはやってるエロゲーとかある？」

銀さんへ
「次回、将軍様が来るかもね？ブリーフで」

ラムザ「もうつっこまないよ…；」『順番にお答えしよう」

パープルハート「パープルスレイヤー、そんなとこね」

ネプギア「私もそれで」

ベール「『男の娘大全』というゲームを（ｒｙ」

真王「出す予定はないです。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

森羅「つぎ、ペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『フォックス「うぷ」

明久「；」

リュカ&ネス&クッパ「ｏｒｚ」

マリオ（絵の状態）「何があった？」

ルイージ「見てないの兄さん？」

マリオ「倒された…それで？」

リリカルお登勢を見せた。

マリオ「強者と見た」

ソニック「ＹＥＳ」

スネーク「よう言えるな」

冥王「質問なの『何でリリカルお登勢を作ったなの？』」

ムッツリーニ「……転生者側に質問『オーケストラをやるなら楽器は何を使う？』」

リンク「質問です『屋敷エリアはテレサのお屋敷をモチーフにしたんですか？』」

次回を待ってます！』なんでもプリキュアお登勢をネタにしてみたって言ってたぞ？・・・う！想像したら吐き気が…」

真王「しっかりしろ。３つめはマリパ８の迷宮をモチーフにしたんです、そして２つ目」

レーティア「チェロよ」

ジャンヌ「私も」

シャル「でっかいラッパだよ」

ギルシア「俺は打楽器だな。太鼓の」

リアス「フルートよ」

イッセー「木琴で」

レオン「私はどうも無理だ」

ユウカ「バイオリンね」

ナリア「チェロで」

タバネ「ピアノでＯＫ」

ガレーナ「余は壊してしまうから無理だ」

レシア「糸で音を弾くあの楽器です」

ヤルオ「笛でＯＫ」

ルシアス「そう言うのは苦手よ」

ルーシア「私も」

アルテス「バイオリンで」

チフユ「指揮者だな」

森羅「成程な。『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

咲夜「次は～、ペンネーム『月光閃火』さんよ～。『ども…月光閃火だ。

しかし…幻想とは言え、あのお登勢の婆さんのコスプレは無理があるよ…（汗）。回想辺りの若いお登勢ならまだマシだが…。

輝刃「だな…。他の敵キャラまでもがお登勢婆さんの年甲斐の無さすぎるコスプレで阿鼻叫喚の地獄絵図と化していたからな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．真王に質問…もし鬼兵隊の面々がお登勢婆さんの年甲斐の無さすぎるコスプレを見たら、どういった反応を見せると思うんだ？

あ～…（汗）そりゃそっちも阿鼻叫喚は起こりそうだな…（汗）。特に変平太辺りが重症になりそうだ…（滝汗）。次は俺からだ。

2．クイーン・ザ・ハードに質問…もしかして、意外と寂しがり屋？

輝刃「…なかなかストレートな所を行くな…（汗）。けど、確かに普段から高圧的な人は…意外と心が純粋だったりするからな…。」

だろ?だからとりあえず、ナデナデ♪（そういって、遠隔技法でクイーン・ザ・ハードの頭を優しく撫でる）』」

真王「まず高杉以外は悶絶します。これは確か」

クイーン・ザ・ハード「そんなことはないわよ。暇だと感じたら遊びに行くだけだし」

真王「というわけで『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次、ペンネーム『ケン』さんだ。『統夜「あれは何処かの漢女と同等の破壊力を誇るな・・・」

あれは恐ろしいからね・・・いいハプニングマスを思いついた。

はやて「何や?」

真恋姫無双に出てくるチョウ蝉と卑魅呼の二人のセクシーポーズを見なくてはいけないという内容を・・・

統夜「おいぃぃぃぃ!!?それは恐ろしいものを考えたな!!」

はやて「それはあかんて!!」

閃いた事だからしょうがない・・・質問するか・・・

転生者達へ

リリカルお登勢を見てどれぐらい気持ち悪かったですか?

真王さんへ

恋姫無双は知っていますか？

タバネさんと源外さんへ

一番興味のあるＩＥＳはどれですか？
現在出ているのはＩＥＳ、ＢＩＥＳ、ＴＩＥＳ、ＯＩＥＳ、ＭＩＥＳ、ＤＩＥＳの六つです。尚出力が高いのはＭＩＥＳです。

以上です。

統夜「次回はどうなるか分からないな・・・」

はやて「次回も楽しみにしていま～す」『・・・ああ、あいつらはこの世が終わりそうだったってな」

真王「知ってるよ。動画で見てる」

タバネ・源外「ＭＩＥＳだな（だね）」

銀八「んじゃ『ケン』さん、廊下に立って若本さんと立ってなさい」

森羅「うぉい！！・・・まいっか。ペンネーム『烈火竜』さんからだ。『質問
たくさんのキャラクターを登場させていますけど、ややこしくなって大変ではありませんか？』・・・どうなんだ作者？」

真王「・・・確かにややこしさが残ります」

咲夜「確かに大変ね～。『烈火竜』？廊下に立つのよ～」

真王「へい次、ペンネーム『白い奇術師』さんだ。『質問

シロ「どうもシロです。こっちの銀ちゃんに質問、甘い物を食べてる場面がありますが、糖尿のほうは大丈夫なの？あとこれあげる」

『シロ特性の酔い止め薬（丸薬タイプ）』

飲めばすぐに酔いが消えますが一定時間不幸体質になる副作用があるのでよく考えて使ってください。』」

銀時「心配すんな。大丈夫だから（嘘です）」

真王「というわけだ。『白い奇術師』さん。廊下に立ってなさい。おっとバトン作るか」

『まだまだオリジナルバトン公開します！

このバトンは敵の攻撃で状態異常を起したときにどんなセリフを出すかというバトンです。

キャラは上から順にハードメンバーでサタン、ジャアント、マッハ、ファントム、サムライ、エッチ

1：毒

「やるね…」

「何のこれしき！」

「これじゃ最高のスピードが出ねぇよ」

「効かないよ？」

「う、気持ち悪いな…」

「侵される!?それもいいかも?」
2：猛毒
「これしき!」
「やってくれるな!」
「頭がいてぇ…」
「だからきかないって」
「あ～、だるい」
「死の恐怖が…」
3：マヒ
「体が、しびれる…」
「ピリピリするな・・・」
「うごけねぇ…」
「幽霊だからきかないホロロ」
「ピリピリするな・・・」
「あん!しびれる～♪」
4：ヤケド
「あっつ!」
「熱いな…」
「あっちぃな!」
「何かむわっとしたよ?」↑無傷
「耐熱モードがいるな」
「蝋燭で攻めて!」
5：氷結
「寒いね…」
「しぬか」
「ここでスピードだしたら凍っちまう…」
「寒くていたずらできそうにないホロロ…」
「あ～さみさみ、しもやけになる～」
「ひんやりするわ～」
6：石化

「くっ！しまった！」
「舐めやがって！」
「しまった！」
「・・・・・・」↑既に固まった
「かっこよくポーズキメときゃよかった」
「・・・・・・」↑魅了のポーズとなって固まっている
7：眠り
「スヤスヤ、スヤスヤ」
「ぐが～」
「カー、カー」
「幽霊は寝ないよホロロ」
「ガ～、ガ～」
「ムニュムニュ・・・」
8：沈黙
「・・・・・・」↑「これはやられたね」と言いたいらしい
「・・・・・・」↑「声が出ねぇな・・・」と言いたいらしい
「・・・・・・」↑「声が出なくてもいけるぜ！」と言いたいらしい
「・・・・・・」↑「声が出ないと脅かすことができないよホロロ…」と言いたいらしい
「・・・・・・」↑「あーあー、本当に出ねぇな…」と言いたいらしい
「・・・・・・」↑「無言プレイ？緩すぎるわ！」と言いたいらしい
9：ド忘れ
「えっと？なんだっけ？」
「あ？何だお前ら？ちっせぇな」↑自分がでかいことを忘れている
「何キロまで言ったっけ？」
「ホロ～？」
「ここはどこだ？私は誰だ？」
「もっとこう…すごいプレイをやってたような…」
10：混乱

「み～んな死ねばいいのさぁ！！」
「つぶれろこのチビめ！」
「早さが足りないぃいいいいいいいいいい！！！！」
「あ〝あ〝あ〝

「認め…ない…ぞ…」
「スロウリィ…だと…？」
「死ねないよ～」
「くっ！私が…」
「もっと楽しみたかった…」
15：スロウ
「の～～ろ～～い～～」
「な～～ん～～だ～～こ～～れ～～？」
「ス～～ロ～～ウ～～リィ～～～～」
「ホ～～ロ～～ロ～～」
「の～～ろ～～く～～なっ～～て～～ん～～ぞ～～？」
「な～～に～～こ～～れ～～？」
16：ミニマム
「わぁ！ちっちゃくなっちゃった！」
「意味ねぇよ、あたし大きくなるから」
「急所狙ってみるか」
「手乗り幽霊になるホロロ」
「うお！？ちっちゃくなっちゃった！」
「何よこれぇ！！」
17：トード
「ゲロゲーロ」↑「フェェン！カエルになっちゃったよ～」と言いたいらしい
「グロロ！」↑「あたしはウシガエルか！」と言いたいらしい
「ゲロゲロ！」↑「なんでカエルだよ！！」と言いたいらしい
「ケロロ」↑「カエル幽霊だよホロロ」と言いたいらしい
「げろ！？」↑「なんでカエルなんだよォォ！？」と言いたいらしい
「ケロ」↑「カエル放置プレイはないわよ」と言いたいらしい
18：魅了
「わぁぁぁ／／／／／」
「べ、別に惚れたわけじゃないからな／／／／／」

「いいな／／／／／」
「ホロ～／／／／／」
「綺麗だな／／／／／」
「あ、すごい／／／／／」
１９：恐怖
「いやなのォォォォォォォ！！！」
「勘弁してくれぇエエエエエ！！！」
「来るな来るなくるなくるなくるなァァァァァ！！！」
「ホロロ、怖くないよ」
「イヤぁぁァァァァァァ！！！」
「イヤァ！！ダメェ！」
２０：目回し
「フェェェ・・・」
「頭ワリぃ…」
「目が回った…」
「酔わないホロロ」
「あ～ふらふらする」
「よいではないか～」↑結構楽しいらしい
２１：陽気
「ルンルンルン♪」
「再興にいい気分だ」
「今なら何億光年でもいけるぜ！」
「楽しいホロロ♪」
「なんか気分がいいぜ」
「私機嫌がいいからやりましょ？」
２２：激怒
「少し頭ひやそっか？」
「ぶち殺す！！」
「後悔させてやるよ！！」
「ノロワレテシネ」

「テメェは私が殺す！」
「覚悟なさい？」
２３：哀愁
「ううぅ・・・」
「なんか泣きたい…」
「・・・・・・」↑声を殺して泣いている
「・・・・・・」↑沈んでいる
「なんか、泣きたくなってきた」
「あれ？涙が…」
２４：出血
「くっ！」
「やりやがったな？」
「やばいな…」
「出ないよそんなん」
「血が足りねぇ」
「血が失っていく…」
２５：ネガティブ
「魔王って言われてごめんなさい…」
「でかすぎてごめんなさい…」
「亀でいいよ私は…」
「幽霊でごめんなさい…」
「ウジ虫になりたい…」
「藻屑になりたい…」
２６：大笑い
「アハハハハハハ！」
「ア～ッハッハッハッハ！」
「アヒャヒャヒャヒャ！」
「ホロロロロロロロロ！！」
「ハハハハハハハハ！」
「アハハハハハハハハハ！！」

２７：ピヨリ
「フェェェ」
「ホレ～」
「ウッ、頭ぶつかった…」
「ホロ～」
「ウヲァ・・・」
「アゥ・・・」
２８：うなだれ
「ニャ～・・・」
「あ”～・・・」
「ヴ～・・・」
「・・・・・」
「あ”～・・・」
「ヴェ～・・・」
２９：死の警告
「そ、そんな・・・」
「まだ死ねるか！」
「出来れば地球を５０周したかったな」
「死ねないって。え？魂が地獄に？それは勘弁！！」
「信じないからな！私信じないから！！」
「死ぬ前に男とあれしたいよもっと！」
３０：不幸
「にゃぁぁぁぁぁ！！！」↑火事にあった
「いで！」↑柱が頭に当たった
「ウゴバッ！！」↑勢いあり過ぎて全身打撲
「ないよ」
「私のジャンプがぁぁぁぁぁ！！！」↑ジャンプが燃えた
「いやあああああああ！！！」
３１：暗黒
「目が見えなくとも！」

「何処だ？」
「前が見えねぇぜ！」
「ホロ～？みんなどこ？」
「何処行ったあいつら！？」
「見えない、目隠しされた！」
３２：ショック、驚き
「にゃあっ！？」
「なんだとっ！？」
「まじでっ！？」
「ホロッ！？」
「まじでかっ！？」
「うえぇ！？」
３３：衰退
「力が…」
「テメェ…」
「スピードは負けねぇよ…」
「ホロ？何か力が抜けるきがする・・・」
「力が入らねぇ…」
「な、なんか力が…」
３４：怠惰
「めんどくさいの…」
「動くきねぇな」
「一休み一休み」
「ほろ～」
「メンドクセ」
「なんかやだわ」
３５：ストップ
「・・・・・・」↑止まっています
「・・・・・・」↑止まっています
「・・・・・・」↑止まっています

「・・・・・・」↑止まっています
「・・・・・・」↑止まっています
「・・・・・・」↑止まっています
３６：洗脳
「アタマヒヤソッカ」
「潰してやろう」
「シニナ」
「ホ～ロホロホロホロ」
「てめぇはぶち殺す！」
「跪きなさい」
３７：捕縛
「くっ、しまった！」
「ガイバー旅行かこれは…」
「くっそ～！」
「動けないホロ…」
「私をどうする気だ！？」
「ひし縄縛りで！！」
３８：よろめき
「あぅぅ・・・」
「くそ・・・」
「しまった・・・」
「ホロ・・・」
「チッ・・・」
「う・・・」
３９：アンデッド
「アァ～・・・」↑「ゾンビは嫌なのぉぉぉ！！！」と言いたいらしい
「グゥゥ・・・」↑「んだこりゃ！？」と言いたいらしい
「グルル・・・」↑「いやだなこれ…」と言いたいらしい
「ロ～～・・・」↑「幽霊がゾンビってないでしょ」と言いたいら

しい
「ウゥゥ・・・」↑「なんでゾンビ!?」と言いたいらしい
「オォォ・・・」↑「いやですわこれ!!」と言いたいらしい
４０：ベイビー
「あう～」↑「赤ちゃんになっちゃった」と言いたいらしい
「バブ・・・」↑「何だこれ…」と言いたいらしい
「あうあう～」↑「懐かしいな～」と言いたいらしい
「プ～♪」↑「幽霊でも赤ちゃんになれるホロ～♪」と言いたいらしい
「バブ!?」↑「何で０歳児!?」と言いたいらしい
「バブ～」↑「いい肉つきね」と言いたいらしい
４１：アニマル
「ごろにゃ～ん」↑ネコ
「肉くれ」↑ライオン
「かぶってね?」↑ラビット
「???」↑変わってない
「ニ、ニャ～・・・／／／／／」↑ネコ。しかも恥ずかしい。
「ブヒッ（私は豚という名の雌豚よ!）」↑豚
４２：気絶
「フェェ・・・」
「頭いてぇ…」
「ホラ～」
「ホロロ～・・・」
「ウゥゥ・・・」
「ホニャ～・・・」
４３：発情
「う…ん…」
「体が疼くな…」
「惚れちまったかあたし…?」
「?」

「むらむらする…」
「あ～、やられたい…」
４４：羞恥
「きゃあ！なにするの！／／／／／」
「どこ見てんだよ！／／／／／」
「きゃあ！／／／／／」
「？」
「そ、そんなに見ないで！／／／／／」
「何見てるのよ！／／／／／」
４５：すっ転び
「きゃ！」
「いて！」
「うわ！」
「ほろ！？」
「わ！」
「きゃあ！」
４６：エロス
「体が熱いよう…／／／／／」
「あたしの胸、使ってもいいぜ／／／／／」
「魅力か私は…／／／／／」
「ホロ～／／／／／」
「つ、使ってもいいわよ。私の体／／／／／」
「私は（１８禁なので自主規制）／／／／／」
４７：病み付き
「フンフン～ン」↑ケーキを作っている
「・・・・・」↑武器を手入れ中
「ヒイィィィィィィィィトアァァァアップダゼェェェェェェェェェェ！！！」↑記録更新挑戦中
「ホ～ロホロホロホロ！」
「甘いもの甘いもの甘いもの（以下無限ループ）」

「アン、アン、ダメェ！」
４８：パニック
「うきゃあああああ！！」
「なんだなんだ？」
「どわあああああああああああああ！！」
「ほろ～～～！！？」
「うわあああああああああああ！！！」
「いやあああああああああ！！」
４９：上の空
「ボ～・・・」
「ボ～・・・」
「ボ～・・・」
「ボ～・・・」
「ボ～・・・」
「ボ～・・・」
５０：酔っ払い
「ヒック・・・」
「酔わないね」
「早いぞ畜生！」
「飲めない…」
「ふざけんじゃねぇぞこんにゃろ…」
「犯してよぉぉ…」
５１：激辛
「フゴォォォォォォ！！！」
「か、辛ぇぇぇ！！」
「口が焼けるぅぅ！！」
「ボォォォォォ！！」
「ウンゴアアアアアア！！」
「ヒィィィィィ！！！」
５２：病気、ウイルス

「ゲホゲホ！」
「頭いてぇ…」
「ベクション！」
「幽霊は病気しないよ」
「何でこんなことに？」
「ううう・・・」
５３：嘔吐
「ボロロロロロロロロロロロ！」
「ドボボボボボボボボボボ！」
「デロロロロロロロロロロロ！」
「ホロロロロロロロロロロロ！」↑はいてない。真似てるだけ
「ドロロロロロロロロロロ！」
「ボロロロロロロロロロロ！」
５４：風邪
「ックシュ！」
「ブァクション！」
「バックシ！」
「・・・」
「フィークション！」
「・・・ックシ！」
５５：幼児退行
「なの～」
「おにいちゃ～ん」
「お兄ちゃん！」
「ほろ～」
「あの…えっと…／／／／／」
「あなたなんて全然好きじゃないんだからね」

真王「このバトンをけびんさん、郡司侑輝さん、十六夜アミナさん、シュバルツ・フロッケンさん、烈火竜さん、風音　椿さん、龍の骨

さん、武田軍兵士　清坂　剣麻さん、白い奇術師さん、白黒さん、十刃さん、風花さん、ボッスンさん、天城さん、リィーンさん、鳴神　ソラさん、白騎士君さん、黒龍さん、ヴァーラガルザさん、パワード・マウンテンさんに渡します」』

真王「では」

第百三訓：海に来たらみんな遊びたい（後書き）

真王「津波が多くて困る」

咲夜「次回『海は遊ぶとこじゃなく泳ぐとこだ』テイクオ～フ」

第百四訓：海は遊ぶことじゃなく泳ぐことだ（前書き）

真王「海エリアです。なんかギルシアとレーティアがメインになった；」

第百四訓：海は遊ぶことじゃなく泳ぐことだ

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム３２４
剣聖チーム３２３
スマブラハーツチーム３１９
学園チーム３１０
プリティレディズチーム３３２
女神チーム３１７
とある転生チーム３３１
狂乱チーム３２１
メテンズナイトチーム３２６
ドラゴンネイルチーム３３１
リリカルライダーチーム３３０
真選組チーム３２４
異界戦士チーム３３２
リリカル銀魂チーム３２９

プリティレディズチームトップ。
現在３４ターン目
次のターン・異界戦士チーム

ここは海エリア。海の中で魚が泳ぎ、海藻が揺れている。
前回の浜辺で何とか抜け出したようだ。
海の中なのになんで息してるかって？わが力に不可能はない！ＢＹ

真王
・・・とまぁ冗談はこれくらいにして異界戦士ターン。

奏「いっくよ～」

奏はブロックをたたいて5を出す。
バトルマスだ。

『海の荒くれ者

ダゴン
サハギンギャング×１０
セイレーン×５』

奏「お姉さま、行きましょうか」
勇華「フフフ、まいりましょう」

そうして戦闘を開始し、物の数分でかたずけた。

銀時「早いなおい！」
真王「それが彼女ですもん」

銀時の突っ込みに真王がしれっと答える。

リリカル銀魂ターン

新八「よし、僕の番だ！」

新八はブロックをたたいて3を出す。
ノーマルマスだ。

神楽「ケッ、やっぱり新八には地味しか残らないネ」
新八「あんだとぉぉぉぉぉぉ！！！」

神楽は毒舌を言い、新八が切れる。
ま、結果は見えてますがね。

ヒーローズターン

シャル「さて、何が出るかしら？」

シャルはブロックをたたいて6を出す。
ハプニングマスだ。

『真選組が食べられた』

真選組チーム「はぁぁぁぁ！！？」

あり得ないと言わんばかりに怒鳴る真選組。
だが後ろに巨大クジラが。

バクッ！

真選組チーム「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」
真王「はい真選組チーム脱出するまで2回休みだ」

シャルは少し申し訳なさそうに笑った。

剣聖ターン

蒼馬「さて、僕の番だね」

蒼馬はブロックをたたいて8を出す。
ペナルティだが。

蒼馬「あ」
森羅「あじゃねぇよこのばかやろぉぉぉぉ！！！！」
蒼馬「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

蒼場以外のチーム全員が蒼馬をストンピングをかます。
ちなみに内容は『袋叩き受け』だ。

スマブラハーツターン

クッパ「吾輩の番なのだ」

クッパはブロックをたたいて6をだす。
ボーナスマスだ。

マリオ「何が出るんだ？」

モニターが現れた。

『プレイヤー追加』

真王「これはあなた方と縁のある方が助っ人として登場しますよ」
明久「僕らと？」
ルイージ「誰だろう？」

明久とルイージはだれだかと思っていると、袖なしの胸元と背中が開いた黒いドレスを着て、地面へ引きずる程の黒く輝く髪を持った長身な女性が来る。
大型の銃を片手で持って。

マリオ「なるほど。彼女がか」
真王「そうだ」
アーカード「銀次がここにいるというからやってきたのだが…」

自称銀次の妻・アーカードはキョロキョロとあたりを見回す。

真王「なら勝ったら銀次と結婚してもＯＫで」
アーカード「よし引き受けよう」
ルイージ「やっぱし…；」

銀次のことになると乗せられるアーカードであった。

学園ターン

ルーシア「さっていくよ～」

ルーシアはブロックをたたいて7を出す。
イベントマスだ。

ルーシア「おお！どんなイベントがあるんだろ！」
恭介（いやな予感しかしないんだけど…）

わくわくするルーシアとは反面に恭介が冷や汗を流す。
そうこうしているうちにモニターが、

『大きなお魚さん』

バクッ！！

学園チーム「ギャアアアアアアアアアア！！！？」

学園チームが大きな魚に食べられた。
だが魚は一気に食べるのが無理だったようで食べられた先から２０マス吐き出された。

由美「こんなの聞いてないよ！！！」
愛淫「そうですわ！断固抗議いたします！」

クレーム付ける２人。

恭介（・・・結果オーライでいいか？）

プリティレディズターン
ナリア「じゃあ私達の出番ね！」
ナリアはブロックを叩いて6を出す。
パーティマスだ。

ナリア「なにが出るかな？」
モニターが現れた。
『潜って探してお宝探し（レーティアＶＳシャルＶＳレオンＶＳ咲夜）』
真王「これは海底にあるお宝を素潜りで探して拾うルールです」
レーティア「つまり海底のどこかにある宝箱を拾えってこと？」
真王はもちろんだと答えた。
真王「準備は出来たか？」
レーティア「やるわ」
シャル「任せなさい」
レオン「ヤレヤレ・・・」
咲夜「いくわよ～」
真王「では、スタート！」
真王が試合開始のコングを鳴らす。
それと同時に４人が素潜りを始める。

真王「まずは同時にスタート。だが」

真王が実況していると４人ともすごい速さで潜っていく。
中にシャルは人魚姿になって泳いでいた。

銀時「あいつ等早ぇ！」
フェイト「泳ぐの得意なんだ…」
新八「つーか真王さん！シャルさんが変身使ってるんですけど！！」
真王「能力使うなというルールはないからな」

感心している時新八は指摘するが真王が説明する。

潜っている四人は手探り目探りで宝箱を探している。
すると、

４人（見つけた！）

４人は宝箱に目をつけて一気に近づく。
その後取り合いに。

レーティア（私が先よ！）
シャル（私よ）
レオン（私だ）
咲夜（私よ～）

水中ではしゃべれないため思考でいって取り合う４人。
そうこうしているうちに宝箱が開いた。

金ぴかの宝石がいっぱいある。

レーティア（これは私が盗るの！）
シャル（違うよ。私が勝つの）
レオン（わたしだ）
咲夜（だから私だってば～）

更に取り合いを始める４人。
そうしていると宝石がポロポロと海底に落ちていく…。

で…

真王「すっからかんな宝箱持ってきたところで意味はないよ。全員ドローだ」

宝箱の中はもはや空っぽ同然となった。
４人はショックを受ける。

女神ターン

ネプギア「私の番ですね」

ネプギアはブロックを叩いて9を出す。
イベントマスだ。

『巨大人魚出現！』

ネプギア「へ？」

モニターに素っ頓狂な顔をするネプギア。
すると受けから巨大な影が落ちてきた。

グシャ！

ネプテューヌ「ぎゃあああああああああああああ！！！」

ネプテューヌの真上から。

ネプギア「お姉ちゃん！？」
？？？「だ、大丈夫ですか！？」

ネプギアと潰した本人である人魚は驚く。
その人魚は桃色のポニーテールに黄色い胸宛にピンクの尾びれを持つ人魚。
それだけならいいが体が異様にでかい。
人間の身長が彼女に指の長さぐらいの差だ。

ネプギア「って、しらほしさんじゃないですか！」
しらほし「その声、ネプギアさん！」

どうやら彼女・しらほしとネプギアは知り合いらしい。

ユニ「・・・ネプギア、あんた彼女と知り合いなの？」
ネプギア「え、えっと…（園長が無理やり連れてきた人だなんて言えない…）」

ネプギアは反応に困った。

ラム「で？この後なにがあるの？もしかしてユニット加入とか？」
真王「ただネプテューヌの上に落ちただけ」
ネプテューヌ「酷くない！？」

ラムが気になったことを言うと真王は即答しネプテューヌは言う。

とある転生チーム

ビビ「いくわよ！」

ビビはブロックを叩いて４を出す。
こっれはペナルティ。

『なのなの部屋』

全員「？」

意味が分からないモニターに首をかしげる。
すると扉が現れた。
中にはたっくさんのなのはが埋め尽くすほどいた。

なのは「私がいっぱいいぃぃぃぃぃぃいいいい！！？？」
ビビ「この子たちあの時の…」

なのはは驚きビビは懐かしそうに言う。
詳しくは『鳴神ソラ』さんの『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ

～銀女神鎮魂歌～　―　第別訓パート４０：クローンを作ったなら最後まで面倒を見るべし！』をみればいい。

真王「あの扉にはいってやってこい」
ビビ「（キュピーン！）そういうこと…なら直球じゃァァァァアア！！！」

ビビはさっさと扉に入った。

真王「とある転生チーム２回休みですね」
神「あいつにとってペナルティなのか？ちがうよな」

ビビの性格を知っている神であった。
ここから先はビビのハネムーン＋ノクターンなので想像でお願いします。
（みたいならリクしてもいいですが。無論ノクターンに載せて）

全員「宣伝かよ！！」

狂乱ターン

シグナム「私の番だな」

シグナムはブロックを叩いて２を出す。
ノーマルマスだ。

シグナム「これはこれで寂しいな…」

メテンズナイトターン

ギルシア「よし、俺様の出番のようだな」

ギルシアはブロックを叩いて7を出す。

デュエルマスだ。

ギルシア「デュエルか。だがどんな相手だろうと…！？」

ギルシアが気合を入れているとモニターに驚愕する内容が書かれてあった。

『夫婦の戦い（ギルシアＶＳレーティア）』

ふとレーティアを見ると彼女も同じらしい。

ギルシア「まさかお前との戦いなんて予想外だぜ」

レーティア「そうね。でもこれが運命なのよ。そう、“愛”の試練の」

銀時「なにさり気無く愛を強調してんだよ」

銀時は突っ込むが2人はスルー。

ギルシア「だが勝負の事なら話は別だ。勝ちは俺様が貰う」

レーティア「いくらギルシアでも優勝は譲るつもりないもの」

ギルシア「というより父親の威厳的な物ってあるがな」

レーティア「私母としてのもあるんだけどね…」

ギルシアはグローブをきっちりとはめ、レーティアはファスシニムと銃を出す。

ギルシア「？その銃は確か…」

レーティア「そ、タバネさんが作った私専用デバイス『ハートローズ』よ」

銃型デバイス『ハートローズ』をくるくる回す。

真王「じゅんびはいいか？では始め！」

真王が開始のコングを鳴らすと同時にレーティアが駆け出す。

レーティア「さて、私とファスシニムとハートローズの舞に耐えられるかしら？」

ギルシア「へ！下の穴に手ぇ突っ込んでガタガタ言わすぞこら！！」

レーティア「いやん、射入れるだなんて／／／／／」

全員（なにこの会話？気持ち悪！）

レーティアは何か想像して顔を赤らめてくねくねしだす。

見ている人らは少し引く。

ギルシア「テンペストスレッド！」

いきなりギルシアの不意打ち。

だがレーティアは分かっていたといわんばかりにその攻撃の間を避けていた。

ギルシア「まだ行くぜ！ディーンドライブ＋ガンダタストリング！」

今度はディーンドライブ並みのスピードで糸を出す。
レーティアはかわしきれずに服の一部一部に切れ目が出る。

レーティア「さすがギルシア。でもすきアリ！」
ギルシア「ガッ！」

レーティアは感心した後ファスシニムでギルシアをはたき落とす。

ギルシア「やったなこのやろ！俺が勝ったら全裸（靴下は着用義務）で俺の全身をなめまわしてもらおうか～！！」
レーティア「ぜひお願いします！」
全員「お願いすんのかいィィィィィィィィ！！！！！！」
レーティア「あと私が勝ったら毎日抱擁でお願い！」
ギルシア「それ毎日やってることだろ！」
全員「毎日かよ！！」

もうこいつらの愛の基準がわからん…

レーティア「踊りなさい！死の舞い踊り！」
ギルシア「ハン！ヴァルカンショックリトルボーイ！！」
レーティア「まだまだ！茨鞭！」
ギルシア「ディーンドライブブラックバード！！」
レーティア「食らいなさい！大旋風！」
ギルシア「くたばれ！ヒートエクスプロージョン！」

炸裂する技の数々。
土煙がはれるとギルシアはところどころに焼け跡と傷が見える。
レーティアもけがをして、ほぼあわれもない姿になっている。

レーティア「さすが私の未来の夫ね♪けどまだ終わりじゃないよ」

ギルシア「確かにその銃使ってないな」
レーティア「そうだよ。さぁハートローズ、出番よ」
ハートローズ≪了解！≫

元気いっぱいな女の声がハートローズから聞こえた。

レーティア「ハートローズ、セットアップ！」

レーティアはハートローズをセットアップする。
バリアジャケットは某ほほえみのおっぱいガンナーのふくを黒くした感じだ。

レーティア「いくわよ」
ギルシア「！ディーンドライブ！」

銃を構えたレーティアを見てギルシアは音速で逃げる。
逃さないと言わんばかりにレーティアは銃を乱射。
が、すぐに弾切れ。

ギルシア「今度はこっちだ！リトルボーイ！」

ギルシアの反撃。
レーティアは紙一重でかわす。
その時大きな胸をぷるるんと揺らし、谷間から六発の銃弾が飛び出してきた。そしてリボルバーの弾奏にリボルバーを振り払ってリロードした。

ナリア「おお！あれはグレネーダーでやるおっぱいリロード！」
ヤルオ「ぬ！？生でみたのははじめてだ！」
光翔竜、恭介（フェイトさん（様）がおっぱいリロー・・・）（鼻

血）
なのは「な、なんか恥ずかしい…」
この光景を見た人はいろいろリアクションをする。
レーティア「そらそらそら！」
ギルシア「効くか！」
レーティアが銃で乱射。
だがギルシアが素早くつかむ。
レーティア「ならこれでどうよ！」
ポンっと胸から6発分を弾奏し、
レーティア「薔薇（ローズ）の玉砕弾（ブレイカー）！！」
ギルシア「ウオッ！」
レーティアの弾丸をギルシアはそってかわす。
壁に着弾した弾はバラの花が咲き散った気がした。
レーティア「最後のこれでとどめといくよ！」
そう言って胸の布切れを取った。
ほとんどの男性陣「ブッ！？」
一部の男性陣「？」
ほとんどの男達は盛大に噴き出した。
一部は何やってんだな顔をしている。

だが中から何発もある弾丸が宙を舞っていた。

銀時「どんだけ中に入れてんだよ!!」

鼻血吹きながら銀時が突っ込む。
するとレーティアは弾を弾奏してギルシアに撃つ。
それもマシンガンの如く。

ギルシア「うおおおおおおおおおおお!!!!」

ギルシアは全力で逃げる。
撃てば弾奏撃って弾奏の繰り返し。
すると一つだけ他のと違う弾がある。

レーティア「ギルシアに悪いけど、勝たせてもらうよ」

レーティアはその弾を弾奏し、

レーティア「相愛の十字砲(そうあいのじゅうじほう)」

ダンッ!!

ギルシア「イッ!?」

ズドガーーーーーーーーーーン!!!

発射されたピンク色の閃光がギルシアに命中。
そしてピンク色の十字架（型の爆発）が出る。

レーティア「ちょっとやり過ぎちゃったかな?」

ガシッ

ギルシア「普通の奴からすればな」

着弾地点を見ていうレーティアの方にギルシアが掴む。
ギルシアはボロ着いているが笑っている。
レーティアもつられて笑う。

ギルシア「さ～て、判決の時間だぁ」

ギルシアの吐く息が白い。

ギルシア「ディーンドライブ＋アグニッシュワッタス＋テンペストスレッド！」

ギルシアは高速で超高熱と神の糸のコンボ攻撃を繰り出した。

レーティア「きゃあああああああああああああああ！！！」

レーティアは巻き込まれ服がほとんど焼かれるか裂かれた。

レーティア（ギルシア、やっぱりあなたは…）
ギルシア「ガンダタストリング！」

ギルシアは糸でレーティアを傷つけずにしばりつけると、

ギルシア「判決！お仕置き！」

十字を切って終了の形となった。

レーティアは落ちた聖女の様に縛られている。

真王「決着がついたみたいだな」
リアス「・・・そのようね」

真王がいい、リアスは肩を竦む。
ギルシアは糸を切ってレーティアをおろす。

レーティア「ん・・・」
ギルシア「よう、起きたか？」
レーティア「ギルシア？わたし、」

レーティアが目を覚ますと、ギルシアがレーティアにジャケットをかぶらせる。

ギルシア「裸じゃ風邪ひくぞ」
レーティア「う、うん・・・／／／／／」

レーティアは赤くなってジャケットをしっかり握る。

レーティア「ギルシア・・・」
ギルシア「？」
レーティア「ちょっと惚れ直したかも、カッコよかったよ」
ギルシア「・・・こっちのセリフだ」
レーティア「ギルシア・・・」
ギルシア「レーティア・・・」
（無限ループ）

超愛フィールド発動。

新八「ぐあああああああああああああ！！！」
フェイト「まぶしい！眩し過ぎる！」
ナリア「グアッハ！止めて！私のライフはゼロなのよ！」
レイン（なんだこの不愉快さ…）
咲夜「キャ～まぶし～！」
はやて「くあああ！！胸が苦しい…」
シグナム「な、なんだ？涙が止まらない…」
近藤「は、張り裂けそうな感覚がぁぁ…」
タバネ「羨ましいな…」
蒼馬「・・・・・・（血涙）」
真王竜「目がぁぁぁぁ！！」
光翔竜「眩しい！！見えないぃぃ！！」
マリオ「何を苦しんでいるんだ？」
アリス「ぬぅぅ・・・ならばアレを持超える愛を築かなければ」
アリア「負けない…」
恭介「目がちかちかする～！！」
由美「きゃああ眩しい！！」
愛淫「な、なんて力…」
統夜、遊輔、メアリ「グハッ！」
グレイ「・・・・・・（今にもぶっ壊したい雰囲気。けど近づくと激しい吐き気が襲う）」
神「か～！羨ましいぜこんちくしょう！」
レヴェッカ（ああいう雰囲気ほしいな…）
勇華「私だって…」

オーラを受けた人たちはもだえ苦しみ、一部は殺気を放つか鈍いか対抗心を燃やすかだ。

愛とは本当によくわからない代物であった。

リル「バブッ（チャンチャン♪）」

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

魔炎竜「ドラゴンネイルの魔炎竜だ」

氷刃竜「同じく氷刃竜よ」

銀八「ハイこのできちゃった夫婦がアシスタントです」

魔炎竜・氷刃竜「誰ができちゃっただ！！」

銀八「わりぃわりぃ、んじゃペンネーム『鳴神　ソラ』からのスタートだ。『マリオ「いや～何回も津波に飲まれたな」

ルイージ「ホントだね」

ソニック「ＹＥＳ」

明久「タコに殴られるからタコ殴り；」

ムッツリーニ「……また転生者側に質問『オーケストラでどんな曲を演奏する？』」

ネス「真王さんに質問『オリジナルの女神さん達の作った理由を教えてください』」

リュウケンドー「サタン・ザ・ハード達に質問『ソロについてどう思う？』」

次回を待ってます！』ズバリ答えよう」

真王「とりあえずベートーベン・ピアノソナタ『月光』で。作った理由はただ成り行きで」

銀八「んだそりゃ！？」

サタン・ザ・ハード「最後にソロについて？キンハのソラとウルトラマンゼロを合わせた人だね。それにいい人かな」

銀八「そんなわけで、『鳴神　ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

魔炎竜「ではペンネーム『なめ猫』からの質問だ。『ラムザ「はい、みんな楽しそうにやってるね」
こなた「こっちには初めて顔出すけど…なるほど、こりゃ峠だね」

俺「あわれ、ベール…；」
かがみ「カイト達…あんなチートだらけの物語に行くのよね？」
ラルム「うん、大変かもしれないね」
ラムザ「ハードのクイーン、自称神……よく見れば、支配系や取りこみの能力が目立つね。ギルシアにしろ、クイーンにしろ…」
俺「力の秩序…ですか」
ラムザ「……カイト達みたいな人、いないかな？」

質問

ノワールへ
見てるかわからんけど、ゲイムネプテューヌ人気投票で1位になれそうな感じだけど、すごいね？発表が楽しみっす。（ネプ姉妹は2、3位気味）

ネプ姉妹へ（多いな）
上関連だけど、ほぼ絶対上位にいけそうだね。流石ヒロイン。

レーティアへ
やっぱサキュバスっていろいろやばいな…；

俺「ちなみに真王さんは誰かに投票しましたか？では！」』あ、作者は投票できてないらしい」

真王「スマン；次」

レーティア「失礼ね。私をやばい女だなんて…」

真王「・・・『なめ猫』さん。投票すんません」

氷刃竜「・・・次はペンネーム『ウィンド』さんからよ。『リア「ただいま」

ウィンド「なんだ?嫌になって帰ってきたか?」

リア「んなわけないでしょ。休憩もらったから戻ってきたんだよ」

ウィンド「なるほど。では成果を聞こうか」

リア「結構順調だよ?クイーン・ザ・ハード師匠とサタン・ザ・ハード師匠のはきついけど面白いし優しいし。サムライ・ザ・ハード師匠の剣技はかなり参考になったよ」

ウィンド「ほぅ」

リア「ただエッチ・ザ・ハード師匠とかマゾチック・ザ・ハード師匠は寝込み襲われるわコスプレされるわお風呂入ってくるわで面白い」

ウィンド「何いってんのお前!?初めては大事にしろよ!」

リア「大丈夫。人間のとき誘拐されたとき(バキューン!)されたから」

ウィンド「はぁ!?」

リア「それにしてもイブ、ドンマイ……(イブの頭を撫でながら慰める)」

ウィンド(そんなんだからフラグ建つんだよ……)

リア「質問いこっか」

ウィンド「おう。リリカルメンバーに。リアについてどう思いますか?」

リア「エッチ・ザ・ハード師匠とマゾチック・ザ・ハード師匠に。そんなにシたいなら今晩ヤります?きがすむまで相手しますよ?」

ウィンド「アホか!」

リア「日頃のお礼で。さて戻りますか」

ウィンド「あ、おい!行っちまった……」』え~っと・・・」

リリカルメンバー「ある意味すごくない！？」

エッチ、マゾチック「モチで！」

この後リアはミイラ化寸前だったとか。

氷刃竜「・・・『ウィンド』よ。廊下に立ってなさい…」

真王「次、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。

しかし…イヴ嬢も災難だよな…。とりあえず…慰めになるかは解らんが、俺の特製料理をご馳走してやるよ…クイーンの嬢ちゃんも一緒にどうだい？（そう言いながら、料理人の格好になる）

輝刃「そういえば、閃火はこっちじゃ俺と同じく料理の腕が良かったな…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．極神十傑衆の面々に質問…正直言って、妙嬢の『卵焼き（ダークマター）』＋シャマル嬢の『シャマパイ』を組み合わせた混合（キメラ）料理…食えるか？

ハハハ…いくら十傑衆でも、それは皆無必至じゃね（汗）？次は俺からだ。

2．クイーンの嬢ちゃんに質問…ぶっちゃけ、好きな料理は何なんだ？俺がそれ作ってご馳走してやっからよ…。

輝刃「フフッ…閃火は、妙な所で律義だな…（微笑）。」』」

極神十傑衆「無理だ（じゃ）（よ）！」

真王「だろうな。次」

クイーン「高級料理。とくにシチューですわ」

真王「というわけで『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次、ペンネーム『ケン』さんだ。『統夜「いや～・・・見事なものだったな」

咲夜「そうね」

統夜「アリスとのバレー・・・心を読むスキルで何とかなったんじゃないのか？」

咲夜「あ・・・」

統夜「いいけどさ・・・メアリと咲夜、シャルさんの水着姿が見れて良かった」

咲夜「嬉しいわね。早速質問するわ。ジャンヌに質問よ。もし新八が他の娘の谷間や水着に見とれていても嫉妬とかしない？」

統夜「心広いからしないっしょ。ギルシアへ質問だ。やっぱ幼女はスク水と一回ぐらいは思った事ある？」

咲夜「凄まじかったわね。ギルシア・・・流石レーティアさんの夫ね」

統夜「だな」

タバネさんと源外さんへ贈り物です。
ＭＩＥＳを宝石にしたマキシマムクリスタルを一つずつ差し上げます。

次回も楽しみにしています。』ズバリお答えしよう」

ジャンヌ「新八君こっち見てよ！」

と言って水着姿のジャンヌが新八を抱き寄せる。

新八「胸が当たってぐはぁッ！」

新八は気絶した。

銀八「テメ新八。何つうラッキースケベやってんだよ」

ジャンヌ「なに？」

銀八「いや、何でもない…（睨まれて縮こまる）」

真王「では『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

第百四訓：海は遊ぶことじゃなく泳ぐことだ（後書き）

真王「さて、次は沈没船エリアに突入だ！」

魔炎竜「次回『沈没船と言えばお宝が眠っている』テイクオフだ」

第百五訓：沈没船と言えばお宝が眠っている（前書き）

真王「今回私ちょっと説教をします」

銀時「なにをだよ」

真王「見てれば分かる」

第百五訓：沈没船と言えばお宝が眠っている

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム３７８
剣聖チーム３５９
スマブラハーツチーム３８５
学園チーム３５９
プリティレディズチーム３８６
女神チーム３６５
とある転生チーム３７７
狂乱チーム３６８
メテンズナイトチーム３７５
ドラゴンネイルチーム３８２
リリカルライダーチーム３８０
真選組チーム３７５
異界戦士チーム３８４
リリカル銀魂チーム３７３

プリティレディズチームトップ。
現在４０ターン目
次のターン・ヒーローズチーム

次なるエリアは海底に沈んだガレオン船。
通称沈没船エリア。

統夜「おりゃあああああ！！！」

統夜が合体剣で死神型モンスター・スペクターを倒した。

統夜「まずまずといったとこだな」

メアリ「死神には死神を、ってやつ？」

統夜「違うぞ」

メアリの一言に統夜がつっこむ。

剣聖ターン

紅也「俺の番だな」

紅也はブロックを叩いて7を出す。

ペナルティマスだ。

紅也「ゲッ！？」

『蓮コラ』

モニターにが出た後一人の人物が現れた。

というより、身体中虫食ったあとと中にぎょろりと目がいっぱい。

森羅、紅也「なんじゃこりゃあああああああ！！！？」

咲夜・さくら「いやあああああああああああ！！！」

員らと紅也は驚愕しさくらとあまり驚かない咲夜が恐怖する。
さすがに気持ち悪いからだ。

銀時「スッゲェ気持ち悪いんですけど！！何あれ！？」
真王「蓮コラっていって生物に体に寄生する虫だよ」
新八「寄生っつーかメッチャ見てるんですけど！うわこっち見た！」
真王「まぁ私も嫌なやつなので消しとこう」

真王自身もいやらしいので消した。

スマブラハーツターン

明久「さて、僕の出番だね」

明久はブロックを叩いて6を出す。
これもペナルティ。

『スリラーダンス』

ゾンビ「ゾンビ～ナイ♪ゾンビ～ナイ♪ゾンビ～ナイ♪ゾンビ～ナイ♪」

目の前にはおどるゾンビ軍。
つられて踊られる明久。

明久「誰か助けて～！」
マリオ「スマン明久；」

マリオ達は申し訳なく謝った。

アーカード「何時か銀次と愛の踊りをしたいものだ」

ルイージ「それはやらないでね…；」

学園ターン

ヤルオ「僕の出番だおｗｗｗｗｗ」

ヤルオはブロックを叩いて9を出す。

ノーマルマスだ。

恭介「セーフ；」

恭介は安心したようだ。

プリティレディズターン

リアス「私の番ね」

リアスはブロックを叩いて6を出す。

クイズマスだ。

『数十人の声を聞けるとされている歴史人物は？

？聖徳太子？徳川太子』

リアス「なに二番目のミックス大名!?」
リアスは2番目の名前に突っ込みを入れた。
無論正解は1なので5マス進んだ。

女神ターン
ネプギア「いきます!」
ネプギアはブロックを叩いて5を出す。
バトルマスだ。
ネプギア「どんな相手なんでしょう…」
ネプギアが緊張する中、モニターが現れた。

『因縁の敵
リンダ
ワレチュー』

ネプギア「・・・誰ですか?」
ユニ「さぁ?聞いたことない相手ね」
ネプギアは心当たり全然ない。

？？？「おい！あたしを忘れんなこのやろ！！」

と大声を出したのはネズミの耳をつけたフードをかぶった少女。
手には鉄パイプが一つ。

ネプギア「あ、あなたは！？」
？？？「へへ、やっと思い出して…」
ネプギア「下っ端さん！」
？？？「誰が下っ端だ！！いい加減その名前止めろ！！」

少女は下っ端と呼ばれて怒鳴る。

リンダ「いいか！あたしの名前はリンダだ！覚えとけ！」
ネプギア「まさか下っ端さんと戦うことになるなんて…」
ユニ「ま、所詮下っ端だしね」
ラム「下っ端なら片付きやすいよ」
ロム「・・・」

リンダは名前を言うが、ネプギア達は訂正する気なし。

リンダ「ガーッ！！まだそれを言うか！！」
？？？「実際下っ端に定着してるっチュ。もう諦めるっチュよ」
リンダ「オメーは黙ってろワレチュー！！」

ネズミのワレチューにまで呼ばれる始末。
見かねた真王があることを言った。

真王「お前ら。いい加減人の機嫌を損ねるいい方やめろ。ちゃんと名前で呼べ」
ラム「なんで？あいつ悪い奴じゃん。頭おかしいの？」

ロム「敵に情けなし…」
ユニ「そうよ」

だが彼女等はその気なし。

真王「あっそ、創造（クリエイト）・ワイルドオーク」
ワイルドオーク「ブモォォォォ！！！」

ドガァッ！

ラム「きゃあ！」

すると真王が猪モンスター・ワイルドオークを作り出してラムに体当たりした。

真王「創造（クリエイト）・エンジェルナース」

ポフッ

ラムの飛ばされた先にエンジェルナースが現れて受け止める。

エンジェルナース「癒しの光・セイントヒール」

エンジェルナースの聖なる光でラムの受けた傷が無くなった。

ネプギア「この子たち…」
真王「私が創造した生き物たちだ」

真王にところにワイルドオークとエンジェルナースが近付く。

フェイト「ふざけるな・・・生き物の命を弄んで」
ワイルドオーク「ブモォォォォォォォ！！！！」

フェイトが怒り混じっていってるところでワイルドオークがフェイトに突っ込んできた。

真王「よせ」

真王が命令するとワイルドオークがフェイトにぶつかるギリギリで止まった。

真王「すまんな。この子たちは私を卑下しようとする人を許さないらしい」
ネプギア「どういうことですか？」
真王「言いたいことはこうだ。『真王様は俺達のために命をくれたんだ！』てな」

真王の言葉に全員は驚く。

真王「命を作ることは簡単ではない。だが私はそれを簡単にできる。でもそれだけじゃだめだ。作った命は大切に見守らなければいけない」

ワイルドオークを撫でる真王。

真王「作った命は責任持って見守ることが必要だ。そして愛で接さなければならない」
ネプテューヌ「愛？」
真王「世間を知らない子供には親の愛によってそれを知る。どうずれた思考にしろ親が子を思うのに理由がいるか？」

ネプテューヌ「ない！」

ネプテューヌははっきりと即答した。

真王「私という作者(かみ)が、生きる者たちに命を与えることに悪いとこはあるか！？」

ネプギア「ありません！！」

ネプギアもはっきりと。

真王「それを聞いて安心したよ。話を戻すがちゃんとした名前で呼べよ？ある兄弟の弟が永遠の2番手なんて呼ばれるのはいやがるんだし」

ルイージ「言ってるし；」

真王「クッパが噛ませ魔王なんても」

クッパ「噛ませとはなんだ！」

リンダ「ちょっと～？あたしを無視しないでくれませんか～？」

リンダは待ち遠しそうだ。

真王「スマン。もう準備ＯＫだよ」

リンダ「へへッ、ついに出番だ」

ワレチュー「ウウッ、なんか涙が出てきたっチュ…」

リンダ「なに感動してんだよ！！」

話を聞いて泣くワレチューに怒鳴るリンダ。

真王「・・・準備はいいか？」

ネプギア「はい！」

真王「宜しい。ではネプギアチームとリンダとワレチューの対決。

始め！」

リンダ「おらよ！」
ネプギア「くっ！」

開始早々リンダの先制攻撃。

ネプギア「すごいですね。以前よりも強くなってませんか？」
リンダ「そりゃ影ながら鍛えてるからな。来る日も来る日も一人と一匹で過ごし、時にはネズミを食べようと思っていたり…」
ワレチュー「それ遠回しにこっち言ってないっチュか！？」

ワレチューが突っ込む。

ネプギア「そうですか。でも、こっちも負けるわけにはイキマセェェェェェ～～～～ン！！！！！」
リンダ「ぎゃあああああああああああ！！」
ワレチュー「ってもうやられたっチュか！？チッ、使えない奴っチュ」

もうやられたリンダに舌打ちするワレチュー。

ユニ「ならあなたも」
ラム「ぶっ飛び」
ロム「…なさい」
ワレチュー「ヂュウウウウウウウウウウ！！！」

ワレチュー同様彼女らに飛ばされました。

真王「勝者女神チーム！」

女神チームの勝ちと決まった。
すると真王が彼女らに近づく。

真王「ほれ」

そう言って渡したのは運試しカードだった。

真王「ワイルドオークのお詫びだ」
ラム「あ、どうも」

ラムは受け取った。

リンダ「これで勝ったと思うなよ～！！」
ワレチュー「それ下っ端のセリフっチュ。やっぱ下っ端で十分っチュ」
リンダ「ネズミの丸焼きにしてやる」
ワレチュー「それだけは勘弁っチュー！！」

リンダとワレチューはどっか去った。
結局彼女等はなんなのかと思う一同だった。

とある転生ターン

リオン「僕の番ですね」

リオンはブロックを叩いて9を出す。
ハプニングマスだ。

『最終番目チームに出番が回った』

リオン「うわしまった！」
ビビ「何やってるのよこのクソガキ！！」

リオンは頭を抱え、ビビは怒鳴る。
最終番目とはリリカル銀魂チームのことだ。

銀時「よし、俺の出番だな」

銀時はブロックを叩いて8を出す。
イベントマスだ。

『救え！機神少女と魔大将！』

モニターが現れると3人の倒れている女性少女と3人の男が現れる。

カオストール「なんだ？」
レギス「転移されたか？」
？？？「・・・・・・」

あまり驚かないカオストールとレギスと黒短髪の男。
その男から感じる殺気がすさまじい。

銀時「なんだおめぇら」
カオストール「人にものを聞くときは自分から名乗るのが礼儀じゃないかね？」
神楽「オイコラ、それはこっちサイドのセリフある。悪役がいうんじゃないね」

銀時「メタは止めろ」

銀時は神楽をはたく。

銀時「けどな、ちっと用事もんがあるらしいな」

銀時は倒れているイシュタルとエル、そして様子がおかしいレルシアを見て言う。

銀時「おい真王、バトルには勝利条件とかあるか？」

真王「そこの悪党２人、別世界の大江戸市で真選組隊士６０００名、幕府高官４５名、天人１２５０００人斬り殺した人斬り侍・冥賀拷訊と・・・」

真王はある人物を見て言う。

銀髪でセフィロスの服を白くした人物だ。

真王「レーヴェ・ネオセフィロス・シルバータイムだ」

全員「え？」

レーヴェを見た一同は驚きの声をあげる。

彼を見て、その姿が銀時に似ているからだ。

フェイト「銀…時…？」

ネプテューヌ「うわそっくりだ・・」

真王「そりゃ別次元の世界の銀時だ。曰くつきだがな…」

真王が暗い表情でいう。

真王「彼はとある組織に自分の仲間達や守るべきものが失われ、今

や高杉と同じ破壊者になったのさ」
なのは「え？」
新八「僕達が死んで…」
ティアナ「兄さんがあの高杉みたいに？」

銀時以外は驚きを隠せない。
その組織は管理局最高評議会なのだがあえて言わなかった。

レーヴェ「そうだ。おれは大切なもん失っちまってこんな醜いことになっちまったんだ。あいつらが消えると同時に俺の中の奴も砕けちまった。今は高杉と同じ黒い獣だ。だからもう一人の俺。こんな醜いことになった俺を止められるか？」
銀時「止めるしかネぇだろ？」

銀時は銀狼夜叉をかまえた。

銀時「いく先を間違えた奴なな、叩いて直させるしかネぇだろ？」
ネプギア「テレビじゃないんですから…」

ネプギアが突っ込むがスルー。

真王「銀時とレーヴェは決定として…拷訊の相手は誰に？」
イシュタル「妾だ…」

イシュタルがボロボロの体を鞭打って起き上がる。

レルシア「イシュタルさん！無茶です！」
イシュタル「フン、無茶であろうが・・・」
真王「ヤレヤレ、そんな満身創痍じゃ戦えんだろ？ホラ」

ボロボロ状態で拷訊を睨むイシュタル。真王は首を振って魔法を投げる。
するとイシュタルの体の傷と疲労が消え去った。

イシュタル「これは・・・」
真王「戦うには完全態勢でいかなきゃ意味が無い。そして面白くない（観客側が）。で、君ら2人でこの人を相手にしますか？」
？？？「んにゃ、3人だぜ」

そう言って現れたのはレイヴィスだ。

イシュタル「む？主は魔王ヴィスガンドラの…」
レイヴィス「レイヴィス・グランスフィアだ。覚えとけ」

機が合う魔族同士。

イシュタル「ふ、足を引っ張るなよ」
レイヴィス「こっちのセリフだ」
拷訊「・・・フン、一人増えようが体が回復してようが同じことだ」
イシュタル「さっきは不覚だったが、女子と甘く見ると痛い目に会うぞ」

両者にらみ合う。

真王「なんでもいいが、スタートだ」

銀時
白夜叉と闇夜叉（レーヴェ）の戦いが始まった。

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リリス「こんにちわ、リリスです。黒龍さんのリリスですよ」

銀八「よし、ペンネーム『月光閃火』から行くぞ。『ども…月光閃火だ。（そう言いながら、口の中に残っている砂糖粒を唾液で取っていく）

輝刃「…おもいっきり器用な取り方をするな、閃火は…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1．守護女神達に質問…正直言って、料理の腕前はどのくらいなのだ？

あ～…確かに、それは少し気になるな…。いくら女神様でも、やれる事はきちんとやれるはずだもんな…。次は俺からだ。

2．ネプテューヌ達女神陣に質問…ぶっちゃけ、甘党と辛党…どっち派なんだ?ちなみに、俺はちょい甘党かな。

輝刃「なるほど…味覚の質問か…。ちなみに、俺はどちらかと言えばやや辛党だ。甘ったるいのは、どうにも胃がもたれやすくてな…（汗）。」『ズバリお答えしよう」

チート・ザ・ハード「普通にこなせます」

ゴッド・ザ・ハード「自慢ではないが生れて一回もない！（ドヤッ！）」

サタン・ザ・ハード「ケーキが一番得意だよ」

バーサーク・ザ・ハード「コノマエダイドコロブッコワシタコトガアルゾ?」

ジャイアント・ザ・ハード「まぁぼちぼちかな?」

エレメント・ザ・ハード「簡単な料理しか…」

ドラゴン・ザ・ハード「作らん」

マッハ・ザ・ハード「無理だ」

ファントム・ザ・ハード「ごめん無理」

クイーン・ザ・ハード「女王足るものできなくては意味がありませんわ」

バグ・ザ・ハード「虫、料理、なら」

ナース・ザ・ハード「医学だけでなく料理もできちゃいますです」

シャドウ・ザ・ハード「・・・・・・（忍者会の料理しかない）」

サムライ・ザ・ハード「私は鉄人級だ」

ロリータ・ザ・ハード「えへへ、この前失敗しちゃって…」

ソニック・ザ・ハード「ごめん不味いんだ私の料理」

マゾチック・ザ・ハード「クイーン様の料理を見ているだけですけど」

プラント・ザ・ハード「炎嫌い」

エッチ・ザ・ハード「作れなくはないけど」

ビースト・ザ・ハード「生肉がいいな」

銀八「次はネプテューヌ達だ」

ネプテューヌ「私甘党」

ネプギア「甘いものが好きですね」

ノワール「私は甘いものかな？」

ユニ「辛い物もいけるけど」

ブラン「甘い…」

ラム「私甘口！」

ロム「甘い…」

ベール「女性はみんな甘いものが好きですわ」

銀八「というわけで『月光閃火』さん。甘いものをよこしなさい」

リリス「何でですか！つぎです。ペンネーム『烈火竜』さんです。『質問
登場人物の制限はしないんですか？
『ライトノベルズ教室』には、‘長編でも、８人以上にはしない方が無難です’と書かれてます。』作者さんいわく必要ないらしいです。『烈火竜』さん。廊下に立ってなさい」

真王「つぎ、ペンネーム『鳴神ソラ』さんだ。『明久「ムッツリーニしっかりして！！」

ムッツリーニ「……服を…脱ぎ…捨てる…な（ガクッ）」↑血の池の中心で気絶

明久「ムッツリーニィィィィィィ！！！」

ドクター「速く輸血しなければ！！」

タレ銀「真王さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」

アーカード「うふふふ♪」

マリオ「ってか…なんだあの戦い方？」

ルイージ「…ほっ、ホントにいきなりだったからビックリしたよ…」

マリオ「まあ、真王に質問『今回のレーティアの戦い方はどう言う作品のを元にしたんだ？』」

クッパ「質問なのだ『レーティアのあのカートリッジロードの方法はどの作品のなのだ？』；」

ネス「質問『今回のステージはマリパ５のアクア・ドリームを元にしたんですか？』」

次回を待ってます！』１つ目と２つ目はグレネーダーという女性ガンマンの主人公のアニメです。３つ目はマリパ３の海ステージをイメージしてください。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「まだ行くぞ。ペンネーム『フリーダム』さんからの質問だ。『Ｓフリーダム「何だ…最後のは…」

∞ジャスティス「あの二人の出す特殊なフィールドか…」

レジェンド「周りが色々とおかしくなっていたが」

デスティニー「周りの事考えないからな…あの二人」

アカツキ「まぁ、気にしたらいけないから質問に行くぜ」

今回出てきたお魚さんとは、プクプク？　それとも全く別のもの？

バスター「魚に飲み込まれるとかごめんだぜ」

更新楽しみにしてます』文字通りあの魚だ。『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

リリス「次はペンネーム『なめ猫』さんです。『俺「はいどうも、ネタごちそうさまー」

ラムザ「学園でもやらせる気か？；」

俺「まあギルシアやレーティアは比較的目立ちますからね。あとは変態のアリア、ビビとか」

ラムザ「全員出しきれないからね…しょうがないよ」

俺「…さて、カイトとミリアの『先輩』にしてみようかw」

質問（意味不明で）

なのはさんへ

のら猫「心が痛ぇんだよおぉぉぉぉぉぉ！！！どうすりゃええんじゃあああああ！！！（何故かはお任せ）」

銀時ラバーズへ

夜ばいするために準備することは？

ギルシアとレーティアへ

この淫乱カップルが！

俺「はいさいなら」『って何ですかこの質問!?」

真王「気にしたらアウトだ。では」

なのは「知らないよ（キッパリ）」

真王「はい次」

ラバーズ「これから考える」

銀八「考えてねぇのかよ。次」

レーティア「褒め言葉よそれは」

リリス「あれでですか!!??『なめ猫』さん!廊下に立ってなさい!!」

真王「あらら、つぎ、ペンネーム『ケン』さんです。『零斗「うおおおおおお!!!!!」

ギルシアとレーティアの愛を見て、手足がついているキャベツに変わってしまった。

たけし「えええええええ!!!!?あの二人の超愛フィールドでキャベツになったよ!!!零斗さん!?」

文乃「凄いわね・・・」

千世「頑張ってほしいわね・・・統夜達」

希「にゃあ・・・これぱっかりは祈るのみ」

ダイチ「ギルシアさぁ～ん！！！レーティアさんの裸体を見せてくれてありがとうございましたぁーーー！！！」

鼻血を出してギルシアに感謝していた。

文乃「あんた・・・エリーに殺されるわね・・・」

千世「私から新八に質問よ。ギルシアとレーティアみたいな超愛フィールドをジャンヌと一緒になって出せる自信ある？」

希「お開き・・・次回も楽しみにしている・・・」『で、2人は」

新八「いやいやいや、無理ですよ！あんなオーラ出せませんよ！」

ジャンヌ「あれは2人にしかできないよ…；」

真王「だそうだ。『ケン』さん。廊下に立ってなさい。最後にしよう。ペンネーム『支配者』さん。『結構カオスですね。

質問です。

はやてに質問。はやてって何座でしたっけ？腹黒狸座？（黒笑）

転生者達に質問

自分達の中で一番エロイのは誰ですか？

なのはに質問

なのはのテーマソングを作って見ました。

『豚豚なのは。魔王が来たぞ、ブー！♪』

感想をお聞かせください（黒笑）』・・・」

はやて「そりゃどういう意味やゴルァあああああ！！！！！#」

転生者組「アルテスかレーティアあたり」

なのは「カオス・スターライト・ブレイカー！！！！！！（激怒）」

ドガーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！！

支配者「塵とかすぅぅぅぅぅ！！！！！」

真王「あーあ、『支配者』さん。喧嘩売ることは止めましょう」

第百五訓：沈没船と言えばお宝が眠っている（後書き）

真王「白夜叉（銀時）と闇夜叉（レーヴェ）、どちらが勝つのかな？」

リリス「次回『絶対不屈の魂であれ』テイクオフです」

第百六訓：絶対不屈の魂であれ（前書き）

真王「ついに銀時とレーヴェの対決は意外な形で決着!?」

銀時「ってどんな決着だよ!!」

真王「本編を見れば分かるぞ」

第百六訓：絶対不屈の魂であれ

前回のあらすじ

銀時とレーヴェ、イシュタルとレルシアとレイヴィスと冥賀拷訊の戦いが始まった。

最初に銀時とレーヴェの戦闘。
両者一歩も譲らない戦いだ。

銀時「ダラァァァァァァァ！！！」
レーヴェ「オラァァァァァァ！！！」

銀時
白夜叉と闇夜叉（レーヴェ）は互いを打ち合っている。

銀時「うおおおおおおおおおお！！！」
レーヴェ「オラァァァァァァ！！！」

二人の剣技が見えないほど激しい。

ネプテューヌ「す、すごい…これが銀さん同士の…」
ノワール「なんて戦いよ！衝撃がこっちまで来るわ！」

2人以外は剣と剣の打ち合いから生じる衝撃波を受けて怯んでいる。

銀時「なんか自分同士で戦ってるみたいだな」
レーヴェ「当たり前だ。俺は未来のお前だからな」

ズガガガガガガガガガガガガガガ！！

まだ両者は倒れない。

銀時「未来の俺！そっちの世界で何がったんだ？」

レーヴェ「・・・いままでは今のお前ぐらい平和にやってきたさ。けどな、それがすぐ地獄に変わっちまった」

レーヴェは悲しい顔で言った。

レーヴェ「一瞬だった。どっかの馬鹿な奴らが俺達ごとぶっ壊しやがった。それも俺を除いて全員死んじまった」

銀時「なっ！！？」

銀時は驚愕する。

死んだ。

その言葉に深いものが心を刺した。

レーヴェ「どでっかいもんぶっ放してきやがった。それも俺達の真上でな。俺はかろうじて助かったものの俺以外は全滅だ。地獄絵図だった。そしてそのとき俺の中の何かが壊れた。魂が、大切なもんごと壊れちまいやがった」

これがレーヴェの心境。

一瞬にして奪われた彼の気持ちはどれくらい暗いどん底の闇へ落ちたか。

それは銀時でさえもわからない。

レーヴェ「もう俺は黒い獣だ。だから何もかもを壊すだけだ」

銀時「させねぇよ」

銀時がいう。

銀時「未来がどうにしろこうにしろ。一つだけ分かったことがある。テメェをぶっ飛ばすことだ」

レーヴェ「俺をぶっ飛ばすだと？」

銀時「確かに目の前で大切なもん失っちまったらさすがのおれでもお前の様になっちまうかもしれねぇ。ふっかい悲しみが俺の中をぐるぐるとわきだしちまう。けどな、ここでおまえを止めなきゃ、高杉と同じになっちまったお前を止めなければいけねぇ気がするんだ。だから、全力で手加減なしで活かせてもらう」

銀時は本気になりだした。

目が鋭くなり、白夜叉となる。

拷訊「ほう？白夜叉か・・・」

イシュタル、レイヴィス、レルシアと対峙している拷訊が興味深そうに見る。

そして銀時に向かって駆け出した。

レイヴィス「あ！こら！」

拷訊「貴様らとやり合っても面白くない！まずは貴様から血祭りに…」

ズダダダダダダダダダダダ！ズドガァッ！！

拷訊「バ・・・バカ・・・ナ・・・・・・」

銀時「人の喧嘩に水差すんじゃねぇよ…」

物の数秒で拷訊を行動不能にした銀時。
彼はもう本気だ。

イシュタル「何と…極神クラスの凌駕するあやつをたった一瞬で…」

イシュタルは驚愕する。
そして足元にボロ雑巾と化した拷訊がいる。

銀時「テメェには銀狼夜叉(コイツ)を開放する必要もねぇ。そして破壊なんてさせねぇ。薄汚い体液ぶちかましてくたばりやがれ」
レーヴェ「・・・いいだろう」

銀時とレーヴェは対峙する。
背後に銀時に白い獣、レーヴェに黒い獣の影がゆらゆらと見える。

シュン！ズダァァ！！

銀時・レーヴェ「うオオオ

銀時が叫ぶ。

銀時「力を手に入れてもあいつらはよろこばねぇよ！！」

レーヴェ「貴様は黙ってろ！」

切って受け止めきって受け止めの繰り返し。

銀時「俺達が侍なら…もつべきものは力なんかじゃない！」

二人の手に力がこもる、

銀時「もっと大切な、誇り高き魂だ！！」

銀時がそう叫ぶのと同時に二人は距離を取り睨みあう

銀時「その魂が叫んでる。オメーを止めろってな！！」

それを受けたレーヴェの笑い声が木霊する。

レーヴェ「悪いが俺の魂はこう言ってる。もっと力を！」

銀時「同じ奴だってのにな…」

レーヴェ「あぁ、そうだな」

銀時は魂を、レーヴェは破壊を。

同じ侍で夜叉でありながら違う考え。

時の違いで人は変わるものである。

そして長い激闘の末、２人の体に限界が来た。

どちらも血だらけで普通の人ならすぐにダウンする傷でもまだ立っ

ている。

銀時「この一撃で最後にしようぜ。未来の俺・・・いや、レーヴェ」
レーヴェ「ああ、そうしよう、坂田銀時」

そして2人は武器を握りしめ、

銀時・レーヴェ「テヤアアア

取らないバスト、頭のアクセサリーに十字コントローラーの様なのがあり、首には白いリング、パーカーワンピ、しましまのストッキングといった美女だ。
銀時はその女性を見て違和感を覚える。

銀時（あれ？あいつ・・・似てやがるな…）

銀時は彼女の容体を見て、ネプテューヌの面影を見た。

？？？「探したよ銀さん」
銀時「え？俺？」
？？？「違うよ。こっちの銀さん」

女性の言う銀時はレーヴェらしい。
銀時はあっそうという。

レーヴェ「誰だお前？いやなんか誰かにてる気がするが…」
？？？「ひどいなぁ。いつも一緒にいたのに。思い出せないの？無邪気で純粋なある子供と一緒にいる」
レーヴェ「・・・まさかとは思うが…」

レーヴェは聞いてみた。

レーヴェ「おまえ、ネプテューヌか？」
プラネ「そう、プラネット・ゲイム・ネプテューン。あなたの大好きなネプテューヌだよ」

女性・プラネはレーヴェと同じ世界のネプテューヌだった。

レーヴェ「ネプテューヌ、お前生きていたのか！！」

プラネ「うん、えへへ、２人っきりになっちゃったね」

レーヴェとプラネは抱き合う。

プラネ「それにしても良かった。銀さん正気に戻って…」

レーヴェ「ああ、お前を思い出した瞬間心が軽くなったよ」

彼女の出現により、レーヴェの心に変化が訪れたようだ。

プラネ「みんな死んじゃって、銀さんがあいつらを殺していなくなったあと私は探し続けたの」

レーヴェ「・・・そうか」

銀時はプラネの頭を撫でる。

プラネ「／／／／／」

プラネは特に嫌がる様子もなく顔を赤くする。

銀時「あ～、ん”ん”！！」

銀時がわざとらしく咳払い。

とりあえずレーヴェとプラネは離れる。

真王「ま、とりあえずゲームは終了。リリカル銀魂チームは１０マス進むぞ」

プラネ「（ピクッ）ゲーム？」

プラネは眉をひそめる。

そしてレーヴェに向き直る。

プラネ「銀さ～ん?私というものがありながら仲良く遊んでたな～!!??」

レーヴェ「グェェ!!く、首を絞めるなぐるじ…」

プラネは怒った顔でレーヴェの首を握りしめる。

プラネ「酷いよ～!私だって楽しく遊びたかったのにぃぃ!!」

レーヴェ「だから首しま…く・・くるじ…」

首を揺らすわ握りしめるわでレーヴェは意識朦朧とする。

銀時「（ヒソヒソ）姿変わってもネプテューヌだなあれ…」

なのは「（ヒソヒソ）確かにネプちゃんだけどね…」

アイエフ「（ヒソヒソ）やっぱネプ子ね…」

ネプギア「（ヒソヒソ）お姉ちゃんですね…」

ネプテューヌ「誰が誰と似てるって?」

ネプテューヌはひそひそ話している奴らを睨む。

真王「感動の再会をしているところ悪いが…迎えが来たよ」

真王がいうと、騎士姿の兵士と某ちっちゃな闇魔様が時空ゲートから現れる。

レーヴェ「来たのか」

プラネ「え?銀さん、一体何をしたの?」

レーヴェ「おれな。一度神に喧嘩売ったんだ」

レーヴェは神に喧嘩売ったと言う。

レーヴェ「なんであいつらが死ななきゃいけないんだと言って怒り任せでやったからな。けど虚しさしか残らねぇ。自分で分かってても止められネぇ」
プラネ「銀さん・・・」

プラネはレーヴェに近づいて、

プラネ「バカァ！！」
レーヴェ「へブッ！」

レーヴェをはたき倒した。

プラネ「バカバカバカバカ！」
レーヴェ「ぶべ！ブッ！おま！なにす！？」

馬乗りになって往復ビンタをかますプラネ。

プラネ「銀さんのバカ！やみくもに復讐したって誰も喜ぶことなんてない！！失ったら元に戻れない！」

プラネは大粒の涙を流す。

プラネ「これ以上、かなしいことは止めようよ…」
レーヴェ「ネプテューヌ・・・」

レーヴェはプラネを抱きしめた。

レーヴェ「そうだったな。俺はお前らを悲しませないために戦ってきたのんだったな」

プラネ「今更遅いよ銀さん」

レーヴェとプラネはお互いの口を重ね…

ネプテューヌ「ダメダメダメダメストーーーーーップ!!」

かけたところで止められた。

プラネは舌打ちして銀時ラバーズは「ナイスフォロー!!」と親指を立てた。

闇魔様「レーヴェ・ネオセフィロス・シルバータイム、あなたを拘束します」

待ってたのか兵士たちが動き出す。

カオストール「まて!これ以上の勝手は許さ「あなた方はおとなしくしてください」!?ちからが・・・」

カオストールとレギスが動こうとすると真紅の守護女神チート・ザ・ハードが能力で止めた。

彼女の能力はアンチ・チート。チート、バグ、神、チート殺しの能力を持つ者に大幅にステータスを下げる能力だ。

レーヴェ「じゃあなネプテューヌ、そしてありがとう」

プラネ「さようなら、銀さん」

レーヴェは連行されました。

プラネはぐしっと涙をとると、

プラネ「はじめまして、別世界のネプテューヌのプラネット・ゲイ

ム・ネプテューン。プラネって読んでください」
ネプテューヌ「あ、どうもこちらこそ」
礼儀正しい挨拶に思わず挨拶して返す一同。
プラネ「あ、その前に…」
と、プラネは白い太刀型デバイスを持ってカオストールに近づき、
プラネ「セ～～～～～ッノ！！」
カキーーーーーーーーーン！！！
2人を野球のようにぶっ飛ばしました。
プラネ「はいこれでよし」
全員「なんでだよ！！」
訂正、やっぱり中身はネプテューヌのままのようだ。
真王「さて、続いてはヒーローズチームのターンだよ」
統夜「おう、いくぜ！」
統夜はブロックをたたいて7を出す。
これはイベントマスだ。
統夜「何が出るんだ？」
モニターが現れた。

『沈没船に異変が！』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

沈没船が揺れ始めた。

銀時「んだこりゃ！？」

ビビ「ちょっと何が起ったのよ！」

真王「まて、おちつけ。すぐにわかる」

真王が落ち着かせる。

すると船の破片と傷がみるみるふさがっていき、船内がきれいになる。

ネプギア「船がきれいになった？」

真王「外へ出てみろ」

真王の言うとおりに外、甲板へ出てみると、

ルイージ「まじで！？」

マリオ「こいつは・・・」

恭介「たけぇぇぇぇ！！」

シャリアローゼ「いい眺めね」

セレス「これは・・・」

なんと沈没船が羽根の生えた船となって空を飛んでいるのだ。

砂漠を通り、火山を眺め、雪景色を拝め、城を超え、時空を超え、

そして約５０マス先に大きな台座のある場所に着いた。

真王「ここは最終エリアである全のエリア。つまり最後の決戦が来

たということになる」
全員「マジでかっ！？」

全員が驚く。
もうすでにゴールが近くになったことに。

真王「覚悟はいいかお前たち。優勝は目の前、悔いのないように存分に腕を振るうがいい！」

これが本当の最後の決戦だ！

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀次「こんにちわ。僕は天野銀次だよ」

アーカード「そして私は銀次の妻アーカードだ」

銀次「だから夫婦じゃないってば！！」

銀八「面倒な奴らだな。んじゃペンネーム『支配者』から始めるぜ。『質問です。

はやてに質問。で？はやてって結局何座でしたっけ？

新八に質問
他の『リリカル銀魂』の自分を如何思いますか？

なのはに質問

質問内容に対して怒るなんて自分で魔王や豚って言うのを認めているのと同じ事なんですけど良いんですか？
後、魔力による暴力はいい加減にするべきです。そんなんだから魔王って呼ばれるんですよ？自分で魔王って呼ばれる原因を作ってるくせに唯暴力を振るうのは止めるんですね。非殺傷設定があるからってね。力なき者への攻撃は思い上がり以外の何物でもないんですよ。いい加減に大人になってください。

この辺でさようなら』では順番にお答えしよう」

はやて「原作じゃ書いとらんがな。まぁ８月８日やな、生まれは（適当）」

新八「何で周りの僕があんなひどい目にぃ！？」

なのは「テメェが言ってるからだろうがァァァァァァ！！！」

ズドオオオオオオオオオオオオン！！

支配者「屑とかすゥゥゥゥゥぅぅぅ！！！！」

真王「・・・『支配者』さん、限度をわきまえろ」

銀次「（ちょっと怖かったかな？）次はペンネーム『なめ猫』さんからだよ。『俺「そういえば下っ端達の人気、どうなんだろうか…」ラムザ「さあ？待つしかないんじゃないか？」ラルム「海の宝っていえば、どんなのがいいかな？私は、パールとかがいいなぁ」ラムザ「なるほど。僕もそういったレアアイテムがいいね」俺「人魚のウロコ……」ラムザ「はい自重」

質問

レーティアへ
ハートローズのリロードについてだが、何で胸？

ネズミ野郎
またコンパに出会えた感想は？

アリアへ
ネプテューヌにチカンとかしてるよね？』」

レーティア「ちょっとグレネーダー見ててね、その中の方が隠しや

すいの」

ワレチュー「嬉しいっチュ！コンパちゃんに会えるのも何かの縁っチュ！」

アリア「モチロン！やったら殴られました」

銀次「やったの！？」

真王「駄目だこりゃ。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

アーカード「ではペンネーム『ケン』の質問を答えるとしようか。『統夜「凄い事になってるな」

達哉「ああ。並行世界の銀さんか・・・」

統夜「管理局の最高評議会のカス共はやっちゃいけない事をやって・・・自業自得だな」

はやて達や仲間達を殺されたら・・・君・・・世界を絶望へ満たす魔王になってたかもね。

並行世界の人物・・・ネタが浮かびました。

達哉「その前に本編を更新しろよ？」

分かってますよ。質問をしますか。

真王さんへ

貴方は管理局をどう思っていますか？上層部も含めてですが・・・

銀さんへ

今週のジャンプにて銀魂の主人公が金時になり、万事屋や全てのポジションを奪われた感想をお願いします。

新八へ

アニメにてラブチョリスに嵌り、逝っちゃった自分をどう思いますか？

以上です。

達哉「最新の事を取り入れたな」

はい。

統夜「さて・・・今回はここでお開きにすっか？」

達哉「だな。次回も楽しみにしてるよ」』」

真王「管理局など外道です。己の理のために動くなんて外道その者です」

銀時「許さん！！一分の１０００殺しにしてやる！！（激怒）」

どうもすべてを取られたことに腹立たしいらしい。

新八「え〝え〝え〝エエエエエエエエエエエエエエエ！！！？？」

驚き過ぎた。

アーカード「面白いなこのコーナーは。では『ケン』よ。廊下に立つのだ」

銀八「へい次、ペンネーム『鳴神　ソラ』さんだ。『ルイージ「真王さん凄いね」

マリオ「うむ…けどなフェイトもフェイトですぐに突っかかるのあな…あいつが命を弄ぶなんて事する訳ないだろ…」

クッパ「と言うか我輩、真王からはかませ大王と言う称号を付けられてるのか；」

明久「はあはあはあはあ…」↑開放された。

ムッツリーニ「……頑張った」

ネス「オリジナル女神さん達に質問！『自分達をボケとツッコミで分けるならどうなる？』」

フォックス「銀時達に質問『ソロが見せた仮面ライダータロウ・スーパーフォームの技を見てどうだった？』」

ヨッシー「オリジナル女神さん達に質問です！『××料理を普通に食べれる人いますか？』」

次回を待ってます！』まず2つ目の答えですがマジパネェが言いたいです。で、ハード達に答えだが」

チート・ザ・ハード「私はどちらもです。あんなゲテモノには興味ありません（でも食べれる）」

ゴッド・ザ・ハード「ツッコミは我の趣味ではない。それと二度とそんなものだしたら地獄を喰らわすぞ！」

サタン・ザ・ハード「ん～？ボケる方かな？それとそれだけは止めて…」

バーサーク・ザ・ハード「ナニイッテルカワカンネェヨ？ツーカソレクッタラシヌダロ！？」

ジャイアント・ザ・ハード「ツッコミが少々。そしてあれはマジ死にかけた…」

エレメント・ザ・ハード「どっちでもないかな？それと無理です」

ドラゴン・ザ・ハード「興味ないな」

マッハ・ザ・ハード「さぁな？（食えないけどな…）」

ファントム・ザ・ハード「ボケるホロ。それに幽霊だから食べれないホロロ」

クイーン・ザ・ハード「さぁ？どちらでしょうね？それからこれはあなたが食いなさい？」

バグ・ザ・ハード「ツッコミ、向かない。ゲテモノ、あれ、とても、うまい」

ナース・ザ・ハード「何のことかよく分かんないです（天然）。それからそれは人が食べてはいけない化学物質です！！」

シャドウ・ザ・ハード「・・・・・・（フルフル）」

サムライ・ザ・ハード「知るかよ。つーかダークマター食わせるな！！」

ロリータ・ザ・ハード「ん～？よく分かんないや」

ソニック・ザ・ハード「僕突っ込み担当。そして食べられません」

マゾチック・ザ・ハード「ボケ側ですね。それからこれは私にとって美味な…（食ったあと失神）」

プラント・ザ・ハード「どっちでもない。何か苦かった」

エッチ・ザ・ハード「両方よ。それから食べれるかぁ！！」

ビースト・ザ・ハード「ツッコミかな？それと食えるかぁ！！」

真王「ありがとう。『鳴神　ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

アーカード「うむ、次はペンネーム『武田軍兵士　清坂　剣麻』だ。『久々に質問いたします。
　質問は皆様方に聞くことになります。　まず一つめは次の内、真の漢だと思うのはどれですか。
1．グレンラガンのカミナ
2．ケンイチの長老（風林寺隼人）
3．Gガンダムのドモン・カッシュ

4．魁！！男塾の剣桃太郎
5．戦国ＢＡＳＡＲＡの真田幸村
　二つめは、次の内最も厄介な集団はどれですか。
1．インベーダー軍団、ゴール＆ブライ（真ゲ）、メタルビースト軍団、ゲッターＧ軍団＋真ドラゴン
2．次元獣軍団＋ガイオウ、螺旋王、皇帝ズール
3．赤屍さん１０００人
4．ゼオライマー、織田信長（ＢＡＳＡＲＡ）、デビルガンダム、ケイサル・エフェス、グランゾン、高町なのは
5．全スパロボ参戦作品＋バンプレストオリジナルロボット軍団』」

真王「う～ん、これは2番のケンイチの方と5番のロボットかな？
というわけで『武田軍兵士　清坂　剣麻』さん。廊下に立ってなさい。つぎ。ペンネーム『ＮＷＩ』さんだ。『銀時達とリリなのメンバーに質問
扱ってみたいペルソナは何ですか？
もし銀時が「なのはは俺の嫁だ」と言ったらほかに銀時に惚れたリリなのメンバーはどうなりますか？
最後になのはさん…暴力を控えめにすればみんなから魔王と呼ばれなくなりますよ』私ペルソナ知らないんで却下。２つ目は怒り狂いますね。絶対。最後だが、それは質問ではなく忠告だ。『ＮＷＩ』さん。廊下に立ってなさい」

～プラネット・ゲイム・ネプテューン（愛称プラネ）～

髪：ピンクよりの紫髪で太ももあたりまで

目：紫
服：本人よりも大きめのパーカーワンピ
年齢：見た目２０ぐらい
３サイズ：１００／５２／８２
体重：潰れている
性別：♀
種族：元プラネテューヌの女神
魔力光：紫
好き：銀さん、みんな、楽しいこと、食べること
嫌い：傷つくこと、他人の苦しむ姿
性格：本人よりも大人びているが抜けたところは一緒だ。
レベル：？？？？
得意武器：ツァラトゥストラセイバー：白い太刀型デバイス。エックスセイバーより色々と強化している（ネプギアの意思が入っている）
ゼロクリスタルウィンド：背中につけるタイプのデバイス。光速移動が可能となる水晶の羽が出現する
スキル：真・女神化（女神・プラネットハートへと変身する）
詳細：レーヴェ（別世界の銀時）とおなじ時期から着たネプテューヌ。かつての仲間を失った彼を探してきた。ネプテューヌを大人見たいにしたイメージ。武器のツァラトゥストラセイバーはある男から貰った者らしい。

第百六訓：絶対不屈の魂であれ（後書き）

真王「さて、次回はリリ銀パーティ最後にずるぜ」

アーカード「次回『結局運が強い奴が勝つ』テイクオフだ」

第百七訓：結局運が強い奴が勝つ（前書き）

真王「今回でリリ銀パーティーは最後だぜ？」

ネプテューヌ「皆さん、今までありがとうございました」

（注）こっちのアリアと黒龍さんのアリアが被るのでアリエスと改名いたしました。

第百七訓：結局運が強い奴が勝つ

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム９７８
剣聖チーム９７６
スマブラハーツチーム９８３
学園チーム９６９
プリティレディズチーム９８６
女神チーム９６５
とある転生チーム９７７
狂乱チーム９６８
メテンズナイトチーム９７５
ドラゴンネイルチーム９８２
リリカルライダーチーム９８０
真選組チーム９７５
異界戦士チーム９８４
リリカル銀魂チーム９７３

プリティレディズチームトップ。
現在５６ターン目
次のターン・とある転生チーム

ついに迎えた最後のエリア。
ここをクリアすると優勝することが出来るのだ！

ＩＢＧＭ永遠のスターｂｙマリオパーティ
（Ｍａｒｉｏ　Ｐａｒｔｙ　Ｍｕｓｉｃ　－　Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｓｔａｒ　ＥＸＴＥＮＤＥＤ）

とある転生ターン

グレイ「ずいぶん長かっ戦いだが、終わらせるとしよう」

グレイはブロックを叩いて5を出す。
何とペナルティマス。

ビビ「あ」

『変態ストーカー』

モニターが現れた後に誰かが召喚された。
見た目は、“新世紀エヴァンゲリオン”の“惣流・アスカ・ラングレー”の髪色が紫色にしたような感じの少女が。

？？？「み～つ～け～ま～し～た～よ～・・・お姉様！」
全員「お姉様！？」
グレイ「知らん」

グレイにお姉様ということに驚くが本人は否定。

ビビ（あれ？なんだか初めて会った気がしないのは気のせいだろうか…（？・―・））

ビビは少女を見て疑問に思う。
グレイ自身はこの少女に寒気を覚える。

天音「グレイお姉様！この出雲天音！お姉様の体の隅々にじっくりと」
グレイ「かえる」

ピュン！（逃げ出した）

天音「ああん、まってぇ～」

ピュン！（追いかけた）

神「おい、あいつがいるってことは確か…」
真王「ええ、作者リィーンさんの許可の元あの４人も着ます」

その後グレイは死体袋を持って来たらしい。
（中身は天音ですが）

狂乱ターン

桂「うむ、では俺が運命を決めよう！」

桂はブロックを叩いて９を出す。
ミニゲームマスだ。

『５秒ミニゲーム・にげろ！』

桂「む？一体何から逃げ…」

ブチャ！

桂が巨大なおばちゃんの足に踏まれた。

はやて「桂さぁぁぁアアアアアん！！！」

ヴィータ「んなあほな…」

言葉が映ったぞヴィータ。

メテンズナイトターン

ガレーナ「ふむ、余の出番だな」

ガレーナはブロックを叩いて８を出す。

ノーマルマスだ。

ガレーナ「チッ、面白くない」

ドラゴンネイルターン

真王竜「よし、これだ」

真王竜はブロックを叩いて８を出す。

それはデンジャーマスだった。

『火山大噴火！』

ゴゴゴ

リリカルライダーチーム：避難した（成功）
真選組チーム：逃げられなくて巻き込まれた（失敗）
異界戦士チーム：瞬時に避難した（成功）
リリカル銀魂チーム：近くの陰に避難した（成功）

真選組チーム以外は全員逃れたようだ。
真選組チームは１００マス後ろに移動させられた。

真王「真選組チーム復活に2回休みです」

真王竜はこれを聞いて少し憐れんだ。

リリカルライダーターン

ソラ「・・・決めるか」

ソラはブロックを叩いて3を出す。
ノーマルマスだ。

ソラ「嬉しいのやらなんやら…」

真選組ターン

火山に巻き込まれたため動けません

異界戦士ターン

勇華「次は私達ね」

勇華はブロックを叩いて5を出す。
イベントマスだ。

『運試しルーレット』

モニターが現れるとルーレット盤が現れる。

真王「色違いのルーレットにはイベントがあります。もちろん青ならノーマル、赤ならペナルティといったことだからな」
勇華「そう、ならば・・・」

勇華はダーツを構える。
ルーレットが回る。

勇華「・・・・・そこ！」

勇華はダーツを投げ当てた。
青色のエリアに。

勇華「ノーマルかぁ…」

少し残念そうな勇華であった。

リリカル銀魂ターン

銀時「よ～し、ここからはやっぱ主人公が一発決めなきゃな」

銀時は気合を入れてブロックを叩いて7を出す。

ノーマルだった。

銀時「攻めてボーナスが良かったな…」

新八「そう簡単にゴールは出来ませんよ」

新八の言うことも最もだった。

ヒーローズターン

統夜「さて、俺らの番だな」

統夜はブロックを叩いて１０を出す。

バトルマスだ。

統夜「どんな相手なんだろうな…」

そう思ってるとモニターが（ｒｙ

『バイオクローン・蒼咲（あおざき）　龍華（るか）』

モニターが出た後腰まである金髪に蒼い瞳をしはやてに似た顔立ちのある少女が現れる。

龍華「はじめまして、かな？蒼咲（あおざき）　龍華（るか）といいます」
統夜「ああ、俺は統夜だ」

２人は挨拶。
すると龍華は嬉しそうな顔をしていった。

龍華「それじゃあ・・・・・・お父様と呼ばせてください！」
全員「・・・・・・は？」

いきなりの発言に戸惑う。

龍華「あ、いい忘れてましたね。私は統夜お父様とはやてお母様達の遺伝子で作られたクローンですよ」
ヒーローズチーム「！！？」

龍華が自分からクローンといった。
彼女曰く統夜の真祖と煌天使と魔人、雪蓮の白虎解放、はやての天使化、メアリの死神化と白獅子化、優子と秀吉の試験召喚獣の操作能力、はやてやカナ、咲夜の持つ魔法技術、シャルの持つトランス能力などを持つクローンの最強体だ。
統夜は真王を睨むと、

真王「お前らの作者のケンがこのキャラ作ってくれって依頼が来たからだが？」
統夜「作者（ケン）ーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！一体何考えてんだァァァァァァ！！！」

統夜は自分のとこの作者にシャウトする。

統夜「ハァ、ハァ、で？俺は龍華と対戦するわけか？」

龍華「はい、それではお父様。いきますよ！」
統夜「！！」

ガギッ！

龍華の剣が統夜の剣と交差する。
その時不思議なオーラが２人から放たれている。

統夜「真・ルシファー、俺の遺伝子があるから使えて当然か」
龍華「うん、だから本気で行くよ～」

ドガバガギドガボギャバガドガギゴデダバガ！

滅茶苦茶な擬音だが激しい戦闘だと物語らせる。

統夜「やるじゃねぇか！」
龍華「お父様こそすごいけんですね！」

２人は戦いを楽しんでいる。
そして迎えるラストスパート。

統夜「行くぜ！」
龍華「行きます！」
統夜、龍華「おおおお

統夜、龍華「ブゲラァッ！！？」

…ようとして見えない何かにつぶされた。
地面に手形のへこみがある。

銀時「オイィィィィィィィィ！！！！何これぇぇぇ！！おい真王！お前何かやったか！！？」
真王「向こうならしってるぞ」

銀時が真王をにらむが真王はある場所を指差している。
その先は手を振りおろしたかのような感じのリルだ。
結論から言うに戦闘音がうるさくて２人をつぶしたからだ。

銀時「待てぇぇぇぇぇぇぇ！！！外野から攻撃はないだろ普通！！」
真王「うむ、このまま引き分けにするのはかわいそうなので勝ちという判定に…」

というわけでヒーローズチームは勝ち判定となって１０マス進んだ。

統夜、龍華「俺（私）を置いてくなぁぁぁぁぁぁ！！！」

剣聖ターン

レイン「いくか」

レインはブロックをたたいて7を出す。
ノーマルマスだ。

スマブラハーツターン

マリオ「いくぜ！」

マリオはブロックをたたいて9を出す。

ペナルティマスだ。

『お妙の卵焼き１００個』

バリボリバリボリ

マリオ「あんまおいしくないな」

だが超合金でできたマリオの胃袋の前では無に等しい。

全員唖然とするのだった。

学園ターン

由美「れっつご～！」

由美はブロックをたたいて5を出す。

ボーナスマスだ。

『運だめしルーレット』

これは異界戦士チームにやった奴だ。

由美「なにが出るかなえい♪」

ノリノリにダーツを投げる。

あたったのはペナルティ。

『暗黒物質（ダークマター）の水』

ドバババババババババババ！

恭介「アバババババババババババババ！！！」

真っ黒な液体が恭介の口の中に入り、恭介は生死を彷徨った。

由美、愛淫「恭介ぇエエエエエエエエ！！！」

2人は叫ぶ。

哀れ。

プリティレディズターン

リアス「いくわよ」

リアスはブロックを叩いて7を出す。

イベントマスだ。

リアス「なにが出るかしら？」

モニターが現れた。

『スカ』

プリティレディズチーム「なんじゃそりゃぁ！！！」

チームはそろってシャウトする。

他のチームもそれはないだろうと思った。

女神ターン

ネプテューヌ「私達の番だね！」

ネプテューヌはブロックをタタ……く前にカードを取り出した。

ネプテューヌ（運試しカード・・・試してみよう！）

ネプテューヌは運試しカードを使用した。

『二回発生』

真王「これはマスに止まった時二回のイベントが発生するんだよ。

ペナルティふんだらペナルティ二回な」

ネプテューヌは少し戦慄した。

ネプテューヌ「な、なら、こうだ！」

ネプテューヌはうねった後ブロックを叩いた。
出た目は7だ。
そしてその先はボーナスマス。

ネプテューヌ「うっし！」

女神チームにボーナスが二回。
またとないチャンス。
そしてモニターが現れる。

『ダッシュブーツを手に入れて１５マス進めた』

ネプテューヌ「えっと・・・真王さん。ボーナス二回って？」
真王「この場合は“同じ内容を二回行う”だ」

真王の言葉にネプテューヌ達は考える。
１５マスを二回で３０マス。
更に自分体がいるマスは９７４マス。
これを足せば…。

真王「そう、女神チーム、ついにゴールへたどり着いた」

ネプテューヌ「……い……い…」

女神チーム「いやったぁぁぁーーーーーーーーーーーーー！！！」

何と女神チームが優勝を果たした。

統夜「オイオイマジか！？」
咲夜「あ～ん負けちゃった～」

アーカード「私は銀次がいれば十分だ」
恭介「フェイトさんが…」
レーティア「あ～ん優勝狙ってたのに～」
ビビ「うがーー！！負けたーーー！！」
はやて「いやーーーーーーーーー！！！」
レオン「フン、勝ちを譲ってやる」
光翔竜「いやァァァァァァ！！！フェイトしゃまァァァァァァ！！！」
セイバー「そ、そんな…」
セレス「まさか負けるとはな…」
新八「ええ！？かっちゃったの！？」

他のチームは驚くか納得するか反発するのもいる。

真王「では結果表を出そうか」

『ヒーローズチーム９９８：二位
剣聖チーム９８３：七位
スマブラハーツチーム９９２：四位
学園チーム９７４：十三位
プリティレディズチーム９９３：三位
女神チーム１００１：一位
とある転生チーム９８２：九位
狂乱チーム９７７：十二位
メテンズナイトチーム９８３：七位
ドラゴンネイルチーム９９０：五位
リリカルライダーチーム９８０：十位
真選組チーム８７５：ビリケツ
異界戦士チーム９８９：六位
リリカル銀魂チーム９８０：十位』

真王「ではビリである真選組チームに罰ゲームを出します」

モニターが現れてガラガラガラとルーレットの様に回る。
どんなのが出る止まっているとそれが出た。

『オカマッチョハッスル』

オカマ「あ～らやだわあなたたちあたしの好みのタイプじゃな～い？」

三つ編みお下げで水着姿の大男（恋姫無双の若本声の人）がぺろりとおいしそうに見つめている。
真選組チームは顔を超真っ青をにしている。

近藤「え、えっと、ば、罰ゲームってこれ？」
真王「はい」

近藤は真っ青な顔で真王に言う。
真王は普通に答える。

沖田「土方さん、大人しく逝ってくだせぇぇぇ！！」
土方「てめ総悟ォォォォォォォォ！！！」

沖田が土方を投げた。
だがオカマが土方を軽く捕まえて言う。

オカマ「大丈夫よ～。あたしまとめ食いが大好きだから。仲良く頂けるわ」

もはや絶望しかない。

オカマ「それじゃあ・・・・・・やらないか」
真選組チーム「くそみそぉぉぉぉーーー

と言って渡したのは青いボール型の宝石だった。

ネプテューヌ「これは？」

真王「ソウルストーン、お守りとして持っていけ」

ネプテューヌはソウルストーンを手に入れた。

真王「そして、入ってこい」

真王が言うと数人くらいの人が入ってきた。

その中にグレイに捕まっていた天音もいる。

仁哉「あんたらとはお初だな？上谷仁哉だぜ？」

竜虎「僕は竜ヶ崎虎太郎だよ」

ハジメ「ハジメ・クレバヤシだ」

天音「出雲天音よ。よろしくね♪」

夢乃「寿夢乃です。よろしくお願いします」

ユリナ「ユリナといいます」

カイン「俺はカイン、一緒に熱くなれよぉぉ！！」

セリア「セリアと申します」

ホラーロード「ホラーロードだよ」

エル「エルです。はじめまして」

コープス「俺コープス、よろしくな」

ローグ「ローグだ」

レルシア「レルシアといいます。アンドロイドですがよろしくお願いします」

アギス「俺はアギス。仲良くやろうぜ？」

レイヴィス「あたしはレイヴィス。よろしく」

ベアトリス「私はベアトリスといいます」

レイシア「レイシアです」

リルマ「リルマ・ロギストルといいます」
龍華「さっきも言ったけど龍華だよ」
ウィエナ「ウィエナです。よろしく」
アーク「わしはアークじゃ」
ディケイト「俺はディケイトだ」
フィリア「フィリアです」
イシュタル「イシュタルだ」
隆次「混獄隆次だ…」
ユリス「その妹ユリスです」
ダヌ「何処の誰かによってわけが分からなく捕まったダヌです」
イヴ「レーティアお姉様によって下僕となったイヴだよ」
ドーン「我が輩はドーンである」
リア「どうも、リア・オルフェウスだ」
セレナ「私はセレナだよ」
真王「彼らはここで仲間になることになった」

全員「いろいろちょっと待てェェェェェェェぇ！！！！」

見ていた全員が突っ込みを入れる。

銀時「どんだけキャラが増えれば気が済むんだよ！！さばき切れるのかおい！」
真王「否定はしないが、多い方が楽しいと思ってな」

真王はそっけなく言う。

レイン「つーか敵だったような奴らも仲間ってどういうことだ？」
真王「そりゃあっちにもごたごたがあっていろいろとなんやかんやってこっち側に着いたと思え」
全員「メッチャ適当だなおい！」

全員はあきれ果てる。

真王「ではこれにて、リリ銀パーティ、終了！！」

こうして長い？パーティは幕を閉じた。

余談だが、ヒーローズチーム、スマブラハーツチーム、リリカルライダーチームの面々がこの世界の興味を持ったらしいので仲間になった。

だがこれで終わりではない。

敵側の面々も激しい戦いののろしを準備しているのだから…

～おまけ～

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

イシュタル「今回のアシストは妾じゃ」

銀八「ああ、いきおくｒ「何か申したか？」イエ、ナンデモアリマセン」

イシュタルから殺意を感じたので片言でしゃべる銀八。

イシュタル「では参ろう。ペンネーム『なめ猫』じゃ。『俺「レーヴェとの話は終わりましたか…そして」

ラムザ「…真王さん、業を煮やしたか？まあ好きにするといいけどさ」

ラルム「いよいよ決着…だね」

質問（２つだけ）

ネプ姉妹へ

公式サイトで君達のＰＶがうｐされたけど、感想を。

他の女神へ

そのＰＶを見て思ったことは？

ラムザ「……ん？そういえばカイトとミリアは？」

俺・ラルム「あっ！？忘れてた！！」』」

ネプテューヌ「いや～、なかなかの出来栄えだと思うよこれ♪」

ネプギア「は、恥ずかしいです…」

それ以外の女神「羨ましいぞこんちくしょォォォォォォォォ！！！」

イシュタル「・・・『なめ猫』よ。廊下に立つのじゃ」

銀八「えっと次、ペンネーム『ケン』さんからの質問だ。『アンチ管理局の作品を書いてて良かった・・・俺自身の努力と苦労が報われた・・・

統夜「普通なら叩かれるもんな・・・」

そうだね。真王さんには感謝です。
質問しますか。

真王さんへ

最高評議会の脳髄達を滅ぼす予定はありますか？

銀さんラバーズへ

銀さんとレーヴェの戦いをみてどう感じましたか？

以上です。

統夜「今回は二つだな」

そうだよ。銀さんマジ強いね。侍魂がある故に強い・・・
次回も楽しみにしています。』ズバリお答えしよう」

真王「管理局のボスは死ぬ運命なのさ…」

ラバーズ「絶対に銀さん（時）が勝つって信じてた！」

銀八「つーか途中でプラネに邪魔されたけどな…。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

真王「えい次、ペンネーム『』さんからだ。『マリオ「やれやれ」

ルイージ「だね」

ソロ「例え少し変わっても仲良いな」

リュウケンドー「だな」

ヨッシー「すいませんね～マリオさんみたいな人いるかな…と思って；」

マリオ「銀時たちに質問『パーティで出たエリアで好きなエリアは何だ？』」

ネス「なのはさん達銀時ＬＯＶＥズに質問『レーヴェを見てどう思った？』」

フォックス「オリジナル女神達に質問『それぞれ暇な時は誰かと一緒にいるか？それとも１人か？』」

次回を待ってます！』銀時らは空ですかね。天国っぽくて。レーヴェのことは彼女等は本当に銀さんそっくりだったと。んであいつ等の答えは」

チート・ザ・ハード「一人で待機です」

ゴッド・ザ・ハード「武器を眺めておった」

サタン・ザ・ハード「自主練だよ」

バーサーク・ザ・ハード「テキトウナヤツヲアタッテタタカウ」

ジャイアント・ザ・ハード「暇な時は日向ぼっこしてたな～」

エレメント・ザ・ハード「自室で実験事してたよ」

ドラゴン・ザ・ハード「なにもしてないな」

マッハ・ザ・ハード「暇なときはファントムゲームしてたぜ」

ファントム・ザ・ハード「ホロロ、マッハと同じだよ」

クイーン・ザ・ハード「エッチとマゾをどう調教させるか実験をしてましたわ」

バグ・ザ・ハード「虫、と、おはなし」

ナース・ザ・ハード「寝てました」

シャドウ・ザ・ハード「・・・・・・（黙祷）」

サムライ・ザ・ハード「私はジャンプ読んでた」

ロリータ・ザ・ハード「適当な人と遊んでた～」

ソニック・ザ・ハード「自室で歌を披露してたよ」

マゾチック・ザ・ハード「クイーン様に尻を敷かれてましたわ」

プラント・ザ・ハード「お花に水やり」

エッチ・ザ・ハード「いつもクイーンに実験台にされてます」

ビースト・ザ・ハード「昼寝だ」

真王「というわけで『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

イシュタル「次はペンネーム『黒龍』からじゃ。『黒龍』「今回は別世界の銀さんとの戦いになるとは……」

銀時「全てを失って魂が折れちまった俺か……」

黒龍「どうしました？　そんな感慨深そうな顔をして」

ソラ「ショックだったか？」

銀時「いや、なんつうか、ああ言う俺もいるんだと思ってな」

黒龍「確かに、高杉と同じ道を歩んだ銀さんですからね」

銀時「それでも、あいつにはまだ背負うもんが残っていたけどな」

黒龍「まぁ、捕まってしまいましたけどね」

ソラ「別世界のネプテューヌならいつまでも待っているだろうな」

黒龍「ええ。じゃあ最後に質問します」

1．ネプテューヌに質問。別世界のあなたはかなりのスタイルでしたね。それで未来に希望とか実えっちゃたりしていますか？

2．新八に質問。アイチョリスに精神の奥深くまで侵食されて廃人になってしまった原作の自分をどう思いますか？（黒笑）

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」』」

ネプテューヌ「何時か大きくなると夢見ています！」

新八「これ僕ゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！？？」

新八はありえないと言うような顔をした。

イシュタル「妾はあんな輩とはついていけん。『黒龍』よ。廊下に立つのじゃ」

真王「次、ペンネーム『ウィンド』さん。『土曜日は新居浜でアカガネマリンミュージックフェスティバルがあり、そこで水樹奈々さんのライブを聞きました！

リア「最高だったね」

ああ、しかもかなり席が近かったから良かった。もはやテンションＭＡＸ連続だったぜ

リア「話を戻して銀さんとレーヴェの戦いはダンテとバージルに似てるね」

まんまだろ。俺もあのシーンは好きだ

リア「質問いくかな。プラネに。そっちの自分を見てどう思う？」

こちらもハード達に。自分が戦いたくない！なんて人はいますか？』
」

プラネ「昔が懐かしーな～って思ったよ。・・・あれ？ちょっとおじさん臭い？」

ハード達「我が主です（ご主人様）（真王様です）（真王だ）」

真王「だそうです。『ウィンド』さん。廊下に立ってなさい。これでラストだ。ペンネーム『黒神』さん。『久しぶりに感想をしましたので、質問させてもらいます。

フェイトへ

エリオは神楽と月詠に一目ぼれしており、キャロはそんな2人に対してとてつもないジェイソン的な嫉妬を抱いています。
貴女から見て詳しいご感想を（黒笑）

シグナムへ

『リリカル銀魂ゲスト杯編』で登場したゲストメンバーの中で是非とも手合わせしてみたい人物はいますか？

以上です。

これからも頑張ってください。』」

フェイト「イ”ヤ”アアアアアアアアアアアアアア！！！！」

フェイトは心の絶叫をした。

シグナム「剣心だ。剣士だからな」

真王「単純だな。『黒神』さん、久しぶりにありがとう」

イシュタル「では次のアシストはあの兄妹じゃ。ではな」

第百七訓：結局運が強い奴が勝つ（後書き）

真王「というわけで優勝は女神チームでした。次回は、管理局に恨みを抱くとある女性が…」

イシュタル「次回『恨みを持つものはたいてい何かが関わっている』テイクオフじゃ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7600p/

リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～銀女神鎮魂歌～

2011年10月22日07時12分発行